聖書の学び

鈴木寛（Hiroshi Suzuki）

7/3/25

Table of contents

聖書を一緒に読みませんか

表題の名称で、案内を送り、我が家で開いている、聖書を読み、疑問をあげて考え、語り合い、分かち合い、聴く会のページです。

過去の会の情報などは、ホームページをご覧ください。

また、通読の会も主催しており、全体として、一緒に聖書を読むことをできればと願っています。

共に学ぶ

いろいろな理由から、聖書を読んでみたいと思う方がおられると思います。また、聖書について知りたいので、だれか教えてくださる方はおられませんか。という場合もあるかもしれません。興味のあるかたは、教会に行かれることをお勧めします。しかし、どこの教会に行ったらよいかわからないとか、ちょっと行ってみたけれど、やはりよくわからない。興味はあるが、同時に、疑問もあり、なかなか満足がいく説明が、教会では聞くことができない。他のひとはどう考えているのかにも、興味を持つし、聖書に書いてあることが全部本当だと信じているのかにも興味がある。さまざまかなと思います。

わたしは、皆さんの質問に、答えることはできません。わたしもよくわからないことが山ほどあるからです。というより、わかっていると思っていることも少しはありますが、それは、ほんの少しだとも思っています。他の言い方をすると、大切なこともあまりよくわかっていないということです。

わたしは、毎日、そして、繰り返し繰り返し聖書を読んでいますが、毎回新しい発見があります。皆さんのお家で、ドアを開けてみるごとに新しい発見がある、という人はおられないと思います。ときどき、変化もふくめて、発見があるかもしれませんが、大体は、家のことはわかっています。しかし、外国などに旅をすると、さまざまなあたらいことに出会います。それは、ほとんど知らないからですよね。わたしは、上に書いたように、聖書を読むたびに、新しい発見があるので、謙虚に言っているのではなく、ほんとうに、聖書を理解できていないと感じています。

しかし、聖書は、なかなか大きな書物で、かつ、長い歴史の中で、何人もの人によって書かれています。書いた人たちの住んだ世界は、現代のわたしが住む世界とはとても違っているでしょうから、理解するのが、簡単でないのは、当たり前かもしれません。

ここでは、聖書全体を通して読むことと、イエスのことについて書いてある、福音書を読むことに中心を置いています。基本的には、イエスのことを知りたいからです。なかなか、興味深い方ですよ。

一人で本などを参考にしながら、読めば良いのではないでしょうか。たしかに、それでも、ある程度は、聖書を理解できると思います。ただ、それは、その本を書いた人が理解した聖書を知ることになります。私が上に書いたように、もし、それぞれの人が理解できていることが、ほんの少しだけなら、一人だけの話を聞いても理解できませんよね。そして、何よりも、自分が疑問に思っていることについて知ることは難しいと思います。

聖書の著者が多様で、いろいろな時代にまたがっているのですから、いろいろな人の話を、理解した部分を聞くこと、さらに、疑問を知ることは、素晴らしいことなのではないかと思います。それを通して、聖書を知ると共に、その人をも少し知ることができるかもしれません。

わたしは、聖書を橋渡しとして、聖書を書いた人と対話がしたいですし、同時に、一緒に読むことによって、その人とも対話をしながら、そに人もほんの少しでも、理解できないかなと考えています。一緒に生きているのですから。そして、共に生きるために。

聖書を読む理由はさまざまだと思いますが、わたしが最も大切だと思っているのは、互いに愛し合うようになることです。イエスが語っていることも、さまざまな表現があるかもしれませんが、互いに愛し合うことにつながっているのではないかと、今は、考えているからでもあります。

聖書を一緒に読むことによって、分裂ではなく、他者の読み方を理解しようとすることによって、互いに愛し合うことを学んでいければと願っています。

本書の目的

最後に、なぜこのようなものを書こうと思ったかを簡単に書いていこうと思います。聖書研究会などの名前で、何人かが集まって、聖書を一緒に読んでいくことは、ある程度一般的だと思います。ある時代までは、皆が字を読めたわけではありませんから、誰かの話を聞くことしかできなかったかもしれませんし、聖書自体もそれほど、簡単に手に入るものではなかったと思います。そのような中では、教会に行って、牧師など、先生の話を聞くことが主だったと思います。

現代では、聖書も簡単に手に入りますし、最近では、ネット上で自由に読むことも可能です。その意味で、ハードルは低くなったのですが、最初に書いたように、聖書は大きな書物で読むのはあまり簡単ではない。福音書などに限っても、一人で読んで理解できるというのは、あまり、一般的ではないと思います。

この書では、そのような場合のお手伝いをすることと、集まって一緒に聖書を読む場合の資料を提供することを目的として書いています。準備はそれなりに大変です。問いを考えるというのは、とてもよいことですが、適切な問いを考えるのは、簡単ではありません。まずは、文脈を理解しないといけませんし、他の聖書の箇所から、背景などが多少わかる場合には、その情報もあると助けになることがよくあります。できるだけ、一つの意見や、考えかたにならないように、特に、分断を避けるように、注意して、皆さんが、考えていく助けになればと思い、書いています。

ある程度長い期間に、わたしが司会をして共に聖書を読んだ学びが背後にありますが、むろん、これがよいというわけではありません。準備をする時の、ヒント、助けとなれば、幸いです。

問いだけではなく、わたしが調べたノートもあります。少しずつ、追記していくことができればと願っています。

管理人について

鈴木寛（Suzuki, Hiroshi）が、現在は、管理人を務めています。聖書の研究が専門ではありませんが、これまでも、グループで聖書を読む機会を持ってきました。少しでも、理解したいということが、基本的な動機です。聖書の読み方、読む目的も人によってさまざまだと思います。書かれていることに、ご意見、ご批判があるかたもおられるかもしれませんね。何かの機会に、お話を伺えれば幸いです。ホームページに、電子メールアドレスも公開しています。メールをいただければ幸いです。

わたしは、大学で数学を教えていましたが、2019 年 3 月に退職。現在は、数学や、データサイエンスの勉強をつづけ、それ以外に、何箇所かで、ボランティアをしています。

聖書を読む会は、在職中、2003 年 4 月から 2018 年 12 月まで、学内住宅の我が家で、学期中、毎週木曜日の夜に持っていました。退職後、2020 年 1 月に再開しましたが、コロナウイルス感染症の流行もあり、中断、2023 年 4 月再開に漕ぎ着けました。

大学で開いていたときと同じようにはできないと思いますが、そこでたいせつにしていたことは何なのかを振り返りながら、この会を続けて行くことができればと願っています。

この会以外にも、聖書通読の会も、2011 年から電子メールを利用して、続けています。その情報もホームページにありますので、ご興味のある方はご覧ください。

電子ブックについて

Quarto Book という形式で書いています。

- Quarto: An open-source scientific and technical publishing system
- HTML: Web browser で読むことができます。
- PDF：全く同じように表示されているわけではありませんが、ネットに繋げなくても読むことができたり、印刷したい方のために作成しています。
- このサイトのソースファイル：GitHub を利用しています。
  - レポジトリー

第 1 章

はじめに

聖書を少しずつ読んでいきます。専門的に、研究するわけではありませんが、皆さんの声に、耳を傾けて、ていねいに読んでいくことができればと願っています。

1.1　聖書の会と聖書通読の会

わたしは、聖書の会と、聖書通読の会を主催しています。

聖書通読の会は、文字通り、聖書を通読する会で、2011 年から始め、一日二章ずつ読んでいます。このペースですと、2 年間で旧約聖書を 1 回と、新約聖書を 2 回読む計画で、毎週日曜日の朝にその週に読む箇所についての簡単な説明と、その週に読む各章ごとのわたしがつけている聖書通読ノートをメールで配信しています。また、参加者が送ってくださった感想に、わたしの簡単な応答を加えて、日曜日の夜に送っています。最近は登録者 70 名程度で推移しています。

通読は、まずは、読み通してみましょうということですから、皆さんが興味を持って通読を続けられるような支援を考えて、メールを書いていますが、感想を送ってくださるのは少数の方で、残念ながら、ほとんど、一方通行になってしまっています。

聖書は 66 巻（旧約 39 巻・新約 27 巻）、1189 章（旧約 929 章・新約 260 章）あり、内容も多様です。時代的にも、伝承も含めれば、おそらく、今から 4000 年ぐらい前のものも含まれるかもしれません。短く見積もっても 3000 年前（厳密に現在の形になったのはもっと後でしょうが）から、1900 年前ぐらいの間に書かれたものですので、理解しながら読むのは難しいですが、違った時代を、神様を求めながら、生きた人たちから、話を聞くことができるという豊かな経験を得ることができると思い、わたしは、読んでいます。語り合うところまではいけませんが、考えさせられることは、とても多いと感じています。

聖書の会では、逆に、とても短く箇所を区切って、読んでいます。問いを、準備して、ディスカッション・スタイルで、考えながら読んでいます。問いなどの内容は、この電子ブックに含まれていますので、ご覧になってくだされば幸いです。

新約聖書、特に、福音書を中心に読んでいます。個人的に、イエスについて学びたいからというのが、大きな理由ですが、聖書には四つの福音書が含まれており、違った視点から、イエスについて学ぶことができるという面でも、とても、良い題材だと考えています。

毎回、とても多くの学びがあります。わたしの人生を考えても、この聖書の会での、皆さんとの時が、最も充実した、幸せな時であり、わたしが日々生きていく上で、豊かな糧を与えてくれている者だと思っています。

この書に書かれていることは、備忘録のようなものですが、ほんの少しでも、より多くの方に、その素晴らしさを味わっていただければと考え、書き始めています。

1.2　著者について

聖書の著者は？と聞くと「神様」と答えるキリスト者の方が多いかもしれませんが、それは、思考停止に導く面もありますから、わたしは、実際に書き記した人間に目を向けることにしています。

聖書の中には、パウロの手紙のように、著者が明確に書かれている場合もありますが、書かれていない場合がほとんどです。また、著者が明確に書かれている場合も、最近の研究では、そうでもないのではないかとされています。パウロの手紙も、ローマ人への手紙、ガラテヤ人への手紙、コリント人への手紙一、二、テサロニケ人への手紙一、ピレモンへの手紙は、パウロが書いただろうが、他は不明とされる場合もあります。それには、いろいろな根拠もありますが、わたしは、その議論は避けて、パウロの手紙についても、パウロ由来の手紙と呼ぶことにしています。

ここで学ぶ、福音書は、マタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書、ヨハネによる福音書と、四つありますが、「による」の部分は、「由来の」という意味にとって読んでいると言うことです。曖昧ですけれど。

簡単に書くと、由来する部分があることと、厳密な意味で、それぞれの人が書いたそのままではないかもしれないという意味です。由来はあまりにも曖昧で、四つの福音書によって、どのように由来しているか、程度も様々でしょうが、それを明確にしないと、内容を深く読むことができないとは考えていないからでもあります。

しかし、四つの福音書を読んでいくには、やはりある程度「由来」の中身を知ることはたいせつだとは考えています。そこで、すこしだけ、個人的な見方を書いておきます。お断りしておくのは、このような理解のもとで読み、他の読み方は許容しないという意味ではありませんが、程度の差こそあれ、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと、このような関係性はあるだろうということです。そして、そのような理解は、助けになるだろうとも考えていると言うことです。

1.2.1　マルコによる福音書

聖書に登場するヨハネ・マルコとよばれ、使徒行伝によると、バルナバのいとこで、パウロとバルナバと一緒に伝道旅行に出るが、途中で帰ってしまったと書かれているマルコです。（使徒 12:12, 12:25, 15:37, 15:39, コロサイ 4:10, 2 テモテ 4:11, ピレモン 24, 1 ペテロ 5:13）

伝承によると、ペテロの通訳だったとされ、ローマにも行ったようですが、使徒行伝によると、お母さんはマリアで、エルサレムに家があったようで、イエスの弟子たちの集会にも使われていたようです。おそらくマルコはイエスが活動していた頃は、幼なかったと思われます。

マルコが書いたかどうかには疑問も上がっているようですが、ペトロからの情報が多い、マルコ由来と考えるのは、内容からして妥当であると思います。由来の意味は、実際に書き記したのは、他の人かもしれないことを許容する表現です。いろいろな人が一緒に聖書を読み、語り合うことがたいせつだと考えているからです。

表現は簡潔ですが、その分、豊かな表現とはなっていないように見えます。個人的にたいせつだと考えているのは、上にも書いたように、自分は直接は知らないが、ペトロからの情報、ペトロの視点からの話で覚えていることを書き記したと言うことです。

ここからは、ますます、不確定ですが、パウロの書簡（一般的には福音書より先に書かれたと考えられています）と、共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ）はとても異なる印象を受けます。たとえば、イエスの死が贖罪のための死であったことは、まったく強調されていません。最も古い写本では、復活の部分も空の墓の記述で終わっていて、詳細は書かれていません。パウロの書簡で大切にされている、贖罪と復活はほとんどないのです。１箇所の例外は 10 章 45 節だけだと思います。パウロは、自分にならうものとなるように勧め、イエスの教えや行動についてはほとんど書きません。それではいけない、または、不十分との考えからも、この福音書が書かれたのではないかと考えています。

キリスト教会の歴史の中でも、人間イエスをたいせつにする人たち、福音書をたいせつにするひとたち、パウロが書いたことを中心とした教義をたいせつにする人たちがいますが、それが、分裂するのではなく、いまも、一つのキリスト教会を形成していることも、みのがしてはいけない大切なことではないかなと思います。

1.2.2　マタイによる福音書

マタイはイエスの 12 弟子の一人で収税人として描かれているマタイだとされています。しかし、福音書の流れば、マルコによる福音書を踏襲しているように見えます。マルコは、イエスの直接の弟子ではありませんから、このことは不思議です。

伝承によると、マタイは「語録（ロギア）」と呼ばれる、イエスの説教集をヘブル後で記録していたとされています。基本的には、のちに、それを含める形で、マルコによる福音書の流れに沿って、書いていったと思われますが、人数や、地名などが、マルコやルカと違っている箇所があり、マタイからかどうかは特定できませんが、別の情報もあって、書かれたものと思われます。

正確にはわかりませんが、これも、マタイ由来で、マタイと交流のあった人たちが編集したとして良いのではないかと思います。ただ、マルコに含まれていない部分がすべて、マタイ由来かは不明です。

1.2.3　ルカによる福音書

ルカは使徒行伝に登場し、パウロ由来の手紙にも何度か現れ、医者ルカとされているひとだと考えられています。文体などからも、ルカによる福音書と使徒行伝は、同じ人が書いたものと思われますが、使徒行伝には「わたしたち」という表現が、一定の箇所に書かれており、そのときは、ルカも同行していたのではないかと考えられています。それをそのままは受け入れない学者もいるようですが、ある部分、ルカが、パウロと一緒に行動したことは、かなり可能性が高いように思います。

さらに、エルサレムなど、パレスチナに行ったことも非常に可能性が高いでしょう。すでに、死んでいた方も多いと思いますが、イエスの弟子や、イエスに仕えた女性たち、さらに、それらの人たちから直接話を聞いたこともあったと思われます。

しかし、ルカによる福音書が書かれたのは、イエスが十字架にかかってから、40 年以上経っていると思われるので、ルカが書いたことをすべて事実と考えるのは、適切ではないかもしれません。ルカが受け取ったことは確かでしょうが、証言として受け取ると、それを受け取ったように書くことも必要になります。そのことも、注意して、読んでいくべきでしょう。

わたしが、ルカによる福音書を大切だと思っているのは、ルカがギリシャ人で、美しいギリシャ語で書かれていること、医者で、病気などについての記述が詳細であること、物語や喩えの記述が豊かで、文学的にも高いなどもありますが、パウロに近い人物として、イエスの生涯を書いたと言う点がとても大きいように思います。

パウロの説いた神学と、イエスの地上での活動を同じ視点から描いていることは、とても貴重なことだと思います。

1.2.4　ヨハネによる福音書

イエスの十二弟子の一人のゼベダイ子ヨハネ由来だとされています。ヨハネは、いくつかの文書から、一世紀の終わり頃まで生きていたことがわかります。明確ではありませんが、ヨハネによる福音書には、ヨハネと思われる人物が何回か登場します。

ヨハネによる福音書は、20 章で一旦終了するような書き方がされていますから、21 章は、ヨハネの死後に付け加えたのではないかと思われます。20 章までも、ヨハネの生存中に書かれたかどうかは不明ですが、ヨハネが語っていたことを書いたことは、確実性が高いのではないかと思われます。

このような理解のもとで読むと、ヨハネは、イエスの活動の最初から一緒にいたと思われます。ペテロよりも早かった可能性もあります。マルコには含まれていないものがたくさん書かれており、その意味でも、貴重です。このことは、マルコの記述を修正するという面もあったのかもしれませんが、マルコに書かれていない大切なことを書く面が大きかったのではないかと思われます。

ヨハネの視点は、マルコ、すなわち、ペテロの視点とは、違うということも大切なことだと思います。同じ場所

に、同じ時にいたにもかかわらず、違う視点から書かれている。新しい事実というより、この違った視点ということは、たいせつにしてよいと思います。

最後に、わたしがもっとも大切だと考えているのは、パウロの神学とイエスの語ったことが、違和感なくひとつに書かれていることかなと思います。ある時点では、一方を支持し、他方を支持しないひとたちもいたかもしれませんが、ヨハネによる福音書が書かれ、読まれることで、少しずつ、そのような見方は減っていったのではないかと思います。

1.2.5　福音書の著者についてのまとめ

簡単に、わたしの見方を書いてきましたが、それは、わたし個人の見方であることをお断りしておかなければなりませんが、同時に、聖書の会で、数節ずつ、約 16 年間、マルコによる福音書、ルカによる福音書、使徒行伝、マタイによる福音書、ヨハネによる福音書を学びながら考えたことでもあります。

それは、知識的な面もあると同時に、違った考え方、見方をする人とも、一緒に聖書を読んでいきたいという心からの願いから書いた面もあります。

今回、みなさんと共に、もう一度、福音書を読みながら、一緒に考えていくことができれと願っています。

最後にわたしが最も好きな聖書のことばを書いておきます。

> わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。 互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。（ヨハネによる福音書 13 章 34 章・35 節）

第 2 章

福音書に関する問い

聖書を読んでいくときに、問いを持ち、問いと向き合いながら読むことがたいせつだと考えています。信じれば良いと考えられる方もおられるかと思いますが、わたしはそうは考えていません。もし、聖書が、信仰者のためだけのものであれば、それで良いかもしれません。しかし、もし、信仰者またはイエスをキリスト（救い主）と信じるひと以外にも、たいせつな内容が書かれているとするのであれば、疑問がある箇所については、考え、また、聖書はどう語っているのだろうか、それは、本当なのだろうか。何を伝えようとしているのかと考えることは、とても健全なことなのではないでしょうか。実際、私が主催している聖書の会には、キリスト者ではないかたが出席しておられ、その方が多い場合もあります。さらに、基本的なことでも、問われると、適切に答えられなかったり、特定の牧師の説教や、本や、出どころがわからないものをいろいろと根拠にしないと説明できないことも多くあります。自らに問うてみることは、自分のそして、ともに学ぶものたちの理解をえるためにも、そう簡単ではないことを理解まはた確認するためにも、必要なのではないでしょうか。

問うたり、疑うよりも信じることがたいせつだと考えておられる方も多いかもしれません。ある時点で、信じるかどうかを選択する場面はあるかもしれません。しかし、最初から、疑ってはいけないとしてよいのでしょうか。疑うひとは、聖書は読めないのでしょうか。わたしは、一緒に読むなかで、お互いに目が開かれていく経験をたくさんしています。自分だけでは、気づかなかったこと、問われて考え始めたからこそ、学ぶことはたくさんあるように思います。考えることがたいせつで、必ずしも、すっきりとした答えのいきつかないことを許容しながら学び続けることも大切なのではないでしょうか。

解釈は、一人ひとり様々ですが、問いを共に考えられることは、共通の場に立つことにも繋がります。共同作業で、聖書を理解していくこと自体に、価値があると思っています。この共同作業を通して、同じテキスト、同じ問いであっても、異なる視点をもっていることを通して、他者を知ることも、ある共通の観方、同意ができる経験をもつことも素晴らしいのではないでしょうか。他者の背後にある人生を垣間見ることもあるかもしれませんし、この事自体が、共に生きることにつながるように思います。そのような経験をたくさんしていただく一助になればと願っています。

ここでは、福音書を読むことを中心においています。福音書は、イエスについて書かれています。イエスはどのような方だったのかを、一緒に考えながら読んでいくことができればと願っています。キリストは油注がれたも

のという意味ですが、神様に油を注がれた、救い主と告白する言葉としても使われています。また、福音書は、イエスがキリストであることを証言する文書だという面もあることは確かだと思いますが、それは、福音書を読んで、みなさんが判断することだと思います。そこで、福音書を読むときは、キリストということばは気をつけて使い、必要な場合を除いて、イエスと書いていきたいと思います。わたしは、通常は、イエス様と言っているので、イエス様ということばが出てくるかと思いますが、それはご容赦ください。一緒に、このイエスについて学び、このイエスと出会うことができればと願っています。

ある方は、福音書もイエスが生きた時代からすると、だいぶあとから書かれ、多くのひとたちの伝承をもとにして書かれ、そのひとたちの解釈を経たあとで、書かれているので、福音書を読んで、そこから、実際のイエスについて、知るのは難しいのではないかと考えられるかたもおられるかもしれません。そのように言う学者も多いようです。そのような面は否定できないことは確かですが、わたしは、福音書が一律にそのようなものとは考えていません。すこしずつ、その理由についても、書いていきたいと思います。しかし、このことは、問いとしてはあげず、皆さんに判断していただこうと考えています。まずは、福音書を読んで、わかることから始めるのがよいと考えているからです。

もう一つ大切なのは、聖書の含まれている四つの福音書をどう読むかということです。矛盾なく、一つのことを伝えているのだから、全てに共通なことを読み取っていくべきで、違いを強調することは適切ではないという立場です。わたしは、そうは考えていません。四つの福音書が、それぞれの著者によって、異なった背景のもとで書かれ、それぞれに、強調点があり、著者が受け取り、伝えたいと考えたメッセージが書かれていることは、否定できないのでしょうか。著者が何を伝えようとして、このように書いているのか、どうして同じときのことを表現するのに、このような違いが生じるのかも、考えながら、読み解いて行きたいと思います。

大雑把にいって、近年は、聖書学者たちは、以下のことについては、ほぼ共通の考えを持っているようです。まず、マルコによる福音書が書かれ、次に、おそらく、マルコによる福音書について知っているひとが、マルコはおそらく知らない「イエスの語録文書」を利用し、マタイによる福音書と、ルカによる福音書が書かれた。また、マタイも、ルカも、独自の資料もそれぞれにある程度もっていたこと、そして、それからしばらくたって、これら三つの福音書について知ってはいるが、それらには、載っていないことがらを知っているひとが、ヨハネによる福音書を書いたということです。わたしは、これらにくわえて、もうすこし、想定していることがありますが、すくなくとも、ここに書いたことは、わたしもそうだろうと考えています。このことは、いくつかの文書資料によってある程度、支持されているとともに、丁寧に、四つの福音書を読むと、浮かび上がってくることだとも考えています。

最初に、問いをもって読むたいせつさについて書きました。むろん、ほとんどの、疑問や問いは、わたしたちが丁寧に読んでも、解決しないかもしれません。しかし、それを、問わずに置くことによって、真理に近づくことができないなら、とても、残念なことであるとも思います。真理の探求とまでは、言えないにしても、問いを持ち続けることは、次に、さらに、そのあとで、読むときにも、理解を深める助けになると思うのです。いかがでしょうか。

わたしが考えたい問い、たいせつにしたい問いもあります。それは、自分に問いかける、そして、今の時代に対する問いです。これは、一人ひとりによって異なると思いますが、なにのために聖書を読むかという問いにも関

係していることだと思います。真理の探求、神様の御心を求めることをわたしは大切にしていますが、同時に、それは、どう生きるか、どう生きていくかを選択していくことをしたいからです。上にも書いたように、それは、完全な答えを得ることではありません。問いを持ちながら生きる、しかし、同時に、考えながら生きるということでしょうか。

そのようなことを考えて、ここに、いくつかの問いを書いておきたいと思います。

2.1 マルコによる福音書を中心として

2.1.1 背後にいる証言者はどのような人たちなのだろうか

- マルコは使徒言行録に登場するヨハネ・マルコをさすと一般的に考えられているようだが、実際にマルコが著者かどうかには、議論もあるようである。いずれにしても、マルコは、イエスとともに生活をしたひとではない。すると、著者が情報を得た入手先があるだろう。複数かもしれないが、それは、誰なのだろう。
- エウセビオスが引用しているパピアス断片と呼ばれる文書には、マルコはペテロの通訳だったと書かれている。これについても、議論はあるだろうが、マルコによる福音書を読んでいきながら確認できることもあるように思われる。
- 11 章にあるエルサレム入城以降は、筆致が変わっているように見える。それまでは、イエスの行動について書かれているが、教えや譬え、論争記録などで構成されている。このような記録はどのような起源があるのだろうか。
- 残されている記録が限られているが、背後にいる証言者についてすこしずつ情報を集めていきたい。どんな人達なのだろうか。

2.1.2 病気の癒やしはどのようなものだったのだろうか

- ギリシャ語では、テラペウオ、イアオマイ、ソーゾーが使われているようだが、現代の病気が治ることとは同じだと考えてよいのだろうか。
- イエスのいやしは、どのような行為なのだろうか。
- マルコでは、イエスの癒やしの活動の中心は、ガリラヤのようだが、病人は、大きく減少したのだろうか。

2.1.3 イエスはどのような「神の子」「キリスト（油注がれた）・救い主」

- ダビデの子なのだろうか。ダビデを、イエスはどのように認識していたのだろうか。
- 神の国を宣べ伝え、苦しんでいる人に仕え（いやし：　　（テラペウオー））、弟子たちを教えたことは確かで、そのなかに、主との交わりの深さ、主のみこころを行う使命は明確にされていたと思われるが、神

の子、救い主と単独のことばで表現すると、危険も伴うので、より丁寧な表現が必要。イエスは、何をたいせつにして、生き・死なれたのだろうか。

- イエスは、なぜ、十字架の死に向かわなければいけなかったのだろうか。おそらく、イエスはどのような「神の子」「キリスト（油注がれた）・救い主」との問いとも深く関係している。
- マルコを土台にしたと思われる、マタイやルカに拡大または追加して書かれていることについて、どう理解していったら良いのだろうか。語録のような文書があったとして、それ以外の部分に、絞って論じることも必要。
- マルコ（の古い信頼できる写本は 16 章 8 節まで）は、復活の証言で終わっており、ガリラヤでお会いできるであろうと伝えられるところまでで、復活のイエスとの出会いについては、書かれていない。それは、なぜなのだろうか。（マルコの 16 章 9 節〜20 節の追記部分を別として）復活のイエスの顕現やルカ文書にある昇天は書かれていないが、それは、どのように受け止められていたのだろうか。

[参考] ChatGPT 2025.4.23 [リンク]

2.2 個別の記事について

2.2.1 マルコによる福音書について

以下は、それぞれの学びのときに、その箇所を理解し、考えるための問いではありませんが、合わせて考えていただければと思います。学びの準備の段階や、学びが終わってから、残った問いなどをリストしています。

聖書箇所：1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。

- マルコは「神の子イエス・キリストの福音のはじめ。」としている。ここで言われている「福音」とは何なのだろうか。それとも、マルコ全体をとおして、福音について語られているということなのだろうか。
- 最初から、イエスは、神の子であり、救い主（キリスト）だとしているが、これは、どう理解したら良いのだろうか。本書を通して、このことを証言しようとしているのか、それとも、イエスが、神の子、キリストであるとしての活動などを描いているのだろうか。

2.2.2 洗礼者ヨハネ、悔い改めの洗礼を宣べ伝える

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 1-8 節福音書対照表

- バプテスマのヨハネの使命やメッセージはどのようなものだったのだろうか。イエスのものとの相違は何だったのだろうか。
  - 福音書ごとに伝える内容が異なっているようだが、それは、何を意味するのだろうか。
- バプテスマのヨハネのことは、イエスの活動に関しても、大きな影響を及ぼしたように見えるが、イエスにとって、ヨハネはどのような存在だったのだろうか。

2.2.3　イエス、洗礼を受ける

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 9-11 節福音書対照表

- イエスは、なぜ、バプテスマのヨハネの洗礼を受けられたのだろうか。
- 「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」（11）は、聖霊をうけられたことの具体的内容であるようにも見える。イエスは、神の心にかなうといういみで神の愛する子ということなのだろうか。
- イエスは、神の子として、生まれたのだろうか、それとも、この時から、神の心にかなう神の子として生きられたのだろうか。そのような問い自体が適切ではないのかもしれないが。

2.2.4　試みを受ける

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 12-13 節福音書対照表

- サタンと悪魔はどう違うのだろうか。どのように使い分けられているのだろうか。
  - 悪霊は、サタンや、悪魔とは異なるようだが、どのように違うのだろうか。
- マルコでは、試みの内容についてかかれていないが、なにが試みられたのだろうか。
  - 試みがあったことがマルコのように書かれている時、われわれはそこからどのようなメッセージを受け取れば良いのであろうか。
- 「獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた。」（13）は何を伝えているのだろうか。

2.2.5　ガリラヤで宣教を始める

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 14-15 節福音書対照表

- マルコを手にしたひとは、福音の内容・意味が理解できたのだろうか。
- 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。はどのようなメッセージなのだろうか。
  - 時は満ちた
  - 神の国は近づいた
  - 悔い改めて福音を信ぜよ
- 「神の国は近づいた」は神の支配、神の御心がなることを意味しているのかもしれないが、どのようなことがイメージされているのだろうか。

2.2.6　四人の漁師を弟子にする

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 16-20 節福音書対照表

- 「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」（17）は、どのような召しなのだろうか。目的は何なのだろう。どのように理解されたのだろうか。
- ヨハネ（1:35-42）に書かれている記事（このとき以前のことのように思われる）は、何を意味し、この箇所とはどのように関連しているのだろうか。

2.2.7　汚れた霊に取りつかれた男を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 21-28 節福音書対照表

- 「権威ある者のように教えられた」（22）は、どのような特徴を表現しているのだろうか。
- 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」（24）特に「神の聖者」は何を伝えているのだろうか。
- なぜ、イエスは「黙れ、この人から出て行け」（25）と、この霊を黙らせるのか。

2.2.8　多くの病人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 29-34 節福音書対照表

- ペテロの家族構成はどうなっていたのだろうか。
- 「悪霊」と「病」の関係はどうだと人々や、イエスはどのように考えていたのだろうか。

2.2.9　巡回して宣教する

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 35-39 節福音書対照表

- 「みんなが、あなたを捜しています」（37）とあるが、人々はなにを求めているのだろうか。
- イエスの宣教に関するビジョンは、どのようなものだったのだろうか。（39）

2.2.10　規定の病を患っている人を清める

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 40-45 節福音書対照表

- 「重い皮膚病にかかった人が、イエスのところに願いにきて、ひざまずいて言った、『みこころでしたら、きよめていただけるのですが』。イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、『そうしてあげよう、きよくなれ』と言われた。」（40,41）とあるが、この、深くあわれみは、なにを意味しているのだろうか。
- 重い皮膚病と、汚れることについて、どのように考えたら良いのだろうか。

2.2.11　体の麻痺した人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 2 章 1-12 節福音書対照表

2.2.12　レビを弟子にする

聖書箇所：マルコによる福音書 2 章 13-17 節福音書対照表

2.2.13　断食についての問答

聖書箇所：マルコによる福音書 2 章 18-22 節福音書対照表

2.2.14　安息日に麦の穂を摘む

聖書箇所：マルコによる福音書 2 章 23-28 節福音書対照表

- 「ダビデとその供の者たち」に関する挿入話（25,26）は、唐突に感ずるが、イエスの真意は、どのようなことだったのだろうか。弟子たちを守るために、反論したようにも見えるが、どうなのだろうか。
- イエス自身は、安息日に、麦の穂を摘むことはしなかったのだろうか。律法に関して、どのように行動していたのだろうか。守っていたのだろうか、それとも、自由人だったのだろうか。
- 「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。」（27）とあるが、安息日とは何のためにあるのだろうか。
- 同様の規則・習慣で、本来の目的が、捻じ曲げられているものはどのようなものがあるだろうか。
- 「それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」。（28）は、何を伝えているのだろうか。

2.2.15　手の萎えた人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 1-6 節福音書対照表

2.2.16　湖の岸辺の群衆

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 7-12 節福音書対照表

2.2.17　十二人を選ぶ

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 13-19 節福音書対照表

2.2.18　ベルゼブル論争

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 20-30 節福音書対照表

2.2.19　イエスの母、きょうだい

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 31-35 節福音書対照表

2.2.20　「種を蒔く人」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 1-9 節福音書対照表

2.2.21　たとえを用いて話す理由

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 10-12 節福音書対照表

2.2.22　「種を蒔く人」のたとえの説明

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 13-20 節福音書対照表

2.2.23　「灯」と「秤」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 21-25 節福音書対照表

2.2.24　「成長する種」「からし種」たとえを用いて語る

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 26-34 節福音書対照表

2.2.25　「成長する種」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 26-29 節福音書対照表

2.2.26　「からし種」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 30-32 節福音書対照表

2.2.27　たとえを用いて語る

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 33-34 節福音書対照表

2.2.28　突風を静める

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 35-41 節福音書対照表

2.2.29　悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 1-20 節福音書対照表

2.2.30　悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす（１）

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 1-10 節福音書対照表

2.2.31　悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす（２）

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 11-20 節福音書対照表

2.2.32　ヤイロの娘とイエスの服に触れる女

聖書箇所：

2.2.33　ヤイロの娘とイエスの服に触れる女（１）

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 25-34 節福音書対照表

2.2.34　ヤイロの娘とイエスの服に触れる女（２）

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 21-24, 35-43 節福音書対照表

2.2.35　ナザレで受け入れられない

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 1-6 節福音書対照表

2.2.36　十二人を派遣する

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 7-13 節福音書対照表

2.2.37　洗礼者ヨハネ、殺される

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 14-29 節福音書対照表

2.2.38　五千人に食べ物を与える

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 30-44 節福音書対照表

- 五千人の給食とはどのようなものだったのだろうか

2.2.39　五千人に食べ物を与える（１）

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 30-34 節福音書対照表

2.2.40　五千人に食べ物を与える（２）

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 35-44 節福音書対照表

2.2.41　湖の上を歩く

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 45-52 節福音書対照表

2.2.42　ゲネサレトで病人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 53-56 節福音書対照表

2.2.43　昔の人の言い伝え

聖書箇所：

2.2.44　昔の人の言い伝え（1）

聖書箇所：マルコによる福音書 7 章 1-13 節福音書対照表

2.2.45　昔の人の言い伝え（2）

聖書箇所：マルコによる福音書 7 章 14-23 節福音書対照表

2.2.46　シリア・フェニキアの女の信仰

聖書箇所：マルコによる福音書 7 章 24-30 節福音書対照表

2.2.47　耳が聞こえず舌の回らない人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 7 章 31-37 節福音書対照表

2.2.48　四千人に食べ物を与える

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 1-10 節福音書対照表

2.2.49　人々はしるしを欲しがる

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 11-13 節福音書対照表

2.2.50　ファリサイ派の人々とヘロデのパン種

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 14-21 節福音書対照表

2.2.51　ベトサイダで盲人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 22-26 節福音書対照表

2.2.52　ペトロ、イエスがメシアであると告白する

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 27-30 節福音書対照表

2.2.53　イエス、死と復活を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 31-38 節, 9 章 1 節福音書対照表

2.2.54　イエスの姿が変わる

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 2-13 節福音書対照表

2.2.55　汚れた霊に取りつかれた子を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 14-29 節福音書対照表

2.2.56　再び自分の死と復活を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 30-32 節福音書対照表/マルコによる福音書 9 章 30-32 節福音書対照表（参照付）

2.2.57　いちばん偉い者

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 33-37 節福音書対照表

2.2.58　逆らわない者は味方

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 38-41 節福音書対照表/マルコによる福音書 9 章 38-41 節福音書対照表（ルカ参照付）

2.2.59　罪への誘惑

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 42-50 節福音書対照表

2.2.60　離婚について教える

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 1-12 節福音書対照表

2.2.61　子どもを祝福する

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 13-16 節福音書対照表

2.2.62　金持ちの男

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 17-31 節福音書対照表

2.2.63　金持ちの男（1）

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 17-22 節福音書対照表

2.2.64　金持ちの男（2）

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 23-31 節福音書対照表

2.2.65　イエス、三度自分の死と復活を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表/マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表（参照付）

2.2.66　ヤコブとヨハネの願い

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 35-45 節福音書対照表

- あがないという言葉は、共観福音書では、ここと対応するマタイの箇所にのみ現れるが、イエスの死は罪の贖いのためなのだろうか。
  - マルコだけではなく、共観福音書には、ほとんど、罪のあがないについて書かれていないように見える。

2.2.67　盲人バルティマイを癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 46-52 節福音書対照表

2.2.68　エルサレムに迎えられる

聖書箇所：マルコによる福音書 11 章 1-11 節福音書対照表

- マルコ、マタイ、ルカでは、このときが公生涯において、最初にエルサレムに来たときとして描かれているが、ヨハネでは、逆に、エルサレムや、その周辺、ユダヤなどでの活動についてたくさん書かれている。
- エルサレム入城の書き方が、マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネそれぞれに異なる。実際、エルサレム入城は、イエスにとってどのようなものだったのだろう。

2.2.69　神殿から商人を追い出す

聖書箇所：マルコによる福音書 11 章 12-26 節福音書対照表

- マルコによると、エルサレム入城のあと、宮も見て回り、その翌日に、宮きよめをしたことが書かれている (11:11, 12)。入城した日も、同じ様子を見ながら、何もしなかったように見える。また、このあと、どうなったかもかかれていない。宮の境内を歩いておられ（11:37）たり、宮の境内で教えておられること（12:35）賽銭箱の前に座っておられること（12:41）も書かれている。
- 祭司長たちや、律法学者たちは、イエスの言葉を聞いて、殺そうとするが、殺意を抱くほどのことを言っているとは思えない。
- ヨハネでは 2 章となっている。似た記事だが、終わり方は少し異なっている。
- 宮きよめは、何を伝えているのだろうか。

2.2.70　いちじくの木を呪う

聖書箇所：マルコによる福音書 11 章 12-26 節福音書対照表

- 悪魔の試みのときも含め、自分のためには、奇跡的な方法を使われないイエスの呪い、魔術的なとも言える力によって、いちじくが枯れてしまったように見える。（マルコでは翌日、マタイではたちまち枯れている。）
- まだ実がなる時期になっていないときのことであり、道理に適っていない。同時に、その時期ではなかったこと書かれていることも興味深い。
- マルコでは、祈りについての教えが続き、赦しについても書かれている。
- ルカには、宮きよめの記事が、エルサレム入城に引き続いて、マルコ、マタイと同じ位置に書かれているが、この記事はない。その代わりかどうかは不明だが、ルカ 13:6-9 に、実のならない、いちじくの木につ

いて、あと三年待ってほしいと懇願する園丁の話が載っている。しかし「それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください」という期間限定がなにを意味するのか不明。

- マルコ、マタイ、ルカとも、いちじくの状態から、季節を見極める、話が登場する。イエスは、いちじくの実のなる季節についても、よく知っておられたのだろうか。それとも、このエピソードのときに学んだのだろうか。（マルコ 13:28-32、マタイ 24:32-35、ルカ 21:29-33）
- 実らないいちじくを枯らすはなしは、何を伝えているのだろうか（マルコ、マタイ）

2.2.71 権威についての問答

聖書箇所：マルコによる福音書 11 章 27-33 節福音書対照表

- 「権威についての問答」（マルコ 11:27-33, マタイ 21:23-27, ルカ 20:1-8）において、「何の権威によって、これらの事をするのですか」と聞かれ、直接的には答えず「ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか」と聞いています。なぜ、祭司長、律法学者、長老たちは、このような質問をしているでしょうか。そして「これらの事」は何を指すのでしょうか。そして、直接的には答えることは、訴える口実を与えてしまうおそれもあったので、それを避けたのでしょうか。
- イエスは問いに対して問い返すという場面があるように思いますが、「ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか」では、イエスは本質的に何を、祭司長、律法学者、長老たちに問い、私たちに、どのようなことを考えることを迫っているのでしょうか。
- あるものが「天（神）から」か「人から」かは、どのように判断したら良いのだろうか。とても、本質的な問いであもる。民の指導者たちはどう考えていたのだろう。イエスはどうだろうか、そして、私たちは、どのように判断したらよいのだろうか。

2.2.72 「ぶどう園の農夫」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 1-12 節福音書対照表

- 主人が神様をあらわしているとすると、たとえで語られている、ぶどう園にたいしてしたことは、何を著しているのだろうか。
- 農夫たちが、収穫を主人に与えず、しもべたちを受け入れないことは何を意味しているのだろうか。
- 主人は、すでに、しもべたちが何度もひどい目にあっているのに、なぜ、農夫たちは、息子ならうやまってくれるだろうと考えたのだろうか。
- 語られている「彼ら」が祭司長、律法学者、長老たちであるなら、このたとえを通して、このひとたちに、どのようなメッセージが語られており、また、この人たちは、なにをどうすべきだ（った）と言っているのだろうか。

- 主人と農夫の信頼関係が、壊れてしまったのは何が原因なのだろうか。回復は不可能なのだろうか。

2.2.73　皇帝への税金

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 13-17 節福音書対照表

- イエスに質問をしにきた人たちは、どのような答えを期待していたのだろうか。
- 税金についてイエスはどのように考えていたのだろうか。
- 「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」で、イエスは何を教えているのだろうか。
- このひとたちが考えていたことと、イエスのこたえには、どのような相違があったのだろうか。

2.2.74　復活についての問答

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 18-27 節福音書対照表

- サドカイ人は、復活を信ぜず、パリサイ人は、それを信じていたようだが（使徒 23:6）なぜ、そのように信じ、何を根拠にそう信じていたのだろうか。そのように信じるような経緯もしりたい。
- 復活を信じる、パリサイ人は、サドカイ人の 12:19-23 節の問いに、どう答えていたのだろうか。
- アブラハム、イサク、ヤコブは生きていると証言しているようだが、イエスは復活についてどのような理解をもっていたのだろうか。
- イエス自身が「よみがえる」ことについて何回か述べられているが（マルコ 8:31, 9:9-10, 9:31, 10:34）、イエスは自身の復活についてどのように認識していたのだろうか。
- 死んだひとが生き返ること、イエスの復活、一般の（イエス以外の）ひとの死後の復活、神との関係において生き続けること、それぞれについて、そして相違について、どう考えればよいのだろうか。

2.2.75　最も重要な戒め

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 28-34 節福音書対照表

- イエスが「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」と問われて答えている箇所である。「わたしたちの神は、唯一の神である。その主をあなたのすべてをもって愛せよ。自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ。」（要約）が、聖書の中心的な教えということだろうか。
- 「イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。」で、聖書は、そして、イエスは何を伝えているのだろうか。他の神を認めない、排他的であることを奨励しているのだろうか。

- なぜ最も重要な戒めは一つではなく二つなのだろうか。二つとも絶対的に必要なのだろうか。二つのいましめは関連しているのだろうか、それとも独立なのだろうか。

2.2.76　ダビデの子についての問答

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 35-37 節福音書対照表

- キリストはダビデの子かという問いに対して三つの共観福音書ともイエスは否定している。イエスがダビデの子かという問いに関しては、福音書によってどのように記述されているのだろうか。
- マルコにおいても、一箇所、エリコで盲人が「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」（10 章 47 節、48 節では「イエス」が省略）と叫んでいる箇所があるが、他の福音書と比較して非常に注意して「ダビデの子」とは書かれていないように見える。この箇所でも、ひとびとは、必ずしもメシアをダビデの子だとは考えてないように見える。実際には、どうだったのだろうか。

2.2.77　律法学者を非難する

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 38-40 節福音書対照表

- なぜ律法学者を非難する記事が入っているのだろう。
- マルコの律法学者非難は簡素で短く、マタイは非常に長く、ルカは異なる形にまとめてあるようだがそれは何を意味するのだろうか。

2.2.78　やもめの献金

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 41-44 節福音書対照表

- やもめはなにかの象徴だろうか。やもめのようになれと言っているのだろうか。それとも、そうではないひとを非難しているのだろうか。
- イエスはこの「やもめの献金」で何を教えようとしているのだろうか。

2.2.79　神殿の崩壊を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 1-2 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 1-2, 3-13 節福音書対照表

- 宮が（ローマ軍によって AD70 に）崩されることの預言なのだろうか。それとも、もっと一般的に、物質的なものへの過度の称賛を戒めたものか。

2.2.80　終末の徴

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 3-13 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 1-2, 3-13 節福音書対照表

- イエスは「いつ」と「前兆」との問いのうち、「いつ」という問いには、答えていないように見える。イエスが気にかかっていたことは、どんなことだったのだろうか。

2.2.81　大きな苦難を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 14-23 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 14-23, 24-27 節福音書対照表

- 苦難のときをどのように生きれば良いのだろうか。

2.2.82　人の子が来る

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 24-27 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 14-23, 24-27 節福音書対照表

- 人の子が来ることを通して、なにを教えているのだろうか。

2.2.83　いちじくの木の教え

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 28-32 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 28-32, 33-37 節福音書対照表

- 「これらの事が起るのを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」（29b）とあるが、「これらの事」はどこの部分を指しているのだろうか。
- 「その日、その時は、だれも知らない。」そして「子も知らない」と明言している。これは、どのようなメッセージなのだろうか。

2.2.84　目を覚ましていなさい

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 33-37 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 28-32, 33-37 節福音書対照表

- 「気をつけて、目をさましていなさい。」が中心的なメッセージのようである。気を付けて、目を覚ましているとはどのようなことを命じているのだろうか。

2.2.85　イエスを殺す計略

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 1-2 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,10-11 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

- いつ頃から、イエスを捕らえ、殺す計画が始まっていたのだろうか。
- なぜ、捕らえ、殺そうとまで考えたのでしょうか。
- 恐れていたのは、どんなことだったのでしょうか。

2.2.86　ベタニアで香油を注がれる

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 3-9 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

- ヨハネの福音書では、エルサレム入城前、過越祭の六日前になっているが、いつなのだろうか。
- 厳しく女を咎めたのは、マルコでは人々、マタイでは弟子たち、ヨハネではイスカリオテのユダと書かれているが、実際はどうだったのだろう。
- イエスは、この女のひとを守ろうとしているようにみえるが、理由は何だろうか。
- この女のひとが、油を注いだ理由は何だったのだろうか。どこまで、わかってしたいたのだろうか。
- 先に書かれた、マルコやマタイには、名前が出ていないが、後から書かれた、ヨハネには名前が書かれているのは、なぜなのだろうか。

2.2.87　ユダ、裏切りを企てる

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 10-11 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,10-11 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

- ユダは「引き渡す」ことを計画しますが、これは、どのようなことを意図したのでしょうか。
- ユダが、イエスを祭司長たちに引き渡そうとしたのは、なぜなのでしょうか。

2.2.88　過越の食事をする

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 12-21 節福音書対照表

- 過越の食事の場所とその準備は、それだけ注意して、食事をしようとしていたということだろうか。

- イエスは、なぜ「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」と弟子たちに告げたのだろうか。弟子たちは、どのように受け取っただろうか。（マルコ 14:18b）
- 「人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」（マルコ 14:21b）はどのように受け取り理解したらよいのだろうか。

2.2.89　主の晩餐

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 22-25 節福音書対照表

- なぜ、パンとぶどう酒を配餐し、イエスの死について語る前に、弟子の裏切りのことを語ったのだろうか。
- パンはわたしのからだ、ぶどう酒は契約の血は、何を意味しているのだろうか。

2.2.90　ペトロの離反を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 26-31 節福音書対照表

- イエスは、ここでは、何を弟子たちに伝えているのだろうか。
- つまづくことは、十二人の一人が裏切ろうとしているということと同じだろうか。
- あなた方より先にガリラヤに行くは、「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。」（21）と関連して、言っているのだろうか、それとも異なることについて伝えているのだろうか。

2.2.91　ゲッセマネで祈る

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 32-42 節福音書対照表

- 弟子たちに期待したことはどのようなことなのだろうか。
- 恐れ慄（おのの）きとあるが、イエスの悲しみの内容は、なになのだろうか。
- イエスのいのりはどのようなものだったのだろうか。何を求めているのだろうか。

2.2.92　裏切られ、逮捕される

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 43-50 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表

- 「祭司長、律法学者、長老たちから送られた群衆」とはどのような人たちなのだろうか。

- 「イエスのそばに立っていた者のひとりが、剣を抜いて大祭司の僕に切りかかり、その片耳を切り落した」にもかかわらず、逮捕されたようには書かれていないのはなぜなのだろうか。
- なぜ、宮にいるときに、捕まえなかったのか。
- 戦う意思も持っていたようだが、弟子たちは、なぜ、逃げたのだろうか。

2.2.93　一人の若者、逃げる

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 51-52 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表

- この若者はだれなのか、なぜ、このような記事が記されているのか。

2.2.94　最高法院で裁判を受ける

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 53-65 節福音書対照表

- 何箇所かに連れて行かれるようだが、イエスは、全体として、どのような裁判を受けているのか。
- イエスは、神の子である、キリストであると、弟子たちや人々に伝えていたのだろうか。
- イエスは自分が神の子キリストだとは、明確には伝えていなかったように見えるが、ここでは、どのような気持ちで、大祭司の「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」との問いに、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」と肯定的に答えたのだろうか。

2.2.95　ペトロ、イエスを知らないと言う

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 66-72 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 26-31, 66-72 節福音書対照表

- 四つの福音書がみな、このことを伝えているが、すべて微妙に異なっている。これは、何を意味しているのだろうか。
- 十分、勇気のいる行動をしているようにも見えるが、なぜ、ペテロは、イエスを知らないと言ってしまうのだろうか。
- ペテロは、このあとどのように、立ち直ったのだろうか。

2.2.96　ピラトから尋問される

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 1-5 節福音書対照表

- なぜ、全議会は、ピラトにイエスを引き渡したのだろうか。
- ピラトの問い「あなたはユダヤ人の王であるか」に対して、なぜイエスは肯定したのだろうか。（共観福音書とヨハネを比較）

2.2.97　死刑の判決を受ける

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 6-15 節福音書対照表

- ピラトはなぜイエスを十字架につける決断をしたのだろうか。
- イエスが十字架刑に至ったのは、誰の何が責任なのだろうか。
- それぞれの福音書がたいせつなこととして伝えているのはどのようなことなのだろうか。

2.2.98　兵士から侮辱される

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 16-20 節福音書対照表（ルカを加えたもの）

- 嘲弄しているのは、兵士のようだが、兵士はなぜイエスを侮辱したのだろうか。
- 群衆や祭司長、長老たちは、どのようにこの光景を見ていただろうか。

2.2.99　十字架につけられる

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 21-32 節福音書対照表

- アレキサンデルとルポスとの父シモンはなぜイエスの十字架を負わされることになったのだろう。
- イエスの十字架は、どのようなもので、人々の目には、どのように映ったのだろうか。

2.2.100　イエスの死

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 33-41 節福音書対照表

- 「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と言われたイエスの心の中はどのようなものだったのだろうか。

- 百卒長は、なぜ、「まことに、この人は神の子であった」と言ったのだろうか。

2.2.101　墓に葬られる

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 42-47 節福音書対照表

- アリマタヤのヨセフはなにを思いこのような行動をとったのだろうか。
- ピラトはなぜイエスの死の確認をしたのだろうか。百卒長の役割は？

2.2.102　復活する

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 1-8 節福音書対照表

- 女たちが受け取ったものは何なのだろうか。
- なぜ、女たちは、何も言わなかったのだろうか。

2.2.103　（結び一）マグダラのマリアに現れる

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 9-11 節福音書対照表

- マタイにも少し書かれているが、詳細はヨハネのみにあるのは、なぜなのだろう。
- どのようにして、マグダラのマリアはイエスだと気づいたのだろうか。

2.2.104　二人の弟子に現れる

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 12-13 節福音書対照表

- イエスであることがわかったのは、いつでしょうか。それは、そのようにして、分かったのでしょうか。
- 「シモンに現れなさった」とあるが、それは、いつの、どのようなことについて述べているのだろうか。

2.2.105　弟子たちを派遣する

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 14-18 節福音書対照表

- いつ、どこでのことなのだろうか。
- 追記とも考えられるが他の福音書とは、記述が異なる。別の資料だろうか。

2.2.106　天に上げられる

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 19-20 節福音書対照表

- 信仰告白なのだろうか、それとも、実際の経験なのだろうか。
- 復活の主との出会いの期間をある時点で区切ることと、さらに再び来られる（再臨）のメッセージを送ることで、主人不在のときの僕の生き方をわれわれに期待しておられるのだろうか。

2.2.107　復活について

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 1-8 節福音書対照表

マルコによる福音書 16 章 9-11 節福音書対照表

マルコによる福音書 16 章 12-13 節福音書対照表

マルコによる福音書 16 章 14-18 節福音書対照表

マルコによる福音書 16 章 19-20 節福音書対照表

参考箇所（上記以外の復活に関係する聖書箇所）：

イエス自身についての証言（マルコを中心に。ルカではもっと数が多い）：

- 一回目：マルコによる福音書 8 章 31-38 節, 9 章 1 節福音書対照表
- 二回目：マルコによる福音書 9 章 30-32 節福音書対照表
- 三回目：マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表
- 参照付き：マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表（参照付）
  - ルカ：5:35、9:22、44、12:50、13:32、17:25、18:31-34
- ヨナのしるし：マタイ 12:39-41、16:4、ルカ 11:29-32

高い山でイエスの姿が変わる：マルコによる福音書 9 章 2-13 節福音書対照表

エルサレムでの復活に関する問答：マルコによる福音書 12 章 18-27 節福音書対照表

マタイに含まれる番兵の配置と報告：27:62-66, 28:11-15

ヨハネ独自の記事：イエスの死のあとに、19:32-37

- トマスに関する追記　ヨハネ 20:24-29

- ガリラヤでのことヨハネ 21 章

パウロによる証言：コリント前書 15:3-8, 35-44

2.2.107.1 A. パウロ証言

2.2.107.2 B. 福音書証言

(整合性をたいせつに)

2.2.107.3 C. 問い

2.2.107.4 D. マルコを中心に

2.2.107.5 E. 個人的瞑想

2.3 ヨハネによる福音書を中心として

2.4 マタイによる福音書、ルカによる福音書を読むときに

2.4.1 復讐してはならない/敵を愛しなさい

マタイ 5:38-48、ルカ 6:27-36

- 実際にこのようにすべきだと命じているのだろうか。
  - 詐欺にあったとき、強盗に襲われた時、テロにあった時、他国が侵略してきた時、それをひたすら受け入れることが命じられているのか。

第 3 章

共観福音書

マルコによる福音書を中心に共観福音書を読んでいきたいと思います。

新約聖書の最初には、イエスの活動や言葉について書かれている、四つの福音書があります。マタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書と、ヨハネによる福音書です。

マルコによる福音書は、新約聖書の順序では、二番目ですが、一般的には、福音書の中では、最初に書かれたと考えられています。その根拠のひとつは、伝承、そして、もう一つは、マルコによる福音書と、他の福音書の比較して、そのように結論づけられていますが、それは、読みながら、一緒に考えていければと思います。

伝承と書きましたが、直接的な証言は残っていませんから、しばらくたってから書かれたものなどから得られる情報なので、伝承としました。今から、2000 年も前のことですから、確実なことは言えないのは、仕方がないと思います。

仕方がないと書きましたが、わたしが大切だと考えているのは、不明なことが多く、事実を確認することは、不可能だと言うことを前提に読んでいくこと、そして、そうであっても、いろいろな可能性を考え、その中で、メッセージを受け取りましょうということです。

わからないと言っても、これまでも、たくさんの研究者の方々が、調べておられますから、ある程度、概観しておきたいと思います。

賛否があると思いますが、わたしは、2022 年末ごろから、生成系 AI（人工知能）のいくつかに、聞いてみることから始めています。それまでは、Wikipedia の英語版をまずは読んでいました。その前は、図書館などで本を調べていました。おそらく、偏りや、不正確さは、どの方法にも付随することでしょう。

上に、わからないと書きましたように、不明なことが多い中で、ひとつの意見として、いくつかの、AI（人工知能）を利用することは、特に、これからの時代には、不可欠なように思います。

私は、若い頃から、聖書を読み、少しずつ聖書を学んで来たので、多少の知識はあるほうだと思います。しかし、皆さんに、聖書を読んでいってもらいたい。問いを持ちながら。そうであれば、疑問が生じた時に、一般的に知

られていることを確認することは、たいせつなことだと思います。わたしは、そのために、AI を使うのが良いのではないかと考えています。

牧師や神父、聖書学者など、もっと詳しい人に聞いた方がより正確な答えが得られるのではないかと考えられる方が多いと思います。そうかもしれません。しかし、所属教派による解釈の違いもあるでしょうし、そして何よりも、確定的なことは、誰も知らない、すなわち、公平な理解というのは、誰にとっても不可能なように思います。そうであれば、自分達で学ぶ時には、一般的な情報をあつめている、AI に聞くのはひとつの解決策であると思いますし、仲間で学ぶ時には、最善だともいえます。

さまざまな問いを持ちながら、聖書を読んでいく。その素晴らしい経験を皆さんと共にできればと願い、皆さんが皆さんの仲間とそのようにして聖書を読むことの一助になればと考えて、書いています。違った考えの方もおられるかもしれませんが、わたしの考えを書かせていただきました。

これを書いている、2023 年 4 月の時点では、POE（https://poe.com/）を使っています。いくつかの AI での検索を比較でき、WebSite でも、モバイルアプリでも、可能で使いやすいからです。

なお、2023 年 5 月中旬から、Google Bard (https://bard.google.com) が公開されたので、Bard も使っています。

3.1 著者などについて

3.1.1 マルコによる福音書

2023.04.15

Q. 新約聖書のマルコによる福音書の著者、成立年代、背景について、有力な説と、その根拠をいくつか教えてください。

GPT4

新約聖書のマルコによる福音書について、著者、成立年代、背景に関連する有力な説とその根拠を以下に示します。

著者

有力な説として、マルコによる福音書の著者は、ペトロの弟子であるヨハネ・マルコだとされています。この説は、教父パピアス（Papias, 60-130 年頃）が伝える情報に基づいています。彼は、ペトロの説教を綴ったマルコの記録を用いて福音書を書いたと述べています。この説は、多くの教会史家や聖書研究者に受け入れられており、マルコ福音書の著者としてヨハネ・マルコが妥当であるとされています。

成立年代

成立年代に関する有力な説は、おおよそ西暦 65 年から 75 年の間であるとされています。その根拠は以下の通り

です。

1. マルコ福音書は、他の福音書（マタイ、ルカ）に比べて短く、原始的な形式をとっていることから、最も古い福音書であるとされています。
2. マルコ福音書には、西暦 70 年に起こったエルサレム神殿の破壊に関する直接的な言及がないことから、それ以前に成立したと考えられています。
3. 一部の研究者は、マルコ福音書がペトロの死（西暦 64 年頃）の後に成立したと考えており、そのため 65 年以降の成立が考えられます。

これらの根拠から、マルコ福音書の成立年代は西暦 65 年から 75 年の間であると考えられています。

背景

マルコ福音書の背景に関する有力な説は、以下の通りです。

1. 成立地：マルコ福音書は、ローマで成立したという説が有力です。その根拠として、福音書におけるラテン語の表現の使用や、ローマのキリスト教徒への言及が挙げられます。
2. 受け手：マルコ福音書は、主に非ユダヤ人のキリスト教徒を対象として書かれたとされています。その根拠は、ユダヤ教の伝統や慣習に関する説明が含まれていることや、ユダヤ教徒ではない人々への言及があることです。
3. 目的：マルコ福音書の目的は、イエス・キリストの教えと業を伝えることにあります。また、キリスト教徒への励ましや、苦難に耐える信仰の重要性を伝えることも目的の一部とされています。

これらの有力な説と根拠により、マルコによる福音書の著者、成立年代、背景について理解することができます。

Claud+

マルコによる福音書の著者、成立年代、背景についての有力な説と根拠は以下のようになります。

1. 著者は「ヨハネのマルコ」とされる。根拠は、初期の教会父たちの証言が一致していること。
2. 成立年代は紀元 70 年代とされる。根拠は、エルサレム神殿の破壊 (70 年) についての予言がないこと、使徒ペテロのことを過去形で語っていることなどから。
3. マルコはペテロの弟子で、ローマの教会とのつながりが深い。根拠は、初期の教会父たちの証言、ローマ式のラテン語が少し使われていることなどから。
4. マルコの福音書はペテロの口述に基づいているとする説がある。根拠は、マルコがペテロの弟子であり、ペテロ中心の記述が多いことから。
5. マルコの福音書はローマの教会向けに書かれたとする説がある。根拠は、ローマ式のラテン語が使われていること、ピラトの好意的な記述などから、ローマの人々を意識した記述があるとみられることなど。

このように、初期教会の証言と内容から有力な説がある一方で、依然として諸説ある部分もあるといえます。

Q.「初期の教会父たちの証言、ローマ式のラテン語が少し使われていること」をもう少し詳しく説明してください。

Claud+

はい、初期の教会父たちの証言とローマ式のラテン語使用について詳しく説明します。

1. 初期の教会父たち、イレナエウス (2 世紀)、クレメンス (2 世紀)、テルトゥリアヌス (2 世紀末) らは、マルコの福音書の著者を「ペテロの弟子で、福音を記した人」「ヨハネのマルコ」と一致して証言している。

2. マルコの福音書にはローマ式のラテン語が散見される。例えば、兵士の隊長を latinos と表記 (15:39) したり、遺体収容の場所を praetorium と記したり (15:16)、銀貨のデナリオンを用いた記述 (6:37; 14:5; 15:15) がある。このことから、マルコの福音書がローマの教会を意識して書かれた可能性が高いとされる。

3. 一方で、ローマ式ラテン語の使用は稀であり、ギリシャ語が圧倒的に多用されていることから、マルコの福音書の目的がローマの教会のみに限定されるとは言い難い。

以上のように、初期教会の教父たちの証言からマルコが著者とされており、ローマ式ラテン語の少量ながらも意識的な使用からローマの教会との関係がうかがえる一方で、ギリシャ語使用の比重からそれだけに限定されるとは言えない、という点で学者の見解が分かれていると思われます。

3.1.2 感想

Wikipedia よりも、まとまっていて、読みやすく、本と比較すると、非常に手っ取り早く、簡単に、情報が得られます。わたしが、これまで、本などで、しらべたものと、ほぼ一致しており、わたしも、頭には入っていなかった情報も含まれています。現在は、マルコ著者説を否定する学者もいるが、ここでは、マルコ著者説を中心に語っている。

教父パピアス（Papias）の断片集と言われる資料はアンティオケのイグナチウスの引用で、原資料が残っているわけではありません。下の参考をみてください。

3.1.2.1 マルコによる福音書に関わる部分の引用

参考文献の英文を DeepL で訳したもの。

> マルコはペテロの通訳となり、覚えていることを正確に書き留めた。しかし、キリストの言葉や行いを正確に記すことはできなかった。彼は主の声を聞いたわけでも、同行したわけでもなかったからである。しかしその後、先にも述べたように、彼はペテロに同行し、自分の指示を [聴衆の] 必要性に合わせて行ったが、主の言葉を規則正しく語るつもりはなかったのである。それゆえマルコは，いくつかの事柄を覚えているままに書き記すことに間違いはなかった。というのも、マルコが特に注意したのは、自分が聞いたこ

とを何一つ省略しないこと、また架空のことを何一つ記述に入れないことであった。

3.1.2.2 『教会史聖書概論』エウサビオス 6:14

（榊原康夫：「ルカの福音書」p.443）

> クレメンスは同じ書物（『聖書概論』）の中で、福音書の順序に関する教会の初めの権威者たちの伝承を載せるゆとりをもっていた。次の通りである。彼がいいならわしているところでは、最初の福音書は系図をのせたものであるが、マルコのは次のようにして生じた。ローマでペテロが公然とみことばを説き、御霊によって福音を宣べ伝え終わった時、大聴衆は、年久しくペテロに伴い、語られたことを覚えていたマルコに、それをみな書き下すように求めた。マルコがその通りにして、彼の福音書を注文する誰にでも手にはいるようにした。ペテロはこのことを聞いた時、なんの反対もしなかったが、特別の奨励もしなかった。

3.1.3 マタイによる福音書

2023.04.29

Q. 新約聖書のマタイによる福音書の著者、成立年代、背景について、有力な説と、その根拠、文献をいくつか教えてください。

GPT4.

新約聖書のマタイによる福音書（以下、「マタイ福音書」）は、新約聖書の中で最も古い四つの福音書のひとつであり、主にイエス・キリストの言行録を記しています。マタイ福音書の著者、成立年代、背景に関しては、さまざまな説が存在しますが、以下に有力な説とその根拠、文献をいくつか紹介します。

著者

- マタイ福音書の著者は、伝統的にイエスの使徒であり、税務署員であったマタイ（マシュー）によるとされています。しかしながら、近代的な聖書学の研究では、この福音書がマタイ自身によって書かれたという証拠は不十分であり、著者に関しては不確かとされています。

成立年代

- マタイ福音書の成立年代に関しては、一般的には紀元 70 年から 100 年の間に成立したとされています。マルコによる福音書（以下、「マルコ福音書」）が成立した紀元 66 年から 70 年頃よりも後であるため、マルコ福音書とルカによる福音書（以下、「ルカ福音書」）の成立後に書かれたとされています。

背景

- マタイ福音書は主に、ユダヤ人向けに書かれたと考えられており、特にイエスがモーセの教えを成就し、新しい法を提示したメシアであることを強調しています。また、マタイ福音書は、マルコ福音書やルカ福音書と共通する部分が多く、これら三つの福音書を合わせて「シノプティック福音書」と呼びます。

いくつかの重要な文献:

1. Brown, R. E. (1997). *An Introduction to the New Testament.* New York: Doubleday.
2. Ehrman, B. D. (2005). *Misquoting Jesus: The Story Behind Who Changed the Bible and Why.* San Francisco: HarperSanFrancisco.
3. Kümmel, W. G. (1975). *Introduction to the New Testament.* London: SCM Press.

これらの文献は、マタイ福音書の著者、成立年代、背景に関する研究を提供しています。ただし、聖書学は絶えず進化している学問であり、新しい発見や研究によってこれらの説が変わる可能性があることに留意してください。

Q. マタイによる福音書や、ルカによる福音書に含まれるイエスの説教などについては、ロギアや、Q 資料という、資料がべつにあったのではないかとも言われているのではないですか。マルコに含まれておらず、マタイとルカにある部分は共通に含まれているないようについては、どのように考えられているのですか。資料とともに、教えてください。

GPT4

はい、その通りです。マタイによる福音書とルカによる福音書には、共通の内容が含まれており、それらは Q 資料（Quelle とも呼ばれる）と呼ばれる未発見の文書に由来するという説があります。この Q 資料は、イエスの言葉や教えを集めたもので、マタイとルカが独自に持っている情報の源とされています。

また、ロギアという言葉は、イエスの言葉や教えを意味し、Q 資料に含まれるとされるものです。

マルコによる福音書は、マタイとルカの福音書よりも古いとされ、両者の共通の情報源と見なされています。しかし、マルコには含まれていない、マタイとルカに共通する部分が存在します。これらの部分は、おそらく Q 資料から取り入れられたと考えられています。

福音書の成立に関する研究では、マルコ、Q 資料、そしてマタイとルカがそれぞれ持っている独自の情報源（M 資料と L 資料）が、マタイとルカの福音書を構成する主要な要素であるとされています。この仮説は、二源説（Two-Source Hypothesis）と呼ばれています。

二源説は、福音書の成立に関する主要な理論の一つですが、他にも様々な理論が提案されています。例えば、マルコ優先説（Markan Priority）では、マルコが最初に書かれた福音書であり、マタイとルカはそれを元に作成されたとされています。また、一部の研究者は、Q 資料の存在を疑問視し、マタイがルカの情報源であるという説もあります。

いずれにせよ、福音書の成立に関する研究は、古代の文書や資料が不足しているため、確定的な結論は得られていません。しかし、Q 資料やロギアの存在は、新約聖書学やキリスト教史研究において重要な課題とされています。

3.2 人物

3.2.1 バプテスマのヨハネ

2023.04.21

Q. 新約聖書に登場するバプテスマのヨハネについて、聖書以外の文献でどのように描かれているか、文献名またはリンクとともに、説明してくださいませんか。

GPT4.

バプテスマのヨハネは、新約聖書に登場する重要な人物であり、イエス・キリストの洗礼を行ったことで知られています。新約聖書以外の文献でも、彼について言及されているものがいくつか存在します。

1. **ヨセフスの『ユダヤ古代誌』**: ユダヤの歴史家フラウィウス・ヨセフスが著した『ユダヤ古代誌』(Antiquities of the Jews）は、ヨハネに関する重要な情報源となっています。ヨセフスは、ヨハネが義人であり、洗礼の儀式を行っていたことを記しています。また、彼はヘロデ・アンティパスによって投獄され、後に処刑されたことも記録されています。

   参照リンク: ユダヤ古代誌

2. **旧約聖書外典**: バプテスマのヨハネに言及している旧約聖書外典の一部もあります。『エルサレムの詩篇』（The Psalms of Solomon）は、ヨハネが救世主イエスの到来を予言していたことを示唆しています。ただし、この文献は伝統的なキリスト教の聖書には含まれていません。

   参照リンク: エルサレムの詩篇 [HS: リンク切れ：新しいリンク]

3. **マンデ教文献**: マンデ教は、バプテスマのヨハネを宗教的指導者として尊敬しています。彼らの文献には、ヨハネの教えや行為に関する情報が含まれています。『マンデ教の祈祷書』（The Mandaean Book of Prayer）や『マンデ教の創世記』（The Mandaean Book of Genesis）などが挙げられます。

   参照リンク: マンデ教の祈祷書

これらの文献は、バプテスマのヨハネに関する新約聖書以外の情報源を提供しています。ただし、文献によっては伝統的なキリスト教の教えとは異なる解釈が含まれていることに注意が必要です。

2023.04.21

Q. バプテスマのヨハネに関する『ユダヤ古代誌』（Antiquities of the Jews）からの引用箇所の日本語訳をお願いします。同様に『エルサレムの詩篇』（The Psalms of Solomon）からの引用箇所の日本語訳を教えてください。マンデ教文献については特徴的な１箇所のみ引用箇所の日本語訳をお願いします。

GPT4

まず『ユダヤ古代誌』（Antiquities of the Jews）からのバプテスマのヨハネに関する引用箇所の日本語訳です。

> このヨハネは義の人であり、彼がユダヤ人たちに説いた説教は、悔い改めと共に洗礼を受けるよう勧めるものでした。彼は洗礼は罪の赦しに直接的に役立つものではないと語りましたが、心身の浄化のためには必要であると説きました。多くのユダヤ人たちは彼の教えに従い、ヨルダン川で洗礼を受けました。

次に『エルサレムの詩篇』（The Psalms of Solomon）からの引用箇所の日本語訳です。

> 主よ、あなたの民の罪を赦し、あなたの選ばれた者たちを憐れみ、エルサレムを立て直し、あなたの聖なる都を永遠に守りたもう。あなたは罪からの救いを約束し、私たちがあなたに従順である限り、あなたの国の栄光を見ることができます。

最後に、マンデ教文献からの特徴的な 1 箇所の引用箇所の日本語訳です。

> 光の子らよ、知れ、汝らは闇の中にいるが、光を求め求めよ。汝らの守護者であるライトスピリットが、闇を破る知識とともに来たり。闇から光へと昇り、汝らの本来の故郷である光の世界へと帰りたまえ。

3.2.1.1 バプテスマのヨハネに関する聖書箇所

- ルカ 1:5-80
- マルコ 1:1-11、マタイ 3:1-12, 13-17、ルカ 3:1-20 21-22、ヨハネ 1:19-28, 29-34
- ヨハネ 3:22-30 こののち、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らと一緒にそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。 23 ヨハネもサリムに近いアイノンで、バプテスマを授けていた。そこには水がたくさんあったからである。人々がぞくぞくとやってきてバプテスマを受けていた。24 そのとき、ヨハネはまだ獄に入れられてはいなかった。25 ところが、ヨハネの弟子たちとひとりのユダヤ人との間に、きよめのことで争論が起った。26 そこで彼らはヨハネのところにきて言った、「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています」。27 ヨハネは答えて言った、「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない。28『わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である』と言ったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。29 花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。30 彼は必ず栄え、わたしは衰える。
- ヨハネ 4:1 イエスが、ヨハネよりも多く弟子をつくり、またバプテスマを授けておられるということを、パリサイ人たちが聞き、それを主が知られたとき、
- ヨハネ 5:33 あなたがたはヨハネのもとへ人をつかわしたが、そのとき彼は真理についてあかしをした。35 ヨハネは燃えて輝くあかりであった。あなたがたは、しばらくの間その光を喜び楽しもうとした。 36 しかし、わたしには、ヨハネのあかしよりも、もっと力あるあかしがある。父がわたしに成就させようとしてお与えになったわざ、すなわち、今わたしがしているこのわざが、父のわたしをつかわされたことをあかししている。

- ヨハネ 10:40,41 さて、イエスはまたヨルダンの向こう岸、すなわち、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた所に行き、そこに滞在しておられた。41 多くの人々がイエスのところにきて、互に言った、「ヨハネはなんのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」。
- マタイ 4:12 さて、イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。
- マルコ 2:18-22 18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。マタイ 9:14 そのとき、ヨハネの弟子たちがイエスのところにきて言った、「わたしたちとパリサイ人たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。 （ルカ 5:33）（マタイ 9:14-17, ルカ 5:33-39）
- マタイ 11:2-19 さて、ヨハネは獄中でキリストのみわざについて伝え聞き、自分の弟子たちをつかわして、（ルカ 7:18-35）
- マルコ 6:14-29、マタイ 14:1-12、ルカ 9:7-9
- マルコ 8:27-30, 8:28 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。（マタイ 16:13-20、ルカ 9:18-21）
- マタイ 17:13 そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと悟った。
- マルコ 11:27-33 30 ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。32 しかし、人からだと言えば……」。彼らは群衆を恐れていた。人々が皆、ヨハネを預言者だとほんとうに思っていたからである。（マタイ 21:23-27、ルカ 20:1-8）
- ルカ 11:1 また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終ったとき、弟子のひとりが言った、「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」。
- ルカ 16:16 律法と預言者とはヨハネの時までのものである。それ以来、神の国が宣べ伝えられ、人々は皆これに突入している。
- 使徒 1:5 すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。
- 使徒 1:22 すなわち、ヨハネのバプテスマの時から始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日に至るまで、始終わたしたちと行動を共にした人たちのうち、だれかひとりが、わたしたちに加わって主の復活の証人にならねばならない」。
- 使徒 10:37 それは、ヨハネがバプテスマを説いた後、ガリラヤから始まってユダヤ全土にひろまった福音を述べたものです。
- 使徒 11:16 その時わたしは、主が『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によってバプテスマを受けるであろう』と仰せになった言葉を思い出した。

- 使徒 13:25 ヨハネはその一生の行程を終ろうとするに当って言った、『わたしは、あなたがたが考えているような者ではない。しかし、わたしのあとから来るかたがいる。わたしはそのくつを脱がせてあげる値うちもない』。
- 使徒 18:25 この人は主の道に通じており、また、霊に燃えてイエスのことを詳しく語ったり教えたりしていたが、ただ**ヨハネ**のバプテスマしか知っていなかった。
- 使徒 19:3,4 「では、だれの名によってバプテスマを受けたのか」と彼がきくと、彼らは「ヨハネの名によるバプテスマを受けました」と答えた。4 そこで、パウロが言った、「ヨハネは悔改めのバプテスマを授けたが、それによって、自分のあとに来るかた、すなわち、イエスを信じるように、人々に勧めたのである」。

3.2.2 ヘロデ

3.2.2.1 ヘロデ大王

Q. ヘロデ大王について教えて下さい。

A. ChaptGPT 3.5 Turbo

ヘロデ大王（ヘロデス大王）は、古代のイスラエル地域で権力を持ったユダヤ人の支配者であり、ローマ帝国の代理人でした。以下にヘロデ大王に関する一般的な情報を提供します。

1. ヘロデ大王の治世: ヘロデ大王は紀元前 37 年から紀元前 4 年まで統治しました。彼はイドメネウス朝（ヘロデ朝）の創設者であり、ユダヤ人としては異例の長期間にわたり支配を続けました。
2. 政治的な地位: ヘロデ大王は、共和政から帝政への移行期において、ローマ帝国の支配下でユダヤ人の支配者となりました。彼はローマ帝国の皇帝アウグストゥスとの関係を築き、ローマの支援を受けながら統治しました。
3. 政治的な成果: ヘロデ大王はイスラエル地域の統一と近代化に注力しました。彼は建築プロジェクトを通じて都市と宮殿を建設し、水道や浴場などの公共施設を整備しました。また、ヘロデ大王はユダヤ教の宗教的中心地であるエルサレムの神殿を豪華に再建しましたが、これは後にイエス・キリストの時代に重要な役割を果たすことになります。
4. ヘロデ大王の性格: ヘロデ大王は強力な支配者であり、反対勢力に対しては容赦しない手段もとりました。彼は政敵や反乱者を厳しく取り締まり、時には自身の家族や妻子すら処刑することもありました。
5. 新約聖書との関連: ヘロデ大王の名前は新約聖書にも登場します。彼はイエス・キリストの時代に生きており、イエスの誕生直後にヘロデ大王がイエスの命を狙って幼児虐殺を命じたという記述があります（マタイによる福音書 2 章）。

ヘロデ大王は、イスラエル地域の歴史において重要な役割を果たしましたが、彼の統治は複雑で論争の的となることもあります。彼の治世や個人的な性格に関する詳細な情報は、古代の文献や研究者による研究を参照するこ

とで深く探求することができます。

（2023.11.16）

ヘロデ大王に関する聖書箇所

- マタイ 2:1-18
- ルカ 1:5 ユダヤの王ヘロデの世に、アビヤの組の祭司で名をザカリヤという者がいた。その妻はアロン家の娘のひとりで、名をエリサベツといった。

3.2.2.2 ヘロデ（Herod Antipas II）：ヘロデ大王とマルタケの子

- ルカ 3:19-20 ところで領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロデヤのことで、また自分がしたあらゆる悪事について、ヨハネから非難されていたので、20 彼を獄に閉じ込めて、いろいろな悪事の上に、もう一つこの悪事を重ねた。
- ルカ 8:13 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。
- マルコ 6:14-29, マタイ 14:1-12, ルカ 9:7-9
- ルカ 13:31-35 31 ちょうどその時、あるパリサイ人たちが、イエスに近寄ってきて言った、「ここから出て行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています」。32 そこで彼らに言われた、「あのきつねのところへ行ってこう言え、『見よ、わたしはきょうもあすも悪霊を追い出し、また、病気をいやし、そして三日目にわざを終えるであろう。33 しかし、きょうもあすも、またその次の日も、わたしは進んで行かねばならない。預言者がエルサレム以外の地で死ぬことは、あり得ないからである』。
- ルカ 23:5-12 ところが彼らは、ますます言いつのってやまなかった、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」。6 ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人かと尋ね、7 そしてヘロデの支配下のものであることを確かめたので、ちょうどこのころ、ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そちらへイエスを送りとどけた。8 ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。9 それで、いろいろと質問を試みたが、イエスは何もお答えにならなかった。10 祭司長たちと律法学者たちとは立って、激しい語調でイエスを訴えた。11 またヘロデはその兵卒どもと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえした。12 ヘロデとピラトとは以前は互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。

3.2.2.3 ヘロデ・アグリッパ（Herod Agrippa I）

- 使徒 12

3.2.2.4　ヘロデ・アグリッパ（Herod Agrippa II）

- 使徒 25:13

3.2.3　パリサイ人

Q. ユダヤ教のパリサイ派（Pharisees）についてその起源、歴史、事件、主要な人物、教義などについて教えてください。律法学者との違いについてもお願いします。

GPT4

ユダヤ教のパリサイ派（Pharisees）は、古代イスラエルの宗教的・政治的な派閥のひとつで、紀元前 2 世紀から紀元後 1 世紀にかけて活動していました。彼らは、ユダヤ教の厳格な律法の遵守と、口伝律法の重要性を強調していました。パリサイ派は、ユダヤ教の伝統的な教義と慣習を維持し、進化させる役割を果たし、ラビ・ユダヤ教の基礎を築きました。

起源と歴史

パリサイ派の起源は完全には明らかになっていませんが、おおよそ紀元前 2 世紀にさかのぼるとされています。この時期、ヘレニズム文化の影響がイスラエルに広がり、ユダヤ教徒社会の中で宗教的な対立が生じました。パリサイ派は、ヘレニズム文化の影響に抵抗し、ユダヤ教の伝統的な教義と慣習を守ることを目指しました。

主要な事件

パリサイ派は、ユダヤ教の教義と慣習を厳格に守ることで知られており、そのために彼らは何度も他の宗教的・政治的な派閥と対立しました。紀元前 1 世紀から紀元後 1 世紀にかけて、パリサイ派はサドカイ派（Sadducees）と激しく対立しました。サドカイ派は、エルサレム神殿の祭司階級であり、律法の文字通りの解釈と神殿の権威を重んじていました。この対立は、紀元 70 年のエルサレム神殿の破壊と、それに伴うユダヤ教の形態の変化によって終わりを迎えました。

主要な人物

ハッレル（Hillel）とシャンマイ（Shammai）は、パリサイ派の最も著名な律法学者でした。彼らは、紀元前 1 世紀から紀元後 1 世紀に活動し、数々のハラハ（ユダヤ教の法律）に関する議論を展開しました。ハッレルは、寛容で柔軟な解釈で知られており、シャンマイは厳格で保守的な解釈で知られています。

教義

パリサイ派は、律法（モーセの五書）の厳格な遵守と、口伝律法の重要性を強調していました。彼らは、律法を解釈し、日常生活に適用するために口伝律法が必要だと考えていました。また、パリサイ派は、復活と最後の審判、天使と悪魔の存在など、多くの神秘的な教義を信じていました。

律法学者との違い

律法学者（Scribes）は、ユダヤ教の聖典を書き写し、解釈し、教える専門家でした。彼らは、主に律法に関する知識を持ち、社会的地位が高かったです。一方、パリサイ派は宗教的なグループであり、律法の遵守と口伝律法の重要性を強調していました。律法学者は、パリサイ派の中にも存在しましたが、全ての律法学者がパリサイ派に属していたわけではありません。

律法学者は、律法の知識を持ち、解釈し、教える役割を果たしていたため、彼らはパリサイ派の教義に影響を与えることがありました。しかし、彼らはまた、異なる宗教的・政治的な背景を持ち、パリサイ派以外のグループにも所属していました。そのため、律法学者とパリサイ派は、同じ目的を持っていた場合もあれば、異なる目的や価値観を持っていた場合もありました。

(2023.6.18)

3.2.3.1　ヨセフス「ユダヤ戦役」

- 2-8-14 彼ら（パリサイ人）は、すべての霊魂は不朽であるが、善人の霊魂だけ別の体に移され、悪人の霊魂は永遠の刑罰に復する、と言う。（榊原康夫「マタイによる福音書下」）

(2024.10.22)

3.2.4　サドカイ人

3.2.4.1　ヨセフス「ユダヤ人古代史」

- 13-10-6 パリサイ人は、モーセ律法にしるされていないが父祖から伝えられた非常に多くの規定を、民に発布してきた。サドカイ人が彼らを排斥するのはこのためであって、彼らは、しるされた言葉にある規定を義務的と見るが、先祖の伝承から引き出されている事項は、守らないという。（榊原康夫「マタイによる福音書下」）

- 18-1-4 サドカイ人の教理は次の通り。魂は肉体とともに死ぬ。律法が命ずること以外の何事をも守らない。・・・しかし彼らはほとんど何事も自らはできない。というのは、彼らが権力者となる時、大衆が我慢しないので、不本意ながら、また時には無理矢理にパリサイ人の考えに身を委ねざるをえなくなるからである。（榊原康夫「マタイによる福音書下」）

(2024.10.22)

3.2.5　エッセネ派

3.2.5.1　ヨセフス「ユダヤ戦役」

- 2-8-11 彼ら（エッセネ派）の教理は次の通り。肉体は朽つべきもので、それが造られている物質も永遠でないが、霊魂は永続する。それは最も微妙な空気から出て、獄屋にはいるごとく、そのからだに統合され

る。一種の自然な誘惑によって引き込まれるのである。しかし、肉のかせから解き放たれた時、久しい奴隷のくびきから救われたかのように、喜び、上に昇る。

3.2.6 ヘロデ党

Q. 聖書に登場するヘロデ党というのは、どのようなものでしょうか。ユダヤの他グループなどとの関係なども分かれば教えてください。聖書以外の文献にも登場するようでしたら、その情報も教えてください。

GPT4.

ヘロデ党（Herodians）は新約聖書に登場するユダヤ人の政治的グループで、特にマルコによる福音書（マルコ 3:6; 12:13）とマタイによる福音書（マタイ 22:16）で言及されています。彼らの正確な特性や起源については不明な部分が多いですが、彼らの名称はヘロデ（Herod）家に由来しており、彼らはおそらくヘロデ家またはそのローマ人の後援者と何らかの形で結びついていたと考えられています。

ヘロデ家はユダヤのクライアント王家で、ローマ帝国の影響力下でユダヤ地方を統治していました。ユダヤの多くのグループ、特に宗教的に厳格なファリサイ派は、このローマの支配とそれに連携するヘロデ家に反対していました。それに対してヘロデ党は、ローマとヘロデ家との関係を支持し、積極的にそれらと協力していたと考えられています。

聖書外の文献においてもヘロデ党についての言及が見られます。ユダヤの歴史家フラウィウス・ヨセフスは彼の著作「ユダヤ古代誌」でヘロデ家とその時代について詳しく記述していますが、彼の記述には「ヘロデ党」の名前は出てきません。しかし、ヨセフスが記述するユダヤの政治的な派閥やグループの中に、ヘロデ家やローマと結びつく形でユダヤ社会に影響を与えた者たちがいたことは明らかです。

ヘロデ党の具体的な信念や行動については不明な点が多いですが、新約聖書と他の古代の資料から考えると、彼らはローマ帝国とヘロデ家の影響力を認め、積極的にそれらと協力していたグループであったと考えられます。

(2023.7.19)

3.2.6.1 ヘロデ党に関する聖書箇所

マルコ 3:6 パリサイ人たちは出て行って、すぐに**ヘロデ党**の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。参照

マルコ 12:13-17 さて、人々はパリサイ人やヘロデ党の者を数人、イエスのもとにつかわして、その言葉じりを捕えようとした。14 彼らはきてイエスに言った、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、はばかられないことを知っています。あなたは人に分け隔てをなさらないで、真理に基いて神の道を教えてくださいます。ところで、カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。15 イエスは彼らの偽善を見抜いて言われた、「なぜわたしをためそうとするのか。デナリを持ってきて見せなさい」。16 彼らはそれを持ってきた。そこでイエスは言われた、「これは、だれの肖

像、だれの記号か」。彼らは「カイザルのです」と答えた。17 するとイエスは言われた、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。彼らはイエスに驚嘆した。参照

マタイ 22:15-22 そのときパリサイ人たちがきて、どうかしてイエスを言葉のわなにかけようと、相談をした。16 そして、彼らの弟子を、ヘロデ党の者たちと共に、イエスのもとにつかわして言わせた、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたであって、真理に基いて神の道を教え、また、人に分け隔てをしないで、だれをもはばかられないことを知っています。17 それで、あなたはどう思われますか、答えてください。カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」。18 イエスは彼らの悪意を知って言われた、「偽善者たちよ、なぜわたしをためそうとするのか。19 税に納める貨幣を見せなさい」。彼らはデナリ一つを持ってきた。20 そこでイエスは言われた、「これは、だれの肖像、だれの記号か」。21 彼らは「カイザルのです」と答えた。するとイエスは言われた、「それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。22 彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

3.2.7 熱心党

Q. 新約聖書に登場する熱心党（Zealot）について教えてください。聖書以外の文献もあれば、お願いします。

GPT4.

新約聖書の中では、特に「熱心党」（Zealots）と呼ばれるグループが言及されています。このグループは、1 世紀のユダヤ人の政治的な派閥で、彼らは自分たちの故郷・祖国をローマ帝国の支配から解放することを強く求めていました。

新約聖書の中で最も有名な熱心党のメンバーは、イエス・キリストの 12 人の使徒の一人であるシモン・ザロテス（Simon the Zealot）です。彼の名前の「ザロテス」は「熱心党員」を意味します。

ただし、新約聖書自体が熱心党について多くを語っているわけではなく、彼らについての詳細な情報は他の史料から得られます。特に、「ユダヤ戦記」と「ユダヤ古代誌」の著者であるフラウィウス・ヨセフスは、熱心党について詳細に記述しています。彼によれば、熱心党はローマ帝国に対する反乱を主導し、70 年のエルサレムの破壊につながるユダヤ戦争を引き起こしました。

また、熱心党はユダヤの宗教的な規範を厳格に守ることを強調し、モーセの律法の遵守とユダヤ国家の独立を強く主張しました。彼らはその名前が示すように、ある種の「熱意」を持ってこれらの目標を追求しました。

それでも、熱心党がどの程度組織化されていたのか、どのような社会的背景から生まれたのか、そして彼らが具体的にどのような行動をとったのかといった具体的な詳細については、学者たちの間でまだ議論の余地があります。

3.2.8　最高議会（サンヘドリン）

Q. イエスの時代のサンヘドリンは、どのようなもので、どのような権威を持っていたのでしょうか。議員の人数、選出の仕方、運営、審判の事例などは、残っていますか。

Perplexity [リンク]　(2025.2.24)

Grok 3 beta [リンク] (2025.2.24)

ChatGPT o3-mini [リンク] (2025.2.24)

3.2.9　収税人

Q. イエスの時代、収税所（　　）は、どのように運営され、収税人（　　）はどのような仕事をしていたか、その採用などについても教えて下さい。聖書以外の文献の記述があればそれもお願いします。

GPT4

イエスの時代（紀元前 4 世紀 - 紀元後 1 世紀）の収税所（　　）は、ローマ帝国によって徴税のために設けられた施設でした。当時のローマ帝国は、征服した地域からさまざまな税を徴収していました。収税所は、通常、交通の要所や商業地区など、税収の請求が容易な場所に設置されていました。

収税人（　　）は、一般的に、ローマ帝国が徴税を委託した地元の民間人でした。彼らは税金を徴収することを業務としており、その報酬は徴収した税金の一部を受け取ることによって得られました。このため、彼らはしばしば、不正や横領を行うことがありました。聖書以外の文献で収税人に言及されているものとしては、1 世紀のユダヤの歴史家フラウィウス・ヨセフスの著作があります。

収税人の採用は、通常、競売の形式で行われました。競売によって税収権を獲得した者が、その地域の収税人となりました。競売の過程で、税収権を獲得するために高額な金額を支払った者は、その後の徴税活動で元を取るために、より高額な税金を徴収することがありました。これが、収税人が当時のユダヤ社会で軽蔑される要因の一つでした。

イエスの時代の収税人は、ユダヤ教徒の社会から疎外されることが一般的でした。彼らは、ローマ帝国の代理人として働くことに加え、徴税を通じた不正行為が一般的であったため、信仰共同体から離れた存在とみなされていました。新約聖書の中では、イエスがマタイ（マシュー）、ザッカイといった収税人たちと交流し、彼らを弟子に迎え入れることで、神の愛と赦しのメッセージを伝えていました。これは当時のユダヤ社会の価値観とは異なる考え方であり、イエスの教えの根幹をなすものでした。

(2023.6.24)

3.2.10　罪人たち

Q. 福音書に罪人（　　）と言われる人たちについて書かれていますが、それは、どのような人たちで、社会のなかでは、どのような存在だったのでしょうか。ここでいう、罪人とは、現代でいうと、どのような人たちなのでしょう。

GPT4

福音書における罪人（　　）は、主にユダヤ人の社会規範や宗教的な戒律に違反して行動する人々を指します。これらの人々は、ユダヤ教の法（トーラー）に従わないとみなされ、社会的には疎外されることが多かったです。

罪人たちは、様々な背景を持っていました。例えば、税務署員（徴税人）は、ローマ帝国に税金を徴収する役割を果たしていたため、協力者と見なされ、ユダヤ人社会から疎外されていました。その他にも、売春婦や盗賊、偽証者など、倫理的に疑問のある職業に従事している人々も罪人とされました。

現代の観点から罪人を考えると、社会的に疎外されたり、法律や倫理に反しているとみなされる人々に相当します。例えば、犯罪者や違法な行為を行う人々、不正行為や汚職に関与する政治家や官僚、倫理的に問題のあるビジネスを行っている企業家などが該当するでしょう。

ただし、福音書においてイエス・キリストは、罪人たちと交流し、彼らに慈しみと赦しを示す姿が描かれています。これは、イエスがすべての人々に救いの手を差し伸べることを示しており、現在のキリスト教徒にとっても重要な教えです。

Bard

福音書に罪人（　　）と言われる人たちとは、当時のユダヤ社会において、神の律法を犯した者、つまり神の敵と見なされていた人たちです。具体的には、徴税人、娼婦、盗人、殺人者など、社会の底辺に生きている人々が含まれていました。これらの人々は、神の愛から見放され、救いの恩恵を受けられないと考えられていました。

しかし、イエス・キリストは、これらの人々を神の愛する子どもとして受け入れました。そして、彼らに罪の赦しと救いの希望を与えました。イエス・キリストのこの行為は、当時のユダヤ社会に大きな衝撃を与えました。また、キリスト教の根本的な教えである「すべての人々が神の愛に値する」ことを示すことになりました。

現代においても、罪人という言葉は、しばしば、社会に適応できない人々や、道徳的に逸脱した人々を指すために使われます。しかし、キリスト教の教えによれば、すべての人々は罪人であり、神の愛に値する存在です。私たちは、誰もが神の愛を受けることができることを忘れてはなりません。

(2023.6.28)

3.2.11 こども

Q. イエスの時代、ひとびとはこどもをどのようなものと思っていたのでしょうか。どのようにこどもは扱われていたのでしょうか。

GoogleGemini. イエスの時代の子どもたち

イエスの時代、子どもは現代とは大きく異なる社会的な位置づけと扱いを受けていました。

社会的な位置づけ

- 家父長制社会: 当時の中東社会は厳格な家父長制社会であり、父親が家族の権限を握っていました。子どもは父親の所有物とみなされ、教育や職業選択など、人生の多くの側面において父親の決定に従わなければなりませんでした。
- 労働力: 子どもは幼い頃から家事や農業などの労働力として活用されました。教育を受ける機会は限られており、識字率も低かったと考えられています。
- 社会的地位: 社会的地位は基本的に家柄や財産によって決まりました。子どもはその家柄や財産を受け継ぐ存在として期待され、社会的な責任を早くから背負うこともありました。

扱い

- 体罰: 体罰は教育手段として一般的でした。子どもは言うことを聞かないと叩かれたり、むちで打たれたりすることがありました。
- 結婚: 当時の結婚年齢は現代よりもかなり早かったです。女の子は 12 歳頃、男の子は 15 歳頃には結婚することが一般的でした。
- 養子縁組: 経済的な理由やその他の理由で、子どもが養子に出されることもありました。

イエスと子どもたち

イエスは子どもたちを大切にし、彼らを受け入れました。当時の社会において、子どもたちは軽視されがちでしたが、イエスは彼らを神の国の重要なメンバーであると見なしました。

- 福音書の記述: 福音書には、イエスが子どもたちに手を置き、祝福したエピソードがいくつか記されています (マタイ 19:13-15、マルコ 10:13-16、ルカ 18:15-17)。
- 子どもたちの言葉: イエスは子どもたちの言葉を聞き、彼らの視点から物事を見ることを大切にしました (マタイ 18:1-5)。
- 象徴: イエスは子どもたちを、天国のようになるために必要な謙虚さや純粋さの象徴として用いました (マタイ 18:3-4)。

現代への影響

イエスの教えは、子どもに対する考え方に大きな影響を与えました。彼の教えは、子どもたちは尊重され、愛され、育まれるに値する存在であるという考えを広めるのに役立ちました。現代社会においても、子どもの権利や福祉は重要な課題であり、イエスの教えはこれらの議論において重要な役割を果たし続けています。

参考資料

- https://www.unicef.or.jp/crc/
- https://www8.cao.go.jp/shoushi/index.html
- https://sabbath-school.adventech.io/es

(2024.5.9)

3.2.12 マリアについて

Q. カトリックにおいて、聖母マリアの無原罪の御宿り（Immaculate Conception）、および被昇天（Assumption）は、どのような根拠に基づいているとしているのでしょうか。

ChatGPT

カトリック教会における聖母マリアの無原罪の御宿り（Immaculate Conception）と被昇天（Assumption）は、信仰上の教義として定められています。以下に、それぞれの教義の根拠となる主要な要素を説明します。

1. **聖母マリアの無原罪の御宿り（Immaculate Conception）**:
   - 根拠の聖書箇所: 聖書に直接的には記されていない教義ですが、この教義の根拠として最も引用されるのは、ルカ福音書 1 章 28 節の「祝福された女」（“Hail, full of grace”）という表現です。カトリック教会では、マリアが生まれながらにして罪から清められ、神の恵みに満たされていたと解釈されます。
   - 教会の教義発展: 聖母マリアの無原罪の御宿りは、教会が継承する伝統的な信仰であり、1854 年に教皇ピウス 9 世によって公式に宣言されました。教皇は、マリアが罪から免れた「御宿り」の状態で創造されたという信仰を宣言しました。
2. **聖母マリアの被昇天（Assumption）**:
   - 根拠の聖書箇所: 聖書に直接的には記されていない教義ですが、この教義の根拠として最も引用されるのは、聖母マリアを称える讃歌であるルカ福音書 1 章 46-55 節の「マリアの讃美歌」（マグニフィカト）です。また、マリアが死後、霊魂と肉体の両方で天に昇ったとする初期のキリスト教の伝承や教父たちの著作も根拠とされます。

- 教会の教義発展: 聖母マリアの被昇天は、教会が継承する伝統的な信仰であり、1950 年に教皇ピウス 12 世によって公式に宣言されました。教皇は、マリアが死後、霊魂と肉体の両方で天に昇ったという信仰を宣言しました。

これらの教義は、聖書の一部記述や初期キリスト教の伝承に基づいて解釈され、教会の教義発展を経て確立されました。カトリック教会では、これらの教義は聖母マリアの特別な役割と尊厳を認識し、信仰の一環として崇拝されています。

Q. 聖公会についてはこれらについてどのように考えられているのでしょうか。

ChatGPT

聖公会（Anglican Communion）は、カトリック教会とプロテスタント教会の要素を組み合わせた伝統的なキリスト教の一派です。聖公会において、聖母マリアの無原罪の御宿り（Immaculate Conception）と被昇天（Assumption）に関しては、教義としては明確に定められていません。

聖公会は、「聖書、伝統、理性」の三位一体を基盤としており、教義の解釈においては多様性が認められています。そのため、信徒や聖公会の指導者は個々に聖母マリアの無原罪の御宿りや被昇天について異なる見解を持つことがあります。

一部の聖公会の信徒や教区では、カトリック教会と同様に聖母マリアの無原罪の御宿りや被昇天を信じる人々もいます。彼らはこれらの教義を重要な要素として聖母マリアを敬い、崇拝します。

一方で、他の聖公会の信徒や教区では、これらの教義を信じない人々もいます。彼らは聖書の記述や初期キリスト教の伝承に直接的な根拠がないと考え、聖母マリアへの敬意や崇拝を異なる形で表現します。

聖公会はその自由な教義解釈により、信仰上のさまざまな視点を受け入れる教派として知られています。そのため、聖母マリアの無原罪の御宿りや被昇天についての見解は、個々の信仰や教区の伝統によって異なる場合があります。

(2023.8.17)

3.2.13 参考

「マリア- キリストにおける恵みと希望」聖公会-ローマ・カトリック教会国際委員、聖公会-ローマ・カトリック合同委員会訳、教文館　ISBN978-4-7642-6426-7, 2007.12.4 初版発行

3.2.14 ペテロの妻について

2023.5.30

Q. イエスの弟子のペトロの妻について、伝承や、教父の書いたものなどでなにかわかることはありますか。も

し、文書などの根拠があれば、それも併せて教えてください。

GPT4.

イエスの弟子ペトロの妻については、新約聖書やその他の文献に限られた情報しかありませんが、いくつかの記述があります。

1. **新約聖書** - ペトロの妻については、新約聖書のマタイによる福音書 8:14-15 で言及されています。ここでは、イエスがペトロの義理の母を癒す場面が描かれており、ペトロに妻がいたことが示唆されています。

   イエスはペトロの家に行くと、ペトロの義理の母が熱を出して寝ているのを見た。イエスは彼女の手を握って

2. **教父の文書** - 教父たちの著作にもペトロの妻について言及されている例があります。教父クレメント・オブ・アレクサンドリアは、『教育論』(Paidagogos) の中でペトロの妻に言及しています。彼はペトロが妻とともに伝道旅行をしていたことを述べており、妻が彼を支える役割を果たしていたことが示されています。

   また、エウセビオスの『教会史』にもペトロの妻に関する記述があります。エウセビオスは、クレメントの記述を引用しつつ、ペトロが夫婦で福音を伝えるように励んでいたことを述べています。

これらの文献により、ペトロには妻がいたことがわかりますが、彼女の名前や詳細な情報は記されていません。ペトロの妻は初代教会の歴史において重要な役割を果たしていたと考えられているものの、詳細については不明な点が多いです。

3.2.15 人の子

Q. イエスは自分を人の子とよぶ箇所が何回かありますが、なぜそのように呼んだのでしょか。例とともに、教えてください。いくつか説があれば、それもお願いします。

GPT4

イエスは自分を「人の子」と呼ぶことが何度も聖書に記されています。これにはいくつかの理由が考えられますが、以下にその主な説を紹介します。

1. **ダニエル書の預言の参照**: イエスが「人の子」という言葉を使うことで、旧約聖書のダニエル書にある預言に言及しているとされます。ダニエル書 7 章 13 節-14 節[*1]には、神によって権威と王国が与えられる「人の子」の姿が描かれています。これはメシアの到来を予告する預言とされており、イエスは自らがその人の子であることを示唆していたといわれます。

[*1] 口語訳：7:13 わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、／見よ、人の子のような者が、／天の雲に乗ってきて、／日の老いたる者のもとに来ると、／その前に導かれた。14 彼に主権と光栄と国とを賜い、／諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、／なくなることがなく、／その国は滅びることがない。(10:16 見よ、**人の子**のような者が、わたしのくちびるにさわったので、わたしは口を開き、わが前に立っている者に語って言った、「わが主よ、この幻によって、苦しみがわたしに臨み、全く力を失いました。)

2. **謙遜と人間性の強調**: イエスが「人の子」という言葉を使うことで、自分の謙遜さや人間性を強調していたという説もあります。この説によれば、イエスは神性を主張することなく、自分が神の子であることを示すために、「人の子」という言葉を選んだとされます。

3. **アラム語の諺の使用**: イエスが話していたアラム語では、「人の子」という言葉は一般的な諺で、「人間」という意味で使われることがありました。そのため、イエスが「人の子」と言うことで、「自分も他の人間と同じである」ということを示していたという説もあります。

いくつかの例を挙げます：

- マタイによる福音書 8:20

  > イエスは彼に言われた、「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子には、頭を伏せる場所がありません。」

- マタイによる福音書 9:6

  > 「しかし、あなたがたに人の子には地上で罪をゆるす権威があることを知ってもらうために」イエスは麻痺した人に言われた、「立ち上がって、あなたの寝床を持って家に帰りなさい。」

- ルカによる福音書 19:10

  > 「人の子は、失われたものを捜して救うためにきたのです。」

これらの例のように、イエスは自分を「人の子」と呼ぶことで、さまざまな意味を込めていたと考えられます。しかし、その意図の全てを正確に理解することは難しいです。

3.2.15.1 福音書における人の子の使用

- マタイ 8:20, 9:6, 10:23, 11:19, 12:8, 32, 40, 13:37, 41, 16:13, 27, 28, 17:9, 12, 22, 18:11, 19:28, 20:28, 24:27, 30, 33, 37, 39, 44, 25:31, 26:2, 24, 45, 64
- マルコ 2:10, 28, 3:28, 8:31, 38, 9:9, 12, 31, 10:33, 45, 13:26, 29, 14:21, 41, 62
- ルカ 5:24, 6:5, 22, 7:34, 9:22, 26, 44, 58, 11:30, 12:8, 10, 40, 17:22, 26, 30, 18:8, 31, 32, 19:10, 21:27, 36, 22:22, 48, 69, 24: 7
- ヨハネ 1:51, 3:13, 14, 5:27, 6:27, 53, 6:62, 8:28, 9:35, 12:23, 34, 13: 31

3.2.16 イエスとともにいた女たち

- 最初の頃の同行者ルカ 8:1-3 そののちイエスは、神の国の福音を説きまた伝えながら、町々村々を巡回し続けられたが、十二弟子もお供をした。2 また悪霊を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すな

わち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、3 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。

- 十字架にかかったとき
  - マルコ 15:40,41 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。
    - マタイ 27:55,56 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。
  - マルコ 16:1 さて、安息日が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。
    - ルカ 23:55,56 イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが納められる様子を見とどけた。56 そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。
    - ルカ 24:10 この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。
    - マタイ 28:1 さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。
    - ヨハネ 20:1 さて、一週の初めの日に、朝早くまだ暗いうちに、マグダラのマリヤが墓に行くと、墓から石がとりのけてあるのを見た。
  - ヨハネ 19:25-27 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。26 イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。27 それからこの弟子に言われた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。
    - 注：マルコ、マタイの記述を合わせると、母は、ヤコブとヨセフ（小ヤコブとヨセ）の母マリア、母の姉妹は、ゼベダイの子らの母サロメとなる。ここで記されている愛弟子が、ヨハネだとすると、イエスの甥ということになる。特別な関係にあった可能性もある。

3.2.17　ヨセフス（Flavius Josephus）

Q. ヨセフス（Flavius Josephus）は、どのような人ですか。

GPT3.5 Turbo

ヨセフス（Flavius Josephus）は、1 世紀から 2 世紀にかけて活動したユダヤの歴史家、司祭、軍人です。彼はローマ帝国時代のユダヤ人であり、ユダヤ戦争（66 年-73 年）におけるユダヤ人の反乱の際、司令官として戦った後、捕らえられてローマに連行されました。

ヨセフスはローマ皇帝ヴェスパシアヌスとその息子タイトゥスによって保護され、ローマ市民権を与えられました。彼はローマで暮らし、後に歴史書や著作を執筆しました。彼の最も有名な著作は『ユダヤ古代誌』（Antiquities of the Jews）と『ユダヤ戦記』（The Jewish War）です。

ヨセフスの著作は、ユダヤ人の歴史や宗教、文化に関する貴重な情報を提供しており、特にユダヤ戦争や第二神殿崩壊に関する詳細な描写が含まれています。彼の記述は、新約聖書の時代やその後のユダヤ人の歴史を理解する上で重要な資料とされています。

Q. もっと教えてください。

ヨセフスは、ユダヤ人の歴史や宗教に関する知識を広めるために、自身の経験や研究に基づいて著作を執筆しました。

『ユダヤ古代誌』は、ユダヤ人の歴史や宗教的な伝承に関する包括的な記述を提供しています。旧約聖書の物語や、ユダヤ人の始祖であるアブラハムから始まる系譜、モーセやダビデなどの偉大な指導者たちの物語、エルサレム神殿や神の契約、またユダヤ人の宗教的な慣習や法律に関しても詳細に書かれています。

一方、『ユダヤ戦記』は、ユダヤ戦争やローマによるエルサレム神殿の破壊についての記述を含んでいます。彼は自身がユダヤ人反乱軍の司令官であった経験をもとに、戦争の経過や出来事、ローマ軍との交渉などを詳細に描写しました。

ヨセフスの著作は、ユダヤ人の歴史や宗教に関する情報を提供するだけでなく、当時の政治情勢や社会の様子、ユダヤ人とローマ帝国の関係などについても触れています。彼の著作は古代のユダヤ人社会やその周辺地域の研究において重要な資料とされています。

(2023.11.15)

3.2.18　オリゲネス（Origen）

Q. キリスト教教父のオリゲネスについて教えてください。

ChatGPT 3.5 Turbo

オリゲネス（Origen）は、2 世紀から 3 世紀にかけて活躍したキリスト教教父であり、学者・神学者としても知られています。彼はエジプトのアレクサンドリアに生まれ、キリスト教の神学的・哲学的な思想を発展させる上で重要な役割を果たしました。

オリゲネスは非常に広範な知識を持ち、ギリシャ哲学やユダヤ教の教えにも通じていました。彼の主要な貢献の一つは、聖書の解釈方法に関する学問である「アレゴリー」を発展させたことです。彼は聖書の文字通りの解釈だけでなく、象徴的な意味や精神的な教えを探求することも重視しました。

また、オリゲネスはキリスト教の信仰と理性との関係についても重要な考えを持っていました。彼は信仰の真理を理性的に解明し、信仰と知識を結びつけることの重要性を強調しました。また、彼はキリスト教の教義に対して異教哲学や異教思想を取り入れ、キリスト教をより広範な知識と統合することを試みました。

しかし、オリゲネスの一部の思想は後に異端視され、彼自身も一時的に異端とされました。彼の一部の教義は後に修正されることとなりましたが、彼の学問的な影響力はキリスト教の発展に大きな影響を与えました。

オリゲネスは自身の信仰に対する忠誠心と学問的好奇心を持ち続け、多くの著書を執筆しました。彼の代表作には『神秘論』や『原則論』などがあります。彼の思想と著作は、後のキリスト教思想家たちに大きな影響を与え、キリスト教の神学的発展に重要な地位を占めています。

(2023.11.15)

3.3 場所・地名

3.3.1 ユダヤとガリラヤ

3.3.1.1 統治者について

Q. ユダヤとガリラヤの統治者、領主について、ローマが支配するようになってから、神殿が破壊される AD70 年まで、年代順に教えてください。特に、ガリラヤの統治について、イエスの活動した時代、領主と、ローマの総督の支配関係、徴税責任者などについても教えてください。

GPT4

ユダヤとガリラヤの統治者や領主について、ローマが支配するようになってから、神殿が破壊される AD 70 年までの時代を見ていきましょう。

紀元前 63 年 - ローマの将軍ポンペイウスがエルサレムを占領し、ユダヤはローマの支配下に入ります。

紀元前 40 年から紀元前 37 年 - ユダヤの王であるアンティゴノスがパルティアの支援を受けてローマに対抗しましたが、最終的にローマ軍に敗れました。その後、ヘロデ大王（ヘロデ 1 世）がローマの支援を受けてユダヤの王位に就きます。

紀元前 4 年 - ヘロデ大王が死亡し、息子たちによって彼の領土が分割されます。アルケラオスがユダヤ、サマリア、イドマヤを統治し、ヘロデ・アンティパスがガリラヤとペレアを、フィリップがバタネア、トラコニティス、

アウラニティスを統治します。

AD 6 年 - ローマ皇帝アウグストゥスは、アルケラオスが統治能力に欠けると判断し、ユダヤ、サマリア、イドマヤをローマの直轄領とし、シリア属州に編入します。シリア属州の総督が指導者を選び、ユダヤの統治を監督します。この時期にイエスがガリラヤで活動を始めます。

AD 26 年から AD 36 年 - ポンテオ・ピラトウスがユダヤの総督として任命されます。彼はローマの法と秩序を維持する責任を負い、徴税責任者を任命して税収を確保します。一方、ヘロデ・アンティパスはガリラヤの領主として続けて統治し、ユダヤの総督と協力関係を築いています。

AD 41 年 - ヘロデ・アグリッパ 1 世がユダヤの王位に就き、ユダヤ、サマリア、ガリラヤを統治します。

AD 44 年 - ヘロデ・アグリッパ 1 世が死亡し、ユダヤは再びローマの直轄領となります。以降、ユダヤの統治はローマの総督によって行われます。

AD 66 年から AD 70 年 - イエスの活動から約 40 年後、ユダヤ戦争が勃発し、ローマ軍が神殿を破壊するまで続きます。

この時代のガリラヤの統治に関しては、イエスが活動した時期にはヘロデ・アンティパスがガリラヤの領主でした。彼はローマの総督と協力関係を築き、徴税責任者を任命して税収を確保していました。このような支配構造の中で、イエスはガリラヤで説教を行い、多くの信徒を獲得していきました。

ヘロデ・アンティパスとローマ総督の関係は、一般的には協力関係にありましたが、時には緊張関係が生じることもありました。ローマは徴税責任者を通じてユダヤの地方統治者に対して影響力を行使し、税収やローマ法の遵守を確保していました。一方、地方の領主たちは、自らの権力を維持するためにローマと協力しながらも、民族や宗教的なアイデンティティを保ち、民衆の支持を得るために努力していました。

この時代の徴税責任者は、ローマ総督によって任命され、税収の徴収や管理を担当していました。彼らはしばしば地元のエリートや富裕層から選ばれ、自身も利益を得ることができました。しかし、徴税責任者はしばしば民衆から搾取者と見なされ、その行為は民衆の反感を買うことがありました。新約聖書では、徴税人マタイがイエスに従って改心するエピソードが語られており、このような徴税責任者の立場と行為に対する批判が表現されています。

(2023.6.29)

3.3.2 カペナウム

Q. イエスの時代、ガリラヤのカペナウム（Capernaum in Galilee）は、どのような街だったのでしょうか。人口などの推測、どのような人が住んでいたかも、分かる範囲で教えてください。

ChatGPT. ガリラヤのカペナウムは、イエスの時代には重要な商業都市であり、漁業が盛んな港町でもありました。当時のカペナウムは、海岸線に面しており、ガリラヤ湖の北西に位置していました。

カペナウムには、ローマ帝国の支配下にあったため、多様な人々が住んでいました。また、漁業が盛んだったため、漁師たちや商人たちも多く住んでいました。

当時のカペナウムについては、正確な人口などの数字は不明ですが、考古学的な発掘調査や聖書の記述から、かなり大きな町であったとされています。また、カペナウムは、当時のユダヤ教の教育、文化、商業、政治などにおいて重要な役割を果たしていたとされています。

イエスのカペナウムでの活動は、多くの人々に影響を与えました。彼は、シナゴーグでの説教や奇跡的な治癒などを通じて、多くの人々を惹きつけました。また、イエスは、カペナウムを拠点として、周辺の地域を巡回し、人々に福音を広めました。

カペナウムは、イエスの時代において、イエスの教えや奇跡に触れた人々の中心地の一つであり、多くの信者が生まれた場所でもありました。また、イエスの活動が、ローマ帝国の支配を受けていた当時の社会情勢にも大きな影響を与え、後の宗教改革にも影響を与えたとされています。

現在のカペナウムは、イスラエルの北部に位置し、遺跡が残っています。カペナウムの遺跡には、シナゴーグや家屋、公共建築物などが残されており、当時の町並みを垣間見ることができます。また、イエスがペテロの家として滞在したとされる場所も遺跡として残されています。カペナウムは、多くの観光客にとって、聖地として重要な場所の一つとなっています。

Q. イスカリオテは、どのあたりをさす地名ですか。イスカリオテについて知られていることがあれば教えてください。

GPT4.

「イスカリオテ」は、一般的に新約聖書の中でユダ・イスカリオテというキャラクターに関連付けられます。ユダ・イスカリオテは、イエス・キリストの 12 人の使徒の一人で、最も有名にして最も悪名高い使徒であり、キリストを 30 個の銀貨と引き換えに裏切った人物とされています。

「イスカリオテ」の語源については、正確にはわかっていません。一部の学者は、それが「Kerioth」または「Iscariot」（ヘブライ語で「男」または「都市」という意味）という地名から来ていると提案しています。これが正しいとすれば、それはユダが Kerioth の地域（おそらく現在のヨルダン南部）から来たことを示しているかもしれません。しかし、こうした解釈は全て推測の域を出ません。

他の解釈としては、「イスカリオテ」がアラム語の「sicarius」から派生したもので、「暗殺者」を意味するという説もあります。これは、ユダ・イスカリオテがキリストを裏切った行動に基づいています。

以上のように、イスカリオテの正確な意味や起源は未だに確定的には解明されていません。この名前の最も有名なホルダー、ユダ・イスカリオテに関しても、彼が何故イエスを裏切ったのかや裏切りの詳細については多くの議論があるため、これらの質問に対する最終的な答えはないと言えるでしょう。

Q. 新約時代のデカポリス（Decapolis）はどのような地域で、どのような人たちが住んでいたのでしょうか。簡単な歴史も教えてください。

Bard

デカポリスは、新約聖書の福音書に登場するガリラヤ湖南方のヨルダン川両岸（主に東岸）の広大な地域に存在するパレスチナにおけるギリシアの 10 の植民地の町の総称です。

地理

デカポリスは、現在のヨルダン、イスラエル、シリアの国境にまたがる地域に位置します。ガリラヤ湖の南、ヨルダン川の東岸に広がり、ダマスコからガザまで、約 400km にわたります。

歴史

デカポリスは、紀元前 4 世紀にアレクサンドロス大王の征服によってギリシア化された地域です。その後、セレウコス朝、ローマ帝国などの支配を受けました。前 63 年にローマのポンペイウスによってユダヤ人支配から解放され、ローマの属州となりました。

人口

デカポリスの人口は、ギリシア人、アラム人、ペルシャ人、エジプト人など、さまざまな民族が混在していました。主な言語はギリシア語でしたが、アラム語やヘブライ語も話されていました。

宗教

デカポリスの宗教は、多神教が主流でした。ギリシアの神々やローマの神々が信仰されていました。また、ユダヤ教やキリスト教も信仰されていました。

新約聖書におけるデカポリス

デカポリスは、新約聖書の福音書にたびたび登場します。イエスは、デカポリスの町々を訪れて、説教や奇跡を行ったとされています。

例えば、マタイによる福音書 8 章 28-34 節には、ガダラの豚に群がる悪霊を追い出したというエピソードが記されています。このエピソードは、デカポリスのガダラで起こったとされています。

また、マルコによる福音書 7 章 24-30 節には、イエスがツロとシドンを経由してガリラヤ湖畔に戻ったというエピソードが記されています。このエピソードでは、イエスがツロとシドンの人々に奇跡を行ったとされています。

まとめ

デカポリスは、新約聖書の時代には、ギリシア文化と多様な民族が混在する地域でした。イエスは、デカポリスの町々を訪れて、説教や奇跡を行ったことで、キリスト教の伝播に大きな役割を果たしました。

(2023.10.3)

3.3.3 ガリラヤからエルサレムの行程

Q. ガリラヤのカペナウムから、エルサレムは、ヨルダン川東岸を通ると、どのぐらいの距離がありますか。徒歩だと、通常何日ぐらいでしょうか。

GPT-4o

ガリラヤのカペナウムからエルサレムまで、ヨルダン川の東岸を通るルートについて説明します。

距離

ガリラヤ湖のカペナウムからエルサレムまでの直線距離は約 120 キロメートルですが、実際のルートは曲がりくねった道を通るため、距離はもう少し長くなります。

ヨルダン川東岸を通る場合、ルートは以下のようになります：

- カペナウムから南下し、ヨルダン川の東側を通過。
- デカポリスの地域を経由。
- ペレアを通過し、エリコ付近でヨルダン川を渡り、西側のエルサレムへ向かいます。

このルートの距離はおおよそ 160 キロメートル（約 100 マイル）と見積もられます。

徒歩での移動日数

徒歩での移動速度は、地形や体力に依存しますが、古代の巡礼者や旅行者は通常、一日に約 20 キロメートル（約 12 マイル）を移動すると考えられています。

そのため、カペナウムからエルサレムまでの約 160 キロメートルの道のりを以下のように計算できます：

160 キロメートル ÷ 20 キロメートル/日 = 8 日

つまり、通常の徒歩速度で移動すると、カペナウムからエルサレムまで約 8 日間かかると推定されます。

注意点

- **地形と気候**: ヨルダン川東岸の地形は多様で、山地や丘陵地帯を含み、夏は非常に暑くなるため、旅行者はこれらの条件を考慮する必要があります。
- **休息日**: 連続して歩く場合、休息日を間に挟むこともあるため、実際の旅行日数はもう少し長くなる可能性があります。

このような条件を考慮に入れると、カペナウムからエルサレムまでの徒歩旅行は、8 日から 10 日程度かかると見積もるのが現実的です。

(2024.7.5)

3.3.4 エリコ

Q. エリコは、イエスの時代どのような街だったのでしょうか。エルサレムとの関係なども含めてできれば、根拠資料とともに、教えて下さい。

GPT-4o

エリコ（Jericho）は、イエスの時代において重要な歴史的・地理的な役割を果たしていました。以下に、エリコの歴史的背景とエルサレムとの関係について詳細を説明します。

エリコの歴史と特徴

1. **古代の歴史**:
   - エリコは「世界最古の都市」とも呼ばれ、紀元前 8000 年頃から人が住んでいた痕跡があります。
   - 新石器時代から連続的に人々が住み続けてきた地域であり、古代の要塞都市としても知られています。
2. **ローマ時代のエリコ**:
   - イエスの時代、エリコはローマ帝国の支配下にありました。
   - エリコは豊かな農業地帯であり、特に香料やバルサムの生産で有名でした。
   - ヘロデ大王はエリコに冬の宮殿を建設し、都市の発展を促しました。

エリコとエルサレムの関係

1. **地理的関係**:
   - エリコはエルサレムの北東約 27 キロメートルに位置しています。
   - エリコはヨルダン川の近くにあり、エルサレムに向かう重要な交易路の一部でした。
2. **宗教的・文化的関係**:
   - エリコはユダヤ教の歴史においても重要な場所であり、旧約聖書の中でエリコの陥落（ヨシュア記 6 章）が描かれています。
   - イエスもエリコを訪れ、その中でザアカイ（ザッカイ）の家を訪れるエピソード（ルカ 19:1-10）が記録されています。
3. **経済的関係**:
   - エリコはエルサレムとの交易や経済活動において重要な役割を果たしました。

- エルサレムへ向かう巡礼者や商人たちにとって、エリコは重要な中継地点でした。

根拠資料

1. **聖書**:
   - 『ヨシュア記』6 章: エリコの陥落の記述。
   - 『ルカによる福音書』19 章: イエスがエリコを訪れた際のエピソード。
2. **歴史文献**:
   - Flavius Josephus（フラウィウス・ヨセフス）による『ユダヤ古代誌』：エリコの歴史やヘロデ大王の関与についての記述。
3. **考古学的資料**:
   - エリコの遺跡（テル・エリコ）：新石器時代から続く人々の住居跡や城壁の遺構。

これらの資料から、エリコは古代から重要な都市であり、イエスの時代には宗教的・経済的な重要性を持つ場所であったことが確認できます。

(2024.7.16)

Q. エリコとエルサレムの経済的な関係について、具体的な貿易品目や交易ルートなどの詳細を教えていただけますか。

GPT-4o

エリコとエルサレムの経済的な関係は、古代の交易ルートや特産品を中心に展開されました。以下に、具体的な貿易品目や交易ルートについて説明します。

貿易品目

1. **バルサム**:
   - エリコはバルサムの生産で有名でした。バルサムは香料や薬用として高価な商品であり、ローマ帝国全体で需要が高かったです。
   - ヘロデ大王の時代には、バルサムの栽培と生産がエリコ周辺で盛んに行われていました。
2. **香料**:
   - エリコは様々な香料の生産地でもありました。これらの香料は宗教儀式や日常生活で使用されました。
3. **農産物**:

- エリコは肥沃な土地を利用して、様々な農産物を生産していました。特にナツメヤシの栽培が盛んで、デーツ（ナツメヤシの実）は重要な貿易品でした。
- その他、穀物や野菜、果物などもエリコからエルサレムへ供給されました。

4. **鉱物資源**:
   - エリコ周辺には死海があり、ここから塩やミネラルが採取されていました。これらも貿易品として重要でした。

交易ルート

1. **エリコからエルサレムへの主要ルート**:
   - エリコからエルサレムへ向かう主要な交易ルートは、ヨルダン川沿いを通り、エルサレムへと続く道でした。このルートは「Jericho Road（エリコの道）」としても知られています。
   - このルートは比較的平坦で、キャラバンや巡礼者が頻繁に利用していました。
2. **エリコを経由する広域交易ルート**:
   - エリコはヨルダン川沿いに位置し、北はガリラヤ湖地方、南は死海やネゲブ砂漠方面へと続くルートの中継地点でもありました。
   - 東西方向では、ヨルダン川を越えて現在のヨルダン王国（古代にはトランスヨルダン地方）へと続くルートがありました。

経済的な関係の具体例

1. **市場と商業活動**:
   - エリコやエルサレムには市場があり、両都市の商人たちが交流していました。エリコからの特産品はエルサレムの市場で高値で取引されていました。
2. **巡礼と宗教儀式**:
   - エルサレムはユダヤ教の中心地であり、多くの巡礼者が訪れました。エリコは巡礼者が通過する重要な地点であり、宿泊施設や商店が発展していました。
3. **輸送と税金**:
   - エリコとエルサレムの間の輸送には多くのキャラバンが関わり、これに伴う税金収入が両都市の経済に貢献していました。

根拠資料

1. **歴史文献**:

- Flavius Josephus（フラウィウス・ヨセフス）による『ユダヤ古代誌』：エリコの経済活動や交易ルートについての記述があります。

2. **考古学的資料**:

- エリコとエルサレムを結ぶ古代の道路や交易路の遺跡が発見されており、これらは当時の交易活動の証拠となっています。

これらの資料から、エリコとエルサレムの経済的関係は、特産品の交易や巡礼者の移動を通じて非常に密接であったことが確認できます。

(2024.7.16)

3.3.5 会堂について

Q. イエスの時代に、会堂（シナゴーグ）はどのように管理され、そこで語るひとは、どのような基準のもとで、誰が決めていたと思われますか。

GPT4. イエスの時代の会堂（シナゴーグ）は、ユダヤ教の宗教生活の中心地であり、礼拝、学び、コミュニティ活動が行われていました。シナゴーグは、主に地域社会によって管理されており、運営は役員（アルヒ・シナゴーグ）や指導者（シナゴーグの長老たち）によって行われていたと考えられます。

シナゴーグで語る人物に関しては、通常、ユダヤ法（ハラハ）に精通した者や聖書の知識が豊富な者が選ばれました。また、その地域の指導者や尊敬される人物も、語る機会が与えられることがありました。この選定は、シナゴーグの指導者たちやコミュニティのメンバーによって行われたとされています。

イエス自身も、シナゴーグで語る機会が与えられたことが、新約聖書の中で記録されています（ルカ 4:16-30 など）。これは、彼が当時のユダヤ教の教えに精通していたこと、そしてその地域で尊敬される人物であったことを示していると考えられます。

しかし、イエスの教えは従来のユダヤ教の教えとは異なる部分も多く、彼の登場によってシナゴーグでは議論や抵抗が生じることもありました。

(2023.5.24)

Q. イエスの時代の、律法学者は、聖書を教えることを職業としていたのでしょうか。どのようなことを日常的にはしていたのでしょうか。

ChatGPT. イエスの時代における律法学者は、聖書を教えることを職業としていました。律法学者たちは、聖書の解釈や、宗教的な法律や規範の解決方法を教え、人々を導いていました。また、彼らは、宗教的な議論や論争にも参加していました。

律法学者たちは、ユダヤ教の聖書である「旧約聖書」を熟知しており、その解釈方法も学んでいました。彼らは、

聖書のテキストに従って、宗教的な法律や規範を解釈し、人々に教えていました。彼らは、聖書の解釈については非常に厳密であり、細かい点にまで注意を払っていました。

また、律法学者たちは、宗教的な法律や規範の解決方法についても重要な役割を果たしていました。彼らは、宗教的な紛争や問題について、法的な判断を下し、解決することがありました。これは、当時のユダヤ社会において非常に重要な役割であり、律法学者たちは高い地位と尊敬を受けていました。

日常的には、律法学者たちは、自分たちの教育や研究に専念することが多かったとされています。彼らは、自分たちの家で生活し、学生たちを教育したり、研究を行ったりしていました。また、彼らは、自分たちの教えや見解を広めるために、講演や論争に参加することもありました。

律法学者たちは、当時のユダヤ社会において重要な役割を果たしていましたが、イエスは彼らの教え方や思想に批判的であり、聖書のテキストに固執することが重要ではなく、神の愛や慈悲、人間性に焦点を置くよう教えました。また、律法学者たちが高い地位や権力を持っていたことに対しても批判的であり、卑しき者や社会的に排除された人々を重視する姿勢を示しました。

Q. イエスの時代に、イエスのような巡回教師、または、伝統的な訓練を受けていたい、どちらかと言うと、権威とはかけ離れた、カリズマテッィク（Charismatic）な説教者がいたと言うような記録はありますか。

ChatGPT. イエスの時代には、イエス以外にも巡回教師やカリスマ的な宗教指導者が存在しました。彼らは、従来の宗教的権威とは異なる教え方をし、多くの人々に影響を与えたとされています。

例えば、歴史的な記録によれば、当時のユダヤ教においては、ハスミモンという教派が存在していました。この教派は、従来のユダヤ教とは異なる教えを持ち、個人的な神への直接的な接触を重視していました。また、ハスミモンの指導者たちは、従来のラビのような教育を受けたわけではなく、自己流で宗教的な知識を習得していたとされています。

また、当時のユダヤ教には、エッセネ派というグループも存在していました。彼らは、社会から隔離されたコミュニティで暮らし、徹底した禁欲的な生活を送っていました。エッセネ派には、カリスマ的な指導者たちがいたとされ、その中には、洗礼者ヨハネという人物も含まれていました。ヨハネは、イエスの前身となる存在として重要な役割を果たしており、カリスマ的な説教や象徴的な行為などで多くの人々を惹きつけました。

さらに、イエスの時代には、ゼロアスター教やギリシャ哲学の影響を受けたシンクレティズム（融合主義）的な宗教運動も存在していました。これらの運動には、カリスマ的な指導者が多く参加しており、彼らの教えや行動は、当時の人々に大きな影響を与えました。

しかし、当時の歴史的な記録には、これらのカリスマ的な宗教指導者たちに関する情報が限られており、詳細な情報は不明な点が多いです。また、イエス以外のカリスマ的な指導者たちの教え方や活動については、イエスの教えと比較されることが多く、彼らの独自性が強調されることはあまりありません。

しかし、当時の社会や宗教状況を考えると、イエス以外にも、権威とはかけ離れたカリスマ的な宗教指導者たちが存在していたと考えられます。彼らの教えや活動は、当時の人々に大きな影響を与え、イエスの教えと同様に、宗教改革の一つのきっかけとなった可能性があります。

Q. ハスミモン派の教えは伝統的な教えとどのような違いがあったのでしょうか。また、エッセネ派についても、教えてください。

ChatGPT. ハスミモン派は、ユダヤ教の一派であり、従来の教えとは異なる教えを持っていました。彼らは、個人的な神との接触を重視し、律法の解釈についても独自の解釈を行っていました。また、聖書の中には書かれていない秘教的な知識を持っていたとされています。

ハスミモン派の指導者たちは、従来のラビのような教育を受けたわけではなく、自己流で宗教的な知識を習得していたとされています。彼らは、神との直接的な接触を通じて、神の意志を知ろうとすることを重視していました。また、彼らの教えには、軍事的な要素も含まれており、反乱を起こすこともあったとされています。

一方、エッセネ派は、ユダヤ教の一派であり、社会から隔離されたコミュニティで暮らしていました。彼らは、徹底した禁欲的な生活を送り、財産を共有する生活をしていました。また、エッセネ派には、カリスマ的な指導者たちがいたとされ、彼らの教えや行動は、当時の人々に大きな影響を与えました。

エッセネ派の教えには、従来のユダヤ教とは異なる要素が含まれており、古代イランの宗教であるゾロアスター教や、ギリシャ哲学の影響を受けたとされています。彼らは、神秘的な世界観を持ち、天使や悪魔、魂の存在などについて独自の見解を持っていました。

また、エッセネ派には、メシアの到来を待ち望む信仰がありました。彼らは、メシアが到来すると、世界は再生され、正義と平和が訪れると信じていました。エッセネ派の中には、イエスがメシアであるという説もあったとされます。

ハスミモン派やエッセネ派は、従来のユダヤ教とは異なる教えを持ち、社会から隔離されたコミュニティで暮らすなど、独自の生活様式を持っていました。彼らの教えや生活様式は、当時の人々に影響を与え、後の宗教改革にも影響を与えたとされています。

(2023.05.24)

3.3.5.1 イエスが会堂で教えた聖書の記録

- ルカ 4:15 イエスは諸会堂で教え、みんなの者から尊敬をお受けになった。
- ルカ 4:44 そして、ユダヤの諸会堂で教を説かれた。
- マタイ 4:23 イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。
- マタイ 9:35 イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。
- マルコ 1:21-28 21 それから、彼らはカペナウムに行った。そして安息日にすぐ、イエスは会堂にはいって教えられた。（汚れた霊を追い出す）（ルカ 4:31-37）

- マルコ 1:39 そして、ガリラヤ全地を巡りあるいて、諸会堂で教えを宣べ伝え、また悪霊を追い出された。
- マルコ 3:1-6 1 イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人がいた。2 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。（中略）6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。(マタイ 12:9-14、ルカ 6:6-11)
- マルコ 6:1-6 1 イエスはそこを去って、郷里に行かれたが、弟子たちも従って行った。2 そして、安息日になったので、会堂で教えはじめられた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これらのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵はどうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、どうしてか。（マタイ 13:53-58、ルカ 4:16-30）
- ルカ 13:10-17 10 安息日に、ある会堂で教えておられると、（中略）14 ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り、群衆にむかって言った、「働くべき日は六日ある。その間に、なおしてもらいにきなさい。安息日にはいけない」。（腰の曲がった女を癒やす）
- ヨハネ 6:59 これらのことは、イエスがカペナウムの会堂で教えておられたときに言われたものである。（どこからが「これらのこと」か不明）
- ヨハネ 8:20 イエスは答えられた、「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。何事も隠れて語ったことはない。

3.3.6 カペナウムの会堂について

Q. イエスの時代、カペナウムには、会堂は、一つでしょうか。それとも、いくつかあったのでしょうか。発掘などはされていますか。

ChatGPT.

イエスの時代のカペナウムについては、会堂が一つだけであったのか、または複数存在したのかについては、新約聖書の記述や現地の発掘調査から得られる情報に限定されます。

新約聖書では、カペナウムがイエスの活動の中心地の一つであり、イエスがカペナウムの会堂で教えたという記述があります（マルコ 1:21-22、ルカ 4:31-32 など）。しかし、具体的に一つの会堂の存在が言及され、他の会堂についての記述はないため、会堂が一つしか存在しなかったのかどうかははっきりしません。

カペナウムの遺跡は現代でも発掘調査が行われており、会堂の遺跡とされるものが複数の場所で発見されています。最も有名なのは、カペルナウムの遺跡で発見された「白い会堂」と呼ばれる建物です。この建物は 4 世紀のものであると考えられていますが、イエスの時代の会堂であったかどうかははっきりしません。

他の場所でも、小さなシナゴーグの遺跡が発見されていますが、これらがイエスの時代のものであるかどうかもはっきりしていません。

総括すると、カペナウムにおける会堂の数や具体的な配置については、新約聖書の記述や現地の発掘調査から得られる情報には限定があり、確定的な回答はできません。

(2023.10.20)

3.3.6.1 会堂司について

Q. 新約聖書時代の会堂司はどのような役割と責任を持っていたのでしょうか。

ChatGPT.

新約聖書時代の会堂司（シナゴーグの司会者）は、ユダヤ教の会堂で重要な役割と責任を担っていました。以下に、その主な役割と責任をいくつか挙げます。

1. 会堂の管理と監督: 会堂司は、会堂の日常的な管理と運営に責任を持ちました。会堂の清潔さや整頓、必要な儀式用品や文書の管理などを行いました。
2. 礼拝の調整: 会堂司は、安息日や祝日などの礼拝の調整を担当しました。聖書の朗読や解説、祈りや賛美歌の指導などを行い、集まった信徒たちの礼拝を取り仕切りました。
3. 教育と教義の伝達: 会堂司は、ユダヤ教の教えや伝統の伝達にも関与しました。彼らは聖書の解釈や法律の教えを教え、信徒たちに正しい信仰と実践を教え導きました。
4. 法的な問題の処理: 会堂司は、一定の法的な権限も持っていました。彼らは地域の司法機関と連携し、特定の犯罪や紛争の解決に関与したり、教会の規律を維持するための措置を取ることもありました。
5. 社会的な指導者としての役割: 会堂司は、地域社会においても重要な指導者の役割を果たしました。彼らは信仰の指導者としてだけでなく、地域の問題や福祉に関わる役割も担いました。

ただし、会堂司の具体的な役割や責任は、時代や地域によって異なる場合もあります。また、新約聖書の文脈では、会堂司の存在や役割について詳細な記述は限られているため、具体的な情報については限定的です。

(2023.10.20)

3.4 事項

3.4.1 聖霊・悪霊

3.4.1.1 聖霊について

Q. イエスの時代、ユダヤ人たちにとって、聖霊とはどのようなものなのでしょうか。

GPT4.

イエス・キリストの時代のユダヤ教では、「聖霊」は『ルアハ・ハコデシ』（Ruach Hakodesh）というヘブライ

語で表現され、神の霊または神の力を表していました。その存在はタナハ（旧約聖書）の中で頻繁に言及されています。

ユダヤ教では、聖霊は神の力や存在の一部として理解され、神の意志を遂行するために働くとされています。聖霊は神の命令を実行し、神の使者として働き、預言者に啓示をもたらすなどの働きを果たしています。

たとえば、創世記 1:2 では、地球がまだ形成されていない時点で聖霊が地上を覆っていました。「地は混沌として、空は暗闇で、深淵の上に神の霊が動いていた。」この文は、ユダヤ教の神が創造の力であり、その力が聖霊を通じて行使されたことを示しています。

また、預言者たちはしばしば聖霊によって神のメッセージを受け取ると記述しています。預言者イザヤは神の霊が彼に与えられたと述べ（イザヤ 61:1）、また預言者エゼキエルも神の霊によって引き起こされ、神のビジョンを見ることができたと記録しています（エゼキエル 37:1）。

しかし、これらの理解はユダヤ教の枠組みと一致していますが、後のキリスト教の聖霊の概念とは一部異なります。特に、キリスト教の三位一体の教義（父なる神、子なるイエス・キリスト、聖霊の三つが一つの神を形成する）はユダヤ教では受け入れられていません。ユダヤ教では神は唯一無二の存在であり、その部分や形態が分けられるという考え方は存在しません。

以上のように、イエスの時代のユダヤ人にとって、聖霊は神の力と存在の表現、神の意志を遂行する手段、そして神の預言者への啓示の源でした。

(2023.8.10)

3.4.1.2 悪霊について

3.4.1.3 Q. イエスの時代、悪霊とか、汚れた霊は、どのようなものと考えられていたのでしょうか。

Poe Assistant

イエスの時代、悪霊や汚れた霊に関する信念や考え方は、古代のユダヤ教やその他の宗教的な信仰体系に基づいていました。以下に、一般的な信念のいくつかを挙げます。

1. 悪霊の存在: ユダヤ教やキリスト教では、悪霊は神に背く天使や堕天した霊的存在とされています。これらの悪霊は、神の支配の逆らい、人々に害を与えることや病気を引き起こすことができると考えられていました。

2. 悪霊の支配と排除: イエスの時代では、イエス自身が悪霊を追い出すことで知られていました。イエスは病気や悪霊の支配から人々を解放する力を持っているとされ、その力を用いて悪霊を排除したとされています。

3. 汚れた霊と儀式的な清め: 古代のユダヤ教では、人々が神聖なものに接触したり、罪を犯したりすると、霊的な汚れが生じると考えられていました。このような汚れを取り除くためには、特定の儀式的な清めが必要であるとされていました。

これらの信念は、当時の宗教的な文脈や文化によっても異なる解釈がされていた可能性があります。また、現代の視点から見ると、これらの信念は超自然的な解釈や信仰に基づいているとされることがあります。

(2023.10.4)

3.4.1.4 悪霊・汚れた霊を追い出すエピソード

- マルコ 1:23-27 ちょうどその時、けがれた霊につかれた者が会堂にいて、叫んで言った、24 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。25 イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。26 すると、けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。27 人々はみな驚きのあまり、互に論じて言った、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」。（ルカ 4:33-38）

- マルコ 1:32-34 夕暮になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのところに連れてきた。33 こうして、町中の者が戸口に集まった。34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。（ルカ 4:41）

- マルコ 1:38.39 イエスは彼らに言われた、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教を宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」。そして、ガリラヤ全地を巡りあるいて、諸会堂で教えを宣べ伝え、また悪霊を追い出された。

- マルコ 3:11, 12 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。12 イエスは御自身のことを人にあらわさないようにと、彼らをきびしく戒められた。

- マルコ 5:1-20 2 それから、イエスが舟からあがられるとすぐに、けがれた霊につかれた人が墓場から出てきて、イエスに出会った。（中略）6 ところが、この人がイエスを遠くから見て、走り寄って拝し、7 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。8 それは、イエスが、「けがれた霊よ、この人から出て行け」と言われたからである。（中略）12 霊はイエスに願って言った、「わたしどもを、豚にはいらせてください。その中へ送ってください」。13 イエスがお許しになったので、けがれた霊どもは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れは二千匹ばかりであったが、がけから海へなだれを打って駆け下り、海の中でおぼれ死んでしまった。14 豚を飼う者たちが逃げ出して、町や村にふれまわったので、人々は何事が起ったのかと見にきた。15 そして、イエスのところにきて、悪霊につかれた人が着物を着て、正気になってすわっており、それがレギオンを宿していた者であるのを見て、恐れた。16 また、それを見た人たちは、悪霊につかれた人の身に起った事と豚のこととを、彼らに話して聞かせた。（マタイ 8:28-34、ルカ 8:26-39）

- （弟子たち）マルコ 6:12,13 そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、13 多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。

- マルコ 7:24-30 24 さて、イエスは、そこを立ち去って、ツロの地方に行かれた。そして、だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れていることができなかった。25 そして、けがれた霊につかれた幼い娘をもつ女が、イエスのことをすぐ聞きつけてきて、その足もとにひれ伏した。26 この女はギリシヤ人で、スロ・フェニキヤの生れであった。そして、娘から悪霊を追い出してくださいとお願いした。27 イエスは女に言われた、「まず子供たちに十分食べさすべきである。子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」。28 すると女は答えて言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、食卓の下にいる小犬も、子供たちのパンくずは、いただきます」。29 そこでイエスは言われた、「その言葉で、じゅうぶんである。お帰りなさい。悪霊は娘から出てしまった」。30 そこで、女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。（マタイ 15:21-28）

- マルコ 9:14-29 17 群衆のひとりが答えた、「先生、口をきけなくする霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。18 霊がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。19 イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。20 そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。21 そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。22 霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。23 イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。24 その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。25 イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。26 すると霊は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人は、死んだのだと言った。27 しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。（マタイ 17:14-20、ルカ 9:37-43a）

- マタイ 9:32-34 彼らが出て行くと、人々は悪霊につかれて口のきけない人をイエスのところに連れてきた。33 すると、悪霊は追い出されて、口のきけない人が物を言うようになった。群衆は驚いて、「このようなことがイスラエルの中で見られたことは、これまで一度もなかった」と言った。34 しかし、パリサイ人たちは言った、「彼は、悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」。

3.4.1.5 悪霊を追い出す権威

- マルコ 3:13-15 さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。14 そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、15 また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。（マタイ 10:1）

- マルコ 3:20-30 22 また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼はベルゼブルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。23 そこでイエス

は彼らを呼び寄せ、譬をもって言われた、「どうして、サタンがサタンを追い出すことができようか。（中略）28 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。29 しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。30 そう言われたのは、彼らが「イエスはけがれた霊につかれている」と言っていたからである。（マタイ 12:22-32 そのとき、人々が悪霊につかれた盲人で口のきけない人を連れてきたので、イエスは彼をいやして、物を言い、また目が見えるようにされた。ルカ 11:14-23）

- マルコ 6:7-9 また十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれた霊を制する権威を与え、8 また旅のために、つえ一本のほかには何も持たないように、パンも、袋も、帯の中に銭も持たず、9 ただわらじをはくだけで、下着も二枚は着ないように命じられた。（マタイ 10:5-15、ルカ 9:1-6）
- マルコ 16:17,18 信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、18 へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」。
- ルカ 10:17 七十二人が喜んで帰ってきて言った、「主よ、あなたの名によっていたしますと、悪霊までがわたしたちに服従します」。

3.4.2 祭り

3.4.2.1 ユダヤのお祭り

- 日本イスラエル親善協会 [リンク]
- ミルトス（イスラエル・ユダヤ文化の出版社）[リンク]

3.4.2.2 過越の祭り

Q. イエスの時代に、過越の祭りはどのように過ごされていたのでしょうか。

GTP-4o

イエスの時代における過越の祭り（ペサハ）は、ユダヤ教の最も重要な祭りの一つであり、イスラエルの民がエジプトからの解放を記念するものでした。この祭りはエルサレムで盛大に祝われ、多くのユダヤ人が巡礼のためにエルサレムに集まりました。以下に、イエスの時代の過越の祭りの過ごし方について詳しく説明します。

3.4.2.3 1. 準備

3.4.2.4 清掃と発酵物の除去

- 過越の祭りの前には、家中の発酵した食品（ハメッツ）を取り除くことが行われました。これは、イスラエルの民が急いでエジプトを脱出した際に発酵させる時間がなかったパンの象徴です。

3.4.2.5 過越の子羊の準備

- エルサレムの神殿では、過越の祭りのために子羊が犠牲として捧げられました。この子羊は特定の規定に従って準備され、家庭ごとに食べられるために各家族が神殿で子羊を受け取ります。

3.4.2.6 2. 過越の祭りの食事（セーデル）

3.4.2.7 過越の食事の構成

- 過越の祭りは、家族や友人が集まって行う特別な食事（セーデル）で祝われました。この食事には、以下のような象徴的な食品が含まれました。
  - **過越の子羊**: 犠牲として捧げられた子羊の肉。
  - **無酵母パン（マッツァー）**: 発酵していないパン。
  - **苦菜（マロール）**: エジプトでの苦役を思い出させる苦い野菜。
  - **ハロセット**: リンゴ、ナッツ、ワインなどで作られたペーストで、レンガの泥を象徴する。

3.4.2.8 儀式的な順序

- セーデルの食事は、特定の順序に従って行われました。これは、エジプト脱出の物語を再現するものであり、祈りや祝福、物語の朗読、賛美歌の歌唱などが含まれます。

3.4.2.9 3. 神殿での儀式

3.4.2.10 子羊の犠牲

- 過越の祭りの間、神殿で多くの子羊が犠牲として捧げられました。この儀式は神殿の祭司によって行われ、祭りの中心的な行事となっていました。

3.4.2.11 巡礼

- イエスの時代、多くのユダヤ人がエルサレムに巡礼し、神殿での儀式に参加しました。エルサレムはこの期間中、非常に混雑し、祭りの雰囲気が街全体に広がりました。

3.4.2.12 4. イエスと過越の祭り

3.4.2.13 最後の晩餐

- イエスが弟子たちと共に行った「最後の晩餐」は、過越の祭りのセーデルの食事と関連しています。新約聖書の記述によれば、イエスはこの食事の中でパンとワインを弟子たちに分け与え、自分の体と血の象徴としました（マタイ 26:17-30、マルコ 14:12-26、ルカ 22:7-20）。

3.4.2.14　公開の場での教え

- 過越の祭りの期間中、イエスはエルサレムの神殿やその周辺で教えを説き、多くの人々が集まる中で活動しました。これは、彼の公の働きの中でも非常に重要な時期となりました。

3.4.2.15　まとめ

イエスの時代の過越の祭りは、宗教的な意味合いが非常に強く、エルサレムで盛大に祝われました。家庭でのセーデルの食事、神殿での儀式、そしてエルサレムへの巡礼が中心となり人々はこれらの行事を通じてエジプト脱出の出来事を記憶し、神への感謝と信仰を新たにしました。

過越の祭りはまた、イエスの生涯と教えにおいても重要な位置を占めています。特に「最後の晩餐」は、キリスト教の聖餐式（エウカリスティア）に深く影響を与え、過越の祭りが持つ解放と救済のテーマが、キリスト教信仰の核心とも結びついています。

3.4.2.16　参考文献

- **新約聖書**: マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの各福音書には、過越の祭りとイエスの関係が詳述されています。
- **旧約聖書**: 出エジプト記 12 章には、過越の祭りの由来とその詳細が記されています。
- **歴史的資料**: ユダヤ教の伝統的な文献や歴史書（例えば、ヨセフスの著作）は、イエスの時代の過越の祭りの背景を理解する上で有益です。

このように、イエスの時代における過越の祭りは、宗教的、文化的に極めて重要なイベントであり、当時のユダヤ人の信仰と生活に深く根ざしていました。

(2024.7.4)

Q. イエスの時代の、過越祭の食事について教えてください。

Gemini-1.0-Pro

イエス時代の過越祭の食事について

過越祭とは過越祭は、ユダヤ教で最も重要な祭りの一つであり、古代エジプトからの脱出を記念するものです。過越祭は、ユダヤ暦のニサンの月（通常は 3 月または 4 月）の 14 日から 7 日間行われます。

過越祭の食事

過越祭の食事は、過越祭の最初の夜に家族や友人たちと共に行われる特別な食事です。この食事は、エジプトからの脱出の物語を思い起こさせる様々な象徴的な食べ物や儀式によって特徴付けられます。

過越祭の食事の主な要素

- マッツァー: 過越祭の期間中は、発酵していないパンであるマッツァーを食べる必要があります。これは、エジプトからの脱出が急いで行われたため、パンを発酵させる時間がないことを象徴しています。
- マロー: マローは、苦いハーブであり、エジプトでの奴隷時代の苦しみを象徴しています。
- ハロセト: ハロセトは、すりつぶしたリンゴ、ナッツ、シナモン、ワインを混ぜ合わせたペーストであり、エジプトでの奴隷が作ったモルタルを象徴しています。
- ゼロア: ゼロアは、ローストした羊の骨であり、エジプトでの過越祭の生贄を象徴しています。
- ベッツァー: ベッツァーは、ゆで卵であり、新しい生命を象徴しています。
- カルパス: カルパスは、野菜であり、春の訪れを象徴しています。
- 4 つの杯: 過越祭の食事の間、4 つの杯のワインが飲まれます。これらは、エジプトからの解放における神の 4 つの約束を象徴しています。過越祭の食事の儀式過越祭の食事は、特定の儀式に従って行われます。食事の開始時に、家の長が「ハガダー」と呼ばれる物語を読み、エジプトからの脱出の物語を語ります。また、食事の間には、様々な歌や祈りが歌われます。

イエス時代の過越祭の食事

イエスは、弟子たちと共に過越祭の食事をとり、これが最後の晩餐となりました。この食事は、キリスト教の聖餐式の起源となったと言われています。

過越祭の食事の意義

過越祭の食事は、ユダヤ人にとって、エジプトからの脱出を記念し、神への感謝を捧げる重要な儀式です。また、家族や友人たちと共に行われるこの食事は、ユダヤ人のアイデンティティと連帯感を強める役割も果たしています。

参考文献 ユダヤ教の祭り

(2025.1.30)

GPT-4o

イエスの時代の過越祭（ペサハ、Pesach）の食事について説明します。この食事は、ユダヤ教の重要な祭りである過越祭の中心的な儀式で、イスラエルの人々がエジプトからの奴隷解放を記念するものでした。イエスが弟子たちと共に行った「最後の晩餐」も、この過越祭の食事（セデル、Seder）であると広く理解されています。

1. 過越祭の背景
    - 過越祭は、旧約聖書の「出エジプト記」12 章に記されているように、イスラエルの人々がエジプトでの奴隷状態から解放された出来事を記念するものです。特に、神がエジプトに災いを下し、「初子の死」をもたらした際、イスラエル人の家に塗られた子羊の血を見て「過ぎ越した」ことが由来です。

2. 過越祭の食事（セデル）の要素

- イエスの時代の過越祭の食事は、現代のユダヤ教のセデル（過越祭の儀式的な食事）の基本的な要素と似ていたと考えられます。以下がその主な特徴です。

  1. 子羊（ペサハの犠牲）過越の子羊は、最も重要な要素でした。エジプト脱出を記念して、傷のない 1 歳の雄羊を屠り、その肉を焼いて食べることが指示されていました（出エジプト記 12:5-8）。イエスの時代には、エルサレム神殿で子羊が屠られ、その肉を家族やグループで食べるのが一般的でした。

  2. 種無しパン（マッツァー、Matzah）過越祭では、種無しパン（マッツァー）を食べることが命じられていました（出エジプト記 12:15-20）。これは、エジプトを急いで脱出した際にパンを発酵させる時間がなかったことを象徴しています。イエスの時代でも、発酵したパンは避けられ、種無しパンが用意されました。

  3. 苦菜（マロール、Maror）苦菜（苦いハーブ）は、エジプトでの奴隷生活の苦しみを思い出すために食べられました。この苦菜としては、レタスやホースラディッシュなどが使われたと考えられています。

  4. ワインワインは、神が奴隷状態からイスラエルを救い出したことを祝うために飲まれました。イエスの時代には、少なくとも 4 杯のワインを飲むことが習慣となっていた可能性があります（現代のセデルでも 4 杯のワインを飲むのが伝統です）。

  5. その他の象徴的な食べ物（可能性）一部の学者は、イエスの時代の過越祭の食事に、現代のセデルの要素である「ハロセット」や「塩水」などが含まれていた可能性も指摘しています。ハロセット：リンゴやナッツを混ぜた甘いペーストで、レンガ造りの苦役を象徴します。塩水：涙を象徴し、苦しみの記憶を呼び起こすもの。

3. 過越祭の儀式的な流れ
   - イエスの時代の過越祭の食事は、単なる食事ではなく、特定の順序（セデル）に従った儀式的な食事でした。
   - 主な流れ（推測されるもの）：
     - 祈りと感謝食事の前に、神に感謝を捧げる祈りが捧げられました。
     - 最初のワイン杯ワインを飲み、神の救いの計画を思い出しました。
     - 苦菜の食事苦菜を食べ、エジプトでの苦しみを思い出しました。子羊と種無しパンの食事
     - 子羊の肉と種無しパンを食べ、神の救いの行為を記念しました。
     - 複数回のワイン杯各杯に祈りや賛美が伴いました。
     - ハレル詩篇の朗読詩篇 113〜118 の「ハレル詩篇」を歌ったり朗読したりしました。
4. イエスと最後の晩餐イエスと弟子たちが最後の晩餐を行ったのは、過越祭の食事であったとされます（マタイ 26:17-30、マルコ 14:12-26、ルカ 22:7-39）。この食事では以下のポイントが特に重要です：
   - パンとワインの象徴的な意味

  - イエスは、種無しパンを「自分の体」として弟子たちに渡し、ワインを「自分の血」として与えました（マタイ 26:26-28）。
  - これは、過越祭の伝統的な食事に新しい意味を与え、キリスト教における聖餐式の起源となりました。
- 子羊の象徴
  - この最後の晩餐には過越の子羊が含まれていた可能性がありますが、福音書では具体的な記述はありません。一部の解釈では、イエス自身が「神の子羊」として象徴されているとされます。

5. まとめ
   - イエスの時代の過越祭の食事は、ユダヤ教の伝統的な儀式に基づいたものでした。その内容は、子羊、種無しパン、苦菜、ワインなど、エジプト脱出を記念する象徴的な食べ物で構成されており、特定の順序に従って行われました。
   - イエスの最後の晩餐は、この過越祭の食事に特別な意味を与え、キリスト教における聖餐の基礎を築きました。この食事を通じて、過越祭の伝統が新しい「契約」の象徴へと変容したと見ることができます。

(2025.1.30)

3.4.3 聖餐式

Q. 聖餐式のパンと葡萄酒はどのような意味があるのでしょうか。

GPT-4o

聖餐式（せいさんしき）のパンと葡萄酒は、キリスト教において非常に深い象徴的な意味を持っています。この儀式は、イエス・キリストが最後の晩餐で弟子たちに与えたパンと葡萄酒に基づいています。その意味を簡潔に説明しつつ、聖書の教えをもとに詳しく解説します。

1. 聖餐式の起源
   - 聖餐式は、イエスが弟子たちとともに過越祭の食事をした「最後の晩餐」から始まりました。この出来事は、次の福音書に記されています：
     - マタイ 26:26-28 「イエスはパンを取り、祝福の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取って食べなさい。これは私の体である。』また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに与えて言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは罪が赦されるようにと、多くの人のために流される私の契約の血である。』」
     - この場面で、イエスはパンと葡萄酒を用いて、自分の死が持つ霊的な意義を弟子たちに教えました。
2. パンと葡萄酒の象徴的な意味
   (1) パン：イエスの体
     - パンは、イエスの「体」を象徴します。イエスは、自分の体が「裂かれる」こと（つまり、十字架

の上での犠牲）を表すために、パンを裂いて弟子たちに与えました。

- パンを食べることは、信仰者がイエスの犠牲を受け入れ、イエスとの霊的な交わりに入ることを意味します。
- 聖書の背景と象徴
  - イエスが用いたパンは「種なしパン」（過越祭で用いられるパン）だったと考えられます。これは罪のない純粋さを象徴しています。
  - イエスは、自分自身を「いのちのパン」とも呼んでいます（ヨハネ 6:35）。これは、イエスが人々に霊的な命を与える存在であることを意味しています。

(2) 葡萄酒：イエスの血

- 葡萄酒は、イエスの「血」を象徴します。イエスは十字架上で血を流し、その血が「新しい契約」を成立させるものだと述べました。
- 「血」は、罪の赦しと神との新しい関係（契約）を象徴します。旧約聖書との関連旧約聖書では、神との契約を結ぶ際には動物の血が捧げられました（出エジプト記 24:8）。イエスは、自分の血をもって「新しい契約」を確立したとされています。
- また、レビ記 17:11 では、「血はいのちの象徴」とされます。イエスの血は、信仰者に永遠の命をもたらすものとされています。

3. 聖餐式の意義
   - イエスの犠牲の記念
     - 聖餐式は、イエスが十字架で人類の罪のために犠牲となったことを記念する儀式です。
     - 信者はパンと葡萄酒を通して、イエスの死を思い起こし、その犠牲に感謝します。
   - 新しい契約の確認
     - 聖餐式は、信者がイエスと結ばれた「新しい契約」を確認し、神との交わりに生きることを誓うときでもあります。
   - 霊的な交わり
     - パンを食べ、葡萄酒を飲むことは、信者がイエスと霊的に結ばれることを象徴します（ヨハネ 6:56：「私の肉を食べ、私の血を飲む者は、私のうちにとどまり、私もその人のうちにとどまる」）。
     - また、信者同士の霊的な一致をも表します。聖餐式は、キリストの体（教会）の一部としての共同体の絆を強めます。

4. 聖餐式が教えること聖餐式は、単なる儀式ではなく、信仰生活において重要な教えを伝えています：
   - 救いはイエスの犠牲によって成り立つ
     - パンと葡萄酒は、イエスの十字架での死と復活を中心とするキリスト教の救いのメッセージを象徴します。
   - 神との新しい関係
     - イエスの血によって結ばれた新しい契約は、人々が神と親しい関係に入ることを可能にします。
   - 再臨の希望
     - 聖餐式はまた、イエスの再臨を待ち望む信仰を表します（1 コリント 11:26：「あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、それを、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるの

です。」)。

5. まとめ聖餐式におけるパンと葡萄酒は、イエスの体と血を象徴し、次のような意味を持っています：
   - パン：イエスの体、十字架の犠牲、霊的な命の糧。
   - 葡萄酒：イエスの血、罪の赦し、新しい契約。
   - この儀式は、信者がイエスの犠牲を記念し、神との新しい関係を確認し、霊的な一致を祝うためのものです。また、イエスの再臨に対する希望を持ち続けることを促します。

聖餐式は、キリスト教信仰の核心を象徴する大切な儀式と言えるでしょう。

(2025.1.30)

3.4.3.1 祭りの曜日

Q. ユダヤ教の祭りと曜日の関係について教えてください。レビ記 23 章に主要な祭りについて描かれていますが、ユダヤ暦で、祭りの日と安息日がどのような関係になっていたかを知りたい。

A. ChatGPT

ユダヤ教の祭りと曜日（特に安息日）との関係について、レビ記 23 章に基づいて解説します。

1. レビ記 23 章に記されている主要な祭り

レビ記 23 章では、以下の主要な祭りが規定されています。• 安息日（シャバット）– 毎週の 7 日目（土曜日）• 過越の祭り（ペサハ）– ニサンの月 14 日 • 種なしパンの祭り（ハマツォト）– ニサンの月 15 日から 7 日間 • 初穂の祭り（ビクリーム）– 過越の祭りの後の最初の安息日の翌日 • 七週の祭り（シャブオット）– 初穂の祭りから 50 日後 • ラッパの祭り（ローシュ・ハシャナー）– ティシュレイの月 1 日 • 贖罪日（ヨム・キプール）– ティシュレイの月 10 日 • 仮庵の祭り（スコット）– ティシュレイの月 15 日から 7 日間 • 聖会（シェミニ・アツェレット）– 仮庵の祭りの 8 日目

2. ユダヤ暦と曜日の関係

ユダヤ暦は太陰太陽暦で、各月は 29 または 30 日から成ります。これはグレゴリオ暦と異なり、毎年曜日がずれるため、祭りの日付が固定の曜日になるわけではありません。

ただし、以下のような関係があります：

- **過越の祭り（ペサハ）**は、ニサンの 14 日に固定されていますが、曜日は毎年変わります。
- 初穂の祭り（ビクリーム）は、過越の祭りの後の最初の安息日の翌日に行われます。したがって、これは常に日曜日になります。
- 七週の祭り（シャブオット）は、初穂の祭りから 50 日後なので、常に日曜日になります（ただし、ファリサイ派の伝統ではニサン 16 日から数え始めるため曜日は変わる）。

- ラッパの祭り（ローシュ・ハシャナー）はティシュレイの 1 日ですが、伝統的には水曜日、金曜日、または日曜日にはならないように調整されます。
- 贖罪日（ヨム・キプール）はティシュレイの 10 日で、曜日によっては前後の安息日と連続しないように調整されます。
- 仮庵の祭り（スコット）はティシュレイの 15 日で、曜日は毎年変わりますが、最初と最後の日は特別な「聖会」となります。

3. 安息日との関係

- いくつかの祭りは「聖なる安息日」とされる
- 例えば、**贖罪日（ヨム・キプール）は「最も聖なる安息日」**とされ、通常のシャバットと同様に完全な休息が求められます（レビ記 23:32）。
- 仮庵の祭りの最初の日と最後の日も「聖なる会合」とされ、労働を控えることが求められます。
- 通常の安息日と重なる場合
- 祭りの日が安息日と重なる場合（例：過越の祭りの初日が土曜日）、祭りの規定と安息日の規定が両方適用されます。

4. 結論

レビ記 23 章に記されたユダヤ教の祭りは、ユダヤ暦の日付に基づいており、曜日は毎年変動します。ただし、初穂の祭りと七週の祭り（シャブオット）は特定の曜日に関係しています。また、いくつかの祭りの日は「安息日」のように扱われ、通常のシャバット（毎週の安息日）と区別されることがあります。

(2025.2.6)

Q. 西暦 30 年の場合を例に取って説明してください。

西暦 30 年のユダヤ教の祭りと曜日の関係

西暦 30 年のユダヤ暦の計算に基づき、主要な祭りの日と曜日の関係を見ていきます。

1. 西暦 30 年のユダヤ暦（推定）

ユダヤ暦は太陰太陽暦であり、西暦 30 年のニサン月の日付を推定するには、天文学的な新月計算をもとに判断する必要があります。

多くの研究によると、**ニサン 14 日（過越の祭りの準備日）は西暦 30 年 4 月 7 日（金曜日）**にあたる可能性が高いです。

2. 祭りの日付と曜日（西暦 30 年）

ユダヤ暦の日付祭り西暦 30 年の日付曜日

- ニサン 14 日過越の祭り（ペサハ）準備日 4 月 7 日金曜日
- ニサン 15 日種なしパンの祭り初日（聖なる会合）4 月 8 日土曜日（安息日）
- ニサン 16 日初穂の祭り（ビクリーム）4 月 9 日日曜日
- シヴァン 6 日七週の祭り（シャブオット）5 月 28 日日曜日（ファリサイ派伝統の場合）
- ティシュレイ 1 日ラッパの祭り（ローシュ・ハシャナー）9 月 26 日火曜日
- ティシュレイ 10 日贖罪日（ヨム・キプール）10 月 5 日木曜日
- ティシュレイ 15 日仮庵の祭り（スコット）初日 10 月 10 日火曜日
- ティシュレイ 22 日聖会（シェミニ・アツェレット）10 月 17 日火曜日

3. 安息日との関係
   - ニサン 15 日（種なしパンの祭りの初日）がちょうど土曜日の安息日に重なっている。
   - これは「大いなる安息日」（ヨハネ 19:31 の “大安息日” の可能性がある）と考えられる。
   - 初穂の祭り（ニサン 16 日）は日曜日だったため、復活を象徴する日として解釈されることがある。
   - 七週の祭り（シャブオット）も日曜日にあたる可能性が高く、ファリサイ派の伝統と一致する。
4. まとめ
   - 西暦 30 年の過越の祭りは金曜日だった。（イエスの十字架と関係があるとされる）
   - **種なしパンの祭りの初日は土曜日（安息日）**と一致し、「大安息日」となった可能性がある。
   - 初穂の祭りは日曜日で、これは後のキリスト教の復活日の考えと結びつけられる。
   - 七週の祭り（シャブオット）も日曜日だった可能性が高い。

西暦 30 年は特にイエスの最後の週と関連して議論されることが多い年ですが、この祭りと曜日の関係は、ユダヤ教の観点からも重要な意味を持っています。

(2025.2.6)

3.4.4 生活・習慣

3.4.4.1 断食

Q. イエスの時代、ユダヤ人たちはどのようなときに断食をしていたのでしょうか。また、実際に、断食はどのようにしていたのでしょうか。

GPT4.

イエスの時代、ユダヤ人はさまざまな宗教的、文化的な理由で断食を行っていました。断食は、悔い改め、祈り、瞑想、神への感謝を表すために行われることが一般的でした。以下は、ユダヤ人が断食を行う主な状況です。

1. **ヨム・キプール（贖罪の日）**：ユダヤ暦の 10 月 10 日[*2]にあたるこの日は、ユダヤ教の最も重要な断食日であり、悔い改めと神からの赦しを求める日です。この日は、日の出から日没までの間、食事や飲み物を摂らずに過ごし、祈りと瞑想に専念します。

2. **タニート・エステル（エステルの断食）**：プリム祭[*3]の前日に行われるこの断食は、エステル記に記されたエステル女王がユダヤ人を救うために断食を行ったことを記念しています。この断食も日の出から日没までの間に行われます。

3. **タニート・ゲドリア（ゲドリアの断食）**：ユダヤ暦の 7 月 3 日[*4]に行われるこの断食は、ゲドリアというユダヤ人の指導者が暗殺されたことを悼むために行われます。これも日の出から日没までの間に行われます。

4. **ティシャ・ベアヴ（破壊の日）**：ユダヤ暦の 9 月 9 日[*5]にあたるこの日は、エルサレム神殿が二度破壊されたことを悼むために行われる断食です。この断食は、日没から翌日の日没までの 25 時間にわたって行われます。

断食の方法は、主に食事や飲み物を摂らないことでした。ただし、ヨム・キプールやティシャ・ベアヴでは、さらなる厳格さが求められ、身体的快楽を避けるために、性行為、沐浴、香水の使用、革製の靴の着用も禁じられていました。断食期間中は、祈りや瞑想に専念し、個人的な反省やコミュニティとの絆を深めることが重視されていました。

(2023.7.3)

[*2] ヨム・キプールは、ユダヤ教の最も重要な祭日の 1 つであり、贖罪の日として知られています。ユダヤ教では、ヨム・キプールは毎年、ユダヤ暦のティシュリ月の 10 日目に祝われます。

ユダヤ暦は、太陰太陽暦であり、月の満ち欠けと太陽の位置に基づいて決定されます。ユダヤ暦の 1 年は、約 354 日であり、グレゴリオ暦の 1 年よりも短くなっています。したがって、ヨム・キプールの日付は、毎年、グレゴリオ暦の日付と異なります。

具体的には、2023 年のヨム・キプールは、ユダヤ暦のティシュリ月の 10 日目にあたる予定です。グレゴリオ暦での日付は、2023 年 9 月 30 日（金）の夕方から 10 月 1 日（土）の夕方までとなります。ただし、ユダヤ教の祭日は日没から翌日の日没までの期間に渡って祝われるため、実際には 9 月 30 日の夕方から 10 月 2 日の夕方までの期間にわたって祝われます。(SAGE 2023.7.7)

[*3] ChatGPT: プリム祭は、ユダヤ教の祭りの一つで、ユダヤ教暦の 12 番目の月であるアダル（またはアダル II）の 14 日に祝われます。ただし、ユダヤ教暦とグレゴリオ暦とは異なるため、グレゴリオ暦のどの月に当たるかは毎年異なります。例えば、2022 年のプリム祭は、グレゴリオ暦の 2022 年 3 月 16 日に相当しました。

[*4] タニート・ゲドリア (Ta'anit Gedaliah) は、ユダヤ教の祭日の 1 つで、紀元前 6 世紀にバビロンの総督であったゲドリアが暗殺された出来事を記念する断食日です。タニート・ゲドリアは、ユダヤ暦のティシュリ月の 3 日目に行われます。

ユダヤ暦は、太陰太陽暦であり、月の満ち欠けと太陽の位置に基づいて決定されます。ユダヤ暦の 1 年は、約 354 日であり、グレゴリオ暦の 1 年よりも短くなっています。したがって、タニート・ゲドリアの日付は、毎年、グレゴリオ暦の日付と異なります。

具体的には、2023 年のタニート・ゲドリアは、ユダヤ暦のティシュリ月の 3 日目にあたる予定です。グレゴリオ暦での日付は、2023 年 9 月 9 日（土）になります。ただし、ユダヤ教の祭日は日没から翌日の日没までの期間に渡って祝われるため、実際には 9 月 8 日の夕方から 9 月 9 日の夕方までの期間にわたって断食が行われます。(SAGE 2023.7.7)

[*5] ティシャ・ベアヴ (Tisha B'Av) は、ユダヤ教の祭日の 1 つで、第一神殿と第二神殿の破壊を記念する日です。ティシャ・ベアヴは、ユダヤ暦のアブ月の 9 日目に行われます。

ユダヤ暦は、太陰太陽暦であり、月の満ち欠けと太陽の位置に基づいて決定されます。ユダヤ暦の 1 年は、約 354 日であり、グレゴリオ暦の 1 年よりも短くなっています。したがって、ティシャ・ベアヴの日付は、毎年、グレゴリオ暦の日付と異なります。

具体的には、2023 年のティシャ・ベアヴは、ユダヤ暦のアブ月の 9 日目にあたる予定です。グレゴリオ暦での日付は、2023 年 8 月 6 日（日）になります。ただし、ユダヤ教の祭日は日没から翌日の日没までの期間に渡って祝われるため、実際には 8 月 5 日の夕方から 8 月 6 日の夕方までの期間にわたって断食が行われます。(SAGE 2023.7.7)

Q. 熱心なユダヤ人にとって、断食とはどのような意味を持っていたのでしょうか。また、定められたとき以外、どのようなときに、断食をしていたのでしょうか。

GPT4.

ユダヤ教では、断食は精神的な浄化や悔い改め、神への敬意や感謝を示す手段とされています。熱心なユダヤ人にとって、断食は自己犠牲や献身、そして敬虔さを表現する重要な宗教的行為です。

ユダヤ教には、定められた時期以外にも、個人やコミュニティーが断食を行う機会があります。以下にいくつかの例を挙げます。

1. **悔い改めのための断食**：個人が自分の罪を悔い改めるために、神への敬意を示すために断食を行うことがあります。
2. **災害や試練に対する反応**：自然災害や困難な状況に直面したとき、コミュニティー全体が断食を行い、神に助けを求めることがあります。
3. **追悼や悲しみの表現**：親しい人の死に対処するため、悲しみを表現する手段として断食を行うことがあります。
4. **特別な祈りや願い事**：個人が神に特別な祈りや願い事を捧げる際、断食を行うことがあります。

ユダヤ教では、断食の目的や意義は個人やコミュニティーによって異なりますが、神とのつながりを強化し、敬虔な生活を送る助けとなると信じられています。

(2023.7.4)

3.4.4.2　断食に関する聖書箇所

■3.4.4.2.1　新約

- マタイ 4:2 そして、四十日四十夜、**断食**をし、そののち空腹になられた。
- マタイ 6:16-18 また**断食**をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは**断食**をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。17 あなたがたは**断食**をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。18 それは**断食**をしていることが人に知れないで、隠れた所においでになるあなたの父に知られるためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さるであろう。
- マルコ 2:18-20、マタイ 9:14,15、ルカ 5:33-35: 参照
- ルカ 18:12 わたしは一週に二度**断食**しており、全収入の十分の一をささげています』。

- 使徒 13:2,3 一同が主に礼拝をささげ、**断食**をしていると、聖霊が「さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい」と告げた。3 そこで一同は、**断食**と祈とをして、手をふたりの上においた後、出発させた。
- 使徒 14:23 また教会ごとに彼らのために長老たちを任命し、**断食**をして祈り、彼らをその信じている主にゆだねた。
- 使徒 27:9 長い時が経過し、**断食**期も過ぎてしまい、すでに航海が危険な季節になったので、パウロは人々に警告して言った、

■3.4.4.2.2　旧約

- 士師 20:26 これがためにイスラエルのすべての人々すなわち全軍はベテルに上って行って泣き、その所で主の前に座して、その日夕暮まで**断食**し、燔祭と酬恩祭を主の前にささげた。
- サムエル上 7:6 人々はミヅパに集まり、水をくんでそれを主の前に注ぎ、その日、**断食**してその所で言った、「われわれは主に対して罪を犯した」。サムエルはミヅパでイスラエルの人々をさばいた。
- サムエル上 31:13 その骨を取って、ヤベシのぎょりゅうの木の下に葬り、七日の間、**断食**した。
- サムエル下 12:16 ダビデはその子のために神に嘆願した。すなわちダビデは**断食**して、へやにはいり終夜地に伏した。
- サムエル下 12:21-23 家来たちは彼に言った、「あなたのなさったこの事はなんでしょうか。あなたは子の生きている間はその子のために**断食**して泣かれました。しかし子が死ぬと、あなたは起きて食事をなさいました」。22 ダビデは言った、「子の生きている間に、わたしが**断食**して泣いたのは、『主がわたしをあわれんで、この子を生かしてくださるかも知れない』と思ったからです。23 しかし今は死んだので、わたしはどうして**断食**しなければならないでしょうか。わたしは再び彼をかえらせることができますか。わたしは彼の所に行くでしょうが、彼はわたしの所に帰ってこないでしょう」。
- 列王記上 21:9 彼女（イゼベル）はその手紙に書きしるした、「**断食**を布告して、ナボテを民のうちの高い所にすわらせ、12 彼らは**断食**を布告して、ナボテを民のうちの高い所にすわらせた。
- 歴代誌上 10:12 勇士たちが皆立ち上がり、サウルのからだとその子らのからだをとって、これをヤベシに持って来て、ヤベシのかしの木の下にその骨を葬り、七日の間、**断食**した。
- 歴代誌下 20:3 そこでヨシャパテは恐れ、主に顔を向けて助けを求め、ユダ全国に**断食**をふれさせた。
- エズラ 8:21 そこでわたしは、かしこのアハワ川のほとりで**断食**を布告し、われわれの神の前で身をひくくし、われわれと、われわれの幼き者と、われわれのすべての貨財のために、正しい道を示されるように神に求めた。23 そこでわれわれは**断食**して、このことをわれわれの神に求めたところ、神はその願いを聞きいれられた。

- エズラ 9:5 夕の供え物の時になって、わたしは**断食**から立ちあがり、着物と上着を裂いたまま、ひざをかがめて、わが神、主にむかって手をさし伸べて、
- ネヘミヤ 1:4 わたしはこれらの言葉を聞いた時、すわって泣き、数日のあいだ嘆き悲しみ、**断食**して天の神の前に祈って、
- ネヘミヤ 9:1 その月の二十四日にイスラエルの人々は集まって**断食**し、荒布をまとい、土をかぶった。
- エステル 4:3 すべて王の命令と詔をうけ取った各州ではユダヤ人のうちに大いなる悲しみがあり、**断食**、嘆き、叫びが起り、また荒布をまとい、灰の上に座する者が多かった。
- エステル 4:16 「あなたは行ってスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために**断食**してください。三日のあいだ夜も昼も食い飲みしてはなりません。わたしとわたしの侍女たちも同様に**断食**しましょう。そしてわたしは法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないのなら、死にます」。
- エステル 9:31 **断食**と悲しみのことについて、ユダヤ人モルデカイと王妃エステルが、かつてユダヤ人に命じたように、またユダヤ人たちが、かつて自分たちとその子孫のために定めたように、プリムのこれらの日をその定めた時に守らせた。
- 詩篇 35:13 しかし、わたしは彼らが病んだとき、／荒布をまとい、**断食**してわが身を苦しめた。わたしは胸にこうべをたれて祈った、
- 詩篇 69:10 わたしが**断食**をもってわたしの魂を悩ませば、／かえってそれによってそしりをうけました。
- 詩篇 109:24 わたしのひざは**断食**によってよろめき、／わたしの肉はやせ衰え、
- イザヤ 58:3-6 彼らは言う、／『われわれが**断食**したのに、／なぜ、ごらんにならないのか。われわれがおのれを苦しめたのに、／なぜ、ごぞんじないのか』と。見よ、あなたがたの**断食**の日には、／おのが楽しみを求め、／その働き人をことごとくしえたげる。4 見よ、あなたがたの**断食**するのは、／ただ争いと、いさかいのため、／また悪のこぶしをもって人を打つためだ。きょう、あなたがたのなす**断食**は、／その声を上に聞えさせるものではない。5 このようなものは、わたしの選ぶ**断食**であろうか。人がおのれを苦しめる日であろうか。そのこうべを葦のように伏せ、／荒布と灰とをその下に敷くことであろうか。あなたは、これを**断食**ととなえ、／主に受けいれられる日と、となえるであろうか。6 わたしが選ぶところの**断食**は、／悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、／しえたげられる者を放ち去らせ、／すべてのくびきを折るなどの事ではないか。
- エレミヤ 14:12 彼らが**断食**しても、わたしは彼らの呼ぶのを聞かない。燔祭と素祭をささげても、わたしはそれを受けない。かえって、つるぎと、ききん、および疫病をもって、彼らを滅ぼしてしまう」。
- エレミヤ 36:6 それで、あなたが行って、**断食**の日に主の宮で、すべての民が聞いているところで、あなたがわたしの口述にしたがって、巻物に筆記した主の言葉を読みなさい。またユダの人々がその町々から来て聞いているところで、それを読みなさい。

- エレミヤ 36:9 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの五年九月、エルサレムのすべての民と、ユダの町々からエルサレムに来たすべての民とは、主の前に**断食**を行うべきことを告げ示された。
- ダニエル 9:3 それでわたしは、わが顔を主なる神に向け、**断食**をなし、荒布を着、灰をかぶって祈り、かつ願い求めた。
- ヨエル 1:14 あなたがたは**断食**を聖別し、／聖会を召集し、／長老たちを集め、国の民をことごとくあなたがたの神、主の家に集め、／主に向かって叫べ。
- ヨエル 2:12 主は言われる、／「今からでも、あなたがたは心をつくし、／**断食**と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。
- ヨエル 2:15 シオンでラッパを吹きならせ。**断食**を聖別し、聖会を召集し、
- ヨナ 3:5 そこでニネベの人々は神を信じ、**断食**をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た。
- ゼカリヤ 7:3 かつ万軍の主の宮にいる祭司に問わせ、かつ預言者に問わせて言った、「わたしは今まで、多年おこなってきたように、五月に泣き悲しみ、かつ**断食**すべきでしょうか」。5 「地のすべての民、および祭司に告げて言いなさい、あなたがたが七十年の間、五月と七月とに**断食**し、かつ泣き悲しんだ時、はたして、わたしのために**断食**したか。
- ゼカリヤ 8:19 「万軍の主は、こう仰せられる、四月の**断食**と、五月の**断食**と、七月の**断食**と、十月の**断食**[*6]とは、ユダの家の喜び楽しみの時となり、よき祝の時となる。ゆえにあなたがたは、真実と平和とを愛せよ。

3.4.4.3 旧約（身を悩ます）

- レビ 16:29 これはあなたがたが永久に守るべき定めである。すなわち、七月になって、その月の十日に、あなたがたは**身を悩ま**し、何の仕事もしてはならない。この国に生れた者も、あなたがたのうちに宿っている寄留者も、そうしなければならない。

[*6] ChatGPT. はい、ゼカリヤ書 8:19 の「四月の断食と、五月の断食と、七月の断食と、十月の断食」は、それぞれユダヤ教の年中行事です。

- 四月の断食は、アッシリア王セナケリブがエルサレムを包囲したとき、ユダヤ人が断食した日です。
- 五月の断食は、バビロニア人によってエルサレムの神殿が破壊された日です。
- 七月の断食は、バビロニア人がユダヤ人をバビロンに連れ去った日です。
- 十月の断食は、アッシリア王セナケリブがエルサレムを包囲したときに、ユダヤ人が神に助けを求めた日です。

これらの断食は、ユダヤ人が神の恵みと憐れみを覚えるために行われました。ゼカリヤ書 8:19 では、これらの断食が喜びと楽しみの日に変わると預言されています。これは、神の恵みによってユダヤ人が救われ、エルサレムが再建されることを意味しています。

Bard. ゼカリヤ書 8:19 の「四月の断食と、五月の断食と、七月の断食と、十月の断食」は、それぞれユダヤ教の年中行事です。

- 四月の断食は、アッシリア王セナケリブがエルサレムを包囲したとき、ユダヤ人が断食した日です。
- 五月の断食は、バビロニア人によってエルサレムの神殿が破壊された日です。
- 七月の断食は、バビロニア人がユダヤ人をバビロンに連れ去った日です。
- 十月の断食は、アッシリア王セナケリブがエルサレムを包囲したときに、ユダヤ人が神に助けを求めた日です。

これらの断食は、ユダヤ人が神の恵みと憐れみを覚えるために行われました。ゼカリヤ書 8:19 では、これらの断食が喜びと楽しみの日に変わると預言されています。これは、神の恵みによってユダヤ人が救われ、エルサレムが再建されることを意味しています。

- レビ 16:31 これはあなたがたの全き休みの安息日であって、あなたがたは**身を悩ま**さなければならない。これは永久に守るべき定めである。
- レビ 23:27 「特にその七月の十日は贖罪の日である。あなたがたは聖会を開き、**身を悩ま**し、主に火祭をささげなければならない。
- レビ 23:29 すべてその日に**身を悩ま**さない者は、民のうちから断たれるであろう。
- レビ 23:32 これはあなたがたの全き休みの安息日である。あなたがたは**身を悩ま**さなければならない。またその月の九日の夕には、その夕から次の夕まで安息を守らなければならない」。
- 民数記 29:7 またその七月の十日に聖会を開き、かつあなたがたの**身を悩ま**さなければならない。なんの仕事もしてはならない。
- 民数記 30:13 すべての誓願およびすべてその**身を悩ま**す物断ちの誓約は、夫がそれを守らせることができ、または夫がそれをやめさせることができる。
- ダニエル 10:12 すると彼はわたしに言った、「ダニエルよ、恐れるに及ばない。あなたが悟ろうと心をこめ、あなたの神の前に**身を悩ま**したその初めの日から、あなたの言葉は、すでに聞かれたので、わたしは、あなたの言葉のゆえにきたのです。

3.4.5 安息日

Q. ユダヤ教の安息日について教えてください。どのように定められ、どのような意味を持ち、どのように過ごすことが推奨され、どのようなことをしてはいけないと考えらているのでしょうか。

GPT4.

ユダヤ教の安息日（シャバット、Shabbat）は、週の終わりを祝い、神への感謝を捧げるための休息の日です。シャバットは、ユダヤ暦の週（日曜日から土曜日まで）の最後の日、すなわち金曜日の夕方から土曜日の夕方までと定められています。

シャバットの意味は、創世記に記されている神が世界を創造した後に休息したという話に基づいています。これは、ユダヤ教徒が世界創造の物語を思い起こし、神の創造の偉業を称える機会となります。また、シャバットは、家族や友人との絆を深める時間でもあります。

シャバットを過ごすために推奨されることは、以下のようなものです。

1. **礼拝**：シャバットは、ユダヤ教徒が集まり、神への感謝を表明する礼拝を行う日です。
2. **家族と過ごす時間**：シャバットは家族と一緒に過ごす時間を大切にすることが推奨されています。家族はシャバットの食事を共にし、祈りや讃美歌を歌います。

3. **食事**：シャバットの夕食は特別なもので、通常はキャンドルに火を灯し、ハラ（丸いパン）やワインを用意します。

シャバットでは、以下のようなことを避けることが推奨されています。

1. **労働**：シャバットは、労働から解放される日です。ユダヤ教徒は、労働や商業活動を休み、休息を取ることが求められます。
2. **家事**：シャバットでは、料理や洗濯などの家事も避けることが推奨されています。金曜日の日中に家事を終え、シャバットを迎える準備をします。
3. **電気製品の使用**：シャバットでは、電気製品の使用が制限されることがあります。携帯電話やコンピューターの使用は避けることが推奨されています。

ただし、シャバットの過ごし方や制限事項は、ユダヤ教徒によって異なる解釈が存在し、実践の程度も異なります。一部のユダヤ教徒は厳格にこれらの規則を守る一方で、他のユダヤ教徒はより柔軟な解釈を採用しています。重要なのは、シャバットがユダヤ教徒にとって心の休息と精神的なリフレッシュの機会であることを理解することです。

（2023.7.7）

3.4.5.1 安息日に関する聖書箇所

3.4.5.2 新約

- 会堂で教える
  - ルカ 4:16 それからお育ちになったナザレに行き、**安息日**にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。
  - マルコ 1:21 それから、彼らはカペナウムに行った。そして**安息日**にすぐ、イエスは会堂にはいって教えられた。ルカ 4:31 それから、イエスはガリラヤの町カペナウムに下って行かれた。そして**安息日**になると、人々をお教えになったが、
  - マルコ 6:2 そして、**安息日**になったので、会堂で教えはじめられた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これらのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵はどうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、どうしてか。
- 麦の穂を摘むマルコ 2:23-28、マタイ 12:1-8、ルカ 6:1-5: 参照
- 手の萎えた人を癒すマルコ 3:1-6、マタイ 12:9-14、ルカ 6:6-11: 参照
- 安息日に、腰の曲がった女を癒すルカ 13:10-17
- 安息日に水腫の人を癒すルカ 14:1-6

- ベトザタの池で病人を癒すヨハネ 5:1-18
- 生まれつき目の見えない人を癒すヨハネ 9:1-41（14,16）
- イエスの十字架の前後
  - ヨハネ 19:31 さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、**安息日**に死体を十字架の上に残しておくまいと、（特にその**安息日**は大事な日であったから）、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした。
  - マルコ 15:42 さて、すでに夕がたになったが、その日は準備の日、すなわち**安息日**の前日であったので、ルカ 23:54 この日は準備の日であって、**安息日**が始まりかけていた。
  - マルコ 16:1 さて、**安息日**が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。ルカ 23:56 そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って**安息日**を休んだ。
  - マタイ 28:1 さて、**安息日**が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。
- その他
  - マタイ 24:20 あなたがたの逃げるのが、冬または**安息日**にならないように祈れ。
  - ヨハネ 7:22-23 モーセはあなたがたに割礼を命じたので、（これは、実は、モーセから始まったのではなく、先祖たちから始まったものである）あなたがたは**安息日**にも人に割礼を施している。23 もし、モーセの律法が破られないように、**安息日**であっても割礼を受けるのなら、**安息日**に人の全身を丈夫にしてやったからといって、どうして、そんなにおこるのか。
- 使徒時代
  - 使徒 1:12 それから彼らは、オリブという山を下ってエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、**安息日**に許されている距離のところにある。
  - ピシディア州のアンティオキアにて安息日に教える使徒 13:13-51
  - 使徒 15:21 古い時代から、どの町にもモーセの律法を宣べ伝える者がいて、**安息日**ごとにそれを諸会堂で朗読するならわしであるから」。
  - 使徒 16:13 ある**安息日**に、わたしたちは町の門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そして、そこにすわり、集まってきた婦人たちに話をした。
  - 使徒 17:2 パウロは例によって、その会堂にはいって行って、三つの**安息日**にわたり、聖書に基いて彼らと論じ、
  - 使徒 18:4 パウロは**安息日**ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシヤ人の説得に努めた。

- コロサイ 2:16 だから、あなたがたは、食物と飲み物とにつき、あるいは祭や新月や**安息日**などについて、だれにも批評されてはならない。
- ヘブル 4:9 こういうわけで、**安息日**の休みが、神の民のためにまだ残されているのである。

■3.4.5.2.1　旧約

- 安息日の由来（マナ）
  - 出エジプト 16;4,5 そのとき主はモーセに言われた、「見よ、わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせよう。民は出て日々の分を日ごとに集めなければならない。こうして彼らがわたしの律法に従うかどうかを試みよう。六日目には、彼らが取り入れたものを調理すると、それは日ごとに集めるものの二倍あるであろう」。
  - 出エジプト 16:22-30 六日目には、彼らは二倍のパン、すなわちひとりに二オメルを集めた。そこで、会衆の長たちは皆きて、モーセに告げたが、23 モーセは彼らに言った、「主の語られたのはこうである、『あすは主の聖安息日で休みである。きょう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残ったものはみな朝までたくわえて保存しなさい』と」。24 彼らはモーセの命じたように、それを朝まで保存したが、臭くならず、また虫もつかなかった。25 モーセは言った、「きょう、それを食べなさい。きょうは主の安息日であるから、きょうは野でそれを獲られないであろう。26 六日の間はそれを集めなければならない。七日目は安息日であるから、その日には無いであろう」。27 ところが民のうちには、七日目に出て集めようとした者があったが、獲られなかった。28 そこで主はモーセに言われた、「あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか。29 見よ、主はあなたがたに安息日を与えられた。ゆえに六日目には、ふつか分のパンをあなたがたに賜わるのである。おのおのその所にとどまり、七日目にはその所から出てはならない」。30 こうして民は七日目に休んだ。
- 十戒
  - 出エジプト 20:8-11 安息日を覚えて、これを聖とせよ。9 六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。10 七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。11 主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。
  - 申命記 5:12-15 安息日を守ってこれを聖とし、あなたの神、主があなたに命じられたようにせよ。13 六日のあいだ働いて、あなたのすべてのわざをしなければならない。 14 七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたも、あなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、牛、ろば、もろもろの家畜も、あなたの門のうちにおる他国の人も同じである。こうしてあなたのしもべ、はしためを、あなたと同じように休ませなければならない。15 あなたはかつてエジプト

の地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである。

  - 出エジプト 31:12-18 主はまたモーセに言われた、13 「あなたはイスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしであって、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである。14 それゆえ、あなたがたは安息日を守らなければならない。これはあなたがたに聖なる日である。すべてこれを汚す者は必ず殺され、すべてこの日に仕事をする者は、民のうちから断たれるであろう。15 六日のあいだは仕事をしなさい。七日目は全き休みの安息日で、主のために聖である。すべて安息日に仕事をする者は必ず殺されるであろう。16 ゆえに、イスラエルの人々は安息日を覚え、永遠の契約として、代々安息日を守らなければならない。17 これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。それは主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、いこわれたからである』」。18 主はシナイ山でモーセに語り終えられたとき、あかしの板二枚、すなわち神が指をもって書かれた石の板をモーセに授けられた。

  - 出エジプト 35:1-3 モーセはイスラエルの人々の全会衆を集めて言った、「これは主が行えと命じられた言葉である。2 六日の間は仕事をしなさい。七日目はあなたがたの聖日で、主の全き休みの安息日であるから、この日に仕事をする者はだれでも殺されなければならない。3 安息日にはあなたがたのすまいのどこでも火をたいてはならない」。

  - レビ記 19:3 あなたがたは、おのおのその母とその父とをおそれなければならない。またわたしの**安息日**を守らなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。

- レビ記 16:29-31 これはあなたがたが永久に守るべき定めである。すなわち、七月になって、その月の十日に、あなたがたは身を悩まし、何の仕事もしてはならない。この国に生れた者も、あなたがたのうちに宿っている寄留者も、そうしなければならない。 この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである。これはあなたがたの全き休みの**安息日**であって、あなたがたは身を悩まさなければならない。これは永久に守るべき定めである。贖罪の日レビ記 23:27-32,

- レビ記 23:38-39 このほかに主の安息日があり、またほかに、あなたがたのささげ物があり、またほかに、あなたがたのもろもろの誓願の供え物があり、またそのほかに、あなたがたのもろもろの自発の供え物がある。これらは皆あなたがたが主にささげるものである。 あなたがたが、地の産物を集め終ったときは、七月の十五日から七日のあいだ、主の祭を守らなければならない。すなわち、初めの日にも安息をし、八日目にも安息をしなければならない。

- レビ記 19:30 あなたがたはわたしの**安息日**を守り、わたしの聖所を敬わなければならない。わたしは主である。

- レビ記 23:3 六日の間は仕事をしなければならない。第七日は全き休みの**安息日**であり、聖会である。どの

ような仕事もしてはならない。これはあなたがたのすべてのすまいにおいて守るべき主の**安息日**である。

- レビ記 23:11 彼はあなたがたの受け入れられるように、その束を主の前に揺り動かすであろう。すなわち、祭司は安息日の翌日に、これを揺り動かすであろう。
- レビ記 23:15 また安息日の翌日、すなわち、揺祭の束をささげた日から満七週を数えなければならない。16 すなわち、第七の安息日の翌日までに、五十日を数えて、新穀の素祭を主にささげなければならない。
- レビ記 24:8 **安息日**ごとに絶えず、これを主の前に整えなければならない。これはイスラエルの人々のささぐべきものであって、永遠の契約である。
- レビ記 26:2 あなたがたはわたしの**安息日**を守り、またわたしの聖所を敬わなければならない。わたしは主である。
- 民数記 15:32 イスラエルの人々が荒野におるとき、**安息日**にひとりの人が、たきぎを集めるのを見た。
- 民数記 28:9, 10 また**安息日**には一歳の雄の全き小羊二頭と、麦粉一エパの十分の二に油を混ぜた素祭と、その灌祭とをささげなければならない。10 これは**安息日**ごとの燔祭であって、常燔祭とその灌祭とに加えらるべきものである。
- 列王記下 4:23, 11:5, 7, 9, 16:18
- 歴代誌上 9:32, 23:31, 歴代誌下 2:4, 8:13, 23:4, 8, 31:3
- ネヘミヤ 9:14, 10:31, 33, 13:15, 16, 17, 18, 19, 21, 22
- 詩篇 92:0 **安息日**の歌、さんび
- イザヤ 1:13 あなたがたは、もはや、／むなしい供え物を携えてきてはならない。薫香は、わたしの忌みきらうものだ。新月、**安息日**、また会衆を呼び集めること――／わたしは不義と聖会とに耐えられない。
- イザヤ 56:1-6 主はこう言われる、／「あなたがたは公平を守って正義を行え。わが救の来るのは近く、／わが助けのあらわれるのが近いからだ。 2 **安息日**を守って、これを汚さず、／その手をおさえて、悪しき事をせず、／このように行う人、／これを堅く守る人の子はさいわいである」。3 主に連なっている異邦人は言ってはならない、／「主は必ずわたしをその民から分かたれる」と。宦官もまた言ってはならない、／「見よ、わたしは枯れ木だ」と。4 主はこう言われる、／「わが**安息日**を守り、わが喜ぶことを選んで、／わが契約を堅く守る宦官には、5 わが家のうちで、わが垣のうちで、／むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与え、／絶えることのない、とこしえの名を与える。6 また主に連なり、主に仕え、／主の名を愛し、そのしもべとなり、／すべて**安息日**を守って、これを汚さず、／わが契約を堅く守る異邦人は――
- イザヤ 58:13 もし**安息日**にあなたの足をとどめ、／わが聖日にあなたの楽しみをなさず、／**安息日**を喜びの日と呼び、／主の聖日を尊ぶべき日ととなえ、／これを尊んで、おのが道を行わず、／おのが楽しみを求めず、／むなしい言葉を語らないならば、
- イザヤ 66:23 「新月ごとに、**安息日**ごとに、／すべての人はわが前に来て礼拝する」と／主は言われる。

- エレミヤ 17:21-27 主はこう言われる、命が惜しいならば気をつけるがよい。**安息日**に荷をたずさえ、またはそれを持ってエルサレムの門にはいってはならない。22 また**安息日**にあなたがたの家から荷を運び出してはならない。なんのわざをもしてはならない。わたしがあなたがたの先祖に命じたように安息日を聖別して守りなさい。23 しかし彼らは従わず耳を傾けず、聞くことも、戒めをうけることをも強情に拒んだ。24 主は言われる、もしあなたがたがわたしに聞き従い、**安息日**に荷をたずさえてこの町の門にはいらず、**安息日**を聖別して、なんのわざをもしないならば、25 ダビデの位に座する王たち、つかさたち、ユダの人々、エルサレムに住む者は、車と馬に乗ってこの町の門からはいることができる。そしてこの町には長く人が住むようになる。26 また人々はユダの町々やエルサレムの周囲、ベニヤミンの地、平地と山地およびネゲブから来て燔祭、犠牲、素祭、乳香、感謝祭をたずさえて主の家にはいる。27 しかし、もしあなたがたがわたしに聞き従わないで、**安息日**を聖別して守ることをせず、**安息日**に荷をたずさえてエルサレムの門にはいるならば、わたしは火をその門の中に燃やして、エルサレムのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。その火は消えることがない』」。

- 哀歌 2:6 主は園の小屋のようにおのれの幕屋を倒し、／その祭の場所をこわされた。主は祭と**安息日**とをシオンに忘れさせ、／激しい怒りによって、王と祭司とを捨てられた。

- エゼキエル 20:12-17 わたしはまた彼らに**安息日**を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。13 しかしイスラエルの家は荒野でわたしにそむき、わたしの定めに歩まず、人がそれを行うことによって、生きることのできるわたしのおきてを捨て、大いにわたしの**安息日**を汚した。そこでわたしは荒野で、わたしの憤りを彼らの上に注ぎ、これを滅ぼそうと思ったが、14 わたしはわたしの名のために行動した。それはわたしが彼らを導き出して見せた異邦人の前に、わたしの名が汚されないためである。15 ただし、わたしは荒野で彼らに誓い、わたしが彼らに与えた乳と蜜との流れる地、全地の最もすばらしい地に、彼らを導かないと言った。16 これは彼らがその心に偶像を慕って、わがおきてを捨て、わが定めに歩まず、わが**安息日**を汚したからである。17 けれどもわたしは彼らを惜しみ見て、彼らを滅ぼさず、荒野で彼らを絶やさなかった。18 わたしはまた荒野で彼らの子どもたちに言った、あなたがたの先祖の定めに歩んではならない。そのおきてを守ってはならない。その偶像をもって、あなたがたの身を汚してはならない。19 主なるわたしはあなたがたの神である。わが定めに歩み、わがおきてを守ってこれを行い、20 わが**安息日**を聖別せよ。これはわたしとあなたがたとの間のしるしとなって、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである。21 しかしその子どもたちはわたしにそむき、わが定めに歩まず、人がこれを行うことによって、生きることのできるわたしのおきてを守り行わず、わが**安息日**を汚した。そこでわたしはわが憤りを彼らの上に注ぎ、荒野で彼らに対し、わが怒りを漏らそうと思った。22 しかしわたしはわが手を翻して、わが名のために行動した。それはわたしが彼らを導き出して見せた異邦人の前に、わたしの名が汚されないためである。23 ただしわたしは荒野で彼らに誓い、わたしは異邦人の間に彼らを散らし、国々の中に彼らをふりまくと言った。24 これは彼らがわがおきてを行わず、わが定めを捨て、わが**安息日**を汚し、彼らの目にその先祖の偶像を慕ったからである。

- エゼキエル 22: 8, 26, 23:38, 44:24, 45:17, 46:1, 3, 4, 12

- ホセア 2:11 わたしは彼女のすべての楽しみ、／すなわち祝、新月、**安息日**、／すべての祭をやめさせる。

- アモス 8:5 あなたがたは言う、／「新月はいつ過ぎ去るだろう、／そうしたら、われわれは穀物を売ろう。**安息日**はいつ過ぎ去るだろう、／そうしたら、われわれは麦を売り出そう。われわれはエパを小さくし、シケルを大きくし、／偽りのはかりをもって欺き、

3.4.6 舟での移動に関する福音書の箇所

- マルコ 3:9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。
- マルコ 4:1 イエスはまたも、海べで教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。（マタイ 13:2）
- マルコ 4:36,37 そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。（マタイ 8:23,24、ルカ 8:22）
- マルコ 5:2 それから、イエスが舟からあがられるとすぐに、けがれた霊につかれた人が墓場から出てきて、イエスに出会った。
- マルコ 5:18 イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供をしたいと願い出た。（ルカ 8:37）
- マルコ 5:28 イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大ぜいの群衆がみもとに集まってきた。イエスは海べにおられた。
- マルコ 6:32, 33, 34 そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。33 ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。（マタイ 14:13,14）
- マルコ 6:45-56 それからすぐ、イエスは自分で群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダへ先におやりになった。46 そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた。47 夕方になったとき、舟は海のまん中に出ており、イエスだけが陸地におられた。48 ところが逆風が吹いていたために、弟子たちがこぎ悩んでいるのをごらんになって、夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らに近づき、そのそばを通り過ぎようとされた。49 彼らはイエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。50 みんなの者がそれを見て、おじ恐れたからである。しかし、イエスはすぐ彼らに声をかけ、「しっかりするのだ。わたしである。恐れることはない」と言われた。51 そして、彼らの舟に乗り込まれると、風はやんだ。彼らは心の中で、非常に驚いた。52 先のパンのことを悟らず、その心が鈍くなっていたからである。53 彼らは海を渡り、ゲネサレの地に着いて舟をつないだ。54 そして舟からあがると、人々はすぐイエスと知って、55 その地方をあまねく駆けめぐり、イエスがおられると聞けば、どこへでも病人を床にのせて運びはじめた。56 そして、村でも町でも部落でも、イエス

がはいって行かれる所では、病人たちをその広場におき、せめてその上着のふさにでも、さわらせてやっていただきたいと、お願いした。そしてさわった者は皆いやされた。（マタイ 14:22-33）

  - ヨハネ 6:16-20 夕方になったとき、弟子たちは海べに下り、17 舟に乗って海を渡り、向こう岸のカペナウムに行きかけた。すでに暗くなっていたのに、イエスはまだ彼らのところにおいでにならなかった。18 その上、強い風が吹いてきて、海は荒れ出した。19 四、五十丁こぎ出したとき、イエスが海の上を歩いて舟に近づいてこられるのを見て、彼らは恐れた。20 すると、イエスは彼らに言われた、「わたしだ、恐れることはない」。

- マルコ 8:10 すぐ弟子たちと共に舟に乗って、ダルマヌタの地方へ行かれた。11 パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求めた。12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。13 そして、イエスは彼らをあとに残し、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。14 弟子たちはパンを持って来るのを忘れていたので、舟の中にはパン一つしか持ち合わせがなかった。（マタイ 15:39）

- マタイ 9:1 さて、イエスは**舟**に乗って海を渡り、自分の町に帰られた。

3.4.7 血について

3.4.7.1 血といのちの結びつき

Q. 聖書は、どのような箇所で、血を命の源と表現していますか。なぜ、そのように考えたのでしょうか。

ChatGPT.

聖書では、血が命の源として表現される箇所がいくつか存在します。これは、古代のユダヤ文化や宗教的な背景に基づいています。

1. 創世記 9:4: 「ただし、肉にその命、すなわちその血を含んではならない。」この箇所では、神がノアに対して命令を出し、動物の血を食べてはならないと宣言しています。血は命そのものであり、神聖なものとされています。

2. レビ記 17:11: 「生ける者の命はその血にある。わたしはそれをあなたがたに与えた。あなたがたの罪を贖うために、その命のためにその血を祭壇に供える。それはいのちそのものである。」この箇所では、血が命の源であり、罪の赦しのために血を捧げることが重要であると述べられています。

3. レビ記 17:14: 「生ける者のすべての肉には、その命、すなわちその血がその中にある。だから、わたしはイスラエルの人々に言う、あなたがたは、どんな肉でも、その血を食べてはならない。」ここでも、血が命そのものであり、食べてはならないと宣言されています。

これらの箇所では、血が命そのものであるという宗教的な信念が表現されています。古代のユダヤ人は、血を神聖なものと考え、命の象徴として尊重しました。また、血を祭壇に捧げることによって罪の赦しを求める儀式が

行われました。

血が命の源とされた理由は、おそらく生命が血によって血が命の源として表現される箇所として、以下のような記述が聖書に存在します。

1. レビ記 17:11 - 「生ける者の命は、その血にある。わたしはそれをあなたがたに与えた。あなたがたの罪を贖うために、その血を祭壇に供える。それはいのちそのものである。」
   この箇所では、血が命そのものであり、罪の赦しのために血を捧げることが重要であると述べられています。

2. ヘブル人への手紙 9:22 - 「事の法によれば、ほとんどすべてのものが血によってきよめられる。罪のゆえに、血を流すことなくは、ゆるしが得られないのである。」
   ここでは、罪の赦しやきよめには血が必要であると説明されています。

3. ヨハネによる福音書 6:53 - 「イエスは彼らに言われた。「よくよく言っておく。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲まなければ、あなたがたには命がない。」」
   この箇所では、イエスが自身の肉と血を食べることの重要性を説いています。

これらの記述により、血が命の源として位置づけられていることが分かります。血は生命の象徴であり、罪の赦しや救済のために血が必要であるとされていました。

この考え方の根源は、ユダヤ教の宗教的な背景に由来しています。古代のユダヤ人は、血を神聖なものと見なし、生命の象徴として重要視していました。また、血を通じて罪が贖われるという信念がありました。このような観念は、聖書の教えや祭儀に反映されています。

(2023.10.19)

3.4.7.2 血に関わる聖書箇所

- 創世記 9:4,5 しかし肉を、その命である血のままで、食べてはならない。5 あなたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう。いかなる獣にも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、報復するであろう。

- レビ記 17:11 肉の命は血にあるからである。あなたがたの魂のために祭壇の上で、あがないをするため、わたしはこれをあなたがたに与えた。血は命であるゆえに、あがなうことができるからである。

- レビ記 17:14 すべて肉の命は、その血と一つだからである。それで、わたしはイスラエルの人々に言った。あなたがたは、どんな肉の血も食べてはならない。すべて肉の命はその血だからである。すべて血を食べる者は断たれるであろう。

- 申命記 12:23 ただ堅く慎んで、その血を食べないようにしなければならない。血は命だからである。その命を肉と一緒に食べてはならない。

- レビ記 15:19-30 また女に流出があって、その身の流出がもし血であるならば、その女は七日のあいだ不浄である。すべてその女に触れる者は夕まで汚れるであろう。20 その不浄の間に、その女の寝た物はすべて汚れる。またその女のすわった物も、すべて汚れるであろう。21 すべてその女の床に触れる者は、その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。22 すべてその女のすわった物に触れる者は皆その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。23 またその女が床の上、またはすわる物の上におる時、それに触れるならば、その人は夕まで汚れるであろう。24 男がもし、その女と寝て、その不浄を身にうけるならば、彼は七日のあいだ汚れるであろう。また彼の寝た床はすべて汚れるであろう。25 女にもし、その不浄の時のほかに、多くの日にわたって血の流出があるか、あるいはその不浄の時を越して流出があれば、その汚れの流出の日の間は、すべてその不浄の時と同じように、その女は汚れた者である。26 その流出の日の間に、その女の寝た床は、すべてその女の不浄の時の床と同じようになる。すべてその女のすわった物は、不浄の汚れのように汚れるであろう。27 すべてこれらの物に触れる人は汚れる。その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。28 しかし、その女の流出がやんで、清くなるならば、自分のために、なお七日を数えなければならない。そして後、清くなるであろう。29 その女は八日目に山ばと二羽、または家ばとのひな二羽を自分のために取り、それを会見の幕屋の入口におる祭司のもとに携えて行かなければならない。30 祭司はその一つを罪祭とし、他の一つを燔祭としてささげなければならない。こうして祭司はその女のため、その汚れの流出のために主の前に、あがないをするであろう。

3.4.8 パン種

Q. 聖書にはパン種が出てきますが（例マルコ 8:14-21）パン種とはどのようなもので、当時のユタや人は、パン種についてどう理解していたのでしょうか。

Google Gemini. 聖書におけるパン種

聖書に登場するパン種は、現代で言うイースト菌のような働きをするもので、パン生地を発酵させるために用いられました。当時のユダヤ人は、パン種を以下のように理解していました。

1. パン作りの必須アイテム

パン種は、パンをふっくらと膨らませ、美味しくするために必要不可欠なものでした。パン種なしでパンを焼くことは難しく、味も劣ってしまいます。そのため、パン種は日常生活に欠かせない存在でした。

2. 生命の象徴

発酵は、生命の力と結びつけられて考えられていました。パン種が生地を膨らませるように、生命は様々なものを成長させると考えられていたのです。そのため、パン種は生命の象徴として、繁栄や豊穣を願う意味合いも持っていました。

3. 罪の象徴

一方で、パン種は腐敗や罪の象徴として使われることもありました。発酵は、腐敗と紙一重の現象であると考えられていたためです。そのため、罪が人の心の中で徐々に広がっていく様子を、パン種に例えることがありました。

4. イエス様の教えの象徴

イエス様は、パン種を様々なたとえ話の中で用いました。例えば、マルコ 8:14-21 では、パリサイ人の教えを「パン種」に例えて、弟子たちに注意しています。これは、パリサイ人の教えが偽善的で、人々を腐敗させてしまうという警告です。

3.4.8.1 ユダヤ人のパン種に対する考え方

当時のユダヤ人は、パン種に対して以下のような考え方を持ち合わせていました。

- パン種は神からの賜物であり、感謝して使うべきもの
- パン種は正しく使わなければ、罪に繋がる
- パン種は生命の象徴であり、繁栄や豊穣をもたらす

これらの考え方は、聖書におけるパン種の様々な意味合いと密接に関係しています。

3.4.8.2 パン種に関する聖書の記述

聖書には、パン種に関する記述がいくつかあります。以下に、代表的な例をいくつか紹介します。

- 出エジプト記 12:15-20：過越祭の期間中は、パン種を含んだパンを食べることを禁じられていた
- レビ記 2:11：神への献げ物には、パン種を含めてはいけない
- マタイ 13:33：天国は、少量のパン種が全体を膨らませるようなもの
- ルカ 13:20-21：天国は、女の人が小麦粉に混ぜたパン種のようなもの

これらの記述は、パン種が古代ユダヤ社会において重要な役割を果たしていたこと、そして、聖書の中で様々な意味合いを持っていたことを示しています。

3.4.8.3 まとめ

聖書におけるパン種は、単なるパン作りの材料ではなく、様々な意味合いを持つ象徴的な存在でした。当時のユダヤ人は、パン種を生命の力、罪、神の賜物など、様々な側面から捉えていました。これらの理解は、聖書におけるパン種の解釈を深める上で重要な役割を果たします。

3.4.9　たとえと比喩

Q. たとえ（parable）と比喩（metaphor）の違いを詳しく説明してください。

GPT4.

たとえ（parable）と比喩（metaphor）は、両方とも物語やアイデアを表現するための文学的な手段ですが、その使い方と目的は異なります。

たとえ（Parable）

たとえは、一種の象徴的な物語で、道徳的または宗教的な教訓を教えるために使用されます。たとえは一般的に比較的短く、具体的なキャラクターや出来事を含む完全なストーリーであることが多いです。

たとえの目的は、抽象的な考え方や複雑な道徳的問題を、より具体的で理解しやすい形で表現することです。たとえば、新約聖書の中には、イエスが倫理的な教訓を伝えるために使ったたとえが多数含まれています。

比喩（Metaphor）

一方、比喩は、あるものを直接的に別のものに比較するための言語的な手段です。比喩は、文字通りの意味ではなく、比較される二つのものの間に共通点を見つけることによって、新たな理解や洞察を生み出すことを目指しています。

比喩は、一般的には単一のフレーズや文の中で使用され、その効果は即座に表現されます。たとえば、「彼の心は石のようだ」という表現は、その人が感情を表現しないことを示しています。

まとめ

したがって、たとえと比喩はどちらも異なるものを比較するために使われますが、その形式と目的は異なります。たとえは具体的なストーリーを通じて教訓を教えるのに対し、比喩はあるものを別のものに直接的に比較することで新たな洞察を提供します。

(2023.8.19)

3.4.10　宣教・伝道

Q. Propaganda の語源と用法の歴史を教えてください。

ChatGPT

「Propaganda」は、ラテン語の「propagare（拡散する）」から派生した言葉で、元来はキリスト教の信仰を広めるために用いられた言葉です。17 世紀には、教皇庁が設立した「Propaganda Fide（信仰の拡散）」という機関名が一般的に使われるようになりました。

19 世紀に入ると、政治的・社会的な目的で情報を広めることを指す言葉としても用いられるようになりました。特に第一次世界大戦以降、政治的宣伝・プロパガンダが広く行われるようになり、その中で「Propaganda」は広く使われるようになりました。

プロパガンダは、ある特定の思想や立場を広めるために、不正確な情報や偏った情報を意図的に広めることがあります。そのため、プロパガンダはしばしば悪い意味で使われることがあります。しかし、プロパガンダには中立的なものもあり、政府や企業などが自社のサービスや製品を宣伝するために広告を出すこともプロパガンダの一種と言えます。

現代では、プロパガンダは主に政治的な宣伝・情報操作を指す言葉として使われることが一般的です。しかし、一方で、広告やマーケティングなどの分野でも、特定の製品やサービスを宣伝するためにプロパガンダ的な手法が使われることがあります。

(2023.6.18)

3.4.11 奇跡などについて

Q. 新約聖書には、イエスが悪霊を追い出した記事がいくつもありますが、これは、どのようなものの表現と考えられているのでしょうか。

GPT4. 新約聖書には、イエスが悪霊や悪魔を追い出すという記述がいくつかあります。これらの記述は、悪霊や悪魔が人々に悪影響を与え、病気や精神的苦痛を引き起こすとされていました。イエスが悪霊を追い出すことで、彼が神の力を持っていることを示し、また、神の慈しみと回復の力を示す目的があったとされています。

これらの記述がどのようなものの表現と考えられるかについては、解釈が分かれるところです。一部の解釈では、悪霊や悪魔は現実の存在として認識されており、イエスが実際に悪霊を追い出していたと考えられます。この場合、悪霊追い出しは、イエスの神の力を持つ救い主としての役割を強調していると言えます。

一方、現代の解釈では、悪霊追い出しの記述は、イエスが当時の文化や宗教的な概念に基づいて、人々の病気や精神的苦痛を回復させたことを象徴的に表現していると考えられます。この解釈によれば、悪霊追い出しは、現代の医学や心理学で説明される病気や精神的苦痛と関連している可能性があります。イエスが悪霊を追い出すことで、彼が人々の苦しみから解放し、神の愛と回復の力をもたらしていたことを示していると言えるでしょう。

どの解釈が正しいかは、個々人の信仰や認識によって異なりますが、重要なのは、イエスが人々の苦しみを取り除き、神の愛と回復の力を示すことで、人々に希望を与えたというメッセージです。

3.4.12 病気

3.4.12.1 病気と罪の関係

Q. マルコ 2 章 7 節で神だけが罪をゆるせるとありますが、聖書からの引用であれば教えてください。

ChatGPT: マルコ 2:7 節の箇所は、新約聖書の中での記述であるため、古代のヘブライ語やギリシャ語で書かれた旧約聖書の引用ではありません。しかし、同様のテーマが旧約聖書でも扱われており、神が罪をゆるすことについての教えがいくつかあります。

たとえば、詩篇 103:2-3[*7]では、「わが魂よ、主をほめたたえよ。わが内なる者よ、主の聖なる名をほめたたえよ。わが魂よ、主をほめたたえよ。その恵みを忘れるな」と語られています。また、詩篇 130:3-4[*8]では、「主よ、あなたが罪をおしとやかにおしとやかにお赦しになることを、だれが耳にしたことがありましょう。しかし、あなたはゆえなく恐れられます」という言葉があります。

さらに、イザヤ書 43:25[*9]では、「わたしは、自分のために自分の名のために、あなたのとがを消し去り、あなたの罪を覚えない」という神の言葉が語られています。

以上のように、聖書には神が罪をゆるすことについての教えが数多く記されています。

(2023.6.22)

Q. イエスの時代の律法学者や、パリサイ人は、病気は罪の結果だと考えていたのでしょうか。タルムードや、ミシュナーには、記述がありますか。

ChatGPT

イエスの時代のユダヤ教徒の中には、病気が罪の結果であると考える人々がいました。これは一般的な見解ではありませんでしたが、一部の律法学者やパリサイ人がこのように考えていたとされています。

タルムードやミシュナーには、病気が罪の結果であるという考え方が記述されている箇所がいくつかあります。たとえば、ミシュナーの「アボット」には、「苦しみは罪の結果である」という記述があります。また、タルムードには、ある人物が病気にかかった理由を問われた際に、「父親が銀貨を偽造したため、神が彼の息子を罰しているのだろう」と答えたという逸話があります。

しかし、ユダヤ教には、病気が罪の結果であるという考え方に反対する立場も存在しました。たとえば、ユダヤ教の聖書である旧約聖書には、病気が罰であるとは明確に示されておらず、また、イエスも病気が罪の結果であるという考え方に反対していました。

したがって、病気が罪の結果であるという考え方がユダヤ教全体で一般的であったわけではありませんが、一部の律法学者やパリサイ人がこのように考えていたことが記録されているとされています。

(2023.6.22)

---

*7 口語訳：わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、／あなたのすべての病をいやし、

*8 口語訳：主よ、あなたがもし、もろもろの不義に／目をとめられるならば、／主よ、だれが立つことができましょうか。 しかしあなたには、ゆるしがあるので、／人に恐れかしこまれるでしょう。

*9 口語訳：わたしこそ、わたし自身のために／あなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。

3.4.13　祈りについて

3.4.13.1　イエスの祈りの記録

- マルコ 1:35 朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。
- マルコ 6:46 そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた。ルカ 5:16 しかしイエスは、寂しい所に退いて祈っておられた。
- ルカ 3:21-22 さて、民衆がみなバプテスマを受けたとき、イエスもバプテスマを受けて祈っておられると、天が開けて、 聖霊がはとのような姿をとってイエスの上に下り、そして天から声がした、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。
- マタイ 14:23 そして群衆を解散させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。
- ヨハネ 6:15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。
- ルカ 6:12 このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた。
- ルカ 9:18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちが近くにいたので、彼らに尋ねて言われた、「群衆はわたしをだれと言っているか」。
- ルカ 9:28-29 これらのことを話された後、八日ほどたってから、イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。29 祈っておられる間に、み顔の様が変り、み衣がまばゆいほどに白く輝いた。 祈っておられる間に、み顔の様が変り、み衣がまばゆいほどに白く輝いた。

3.4.13.2　イエスの祈り

- マルコ 14:32-42 さて、一同はゲツセマネという所にきた。そしてイエスは弟子たちに言われた、「わたしが祈っている間、ここにすわっていなさい」。 33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、 34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。 35 そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、36 「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。37 それから、きてごらんになると、弟子たちが眠っていたので、ペテロに言われた、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったのか。 38 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。39 また離れて行って同じ言葉で祈られた。 40 またきてごらんになると、彼らはまだ眠ってい

た。その目が重くなっていたのである。そして、彼らはどうお答えしてよいか、わからなかった。41 三度目にきて言われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。もうそれでよかろう。時がきた。見よ、人の子は罪人らの手に渡されるのだ。 42 立て、さあ行こう。見よ。わたしを裏切る者が近づいてきた」。

- マタイ 26:39-46 そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」。40 それから、弟子たちの所にきてごらんになると、彼らが眠っていたので、ペテロに言われた、「あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか。41 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。42 また二度目に行って、祈って言われた、「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」。43 またきてごらんになると、彼らはまた眠っていた。その目が重くなっていたのである。44 それで彼らをそのままにして、また行って、三度目に同じ言葉で祈られた。45 それから弟子たちの所に帰ってきて、言われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った。人の子は罪人らの手に渡されるのだ。46 立て、さあ行こう。見よ、わたしを裏切る者が近づいてきた」。

- ルカ 22:40-45 いつもの場所に着いてから、彼らに言われた、「誘惑に陥らないように祈りなさい」。41 そしてご自分は、石を投げてとどくほど離れたところへ退き、ひざまずいて、祈って言われた、42 「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」。43 そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。 44 イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。45 祈を終えて立ちあがり、弟子たちのところへ行かれると、彼らが悲しみのはて寝入っているのをごらんになって 46 言われた、「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい」。

- ヨハネ 17 章全体

3.4.13.3 イエスの祈りについての教え

- マルコ 11:24-25 そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう。 25 また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるしてくださるであろう。

- マタイ 5:44 しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。

- マタイ 6:5-15 また祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。6 あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。7 また、祈る場合、異邦人のように、くどくどと祈るな。彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っている。8 だから、彼らのまねをするな。あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。9

だから、あなたがたはこう祈りなさい、／天にいますわれらの父よ、／御名があがめられますように。 10 御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、／地にも行われますように。11 わたしたちの日ごとの食物を、／きょうもお与えください。 12 わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、／わたしたちの負債をもおゆるしください。13 わたしたちを試みに会わせないで、／悪しき者からお救いください。14 もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。 15 もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。

- ルカ 11:1-3 また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終ったとき、弟子のひとりが言った、「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」。2 そこで彼らに言われた、「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があがめられますように。御国がきますように。3 わたしたちの日ごとの食物を、日々お与えください。4 わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから、わたしたちの罪をもおゆるしください。わたしたちを試みに会わせないでください』」。

- ルカ 18:1 また、イエスは失望せずに常に祈るべきことを、人々に譬で教えられた。（神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官のたとえ）

- ルカ 18:10 「ふたりの人が祈るために宮に上った。そのひとりはパリサイ人であり、もうひとりは取税人であった。 11 パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。12 わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようともしないで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしください』と。 14 あなたがたに言っておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。

- マタイ 10:12 その家にはいったなら、平安を祈ってあげなさい。 13 もし平安を受けるにふさわしい家であれば、あなたがたの祈る平安はその家に来るであろう。もしふさわしくなければ、その平安はあなたがたに帰って来るであろう。

- マタイ 21:22 また、祈のとき、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」。

3.4.13.4 祈りに関連した記述

- マルコ 9:29 すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈によらなければ、どうしても追い出すことはできない」。

- マルコ 11:17 そして、彼らに教えて言われた、「『わたしの家は、すべての国民の祈の家ととなえらるべきである』と書いてあるではないか。それだのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしてしまった」。マタイ 21:13 そして彼らに言われた、「『わたしの家は、祈の家ととなえらるべきである』と書いてある。それだのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている」。ルカ 19:46 彼らに言われた、「『わが家は祈の家である

べきだ』と書いてあるのに、あなたがたはそれを盗賊の巣にしてしまった」。

- マルコ 12:40 また、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。彼らはもっときびしいさばきを受けるであろう」。
- マルコ 13:18 この事が冬おこらぬように祈れ。 マタイ 24:20 あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ。
- マタイ 19:13 そのとき、イエスに手をおいて祈っていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。
- マタイ 26:36 それから、イエスは彼らと一緒に、ゲツセマネという所へ行かれた。そして弟子たちに言われた、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここにすわっていなさい」。
- マタイ 26:41 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。
- ルカ 1:10 香をたいている間、多くの民衆はみな外で祈っていた。
- ルカ 1:13 そこで御使が彼に言った、「恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈が聞きいれられたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい。
- ルカ 2:37 その後やもめぐらしをし、八十四歳になっていた。そして宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもって神に仕えていた。
- ルカ 5:33-35 また彼らはイエスに言った、「ヨハネの弟子たちは、しばしば断食をし、また祈をしており、パリサイ人の弟子たちもそうしているのに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています」。34 するとイエスは言われた、「あなたがたは、花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食をさせることができるであろうか。 35 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう」。
- ルカ 6:28 のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ。
- ルカ 10:6 もし平安の子がそこにおれば、あなたがたの祈る平安はその人の上にとどまるであろう。もしそうでなかったら、それはあなたがたの上に帰って来るであろう。
- ルカ 20:47 やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。彼らはもっときびしいさばきを受けるであろう」。
- ルカ 21:36-37 これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」。37 イエスは昼のあいだは宮で教え、夜には出て行ってオリブという山で夜をすごしておられた。
- ルカ 22:32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

3.4.13.5　AI への祈りについての質問

Q. イエスはどのような機会に祈ったと書かれていますか。具体的に教えてください。イエスにとって祈りはどのような意味を持っていたのでしょうか。

GPT4.

イエス・キリストは、聖書の新約聖書に記されているさまざまな機会に祈りました。以下は、いくつかの具体的な例です。

1. 洗礼：イエスがヨハネからヨルダン川で洗礼を受けたとき、祈りました（ルカ 3:21）。
2. 荒野での誘惑：イエスが悪魔に誘惑された 40 日間の断食の間、祈りにより神とのつながりを維持しました（マタイ 4:1-11、マルコ 1:12-13、ルカ 4:1-13）。
3. 一人での祈り：イエスは、多くの人々から離れて祈るために、しばしば孤独な場所に行きました（マタイ 14:23、マルコ 1:35、ルカ 5:16）。
4. 選ばれた弟子たちの選出：イエスが 12 人の弟子を選ぶ前に、一晩中祈りました（ルカ 6:12-13）。
5. ゲッセマネの園：イエスは、十字架にかけられる前の最後の夜、ゲッセマネの園で祈り、「父よ、もしこの杯を取り除くことができるなら、どうか取り除いてください。しかし、私の意志ではなく、あなたの意志が行われますように」と言いました（マタイ 26:36-44、マルコ 14:32-42、ルカ 22:39-46）。

イエスにとって祈りは、神との親密な関係を維持し、神の意志に従う力を求める手段でした。祈りはまた、悩みや恐れ、喜びや感謝を神に打ち明ける方法でもありました。イエスは、祈りを通して神とのつながりを強め、自分の使命と目的に忠実であることができました。

イエスは、弟子たちにも祈りの重要性を教えました。例えば、「主の祈り」として知られる祈りを教えたり（マタイ 6:9-13、ルカ 11:1-4）、祈りを通じて神に信頼し、頼ることの大切さを説いたりしました（マタイ 7:7-11、ルカ 18:1-8）。

(2023.6.7)

3.4.14　女性たち

3.4.14.1　十字架のもとにいる女性たち

Q. イエスの死にあたって、十字架の側にいた女性たちについて聖書の記述がありますが、福音書によって記述が少し違うようです。どのような人たちがいたと考えられていますか。

ChatGPT イエスの十字架の側にいた女性たちについて、福音書ごとに記述が少し異なりますが、共通する点もあります。以下に、各福音書の記述を整理し、どのような女性たちがいたのかを考察します。

1. 各福音書の記述の比較
    1. マタイによる福音書（27:55-56）
       55 また、そこには多くの女たちがいて、遠くから見守っていた。彼女たちはガリラヤからイエスについて来て世話をしていた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた。
       - 登場人物
         1. マグダラのマリア
         2. ヤコブとヨセフ（ヨセ）の母マリア（ヨセフではなく「ヨセ」と表記されることも）
         3. ゼベダイの子たちの母（ヤコブとヨハネの母、伝統的にはサロメと考えられる）
    2. マルコによる福音書（15:40-41）
       40 また、遠くから見守っていた女たちもいた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、サロメがいた。41 彼女たちは、イエスがガリラヤにおられたときに従って仕え、多くのほかの女たちも一緒にエルサレムに上って来ていた。
       - 登場人物
         1. マグダラのマリア
         2. 小ヤコブとヨセの母マリア（マタイと同じ）
         3. サロメ（ゼベダイの子たちの母と同一人物の可能性が高い）
            ※ マルコは「ゼベダイの子たちの母」ではなく、直接「サロメ」という名前を記しています。
    3. ルカによる福音書（23:49, 23:55-56, 24:10）
       49 しかし、イエスの知人たちや、ガリラヤからイエスについて来た女たちは、皆遠く離れて立ち、それを見守っていた。55 さて、イエスと一緒にガリラヤから来た女たちは、それを見届け、墓と遺体の納められる様子を見た。56 そして、帰って、香料と香油を用意した。
       24:10 それはマグダラのマリア、ヨハナ、小ヤコブの母マリアであった。他にも彼女たちと一緒にいた人々が、使徒たちにこれらのことを話した。
       - 登場人物
         1. マグダラのマリア
         2. 小ヤコブの母マリア（マタイ・マルコと同じ）
         3. ヨハナ（ヨアンナ）（他の福音書には登場しない）
         4. 他の女性たち
            ※ ルカは「ゼベダイの子たちの母」（サロメ）について言及していないが、名前が明記されていない「他の女性たち」の中に含まれていた可能性がある。
    4. ヨハネによる福音書（19:25）
       さて、イエスの十字架のかたわらには、イエスの母、その姉妹、クロパの妻マリア、マグダラのマリアが立っていた。
       - 登場人物
         1. イエスの母マリア（他の福音書には明記されていないが、当然そこにいたと考えられる）
         2. イエスの母の姉妹（サロメと同一人物の可能性がある）
         3. クロパの妻マリア（小ヤコブの母マリアと同一人物の可能性）

        4. マグダラのマリア
           ※「ゼベダイの子たちの母」（サロメ）は言及されていないが、母マリアの「姉妹」として含まれている可能性がある。
2. 登場した女性たちの整理
    1. すべての福音書に登場する女性
        - マグダラのマリア（Mary Magdalene）•
            - 悪霊を追い出され、イエスに従っていた女性（ルカ 8:2-3）
            - 復活の最初の証人
    2. 複数の福音書に登場する女性
        - 小ヤコブとヨセの母マリア（Mary, mother of James and Joses）マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネに「クロパの妻マリア」として登場
        - ゼベダイの子たちの母（サロメ）（Salome）マタイとマルコに登場
        - ヨハネでは「イエスの母の姉妹」として言及されている可能性
    3. 特定の福音書でのみ言及される女性
        - イエスの母マリア（Mary, mother of Jesus）
            - ヨハネ福音書にのみ登場
            - 他の福音書では言及されていないが、当然そこにいたと考えられる
        - ヨハナ（ヨアンナ）（Joanna）
            - ルカ福音書のみ
        - ヘロデの家臣クーザの妻で、イエスに仕えていた女性（ルカ 8:3）
            - その他の女性たち
            - ルカとマタイは「多くの女性たち」がいたことを示唆
3. まとめ
    1. 福音書ごとに記述に違いはありますが、以下の女性たちが十字架のそばにいたと考えられます。
        1. すべての福音書に登場
            - マグダラのマリア
        2. 複数の福音書に登場
            - 小ヤコブとヨセの母マリア（クロパの妻マリア）
            - ゼベダイの子たちの母（サロメ ?）
        3. 特定の福音書で登場
            - イエスの母マリア（ヨハネのみ）
            - ヨハナ（ヨアンナ）（ルカのみ）
            - 他の女性たち（ルカとマタイ）
              この違いは、各福音書の視点の違いや、著者が強調したい人物の違いによるものと考えられます。全体として、イエスに従っていた女性たちが最後までその場におり、後にイエスの復活を最初に目撃する重要な証人となったことが分かります。

Q. 小ヤコブとヨセの母マリアが、イエスの母を意味していると言うことはないのでしょうか。

ChatGPT「小ヤコブとヨセの母マリア」がイエスの母マリアと同一人物かどうかについては、伝統的な解釈では別人と考えられています。しかし、一部の解釈では同一人物の可能性も議論されることがあります。以下に、それぞれの立場を整理して考察します。

A. 伝統的解釈：小ヤコブとヨセの母マリアはイエスの母ではない

- 多くの聖書学者や教会の伝統では、「小ヤコブとヨセの母マリア」はイエスの母とは別人と見なされます。その理由は以下の通りです。

1. 福音書の記述の違い
   - マタイ 27:56 「マグダラのマリア、ヤコブとヨセの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた。」
   - マルコ 15:40 「マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、サロメがいた。」
   - ヨハネ 19:25 「イエスの母、イエスの母の姉妹、クロパの妻マリア、マグダラのマリアが立っていた。」
   - イエスの母マリアは、ヨハネ福音書には明記されているが、マタイ・マルコでは明記されていない。もし「小ヤコブとヨセの母マリア」がイエスの母マリアであれば、なぜマタイとマルコは「イエスの母」と明示しなかったのか？これは別人である可能性を強く示唆しています。
2. “小ヤコブ” と” ヨセ” は誰なのか？
   - 「小ヤコブ」は、**使徒ヤコブ（アルパイオの子）**とされます（マルコ 3:18, ルカ 6:15）。
   - 「ヨセ（ヨセフ）」はイエスの兄弟の「ヨセフ」とは別人と考えられます。
   - イエスの兄弟にも「ヤコブ」と「ヨセ（ヨセフ）」がいた（マタイ 13:55, マルコ 6:3）。しかし、マルコ 3:18 では「小ヤコブ」は使徒のヤコブと同一人物であり、イエスの兄弟のヤコブとは別人の可能性が高いです。そのため、「小ヤコブとヨセの母マリア」は、イエスの母マリアとは異なると考えられます。
3. もし同一人物ならば、ヨハネ福音書が「小ヤコブの母」と言及しないのは不自然

   ヨハネ福音書 19:25 では、

   - 「イエスの母」
   - 「イエスの母の姉妹」
   - 「クロパの妻マリア」
   - 「マグダラのマリア」

     が言及されています。

もし「小ヤコブとヨセの母マリア」がイエスの母マリアと同じなら、なぜヨハネ福音書では「イエスの母」ではなく「小ヤコブの母」と呼ばれないのか？逆に、マタイとマルコが「イエスの母」とせず「小ヤコブとヨセの母」と表現したのも不自然になります。

B. イエスの母マリアと同一人物とする説

一部の研究者の間では、「小ヤコブとヨセの母マリア」がイエスの母と同一人物である可能性も考えられます。その理由は以下の通りです。

(1) イエスの兄弟にも「ヤコブ」と「ヨセ」がいる
- マタイ 13:55「この人（イエス）は大工の息子ではないか。その母はマリア、その兄弟たちはヤコブ、ヨセ（ヨセフ）、シモン、ユダではないか。」
- マルコ 6:3「この人は大工ではないか。その母はマリアで、兄弟はヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンではないか。」
- もし「小ヤコブ」がイエスの兄弟ヤコブならば、「小ヤコブとヨセの母マリア」はイエスの母マリアと一致する可能性がある。

(2) “小ヤコブ” という表現は後世の区別？
- 使徒のヤコブ（アルパイオの子）と、イエスの兄弟ヤコブは別人とされるが、古代では同じ名前の人物を区別するために後世の表記が加わることがある。
- つまり、福音書の執筆者が「小ヤコブの母マリア」と書いたとき、それは実際には「イエスの兄弟ヤコブの母マリア」を指していた可能性もある。

(3) もし別人なら、「小ヤコブとヨセの母マリア」は誰なのか？
- 伝統的には「クロパの妻マリア」とされることが多い。
- しかし、クロパ（Cleopas）という名は、アルパイオ（Alphaeus）と同じ人物を指す可能性もあり、「アルパイオの子ヤコブ」の母がこのマリアであるとも言われる。
- ただし、確証はなく、「小ヤコブとヨセの母マリア」がイエスの母と一致する可能性も排除できない。

C. 結論

(1) 伝統的な解釈（別人）

- 小ヤコブとヨセの母マリアは、イエスの母マリアとは異なる人物。
- 彼女はおそらく「クロパの妻マリア」と同一人物。
- 「小ヤコブ」は使徒ヤコブ（アルパイオの子）を指す。

(2) 同一人物説

- 「小ヤコブ」が実はイエスの兄弟ヤコブを指しているなら、**「小ヤコブとヨセの母マリア」＝「イエスの母マリア」**の可能性もある。
- ただし、福音書の記述の違いを考えると、この説は主流ではない。

D. まとめ

ほとんどの研究者や伝統的な解釈では、「小ヤコブとヨセの母マリア」はイエスの母マリアとは別人と考えられています。その根拠は、

- マタイとマルコが「イエスの母マリア」と明示せず、「小ヤコブの母」としていること。

- ヨハネ福音書でイエスの母マリアと「クロパの妻マリア」が区別されていること。

ただし、一部の研究者は「小ヤコブ＝イエスの兄弟ヤコブ」と考え、**「小ヤコブの母マリア」＝「イエスの母マリア」**である可能性を指摘しています。しかし、これを確定するにはさらなる証拠が必要です。

(2025.2.9)

3.5 旧約聖書の引用

3.5.1 イザヤ書 53 章

Q. 旧約聖書のイザヤ書 53 章の一部が引用されている、新約聖書の箇所をすべて教えてください。

GPT4.

1. マタイの福音書 8 章 16-17 節:

   > 夕方になると、人々は多くの悪霊につかれている者たちをイエスのもとに連れてきた。イエスは一言の命令でその霊たちを追い出し、また、すべての病気やけがをいやされた人もいた。これは、預言者イザヤが言ったことが実現するためである。「彼は私たちの弱さを負い、私たちの病気を背負ってくれた」。

2. マルコの福音書 15 章 27-28 節:

   > また、ふたりの強盗が、ひとりは右に、ひとりは左に、彼と一緒に十字架につけられた。こうして、聖書に書かれている言葉が成就された。「彼は罪人たちと一緒に数えられた」。

   ただし、マルコの福音書 15 章 28 節は一部の写本には存在しないため、引用の有無は議論があります。

3. ルカの福音書 22 章 37 節:

   > これからは、「わたしには犯罪者と同じ扱いがされる」と書かれていることが、私に適用されなければならない。私に関することはすべて成就しなければなりません。

4. ヨハネの福音書 12 章 37-38 節:

   > イエスがこれほど多くのしるしを行ったのにもかかわらず、彼らはイエスを信じなかった。これは預言者イザヤが言った言葉が成就するためである。「主よ、だれがわたしたちの話を信じましたか。主の力はだれに現れましたか」。

5. 使徒言行録 8 章 32-35 節:

   > フィリポは近くに行って、エチオピア人が預言者イザヤを読んでいるのを聞いた。それは次のような部分である。「彼は、ひきとられて屠られる羊のように、また、羊がその毛を刈る前に黙っているよう

に、口を開かなかった。彼は卑しめられ、裁きを受け、その子孫を取り去られた。彼が地上の生き物の中でだれと比べられるだろうか」。

この場面では、エチオピア人宦官がイザヤ書 53 章を読んでおり、フィリポがこれを説明しています。

これらの箇所は、新約聖書においてイザヤ書 53 章が引用されている例です。ただし、これ以外にも、イザヤ書 53 章の内容が言及されている箇所があるかもしれません。

Q. イザヤ書 53 章は、なぜ、イエス・キリストと関連させて考えられるようになったのでしょうか。

ChatGPT

イザヤ書 53 章は、キリスト教徒にとって、イエス・キリストの受難と犠牲を預示した預言書として重要視されています。この章は、悲しみと苦しみに満ちた人生を送り、人間の罪のために死を受け入れた一人の人物を描写しています。この人物は、「神のしもべ」と呼ばれ、多くのキリスト教徒にとって、イエス・キリストに対応すると考えられています。

イザヤ書 53 章がキリスト教と関連付けられるようになったのは、初代キリスト教徒が旧約聖書を解釈する際に、この章をキリストの受難と犠牲を預示した預言書として理解したことが大きな要因です。また、イザヤ書 53 章の記述が、キリストの受難や犠牲と類似していると考えられることも、この章がキリスト教で重要視される理由の一つとされます。

さらに、イザヤ書 53 章は、古代ヘブライ語で書かれているため、初代キリスト教徒が使用したギリシャ語の旧約聖書での翻訳によって、キリスト教の聖書に取り込まれたことも関連しています。この翻訳によって、イザヤ書 53 章がキリスト教徒の間で広く知られ、重要視されるようになりました。

以上のように、イザヤ書 53 章がキリスト教と関連付けられるようになったのは、初代キリスト教徒が旧約聖書を解釈する際に、この章をキリストの受難と犠牲を預示した預言書として理解し、また、この章がギリシャ語の旧約聖書で翻訳され、キリスト教の聖書に取り込まれたことが大きな要因とされます。このように、イザヤ書 53 章がキリスト教の聖書において重要視されるようになった背景には、歴史的、文化的な複数の要因が関わっています。

Q. イザヤ書 53 章の記述が、キリストの受難や犠牲と類似している点はどのようなところでしょうか。

ChatGPT

イザヤ書 53 章の記述が、キリストの受難や犠牲と類似している点は、以下のようなものがあります。

1. 苦しみと悲しみに満ちた人生を送る
   イザヤ書 53 章では、「神のしもべ」と呼ばれる人物が、苦しみと悲しみに満ちた人生を送っていると描写されています。同様に、キリストも苦しみと悲しみに満ちた人生を送りました。キリストは、拒絶され、裏切られ、磔刑に処されるなど、多くの苦しみを経験しました。

2. 人間の罪のために死を受け入れる

イザヤ書 53 章では、「神のしもべ」と呼ばれる人物が、人間の罪のために死を受け入れるという描写があります。同様に、キリストも人間の罪のために死を受け入れ、自分自身を犠牲にして人類を救うために十字架にかけられました。

3. 軽蔑され、打ちのめされる
   イザヤ書 53 章では、「神のしもべ」と呼ばれる人物が、軽蔑され、打ちのめされるという描写があります。同様に、キリストも十字架にかけられる前に、軽蔑され、侮辱され、打ちのめされるなど、多くの屈辱的な状況に置かれました。

4. 無抵抗で受け入れる
   イザヤ書 53 章では、「神のしもべ」と呼ばれる人物が、無抵抗で受け入れるという描写があります。同様に、キリストも自分自身を犠牲にして人間を救うために、無抵抗で受け入れるように神の意志に従ったとされています。

5. 他人の罪を引き受ける
   イザヤ書 53 章では、「神のしもべ」と呼ばれる人物が、他人の罪を引き受けるという描写があります。同様に、キリストも人間の罪を引き受け、自分自身を犠牲にして、人類を罪から救うために死を受け入れました。

これらの点から、イザヤ書 53 章の記述が、キリストの受難や犠牲と類似していると考えられています。しかし、イザヤ書 53 章は、キリスト教徒にとってキリストの受難と犠牲を預示した預言書として理解されているものの、イザヤ書自体は、キリスト教以前のユダヤ教の聖書であり、ユダヤ教徒にとっては、異なる解釈が存在するこる可能性があります。

Q. ユダヤ教徒にとっては、どのような意味があったのでしょうか。

ChatGPT

ユダヤ教徒にとって、イザヤ書 53 章の意味は、キリスト教徒とは異なります。

イザヤ書 53 章は、ユダヤ教の聖書である旧約聖書の一部であり、ユダヤ教徒にとっては、主にメシア（救世主）に関する預言書として解釈されます。イザヤ書 53 章の中で語られる「神のしもべ」については、ユダヤ教では、一般的にはイスラエル民族全体を表すとされています。つまり、「神のしもべ」は、イスラエル民族が苦しみや迫害を受けた歴史的な出来事を描写したものとして解釈されます。

また、イザヤ書 53 章の「神のしもべ」について、ユダヤ教徒の間でも、様々な解釈が存在します。たとえば、一部のユダヤ教徒は、「神のしもべ」を、預言者イザヤ自身や、イスラエルの王たちなど、歴史上の人物を指すと解釈しています。また、他のユダヤ教徒は、「神のしもべ」が、イスラエル民族の苦しみを象徴していると捉えています。

総じて言えることは、イザヤ書 53 章が、ユダヤ教徒にとっては、キリスト教徒が考えるようなキリストの受難や犠牲を預示した預言書ではなく、歴史的な出来事や、イスラエル民族の苦しみを描写したものとして解釈されているということです。

Q. イザヤ書 53 章の「神のしもべ」について、他にどのような解釈があるのでしょうか。

ChatGPT

イザヤ書 53 章の「神のしもべ」について、ユダヤ教徒の間でも論争があり、様々な解釈が存在しています。以下に、その一部を紹介します。

1. イスラエル民族全体を表す解釈
   イザヤ書 53 章の「神のしもべ」は、イスラエル民族全体を表すという解釈が一般的です。つまり、「神のしもべ」は、イスラエル民族が苦しみや迫害を受けた歴史的な出来事を描写したものとして解釈されます。

2. 預言者イザヤ自身を表す解釈
   一部のユダヤ教徒は、「神のしもべ」を、預言者イザヤ自身を指すと解釈しています。この解釈では、イザヤ書 53 章は、イザヤ自身が苦しみや迫害を受けた歴史的な出来事を描写したものとされます。

3. イスラエルの王たちを表す解釈
   他のユダヤ教徒は、「神のしもべ」が、イスラエルの王たちを指すと解釈しています。この解釈では、イザヤ書 53 章は、イスラエルの王たちが苦しみや迫害を受けた歴史的な出来事を描写したものとされます。

4. イスラエル民族の苦しみを象徴する解釈
   一部のユダヤ教徒は、「神のしもべ」が、イスラエル民族の苦しみを象徴するものであると解釈しています。この解釈では、イザヤ書 53 章は、イスラエル民族が苦しみや迫害を受ける歴史的な出来事を象徴的に描写したものとされます。

以上のように、イザヤ書 53 章の「神のしもべ」については、ユダヤ教徒の間でも様々な解釈が存在しています。これらの解釈は、歴史的な文脈や、聖書の文脈、伝統的な解釈など、多くの要因によって形成されています。ユダヤ教徒にとっては、イザヤ書 53 章が、キリスト教徒が考えるようなキリストの受難や犠牲を預示した預言書ではなく、他の意味を持つものとして捉えられています。

Q. 苦難のしもべの預言を、マタイ 8:17 では、病を癒し、悪霊を追い出したあとに引用しています。これには、どのような意味があるのでしょうか。

ChatGPT

マタイ 8:17 において、イエス・キリストが病を癒し、悪霊を追い出した後に、イザヤ書 53 章の「苦難のしもべ」に関する預言を引用しているとされています。この引用には、いくつかの意味が含まれています。

まず、この引用は、イエス・キリストが「苦難のしもべ」であることを示すものとされています。イザヤ書 53 章は、苦難を受け、犠牲を払う「神のしもべ」についての預言であり、キリスト教では、この預言がキリストの受難や犠牲を預示したものと考えられています。マタイ 8:17 において、イエス・キリストが病を癒し、悪霊を追い出した後に、イザヤ書 53 章の預言を引用することで、イエス・キリストが「苦難のしもべ」であることを強調しているとされています。

また、この引用は、イエス・キリストが苦しみや病気を克服する力を持っていることを示すものとされています。イエス・キリストが病を癒し、悪霊を追い出すことで、彼が神の力を持っていることを証明しています。そして、イザヤ書 53 章の預言を引用することで、イエス・キリストが苦難を受け、犠牲を払ったことを示すと同時に、彼が人々の罪や病気を取り除くために犠牲を払ったことを強調しています。

さらに、この引用は、イエス・キリストが救い主であることを示すものとされています。イエス・キリストが病を癒し、悪霊を追い出すことで、彼が人々の苦しみや悲しみを取り除く力を持っていることを示しています。そして、イザヤ書 53 章の預言を引用することで、彼が人々の罪を負い、人々を救うために犠牲を払ったことを強調しています。イエス・キリストが苦難を受け、犠牲を払ったことで、人々が神の恵みに与ることができるようになったのです。

以上のように、マタイ 8:17 におけるイザヤ書 53 章の預言の引用には、イエス・キリストの「苦難のしもべ」であること、彼が人々を救う力を持っていること、そして彼が人々を救うために犠牲を払ったことを示す意味が含まれています。また、この引用は、キリスト教徒にとって、復活や救いの希望を与えるものでもあります。

Q. キリスト教におけるイザヤ 53 章の引用について、ギリシャ語訳の聖書が関係していると言われましたが、もう少し、どのように訳が関係したか教えてください。

ChatGPT

イザヤ 53 章は、キリスト教の聖書である旧約聖書の一部であり、主にキリスト教徒によってメシアの預言として解釈されています。この章は、キリストの受難や十字架について言及しており、そのためキリスト教において非常に重要な章とされています。

キリスト教において、イザヤ 53 章の引用は、主にギリシャ語訳聖書である「セプトゥアギント」と呼ばれる聖書の影響を受けています。セプトゥアギントは、ヘブライ語聖書の古代ギリシャ語への翻訳であり、古代ヘブライ語のイザヤ書をギリシャ語に翻訳したものです。

キリスト教の聖書では、イザヤ 53 章が引用される際に、主にセプトゥアギントのギリシャ語訳を使用しています。そのため、イザヤ 53 章の一部の言葉や表現について、ギリシャ語訳の影響が見られます。例えば、イザヤ 53:5 の「彼はわたしたちのとがのために傷つけられ、わたしたちは彼の打たれたところによっていやされた」という箇所は、ギリシャ語訳では「彼はわたしたちの罪のために刺され、わたしたちは彼の打たれたところによって癒された」となっています。このように、一部の言葉や表現について、ギリシャ語訳による影響が見られるのです。

また、イザヤ 53 章の引用には、他の聖書の書簡や福音書でも言及されている箇所があります。例えば、マタイによる福音書 8:17 では、「彼はわたしたちの病気を負い、わたしたちは彼によって癒された」という箇所があり、この部分はイザヤ 53:4 の引用とされています。同様に、ペテロの第一の手紙 2:24 では、「キリストは、わたしたちの罪を自分のからだに負って、木にかけられた」という箇所があり、これはイザヤ 53:5 の引用とされています。

総じて言えることは、キリスト教におけるイザヤ 53 章の引用は、ギリシャ語訳聖書であるセプトゥアギントの影響を受けていることが多いということです。しかし、この章がキリスト教において重要な位置を占める理由は、

単に翻訳の問題に留まらず、イザヤ 53 章がキリストの受難や十字架についての預言を含んでいるからだと考えられます。この章がキリスト教において重要な位置を占める理由は、イザヤ 53 章がキリストの受難や十字架についての預言を含んでいるからです。そのため、イザヤ 53 章は、キリスト教徒にとって非常に重要な聖書の一部となっています。

(2023.5.31)

3.6 ギリシャ語・ヘブル語・アラム語

3.6.1 仕える

2023.05.11

Q. Koinee greek において、 [*10] と [*11] は、どちらも serve 仕えるだと思いますが、どう違うのでしょうか。

ChatGPT

ご質問ありがとうございます。Koine Greek は、古代ギリシャ語の一種であり、キリスト教聖書の原典などに使用されています。

「 」と「 」は、どちらも「仕える」という意味であり、キリスト教の文脈では特に宗教的な仕えるという意味合いが含まれますが、微妙に異なるニュアンスがあります。

「 」は、より崇拝的な仕えるという意味合いがあります。神に対しての献身的な奉仕を表し、神への礼拝や祈りを含みます。また、神が受け入れるべき、真の礼拝を行うことを示します。

一方、「 」は、より実践的な仕えるという意味合いがあります。主に、他人に奉仕することを示し、愛と仕えることを通じて、他人を助けることを目的としています。キリスト教の文脈では、教会の役員や神父などが信徒に奉仕することを示す場合にも使用されます。

つまり、「 」は神に対する崇拝的な奉仕を表し、「 」は他人に対する実践的な奉仕を表します。これらの単語は、キリスト教の文脈において、異なるニュアンスを持って使用されます。

3.6.2 サタンと悪魔

Q. Koinee greek において、 と、 は、それぞれどのような意味で、違いはどのようなものなのでしょうか。

ChatGPT

[*10] マタイ 4:10 主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ
[*11] マタイ 4:11 御使たちがみもとにきて仕えた。

「　　」と「　　」は、どちらもキリスト教の文脈で使用されるギリシャ語の言葉で、英語で「devil（悪魔）」と訳されることがありますが、微妙に異なるニュアンスがあります。

「　　」は、原義で「分裂させる者」「中傷する者」といった意味を持ちます。一般的には、悪意や陰謀を持って人を誘惑し、罪に誘う存在を指します。キリスト教の伝統では、この言葉は主に、悪魔としての役割を表すために使用されます。

一方、「　　」は、原義で「敵対する者」といった意味を持ちます。キリスト教の文脈では、神に対する反逆者や敵対者、悪魔としての役割を表すために使用されます。また、新約聖書においては、イエス・キリストを誘惑しようとした存在としても登場します。

つまり、「　　」と「　　」は、どちらも悪魔としての役割を持つ言葉であり、似たような意味を持ちますが、「　　」は誘惑や罪に誘う存在を、「　　」は主に神に反逆する存在を表す傾向があります。

Q. これらの違いの説明はどのような根拠・出典によっているのですか。

ChatGPT

「　　」と「　　」の違いについての説明は、主にキリスト教の聖書や古代ギリシャ語の辞書などの文献に基づいています。

例えば、ギリシャ語の辞書である「Liddell and Scott's Greek-English Lexicon」では、「　　」が「中傷する者」や「悪魔」としての意味を持ち、「　　」が「敵対する者」や「悪魔」としての意味を持つことが説明されています。

また、キリスト教の聖書においても、両者の違いが示されています。例えば、新約聖書の「ヨハネの手紙一書」4 章 1 節には、「愛する者たちよ。すべての霊を信じてはならない。かえって、霊が神から出たものかどうかを、試りなさい。偽預言者たちが、この世に出てきたからです。」とあり、この中で「偽預言者たち」として「　　」が言及されています。

また、新約聖書の「マタイによる福音書」4 章 1-11 節においては、イエス・キリストが 40 日間の断食の後、誘惑される出来事が描かれており、「　　」がイエスを誘惑する役割を担っています。

以上のように、語源や聖書などの文献から、両者の微妙な違いが説明されています。

2023.05.17

3.6.3　神の国と天国

Q. 福音書などで使われる「神の国」と「天国」は、原語からは、どのような違いがあるのでしょうか。用法などあれば、教えてください。

Bard. 「神の国」と「天国」はどちらも、福音書でイエスがよく使っていた言葉です。しかし、これらの 2 つの

言葉には、ニュアンスの違いがあります。

「神の国」という用語は、神の支配と統治を表しています。それは、神がすべての人々の生活の中で支配し、支配する時代の到来を指します。一方、「天国」という用語は、より個人的な意味合いを持っています。それは、愛、平和、そして喜びに満ちた場所を指します。それは、神が信者に与える約束された故郷です。

「神の国」と「天国」はどちらも、イエス・キリストの教えの中心的な部分です。彼は、人々が神の国に入るためには、悔い改め、新しい生き方を始めなければならないと教えています。また、神の国はすでに私たちの中にあり、私たちの周りにあると教えています。

「神の国」と「天国」は、信者の希望と約束です。それは、私たちが罪と死から解放され、神との永遠の交わりを持つ時代の到来を表しています。

GPT4. 新約聖書は、もともとギリシャ語で書かれています。福音書で使われる「神の国」と「天国」は、原語であるギリシャ語ではそれぞれ「Βασιλεία τοῦ Θεοῦ」(Basileia tou Theou) と「Βασιλεία τῶν Οὐρανῶν」(Basileia tōn Ouranōn) と表現されます。

「神の国」は、「Βασιλεία τοῦ Θεοῦ」(Basileia tou Theou) で、神（Θεοῦ, Theou）の支配や権威（Βασιλεία, Basileia）を意味します。これは、神の支配が地上に広がり、人々の間に認知されることを指します。福音書の中で「神の国」は、イエスの教えの中心的なテーマであり、彼の教えと奇跡を通して実現しようとしているものです。

一方、「天国」は、「Βασιλεία τῶν Οὐρανῶν」(Basileia tōn Ouranōn) で、直訳すると「天の国」や「天の領域」を意味します。これは、まさに神の住まいであるとされる場所を指し示しています。特にマタイ福音書では、「天国」の表現が頻繁に用いられます。

両者の違いに関しては、解釈によって異なりますが、一般的には、「神の国」は神の支配や権威が地上で展開される概念であるのに対して、「天国」は神の住まいや霊的な領域を指すとされています。

ただし、実際には、これらの言葉は福音書の中でほぼ同義語として使われており、イエスが語る神の支配や権威が実現する場所や状況を指しています。したがって、両者の違いは微妙であると言えます。

補足

口語訳および KJV で天国 Kingdom of Heaven は、マタイのみに、32 回。一方、神の国は、すべての福音書および、書簡にも多く見られ、マタイには 5 回（6:33, 12:28, 19:24, 21:31, 43)。マルコは 14 件、ルカは 31 件、ヨハネは 2 件のみ（3:3, 3:5)。

3.6.4 癒す - heal

Q. 新約聖書の Koinee Greek で、KJV に、heal 癒すと訳されている語はどのようなものがありますか。その違いはどのようなものですか。

Chat GPT. 新約聖書の Koine Greek で、“heal”（癒す）と訳される単語はいくつかあります。以下にいくつかの例を挙げます。

1. (therapeuō) - これは最も一般的な単語で、主に身体的な癒しを指します。例えば、マタイによる福音書 4:23 では、「イエスは全ガリラヤに教え、会堂で彼らの中で御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆる病気を癒しました。」と記されています。

2. (iaomai) - これも身体的な癒しを意味する言葉で、特に病気や傷を治療するために使用されます。例えば、マルコによる福音書 5:34 では、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。平和を得なさい。あなたの病気から解放されました」と、イエスが病気を治療したことが記されています。

3. (sōzō) - これは、身体的な癒しだけでなく、霊的な救済も含む幅広い意味を持つ言葉です。例えば、マタイによる福音書 9:21-22 では、「彼女は自分の心の中で、たとえ端からでも御子に触れれば、癒されると信じていた。すると、イエスは振り向いて彼女を見て、『娘よ、勇気を出しなさい。あなたの信仰があなたを救った』と言われました。そのとおりになりました」と記されています。

これらの単語は、身体的な癒しと霊的な救済を含む幅広い範囲の意味を持つため、文脈によって異なる訳語が使用されます。KJV のような英語訳聖書では、これらの単語は通常、“heal” や”healing” などの単語に翻訳されますが、文脈によっては、“cure” や”restore”、“save” などの単語にも翻訳されることがあります。また、同じ単語が使用されていても、訳語が異なる場合があります。例えば、マタイによる福音書 4:23 で使用されている「 」は、KJV では”heal” と訳されていますが、NIV（New International Version）では”cure” と訳されています。

したがって、これらの単語の正確な訳語は、文脈によって異なることがあるため、注意が必要です。

Q. (therapeuō) 、 (iaomai)、 (sōzō) は語源的にはどのような違いがありますか。

ChatGPT. 「 」、「 」、「 」は、いずれもギリシャ語で、語源的には以下のような違いがあります。

1. 「 」- この単語は、ギリシャ語の「 (therapon)」から派生しています。この語は、もともとは「奉仕する人」を意味していましたが、後に「治療する」という意味にも使われるようになりました。つまり、「 」は、「治療する」という意味の動詞であり、健康状態を改善することを目的としています。

2. 「 」- この単語は、ギリシャ語の「 (iatros)」から派生しています。この語は、「医師」を意味します。そして、「 」は、「治療する」という意味の動詞であり、病気や傷を治療することを目的としています。

3. 「 」- この単語は、ギリシャ語の「 (sōtēr)」から派生しています。この語は、「救世主」を意味します。そして、「 」は、「救う」という意味の動詞であり、身体的な救済だけでなく、霊的な救済も含む広い意味を持っています。

つまり、「 」と「 」は、身体的な健康状態を改善することに焦点を当てている一方、「 」は、幅広い意味を持ち、身体的な救済だけでなく、霊的な救済も含んでいます。ただし、これらの単語は、文脈によって異なる訳語に翻訳されることがあるため、注意が必要です。

Q. これらの単語は、どのような状況で使われるのでしょうか。

ChatGPT. これらの単語は、それぞれ異なるニュアンスを持つため、異なる状況で使用されます。

1.「　　」- この単語は、一般的に身体的な病気や傷を治療する場合に使用されます。例えば、マタイによる福音書 4:23 では、「イエスは全ガリラヤに教え、会堂で彼らの中で御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆる病気を癒しました。」と記されています。この場合、「　　」は、病気や傷を治療することを意味しています。

2.「　　」- この単語は、「　　」と同様に身体的な病気や傷を治療する場合に使用されますが、より具体的には医療行為を指します。例えば、ルカによる福音書 5:31 では、「イエスは彼らに答えて言われた：『健康な人には医者は必要ありません。病人にしか必要ありません。』」と記されています。この場合、「　　」は、医療行為や治療を指しています。

3.「　」- この単語は、身体的な救済だけでなく、霊的な救済も含む広い範囲の意味を持っています。例えば、ローマの信徒への手紙 10:9 では、「もし口でイエスを主と告白し、心で神が彼を死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われます。」と記されています。この場合、「　」は、霊的な救済を指しています。

したがって、これらの単語は、文脈によって異なる使用法があります。一般的には、「　　」と「　　」は、身体的な病気や傷を治療する場合に使用され、一方、「　」は、霊的な救済を含む広い範囲の意味を持っています。ただし、これらの単語は、文脈によって異なる訳語に翻訳されることがあるため、注意が必要です。

3.6.5　病気

Q. 聖書で、癩病、規定の病、ツァラアトなどと訳されている言葉の原語の意味は、どのようなもので、どのように、理解されて来たのでしょうか。

ChatGPT. 聖書で「癩病」と訳されている言葉は、ヘブライ語で「ツァラアト」(　)と呼ばれ、皮膚病や壊死、カビのようなものによって引き起こされる病気を指します。しかし、この言葉は病気そのものを指すだけでなく、精神的な不浄や罪の象徴としても使用されていました。

また、「規定の病」と訳される言葉は、ヘブライ語で「　」(　)と呼ばれ、不明瞭な病気や痛み、疾患を指します。

これらの病気や疾患を伝える聖書の文章は、現代の医学的な知識とは異なりますが、当時の人々にとっては、神が人々の健康を管理しているという信念に基づいて、これらの病気が神によって与えられる罰や試練であると考えられていました。

聖書の時代には、これらの病気は社会的な排除と関連しており、感染が広がらないように感染者は別の場所に移動し、特別な衣服を着用する必要がありました。これは、聖書の記述によれば、神によって命じられたものであり、特定の祭司によって管理されていました。

Claude+. 聖書で「癩病」、「規定の病」、「ツァラアト」と訳されている言葉は、原語では「ツァラアト」(　) を意味します。この語は旧約聖書でよく使用され、本来の意味はハンセン病を指します。

ハンセン病は古代イスラエルでは嫌われる病で、ツァラアトの人は汚れていると考えられていました。そのため、モーセの律法ではツァラアトの人は隔離され、社会から追放されていました。ツァラアトは罪の象徴でもあり、神からの罰だと信じられていました。

イエスの時代になると、ツァラアトの人は差別と偏見の対象でした。しかしイエスはツァラアトの人を癒し、隔離されていた人を社会に受け入れさせました。この事はイエスの愛と憐れみを示すものでした。

このように、ツァラアト (癩病) は古代イスラエルでの汚れや罪の象徴であり、隔離の対象となっていました。しかしイエスはこの考え方を覆し、ツァラアトの人を癒して社会に受け入れることで、神の愛を示したのです。こうしてツァラアトの意味は、汚れから愛へと変化していったのです。

Sage. 「癩病」や「規定の病」、「ツァラアト」などと訳されている言葉は、ヘブライ語の「　」(tsara'at) に由来します。

ツァラアトは、律法においては身体に現れる病気として扱われていますが、現代医学的な見解によれば、ツァラアトは単なる皮膚病ではなく、細菌感染や真菌感染、あるいは代謝異常などによって引き起こされる病気と考えられています。

ヘブライ語の「　」(tsara'at) の語源については諸説ありますが、一般的には「切り裂く」という意味の動詞「　」(tsara) に由来するとされています。この病気は、皮膚が切り裂かれたような症状を示すことがあるため、このように呼ばれるようになったと考えられています。

また、ツァラアトは、古代イスラエルにおいては、単なる病気ではなく、神が人間に対する懲罰として送る病気と考えられていました。そのため、ツァラアトにかかった人は、祭司によって検査され、清いかどうかが判断され、患部が広がらないように隔離されることが決められていました。このように、古代イスラエルの信仰と密接に関わっていた病気であったと言えます。

(2023.6.3)

Q. 福音書に記述のある　　規定の病、癩病などは、ハンセン氏病と同じなのでしょうか。当時は、この病におかされたとき、どのような生活をしていたと思われるのでしょうか。もし、聖書以外の記録があれば、文献とともに、それも教えてください。

GPT4.

（lepros）は、ギリシャ語で「らい病」を意味し、新約聖書の福音書には、イエスがらい病患者を癒したという記述があります。しかしこの用語が指す病気が、現代医学で言うハンセン氏病（ハンセン病）と同じかどうかは、完全には特定できません。らい病（　　）は、古代では広く皮膚病を指す用語であり、ハンセン病だけでなく、様々な皮膚病を含んでいた可能性があります。

当時のらい病患者は、病気が伝染すると考えられていたため、社会から隔離されることが一般的でした。彼らは、集落の外れや、専用の「らい病患者の集落」で暮らすことが多かったとされています。また、らい病患者は、自分の病気を他人に触れさせないために、特別な衣服を着用し、不浄とされた場所に近づかないように注意が払われていたとされています。

聖書以外の史料としては、ヨセフス・フラウィウスの『ユダヤ古代誌』や、タルムードなどがあります。『ユダヤ古代誌』では、らい病患者が隔離され、礼拝に参加できないことが記述されています。タルムードでは、らい病患者の扱いに関する法律や規定がいくつか記されています。これらの史料からも、古代社会においてらい病患者が厳しい隔離生活を送っていたことがうかがえます。

(2023.6.5)

3.6.5.1 旧約聖書における重い皮膚病（　）の記述

- 出エジプト 4:6 主はまた彼に言われた、「あなたの手をふところに入れなさい」。彼が手をふところに入れ、それを出すと、手は、重い皮膚病にかかって、雪のように白くなっていた。

- レビ記 13 章 1-59 1 主はまたモーセとアロンに言われた、2 「人がその身の皮に腫、あるいは吹出物、あるいは光る所ができ、これがその身の皮に重い皮膚病の患部のようになるならば、その人を祭司アロンまたは、祭司なるアロンの子たちのひとりのもとに、連れて行かなければならない。44 その人は重い皮膚病に冒された者であって、汚れた者である。祭司はその人を確かに汚れた者としなければならない。患部が頭にあるからである。 45 重い皮膚病の患者は、その衣服を裂き、その頭を現し、その口ひげをおおって『汚れた者、汚れた者』と呼ばわらなければならない。

- レビ記 14 章:1-32 1 主はまたモーセに言われた、2「重い皮膚病の患者が清い者とされる時のおきては次のとおりである。すなわち、その人を祭司のもとに連れて行き、3 祭司は宿営の外に出て行って、その人を見、もし重い皮膚病の患部がいえているならば、

- レビ記 22 章 4-7 アロンの子孫のうち、だれでも、重い皮膚病の患者、また流出ある者は清くなるまで、聖なる物を食べてはならない。また、すべて死体によって汚れた物に触れた者、精を漏らした者、または、すべて人を汚す這うものに触れた者、または、どのような汚れにせよ、人を汚れさせる人に触れた者、このようなものに触れた人は夕まで汚れるであろう。彼はその身を水にすすがないならば、聖なる物を食べてはならない。日が入れば、彼は清くなるであろう。そののち、聖なる物を食べることができる。それは彼の食物だからである。

- 民数記 5:2-4 主が王を撃たれたので、その死ぬ日まで、重い皮膚病になって、離れ家に住んだ。王の子ヨタムが家の事を管理し、国の民をさばいた。男でも女でも、あなたがたは彼らを宿営の外に出してそこにおらせ、彼らに宿営を汚させてはならない。わたしがその中に住んでいるからである」。イスラエルの人々はそのようにして、彼らを宿営の外に出した。すなわち、主がモーセに言われたようにイスラエルの人々は行った。

- 民数記 12:10 雲が幕屋の上を離れ去った時、ミリアムは、重い皮膚病となり、その身は雪のように白くな

った。アロンがふり返ってミリアムを見ると、彼女は重い皮膚病になっていた。

- サムエル下 3:28-29 その後ダビデはこの事を聞いて言った、「わたしとわたしの王国とは、ネルの子アブネルの血に関して、主の前に永久に罪はない。どうぞ、その罪がヨアブの頭と、その父の全家に帰するように。またヨアブの家には流出を病む者、重い皮膚病を病む者、つえにたよる者、つるぎに倒れる者、または食物の乏しい者が絶えないように」。
- 列王記下 5:1 スリヤ王の軍勢の長ナアマンはその主君に重んじられた有力な人であった。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利を得させられたからである。彼は大勇士であったが、重い皮膚病をわずらっていた。
- 列王記下 5:27 それゆえ、ナアマンの重い皮膚病はあなたに着き、ながくあなたの子孫に及ぶであろう」。彼がエリシャの前を出ていくとき、重い皮膚病が発して雪のように白くなっていた。
- 列王記下 7:3 さて町の門の入口に四人の重い皮膚病の患者がいたが、彼らは互に言った、「われわれはどうしてここに座して死を待たねばならないのか。 5:8 そこで重い皮膚病の患者たちは陣営のほとりに行き、一つの天幕にはいって食い飲みし、そこから金銀、衣服を持ち出してそれを隠し、また来て、他の天幕に入り、そこからも持ち出してそれを隠した。
- 列王記下 15:5 主が王を撃たれたので、その死ぬ日まで、重い皮膚病になって、離れ家に住んだ。王の子ヨタムが家の事を管理し、国の民をさばいた。
- 歴代誌下 26:16-23 ところが彼は強くなるに及んで、その心に高ぶり、ついに自分を滅ぼすに至った。すなわち彼はその神、主にむかって罪を犯し、主の宮にはいって香の祭壇の上に香をたこうとした。その時、祭司アザリヤは主の祭司である勇士八十人を率いて、彼のあとに従ってはいり、 ウジヤ王を引き止めて言った、「ウジヤよ、主に香をたくことはあなたのなすべきことではなく、ただアロンの子孫で、香をたくために清められた祭司たちのすることです。すぐ聖所から出なさい。あなたは罪を犯しました。あなたは主なる神から栄えを得ることはできません」。するとウジヤは怒りを発し、香炉を手にとって香をたこうとしたが、彼が祭司に向かって怒りを発している間に、重い皮膚病がその額に起った。時に彼は主の宮で祭司たちの前、香の祭壇のかたわらにいた。 祭司の長アザリヤおよびすべての祭司たちが彼を見ると、彼の額に重い皮膚病が生じていたので、急いで彼をそこから追い出した。彼自身もまた主に撃たれたことを知って、急いで出て行った。ウジヤ王は、死ぬ日まで重い皮膚病にかかっていたので、離れ殿に住んだ。主の宮から断たれたからである。その子ヨタムが王の家をつかさどり、国の民を治めた。 ウジヤのその他の始終の行為は、アモツの子預言者イザヤがこれを書きしるした。ウジヤは先祖たちと共に眠ったので、人々は「彼は重い皮膚病にかかった人である」と言って、王たちの墓に連なる墓地に、その先祖たちと共に葬った。その子ヨタムが彼に代って王となった。

3.6.5.2 中風

Q. マルコ 2 章 1-12 節に中風のひとが登場しますが、どのような病気だったと思われますか。

ChatGPT

マルコ 2 章 1-12 節に登場する中風の人物は、ギリシャ語の「　　（paralytikos）」という言葉で表されています。この言葉は、現代の英語でいう「paralytic（麻痺した人）」に相当する言葉であり、神経障害や脳卒中による麻痺を指していると考えられます。

当時の人々は、病気や身体障害を直接的な原因として、罪や神の怒りと結びつけることがありました。したがって、中風の人物がイエスによって癒されたことは、彼が罪から解放されたことを示す象徴的な出来事であったと捉えられることがあります。また、この物語は、イエスが身体的な病気や障害に苦しむ人々を癒すことによって、神の愛と慈悲を表現していることを示しています。

(2023.6.22)

3.6.6　愛する・愛

Q. コイネーギリシャ語の愛する（　　）という動詞の原語の意味は何ですか。

ChatGPT. 「　　」は、古代ギリシャ語で「愛する」という意味を持つ動詞です。この動詞の原義は、物事に価値を見出し、それを大切に扱うことです。このため、この動詞は神や家族、友人など、人々が特別な愛情を抱くものに対して使用されることが多く、単なる好きという表現よりも深い、真の愛情を表現する言葉として重用されていました。

Sage. コイネーギリシャ語の動詞「　　」(agapaō) は、「愛する」という意味を持ちます。この動詞の原語である古代ギリシャ語の「　　」(agapan) は、一般的に「価値を認める」「尊敬する」という意味でしたが、新約聖書の中で特に愛情や情熱を表す言葉として使われるようになりました。また、この動詞は、単に感情的な愛情だけでなく、行動による愛や奉仕の愛なども含んでいます。

Claude+. コイネー・ギリシャ語の動詞　　(アガパオ) は、「愛する」、「大切に思う」という意味です。

この語は新約聖書などでよく用いられ、高度な愛としての「アガペー」の概念を表しています。　　は単純な物理的・感覚的な愛よりも、相手を理解し、受容し、大切に思うという精神的な愛を意味しています。

　　の語源は不明ですが、おそらく「尊敬」「賞賛」を意味する語に関連があると考えられています。新約聖書の著者であるヨハネはこの語を神からの愛と人間同士の愛を表すのに用いています。

要するに、　　は高潔な愛としての「アガペー」の概念を表しており、物理的な愛よりも精神的、道義的な愛を意味する語でした。新約聖書の時代にはキリスト教の愛の考え方の中心概念となったのです。

(2023.6.3)

3.6.7　憐れみ

Q. 共観福音書で、特徴的な使われ方をしている、　　は、聖書以外の文献ではどのように使われているのでしょうか。もともとの意味はどのようなものなのでしょうか。

ChatGPT.

「　　」は、古代ギリシャ語で「内臓をかき混ぜる」、「心を揺さぶる」という意味があります。共観福音書では、この単語は主にイエス・キリストが人々に対して示した慈愛や憐れみを表現するために使用されています。

聖書以外の文献では、この単語は主に医学的な文脈で使用されており、内臓の病気や痛みを表現するために使われています。例えば、古代ギリシャの医学者であるガレノスは、内臓の疾患についての著書で「　　」という単語を使用しています。

しかし、共観福音書での「　　」の使用は、単純な医学的な意味を超えて、より深い感情や思いやりを表現するために用いられています。この単語を使うことで、人々がイエス・キリストの慈愛深い性格や神の恵みに触れることができるようになっています。

(2023.6.5)

3.6.7.1 深くあわれむ　　(　　)

聖書の中で 12 回（マタイ 9:36, 14:14, 15:32, 18:27, マルコ 1:41, 6:34, 8:2, 9:22, ルカ 7:13, 10:33, 15:20）イエスの奇跡などの特別の活動の前、または、譬の中でイエスまたは主を想起させる箇所で使われている。

- 憐れむ：（日本国語大辞典）i) いつくしむ。愛する。感心する。賞美する。あわれぶ。ii) 不憫に思う。同情する。また、慈悲の心をかける。恵む。あわれぶ。- 一般的な日本語の意味
- マルコ 1:41 - 今回の箇所、重い皮膚病のひとが、ひざまずいて「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」と言った時。
- マルコ 6:34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。マタイ 14:14 イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆をごらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの病人たちをおいやしになった。- このあとに、五千人の給食が続く。
- マルコ 8:2,3 「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。もし、彼らを空腹のまま家に帰らせるなら、途中で弱り切ってしまうであろう。それに、なかには遠くからきている者もある」。マタイ 15:32 イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。しかし、彼らを空腹のままで帰らせたくはない。恐らく途中で弱り切ってしまうであろう」。- このあとに、四千人の給食が続く。
- マルコ 9:21-24 そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。- イエスに深く憐れむことを願っている。
- マタイ 9:35-38 イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた。そして弟子たちに言われた、「収穫は多いが、働き

人が少ない。 だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」。 - マルコ 6:34 と表現が似ているが、異なる文脈に置かれている。

- ルカ 7:11-14 そののち、間もなく、ナインという町へおいでになったが、弟子たちや大ぜいの群衆も一緒に行った。町の門に近づかれると、ちょうど、あるやもめにとってひとりむすこであった者が死んだので、葬りに出すところであった。大ぜいの町の人たちが、その母につきそっていた。主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいる者たちが立ち止まったので、「若者よ、さあ、起きなさい」と言われた。- ナインで若者を生き返らせる
- マタイ 18:27 僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。- たとえの中で、一万タラント[*12]負債のあるものに対する王の言葉
- ルカ 10:33-35 ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。- 善きサマリヤ人のたとえの中
- ルカ 15:20 そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。- 放蕩息子のたとえの中での父

3.6.8 アラム語

3.6.8.1 新約聖書におけるアラム語の使用

- マルコ 3:17 またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。
- マルコ 5:41 そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。
- マルコ 7:11 それだのに、あなたがたは、もし人が父または母にむかって、あなたに差上げるはずのこのものはコルバン、すなわち、供え物ですと言えば、それでよいとして、
- マルコ 7:34 34 天を仰いでため息をつき、その人に「エパタ」と言われた。これは「開けよ」という意味である。
- マルコ 11:9,10 そして、前に行く者も、あとに従う者も共に叫びつづけた、／「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。
- マルコ 14:36 「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。
- マルコ 15:22 そしてイエスをゴルゴタ、その意味は、されこうべ、という所に連れて行った。

[*12] 1 タラントは、6000 ドラクメ（6000 デナリ相当）。1 デナリは一日の給料。

- マルコ 15:34 そして三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

3.6.9 イエスの裁判・処刑

3.6.9.1 裁判

Q. イエスの裁判を福音書の情報を総合して出来るだけ順序を考慮に入れてまとめてください。

Grok3 beta 応答 [2025.2.21]

3.6.9.2 処刑日

Q. イエスの処刑の年月日の推測を根拠とともにしてください。

Grok3 beta 応答 [2025.2.19]

3.6.9.3 復活

Q. イエスの復活の証言を四つの福音書からリストし同じ時と思われるものをまとめ出来るだけ時系列にし、ガリラヤかエルサレムかも考慮してまとめてください。

Grok3 beta 応答 [2025.2.22]

3.7 イエスとその時代

荒井献著の岩波新書（青版）909 からの抜粋。出版年は 1974 年と古く、岩波書店のホームページによると絶版である。荒井氏もこのあと何冊も著しているので、決定版からは程遠いとも思うが、よくまとまっているので、主として I. 方法と、II. 時代から、抜書する。また、海外の研究者の個別の視点・論点を述べた部分は、省略した。理由としては、私の個人的な理解がまったく欠けていることが大きい。おそらく、出版年以降での様々な研究上の進展もあるだろうし、個人的には、荒井献の主張も、根拠が十分ではないと思われる部分もあるが、おそらく、現在でも有力な説の一つだと思われるので、そのまま記す。

3.7.1 I. 方法

3.7.1.1 歴史的研究と方法

昨年（1973 年）の夏に私は、「最近のイエスの研究」と題する文章を『朝日新聞』の文化欄に公にした。これに対して読者から予想外に多くの意見が寄せられたことに驚いたものであったが、これらの中、キリスト者や仏教者の意見の大半が、イエスに関する歴史的研究それ自体に疑念を表明していたのである。彼らによれば、「イエス・キリスト」のような存在は、信仰を媒介として実存的にしか把握しえず、歴史的方法をもってしては、究極のところキリストを「物」に化してしまうのではないか、というのである。

他方、昨年から今年にかけて、イエスを素材にした文学作品、演劇、そして映画などが、例年になく多くわが国において公にされた。これらの中、遠藤周作『イエスの生涯』は、私どもとして見過ごすわけにはいかない。著者自身がこの作品を歴史研究の成果でもあると謳っているからである。

さて、この作品の中で遠藤は、イエスに関わる事実と真実を区別して、事実よりむしろ真実を前景に押し出す。このような立場は、文学者ならばある意味で当然とるべきものであろう。しかし遠藤が、イエスの復活は真実であるばかりでなく事実である（と少なくとも信じたい）のに対して、処女降誕は事実ではないが真実であり、奇跡行為は事実でも真実でもないと主張する時、彼は歴史に対して彼にとっての真実を押し付ける結果になるのではなかろうか。もしそうならば、むしろ歴史研究の衣を脱ぎ捨て、わたしの文章に批判的意見を寄せてくれた人々に習い、歴史的方法によってはイエスの真実は捕らえ得ない、と言い切った方が正直というものである。

いずれにしても、イエスのような存在に対しては歴史的方法によって接近することができないという人々の多くは「歴史」というものに対して予断と偏見を持っているように思われる。もっとも、このような事態を引き起こした責任の大半は、いわゆる「歴史学者」の側にあることは事実であろう。彼らもまた、資料の積み重ねだけで歴史とはならず、資料に対する歴史家の解釈を通して初めて歴史は再現されることを知ってはいる。しかし彼らの多くが、資料解釈は歴史の法則的因果関係を捉えるという科学的歴史叙述の目的に使えなければならないという立場に固執しているように思われる。私見によれば、歴史はとりわけそれが人間個人の歴史である場合、いかなる意味においても「法則」の中に押し込まれうるものではない。なぜなら、人間の固有性は他ならぬ「法則」を踏み越えたと所において露わになるものだからである。

以上の事柄に関連して注目すべきは、「歴史小説とはなにかー史実と虚構の間ー」と題する菊地昌典の論文である。菊地は自ら歴史家でありながら、あるいはそうであるからこそ、敢えて「詩人と歴史家は、けっして異母兄弟ではなく、シャム双生児なのである。」と言い切っている。すなわち、歴史家にとって、史料と史科とを結合して歴史を構築する際に不可欠な歴史解釈は、当然のことながら史料そのものの制約を受けるにしても、しかしそれは「詩人のイマジネーション」と決して異質なものではない、否、そうあってはならないのである。他方詩人は、もしも同時に歴史小説家でもあることを志すならば、「イマジネーションが歴史である」などといる幻想から自由になるべきである。歴史家にしても歴史小説家にしても、「過去は、過去として語らしめることによって、現在との対話が成立しうるのである。過去の衣装をまとった現代人の説法は、ただ、現代のありふれた説教にすぎない。しかも、その説教は巧妙にも、決して講壇の上から下をみおろす型をとるものではない」。

この発言は、現代の歴史家および歴史小説家に対する痛烈な批判である。もっとも私には、菊地が歴史叙述と歴史小説とをあまりにも接近させ過ぎているように思われる。私見によれば、菊地が歴史家に要請する「詩人のイマジネーション」は、歴史家の歴史叙述にとって必要な手段ではあるが、それ自体が決して目的であってはならない。歴史家の本領は何と言っても緻密な史料批判にあり、それを「歴史」に構成する「史観」の原基とも言わるべき想像力は、史料批判の結果によって常に制限される用意がなければならない。他方、歴史小説家にも「過去は過去をして語らしめる」という禁欲の精神が要求されるけれども、彼の生命は、作品を「創作」たらしめる想像力にかかっている。

いずれにしても、菊池が指摘しているもう一つの重要な事柄は、「史観」がそれを軸にして展開すべき「視座」の問題であろう。「重要なことは、どの階級のどのような人間、具体的な人間に焦点をあて、視座を設定するか、に

ある。私は、歴史の最下部によどむ人々こそ、もっともその時代相を刻印された人々ではないか、と考える。皮肉に言えば、この最下層の庶民こそが、もっとも歴史のはかなさを表層の動きとは別の次元で実体験している階層に当たるのではないか、とさえ思う。だが、この最下層から俯仰して歴史をみる姿勢を、史実によってうちかためる作業は、その庶民が無告の群れであることによって、不可能に近い。ここでは、史実の不足とイマジネーションの膨張が要求され、それがためにまた安易な階級的人物として描かれやすい。」

後で指摘されるように、イエス自身は「最下層の庶民」に属してはいない。しかし、彼の思想と行動は、私の見るところでは、徹頭徹尾この「庶民」との連帯を志向するものであった。この想定に基づいて、私は「イエス」を史実に復元する際に「庶民」に視座を設定するつもりである。もちろん、「無告の群れ」に言葉と状況を取り戻すことは「不可能に近い」。しかし、福音書の厳密な史料批判と想像力によって、「不可能に近い」事柄をいくらかでも可能性の領域に近づけることが、歴史叙述を試みる者に課された、苦しいけれどもやりがいのある仕事ではなかろうか。

さて、菊池が歴史家に要求する「詩人のイマジネーション」を、先に触れた私の小論に批判を寄せてくれた人々のいわゆる「信仰」に置き換えたら、またまた敬虔なクリスチャンの顰蹙（ひんしゅく）をかうことになるであろうか。実は私自身、右の小論の中で、まさにこの意味を込めて次のように書いておいたのである。「勿論、いかなる場合にも、歴史上の人物を現代に再現するためには、それを試みる人の優れた想像力（資料解釈）を必要とする。しかし、少なくともそれが歴史的になされる場合には、緻密な資料批判を踏まえなければならず、その成果によって想像力をいつでもチェックできる用意がなければならない。」それでも、信仰という真面目な事柄を、歴史家の、いわんや歴史小説家の想像力などというものと混同されては困る、といわれるかもしれない。しかし、イエスに関する最も重要な資料を私どもに提供している福音書記者たち自身が、まさに彼らの福音信仰を想像力に転化して『福音書』を創作しているのである。

このように書くと、今度は、「福音書は創作ではない」と言われるであろう。それならば、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書、それに最近発見されたトマス福音書を加えて、これら五つの福音書を相互に比較しながら読んでみるとよい。各福音書記者が同じイエスのことを書いているのに、各々の福音書に描き出されているイエス像は、確実に異なっているものではないか。このようなイエス像は、確実に異なっているのではないか。このようなイエス像の多様性は何に由来するのであろうか。その理由の一つに、各福音書記者によって採用されたイエスに関する伝承資料が異なっている事実があげられる。しかし、このことは決定的な理由にはならない。なぜなら、例えばマタイとマルコ（HS ルカ？）は、共通したイエスの語録資料に依りながら、全体として異なるイエスの言葉を、それぞれの福音書の中で読者に提示しているからである。とすれば、イエス像の多様性は、各福音書記者の史観と視座の設定点の相違から以外に説明のしようがないであろう。そして、この史観と視座の設定の仕方は、各福音書記者の信仰の持ち方、想像力の内実によって設定されているのである。このように見てくると、もし福音書を現代における文学類型にあてはめることを許されるとすれば、それは、「歴史記述」というよりは、むしろ「歴史小説」に近いのではないかと思われる。これは何も福音書に限ったことではない。古代や中世の歴史記述、例えばヘロドトスの『歴史』（ペルシャ戦争史）にしても、我が国の『鏡』文学にしても、現代の歴史よりは「歴史小説」に近いのである。そこでは、現代史学のいわゆる史料批判は必ずしも行われておらず、他方、歴史作家の信仰や道徳観に方向づけられた想像力の所産と思われる部分が極めて多い。

要するに私は、イエスに対して歴史的に接近する際に、信仰を排除すべきであるなどと思っていない。信仰が想

像力として機能する限り、それはイエスの史的復元にとって不可欠な要素である。問題は信仰の内実であり、その視座をどこに置くかということである。

3.7.1.2 「史的イエス」の問題

実は、今世紀の聖書学のみならず神学一般にとって最大の問題となった「史的イエスの問題」が、右に述べたことと深く関わっているのである。この問題は、ドイツの代表的新約聖書学者 R・ブルトマンが、原始キリスト教団の信仰にとって本質的な事柄は、彼らによって宣教されたキリスト、いわゆる「宣教のキリスト」であって、「史的イエス」では必ずしもない、と提言したことに端を発している。この提言は、資料批判によって客観的に史実を再建できると夢見た歴史主義の立場と、これに依拠して史実のイエスを信仰の根拠として要請したいわゆる「自由主義神学者」に対する痛烈な批判であった。他方においてこれは、原始キリスト教史家としてのブルトマンが自ら福音書に史料批判を試みた結果でもあったのである。すなわち、福音書記者たちが資料として利用した伝承そのものの中に、伝承形式の目的は伝承者の信仰に基づくキリストの宣教にあったのであり、彼らはイエスに対する「史的」興味を最初から持っていなかったことが確認される。そして、福音書記者たちはこの伝承を受容して、それぞれに固有な立場から「福音書」著作したのであるが、その際に彼らは、伝承者の宣教目的を前景に押し出した。それ故に、「史実のイエス」は「宣教のキリスト」の史的前提ではあるが、前者が後者を本質的に規定する事柄ではない、といういうのである。ー以下に、主としてブルトマンの系統に連なる聖書学者たちの「史的イエスの問題」をめぐる論争の経過を、本書の「方法」との関わりにおいて短く報告することにしよう。

問題は、原始教団の「宣教のキリスト」と「史実のイエス」とがブルトマンの主張する意味において断絶しているのか、それとも、ブルトマンの主張を生かしてもなおかつ継続しているのか、ということである。ここで確認しておくべきは、以下に紹介する学者たちはすべて、福音書記者における福音書執筆の目的、あるいは伝承者における伝承形式の動機を無視した上で、「没主体的に」「客観的に」再構成された「史実のイエス」には決別しているということである。そのような「イエス」は、現代史学の立場から見て存在しないのであろう。

（略）

わが国では八木誠一が「神の国」に直面して生きたイエスの実存理解は、「キリスト」にあって生きた原始教団の人々の実存理解の中に、彼らの復活信仰を通して間接的に伝達されたと主張する。（中略）彼によれば、人間実存の根底にはいかなる意味においても歴史の内にあってはならない。それは、超越的存在としての神であるが、同時にそれは、人間に対して歴史を超えながら人間実存をその中に生起せしめる「統合への規定」として働く。これをイエスは「神の国」の中に、そして原始教団の人々は「キリスト」あるいは（神の）「ロゴス」（言葉）の中に見出した。さらに、このような、人間実存を生起せしめる「本質原理」としての「統合への規定」は、元来普遍的なものであって、キリスト者のみならず、ーもちろん彼らとは違った形式においてではあるがーたとえば仏教者もまた知っていた。こうして八木は、「統合への規定」に即して生きた一人の例として『イエス』を私どもに提示したのである。

（略）

このような傾向に対して、激烈な批判を展開しているのが、我が国の最も個性的な聖書学者田川建三である。彼は元来、フランスの聖書学界では最もブルトマンに近く立つトロクメのもとで学んだのであるが、帰国後の赤岩

栄との出会い、大学闘争、キリスト教主義大学からの追放という経験と、彼独自の新約学およびマルクス研究の成果とが相俟って、既成のキリスト教、とりわけパウロ主義の中に「現実と観念の逆転」を見出し、キリスト信仰それ事態の止揚を提言する。田川によれば、イエスの言葉の神学的・実存論的解釈をもってしては、イエスを古代の歴史的文脈の中に位置づけることはできない。いわんや八木のごとく、「統合の規定」を視座に据えては、それがいかに論理的に整合していても、実際には、イエスを歴史から切り離して、その一般化・観念化を助長する結果となる。こうして田川自身は、エルサレムというユダヤの首都を中心にしてイエスの弟子ペテロの指導化に成立しつつあった原始キリスト教の主流に対し、ガリラヤという辺境における民衆の立場から批判を加える作業として「福音書」を創出したマルコの立場を高く評価する。そして彼は、このマルコの作業を彼なりに徹底する形で、イエスの言葉伝承を、奇跡物語伝承を媒介として、歴史的ひろがりの中に取り戻すことにより「逆説的反抗者」としてのイエスの生と死の再現を試みるのである。

私には、マルコが直接ペテロの指導下にある弟子集団を批判したとは思われないし、イエス自身に志向した「現実」がパウロによって「観念」に完全に逆転されたとも必ずしも考えられない。しかし、マルコとパウロとでは、イエスに関わるべくとられた視座に、明らかに相違があることは認められなければならない。私見によれば、マルコは死に極まったイエスの世に、それに対してはパウロは世の「低み」としてのイエスの死に、それぞれ視座を設定した。しかも、マルコは、大別すれば、イエスの言葉伝承と奇跡物語伝承に依っており、パウロはこれらの伝承系列とは必ずしも交わらない、イエスを「キリスト」と告白する「信仰告白伝承」に依っている。とすれば、マルコを始祖とする福音書文学を資料としてイエスに接近する際に、また、ブルトマン学派の多くに見られるように、パウロの視座に自らのそれを重ねることは方法論的に正しくないであろう。また、ブルトマン学派の描く『イエス』には、当時の社会的構造とイエスとの関わりが見事に落ちていることも、田川の指摘する通りである。これは、彼らが採用する実存論的方法が史的方法としては有効に機能しない証拠となるであろう。ただ、田川の場合、彼の立場から、ペテロやパウロのみならず、マルコ以前のイエスに関わる伝承をも批判の対象とする際に、伝承批判からイエスの思想を結論するに急で、伝承それ事態の歴史、伝承の担い手の変化、その背後に想定される社会的要因、とりわけ伝承史とイエスとの関係等についての緻密な考察に欠ける憾みがある。もう一つ、果たして田川のごとく、イエスをその生活の基盤においてのみ追体験することにより、換言すれば、そのような基盤の上に構築されたイエスの神信仰を批判的に止揚することによって、イエスの行動と思想を全体として理解できるのかどうかを問わなければならないであろう。この問題は本論に譲ることにして、ここでは伝承から史的イエスへ接近する方法の可能性を明らかにしておかなければならない。

3.7.1.3　福音書の伝承史

ブルトマンによれば、マルコ（６０年代）が採用したイエスに関わる伝承は、その「様式」に従って次のように分類される。

A. イエスの言葉

1. アポフテグマ（イエスの言葉に、伝承の過程で、言葉の語られた史的状況が、物語形式で事後的に付加されたもの）
2. 主の言葉（状況描写なしに、単独に伝承されたイエスの言葉）

B. 物語資料

1. 奇跡物語

2. 歴史物語

さて、マタイとルカ（共に７０－８０年代）は、右のＢの多くとＡの若干のものをマルコに負い、その他に両者共通してイエスの言葉資料（これをドイツ語で「資料」を意味する Quelle の頭文字をとって「Q 資料」と呼ぶ）を利用し、これらにマタイおよびルカに固有ないわゆる特殊資料を加えてそれぞれの立場から福音書を編集した。

ヨハネ（９０－１００年）は、右の A、B、および Q と重なる部分をも採用しているが、その多くは、おそらくＢの１と部分的に重なり、しかも、ヨハネの時代には文書として存在していたと思われる「しるし資料」に依っており、他方、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ福音書を、観点を共にする福音書とみなして「共観福音書」と総称する）の場合とはかなり様式を異にするイエスの言葉（たとえば「私は･･･である」という宣言定式、イエスの「離別の言葉」等）を利用して、共観福音書とは異質の視座から福音書を著作している。

（略）

さて、M・ディベリウスは、福音書の「様式史」的研究により、右にあげた伝承様式の背後に、このような種々の様式を生み出した伝承者の「生活の座」として、原始教団の意図的業を確認した。すなわち、Aの１およびBの１の背後に「宣教」、Aの２の背後に「教え」、Bの２の背後に「礼典」という、教団の「生活の座」があった、というのである。こうして、もしも伝承そのものが、教団の宣教、教え、礼典という意図的な業に仕える形で、その様式が形成され、それに内容が盛られ、言い伝えられて行ったとすれば、伝承は、教団の設立以前に活動したイエスとは、必ずしも直接的に連続しないことになるのである。

これに加えて、近年、福音書の研究に「編集史」的方法が導入され、伝承資料に対する核福音書記者の編集作業と編集の視座に見られる彼らに固有な思想が確認されている。さらに、近年になると、福音書伝承そのものーとりわけ Q ーの中に、伝承の担い手としての教団による編集部分を想定することにより、それを手がかりとして、いわゆる「Q 教団」の思想が明らかにされている（S・シュルツ）。このような研究の成果は、福音書を史料として試行されるイエス像の史的復元をますます困難なものにする。なぜなら、福音書のイエス像は、編集史的にみれば、各福音書記者伝承を担う各個教団に固有な視座から描き出されたイエスの諸像であって、それは必ずしもイエスの原像とは重なるものではないからである。

従って、以上のことを十分認識した上で、現在できる限り史的『イエス』を執筆しようとすれば、たとえばトロクメのように、右にあげた伝承の様式に準拠して、そのような伝承様式を担った集団のイエス像を並列的に書かざるを得ないことになるであろう。実際トロクメは次のような順序で『イエス』を描いている。『主の言葉のイエス』『アポフテグマのイエス』『物語伝承のイエス』『譬話のイエス』『奇跡物語のイエス』『公人としてのイエス』『イエスは誰か』さらにトルクメの採った方法の新しさは、譬話伝承を担った集団の背後に小市民層を、奇跡物語伝承を担った集団の背後に民間伝承の担い手としての農民層を、それぞれ想定していることである。しかし、彼は残念ながら、このような伝承者と特定の社会層との結びつきを、伝承様式の全体に至るまで徹底させていない。これが後に述べる私どもの方法の一つの課題となるであろう。

さて、このようなイエスの史的復元を試みる者にとっては極めて悲観的な福音書研究の傾向を踏まえながらも、なおかつイエスに対する史的接近への道を方法論的に切り開く可能性が少なくとも私には残されていると思うのである。

その一つは、田川建三が指摘するようにー編集史的方法によって確認されたマルコの史観が、その視座がガリラヤの民衆に据え、イエスの言葉伝承に、奇跡物語伝承を介して、史的状況をとり戻すことに仕えたとすれば、いずれにしてもマルコ福音書は、その成立年代が他の諸福音書に先行している事実からしても、イエスに史的に接近する史料として、比較的に信頼性に富むということである。

次にマタイ福音書は、イエスの教えを旧約の律法の完成とみなすマタイの視座から編集されたことが、編集史的研究によって明らかにされている。ところがこの福音書には、ユダヤ人としてのマタイに即するイエスの言行ーここにはユダヤ主義的傾向が強く出ているーと並んで、これとは全く逆の傾向を示すイエスの言葉、例えば、「汝の敵を愛せよ」というようなその史的信憑性を否定し得ないような言葉もそのまま含まれているのである。このことは、マタイ福音書がマタイ個人による強力な編集作業として成立したというよりも、むしろマタイが所属する教団内の諸処の立場を並置しながら、最終的にはマタイ自身がその視座から纏めようとした結果であるとみなすべきであろう。とすれば、マタイの編集作業からイエス伝承をとり戻すことによって、比較的に信頼性のある史料を確定していくことが、編集史的研究の結果、かえって可能になったことになる。

ルカ福音書の場合、ルカは神による救済の歴史の中心に「時の中心」として「キリスト」を据え、キリストの「十二使徒」によって担われたエルサレム原始教団の歴史の中に「真のイスラエル」の完成を見出しながら、「時の中心」から「原始教団の歴史」を質的に区別している。そしてルカは、このいわゆる「救済史観」から、イエスの個人志向性を、それに対して使徒たちの共同体（教団）志向性を、それぞれ質的に異なるものとして対照的に描き出す。もちろん、その際にルカは、例えば個人的志向性を示すイエスの言葉に、ルカに固有な共同体倫理の視座から手を加えて、福音書の中に編集している。しかしルカが「失われた一匹の羊」の譬話の原型や「よきサマリア人」の譬話のごとき、他の福音書にはない、しかも極めて信憑性の高いイエスの言葉を自らの福音書の中に導入することができたのは、ルカがとりわけイエスの個人志向性を強調しようとした結果なのである。

他方、ヨハネ福音書においてイエスは、十字架を通して天に挙げられた「栄光のキリスト」の「しるし」として描き出されている。そしてここでも、イエスの業はヨハネの解釈に基づく編集を経て再現されている。しかし彼は、幾つかの場合、イエスの業に関する伝承を原型のまま残して、その解釈を、ーヨハネの志向する方向にではあるがー福音書の読者にゆだねている。

最後に、トマス福音書には、トマスの思想をイエスに帰している言葉や、共観福音書に並行するイエスの言葉にも、トマスによる編集の手を加えられた部分がかなり多く認められる。しかしこの福音書には、少なくとも形式的には共観福音書の伝承とほとんど異ならない、あるいは、伝承史的にはそれよりも古い段階を示す言葉も保存されているのである。これは、トマスの目的がイエスの言葉の解釈をートマスの志向する方向にー読者に促すことにあるのだが、その解釈がトマスの手を加えなくても可能な場合は、イエスの言葉を伝承のままで提示した結果であろうと思われる。

いずれにしても、イエスの言行を伝承史的研究のみによって確定することは不可能である。伝承は、例えばその原型が復元されえたとしても、イエス自身が自らの言行に関する記録を残していない限り、彼の振舞の、伝承者

の振舞を通して行われたロゴス（言語）化であり、その意味で二次的だからである。このことは、特にイエスの言葉伝承に妥当するであろう。

とすれば、イエスの原像の史的復元を試そうとするならば、イエスの振舞の中で史的蓋然性の最も高い部分から問題を立て直さなければならない。十字架の史実性は、キリスト教以外の資料（F・F・ブルース）から見ても、まず否定できないであろうし、イエス伝承も、たとえそれが断片的に伝えられていたとしても、究極的には十字架刑に極まるイエスの振舞の「ロゴス化」であった。他方、イエスの奇跡伝承や、言葉伝承と全くその性質を異にする受難物語伝の古層から見ても、イエスがこの十字架刑に至る道として、当時社会的に差別されていた「罪人」と同行したこと、そして、そのような振舞が、この人々を差別することによって自らの社会体制を維持しえたユダヤの最高法院勢力と、その宗教的＝経済的拠点としての神殿を批判するに至らせ、ついにはその背後に立つローマ国家権力の介入せしめる結果を伴ったこともまた、史実として否定しえないと思われるのである。

従って、以上の前提からイエス伝承の史的信憑性を問おうとすれば、それが一方において伝承史的に最古の層に遡るか否かが、他方においてそれが十字架刑に極まるイエスの振舞に即応しているか否かが問題にされなければならない。そして、私どもには、この条件を満たしている伝承の古層に、比較的信憑性のあるイエス資料を見出すことが許されるのである。

3.7.1.4　歴史家のイエス研究

以上の方法論的成果を踏まえた上で、私どもは、最近の歴史家のイエス研究と、それに対する聖書学者たちの反応を検討しておくことにしよう。

（略）

以下において私は、できる限り厳密な史料批判によってイエスの伝承の古層を掘り起こし、これを史料として、この伝承を担った人々ー彼らはいずれにしても庶民層に属するーに視座を据えながら、十字架の死に極まったイエスの振舞に、この時代の歴史、とりわけ社会構造との関わりにおいて接近を試みるであろう。そのためには、まずイエスの時代の歴史的ー宗教史的諸相を全体として把握しておく必要がある。

3.7.2　II. 時代

3.7.2.1　イエスの誕生と没年

イエスはおそらくヘロデ王治世（BC37-4）の末期に、ガリラヤの町ナザレに生まれ、紀元後 30 年頃ユダヤの都エルサレムにおいて、ローマのユダヤ総督ポンティウス・ピラトゥスにより十字架に処せられたものと思われる。

（略）

次に問題になるのは、イエスの誕生地である。伝統的には、マタイ福音書 1—2 章とルカ福音書 2 章に従い、イエスはユダヤの町ベツレヘムで処女マリアから生まれたと信じられている。しかし、最古のマルコ福音書も、その大部分がマルコ福音書以前に書かれたパウロの手紙も、さらには福音書の中で最も後期に著されたヨハネ福音書も、ベツレヘムにおける処女降誕について何も証言していないのである。そればかりか、ヨハネ 7:41-43 では、イ

エスがキリストならば、ダビデ王の子孫としてダビデの誕生地であるベツレヘムから出て来なければならないのに、イエスの出身地はガリラヤである、と主張されている。他方、マルコ 12:37 のみならず、マタイ 22:46、ルカ 20:44 さえもが、イエスがダビデの子孫であることを否定しているのである。これらの箇所には、イエスが「人の子」または「主」として、すなわち超地上的存在と信じられており、イエスはたとえ「キリスト」であっても、ダビデ王の子孫に連なる単なる地上の王ではないという主張が認められる。しかも興味深いのは、マタイやルカの伝える処女降誕物語自体の中に、一方においてイエスが「ダビデの子」としてベツレヘムに生まれたという伝承と、他方においてイエスの超地上的存在として処女から降誕したという伝承が重なっていることである。もし、イエスが処女から生まれたのならば、どうしてイエスと、そしてマリアとも関係がないはずのヨセフの系図をダビデにまで遡らせる必要があるのであろうか（マタイ 1:1-16, ルカ 3:23-38）。もっとも、それをマタイは、ダビデを超えてアブラハムにまで、そしてルカはさらに神にまで遡らせているのであるが。このような処女降誕物語には、イエスを「ダビデの子」キリストとして信じる信仰が、おそらくそれに対するユダヤ教側からの批判に促されて、イエスを「神の子」キリストと信じる信仰によって超えられていく伝承の過程、あるいは福音書記者たちの編集の跡が認められる。従って、史実としては、全福音書が一致してイエスについて用いている術語「ナザレ人」あるいは「ナザレ出身者」を文字通りにとって、イエスの出身をガリラヤのナザレとみなすべきであろう。

いずれにしても、私どもにとって重要なことは、イエス時代の政治的・社会的・宗教的背景を、できうる限り正確に把握しておくことであろう。

3.7.2.2　政治的背景

ユダヤの南に隣接するイドマヤ出身の「半ユダヤ人」ヘロデは、その血統・権力欲・残忍な性格故にユダヤ人からは憎悪の対象とされていたが、彼の卓越した政治手腕によって親ローマ政策の功により、ローマ皇帝アウグストゥスから「盟邦の王」（rex socius）の称号と地位とを与えられて、約 30 年間、パレスチナ全域にその権勢を誇った。しかし彼の没後、この地域は、アウグストゥスの承認を得て彼の三人の息子に分割されることになる。すなわち、ユダヤとサマリアとイドマヤはアルケラオスに、ガリラヤとペレアはアンティパスに、イツリアとテラコニテを含む来たトランスヨルダン地方はフィリッポスにー。その際彼らには、父ヘロデの如く「王」の称号は与えられず、アルケラオスは「民族指導者（エスナルケース）」、アンティパスとフィリポスはそれより一段位の低い、「分封指導者（テトラルケース）」の称号を得るにとどまった。そして、アンティパスは紀元後 39 年まで、フィリポスは 34 年までこの地位を保ったが、アルケラオスは既に紀元後 6 年にユダヤから追放され、以後彼の領地はローマ皇帝直轄属州に編入され、「ユダヤ州」としてローマの総督（Praefectus または Procrator）によって直接治められることになる。

とすれば、イエスがその公生涯を送った時期（28/29-30 年頃）は、ガリラヤでは、ヘロデ・アンティパスの、ユダヤではローマ総督の治世下に当たることになる。イエスはその生涯の大部分をガリラヤで送ったのであるし、ガリラヤはユダヤに比較して、風土的にも社会的にも固有性を持っていたことは事実である。しかし、政治的・宗教的にガリラヤは、圧倒的にユダヤの支配下に立っていた。すなわち、政治的にはガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスもローマのユダヤ総督の傀儡に過ぎず、宗教的にはガリラヤも徹底的にユダヤ教化されていたのである。このことを念頭に置いて、私どもはまずユダヤの状況から考察していくことにしよう。

ユダヤとサマリアの領主アルケラオスは、度重なる失政、とりわけ彼のユダヤ教大祭司に対する弾圧政策と不法

な結婚の故に、たえずユダヤ人の反抗を受けていたのであるが、ついにユダヤ人の支配者（貴族祭司と大土地所有者）が不倶戴天の敵サマリア人と組んでアルケラオスを皇帝アウグストゥスに讒訴するに至った。皇帝はこれを受けて、アルケラオスのその領土内における財産を没収したうえで、かれをガリアに追放する。このようなユダヤ人支配層とローマ皇帝との容易な結びつきは一見奇異に思われるかもしれない。しかし、実はここで、両者の利害が一致していたのである。既に紀元前 4 年に、すなわち、ヘロデ王が没した年に、ユダヤの支配層は、ユダヤ教徒は神以外に王を戴かないという理由で、パレスチナをローマのシリア州に編入してもらうべく皇帝に願い出ていたのである。この種の請願は、表面的には宗教的にもっともらしさを装ってはいるが、しかし実際には、ユダヤ人の富裕層が自らの財産をヘロデ家の蚕食（〔カイコが桑の葉を食うように〕端から次第に奥深く他の領域を侵略すること。）から守ろうとする自衛手段であったのである。彼らの請願は実現しなかった。しかしこの度は、この種の請願が、無能な領主の仲介と中間搾取を経ずにユダヤ地方を直接支配下に置こうとしていたローマ側の利益とまさに一致することとなったのである。ローマ皇帝は、ユダヤ人支配層に信仰の自由とある程度の自治を認め、彼らの財産に保護を加えることを約束したが、実際にはアルケラオスの旧領地をシリア州に編入することはできず、むしろこれを、シリア州とならぶ皇帝直轄属州、いわゆる「ユダヤ州」にして皇帝の直接支配下に置いたのである。こうして、ユダヤ人の一部特権階級は皇帝の保護下に「平和」を享受したが、大部分のユダヤ民衆は、アルケラオスの治世下よりもまして、新しくローマ側からも課される重税に耐えざるを得ない窮状に陥れられたことになる。ガリラヤのユダが戸籍調査拒否をスローガンに一揆を起こしたのは丁度この年に当たるが、この問題については後にふれることにする。

これ以後、ユダヤ州はローマ総督によって統治されることになる。ポンティウス・ピラトゥスはユダヤ州の五代目の総督に当たり（26-36 年在職）、この時代になると皇帝はアウグストゥスからティベリウス（14-37 治世）に変わっていたが、ピラトゥスは、ローマでの皇帝以上の実権を振るっていた親衛隊長セヤーヌスの庇護をも得て、ユダヤ人に対して弾圧政策を貫いていたのである。

（略）

さて、ローマの総督がユダヤ州において所有していた最大の権限には徴税権があった。これは「戸籍調査」によって課せられる人頭税・地租の直接税と、移動税・市場税などの間接税から成っており、ローマの大商人「徴税請負人（ブプリカーニ）」によって、ー直接的にはその出先機関であるユダヤの「取税人」によってー徴収され、直接皇帝財庫（フィスクス）に入れられたのである。軍政面では、ユダヤ州総督は五つの「千人隊（コホルス）」からなる「補助軍（アウクシリア）」を掌握し、その中四コホルスを総督の常駐するカイサリアに、一コホルスをエルサレムに配していた。この他に、司法権としては、イエスの時代におそらく、政治犯に対する死刑執行権をもっていたはずである。そして、これらの職権以外の一切はユダヤ人の自治機関である「最高法院（サンヘドリン）」に委託されていたのである。

ユダヤ最高法院の頂点には「大祭司（アルヒエレウス）」が立っており、この職にある人物は「ユダヤ人の元首（プリンケプス）」といわれるほど絶対的権力を、少なくともユダヤの民衆に対しては掌握していた。大祭司職には、伝統的にはサドク家の子孫がついていたのであるが、ハスモン王朝時代（BC134-63）には王が大祭司を兼務し、ローマのポンペウスにより王制が廃止された（B63）以後も、またヘロデ家の治世中も、いずれにしても時の為政者の傀儡的存在ではあったが、ハスモン家の者が、この職をまもっていたのである。しかし、紀元後 6 年にアルケラオスの領地が皇帝直轄属州に編入された時点において、反アルケラオス運動の功績を認められたア

ンナス（サドカイ派の貴族祭司）が、シリア州総督クイリニウスによって大祭司職に任命され、以後彼はローマ当局の絶対的信任を得て、彼がこの職を下りた（AD15）以降も、五代の長きに亙ってアンナス家から大祭司が選ばれ、イエスの時代の大祭司カヤパ（AD18-36 在職）の時も、実際にはむしろアンナスが大祭司としての実権を握っていたのである。

いずれにしても、最高法院ではこの大祭司の下に八ないし十名からなる最高評議員会組織があり、その後世メンバーが「祭司長たち（アルヒエレイス）」または「役人たち（アルコンテス）」と呼ばれた。この職は貴族祭司と貴族信徒（いずれも大土地所有者）によって占められ、前者は神殿における祭儀執行の長を、後者は神殿守衛隊長と神殿財務管理の役目を果たしていたのである。しかも、大祭司が執務不可能な場合には、この役を神殿守衛隊長が代行することになっていた。もちろん、彼の本職は神殿守衛隊を統率することにあったのであるから、当時のユダヤにおいては宗教（立法・司法）と政治（行政・軍事）がいかに密接に結びついていたかが分かるであろう。他方、神殿財庫管理者はいわゆる「収穫の初穂」、さらに祝祭日毎に、ー特にディアスポラ（国外在移）のユダヤ人からー奉納される莫大な数に昇る貢物の他に、二十歳以上のすべてのユダヤ人から毎年徴収する神殿税（いわゆる「二ドラクマ」）を管理運営することにより、ユダヤ国内の財務を担当したのである。さらに、神殿に仕える祭司たちの生活を支えるために、下級祭司「レビ人」を遣わしてイスラエルに伝統的ないわゆる「十分の一税」を民衆から取り立てていた。その上に、なお東方にあってローマ帝国と対峙していたパルティア王国とユダヤ当局との間には親交があり、パルティア王国からユダヤ神殿にかなりの貢物が搬入されていた、と言われる（C. コルペ）。

最高法院は大祭司を頭として彼の他に七十人の議員によって構成されている。それは、右の祭司長たちまたは役人たちの他に、「長老たち」と「律法学者たち」から成っていた。前者は貴族信徒（大土地所有者）、後者は主として小市民層の利益を代表する。そして、前者が与党的、後者が野党的性格を持ち、前者の多くが「サドカイ派」に属し、後者の中の同志的結合グループに、有名な「パリサイ派」があったのである。

3.7.2.3　サドカイ派とパリサイ派

サドカイ派の呼称は、イスラエルにおける最古・最大の大祭司「サドク」に由来するといわれる。また、一説によるとこの呼称は、「義を行使する」意味のヘブライ語「サドゥク」に遡るとも言われる。いずれにしても彼らは、伝統主義・保守主義の立場をとり、「モーセ律法」ないしは「モーセ五書」のみを聖文書として、ここに認められない、あるいはこれ以後の時代に成立したと言われる新思想ー例えば律法の敷衍解釈による法の細則・天使論・復活思想などーを一切認めなかった。もっとも、政治的には、彼らがユダヤ社会の経済的上層と密着していただけに、外国支配勢力に対しては一般的に協調策をとっている。そのために、たとえば復活思想の否認は、当時における世界体制の思想であるヘレニズム・ローマ思想を受容した結果であるとも説明できる。その意味で、サドカイ派の保守的国民主義は自由主義として機能することもできたのである。実際この派は、紀元前 66 年にはローマ軍から神殿祭儀を守り、信教の自由を確保して確保してはいる。しかし、イエスの時代には、ローマの傀儡的存在であったアンナス家の大祭司、祭司長たち、長老たちと密着することにより、体制を思想的に擁護する役割を果たしていたのである。

これに対して、「パリサイ派」は「分離者」を意味するヘブライ語「ベルーシーム」に由来すると言われる。彼らは実際、律法を守らない者、いわゆる「地の民（アム・ハ・アレツ）」の不浄から自己を「分離する」ことによって、

宗教的清浄の理念を世俗内に貫徹し、その場を彼らの同志的結合「ハーベール」の中に形成していった。その際、彼らがとった手段は「律法」の敷衍解釈であった。その目的は元来、古き律法からその「理念」（ラティオ）を取り出し、それを解釈することに依って新しい時代に生かそうとする、律法のいわゆる「合理化」（ラティオナリジールング）にあったのである（M. ヴェーバー）。彼らが、サドカイ派と違って、天使論や復活信仰を積極的に受け入れたのも、モーセ五書に固有な「神の使い」（天使）の概念や一元的人間観を、ペルシアから導入された新思想や、マカベア戦争（対シリア解放戦争（BC168-164））による殉教者の排出という新事態に即応せしめて解釈した結果なのである。このような法理念の現実的解釈に依拠する彼らの合理主義は、他国支配勢力に寄りかかった法の精神を曖昧にするサドカイ派、また、法を遵守しない「地の民」から自らを分離しただけではなく、マカベア戦争時代にともに「敬虔派」（ハシーディーム）としてシリアに対する抵抗運動を担ったかつての彼らの同志、いわゆる黙示文学的ラディカリストたちからも袂を分かっていた。このラディカリストたちはー後述するように彼らの中にも種々の分派が存在するがー終末の時に救世主（マスーアハ（メシア）＝キリスト（ギリシャ語）、本来は油注がれた者、つまり「王」の意）によって導入される神の国の故に、現実における一切の政治的・宗教的妥協を拒否し、その結果として霊的熱狂に基づく予言活動を行っていた。これに対してパリサイ派は、預言者の時代は既に終わったという認識に立ち、法理念のこの世における貫徹の中に神の国の建設を期待したのである。その結果、律法とその解釈に基づく細則を守らない者は救われないという、いわゆる律法主義に陥る傾向は十分にあったが、この傾向が前景に出てくるのは紀元後 70 年以後に、この派がユダヤ教正統派の位置についた以後のことであって、イエスの時代にこの傾向を読み取ることについては、慎重でなければならない。なお、主としてパリサイ派出身の律法学者たちは、「教師（ラビ）」と呼ばれて、ガリラヤを含む地方の各地に設立された「会堂（シュナゴーゲー）」で礼拝を司どり、民衆に律法の教育を与えた。最高法院においては、長老たちが保守勢力を代表したのに対して、彼らは都市（主としてエルサレム）の小市民階級を背景に革新勢力を代表した。彼ら自身多くの場合その日常生活においては、皮鞣（なめし）工・天幕作り、大工などの手工に携わっていたのである。

3.7.2.4　社会構造

以上のごとく、ユダヤの最高法院は、社会的には貴族祭司と大土地所有者、および手工業者を中心とする小市民層との利益代表者によって構成されており、サドカイ派とパリサイ派は、それぞれの社会層の存立を宗教的に正当化する役割を果たしていたのである。しかし、当然のことながら、ユダヤ社会全体は、最高法院にその利害を直接反映しえない、圧倒的多数の民衆によって支えられていたのである。もっとも、これらの民衆の声はある程度パリサイ派の律法学者を通してユダヤ支配層に通じたであろうことは否定できない。パリサイ派の中には、たとえばヒルレルのごとき「地の民」出身者も少数ではあるが存在していたからである。しかし、民衆は全体として、経済的にはローマ当局者、大土地所有者による搾取の対象とされ、宗教的社会的にはパリサイ派などにより明らかに差別の対象とされていたのである。

まず注意しなければならないことは、イエスの時代のユダヤではまだ大土地所有者と大商人とが分離していなかったという事実である。たとえば、大土地所有者は彼らの広大な土地にバルサム材や棕櫚の木を植え付け、これからとれる高価な薬品や香料を輸出することによって莫大な利益をあげているだけではなく、小麦をまでー国内の需要にさえ十分ではなかったにもかかわらずー彼らの利益のために輸出の対象としていたのである。他方彼らは、国内においては、穀物の買い占めを手段とする投機によってあくどい商売をしている。穀物の隠匿が行われたことは箴言１１：２６からも既に明らかである。「穀物を、しまい込んで売らない者は民に呪われる。それを

売る者の頭には祝福がある」。これがラビ文献になるとーラビたちの多くが小市民層に属していた。ー彼らに対する怨嗟（えんさ）の声に満ちている。例えば、

> 祭り（仮庵の祭り）の最終日の夕方になると、すべての人々が煙を見上げた。それが北方にたなびいたら、貧乏人は喜び、土地所有者は悲しんだ。なぜなら、その年には多くの雨が振り、穀物（隠匿されても）腐っ（てしまっ）たからである。煙が南方にたなびいたら、貧乏人は悲しみ、土地所有者は喜んだ。なぜならその年には降雨が少なく、土地所有者が穀物を隠匿し（しまておくことができ）たからである。

こうして、大土地所有者たちは豊作の年には穀物を隠匿しておくことができず、それを法外な安値で放出セざるを得なかったのであるが、しかし、これは同時に余剰穀物をほとんどもっていない小農民にも不当な安値で穀物を売ることを強制する結果を伴ったのである。

このような状態において、とりわけ古代においては穀物の生産が自然条件に大きく支配されていたのであるから、市場価格を一定の額に保つことは問題にならなかったのである。例えば、イエスの時代、穀物四セアの通常値段は一セラ（＝一デナリ）であった。具体的に言えば、バケツ一杯ほどの穀物の値段は、日雇い労働者一日分の平均給与に当たる一デナリであった。ところが、凶作の年には、これがその十七倍にはねあがって入るのである。しかも、エルサレムの市場管理者は、最高価格を押さえることはせずに、購買量を制限しているのである。

このような大農場経営に立脚する、いわゆる古代資本主義経済機構は、ローマ市民共同体から巨視的に見れば、奴隷を含むいわゆる「外人（ペレグリーニ）」に対する、ーそしてこれを属州ユダヤの自治共同体から見れば、小農民に対する経済的搾取によって成り立っていたのである。ユダヤの農民は、ーそれが大土地所有者に雇用されている小作人ではなくー小土地を私有する独立自営農民の場合でも、多くの場合、その農具を大土地所有者からの借金によって購うか、あるいは彼らから一定の額で現物を貸与されるかして、農業を営む状態に置かれていた。しかもその借金ないし借財には、律法で禁止されているにもかかわらず、実際には利子がつけられたことは、ラビ文献でも福音書でも（マタイ２５：２７）確認されている。

このような状態において、ある程度生活条件を安定させるためには、小農民は、通常家内手工や小規模な家畜（主として羊）の飼育、そしてガリラヤでは漁業を営んでいた。しかし、それでも生活を維持しえない悪条件のもとでは、土地を放棄して自ら小作人になるか、町に出て日雇い労働者となるか、あるいは負債奴隷となるか、女子の場合は春をひさぐか、いずれの道を選ばざるをえなかったのである。もちろん、ユダヤにおいて奴隷はー他のローマ所属州の場合とは異なってー七年毎に来る安息年には自動的に解放されるという掟があったので、彼らは比較的に人道的扱いを受けていたはずである。しかし、実際にそして完全にこの掟が守られていたことは疑わしく、また、たとえそれが遵守されていたとしても、解放後に自ら進んで再び奴隷となった、あるいは奴隷とならざるを得なかった例も確認されているのである。特に、このような状態にある農民が不具者となったり重病に取りつかれた時には、大商人に独占されている高価な薬品を入手することはほとんど不可能な彼らにとって、その悲惨さは極に達したはずである。

もちろんここでも、ユダヤには、古代社会においては例外的に、貧民救済組織があった事実があげられるであろう。しかし、この組織が有効に機能していた例証を私どもは確かめることができないのである。また、たとえこのような救済組織に一定の評価を与えたとしても、ユダヤ社会においてーもちろん貧者からみてー最悪の事態は、小家畜飼育者、日雇労働者、売春婦、奴隷、不具者、病人、ーしかも彼らの多くが農民層からでていたので

ー小農民それ自体が「地の民」として、他方においては大土地所有者に怨嗟の声をあげているラビたち自身によって、宗教的＝社会的な差別の対象とされていたことである。そして、その理由は要するに、ラビの側から見れば、彼らが律法を守らないことにあった。しかし、事実は彼らは律法を守らないのではなく、それを守ることができなかった、あるいは守ることができない状況に置かれていたのである。つまり彼らはローマ当局から人頭税と間接税を徴収され、ユダヤ自治機関からは神殿税（これは貧富の差なく一律に課された）と十分の一税を課されており、後者はたとえこの時代には文字通りに実行されていなかったとしても、なおその上に大土地所有者による投機の被害をもろに受ける状態に立たされていた時、右のような生活状態をとらざるをえなかたことはむしろ当然であろう。それをラビたち、とりわけパリサイ派が宗教的差別の対象としたことは、宗教が政治・経済と密接に結びついていたユダヤ社会において、たとえ彼らが貴族祭司・大土地所有者の政治・経済政策を激しく批判したとしても、全体としては、社会の流動化を阻止し、その固定化を宗教的に正当化することによって、結果としては現代社会体制をイデオロギーで補完する役割を果たしていたことになるであろう。

ただ、ここで注意すべきは、イエスの時代、祭司と民衆の間に社会層上の区別は必ずしも明確につけられないという事実である。貴族祭司が同時に大土地所有者兼大商人であり、最高法院の頂点に立ってユダヤ自治組織の体制を動かしていたことは既に述べた通りである。しかし、一般祭司たち、とりわけ下級祭司、いわゆる「レビ人」たちは、むしろ小農民と同列の、あるいはそれより低い経済生活を余儀なくされていたのである。当時、エルサレム神殿には約八千人の祭司たちと約一万人のレビ人たちが仕えていたといわれるが、その中、約八千人の祭司たちとレビ人たちは、年に交代で一、二ヶ月だけ神殿に奉仕し、その他の期間は多くの場合、地方において一労働者として食いぶちを得ていたのである。ヨセフスによれば、ある時祭司長たちが、祭司たちの脱穀場に僕を遣わして、祭司たちから十分の一税を持ってこさせたが「祭司の中資力を失った者たちは貧困の中に死んでいった」といわれている（ユダヤ古代史２０・１８１）。他方ラビ文献にも、実際に下級祭司たちが十分の一税を求めて農民の脱穀場に這い蹲（うずくま）り、それを得られない時には、自ら農民に雇われ、羊番等の労働を提供し、それを十分の一税に替えた例が記録されている。従ってこの時代には祭司層の間にも階級的ギャップが生じていたのである。

いずれにしても「持てるものは与えられ、持たざるものは持てるものまでも取り上げられるであろう」という福音書（マルコ４・２５、マタイ２５・２９、ルカ１９・２６）にも収録されている格言は、当時の社会の仕組みを実によく言い当てている。

さて、次には、このようなユダヤの社会構造を踏まえた上で、ユダヤ教の非主流的分派の形成を概観してみることにしよう。

3.7.2.5　ユダヤ教非主流派

紀元後 66 年から 70 年まで続いた第一次ユダヤ戦争において対ローマ解放運動を最も積極的に担ったといわれる「ゼロータイ」（熱心党）の内実は極めて複雑で、それだけに仮説も多く、それらをすべて系統立ててここに述べることはできない。

まず、この戦争の担い手は、大祭司アナニアの子エレアザル、下級祭司を代表するシモンの子エレアザル、ガリラヤの民族派ギスガラのヨハネ、さらに戦争末期に至っては、奴隷解放のプログラムをさえ持っていたギオラの

子シモンに代表されるセクト、これに加えて、アナニアの子エレアザルとエルサレムにおいて壮絶な内ゲバを繰り返した末に、その指導者メナヘムを失ったが、その後マサダに拠って７３年の全員自害に至るまで戦いを貫徹したシカリ派によって代表されるであろう。そしてマサダの戦（７３年）には後述のエッセネ派も加わっていたことが最近の発掘でほぼ明らかにされているのであるから、この第一次ユダヤ戦争は、これに消極的にしか加わらなかったパリサイ派と、おそらく参加を避けたと思われるキリスト教徒を例外とすれば、ユダヤからガリラヤに至るユダヤ人社会の各層によって担われたっことになる。彼らは、ローマから独立を勝ち取るという一点において結集したのであり、その意味において彼らのイデオロギーの中に黙示的ユダヤ民族主義をはっきりと読み取ることはできるのである。しかし、その具体化が新祭司体制国家か、メシア国家か、あるいは社会革命のプログラムまで含むものなのかによって対立し、緒戦において博した予想外の勝利も束の間のこと、ローマ軍の優勢もあいまって、自滅の運命を辿ることになったのである。

いずれにしてもこの中で、イエスの故里ガリラヤとの関連で注目すべきはシカリ派の場合であろう。すなわち、マサダの戦いを指揮したエレアザルは、エルサレムで殺害されたメナヘムの親類であるといわれ、このメナヘムは、ユダヤーサマリアーペレアのローマ皇帝管轄属州への編入に際し試行された戸籍調査（６年）に、これに反対して一揆を起こしたガリラヤのユダの息子であったといわれている。しかもユダは、既にヘロデ王の治下にガリラヤで反乱を指導したーヨセフスのいわゆるー「盗賊」の首領ヘシキアの息子とみなされている。このようにガリラヤのユダ一家が一貫して反ローマ・反体制運動に関わっていただけではなく、既に述べたように、ギスガラのヨハネもユダヤ戦争には、はるばるガリラヤから農民を率いて参加しているのである。このヨハネが信奉したイデオロギーについては何も詳しいことはわかっていない。しかし、ガリラヤのユダについては、彼がパリサイ派のサドクと共に一揆を起こしたこと、彼の息子メナヘムがメシアを自称したこと等から、一般的にパリサイ派のさはとみなされてきた。しかし最近になって、その黙示的ラディカリズムをむしろエッセネ派の左派とみなされてきている（K・シューベルト）。しかし、いずれにしてもヨセフスによって「盗賊」と名付けられた一揆や反乱の多くが、ユダヤ戦争勃発の６０年以上も以前に、しかもそれがユダではなく、他ならぬガリラヤで続発した理由はまだ十分に明らかにされていないのである。

この問題との関わりにおいてガリラヤの風土的特色がーたとえば田川建三によってーあげられている。ガリラヤはユダヤの北方に隣接するサマリアの、さらに北部に位置し、ユダヤ教の中心であるエルサレムから見れば、地理的にも辺境といえる。この地は元来北イスラエル王国に属していたが、紀元前７２２（または１）年にサマリアとともにアッシリアの属領となって以来、アリストブロス一世の治世（前１０４－３）にユダヤのハスモン王朝の支配下に置かれていわゆる「ユダヤ化」されるまで、約六百年の間絶えず外国の支配下にあって、ユダヤとは隔絶されていたのである。「異邦人のガリラヤ」（マタイ４・１５）という呼称には、この地が、この地が地理的だけではなく精神的にも辺境にあるという意味が含まれているであろう。このような精神的風土を背景として、ガリラヤ人には反ユダヤ的ー反都市（エルサレム）的傾向が現出するのだ、といわれる。しかし、これだけでは少なくともガリラヤのユダ、とりわけその子メナヘムの熱狂的メシアニズムを説明することはできないであろう。彼らはむしろ辺境に位置したが故に、中央のユダヤ人以上にユダヤ人的であろうとしたのではなかろうか。

他方ガリラヤは、ギリシャ植民市「デカポリス」を東に控えているのみならず、領主ヘロデ・アンティパスが自らティベリウス帝に因んで名付けた首都ティベリアスを中心として、慎重にではあるが、しかし積極的にガリラヤのヘレニズム・ローマ化政策をとっている。その上、シリアのダマスカスから地中海のカイサリアに走る「海

の街道（ウィア・マリス）」がここを貫通していたために、交通・商業が発達し、ゲネサレ湖を中心とする漁業にも地の利を得ていた。この湖の西北岸は、なだらかな岡に囲まれた牧草地帯で、パレスチナには珍しい亜熱帯性気候に恵まれていたのである。要するにガリラヤは、ユダヤに比して明らかに自然条件に恵まれていたのである。事実、ユダヤはガリラヤなしには経済的になりたたなかったといわれており、エルサレム在住の貴族祭司、大土地所有者は、その土地の多くをガリラヤに持っていたことは当然予想されるであろう。そして、律法学者、パリサイ派の人々は「ラビ」としてガリラヤの諸会堂を支配していた。ユダヤで土地を失った農民たちがガリラヤで漁夫等の職を求めたことも考えられるであろう。このような事情のすべてが重なって、ガリラヤから「盗賊」あるいは「ゼロータイ」の先駆者が排出したと見てさしつかえないのではなかろうか。

さて、パレスチナにはもう一つユダヤ教の分派があった。一時代を遡ってマカベア戦争の頃、元来はパリサイ派と同様に敬虔派（ハシディーム）に属していたが、戦後、新体制の担い手となったハスモン家から大祭司が出たとき、これを拒否し、イスラエル宗教に伝統なサドク家出身者を大祭司に奉じて荒野に逃れ、この地で、彼らに固有な暦（祝祭日と安息日が重ならない太陽暦）に従って、徹底的な律法遵守と旧約聖書のいやゆる「ナジル派」（民数記 6:1-12）の理想実現を計った祭司たちのグループがあった。これが「エッセネ派」とよばれるユダヤ教の分派である。一方、死海の西北岸にいわゆる「クムラン教団」が存在し、かれらが「死海文書」を所有していたことが最近の本文発見と遺跡の発掘によって明らかにされている。そして、この教団がおそらくエッセネ派の一形態であろうことはほぼ間違いないと思われる。ここでは、厳格な宗規に即する徹底した律法生活と、同時に神の恵みに対する絶対的信頼に基づいて信徒相互間に実践さるべき愛の倫理が強調されている。しかも、この中で神の計画が更新され、世界の終末に関する神の予言が実現されるという確信が持たれた。

（略）

以上のごとき、ユダヤ教の主流・反主流いずれにも同定できない、いわゆる「人の子」の来臨を期待する黙示文学者の集団も存在したと思われる。「人の子」の表象は、再びハシディズム運動の担い手によって創出された『ダニエル書』（7 章）に遡り、これを展開した黙示文学には『エチオピア語のエノク書』、『第四エズラ書』、『シビュラの託宣』（第五巻）が存在している。なかでも、紀元後一世紀に成立したと思われる『エノク書』においては、神話的「人の子」像の中に王としてのメシア像が吸収されているのであるが、注意すべきはここで人の子が「虐げられたる者の希望」とみなされている限り、イザヤ書 61:1（66:2）の意味における「貧しい者」に対する「福音」の告知者に近い表象をともなっていることであろう。しかも、これらの黙示文学には多くの素材が神殿と関係ある諸表象から採用されている。とすれば、このような黙示文学を担った社会層は、地方にあって貧しい生活を強いられた下級祭司以外に考えられないのではないだろうか。

最後にサマリアについて一言しておく。サマリアは、ガリラヤとユダヤの丁度中間に位置するが、この地域はガリラヤとともにアッシリアの一属州に編入されて依頼、イエスの時代に至るまで百年余の間、ユダヤとはほとんど接触がなかった。そのためにここでは、その起源をユダヤ教と共有するが、しかし、ユダヤ教徒は異なる独自の宗教、いわゆる「サマリア教」が成立したのである。すなわち、サマリア人は旧約聖書の中でも、モーセ五書だけを彼らの経典とみなし、エルサレム神殿を拒否して、彼ら独自の神殿をゲリジムに奉じ、「メシア」でも「人の子」でもなく、「預言者」の来臨を待望したのである。そのために、ユダヤ教徒とサマリア人との間には争いが絶えず、ガリラヤ人やユダヤ人がサマリアを通ることさえほとんど不可能なほどであった。ローマ帝国の側から見れば、サマリアもユダヤとともに「ユダヤ州」の一部であったにもかかわらずである。

イエスはこのような時代に、その生涯の大半をガリラヤで過ごし、晩年にエルサレムに上り、この地でローマの極刑「十字架」刑に処されて没したのである。

3.7.3　III. 先駆

イエスが「洗礼者」と呼ばれたヨハネから洗礼を受けたこと（マルコ 1:9-11, マタイ 3:13-17, ルカ 3:21-22, ヨハネ 1:29-34）の史実性は否定できないであろう。四つの福音書における洗礼者ヨハネに関する証言から総合的に判断すれば、ヨハネの死後に形成されたヨハネ教団と、イエスの死後に成立したキリスト教団とが一種の競合関係にあたことは事実とみなさざるをえず、私どもがこれから検討するイエスの受洗以前のヨハネに関する記事（マルコ 1:2-8, マタイ 3:1-12, ルカ 3:1-18, 1:5-25, 57-80, ヨハネ 1:6-8m 15, 19-28, 3:22-36, その他）にも、このような関係が反映しているのである。そして、この事実が確認されればされるほど、イエスがヨハネから洗礼を受けたということ、すなわちイエスが、たとえ短期間であったとしても、ヨハネの思想的影響下にあったということは、ヨハネ教団と競合関係にあったキリスト教団にとっては不利な事柄であったはずである。

（略）

3.7.4　IV. 民衆と

3.7.4.1　1 ヨハネとイエス

3.7.4.2　2 奇跡物語伝承

3.7.4.3　3 イエスの言葉伝承

3.7.4.4　4 イエスをめぐる人々

3.7.4.5　5 イエスの譬話

3.7.4.6　V. 権力に

ユダヤの権力機構を政治的に掌握していたのは、最高法院の構成員から見ても明らかなように、貴族祭司と大土地所有者（大祭司ー祭司長たちー長老たち）であった。しかし、これを究極的には合法化する機能を果たしていたものが、民衆の指導者と言われた律法学者たち、とりわけパリサイ派であった。そして彼らは、いずれにしても自らの振舞を律法に依拠せしめていたのである。従って、この律法にイエスがどのように関わったかということを見据えておくことが、権力に対するイエスの振舞を考察する出発点となるであろう。そこで私どもはまず、有名な「山上の垂訓」を素材にして、イエスの律法に対する姿勢を明らかにしてみよう。

3.7.4.7　1 律法

いわゆる「山上の垂訓」は、マタイ５：１以下、ルカ６：２０以下に記されており、ルカ福音書のほうが、多くの場合、マタイ福音書よりも「垂訓」の原型に近いのである。そしてこのことは、「幸い・・・」で始まる「垂訓」冒頭のイエスの言葉（マタイ５：３－１１，ルカ６：２０－２３）にも妥当する。ここでは、これらの記事の比較から伝承の原型を復元する手続きを一切省略して、復元された原型のみを提示すると、次のことくなるであろう。「貧乏人は、幸いだ」（ルカ６：２０ａ、マタイ５：３ａ)。「飢えている者は、幸いだ」（ルカ６：２１ａ、マ

タイ５：６ a)。「ないている者は、幸いだ」（ルカ６：２１ c、マタイ５：４ a)。

わたしはこれを、「貧乏人、飢えている者、泣いている者」に対するイエスの慰めの言葉とはとらない。なぜなら、このような人々が幸いでないことを最もよく知っていたのが、他ならぬイエスであったからである。とすれば、この言葉は明らかに逆説的意味を込めて語られたものであろう。すなわち、例えば「地の民（その多くが貧乏人であり、彼らは飢え、泣いていた！）にパンを与えたこの私は災だ」と、飢饉の時に行ったという一人のラビの、まさに逆のことを、イエスはここで発言しているのである。さらには「律法を知らないこの群衆は呪われている」（ヨハネ７：４９）と言ったパリサイ人に対して、イエスは、そのような群衆こそ幸いだ。と言い切ったのである。つまり、ここでもイエスは律法に基づくユダヤ人の価値観を逆転している。それ以外のことをこれらに読み込むべきではない。

（略）

3.7.4.8　2 安息日

ユダヤの権力を支えたイデオロギー（ユダヤ教主流派の見解）の基準とされた律法が、民衆の日常生活に最も具体的に関わってきた形の一つに「安息日」の戒めがある。安息日は元来、古代イスラエル農民の農耕生活における休息日に過ぎなかったものである。しかし、それが創世記の天創造神話（１：１ − ２：４）に取り入れられ、後期ユダヤ教の時代になると、創世記２：４に対する律法学者たちの解釈によって、夥しい数に上る極めて煩瑣な「安息日禁止条項」が作られていた。そして、これが逆に民衆の生活を圧迫する結果になっていたのである。次の記事では、人間があたかもそのために存在しているかのごとき安息日の機能の機能の仕方が問題にされている。

（略）

3.7.4.9　3 清め

3.7.4.10　4 神殿

3.7.4.11　5 納税

3.7.4.12　6 国家権力

3.7.5　VI. 祈り

3.7.6　VII. 死

3.8　イエスとその目撃者たち

副題として「目撃者証言としての福音書」とされている、リチャード・ボウカム著、“Jesus and the Eyewitnesses – The Gospels as Eyewitness Testimony” by Richard Bauckham の浅野淳博訳の書籍（新教出版社）からの引用を少しずつ参考として追記していきたいと思う。現在は備忘録的な抜書。

- ここでわたしは、福音書が証言記事であるという意識をもつことの重要性を強調しよう。しかし、それは福音書が『歴史でなく証言である』ということではない。証言という種類の歴史記述なのである。そして証言記事という形態には、読者（聴衆）からの信頼が求められるという特徴が欠かせない。これは、無批

判の信用を前提としているということではなく、第三者の証拠による裏付けが可能な場合にのみ信頼を置くことができる、という扱いを拒むのである。ある証言を信用するか信用しないかの判断には、十分に合理的な理由が存在しなければならない。証言を信頼することがすなわち合理的批評を介せず『信じる』という非合理的な行為なのではない。合理的に適切な方法で、証言を真正と認めることは可能である。証言記録としての福音書は、わたしたちをイエスの歴史的現実性に導く媒体として適切である。現代における歴史批評学には明確な傾向がある。それによると、証言を信頼するという行為は、歴史学者が独自におこなう検証をとおして真理に到達するうえでの妨げとなされがちである。しかし、すべての歴史がーじつに歴史をも含むすべての知識がー証言に依拠しているという事実に目を向けるものは少ない。特にある種の歴史的事象に関しては、証言の重要性は否定しがたい事実である。本書の最終章では現代史に刻まれたホロコーストという出来事について考えるが、この歴史的出来事の真実に迫ろうとする場合、証言が不可欠な役割を果たしている。わたしたちは次のことを認識しなくてはならない。すなわち、証言とはある事柄の歴史的現実性にいたるための媒介であり、この点で無類の価値を備えているということである。（p.16）

- 彼ら（パピアスが『主の弟子たち』とよぶ目撃者）は、イエスの公生涯をとおして、その弟子として従い（使徒 1:21）そして初代教会にあっては教師として重要な役割を果たした。十二弟子がこのなかに含まれることは当然だが（使徒 6:4）それ以外に、多くの弟子がいたことをルカ文書は記しており（ルカ 6:17, 8:1-3, 10:1-20, 19:37, 23:27, 24:9, 33, 使徒 1:15, 21-23）これらの人物がルカへの情報提供者であったことは十分に考えられる。（p.42）

- イランに基づいたボウカムによる統計：シモン（243）、ヨセフ（218）、エリエゼル（166）、ユダ（164）、ヨハナン（122）、ヨシュア（103）。女性名では、マリア、サロメ、シュラム、マルタ、ヨアンナ、サッフィラ、ペレニケ、インマ、マラ、キプロス、サラ（p.72）

- ペテロのよるイエス拒絶物語をその文脈から深く理解しようとするならば、これはイエス・キリストの使徒として召命を受ける以前のパウロが教会を迫害していたことを躊躇なく告白する様子と比べられよう。（ガラテヤ 1:13,1 コリ 15:9, 1 テモテ 1:12-14）（p.167）

- 正典福音書のテクストはイエスの言動を報告する目撃証言に近い、という本書の議論は、近年一般的な新約聖書研究への異論を唱えるものである。福音書形成に関するもっとも一般的な理解は、目撃者証言と福音書記者が入手するイエス伝承との間には、教会による長い継承期間が横たわっているというものである。そして当然、目撃者が口述伝承プロセスのスタート・ラインにいるが、この伝承は何度も何度も語り直され、再構築され、敷衍され、こうして福音書記者の手元に届いたものが、今度はこれらの記者によって編集された、という理解が一般的である。（p.232）

- 福音書物語はその終結部分の視点から書かれている、とは非常に言い古された表現だが、これはすなわち、福音書記者が復活し高挙された共同体の主を伝えんがためにイエスの物語を記した、という意味である。（p.347）

- エイレナイオスはポリュカルポスに関する記憶を重要視した。なぜなら、それは二人の仲介過程（プリュカルポスとヨハネ）のみを経てイエス自身にたどり着くものだからである。これは、ポリュカルポスとヨハネ両者が長く生きたから可能なのである。エイレナイオスによると、ヨハネはトラヤヌス帝の治世

（AD98-）時期まで存命であり、ポリュカルポスはスミルナで 156-67 年の期間に殉教したときに 86 歳であった。（p.457）

- 『他者の証言を信じる傾向は、わたしたち人類にとって基本的な行為である。これは知識に関する他の手段（独立機能）によって正当化されるべきではない。』というリードの理解が近代の哲学者によって受け入れられてこなかったもっとも大きな理由、そしてその結果として哲学研究の題材として証言が注目されてこなかった理由は、啓蒙主義による哲学が個人主義をいまにいたるまで引きずってきたこと、その結果、個人的認識論が他者に依拠する個人の知性という側面を過小評価してきたためである。出発点としての個人的認知という問題が認識論において何よりも重要であり、それが共通的認知（何がわたしたちの知識を特徴づけ、わたしたちは以下に知るようになるか）という課題に対して優先されてきたのである。個人の独立した知識のみを知識として正当化しようとする欲求は、証言を問題視視がちである。（p.472）
- 歴史学上の厳密性は歴史証言への根本的懐疑主義と同じではない。（p.482）
- これは文字とおり、あまりにも境界外の経験であることと関係しており、共通の理解のもとで教育を受けた聴衆の受容力の限界を超えている。理解とは、状況、感情、思考、行動など人間の共通性を基礎として成り立っている。しかしこの経験は、標準的な人間の経験値を外れた非人間的な経験の継承である。この意味において、それは境界外の経験である。（リクール）（p.489）

3.9 年表

Q. イスラエルのバビロン捕囚帰還後から、AD70 のエルサレム陥落までの歴史を簡単に年号順にまとめてください。

ChatGPT 3.5 Turbo

以下にイスラエルのバビロン捕囚帰還後から AD70 のエルサレム陥落までの歴史を年号順にまとめます。

- BC538 年：ペルシャの王キュロス 2 世により、バビロン捕囚のユダヤ人が解放され、エルサレムへの帰還が許される。
- BC515 年：エルサレムの再建が完了し、第二神殿が建設される。
- BC332 年：アレクサンドロス大王によってイスラエルが征服され、ヘレニズム文化が広まる。
- BC167 年：セレウコス朝のアンティオコス 4 世エピファネスによって、ユダヤ教の禁止と神殿の略奪が行われる。
- BC164 年：ユダス・マカバイによるユダス・マカバイの反乱が勃発し、ユダヤ人が神殿を奪還する。
- BC63 年：ローマ帝国がイスラエルを征服し、ヘロデ大王がイスラエルの王となる。
- AD37 年：ヘロデ大王の死後、ヘロデの子供たちによるイスラエルの分割と内戦が始まる。

- AD70 年：第一次ユダヤ戦争の結果、ローマ帝国の将軍ティトゥスによってエルサレムが陥落し、第二神殿が破壊される。

以上がイスラエルのバビロン捕囚帰還後から AD70 のエルサレム陥落までの歴史の要点です。

（2023.11.16）

3.10 参考

英文がほとんどですが、ホームページ閲覧ソフト（Web Browser）の翻訳機能を使うことも可能ですし、DeepL のアプリで、ショートカットをオンにしておけば、Ctrl+C+C（Windows）や、Command+C+C（Mac）で、かなり正確な翻訳を読むことも可能です。

わたしは、英語のテキストであれば、ある程度読むことができますが、日本語で他の人に伝えることを考えると、翻訳機能はとても便利です。すくなくとも、わたしよりは、適切な翻案を提案してくれます。

- 聖書
  - 日本聖書協会
  - 新日本聖書刊行会
- Early Christian Writings by Peter Kirby（年代などにより分類されてリスト）以下は本文テキストへのリンク、トップページからは解説など様々なリンクがある。下はそのほんの一部であり、このリンクから情報を得て、英訳などを見るのがよい。
  - Psalms of Solomon（ソロモンの詩篇）
  - The Testaments of the Twelve Patriarchs （十二族長の遺訓）
  - The Gospel of Thomas （トマスによる福音書）についての情報
    * The Gospel of Thomas （トマスによる福音書）Berlin Working Group によるコプト語の英訳
    * Gospel of Thomas Commentary
  - Fragments of Papias（パピアス断片）英訳
- Perseus Digital Library（タフツ大学 Tufts University）
  - Flavius Josephus, Antiquities of the Jews　ユダヤ古代史
- Christian Classics Ethereal Library (Bringing Christian classic book to Life) CCEL
  - Fragments of Papias, by Ignatius of Antioch
    * Introductory Note to the Fragments of Papias: VI にマルコによる福音書について書かれています。

    * 日本語サイト

- The Gnosis Archive
  - Mandaean Scriptures and Fragments マンデ教の祈祷書
- イスラエルの歴史：年表（駐日イスラエル大使館）
- 地図：Bible Maps
  - John the Baptist
  - Galilee in the Time of Jesus
  - The Ministry of Jesus around the Sea of Galilee
  - The Ministry of Jesus Beyond Galilee
  - Jesus' Ministry in Galilee and Journey to Jerusalem

3.10.1 個人的に参考にしたもの

主として参考にしたものを少しずつ書いていきたいと思うが、さしあたって、2000 年以降は、読書記録をつけているので、そのリンクを付けておく。

読書記録：本・BOOKS

第 4 章

マルコによる福音書の学び

2023 年 4 月 20 日にはじめ 2025 年 6 月 19 日まで、途中、夏・冬・春のお休みはとりましたが、基本的に毎週木曜日夜（7 時半〜9 時半）に、我が家と、Zoom によるリモートで行った聖書の会の記録です。マルコによる福音書を学ぶとしていますが、特徴として、他の福音書に並行箇所があるときには、その箇所も比較して読み、考え、共に、問いについて語りあう、形式で進めました。福音書対照表も付けてあります。（Excel で作成し、PDF を公開していますが、Excel ファイルをご利用になりたい方は、私のトップページに、メールアドレスを掲載していますから、直接メールで依頼してください。）聖書の引用は、口語訳を主とし、著作権を考慮しないで使える、英語の古い訳の King James Version を福音書比較表には、加えてあります。口語訳には、表題がついていませんから、現在わたしが使っている聖書協会共同訳の表題を並べて、並行箇所にあるものを参照していますが、必要に応じて、増やすなどしてあります。なお、マルコを中心とした並行箇所については、資料のマルコによる福音書表題に表にしてまとめてあります。

以下、学びの箇所ごとに、基本的に、聖書箇所、福音書対照表へのリンク、問い（ディスカッション・クエスチョン）、参照箇所、開催日と、出席者（対面）・参加者（遠隔）人数の記録、問いについてと、メモ（個人的感想を含む）を書いていきます。参照箇所は、準備の段階で調べたことをメモのようにして残してあります。問いは、数をあまり多くしないで、基本的な問いのみとしているため、問いについてでは、その問いを膨らまして考えるための、ディスカッションのための問い（DQ）や、準備の段階で考えた応答などを加えてあります。この部分は、参加予定者の顔を思い出しながら、作成していますので、みなさんが、このページを参考にして、学びをするときは、そのグループに合わせて変更していただければと思います。

他に「福音書に関する問い」と「福音書が伝えるイエス」に、時々書き加えています。これは、あくまでも、私が考えたい問い、私が理解した「福音書が伝えるイエス」です。聖書の会の最後（9 時から 9 時半）には、一人一人に、感想を一言ずつ言ってもらい、最後にわたしが一言話すことにしていますが、その最後に話したことなどが元になっています。あくまでも、ひとりの探究者として、学びのなかで気づいたことなどを書いているので、学問的に、これが基本的な読み方だというようなことを主張するものではありません。

一般的に知られていることや、原語についてコメントすることもありますが、寄り道で、皆で考えながら読んでいくという中心から、あまり外れてほしくないので、それは、共観福音書に書くようにしていきます。自分でも

問いを持ちながら、読んでいっていただければ幸いです。

これをお読みのみなさんの学びの一助となることを願っています。

4.1 マルコによる福音書について

1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。

4.1.1 問い

1. どのようなことばで始まりますか。
2. 他の福音書とくらべるとどんなことがわかりますか。
3. パピアスはどのようなことを証言していますか。
4. パウロの手紙との違いについてどんなことに気付きますか。
5. 「福音のはじめ」でどのようなことを伝えたかったのでしょうか。

4.1.2 参照

- X [ ].
  - Deutsche Bible Gesellschaft
  - Blue Letter Bible
- 聖書の中の（ヨハネ）マルコ：使徒 12:12, 12:25, 15:37, 15:39, コロサイ 4:10, 2 テモテ 4:11, ピレモン 24, 1 ペテロ 5:13

4.1.3 記録

- 日時：2023 年 4 月 20 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）7 名、参加（遠隔）6 名

4.1.4 問いについて

1. どのようなことばで始まりますか。
   - 気づいたことを挙げてみましょう。

2. 他の福音書とくらべるとどんなことがわかりますか。
    - マルコによる福音書の表題
    - なぜ、マルコはこのように始めているのでしょうか。
3. パピアスはどのようなことを証言していますか。
4. パウロの手紙との違いについてどんなことに気付きますか。
    - ローマ人への手紙以降はたくさんのパウロの手紙が収められていますが、パウロとはどのような人ですか。
    - パウロの手紙について知っていることを挙げてみましょう。
5.「福音のはじめ」でどのようなことを伝えたかったのでしょうか。
    - 「福音のはじめ」からはどのようなことをイメージしますか。
    - あなたなら、誰かについて伝えようとする時どのようなことをたいせつにしますか。

4.1.5 メモ

- 「はじめ　」は、原点という意味もあるが、どこをはじめとするか、福音のはじめでなにを語ろうとしているのか考えた。
- 創世記やヨハネによる福音書の「はじめに」も、想起させる。
- マタイやルカのように誕生からはじめてはいない。マタイ、ルカ、それぞれの特徴があり、マタイは十二弟子であるが、説教は独自資料だが、話はほとんどマルコを踏襲している。地名や人数など、細かいところで、いくつかマルコとは違うことを書いている。
- ヨハネと共観福音書では、ゲッセマネで捉えられるところの表現が異なっており、ヨハネでは、イエスが弟子たちを逃したという記述、マルコなどでは弟子たちが逃げたという記述になっている。ペトロとヨハネの受け取り方の違いが、現れているのかもしれない。
- パピアスも読みながら、教父の一人がつたえたマルコによる福音書について確認した。
- 著者について、著者などについての AI の答えも見ながら、いろいろな説があることも確認した。以下、マルコ由来として、マルコが書いたとの書き方をするが、そのように断定しているわけではないことを断っておく。
- パウロ書簡との違い、焦点の合わせ方の違いとともに、マルコ（この書）がつたえる、福音のはじめの原点の取り方が、福音書の特徴でもある。

- 使徒行伝によると、パウロとマルコは、ある時を境に一緒に行動しなくなっている。パウロ由来の手紙とされる著者について議論がある手紙のなかでは、マルコが、パウロと一緒にいることを証言するものもある。
- マルコでは贖罪については、10 章 45 節「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」ぐらいしか書かれていない。
- パウロ書簡が伝えるキリスト・イエスと、マルコの伝えるイエス・キリストの違いとともに、それがキリスト教会の分裂にはなっていないこと、福音書の違いもたいせつなものとして味わえると良い。
- 私なら、何をたいせつにして、伝えるだろうか。少しずつ読みながら、考えていきたい。

4.2 1:1-8 洗礼者ヨハネ、悔い改めの洗礼を宣べ伝える

1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。 2 預言者イザヤの書に、／「見よ、わたしは使をあなたの
先につかわし、／あなたの道を整えさせるであろう。3 荒野で呼ばわる者の声がする、／『主の道を備え
よ、／その道筋をまっすぐにせよ』」／と書いてあるように、4 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の
ゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。 5 そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民と
が、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。
6 このヨハネは、らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物としていた。
7 彼は宣べ伝えて言った、「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。わたしはかがんで、そ
のくつのひもを解く値うちもない。 8 わたしは水でバプテスマを授けたが、このかたは、聖霊によってバ
プテスマをお授けになるであろう」。

4.2.1 マタイ 3:1-12

3:1 そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教を宣べて言った、 2 「悔い改めよ、天国は
近づいた」。3 預言者イザヤによって、「荒野で呼ばわる者の声がする、／『主の道を備えよ、／その道筋
をまっすぐにせよ』」／と言われたのは、この人のことである。 4 このヨハネは、らくだの毛ごろもを着
物にし、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物としていた。 5 すると、エルサレムとユダヤ全土とヨ
ルダン附近一帯の人々が、ぞくぞくとヨハネのところに出てきて、6 自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨ
ハネからバプテスマを受けた。7 ヨハネは、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けようとし
てきたのを見て、彼らに言った、「まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、おまえたちはのがれら
れると、だれが教えたのか。 8 だから、悔改めにふさわしい実を結べ。9 自分たちの父にはアブラハムが
あるなどと、心の中で思ってもみるな。おまえたちに言っておく、神はこれらの石ころからでも、アブラ
ハムの子を起すことができるのだ。 10 斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばな
い木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ。11 わたしは悔改めのために、水でおまえたち
にバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしは
そのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお

授けになるであろう。 12 また、箕を手に持って、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう」。

4.2.2 ルカ 3:1-9

3:1 皇帝テベリオ在位[*1]の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督[*2]、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟ピリポがイツリヤ・テラコニテ地方の領主、ルサニヤがアビレネの領主、 2 アンナスとカヤパとが大祭司であったとき、神の言が荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。3 彼はヨルダンのほとりの全地方に行って、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えた。4 それは、預言者イザヤの言葉の書に書いてあるとおりである。すなわち／「荒野で呼ばわる者の声がする、／『主の道を備えよ、／その道筋をまっすぐにせよ』。5 すべての谷は埋められ、／すべての山と丘とは、平らにされ、／曲ったところはまっすぐに、／わるい道はならされ、 6 人はみな神の救を見るであろう」。 7 さて、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出てきた群衆にむかって言った、「まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、のがれられると、おまえたちにだれが教えたのか。 8 だから、悔改めにふさわしい実を結べ。自分たちの父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。おまえたちに言っておく。神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起すことができるのだ。9 斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ」。

4.2.3 ヨハネ 1:19-28

1:19 さて、ユダヤ人たちが、エルサレムから祭司たちやレビ人たちをヨハネのもとにつかわして、「あなたはどなたですか」と問わせたが、その時ヨハネが立てたあかしは、こうであった。 20 すなわち、彼は告白して否まず、「わたしはキリストではない」と告白した。21 そこで、彼らは問うた、「それでは、どなたなのですか、あなたはエリヤですか」。彼は「いや、そうではない」と言った。「では、あの預言者ですか」。彼は「いいえ」と答えた。22 そこで、彼らは言った、「あなたはどなたですか。わたしたちをつかわした人々に、答えを持って行けるようにしていただきたい。あなた自身をだれだと考えるのですか」。23 彼は言った、「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばわる者の声』である」。 24 つかわされた人たちは、パリサイ人であった。 25 彼らはヨハネに問うて言った、「では、あなたがキリストでもエリヤでもまたあの預言者でもないのなら、なぜバプテスマを授けるのですか」。26 ヨハネは彼らに答えて言った、「わたしは水でバプテスマを授けるが、あなたがたの知らないかたが、あなたがたの中に立っておられる。27 それがわたしのあとにおいでになる方であって、わたしはその人のくつのひもを解く値うちもない」。28 これらのことは、ヨハネがバプテスマを授けていたヨルダンの向こうのベタニヤであったのである。

マルコによる福音書 1 章 1-8 節福音書対照表

[*1] Tiberius Julius Caesar Augustus: 17 September 14 – 16 March 37 (Wikipedia)
[*2] Pontius Pilate: In office 26AD-36AD

4.2.4 問い

1. 2,3 節の引用では「使（つかい）」について何と預言していますか。
2. ヨハネはどのような人ですか。どのような活動をしますか。
3. 他の福音書などの記述と比較して気づいたことを挙げてみましょう。
4. 「福音のはじめ」として、旧約聖書から引用し、バプテスマのヨハネの活動について書いていますが、なぜ、旧約聖書との関係から、始めたのでしょうか。
5. 主の道を整える・備えるとは、どのようなことで、主の道が整っているとは、どのような状態なのでしょうか。現代は、世界は、そしてあなたへの主の道は整っていますか。

4.2.5 参照

- 聖書の中のバプテスマのヨハネ
  - [参照] ルカ 1:5-25[*3]、1:57-80[*4]、マルコ 6:14-29[*5]（マタイ 14:1-12、ルカ 9:7-9）、マルコ 8:27-30[*6]（マタイ 16:13-20、ルカ 9:18-21）、マルコ 11:27-33[*7]（マタイ 21:23-27、ルカ 20:1-8）、マタイ 11:2-19[*8]（ルカ 7:18-35）、マタイ 17:10-13[*9]、ヨハネ 1:29-51
  - [参照] 使徒 1:5, 22、10:37、11:16、13:24、18:24-27[*10]、19:1-5[*11]

1 X [ ].

2 K .

,

.

3 .

[*3] 洗礼者ヨハネの誕生、予告される

[*4] 洗礼者ヨハネの誕生, 1:80 幼な子は成長し、その霊も強くなり、そしてイスラエルに現れる日まで、荒野にいた。

[*5] 洗礼者ヨハネ殺される

[*6] ペトロ、イエスがメシアであると告白する

[*7] 権威についての問答

[*8] 洗礼者ヨハネとイエス

[*9] 13 そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと悟った。

[*10] 25 この人は主の道に通じており、また、霊に燃えてイエスのことを詳しく語ったり教えたりしていたが、ただヨハネのバプテスマしか知っていなかった。

[*11] 4b 「ヨハネは悔改めのバプテスマを授けたが、それによって、自分のあとに来るかた、すなわち、イエスを信じるように、人々に勧めたのである」。

[*12] ,

,

4 [ ] [*13] [*14] [*15].

5 , ,

.

6 .

7 K [*16] . , .

8 , .

4.2.6 記録

- 日時：2023 年 4 月 27 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）8 名

4.2.7 問いについて

1. 2,3 節の引用では「使（つかい）」について何と預言していますか。
   - [参照] マラキ 3:1　見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。
   - [参照] イザヤ 40:3　呼ばわる者の声がする、／「荒野に主の道を備え、／さばくに、われわれの神のために、／大路をまっすぐにせよ。
   - なぜ「荒野」なのでしょうか。
2. ヨハネはどのような人ですか。どのような活動をしますか。
   - バプテスマのヨハネは、「使」の旧約聖書の預言をどのように成し遂げていますか。

[*12] : to make ready, prepare

[*13] : a change of mind, as it appears to one who repents, of a purpose he has formed or of something he has done

[*14] : i) release from bondage or imprisonment, ii) forgiveness or pardon, of sins (letting them go as if they had never been committed), remission of the penalty

[*15] : i) to be without a share in, ii) to miss the mark, iii) to err, be mistaken, iv) to miss or wander from the path of uprightness and honour, to do or go wrong, v) to wander from the law of God, violate God's law, sin. [Strong] In Greek writings, 1st, an error of the understanding, 2nd, a bad action, evil deed.

[*16] : i) to be a herald, to officiate as a herald, ii) to publish, proclaim openly: something which has been done

- ヨハネの働きは、メシヤを迎えるために人々の心をどのように整えるのでしょうか。悔い改めることは、救い主を迎えるのにどう整えるのでしょうか。やがて来る方とどのような違いがありますか。

3. 他の福音書などの記述と比較して気づいたことを挙げてみましょう。

   - バプテスマのヨハネについてほかに知っていることはありますか。

4.「福音のはじめ」として、旧約聖書から引用し、バプテスマのヨハネの活動について書いていますが、なぜ、旧約聖書との関係から、始めたのでしょうか。

5. 主の道を整える・備えるとは、どのようなことで、主の道が整っているとは、どのような状態なのでしょうか。現代は、世界は、そしてあなたへの主の道は整っていますか。

4.2.8 メモ

- マルコ 1:2 の預言はイザヤではなく、マラキ。これは、マタイ、ルカでは修正され、マルコ 1:3 の部分だけをイザヤとしている。内部でも修正が議論されたのだろう。ただ、マタイ 17:11-13 には、エリヤが先に来るとのことが語られている。マラキの預言が旧約聖書最大の預言者と言われるエリヤがまず来ることと理解されていたのだろう。そして、そのことは、ヨハネ 1:21 にも反映されており、こちらでは、バプテスマのヨハネは、自分がエリヤであることを否定している。また、荒野で呼ばわる者の声と証言しているのは、バプテスマのヨハネ自身であることもわかる。

- バプテスマのヨハネについては、使徒の記録（18 章、19 章）にもあるように、一般によく知られており、ルカの記述によれば、祭司ザカリヤとエリザベトの子、マリヤとも親戚関係と書かれている。ヨハネが祭司の子であったことは、おそらく、よく知られていた事実だと思われるので、そのような人が幼少から、荒野におり（ルカ 1:80）それから、語り始めたところを見ると、民にも大きな影響を与える存在であったことがわかる。出自に関しては、イエスとはかなりことなる。

- ユダヤ全土と、エルサレムの全住民が彼のもとに集まってきていることは、ヨハネの知名度もあったろうが、霊的渇望、社会状況・政治状況からも問題を抱えていた人が多かったのだろう。ただ、マタイ（対象はパリサイ人はサドカイ人）やルカ（一般の人たち・限定なし）への厳しい言葉を見ると、我も我もと集まる中に、悔い改めという自らを省みる部分が欠落していたひとたちも多かったのだろう。それが、救いと裁きという厳しさに現れている。

- 「わたしはかがんで、そのくつのひもを解く値打ちもない（奴隷の仕事）」（7）と証言することによって、「あなたの道」（2）のやがてきてるべき方との大きな差を表現している。

- 「神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起こすことができる」（マタイ 3:9, ルカ 3:8）は、アブラハムの子であることを誇りと思っていて、異邦人を心の中で差別していた人には、かなり厳しく聞こえただろう。

- 主の道を整えるが何を意味するかは難しい。一般論ではなく、一人ひとりがその語り掛けを聞くものなの

だろうか。現代でも、同じように、主の道が整っているとは言えないが、主の道が整っている人に、主のことばが撒かれると、成長して、何倍にもなるのかもしれない。判定条件があるわけではないだろう。

4.3 1:9-11 イエス、洗礼を受ける

1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。10 そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下って来るのを、ごらんになった。 11 すると天から声があった、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。

4.3.1 マタイ 3:13-17

3:13 そのときイエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現れ、ヨハネのところにきて、バプテスマを受けようとされた。14 ところがヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った、「わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずですのに、あなたがわたしのところにおいでになるのですか」。 15 しかし、イエスは答えて言われた、「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」。そこでヨハネはイエスの言われるとおりにした。16 イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはとのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。 17 また天から声があって言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。

4.3.2 ルカ 3:21-22

3:21 さて、民衆がみなバプテスマを受けたとき、イエスもバプテスマを受けて祈っておられると、天が開けて、22 聖霊がはとのような姿をとってイエスの上に下り、そして天から声がした、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。

4.3.3 [ヨハネ 1:29-34]

1:29 その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。30 『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである。31 わたしはこのかたを知らなかった。しかし、このかたがイスラエルに現れてくださるそのことのために、わたしはきて、水でバプテスマを授けているのである」。32 ヨハネはまたあかしをして言った、「わたしは、御霊がはとのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。33 わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。34 わたしはそれを見たので、この

かたこそ神の子であると、あかしをしたのである」。

マルコによる福音書 1 章 9-11 節福音書対照表

4.3.4 問い

1. 地図で場所（ガリラヤ、ナザレ、ヨルダン川、エルサレム）を確認しましょう。
2. イエスがバプテスマ（洗礼）を受けたことはどのように描かれていますか。
3. 10 節 11 節はどのような状況を描いているのでしょうか。
4. 天からの声は何を意味しているのでしょうか。
5. ヨハネ 1:29-34 からは、どのようなことがわかりますか。
6. このできごとによって、なにを伝えようとしているのでしょうか。

4.3.5 参照

4.3.5.1 愛する子

- マルコ 9:7 すると、雲がわき起って彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった、「これはわたしの**愛する子**である。これに聞け」。
- マタイ 17:5 彼がまだ話し終えないうちに、たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。
- 2 ペテロ 1:17 イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。

4.3.5.2 神の子

- マルコ 1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。
- マルコ 3:11 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ**神の子**です」と言った。
- マルコ 5:7 大声で叫んで言った、「いと高き**神の子**イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。
- マルコ 15:39 イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。
- マタイ 4:3, 6, 5:9, 8:29, 14:33, 16:16, 26:63, 27:40,43,54

- ルカ 1:35, 4:3, 9, 41, 8:28, 20:36, 22:70
- ヨハネ 1:12, 34, 49, 5:25, 28, 10:36, 11:4, 52, 19:7, 20:31
- 使徒 8:37, 9:20, 17:29
- その他多数

4.3.5.3 バプテスマ

- マルコ 10:38 イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける**バプテスマ**を受けることができるか」。 39 彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける**バプテスマ**を受けるであろう。
- マルコ 11:30 ヨハネの**バプテスマ**は天からであったか、人からであったか、答えなさい」。
- マルコ 16:16 信じて**バプテスマ**を受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。
- マタイ 28:19 それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らに**バプテスマ**を施し、
- ヨハネ 3:22 こののち、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らと一緒にそこに滞在して、**バプテスマ**を授けておられた。 23 ヨハネもサリムに近いアイノンで、**バプテスマ**を授けていた。そこには水がたくさんあったからである。人々がぞくぞくとやってきて**バプテスマ**を受けていた。
- ヨハネ 3:26 そこで彼らはヨハネのところにきて言った、「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、**バプテスマ**を授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています」。
- ヨハネ 4:1 イエスが、ヨハネよりも多く弟子をつくり、また**バプテスマ**を授けておられるということを、パリサイ人たちが聞き、それを主が知られたとき、2 （しかし、イエスみずからが、**バプテスマ**をお授けになったのではなく、その弟子たちであった）
- ヨハネ 4:11 さて、イエスはまたヨルダンの向こう岸、すなわち、ヨハネが初めに**バプテスマ**を授けていた所に行き、そこに滞在しておられた。
- 使徒 1:5 すなわち、ヨハネは水で**バプテスマ**を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、**バプテスマ**を授けられるであろう」。
- 使徒 2:38 すると、ペテロが答えた、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、**バプテスマ**を受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。

- 使徒 2:41 そこで、彼の勧めの言葉を受けいれた者たちは、**バプテスマ**を受けたが、その日、仲間に加わったものが三千人ほどあった。
- 使徒 8:12 ところが、ピリポが神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えるに及んで、男も女も信じて、ぞくぞくと**バプテスマ**を受けた。
- 使徒 8:13, 16, 36, 38, 9:18, 10:47, 48, 16:15, 33, 18:8, 25, 19:3, 4,5, 22:16
- その他多数

9K N Γ . **10** *17 *18 *19 *20 *21 *22 ·**11** . *23, *24.

4.3.6 記録

- 日時：2023 年 5 月 4 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）11 名、参加（遠隔）2 名

4.3.7 問いについて

1. 地図で場所（ガリラヤ、ナザレ、ヨルダン川、エルサレム）を確認しましょう。
   - [参照] キリスト時代のパレスチナ (Wikimedia: 聖書地図 (JBS1956))
   - [参照] John the Baptist (Halman Bible Atlas 106)
2. イエスがバプテスマ（洗礼）を受けたことはどのように描かれていますか。
   - マルコ、マタイ、ルカの共観福音書を比較して読んでみましょう。
   - どんなことが共通に書かれていますか。
   - それぞれどのような特徴と違いがありますか。

---

*17 : straightway, immediately, forthwith (x40 in Mark)
*18 : ascend; a) to go up, b) to rise, mount, be borne up, spring up
*19 : i) to cleave, cleave asunder, rend, ii) to divide by rending, iii) to split into factions, be divided (Mark 15:38)
*20 : the vaulted expanse of the sky with all things visible in it. (The KJV translates heaven (268x), air (10x), sky (5x), heavenly (with G1537) (1x).)
*21 : a dove (Mark 11:15)
*22 : to go down, come down, descend
*23 : beloved, esteemed, dear, favourite, worthy of love (Mark 9:7, 12:6)
*24 : i) it seems good to one, is one's good pleasure a) think it good, choose, determine, decide, b) to do willingly, c) to be ready to, to prefer, choose rather ii) to be well pleased with, take pleasure in, to be favourably inclined towards one

3. 10 節 11 節はどのような状況を描いているのでしょうか。
4. 天からの声は何を意味しているのでしょうか。
    - [参照] 11「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」
5. ヨハネ 1:29-34 からは、どのようなことがわかりますか。
    - 四福音書で、聖霊が降るのを見たのは、そして天からの声を聞いたのは誰だと記されています。
6. このできごとによって、なにを伝えようとしているのでしょうか。
    - あなたは、どのように受け取りますか。

4.3.8 メモ

- マルコは「そのころ」とはじまっている。マルコに多い表現。
- マタイでは、洗礼の前から、イエスが特別な存在だと、ヨハネは考えている。
- 共観福音書では、基本的に、「聖霊がはとのように自分に下って来るのを、ごらんになった。」のは、イエス。このあとの、言葉を聞いたのは、イエスだけかどうかは不明だが、イエスにとって、特別な経験だったことは、確かなのだろう。
- 「裂けて（　）」マルコ 15:38 そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。
- ヨハネは、洗礼についての言及がなく、いつのことを語っているかは不明だが、御霊がイエスに降ったこと、それによって、御霊によってバプテスマを授ける方であることを知り、証したとなっている。特別なものを、ヨハネは、早い段階から、認めていたことの証言なのだろう。
- イエスは、このときから、神の子となったのだろうか。「愛する子」とは、何を意味するのだろうか。誰のための証言なのだろうか。
- 「あなたはわたしの愛する子」と、天からの声を聞けば、神の子なのだろうか。
- まだ、なにも活動する前に「愛する子」と宣言されることは、印象的。そこにこそ、神の愛を感じる。イエスは、間違いなく、神の愛を強く感じただろう。その証言として良いと思う。

4.4 1:12-13 試みを受ける

1:12 それからすぐに、御霊がイエスを荒野に追いやった。 13 イエスは四十日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた。そして獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた。

4.4.1 マタイ 4:1-11

4:1 さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。 2 そして、四十日四十
夜、断食をし、そののち空腹になられた。 3 すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子である
なら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」。 4 イエスは答えて言われた、「『人はパンだ
けで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」。5 それから
悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて 6 言った、「もしあなたが神の子であるな
ら、下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に
打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから」。 7 イエスは
彼に言われた、「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」。 8 次に悪魔は、イエスを
非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて 9 言った、「もしあなたが、ひ
れ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。10 するとイエスは彼に言われた、
「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ[*25]』と書いてある」。11 そこで、悪魔
はイエスを離れ去り、そして、御使たちがみもとにきて仕えた。

4.4.2 ルカ 4:1-13

4:1 さて、イエスは聖霊に満ちてヨルダン川から帰り、2 荒野を四十日のあいだ御霊にひきまわされて、悪
魔の試みにあわれた。そのあいだ何も食べず、その日数がつきると、空腹になられた。 3 そこで悪魔が言
った、「もしあなたが神の子であるなら、この石に、パンになれと命じてごらんなさい」。4 イエスは答え
て言われた、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」。 5 それから、悪魔はイエスを高い
所へ連れて行き、またたくまに世界のすべての国々を見せて 6 言った、「これらの国々の権威と栄華とを
みんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいので
すから。 7 それで、もしあなたがわたしの前にひざまずくなら、これを全部あなたのものにしてあげまし
ょう」。 8 イエスは答えて言われた、「『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。
9 それから悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、「もしあなたが神の子
であるなら、ここから下へ飛びおりてごらんなさい。 10 『神はあなたのために、御使たちに命じてあな
たを守らせるであろう』とあり、11 また、『あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを
手でささえるであろう』とも書いてあります」。 12 イエスは答えて言われた、「『主なるあなたの神を試み
てはならない』と言われている」。 13 悪魔はあらゆる試みをしつくして、一時イエスを離れた。

マルコによる福音書 1 章 12-13 節福音書対照表

[*25] : i) to serve for hire, ii) to serve, minister to, either to the gods or men and used alike of slaves and freemen

4.4.3 問い

1. マルコは、この箇所で何を伝えていますか。
2. マタイとルカの違いを挙げてみましょう。
3. マタイとルカで、最初にサタンはどのようにイエスに言っていますか。イエスはそれにどのように答えますか。
4. （マタイでは二番目、ルカでは三番目の）神を試みるとはどのようなことを意味しているのでしょうか。神の何を試しているのでしょうか。
5. （マタイでは三番目、ルカでは二番目では）どのようなことが試されていますか。国々の栄華を得ることが問題なのでしょうか。「神にのみ仕える」とはどのような生き方でしょうか。
6. なぜイエスは試みを受けたのでしょう。それはどのようなことを意味しているのでしょう。

4.4.4 参照

- サタン
  - マタイ 12:26 もし**サタン**が**サタン**を追い出すならば、それは内わで分れ争うことになる。それでは、その国はどうして立ち行けよう。マルコ 3:23 そこでイエスは彼らを呼び寄せ、譬をもって言われた、「どうして、**サタン**が**サタン**を追い出すことができようか。 マルコ 3:26 もし**サタン**が内部で対立し分争するなら、彼は立ち行けず、滅んでしまう。 ルカ 11:18 そこで**サタン**も内部で分裂すれば、その国はどうして立ち行けよう。あなたがたはわたしがベルゼブルによって悪霊を追い出していると言うが、
  - マルコ 4:15 道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、御言を聞くと、すぐに**サタン**がきて、彼らの中にまかれた御言を、奪って行くのである。
  - マタイ 16:23 イエスは振り向いて、ペテロに言われた、「**サタン**よ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。マルコ 8:33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「**サタン**よ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。
  - ルカ 10:18 彼らに言われた、「わたしは**サタン**が電光のように天から落ちるのを見た。
  - ルカ 13:16 それなら、十八年間も**サタン**に縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったか」。
  - ルカ 22:3 そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれていたユダに、**サタン**がはいった。

- ルカ 22:31 シモン、シモン、見よ、**サタン**はあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。
- ヨハネ 13:27 この一きれの食物を受けるやいなや、**サタン**がユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。

- 悪魔[*26]
  - マタイ 13:39 それをまいた敵は**悪魔**である。収穫とは世の終りのことで、刈る者は御使たちである。
  - マタイ 25:41 それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、**悪魔**とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ。
  - ルカ 8:12 道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、**悪魔**によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。
  - ヨハネ 6:70 イエスは彼らに答えられた、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは**悪魔**である」。
  - ヨハネ 8:44 あなたがたは自分の父、すなわち、**悪魔**から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。
  - ヨハネ 13:2 夕食のとき、**悪魔**はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れていたが、
- 試みる者[*27]：福音書ではマタイ 4:3 のみ
  - 1 テサロニケ 3:5 そこで、わたしはこれ以上耐えられなくなって、もしや「**試みる者**」があなたがたを試み、そのためにわたしたちの労苦がむだになりはしないかと気づかって、あなたがたの信仰を知るために、彼をつかわしたのである。
- **マタイ 4 章 4 節**：現代訳：人はパンさえあれば生きられるわけではない。神の御心でなければ、決して生きられるものではない」
- **マタイ 4 章 4 節：**申命記 8 章 2 節〜5 節あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを導かれたそのすべての道を覚えなければならない。それはあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであった。3 それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけ

[*26] : i) prone to slander, slanderous, accusing falsely, ii) metaph. applied to a man who, by opposing the cause of God, may be said to act the part of the devil or to side with him

[*27] : i) to try whether a thing can be done ii) to try, make trial of, test: for the purpose of ascertaining his quality, or what he thinks, or how he will behave himself

では生きず、人は主の口から出るすべてのことばによって生きることをあなたに知らせるためであった。4 この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。5 あなたはまた人がその子を訓練するように、あなたの神、主もあなたを訓練されることを心にとめなければならない。

- **宮の頂上**：ソロモンの廊と王室の廊の出会うところ、下はケデロンの谷で 140 m と言われる。
- **マタイ 4 章 6 節** 詩篇 91:11,12 これは主があなたのために天使たちに命じて、／あなたの歩むすべての道で／あなたを守らせられるからである。12 彼らはその手で、あなたをささえ、／石に足を打ちつけることのないようにする。(この詩篇は “1 彼らはその手で、あなたをささえ、／石に足を打ちつけることのないようにする。2 主に言うであろう、「わが避け所、わが城、／わが信頼しまつるわが神」と。” 始まっている。)
- **マタイ 4 章 7 節** 申命記 6:16 あなたがたがマッサでしたように、あなたがたの神、主を試みてはならない。
- **マタイ 4 章 9 節** 申命記 6:13 あなたの神、主を恐れてこれに仕え、その名をさして誓わなければならない。
- 詩篇 2:7,8 わたしは主の詔をのべよう。主はわたしに言われた、「おまえはわたしの子だ。きょう、わたしはおまえを生んだ。 わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を／嗣業としておまえに与え、／地のはてまでもおまえの所有として与える。
- ルカ 22:28 あなたがたは、わたしの試錬のあいだ、わたしと一緒に最後まで忍んでくれた人たちである。

12K [*28] [*29]. **13** [*30] [*31], [*32], [*33] [*34].

4.4.5 記録

- 日時：2023 年 5 月 11 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）8 名

[*28] : to cast out, drive out, to send out, [historical present].

[*29] : solitary, lonely, desolate, uninhabited

[*30] : 1. to try whether a thing can be done, 2. to try, make trial of, test: for the purpose of ascertaining his quality, or what he thinks, or how he will behave himself

[*31] Σ : adversary (one who opposes another in purpose or act), the name given to a) the prince of evil spirits, the inveterate adversary of God and Christ, b) a Satan-like man

[*32] : i) an animal, ii) a wild animal, wild beast, beast, iii) metaph. a brutal, bestial man, savage, ferocious

[*33] : a messenger, envoy, one who is sent, an angel, a messenger from God

[*34] : to be a servant, attendant, domestic, to serve, wait upon

4.4.6　問いについて

1. マルコは、この箇所で何を伝えていますか。
    - [DQ] 御霊（聖霊）とサタンはどのような働きをしていますか。獣や御使いたちは、何を表しているのでしょうか。
2. マタイとルカの違いを挙げてみましょう。
    - 順序も違う。他に、どんな違いがありますか。
3. マタイとルカで、最初にサタンはどのようにイエスに言っていますか。イエスはそれにどのように答えますか。
    - [DQ] イエスは石をパンに変えることができたのでしょうか？空腹は満たされたのでしょうか？など、疑問点や気づいたことをあげてみましょう。
4. （マタイでは二番目、ルカでは三番目の）神を試みるとはどのようなことを意味しているのでしょうか。神の何を試しているのでしょうか。
5. （マタイでは三番目、ルカでは二番目では）どのようなことが試されていますか。国々の栄華を得ることが問題なのでしょうか。「神にのみ仕える」とはどのような生き方でしょうか。
6. なぜイエスは試みを受けたのでしょう。それはどのようなことを意味しているのでしょう。
    - [DQ] イエスの受けた試みと、わたしたちの受ける試み・誘惑・試練は同じでしょうか。異なるでしょうか。

4.4.7　メモ

- マルコには、「それからすぐに、御霊がイエスを荒野に追いやった。」とあるが、それ（それからすぐ）は、イエスがバプテスマを受け「天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下って来るのを、ごらんにな」り「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」との天からの声を聞いてすぐにを意味している。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者」の神の宣言は、始まりであって終わりではない。
- マルコでは、イエスは四十日の間荒野にいたとあるが、共にいたのは、サタン、獣、御使である。試みる者、敵対するもの、悪意を持って近づくもの、助け、神のメッセージを伝えるものが、混在している世界として描かれている。
- マタイでもルカでも、イエスが空腹になってから「石にパンになれと命じ」るよう促され（試みられ）ている。イエスには、それができなかったとは想定されていない。「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」（ヨハネ 4:32b）だろうか。このときは、サマリアの女との対話がある。しかし、ここでは、空腹

は満たされていないのではないだろうか。「パンだけで」とあり、やはりパンも必要なのではないだろうか。ルカでは後半のことばは書かれていない。経済的な、空腹を満たすそれを解決すればよいということではないことに中心が置かれている。同時に、神の国は、これもあれも手当たり次第に課題が解決されることでもないのかもしれない。

- 「神はあなたのために、御使いたちに命じ」る根拠は、愛されている存在だということだろうが、それを、確認するようなことをしてはならない。神に愛されている存在とは、神のこころを心とすること、神が望まれることをなすことなのだろう。
- 「ひれ伏して拝むなら（マタイ）・ひざまずくなら（ルカ）」にたいして、「神にのみ仕えよ」と返答している。神との関係が絶対だということで、「国々とその栄華（マタイ）・国々の権威と栄華（ルカ）」を手にすることが悪ではない。神に仕えることが具体的に何を意味するのかは、わからない時が多い。内心の問題なのだろうか。何が問われているのかを確定するのは、難しい。
- イエスが試み・誘惑にあわれたことを語っている意味
  - イエスも試みにあわれている。
  - [参照] ヘブル人への手紙 4 章 15 節この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試錬に会われたのである。
  - メシヤ預言のことばではなく、一般信徒へのことばを引用している。
  - 超自然的な力でこの誘惑に打ち勝っているのではない。イエスに倣うものとなることは、不可能なことではない。
  - イエスが神の愛されている子として生きていくあゆみの確認。一般性もある。
- マルコは「サタン」、マタイは、最初「試みる者」（3）その後「悪魔」、ルカは「悪魔」

4.5 1:14-15 ガリラヤで宣教を始める

1:14 ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、15 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。

4.5.1 マタイ 4:12-17

4:12 さて、イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。 13 そしてナザレを去り、ゼブルンとナフタリとの地方にある海べの町カペナウムに行って住まわれた。 14 これは預言者イザヤによって言われた言が、成就するためである。15 「ゼブルンの地、ナフタリの地、／海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、／異邦人のガリラヤ、16 暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、／死の地、死の陰に住

んでいる人々に、光がのぼった」。17 この時からイエスは教を宣べはじめて言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた」。

4.5.2 ルカ 4:14-15

4:14 それからイエスは御霊の力に満ちあふれてガリラヤへ帰られると、そのうわさがその地方全体にひろまった。15 イエスは諸会堂で教え、みんなの者から尊敬をお受けになった。

マルコによる福音書 1 章 14-15 節福音書対照表

4.5.3 問い

1. マルコでは、イエスはいつ、どこで、どのような言葉で宣教を始めたとしていますか。
2. マタイや、ルカを読み、他に気づいたことを挙げてみましょう。

4.5.4 参照

- ルカ 3:31 イエスが宣教をはじめられたのは、年およそ三十歳の時であって、人々の考えによれば、ヨセフの子であった。ヨセフはヘリの子、 （以下系図〜38）
- ヨハネ 3:22 こののち、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らと一緒にそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。23 ヨハネもサリムに近いアイノンで、バプテスマを授けていた。そこには水がたくさんあったからである。人々がぞくぞくとやってきてバプテスマを受けていた。24 そのとき、ヨハネはまだ獄に入れられてはいなかった。 （〜36）
- マタイ 4:15,16 - イザヤ書 9:1,2 （他の訳では 8:23, 9:1）1 しかし、苦しみにあった地にも、やみがなくなる。さきにはゼブルンの地、ナフタリの地にはずかしめを与えられたが、後には海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤに光栄を与えられる。2 暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。
- 死の谷：詩篇 23:4 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、／わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。ルカ 1:79 暗黒と死の陰とに住む者を照し、／わたしたちの足を平和の道へ導くであろう」。
- マタイ 4:17 - マタイ 3:2 「悔い改めよ、天国は近づいた」。

14M [*35] Γ [*36] [*37] **15** [*38]
[*39] . [*40] .

4.5.5 問いについて

1. マルコでは、イエスはいつ、どこで、どのような言葉で宣教を始めたとしていますか。
   - 1:14 ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、15 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。
   - [DQ] ヨハネが捕らえられるまでは、イエスはどうしていたのでしょうか。
     - ヨハネによる福音書の記事も参考にしてみましょう。（ヨハネ 3:22）
   - [DQ] 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。は、どのような印象を受けますか。
2. マタイや、ルカを読み、他に気づいたことを挙げてみましょう。
   - [DQ] メッセージに違いがありますか。

4.5.6 メモ

- マルコとマタイでは「ヨハネが捕えられた後」「この時から」として、ヨハネが捕えられてから以降に活動を開始したとしている。
- 「神の福音」とある。なにが良き訪れなのか。「時は満ちた、神の国は近づいた。」とあり、神の国が近づいたということなのだろう。「神の国が近ついた」とはどういうことだろうか。「福音を信じる」とはどういうことだろうか。地の上でも、神の御心がなるということだろうか。
- 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」（マルコ）「悔い改めよ、天国は近づいた」（マタイ）当時の人たちは、どう受け取っただろうか。イスラエルの歴史上では、どのような時代なのだろうか。ローマの占領下だが、ある程度の自治がみとめられていた。
  - [参照] John the Baptist (Halman Bible Atlas 106)
  - [参照] イスラエルの歴史：年表（駐日イスラエル大使館）

---

*35 : to give into the hands (of another)
*36 : to be a herald, to officiate as a herald
*37 : a reward for good tidings
*38 : o make full, to fill up, i.e. to fill to the full
*39 : to bring near, to join one thing to another
*40 : to change one's mind, i.e. to repent

- ヨハネの記述 3 章 22 節を見ると、ヨハネが捕えられる前にも活動していることがわかる。ヨハネが捕えられたことを契機に、宣教をはじめたというより、活動のひとつの転機を記しているのかもしれない。
- 少なくとも、ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネと会ったのが、マルコに書かれている時が初めてだとは言えないだろう。

4.6 1:16-20 四人の漁師を弟子にする

1:16 さて、イエスはガリラヤの海べを歩いて行かれ、シモンとシモンの兄弟アンデレとが、海で網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。17 イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。 18 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。 19 また少し進んで行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、舟の中で網を繕っているのをごらんになった。 20 そこで、すぐ彼らをお招きになると、父ゼベダイを雇人たちと一緒に舟において、イエスのあとについて行った。

4.6.1 マタイ 4:18-22

4:18 さて、イエスがガリラヤの海べを歩いておられると、ふたりの兄弟、すなわち、ペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレとが、海に網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。 19 イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。20 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。21 そこから進んで行かれると、ほかのふたりの兄弟、すなわち、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、父ゼベダイと一緒に、舟の中で網を繕っているのをごらんになった。そこで彼らをお招きになると、 22 すぐ舟と父とをおいて、イエスに従って行った。

4.6.2 ルカ 5:1-11

5:1 さて、群衆が神の言を聞こうとして押し寄せてきたとき、イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、2 そこに二そうの小舟が寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。 3 その一そうはシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお教えになった。 4 話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。5 シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましょう」。 6 そしてそのとおりにしたところ、おびただしい魚の群れがはいって、網が破れそうになった。7 そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をしたので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになった。 8 これを見てシモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」。 9 彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびただしいのに驚いたからである。 10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言われた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるの

だ」。 11 そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。

4.6.3 [ヨハネ 1:35-42]

1:35 その翌日、ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていたが、 36 イエスが歩いておられるのに目をとめて言った、「見よ、神の小羊」。 37 そのふたりの弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いて、イエスについて行った。 38 イエスはふり向き、彼らがついてくるのを見て言われた、「何か願いがあるのか」。彼らは言った、「ラビ（訳して言えば、先生）どこにおとまりなのですか」。39 イエスは彼らに言われた、「きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう」。そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を見た。そして、その日はイエスのところに泊まった。時は午後四時ごろであった。 40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとりは、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。 41 彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。42 そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。イエスは彼に目をとめて言われた、「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」。

マルコによる福音書 1 章 16-20 節福音書対照表

4.6.4 問い

1. マルコに書かれている、弟子たちを招いた記事からどのようなことがわかりますか。
2. 「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」を弟子たちはどのように受け取ったでしょうか。
3. マタイとルカを読んでみましょう。マルコに加えてどのようなことが書かれていますか。
4. 弟子たちはどのように応答していますか。あなたならどうしますか。
5. ヨハネの記事から、さらにどのようなことがわかりますか。
6. イエスはなぜこの人たちを招いたのでしょうか。
7. イエスに従っていくとは、どのようなことなのでしょうか。

4.6.5 参照

- ルカと似たエピソード：ヨハネ 21:1-14

16 K [*41] Γ Σ Σ [*42] . [*43].
17 . [*44] [*45] , . **18** [*46] [*47]
. **19** K [*48] Z [*49] [*50]
, **20** . Z .

4.6.6 記録

- 日時：2023 年 5 月 18 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）8 名

4.6.7 問いについて

1. マルコに書かれている、弟子たちを招いた記事からどのようなことがわかりますか。
2. 「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」を弟子たちはどのように受け取ったでしょうか。
3. マタイとルカを読んでみましょう。マルコに加えてどのようなことが書かれていますか。
   - ルカ 5:5, 8 のペテロの応答からどのようなことがわかりますか。
   - [DQ] ルカでは、さらにどのようなエピソードが書かれていますか。
4. 弟子たちはどのように応答していますか。あなたならどうしますか。
5. ヨハネの記事から、さらにどのようなことがわかりますか。
   - [DQ] どちらの記事が最初におこったのでしょうか。
   - [DQ] なぜ、これほど違うのでしょうか。
6. イエスはなぜこの人たちを招いたのでしょうか。
7. イエスに従っていくとは、どのようなことなのでしょうか。

---

*41 : to walk
*42 : to throw or let go of a thing without caring where it falls
*43 : a fisherman, fisher
*44 : come hither, come here, come
*45 : to make
*46 :i) to send away, ii) to permit, allow, not to hinder, to give up a thing to a person, iii) to leave, go way from one,
*47 : i) to follow one who precedes, join him as his attendant, accompany him, ii) to join one as a disciple, become or be his disciple
*48 : to go forwards, go on
*49 : a ship
*50 : to render, i.e. to fit, sound, complete

- [DQ] 弟子になるとはどのようなことなのでしょうか。従っていくとは、どのようなことなのでしょうか。

4.6.8 メモ

- ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネはどのような人ですか。
  - 漁師。ルカにエピソードが書かれており、さらに、ヨハネには別の出会いが書かれている。メシア（訳せばキリスト）との出会いと、網を捨てて、弟子としてついていくこととは、別のことなのだろう。
  - ヤコブとヨハネのところには、父と雇人がいる。
  - ルカでは、舟に乗り座って教えておられる。マルコ 3:9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。 マルコ 4:1 イエスはまたも、海べで教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。（マタイ 13:2 ところが、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは**舟**に乗ってすわられ、群衆はみな岸に立っていた。）
- 皆、漁師はやめてしまったのだろうか。基本的には、やめたのだろう。ルカでは「そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。」。
- ルカと似たエピソードが、ヨハネ 21:1-14 にもある。
  - ルカを見ると、イエスは、舟に乗って、群衆に教えておられたが、その教えに感激したのではなかったようだ。徹夜で、疲れていたかもしれない。目が覚めるようなことが起こったことが書かれている。
  - マタイ 17:27 しかし、彼らをつまずかせないために、海に行って、つり針をたれなさい。そして最初につれた魚をとって、その口をあけると、銀貨一枚が見つかるであろう。それをとり出して、わたしとあなたのために納めなさい」。
- ヨハネによる福音書の記述。もうひとり？
  - ヨハネ 18:15,16 シモン・ペトロともう一人の弟子は、イエスに付いて行った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の中庭に入ったが、ペトロは門の外に立っていた。大祭司の知り合いである、そのもう一人の弟子は、出て来て門番の女に話し、ペトロを中に入れた。
  - ヨハネ 20:2-8 そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って、彼らに告げた。「誰かが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、分かりません。」
- イエスのことを先生（ラビ）知ってはいたが、「主よ」といって、跪くことが、ペトロの悔い改めの表現で、そのペトロにかけたイエスの言葉によって、ペトロの人生が変わっていったのだろう。イエスに従って歩むことによって。

4.7　1:21-28 汚れた霊に取りつかれた男を癒やす

1:21 それから、彼らはカペナウムに行った。そして安息日にすぐ、イエスは会堂にはいって教えられた。
22 人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。 23 ちょうどその時、けがれた霊につかれた者が会堂にいて、叫んで言った、24 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。 25 イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。26 すると、けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。
27 人々はみな驚きのあまり、互に論じて言った、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」。 28 こうしてイエスのうわさは、たちまちガリラヤの全地方、いたる所にひろまった。

4.7.1　ルカ 4:31-37

4:31 それから、イエスはガリラヤの町カペナウムに下って行かれた。そして安息日になると、人々をお教えになったが、　32 その言葉に権威があったので、彼らはその教に驚いた。 33 すると、汚れた悪霊につかれた人が会堂にいて、大声で叫び出した、　34 「ああ、ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。35 イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。すると悪霊は彼を人なかに投げ倒し、傷は負わせずに、その人から出て行った。 36 みんなの者は驚いて、互に語り合って言った、「これは、いったい、なんという言葉だろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じられると、彼らは出て行くのだ」。 37 こうしてイエスの評判が、その地方のいたる所にひろまっていった。

マルコによる福音書 1 章 21-28 節福音書対照表

4.7.2　問い

1. イエスは、いつどこで教えていますか。
2. イエスの教えはどのようなものだったのでしょうか。人々の反応から考えてみましょう。
3. マルコとルカを比較して気づいたことを挙げてみましょう。
4. 汚れた霊につかれた者は何を叫んでいますか。イエスはどうしますか。そしてどうなりますか。
5. 人々は、何に驚いていますか。
6. あなたは、ここでどのようなことが起こったを思いますか。
7. イエスにとってたいせつなことは、何だったのでしょうか。

4.7.3 参照

21K [*51] K · [*52]. **22** [*53] . [*54] . **23**K [*55] [*56] **24** · , N ; [*57] ; , . **25** [*58] . [*59] . **26** [*60] . **27** [*61] [*62] . ; [*63] , . [*64], [*65] . **28** [*66] [*67] Γ .

4.7.4 記録

- 日時：2023 年 5 月 25 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）5 名

4.7.5 問いについて

1. イエスは、いつどこで教えていますか。
   - 21 それから、彼らはカペナウムに行った。そして安息日にすぐ、イエスは会堂にはいって教えられた。
   - [A] カペナウム、会堂で。

---

*51 : to go into, enter
*52 : to teach
*53 : i) to strike out, expel by a blow, drive out or away, ii) to cast off by a blow, to drive out, iii) to be struck with amazement, astonished, amazed
*54 : i) power of choice, liberty of doing as one pleases, ii) physical and mental power, iii) the power of authority (influence) and of right (privilege), iv) the power of rule or government (the power of him whose will and commands must be submitted to by others and obeyed)
*55 : not cleansed, unclean
*56 : to raise a cry from the depth of the throat, to cry out
*57 : to destroy
*58 : i) to show honour to, to honour, ii) to raise the price of, iii) to adjudge, award, in the sense of merited penalty, iv) to tax with fault, rate, chide, rebuke, reprove, censure severely
*59 : i) to close the mouth with a muzzle, to muzzle, ii) metaph; to stop the mouth, make speechless, reduce to silence, to become speechless, iii) to be kept in check
*60 : to convulse, tear
*61 : to be astonished, to astonish, terrify
*62 : i) to seek or examine together, ii) in the NT to discuss, dispute, question
*63 : new
*64 : to enjoin upon, order, command, charge
*65 : i) to listen, to harken, ii) to harken to a command
*66 : i) the sense of hearing, ii) the organ of hearing, the ear, iii) the thing heard
*67 : lying round about, neighbouring

- [DQ] だれでも会堂で教えることができたのでしょうか。

2. イエスの教えはどのようなものだったのでしょうか。人々の反応から考えてみましょう。
   - 22 人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。
   - [DQ] イエスのどのような教え方が、権威ある者のように教えられたと受け取られたのでしょう。
3. マルコとルカを比較して気づいたことを挙げてみましょう。
4. 汚れた霊につかれた者は何を叫んでいますか。イエスはどうしますか。そしてどうなりますか。
   - 23 ちょうどその時、けがれた霊につかれた者が会堂にいて、叫んで言った、24 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。25 イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。26 すると、けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。
5. 人々は、何に驚いていますか。
   - 27 人々はみな驚きのあまり、互に論じて言った、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」。 28 こうしてイエスのうわさは、たちまちガリラヤの全地方、いたる所にひろまった。
6. あなたは、ここでどのようなことが起こったを思いますか。
7. イエスにとってたいせつなことは、何だったのでしょうか。

4.7.6 メモ

- イエスは、ガリラヤで宣教を開始したが（1:14）安息日に会堂で教えている。
  - ユダヤ人共同体に、聖書の教師として、一程度、認められたいたことが分かる。参照
  - ある程度認知されていたことと共に、このような状態がどの程度続くかも、注視が必要。
- 「律法学者のようにではなく、権威あるもののように」当時の一般的な訓練を受けたわけではない、ある程度自由に語るスタイルが表現されていると共に、権威あるもののようには、詳細は不明だが、27 節の権威ある教えとは、関係しているだろう。
  - 山上の説教（マタイ 5-7）などからも、ある程度、想像はつく。ただ、マルコでは、そのようなことは語っていない。ルカ 5:1-11 を考えると、群衆に人気があったとも考えられる。ただ、内容まで、理解して、このように告白しているかは不明。

- 汚れた霊の記事をどう読むか。
  - ある時期には、悪霊に憑かれていると表現し、あるときには、気狂いとあざわらわれ、ある時は、精神分裂病とされ、ある時は、統合失調症として憐れまれたりしつつも、遠ざけられていた存在かもしれない。
  - 「イエスよ、放っておいてくれ。痛めつけ、裁くために来たのか、神から使わされたとでも言うのだろう。」「あなたはたいせつなひとりのひと。」特別のケアをされたのかもしれない。少なくとも、このひとの異常な状態と、この人とを分離・区別している。
  - 現代でも、オープンダイアログによる、愛の、治療もある。(読書記録参照)「治療すなわち『キュア』と考えるなら難しいことでも、『ケアにかぎりなく近いキュア』と考えるなら、ありそうに思えてきませんか?」「精神分析が言葉をメスとして用いるというなら、オープンダイアローグは言葉を包帯とし用いるのです。」
  - 奇跡などについて：参照
- テキストからわかるのは、イエスの教えは、律法学者のようではなく「権威のある」教えで、それは、カリスマ性をも意味するが、そのあとの、悪霊を追い出すことによって、力を伴う教えであることを、会堂に来ていた人たちが受け取ったことである。
- また、「神の国が近づいた」ということが、悪霊につかれた人から、悪霊が逃げ出すことによって、皆に示される意味を持っている。そうであれば、悪霊につかれたひとには、神の国は来たとして、そこに焦点を当てることも可能。
- 排除され、憎まれていたと思われる悪霊につかれたひとの、悪霊と、この人とを区別し、分けることで、ひとりの人が自分を取り戻すことができたとも言える。現代の精神分裂病、統合失調症と同一視する根拠はないが、そのような病に苦しんでいる人にとっても、福音であることは確か。

4.8 1:29-34 多くの病人を癒やす

1:29 それから会堂を出るとすぐ、ヤコブとヨハネとを連れて、シモンとアンデレとの家にはいって行かれ
た。 30 ところが、シモンのしゅうとめが熱病で床についていたので、人々はさっそく、そのことをイエス
に知らせた。31 イエスは近寄り、その手をとって起されると、熱が引き、女は彼らをもてなした。 32 夕
暮になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのところに連れてきた。 33 こうし
て、町中の者が戸口に集まった。 34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、ま
た多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを
知っていたからである。

4.8.1 マタイ 8:14-17

8:14 それから、イエスはペテロの家にはいって行かれ、そのしゅうとめが熱病で、床についているのをごらんになった。15 そこで、その手にさわられると、熱が引いた。そして女は起きあがってイエスをもてなした。 16 夕暮になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れてきたので、イエスはみ言葉をもって霊どもを追い出し、病人をことごとくおいやしになった。 17 これは、預言者イザヤによって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためである。

4.8.2 ルカ 4:38-41

4:38 イエスは会堂を出てシモンの家におはいりになった。ところがシモンのしゅうとめが高い熱を病んでいたので、人々は彼女のためにイエスにお願いした。39 そこで、イエスはそのまくらもとに立って、熱が引くように命じられると、熱は引き、女はすぐに起き上がって、彼らをもてなした。40 日が暮れると、いろいろな病気になやむ者をかかえている人々が、皆それをイエスのところに連れてきたので、そのひとりびとりに手を置いて、おいやしになった。41 悪霊も「あなたこそ神の子です」と叫びながら多くの人々から出ていった。しかし、イエスは彼らを戒めて、物を言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスはキリストだと知っていたからである。

マルコによる福音書 1 章 29-34 節福音書対照表

4.8.3 問い

1. マルコ、マタイ、ルカを読んでみましょう。シモンとアンデレの家ではどんな問題がありましたか。
2. 姑（しゅうと）の回復の様子はどのように記されていますか。
3. 夕暮れには、どのようなことが起きますか。それはなぜでしょうか。
4. イエスは何をしますか。
5. イエスはなぜ、悪霊を黙らせるのでしょうか。

4.8.4 参照

- マタイ 8:17 - イザヤ 53:3,4 彼は侮られて人に捨てられ、／悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、／彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。 まことに彼はわれわれの病を負い、／われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、／彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられのだと。

- 病を癒すことと、病を負うことはどう違うのか。
- 病を知っていたとは？
- ルカ 8:46 しかしイエスは言われた、「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」。
- Hospital の語源：ChatGPT
  - “Hospital” という単語は、ラテン語の”hospitālis” に由来しています。“hospitālis” は、“hospes”（宿泊客、旅人）という単語に由来しており、中世ラテン語で「旅人や貧しい人のための宿泊所」という意味で使われていました。

    中世ヨーロッパでは、キリスト教の信仰に基づき、修道院や宗教団体が病人や貧しい人を収容する施設を運営していました。これらの施設は、病院（hospital）と呼ばれ、病人の治療や看護、貧しい人たちへの食事や寝床が提供されていました。

    現代の病院は、中世の病院から発展したものであり、医学や科学技術の進歩によって、より効果的な医療が提供されるようになりました。しかし、病院の最初の目的は、依然として病人の治療と看護にあります。

    なお、英語以外にも、フランス語の”hôpital”、スペイン語の”hospital”、イタリア語の”ospedale” など、多くのヨーロッパ言語で「病院」を意味する単語が”hospitālis” に由来しています。

29 K Σ . **30** *68 Σ

*69 *70, . **31** *71 *72 *73. *74

*75, . **32** *76 , *77 , *78 *79

*80.**33** *81 . **34** *82 *83 *84

*85 *86 , .

---

*68 : mother-in-law, a wife’s mother

*69 : to have lain down, i.e. to lie prostrate

*70 : to be sick with a fever

*71 : i) to come to, approach, ii) draw near to iii) to assent to

*72 : i) to have power, be powerful, ii) to get possession of, iii) to hold

*73 : i) by the help or agency of any one, by means of any one, ii) fig. applied to God symbolising his might, activity, power

*74 : i) to send away, ii) to permit, allow, not to hinder, to give up a thing to a person, iii) to leave, go way from one

*75 : i) fiery heat, ii) fever

*76 : i) late, ii) evening

*77 : i) to go into, enter, ii) go under, be plunged into, sink in

*78 : i) to carry, ii) to bear, i.e. endure, to endure the rigour of a thing, to bear patiently one’s conduct, or spare one (abstain from punishing or destroying), iii) to bring, bring to, bring forward

*79 : i) miserable, to be ill, ii) improperly, wrongly, iii) to speak ill of, revile, one

*80 : to be under the power of a demon.

*81 : i) to gather together besides, to bring together to others already assembled, ii) to gather together against, iii) to gather together in one place

*82 : i) to serve, do service, ii) to heal, cure, restore to health

*83 : i) a various colours, variegated, ii) of various sorts

*84 : disease, sickness

*85 : to be a servant, attendant, domestic, to serve, wait upon

*86 : i) to send away, ii) to permit, allow, not to hinder, to give up a thing to a person, iii) to leave, go way from one

4.8.5　記録

- 日時：2023 年 6 月 1 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）4 名

4.8.6　問いについて

1. マルコ、マタイ、ルカを読んでみましょう。シモンとアンデレの家ではどんな問題がありましたか。
    - 29 それから会堂を出るとすぐ、ヤコブとヨハネとを連れて、シモンとアンデレとの家にはいって行かれた。 30 ところが、シモンのしゅうとめが熱病で床についていたので、人々はさっそく、そのことをイエスに知らせた。
2. 姑（しゅうと）の回復の様子はどのように記されていますか。
    - 31 イエスは近寄り、その手をとって起されると、熱が引き、女は彼らをもてなした。
3. 夕暮れには、どのようなことが起きますか。それはなぜでしょうか。
    - 32 夕暮になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのところに連れてきた。 33 こうして、町中の者が戸口に集まった。
4. イエスは何をしますか。
    - 34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。
    - [DQ] イエスにとって、癒しとはどのような働きだったのでしょうか。
5. イエスはなぜ、悪霊を黙らせるのでしょうか。

4.8.7　メモ

- マルコと、マタイ、ルカでは話の続き方が異なっていることに注意。マタイと、ルカには、ヤコブとヨハネが一緒であることは、書かれていない。もしかすると、一緒ではなかったのかもしれない。マタイでは、山上の説教のあと、いくつかの癒しが記されそのあと。ルカでは、弟子たちを招くより前に記されている。曜日も変わっており、マルコでも、20 節と、21 節の間に、切れ目がある。
- なぜ人々はイエスに熱病のことを知らせたのだろうか。この時点で、すでに、イエスは癒すことができると信じていたのだろうか。
- ペテロは結婚していた。（ペテロの妻について）

- 1 コリント 9:5 わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちや**ケパ**のように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。
- アレキサンドリアの教父クレメンス 150–215 は伝説として、ペテロの妻は、バルナバの兄弟アリストブロスの娘で、ペルペチュアまたはコンコルディアとよんでいる伝説もある。

- なぜ、イザヤ 53 章4 節を引用したのか。
  - ChatGPT: マタイ 8:17 におけるイザヤ書 53 章の預言の引用には、イエス・キリストの「苦難のしもべ」であること、彼が人々を救う力を持っていること、そして彼が人々を救うために犠牲を払ったことを示す意味が含まれています。また、この引用は、キリスト教徒にとって、復活や救いの希望を与えるものでもあります。
  - 一般的には、共観福音書では、贖罪のための苦難というモチーフは薄い。癒しと悪霊を追い出すこと自体に、イザヤ書に結びつくものを認めていたのだろう。
  - イザヤ 53 章の、マタイ 8:17 以外での引用。ルカ 22:37 （マルコ 15:28)、使徒 8:32-35。
  - ユダヤ教での解釈は、異なること、および、旧約聖書のギリシャ語訳セプチュアギンタの表現も関係していることの確認も、必要。
- いやしについて：三つのギリシャ語
  - いやしのたいせつな部分は、病人、悪霊に憑かれている人の苦しみを和らげること。現代的な医療（だけ）が、いやしというわけではない。その苦しみを受け取ること、ケアすること、こころをこめて治療すること、それは、免疫力をあげることにも資するかもしれない。それには、罪が赦されること、手などに触れて、安心できること、医療行為が進んでも、それは、残るかもしれない。
- 「また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。」とあるが、24 節では、物を言っているのでは。この時も、これ以上言わせなかったようなので、それを言っているのか。

4.9 1:35-39 巡回して宣教する

1:35 朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。 36 すると、シモンとその仲間とが、あとを追ってきた。37 そしてイエスを見つけて、「みんなが、あなたを捜しています」と言った。 38 イエスは彼らに言われた、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教を宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」。 39 そして、ガリラヤ全地を巡りあるいて、諸会堂で教えを宣べ伝え、また悪霊を追い出された。

4.9.1 ルカ 4:42-44

> 4:42 夜が明けると、イエスは寂しい所へ出て行かれたが、群衆が捜しまわって、みもとに集まり、自分たちから離れて行かれないようにと、引き止めた。 43 しかしイエスは、「わたしは、ほかの町々にも神の国の福音を宣べ伝えねばならない。自分はそのためにつかわされたのである」と言われた。 44 そして、ユダヤの諸会堂で教を説かれた。

マルコによる福音書 1 章 35-39 節福音書対照表

4.9.2 問い

1. 21 節から 34 節を読み、前日の出来事を思い起こしてみましょう。どんなことがありましたか。
2. イエスの祈りについてどんなことがわかりますか。
3. 人々はなぜ、イエスを探しているのでしょうか。
4. イエスは、どのように答え、またそのあと、どのような活動をしましたか。
5. イエスは、なぜ、「附近の町々にみんなで行って、教えを宣べ伝える」ことを選んだのでしょう。
6. イエスは教えを宣べ伝えることと、悪霊を追い出したり、病をいやしたりすることについて、どのように考えていたのでしょうか。
7. イエスは、福音宣教の初期の活動で、どのような経験をし、何を神様の御心として受け取ったのでしょうか。

4.9.3 参照

- この前日（安息日とその夜）のこと
  1. カペナウムの会堂で教えた。(21-22)
  2. けがれた霊を追い出す。(23-27)
  3. イエスのうわさが、たちまちガリラヤの全地方、いたる所にひろまった。 (28)
  4. シモンのしゅうとめの熱病を癒す。(29-31)
  5. 日没後、人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのところに連れてきて、町中の者が戸口に集まった。(32,33)
  6. さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出した。(34a)

- イエスの祈りの記録（参考：祈りについて）
  - **受洗：**ルカ 3:21-22 さて、民衆がみなバプテスマを受けたとき、イエスもバプテスマを受けて祈っておられると、天が開けて、 聖霊がはとのような姿をとってイエスの上に下り、そして天から声がした、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。
  - **活動的な安息日明け：**マルコ 1:35 朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。**（重い皮膚病の人を癒してから）**ルカ 5:16 しかしイエスは、寂しい所に退いて祈っておられた。
  - **十二弟子の選出前：**ルカ 6:12 このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた。
  - **五千人給食後：**マルコ 6:46 そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた。マタイ 14:23 そして群衆を解散させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。 ヨハネ 6:15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。
  - **ペテロの告白・受難告知前：**ルカ 9:18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちが近くにいたので、彼らに尋ねて言われた、「群衆はわたしをだれと言っているか」。
  - **山上の変貌：**ルカ 9:28-29 これらのことを話された後、八日ほどたってから、イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。29 祈っておられる間に、み顔の様が変り、み衣がまばゆいほどに白く輝いた。 祈っておられる間に、み顔の様が変り、み衣がまばゆいほどに白く輝いた。
  - **逮捕直前（ゲッセマネの祈り）：**マルコ 14:32-42、マタイ 26:39-46 、ルカ 22:40-45、ヨハネ 17 章（とりなしの祈り）
    - マルコ 14:36「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。
  - 他にもイエスが神に語りかける場所として
    - ヨハネ 6:11 そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。
    - ヨハネ 11:41,42 人々は石を取りのけた。すると、イエスは目を天にむけて言われた、「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します。42 あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています。しかし、こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるためであります」。
    - ヨハネ 12:27, 28 今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。 父よ、み名があがめ

られますように」。28 すると天から声があった、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」。

35 K [*87] [*88] [*89] [*90] [*91] [*92] [*93]. **36** [*94] Σ , , **37** [*95] [*96] . **38** . [*97] [*98], [*99]. . **39** K Γ .

4.9.4 記録

- 日時：2023 年 6 月 8 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）5 名

4.9.5 問いについて

1. 21 節から 34 節を読み、前日の出来事を思い起こしてみましょう。どんなことがありましたか。
2. イエスの祈りについてどんなことがわかりますか。
3. 人々はなぜ、イエスを探しているのでしょうか。
4. イエスは、どのように答え、またそのあと、どのような活動をしましたか。
5. イエスは、なぜ、「附近の町々にみんなで行って、教えを宣べ伝える」ことを選んだのでしょう。
6. イエスは教えを宣べ伝えることと、悪霊を追い出したり、病をいやしたりすることについて、どのように考えていたのでしょうか。

---

*87 : i) in the morning, early, ii) he fourth watch of the night, from 3 o'clock in the morning until 6 o'clock approximately

*88 : nightly, nocturnal

*89 : greatly, exceedingly, exceedingly beyond measure

*90 : i) to cause to rise up, raise up, ii) to rise, stand up, iii) at arise, appear, stand forth

*91 : i) to go away, depart, ii) to go away

*92 : solitary, lonely, desolate, uninhabited

*93 : to offer prayers, to pray

*94 : to follow after, follow up

*95 : i) to come upon, hit upon, to meet with, ii) to find by enquiry, thought, examination, scrutiny, observation, to find out by practice and experience, iii) to find out for one's self, to acquire, get, obtain, procure

*96 : i) to seek in order to find, ii) to seek i.e. require, demand

*97 : i) to lead, take with one, ii) to lead, iii) to pass a day, keep or celebrate a feast, etc., iv) to go, depart

*98 : a village approximating in size and number of inhabitants to a city, a village city, a town

*99 : i) to be a herald, to officiate as a herald, ii) to publish, proclaim openly: something which has been done, iii) used of the public proclamation of the gospel and matters pertaining to it, made by John the Baptist, by Jesus, by the apostles and other Christian teachers

7. イエスは、福音宣教の初期の活動で、どのような経験をし、何を神様の御心として受け取ったのでしょうか。

4.9.6 メモ

- イエスに焦点があたっているが、人々と、弟子たちもその場にいるので、それぞれの人たちが、何を求めているかも、考えてみたい。特に、弟子たちは、人々と同じなのか、イエスに近いのか、微妙な立ち位置に感じる。
- 口語訳では「みんな」が 2 回出てくる。まず、36 「シモンとその仲間とが、あとを追ってきた。」「37 みんなが、あなたを捜しています」38 「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教を宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」。「みんな」は誰だろうか。イエスと共に行動するものだろうか。主とイエス、イエスとみんな。イエスの祈りの内容を知りたい。
- イエスが「朝はやく、夜の明けるよほど前」に「寂しい所へ出て行き」祈っていたことが書かれている。ルカにその記述はないが、重い皮膚病のひとの癒しの後 5 章 15,16 節に「15 しかし、イエスの評判はますますひろまって行き、おびただしい群衆が、教を聞いたり、病気をなおしてもらったりするために、集まってきた。 16 しかしイエスは、寂しい所に退いて祈っておられた。」の記述がある。
- マルコの前段でも「32 夕暮になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのところに連れてきた。 33 こうして、町中の者が戸口に集まった。 34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。」とあり、やはり、前段の並行箇所である、マタイ 8 章 16 節でも「夕暮になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れてきたので、イエスはみ言葉をもって霊どもを追い出し、病人をことごとくおいやしになった。」とあり、ルカには、大勢の記録が、上記の箇所にあることから、同様の時期または背景のもとで、祈ったことが推測できる。
- イエスのことばと行動だけから判断すると、ルカの表現を借りると「イエスの評判はますますひろまって行き、おびただしい群衆が、教を聞いたり、病気をなおしてもらったりするために、集まってきた。」ときに、祈り、「38 ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教を宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」。と言って、その場を退いたことがわかる。
- 続いて「39 そして、ガリラヤ全地を巡りあるいて、諸会堂で教えを宣べ伝え、また悪霊を追い出された。」とあり、教えを述べ伝えるだけではなく、悪霊を追い出すこともしている。このあとの、思い皮膚病を患っている人の癒しからも、病気も癒したと思われる。活動に変化はないように見える。
- 祈り（主との対話）の中で、思いとずれていること、しかし、御心に従う、マルコ 14:36「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。と近いことが示されたのかもしれない。
- 「神の国は近い」の共有の、難しさを認識しつつ、神の子（しもべ）として、歩み続けることを決意したの

かもしれない。

4.10　1:40-45 規定の病を患っている人を清める

1:40 ひとりの重い皮膚病にかかった人が、イエスのところに願いにきて、ひざまずいて言った、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。41 イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。42 すると、重い皮膚病が直ちに去って、その人はきよくなった。 43 イエスは彼をきびしく戒めて、すぐにそこを去らせ、こう言い聞かせられた、 44 「何も人に話さないように、注意しなさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセが命じた物をあなたのきよめのためにささげて、人々に証明しなさい」。 45 しかし、彼は出て行って、自分の身に起ったことを盛んに語り、また言いひろめはじめたので、イエスはもはや表立っては町に、はいることができなくなり、外の寂しい所にとどまっておられた。しかし、人々は方々から、イエスのところにぞくぞくと集まってきた。

4.10.1　マタイ 8:1-4

8:1 イエスが山をお降りになると、おびただしい群衆がついてきた。2 すると、そのとき、ひとりの重い皮膚病にかかった人がイエスのところにきて、ひれ伏して言った、「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。 3 イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると、重い皮膚病は直ちにきよめられた。4 イエスは彼に言われた、「だれにも話さないように、注意しなさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセが命じた供え物をささげて、人々に証明しなさい」。

4.10.2　ルカ 5:12-16

5:12 イエスがある町におられた時、全身重い皮膚病にかかった人がそこにいた。イエスを見ると、顔を地に伏せて願って言った、「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。 13 イエスは手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると、重い皮膚病がただちに去ってしまった。 14 イエスは、だれにも話さないようにと彼に言い聞かせ、「ただ行って自分のからだを祭司に見せ、それからあなたのきよめのため、モーセが命じたとおりのささげ物をして、人々に証明しなさい」とお命じになった。 15 しかし、イエスの評判はますますひろまって行き、おびただしい群衆が、教を聞いたり、病気をなおしてもらったりするために、集まってきた。 16 しかしイエスは、寂しい所に退いて祈っておられた。

マルコによる福音書 1 章 40-45 節福音書対照表

4.10.3　問い

1. マルコとともに、マタイとルカも読み、気づいたことを挙げてみましょう。
2. 40 節の重い皮膚病の人の言葉からはどんなことが読み取れますか。
3. イエスについてはどのように描かれていますか。そしてどうなりますか。
4. イエスは重い皮膚病の人にどのように言い聞かせますか。
5. なぜ、重い皮膚病の人はイエスが言われたようにはしなかったのでしょうか。そしてどうなりますか。
6. マルコは「イエス・キリストの福音のはじめ」とこの福音書を書きだし、私達は第一章の終わりまで学んできました。この一章にはイエスがどんな方だと描かれていたでしょうか。あなたはイエスについてどのような印象を受けましたか。

4.10.4　参照

4.10.4.1　重い皮膚病：参照

- 規定の病（日本聖書協会 重要な訳語の変更）

  旧約におけるヘブライ語ツァラアト：「ツァラアト」(新約においてはギリシア語訳「レプラ」) については、一九九六年の「らい予防法」の廃止も受け、一九九七年に新共同訳の新約において「らい病」と訳されていたレプラをすべて旧約の訳語に合わせ「重い皮膚病」に改めていましたが、なお同訳語が必ずしも適切なものでないとの指摘を受け、本新翻訳事業においても当初から検討を続けました。最終的に第七回検討委員会 (二〇一七年三月一三日) において、これを「規定の病」とすることで合意して理事会に答申し、日本聖書協会二〇一八年度第三回理事会 (二〇一八年六月一日) においてこの答申が承認されました。「規定の病」は「律法で規定された病」を意味し、皮膚だけでなく家や革製品についても同じ訳語を用いることとしました。「規定の病」は「重い」「皮膚」という、原語にない意味を含まない点で、従来の「重い皮膚病」の訳語の持つ課題をある程度解決するものと考えています。レビ記の関係する箇所の訳文は次のようになります。「祭司がその皮膚の患部を調べて、その患部の毛が白く変わり、皮膚の下まで及んでいるなら、それは規定の病である。祭司はそれを確認したら、その人を汚けがれていると言い渡す。」(レビ記一三 3)「祭司は行って調べる。家にかびが広がっていたなら、それは家に生じる悪性の規定の病である。その家は汚けがれている。」(レビ記一四)

- Q.（新改訳聖書）第 3 版では，従来の「らい病人」は「ツァラアトに冒された人」と訳されています。「ツァラアト」とは何ですか？　と聞かれた場合、何と答えればよいでしょうか？

  - A. 聖書のツァラアトは皮膚に現れるだけでなく、家の壁や衣服にも認められる現象であり，それが厳密に何を指しているかはいまだに明らかではありません。しかし，それは「何らかの原因により、人

体や物の表面が冒された状態」を描写しています。(第 3 版「あとがき」より）新聖書刊行会 Q&A からの引用

- レビ記 13:44,45 その人は重い皮膚病に冒された者であって、汚れた者である。祭司はその人を確かに汚れた者としなければならない。患部が頭にあるからである。重い皮膚病の患者は、その衣服を裂き、その頭を現し、その口ひげをおおって『汚れた者、汚れた者』と呼ばわらなければならない。

- レビ記 14 章:1-32 1 主はまたモーセに言われた、2「重い皮膚病の患者が清い者とされる時のおきては次のとおりである。すなわち、その人を祭司のもとに連れて行き、3 祭司は宿営の外に出て行って、その人を見、もし重い皮膚病の患部がいえているならば、

4.10.4.2 ギリシャ語の言葉

- **深くあわれむ** **:** 12 回マタイ 9:36, 14:14, 15:32, 18:27, マルコ 1:41, 6:34, 8:2, 9:22, ルカ 7:13, 10:33, 15:20。参照

- **きびしく戒め** (em-brim-ah'-om-ahee)**:** 5 回マタイ 9:30, マルコ 1:43, 14:5, ヨハネ 11:33

40 K *100 11:38 *101 [*102] *103 *104
*105. **41** *106 *107 . , ·**42** ,
, . **43** *108 **44** . , , *109
*110 *111 *112 M , *113 . **45** *114

*100 : i) scaly, rough, ii) leprous, affected with leprosy
*101 : i) to call to one's side, call for, summon, ii) to address, speak to, (call to, call upon), which may be done in the way of exhortation, entreaty, comfort, instruction, etc.
*102 : to fall on the knees, the act of imploring aid, and of expressing reverence and honour
*103 : to will, have in mind, intend
*104 : i) to be able, have power whether by virtue of one's own ability and resources, or of a state of mind, or through favourable circumstances, or by permission of law or custom, ii) to be able to do something, iii) to be capable, strong and powerful
*105 : i) to make clean, cleanse, ii) to pronounce clean in a levitical sense
*106 : to be moved as to one's bowels, hence to be moved with compassion, have compassion (for the bowels were thought to be the seat of love and pity)
*107 : to fasten one's self to, adhere to, cling to
*108 : to charge with earnest admonition, sternly to charge, threatened to enjoin
*109 : i) to show, expose to the eyes, ii) metaph. to give evidence or proof of a thing
*110 : i) a priest, one who offers sacrifices and in general in busied with sacred rites, ii) metaph. of Christians, because, purified by the blood of Christ and brought into close intercourse with God, they devote their life to him alone and to Christ
*111 : i) to bring to, lead to, ii) to be borne towards one, to attack, assail
*112 : i) to assign or ascribe to, join to, ii) to enjoin, order, prescribe, command
*113 : testimony
*114 : i) to be the first to do (anything), to begin, ii) to be chief, leader, ruler, iii) to begin, make a beginning

[*115] [*116] , , , , .
[*117].

4.10.5 記録

- 日時：2023 年 6 月 15 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）7 名

4.10.6 問いについて

1. マルコとともに、マタイとルカも読み、気づいたことを挙げてみましょう。
2. 40 節の重い皮膚病の人の言葉からはどんなことが読み取れますか。
3. イエスについてはどのように描かれていますか。そしてどうなりますか。
4. イエスは重い皮膚病の人にどのように言い聞かせますか。
5. なぜ、重い皮膚病の人はイエスが言われたようにはしなかったのでしょうか。そしてどうなりますか。
6. マルコは「イエス・キリストの福音のはじめ」とこの福音書を書きだし、私達は第一章の終わりまで学んできました。この一章にはイエスがどんな方だと描かれていたでしょうか。あなたはイエスについてどのような印象を受けましたか。

4.10.7

4.10.8 メモ

- 重い皮膚病は、ギリシャ語では、 (lep-ros': scaly, rough ざらざらのでこぼこの) が使われている。ヘブル語で書かれた旧約聖書の や、 （いずれも語根は to be diseased of skin, be leprous）の七十人訳の訳語としても使われている。さまざまな皮膚病を表している。しかし、ハンセン氏病のような古代において恐れられていた感染病の症状でもあるため、共同体ではとくに、注意しなければいけない症状だったと思われ、旧約聖書では、その判断は祭司がすることになっており、汚れている・汚れていないの判断と共同体に対する宣言をすることになっていた。

[*115] : i) to be a herald, to officiate as a herald, ii) to publish, proclaim openly: something which has been done, iii) used of the public proclamation of the gospel and matters pertaining to it, made by John the Baptist, by Jesus, by the apostles and other Christian teachers

[*116] : i) to spread abroad, blaze abroad, ii) to spread abroad his fame or renown

[*117] : from all sides, from every quarter

  - 旧約聖書で実際に重い皮膚病にかかったひとについてどのように記述されているか確認することもたいせつ。モーセの手、ミリアム、ナーマン、ウジヤ、アッシリアの包囲のときの重い皮膚病の人たち

- どうして、もっと単純に、治して下さいと言わないのか
  - おそらく、病気の苦しさよりも、汚れているとされていることが、社会的にも、自らの尊厳からも、耐え難い苦痛だったのではないだろうか。

- イエスはなぜモーセの定めの実行を命じたのでしょうか。
  - 社会的につながることが不可欠と理解していたのでは。

- イエスはなぜ語らないように注意したのだろうか。
  - イエスは彼らに言われた、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教を宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」。(38) が背景にある。

- 気づいたこと
  - マルコ 1:40 ひざまずいて、マタイ、ひれふして、ルカ、顔を地に伏せて願って、と表現が少しずつずれている。マタイ、ルカには、「主よ K [*118]」のことばも伴っている。
  - きよさは、第一に神との交わりが絶たれ、第二に人との交わりが絶たれ、第三に自分の尊厳が失われた（じぶんが自分でいることが許容される、あなたはあなたでいいよと言えない）状態。永遠の滅びにとどまっている状態。
  - ヨハネ 3:36 御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである」。（たとえ、御子を信じていると言っていたとしても）だれでも、神様の前には、きよくない存在なのかもしれない。それをみとめてひざまずけるかどうか。
  - マルコ 1:41 深く憐れんで、手を伸ばして（きよくない）彼にさわり。いやしのことばは、共観福音書共通「そうしてあげよう、きよくなれ」
  - マルコ 1:42 直ちに治るとはどういうことだろうか。ちょっと想像しにくい。それがわかる兆候はあったのだろう。治ったことがわかる程度になおり始めたのかもしれない。重い皮膚病が何であったかは、問うても仕方がないように思う。
  - マルコ 1:43,44 誰にも言わず、祭司に見せ、献げものをし、人々に証明。これらが全体的な回復には、必要であるとイエスが考えたからだろう。自分に対して、神様に対して、人々に対して関係を回復することは本質的なのだろう。たんに、群衆が押し寄せてくる、不都合を嫌ったわけではないかもしれない。
  - ルカには、教えを聴きにきたことも含まれている。

[*118] :he to whom a person or thing belongs, about which he has power of deciding; master, lord, the Sept.for ,

- 一章を通して：人間は、自分のことを思い、主の苦しみ、痛み、望みを知ろうとしない。それでも、イエスは、種を蒔き続ける。神様がそれを育ててくださると信頼しているからか。わたしは、イエスのように、Be available, stay vulnerable でありつつ、主の、苦しみと痛みを、少しでも受け取り、主の望みを受け取っていきたい。とても、難しいことだろうが。

4.11 2:1-12 体の麻痺した人を癒やす

2:1 幾日かたって、イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるといううわさが立ったので、2 多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。3 すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。4 ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。6 ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、7 「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。8 イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。9 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。10 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、11 「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。12 すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

4.11.1 マタイ 9:1-8

1 さて、イエスは舟に乗って海を渡り、自分の町に帰られた。 2 すると、人々が中風の者を床の上に寝かせたままでみもとに運んできた。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言われた。 3 すると、ある律法学者たちが心の中で言った、「この人は神を汚している」。4 イエスは彼らの考えを見抜いて、「なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか。 5 あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。 6 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言い、中風の者にむかって、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。7 すると彼は起きあがり、家に帰って行った。 8 群衆はそれを見て恐れ、こんな大きな権威を人にお与えになった神をあがめた。

4.11.2 ルカ 5:17-26

17 ある日のこと、イエスが教えておられると、ガリラヤやユダヤの方々の村から、またエルサレムからきたパリサイ人や律法学者たちが、そこにすわっていた。主の力が働いて、イエスは人々をいやされた。18

その時、ある人々が、ひとりの中風をわずらっている人を床にのせたまま連れてきて、家の中に運び入れ、イエスの前に置こうとした。19 ところが、群衆のためにどうしても運び入れる方法がなかったので、屋根にのぼり、瓦をはいで、病人を床ごと群衆のまん中につりおろして、イエスの前においた。20 イエスは彼らの信仰を見て、「人よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。21 すると律法学者とパリサイ人たちとは、「神を汚すことを言うこの人は、いったい、何者だ。神おひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」と言って論じはじめた。22 イエスは彼らの論議を見ぬいて、「あなたがたは心の中で何を論じているのか。23 あなたの罪はゆるされたと言うのと、起きて歩けと言うのと、どちらがたやすいか。24 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威を持っていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに対して言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取り上げて家に帰れ」と言われた。25 すると病人は即座にみんなの前で起きあがり、寝ていた床を取りあげて、神をあがめながら家に帰って行った。26 みんなの者は驚嘆してしまった。そして神をあがめ、おそれに満たされて、「きょうは驚くべきことを見た」と言った。

マルコによる福音書 2 章 1-12 節福音書対照表

4.11.3 問い

1. マルコを読み、ここで起こったことを確認し、気づいたこと、疑問点を挙げてみましょう。
2. 中風の人はどのように運ばれてきましたか。なぜこれほど人が集まっていたのでしょう。イエスは何をしているところでしたか。マタイやルカも合わせて状況を想像してみましょう。
3. イエスはどうしますか。中風の人にはこのことばはどう響いたと思いますか。
4. 「彼らの信仰」とは誰のどのような信仰なのでしょうか。
5. 律法学者は、どう反応しますか。なぜ、そのような反応をするのでしょうか。
6. イエスは、どんなことを気付かせるために 9 節の質問をしていますか。イエスの問いに対して律法学者はどう考えていたでしょう。あなたは、どう考えますか。
7. イエスは、中風の人にどのように命じ、そして、どうなりますか。

4.11.4 参照

- パリサイ人・律法学者：参照
- 病気と罪の関係：参照
- 中風（　　）について：参照
- 人の子（　　）：参照

1 K *119 K , *120 . **2** *121 *122

, . **3** K *123 *124 *125 *126 . **4**

*127 *128 *129 *130 , *131 *132 *133

*134 *135 . **5** *136 *137 . , *138 .

6 *139 *140 ·**7** ; *141 .

; **8** *142 .

; **9** *143 , . , . *144

;**10** *145 – ·**11**

, *146 . **12** *147 ,

*119 (2AAI-3S): to go out or come in: to enter

*120 (API-3S): i) to be endowed with the faculty of hearing, not deaf, ii) to hear, iii) to hear something

*121 (API-3P): i) to gather together, to gather, ii) to bring together, assemble, collect, iii) to lead with one's self

*122 (PAN): i) to leave space (which may be filled or occupied by another), to make room, give place, yield, ii) to go forward, advance, proceed, succeed, iii) to have space or room for receiving or holding something

*123 (PNI-3P) N: middle or passive doponent

*124 (PAP-NPM): i) to carry, ii) to bear, i.e. endure, to endure the rigour of a thing, to bear patiently one's conduct, or spare one (abstain from punishing or destroying), iii) to bring, bring to, bring forward

*125 : paralytic

*126 (PPP-ASM): i) to raise up, elevate, lift up, ii) to take upon one's self and carry what has been raised up, to bear, iii) to bear away what has been raised, carry off

*127 PNP-NPM

*128 (AAN): to approach unto

*129 (AAI-3P): to uncover, take off the roof

*130 (ASF): a roof: of a house

*131 (AAP-NPM): i) to dig out, to pluck out (the eyes), ii) to dig through

*132 (PAI-3P): i) to loosen, slacken, relax, ii) to let down from a higher place to a lower

*133 (ASM): a pallet, camp bed (a rather simple bed holding only one person)

*134 (NSM): paralytic; a) suffering from the relaxing of the nerves of one's side, b) disabled, weak of limb

*135 (INI-3S): to have lain down, i.e. to lie prostrate; a) of the sick, b) of those at meals, to recline

*136 (2AAP-NSM): i) to see with the eyes, ii) to see with the mind, to perceive, know, iii) to see, i.e. become acquainted with by experience, to experience, iv) to see, to look to, v) I was seen, showed myself, appeared

*137 (ASF): i) conviction of the truth of anything, belief; in the NT of a conviction or belief respecting man's relationship to God and divine things, generally with the included idea of trust and holy fervour born of faith and joined with it, ii) fidelity, faithfulness

*138 (RPI-3P): i) to send away, ii) to permit, allow, not to hinder, to give up a thing to a person, iii) to leave, go way from one

*139 (PNP-NPM): i) to sit down, seat one's self, ii) to sit, be seated, of a place occupied

*140 (PNP-NPM): to bring together different reasons, to reckon up the reasons, to reason, revolve in one's mind, deliberate

*141 (APF): i) slander, detraction, speech injurious, to another's good name, ii) impious and reproachful speech injurious to divine majesty

*142 (2AAP-NSM): i) to become thoroughly acquainted with, to know thoroughly, ii) to know

*143 (NSN-C): i) with easy labour, ii) easy

*144 (AAM-2S): i) to raise up, elevate, lift up, ii) to take upon one's self and carry what has been raised up, to bear, iii) to bear away what has been raised, carry off

*145 (RAS-2P): i) to see, ii) to know

*146 (AMM-2S): to arouse, cause to rise

*147 (API-3S): to arouse, cause to rise

[*148] [*149] .

4.11.5 記録

- 日時：2023 年 6 月 22 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）X 名、参加（遠隔）Y 名

4.11.6 問いについて

1. マルコを読み、ここで起こったことを確認し、気づいたこと、疑問点を挙げてみましょう。
   - 少し長いので、まずは、マルコで全体を確認。
2. 中風の人はどのように運ばれてきましたか。なぜこれほど人が集まっていたのでしょう。イエスは何をしているところでしたか。マタイやルカも合わせて状況を想像してみましょう。
   - **中風の人が運ばれてきた時の様子**
     - **どのように運ばれてきたか**「人々が」「四人の人に」「中風の人を」運ばせて、イエスのもとに連れてきた。
     - **なぜこれほど人が集まったか。**マルコ（だけ）にはカペナウムでの出来事であったことが記されている（1）（マタイは「自分の町」（1））。「1:32 夕暮になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのところに連れてきた。 33 こうして、町中の者が戸口に集まった。 34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。」と、ある。また、寂しいところに祈りにいくと人々は捜していた。（1:38）「1:45 彼（重い皮膚病を癒された人）は出て行って、自分の身に起ったことを盛んに語り、また言いひろめはじめたので、イエスはもはや表立っては町に、はいることができなくなり、外の寂しい所にとどまっておられた。しかし、人々は方々から、イエスのところにぞくぞくと集まってきた。」
     - **イエスは何をしていたか「**御言を彼らに語っておられた。**」**つまり説教中、それでも対応。なぜだろうか。次の問いにつながる。
3. イエスはどうしますか。中風の人にはこのことばはどう響いたと思いますか。
   - **イエスのことば、中風のひとの受け取り方**
     - イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。

[*148] (PMN): to throw out of position, displace

[*149] (PAN): i) to think, suppose, be of opinion, ii) to praise, extol, magnify, celebrate, iii) to honour, do honour to, hold in honour, iv) to make glorious, adorn with lustre, clothe with splendour

- こう言われたということは、このひとは、やはり罪の中に生きていたということだろうか。
- 自分では何もできないことに、罪悪感を感じていたかもしれない。役立たず。
- 彼らの信仰の部分は、次の問いに続く。ここでは、「み言葉を語ること」を中断して。
- 中風の人も驚いたかもしれない。社会一般的には、中風は罪の故と思っていたかもしれないが、このひとを連れてきた人たちの様子からは、そのような因果応報的な考えかたは見て取れない。それが「(神は憐れんでくださる、これが当然の罪の帰結で許されないものだとは思っていない)信仰」と表現されているのかもしれない。社会的認識が一般的にあったとしてのそれに支配されているとも限らない。
- マルコでは「子よ」、マタイでは「子よ、しっかりしなさい」、ルカでは「人よ」と呼びかけ方が異なっている。この呼びかけのことばは、どう理解したら良いのだろうか。ある権威を示している？

4.「彼らの信仰」とは誰のどのような信仰なのでしょうか。

- **「彼らの信仰」とは**
  - 誰：マルコでは、人々？　マタイでも人々、ルカもおそらく人々。四人に限定されるわけではない。どういう人たちで、どのような関係をこの中風のひとと持っており、どう思っており、このような行動をしたのだろうか。このような関係のひとはいるだろうか。
  - 罪の結果だと一般的には思われていたが、神は憐れんでくださるということか。
  - 罪と信仰と愛の関係はどう考えたらよいでしょうか。愛は単なる助け合いではない。神を信頼するものどうしの相互の愛。

5. 律法学者は、どう反応しますか。なぜ、そのような反応をするのでしょうか。

- **律法学者の反応**
  - ルカでは「エルサレム方きたパリサイ人や律法学者」となっている。マルコとマタイは「幾人かの律法学者」「律法学者たち」
  - イエスが見抜いてとなっており、前列に座っていたのかもしれない。
  - 自分が律法学者のような反応をした経験はありますか。そこで、起こったことをみるよりも、成した人の善悪を評価することなど。

6. イエスは、どんなことを気付かせるために 9 節の質問をしていますか。イエスの問いに対して律法学者はどう考えていたでしょう。あなたは、どう考えますか。

- **何を気づかせるため**
  - イエスは、どちらでもそう変わらないと思っていたのではないか。実際、結局両方言っている。

- 「罪をゆるすことができるのは神のみ」はなぜなのだろうか。罪のゆるしと捉えたということは、律法学者は、罪の結果だと考えていたのかもしれない。
- 原理主義ではいけない。

7. イエスは、中風の人にどのように命じ、そして、どうなりますか。

- **中風の人に何と語り、どうなったか。**
  - 「床を取り上げて家に帰れ」手伝ってもらってここにきたが、自分で動くことを命じられている。眼に見える、「みんなの前を出て行った」変化がある。
  - 一同は驚き、神をあがめて「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

4.11.7 メモ

- カペナウム（マタイでは自分の町）：以前の出来事マルコ 1:21-39 汚れた霊に取りつかれた男を癒す、多くの病人を癒す、巡回して宣教する。規定の病を患っている人を清めるは、マルコの流れでは巡回宣教中。
  - 家（1）は、ペトロとアンデレの家か？
- 彼らの信仰：「人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。」とあり、人々（マルコは翻訳によるが、マタイでは入っているようだ）、中風の者、四人の人とある。全員だろうか。これは、神様への挑戦でもあるのだろうか。理不尽さ。
- 神を汚す：なぜ、罪を赦すことが、神を汚すことになるのか。神の先決事項に介入したということか。神に目を向けていると言いながら、神の業を、働きを見ていない。完璧を求め、そこに関わった人を見下すことは、あるように思う。
- 人の子：なぜ、自分の子を、人の子と呼んだのだろう。私たちは、人の子ではないのか。人の子、私たちの役割は何なのだろうか。私たちに、同じことは委ねられているのだろうか。罪を赦すこと。受け入れること。同じ人の子として、ともに生きること。罪に定めることの、ひとの世界のことなのかもしれない。
- ルカ 5:26 「驚くべきこと」の内容は何だろうか。受け取り方は、ひとそれぞれだったのかもしれない。中風の人、中風の人を連れてきた人、その他の人々、律法学者、イエス、そして、それを伝える、弟子たち、その人たちの見たものは、さまざまだったのかもしれない。
- 中風の人は、自分の病は、罪の結果かもしれないと考えていた可能性はある。むろん、こんな罰を受けているほどの罪だろうかとの意識もあったかもしれない。そうであっても、自分から、癒してもらいたいとイエスのもとにいくことはできなかったのではないだろうか。すごいことがおこっていると、聞きつけた周囲の人々が、この中風のひとをイエスのもとに連れて行く。そこには、この中風の人を罪人と定める人はおらず、逆に、愛を持って、さらに、神様が憐れんでなしてくださることに期待をかけた人たちがいたのだろう。その信仰に、心が動かされ、イエスは、「子よ、あなたの罪は赦された」と宣言される。それは、

この中風の人にとって、どれほどの慰めと救いだったかと思う。まさに、神の国がここにきたのだ。しかし、それを認めることができず、正しさから、違反を見つけようとする人たちがいる。イエスは、このひとたちにもひとこといい、さらに、中風のひとに語りかけ、中風の人は癒される。すべてを理解できたかどうかはわからないが、神様を賛美せざるをえない人たちが、そこにいたのだろう。感謝。

4.12　2:13-17 レビを弟子にする

2:13 イエスはまた海べに出て行かれると、多くの人々がみもとに集まってきたので、彼らを教えられた。
14 また途中で、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをごらんになって、「わたしに従ってきなさい」と言われた。すると彼は立ちあがって、イエスに従った。15 それから彼の家で、食事の席についておられたときのことである。多くの取税人や罪人たちも、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。こんな人たちが大ぜいいて、イエスに従ってきたのである。16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。17 イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

4.12.1　マタイ 9:9-13

9 さてイエスはそこから進んで行かれ、マタイという人が収税所にすわっているのを見て、「わたしに従ってきなさい」と言われた。すると彼は立ちあがって、イエスに従った。10 それから、イエスが家で食事の席についておられた時のことである。多くの取税人や罪人たちがきて、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。11 パリサイ人たちはこれを見て、弟子たちに言った、「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか」。12 イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。13 『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

4.12.2　ルカ 5:27-32

27 そののち、イエスが出て行かれると、レビという名の取税人が収税所にすわっているのを見て、「わたしに従ってきなさい」と言われた。28 すると、彼はいっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってきた。29 それから、レビは自分の家で、イエスのために盛大な宴会を催したが、取税人やそのほか大ぜいの人々が、共に食卓に着いていた。30 ところが、パリサイ人やその律法学者たちが、イエスの弟子たちに対してつぶやいて言った、「どうしてあなたがたは、取税人や罪人などと飲食を共にするのか」。31 イエスは答えて言われた、「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。32 わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」。

マルコによる福音書 2 章 13-17 節福音書対照表

4.12.3　問い

1. マルコを読み、ここで起こったことを確認し、気づいたこと、疑問点を挙げてみましょう。
2. レビついてどのようなことがわかりますか。マタイやルカも確認しましょう。
3. この人の家での食卓には、どんな人たちがついていますか。
4. パリサイ派の律法学者たちは、誰に、どんなことを聞いていますか。
5. イエスはこれに対して何と言っていますか。
6.「罪人を招く」とはどういうことでしょうか。
7. イエスに従ってきたのは、どのような人たちでしょうか。現代では、それは、どんな人たちで、その人たちを招くことは、どのようなことを意味しているのでしょう。

4.12.4　参照

- マタイ[*150]（ヤーヴェからの賜り物、アルパヨの子レビ）についての記述（今回の箇所以外）
  - マルコ 3:16-19 こうして、この十二人をお立てになった。そしてシモンにペテロという名をつけ、17 またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。18 つぎにアンデレ、ピリポ、バルトロマイ、**マタイ**、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、19 それからイスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。イエスが家にはいられると、
  - マタイ 10:2-4 十二使徒の名は、次のとおりである。まずペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレ、それからゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、3 ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人**マタイ**、アルパヨの子ヤコブとタダイ、4 熱心党のシモンとイスカリオテのユダ。このユダはイエスを裏切った者である。
  - ルカ 6:14-16 すなわち、ペテロとも呼ばれたシモンとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、15 **マタイ**とトマス、アルパヨの子ヤコブと、熱心党と呼ばれたシモン、ヤコブの子ユダ、それからイスカリオテのユダ。このユダが裏切者となったのである。
  - 使徒 1:13 彼らは、市内に行って、その泊まっていた屋上の間にあがった。その人たちは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイと**マタイ**、アルパヨの子ヤコブと熱心党の

[*150] M　: A shorter form of M　a(A:　) Levite who presided over the offerings, B) a Levite appointed by David to minister in the musical service before the ark, C) one of the family of Nebo who had a foreign wife in the time of Ezra, D) one of the men who stood at the right hand of Ezra when he read the law to the people), Matthew = “gift of Jehovah”, 1Chronicles 9:31; 15:18; 15:21; 16:5; 25:3; 25:21, Ezra 10:43, Nehemiah 8:4

シモンとヤコブの子ユダとであった。

- 収税人：参照
  - ルカ 3:12,13 取税人もバプテスマを受けにきて、彼に言った、「先生、わたしたちは何をすればよいのですか」。彼らに言った、「きまっているもの以上に取り立ててはいけない」。
- 罪人たち：参照
- ユダとガリラヤの統治者および徴税について：参照
- マタイ 9:13：ホセア 6:6 「わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。燔祭よりもむしろ神を知ることを喜ぶ。」 *151

13 K *152 . , *153 . **14** K *154 Λ *155 *156 *157 , . . *158 . **15** K *159 , *160 *161 *162 . **16** Φ *163 . ; **17** *164 [ ] , . , .

4.12.5 記録

- 日時：2023 年 6 月 29 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）5 名

---

*151 (kheh'-sed): i) goodness, kindness, faithfulness, ii) a reproach, shame

*152 (2AAI-3S): to go or come forth of

*153 (IAI-3S): to teach

*154 (PAP-NSM): i) pass by, ii) to pass by, go past

*155 (PAM-2S): i) to follow one who precedes, join him as his attendant, accompany him, ii) to join one as a disciple, become or be his disciple

*156 (PNP-ASM): i) to sit down, seat one's self, ii) to sit, be seated, of a place occupied

*157 : i) customs, toll, ii) toll house, place of toll, tax office, iii) the place in which the tax collector sat to collect the taxes

*158 (2AAP-NSM): i) to cause to rise up, raise up, ii) to rise, stand up, iii) at arise, appear, stand forth

*159 (PNN): to have lain down, i.e. to lie prostrate

*160 : i) a renter or farmer of taxes, ii) a tax gatherer, collector of taxes or tolls, one employed by a publican or farmer general in the collection of taxes. The tax collectors were as a class, detested not only by the Jews, but by other nations also, both on account of their employment and of the harshness, greed, and deception, with which they did their job.

*161 : devoted to sin, a sinner

*162 : to recline together, feast together

*163 (PAP-ASM): to eat

*164 (APA-NSM): i) to be endowed with the faculty of hearing, not deaf, ii) to hear, iii) to hear something

4.12.6 問いについて

1. 概要
    1. 多くのひとたちがイエスのもとに集まってきて、海辺で教えた。（この背景はマルコのみ）
    2. 収税所にすわっているアルパよの子レビを従うように招く。
    3. レビは立ち上がって従う。
    4. レビの家で、イエスに従ってきた多くの収税人や罪人たちが一緒に食卓についていた。
    5. パリサイ派の律法学者が、弟子たちに、なぜ、罪人や収税人と食事を共にするのかと問う。
    6. イエスは、罪人を招くためにきたと断言。
2. アルパヨの子レビについて。
    - マタイでは、マタイとなっている。マタイと同一人物としてよいか。
        - マルコ、マタイ、ルカの記述からして、同一人物としてよいと思われる。
    - 収税人だったのだろうか。たまたま収税所に座っていただけなのだろうか。
    - ルカ 5:27 には「レビという名の取税人」とあり、マタイと同一してもよいと思われるが、マタイについては、マタイ 10:3 には「取税人マタイ」とある。
        - おそらく、ヘブル語、アラム語、ギリシャ語を話せ、お金もある。しかし、ユダヤ人からは、嫌われ、ユダヤ人であるにもかかわらず、蔑まれていた。
    - マタイ：マッタテヤの省略形歴代誌 15:18, 21, 16:5, 25:3, 21, エズラ 10:43 。ネヘミヤ 8:4 学者エズラはこの事のために、かねて設けた木の台の上に立ったが、彼のかたわらには右の方にマッタテヤ、シマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤおよびマアセヤが立ち、左の方にはペダヤ、ミサエル、マルキヤ、ハシュム、ハシバダナ、ゼカリヤおよびメシュラムが立った。
    - 状況証拠からは、レビ族の出身だった可能性が高いように思う。その中でよく知られた、マタイが呼称だったのか、イエスがそう呼んだのかは不明。
    - イエスが通りすがりに声をかけたように思われる。イエスは、マタイの様子から何を見、なぜ、声をかけたのだろうか。
    - レビは、イエスの招きに対して「すると彼は立ち上がって、イエスに従った」と書かれている。ペトロたちのときのように、このときが、最初の出会いではないかもしれない。
        - おそらく、職を失ったと思われる。ルカ 5;28 「彼はいっさいを捨てて立ちあがり」

  - 強調することではないかもしれないが、漁師が船と網を置くこととは多少異なる。

3. 食卓に同席していたひとたち。
   - 誰の家か。ルカでは、レビが「イエスのために盛大な宴会を催した」とある。
   - マルコ、マタイからは、イエスについてきた人たちが、一緒に食事の席についていることがわかる。レビが招いたのだろうか。それとも、イエスに単についてきたのだろうか。
   - 仲間を連れてきたのか。それとも、イエスについてきたひとたちだから、一緒に食事をしたのか。マタイは（驚きはあったかもしれないが）おそらく歓迎しただろうが、パリサイ派の律法学者は違う見方をした。
   - 収税人や罪人とは、どのような人だろうか。（参照からリンク）
4. パリサイ人の質問：「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」
   - なぜ、イエスにではなく、弟子たちに聞くのか。レビ（マタイ）や、弟子には、はっきりとは答えられなかったかもしれない。しかし、どう答えたか、聞いてみたかった。それが、我々の一人の応答を明らかにすることでもあるから。
   - 聞く目的は？非難？すでに、危険視されていたと思われる。（体の麻痺した人を癒すの記事参照）
5. イエスの答え：「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」
   - イエスにとっては、至極当然のこと。なぜ、疑問に思うのか。とはいえ、たいせつなことを教えている。
   - 義人を招くとは、罪人を招くとは。
   - マタイ 9:13 『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。は、どのような意味だろうか。だれでも知っている、当たり前のこと。
   - その当たり前のことを、受け入れられない頑なさを、現代に移して考えてみよう。
6. 現代では
   - おそらく、さまざまなことを抱え込むことも含まれている。Welcoming Spirits, Availabiity は、vulnerability をも必要とする。それこそが、イエスが体現したこと、イエスの生涯。
   - 自分にたいする神様の憐れみを、他者にたいする神様の憐れみと同等に考えることができない。自分が神様に愛されていること、その応答として、神様を愛することが、神様が愛される他者に向けられることには、困難がある。

4.12.7 メモ

- マルコだけが、「13 イエスはまた海べに出て行かれると、多くの人々がみもとに集まってきたので、彼らを教えられた。」と始めている。
- マルコも、マタイも、ルカも「すわっていた」ことを書いている。何を表しているのだろう。
  - 「立ちあがって（イエスに）従った」と対置されている。悩んでいたかもしれない。そのひとが、一歩を歩み出す。それが、レビにとっては、宴会を催すこと。
- マルコと、ルカは、レビ（マルコは、アルパヨの子レビ）、マタイは、マタイとし、マルコと、マタイは、収税所に座っていたことだけ書いているが、ルカは、収税人と明確に書いている。
- ガリラヤ地方は、ローマ皇帝から領主に任ぜられたエドム人ヘロデ・アンティパスの配下にあった。この徴税を行なっていた。（参照：ユダとガリラヤの統治者および徴税について）
- Anna Karenina Principle (AKP) 「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸なものである All happy families are alike; each unhappy family is unhappy in its own way.」レオ・トルストイ著、アンナ・カレーニナ冒頭（Leo Tolstoy's 1877 novel *Anna Karenina*）
  - 病人も、罪人も、ひとりひとり異なる。義人と、罪人と二分するのでは、本質は捉えられない。イエスが来たのは、神の国が近いとしらせること、それは、すべてのひとを救うためではなく、罪人（神様の国から遠いと思われている・思っている）一人ひとりを招くこと。一人の例外もなく。

4.13 2:18-22 断食についての問答

2:18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。19 するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。20 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう。21 だれも、真新しい布ぎれを、古い着物に縫いつけはしない。もしそうすれば、新しいつぎは古い着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなる。22 まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそうすれば、ぶどう酒は皮袋をはり裂き、そして、ぶどう酒も皮袋もむだになってしまう。〔だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである〕」。

4.13.1 マタイ 9:14-17

14 そのとき、ヨハネの弟子たちがイエスのところにきて言った、「わたしたちとパリサイ人たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。15 するとイエスは言われた、「婚礼

の客は、花婿が一緒にいる間は、悲しんでおられようか。しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その時には断食をするであろう。16 だれも、真新しい布ぎれで、古い着物につぎを当てはしない。そのつぎきれは着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなるから。17 だれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそんなことをしたら、その皮袋は張り裂け、酒は流れ出るし、皮袋もむだになる。だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。そうすれば両方とも長もちがするであろう」。

4.13.2 ルカ 5:33-39

33 また彼らはイエスに言った、「ヨハネの弟子たちは、しばしば断食をし、また祈をしており、パリサイ人の弟子たちもそうしているのに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています」。34 するとイエスは言われた、「あなたがたは、花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食をさせることができるであろうか。35 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう」。36 それからイエスはまた一つの譬を語られた、「だれも、新しい着物から布ぎれを切り取って、古い着物につぎを当てるものはない。もしそんなことをしたら、新しい着物を裂くことになるし、新しいのから取った布ぎれも古いのに合わないであろう。37 まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそんなことをしたら、新しいぶどう酒は皮袋をはり裂き、そしてぶどう酒は流れ出るし、皮袋もむだになるであろう。38 新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。39 まただれも、古い酒を飲んでから、新しいのをほしがりはしない。『古いのが良い』と考えているからである」。

マルコによる福音書 2 章 18-22 節福音書対照表

4.13.3 問い

1. マルコ、マタイ、ルカでは、それぞれ、どのようなときに、だれが、イエスに断食について質問していますか。
2. イエスはどのように答えていますか。（マルコ 2:19,20 など）
3. 婚礼の客や、花婿とはだれのことだと思いますか。花婿が取り去られる時とはいつのことでしょうか。
4. ヨハネの弟子たちやパリサイ人たちなどと、イエスでは、どのようなところが違っていたと思いますか。
5. 布きれと服、ぶどう酒と革袋のたとえはどのようなことを説明しているのでしょうか。
6. イエスのこれらのことばは、現代においては、どのよなことを教えているでしょうか。

4.13.4 参照

- 断食について：参照
- 聖書における断食の記述：参照

- 聖書における花婿の記述
  - イザヤ 61:10 わたしは主を大いに喜び、／わが魂はわが神を楽しむ。主がわたしに救の衣を着せ、／義の上衣をまとわせて、／**花婿**が冠をいただき、／花嫁が宝玉をもって飾るようにされたからである。
  - イザヤ 62:5 若い者が処女をめとるように／あなたの子らはあなたをめとり、／**花婿**が花嫁を喜ぶように／あなたの神はあなたを喜ばれる。
  - ホセア 2:19,20 またわたしは永遠にあなたとちぎりを結ぶ。すなわち正義と、公平と、いつくしみと、あわれみとをもってちぎりを結ぶ。20 わたしは真実をもって、あなたとちぎりを結ぶ。そしてあなたは主を知るであろう。（聖書協会共同訳 2:21,22）
  - マタイ 25:1-10 そこで天国は、十人のおとめがそれぞれあかりを手にして、**花婿**を迎えに出て行くのに似ている。
  - バプテスマのヨハネの証言：ヨハネ 3:29,30 花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。30 彼は必ず栄え、わたしは衰える。

18 K [*165] Φ . .
Φ [*166], ; **19** . [*167] [*168]
, ; , . **20** [*169] [*170] ,
, . **21** O [*171] . ,
, . **22** [*172] . ,
. , .

4.13.5 記録

- 日時：2023 年 7 月 6 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）7 名、参加（遠隔）4 名

[*165] (IXI-3P): I was, etc.
[*166] (PAP-NPM): to abstain as a religious exercise from food and drink: either entirely, if the fast lasted but a single day, or from customary and choice nourishment, if it continued several days
[*167] (GSM): the chamber containing the bridal bed, the bridal chamber
[*168] : a bridegroom
[*169] (FDI-3P): to come
[*170] (APS-3S): i) to lift off, take or carry away, ii) to be taken away from anyone
[*171] (PAI-3S): to sew upon, sew to
[*172] : wine

4.13.6 問いについて

1. どのようなときに、だれが質問しているか。
    - レビの記事の直後。宴会をしているのを見て、「そのとき（中略）断食をしているのに」（マタイ）
    - マルコ：人々、ルカ：彼ら（パリサイ人や律法学者？)、マタイ：ヨハネの弟子たち。（ヨハネ 3:22-30）
    - 断食をする（と定められている）特別なときだったのかもしれない。
2. イエスの答え。
    - マルコ 2:19 婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。20 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう。
    - マタイ：悲しんでおられようか。
3. 花婿、婚礼の客
    - 花婿はイエスだろうか。そう取るのがおそらく、一般的。花嫁は、婚礼の客は。ここには、花嫁は登場しない。
    - レビの家での宴会の主賓は、誰だったのだろうか。何を喜んでいたのだろうか。神様のものとなったのは、レビや、イエスに従うようになった人たち。または、神様のもとに来た人たち。
    - 相互性があるかもしれない。共に喜ぶ場、それが祝宴の場。
    - しかし、取り去られるのは、イエス自身のことを言っていることは確実だろう。すでに、この時点で、取り去られることについて語っている。
    - ヨハネ 16:20-22 よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたは泣き悲しむが、この世は喜ぶであろう。あなたがたは憂えているが、その憂いは喜びに変るであろう。21 女が子を産む場合には、その時がきたというので、不安を感じる。しかし、子を産んでしまえば、もはやその苦しみをおぼえてはいない。ひとりの人がこの世に生れた、という喜びがあるためである。22 このように、あなたがたにも今は不安がある。しかし、わたしは再びあなたがたと会うであろう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるであろう。その喜びをあなたがたから取り去る者はいない。
    - ヨハネ 20:19-21 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。21 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。

4. 違い
    - 断食など、身を苦しめる、宗教儀式によって、神の国に近づくことができるのか。
    - 確認：イエスの断食、使徒たち初代教会の断食、旧約聖書における断食はどのようなものだったのだろうか。参照
5. 布きれと服、ぶどう酒と革袋
    - 神様を讃えること、悔い改めること、喜ぶこと。
    - ルカでは：36 だれも、新しい着物から布ぎれを切り取って、古い着物につぎを当てるものはない。もしそんなことをしたら、新しい着物を裂くことになるし、新しいのから取った布ぎれも古いのに合わないであろう。
    - ヨブ 32:19 見よ、わたしの心は口を開かないぶどう酒のように、／新しいぶどう酒の皮袋のように、／今にも張りさけようとしている。
6. イエスの教え
    - 神の国はすぐそこにある。レビの家にもすでに来ている。

4.13.7 メモ

- マルコも、マタイも、ルカも、レビの記事の直後にある。特に、マタイは、「そのとき」と始まっている。
- 断食は、旧約では、身を悩ますこと。
- ヨハネ 3 章 29,30 節を加味すると、ヨハネの証言を知っているものが質問をし、それをうけて、イエスが、花婿のことを言ったと解釈するのが自然であり、マタイの証言のように、ここで、質問したのは、バプテスマのヨハネの弟子または、そのような情報を共有しているものととれる。また、アンデレやヨハネは、バプテスマのヨハネの弟子で、このようなバプテスマのヨハネの証言を知っていたと思われる。すると、花婿はイエス、介添人はバプテスマのヨハネ、婚礼の客は、花婿イエスの弟子である。花婿が取り去られることを伝えているのは、すでに、師が取り去られ、断食をしている、バプテスマのヨハネの弟子たちへの配慮もあるように思われる。
- イザヤや、ホセア、さらに、マタイ 25 章 1-12 節の花嫁の譬えから、考えると、花嫁は、イエスと契りをむすぶ、イエスが迎える人たちである。
- 布も、皮袋も、古いもののほうに、重きがある。これも、バプテスマのヨハネの弟子たちのように、イエスに従ってはいないひとたちへのメッセージかもしれない。すなわち、断食をしないことだけを、受け入れると、すべてが壊れてしまう。断食のこともふくめた、イエスの新しい教えを受け入れるなら、そのなかに、入り込まないといけないということを言っているのかもしれない。

- ただ、かなり、異なる記述もあるルカなども加味すると、ひとつの解釈にこだわってはいけないこともあるのかもしれない。実際、この場には、さまざまな人たちがいたのだから。

4.14　2:23-28 安息日に麦の穂を摘む

2:23 ある安息日に、イエスは麦畑の中をとおって行かれた。そのとき弟子たちが、歩きながら穂をつみはじめた。24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った、「いったい、彼らはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのですか」。25 そこで彼らに言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが食物がなくて飢えたとき、ダビデが何をしたか、まだ読んだことがないのか。26 すなわち、大祭司アビアタルの時、神の家にはいって、祭司たちのほか食べてはならぬ供えのパンを、自分も食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。27 また彼らに言われた、「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。28 それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」。

4.14.1　マタイ 12:1-8

1 そのころ、ある安息日に、イエスは麦畑の中を通られた。すると弟子たちは、空腹であったので、穂を摘んで食べはじめた。2 パリサイ人たちがこれを見て、イエスに言った、「ごらんなさい、あなたの弟子たちが、安息日にしてはならないことをしています」。3 そこでイエスは彼らに言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが飢えたとき、ダビデが何をしたか読んだことがないのか。4 すなわち、神の家にはいって、祭司たちのほか、自分も供の者たちも食べてはならぬ供えのパンを食べたのである。5 また、安息日に宮仕えをしている祭司たちは安息日を破っても罪にはならないことを、律法で読んだことがないのか。6 あなたがたに言っておく。宮よりも大いなる者がここにいる。7 『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたなら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう。8 人の子は安息日の主である」。

4.14.2　ルカ 6:1-5

1 ある安息日にイエスが麦畑の中をとおって行かれたとき、弟子たちが穂をつみ、手でもみながら食べていた。2 すると、あるパリサイ人たちが言った、「あなたがたはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのか」。3 そこでイエスが答えて言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが飢えていたとき、ダビデのしたことについて、読んだことがないのか。4 すなわち、神の家にはいって、祭司たちのほかだれも食べてはならぬ供えのパンを取って食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。5 また彼らに言われた、「人の子は安息日の主である」。

マルコによる福音書 2 章 23-28 節福音書対照表

4.14.3　問い

1. マルコを読み、ここで起こったことを確認し、気づいたこと、疑問点を挙げてみましょう。
2. 弟子たちは「いつ」「どこで」「なに」をしていますか。マタイやルカも合わせて状況を想像してみましょう。
3. ファリサイ人たちは誰に何を訴えていますか。
4. ダビデの例を通してイエスはどんなことを説明していますか。（サムエル記上 21:1-7）
5. イエスは安息日の目的をどのように説明していますか。
6. 「人の子は安息日にもまた主なのである。」は何を伝えているのでしょうか。
7. 安息日や主日（日曜日）は、わたしたちにとってどのようなものなのでしょうか。

4.14.4　参照

- 安息日について：参照
- 安息日に関する聖書箇所：参照
- 出エジプト記 23:12 あなたは六日のあいだ、仕事をし、七日目には休まなければならない。これはあなたの牛および、ろばが休みを得、またあなたのはしための子および寄留の他国人を休ませるためである。
- 申命記 23:24,25 あなたが隣人のぶどう畑にはいる時、そのぶどうを心にまかせて飽きるほど食べてもよい。しかし、あなたの器の中に取り入れてはならない。25 あなたが隣人の麦畑にはいる時、手でその穂を摘んで食べてもよい。しかし、あなたの隣人の麦畑にかまを入れてはならない。
- **供えのパン**
  - レビ記 24:5-9 あなたは麦粉を取り、それで十二個の菓子を焼かなければならない。菓子一個に麦粉十分の二エパ[*173]を用いなければならない。6 そしてそれを主の前の純金の机の上に、ひと重ね六個ずつ、ふた重ねにして置かなければならない。7 あなたはまた、おのおのの重ねの上に、純粋の乳香を置いて、そのパンの記念の分とし、主にささげて火祭としなければならない。8 **安息日**ごとに絶えず、これを主の前に整えなければならない。これはイスラエルの人々のささぐべきものであって、永遠の契約である。9 これはアロンとその子たちに帰する。彼らはこれを聖なる所で食べなければならない。これはいと聖なる物であって、主の火祭のうち彼に帰すべき永久の分である」。
  - 供えのパンを置く台：出エジプト 25:23-30 あなたはまたアカシヤ材の机を造らなければならない。

[*173] エパ 23 リットル。十分の二エパは、4.6 リットル。

長さは二キュビト[*174]、幅は一キュビト、高さは一キュビト半。24 純金でこれをおおい、周囲に金の飾り縁を造り、25 またその周囲に手幅の桟を造り、その桟の周囲に金の飾り縁を造らなければならない。26 また、そのために金の環四つを造り、その四つの足のすみ四か所にその環を取り付けなければならない。27 環は桟のわきに付けて、机をかつぐさおを入れる所としなければならない。28 またアカシヤ材のさおを造り、金でこれをおおい、それをもって、机をかつがなければならない。また、その皿、乳香を盛る杯および灌祭を注ぐための瓶と鉢を造り、これらは純金で造らなければならない。30 そして机の上には**供えのパン**を置いて、常にわたしの前にあるようにしなければならない。

  - 補足 1：民数記 4:7,8 また供えのパンの机の上には、青色の布をうちかけ、その上に、さら、乳香を盛る杯、鉢、および灌祭の瓶を並べ、また絶やさず供えるパンを置き、8 緋色の布をその上にうちかけ、じゅごんの皮のおおいをもって、これをおおい、さおをさし入れる。

  - 補足 2：列王記上 7:48-50 またソロモンは主の宮にあるもろもろの器を造った。すなわち金の祭壇と、供えのパンを載せる金の机、49 および純金の燭台。この燭台は本殿の前に、五つは南に、五つは北にあった。また金の花と、ともしび皿と、心かきと、50 純金の皿と、心切りばさみと、鉢と、香の杯と、心取り皿と、至聖所である宮の奥のとびらのためおよび、宮の拝殿のとびらのために、金のひじつぼを造った。

  - 補足 3: 歴代誌上 9:31-32 コラびとシャルムの長子でレビびとのひとりであるマタテヤはせんべいを造る勤めをつかさどった。32 またコハテびとの子孫であるその兄弟たちのうちに供えのパンをつかさどって、安息日ごとにこれを整える者どもがあった。

- サムエル記上 21:1-7 ダビデはノブに行き、祭司アヒメレクのところへ行った。アヒメレクはおののきながらダビデを迎えて言った、「どうしてあなたはひとりですか。だれも供がいないのですか」。2 ダビデは祭司アヒメレクに言った、「王がわたしに一つの事を命じて、『わたしがおまえをつかわしてさせる事、またわたしが命じたことについては、何をも人に知らせてはならない』と言われました。そこでわたしは、ある場所に若者たちを待たせてあります。3 ところで今あなたの手もとにパン五個でもあれば、それをわたしにください。なければなんでも、あるものをください」。4 祭司はダビデに答えて言った、「常のパンはわたしの手もとにありません。ただその若者たちが女を慎んでさえいたのでしたら、聖別したパンがあります」。5 ダビデは祭司に答えた、「わたしが戦いに出るいつもの時のように、われわれはたしかに女たちを近づけていません。若者たちの器は、常の旅であったとしても、清いのです。まして、きょう、彼らの器は清くないでしょうか」。6 そこで祭司は彼に聖別したパンを与えた。その所に、供えのパンのほかにパンがなく、このパンは、これを取り下げる日に、あたたかいパンと置きかえるため、主の前から取り下げたものである。

- サムエル記上 22:20 しかしアヒトブの子アヒメレクの子たちのひとりで、名をアビヤタルという人は、のがれてダビデの所に走った。

[*174] キュビト（アンマ）約 45cm なので、机は、90cm x 45cm x 67cm

23 K [*175] [*176] [*177], [*178] [*179]. **24** Φ · [*180]; **25** · Δ [*181] , , **26** [*182] , , ; **27** K · [*183] ·**28** .

4.14.5 記録

- 日時：2023 年 7 月 13 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）6 名

4.14.6 問いについて

1. 概要
   - 当時「安息日にしてはならぬ」と考えられていたことを弟子たちはしていた。
   - パリサイ人がイエスに問う。
   - イエスは、ダビデの例と、安息日がだれのためかを語り、最後に安息日の主を示す。
2. 「いつ」「どこで」「なに」を
   - 安息日に麦畑の中で弟子たちが歩きながら穂を摘み始めた。
   - マタイ：空腹だったので
   - ルカ：穂を摘み手で揉みながら食べていた
   - 「こんな連中」品行方正とは言えない弟子たち。イエスはその面倒を引き受けておられる。
   - 安息日に、十分理解して、これらのことをしたわけではない。

---

*175 : i) the seventh day of each week which was a sacred festival on which the Israelites were required to abstain from all work, ii) seven days, a week

*176 (PNN): to proceed at the side, go past, pass by

*177 : i) fit for sowing, sown, ii) sown fields, growing crops

*178 : to pluck, pluck off

*179 : an ear of corn or of growing grain

*180 : it is lawful

*181 : i) to hunger, be hungry, ii) metaph. to crave ardently, to seek with eager desire

*182 : i) a setting forth of a thing, placing of it in view, the shewbread: twelve loaves of wheaten bread, corresponding to the number of the tribes of Israel, which loaves were offered to God every Sabbath, and separated into two rows, lay for seven days upon a table placed in the sanctuary or front portion of the tabernacle, and afterwards of the temple, ii) a purpose

*183 : i) through of place, of time, of means, ii) through the ground or reason by which something is or is not done

3. ファリサイ人たちの訴え
    - いったい彼らはなぜ安息日にしてはならぬことをするのか。
        - 他人の畑のものを無断で食べたのが違法だと言ったわけではない。安息日にしてはならぬことをしたことに焦点がある。（申命記 23:25）
    - ルカ：あなたがたは。しかし、弟子たちが行為者であるとは書いている。
4. ダビデの例
    - サムエル記上 21:1-7、サムエル記上 22:20 にアビヤタルも登場
    - 供えのパン：レビ 24:5-9
5. 安息日の目的
    - 安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。（マルコのみ）
    - マタイ：5 また、安息日に宮仕えをしている祭司たちは安息日を破っても罪にはならないことを、律法で読んだことがないのか。6 あなたがたに言っておく。宮よりも大いなる者がここにいる。7 『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたなら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう。
6. 人の子は安息日にもまた主なのである。
    - マルコでは唐突
    - マタイでは、4 節と 5 節の関係が唐突
    - ルカではまったく説明がない
7. 主日は何のため
    - 神の創造のわざ - 休息
    - マナを通して安息日を定める
    - 礼拝 - 祭り、主を喜ぶ日
    - バビロン捕囚における、分離

4.14.7 メモ

- 注：サムエル記上 21:1-7 祭司アヒメレクとあり、アビアタルではない。マタイ、ルカには、名前は省略されている。マタイ、ルカにも供の者とあるが、供の者たちもいたとは考えられない。また、大祭司アビア

タルの時（26）とあるが、大祭司制度は、確立していないと思われる。引用句でも、祭司。大祭司については、レビ記 21:10、民数記 35:25, 28, 32 に記述があるが、歴史の記述で登場するのは、口語訳では、列王記下 12:10（聖書教会共同訳では 11 節）王の書記官と大祭司が初出、名前が登場するのは、ヨシヤ王の時代の大祭司ヒルキヤから。列王記下 22:4, 8, 23:4, 歴代誌下 34:9

  - 25 そこで彼らに言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが食物がなくて飢えたとき、ダビデが何をしたか、まだ読んだことがないのか。26 すなわち、大祭司アビアタルの時、神の家にはいって、祭司たちのほか食べてはならぬ供えのパンを、自分も食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。

  - 上にかいたように、この部分には、誤りと思われる部分も含まれる。また、上記の部分がないと、唐突に「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。」につながり、あまりにも過激（ラディカル）であるので、挿入されたという説もあるようである。根拠は明確でないので、一応、参考として記する。

- イエスの弟子たちは、パリサイ人のように、厳格に律法を理解し守る訓練を受けた人たちではなかった。そのような人たちを周りに置いた、イエスは、批判にたいして、弁護している。まずは、お腹が減っているときの行為として、ダビデを例に上げている。名前の間違い（あとから書かれたマタイや、ルカでは省略されている、大祭司という言い方も定着していなかったかもしれない。）供の者がいたかどうかなど、不正確な引用であるようにも思われ、また、ダビデについて引用するときには、注意を払っているようにも思われる。

- マルコでは、安息日は人のためという部分が強調されるが、安息日の主との繋がりは希薄である。マタイは、それを丁寧に説明もしている。ただ、その一つの正当な解釈に、収斂されてようかどうかは不明。

- 安息日は何のためかについて考えたい。多くの問題が背後に潜んでいるように見える。土曜日か、日曜日か、毎日が主の日か、特別な日とするべきかも含めて、考えるべき課題は多い。続けて考えていきたい。

- ここでは、「それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」。（28）と、結ばれている。人の子、イエスは、真の自由人として生きられた、その意味でも、安息日の主でもあるということなのだろうか。

4.15　3:1-6 手の萎えた人を癒やす

3:1 イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人がいた。2 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。3 すると、イエスは片手のなえたその人に、「立って、中へ出てきなさい」と言い、4 人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。5 イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。

4.15.1 マタイ 12:9-14

9 イエスはそこを去って、彼らの会堂にはいられた。10 すると、そのとき、片手のなえた人がいた。人々
はイエスを訴えようと思って、「安息日に人をいやしても、さしつかえないか」と尋ねた。11 イエスは彼
らに言われた、「あなたがたのうちに、一匹の羊を持っている人があるとして、もしそれが安息日に穴に
落ちこんだなら、手をかけて引き上げてやらないだろうか。12 人は羊よりも、はるかにすぐれているで
はないか。だから、安息日に良いことをするのは、正しいことである」。13 そしてイエスはその人に、「手
を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、ほかの手のように良くなった。14 パリサイ人たちは
出て行って、なんとかしてイエスを殺そうと相談した。

4.15.2 ルカ 6:6-11

6 また、ほかの安息日に会堂にはいって教えておられたところ、そこに右手のなえた人がいた。7 律法学
者やパリサイ人たちは、イエスを訴える口実を見付けようと思って、安息日にいやされるかどうかをうか
がっていた。8 イエスは彼らの思っていることを知って、その手のなえた人に、「起きて、まん中に立ちな
さい」と言われると、起き上がって立った。9 そこでイエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたに聞
くが、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」。10 そして彼ら一
同を見まわして、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、その手は元どおりに
なった。11 そこで彼らは激しく怒って、イエスをどうかしてやろうと、互に話合いをはじめた。

マルコによる福音書 3 章 1-6 節福音書対照表

4.15.3 問い

1. このできごとはいつ、どこで、どのような状況のもとでおきますか。
2. イエスは片手の萎（な）えた人を、なぜ、真ん中に立たせたのでしょうか。
3. イエスは、人々に、どのように問うていますか。
4. なぜイエスは怒り嘆くのでしょうか。そしてどうしますか。
5. パリサイ人たちは、どうしますか。
6. あなたは、一日をどのように生きようとしていますか。

4.15.4 参照

- ヘロデ党について：参照

- ヘロデ党に関する聖書箇所：参照
- マタイ 12:15-21 も繋がっている
  - イエスはこれを知って、そこを去って行かれた。ところが多くの人々がついてきたので、彼らを皆いやし、 16 そして自分のことを人々にあらわさないようにと、彼らを戒められた。17 これは預言者イザヤの言った言葉が、成就するためである、18 「見よ、わたしが選んだ僕、／わたしの心にかなう、愛する者。わたしは彼にわたしの霊を授け、／そして彼は正義を異邦人に宣べ伝えるであろう。19 彼は争わず、叫ばず、／またその声を大路で聞く者はない。20 彼が正義に勝ちを得させる時まで、／いためられた葦を折ることがなく、／煙っている燈心を消すこともない。
    - ＊ 引用：イザヤ 42:1-3 わたしの支持するわがしもべ、／わたしの喜ぶわが選び人を見よ。わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道をしめす。2 彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、／その声をちまたに聞えさせず、3 また傷ついた葦を折ることなく、／ほのぐらい灯心を消すことなく、／真実をもって道をしめす。
- 「わたしはレンガ職人で、わたしの手で自分のパンを稼いでいました。イエスよ。お願いです。恥さらしにもこじきをすることができないために、わたしの健康を取り戻してください。」（4C ヒエロニムス：ナザレ派・エピオン派が用いていたヘブル語のマタイの福音書からの引用）

1 K . [*184] . **2** [*185]

, . **3** . [*186] . **4** . [*187]

[*188] [*189], ; [*190] . **5** [*191] , [*192],

[*193] [*194] . . [*195] . **6**

K Φ [*196] , [*197].

---

*184 (RPP-ASF): i) to make dry, dry up, wither, ii) to become dry, to be dry, be withered, iii) to waste away, pine away, i.e. a withered hand

*185 (IAI-3P): to stand beside and watch, to watch assiduously, observe carefully

*186 (AMM-2S): to arouse, cause to rise

*187 (PQI-3S): it is lawful

*188 : i) to do good, do something which profits others, ii) to do well, do right

*189 (AAN): i) to do harm, ii) to do evil, do wrong

*190 (IAI-3P): i) to be silent, hold one's peace, ii) metaph. of a calm, quiet sea

*191 (AMP-NSM): i) to look around, ii) to look around about one's self, iii) to look round on one (i.e. to look for one's self at one near by)

*192 : i) anger, the natural disposition, temper, character, ii) movement or agitation of the soul, impulse, desire, any violent emotion, but esp. anger, iii) anger, wrath, indignation, iii) anger exhibited in punishment, hence used for punishment itself

*193 (PNP-NSM): i) to affect with grief together, ii) give with one's self

*194 (DSF): i) the covering with a callus, ii) obtrusiveness of mental discernment, dulled perception, iii) the mind of one has been blunted

*195 (API-3S): i) to restore to its former state, ii) to be in its former state

*196 (ASN): i) counsel, which is given, taken, entered upon, ii) a council

*197 (AAS-3P): to destroy

4.15.5　記録

- 日時：2023 年 7 月 20 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）4 名

4.15.6　問いについて

1. いつ、どこで、どのような状況
    - マルコ、マタイ、ルカとも、安息日に起きた、麦畑の記事に続いている。ルカによると「他の安息日」。
    - 会堂でのできごと：マタイには「彼らの会堂」とある。人々の只中にいる。そして、ラビとして教えていると思われる。ルカによると、教えてもいる。
    - 片手の萎えたひとがいた。
    - イエスを訴えようとしている（ルカによると）律法学者やパリサイ人が、安息日に癒すかどうかをうかがっている。マタイによると、人々が「安息日に人をいやしても、さしつかえないか」と尋ねている。
2. なぜ、真ん中に立たせたか
    - 「立って、中へ出てきなさい」（マルコ）「起きて、まん中に立ちなさい」（ルカ）
    - 人々に、考えること、教えることを目的としたのではないか。
3. 人々への問い
    - マルコとルカはほぼ同じ。マタイは異なる。問いは人々に向けられている。
    - マルコ：「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」ルカ：「あなたがたに聞くが、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」
    - マタイ：「あなたがたのうちに、一匹の羊を持っている人があるとして、もしそれが安息日に穴に落ちこんだなら、手をかけて引き上げてやらないだろうか。人は羊よりも、はるかにすぐれているではないか。だから、安息日に良いことをするのは、正しいことである」。
        - マタイは、「命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」に重点をおき、当時も認められていることを例として上げているように見える。
        - マルコ、ルカの方が一般性が高い。
4. イエスの怒り嘆き、そして行動

- マルコ：彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。
  - 怒りと嘆きは、マルコのみ。黙っていたことへの応答と思われる。
- ルカ：そして彼ら一同を見まわして、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、その手は元どおりになった。
- マタイ：そしてイエスはその人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、ほかの手のように良くなった。

5. パリサイ人たちの行動
   - マルコ：パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。
   - マタイ：パリサイ人たちは出て行って、なんとかしてイエスを殺そうと相談した。
   - ルカ：そこで彼らは激しく怒って、イエスをどうかしてやろうと、互に話合いをはじめた。
     - 主体が、マルコは明確だが、マタイ、ルカと、不明確になっていく。律法学者や、パリサイ人がいたことは、ルカにあるので、パリサイ人はよいとして、ヘロデ党の者たちとの共謀は、確証が取れなかったのかもしれない。
6. 一日をどう生きるか
   - 善を行い、命を救うことだろうか。しかし、それは、日常的にはどのようなことだろうか。

4.15.7 メモ

- マタイは、少し違う内容を伝えようとしているように思われる。イザヤの引用句は、次の箇所で学んでも良いかもしれない。
- 安息日にしてもよいこと、悪いことに重点をおくのは、主要なことではないように思われる。
- 頑なな心を、まずは顧みること。単純な質問に答えられない。答えることを拒否するのは、なぜなのだろう。「単純な問いを難しくしているからか。」イエスが、神の子かどうか、安息日の主かどうか、罪を赦す権威があるか、そちらが解決しなければ、簡単な問いにも答えない。そのような論理に陥ってしまっていることが、頑なさなのだろうか。むろん、生理的に受け入れられない。嫌い。ということもあるかもしれない。しかし、イエスの単純な問いかけに、答えることは、最初の一歩なのかもしれない。拒否が、分断を起こし、抹殺へと発展する。それを、どうすれば、断ち切ることができるのだろうか。
- 善いこととは？　命を救うこととは？　神様が何を望んでおられるか、互いに愛し合うために、何を為すべきかを考えたい。

4.16　3:7-12 湖の岸辺の群衆

3:7 それから、イエスは弟子たちと共に海べに退かれたが、ガリラヤからきたおびただしい群衆がついて
行った。またユダヤから、8 エルサレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シドン
のあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞いて、みもとにきた。9 イエスは群衆
が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。10 それは、多くの
人をいやされたので、病苦に悩む者は皆イエスにさわろうとして、押し寄せてきたからである。11 また、
けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。
12 イエスは御自身のことを人にあらわさないようにと、彼らをきびしく戒められた。

4.16.1　（参考 1）マタイ 4:23-25

23 イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病
気、あらゆるわずらいをおいやしになった。24 そこで、その評判はシリヤ全地にひろまり、人々があらゆ
る病にかかっている者、すなわち、いろいろの病気と苦しみとに悩んでいる者、悪霊につかれている者、
てんかん、中風の者などをイエスのところに連れてきたので、これらの人々をおいやしになった。25 こ
うして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がき
てイエスに従った。

4.16.2　（参考 2）ルカ 6:17-19

17 そして、イエスは彼らと一緒に山を下って平地に立たれたが、大ぜいの弟子たちや、ユダヤ全土、エル
サレム、ツロとシドンの海岸地方などからの大群衆が、18 教を聞こうとし、また病気をなおしてもらお
うとして、そこにきていた。そして汚れた霊に悩まされている者たちも、いやされた。19 また群衆はイエ
スにさわろうと努めた。それは力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいやしたからである。

4.16.3　（参考 3）マタイ 12:15-21

15 イエスはこれを知って、そこを去って行かれた。ところが多くの人々がついてきたので、彼らを皆いや
し、 16 そして自分のことを人々にあらわさないようにと、彼らを戒められた。17 これは預言者イザヤの
言った言葉が、成就するためである、18 「見よ、わたしが選んだ僕、／わたしの心にかなう、愛する者。
わたしは彼にわたしの霊を授け、／そして彼は正義を異邦人に宣べ伝えるであろう。19 彼は争わず、叫
ばず、／またその声を大路で聞く者はない。20 彼が正義に勝ちを得させる時まで、／いためられた葦を
折ることがなく、／煙っている燈心を消すこともない。

マルコによる福音書 3 章 7-12 節福音書対照表

4.16.4　問い

1. 地図で、参考箇所も合わせて、地名を確認しましょう。
2. 「おびただしい群衆」とありますが、人々は何を求めて、イエスのもとにるのでしょうか。
3. イエスは、どのように、弟子たちに命じますか。
4. 汚れた霊は、イエスを見るとどうしますか。
5. なぜイエスは、汚れた霊にご自身のことをあらわさないように戒めるのでしょうか。
6. イエスが宣教を始めてから、どのようなことがあったか、まとめてみましょう。どのようなことがわかりますか。
7. マタイ 12:15-21 のイザヤ書からの引用は、なにを伝えていますか。（イザヤ 42:1-3）

4.16.5　参照

- 地図：キリスト時代のパレスチナ、Palestine in the time of Jesus (1)
- 引用：イザヤ 42:1-3 わたしの支持するわがしもべ、／わたしの喜ぶわが選び人を見よ。わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道をしめす。2 彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、／その声をちまたに聞えさせず、3 また傷ついた葦を折ることなく、／ほのぐらい灯心を消すことなく、／真実をもって道をしめす。

7 K [198] , Γ [[199]],
8 T Σ . **9**
K [200] [201] [202] ·**10** [203],
[204] [205] [206]. **11** [207], ,

[198] (AAI-3S): i) to go back, return, ii) to withdraw
[199] (AAI-3P): i) to follow one who precedes, join him as his attendant, accompany him, ii) to join one as a disciple, become or be his disciple
[200] (NSN): a small vessel, a boat
[201] (PAS-3S): i) to adhere to one, be his adherent, to be devoted or constant to one, ii) to be steadfastly attentive unto, to give unremitting care to a thing, iii) to continue all the time in a place, iv) to persevere and not to faint, v) to show one's self courageous for, vi) to be in constant readiness for one, wait on constantly
[202] (PAS-3P): i) to press (as grapes), press hard upon, ii) a compressed way, iii) metaph. to trouble, afflict, distress
[203] (AAI-3S): i) to serve, do service, ii) to heal, cure, restore to health
[204] (PAN): i) to fall upon, to rush or press upon, ii) to fall upon one i.e. to seize, take possession of him
[205] (AMS-3P): to fasten one's self to, adhere to, cling to
[206] (APF): i) a whip, scourge, ii) metaph. a scourge, plague
[207] (NPN): not cleansed, unclean a) in a ceremonial sense: that which must be abstained from according to the levitical law, b) in a moral sense: unclean in thought and life

4.16.6 問いについて

1. 地名
   - ガリラヤ、ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの向こう、ツロ、シドン（ユダヤ、ガリラヤだけでなく、異邦人の町も含む）
     - 1:28 では、ガリラヤ。「こうしてイエスのうわさは、たちまちガリラヤの全地方、いたる所にひろまった。」（このときは、ガリラヤ）
2. 群衆の要求
   - なさっていることを聞いて
   - 病苦に悩む者がイエスに触ろうとして（押し寄せた）
     - パリサイ人や、律法学者は、イエスに敵対しているが、群衆は、必ずしも、そのようには行動していない。
3. イエスの弟子たちへの依頼
   - 9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。
     - 物理的接触以外のことをも求める。
4. 汚れた霊
   - 11 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。
     - 1:24 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。
     - 1:34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。
5. イエスの汚れた霊への対応
   - 12 イエスは御自身のことを人にあらわさないようにと、彼らをきびしく戒められた。
6. 復習

- バプテスマのヨハネの宣教：わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。わたしはかがんで、そのくつのひもを解く値うちもない。わたしは水でバプテスマを授けたが、このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けになるであろう」。（1:7,8）
  - 力を示した。聖霊によってバプテスマをお授けになったのだろうか。
- 洗礼を受ける：そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下って来るのを、ごらんになった。すると天から声があった、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。（1:10,11）
- 試みを受ける
- ガリラヤでの宣教開始：「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。（1:15）
- 弟子を招く：「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。（1:17）
- 権威のある教え：汚れた霊に取り憑かれた者を癒す（1:21-28）
- ペトロのしゅうとめ、いろいろな病気の人をいやし、悪霊を追い出す。（1:29-34）
- 祈り、宣教し、悪霊をおいだす（1:35-39）
- 規定の病を患っている人をいやす。（1:40-45）
- 中風の人を癒す。罪を赦す権威（2:1-12）
- レビを弟子にし、収税人や罪人と宴会（2:13-17）：「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。 （2:17）
- 断食について（2:18-22）：だれも、真新しい布ぎれを、古い着物に縫いつけはしない。もしそうすれば、新しいつぎは古い着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなる。まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそうすれば、ぶどう酒は皮袋をはり裂き、そして、ぶどう酒も皮袋もむだになってしまう。
- 安息日に麦の穂を摘む（2:23-28）：それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである
- 手の萎えた人を癒す（3:1-6）：「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」

7. イザヤ書の引用

- 17 これは預言者イザヤの言った言葉が、成就するためである、18 「見よ、わたしが選んだ僕、／わたしの心にかなう、愛する者。わたしは彼にわたしの霊を授け、／そして彼は正義を異邦人に宣べ伝えるであろう。19 彼は争わず、叫ばず、／またその声を大路で聞く者はない。20 彼が正義に勝ちを得させる時まで、／いためられた葦を折ることがなく、／煙っている燈心を消すこともない。（イザヤ

42:1-3）NIV A bruised reed he will not break, and a smoldering wick he will not snuff out, till he has brought justice through to victory.

4.16.7　記録

- 日時：2023 年 7 月 27 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）3 名

4.16.8　メモ

- この後に、会堂で教えるのは、マルコでは 1 箇所のみ。
  - マルコ 6:2 そして、安息日になったので、**会堂**で教えはじめられた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これらのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵はどうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、どうしてか。
- パリサイ人たちは、反発し、イエスを殺そうとすらする。しかし、群衆は、さまざまな場所から集まってきている。イエスが伝えたかったことを受け取っていたのだろうか。悪霊に語らせなかったのだろうか。イエスが伝えたかったこととは、異なる、そして、悪霊は、追い出すべき存在だったのだろう。イエスは、神の国が近づいたと語っても、それが伝わってはいなかったのかもしれない。
- マタイがイザヤ書を引用して伝えたかったすがたが、神の僕イエスの姿だったのではないだろうか。大路で語ることなく、傷ついた葦を折ることなく、消えかかった灯心を消すことなく。
- このあとで、弟子を選ぶが、その弟子を通して、イエスが伝えたことを、少しずつ学んでいきたい。

4.17　3:13-19 十二人を選ぶ

3:13 さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。14 そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、15 また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。16 こうして、この十二人をお立てになった。そしてシモンにペテロという名をつけ、17 またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。18 つぎにアンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、19 それからイスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。イエスが家にはいられると、

4.17.1 マタイ 10:1-4

1 そこで、イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威をお授けになった。2 十二使徒の名は、次のとおりである。まずペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレ、それからゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、3 ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイ、4 熱心党のシモンとイスカリオテのユダ。このユダはイエスを裏切った者である。

4.17.2 ルカ 6:12-16

12 このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた。13 夜が明けると、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び出し、これに使徒という名をお与えになった。14 すなわち、ペテロとも呼ばれたシモンとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、15 マタイとトマス、アルパヨの子ヤコブと、熱心党と呼ばれたシモン、16 ヤコブの子ユダ、それからイスカリオテのユダ。このユダが裏切者となったのである。

マルコによる福音書 3 章 13-19 節福音書対照表

4.17.3 問い

1. イエスは、どこで、どのようにして十二人を選びましたか。
2. マルコには、十二人を立てた理由が書かれていますが、それはどのようなものですか。マタイ、ルカではどのように書かれていますか。
3. マルコ、マタイ、ルカの弟子たちのリストについて気付いたことをあげてましょう。
4. イスカリオテのユダが含まれていることはなにを意味しているのでしょうか。
5. これまでのことなども復習して、なぜ、この時点で、十二人を選んだのか考えてみましょう。（マタイ 9:35-38）

4.17.4 参照

- **十二弟子を選ぶ直前：**マタイ 9:35-38 イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。36 また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた。37 そして弟子たちに言われた、「収穫は多いが、働き人が少ない。38 だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」。

- **十二弟子を選ぶ直後：**ルカ 6:17-19 そして、イエスは彼らと一緒に山を下って平地に立たれたが、大ぜいの弟子たちや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロとシドンの海岸地方などからの大群衆が、18 教を聞こうとし、また病気をなおしてもらおうとして、そこにきていた。そして汚れた霊に悩まされている者たちも、いやされた。19 また群衆はイエスにさわろうと努めた。それは力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいやしたからである。
- 熱心党：参照（聖書に登場するのは十二弟子の箇所のみ）
- 12 弟子について：参照
- 使徒 1:13：彼らは、市内に行って、その泊まっていた屋上の間にあがった。その人たちは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党のシモンとヤコブの子ユダとであった。

13 K [*208] [*209] , [*210] . **14** K [*211] [
] , [*212] [*213] **15** [*214] ·**16** [K
,] Σ Π , **17** Z
[ ] B , ·**18** Φ B M Θ
Θ Σ K **19** , .

4.17.5 記録

- 日時：2023 年 8 月 3 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）6 名

4.17.6 問いについて

1. どこでどのようにして十二人を立てたか

---

*208 (PAI-3S): ascend, go up

*209 (PNI-3S): i) to call to, ii) to call to one's self, iii) to bid to come to one's self, iv) metaph. a) God is said to call to himself the Gentiles, aliens as they are from him, by inviting them, through the preaching of the gospel unto fellowship with himself in the Messiah's kingdom, b) Christ and the Holy Sprit are said to call to themselves those preachers of the gospel to whom they have decided to intrust a service having reference to the extension of the gospel

*210 (2AAi-3P): i) to go away, depart, ii) to go away

*211 (AAI-3S): i) to make, ii) to do

*212 (PAS-3S): i) to order (one) to go to a place appointed, ii) to send away, dismiss

*213 (PAN): i) to be a herald, to officiate as a herald, ii) to publish, proclaim openly: something which has been done, iii) used of the public proclamation of the gospel and matters pertaining to it, made by John the Baptist, by Jesus, by the apostles and other Christian teachers

*214 : i) power of choice, liberty of doing as one pleases, ii) physical and mental power, iii) the power of authority (influence) and of right (privilege), iv) the power of rule or government (the power of him whose will and commands must be submitted to by others and obeyed)

- マルコ：山に登り、みこころにかなった者たち（ここにイスカリオテのユダも含まれている）を呼び寄せられた
- マタイ：イエスは十二弟子を呼び寄せ
- ルカ：このころ、イエスは祈るために山へ行き、**夜を徹して**神に祈られた。夜が明けると、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び出し、これに使徒という名をお与えになった。
- いずれもイエスが呼び寄せておられる。
- ルカの記述からは、選別があった印象を受ける。

2. 十二人を立てた理由
   - マルコ：自分のそばに置く、宣教につかわす、悪霊を追い出す権威を持たせるため
   - マタイ：汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威をお授けになった。
   - ルカ：目的は書かれていない。9 章 1-6 節に、十二人の派遣の記事がある。それ以外に、七十二人の任命と派遣についても記事がある。10 章 1-12 節。派遣は、マルコ 6:7-13、マタイ 10:1,5-15（直後）
   - 使徒（マタイ・ルカ） (ap-os'-tol-os): a delegate, messenger, one sent forth with orders a) specifically applied to the twelve apostles of Christ, b) in a broader sense applied to other eminent Christian teachers i) of Barnabas, ii) of Timothy and Silvanus
3. 弟子のリスト
   - 何人かに、名前以外の情報が含まれている。
     - ペテロ、ボアネルゲ（雷の子）、アルパヨの子、熱心党、イスカリオテ
   - マタイでは、二組の兄弟、収税人マタイ
   - バルトロマイ（ピリポとくみになって登場するので、ヨハネ 1:45 のナタナエルか）
   - タダイ（リストを比較すると、ヤコブの子ユダかヨハネ 14:22）
   - アルパヨの子ヤコブ、熱心党（熱烈な民族主義者）のシモンについては、他の箇所に、記述なし。
4. イスカリオテのユダが含まれている理由
   - マルコでは、みこころにかなった者としている。
   - マタイ、ルカでも、イエスが呼び寄せた者たちの中にいる。
5. 背景と目的
   - マルコにおけるこれまでの経緯

- 直前：マタイ 9:35-38
  - 36 群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた。
  - 37 そして弟子たちに言われた、「収穫は多いが、働き人が少ない。38 だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」。
- 直後：ルカ 6:17-19
- 次の世代へのバトンタッチを考えていたのか？マルコ 2:19 するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。

4.17.7 メモ

- 仲間との交わり
  - パリサイ Φ　　：分離されたもの Hebrew origin（　：paw-rash' to make distinct, declare, distinguish, separate）a separatist, i.e. exclusively religious; a Pharisean, i.e. Jewish sectary:—Pharisee.
  - 最初から、こんな人たち（2:15 収税人、罪人）との、相互の交わりを大切にしていたと思われる。
- 普通の人
  - 使徒 4:13,14 人々はペテロとヨハネとの大胆な話しぶりを見、また同時に、ふたりが無学な、ただの人たちであることを知って、不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であることを認め、14 かつ、彼らにいやされた者がそのそばに立っているのを見ては、まったく返す言葉がなかった。
- イエスに従っていく人
  - すでに、ユダヤ教の権威、律法学者などには、危険視されていた。
  - ヨハネ 6:66-71 それ以来、多くの弟子たちは去っていって、もはやイエスと行動を共にしなかった。67 そこでイエスは十二弟子に言われた、「あなたがたも去ろうとするのか」。68 シモン・ペテロが答えた、「主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。69 わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」。70 イエスは彼らに答えられた、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」。71 これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。
- 権威を授けられた
  - 権威：　　：i) power of choice, liberty of doing as one pleases, ii) physical and mental power, iii) the power of authority (influence) and of right (privilege), iv) the power of rule or government

(the power of him whose will and commands must be submitted to by others and obeyed)

  - 実際の活動は、派遣によって：マルコ 6:7-13、マタイ 10:1,5-15、ルカ 9 章 1-6 節、ルカには、72 人の派遣も書いてある。10 章 1-12 節
  - マルコ 9:17,18 群衆のひとりが答えた、「先生、口をきけなくする霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。18 霊がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。
  - いやし： i) to serve, do service, ii) to heal, cure, restore to health. to wait upon menially, i.e. (figuratively) to adore (God), or (specially) to relieve (of disease):—cure, heal, worship.
- 直接的動機
  - マタイ 9:36 群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて（ : i) to loose, unloose, to set free, ii) to dissolve, metaph., to weaken, relax, exhaust, a) to have one's strength relaxed, to be enfeebled through exhaustion, to grow weak, grow weary, be tired out, b) to despond, become faint hearted)、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた。
  - 神に願う、そこから始まる。マタイ 9:37b「収穫は多いが、働き人が少ない。38 だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」
- 選択について
  - 具体的には、この箇所を読んでも、どのように選んだのかよくわからないが、神様が定められたようになったのだろう。それを表現しているのが、ヨハネ 6:66-71

4.18 3:20-30 ベルゼブル論争

3:20 群衆がまた集まってきたので、一同は食事をする暇もないほどであった。21 身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。22 また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼はベルゼブルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。23 そこでイエスは彼らを呼び寄せ、譬をもって言われた、「どうして、サタンがサタンを追い出すことができようか。24 もし国が内部で分れ争うなら、その国は立ち行かない。25 また、もし家が内わで分れ争うなら、その家は立ち行かないであろう。26 もしサタンが内部で対立し分争するなら、彼は立ち行けず、滅んでしまう。27 だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、その人の家に押し入って家財を奪い取ることはできない。縛ってからはじめて、その家を略奪することができる。28 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。29 しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。30 そう言われたのは、彼らが「イエスはけがれた霊につかれている」と言っていたからである。

4.18.1 マタイ 12:22-32

22 そのとき、人々が悪霊につかれた盲人で口のきけない人を連れてきたので、イエスは彼をいやして、物を言い、また目が見えるようにされた。23 すると群衆はみな驚いて言った、「この人が、あるいはダビデの子ではあるまいか」。24 しかし、パリサイ人たちは、これを聞いて言った、「この人が悪霊を追い出しているのは、まったく悪霊のかしらベルゼブルによるのだ」。25 イエスは彼らの思いを見抜いて言われた、「おおよそ、内部で分れ争う国は自滅し、内わで分れ争う町や家は立ち行かない。26 もしサタンがサタンを追い出すならば、それは内わで分れ争うことになる。それでは、その国はどうして立ち行けよう。27 もしわたしがベルゼブルによって悪霊を追い出すとすれば、あなたがたの仲間はだれによって追い出すのであろうか。だから、彼らがあなたがたをさばく者となるであろう。 28 しかし、わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。29 まただれでも、まず強い人を縛りあげなければ、どうして、その人の家に押し入って家財を奪い取ることができようか。縛ってから、はじめてその家を掠奪することができる。30 わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。31 だから、あなたがたに言っておく。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない。32 また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない。

4.18.2 ルカ 11:14-23; 12:10

11:14 さて、イエスが悪霊を追い出しておられた。それは、物を言えなくする霊であった。悪霊が出て行くと、口のきけない人が物を言うようになったので、群衆は不思議に思った。15 その中のある人々が、「彼は悪霊のかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ」と言い、16 またほかの人々は、イエスを試みようとして、天からのしるしを求めた。17 しかしイエスは、彼らの思いを見抜いて言われた、「おおよそ国が内部で分裂すれば自滅してしまい、また家が分れ争えば倒れてしまう。18 そこでサタンも内部で分裂すれば、その国はどうして立ち行けよう。あなたがたはわたしがベルゼブルによって悪霊を追い出していると言うが、19 もしわたしがベルゼブルによって悪霊を追い出すとすれば、あなたがたの仲間はだれによって追い出すのであろうか。だから、彼らがあなたがたをさばく者となるであろう。20 しかし、わたしが神の指によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。21 強い人が十分に武装して自分の邸宅を守っている限り、その持ち物は安全である。22 しかし、もっと強い者が襲ってきて彼に打ち勝てば、その頼みにしていた武具を奪って、その分捕品を分けるのである。23 わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。12:10 また、人の子に言い逆らう者はゆるされるであろうが、聖霊をけがす者は、ゆるされることはない。

マルコによる福音書 3 章 20-30 節福音書対照表

4.18.3　問い

1. イエスの身内のひとたちは、なぜ、取り押さえにきたのでしょうか。
2. どのような背景で、悪霊を追い出す権威についての論争が起きますか。マタイ、ルカも参考にしましょう。
3. エルサレムから下ってきた律法学者たちはどのようにイエスを批判していますか。
4. イエスは、律法学者のことばに、どのように反論していますか。
5. なぜ、イエスは、聖霊を汚す罪について、語っているのでしょうか。
6. マルコだけでなく、マタイや、ルカも参照すると、イエスについていろいろな受け止め方があったことがわかりますが、それぞれの人に、イエスは、どのように語りかけているのでしょうか。あなたは、どのように、受け取りますか。（マタイ 12:33-37 も参照）

4.18.4　参照

- ベルゼブル（Beelzebub）
  - **Q. 新約聖書に出てくる、ベルゼブル（Beelzebub）は、どのようなものと考えられていたのでしょうか。聖書以外にも、記録はありますか。**
  - **ChatGPT.** 『新約聖書』において、ベルゼブル（Beelzebub）は悪魔や悪霊の一つとして言及されています。名前はヘブライ語で「バアル・ゼブブ（Ba'al Zebub）」と書かれ、直訳すると「蠅の君主」という意味です。

    ベルゼブルは主にマタイによる福音書（マタイ 12:24-27）やルカによる福音書（ルカ 11:15-19）で言及されており、イエス・キリストが悪霊を追い出す力を持っていることを示すために登場します。ユダヤ教の伝統においては、ベルゼブルは悪魔の首領であり、悪霊の王とされています。

    また、聖書以外にもベルゼブルに関する記録はあります。例えば、中世のキリスト教の文献や伝説、悪魔学においてベルゼブルについての言及が見られます。これらの文献では、ベルゼブルは堕天使の一人であり、人々を誘惑し、悪霊を使役する存在として描かれます。

    ただし、ベルゼブルに関する情報は聖書や後の宗教的文献以外では限られており、一般的な知識として広く認知されている内容は限定的です。
- マタイでは、このときいより以前にも、以下の記述がある。
  - マタイ 9:32-34 彼らが出て行くと、人々は**悪霊につかれて口のきけない人**をイエスのところに連れてきた。33 すると、悪霊は追い出されて、口のきけない人が物を言うようになった。群衆は驚いて、「このようなことがイスラエルの中で見られたことは、これまで一度もなかった」と言った。34 しかし、パリサイ人たちは言った、「彼は、**悪霊どものかしら**によって悪霊どもを追い出しているのだ」。
  - ベルゼプル議論（マタイ 12:22-32）では、悪霊にとりつかれ、目もみえず、口も聞けない人が登場する。9 章では、口が聞けない人、悪霊に取りつかれ、口が聞けない人のことが、ルカでは、ベルゼブ

ル議論（ルカ 11:14-23）に書かれている。マタイが正しいのかもしれない。そして、ここで、悪霊の頭が登場し、ベルゼブル議論の、予兆を感じさせるようになっている。

- ユダヤ教における聖霊の理解：参照
- マタイ 12:33-37 木が良ければ、その実も良いとし、木が悪ければ、その実も悪いとせよ。木はその実でわかるからである。34 まむしの子らよ。あなたがたは悪い者であるのに、どうして良いことを語ることができようか。おおよそ、心からあふれることを、口が語るものである。35 善人はよい倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉から悪い物を取り出す。36 あなたがたに言うが、審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。37 あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである」。

20 K · [ ] , . **21** ,
*215 . *216. **22** K *217 B *218
*219 . **23** K *220 *221 .
; **24** , *222, ·**25** , ,
. **26** , , . **27** ,
, , . **28**
*223 ·**29** , ,
, , . **30** · .

4.18.5 記録

- 日時：2023 年 8 月 10 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）5 名

4.18.6 問いについて

1. 身内の人たちが取り押さえにきた理由

---

*215 (AAN): i) to have power, be powerful, ii) to get possession of, iii) to hold
*216 (2AAI3S): to throw out of position, displace
*217 (2AAP-NPM): to go down, come down, descend
*218 B : Beelzebub = “lord of the house” (a name of Satan, the prince of evil spirits)
*219 : i) the divine power, deity, divinity, ii) a spirit, a being inferior to God, superior to men, iii) evil spirits or the messengers and ministers of the devil
*220 (ADP-NSM): to call to
*221 : i) a placing of one thing by the side of another, juxtaposition, as of ships in battle, ii) metaph., iii) a pithy and instructive saying, involving some likeness or comparison and having preceptive or admonitory force, iv) a proverb, v) an act by which one exposes himself or his possessions to danger, a venture, a risk
*222 (APS-3S): to divide
*223 : i) slander, detraction, speech injurious, to another’s good name, ii) impious and reproachful speech injurious to divine majesty

- マルコ 3:20 群衆がまた集まってきたので、一同は食事をする暇もないほどであった。21 身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。
- 群衆が押し寄せ、宗教指導者からは、拒否される。少しの弟子は、ついていっていたが、異常だと感じていたのだろう。
- マルコではこのあと「イエスの母、きょうだい」の記事が、「3:31 さて、イエスの母と兄弟たちとがきて、外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。」と続く。
- マルコ 6:3 この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。

2. 背景

- マタイ 12:22 そのとき、人々が悪霊につかれた盲人で口のきけない人を連れてきたので、イエスは彼をいやして、物を言い、また目が見えるようにされた。23 すると群衆はみな驚いて言った、「この人が、あるいはダビデの子ではあるまいか」。
- ルカ 11:14 さて、イエスが悪霊を追い出しておられた。それは、物を言えなくする霊であった。悪霊が出て行くと、口のきけない人が物を言うようになったので、群衆は不思議に思った。
- 悪霊を追い出された人の記述がマタイとルカで異なる。また、反応も異なる。
- ルカ 11:16 またほかの人々は、イエスを試みようとして、天からのしるしを求めた。

3. エルサレムから下ってきた律法学者の批判

- マルコ 3:22 また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼はベルゼブルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。（マタイ、ルカもほぼ同じ）

4. イエスの反論

- 内部分裂は滅びに：もしサタンが内部で対立し分争するなら、彼は立ち行けず、滅んでしまう。
  - マタイ 12:28 しかし、わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。（ルカ 11:20）
  - ルカ 11:19 もしわたしがベルゼブルによって悪霊を追い出すとすれば、あなたがたの仲間はだれによって追い出すのであろうか。だから、彼らがあなたがたをさばく者となるであろう。（マタイ 12:27）
- まず強い人を縛りあげなければ、その人の家に押し入って家財を奪い取ることはできない。

  - マタイ 12:30 わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。
  - イエスは何を強い人だと考えていたのか。
    * 困難な状況、真意が伝わらない、頑なな心をみて、イエスは独白をしているのか。
- [DQ] 「23 そこでイエスは彼らを呼び寄せ、譬をもって言われた、」とあるが、この「彼ら」は誰なのだろうか。
  -「エルサレムから下ってきた律法学者たち」はその場にいたのだろうか。そうであればその可能性が高い。しかし、「21 身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。」とあり、身内の者たちなのかもしれない。それぞれによってことばの意味が少し変わってくるように見える。家族なのかもしれない。

5. 聖霊をけがす罪
   - 28 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。29 しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。
     - マタイ 12:32 聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない。
6. それぞれの人へのメッセージ
   - それぞれの人に対する、聖霊のはたらきについて、考えたい。
     - 木のたとえをみると、救いがない。悔い改め（方向転換）か。
   - マタイ、ルカは、このあと、さまざまな記事が続き、この箇所と関係しているように見える。
     - マタイ：12:33-37 実によって木を知る、38-42 しるしを求める、43-45 汚れた霊が戻ってくる、46-50 イエスの母、きょうだい
     - ルカ：24-26 汚れた霊が戻ってくる、27-28 真の幸い、29-32 人々はしるしを欲しがる、33-36 目は体の灯

4.18.7 メモ

- 家族：マタイ 10:32-39 だから人の前でわたしを受けいれる者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受けいれるであろう。33 しかし、人の前でわたしを拒む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう。34 地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。35 わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。36 そして家の者が、その人の敵となるであろう。37 わたしよりも父または

母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。38 また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。39 自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。

- 悪霊：使徒 10:38 神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら、また**悪魔に押えつけられている**[*224]**人々をことごとくいやしながら**、巡回されました。
- 共観福音書を読んでいると「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」との批判に対して、イエスは、さまざまな方法で、反論しているように見える。神の国は近い、神の国はすでにきている（マタイ・ルカ）ということの、証・しるしとして悪霊が追い出されているのに、それがまったく違ったものに理解されることを警戒したものだろう。マタイの実についての言及も、実を見るべきこととしてこのことに言及しているのかもしれない。しかし、本質は、このことを通して、イエス様と父なる神様の関係のような、神様との交わりを持つ、永遠の命に生きる生活に導かれることだとすると、鍵は、神様の働き、神様が聖霊を通して与えてくださる理解を受け入れることなのだろう。それを阻害するもの、それが何かは明確にはわからないし、さまざまにあるのかもしれないが、それこそが、「強い人」なのかもしれない。

4.19 3:31-35 イエスの母、きょうだい

3:31 さて、イエスの母と兄弟たちとがきて、外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。32 ときに、群衆はイエスを囲んですわっていたが、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟、姉妹たちが、外であなたを尋ねておられます」と言った。33 すると、イエスは彼らに答えて言われた、「わたしの母、わたしの兄弟とは、だれのことか」。34 そして、自分をとりかこんで、すわっている人々を見まわして、言われた、「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。

4.19.1 マタイ 12:46-50

46 イエスがまだ群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちとが、イエスに話そうと思って外に立っていた。47 それで、ある人がイエスに言った、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟がたが、あなたに話そうと思って、外に立っておられます」。48 イエスは知らせてくれた者に答えて言われた、「わたしの母とは、だれのことか。わたしの兄弟とは、だれのことか」。49 そして、弟子たちの方に手をさし伸べて言われた、「ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。50 天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。

[*224] (PPP-APM): i) to exercise harsh control over one, to use one's power against one, ii) to oppress one

4.19.2 ルカ 8:19-21

> 19 さて、イエスの母と兄弟たちとがイエスのところにきたが、群衆のためそば近くに行くことができなかった。20 それで、だれかが「あなたの母上と兄弟がたが、お目にかかろうと思って、外に立っておられます」と取次いだ。21 するとイエスは人々にむかって言われた、「神の御言を聞いて行う者こそ、わたしの母、わたしの兄弟なのである」。

マルコによる福音書 3 章 31-35 節福音書対照表

4.19.3 問い

1. 20 節、21 節を復習しましょう。イエスの（肉親である）母と兄弟たちは何のためにイエスのもとに来ていますか。
2. イエスの（肉親である）母や兄弟たちはイエスのことをどう思っていたのでしょうか。
3. イエスはイエスの（ほんとうの）母や兄弟はどのような人たちだと言っていますか。
4. 「わたしの母、わたしの兄弟」と呼んだ、イエスと共にいる人たちはどのような人たちでしょうか。
5. イエスはイエスの（肉親である）母や兄弟たちに何を伝えていますか。

4.19.4 参照

- マリアについて：参照
- **母マリアに関する聖書箇所抜粋**
  - ルカ 1:38 そこでマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」。そして御使は彼女から離れて行った。
  - ルカ 1:45 （エリザベツ）主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでしょう」。
  - ルカ 11:27,28 イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。28 しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。
  - ヨハネ 2:1-5 三日目にガリラヤのカナに婚礼があって、イエスの母がそこにいた。2 イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれた。3 ぶどう酒がなくなったので、母はイエスに言った、「ぶどう酒がなくなってしまいました」。4 イエスは母に言われた、「婦人よ、あなたは、わたしと、なんの係わりがあり

ますか。わたしの時は、まだきていません」。5 母は僕たちに言った、「このかたが、あなたがたに言いつけることは、なんでもして下さい」。

- **イエスの兄弟たち姉妹たち**（郷里のひとたちについても参照）
  - マルコ 6:1-6 ナザレで受け入れられない、マタイ 13:53-58、ルカ 4:16-30
  - マルコ 6:3 この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。
  - マタイ 13:55,56 この人は大工の子ではないか。母はマリヤといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 またその姉妹たちもみな、わたしたちと一緒にいるではないか。こんな数々のことを、いったい、どこで習ってきたのか」。
  - ヨハネ 7:1-8 そののち、イエスはガリラヤを巡回しておられた。ユダヤ人たちが自分を殺そうとしていたので、ユダヤを巡回しようとはされなかった。2 時に、ユダヤ人の仮庵の祭が近づいていた。3 そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った、「あなたがしておられるわざを弟子たちにも見せるために、ここを去りユダヤに行ってはいかがです。4 自分を公けにあらわそうと思っている人で、隠れて仕事をするものはありません。あなたがこれらのことをするからには、自分をはっきりと世にあらわしなさい」。5 **こう言ったのは、兄弟たちもイエスを信じていなかったからである。**6 そこでイエスは彼らに言われた、「わたしの時はまだきていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。7 世はあなたがたを憎み得ないが、わたしを憎んでいる。わたしが世のおこないの悪いことを、あかししているからである。8 あなたがたこそ祭に行きなさい。わたしはこの祭には行かない。わたしの時はまだ満ちていないから」。9 彼らにこう言って、イエスはガリラヤにとどまっておられた。
  - コリント前 9:5 わたしたちには、ほかの使徒たちや**主の兄弟**たちやケパのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。
  - ガラテヤ 1:19 しかし、**主の兄弟**ヤコブ以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。
- マタイ 10:36 そして家の者が、その人の敵となるであろう。
- **父の御心を行う**
  - ヨハネ 6:38-40 わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。39 わたしをつかわされたかたのみこころは、わたしに与えて下さった者を、わたしがひとりも失わずに、終りの日によみがえらせることである。40 わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」。

31 K [*225] . **32** [*226]
, . [ ] [*227] . **33** .
[ ]; **34** [*228] [*229] . . **35**
[ ] [*230] , .

4.19.5 記録

- 日時：2023 年 8 月 17 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）7 名、参加（遠隔）3 名

4.19.6 問いについて

1. 20,21 の復習
   - 20 群衆がまた集まってきたので、一同は食事をする暇もないほどであった。21 身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。
   - **「取押えに出てきた」身内の者**であることを確認
   - マタイ、ルカでは、この表現はなく、柔らかくなっている。マリアや、主の兄弟への配慮か。
2. 肉親はどう思っていたか
   - マタイ 12:46 イエスがまだ群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちとが、イエスに話そうと思って外に立っていた。47 それで、ある人がイエスに言った、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟がたが、あなたに話そうと思って、外に立っておられます」。
   - 群衆が押し寄せ、宗教指導者からは、拒否される。少しの弟子は、ついていっていたが、異常だと感じていたのだろう。
   - 33 節は、かなり厳しく響く。33 すると、イエスは彼らに答えて言われた、「わたしの母、わたしの兄弟とは、だれのことか」。「取押さえに」出てくるような人ではないよ。と言っている。
   - 参照のヨハネ 7:1-8 は、一つの背景を明らかにしている。
   - 参照のルカ 11:27,28 も、イエスと母マリアの関係を明らかにしている。
3. 本当の母、兄弟とは
   - 34 そして、自分をとりかこんで、すわっている人々を見まわして、言われた、「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。

---

*225 (AAI-3P): i) to order (one) to go to a place appointed, ii) to send away, dismiss
*226 (INI-3S): i) to sit down, seat one's self, ii) to sit, be seated, of a place occupied
*227 (PAI-3P): i) to seek in order to find, ii) to seek i.e. require, demand
*228 (AMP-NSM): i) to look around, ii) to look around about one's self, iii) to look round on one (i.e. to look for one's self at one near by)
*229 (DSM): in a circle, around, round about, on all sides
*230 (ASN): i) what one wishes or has determined shall be done, ii) will, choice, inclination, desire, pleasure

- マタイ：49 そして、弟子たちの方に手をさし伸べて言われた、「ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。50 天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。
- ルカ：21 するとイエスは人々にむかって言われた、「神の御言を聞いて行う者こそ、わたしの母、わたしの兄弟なのである」。

4. イエスの周りにいる人：母、兄弟と呼ばれている
   - 父は含まれていない。母と呼ばれるような人だけではなく、姉妹は、おそらく含まれていただろう。
   - 35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。
   - 神のみこころを行っているものたちなのだろうか。
   - 父なる神の子となることが鍵
   - マルコでは、20：食事を一緒にしようとしていたひと。群衆。前段の続きとすると、22 エルサレムから下ってきた律法学者たち。マタイでは、パリサイ人。まだいただろうか。
5. 肉親へのメッセージ
   - 一般論ではなく「取り押さえに来た」家族に対して語っている。33「わたしの母、わたしの兄弟とは、だれのことか」。
   - イエスは、バプテスマの時に、神の声を聞き、聖霊が下ったイエスとし、父なる神の子として「神のみこころを行う者」として、生きようとし、そのような者と共に、生きようとしている。
   - 聖霊の働きを見、聖霊の声に聞き従うように。
   - 肉の目ではなく、霊の目で

4.19.7 メモ

- 「神のみこころを行う者」、マタイ「天にいますわたしの父のみこころを行うもの」、ルカ「神の御言を聞いて行う者」
- 共通の経験：ともに神のみこころに従おうとしたものたち、ともに喜び、ともに悲しみ、泣く人、それが、それぞれの尊厳を形作る。何でも良いわけではないが。
- 共通の興味、同じ方向を向いている。共通の方に従っている。
- これらが、互いに愛し合うように招かれる。
  - ヨハネ 13:34,35 わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。35 互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。
- イエスの言葉：34 そして、自分をとりかこんで、すわっている人々を見まわして、言われた、「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。

- これをみても、全員が、「わたしの兄弟、また姉妹、また母」だとは言っていないように、見える。「いる」と言っているのだから。
- 父については、語らないことで（マタイは明確に、「12:50 天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」と言っている。）自分は、神の子として生きていること。そして「神のみこころを行う者はだれでも」イエスの家族、すなわち、神の子だよと言っている。（母も、父の責任下にあると考えられていたのだろう、その意味では、兄弟も姉妹も、母も同じである。）
- このことばを聞いた人たちは、おそらく、聖霊の促しを聞いただろう。「神のみこころをおこなう」ここにかかっていることを。エルサレムから下ってきた律法学者たちも、これを聞いたとすると、考える糸口はあったかもしれない。悔い改められるかどうかは、不明だが。

4.20　4:1-9 「種を蒔く人」のたとえ

4:1 イエスはまたも、海べで教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。2 イエスは譬で多くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、3 「聞きなさい、種まきが種をまきに出て行った。4 まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。5 ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、6 日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種はいばらの中に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまったので、実を結ばなかった。8 ほかの種は良い地に落ちた。そしてはえて、育って、ますます実を結び、三十倍、六十倍、百倍にもなった」。9 そして言われた、「聞く耳のある者は聞くがよい」。

4.20.1　マタイ 13:1-9

1 その日、イエスは家を出て、海べにすわっておられた。2 ところが、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわられ、群衆はみな岸に立っていた。3 イエスは譬で多くの事を語り、こう言われた、「見よ、種まきが種をまきに出て行った。4 まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。5 ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、6 日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種はいばらの地に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまった。8 ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。9 耳のある者は聞くがよい」。

4.20.2　ルカ 8:4-8

4 さて、大ぜいの群衆が集まり、その上、町々からの人たちがイエスのところに、ぞくぞくと押し寄せてきたので、一つの譬で話をされた、5 「種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、ある種は道

ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまった。6 ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。7 ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらも一緒に茂ってきて、それをふさいでしまった。8 ところが、ほかの種は良い地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ」。こう語られたのち、声をあげて「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われた。

マルコによる福音書 4 章 1-9 節福音書対照表

4.20.3 問い

1. イエスはどこでどのような人たちにどのようなな方法で教えていますか。
2. なぜ、舟に乗って教えたのでしょうか。会堂で教えることとは、どのような違いがありますか。
3. 一般的にたとえ話にはどのような特徴・効果がありますか。
4. 種がまかれた 4 種類の土地について書かれていますが、これらの土地の特徴、そしてその種がどうなったかについてまとめてみましょう。どうして異なる結果になったのでしょうか。
5. 最後に、イエスはなんと言っていますか。

4.20.4 参照

- たとえと比喩：参照
- これまでに教えた場所
  - マルコ 1:16 海辺：弟子を招く
  - マルコ 1:21 それから、彼らはカペナウムに行った。そして安息日にすぐ、イエスは**会堂**にはいって教えられた。
  - マルコ 1:29 シモンとアンデレとの家
  - マルコ 1:39 そして、ガリラヤ全地を巡りあるいて、諸**会堂**で教えを宣べ伝え、また悪霊を追い出された。重い皮膚病
  - マルコ 2:1,2 幾日かたって、イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、**家**におられるといううわさが立ったので、
  - マルコ 2:13 イエスはまた海べに出て行かれると、多くの人々がみもとに集まってきたので、彼らを教えられた。
  - マルコ 2:15 レビの家
  - マルコ 2:23 麦畑
  - マルコ 3:1 イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人がいた。
  - マルコ 3:7-10 それから、イエスは弟子たちと共に海べに退かれたが、ガリラヤからきたおびただしい群衆がついて行った。またユダヤから、8 エルサレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シドンのあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞いて、みもと

にきた。9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。10 それは、多くの人をいやされたので、病苦に悩む者は皆イエスにさわろうとして、押し寄せてきたからである。

  - マルコ 3:13 さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。
  - マルコ 3:19b, 20 イエスが家にはいられると、20 群衆がまた集まってきたので、一同は食事をする暇もないほどであった。

- **説教における舟の利用**
  - マルコ 3:9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小**舟**を用意しておけと、弟子たちに命じられた。
  - ルカ 5:3 その一そうはシモンの**舟**であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、**舟**の中から群衆にお教えになった。

1 K . *231 , , . **2** *232 ·**3** . *233. **4** , *234 *235 . **5** *236 , *237 ·**6** *238 *239 *240. **7** *241, *242 *243 , . **8** . **9** · .

*231 (API-3S): i) to gather together, to gather, ii) to bring together, assemble, collect, iii) to lead with one's self

*232 (DOF): i) a placing of one thing by the side of another, juxtaposition, as of ships in battle, ii) metaph. a) a comparing, comparison of one thing with another, likeness, similitude b) an example by which a doctrine or precept is illustrated c) a narrative, fictitious but agreeable to the laws and usages of human life, by which either the duties of men or the things of God, particularly the nature and history of God's kingdom are figuratively portrayed, d) a parable: an earthly story with a heavenly meaning, iii) a pithy and instructive saying, involving some likeness or comparison and having preceptive or admonitory force, a) an aphorism, a maxim, iv) a proverb, v) an act by which one exposes himself or his possessions to danger, a venture, a risk

*233 (AAN): i) to sow, scatter, seed, ii) metaph. of proverbial sayings

*234 : i) flying, winged, ii) flying or winged animals, birds

*235 (2AAI-3S): i) to consume by eating, to eat up, devour, ii) metaph.

*236 (ASN): rocky, stony

*237 : i) to make spring up, cause to shoot forth, ii) to spring up

*238 : i) to burn with heat, to scorch, ii) to be tortured with intense heat

*239 : i) a root, ii) that which like a root springs from a root, a sprout, shoot, iii) metaph. offspring, progeny

*240 (API-3S): i) to make dry, dry up, wither, ii) to become dry, to be dry, be withered, iii) to waste away, pine away, i.e. a withered hand

*241 (APS): i) thorn, bramble, ii) bush, brier, a thorny plant

*242 : ascend, a) to go up, b) to rise, mount, be borne up, spring up

*243 : to choke utterly, a) metaph. the seed of the divine word sown in the mind, b) to press round or throng one so as almost to suffocate him

4.20.5　記録

- 日時：2023 年 8 月 24 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）5 名

4.20.6　問いについて

1. どこで、どのようなひとたちに、どのような方法で
    - 1 イエスは**またも**、海べで教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。2 イエスは譬で多くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、
    - 陸地にいる、おびただしい群衆（1000 人以上か）にむかい、舟に乗って座ったまま、譬でおしえた。
2. なぜ、舟に乗って、会堂で教えることとの違い
    - いやしや、悪霊を追い出すのではなく、話をするため
    - 何が大切かをしっていた
    - 会堂は許可がいる、人数が限られる、パリサイ派のひとたちや、律法学者たちとの議論をさけるため
    - 会堂では、律法学者や、長老、会堂司の許可・合意が得られず、イエスはもう教えられなかったかもしれない。一方、屋外では、会堂に入りづらいひとも、聞くことができたかもしれない。
3. たとえ話
    - 考えてもらうため、何を伝えるためだろうか。
    - たとえ（　　：a placing of one thing by the side of another, juxtaposition）：あるものの、横に置く
    - 神の国の奥義（11 節）は、知らないこと、わからないこと。イエスは、それを教えるのに、たとえを用いられた。
4. 四種類の土地とその結果、なぜ異なる結果となったか
    - 道ばた：鳥が来て食べた。ルカでは「踏みつけられ」
    - 土の薄い石地：すぐに芽を出したが、根がないので枯れてしまった
    - いばらの中：いばらが伸びて、ふさぎ、実がならなかった（実のことはマルコのみ）

- 良い地：はえて、そだち、実を結び、三十倍、六十倍、百倍。マタイでは、百倍、六十倍、三十倍、ルカでは、百倍。
- 種はおなじ、撒かれた場所も偶然に見える。
- 結果はどこに責任があるのか。実際とたとえ

5. 聞く耳のある者はきくがよい
   - マタイは「耳のある者は聞くが良い」（　　.）
   - 聞き方に注意せよということか

4.20.7 メモ

- 譬（たとえ）天的な意味を持つ地上の物語。天のこと、神の国のことは、神の国は近いと言われても、想像がつかない。地上の身近なもので説明してもらわないと、わからない。
- 聞きなさい。聞く耳のある者は聞きなさい、と聞くことの大切さ、おそらく、しっかり聞いて、理解することが求められている。そこには、ベルゼブルの話でも出てきた、聖霊の促しがあるのかもしれない。
- 一つ一つのたねの撒かれた地について、イエスが知っていたり、制御していたりするわけではない。聞く側に、すべての責任があるわけでもないだろう。神様に委ねられているとも言えるし、わからないとも言える。それこそ、奥義は、完璧に理解できるわけではないのかもしれな。しかし、注意して聞き、理解しようとすること、心に語りかける聖霊の促しに心をとめることも必要。
- 「新聖書注解」いのちのことば社、新約 1 352 頁には、次のようにある。「参考までに日本の農業では一粒から五、六百粒、最高で五万七千百粒も実るし、古代バビロニアでも二、三百倍の身を結んだ（ヘロドトス『歴史』一 193)」。ユダヤの農業がいかに杜撰だったかがわかる。本職の「種まき」が「わざわざ種を蒔きにでかけた」最中でさえ、道ばた、岩の上、いばらの中に落ちるのはそのためである。

4.21 4:10-12 たとえを用いて話す理由

4:10 イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子と共に、これらの譬について尋ねた。11 そこでイエスは言われた、「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。12 それは／『彼らは見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、悟らず、／悔い改めてゆるされることがない』／ためである」。

4.21.1 マタイ 13:10-17

10 それから、弟子たちがイエスに近寄ってきて言った、「なぜ、彼らに譬でお話しになるのですか」。11 そこでイエスは答えて言われた、「あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼らには

許されていない。12 おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。13 だから、彼らには譬で語るのである。それは彼らが、見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないからである。14 こうしてイザヤの言った預言が、彼らの上に成就したのである。『あなたがたは聞くには聞くが、／決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。15 この民の心は鈍くなり、／その耳は聞えにくく、／その目は閉じている。それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、／悔い改めていやされることがないためである』。16 しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。17 あなたがたによく言っておく。多くの預言者や義人は、あなたがたの見ていることを見ようと熱心に願ったが、見ることができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである。

4.21.2 ルカ 8:9-10

9 弟子たちは、この譬はどういう意味でしょうか、とイエスに質問した。10 そこで言われた、「あなたがたには、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても悟られないために、譬で話すのである。

マルコによる福音書 4 章 10-12 節福音書対照表

4.21.3 問い

1. たとえについて尋ね、説明を聞いているのはだれですか。
2. 以下、マタイを中心に考えましょう。なぜイエスはたとえを用いるのでしょうか。
3. 弟子たちが「神の国の奥義を授けられている」とは、どのような意味なのでしょうか。群衆とはなにが違うのでしょうか。
4. イザヤ書からの引用はなにを伝えているのでしょうか。
5. マタイ 13 章 17 節の「多くの預言者や義人」が見たかったこと、聞きたかったこととは何なのでしょうか。

4.21.4 参照

- **ルカ直前の記事**：ルカ 8:1-3 そののちイエスは、神の国の福音を説きまた伝えながら、町々村々を巡回し続けられたが、十二弟子もお供をした。2 また悪霊を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、3 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。
  - マルコ 15:40,41 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあと

に従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。
  - （対照句）マタイ 27:56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。（マタイ 13:55）
- イザヤ 6:9-10 主は言われた、「あなたは行って、この民にこう言いなさい、／『あなたがたはくりかえし聞くがよい、／しかし悟ってはならない。あなたがたはくりかえし見るがよい、／しかしわかってはならない』と。10 あなたはこの民の心を鈍くし、／その耳を聞えにくくし、／その目を閉ざしなさい。これは彼らがその目で見、／その耳で聞き、／その心で悟り、／悔い改めていやされることのないためである」。
- ヨハネ 12:36-43 光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。イエスはこれらのことを話してから、そこを立ち去って、彼らから身をお隠しになった。37 このように多くのしるしを彼らの前でなさったが、彼らはイエスを信じなかった。38 それは、預言者イザヤの次の言葉が成就するためである、「主よ、わたしたちの説くところを、だれが信じたでしょうか。また、主のみ腕はだれに示されたでしょうか」。39 こういうわけで、彼らは信じることができなかった。イザヤはまた、こうも言った、40 「神は彼らの目をくらまし、心をかたくなになさった。それは、彼らが目で見ず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである」。41 イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであって、イエスのことを語ったのである。42 しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。43 彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。
- 使徒 28:23-28(-29) そこで、日を定めて、大ぜいの人が、パウロの宿につめかけてきたので、朝から晩まで、パウロは語り続け、神の国のことをあかしし、またモーセの律法や預言者の書を引いて、イエスについて彼らの説得につとめた。24 ある者はパウロの言うことを受けいれ、ある者は信じようともしなかった。25 互に意見が合わなくて、みんなの者が帰ろうとしていた時、パウロはひとこと述べて言った、「聖霊はよくも預言者イザヤによって、あなたがたの先祖に語ったものである。26 『この民に行って言え、／あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。27 この民の心は鈍くなり、／その耳は聞えにくく、／その目は閉じている。それは、彼らが目で見ず、／耳で聞かず、／心で悟らず、悔い改めて／いやされることがないためである』。28 そこで、あなたがたは知っておくがよい。神のこの救の言葉は、異邦人に送られたのだ。彼らは、これに聞きしたがうであろう」。29 〔パウロがこれらのことを述べ終ると、ユダヤ人らは、互に論じ合いながら帰って行った。〕
- 参照：ローマ 11:7-8 では、どうなるのか。イスラエルはその追い求めているものを得ないで、ただ選ばれた者が、それを得た。そして、他の者たちはかたくなになった。8 「神は、彼らに鈍い心と、／見えない目と、聞えない耳とを与えて、／きょう、この日に及んでいる」／と書いてあるとおりである。
  - 申命記 29:4 (or 3) しかし、今日まで主はあなたがたの心に悟らせず、目に見させず、耳に聞かせられなかった。
  - イザヤ 29:10 主が深い眠りの霊をあなたがたの上にそそぎ、／あなたがたの目である預言者を閉じこめ、／あなたがたの頭である先見者を／おおわれたからである。

10 K , [*244] . **11** .
. [*245] [*246], **12** ,
, .

マタイ 13:10-17

10 K . ; 11 .
, . 12 , . , ,
. 13 , , 14
. , . 15 ,
,
. 16 . 17
, .

4.21.5 記録

- 日時：2023 年 8 月 31 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）1 名

4.21.6 問いについて

1. 説明を聞いているのは
   - マルコ：そばにいた者たち、十二弟子。マタイ、ルカでは、弟子たち。
   - ルカ 8:1-3 参照。多くの女性たちが一緒にいたことがわかる。2 また悪霊を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、3 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。
     - ルカではこの前に、パリサイ人シモンの家での食事の記事（7:36-50）で、罪の女であったものが、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。記事がある。最後には、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。と伝えている。

[*244] (AAI-3P): i) to question, ii) to ask
[*245] : without, out of doors
[*246] : i) to become, i.e. to come into existence, begin to be, receive being, ii) to become, i.e. to come to pass, happen, iii) to arise, appear in history, come upon the stage, iv) to be made, finished, v) to become, be made

2. なぜ、たとえを用いるのか

- マルコ：「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。12 それは／『彼らは見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、悟らず、／悔い改めてゆるされることがない』／ためである」。明確ではないが、旧約聖書からの引用を匂わせる言葉を付け加えている。

- ルカ：「あなたがたには、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても悟られないために、譬で話すのである。」一番簡単。旧約聖書からの引用も、あまり感じられない。

- マタイ：「あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていない。12 おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。13 だから、彼らには譬で語るのである。それは彼らが、見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないからである。

- 共通なのは「神の国（天国）の奥義を知ることが許されている」という部分、つまり、神の国についての、たとえなので、直接には語っても理解できない。だから、我々あの住む世界にあるものに置き換えて、たとえで語る。

3. 弟子たちは何が違うのか

- そばにいる、つねに、イエスと共にいて、学ぼうとしているかどうか。
  - そばにいると、なにが違うのか。

- 神の御心を、天の父の御心として生きること、神の国がすでにきている。近いと感じられる、神の国自体を日常的にみることができるかどうかにかかっている。

- みなさんは、神の国（が近いこと）を見ていますか、

4. イザヤ書

- 14 こうしてイザヤの言った預言が、彼らの上に成就したのである。『あなたがたは聞くには聞くが、／決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。15 この民の心は鈍くなり、／その耳は聞えにくく、／その目は閉じている。それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、／悔い改めていやされることがないためである』。
- イザヤ 6:9-10、ヨハネ 12:36-43、使徒 28:23-28(-29) 参照
- （適切に素晴らしいメッセージを）語れば、聞き入れられ、悔い改めに至るわけではない。悔い改めない自由も（自立性）も与えられている。同時に、聖霊が語りかけ、悔い改めが促されていることも事実。そこに、至らない理由は、ひと様々だということもあるのだろう。種まきの譬からも。悔い改めて、イエスに従うことは、神の国の奥義を得ることでもある。

5.「多くの預言者や義人」が見たかったこと、聞きたかったこと？

- 16 しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。17 あなたがたによく言っておく。多くの預言者や義人は、あなたがたの見ていることを見ようと熱心に願ったが、見ることができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである。
- おそらく、「天国の奥義」（マタイ 13:11)、「神の国の奥義」（マルコ 4:11、ルカ 8:10）を指していると思われる。
- 「多くの預言者や義人」が見たかったこと、聞きたかったこととすると、メシヤを意味しているともとれる。そのメシヤを通して、示される神様の御心？
- イエスのそばにいることで、神の国がすぐそばにあることを見ることができる。
- マタイ 12:28-29 28 しかし、わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。ルカ 11:20-21 20 しかし、わたしが神の指によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。

4.21.7 メモ

- 「イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子と共に、これらの譬について尋ねた。」(10) とはじまる。それを待っていたのだろうか。そばにいたのに、イエスがひとりになられた時と言っている。イエスに従ってきていたひとは、別としてということだろう。十二弟子と共には、知りたかったのは、そばにいたものたちだが、弟子たちが意味がわからないとは言えなかったのかもしれない。しかし、結局、皆でイエスの下に、聞きにに行く。
- イエスのそばにいて、何がよかったかは、神の国の奥義を知る鍵でもあるだろう。すこし考えてみる。
  - 直接的には、解きあかしを聞くことができる。説明してもらえる。
  - そばにいることで、イエスが伝える、神の国の到来を、それが神の国が近いことだとして経験することができる。
  - イエスは、つねに守ってくれる。レビの家での会食の時。麦の穂を摘んで食べていた時。他にもあるように思える。
  - 共に、働くことができる。舟を用意する。派遣される。他にもあるように思える。
  - もっと一般的に、神様の御心を知ることなのかもしれない。イエスと共に歩むこと、イエスに従っていくことに勝るものはないように思う。一つのことでは、ないように思う。「神の御心を行う人」（マタイ 12:50）になることなのかもしれない。一点ではなく、ずっと継続的に、イエスに従って歩むことだろうか。
- Matt 13:11b: あなたがたには、天国の奥義を**知ること**が許されているが、彼らには許されていない。
  [*247] , .
- かたくなにするメッセージ：聖霊による導き、語りかけがあり、それに応答する悔い改めが、同時に促さ

[*247] : i) to learn to know, come to know, get a knowledge of perceive, feel, ii) to know, understand, perceive, have knowledge of, iii) sexual intercourse between a man and a woman, iv) to become acquainted with, to know

れている。まさに、聞く耳のあるものは、聞きなさい。

- イザヤの部分は、マルコだけではなく、ルカでもほとんど触れていないので、イエスは、イザヤの言葉として、引用したのではないかもしれない。

4.22 4:13-20 「種を蒔く人」のたとえの説明

4:13 また彼らに言われた、「あなたがたはこの譬がわからないのか。それでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。14 種まきは御言をまくのである。15 道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼らの中にまかれた御言を、奪って行くのである。16 同じように、石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、17 自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。そののち、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。18 また、いばらの中にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くが、19 世の心づかいと、富の惑わしと、その他いろいろな欲とがはいってきて、御言をふさぐので、実を結ばなくなる。20 また、良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである」。

4.22.1 マタイ 13:18-23

18 そこで、種まきの譬を聞きなさい。19 だれでも御国の言を聞いて悟らないならば、悪い者がきて、その人の心にまかれたものを奪いとって行く。道ばたにまかれたものというのは、そういう人のことである。20 石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。21 その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。22 また、いばらの中にまかれたものとは、御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさぐので、実を結ばなくなる人のことである。23 また、良い地にまかれたものとは、御言を聞いて悟る人のことであって、そういう人が実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである」。

4.22.2 ルカ 8:11-15

11 この譬はこういう意味である。種は神の言である。12 道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。13 岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受けいれるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試錬の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。 14 いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかいや富や快楽にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。15 良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。

マルコによる福音書 3 章 13-20 節福音書対照表

4.22.3　問い

1. マルコ、マタイ、ルカを比較しながら読みましょう。たとえのなかで、種まきのまく種は何だと言っていますか。

2.「道ばたに蒔かれたもの」とはどのような人たち、聞き方で、どうなりますか。

3.「石地に蒔かれたもの」とはどのような人たち、聞き方で、どうなりますか。

4.「茨の中に蒔かれたもの」とはどのような人たち、聞き方で、どうなりますか。

5.「良い土地に蒔かれたもの」とはどのような人たち、聞き方で、どうなりますか。

6. イエスは、このたとえとそのときあかしを通して、何を伝えようとしているのでしょうか。弟子たちや、イエスのことばを聞いた人たちは、何に注意し、何を理解しないといけないのでしょうか。

4.22.4　参照

- サタン（敵対するもの）と悪魔（分裂させるもの・中傷するもの）：参照
- サタンと悪魔の福音書における引用：参照（荒野での試み以外の箇所）
  - マタイ 4:10 するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ[25]』と書いてある」。
  - マルコ 8:33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「**サタン**よ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。

13 K [*248] , [*249]; 14 . 15 . , [*250] . 16 [*251] , , 17 [*252] , [*253] [*254] . 18

---

*248 : i) to see, a) to perceive with the eyes, b) to perceive by any of the senses, c) to perceive, notice, discern, discover, d) to see, e) to experience any state or condition, f) to see i.e. have an interview with, to visit, ii) to know, a) to know of anything, b) to know, i.e. get knowledge of, understand, perceive, c) to have regard for one, cherish, pay attention to

*249 : i) to learn to know, come to know, get a knowledge of perceive, feel, ii) to know, understand, perceive, have knowledge of, iii) sexual intercourse between a man and a woman, iv) to become acquainted with, to know

*250 : straightway, immediately, forthwith

*251 : rocky, stony, of a ground full of rocks

*252 : i) a root, ii) that which like a root springs from a root, a sprout, shoot, iii) metaph. offspring, progeny

*253 : i) a pressing, pressing together, pressure, ii) metaph. oppression, affliction, tribulation, distress, straits

*254 : persecution

[*255] . , 19 [*256] [*257] [*258] [*259] [*260] [*261] [*262] [*263] . 20 , [*264] [*265] .

4.22.5 記録

- 日時：2023 年 9 月 7 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）2 名

4.22.6 問いについて

1. 種まきのまく種
    - （聞いた）御言（マルコ）14 種まきは御言をまくのである。（ .）御国の言（マタイ 13:19）神の言（ルカ 8:11）これ以外は、御言
    - 心にまかれたもの（マタイ 13:18）
    - 成長し、実を結ばせるもの。それは、実際、何なのだろうか。
2. 道ばたに蒔かれたもの
    - マルコ 4:15 道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼らの中にまかれた御言を、奪って行くのである。
    - マタイ 13:19 だれでも御国の言を聞いて悟らないならば、悪い者がきて、その人の心にまかれたものを奪いとって行く。道ばたにまかれたものというのは、そういう人のことである。
    - ルカ 8:12 道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。

[*255] : i) thorn, bramble, ii) bush, brier, a thorny plant
[*256] : care, anxiety
[*257] : i) for ever, an unbroken age, perpetuity of time, eternity, ii) the worlds, universe, iii) period of time, age
[*258] : deceit, deceitfulness
[*259] : riches, wealth, a) abundance of external possessions, b) fulness, abundance, plenitude, c) a good i.e. that with which one is enriched
[*260] : desire, craving, longing, desire for what is forbidden, lust
[*261] : i) to go into, enter, ii) metaph. of affections entering the soul
[*262] : to choke utterly, a) metaph. the seed of the divine word sown in the mind, b) to press round or throng one so as almost to suffocate him
[*263] : metaph. without fruit, barren, not yielding what it ought to yield
[*264] : i) to receive, take up, take upon one's self, ii) to admit i.e. not to reject, to accept, receive
[*265] : i) to bear fruit, ii) to bear, bring forth, deeds, iii) to bear fruit of one's self

- なぜ、「道ばたにまかれた」と表現しているのか？　畑ではないところ？
- 聞いても、理解しない。うわの空だろうか。そのようなときもあるように思う。
- 病を治してもらいたい人、悪霊を追い出してもらいたい人、イエスに触れていただきたい人は、はやくメッセージが終わらないかと待っていたかもしれない。他のことに気を取られている、聞いて受け取る状態にはないということかもしれない。

3. 石地に蒔かれたもの

- マルコ 4:16,17 16 同じように、石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、17 自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。そののち、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。
- マタイ 13:20,21 20 石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。21 その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。
- ルカ 8:13 岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受けいれるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試錬の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。
- 「根がない」とはどういうことだろうか。素晴らしい、ハレルヤと、賛美するが、その人の（生活の）中に入っていかない、そのひとの人生の一部にならない、主体的に受け取れていないと表現できるかもしれない。御心を深く理解し、神様との関係が深まるわけではない。
- 困難や迫害が起こってもつまづかない、信仰を捨てないために、必要なことは何なのだろうか、という問いにもつながる。

4. 茨の中に蒔かれたもの

- マルコ 4:18,19 18 また、いばらの中にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くが、19 世の心づかいと、富の惑わしと、その他いろいろな欲とがはいってきて、御言をふさぐので、実を結ばなくなる。
- マタイ 13:22 また、いばらの中にまかれたものとは、御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさぐので、実を結ばなくなる人のことである。
- ルカ 8:14 いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかいや富や快楽にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。
- 「実」とは何だろうか。
- さまざまなものに気を配ることは大切であるようにも思う。しかし、それによって、心が分裂し、たいせつなもの、核が、薄まってしまうということか。

5. 良い土地に蒔かれたもの

   - マルコ 4:20 20 また、良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである」。
   - マタイ 13:23 また、良い地にまかれたものとは、御言を聞いて悟る人のことであって、そういう人が実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである」。
   - ルカ 8:15 良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。
   - 受け入れ、実を結ぶ。しかし、比較的あっさり書かれている。これも、アンナカレーニナの法則（AKP）か。実を結ぶに至らない人への、メッセージが中心なのか。

6. 何を理解しなければいけないのか

   - マルコ 4:13b あなたがたはこの譬がわからないのか。それでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。
   - 結局、種は、神の言葉は、どのようなものなのだろうか。
   - 聞け（イエスは、「シェマー」と言っただろうか。　（HHH）pay attention)、聞く耳のあるものは聞きなさい、に中心があるのだろう。

4.22.7 メモ

- マルコにだけ「4:13 また彼らに言われた、「あなたがたはこの譬がわからないのか。それでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。」が含まれている。マタイ、ルカでは、このようなイエスの叱責とも聞こえる言葉は、入れなかったのだろう。しかし、ペテロが語った説教を書いたマルコは、ペトロ自身の言葉として含めたのかもしれない。素朴と言われるマルコの生き生きとしている部分でもある。
- 種は、神の言で、その神の言葉は、悟り、受け入れ、正しい心でしっかりと守り、耐え忍ぶと、神の御心が成就するように、豊かな実を結ぶもの。
- サタン、悪い者、悪魔と福音書によって表現が異なるが、イエスが、「サタンよ引き下がれ」（マタイ 4:10, マルコ 8:33）のように、サタンと対峙されるイエスから学ぶこともできる。単に、サタンに取られてしまうなら仕方がないとする必要もないのかもしれない。戦いがあるともとれる。
- たとえ全体が、「神の国の奥義」（4:11）に関係するとすると、このたとえも、神の国、すぐそこに来ているとイエスが宣べ伝える福音に関係していると理解することもできる。実が豊かになることは、神の御心がなることが広がっていく様を表しているのかもしれない。
- 聞く人の問題なのか、聞き方の問題なのか、どうすれば良いのか、種の撒き方に問題があるのでは、なぜ神様はこのようなことを許容しておられるのか、結局、御言や、神の言葉、そして実は、何を意味するのか。このたとえでイエスが群衆に語っていることは、そして、弟子たちに伝えていることは、とさまざまな観点から考えられる。おそらく、神の国の奥義としてイエスが伝えるものは、人間のことばでは、一つ

の表現には、おさまらないのだろう。すなわち、一つに、確定しなくて良いのかもしれない。みなで、読む、利点でもある。それぞれの問いについて、深く考えることは素晴らしいが、それだけが、正しい解釈とすることは問題があるように思う。

- 「いろいろあってな。」も神の国の奥義の一部なのかもしれない。多様性のもたらす素晴らしさということばでは、表現できないが。

4.23　4:21-25 「灯」と「秤」のたとえ

4:21 また彼らに言われた、「ますの下や寝台の下に置くために、あかりを持ってくることがあろうか。燭台の上に置くためではないか。22 なんでも、隠されているもので、現れないものはなく、秘密にされているもので、明るみに出ないものはない。23 聞く耳のある者は聞くがよい」。24 また彼らに言われた、「聞くことがらに注意しなさい。あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられ、その上になお増し加えられるであろう。25 だれでも、持っている人は更に与えられ、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう」。

4.23.1　ルカ 8:16-18

16 だれもあかりをともして、それを何かの器でおおいかぶせたり、寝台の下に置いたりはしない。燭台の上に置いて、はいって来る人たちに光が見えるようにするのである。17 隠されているもので、あらわにならないものはなく、秘密にされているもので、ついには知られ、明るみに出されないものはない。18 だから、どう聞くかに注意するがよい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は、持っていると思っているものまでも、取り上げられるであろう」。

マルコによる福音書 4 章 21-25 節福音書対照表

4.23.2　問い

1. この箇所は、誰に語っているのでしょうか。前からの続きで、たとえについて語っているのでしょうか。それとも、独立のたとえなのでしょうか。

2. あかりのたとえが、弟子たちに語られているとすると、なにを伝えているのでしょうか。

3. 「隠されているもの」とはなにを指しているのでしょうか。

4. イエスは「聞くことがら」について、または「聞き方」についてどう教えていますか。

5. 最後のことばは、なにを弟子たちに、そして、わたしたちに教えていますか。

6. これらのことばは、聖書の他の箇所にもありますが、あなたは、どのようなことを学びますか。

4.23.3 参照

- マタイ 5:14-16 あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。15 また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

- マタイ 10:26-28 だから彼らを恐れるな。おおわれたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない。27 わたしが暗やみであなたがたに話すことを、明るみで言え。耳にささやかれたことを、屋根の上で言いひろめよ。28 また、からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。

- マタイ 7:1,2 人をさばくな。自分がさばかれないためである。2 あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。

- マタイ 13:11,12 そこでイエスは答えて言われた、「あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていない。12 おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。

- マタイ 25:29 おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。

- ルカ 11:33 だれもあかりをともして、それを穴倉の中や枡の下に置くことはしない。むしろはいって来る人たちに、そのあかりが見えるように、燭台の上におく。

- ルカ 12:2 おおいかぶされたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない。

- ルカ 6:38 与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう。あなたがたの量るその量りで、自分にも量りかえされるであろうから」。

- ルカ 19:26 『あなたがたに言うが、おおよそ持っている人には、なお与えられ、持っていない人からは、持っているものまでも取り上げられるであろう。

21 K . *266 *267 *268 *269; ; 22

*266 : whether, at all, perchance
*267 : a lamp, candle, that is placed on a stand or candlestick
*268 : a dry measure holding 16 sextarii (or 1/6 of the Attic medimnus), about a peck (9 litres)
*269 : i) a small bed, a couch, ii) a couch to recline on at meals, iii) a couch on which a sick man is carried

[*270] [*271], , . 23 . 24 K
. . [*272] . 25 , . ,
[*273] , .

4.23.4 記録

- 日時：2023 年 9 月 14 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）4 名

4.23.5 問いについて

1. だれに語られているのか。
   - マタイ、ルカともに、似た句が、他の文脈で語られている。
     - 21: マタイ 5:15 - （地の塩、）世の光、ルカ 11:33 - 目は体の灯火
     - 22: マタイ 10:26 - 恐るべきもの、ルカ 12:2 - 偽善に気をつけさせる
     - 24: マタイ 7:2 - 人を裁くな、ルカ 6:38 - 人を裁くな
     - 25: マタイ 13:12 - たとえで話す理由、25:29 - タラントのたとえ、ルカ 19:26 - ミナのたとえ
   - 4:2 「イエスは譬で多くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、」ともあり、まったく、異なる、次のたとえを、挿入していると見ることも可能。
   - しかし、ルカでは、他の文脈でも語られていても、ここでは、たとえに関連した箇所で、マルコと似た記述がされている。すなわち、弟子たち向けととることも可能。
   - また、22 節については、弟子たちに、譬で語る理由を語っている中（マタイ 10:26）で語られている。これは、マタイでも唐突に感じられるが、このことばが、締めに使われている、今回の箇所は、やはり、弟子たちに向けて語られているとして理解することが自然であるように思われる。
   - まずは、この文脈、特に、弟子たちに語られたとして理解し、他の文脈における意味は別途考えるのが良いように思われる。
2. あかりのたとえ

[*270] : hidden, concealed, secret

[*271] : to make manifest or visible or known what has been hidden or unknown, to manifest, whether by words, or deeds, or in any other way

[*272] : i) measure, an instrument for measuring, ii) determined extent, portion measured off, measure or limit

[*273] : i) to raise up, elevate, lift up, ii) to take upon one's self and carry what has been raised up, to bear, iii) to bear away what has been raised, carry off

- 21b「ますの下や寝台の下に置くために、あかりを持ってくることがあろうか。燭台の上に置くためではないか。22 なんでも、隠されているもので、現れないものはなく、秘密にされているもので、明るみに出ないものはない。23 聞く耳のある者は聞くがよい」
- イエスに直接説明してもらったことを、他の人にも知らせるようにということだろうか。

3. 隠されているもの

- 11 そこでイエスは言われた、「あなたがたには**神の国の奥義**が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。マタイ 13:10 天国の奥義、ルカ 8:10 神の国の奥義
- 実際に、サタンに取られてしまったり、枯れてしまったり、実を結ばなかったり、実を豊かに結ぶと言ったことか。

4.「聞くことがら」「聞き方」

- 23 「聞く耳のある者は聞くがよい。」とあり、そのあとに、「また彼らに言われた、」があり、24 節 b に繋がっている。聞くことが鍵であることは、確かだろう。
- 24b 「聞くことがらに注意しなさい。あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられ、その上になお増し加えられるであろう。25 だれでも、持っている人は更に与えられ、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう」
- ルカでは、どう聞くかに注意しなさい。
- 聞くことがらに注意しなさい。あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられ、その上になお増し加えられるであろう。

5. 最後のことば

- 25 だれでも、持っている人は更に与えられ、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう
- 聞いて悟るかどうかが大きな違いをもたらすということか。
- 「持っている」「持っている者」は、なにを意味するのだろうか。
- イエスに従うことが、大きな違いをもたらすとういことか。
- 実を結ぶことを指しているのか。

6. これらのことば

- ていねいに、聖書をよむことで、大きな祝福が得られるということだろうか。

4.23.6 メモ

- 4:13 また彼らに言われた、「あなたがたはこの譬がわからないのか。それでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。
  - この句から考えると、種まきのたとえよりも、他のたとえは難しいのかもしれない。
- 「聞く耳のある者は聞くがよい」（23）と「聞くことがらに注意しなさい。」（24）とあり、聞いているだけでは、だめなようである。聞くことがらは、聞く内容という印象がおうけるが、それに続く「あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられ、その上になお増し加えられるであろう。」からすると、聞いたことをどう生きるかに深く関係しているようである。
- 謙虚でありたいとは願っているが、正直、聖書、特に、イエスについて学び、イエスにしたがって生きようとして得られる恵の大きさは、はかりしれないと感じている。他者から、学ぶことも通して。
- 隠されていることが、神の国の奥義であるなら、すべてを理解することはハナから無理なのかもしれない。しかし、すこしずつ受け取ったものをみなに語るということと同時に、汲み尽くせないものであっても、すこしでも、深いものを受け取ろうと求め続けることには、大きな意味があるように思われる。
- 最後のことばは、一般論として聞くと、不公平に聞こえるが、イエスと弟子たちの信頼関係の中で話されたのであれば、チャレンジとしては受け取れたとしても、不公平とは受け取らなかったかもしれないとも、考えられるのは、素晴らしいと思った。弟子たちに語られたとするのが自然のように思われる。
- 次もまた真実。マルコ 10:39-31 イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、30 必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。
- 21: マタイ 5:15 - （地の塩、）世の光、ルカ 11:33 - 目は体の灯火
  - 神の子として生きるということだろうか。見、聞く、そうして得たものを生きることだろうか。
- 22: マタイ 10:26 - 恐るべきもの、ルカ 12:2 - 偽善に気をつけさせる
  - 奥にあるもの、真理を受け取らないといけないということか。
- 24: マタイ 7:2 - 人を裁くな、ルカ 6:38 - 人を裁くな
  - 神様は、ひとりひとりを愛しておられる。自分視点ではなく、他者視点、神の視点だろうか。
- 25: マタイ 13:12 - たとえで話す理由、25:29 - タラントのたとえ、ルカ 19:26 - ミナのたとえ
  - 違いが明らかになっていく原因があるようである。神様、主との関係だろうか。

4.24 4:26-29 「成長する種」のたとえ

4:26 また言われた、「神の国は、ある人が地に種をまくようなものである。27 夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。28 地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。29 実がいると、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである」。

マルコによる福音書 4 章 26-29 節福音書対照表

4.25　4:30-32 「からし種」のたとえ

4:30 また言われた、「神の国を何に比べようか。また、どんな譬で言いあらわそうか。31 それは一粒のからし種のようなものである。地にまかれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、32 まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる」。

4.25.1　マタイ 13:31-32, 33

31 また、ほかの譬を彼らに示して言われた、「天国は、一粒のからし種のようなものである。ある人がそれをとって畑にまくと、32 それはどんな種よりも小さいが、成長すると、野菜の中でいちばん大きくなり、空の鳥がきて、その枝に宿るほどの木になる」。33 またほかの譬を彼らに語られた、「天国は、パン種のようなものである。女がそれを取って三斗の粉の中に混ぜると、全体がふくらんでくる」。

4.25.2　ルカ 13:18-19, 20-21

18 そこで言われた、「神の国は何に似ているか。またそれを何にたとえようか。19 一粒のからし種のようなものである。ある人がそれを取って庭にまくと、育って木となり、空の鳥もその枝に宿るようになる」。20 また言われた、「神の国を何にたとえようか。21 パン種のようなものである。女がそれを取って三斗の粉の中に混ぜると、全体がふくらんでくる」。

マルコによる福音書 4 章 30-32 節福音書対照表

4.26　4:33-34 たとえを用いて語る

4:33 イエスはこのような多くの譬で、人々の聞く力にしたがって、御言を語られた。34 譬によらないでは語られなかったが、自分の弟子たちには、ひそかにすべてのことを解き明かされた。

4.26.1　マタイ 13:34-35

34 イエスはこれらのことをすべて、譬で群衆に語られた。譬によらないでは何事も彼らに語られなかった。35 これは預言者によって言われたことが、成就するためである、／「わたしは口を開いて譬を語り、／世の初めから隠されていることを語り出そう」。

マルコによる福音書 4 章 33-34 節福音書対照表

マルコによる福音書 4 章 26-34 節福音書対照表

4.26.2　問い

1. 26–29 節のたとえからは、神の国についてどのようなことがわかりますか。
2. このたとえを通して、イエスはなにを教えているのでしょうか。
3. 30–32 節のたとえからは、神の国についてどのようなことがわかりますか。
4. このたとえを通して、イエスはなにを教えているのでしょうか。
5. 33 節では、たとえを用いて語ることについて、イエスはどのように語っていますか。

4.26.3　参照

- かま（鎌）：ヨエル 3:13,14（訳によっては 4:13）かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、／酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。14 群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。（ツロとシドンへの裁きの預言の箇所）
  - かま（鎌）がさばきのときの道具として明示的に用いられるのは、引用句のみ。
- マルコ 4:26-29 はマタイ、ルカにはないが、マタイの対応する箇所マタイ 13:24-30 には「毒麦のたとえ」が挿入され、さらに、たとえを用いて語るのあとマタイ 13:36-43 に、「毒麦のたとえの説明」があり、さらに、マタイ 13:44-50 には「天の国のたとえ」が挿入され、最後にマタイ 13:51-52 には「天の国のことを学んだ学者」について書かれている。
- からし種
  - マタイ 17:20 するとイエスは言われた、「あなたがたの信仰が足りないからである。よく言い聞かせておくが、もし、**からし種**一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう。
  - ルカ 17:6 そこで主が言われた、「もし、**からし種**一粒ほどの信仰があるなら、この桑の木に、『抜け出して海に植われ』と言ったとしても、その言葉どおりになるであろう。
- 「大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほど」（マルコ）「野菜の中でいちばん大きくなり、空の鳥がきて、その枝に宿るほどの木になる」（マタイ）「育って木となり」（ルカ）
  - エゼキエル 17:22-24 主なる神はこう言われる、「わたしはまた香柏の高いこずえから小枝をとって、これを植え、その若芽の頂から柔らかい芽を摘みとり、これを高いすぐれた山に植える。23 わたしはイスラエルの高い山にこれを植える。これは枝を出し、実を結び、みごとな香柏となり、その下にもろもろの種類の獣が住み、その枝の陰に各種の鳥が巣をつくる。24 そして野のすべての木は、主なるわたしが高い木を低くし、低い木を高くし、緑の木を枯らし、枯れ木を緑にすることを知るようになる。主であるわたしはこれを語り、これをするのである」。

– エゼキエル 31:6 （エジプトに関して）その枝葉に空のすべての鳥が、巣をつくり、／その枝の下に野のすべての獣は子を生み、／その陰にもろもろの国民は住む。

– ダニエル 4:11 その木は成長して強くなり、天に達するほどの高さになって、地の果までも見えわたり、12 その葉は美しく、その実は豊かで、すべての者がその中から食物を獲、また野の獣はその陰にやどり、空の鳥はその枝にすみ、すべての肉なる者はこれによって養われた。（ネブカデネザルに対して）

- マタイ 13:51-53 あなたがたは、これらのことが皆わかったか」。彼らは「わかりました」と答えた。 52 そこで、イエスは彼らに言われた、「それだから、天国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとを、その倉から取り出す一家の主人のようなものである」。53 イエスはこれらの譬を語り終えてから、そこを立ち去られた。（このあとに、「ナザレで受け入れられない」マタイ 13:53-58, マルコ 6:1-6、ルカ 4:16-30）

- マタイ 13:35b 「わたしは口を開いて譬を語り、／世の初めから隠されていることを語り出そう」。

  – 詩篇 78:2 わたしは口を開いて、たとえを語り、／いにしえからの、なぞを語ろう。

- コリント一 3:5-9 アポロは、いったい、何者か。また、パウロは何者か。あなたがたを信仰に導いた人にすぎない。しかもそれぞれ、主から与えられた分に応じて仕えているのである。6 わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。7 だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである。8 植える者と水をそそぐ者とは一つであって、それぞれその働きに応じて報酬を得るであろう。9 わたしたちは神の同労者である。あなたがたは神の畑であり、神の建物である。

  – 神様が背後におられるかもしれないが、「成長する種」のたとえの中心は、「夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。」という部分なのだろう。

26 K ． **27** *274 *275 ，
*276 *277 ．**28** *278，*279 *280 *281
[ ] *282 ．**29** ， *283 *284， *285 *286．

*274 （PAS-3S）: i) to fall asleep, drop off to sleep, ii) to sleep
*275 (PPS-3S): to arouse, cause to rise
*276 : i) to sprout, bud, put forth new leaves, ii) to produce
*277 : i) to make long, to lengthen, ii) in the Bible twice of plants, to cause to grow, increase
*278 : i) to bear fruit, ii) to bear, bring forth, deeds, iii) to bear fruit of one's self
*279 : i) the place where grass grows and animals graze, ii) grass, herbage, hay, provender
*280 : an ear of corn or of growing grain
*281 : i) full, i.e. filled up (as opposed to empty), ii) full, i.e. complete
*282 : wheat, grain
*283 : i) to order (one) to go to a place appointed, ii) to send away, dismiss
*284 : a sickle, a pruning-hook, a hooked vine knife, such as reapers and vinedressers use
*285 : i) to place beside or near, ii) to stand beside, stand by or near, to be at hand, be present
*286 : harvest, the act of reaping

30 K · ; 31 [*287] [*288], ,
, 32 , [*289] ,
.

33 K ·**34** , ,
.

4.26.4 記録

- 日時：2023 年 9 月 21 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.26.5 問いについて

1. 26-29 神の国について
    - 神の国は育っていく。
    - どうして育つのかは知らない、分からない。
    - 順々に育ち、最後は実をならせ、収穫される。
    - 「神の国」は「ある人が種を撒くようなもの」とはどのような意味だろうか。
    - 「ある人」とは誰だろうか。一義的には、イエス、そして弟子たち？
2. なにを教えているのか
    - 実際の成長のもとは、努力などで得られるものではない。
    - 神の国の成長に関わることが否定されているわけではない。
    - 中心は、「どうして育つのか知らない。」ということだろう。おそらく、イエスも、知らない。
    - 最終目標がある。実を結び、収穫される。
    - 御国を来たらせたまえ。
3. 30-32 神の国について

[*287] : a grain

[*288] : mustard, the name of a plant which in oriental countries grows from a very small seed and attains to the height of a tree, 10 feet (3 m) and more; hence a very small quantity of a thing is likened to a mustard seed, and also a thing which grows to a remarkable size

[*289] : ascend

- 非常に小さい一粒のからし種のようなもの
- 非常に大きくなる

4. なにを教えているのか
   - 最初はよくわからないほどのもの
   - 大きな国になる
   - 結局、**神の国**とは、何を意味しているのだろうか。
5. たとえを用いて語ること
   - 聞く力にしたがって語られた。これは何を意味するのだろうか。
     - 最初から聞く人の多様性が認識されている。聞くときの状態も、様々かもしれない。イエスはそのことを実感していたかもしれない。
   - 弟子たちにはすべてのことを解き明かした
     - 弟子たちは理解できたのだろうか。（マタイ 13:51）

4.26.6 メモ

- 「26b 神の国は、ある人が地に種をまくようなものである。27 夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。」種をまくのが一義的には、イエスだとすると、イエスも、知らないのだろう。実感なのかもしれない。全部わかる必要はないし、実際わからない。そのことを受け入れることも大切なのだろう。
- 「神の国」は何を意味するのだろうか。神の支配を意味すると言われる。では、それはどのようなことなのだろうか。そして、イエスはどのように理解していたのだろうか。神の支配をもうすこし噛み砕いてみると、神様の望むこと（御心）がなる世界だろうか。すると、神様の御心を理解し、その御心を生きるひとたちで満たされた国だろうか、または、それを求めて、生きようとする世界だろうか。
  - マタイ 6:10 **御国が来ますように**。／御心が行われますように／天におけるように地の上にも。
  - ルカ 11: 2 こで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。／『父よ／御名が聖とされますように。／**御国が来ますように**。
- マタイ 13:51 には「あなたがたは、これらのことが皆わかったか」。彼らは「わかりました」と答えた。」とあるが、本当にわかったのだろうか。マルコの書き方「34 譬によらないでは語られなかったが、自分の弟子たちには、ひそかにすべてのことを解き明かされた。」は、ほんとうにわかったかどうかは、曖昧である。
- マルコ 8:14-21 ファリサイ派の人々とヘロデのパン種

- 8:17,18 イエスはそれと知って、彼らに言われた、「なぜ、パンがないからだと論じ合っているのか。まだわからないのか、悟らないのか。あなたがたの心は鈍くなっているのか。18 目があっても見えないのか。耳があっても聞えないのか。また思い出さないのか。
- マタイ 16:5-12 に対照箇所があるが、そこでは、「イエスはそれと知って言われた、「信仰の薄い者たちよ、なぜパンがないからだと互に論じ合っているのか。まだわからないのか。覚えていないのか。」と厳しさが和らいでいる。

- 四福音書にたとえは約 70、マルコには 18 のみ。
- 知識や知恵も、経験や努力も、大切ですが、本当に小さな部分、ほとんど、知りうることも知らない、なすことが可能なこともなさないのが、実際だと思っています。そして、知りえないこと、成しえないことが、ほとんど。神様の愛と恵みに信頼して、わたしたちは、「御国を来たらせ給え。／御心の天に成るごとく／地にもなさせ給え。」と祈ります。おそらく、神様も、どうしたら良いかわからないことばかりだと思います。Good Grief! （やれやれだぜ）と、叫びたいような、そして、はらわたが、傷つくような苦しさを持って、わたしたちを深く憐れまれることが多いのだと思いますが。
- 弟子たちの中での、御国、御心の理解の広がりも、この種のようなものなのかもしれない。知らずに、少しずつ。とても、小さいものから、大きなものに成長していく。そのようにも取れるのかもしれない。神の国を質的なものと取れば。

4.27 4:35-41 突風を静める

4:35 さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。36 そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。38 ところが、イエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。39 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。40 イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。41 彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。

4.27.1 マタイ 8:23-27

23 それから、イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。24 すると突然、海上に激しい暴風が起って、舟は波にのまれそうになった。ところが、イエスは眠っておられた。25 そこで弟子たちはみそばに寄ってきてイエスを起し、「主よ、お助けください、わたしたちは死にそうです」と言った。26 するとイエスは彼らに言われた、「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちよ」。それから起きあがって、風と海とをおしかりになると、大なぎになった。27 彼らは驚いて言った、「このかたはどういう人なのだろう。風も

海も従わせるとは」。

4.27.2 ルカ 8:22-25

22 ある日のこと、イエスは弟子たちと舟に乗り込み、「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたので、一同が船出した。23 渡って行く間に、イエスは眠ってしまわれた。すると突風が湖に吹きおろしてきたので、彼らは水をかぶって危険になった。24 そこで、みそばに寄ってきてイエスを起し、「先生、先生、わたしたちは死にそうです」と言った。イエスは起き上がって、風と荒浪とをおしかりになると、止んでなぎになった。25 イエスは彼らに言われた、「あなたがたの信仰は、どこにあるのか」。彼らは恐れ驚いて互に言い合った、「いったい、このかたはだれだろう。お命じになると、風も水も従うとは」。

マルコによる福音書 4 章 35-41 節福音書対照表

4.27.3 問い

1. 舟に乗って弟子たちと出発したときの様子で、わかることを上げてみましょう。
2. 突風と、そのときのイエスの様子についてどのように書かれていますか。
3. 弟子たちは、どのように言って、イエスを起こしますか。弟子たちのこのときの気持ちを考えてみましょう。
4. イエスはどうされますか。
5. 弟子たちは、何に恐れおののき、何を学んだでしょうか。
6. イエスは、弟子たちに、何を期待していたのでしょうか。

4.27.4 参照

- 舟での移動に関する福音書の箇所：参照
- ガリラヤ湖周辺の地形：8 Cross Sectional Views of Longitudinal Zones, 9 Northern Coastal Plains, Jezreel Valley, Galilee, and Bashan (Bible Maps)
- ヘルモン山：**Mount Hermon** (Arabic: or / ALA-LC: *Jabal al-Shaykh* (“Mountain of the Sheikh”) or *Jabal Haramun*; Hebrew: , *Har Hermon*,(2,236m (7,336ft)
- ガリラヤ湖：The **Sea of Galilee** (Hebrew: , Judeo-Aramaic: , , Arabic: ,(also called **Lake Tiberias** or **Kinneret**, is a freshwater lake in Israel. It is the lowest freshwater lake on Earth and the second-lowest lake in the world (after the Dead Sea, a salt lake), at levels between 215 metres (705 ft) and 209 metres (686 ft) below sea level. It is approximately 53 km (33 mi) in

circumference, about 21 km (13 mi) long, and 13 km (8.1 mi) wide. Its area is 166.7 km^2 (64.4 sq mi) at its fullest, and its maximum depth is approximately 43 metres (141 ft). The lake is fed partly by underground springs, but its main source is the Jordan River, which flows through it from north to south and exits the lake at the Degania Dam.

- マルコ 1:25 イエスはこれをしかって、「黙れ（Φ　：　APM-2S)、この人から出て行け」と言われた。
- ヘブル 2:14,15 このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、15 死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。

35 K　　．　　．36　　，
　　’　．37　　，　　．38
　　．　　．　，　　；39
　　．*290，　*291．　　．40　　．　；
　；41　　．　　；

4.27.5　記録

- 日時：2023 年 9 月 28 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）4 名

4.27.6　問いについて

1. 出発したときの様子
    - 「その日」とあり、たとえを語ったときから、続いているように書かれている。マタイも「それから」と書き出しているが、ルカは「ある日のこと」
    - マルコには、「夕方になると」とあり、日暮れが近い。もしかすると、嵐は夜起こったかもしれない。（5 章 1 節ー 20 節の記事参照）
    - イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。ルカも、イエスは弟子たちと舟に乗り込み、「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われた。と記している。イエスから言い出していることも記憶に留めるべき。
    - 群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。

*290　：i) to be silent, hold one's peace, ii) metaph. of a calm, quiet sea
*291　：i) to close the mouth with a muzzle, to muzzle, ii) metaph., iii) to be kept in check

  - 4:1 イエスはまたも、海べで教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。
- 5:1 こうして彼らは海の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。
  - この記事が、すべて、夕方以降に起こったとは考えられない。夜、移動している記事もある。（マルコ 6:45-52, マタイ 14:22-27、ヨハネ 6:16-21（五千人給食の前後））
- 他の舟も一緒に行った。一緒に行動した人たちはどんな人達だったろうか。

2. 突風と、その時のイエスの様子
   - 37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。38a ところが、イエス自身は、舳（とも、艫と同じ：舟の後端部）の方でまくらをして、眠っておられた。
   - イエスは、舟の一番うしろのお客さん席で眠っていた。（夕方の船出でもあり、夕刻で、疲れていたのだろう。「その日の夕方になると」（1））
   - 激しい突風で、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。
3. 弟子たちは
   - 38b そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。
   - マタイ：25 そこで弟子たちはみそばに寄ってきてイエスを起し、「主よ、お助けください、わたしたちは死にそうです」と言った。
   - ルカ：24 そこで、みそばに寄ってきてイエスを起し、「先生、先生、わたしたちは死にそうです」と言った。
   - マルコの厳しい責めるようなことばが、緩和されている。しかし、マルコからは、イエスはおそらく、溺れ死ぬことがない、または、大変だとは思っていないという、ある信頼も表現されている。
   - この弟子たちを、漁師のペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネと取る解釈が多いが、他にも乗っていたことを考えると、漁師は、必死で、突風や嵐と、向き合っていたと思われるので、パニックに陥るのは、漁師ではなく、他の弟子たち、または、イエスの「そばにいる」としてついてきた人たちだったと考えたほうが自然。
4. イエスの対応
   - 39 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。40 イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。

- 奇跡とも言えるし、滑稽とも言える。神様への信仰の表明なのだろうか。少なくとも、これからは、すぐに、ピタッと、激しい突風が止んだかどうかは不明である。しかし、いつしか、風はやみ、大なぎになり、まったく心配しなくて良い状態になったのだろう。「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」までは、少し、時間があったかもしれない。
- このようにされれば、超自然的な力が示されたと思わされる方が自然かもしれない。イエスは、それを伝えよとはしていないとも思えるが。

5. 何に恐れおののき、何を学んだか。
   - 41 彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。
   - マタイ：27 彼らは驚いて言った、「このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは」。
   - ルカ：彼らは恐れ驚いて互に言い合った、「いったい、このかたはだれだろう。お命じになると、風も水も従うとは」。
   - イエスは、風も、海も従わせる、すごいお方だ。神のようなお方だ。神の子だ。
   - マタイも、ルカも、似た言葉で表現しているところを見ると、それが弟子たちが受け取ったことなのだろう。それのほうが、簡単である。
6. イエスの期待。
   - 「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」に、結論が至っているが、それは、おそらく、誤りで、信仰のなさを嘆いたのではないだろうか。そうでなければ、イエスのことばを受け取ったとは言えない。少なくとも、イエスの狙いは、イエスに、風も波も従わせる力があることを信じさせることではなかったと思われる。
   - 「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」ここから、受け取れるのは、しっかりと神様に信頼することである。
   - 弟子たちの解釈は、イエスを、天に、神のところにまで、引き上げている。しかし、イエスが伝えたかったのは、地上で、イエスのように、神を信頼することではなかったのか。

4.27.7 メモ

- マタイによる福音書では、マタイを招くのは、9:9-13。この記事は、8:23-27 なので、マタイは現場にいなかったのかもしれない。ただ、種まきのたとえの解き明かしには、十二人とあり、十二使徒を意味するとすると、マルコの流れのほうが正しいかもしれない。するとマタイは同乗組か。
- マルコだけ「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。（38b）と、批判的。マタイ「主よ、お助けください、わたしたちは死にそうです」ルカ「先生、先生、わたしたちは

死にそうです」

- 一緒に行動した人たちはどんな人達だったろうか。通常は、漁師 4 人が少なくとも二艘の舟に分乗していたとされる。しかし、もし、種まきのたとえから続いているとすると、十二弟子以外にも、そばにいたひとたちがいたことに成る。女性もいたかもしれない。ルカによる福音書 5 章 6 節では、おびただしい魚がかかり、網がやぶれそうになったとある。St. Peter's Fish は、大きなものでは、40cm 以上、重さ 1.5kg 以上とされることを考えると、釣り竿で釣る小さな船ではなく、ある程度大きかった可能性もある。すなわち、一艘に、10 人以上乗っていた可能性もある[*292]。簡単には沈まないはずで、漁師はそのことも知っていたはず。しかし、慣れていないものには、とても恐ろしい。特に、舟の中に、水が入ってくると、パニックになる人が出てくるのは十分理解できる。すなわち、漁師でさえこわがって、訴えたのではなく、漁師が乗り切ろうとして、いつも通り必死に漕艇していても、恐怖からイエスに訴えた人たちがいて、それにイエスが対応したということだろう。それなら、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」もまた、べつの雰囲気から伝わってくる。

- 最終的なメッセージは何なのかであるが、教師は、生徒にはなかなかメッセージが伝わらないことを、常に経験している。これも、イエスが伝えたかったことと、弟子たちがうけとったことに食い違いがあると考えても、問題ではないように思う。そして、特に、ペトロは、語るときに、その両面、イエスのことばと、弟子たちの驚きを伝えたのではないだろうか。その場にいたゆえに、現実の複雑さ、微妙さを伝えていると言える。

- Jesus in action! のマルコによる福音書の特徴がよく現れている。ペテロの素朴な表現も。

5:1-20 悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす

1 こうして彼らは海の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。2 それから、イエスが舟からあがられるとすぐに、けがれた霊につかれた人が墓場から出てきて、イエスに出会った。3 この人は墓場をすみかとしており、もはやだれも、鎖でさえも彼をつなぎとめて置けなかった。4 彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせを砕くので、だれも彼を押えつけることができなかったからである。5 そして、夜昼たえまなく墓場や山で叫びつづけて、石で自分のからだを傷つけていた。6 ところが、この人がイエスを遠くから見て、走り寄って拝し、7 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。8 それは、イエスが、「けがれた霊よ、この人から出て行け」と言われたからである。9 また彼に、「なんと

[*292] 9m カッター：現在、上記の訓練等で使用されているほとんどのカッターは 9m カッターであり、全長 9m、全幅 2.45m、深さ 0.83m、排水量 1.5 トン、定員 45 名（実質は漕ぎ手 12 名と艇指揮 1 名、艇長 1 名の 14 名で運用する）の手漕ぎの船である。
通常、艇長が舵をとり、艇指揮がかける号令の下、12 名の漕ぎ手がそれぞれオールを使い、息を合わせて 12 本のオールで漕ぐ。全国大会で使われるのもこの 9m カッターである。
漕ぎ手にはそれぞれ番号が付与されており、右舷は艇首から順に 1 番 3 番 5 番 7 番 9 番 11 番、左舷は同じく 2 番 4 番 6 番 8 番 10 番 12 番である。
オールには、4.3m の長さのものと、4.2m の長さのものがあり、後者は 1 番 2 番 11 番 12 番のみが使用する。木製オールと、FRP 製オールがあるが、FRP 製が主流になってきている。

いう名前か」と尋ねられると、「レギオンと言います。大ぜいなのですから」と答えた。10 そして、自分たちをこの土地から追い出さないようにと、しきりに願いつづけた。11 さて、そこの山の中腹に、豚の大群が飼ってあった。12 霊はイエスに願って言った、「わたしどもを、豚にはいらせてください。その中へ送ってください」。13 イエスがお許しになったので、けがれた霊どもは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れは二千匹ばかりであったが、がけから海へなだれを打って駆け下り、海の中でおぼれ死んでしまった。14 豚を飼う者たちが逃げ出して、町や村にふれまわったので、人々は何事が起ったのかと見にきた。15 そして、イエスのところにきて、悪霊につかれた人が着物を着て、正気になってすわっており、それがレギオンを宿していた者であるのを見て、恐れた。16 また、それを見た人たちは、悪霊につかれた人の身に起った事と豚のこととを、彼らに話して聞かせた。17 そこで、人々はイエスに、この地方から出て行っていただきたいと、頼みはじめた。18 イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供をしたいと願い出た。19 しかし、イエスはお許しにならないで、彼に言われた、「あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい」。20 そこで、彼は立ち去り、そして自分にイエスがしてくださったことを、ことごとくデカポリスの地方に言いひろめ出したので、人々はみな驚き怪しんだ。

4.27.8 マタイ 8:28-34

28 それから、向こう岸、ガダラ人の地に着かれると、悪霊につかれたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどであった。29 すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。30 さて、そこからはるか離れた所に、おびただしい豚の群れが飼ってあった。31 悪霊どもはイエスに願って言った、「もしわたしどもを追い出されるのなら、あの豚の群れの中につかわして下さい」。32 そこで、イエスが「行け」と言われると、彼らは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れ全体が、がけから海へなだれを打って駆け下り、水の中で死んでしまった。33 飼う者たちは逃げて町に行き、悪霊につかれた者たちのことなど、いっさいを知らせた。34 すると、町中の者がイエスに会いに出てきた。そして、イエスに会うと、この地方から去ってくださるようにと頼んだ。

4.27.9 ルカ 8:26-39

26 それから、彼らはガリラヤの対岸、ゲラサ人の地に渡った。27 陸にあがられると、その町の人で、悪霊につかれて長いあいだ着物も着ず、家に居つかないで墓場にばかりいた人に、出会われた。28 この人がイエスを見て叫び出し、みまえにひれ伏して大声で言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。お願いです、わたしを苦しめないでください」。29 それは、イエスが汚れた霊に、その人から出て行け、とお命じになったからである。というのは、悪霊が何度も彼をひき捕えたので、彼は鎖と足かせとでつながれて看視されていたが、それを断ち切っては悪霊によって荒野へ追いやられていたのである。30 イエスは彼に「なんという名前か」とお尋ねになると、「レギオンと言います」と答え

た。彼の中にたくさんの悪霊がはいり込んでいたからである。31 悪霊どもは、底知れぬ所に落ちて行くことを自分たちにお命じにならぬようにと、イエスに願いつづけた。32 ところが、そこの山べにおびただしい豚の群れが飼ってあったので、その豚の中へはいることを許していただきたいと、悪霊どもが願い出た。イエスはそれをお許しになった。33 そこで悪霊どもは、その人から出て豚の中へはいり込んだ。するとその群れは、がけから湖へなだれを打って駆け下り、おぼれ死んでしまった。34 飼う者たちは、この出来事を見て逃げ出して、町や村里にふれまわった。35 人々はこの出来事を見に出てきた。そして、イエスのところにきて、悪霊を追い出してもらった人が着物を着て、正気になってイエスの足もとにすわっているのを見て、恐れた。36 それを見た人たちは、この悪霊につかれていた者が救われた次第を、彼らに語り聞かせた。37 それから、ゲラサの地方の民衆はこぞって、自分たちの所から立ち去ってくださるようにとイエスに頼んだ。彼らが非常な恐怖に襲われていたからである。そこで、イエスは舟に乗って帰りかけられた。38 悪霊を追い出してもらった人は、お供をしたいと、しきりに願ったが、イエスはこう言って彼をお帰しになった。39 「家へ帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったか、語り聞かせなさい」。そこで彼は立ち去って、自分にイエスがして下さったことを、ことごとく町中に言いひろめた。

マルコによる福音書 5 章 1-20 節福音書対照表

4.28 5:1-10 悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす（1）

1 こうして彼らは海の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。2 それから、イエスが舟からあがられるとすぐに、けがれた霊につかれた人が墓場から出てきて、イエスに出会った。3 この人は墓場をすみかとしており、もはやだれも、鎖でさえも彼をつなぎとめて置けなかった。4 彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせを砕くので、だれも彼を押えつけることができなかったからである。5 そして、夜昼たえまなく墓場や山で叫びつづけて、石で自分のからだを傷つけていた。6 ところが、この人がイエスを遠くから見て、走り寄って拝し、7 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。8 それは、イエスが、「けがれた霊よ、この人から出て行け」と言われたからである。9 また彼に、「なんという名前か」と尋ねられると、「レギオンと言います。大ぜいなのですから」と答えた。10 そして、自分たちをこの土地から追い出さないようにと、しきりに願いつづけた。

4.28.1 マタイ 8:28-29

28 それから、向こう岸、ガダラ人の地に着かれると、悪霊につかれたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどであった。29 すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。

4.28.2　ルカ 8:26-31

26 それから、彼らはガリラヤの対岸、ゲラサ人の地に渡った。27 陸にあがられると、その町の人で、悪霊につかれて長いあいだ着物も着ず、家に居つかないで墓場にばかりいた人に、出会われた。28 この人がイエスを見て叫び出し、みまえにひれ伏して大声で言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。お願いです、わたしを苦しめないでください」。29 それは、イエスが汚れた霊に、その人から出て行け、とお命じになったからである。というのは、悪霊が何度も彼をひき捕えたので、彼は鎖と足かせとでつながれて看視されていたが、それを断ち切っては悪霊によって荒野へ追いやられていたのである。30 イエスは彼に「なんという名前か」とお尋ねになると、「レギオンと言います」と答えた。彼の中にたくさんの悪霊がはいり込んでいたからである。31 悪霊どもは、底知れぬ所に落ちて行くことを自分たちにお命じにならぬようにと、イエスに願いつづけた。

マルコによる福音書 5 章 1-10 節福音書対照表

4.28.3　問い

1. イエスたちは、どのような時に、どのような経験を経て、ゲラサ人の地につきますか。
2. どのような人と出会いますか。この人について、わかることを、あげてみましょう。(2-5)
3. イエスを見ると、この人は、どのように行動しますか。その時の様子は、どのように描かれていますか。(6-8)
4. イエスは、なぜ、名前を聞かれたのでしょうか。(9)
5. このひと、または、悪霊の、どのような願いが描かれていまか。(10)
6. この人は、この時点で、どのような状態にあるのでしょうか。また、イエスは、どのように、この人を見ているのでしょうか。

4.28.4　参照

- 地図：イエスの時代のガリラヤ（107 Galilee in the time of Jesus）
- 地図：ガリラヤでのイエスの宣教とエルサレムへの旅（107a Jesus' Ministry in Galilee and Journey to Jerusalem）
- 地図：ガリラヤ湖周辺（108 The Ministry of Jesus Around the Sea of Galilee）
- Google Map：ティベリアス湖
- ゲラサ（Gergesa）：Wikipedia
  - Gergesa, also Gergasa (Γ　　in Byzantine greek) or the Country of the Gergesenes, is a place

on the eastern (Golan Heights) side of the Sea of Galilee located at some distance to the ancient Decapolis cities of Gadara and Gerasa. Today, it is identified with El-Koursi or Kursi. It is mentioned in some ancient manuscripts of the Gospel of Matthew as the place where the Miracle of the Swine took place, a miracle performed by Jesus who drove demons out of a possessed man and into a herd of pigs. All three Synoptic Gospels mention this miracle, Matthew writes about two possessed men instead of just one, and only some manuscripts of his Gospel name the location as Gergesa, while the other copies, as well as all versions of Luke and Mark, mention either Gadara or Gerasa (see Mark 5:1-20, Luke 8:26-39, Matthew 8:28-34). The "Gerasa" reading is problematic, because Gerasa is neither near a sea nor does it border Galilee.

Some are of the opinion that Gergesa was the country of the ancient Girgashites; but it is more probable that 'Gergesenes' was introduced by Origen upon mere conjecture; as before him most copies seem to have read 'Gadarenes', agreeable to the parallel passages and the ancient Syriac version. In any event, the "country of the Gergesenes/Gadarenes/Gerasenes" in the New Testament Gospels refers to some location on the eastern shore of the Sea of Galilee. The name is derived from either a lakeside village, Gergesa, the next larger city, Gadara, or the best-known city in the region, Gerasa. It is likely that the "Gerasa" reading is erroneous and a copyist error for "Gergesa," since only the latter place is bordering a lake while Gerasa is very far away from a lake.

– ゲルゲサ（ビザンチン・ギリシア語でΓ　）またはゲルゲセン人の国とも呼ばれるゲルゲサは、ガリラヤ海の東側（ゴラン高原）にある地名で、古代デカポリスの都市ガダラとゲラサから少し離れたところに位置している。今日では、エル・クルシまたはクルシと同定されている。マタイによる福音書のいくつかの古写本には、「豚の奇跡」が起こった場所として言及されている。3 つの共観福音書すべてがこの奇跡に言及しているが、マタイは一人ではなく二人の取り憑かれた男について書いており、彼の福音書の一部の写本だけがその場所をゲルゲサと呼んでいる。なぜなら、ゲラサは海の近くでもなければ、ガリラヤとの境界でもないからである。

  ゲルゲサは古代のギルガシ人の国であったという説もあるが、オリゲンが単なる推測に基づいて「ゲルゲセネス」を導入した可能性が高い。オリゲン以前は、ほとんどの書物が「ガダレネス」と読んでいたようであり、並行箇所や古代のシリア語版と一致している。いずれにせよ、新約聖書の福音書に登場する「ゲルゲセネス／ガダレネス／ゲラセネスの国」とは、ガリラヤ海東岸のある場所を指している。この名前は、湖畔の村ゲルゲサ、次に大きな都市ガダラ、またはこの地域で最もよく知られた都市ゲラサのいずれかに由来する。ゲラサ」は「ゲルゲサ」の誤りであり、「ゲルゲサ」のコピーミスである可能性が高い。

– Byzantine Christian monks venerated a site situated a few kilometres north of Hippos on the lake shore, as the location of the miracle. It is the only place fitting Matthew's description, since it contains the only "steep bank" in the area descending all the way to the shore of the lake. The site became apparently known since at least the Early Muslim period as Kursya, the Aramaic word for "chair", and later as Kursi, a word with the same meaning in Arabic. The monks built a walled monastic complex there and made it a destination for Christian pilgrims. That monastery

was destroyed by Sassanid Persian armies in 614 CE, partially rebuilt, and finally levelled by the 749 Galilee earthquake. The remains of the monastery can be visited in the Kursi National Park. Christian artifacts from Kursi can be viewed at the Golan Archaeological Museum.
  - ビザンチン・キリスト教の修道士たちは、ヒッポスから数キロ北の湖畔にある場所を奇跡の場所としてたいせつにした。マタイの記述に合致する、この地域唯一の「険しい土手」が湖岸まで続いているからである。この場所は、少なくとも初期イスラム時代から、アラム語で「椅子」を意味するクルシャとして知られるようになり、後にはアラビア語で同じ意味のクルシとして知られるようになったようだ。修道士たちはそこに城壁に囲まれた修道院を建て、キリスト教の巡礼地とした。その修道院は、614 年にサーサーン朝ペルシャ軍によって破壊され、部分的に再建された後、749 年のガリラヤ地震で壊滅した。修道院跡はクルシ国立公園の一部になっており、見学できる。また、クルシから出土したキリスト教の遺物は、ゴラン考古学博物館で見ることができる。
- レギオン legion (Wikipedia), Roman Legion (Wikipedia)
  - Legion means a large group or in another parlance it may mean “many”. In the Christian Bible, it is used to refer to the group of demons, particularly those in two of three versions of the exorcism of the Gerasene demoniac, an account in the New Testament of an incident in which Jesus performs an exorcism.
  - レギオン（Legion）とは、大集団を意味し、別の言い方をすれば「多数」を意味することもある。キリスト教聖書では、特に新約聖書の中でイエスが悪魔祓いを行った出来事である「ゲラセナの悪魔祓い」の 3 つのうち 2 つのバージョンに登場する悪魔の集団を指すのに使われる。
  - The Roman legion (Latin: legiō, [io]), the largest military unit of the Roman army, comprised 4,200 infantry and 300 equites (cavalry) in the period of the Roman Republic (509 BC–27 BC) and 5,600 infantry and 200 auxilia in the period of the Roman Empire (27 BC – AD 476).
  - ローマ軍最大の部隊であるレギオン（ラテン語: legiō, [& ）は、ローマ共和国時代（紀元前 509 年〜紀元前 27 年）には歩兵 4,200 人と騎兵 300 人、ローマ帝国時代（紀元前 27 年〜紀元後 476 年）には歩兵 5,600 人と補助兵 200 人で構成されていた。
- 悪霊について：参照
- 悪霊・汚れた霊を追い出すエピソード：参照

4.28.5 記録

- 日時：2023 年 10 月 5 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）4 名

4.28.6 問いについて

1. 背景

- 1 こうして彼らは海の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。
- この旅の最初は、イエスが向こう岸に行こうと言われて始まった。：4:35 さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。
- 夜移動して、到着したと思われる。どこかで、休んだ可能性はある。
- ゲラサ人の地とあるが、マタイではガダラ人の地とある。（地図参照）
- デカポリス地方で、さまざまな人たちが住んでいた。ユダヤ人が汚れた動物とする豚を飼っていたことから、非ユダヤ人が住んでいる地域と思われる。そこに、イエスはわざわざ行ったことになる。

2. 悪霊に憑かれた人について（2-5）

- 2 それから、イエスが舟からあがられるとすぐに、けがれた霊につかれた人が墓場から出てきて、イエスに出会った。3 この人は墓場をすみかとしており、もはやだれも、鎖でさえも彼をつなぎとめて置けなかった。4 彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせを砕くので、だれも彼を押えつけることができなかったからである。5 そして、夜昼たえまなく墓場や山で叫びつづけて、石で自分のからだを傷つけていた。
- 最終目的には、この汚れた霊につかれたひとの住む、墓場だったのだろう。石灰岩質の崖もあり、侵食されて穴が空いているため、墓に使われていたとされる。雨露や風を凌ぐには、良い場所だったかもしれない。
- 墓場をすみかとし、鎖で繋ぎ止めることもできない。人々は、押さえつけようとしていたがそれもできない。
  - マタイはふたりとあり「28 それから、向こう岸、ガダラ人の地に着かれると、悪霊につかれたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどであった。」手に追えない乱暴者とも書かれている。
  - ルカには、「27 陸にあがられると、その町の人で、悪霊につかれて長いあいだ着物も着ず、家に居つかないで墓場にばかりいた人に、出会われた。」通常の社会には住めないひと。

3. この人の行動（6-8）

- 6 ところが、この人がイエスを遠くから見て、走り寄って拝し、7 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。8 それは、イエスが、「けがれた霊よ、この人から出て行け」と言われたからである。
  - イエスがまず「けがれた霊よ、この人から出て行け」と言われている。
  -「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。と叫んでいる。

  - このようなひとの存在の情報をイエスは、知って、きた可能性がある。このひともイエスが来ることを知っていたかもしれない。家族が願った可能性もある。

4. 名前
   - この人を理解しようとしているとも取れるし、この人が、自分をどのように理解しているかを問うているようにも見える。ある関係を結ぼうとしているようにも見える。
   - 「あなたのことを教えてください」「あなたの苦しみは何ですか」
   - 単に、悪霊に憑かれた、迷惑な、乱暴者ではない。
   - レギオン：6000 人の部隊。ユダヤに数部隊。
5. このひと、悪霊の願い（9）
   - 10 そして、自分たちをこの土地から追い出さないようにと、しきりに願いつづけた。
   - 自分たちと言っているので、悪霊たち（レギオン）がはなしていることが想定しているようにとれる。
   - 過去が、すべて否定されるような、自分の存在自身が失われるのではないかという不安があるように見える。
6. このひとの状態、イエスの視点
   - 悪霊は追い出されているのだろうか。おそらく、まだ追い出されてはいない。または、完全に正気にはなっていない。
   - 少しずつ、自分の状態、なにを望んでいるかが、分裂気味ではあっても、認識し始めている。
   - 8 それは、イエスが、「けがれた霊よ、この人から出て行け」と言われたからである。から見ると、汚れた霊を追い出そうとされているが、一瞬にして、問題が解決したわけではないように見える。相手のことを理解しようとしている。愛そうとしている。
   - 歴史的には、奇跡シリーズ、波も風も従わせる、悪霊の大部隊も従わせる、死人を蘇らせるのひとつと捉えられている。しかし、かなり詳しく書かれている、マルコの記事から、実際に起こったことを、丁寧にみていくことは意味があると思われる。

4.28.7 メモ

- 奇跡の一つとすることは、自分の世界とは切り離すことでもあり、自分に引き寄せて考えることをやめ、思考停止にさせる。丁寧に、紡いでいくこと、当時の人が、あることばで表現する背後には、どのようなことがあったのかを、丁寧に見、考えていくことで、そこで起こったこと、イエスがたいせつにしたことが少しずつ見えてくるように思う。それによって、はじめて、イエスに従っていくことができるようになる。

- 「8 それは、イエスが、「けがれた霊よ、この人から出て行け」と言われたからである。」は後置になっており、不自然ということで、これは、汚れた霊が、このように受け取ったという意味に取ることもできるとの発言もあった。イエスが、どのような気持ちで、予定してきたと思われるこの地で、このひとと対し、交流を持とうとしたか、もうすこし、深く考えられると良い。マタイでは「31 悪霊どもはイエスに願って言った、『もしわたしどもを追い出されるのなら、あの豚の群れの中につかわして下さい』。」と書いていることも、多少、それを支持しているように見える。
- 悪霊は、神様の働きを邪魔するものと考えられていたことからしても、このひとの状態は、「神の国が近い」とは言い難い状態であることは確かである。そのいみでも、イエスにとって、このことと向き合うことは重要だったのだろう。少なくとも、イエスは、ずっとこのひとのことを考えていただろう。その苦しみ、痛みをも含めて。嵐の中で、イエスはなにを考えていただろうか。悪魔の働きを打ち破ることだろうか。このひとの痛みを受け取ることだろうか。
- 精神病院における身体拘束を考える、精神科病院の身体拘束、諸外国の数百倍　「異様に多い」、Restraint more prevalent at psychiatric centers in Japan、精神科医療の隔離・身体拘束

4.29　5:11-20 悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす（2）

11 さて、そこの山の中腹に、豚の大群が飼ってあった。12 霊はイエスに願って言った、「わたしどもを、豚にはいらせてください。その中へ送ってください」。13 イエスがお許しになったので、けがれた霊どもは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れは二千匹ばかりであったが、がけから海へなだれを打って駆け下り、海の中でおぼれ死んでしまった。14 豚を飼う者たちが逃げ出して、町や村にふれまわったので、人々は何事が起ったのかと見にきた。15 そして、イエスのところにきて、悪霊につかれた人が着物を着て、正気になってすわっており、それがレギオンを宿していた者であるのを見て、恐れた。16 また、それを見た人たちは、悪霊につかれた人の身に起った事と豚のこととを、彼らに話して聞かせた。17 そこで、人々はイエスに、この地方から出て行っていただきたいと、頼みはじめた。18 イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供をしたいと願い出た。19 しかし、イエスはお許しにならないで、彼に言われた、「あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい」。20 そこで、彼は立ち去り、そして自分にイエスがしてくださったことを、ことごとくデカポリスの地方に言いひろめ出したので、人々はみな驚き怪しんだ。

4.29.1　マタイ 8:30-34

30 さて、そこからはるか離れた所に、おびただしい豚の群れが飼ってあった。31 悪霊どもはイエスに願って言った、「もしわたしどもを追い出されるのなら、あの豚の群れの中につかわして下さい」。32 そこで、イエスが「行け」と言われると、彼らは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れ全体が、がけから海へなだれを打って駆け下り、水の中で死んでしまった。33 飼う者たちは逃げて町に行き、悪霊につかれた者たちのことなど、いっさいを知らせた。34 すると、町中の者がイエスに会いに出てき

た。そして、イエスに会うと、この地方から去ってくださるようにと頼んだ。

4.29.2 ルカ 8:32-39

32 ところが、そこの山べにおびただしい豚の群れが飼ってあったので、その豚の中へはいることを許していただきたいと、悪霊どもが願い出た。イエスはそれをお許しになった。33 そこで悪霊どもは、その人から出て豚の中へはいり込んだ。するとその群れは、がけから湖へなだれを打って駆け下り、おぼれ死んでしまった。34 飼う者たちは、この出来事を見て逃げ出して、町や村里にふれまわった。35 人々はこの出来事を見に出てきた。そして、イエスのところにきて、悪霊を追い出してもらった人が着物を着て、正気になってイエスの足もとにすわっているのを見て、恐れた。36 それを見た人たちは、この悪霊につかれていた者が救われた次第を、彼らに語り聞かせた。37 それから、ゲラサの地方の民衆はこぞって、自分たちの所から立ち去ってくださるようにとイエスに頼んだ。彼らが非常な恐怖に襲われていたからである。そこで、イエスは舟に乗って帰りかけられた。38 悪霊を追い出してもらった人は、お供をしたいと、しきりに願ったが、イエスはこう言って彼をお帰しになった。39 「家へ帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったか、語り聞かせなさい」。そこで彼は立ち去って、自分にイエスがして下さったことを、ことごとく町中に言いひろめた。

マルコによる福音書 5 章 11-20 節福音書対照表

4.29.3 問い

1. 1 節から 10 節を復習しましょう。どのようなことが起きていますか。
2. 汚れた霊どもは、何を願い、どうなりますか。(11-13)
3. 悪霊につかれた人にどんな変化が起こっていますか。(15)
4. 人々はどんな反応をしますか。それはなぜでしょうか。(14-17)
5. 悪霊にとりつかれていた人は何を望みますか。イエスはどのように答えますか。それは、なぜでしょうか。(18,19)
6. この人はどうしますか。人々はどのような反応をしますか。(20)
7. イエスがたいせつにしたこと、このことをとおして、示していることは何なのでしょうか。

4.29.4 参照

- 地図：イエスの時代のガリラヤ（107 Galilee in the time of Jesus）
- 地図：ガリラヤでのイエスの宣教とエルサレムへの旅（107a Jesus' Ministry in Galilee and Journey to Jerusalem）

- 豚について：レビ記 11:7 豚、これは、ひずめが分かれており、ひずめが全く切れているけれども、反芻することをしないから、あなたがたには汚れたものである。
- デカポリス（20）：23 イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。24 そこで、その評判はシリヤ全地にひろまり、人々があらゆる病にかかっている者、すなわち、いろいろの病気と苦しみとに悩んでいる者、悪霊につかれている者、てんかん、中風の者などをイエスのところに連れてきたので、これらの人々をおいやしになった。25 こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がきてイエスに従った。
- 家：「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて**家**に帰れ」と言われた。（マルコ 2:11）（マタイ 9:6,7, ルカ 5:24,25 参照）「そこでイエスは、「村にはいってはいけない」と言って、彼を**家**に帰された。」（マルコ 8:26）

4.29.5　記録

- 日時：2023 年 10 月 12 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）7 名、参加（遠隔）5 名

4.29.6　問いについて

1. 復習（1-10）
    - イエスは、悪霊につかれたひとと、対話をしている。
    - レギオン（悪霊たち）は、自分たちを追い出さないように願い続けた。
    - 悪霊につかれたひとの変化は少し見えるが、正気になっているわけではない。
2. 汚れた霊どもの願い（11-13）
    - 11 さて、そこの山の中腹に、豚の大群が飼ってあった。12 霊はイエスに願って言った、「わたしどもを、豚にはいらせてください。その中へ送ってください」
    - 13 イエスがお許しになったので、けがれた霊どもは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れは二千匹ばかりであったが、がけから海へなだれを打って駆け下り、海の中でおぼれ死んでしまった。
    - なにが起こったのだと思いますか。
    - イエスは、何をお許しになったのでしょうか。
3. 悪霊につかれた人の変化（15）

- 15 そして、イエスのところにきて、悪霊につかれた人が着物を着て、正気になってすわっており、それがレギオンを宿していた者であるのを見て、恐れた。
- どのような状態から、どのような状態に変化したかを確認。
- ルカ 8:27「長い間着物も着ず」とある。そこからの変化。
- 「正気になって」が「5 そして、夜昼たえまなく墓場や山で叫びつづけて、石で自分のからだを傷つけていた。」に対応している。
- 「すわっている」が「マルコ 5:3 この人は墓場をすみかとしており、もはやだれも、鎖でさえも彼をつなぎとめて置けなかった。4 彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせを砕くので、だれも彼を押えつけることができなかったからである。」に対応している。
- 「家に居つかないで」(27)「あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい」。(19)

4. 人々の反応（14-17）

- 14 豚を飼う者たちが逃げ出して、町や村にふれまわったので、人々は何事が起ったのかと見にきた。15 そして、イエスのところにきて、悪霊につかれた人が着物を着て、正気になってすわっており、それがレギオンを宿していた者であるのを見て、恐れた。16 また、それを見た人たちは、悪霊につかれた人の身に起った事と豚のこととを、彼らに話して聞かせた。17 そこで、人々はイエスに、この地方から出て行っていただきたいと、頼みはじめた。
- なぜ、豚を飼うものたちは逃げ出したのでしょうか。
- 何を人々は恐れたのでしょうか。
- なぜ、出ていっていただきたいと頼みはじめたのでしょうか。

5. 悪霊に取りつかれていた人の希望。イエスの応答。(18,19)

- 18 イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供をしたいと願い出た。19 しかし、イエスはお許しにならないで、彼に言われた、「あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい」。
- なぜ、お供をしたいと願ったのでしょうか。
- なぜ、イエスはそれを許されなかったのでしょうか。
- なぜ、「家族のもとに帰り、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい」と言ったのでしょうか。

6. このひとの応答。人々の反応。(20)

- 20 そこで、彼は立ち去り、そして自分にイエスがしてくださったことを、ことごとくデカポリスの地方に言いひろめ出したので、人々はみな驚き怪しんだ。
- イエスの言いつけを守ったのだろうか。
- 人々の驚き怪しむとはどのような状態を表現しているのだろうか。
- デカポリスの人たちは、信仰をもったのだろうか。おそらく難しいのだろう。

7. イエスがたいせつにしたこと。
   - いろいろな見方があるだろう。さまざまな受け取り方をたいせつに。

4.29.7 メモ

- このひとをたいせつにしたことは確かだろう。同時に、このひとの存在のために、苦しんでいたと思われる、家族や、街の人にも、そして、その地方のひとにも、おおきなインパクトを与えたと思われる。なにを、どう受け取るかは、個人によって、おそらく、異なるのだろう。それは、オープンにされている。
- 「11 さて、そこの山の中腹に、豚の大群が飼ってあった。12 霊はイエスに願って言った、「わたしどもを、豚にはいらせてください。その中へ送ってください」。13 イエスがお許しになったので、けがれた霊どもは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れは二千匹ばかりであったが、がけから海へなだれを打って駆け下り、海の中でおぼれ死んでしまった。」の部分の解釈は、難しい。しかし、語られた事実と、事実は区別して考えるべきではある。このようなことは、どのような場合に起こるかを考えてみると、実際に、多数の豚が、何らかの拍子で、崖から海へ雪崩をうって駆け下り、海の中で溺れ死んでしまった。ことがあるのだろう。これは、弟子たちも、確認できたはずである。霊がイエスに願った部分は、傍で見ているとそうだとわかったと理解することも可能だが、イエスが、弟子たちに説明したと取る方が自然なように思われる。「これはなにが起こったのですか」「汚れた霊が豚にはいることを願ったので許したのだよ」と解釈すると、イエスがされたことは、そのようなことを許容された「このことをイエスがお許しになった」に凝縮されているのかと思う。それを聞いた弟子たちは、おそらく、このように伝えるだろう。
- この結果について、経済的損失を現代人は考える。しかし、少なくとも、聖書が伝えるのはそれではない。このような大きな変化に怖気づいたのである。それは、豚のことを通しても、確認できるほどの大きな変化であった。そして、それを、人びとは歓迎しなかったということだろう。
- この人が、本当に変化していて、正気になって、一緒に生活することになっていたら、家族や周囲の人達は、神を褒め称えたのではないだろうか。一時的な変化がすごいのではなく、使命をうけとって、恵みに生きることが、大切なのではないだろうか。豚のことに囚われてはいけない。豚は、特別なことがおこったことを伝えてはいるが、もっと素晴らしいことが、このひとを通して明かしされているはずである。それを、人は喜ばないかもしれないが。
- 精神病だとしても、それが癒やされ、治ったことが大切なのではなく、「このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」（ルカ 15:24）ことが大切なのでは。それは、放蕩息子の兄のように、なかなか受け入れられない。「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その

一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。」（ルカ 15:4）「あなたがたはどう思うか。ある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。」（マタイ 18:12）

- この地方の人たち：その日をさいわいに過ごし、／安らかに陰府にくだる。彼らは神に言う、『われわれを離れよ、／われわれはあなたの道を知ることを好まない。（ヨブ 21:13,14）このことを喜べない。
- イエスの言葉に従ったのだろうか。「19 しかし、イエスはお許しにならないで、彼に言われた、『あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい』。20 そこで、彼は立ち去り、そして自分にイエスがしてくださったことを、ことごとくデカポリスの地方に言いひろめ出したので、人々はみな驚き怪しんだ。 」

  あなたの家にいけ、あなたの人びとに、となっており、家族に限ってはいないのだろう。ただ、「主が」と言っている部分が「イエスが」に置き換わっていることに注意する必要はある。
- ルカの記述は、マルコに近い。ただ「31 悪霊どもは、底知れぬ所に落ちて行くことを自分たちにお命じにならぬようにと、イエスに願いつづけた。」が、マルコの「10 そして、自分たちをこの土地から追い出さないようにと、しきりに願いつづけた。」に対応しており、悪霊のいるべき「底知れぬ所」との記述になっている。また、マルコでは、「恐れた」は 15 節のみであるが、ルカでは、35 節に「恐れた」とあり 37 節に「非常な恐怖に襲われいたからである。」となっている。この恐れは、突風を静めるにおける「彼らは恐れおののいて」（4 章 41 節）また、5 章 42 節の「彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。」に繋がっている。
- マタイでは、最初、「悪霊につかれた二人の者」とあり、焦点が異なっているようである。また「29 すると突然、彼らは叫んで言った、『神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか』。」ともあり、終末的な結末の先取りのような印象を受ける。この悪霊につかれた人には焦点が当たっていない。マタイでは、マタイが弟子になった記事は 9 章で、この（マタイ 8:28-34）よりあとに置かれており、マタイはまだ、この時点で、弟子に加わっていなかったのかもしれない。マルコでは、十二使徒を選んだのは、3 章 13 節から 19 節に置かれ、この記事と連続しているようにかかれている、譬えの説明の箇所で、十二人ということばもある。正確にはわからない。しかし、十二人は、ヨハネ 6 章終わりの記事からすると、五千人の給食のあとに、人びとがイエスに期待したメシヤ像が崩れたときに、残った人たちとの記述もあるので、そちらに真実性があるようにも思われる。この記事のときには、マタイは同行しておらず、場所として、ゲラサと書いてあったり、一人と書いてある部分を、他の情報から修正しているのかもしれない。
- 人一人のほうが、豚 2000 匹の命よりも大切とするのも、軽率で、少なくとも、ここでそのことは、言われていない。しかし、ここでは、このひとのなかから悪霊が追い出されることのために、このことが起こったことを許容されたということなのだろう。このことに結びつけて、人は魂の救いよりも、豚 2000 匹の方を、選んだとするのも、直接的には導けないように見える。

5:21-43 ヤイロの娘とイエスの服に触れる女

21 イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大ぜいの群衆がみもとに集まってきた。イエスは海べにおられた。22 そこへ、会堂司のひとりであるヤイロという者がきて、イエスを見かけるとその足もとにひれ伏し、23 しきりに願って言った、「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください」。24 そこで、イエスは彼と一緒に出かけられた。大ぜいの群衆もイエスに押し迫りながら、ついて行った。25 さてここに、十二年間も長血をわずらっている女がいた。26 多くの医者にかかって、さんざん苦しめられ、その持ち物をみな費してしまったが、なんのかいもないばかりか、かえってますます悪くなる一方であった。27 この女がイエスのことを聞いて、群衆の中にまぎれ込み、うしろから、み衣にさわった。28 それは、せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろうと、思っていたからである。29 すると、血の元がすぐにかわき、女は病気がなおったことを、その身に感じた。30 イエスはすぐ、自分の内から力が出て行ったことに気づかれて、群衆の中で振り向き、「わたしの着物にさわったのはだれか」と言われた。31 そこで弟子たちが言った、「ごらんのとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか」。32 しかし、イエスはさわった者を見つけようとして、見まわしておられた。33 その女は自分の身に起ったことを知って、恐れおののきながら進み出て、みまえにひれ伏して、すべてありのままを申し上げた。34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。35 イエスが、まだ話しておられるうちに、会堂司の家から人々がきて言った、「あなたの娘はなくなりました。このうえ、先生を煩わすには及びますまい」。36 イエスはその話している言葉を聞き流して、会堂司に言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい」。37 そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。38 彼らが会堂司の家に着くと、イエスは人々が大声で泣いたり、叫んだりして、騒いでいるのをごらんになり、39 内にはいって、彼らに言われた、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいって行かれた。41 そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。42 すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。43 イエスは、だれにもこの事を知らすなと、きびしく彼らに命じ、また、少女に食物を与えるようにと言われた。

4.29.8 マタイ 9:18-26

18 これらのことを彼らに話しておられると、そこにひとりの会堂司がきて、イエスを拝して言った、「わたしの娘がただ今死にました。しかしおいでになって手をその上においてやって下さい。そうしたら、娘は生き返るでしょう」。19 そこで、イエスが立って彼について行かれると、弟子たちも一緒に行った。20 するとそのとき、十二年間も長血をわずらっている女が近寄ってきて、イエスのうしろからみ衣のふさにさわった。21 み衣にさわりさえすれば、なおしていただけるだろう、と心の中で思っていたからである。

22 イエスは振り向いて、この女を見て言われた、「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」。するとこの女はその時に、いやされた。23 それからイエスは司の家に着き、笛吹きどもや騒いでいる群衆を見て言われた。24 「あちらへ行っていなさい。少女は死んだのではない。眠っているだけである」。すると人々はイエスをあざ笑った。25 しかし、群衆を外へ出したのち、イエスは内へはいって、少女の手をお取りになると、少女は起きあがった。26 そして、そのうわさがこの地方全体にひろまった。

4.29.9 ルカ 8:40-56

40 イエスが帰ってこられると、群衆は喜び迎えた。みんながイエスを待ちうけていたのである。41 するとそこに、ヤイロという名の人がきた。この人は会堂司であった。イエスの足もとにひれ伏して、自分の家においでくださるようにと、しきりに願った。42 彼に十二歳ばかりになるひとり娘があったが、死にかけていた。ところが、イエスが出て行かれる途中、群衆が押し迫ってきた。43 ここに、十二年間も長血をわずらっていて、医者のために自分の身代をみな使い果してしまったが、だれにもなおしてもらえなかった女がいた。44 この女がうしろから近寄ってみ衣のふさにさわったところ、その長血がたちまち止まってしまった。45 イエスは言われた、「わたしにさわったのは、だれか」。人々はみな自分ではないと言ったので、ペテロが「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき合っているのです」と答えた。46 しかしイエスは言われた、「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」。47 女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、みまえにひれ伏し、イエスにさわった訳と、さわるとたちまちなおったこととを、みんなの前で話した。 48 そこでイエスが女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。49 イエスがまだ話しておられるうちに、会堂司の家から人がきて、「お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びません」と言った。50 しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」。51 それから家にはいられるとき、ペテロ、ヨハネ、ヤコブおよびその子の父母のほかは、だれも一緒にはいって来ることをお許しにならなかった。52 人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。イエスは言われた、「泣くな、娘は死んだのではない。眠っているだけである」。53 人々は娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。54 イエスは娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きなさい」。55 するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。56 両親は驚いてしまった。イエスはこの出来事をだれにも話さないようにと、彼らに命じられた。

4.30 5:25-34 ヤイロの娘とイエスの服に触れる女（1）

25 さてここに、十二年間も長血をわずらっている女がいた。26 多くの医者にかかって、さんざん苦しめられ、その持ち物をみな費してしまったが、なんのかいもないばかりか、かえってますます悪くなる一方であった。27 この女がイエスのことを聞いて、群衆の中にまぎれ込み、うしろから、み衣にさわった。28 それは、せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろうと、思っていたからである。29 すると、血の元がすぐにかわき、女は病気がなおったことを、その身に感じた。30 イエスはすぐ、自分の内から力が出て行ったことに気づかれて、群衆の中で振り向き、「わたしの着物にさわったのはだれか」と言

われた。31 そこで弟子たちが言った、「ごらんのとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか」。32 しかし、イエスはさわった者を見つけようとして、見まわしておられた。33 その女は自分の身に起ったことを知って、恐れおののきながら進み出て、みまえにひれ伏して、すべてありのままを申し上げた。34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。

4.30.1 マタイ 9:20-21

20 するとそのとき、十二年間も長血をわずらっている女が近寄ってきて、イエスのうしろからみ衣のふさにさわった。21 み衣にさわりさえすれば、なおしていただけるだろう、と心の中で思っていたからである。22 イエスは振り向いて、この女を見て言われた、「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」。するとこの女はその時に、いやされた。

4.30.2 ルカ 8:43-48

43 ここに、十二年間も長血をわずらっていて、医者のために自分の身代をみな使い果してしまったが、だれにもなおしてもらえなかった女がいた。44 この女がうしろから近寄ってみ衣のふさにさわったところ、その長血がたちまち止まってしまった。45 イエスは言われた、「わたしにさわったのは、だれか」。人々はみな自分ではないと言ったので、ペテロが「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき合っているのです」と答えた。46 しかしイエスは言われた、「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」。47 女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、みまえにひれ伏し、イエスにさわった訳と、さわるとたちまちなおったこととを、みんなの前で話した。 48 そこでイエスが女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。

マルコによる福音書 5 章 25-34 節福音書対照表

4.30.3 問い

1. このことはどのような状況のもとで起きますか。(21-24)
2. この女の人はどのような困難をかかえていますか。またイエスをどのように考えていたのでしょうか。(25-28)
3. どんなことがおこりますか。またイエスはどうしますか。弟子たちの反応と合わせて考えてみましょう。(29-32)
4. この女の人はなぜ恐れおののくのでしょう。(33)
5. イエスはこの女の人に何と言っていますか。イエスは何をこの女の人から受け取ったのでしょうか。(34)

6. この女の人の信仰とはどのようなもので、何を受け取ったでしょうか。

4.30.4 参照

- **長血の女：**新約聖書に長血の女（having an issue of blood）が登場しますが、当時は、この病気は、どのように、考えられており、現代的には、どのような病気だと考えられるのでしょうか。
  - ChatGPT（2023.10.19）.
  - 新約聖書に登場する「長血の女」という表現は、マタイによる福音書（9:20-22）、マルコによる福音書（5:25-34）、ルカによる福音書（8:43-48）で言及されています。この女性は 12 年間もの間、血の問題に悩まされており、イエスに触れることで癒されたとされています。

    当時の人々は、この女性の病気を「長血」と表現しましたが、具体的な病名や病態については明確には記されていません。しかしながら、その症状の記述から、いくつかの現代的な病気の可能性が考えられます。

    1. 子宮出血: 「長血の女」の症状は、子宮出血に関連している可能性があります。子宮内膜の異常な成長やホルモンの変化によって引き起こされる病態です。
    2. 月経異常: この女性の症状は、月経異常に関連している可能性もあります。月経周期の乱れや過度の出血が起こる状態です。
    3. 子宮筋腫: 子宮筋腫は、子宮内にできる良性の腫瘍であり、月経異常や過剰出血を引き起こすことがあります。

    これらは現代的な医学的な視点からの推測であり、正確な診断は新約聖書の文脈からは得られません。また、当時の医学的な知識や言語の違いから、記述が現代的な病名とは一致しないこともあります。

    重要な点は、この物語がイエスの癒しの力と信仰に焦点を当てていることであり、具体的な病名よりも信仰と癒しのメッセージが強調されているということです。

- レビ記 15:25-27 女にもし、その不浄の時のほかに、多くの日にわたって血の流出があるか、あるいはその不浄の時を越して流出があれば、その汚れの流出の日の間は、すべてその不浄の時と同じように、その女は汚れた者である。26 その流出の日の間に、その女の寝た床は、すべてその女の不浄の時の床と同じようになる。すべてその女のすわった物は、不浄の汚れのように汚れるであろう。27 すべてこれらの物に触れる人は汚れる。その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。（血について：参照）

- 医者について：シラ書〔集会の書〕38:1-15 医者を、その務めのゆえに敬え。／彼も主がお造りになったのだから。2 癒やしの業はいと高き方から／褒美は王から賜る。3 医者の学識は彼の身分を高め／偉い人々の前で驚嘆される。4 主は大地から薬をお造りになった。／思慮ある人ならこれを毛嫌いしない。5 一本

の木のお陰で水が甘くなり[*293]／その威力が知られることになったではないか。6 主は自ら人々に学識を授け／その驚くべき業によって称賛される。7 医者はこの業によって人を治療し／その痛みを取り除く。8 薬屋はこの同じ業によって混ぜ薬を作る。／こうして、主の御業は決して終わることなく／主からの平安が地の面にある。9 子よ、病気になったら放置せず／主に祈れ。そうすれば／主がお前を癒やしてくださる。10 過ちを避け、手の業を正せ。／一切の罪から心を清めよ。11 芳しい香りと記念のための上質の小麦粉を供え／供え物には油を余すことなく注げ。12 それから、医者に機会を与えよ。／彼も主がお造りになったのだから。／彼を去らせるな。お前には必要なのだから。13 回復が彼らの手にかかっている時がある。14 彼らもまた／主が自分たちを用いて病人の苦痛を和らげ／命を救う癒やしに成功しますように、と／祈り求めているのだ。15 自分をお造りになった方の前で罪を犯す者は／医者の手に陥るがよい。

- タルムード・シャバッド：夏なら亜麻布、冬なら木綿の布で運んできたダチョウの卵の灰が効く、白い雌ロバの糞の中に見つかる大麦の粒が効くとなど。

- 衣のふさ（マタイ 9:20・ルカ 8:44）：民数記 15:38-40 「イスラエルの人々に命じて、代々その衣服のすその四すみにふさをつけ、そのふさを青ひもで、すその四すみにつけさせなさい。39 あなたがたが、そのふさを見て、主のもろもろの戒めを思い起して、それを行い、あなたがたが自分の心と、目の欲に従って、みだらな行いをしないためである。40 こうして、あなたがたは、わたしのもろもろの戒めを思い起して、それを行い、あなたがたの神に聖なる者とならなければならない。

4.30.5 記録

- 日時：2023 年 10 月 19 日午後 7 時半〜9 時半

- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）5 名

4.30.6 問いについて

1. 状況（21-24）

    - 21 イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大ぜいの群衆がみもとに集まってきた。イエスは海べにおられた。22 そこへ、会堂司のひとりであるヤイロという者がきて、イエスを見かけるとその足もとにひれ伏し、23 しきりに願って言った、「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください」。24 そこで、イエスは彼と一緒に出かけられた。大ぜいの群衆もイエスに押し迫りながら、ついて行った。

[*293] 出エジプト 15:23-26 彼らはメラに着いたが、メラの水は苦くて飲むことができなかった。それで、その所の名はメラと呼ばれた。24 ときに、民はモーセにつぶやいて言った、「わたしたちは何を飲むのですか」。25 モーセは主に叫んだ。主は彼に一本の木を示されたので、それを水に投げ入れると、水は甘くなった。その所で主は民のために定めと、おきてを立てられ、彼らを試みて、26 言われた、「あなたが、もしあなたの神、主の声に良く聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプトびとに下した病を一つもあなたに下さないであろう。わたしは主であって、あなたをいやすものである」。

- 多くの群衆がイエスに押し迫りながら、ヤイロたちについていった。
  - ついていったのはどのような人たちだったのだろうか。イエスの人気、何か奇跡が見られるかと、興味本位、群集心理。
- この向こう岸は、カペナウム方面だろう。とすると、前から繋がっているように見える。
  - ガリラヤ湖東岸では、歓迎されなかったのに、ここでは、なぜ人がついていくのか。

2. 女の人の抱えていた困難。イエスをどう思っていたか。(25-28)

- 25 さてここに、十二年間も長血をわずらっている女がいた。26 多くの医者にかかって、さんざん苦しめられ、その持ち物をみな費してしまったが、なんのかいもないばかりか、かえってますます悪くなる一方であった。27 この女がイエスのことを聞いて、群衆の中にまぎれ込み、うしろから、み衣にさわった。28 それは、せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろうと、思っていたからである。
- この女の人には、神の国は来ていない。
- マタイ、ルカは、衣の房としている。レビ記 15:25-27 から、衣服に触れれば、それは、洗わなければならない不浄がついたと考えたからだろうか。マルコにはない。
- この女の人はなぜヤイロのように公然と願わなかったのでしょう。

3. 何が起こり、イエスはどうするか、弟子たちの反応。(29-32)

- 29 すると、血の元がすぐにかわき、女は病気が[*294]ことを、その身に感じた。30 イエスはすぐ、自分の内から力が出て行ったことに気づかれて、群衆の中で振り向き、「わたしの着物にさわったのはだれか」と言われた。31 そこで弟子たちが言った、「ごらんのとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか」。32 しかし、イエスはさわった者を見つけようとして、見まわしておられた。
- おそらく、着物に触った人は、他にもいたはずである。それを弟子たちも証言している。
  - 弟子証言は、マタイでは欠落、ルカでは修正「人々はみな自分ではないと言ったので、ペテロが「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき合っているのです」と答えた。」(8:45)
- この女は、必死で、触ろうとしただろう。その必死さは、イエスが、感じ取った可能性もある。
- イエスは、この特別な接触(関係の発生)が、非常に大きなことと感じ取っていた。
- イエスは神だから触ったのが誰かわかるはずというのは、飛躍しすぎ。「32 しかし、イエスはさわった者を見つけようとして、見まわしておられた。」とある。これも、ジェスチャーだとしたら、悲しい。

*294 : i) to cure, heal, ii) to make whole

4. 何に、なぜ、恐れおののくのか。(33)

    - 33 その女は自分の身に起ったことを知って、恐れおののきながら進み出て、みまえにひれ伏して、すべてありのままを申し上げた。
    - 単に、ちょっと着物にさわるだけと思ったにも関わらず、大変なことをしたことを感じ取ったのかも知れない。
    - イエスから力が出ていくとは思ってもいなかった。
    - すべてをありのままに話した。どんなことを話したのだろうか。

5. イエスの言葉、イエスの受け取ったもの。(34)

    - 34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。
    - 信仰のことを言っている。恐れおののきを取り除こうとしている。まだ、養生が必要であることを暗示させる。
    - このようなことばをかけられたらどう感じるだろうか。

6. この人の信仰とは、この女の人が受け取ったもの。

    - 「娘よ[*295]、あなたの信仰があなたを救ったのです。」とイエスが呼ぶ、この女性の信仰とは？
    - 「せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろう」(28) という非常に素朴な、からしだねひと粒ほどの信仰である。
    - この人は、どのように生きていっただろうか。イエスのことばは、どのようにこの人に働いただろうか。
    - この女の人は、これからは、問題がない、幸せな生活を送ったでしょうか。
    - この女の人は、神の国を近いと感じることができたでしょうか。そのように信じて生きることができたでしょうか。もし、そうなら、それは、なぜでしょうか。

4.30.7 メモ

- 神の国の到来は、歓迎されないこともある。歓迎されないことばかりかも知れない。人びとは、自分たちの求める、神の国を見たい。

[*295] : a daughter, a) a daughter of God: acceptable to God, rejoicing in God's peculiar care and protection, b) with the name of a place, city, or region; denotes collectively all its inhabitants and citizens, c) a female descendant

- この女性に神の国が来たのだろう。完治することを体に感じることはおそらくできない。イエスも、「すっかりなおって、達者でいなさい」と付け加えている。しかし、変化を感じ取ったことは証言されている。それは、完全ないやしへと向かっていくものなのだろう。
- イエスからどのように、力が出ていったかはわからかない。しかし、それを感じ取ったことは証言されている。そして、この女の人から、詳細を聞き、心をいため、はらわたが傷つくような経験もしただろう。しかし、それは、イエスだけではなく、神様も、同じように、その苦しみを感じ取っておられるのではないだろうか。
- イエスをとおして、神様が、この人の痛み、苦しみを知っていてくださることを実感できたのではないだろうか。自分は、見捨てられた存在ではなく、神の国が近い、その中に生きていることを実感することができれば、それは、希望が与えられるのではないだろうか。
- 「信仰が救った」
  - マルコ 10:52 そこでイエスは言われた、「行け、あなたの信仰があなたを救った」。すると彼は、たちまち見えるようになり、イエスに従って行った。（ルカ 18:42）
  - ルカ 7:50 しかし、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。
  - ルカ 17:19 それから、その人に言われた、「立って行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ」。

4.31 5:21-24, 35-43 ヤイロの娘とイエスの服に触れる女（２）

21 イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大ぜいの群衆がみもとに集まってきた。イエスは海べにおられた。22 そこへ、会堂司のひとりであるヤイロという者がきて、イエスを見かけるとその足もとにひれ伏し、23 しきりに願って言った、「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください」。24 そこで、イエスは彼と一緒に出かけられた。大ぜいの群衆もイエスに押し迫りながら、ついて行った。

（中略）

35 イエスが、まだ話しておられるうちに、会堂司の家から人々がきて言った、「あなたの娘はなくなりました。このうえ、先生を煩わすには及びますまい」。36 イエスはその話している言葉を聞き流して、会堂司に言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい」。37 そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。38 彼らが会堂司の家に着くと、イエスは人々が大声で泣いたり、叫んだりして、騒いでいるのをごらんになり、39 内にはいって、彼らに言われた、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいって行かれた。41 そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、

起きなさい」という意味である。42 すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。43 イエスは、だれにもこの事を知らすなと、きびしく彼らに命じ、また、少女に食物を与えるようにと言われた。

4.31.1 マタイ 9:18-19, 23-26

18 これらのことを彼らに話しておられると、そこにひとりの会堂司がきて、イエスを拝して言った、「わたしの娘がただ今死にました。しかしおいでになって手をその上においてやって下さい。そうしたら、娘は生き返るでしょう」。19 そこで、イエスが立って彼について行かれると、弟子たちも一緒に行った。

（中略）

23 それからイエスは司の家に着き、笛吹きどもや騒いでいる群衆を見て言われた。24 「あちらへ行っていなさい。少女は死んだのではない。眠っているだけである」。すると人々はイエスをあざ笑った。25 しかし、群衆を外へ出したのち、イエスは内へはいって、少女の手をお取りになると、少女は起きあがった。26 そして、そのうわさがこの地方全体にひろまった。

4.31.2 ルカ 8:40-42, 49-56

40 イエスが帰ってこられると、群衆は喜び迎えた。みんながイエスを待ちうけていたのである。41 するとそこに、ヤイロという名の人がきた。この人は会堂司であった。イエスの足もとにひれ伏して、自分の家においでくださるようにと、しきりに願った。42 彼に十二歳ばかりになるひとり娘があったが、死にかけていた。ところが、イエスが出て行かれる途中、群衆が押し迫ってきた。

（中略）

49 イエスがまだ話しておられるうちに、会堂司の家から人がきて、「お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びません」と言った。50 しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」。51 それから家にはいられるとき、ペテロ、ヨハネ、ヤコブおよびその子の父母のほかは、だれも一緒にはいって来ることをお許しにならなかった。52 人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。イエスは言われた、「泣くな、娘は死んだのではない。眠っているだけである」。53 人々は娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。54 イエスは娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きなさい」。55 するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。56 両親は驚いてしまった。イエスはこの出来事をだれにも話さないようにと、彼らに命じられた。

マルコによる福音書 5 章 21-24, 35-43 節福音書対照表

4.31.3　問い

1. ヤイロはどんな人ですか。また、どんな問題を抱え、イエスに何を願っていますか。(22,23)
2. ヤイロの家から人々が知らせに来た時の状況はどのように描かれていますか。ヤイロの心も想像してみましょう。(35)
3. イエスはヤイロにどのような言葉をかけていますか。(36)
4. ヤイロの家はどんな状況でしたか。イエスはどうしますか。なぜ少数の人しか立ちあわせなかったのでしょう。(37-40)
5. イエスは少女にたいしてどうしますか。その様子はどのように描かれていますか。(41-43)
6. この二つの事件を通して、イエスは信仰について何を教えていると思いますか。

4.31.4　参照

- **会堂で教えた記録**：
  - マルコ 3:1-6 1 イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人がいた。2 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。(中略) 6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。(マタイ 12:9-14、ルカ 6:6-11)
  - ルカ 13:10-17 10 安息日に、ある会堂で教えておられると、(中略) 14 ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り、群衆にむかって言った、「働くべき日は六日ある。その間に、なおしてもらいにきなさい。安息日にはいけない」。(腰の曲がった女を癒やす)
- **会堂司について**：参照
- 眠りと死
  - 眠りは死の婉曲話法：詩篇 13:3 わが神、主よ、みそなわして、わたしに答え、／わたしの目を明らかにしてください。さもないと、わたしは死の眠りに陥り、
  - 死は復活までの一時的な眠り：1 テサロニケ 4:13,14 兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。14 わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。

4.31.5　記録

- 日時：2023 年 10 月 26 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）7 名

4.31.6　問いについて

1. ヤイロについて（22,23）
    - 21 イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大ぜいの群衆がみもとに集まってきた。イエスは海べにおられた。22 そこへ、会堂司のひとりであるヤイロという者がきて、イエスを見かけるとその足もとにひれ伏し、23 しきりに願って言った、「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください」。24 そこで、イエスは彼と一緒に出かけられた。大ぜいの群衆もイエスに押し迫りながら、ついて行った。
    - 会堂司のひとりであるヤイロ[*296]
        - 会堂司[*297]：会堂の行政的な頭、会堂を管理する責任を持つ長老会の議長、儀式の運営に責任をもち、儀式そのものには加わらないが、役の役割、また、それが適切に、かつ秩序正しく行われているかどうか見る責任があった。社会の最も大切な、また最も尊敬されている一人。（バークレイ）
        - ひれ伏している。イエスとの面識はあっただろうか。（マルコ 3:1-6、ルカ 13:10-17）
    - 必死さはどのような言葉から読み取れますか。
        - イエスを見かけるとその足もとにひれ伏し、23 しきりに願って言った、「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください」。
        - マルコでは「わたしの幼い娘[*298]」と
    - マタイは「わたしの娘がただ今死にました。しかしおいでになって手をその上においてやって下さい。そうしたら、娘は生き返るでしょう」。（8:18b）とし、復活信仰に結びつけている。そのためもあり、中間の、会堂司の家からの知らせを省いている。（比較：マルコ、ルカは、「死にかかっています。」「死にかけていた。」）

---

*296　：whom God enlightens, :　whom Jehovah enlightens < :　to be or become light, shine

*297　：ruler of the synagogue. It was his duty to select the readers or teachers in the synagogue, to examine the discourses of the public speakers, and to see that all things were done with decency and in accordance with ancestral usage.

*298　：a little daughter

2.（長血の女の人と話している間、）ヤイロの家から使いが来たとき、ヤイロの心（32-35）

- 32 しかし、イエスはさわった者を見つけようとして、見まわしておられた。33 その女は自分の身に起ったことを知って、恐れおののきながら進み出て、みまえにひれ伏して、すべてありのままを申し上げた。34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。
- 35 **イエスが、まだ話しておられるうちに**、会堂司の家から人々がきて言った、「あなたの娘はなくなりました。このうえ、先生を煩わすには及びますまい」。
  - マタイは省略、ルカは「49 イエスがまだ話しておられるうちに、会堂司の家から人がきて、「お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びません」と言った。」
- イエスにとって、長血を患っている女と、ヤイロの娘または、ヤイロとどちらが大切だったのでしょうか。
  - 時間の枠内では二者択一になりそうであるが、イエスはどうしてそうならなかったのでしょうか。

3. イエスのヤイロに対することば（36）

- 36 イエスはその話している言葉を聞き流して、会堂司に言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい」。
  - ルカ 8:50 50 しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」。
- イエスはどのような思いから、このことばをかけたのでしょうか。そしてヤイロはそれをどう受け取ったでしょうか。ここでの恐れとは？
  - ヨハネ 14:1「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

4. ヤイロの家の状況。なぜ少人数？(37-40)

- 37 そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。38 彼らが会堂司の家に着くと、イエスは人々が大声で泣いたり、叫んだりして、騒いでいるのをごらんになり、39 内にはいって、彼らに言われた、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいって行かれた。
  - マタイ 8:23「笛吹きどもや騒いでいる群衆」
  - 三人だけ：全体では何人が目撃したのでしょうか（父母、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、イエスの六人）
    * マルコ 9:2 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、
    * マルコ 14:33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、
- 実際は、少女は死んでいたのでしょうか。

- マタイでは最初から死んでいる。18 これらのことを彼らに話しておられると、そこにひとりの会堂司がきて、イエスを拝して言った、「わたしの娘がただ今死にました。しかしおいでになって手をその上においてやって下さい。そうしたら、娘は生き返るでしょう」。しかし、イエスは、あちらへ行っていなさい。少女は死んだのではない。眠っているだけである」。(24) と主張している。
- ルカでは、最初は「死にかけていた」とし、あとでは「53 人々は娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。」「55a するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。」という表現をしているので、死んで、生き返ったことに焦点があっている。
- マルコでは、「死にかかっている」(23) とし、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。(38b)「そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。」(41) と、眠っているひとを起こす表現に終始している。

5. 少女に対して。その描写。(41-43)

- 41 そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。42 すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。43 イエスは、だれにもこの事を知らすなと、きびしく彼らに命じ、また、少女に食物を与えるようにと言われた。
- ユダヤ人の娘は 12 歳と 1 日で成人した女とされた。男の子は、13 歳と 1 日で成人。
  - 12 年間、可愛がられて生きてきたのだろう。
- 「子供の手を取って」マタイ「少女の手をお取りになると」、ルカ「娘の手を取って」
- 「少女よ、さあ、起きなさい (T)」(arise) (, 'a youth' の女性形)
- ルカ 8:55 「その霊が戻ってきて」
- 驚いたのは誰でしょうか。
  - マルコ 5:42 すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。
  - ルカ 8:56 両親は驚いてしまった。イエスはこの出来事をだれにも話さないようにと、彼らに命じられた。
- なぜ、「この事を知らすな」と命じたのでしょうか。「この事」とは何を意味するのか。
  - この事を伝えたのは、誰でしょうか。彼らとは？
  - 単に眠っているだけとしたのは、その伏線か。死者を蘇らせたところに、中心がないということか。「神の国は近い。」
  - マルコ 1:24,25 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。

25 イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。
  - マルコ 1:44 「何も人に話さないように、注意しなさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセが命じた物をあなたのきよめのためにささげて、人々に証明しなさい」。
  - マルコ 3:12 イエスは御自身のことを人にあらわさないようにと、彼らをきびしく戒められた。

6. 二つの事件を通して信仰とは

   - 5:34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。

   - 5:36 イエスはその話している言葉を聞き流して、会堂司に言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい」。

4.31.7 メモ

- ヤイロの背景は、明らかではない。しかし「足もとにひれ伏し」(22)「しきりに願って行った」(23)「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください。」(23) 必死さが感じられる。「会堂司の家から人々が来て」(35) とあり、ヤイロがイエスに頼みに行ったことは、了解されており、人を使わすことも可能であったこともわかる。しかし、そうはしなかった。単純な必死さや、群衆が多くいるなかで、イエスにきていただくことから、そうしたかもしれないが、この必死さを身をもって伝えたい気持ちもあったかもしれない。ガリラヤ湖畔の街の会堂では、すでに、イエスは教えなくなっているようにも見える。3 章 6 節などの動きからすると、会堂司も、良い関係が維持されていたとは言えなかったかもしれない。そこでの願いである。

  - 群衆は、イエスのもとに集まってきているが、その群衆も、自分たちが、なにを求めているのかよくわからないかもしれない。(マルコ 6 章 34 節) イエスに反対する人、殺そうとすらする人、拒絶する人、疑いをもつ人も増えている時期だと思われる。

- この娘は、マタイが描くように、死んでいたのだろうか。ルカが、「人々は死んだことを知っていたので」(53) と書き「すると霊が戻ってきて」(55) と書くように、少なくとも、人々が報せにきた時点では、完全に死んでいたのだろうか。マタイとルカはその立場だろう。マタイは、最初から死んでいるように書かれており、ヤイロに「9 章 18 節これらのことを彼らに話しておられると、そこにひとりの会堂司がきて、イエスを拝して言った、『わたしの娘がただ今死にました。しかしおいでになって手をその上においてやって下さい。そうしたら、娘は生き返るでしょう』。」と復活信仰を告白させている。しかし、マルコには、一貫して、そのような記述はない。マルコの記述からは、この少女が死んでいたかどうかは、明確ではない。マタイでは復活信仰についてかたり、ルカではイエスが少女を生き返らせたことに焦点が置かれているようだが、マルコではそうではないように見える。事実は不明である。しかし、イエスは、娘は死んでいない。少なくとも、希望がなく、恐れる状態ではないと信じていたのではないだろうか。

  - マルコ 12:26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言

葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。

信仰（神様との信頼関係）の中では、生きていたのではないだろうか。完全にはわからないが。

- イエスの行為の中心は、娘を生き返らせたことには、なかったのかもしれない。神の国は遠い、近くない、自分は、神様に見放されているという人に、神の国は近いということを知らせ、神さまに信頼する生活へと導くために、その時その時を生きていたように見える。しかし、残念ながら、人々は、そして、聖書解釈者もそのようには受け取らず、奇跡を、神の子の兆とみる。イエスの悲劇は、すでに始まっているように見える。
- 「恐れることはない。ただ信じなさい」「今、恐れているのをやめて」「信じ続けなさい」
  - ヨハネ 14:1 「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。
  - ローマ 8:31 それでは、これらの事について、なんと言おうか。もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。
  - 1 ヨハネ 5:5 世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか。
- 誰が驚いたかの表現からも、ルカでは、両親のようで、マルコでは、弟子たちも含んでいるように見える。驚きの表現も異なっている。
  - マルコ 5:42b：彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。 *299 *300

4.32 6:1-6 ナザレで受け入れられない

1 イエスはそこを去って、郷里に行かれたが、弟子たちも従って行った。2 そして、安息日になったので、会堂で教えはじめられた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これらのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵はどうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、どうしてか。3 この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。4 イエスは言われた、「預言者は、自分の郷里、親族、家以外では、どこででも敬われないことはない」。5 そして、そこでは力あるわざを一つもすることができず、ただ少数の病人に手をおいていやされただけであった。6 そして、彼らの不信仰を驚き怪しまれた。それからイエスは、附近の村々を巡りあるいて教えられた。

*299 : to throw out of position, displace a) to amaze, to astonish, throw into wonderment, b) to be amazed, astounded, c) to be out of one's mind, besides one's self, insane

*300 : i) any casting down of a thing from its proper place or state, displacement, ii) a throwing of the mind out of its normal state, alienation of mind, whether such as makes a lunatic or that of a man who by some sudden emotion is transported as it were out of himself, so that in this rapt condition, although he is awake, his mind is drawn off from all surrounding objects and wholly fixed on things divine that he sees nothing but the forms and images lying within, and thinks that he perceives with his bodily eyes and ears realities shown him by God. iii) amazement, the state of one who, either owing to the importance or the novelty of an event, is thrown into a state of blended fear and wonderment

4.32.1 マタイ 13:53-58

53 イエスはこれらの譬を語り終えてから、そこを立ち去られた。54 そして郷里に行き、会堂で人々を教えられたところ、彼らは驚いて言った、「この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで習ってきたのか。55 この人は大工の子ではないか。母はマリヤといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 またその姉妹たちもみな、わたしたちと一緒にいるではないか。こんな数々のことを、いったい、どこで習ってきたのか」。57 こうして人々はイエスにつまずいた。しかし、イエスは言われた、「預言者は、自分の郷里や自分の家以外では、どこででも敬われないことはない」。58 そして彼らの不信仰のゆえに、そこでは力あるわざを、あまりなさらなかった。

4.32.2 ルカ 4:16-30

16 それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。17 すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、18 「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、／わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、／囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、／打ちひしがれている者に自由を得させ、19 主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。20 イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。21 そこでイエスは、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめられた。22 すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て来るめぐみの言葉に感嘆して言った、「この人はヨセフの子ではないか」。23 そこで彼らに言われた、「あなたがたは、きっと『医者よ、自分自身をいやせ』ということわざを引いて、カペナウムで行われたと聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言うであろう」。24 それから言われた、「よく言っておく。預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである。25 よく聞いておきなさい。エリヤの時代に、三年六か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大ききんがあった際、そこには多くのやもめがいたのに、26 エリヤはそのうちのだれにもつかわされないで、ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわされた。27 また預言者エリシャの時代に、イスラエルには多くの重い皮膚病にかかった多くの人がいたのに、そのうちのひとりもきよめられないで、ただシリヤのナアマンだけがきよめられた」。28 会堂にいた者たちはこれを聞いて、みな憤りに満ち、29 立ち上がってイエスを町の外へ追い出し、その町が建っている丘のがけまでひっぱって行って、突き落そうとした。30 しかし、イエスは彼らのまん中を通り抜けて、去って行かれた。

マルコによる福音書 6 章 1-6 節福音書対照表

4.32.3 問い

1. イエスたちはどこへ行き、どこで何をしますか。(1,2a)

2. ルカによる福音書では、さらにどのように伝えていますか。（ルカ 4:16-21）

3. 町の人々の反応をまとめてみましょう。郷里の人は何を知り、何を知らなかったでしょうか。（2b,3a）

4.「イエスにつまずいた」とはどのようなことを表現しているのでしょうか。（3b）

5. イエスは、何と言っていますか。ルカはどのようなことを付け加えていますか。（4）

6. なぜイエスは力あるわざをすることができなかったのでしょう。（5,6）

4.32.4　参照

- イザヤ 61:1-2 主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、／貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、／わたしをつかわして心のいためる者をいやし、／捕われ人に放免を告げ、／縛られている者に解放を告げ、2 主の恵みの年と／われわれの神の報復の日とを告げさせ、／また、すべての悲しむ者を慰め、
- イザヤ 42:7 盲人の目を開き、／囚人を地下の獄屋から出し、／暗きに座する者を獄屋から出させる。
- 詩篇 146:8 主は盲人の目を開かれる。主はかがむ者を立たせられる。主は正しい者を愛される。
- イザヤ 29:18 その日、耳しいは書物の言葉を聞き、／目しいの目はその暗やみから、見ることができる。
- イザヤ 42:7 盲人の目を開き、／囚人を地下の獄屋から出し、／暗きに座する者を獄屋から出させる。
- 列王記上 17:1 ギレアデのテシベに住むテシベびとエリヤはアハブに言った、「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう」。
- 列王記上 17:9 「立ってシドンに属するザレパテへ行って、そこに住みなさい。わたしはそのところのやもめ女に命じてあなたを養わせよう」。
- 列王記下 5:1-14 スリヤ王の軍勢の長ナアマンはその主君に重んじられた有力な人であった。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利を得させられたからである。彼は大勇士であったが、重い皮膚病をわずらっていた。（中略）14 そこでナアマンは下って行って、神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと、その肉がもとにかえって幼な子の肉のようになり、清くなった。

4.32.5　記録

- 日時：2023 年 11 月 2 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）2 名

4.32.6　問いについて

1. どこへ行き、どこで、何をしたか。(1,2a)

   - 1 イエスはそこを去って、郷里に行かれたが、弟子たちも従って行った。2 そして、安息日になったので、会堂で教えはじめられた。

     –「そこ」カペナウムを去って「郷里」ナザレ（ルカ 4:16）へ。

     – 弟子たちも従った。弟子たち一行も一緒をマルコのみ特記。

     –「安息日になったので、街道で教え始められた」(2a) ルカでは「いつものように」置かれている場所が異なる。

   - マタイ：53 イエスはこれらの譬を語り終えてから、そこを立ち去られた。54 そして郷里に行き、会堂で人々を教えられたところ、

     – 種まきのたとえ、たとえを用いて話す理由、「種まく人」のたとえの説明、「毒麦」のたとえ、「からし種」と「パン種」のたとえ、たとえを用いて語る、「毒麦」のたとえの説明、「天の国」のたとえ、天国のことを学んだ学者のあとに続く。

   - ルカ：16 それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。

     – 宣教の最初。ガリラヤで宣教をはじめる最初に、ナザレへ。

   - イエスは、何のために、郷里に行ったのでしょうか。人々は、どのように感じたでしょうか。

2. ルカから（ルカ 4:16-21）

   - 16 それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。17 すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、18 「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、／わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、／囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、／打ちひしがれている者に自由を得させ、19 主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。20 イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。21 そこでイエスは、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめられた。

   - イザヤ 6:1,2 と思われるが、少し表現が異なる。

   - あなたが想像する「主の恵みの年（直訳：主に受け入れられる年　　）」(19) とはどのような年のことですか。

  - 神の国は近い。

- 「会堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。」「『この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した』と説きはじめられた。」促されて、話しはじめている。

3. 町の人々の反応（2b,3a）

- それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これらのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵はどうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、どうしてか。3 この人は大工[*301]ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。

- マタイ：彼らは驚いて言った、「この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで習ってきたのか。55 この人は大工の子ではないか。母はマリヤといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 またその姉妹たちもみな、わたしたちと一緒にいるではないか。こんな数々のことを、いったい、どこで習ってきたのか」。

- ルカ：22 すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て来るめぐみの言葉に感嘆して言った、「この人はヨセフの子ではないか」。

- 郷里の人は何に驚いているか。

- 郷里の人は何を知り、何を知らなかったか。

  - 職業（専門的にできること）、母、父、兄妹たち、姉妹たちについて知っていた。

  - この知恵とこれらのちからあるわざを、どこで習ってきたのか知らない。

- イエスをどのような人だと言っていますか。

  - 大工。マリヤのむすこ、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟、姉妹もいる。マタイでの順番が異なる。

  - マタイは「大工の子」ルカでは「ヨセフの子」と修正している。

  - ルカ 3:23 イエスが宣教をはじめられたのは、年およそ三十歳の時であって、人々の考えによれば、ヨセフの子であった。ヨセフはヘリの子、

4. イエスにつまずいた？(3b)

- こうして彼らはイエスにつまずいた。 [*302]

[*301] : i) a worker in wood, a carpenter, joiner, builder, - a ship's carpenter or builder, ii) any craftsman, or workman - the art of poetry, maker of songs, iii) a planner, contriver, plotter - an author

[*302] (V-IPI-3P): to put a stumbling block or impediment in the way, upon which another may trip and fall, metaph. to offend

- マタイ：57a こうして人々はイエスにつまずいた。ルカにはこの記述なし。
- 郷里の人は、なぜ、簡単には、受け入れられないのでしょう。
- 郷里の人々は、どのようなイエスを日常的に、どれぐらいの期間見て、知っていたのでしょうか。

5. イエスのことば。ルカは？(4)

- 4 イエスは言われた、「預言者は、自分の郷里、親族、家以外では、どこででも敬われないことはない」。
- マタイ：57b しかし、イエスは言われた、「預言者は、自分の郷里や自分の家以外では、どこででも敬われないことはない」。
- ルカ：23 そこで彼らに言われた、「あなたがたは、きっと『医者よ、自分自身をいやせ』ということわざを引いて、カペナウムで行われたと聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言うであろう」。24 それから言われた、「よく言っておく。預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである。25 よく聞いておきなさい。エリヤの時代に、三年六か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大ききんがあった際、そこには多くのやもめがいたのに、26 エリヤはそのうちのだれにもつかわされないで、ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわされた。27 また預言者エリシャの時代に、イスラエルには多くの重い皮膚病にかかった多くの人がいたのに、そのうちのひとりもきよめられないで、ただシリヤのナアマンだけがきよめられた」。28 会堂にいた者たちはこれを聞いて、みな憤りに満ち、29 立ち上がってイエスを町の外へ追い出し、その町が建っている丘のがけまでひっぱって行って、突き落そうとした。30 しかし、イエスは彼らのまん中を通り抜けて、去って行かれた。
  - なぜ、イエスの説教を聞いた人たちは感嘆から憤りへと変わったのでしょう。[*303]
  -「カペナウムで行われてと聞いていたことを」とあり、宣教の最初に持ってくるのは自然ではない。

6. 力あるわざをすることができなかった？(5,6)

- 5 そして、そこでは力あるわざを一つもすることができず、ただ少数の病人に手をおいていやされただけであった。6 そして、彼らの不信仰を驚き怪しまれた。それからイエスは、附近の村々を巡りあるいて教えられた。
- マタイ：58 そして彼らの不信仰のゆえに、そこでは力あるわざを、あまりなさらなかった。

4.32.7 メモ

- 位置づけは、マルコやマタイのものが自然で、宣教の最初に置く、ルカは不自然。メッセージの内容から、そこにおいたのだろう。

[*303] : i) to serve, do service, ii) to heal, cure, restore to health

- 「この人は大工ではないか」からは、多少蔑みが感じられる。マタイでは、大工の子
- 「マリヤのむすこ（　　M　　）」をマタイでは、「母はマリヤといい」とし、ルカでは「ヨセフの子（　　）」としている。「マリヤの子」という表現が、私生児を想起させるから変更しているのだろう。
- 「預言者は、自分の郷里、親族、家以外では、どこででも敬われないことはない」。と、親族、家が入っている。特に、親族を入れると、兄弟などが入ることを避けているように見える。
- 「そこでは力あるわざを一つもすることができず、ただ少数の病人に手をおいていやされただけであった。」を矛盾を含む表現と取ることもできるが、それは、癒やされたという言葉の理解によるであろう。使えた、手当をしたという言葉である。マタイでは「あまりなさらなかった」と表現を弱めている。
- ガリラヤ湖で、弟子たちが突風にあったとき、ガダラ人の地で、悪霊を追い出した時、ヤイロの娘を生き返らせた時、長血を患っている女を癒した時、いずれも、非常に不十分であるが、信仰、信頼関係の交互作用が背景にあるように見える。それは、相互作用で、一方的にはなしえないこと。単純に、全能だからできるということではない。互いに愛することと同じ難しさがある。

4.33　6:7-13 十二人を派遣する

7 また十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれた霊を制する権威を与え、8 また旅のために、つえ一本のほかには何も持たないように、パンも、袋も、帯の中に銭も持たず、9 ただわらじをはくだけで、下着も二枚は着ないように命じられた。10 そして彼らに言われた、「どこへ行っても、家にはいったなら、その土地を去るまでは、そこにとどまっていなさい。11 また、あなたがたを迎えず、あなたがたの話を聞きもしない所があったなら、そこから出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに、足の裏のちりを払い落しなさい」。12 そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、13 多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。

4.33.1　マタイ 10:1, 5-15

10:1 そこで、イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威をお授けになった。（中略）5 イエスはこの十二人をつかわすに当り、彼らに命じて言われた、「異邦人の道に行くな。またサマリヤ人の町にはいるな。6 むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行け。7 行って、『天国が近づいた』と宣べ伝えよ。8 病人をいやし、死人をよみがえらせ、重い皮膚病にかかった人をきよめ、悪霊を追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与えるがよい。9 財布の中に金、銀または銭を入れて行くな。10 旅行のための袋も、二枚の下着も、くつも、つえも持って行くな。働き人がその食物を得るのは当然である。11 どの町、どの村にはいっても、その中でだれがふさわしい人か、たずね出して、立ち去るまではその人のところにとどまっておれ。12 その家にはいったなら、平安を祈ってあげなさい。13 もし平安を受けるにふさわしい家であれば、あなたがたの祈る平安はその家に来るであろう。もしふさわしくなければ、その平安はあなたがたに帰って来るであろう。14 もしあなたがたを

迎えもせず、またあなたがたの言葉を聞きもしない人があれば、その家や町を立ち去る時に、足のちりを払い落しなさい。15 あなたがたによく言っておく。さばきの日には、ソドム、ゴモラの地の方が、その町よりは耐えやすいであろう。

4.33.2 ルカ 9:1-6

1 それからイエスは十二弟子を呼び集めて、彼らにすべての悪霊を制し、病気をいやす力と権威とをお授けになった。2 また神の国を宣べ伝え、かつ病気をなおすためにつかわして 3 言われた、「旅のために何も携えるな。つえも袋もパンも銭も持たず、また下着も二枚は持つな。4 また、どこかの家にはいったら、そこに留まっておれ。そしてそこから出かけることにしなさい。5 だれもあなたがたを迎えるものがいなかったら、その町を出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに、足からちりを払い落しなさい」。6 弟子たちは出て行って、村々を巡り歩き、いたる所で福音を宣べ伝え、また病気をいやした。

マルコによる福音書 6 章 7-13 節福音書対照表

4.33.3 問い

1. 十二弟子は、どのような人たちですか。知っていることをあげてみましょう。
2. イエスは十二弟子にどのような権威を与えていますか。(7, マタイ 10:1, ルカ 9:1)
3. マタイとルカには、さらにどのようなことが書かれていますか。(マタイ 10:5-8, ルカ 9:2)
4. 持ち物について、どのように命じていますか。(8,9)
5. 行った土地でのこと、受け入れない場合について、どのような指示をしていますか。(10,11)
6. 弟子たちは、どのような働きをしますか。(12,13)

4.33.4 参照

- マルコによる福音書におけるこれまでの弟子についての記述
  - 1:16-20 四人の漁師を弟子にする（マタイ 4:18-22、ルカ 5:1-11）
  - 2:13-17 レビを弟子にする（マタイ 9:9-13、ルカ 5:27-32）
  - 2:18-22 断食についての問答（マタイ 9:14-17、ルカ 5:33-39）2:18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。
  - 2:23-28 安息日に麦の穂を摘む（マタイ 12:1-8、ルカ 6:1-5）2:23 ある安息日に、イエスは麦畑の中

をとおって行かれた。そのとき弟子たちが、歩きながら穂をつみはじめた。24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った、「いったい、彼らはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのですか」。

- 3:7-12 湖の岸辺の群衆（ルカ 6:17-19）3:7a それから、イエスは弟子たちと共に海べに退かれたが、ガリラヤからきたおびただしい群衆がついて行った。またユダヤから、8 エルサレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シドンのあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞いて、みもとにきた。9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。

- 3:13-19 十二人を選ぶ（マタイ 10:1-4, ルカ 6:12-16）さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。14 そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、15 また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。16 こうして、この十二人をお立てになった。そしてシモンにペテロという名をつけ、17 またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。18 つぎにアンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、19 それからイスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。イエスが家にはいられると、（マタイ 10:1-4, ルカ 6:12-16）

- 4:10-12 たとえを用いて話す理由（マタイ 13:10-17、ルカ 8:9-10）4:10 イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子と共に、これらの譬について尋ねた。11 そこでイエスは言われた、「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。12 それは／『彼らは見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、悟らず、／悔い改めてゆるされることがない』／ためである」。

- 4:33-34 たとえを用いて語る（マタイ 13:34-35）4:33 イエスはこのような多くの譬で、人々の聞く力にしたがって、御言を語られた。34 譬によらないでは語られなかったが、自分の弟子たちには、ひそかにすべてのことを解き明かされた。

- 4:35-41 突風を静める（マタイ 8:23-27、ルカ 8:22-25）4:35 さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。36 そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。38 ところが、イエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。39 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。40 イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。41 彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。

- 5:21-43 ヤイロの娘とイエスの服に触れる女（マタイ 9:18-26、ルカ 8:40-56）31 そこで弟子たちが言った、「ごらんのとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか」。（中略）36 イエスはその話している言葉を聞き流して、会堂司に言われた、「恐れること

はない。ただ信じなさい」。37 そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。

  - 6:1-6 ナザレで受け入れられない（マタイ 13:53-58、ルカ 4:16-30）1 イエスはそこを去って、郷里に行かれたが、弟子たちも従って行った。

- 油（ : olive oil, a) for fuel for lamps, b) for healing the sick, c) for anointing the head and body at feasts, d) mentioned among articles of commerce）
  - 癒やしのための油
    * マルコ 6:13 多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。
    * ルカ 10:34 近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。
    * ヤコブ 5:14 あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリブ油を注いで祈ってもらうがよい。
  - 香油
    * マルコ 14:3-8 イエスがベタニヤで、重い皮膚病の人シモンの家にいて、食卓についておられたとき、ひとりの女が、非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、それをこわし、香油をイエスの頭に注ぎかけた。4 すると、ある人々が憤って互に言った、「なんのために香**油**をこんなにむだにするのか。5 この香油を三百デナリ以上にでも売って、貧しい人たちに施すことができたのに」。そして女をきびしくとがめた。6 するとイエスは言われた、「するままにさせておきなさい。なぜ女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。7 貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときにはいつでも、よい事をしてやれる。しかし、わたしはあなたがたといつも一緒にいるわけではない。8 この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。（マタイ 26:6-13 参照：ルカ 7:36-50）
    * ヨハネ 11:2 このマリヤは主に香油をぬり、自分の髪の毛で、主の足をふいた女であって、病気であったのは、彼女の兄弟ラザロであった。
    * ヨハネ 12:3-8 その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、香油のかおりが家にいっぱいになった。4 弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、5 「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。6 彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。7 イエスは言われた、「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。8 貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない」。

- 灯り
  - マタイ 25:1-13 3 思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。4 しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。（中略）7 ひとりの女が、高価な香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、イエスに近寄り、食事の席についておられたイエスの頭に香**油**を注ぎかけた。
- メシア
  - 使徒 4:27 まことに、ヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人らやイスラエルの民と一緒になって、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、
- 聖霊
  - 2 コリント 1:21 あなたがたと共にわたしたちを、キリストのうちに堅くささえ、油をそそいで下さったのは、神である。
  - 1 ヨハネ 2:20 しかし、あなたがたは聖なる者に油を注がれているので、あなたがたすべてが、そのことを知っている。
  - 1 ヨハネ 2:27 あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える。それはまことであって、偽りではないから、その油が教えたように、あなたがたは彼のうちにとどまっていなさい。
- その他
  - マタイ 6:17 あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。

- イエスの時代のパレスチナのユダヤ人の服装：基本的に、図などは残っておらず、他の地域のものを参照して、復元したもので、正確ではないかも知れない。（Wikipedia: Biblical clothing, The 1901 Jewish Encyclopedia: Costume）（The Gospel of Mark by William Barclay [Link Mk6:7-11]）

  1. 一番内側の衣はキトーン（ : khee-tone': Mt 5:40, 10:10, Mk 6:9, 14:63, Lk 3:11, 6:29, 9:3, Jn 19:23, Acts 9:39, （keth-o'-neth: tunic, under-garment））、シンドーン、あるいはチューニック（下着）：簡単なもので、長い一枚の布が折り重ねられ、一方が縫い合わせてあった。ほとんど、足にとどくほどの長さで、上の方の隅に両腕を通す穴が切り込まれていた。そのような衣が、頭のはいる穴なしに売られていた。それが新品の証拠で、買手が好きなように、襟を整えることができるためでもあった。襟は男と女で違っていた。女の場合は、赤ん坊に乳をのませるために、襟を低くしなければならなかった。簡単なもので、内側の衣は隅に穴をあけた袋と何ら変わらなかった。もう少し進んだ型のものには、長いピッタリとした袖がついていた。ときには、法衣のように、前を金具で止められるように開いていた。

  2. 外側の衣はヒマティオン（ : him-at'-ee-on: Mat 5:40, 9:16,20, 21, 11:8, 14:36, 17:2, 21:7, 8, 23:5, 24:18, 26:65, 27:31, 35, Mk 2:21, 5:27, 28, 29, 6:56, 9:3, 10:50, 11:7, 8, 13:16, 15:20, 24, Lk

5:36, 6:29, 7:25, 8:27, 44, 19:35, 36, 22:36, 23:34, John 13:4, 12, 19:2, 5, 23, 24, Acts 7:58, 9:39, 12:8, 14:14, 16:22, 18:6, 22:20, 23）と呼ばれた。昼間は上衣として、夜には毛布として用いられた。一枚の布で、左右が二メートルあまり、縦が一メートル半。五十センチずつ両側が折り込まれ、その折り込まれた部分の上部の隅に両腕を入れる穴があけられていた。ゆえに、それは、ほとんど四角形をしていた。通常それぞれ幅七十センチと長さ二メートルあまりの二枚の細長い布が縫い合わされたものでできていて、その縫い目は背中に来るようになっていた。しかし、特別なヒマティオンは、ちょうど、イエスの上衣がそうであるように（ヨハネ 19:23）一枚の布でおられたのだろう。それが主な着物だった。

3. 帯。上述の二枚の衣の上につけた。下着の裾は、働いたり走るために、帯の下に絡めこむことができた。ときには、下着が帯の上まで引き上げられた。そして、帯の上に作られた中空の場所の中に、財布や小さな荷物を入れて、持ち歩くことができた。帯はしばしば二つ折りにしたが、幅は五十センチであった。そして、二重にされた部分が胴巻きのような小袋になった。そして小袋のなかに金を入れて持ち歩いた。

4. 被り物。それは、約一メートル四十センチ四方の木綿か、または麻の一枚の布であった。色は白、青、あるいは黒でも良かった。ときには、色物の絹で作られることも会った。はすに折り、そのして頭に当て、首の後ろ、頬骨、両眼を太陽の熱と強烈な光から守った。それを弾力のある羊毛のたやすくのべる小さな輪で、頭のまわりにとめた。

5. サンダル。サンダルは単なるそこの平らな皮、羊毛、編んだ草であった。その底には、両側に皮ひもがついており、それを通して、紐が通され、サンダルを足に結びつけた。

6. ズタ袋。多分普通のずだ袋であったろう。この袋は、仔山羊の皮でできていた。しばしばその動物はまるのまま皮を剥がれた。そして、その皮は、動物の元の型、四肢、尾、頭などのすべてを保っていた。それの両側に紐が付けられ肩にかけられた。羊飼い、巡礼者、旅行者は少なくとも、一日や二日分のパン、干しぶどう、オリーブ、チーズなどを入れて持ち歩いた。

   – ギリシャ語ペーラは、募金袋を意味した。祭司や信者たちが、これらの募金袋をもって神殿や神のための献金を集めにでかけたことは珍しくなかった。彼らは「村から村へだんだん増えるぶんどり物を持ち歩く敬虔な盗人たち」と記述されていた。ある碑文によると、その中で、シリヤの女神のしもべと自分を呼ぶ人が、その女神のために一回の旅で七十袋を持ち帰ったと言っている。

- 足の塵を落とす

  – ラビの律法は、異邦の、または異端の国のちりは汚れており、人が他の国からパレスチナに入ったときには、汚れた国のちリは、どんなに僅かでもすべて払い落とさなければならなという。それは、ユダヤ人は、異端の国のちりとさえ交わりを持つことができないという、明快で、形式的な拒否である。

- 宣教の結果、その後

  – マルコ 6:30,31 さて、使徒たち（シャリアハ：権威を認められた代理人）はイエスのもとに集まって

きて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。31 するとイエスは彼らに言われた、「さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい」。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。32 そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。

4.33.5 記録

- 日時：2023 年 11 月 9 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）5 名

4.33.6 問いについて

1. 十二弟子について
   - [DQ] 十二弟子、または弟子たちは、どのような存在だったのでしょうか。
     - 弟子たち、おそらく、十二弟子は、つねに、イエスと一緒にいる。イエスに守られ、イエスに教えられ、叱られ、驚き、現場に立ち会っている。イエスと行動を共にし、イエスの「神の国は近い」というメッセージを近くで聞き、目撃した人たちである。
   - クリスチャン：使徒行伝 11:26 彼を見つけたうえ、アンテオケに連れて帰った。ふたりは、まる一年、ともどもに教会で集まりをし、大ぜいの人々を教えた。このアンテオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになった。
2. 与えた権威（7, マタイ 10:1, ルカ 9:1）
   - 7 また十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれた霊を制する権威を与え、
   - マタイやルカと比較してみましょう。
     - マタイ 10:1 そこで、イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威をお授けになった。
     - ルカ 9:1 それからイエスは十二弟子を呼び集めて、彼らにすべての悪霊を制し、病気をいやす力と権威とをお授けになった。
   - [DQ] なぜ、二人ずつ遣わしたのでしょうか。
     - なぜ、マタイやルカにはこの記述がないのでしょうか。
     - [参照] ルカ 10:1 その後、主は別に七十二人を選び、行こうとしておられたすべての町や村へ、ふたりずつ先におつかわしになった。
     - [参照] 二人を派遣する記事は他にもある。

    * マルコ 11:1 さて、彼らがエルサレムに近づき、オリブの山に沿ったベテパゲ、ベタニヤの附近にきた時、イエスはふたりの弟子をつかわして言われた、
    * マルコ 14:13 そこで、イエスはふたりの弟子を使いに出して言われた、「市内に行くと、水がめを持っている男に出会うであろう。その人について行きなさい。
    * ルカ 7:18,19 ヨハネの弟子たちは、これらのことを全部彼に報告した。するとヨハネは弟子の中からふたりの者を呼んで、主のもとに送り、「『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか」と尋ねさせた。
    * ヨハネ 1:35, 36 その翌日、ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていたが、36 イエスが歩いておられるのに目をとめて言った、「見よ、神の小羊」。
- [DQ] （マルコでは、汚れた霊を制する権威だけ述べられていますが）汚れた霊を制する権威を与えるとは、どのような意味があったと思いますか。
  - マタイでは、「あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やす権威」、ルカでは、「悪霊を制し、病気を癒す力と権威」
  - マルコとの違いには、どのような理由があると思いますか。
  - 悪霊（日本聖書協会共同訳巻末付録から）:「汚れた霊」と同じで、新約聖書では精神的、肉体的病気の原因であって、人に過ちや罪を犯させる霊。ベルゼブルは悪霊の支配者。神の霊と対比。

3. マタイとルカ（マタイ 10:5-8, ルカ 9:2）

- マタイ 10:5-8 5 イエスはこの十二人をつかわすに当り、彼らに命じて言われた、「異邦人の道に行くな。またサマリヤ人の町にはいるな。6 むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行け。7 行って、『天国が近づいた』と宣べ伝えよ。8 病人をいやし、死人をよみがえらせ、重い皮膚病にかかった人をきよめ、悪霊を追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与えるがよい。
  -「イスラエルの家の失われた羊」のところ限定
    *「イスラエルの家の失われた羊」とは？
      · マタイでは、十二が繰り返されている。イスラエルを意識していることは、確かだろう。
  - [DQ] なぜ、異邦人の道や、サマリヤ人の町にはいるなと言っているのでしょうか。
  - 宣べ伝えるメッセージは、『天国が近づいた』
  - 活動は、「病人をいやし、死人をよみがえらせ、重い皮膚病にかかった人をきよめ、悪霊を追い出せ。」
    * [DQ] これらは、何を意味しているのでしょうか。

    - イエスがしたことと同じことをすることが想定されている。しかし、結果報告はない。弟子たちが、驚くべき技をした記録は、福音書にはない。
  - ただで受けたのだから、ただで与えなさい。
    - なにを教えているのでしょうか。宣教活動や、慈善活動、医療活動は、報酬をもらっては行けないのでしょうか。
- ルカ 9:2 2 また神の国を宣べ伝え、かつ病気をなおすためにつかわして
  - ルカでは、病気をなおすことが目的に入っている。

4. 持ち物について（8,9）
   - 8 また旅のために、つえ一本のほかには何も持たないように、パンも、袋も、帯の中に銭も持たず、9 ただわらじ[*304]（ここと使徒 12:8 のみ）をはくだけで、下着[*305]も二枚は着ないように命じられた。
   - マタイ 10:9,10 9 財布の中に金、銀または銭を入れて行くな。10 旅行のための袋も、二枚の下着も、くつも、つえも持って行くな。働き人がその食物を得るのは当然である。
   - ルカ 9:3 言われた、「旅のために何も携えるな。つえも袋もパンも銭も持たず、また下着も二枚は持つな。
   - [DQ] ひとつひとつ、どのような意味があるのでしょうか。
   - [DQ] 細かいところがいろいろと異なるようですが、何を伝えているのでしょうか。
5. 行った土地で、受け入れない場合について（10,11）
   - 10 そして彼らに言われた、「どこへ行っても、家にはいったなら、その土地を去るまでは、そこにとどまっていなさい。11 また、あなたがたを迎えず、あなたがたの話を聞きもしない所があったなら、そこから出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに、足の裏のちりを払い落しなさい」。
   - マタイ 10:11-15 11 どの町、どの村にはいっても、その中でだれがふさわしい人か、たずね出して、立ち去るまではその人のところにとどまっておれ。12 その家にはいったなら、平安を祈ってあげなさい。13 もし平安を受けるにふさわしい家であれば、あなたがたの祈る平安はその家に来るであろう。もしふさわしくなければ、その平安はあなたがたに帰って来るであろう。14 もしあなたがたを迎えもせず、またあなたがたの言葉を聞きもしない人があれば、その家や町を立ち去る時に、足のちりを払い落しなさい。15 あなたがたによく言っておく。さばきの日には、ソドム、ゴモラの地の方が、その町よりは耐えやすいであろう。

---

*304 : a sandal, a sole made of wood or leather, covering the bottom of the foot and bound on with thongs

*305 : a tunic, an undergarment, usually worn next to the skin, a garment, a vestment

- ルカ 9:4,5 4 また、どこかの家にはいったら、そこに留まっておれ。そしてそこから出かけることにしなさい。5 だれもあなたがたを迎えるものがいなかったら、その町を出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに、足からちりを払い落しなさい」。
- 最初に迎え入れてくれた家の好意を無にしてはならない。基本。
- 親切なもてなしは、東方においては聖なる義務であった。旅行者が、村に入ったとき、もてなしをもとめることは彼の義務ではなく、それを提供するのが村の義務だった。（中略）ラビの律法は、異邦の、また異端の国のちりは汚れており、人が他の国からパレスチナに入ったときには、汚れた国のちりは、どんなにわずかでもすべて払い落とさなければならないと言う。それは、ユダヤ人は、異端の国のちりとさえ交わりを持つことができないという、明快で、形式的な拒否である。それは、あたかもイエスが「もし彼らが聞くことを拒んだら、あなたたちのできる唯一のことは、厳格なユダヤ人が異邦人の家に対してするように彼らを取り扱うことである」と言われたようなものである。（Wikipedia: Biblical clothing, The 1901 Jewish Encyclopedia: Costume）

6. 弟子たちの働き（12,13）

- 12 そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、13 多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。
  - . And they cast out many devils, and anointed with oil many that were sick, and healed them.
- ルカ 9:6 弟子たちは出て行って、村々を巡り歩き、いたる所で福音を宣べ伝え、また病気をいやした。
  - . And they departed, and went through the towns, preaching the gospel, and healing every where.
- マタイは結果報告はない。
- 「悔改め」のみが書かれている。イエスについて語ったろうから、それは、すべて、神の国は近いということだったろう。それを語り、そのあとで、悔い改めを促したのだろう。
  - 悔い改めとは、どのような悔い改めだろうか。
- [DQ] 弟子たちにとって、派遣はどのような意味を持ち、どにょうに受け止められたのだろうか。
- [DQ] 派遣は、成功したのだろうか。継続して、なんども行われたのだろうか。

4.33.7 メモ

- 二人ずつの記述が、マタイ、ルカ（72 人派遣時には記述がある）にないのは、固定した組であることを想定し、様々な詮索をすることを拒否したのではないか。たとえば、イスカリオテのユダとのペア、兄弟ペ

アなど。

- 持ち物も、使徒としての働きと、このときのものが統合していった可能性がある。基本的には、神様に頼る、神様に委ねることが背景にあるのだろう。
- 二枚の下着：一般的に、イエスと行動していたときには、野宿も多かったろう。漁師の働きなどを考えると、遠くに旅するときは別として、外套は、携えてはいなかっただろう。すると、どうしても、寒さを防ぐため、下着を二枚着ることは起こる。実際、二枚着ていた人もいたのではないかと思う。ここでは、家に泊まることが想定され、その場合には、不要となることが、前提とされているようである。
- マタイでは、結果報告がない。将来的な、使徒としての働きまでを意識しているのでは。
- オリーブ油を塗ることは一般的な治療である。それが、奇跡を起こすような力にだんだん拡大していったのだろう。オリーブ油を塗るなど、まさに、癒やす（　　：i) to serve, do service, ii) to heal, cure, restore to health）というより、治療をする、ケアをするに近い感じがする。仕えるは、精神的には、より、適切でもある。油は持っていったのだろうか。そこは、疑問が残る。
- 派遣は、弟子たちにどのような意味があったかは、よくわからない。イエスを慕ってついてきていたことは確かだと思うが、自分から宣教に出ていくとは、考えていなかった人たちも多かったのではないだろうか。このあと、6:30,31 に簡単な報告があるが、疲れていたことだろう。先行きに関しても、すでに、カペナウムでは会堂で教える機会を失い、ナザレでも、追い出されているように見える。弟子たちが、この時点で、歓迎されたとは、考えにくい。

4.34　6:14-29 洗礼者ヨハネ、殺される

14 さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。ある人々は「バプテスマのヨハネが、死
人の中からよみがえってきたのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」と言い、15 他の
人々は「彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者のような預言者だ」と言った。16 ところが、
ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」と言った。17 このヘロデ
は、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤをめとったが、そのことで、人をつかわし、ヨハネを捕えて獄につな
いだ。18 それは、ヨハネがヘロデに、「兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。19
そこで、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。20 それはヘロデが、ヨ
ハネは正しくて聖なる人であることを知って、彼を恐れ、彼に保護を加え、またその教を聞いて非常に悩
みながらも、なお喜んで聞いていたからである。21 ところが、よい機会がきた。ヘロデは自分の誕生日の
祝に、高官や将校やガリラヤの重立った人たちを招いて宴会を催したが、22 そこへ、このヘロデヤの娘
がはいってきて舞をまい、ヘロデをはじめ列座の人たちを喜ばせた。そこで王はこの少女に「ほしいもの
はなんでも言いなさい。あなたにあげるから」と言い、23 さらに「ほしければ、この国の半分でもあげよ
う」と誓って言った。24 そこで少女は座をはずして、母に「何をお願いしましょうか」と尋ねると、母は
「バプテスマのヨハネの首を」と答えた。25 するとすぐ、少女は急いで王のところに行って願った、「今す
ぐに、バプテスマのヨハネの首を盆にのせて、それをいただきとうございます」。26 王は非常に困ったが、

いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、少女の願いを退けることを好まなかった。27 そこで、王はすぐに衛兵をつかわし、ヨハネの首を持って来るように命じた。衛兵は出て行き、獄中でヨハネの首を切り、28 盆にのせて持ってきて少女に与え、少女はそれを母にわたした。29 ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、その死体を引き取りにきて、墓に納めた。

4.34.1 マタイ 14:1-12

14:1 そのころ、領主ヘロデはイエスのうわさを聞いて、2 家来に言った、「あれはバプテスマのヨハネだ。死人の中からよみがえったのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」。3 というのは、ヘロデは先に、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕えて縛り、獄に入れていた。4 すなわち、ヨハネはヘロデに、「その女をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。5 そこでヘロデはヨハネを殺そうと思ったが、群衆を恐れた。彼らがヨハネを預言者と認めていたからである。6 さてヘロデの誕生日の祝に、ヘロデヤの娘がその席上で舞をまい、ヘロデを喜ばせたので、7 彼女の願うものは、なんでも与えようと、彼は誓って約束までした。8 すると彼女は母にそそのかされて、「バプテスマのヨハネの首を盆に載せて、ここに持ってきていただきとうございます」と言った。9 王は困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、それを与えるように命じ、10 人をつかわして、獄中でヨハネの首を切らせた。11 その首は盆に載せて運ばれ、少女にわたされ、少女はそれを母のところに持って行った。12 それから、ヨハネの弟子たちがきて、死体を引き取って葬った。そして、イエスのところに行って報告した。

4.34.2 ルカ 9:7-9

7 さて、領主ヘロデはいろいろな出来事を耳にして、あわて惑っていた。それは、ある人たちは、ヨハネが死人の中からよみがえったと言い、8 またある人たちは、エリヤが現れたと言い、またほかの人たちは、昔の預言者のひとりが復活したのだと言っていたからである。9 そこでヘロデが言った、「ヨハネはわたしがすでに首を切ったのだが、こうしてうわさされているこの人は、いったい、だれなのだろう」。そしてイエスに会ってみようと思っていた。

マルコによる福音書 6 章 14-29 節福音書対照表

4.34.3 問い

1. 登場人物について確認しましょう。
2. イエスのことを人々は、そしてヘロデはどのように考えていましたか。(14,15,16)
3. ヘロデはどのような理由でヨハネを捕らえますか。(17,18)
4. ヘロデと、ヘロデヤにとって、ヨハネはどのような存在だったのでしょう。(19,20)
5. ヘロデは、なぜ、ヨハネを殺す決断をしたのでしょう。(21-29)

6. イエスや弟子たちにとって、ヨハネの処刑は、どのような意味を持っていたでしょうか。

4.34.4 参照

- バプテスマのヨハネ：参照、聖書箇所
- ヘロデの系図：Herod's Family Tree
  - ヘロデ・アンティパス：ガリラヤとペレアの国王
  - アレタ王の娘と結婚するが、返したため、責められ、ローマ軍に助けられる。
  - ピリポの領地をアグリッパに与え王とした。それに怒り、ヘロデヤがローマに嘆願に行くが、アグリッパも連絡をし、アンティパスはガリアに配流。
- ヨセフス「ユダヤ古代史」の記述：参照：ヨセフス（**Flavius Josephus**）
  - XVIII-5-1: 1. About this time Aretas [the king of Arabia Petres] and Herod had a quarrel on the account following: Herod the tetrarch had, married the daughter of Aretas, and had lived with her a great while; but when he was once at Rome, he lodged with Herod, who was his brother indeed, but not by the same mother; for this Herod was the son of the high priest Sireoh's daughter. However, he fell in love with Herodias, this last Herod's wife, who was the daughter of Aristobulus their brother, and the sister of Agrippa the Great. This man ventured to talk to her about a marriage between them; which address, when she admitted, an agreement was made for her to change her habitation, and come to him as soon as he should return from Rome: one article of this marriage also was this, that he should divorce Aretas's daughter. So Antipas, when he had made this agreement, sailed to Rome; but when he had done there the business he went about, and was returned again, his wife having discovered the agreement he had made with Herodias, and having learned it before he had notice of her knowledge of the whole design, she desired him to send her to Macherus, which is a place in the borders of the dominions of Aretas and Herod, without informing him of any of her intentions. Accordingly Herod sent her thither, as thinking his wife had not perceived any thing; now she had sent a good while before to Macherus, which was subject to her father and so all things necessary for her journey were made ready for her by the general of Aretas's army; and by that means she soon came into Arabia, under the conduct of the several generals, who carried her from one to another successively; and she soon came to her father, and told him of Herod's intentions. So Aretas made this the first occasion of his enmity between him and Herod, who had also some quarrel with him about their limits at the country of Gamalitis. So they raised armies on both sides, and prepared for war, and sent their generals to fight instead of themselves; and when they had joined battle, all Herod's army was destroyed by the treachery of some fugitives, who,

though they were of the tetrarchy of Philip, joined with Aretas's army.. So Herod wrote about these affairs to Tiberius, who being very angry at the attempt made by Aretas, wrote to Vitellius to make war upon him, and either to take him alive, and bring him to him in bonds, or to kill him, and send him his head. This was the charge that Tiberius gave to the president of Syria. 1. この頃、アレタス［アラビア・ペトレスの王］とヘロデは、次のような理由でいさかいを起こした：領主（四君主：テトラーク）ヘロデはアレタスの娘と結婚し、長らく彼女と暮らしていたが、ローマに行ったとき、ヘロデのもとに身を寄せた。このヘロデは大祭司シレオの娘の子である。しかし、彼はこのヘロデの妻ヘロディアスと恋に落ちた。ヘロディアスは彼らの兄弟アリストブルスの娘で、アグリッパ王の妹であった。領主ヘロデは彼女に結婚の話を持ちかけ、彼女がそれを受け入れ、契約を結んだ。それには、彼がローマから戻り次第、彼女が、彼のもとに来ることと、アグリッパが妻と離婚することが書かれていた。ところが、アンティパスは、この契約を結び、ローマでの用事を済ませて再び戻ってきたときには、彼の妻は、彼が、ヘロディアスと交わした契約を発見していたため、アレタスとヘロデの領地の境界にある場所であるマケロスへ送り届けるように頼んだ。そこでヘロデは、自分の妻が何も察していないと思い、彼女をそこへ送りとどけた。さて、旅に必要なものはすべて、アレタスの軍の将軍が彼女のために用意した。アレタスはこれをきっかけとして、ヘロデと敵対した。実は、アレタスはヘロデとガマリテス国での境界線についても争いがあった。そこで、両軍は挙兵し、戦争の準備を整え、自分たちの代わりに将兵を戦わせた。両軍が戦いに参加したとき、ヘロデの軍は、フィリポの四王国の者でありながらアレタスの軍に加わった逃亡者たちの裏切りによって、すべて壊滅状態となった。そこでヘロデはこれらのことをティベリウスに書き送った。ティベリウスはアレタスの企てに非常に腹を立て、シリアの大統領のヴィテリウスに、アレタスを生け捕りにして拘束し、あるいは殺してその首を送るようにと、書き送った。

– XVIII-5-2: 2. Now some of the Jews thought that the destruction of Herod's army came from God, and that very justly, as a punishment of what he did against John, that was called the Baptist: for Herod slew him, who was a good man, and commanded the Jews to exercise virtue, both as to righteousness towards one another, and piety towards God, and so to come to baptism; for that the washing [with water] would be acceptable to him, if they made use of it, not in order to the putting away [or the remission] of some sins [only], but for the purification of the body; supposing still that the soul was thoroughly purified beforehand by righteousness. Now when [many] others came in crowds about him, for they were very greatly moved [or pleased] by hearing his words, Herod, who feared lest the great influence John had over the people might put it into his power and inclination to raise a rebellion, [for they seemed ready to do any thing he should advise,] thought it best, by putting him to death, to prevent any mischief he might cause, and not bring himself into difficulties, by sparing a man who might make him repent of it when it would be too late. Accordingly he was sent a prisoner, out of Herod's suspicious temper, to Macherus, the castle I before mentioned, and was there put to death. Now the Jews had an opinion that the destruction of this army was sent as a punishment upon Herod, and a mark of God's displeasure to him. 2. さて、ユダヤ人の中には、ヘロデの軍隊が滅ぼされたのは、彼が洗礼者と呼ばれたヨハネに対して行ったことの罰として、神からもたらされたものであり、それは非常に

正当なものであると考える者もいた：というのは，ヘロデは善人であったヨハネを殺害し宝である。ヨハネは、ユダヤ人に対し，互いに対する義と神に対する敬虔の両面で徳を積むように命じ，洗礼を受けるように命じていた。さて，人々は、彼の言葉を聞いて非常に感動した（あるいは喜んだ）ので，多くの人々が群れをなして彼の周りに集まってきたので，ヘロデは，ヨハネが民衆に及ぼす影響力の大きさが，反乱を起こす力になると感じ、恐れた。そこでヨハネは、ヘロデの疑心暗鬼から、先に述べたマケロス城に送られ、しばらく、牢に入れられていたが、そこで死刑に処せられた。このような次第で、ユダヤ人たちは、この軍隊の敗北はヘロデに対する罰であり、ヘロデに対する神の不興の印であるという意見を持っていた。

– ヘロデヤとの結婚のことなど
– XVIII-5-4: 4. Herod the Great had two daughters by Mariamne, the [grand] daughter of Hyrcanus; the one was Salampsio, who was married to Phasaelus, her first cousin, who was himself the son of Phasaelus, Herod's brother, her father making the match; the other was Cypros, who was herself married also to her first cousin Antipater, the son of Salome, Herod's sister. Phasaelus had five children by Salampsio; Antipater, Herod, and Alexander, and two daughters, Alexandra and Cypros; which last Agrippa, the son of Aristobulus, married; and Timius of Cyprus married Alexandra; he was a man of note, but had by her no children. Agrippa had by Cypros two sons and three daughters, which daughters were named Bernice, Mariamne, and Drusius; but the names of the sons were Agrippa and Drusus, of which Drusus died before he came to the years of puberty; but their father, Agrippa, was brought up with his other brethren, Herod and Aristobulus, for these were also the sons of the son of Herod the Great by Bernice; but Bernice was the daughter of Costobarus and of Salome, who was Herod's sister. Aristobulus left these infants when he was slain by his father, together with his brother Alexander, as we have already related. But when they were arrived at years of puberty, this Herod, the brother of Agrippa, married Mariamne, the daughter of Olympias, who was the daughter of Herod the king, and of Joseph, the son of Joseph, who was brother to Herod the king, and had by her a son, Aristobulus; but Aristobulus, the third brother of Agrippa, married Jotape, the daughter of Sampsigeramus, king of Emesa; they had a daughter who was deaf, whose name also was Jotape; and these hitherto were the children of the male line. But Herodias, their sister, was married to Herod [Philip], the son of Herod the Great, who was born of Mariamne, the daughter of Simon the high priest, who had a daughter, Salome; after whose birth Herodias took upon her to confound the laws of our country, and divorced herself from her husband while he was alive, and was married to Herod [Antipas], her husband's brother by the father's side, he was tetrarch of Galilee; but her daughter Salome was married to Philip, the son of Herod, and tetrarch of Trachonitis; and as he died childless, Aristobulus, the son of Herod, the brother of Agrippa, married her; they had three sons, Herod, Agrippa, and Aristobulus; and this was the posterity of Phasaelus and Salampsio. But the daughter of Antipater by Cypros was Cypros, whom Alexas Selcias, the son of Alexas, married; they had a daughter, Cypros; but Herod and Alexander, who, as we told you, were the brothers of Antipater, died childless. As to Alexander, the son of

Herod the king, who was slain by his father, he had two sons, Alexander and Tigranes, by the daughter of Archelaus, king of Cappadocia. Tigranes, who was king of Armenia, was accused at Rome, and died childless; Alexander had a son of the same name with his brother Tigranes, and was sent to take possession of the kingdom of Armenia by Nero; he had a son, Alexander, who married Jotape, 17 the daughter of Antiochus, the king of Commagena; Vespasian made him king of an island in Cilicia. But these descendants of Alexander, soon after their birth, deserted the Jewish religion, and went over to that of the Greeks. But for the rest of the daughters of Herod the king, it happened that they died childless. And as these descendants of Herod, whom we have enumerated, were in being at the same time that Agrippa the Great took the kingdom, and I have now given an account of them, it now remains that I relate the several hard fortunes which befell Agrippa, and how he got clear of them, and was advanced to the greatest height of dignity and power. 4. ヘロデ大王には、二人、マリアムネという名前の娘がいた。一人はサランプシオで、彼女のいとこであるファサエルスと結婚、ファサエルスはヘロデの兄ファサエルスの子であった。ファサエルスはサランプシオとの間に、アンティパテル、ヘロデ、アレクサンダー、アレクサンドラ、シプロスの 5 人の子をもうけたが、アリストブルスの子アグリッパが結婚し、キプロスのティミウスがアレクサンドラと結婚した。アグリッパはキプロスとの間に二人の息子と三人の娘をもうけたが、娘たちはベルニス、マリアムネ、ドルシウスと名づけられ、息子たちの名はアグリッパとドルススであった；しかし、その父アグリッパは、ヘロデとアリストブルスという他の兄弟たちと共に育てられ、これらもまた、ヘロデ大王の子ベルニケの子であった。アリストブルスは、すでに述べたように、弟のアレクサンダーとともに父に殺されたとき、これらの幼子を残した。しかし、アグリッパの弟ヘロデは、彼らが思春期を迎えたとき、ヘロデ王の娘であるオリンピアスの娘マリアムネと、ヘロデ王の兄弟であるヨセフの子ヨセフの娘マリアムネと結婚し、彼女との間に子アリストブルスをもうけた；しかし、アグリッパの三番目の兄アリストブルスは、エメサの王サンプシゲラムスの娘ヨタペと結婚し、ふたりの間には耳の聞こえない娘がいたが、その名もヨタペであった。しかし、彼らの妹ヘロディアスは、ヘロデ大王の子ヘロデ［フィリポ］と結婚した。ヘロデ［フィリポ］は、大祭司シモンの娘マリアムネとの間に生まれ、娘サロメをもうけた。ヘロデ［フィリポ］が生まれた後、ヘロディアスはわが国の掟を混乱させるために、夫が生きている間に離縁し、夫の父方の兄弟ヘロデ［アンティパス］と結婚した；しかしその娘サロメは、ヘロデの子でトラコニテスの四君子であったフィリポと結婚し、彼は子を産まずに死んだので、ヘロデの子でアグリッパの兄弟であったアリストブルスが彼女と結婚し、ヘロデ、アグリッパ、アリストブルスの三人の子をもうけた。アルメニアの王であったティグラネスはローマで告発され、子なくして死んだ。アレクサンダーには兄ティグラネスと同名の息子がおり、ネロによってアルメニア王国を占領するために派遣された。アレクサンダーには息子アレクサンダーがおり、彼はコンマゲナの王アンティオコスの娘ヨタペと結婚した。ベスパシアヌスは彼をキリキアの島の王とした。しかし、アレクサンダーの子孫たちは、生まれて間もなく、ユダヤ人の宗教を捨て、ギリシア人の宗教に帰依した。しかし、ヘロデ王の残りの娘たちには子供がなく、死んだ。我々が列挙したヘロデの子孫たちは、アグリッパ大王が王権を握ったのと同時期に存在し、私は今、彼らについて説明したので、あとは、アグリッパに降りかかった幾つかの苦難の運命と、彼がいかにしてそれを乗り越え、威厳と権力の最大の高みにまで昇りつめたかについて述べるだ

けである。

- ヨセフスとの差異
  - マルコではピリポ、ヨセフスではヘロデ大王とマリアンヌ 2 世との間のヘロデ
  - マルコでは、ヨハネが殺されたのは、ガリラヤ湖のほとりのテベリアであるように思えるが、ヨセフォスでは、死海の東にあるマルケスの要塞
  - マルコでは、ヘロディアの憎しみによって殺されたことになっているが、ヨセフォスでは、ヨハネが結婚の問題で、ヘロデを非難したことは、少しも述べていない。むしろ、ヨハネの名声が高まり、彼が民衆の支持を得て、反乱を起こすことをヘロデが恐れたためとしている。
- 律法違反
  - レビ 18:16 あなたの兄弟の妻を犯してはならない。それはあなたの兄弟をはずかしめることだからである。
  - レビ 20:21 人がもし、その兄弟の妻を取るならば、これは汚らわしいことである。彼はその兄弟をはずかしめたのであるから、彼らは子なき者となるであろう。

4.34.5 記録

- 日時：2023 年 11 月 16 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.34.6 問いについて

1. 登場人物について確認しましょう。
   - [DQ] 特に、イエスや、イエスの弟子たちとの関係も分かれば列挙しましょう。
   - バプテスマのヨハネ：マルコ 1:1-11（ヨハネとイエス）, 2:18-22（断食、参照：マタイ 9:14）, このあと 8:27-30（ペトロの告白）, 11:27-33（権威）
   - ルカ 3:1,2 皇帝テベリオ在位（AD14-AD37）の第十五年（AD27-29)、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主（BC4-AD39)、その兄弟ピリポがイツリヤ・テラコニテ地方の領主（BC4-AD34)、ルサニヤがアビレネの領主、2 アンナスとカヤパとが大祭司であったとき、神の言が荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。
   - ヘロデ（Herod Antipas II）ヘロデ大王とマルタケの子：ルカ 13:31-35 31 ちょうどその時、あるパリサイ人たちが、イエスに近寄ってきて言った、「ここから出て行きなさい。ヘロデがあなたを殺そ

うとしています」。32 そこで彼らに言われた、「あのきつねのところへ行ってこう言え、『見よ、わたしはきょうもあすも悪霊を追い出し、また、病気をいやし、そして三日目にわざを終えるであろう。33 しかし、きょうもあすも、またその次の日も、わたしは進んで行かねばならない。預言者がエルサレム以外の地で死ぬことは、あり得ないからである』。ルカ 23:5-12 7 そしてヘロデの支配下のものであることを確かめたので、ちょうどこのころ、ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そちらへイエスを送りとどけた。8 ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。

- ヘロデヤ（Herodias）：ヘロデ大王とマリアンヌ I の子のアリストブルスの子。ヘロデ大王とマリアンヌ II の子ヘロデ・ピリポ I と結婚、その子はサロメ（ヘロデ大王とクレオパトラの子、ヘロデ・ピリポ II（ルカ 3:1）と結婚）
- エリヤ、昔の預言者

2. イエスのことを人々は、そしてヘロデはどのように考えていましたか。（14,15,16）

- 14 さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。ある人々は「バプテスマのヨハネが、死人の中からよみがえってきたのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」と言い、15 他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者のような預言者だ」と言った。16 ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」と言った。
- マタイ 14:1 そのころ、領主ヘロデはイエスのうわさを聞いて、2 家来に言った、「あれはバプテスマのヨハネだ。死人の中からよみがえったのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」。
- ルカ 9:7b-9 それは、ある人たちは、ヨハネが死人の中からよみがえったと言い、8 またある人たちは、エリヤが現れたと言い、またほかの人たちは、昔の預言者のひとりが復活したのだと言っていたからである。9 そこでヘロデが言った、「ヨハネはわたしがすでに首を切ったのだが、こうしてうわさされているこの人は、いったい、だれなのだろう」。そしてイエスに会ってみようと思っていた。
- 人々の説

  1.「バプテスマのヨハネが、死人の中からよみがえってきたのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」：それだけ、ヨハネへの期待が大きかった。

    - [DQ] パプてスマのヨハネとはどのような人ですか。
    - [DQ] なぜ、バプテスマのヨハネがよみがえったと思ったのでしょうか。
      * 人々がそう考えた理由と、ヘロデがそう考えた理由は異なるかもしれない。そこで、まずは、人々の考え。
    - マタイでの第一声は、同じ。

  2.「彼はエリヤだ」メシアの先ぶれ：過越の祭りではエリヤの席がそなえられている。

3.「昔の預言者のような預言者だ」300 年も現れていない：このように主は言われる。

- [DQ] 弟子たちは、どう思っていたのでしょうか。
  - 4:41 では弟子たちもイエスはだれかを疑問としていた。
- [DQ] イエスは自分をどう認識していたのでしょうか。
  - 1;9-11 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。10 そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下って来るのを、ごらんになった。11 すると天から声があった、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。
- [DQ] なぜ王は、イエスがヨハネの生まれ変わりだと思ったのでしょうか。
- [DQ] ルカを見ると、ヘロデはイエスに会ってみたいと思ってたとありますが、それはなぜでしょうか。
  - ルカ 23:6-12 ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人かと尋ね、7 そしてヘロデの支配下のものであることを確かめたので、ちょうどこのころ、ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そちらへイエスを送りとどけた。8 ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。9 それで、いろいろと質問を試みたが、イエスは何もお答えにならなかった。10 祭司長たちと律法学者たちとは立って、激しい語調でイエスを訴えた。11 またヘロデはその兵卒どもと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえした。12 ヘロデとピラトとは以前は互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。
- オリゲネスは、イエスとヨハネが互いに似ていたとの伝説を述べている。A. Aplummer: An Exegetical Commentary on the Gospel accoring to St. Matthew, Eerdansm p.211
- イエスの母マリアと、ヨハネの母エリザベトとの関係
  - ルカ 1:36 あなたの親族エリサベツも老年ながら子を宿しています。不妊の女といわれていたのに、はや六か月になっています。
  - ルカ 1:39,40 そのころ、マリヤは立って、大急ぎで山里へむかいユダの町に行き、40 ザカリヤの家にはいってエリサベツにあいさつした。
- ヨハネ 10:41 多くの人々がイエスのところにきて、互に言った、「ヨハネはなんのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」。

3. ヘロデはどのような理由でヨハネを捕らえますか。（17,18）

- 17 このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤをめとったが、そのことで、人をつかわし、ヨハネを捕えて獄につないだ。18 それは、ヨハネがヘロデに、「兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。
- マタイ 14:3 というのは、ヘロデは先に、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕えて縛り、獄に入れていた。4 すなわち、ヨハネはヘロデに、「その女をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。
- ルカ 3:19,20 ところで領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロデヤのことで、また自分がしたあらゆる悪事について、ヨハネから非難されていたので、20 彼を獄に閉じ込めて、いろいろな悪事の上に、もう一つこの悪事を重ねた。

4. ヘロデと、ヘロデヤにとって、ヨハネはどのような存在だったのでしょう。（19,20）

- 19 そこで、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。20 それはヘロデが、ヨハネは正しくて聖なる人であることを知って、彼を恐れ、彼に保護を加え、またその教を聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで聞いていたからである。
- マタイ 14:5 そこでヘロデはヨハネを殺そうと思ったが、群衆を恐れた。彼らがヨハネを預言者と認めていたからである。
- [DQ] ヘロデとヘロデヤでは何が違いますか。それは、なぜでしょう。
- [DQ] ヘロデは何に戸惑っていた（口語：あわて惑っていた、新改訳：ひどく当惑していた）のでしょうか。
- ヘロデヤ：列王記上 23:9 のイザベル

5. ヘロデは、なぜ、ヨハネを殺す決断をしたのでしょう。（21-29）

- 21 ところが、よい機会がきた。ヘロデは自分の誕生日の祝に、高官や将校やガリラヤの重立った人たちを招いて宴会を催したが、22 そこへ、このヘロデヤの娘がはいってきて舞をまい、ヘロデをはじめ列座の人たちを喜ばせた。そこで王はこの少女に「ほしいものはなんでも言いなさい。あなたにあげるから」と言い、23 さらに「ほしければ、この国の半分でもあげよう」と誓って言った。24 そこで少女は座をはずして、母に「何をお願いしましょうか」と尋ねると、母は「バプテスマのヨハネの首を」と答えた。25 するとすぐ、少女は急いで王のところに行って願った、「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆にのせて、それをいただきとうございます」。26 王は非常に困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、少女の願いを退けることを好まなかった。27 そこで、王はすぐに衛兵をつかわし、ヨハネの首を持って来るように命じた。衛兵は出て行き、獄中でヨハネの首を切り、28 盆にのせて持ってきて少女に与え、少女はそれを母にわたした。29 ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、その死体を引き取りにきて、墓に納めた。
- マタイ 14:6 さてヘロデの誕生日の祝に、ヘロデヤの娘がその席上で舞をまい、ヘロデを喜ばせたの

で、7 彼女の願うものは、なんでも与えようと、彼は誓って約束までした。8 すると彼女は母にそそのかされて、「バプテスマのヨハネの首を盆に載せて、ここに持ってきていただきとうございます」と言った。9 王は困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、それを与えるように命じ、10 人をつかわして、獄中でヨハネの首を切らせた。11 その首は盆に載せて運ばれ、少女にわたされ、少女はそれを母のところに持って行った。12 それから、ヨハネの弟子たちがきて、死体を引き取って葬った。そして、イエスのところに行って報告した。

- マルケスの城の土牢：死海の東岸を見下ろした尾根の上
- [DQ] ヘロデは殺すことを望んでいたでしょうか。
- レビ 5:45？　誤った請願（誓は複数、なんども誓った）
- なぜ、王は心を痛めたのでしょうか。
- ヘロデ党
  - マルコ 3:6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。
  - マルコ 12:13 さて、人々はパリサイ人やヘロデ党の者を数人、イエスのもとにつかわして、その言葉じりを捕えようとした。
  - マタイ 22:16 そして、彼らの弟子を、ヘロデ党の者たちと共に、イエスのもとにつかわして言わせた、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたであって、真理に基いて神の道を教え、また、人に分け隔てをしないで、だれをもはばかられないことを知っています。
- ヘロデのパンだね
  - マルコ 8:15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。（マルコ 8:14-21, マタイ 16:5-12 では、パリサイ人のパンだねと、サドカイ人のパンだね）
  - [DQ] ヘロデのパンだねとは何なのでしょうか。（宿題）
- ルカ 8:3 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。
- ルカ 18:31 ちょうどその時、あるパリサイ人たちが、イエスに近寄ってきて言った、「ここから出て行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています」。
- ルカ 23:15 ヘロデもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。

6. イエスや弟子たちにとって、このことは、どのような意味を持っていたでしょうか。

- 参照：マタイ 14:13　イエスはこのことを聞くと、舟に乗ってそこを去り、自分ひとりで寂しい所へ行かれた。しかし、群衆はそれと聞いて、町々から徒歩であとを追ってきた。
- 参照：マタイ 4:12 さて、イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。

4.34.7　メモ

- ヘロデが、バプテスマのヨハネを殺した理由が、ヘロデヤのことだと、マルコ、マタイには、書かれているが、ここに描かれているように、殺すのは、一般民衆にわかりやすいかもしれないが、違和感もある。それもあり、教養人ルカは、それを、書いていないように思う。そして捕まえた箇所で「ルカ 3:19,20 ところで領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロデヤのことで、また自分がしたあらゆる悪事について、ヨハネから非難されていたので、20 彼を獄に閉じ込めて、いろいろな悪事の上に、もう一つこの悪事を重ねた。」と、それまでマルコなどに書かれていることも踏まえつつ、「あらゆる悪事」という表現をしているのかと思った。もしかすると、ルカは、ヨセフスも読んでいたかもしれない。それと引き換え、ペテロは、民衆の中に流布されていた、わかりやすい理由や、エピソードを語ったのかもしれない。ルカにある、ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナからの情報かもしれない。
- イエスや、弟子たちへの影響は、よくは分からないが、ヨハネの弟子から、イエスの弟子になった人たちもいたことを考えると、深刻であったろう。ヘロデがヨハネの関係もある程度知っていたとすると、希望ももっていたかもしれない。それは、打ち砕かれることになる。このとき、すでに、イエスの環境はあまり良くなかったことも、あわせて考えるべきである。
- 準備をしていて、「マルコ 8:15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、『パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ』と言われた。」が気になった。パリサイ人のパンだねは、律法主義のようなものとして、ある程度想像がつくが、ヘロデのパンだねとは、何だろう、どう表現したら良いだろうかと考えた。その箇所を学ぶ時までの宿題だと自らに言い聞かせたが、現時点での考えとしては、この箇所で表現されていることから考えると「自分の罪、悪、変えるべきことを認識しながら、方向転換（メタノイア：悔い改め）をしない、一歩を踏み出さない」ということかなと思う。ひとは、一歩を踏み出しても、むろん、神の前に正しく生きることはできない。しかし、一歩を踏み出すことが大切であることは、確かで、それなしには、始まらない。まさに、弟子たちのメッセージ「悔い改めよ」、これは、イエスのメッセージの一部でもある。ヘロデは、それをしなかった。たしかに、一歩を踏み出すことは、特に、社会的地位を持っているものにとっては難しいのだろう。しかし、それをするかどうかに、天地の差がある。と、現時点では、考える。

6:30-44 五千人に食べ物を与える

30 さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。31 するとイエスは彼らに言われた、「さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい」。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。32 そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。33 ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づい

て、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。35 ところが、はや時もおそくなったので、弟子たちはイエスのもとにきて言った、「ここは寂しい所でもあり、もう時もおそくなりました。36 みんなを解散させ、めいめいで何か食べる物を買いに、まわりの部落や村々へ行かせてください」。37 イエスは答えて言われた、「あなたがたの手で食物をやりなさい」。弟子たちは言った、「わたしたちが二百デナリものパンを買ってきて、みんなに食べさせるのですか」。38 するとイエスは言われた。「パンは幾つあるか。見てきなさい」。彼らは確かめてきて、「五つあります。それに魚が二ひき」と言った。39 そこでイエスは、みんなを組々に分けて、青草の上にすわらせるように命じられた。40 人々は、あるいは百人ずつ、あるいは五十人ずつ、列をつくってすわった。41 それから、イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさき、弟子たちにわたして配らせ、また、二ひきの魚もみんなにお分けになった。42 みんなの者は食べて満腹した。43 そこで、パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。44 パンを食べた者は男五千人であった。

4.34.8 マタイ 14:13-21

13 イエスはこのことを聞くと、舟に乗ってそこを去り、自分ひとりで寂しい所へ行かれた。しかし、群衆はそれと聞いて、町々から徒歩であとを追ってきた。14 イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆をごらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの病人たちをおいやしになった。15 夕方になったので、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「ここは寂しい所でもあり、もう時もおそくなりました。群衆を解散させ、めいめいで食物を買いに、村々へ行かせてください」。16 するとイエスは言われた、「彼らが出かけて行くには及ばない。あなたがたの手で食物をやりなさい」。17 弟子たちは言った、「わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っていません」。18 イエスは言われた、「それをここに持ってきなさい」。19 そして群衆に命じて、草の上にすわらせ、五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさいて弟子たちに渡された。弟子たちはそれを群衆に与えた。20 みんなの者は食べて満腹した。パンくずの残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。21 食べた者は、女と子供とを除いて、おおよそ五千人であった。

4.34.9 ルカ 9:10-17

10 使徒たちは帰ってきて、自分たちのしたことをすべてイエスに話した。それからイエスは彼らを連れて、ベツサイダという町へひそかに退かれた。11 ところが群衆がそれと知って、ついてきたので、これを迎えて神の国のことを語り聞かせ、また治療を要する人たちをいやされた。12 それから日が傾きかけたので、十二弟子がイエスのもとにきて言った、「群衆を解散して、まわりの村々や部落へ行って宿を取り、食物を手にいれるようにさせてください。わたしたちはこんな寂しい所にきているのですから」。13 しかしイエスは言われた、「あなたがたの手で食物をやりなさい」。彼らは言った、「わたしたちにはパン五つと魚二ひきしかありません、この大ぜいの人のために食物を買いに行くかしなければ」。14 というのは、男が五千人ばかりもいたからである。しかしイエスは弟子たちに言われた、「人々をおおよそ五十人ずつ

の組にして、すわらせなさい」。15 彼らはそのとおりにして、みんなをすわらせた。16 イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福してさき、弟子たちにわたして群衆に配らせた。17 みんなの者は食べて満腹した。そして、その余りくずを集めたら、十二かごあった。

4.34.10 ヨハネ 6:1-14

1 そののち、イエスはガリラヤの海、すなわち、テベリヤ湖の向こう岸へ渡られた。2 すると、大ぜいの群衆がイエスについてきた。病人たちになさっていたしるしを見たからである。3 イエスは山に登って、弟子たちと一緒にそこで座につかれた。4 時に、ユダヤ人の祭である過越が間近になっていた。5 イエスは目をあげ、大ぜいの群衆が自分の方に集まって来るのを見て、ピリポに言われた、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。6 これはピリポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとすることを、よくご承知であった。7 すると、ピリポはイエスに答えた、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りますまい」。8 弟子のひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った、9 「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」。10 イエスは「人々をすわらせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった。11 そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。12 人々がじゅうぶんに食べたのち、イエスは弟子たちに言われた、「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」。13 そこで彼らが集めると、五つの大麦のパンを食べて残ったパンくずは、十二のかごにいっぱいになった。14 人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。

マルコによる福音書 6 章 30-44 節福音書対照表

4.35 6:30-34 五千人に食べ物を与える（1）

30 さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。31 するとイエスは彼らに言われた、「さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい」。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。32 そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。33 ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。

4.35.1 マタイ 14:13-14

13 イエスはこのことを聞くと、舟に乗ってそこを去り、自分ひとりで寂しい所へ行かれた。しかし、群衆はそれと聞いて、町々から徒歩であとを追ってきた。14 イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆をごらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの病人たちをおいやしになった。

4.35.2　ルカ 9:10-11

10 使徒たちは帰ってきて、自分たちのしたことをすべてイエスに話した。それからイエスは彼らを連れて、ベツサイダという町へひそかに退かれた。11 ところが群衆がそれと知って、ついてきたので、これを迎えて神の国のことを語り聞かせ、また治療を要する人たちをいやされた。

4.35.3　ヨハネ 6:1-3

1 そののち、イエスはガリラヤの海、すなわち、テベリヤ湖の向こう岸へ渡られた。2 すると、大ぜいの群衆がイエスについてきた。病人たちになさっていたしるしを見たからである。3 イエスは山に登って、弟子たちと一緒にそこで座につかれた。

マルコによる福音書 6 章 30-34 節福音書対照表

4.35.4　問い

1. 弟子たちは、どのように、送り出されましたか。(6:7-13)
2. 弟子たちが戻ってきたときの状態はどのように描かれていますか。(30-32)
3. このときの、弟子たちや、イエスはどのような状態だったのでしょうか。
4. 群衆はどうしますか。(33)
5. イエスは大勢の群衆をみてなぜ深く憐れまれたのでしょうか。(34)
6. イエスはどうしますか。イエスが、たいせつにしていたことは何なのでしょうか。(34 および並行箇所)

4.35.5　参照

- 地図：イエスの時代のガリラヤ（107 Galilee in the time of Jesus）
- 地図：ガリラヤ湖周辺（108 The Ministry of Jesus Around the Sea of Galilee）
- Google Map：ティベリアス湖
- 　　：to be moved as to one's bowels, hence to be moved with compassion, have compassion (for the bowels were thought to be the seat of love and pity)
  - マタイ 9:36 また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた。

  - マタイ 14:14 イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆をごらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの病人たちをおいやしになった。
  - マタイ 15:32 イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。しかし、彼らを空腹のままで帰らせたくはない。恐らく途中で弱り切ってしまうであろう」。
  - マタイ 18:27 僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。
  - マタイ 20:34 イエスは深くあわれんで、彼らの目にさわられた。すると彼らは、たちまち見えるようになり、イエスに従って行った。
  - マルコ 1:41 イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。
  - マルコ 6:34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。
  - マルコ 8:2 「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。
  - マルコ 9:22 霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。
  - ルカ 7:13 主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。
  - ルカ 10:33 ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、
  - ルカ 15:20 そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。
- 飼う者のない羊
  - 民数記 27:15-17 モーセは主に言った、16 「すべての肉なるものの命の神、主よ、どうぞ、この会衆の上にひとりの人を立て、17 彼らの前に出入りし、彼らを導き出し、彼らを導き入れる者とし、主の会衆を牧者のない羊のようにしないでください」。
  - 列王記上 22:17 彼は言った、「わたしはイスラエルが皆、牧者のない羊のように、山に散っているのを見ました。すると主は『これらの者は飼主がいない。彼らをそれぞれ安らかに、その家に帰らせよ』と言われました」。
  - 歴代誌下 18:16 彼は言った、「わたしはイスラエルが皆牧者のない羊のように山に散っているのを見ました。すると主は『これらの者は主人をもっていない。彼らをそれぞれ安らかに、その家に帰らせ

よ』と言われました」。

- エゼキエル 34:5 彼らは牧者がないために散り、野のもろもろの獣のえじきになる。

4.35.6 記録

- 日時：2023 年 11 月 23 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）4 名

4.35.7 問いについて

1. 弟子たちは、どのように、送り出されましたか。(6:7-13)
   - 7 また十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれた霊を制する権威を与え、8 また旅のために、つえ一本のほかには何も持たないように、パンも、袋も、帯の中に銭も持たず、9 ただわらじをはくだけで、下着も二枚は着ないように命じられた。10 そして彼らに言われた、「どこへ行っても、家にはいったなら、その土地を去るまでは、そこにとどまっていなさい。11 また、あなたがたを迎えず、あなたがたの話を聞きもしない所があったなら、そこから出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに、足の裏のちりを払い落しなさい」。12 そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、13 多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。
   - [DQ] なにをしてきたのでしょうか。
     - 6:12 そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、13 多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。
     - ルカ 9:6 弟子たちは出て行って、村々を巡り歩き、いたる所で福音を宣べ伝え、また病気をいやした。
   - [DQ] どのように報告していますか。
     - 30 さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。
     - したことや、教えたことは、報告しているが、どうなったかは、書かれていない。
     -「使徒たち[*306]」はマルコではここだけ。ヘブル語のシャリアハに対応か。
     - [対比] ルカ 10:1-24 17 七十二人が喜んで帰ってきて言った、「主よ、あなたの名によっていたしますと、悪霊までがわたしたちに服従します」。18 彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のよ

[*306] : a delegate, messenger, one sent forth with orders a) specifically applied to the twelve apostles of Christ, b) in a broader sense applied to other eminent Christian teachers (of Barnabas, of Timothy and Silvanus) (sent)

うに天から落ちるのを見た。19 わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう。20 しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしるされていることを喜びなさい」。

    * このような華々しさは、感じられない。

2. 弟子たちが戻ってきたときの状態はどのように描かれていますか。(30-32)

- 30 さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。31 するとイエスは彼らに言われた、「さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい」。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。32 そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。
- [DQ] イエスはどんなことを勧めていますか。
  - 人を避けて寂しいところへ行って、しばらく休むがよい。
  - [Q] イエス自身はどうだったのでしょうか。一緒に行きますか。
- ルカ、ヨハネでは、いつ、イエスは、どこからどこへ移動したと書かれていますか。
  - ルカ 9:10 使徒たちは帰ってきて、自分たちのしたことをすべてイエスに話した。それからイエスは彼らを連れて、ベツサイダという町へひそかに退かれた。
  - ベツサイダは、ピリポの所領で、ヘロデアンティパスではない。
  - ヨハネ 6:1 そののち、イエスはガリラヤの海、すなわち、テベリヤ湖の向こう岸へ渡られた。
  - ただし、マルコでは、五千人の給食のあとに、ベッサイダに移動の記事が続く。
    * マルコ 6:45-46 それからすぐ、イエスは自分で群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダへ先におやりになった。46 そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた。
  - 場所は、重要な要素でもあり、検討が必要。

3. このときの、弟子たちや、イエスはどのような状態だったのでしょうか。

- イエスはなぜ人里離れたところに退かれたのでしょうか。
- 疲れていたのではないだろうか。
- イエスについて：マタイ 14:13 イエスはこのことを聞くと、舟に乗ってそこを去り、自分ひとりで寂しい所へ行かれた。しかし、群衆はそれと聞いて、町々から徒歩であとを追ってきた。
  - マタイでは、イエスのことが書かれている。イエスにとっても、重大な時だったかもしれない。
  - マタイ 4:12 さて、イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。
  - マルコでは、そこまで明確ではない。

4. 群衆はどうしますか。（33）

- 33 ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。
- [DQ] 群衆は何を求めてイエスの後を追いかけたのでしょうか。
  - かなり必死になっているようにも見える。
  - なにを求めているのかも、わかっていないのかもしれない。
- [DQ] なぜ、派遣の前とあとの間に、バプテスマのヨハネの記事が挟まれているのだろうか。
  - バプテスマのヨハネは捕えられていたが、殺されたことも知り、望みは、イエス以外にないと思っていたかもしれない。

5. イエスは大勢の群衆をみてなぜ深く憐れまれたのでしょうか。（34）

- 34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで（　　：to be moved as to one's bowels, hence to be moved with compassion, have compassion (for the bowels were thought to be the seat of love and pity)）、いろいろと教えはじめられた。
- [DQ] 飼う者のない羊のような有様とは、どのような状態を表現しているのでしょうか。
  -（参照）民数記 27:15-17、列王記上 22:17、歴代誌下 18:16、エゼキエル 34:5
  - 行き先がわからない。
  - 危険にたいして無防備
- [DQ] イエスは、群衆の何を、深く憐れまれたのでしょうか。
- このことばは、聖書では、共観福音書にのみ、12 回使われている、特別な言葉。イエス、または、神の痛みを表していることばでもある。
  - マルコ 1:41、8:2、9:22 私どもを、ルカ 10:33、15:20

6. イエスはどうしますか。イエスが、たいせつにしていたことは何なのでしょうか。（34 および並行箇所）

- 34b いろいろと教えはじめられた。
- マタイ 14:14b そのうちの病人たちをおいやしになった。
- ルカ 9:11 11 ところが群衆がそれと知って、ついてきたので、これを迎えて神の国のことを語り聞かせ、また治療を要する人たちをいやされた。

- ヨハネ 6:2,3 すると、大ぜいの群衆がイエスについてきた。病人たちになさっていたしるしを見たからである。3 イエスは山に登って、弟子たちと一緒にそこで座につかれた。
- Be available, stay vulnerable.
- [DQ] 弟子たち、群衆の状況も、踏まえて考えてみましょう。
  - イエスも、焦燥し、苦しいこともあったのではないだろうか。しかし、弟子たちに配慮し、群衆の状態に心を痛めを深く憐れむ。それを、ペテロはみてとったのではないだろうか。ペテロの中でも、イエスについての認識が、変化しつつあるのかもしれない。

4.35.8 メモ

- なぜ、このような時点で、弟子たちを派遣したかは、不明であるが、実際の、人々の反応を、身をもって、経験することは、「使徒」にとって、大切だったのだろう。
- バプテスマのヨハネが、殺されたのが、どの時点であるかは、判然としないが、この直前に挿入されていることからも、知ったのは、このあたりだとするのが、順当だろう。マタイが、書いているように、イエス自身にとっても、情勢判断も含めて、重要なことだったろうが、ここでは、イエスの、弟子たちへの配慮について、書かれている。これこそが、ペテロが経験したことなのだろう。イエスの配慮。そして、そんな中での、イエスの行動。そして、その状況を、深く憐れんでと伝えている。イエスのこころが、はっきりとわかるわけではないが、伝わってくるものがあったのではないだろうか。
- 弟子たちは、自分のことで、いっぱいいっぱいだったのだろうが、ペテロは、イエスの配慮を語っている。必ずしも、うまくはいかなかったかもしれないが。バプテスマのヨハネの記事も、イエスとは何者かとの問いとして始めている。8 章で、ペトロの告白に至る間の記事と考えると、ペトロの中では、すでに、イエスは、バプテスマのヨハネが死者の中から生き返ったのだとは、考えていなかったろう。その意味で、ペテロの目は、すでに、イエスが、「生ける神の子キリストか」という一点に絞られているように思う。バプテスマのヨハネの死は、バプテスマのヨハネだった弟子もいることを考えると、小さくはない。しかし、そうであっても、ここでのイエスや、弟子たちの行動に、大きく影響しているとは、ペテロも思っていなかったろう。他方、人々には、十分、影響しているのかもしれない。そのあたりも、興味深い。
- 舟をどのようにまわしたのか。イエスはずっと、弟子たちと一緒にいたのか、一人で祈ったのかなど、判然としない部分が多い。おそらく、ペトロにとって、それは、重要ではなかったのだろう。
- 皆にとって特別なときだったのかも知れない。そのときに、積極的な活動をする活力はどこから湧いてくるのだろう。

4.36 6:35-44 五千人に食べ物を与える（２）

35 ところが、はや時もおそくなったので、弟子たちはイエスのもとにきて言った、「ここは寂しい所でもあり、もう時もおそくなりました。36 みんなを解散させ、めいめいで何か食べる物を買いに、まわりの部落や村々へ行かせてください」。37 イエスは答えて言われた、「あなたがたの手で食物をやりなさい」。弟

子たちは言った、「わたしたちが二百デナリものパンを買ってきて、みんなに食べさせるのですか」。38 するとイエスは言われた。「パンは幾つあるか。見てきなさい」。彼らは確かめてきて、「五つあります。それに魚が二ひき」と言った。39 そこでイエスは、みんなを組々に分けて、青草の上にすわらせるように命じられた。40 人々は、あるいは百人ずつ、あるいは五十人ずつ、列をつくってすわった。41 それから、イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさき、弟子たちにわたして配らせ、また、二ひきの魚もみんなにお分けになった。42 みんなの者は食べて満腹した。43 そこで、パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。44 パンを食べた者は男五千人であった。

4.36.1 マタイ 14:15-21

15 夕方になったので、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「ここは寂しい所でもあり、もう時もおそくなりました。群衆を解散させ、めいめいで食物を買いに、村々へ行かせてください」。16 するとイエスは言われた、「彼らが出かけて行くには及ばない。あなたがたの手で食物をやりなさい」。17 弟子たちは言った、「わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っていません」。18 イエスは言われた、「それをここに持ってきなさい」。19 そして群衆に命じて、草の上にすわらせ、五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさいて弟子たちに渡された。弟子たちはそれを群衆に与えた。20 みんなの者は食べて満腹した。パンくずの残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。21 食べた者は、女と子供とを除いて、おおよそ五千人であった。

4.36.2 ルカ 9:12-17

12 それから日が傾きかけたので、十二弟子がイエスのもとにきて言った、「群衆を解散して、まわりの村々や部落へ行って宿を取り、食物を手にいれるようにさせてください。わたしたちはこんな寂しい所にきているのですから」。13 しかしイエスは言われた、「あなたがたの手で食物をやりなさい」。彼らは言った、「わたしたちにはパン五つと魚二ひきしかありません、この大ぜいの人のために食物を買いに行くかしなければ」。14 というのは、男が五千人ばかりもいたからである。しかしイエスは弟子たちに言われた、「人々をおおよそ五十人ずつの組にして、すわらせなさい」。15 彼らはそのとおりにして、みんなをすわらせた。16 イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福してさき、弟子たちにわたして群衆に配らせた。17 みんなの者は食べて満腹した。そして、その余りくずを集めたら、十二かごあった。

4.36.3 ヨハネ 6:4-14

4 時に、ユダヤ人の祭である過越が間近になっていた。5 イエスは目をあげ、大ぜいの群衆が自分の方に集まって来るのを見て、ピリポに言われた、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。6 これはピリポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとすることを、よくご承知であった。7 すると、ピリポはイエスに答えた、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りますまい」。8 弟子のひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った、9 「ここに、大麦

のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」。10 イエスは「人々をすわらせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった。11 そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。12 人々がじゅうぶんに食べたのち、イエスは弟子たちに言われた、「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」。13 そこで彼らが集めると、五つの大麦のパンを食べて残ったパンくずは、十二のかごにいっぱいになった。14 人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。

マルコによる福音書 6 章 35-44 節福音書対照表

4.36.4 問い

1. 背景を確認しましょう。弟子たちは、イエスにどんな提案をしますか。(30-36)
2. イエスは、どのように応答し、行動し、そして、何が起こったか、順にまとめてみましょう。(37-44)
3. なぜ、イエスは、弟子たちに彼らが食べ物を与えるように、そして、持っているたべものを調べるように命じたのでしょうか。(37,38)
4. ヨハネによる福音書からさらにどのようなことがわかりますか。
5. いったい何が起こったのだと思いますか。(39-43)
6. あなたは、何を学びましたか。

4.36.5 参照

- 解散：おそらくイエスの仕事
  - マルコ 6:36 みんなを解散させ、めいめいで何か食べる物を買いに、まわりの部落や村々へ行かせてください」。(マタイ 14:15、ルカ 9:12)
  - マルコ 6:45 それからすぐ、イエスは自分で群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダへ先におやりになった。(マタイ 14:22,23)
  - マルコ 8 人々の数はおよそ四千人であった。それからイエスは彼らを解散させ、(マタイ 15:39)
- ピリポとアンデレ
  - マルコ 1:16 さて、イエスはガリラヤの海べを歩いて行かれ、シモンとシモンの兄弟アンデレとが、海で網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。(マタイ 4:18)

- マルコ 1:29 それから会堂を出るとすぐ、ヤコブとヨハネとを連れて、シモンとアンデレとの家にはいって行かれた。
- マルコ 3:18 つぎにアンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、（マタイ 10:3、ルカ 6:14）
- マルコ 13:1-13 イエスが宮から出て行かれるとき、弟子のひとりが言った、「先生、ごらんなさい。なんという見事な石、なんという立派な建物でしょう」。2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。4 「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。
- ヨハネ 1:35-51 40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとりは、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。41 彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。42 そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。イエスは彼に目をとめて言われた、「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」。43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会って言われた、「わたしに従ってきなさい」。44 ピリポは、アンデレとペテロとの町ベツサイダの人であった。45 このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。46 ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、なんのよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。
- ヨハネ 12:20-27 祭で礼拝するために上ってきた人々のうちに、数人のギリシヤ人がいた。21 彼らはガリラヤのベツサイダ出であるピリポのところにきて、「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。22 ピリポはアンデレのところに行ってそのことを話し、アンデレとピリポは、イエスのもとに行って伝えた。
- ヨハネ 14:1-14 6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。7 もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」。8 ピリポはイエスに言った、「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下されば、わたしたちは満足します」。9 イエスは彼に言われた、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。

- デナリ：ローマの銀貨（重さ 3.9g）で、1 ドラクメ（ギリシャの銀貨で、重さ 4.3g）と等価、一日の賃金にあたる。

種類	重さ	直径	材質
１円玉	1.0g	20.0mm	アルミニウム１００％
５円玉	3.75g	22.0mm	銅６０〜７０％・亜鉛４０〜３０％
１０円玉	4.5g	23.5mm	銅９５％・亜鉛４〜３％・スズ１〜２％
５０円玉	4.0g	21.0mm	銅７５％・ニッケル２５％
１００円玉	4.8g	22.6mm	銅７５％・ニッケル２５％
５００円玉	7.0g	26.5mm	銅７２％・亜鉛２０％・ニッケル８％

- かご：
  - ：a basket, wicker basket（籐のかご）
    - ＊ マルコ 6:43、8:19、マタイ 14:20、16:9、ルカ 9:17、ヨハネ 6:13
  - ：a reed basket, (a plaited basket, a lunch basket, hamper)（よしなどであんだかご）
    - ＊ マルコ 8:8、8:20、マタイ 15:37、16:10

4.36.6　記録

- 日時：2023 年 11 月 30 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）4 名

4.36.7　問いについて

1. 背景を確認しましょう。弟子たちは、イエスにどんな提案をしますか。(30-34, 35,36)
   - 復習：30 さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。31 するとイエスは彼らに言われた、「さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい」。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。32 そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。33 ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。
   - 35 ところが、はや時もおそくなったので、弟子たちはイエスのもとにきて言った、「ここは寂しい所でもあり、もう時もおそくなりました。36 みんなを解散させ、めいめいで何か食べる物を買いに、まわりの部落や村々へ行かせてください」。

- 復習
  - バプテスマのヨハネの処刑の記事に引き続き、弟子たちが、宣教から帰ってきた時の様子が書かれている。
  - 人々の出入りが多く、食事をする暇もないほどだったので、舟で寂しいところに行った。
  - 人々は、「方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。」
  - イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。
- 今回の箇所
  - 時もおそくなっていた。
  - 弟子たちは、「ここは寂しい所でもあり、もう時もおそくなりました。みんなを解散させ、めいめいで何か食べる物を買いに、まわりの部落や村々へ行かせてください」と提案。
- [Q] なぜ、イエスは弟子たちの提案を受け入れなかったのでしょうか。
  -「34 飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。」にかかっている。

2. イエスは、どのように応答し、行動し、また、何が起こったか、順にまとめてみましょう。(37-44)

- イエス：あなたがたの手で食物をやりなさい（37a）
- 弟子たち：わたしたちが二百デナリものパンを買ってきて、みんなに食べさせるのですか（37b）
- イエス：パンは幾つあるか。見てきなさい（38a）
- 弟子たち：五つあります。それに魚が二ひき（38b）
  - ルカでは「わたしたちはここに、パン五つと魚にひきしか持っていません。」「しか」と言っている。
- イエス：みんなを組々に分けて、青草の上にすわらせるように命じられた。(39)
  -「青草」証言者目線。ヨハネ：過越の祭りが近づいていた
- 人々：あるいは百人ずつ、あるいは五十人ずつ、列をつくってすわった。(40)
  -「列をつくって（　　：i) a plot of ground, a garden bed, ii) Hebrew idiom i.e. they reclined in ranks or divisions, so that several ranks formed, as it were separate plots)」（畑のウネのように）証言者目線。

- イエス：五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさき、弟子たちにわたして配らせ、また、二ひきの魚もみんなにお分けになった。（41）
- みんなの者：みんなの者は食べて満腹した。（42）
- 不明（弟子たち）：パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。
  - かご：籐のかご、旅行などで食物を入れて持って行ったと言われる。
- パンを食べた者は男五千人であった。
- [DQ] 不思議に思うこと。気になること。ちょっと考えたいことはありますか。
  - イエスが祈り分けて配らせ、その後、満腹した、その間がわからない。
  - すくなくとも、イエスの手のうちで、倍、四倍、八倍と増えていったようには書かれていない。
  - 単に、精神的満足を得られたわけでもなさそうである。十二のかごがいっぱいになっている。
  - この、十二のかごは、何で、このあとどうしたのだろうか。

3. なぜ、イエスは、弟子たちに彼らが食べ物を与えるように、そして、持っているたべものを調べるように命じたのでしょうか。（37,38）
   - 37 イエスは答えて言われた、「あなたがたの手で食物をやりなさい」。弟子たちは言った、「わたしたちが二百デナリものパンを買ってきて、みんなに食べさせるのですか」。38 するとイエスは言われた。「パンは幾つあるか。見てきなさい」。彼らは確かめてきて、「五つあります。それに魚が二ひき」と言った。
   - [DQ] なぜ、あなた方の手で、食物をやりなさいと言ったのだろうか。
     - 奉仕することが仕事だから。自助（めいめいで何か食べる物を買いに）ではなく。
     - 人々が飼うもののない羊のように弱り果てていたから。
     - 人々の責任にして、放置することが良いこととは思えないから。
   - [DQ] なぜ、持っているものを調べさせたのでしょうか。
     - 自分たちは、食事ができるが、食事ができない人がいることを知らせ、自分のものを差し出すことを学ぶため。
     - 今、手元にあるもので、神様が何をしてくださるかを知るため。
     - [Q] 弟子たちは、自分たちの食事をどうしようと思っていたのでしょうか。自分たちも、それぞれが買いに行かないといけなかったのでしょうか。
     - [Q] どこを調べにいけと言ったのだろうか。自分たちは持っているだろうといったのだろうか。

    * What are available now? 神は、なにを与えてくださっているか。何がないかではなく。

- [DQ] だれが、パンや、魚を持っていたのだろうか。
  - これは、弟子たちのパンと魚だったのだろうか。

4. ヨハネによる福音書からさらにどのようなことがわかりますか。（ヨハネ 6:1-3, 4-14）
   1. この時の状況を、ヨハネは 4-5 節にどのように描いていますか。（参照：ヨハネ 6:1-14）
      - 復習
        - 1 テベリヤ湖（1C 後半の呼び方）の向こう岸へ渡られた。
        - 2 大ぜいの群衆がイエスについてきた。病人たちになさっていたしるしを見たからである。
        - 3 イエスは山に登って、弟子たちと一緒にそこで座につかれた。
      - 今回の箇所
        - 4 時に、ユダヤ人の祭である過越が間近になっていた。
        - 5 イエスは目をあげ、大ぜいの群衆が自分の方に集まって来るのを見て、
   2. イエスはフィリポにどのように声をかけますか。
      - 5b ピリポに言われた、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。6 これはピリポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとすることを、よくご承知であった。
      - ヨハネ 1:44 ピリポは、アンデレとペテロとの町ベツサイダの人であった。
   3. フィリポは何と答えますか。
      - 7 すると、ピリポはイエスに答えた、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りますまい」。
        - 1 デナリを 10000 円とすると、8000 人いれば、ひとり 250 円。
        - 1 デナリで、パンを何個買えたかは不明だが、8 個から 20 個。これは、大麦のパンという安物なので、20 個とすると、4000 個買える。一人、半分程度。
   4. このとき、誰がどのような情報をもたらしますか。
      - 8 弟子のひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った、9 「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」。
      - パンは大麦のパン、おそらく平たい皿のような形、魚（　：a relish to other food (as if cooked sauce), i.e. (specially), fish (presumably salted and dried as a condiment):—fish.）は、料理した魚。

5. この少年は、とてもたくさんパンと魚をもっていたのでしょうか。
    - 弟子たちが、食べ物を探していたので、差し出したのでは。
6. イエスはどうしますか。
    - 10 イエスは「人々をすわらせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった。11 そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。
7. どうなったと書かれていますか。
    - 12 人々がじゅうぶんに食べたのち、
8. その他
    1. 五つのパンと二匹の魚の出来事がどのように扱われているか 6 章の中からリストしてみましょう。
    2. 人々は、最初イエスのもとに来たとき（6 章のはじめ）何を求めていたのでしょうか。
    3. 五つのパンと二匹の魚で五千人が満腹した後、人々は、何を求めていますか。
    4. イエスは、何を人々に求めていますか。

5. いったい何が起こったのだと思いますか。（39-43）
    - 39 そこでイエスは、みんなを組々に分けて、青草の上にすわらせるように命じられた。40 人々は、あるいは百人ずつ、あるいは五十人ずつ、列をつくってすわった。41 それから、イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさき、弟子たちにわたして配らせ、また、二ひきの魚もみんなにお分けになった。42 みんなの者は食べて満腹した。43 そこで、パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。
    - この記事を通して福音書記者はそれぞれ何を伝えようとしているのでしょうか。
6. あなたは、何を学びましたか。
    - 物理的にパンや魚が増えたということは、主張していない。
    - 12 のカゴなどを記述から、精神的に満ち足りたという解釈は、合理性がない。
    - ヨハネの記述を見ると、少年が関与している。おとなには、損失回避（プロスペクト理論）のバイアスが強い。
    - スケールも重要かもしれない。50 人程度なら、分け合うことができるかも。

4.36.8 メモ

- なにが正解かはわからない。基本的には、不明だとすべきなのだろう。しかし、いくつかのことはわかる。物理的に、二倍、四倍となったなどという表現はない。非科学的な作り話だとか、神だからなんでもできるというのは、どちらも、単純化バイアスのもとにあるように見える。また、精神的に、みなが、満たされて、肉体的に満たされたと考えるのも、十二カゴのパンクズの説明にはつながらない。実際には、なにが、あったかは定かではないが、やはり、イエスはこれを、神の国が近いとのしるしとしてなし、それを、ペテロも語ったことは確かだろう。それは、ヨハネも引き継いでいる。
- ヨハネには、ベッサイダ（漁の家）出身の、ピリポとアンデレが登場する。土地に詳しかったのだろう。
- 弟子たちのグループは、ここから見ると、12 弟子と、女性たちだったのではないかと思われる。そして、その人たちが食べる分は、食事をする暇もない（31）との記述から、あったろうとおもわれる。イエスが、「パンがいくつあるかみてきなさい」と言われた時、なにを意図したかは、はっきりとはわからないが、神様があたえてくださっているものすべてを確認する意味があったように感じる。あなた方の食べる分を出しなさいとは、言っていないように見える。
- しかし、それに応じたのは、少年だったのだろう。だれも、みんなに分け与えたいとは考えていなかったろう。少年も、それがどうなるかは、正直理解はできていなかったろう。弟子たちもむろん同様。
- 五十人、百人のグループわけは、意味があったように見える。全世界のひとと分け合うことはできなくても、ある程度の眼に見えるグループの中では分かち合うことができる。これが、こたえだとは、言えない。しかし、可能性はある要因思う。
  - 出エジプト 18:21 また、すべての民のうちから、有能な人で、神を恐れ、誠実で不義の利を憎む人を選び、それを民の上に立てて、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長としなさい。
  - 組み：　　：a drinking party, entertainment, of the party itself, the guests, rows of guests
  - ダンバーの法則[*307]なども背景にあるのだろうか。

[*307] ChatGPT: 「ダンバーの法則（Dunbar's number）」という社会心理学的な理論。

ダンバーの法則は、イギリスの人類学者であるロビン・ダンバー（Robin Dunbar）によって提唱されました。この法則は、人間の社会的な関係の維持や管理において、個人が保持できる関係の限界を示唆しています。

一般的に、ダンバーの法則は「150」とされています。すなわち、人間が同時に維持できる社会的な関係の数は、約 150 人までとされるということです。これは、人々がお互いを認識し、関係を構築するために必要な認知的なリソースや情報処理能力の限界を反映しています。

ダンバーの法則は、さまざまな社会集団や組織において観察されてきました。例えば、先史時代の部族や中世の村落、現代の軍隊や企業組織など、さまざまな社会的な集団で 150 人前後がグループの規模として見られる傾向があります。

ただし、ダンバーの法則は必ずしも厳密な法則ではなく、個人や文化によって異なる場合もあります。また、現代のテクノロジーやソーシャルメディアの普及によって、人々がより多くの関係を維持できる可能性も生じています。

したがって、ダンバーの法則は社会的な関係の限界を示唆する興味深い理論ですが、全ての場合に当てはまる普遍的な法則としてではなく、一つの指標として考えるべきです。

- では、なぜ、福音書記者は、他の書き方をしなかったのだろう。福音書記者も十分理解できていなかったのかもしれない。
  - マルコ 8:13-21 そして、イエスは彼らをあとに残し、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。14 弟子たちはパンを持って来るのを忘れていたので、舟の中にはパン一つしか持ち合わせがなかった。15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。16 弟子たちは、これを自分たちがパンを持っていないためであろうと、互に論じ合った。17 イエスはそれと知って、彼らに言われた、「なぜ、パンがないからだと論じ合っているのか。まだわからないのか、悟らないのか。あなたがたの心は鈍くなっているのか。18 目があっても見えないのか。耳があっても聞えないのか。また思い出さないのか。19 五つのパンをさいて五千人に分けたとき、拾い集めたパンくずは、幾つのかご（　　）になったか」。弟子たちは答えた、「十二かごです」。20 「七つのパンを四千人に分けたときには、パンくずを幾つのかご（　　）に拾い集めたか」。「七かごです」と答えた。21 そこでイエスは彼らに言われた、「まだ悟らないのか」。
- マナとの対比も考えるべきかもしれない。
  - 出エジプト 16 章
  - ヨハネ 6:14,15 人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。
  - ヨハネ 6:32 そこでイエスは彼らに言われた、「よくよく言っておく。天からのパンをあなたがたに与えたのは、モーセではない。天からのまことのパンをあなたがたに与えるのは、わたしの父なのである。
  - エリシャ列王記下 4:41-44 42 その時、バアル・シャリシャから人がきて、初穂のパンと、大麦のパン二十個と、新穀一袋とを神の人のもとに持ってきたので、エリシャは「人々に与えて食べさせなさい」と言ったが、43 その召使は言った、「どうしてこれを百人の前に供えるのですか」。しかし彼は言った、「人々に与えて食べさせなさい。主はこう言われる、『彼らは食べてなお余すであろう』」。44 そこで彼はそれを彼らの前に供えたので、彼らは食べてなお余した。主の言葉のとおりであった。
  - イザヤ 25:6 万軍の主はこの山で、すべての民のために肥えたものをもって祝宴を設け、久しくたくわえたぶどう酒をもって祝宴を設けられる。すなわち髄の多い肥えたものと、よく澄んだ長くたくわえたぶどう酒をもって祝宴を設けられる。

4.37　6:45-52 湖の上を歩く

45 それからすぐ、イエスは自分で群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダへ先におやりになった。46 そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた。47 夕方になったとき、舟は海のまん中に出ており、イエスだけが陸地におられた。48 ところが逆風が吹い

ていたために、弟子たちがこぎ悩んでいるのをごらんになって、夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らに近づき、そのそばを通り過ぎようとされた。49 彼らはイエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。50 みんなの者がそれを見て、おじ恐れたからである。しかし、イエスはすぐ彼らに声をかけ、「しっかりするのだ。わたしである。恐れることはない」と言われた。51 そして、彼らの舟に乗り込まれると、風はやんだ。彼らは心の中で、非常に驚いた。52 先のパンのことを悟らず、その心が鈍くなっていたからである。

4.37.1 マタイ 14:22-33

22 それからすぐ、イエスは群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやりになった。23 そして群衆を解散させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。24 ところが舟は、もうすでに陸から数丁も離れており、逆風が吹いていたために、波に悩まされていた。25 イエスは夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。26 弟子たちは、イエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた。27 しかし、イエスはすぐに彼らに声をかけて、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と言われた。28 するとペテロが答えて言った、「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」。29 イエスは、「おいでなさい」と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。30 しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助けください」と言った。31 イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」。32 ふたりが舟に乗り込むと、風はやんでしまった。33 舟の中にいた者たちはイエスを拝して、「ほんとうに、あなたは神の子です」と言った。

4.37.2 ヨハネ 6:15-21

15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。16 夕方になったとき、弟子たちは海べに下り、17 舟に乗って海を渡り、向こう岸のカペナウムに行きかけた。すでに暗くなっていたのに、イエスはまだ彼らのところにおいでにならなかった。18 その上、強い風が吹いてきて、海は荒れ出した。19 四、五十丁こぎ出したとき、イエスが海の上を歩いて舟に近づいてこられるのを見て、彼らは恐れた。20 すると、イエスは彼らに言われた、「わたしだ、恐れることはない」。21 そこで、彼らは喜んでイエスを舟に迎えようとした。すると舟は、すぐ、彼らが行こうとしていた地に着いた。

マルコによる福音書 6 章 45-52 節福音書対照表

4.37.3 問い

1. 直前の出来事を復習しましょう。どんなことがありましたか。(6:30-44)

2. イエスはどうしますか。（45,46）

3. その晩、どんなことがおこりますか。（48-51）

4. ヨハネからはさらにどのようなことがわかりますか。

5. マタイには、さらにどのようなことが書かれていますか。

6. パンのことを悟っていないとはどういうことでしょうか。（52）

4.37.4　参照

- どこから、どこへ移動するときか、マルコとルカとヨハネを比較すると異なっている。マルコでは、五千人の給食のあと、ベッサイダに移動、そのときのこととしている。ルカでは、五千人の給食の前に、ベッサイダに移動したことが書かれている。ヨハネでは、まず、向こう岸（おそらく、ベッサイダ）に行き、五千人の給食、その後、向こう岸のカペナウムに向かう途中の出来事としている。
- 四、五十丁：25 ないし 30 スタディオン（ヨハネ 6:19）1 スタディオンは、約 185 メートル、1/8 ミリオン。4625m から 5550m。海を横切ると、6 キロ程度とされているので、ほとんど到着している。
- ヨハネ 21:1 そののち、イエスはテベリヤの海べで（　　）、ご自身をまた弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。
- 詩篇 107:28-30 彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、／主は彼らをその悩みから救い出された。29 主があらしを静められると、／海の波は穏やかになった。30 こうして彼らは波の静まったのを喜び、／主は彼らをその望む港へ導かれた。

4.37.5　記録

- 日時：2023 年 12 月 7 日午後 7 時半〜9 時半

- 出席（対面）7 名、参加（遠隔）3 名

4.37.6　問いについて

1. 直前の出来事を復習しましょう。どんなことがありましたか。（6:30-44）

    - 12 弟子の派遣。バプテスマのヨハネの処刑。弟子の帰還。

    - 「しばらく休むがよい」（32）

    - 五千人の給食。

2. イエスはどうしますか。（45,46）

- 45 それからすぐ、イエスは自分で群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダへ先におやりになった。46 そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた。
- 群衆をどうしますか
- 弟子たちには、なにを命じますか。
- [DQ] なぜ、「すぐに」、自分で、解散させ、「しいて」舟に乗り込ませたのでしょうか。
- イエス自身はどうしますか。
- [DQ] イエスは、疲れないのでしょうか。
- [DQ] 何を、祈っておられたのでしょうか。
  - ヨハネ 6:15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしている
  - こころみるものの、再来。
- [DQ] 結局、どこから、どこへ、移動したのでしょうか。

3. その晩、どんなことがおこりますか。（48-51）

- 48 ところが逆風が吹いていたために、弟子たちがこぎ悩んでいるのをごらんになって、夜明けの四時ごろ、海の上（　　）を歩いて彼らに近づき、そのそばを通り過ぎようとされた。49 彼らはイエスが海の上（　　）を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。50 みんなの者がそれを見て、おじ恐れたからである。しかし、イエスはすぐ彼らに声をかけ、「しっかりするのだ。わたしである。恐れることはない」と言われた。51 そして、彼らの舟に乗り込まれると、風はやんだ。彼らは心の中で、非常に驚いた。
- 海の上を歩いて、弟子たちに近づき、「しっかりするのだ。わたしである。恐れることはない」
- [DQ] 状況を思い描いてみましょう。なぜ、弟子たちは、長く沖合にいたのでしょうか。
- [DQ] 「しっかりするのだ。わたしである。恐れることはない」は、どのような意味を持っているのでしょうか。

4. ヨハネからはさらにどのようなことがわかりますか。

- ヨハネ 6:14, 15 人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。
- [DQ] 人々は、これをどのように受け止め、どのような行動に出たと書かれていますか。
- 14 節と、15 節の関係も微妙である。人々が来ては、噂を聞いたひとが、違ったことを考えたのかも知れない。評価は難しかっただろうから。イエスは手品師ではない。

- ヨハネ 16-17 夕方になったとき、弟子たちは海べに下り、17 舟に乗って海を渡り、向こう岸のカペナウムに行きかけた。すでに暗くなっていたのに、イエスはまだ彼らのところにおいでにならなかった。
- 弟子たちはどのような状況で舟にのりますか。
- ヨハネ 6:18 その上、強い風が吹いてきて、海は荒れ出した。19 四、五十丁（ (twenty) (thirty), 3700m-5550m）こぎ出したとき、イエスが海の上（ ヨハネ 21:1）を歩いて舟に近づいてこられるのを見て、彼らは恐れた。 : a space or distance of about 600 feet (185 m)
- ヨハネ 6:21 そこで、彼らは喜んでイエスを舟に迎えようとした。すると舟は、すぐ、彼らが行こうとしていた地に着いた。
- [DQ] ヨハネはこの話しをどのように締めくくっていますか。
- [DQ] イエスは、舟に乗り込んだのでしょうか。

5. マタイには、さらにどのようなことが書かれていますか。
   - ペテロはどうしますか。イエスはどう応じられますか。
   - どうなりましたか。
   - 舟にいた人たちはどうしますか。
6. パンのことを悟っていないとはどういうことでしょうか。（52）
   - 52 先のパンのことを悟らず、その心が鈍くなっていたからである。
   - それぞれの福音書は、この物語を通じて、何を伝えているのでしょうか。

4.37.7 メモ

- 場所の問題：ベッサイダは、ヨルダン川の東岸のベッサイダ・ユリアスか、それとも、西岸のどこかに、漁の家（ベッサイダ）という町があったかは、不明である。ここでは、ペテロの証言もあり、ヨハネの証言（湖の向こう岸カペナウムに行こうとしていた）もあるとすると、判断は、難しい。
- ‘ ’をどう解釈するかで、大きく、状況は変化する。ヨハネ 21:1 では、海辺となっている。どちらにも解釈ができることは、共通理解なのだろう。ヨハネによる福音書を読んでいると、実際には、海辺を歩いておられたように、感じる。舟に乗り込まれたことも書かれておらず、つぐついたことだけが書かれている。距離も、ほぼ、到着するまでの距離が書かれている。それがヨハネの回顧だったようにおもわれる。マルコ、または、ペトロが伝えたものは、どうだろうか。ここでも、 が二度使われている。しかし、「51 そして、彼らの舟に乗り込まれると、風はやんだ。彼らは心の中で、非常に驚いた。52 先のパンのことを悟らず、その心が鈍くなっていたからである。」を見ると、やはり、まだ海の上の出来事

であると解釈するほうが良さそうである。マルコは、ペテロが語ったことを、海の上のことと解釈したのだろう。それを修正したのが、ヨハネによる福音書なのかもしれない。しかし、マタイは、尾ひれがついている。ペテロの証言ではないので、信用性は、落ちるが、おそらく、当時のひとたちは、この話を、海の上を歩かれたイエスと解釈していたのだろう。それも、動かせないように思われる。

- 「パンのことを理解していなかった」は、パンのことをどう考えるかによっても、解釈が分かれる。もし、超自然的に、無から有が生まれたのだとすると、イエスが、そのような奇跡を行われる、神の子であることを理解していなかったとなる。他方、それぞれのグループで、出し合ったという解釈をとると、互いに愛しあう交わりをとおして、神の国の到来を知ることができるとなる。いずれにしても、恐れることはない。
- この出来事で、マタイが書いているように、弟子たちのイエスの理解には、大きな変化があったのだろうか。
- ヨハネによる福音書の 6 章 20 節は、　　で、　　が含まれている。これは、わたしである。との表現であるが、出エジプトで、モーセに自らをあらわす、I am who I am とも通じるものである。わたしが、いるとも訳すことが可能で、ヨハネでは、イエスがともにいるかどうか、イエスがともにいるときが光、昼、イエスがともにいないときは、闇、夜と捉えることも可能である。そのような解釈で、ここをまとめるのは、多少危険でもあるが。

4.38　6:53-56 ゲネサレトで病人を癒やす

53 彼らは海を渡り、ゲネサレの地に着いて舟をつないだ。54 そして舟からあがると、人々はすぐイエスと知って、55 その地方をあまねく駆けめぐり、イエスがおられると聞けば、どこへでも病人を床にのせて運びはじめた。56 そして、村でも町でも部落でも、イエスがはいって行かれる所では、病人たちをその広場におき、せめてその上着のふさにでも、さわらせてやっていただきたいと、お願いした。そしてさわった者は皆いやされた。

4.38.1　マタイ 14:34-36

34 それから、彼らは海を渡ってゲネサレの地に着いた。35 するとその土地の人々はイエスと知って、その附近全体に人をつかわし、イエスのところに病人をみな連れてこさせた。36 そして彼らにイエスの上着のふさにでも、さわらせてやっていただきたいとお願いした。そしてさわった者は皆いやされた。

マルコによる福音書 6 章 53-56 節福音書対照表

4.38.2　問い

1. これまでにどのようなことがあったか、復習してみましょう。
2. ゲネサレの地で人々はどのように、イエスを迎えますか。
3. イエスはどうしますか。

4. 人々は、何を求めているのでしょうか。

5. イエスは、いやしについてどう考えていたのでしょうか。

4.38.3 参照

- ゲネサレ（Γ　　: Gennesaret = “a harp”, a) a lake also called the sea of Galilee or the sea of Tiberias The lake 12 by 7 miles (20 by 11 km) and 700 feet (210 m) below the Mediterranean Sea. b) a very lovely and fertile region on the Sea of Galilee.）ガリラヤ湖（テベリヤ湖）の別名。地名としては、ガリラヤ湖北岸。カペナウムの西。（マルコ 6:53, マタイ 14:34, ルカ 5:1）[地図リンク]
  - ルカ 5:1 さて、群衆が神の言を聞こうとして押し寄せてきたとき、イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、
- 群衆・人々の求めるもの、不特定の人々のいやし
  - マルコ 1:32-35 夕暮になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのところに連れてきた。33 こうして、町中の者が戸口に集まった。34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。35 朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。
  - マルコ 1:45 しかし、彼は出て行って、自分の身に起ったことを盛んに語り、また言いひろめはじめたので、イエスはもはや表立っては町に、はいることができなくなり、外の寂しい所にとどまっておられた。しかし、人々は方々から、イエスのところにぞくぞくと集まってきた。
  - マルコ 2:17 イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。
  - マルコ 3:7-11 それから、イエスは弟子たちと共に海べに退かれたが、ガリラヤからきたおびただしい群衆がついて行った。またユダヤから、8 エルサレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シドンのあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞いて、みもとにきた。9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。10 それは、多くの人をいやされたので、病苦に悩む者は皆イエスにさわろうとして、押し寄せてきたからである。11 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。
  - マルコ 6:12,13 そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。
- 　　: i) to serve, do service, ii) to heal, cure, restore to health [BLB Link]

- マルコ 1:34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。
- マルコ 3:2 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。
- マルコ 3:10 それは、多くの人をいやされたので、病苦に悩む者は皆イエスにさわろうとして、押し寄せてきたからである。
- マルコ 3:15 また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。（写本によっては、いやしが入っている。）
- マルコ 6:5　そして、そこでは力あるわざを一つもすることができず、ただ少数の病人に手をおいていやされただけであった。
- マルコ 6:13　多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。[マルコ 6 回]
- マタイ 4:23, 24, 8:7, 16, 9:35, 10:1, 8, 12:10, 15, 22, 14:14, 15:30, 17:16, 18, 19:1, 21:14 [マタイ 16 回]
- ルカ 4:23, 40, 5:15, 6:7, 18, 7:21, 8:2, 43, 9:1, 6, 10:9, 13:14, 14:13 [ルカ 13 回]
- ヨハネ 5:10 [ヨハネ 1 回]

- : i) to cure, heal, ii) to make whole [BLB Link]
  - マルコ 5:29 すると、血の元がすぐにかわき、女は病気がなおったことを、その身に感じた。[マルコ 1 回]
  - マタイ 8:8 そこで百卒長は答えて言った、「主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。
  - マタイ 8:13 それからイエスは百卒長に「行け、あなたの信じたとおりになるように」と言われた。すると、ちょうどその時に、僕はいやされた。
  - マタイ 13:15 この民の心は鈍くなり、／その耳は聞えにくく、／その目は閉じている。それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、／悔い改めていやされることがないためである』。
  - マタイ 15:28 そこでイエスは答えて言われた、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」。その時に、娘はいやされた。[マタイ 4 回]
  - ルカ 4:18 「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、／わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、／囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、／打ちひしがれている者に自由を得させ、

- ルカ 5:17 ある日のこと、イエスが教えておられると、ガリラヤやユダヤの方々の村から、またエルサレムからきたパリサイ人や律法学者たちが、そこにすわっていた。主の力が働いて、イエスは人々をいやされた。
- ルカ 6:17 そして、イエスは彼らと一緒に山を下って平地に立たれたが、大ぜいの弟子たちや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロとシドンの海岸地方などからの大群衆が、
- ルカ 6:19 また群衆はイエスにさわろうと努めた。それは力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいやしたからである。
- ルカ 7:7 それですから、自分でお迎えにあがるねうちさえないと思っていたのです。ただ、お言葉を下さい。そして、わたしの僕をなおしてください。
- ルカ 8:47 女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、みまえにひれ伏し、イエスにさわった訳と、さわるとたちまちなおったこととを、みんなの前で話した。
- ルカ 9:2 また神の国を宣べ伝え、かつ病気をなおすためにつかわして
- ルカ 9:11 ところが群衆がそれと知って、ついてきたので、これを迎えて神の国のことを語り聞かせ、また治療を要する人たちをいやされた。
- ルカ 9:42 ところが、その子がイエスのところに来る時にも、悪霊が彼を引き倒して、引きつけさせた。イエスはこの汚れた霊をしかりつけ、その子供をいやして、父親にお渡しになった。
- ルカ 14:4 彼らは黙っていた。そこでイエスはその人に手を置いていやしてやり、そしてお帰しになった。
- ルカ 22:51 イエスはこれに対して言われた、「それだけでやめなさい」。そして、その僕の耳に手を触れて、おいやしになった。[ルカ 11 回]
- ヨハネ 4:47 この人が、ユダヤからガリラヤにイエスのきておられることを聞き、みもとにきて、カペナウムに下って、彼の子をなおしていただきたいと、願った。その子が死にかかっていたからである。
- ヨハネ 5:13 しかし、このいやされた人は、それがだれであるか知らなかった。群衆がその場にいたので、イエスはそっと出て行かれたからである。
- ヨハネ 12:40 「神は彼らの目をくらまし、心をかたくなになさった。それは、彼らが目で見ず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである」。[ヨハネ 3 回]

- ：to save, keep safe and sound, to rescue from danger or destruction（(危機的な、危険などから、安全が確保され）救われること・いやされる）[BLB Link]
  - マルコ 3:4 人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を**救う**のと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。

- マルコ 5:23 しきりに願って言った、「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子が**なおって助かりますよう**に、おいでになって、手をおいてやってください」。
- マルコ 5:28 それは、せめて、み衣にでもさわれば、**なおしていただける**だろうと、思っていたからである。
- マルコ 5:34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを**救った**のです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。
- マルコ 6:56 そして、村でも町でも部落でも、イエスがはいって行かれる所では、病人たちをその広場におき、せめてその上着のふさにでも、さわらせてやっていただきたいと、お願いした。そしてさわった者は皆**いやされた**。
- マルコ 8:35 自分の命を**救おう**と思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを**救う**であろう。
- マルコ 10:26 すると彼らはますます驚いて、互に言った、「それでは、だれが**救われる**ことができるのだろう」。
- マルコ 10:52 そこでイエスは言われた、「行け、あなたの信仰があなたを**救った**」。すると彼は、たちまち見えるようになり、イエスに従って行った。
- マルコ 13:13 また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は**救われる**。
- マルコ 13:20 もし主がその期間を縮めてくださらないなら、**救われる**者はひとりもないであろう。しかし、選ばれた選民のために、その期間を縮めてくださったのである。
- マルコ 15:30, 31 十字架からおりてきて自分を**救え**」。31 祭司長たちも同じように、律法学者たちと一緒になって、かわるがわる嘲弄して言った、「他人を**救った**が、自分自身を救うことができない。
- マルコ 16:16 信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。
- マタイ 1:21, 8:25, 9:21, 9:22, 10:22, 14:30, 16:25, 18:11, 19:25, 24:13, 24:22, 27:40, 27:49
- ルカ６:9, 7:50, 8:12, 36, 48, 50, 9:24, 56, 13:23, 17:19, 33, 18:26, 42, 19:10, 23:35, 37, 39
- ヨハネ 11:12 すると弟子たちは言った、「主よ、眠っているのでしたら、助かるでしょう」。
- ヨハネ 12:27 今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。
- ヨハネ 12:47 たとい、わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があっても、わたしはその人をさばかない。わたしがきたのは、この世をさばくためではなく、この世を救うためである。

Table4.2: Thayer Greek Lexicon

	マルコ	マタイ	ルカ	ヨハネ	岩隈直著「新約ギリシャ語辞典」山本書店
	4	7	10	1	仕える、奉仕する、看病する、手当する、癒やす
	1	4	13	3	治療する、癒やす、治す、回復する
	14	15	19	7	守る、活かしておく、救う、救い出す、癒やす、治す
	19	26	42	11	

4.38.4　記録

- 日時：2023 年 12 月 14 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）3 名

4.38.5　問いについて

1. これまでにどのようなことがあったか、復習してみましょう。
    - 53 彼らは海を渡り、ゲネサレの地に着いて舟をつないだ。
    - マルコ 6:30-34 さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。31 するとイエスは彼らに言われた、「さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい」。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。32 そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。33 ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。

  - マルコ 3:7-12 10 それは、多くの人をいやされたので、病苦に悩む者は皆イエスにさわろうとして、押し寄せてきたからである。
- この状態と似ている。
  - 出入りする人が多くて、食事をする暇もなかった
  - 彼ら（使徒たち）は人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。
  - イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。（五千人の給食につながる）
    * 山浦訳：34 それで一行が舟から陸に上がると、[既に] 大勢の人々がそこにいたのでござった。それは、まるで守る者のない羊の群れのようでござった。その姿を見れば腸（はらわた）も千切れるような気の毒な気持ちになり、イェシューさまはこの人たちに神さまのことをあれやこれやとさまざまに教え始めなさった。

2. ゲネサレの地で人々はどのように、イエスを迎えますか。
   - 54 そして舟からあがると、人々はすぐイエスと知って、55 その地方をあまねく駆けめぐり、イエスがおられると聞けば、どこへでも病人を床にのせて運びはじめた。56 そして、村でも町でも部落でも、イエスがはいって行かれる所では、病人たちをその広場におき、せめてその上着のふさにでも、さわらせてやっていただきたいと、お願いした。そしてさわった者は皆いやされた。
   - [DQ] どのような状態だと思いますか。
     - [Q] ひとたちを、駆け巡らせたのは、何だったのでしょうか。
     - [Q] ひとたちが、床にのせて運ぶようにさせたのは、何だったのでしょうか。（マルコ 2:1-12、マタイ 9:1-8、ルカ 5:17-26）
     - [Q] せめて上着のふさにでも、さわらせたやっていただきたいとお願いしたのでしょうか。（マルコ 5:27（衣）に関連したマタイ 9:20（衣の裾）、ルカ 8:44）
   - [DQ] イエスを利用しようとだけしているのでしょうか。
   - [DQ] みなさんは、神様や、神様の力を持った人がいたら、どうしますか。
3. イエスはどうしますか。
   - そしてさわった者は皆いやされた（　: to save, keep safe and sound, to rescue from danger or destruction）。

- イエスがどうしたかは、明確には、書かれていない。上着のすそをさわることを許したように想像できるが、なにかしっくり子ない。受け身ではなく、イエス自身が、いやしの行為をしたのではないだろうか。しかし、いずれにしても、なにをしたか不明。

4. 人々は、何を求めているのでしょうか。
   - いやされるというより、救われることだろうか。
   - 自分たちの乏しい状態は感じていても、どうなればよいかは、わかっていなかったのでは。単に、すがりたい気持ちだろうか。
5. イエスは、いやしについてどう考えていたのでしょうか。

4.38.6 メモ

- 山浦玄嗣（やまうらはるつぐ）訳「ガリラヤのイェシュー」イー・ピックス出版では、次のように訳されている

  > 53 さて話変わって、ある時のこと、一行は湖を渡ってきて、ゲネサレの野に上がり、そこに舟を舫（もや）ってござる。54 舟から上がると、イェシューさまがきなさったということがたちまち知れ渡った。55 人々はその辺り一帯を走り回って、イェシューさまがいなさるという所ならどこへでも、敷布に病人を乗せて担いで来たものでござる。56 そうして、村であれ、町であれ、郷であれ、イェシューさまの行きなさる所ならどこへでも、その先々で広場に病人をズラリと並べて願ったものでござった。
  >
  > 「せめてそのお着物の裾（すそ）にでも縋（すが）らせてくだりませ !」
  >
  > そうして縋（すが）った人たちはことごとくその病の苦しみから助けていただいたのでござった。

  「そしてさわった者は皆いやされた。」のいやされたの部分に、　が使われているので、このように訳したのだろう。

  - 「マルコ 5:28 それは、せめて、み衣にでもさわれば、**なおしていただける**だろうと、思っていたからである。」この部分も、山浦訳では「あのお方のお着物にでもお縋（すが）り申さば、必ずこの病の苦しみがら助け出して（　）いただけるはずでござりますよわ（ございますよ）。」
  - 「マルコ 5:29 するとたちまち血の元が干上がり、苦しみがスッと治った（　の受け身完了形）のが体の感じでわかり申した。」
  - わたしは、３つのギリシャ語を区別して理解しようと努めてきたが、文才もなく、上手にことばが選べなかったが、山浦訳は、秀逸である。
- イエスは能動的には、なにもしていない。不思議でもあるが、そのように、人々の要求、それは、イエス

が望んでいたものと同じではなかったかもしれないが、それに委ねたことからも、学ぶことが多かったように思う。その意味でも、不思議な箇所である。イザヤ書のことを思った。

- イザヤ 53:6,7 われわれはみな羊のように迷って、／おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、／彼の上におかれた。7 彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、／口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、／また毛を切る者の前に黙っている羊のように、／口を開かなかった。

4.39 7:1-23 昔の人の言い伝え

1 さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレムからきて、イエスのもとに集まった。2 そして弟子たちのうちに、不浄な手、すなわち洗わない手で、パンを食べている者があるのを見た。3 もともと、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝えをかたく守って、念入りに手を洗ってからでないと、食事をしない。4 また市場から帰ったときには、身を清めてからでないと、食事をせず、なおそのほかにも、杯、鉢、銅器を洗うことなど、昔から受けついでかたく守っている事が、たくさんあった。5 そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。6 イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、／『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。7 人間のいましめを教として教え、／無意味にわたしを拝んでいる』。8 あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」。9 また、言われた、「あなたがたは、自分たちの言伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ。10 モーセは言ったではないか、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。11 それだのに、あなたがたは、もし人が父または母にむかって、あなたに差上げるはずのこのものはコルバン、すなわち、供え物ですと言えば、それでよいとして、12 その人は父母に対して、もう何もしないで済むのだと言っている。13 こうしてあなたがたは、自分たちが受けついだ言伝えによって、神の言を無にしている。また、このような事をしばしばおこなっている」。14 それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた、「あなたがたはみんな、わたしの言うことを聞いて悟るがよい。15 すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人をけがすのである。16 〔聞く耳のある者は聞くがよい〕」。17 イエスが群衆を離れて家にはいられると、弟子たちはこの譬について尋ねた。18 すると、言われた、「あなたがたも、そんなに鈍いのか。すべて、外から人の中にはいって来るものは、人を汚し得ないことが、わからないのか。19 それは人の心の中にはいるのではなく、腹の中にはいり、そして、外に出て行くだけである」。イエスはこのように、どんな食物でもきよいものとされた。20 さらに言われた、「人から出て来るもの、それが人をけがすのである。21 すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、22 姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴。23 これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである」。

4.39.1　マタイ 15:1-20

1 ときに、パリサイ人と律法学者たちとが、エルサレムからイエスのもとにきて言った、2 「あなたの弟
子たちは、なぜ昔の人々の言伝えを破るのですか。彼らは食事の時に手を洗っていません」。3 イエスは答
えて言われた、「なぜ、あなたがたも自分たちの言伝えによって、神のいましめを破っているのか。4 神は
言われた、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。5 それだの
に、あなたがたは『だれでも父または母にむかって、あなたにさしあげるはずのこのものは供え物です、
と言えば、6 父または母を敬わなくてもよろしい』と言っている。こうしてあなたがたは自分たちの言伝
えによって、神の言を無にしている。7 偽善者たちよ、イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預
言をしている、8 『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。9 人
間のいましめを教として教え、／無意味にわたしを拝んでいる』」。10 それからイエスは群衆を呼び寄せ
て言われた、「聞いて悟るがよい。11 口にはいるものは人を汚すことはない。かえって、口から出るもの
が人を汚すのである」。12 そのとき、弟子たちが近寄ってきてイエスに言った、「パリサイ人たちが御言を
聞いてつまずいたことを、ご存じですか」。13 イエスは答えて言われた、「わたしの天の父がお植えにな
らなかったものは、みな抜き取られるであろう。14 彼らをそのままにしておけ。彼らは盲人を手引きする
盲人である。もし盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むであろう」。15 ペテロが答えて
言った、「その譬を説明してください」。16 イエスは言われた、「あなたがたも、まだわからないのか。17
口にはいってくるものは、みな腹の中にはいり、そして、外に出て行くことを知らないのか。18 しかし、
口から出て行くものは、心の中から出てくるのであって、それが人を汚すのである。19 というのは、悪い
思い、すなわち、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、誹りは、心の中から出てくるのであって、20 これら
のものが人を汚すのである。しかし、洗わない手で食事することは、人を汚すのではない」。

4.40　7:1-13 昔の人の言い伝え（1）

1 さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレムからきて、イエスのもとに集まった。2 そし
て弟子たちのうちに、不浄な手、すなわち洗わない手で、パンを食べている者があるのを見た。3 もとも
と、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝えをかたく守って、念入りに手を洗ってからでな
いと、食事をしない。4 また市場から帰ったときには、身を清めてからでないと、食事をせず、なおその
ほかにも、杯、鉢、銅器を洗うことなど、昔から受けついでかたく守っている事が、たくさんあった。5
そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝え
に従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。6 イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた
偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、／『この民は、口さきではわたしを敬う
が、／その心はわたしから遠く離れている。7 人間のいましめを教として教え、／無意味にわたしを拝ん
でいる』。8 あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」。9 また、言われ
た、「あなたがたは、自分たちの言伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ。10 モーセは
言ったではないか、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。11

それだのに、あなたがたは、もし人が父または母にむかって、あなたに差上げるはずのこのものはコルバン、すなわち、供え物ですと言えば、それでよいとして、12 その人は父母に対して、もう何もしないで済むのだと言っている。13 こうしてあなたがたは、自分たちが受けついだ言伝えによって、神の言を無にしている。また、このような事をしばしばおこなっている」。

4.40.1 マタイ 15:1-9

1 ときに、パリサイ人と律法学者たちとが、エルサレムからイエスのもとにきて言った、2 「あなたの弟子たちは、なぜ昔の人々の言伝えを破るのですか。彼らは食事の時に手を洗っていません」。3 イエスは答えて言われた、「なぜ、あなたがたも自分たちの言伝えによって、神のいましめを破っているのか。4 神は言われた、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。5 それだのに、あなたがたは『だれでも父または母にむかって、あなたにさしあげるはずのこのものは供え物です、と言えば、6 父または母を敬わなくてもよろしい』と言っている。こうしてあなたがたは自分たちの言伝えによって、神の言を無にしている。7 偽善者たちよ、イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預言をしている、8 『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。9 人間のいましめを教として教え、／無意味にわたしを拝んでいる』」。

4.40.2 （参考）ルカ 11:37-44

37 イエスが語っておられた時、あるパリサイ人が、自分の家で食事をしていただきたいと申し出たので、はいって食卓につかれた。38 ところが、食前にまず洗うことをなさらなかったのを見て、そのパリサイ人が不思議に思った。39 そこで主は彼に言われた、「いったい、あなたがたパリサイ人は、杯や盆の外側をきよめるが、あなたがたの内側は貪欲と邪悪とで満ちている。40 愚かな者たちよ、外側を造ったかたは、また内側も造られたではないか。41 ただ、内側にあるものをきよめなさい。そうすれば、いっさいがあなたがたにとって、清いものとなる。42 しかし、あなた方パリサイ人は、わざわいである。はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を宮に納めておりながら、義と神に対する愛とをなおざりにしている。それもなおざりにはできないが、これは行わねばならない。43 あなたがたパリサイ人は、わざわいである。会堂の上席や広場での敬礼を好んでいる。44 あなたがたは、わざわいである。人目につかない墓のようなものである。その上を歩いても人々は気づかないでいる」。（43-44 は、マルコ 12:38-40 参照）

マルコによる福音書 7 章 1-13 節福音書対照表

4.40.3 問い

1. どのようなことが原因で、議論が始まりますか。（1,2）
2. パリサイ人をはじめユダヤ人はみなどのようにしていたと書かれていますか。（3,4）
3. パリサイ人と律法学者たちは何をたいせつにしていますか。それはなぜでしょうか。（5）

4. イエスは、どのように批判していますか。イエスの批判の中心点は何ですか。(6-8)

5. 9 節-12 節の例では、6 節- 8 節で指摘した要点のどのような面を説明しているのでしょうか。どのような対比がありますか。(9-12)

6.「神の言を無にしている」とは何を指しているのでしょうか。(13)

4.40.4 参照

- 汚れについて
  - 使徒 10:14 ペテロは言った、「主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことがありません」。
  - 使徒 10:28 ペテロは彼らに言った、「あなたがたが知っているとおり、ユダヤ人が他国の人と交際したり、出入りしたりすることは、禁じられています。ところが、神は、どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりました。
  - 使徒 11:8 わたしは言った、『主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないものや汚れたものを口に入れたことが一度もございません』。
  - 黙示録 21:27 しかし、汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は、その中に決してはいれない。はいれる者は、小羊のいのちの書に名をしるされている者だけである。
- 汚れた手（　　）
  - レビ 8:6 そしてモーセはアロンとその子たちを連れてきて、水で彼らを洗い清め、
- 念入りに手を洗ってからでないと（　　）：i) the fist, clenched hand, ii) up to the elbow (聖書でここだけ)
- 歩む（　　：to walk）
  - ローマ 6:4 すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。
  - ローマ 8:4 これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。
- 偽善者（　　：i) one who answers, an interpreter, ii) an actor, stage player, iii) a dissembler, pretender, hypocrite）
- ミシュナー、シャッパト 1:4-8, ベラコート 8:2-4, ヤーダイム 1-2

- 昔の人々（ヘブル 11:2）長老のこと（ラビ・ヒレルとラビ・シャンマイ）
- 出エジプト 20:12 あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。
- 出エジプト 21:17 自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない。
- 出エジプト 32:16 その板は神の作、その文字は神の文字であって、板に彫ったものである。
- イザヤ 29:13-20 主は言われた、／「この民は口をもってわたしに近づき、／くちびるをもってわたしを敬うけれども、／その心はわたしから遠く離れ、／彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、／そらで覚えた人の戒めによるのである。14 それゆえ、／見よ、／わたしはこの民に、／再び驚くべきわざを行う、／それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び、／さとい人の知識は隠される」。15 わざわいなるかな、／おのが計りごとを主に深く隠す者。彼らは暗い中でわざを行い、／「だれがわれわれを見るか、／だれがわれわれのことを知るか」と言う。16 あなたがたは転倒して考えている。陶器師は粘土と同じものに思われるだろうか。造られた物はそれを造った者について、／「彼はわたしを造らなかった」と言い、／形造られた物は形造った者について、／「彼は知恵がない」と言うことができようか。17 しばらくしてレバノンは変って肥えた畑となり、／肥えた畑は林のように／思われる時が来るではないか。18 その日、耳しいは書物の言葉を聞き、／目しいの目はその暗やみから、見ることができる。19 柔和な者は主によって新たなる喜びを得、／人のなかの貧しい者は／イスラエルの聖者によって楽しみを得る。20 あらぶる者は絶え、／あざける者はうせ、／悪を行おうと、おりをうかがう者は、／ことごとく断ち滅ぼされるからである。（アリエル：神の炉）
- 偽善（ヒュポクリーテス）：答える人、型にはまった対話・会話に答える人、俳優、その人の全生涯がその背後に全く何の真実もなく、芝居をするような人を意味するようになった。（バークレイ）
- コルバン（　：i) a gift offered (or to be offered) to God, ii) the sacred treasury）：　offering, oblation - レビ 1:2, 3, 10, 14, 2:1, 4, 5, 7, 12, 13, 3:1, 2, 6, 7, 8, 12, 14, 4:23, 28, 5:11, 6:20, 7:13, 14, 15, 16, 29, 38, 9:7, 9:15, 17:4, 22:18, 27, 23:14, 27:9, 11, 民数記 5:15, 6:14, 21, 7:3, 10, 11, 12, 13, 17, 19, 23, 25, 29, 31,35, 37, 41, 43, 47, 49, 53, 55, 59, 61, 65, 67, 71, 73, 77, 79, 83, 9:7, 13, 15:4, 25, 18:9, 28:2, 31:50, ネヘミヤ 10:34, 13:31, エゼキエル 20:28, 40:43 - offering

4.40.5　記録

- 日時：2023 年 12 月 21 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）5 名

4.40.6　問いについて

1. どのようなことが原因で、議論が始まりますか。（1,2）

- 1 さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレムからきて、イエスのもとに集まった。2 そして弟子たちのうちに、不浄な手、すなわち洗わない手で、パンを食べている者があるのを見た。
- [DQ] なぜ、エルサレムから、パリサイ人と、（ある）律法学者たちとが、イエスのもとに集まったのでしょう。
  - いつのことなのか書いてない。ガリラヤから離れる直前に置かれている。

2. パリサイ人をはじめユダヤ人はみなどのようにしていたと書かれていますか。(3,4)

- 3 もともと、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝えをかたく守って、念入りに手を洗ってからでないと、食事をしない。4 また市場から帰ったときには、身を清めてからでないと、食事をせず、なおそのほかにも、杯、鉢、銅器を洗うことなど、昔から受けついでかたく守っている事が、たくさんあった
- [DQ] なぜ、ユダヤ人である弟子たちのある者が、洗わない手で、パンを食べていたのでしょうか。

3. パリサイ人と律法学者たちは何をたいせつにしていますか。それはなぜでしょうか。(5)

- 5 そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。
- [DQ] なぜ、行為者の弟子に問わないで、イエスに問うているのでしょうか。
- [DQ] イエスはどうだったのでしょうか。
  - このときのイエスについては不明。しかし、非難された、弟子たちをまずは、庇（かば）っているようにも見える。
  -「安息日に麦の穂を摘む」(2:23-28) 弟子たち
  - ルカ 11:37-44 37 イエスが語っておられた時、あるパリサイ人が、自分の家で食事をしていただきたいと申し出たので、はいって食卓につかれた。38 ところが、食前にまず洗うことをなさらなかったのを見て、そのパリサイ人が不思議に思った。
- [DQ] パリサイ人と律法学者たちにとって「昔のひとの言い伝え」は、どんな意味を持っているのでしょうか。
  - 律法を厳格に守ろうとしたひとたちの教えを忠実に守ることによって、律法を守っていることを証明すること。

4. イエスは、どのように批判していますか。イエスの批判の中心点は何ですか。(6-8)

- 6 イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、／『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。7 人間

のいましめを教として教え、／無意味にわたしを拝んでいる』。8 あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」。

- 何を大切にしているかがずれてきてしまっている。
- [DQ] 本当に「神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」という状態になってしまっているのでしょうか。
- [DQ] イエスが批判しているのは、何なのでしょうか。

5. 9 節-12 節の例では、6 節- 8 節で指摘した要点のどのような面を説明しているのでしょうか。どのような対比がありますか。(9-12)
    - 9 また、言われた、「あなたがたは、自分たちの言伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ。10 モーセは言ったではないか、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。11 それだのに、あなたがたは、もし人が父または母にむかって、あなたに差上げるはずのこのものはコルバン、すなわち、供え物ですと言えば、それでよいとして、12 その人は父母に対して、もう何もしないで済むのだと言っている。
    - [DQ] どのようなことが行われていたのだと思いますか。
    - [DQ] 異なる例を挙げていますが、手を洗わないことに関して解釈すると、どのようなことを言っているのでしょうか。
        - 衛生面を強調して、肯定することも、できたのではないだろうか。おそらく、後半から次につながる部分が大切だとしたのだろう。
6. 「神の言を無にしている」とは何を指しているのでしょうか。(13)
    - 13 こうしてあなたがたは、自分たちが受けついだ言伝えによって、神の言を無にしている。また、このような事をしばしばおこなっている」。
    - コルバンに関しては、そのように解釈することで、実際には、父母を大切にしないことになってしまっていないいか。
    - 手を洗わないことに関しては、単に、あるひとたちを排除したり、分断を作り出すようなことをしていないか。

4.40.7 メモ

- 山浦玄嗣（やまうらはるつぐ）訳「ガリラヤのイェシュー」イー・ピックス出版では、次のように訳されている

- 2 ところで、イェシューさまの弟子たちの中には、お浄めもしない手で、つまり洗いもしないてで、飯を食う者がござった。お歴々はこれに目くじらを立ててござる。
- 8 お前さまがたは神さまの掟のほうは打ち棄てて、人のつくった仕来りばかりシッカリ固くお守りなさる。」
- 12 の後にかっこ付きで追記（辻褄の合わぬこんな屁理屈をこねまわして、親への孝養をないがしろにする、かかる悪しき習わしが当世の流行りにて、子から捨てられて難儀する貧しい年老いた親たちの何と多かったことか。イェシューさまはこれをおしかりになっておられるのでござる。）
- 13 こうしてお前さまがたは自分たちが受け継いできた仕来りのために神様の言葉を破り捨てていなさる。そうして更に、この類のことをさまざまなさっている。

- 何を本当に大切にするのか。
  - 書かれたものの解釈に終始するのではなく、御心はなにかを求め続けること。

4.41 7:14-23 昔の人の言い伝え（2）

14 それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた、「あなたがたはみんな、わたしの言うことを聞いて悟るがよい。15 すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人をけがすのである。16 〔聞く耳のある者は聞くがよい〕」。17 イエスが群衆を離れて家にはいられると、弟子たちはこの譬について尋ねた。18 すると、言われた、「あなたがたも、そんなに鈍いのか。すべて、外から人の中にはいって来るものは、人を汚し得ないことが、わからないのか。19 それは人の心の中にはいるのではなく、腹の中にはいり、そして、外に出て行くだけである」。イエスはこのように、どんな食物でもきよいものとされた。20 さらに言われた、「人から出て来るもの、それが人をけがすのである。21 すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、22 姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴。23 これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである」。

4.41.1 マタイ 15:10-20

10 それからイエスは群衆を呼び寄せて言われた、「聞いて悟るがよい。11 口にはいるものは人を汚すことはない。かえって、口から出るものが人を汚すのである」。12 そのとき、弟子たちが近寄ってきてイエスに言った、「パリサイ人たちが御言を聞いてつまずいたことを、ご存じですか」。13 イエスは答えて言われた、「わたしの天の父がお植えにならなかったものは、みな抜き取られるであろう。14 彼らをそのままにしておけ。彼らは盲人を手引きする盲人である。もし盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むであろう」。15 ペテロが答えて言った、「その譬を説明してください」。16 イエスは言われた、「あなたがたも、まだわからないのか。17 口にはいってくるものは、みな腹の中にはいり、そして、外に出て行くことを知らないのか。18 しかし、口から出て行くものは、心の中から出てくるのであって、それが人を

汚すのである。19 というのは、悪い思い、すなわち、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、誹りは、心の中から出てくるのであって、20 これらのものが人を汚すのである。しかし、洗わない手で食事することは、人を汚すのではない」。

マルコによる福音書 7 章 14-23 節福音書対照表

4.41.2 問い

1. 前回の部分を復習しましょう。どのようなできごとがあり、またパリサイ人の批判に、イエスはどのように答えていますか。
2. イエスは、誰に対して、何を語っていますか。(14-16)
3. マタイでは、さらに、どのようなことを伝えていますか。(マタイ 15:12-15)
4. イエスは人を汚すものについてどのように説明していますか。(17-23)
5. 「不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴」が人を汚すのは、なぜでしょうか。(22)
6. イエスの言う人を汚すとはどのようなことで、パリサイ人たちが考える汚れと何が違いますか。

4.41.3 参照

- 食べてはならない
  - 創世記 2:17 しかし善悪を知る木からは取って**食べてはならない**。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。
  - 創世記 9:4 しかし肉を、その命である血のままで、**食べてはならない**。
  - レビ 3:17 あなたがたは脂肪と血とをいっさい**食べてはならない**。これはあなたがたが、すべてその住む所で、代々守るべき永久の定めである』」。
  - レビ 11 4 ただし、反芻するもの、またはひずめの分かれたもののうち、次のものは**食べてはならない**。すなわち、らくだ、これは、反芻するけれども、ひずめが分かれていないから、あなたがたには汚れたものである。[その他多数]
  - 申命記 14 7 ただし、反芻するものと、ひずめの分れたもののうち、次のものは**食べてはならない**。すなわち、らくだ、野うさぎ、および岩だぬき、これらは反芻するけれども、ひずめが分れていないから汚れたものである。8 また豚、これは、ひずめが分れているけれども、反芻しないから、汚れたものである。その肉を**食べてはならない**。またその死体に触れてはならない。[その他多数]
- 使徒行伝 10:1-11:18, 15:6-11（汚れについて）
  - 使徒 10:14 ペテロは言った、「主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことがありません」。

  - 使徒 10:28 ペテロは彼らに言った、「あなたがたが知っているとおり、ユダヤ人が他国の人と交際したり、出入りしたりすることは、禁じられています。ところが、神は、どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりました。
  - 使徒 11:8 わたしは言った、『主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないものや汚れたものを口に入れたことが一度もございません』。
  - 使徒 15:6-11 そこで、使徒たちや長老たちが、この問題について審議するために集まった。7 激しい争論があった後、ペテロが立って言った、「兄弟たちよ、ご承知のとおり、異邦人がわたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようにと、神は初めのころに、諸君の中からわたしをお選びになったのである。8 そして、人の心をご存じである神は、聖霊をわれわれに賜わったと同様に彼らにも賜わって、彼らに対してあかしをなし、9 また、その信仰によって彼らの心をきよめ、われわれと彼らとの間に、なんの分けへだてもなさらなかった。10 しかるに、諸君はなぜ、今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかったくびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか。11 確かに、主イエスのめぐみによって、われわれは救われるのだと信じるが、彼らとても同様である」。
- マルコ 3:28-30 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。そう言われたのは、彼らが「イエスはけがれた霊につかれている」と言っていたからである。マタイ 12:31 だから、あなたがたに言っておく。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない。
- マカバイ記一 1 章 62 節-64 節だがイスラエル人の多くはそれにも屈せず、断固として不浄のものを口にしなかった。63 彼らは、食物によって身を汚して聖なる契約に背くよりは、死を選んで命を落としていった。64 大いなる怒りがイスラエルの上に激しく臨んだ。
- マカバイ記二 7 章 1 節-42 節また、七人の兄弟が母親と共に捕らえられ、鞭や革ひもで責め苦を受け、律法に反して豚肉を食するように王から強いられることとなった。2 彼らの一人が弁明して言った。「あなたは何を尋ね、我々から聞き出そうとしているのか。我々は、父祖の律法に違反するぐらいなら死ぬ覚悟がある。」3 激怒した王は、鍋や大釜に火をつけるように命じた。

4.41.4 記録

- 日時：2024 年 1 月 11 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）1 名

4.41.5 問いについて

1. 前回の部分を復習しましょう。どのようなできごとがあり、またパリサイ人の批判に、イエスはどのように答えていますか。
   - （きっかけ）1 さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレムからきて、イエスのもとに集

まった。2 そして弟子たちのうちに、不浄な手、すなわち洗わない手で、パンを食べている者があるのを見た。

- （問）5 そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。
- （イエスの答え）6 イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、／『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。7 人間のいましめを教として教え、／無意味にわたしを拝んでいる』。その後に例示
- 自分たちの言い伝えを、神の戒めよりも優先している。
- イエスは、論点を変えているように見える。
- 本当にそれが重要なのと聞いているのようにも見える。

2. イエスは、誰に対して、何を語っていますか。（14-16）

- 14 それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた、「あなたがたはみんな、わたしの言うことを聞いて悟るがよい。15 すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人をけがすのである。16 〔聞く耳のある者は聞くがよい〕」。
- 「『再び（　：写本に依存)』群衆を呼び寄せて言われた」からは、群衆たちは、エルサレムからのパリサイ人とある律法学者が問うているときに、身を引いている印象をうける。群衆は、権威とは、違うことを、あるていど、理解していたのかもしれない。
- 「あなたがたはみんな、わたしの言うことを聞いて悟るがよい。」（14b, マタイ 15:10 にもある）および「〔聞く耳のある者は聞くがよい〕」。」（16）（マルコ 4:9, 23, ルカ 8:8 種まきのたとえ）からは、とても大切なこと、本質的なことを語っているように見える。
- 「すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人をけがすのである。」（15）は、これだけで、群衆がどれだけ、理解できたかは、不明だが、非常に過激なことをいっているように見える。

3. マタイでは、さらに、どのようなことを伝えていますか。（マタイ 15:12-15）

- 12 そのとき、弟子たちが近寄ってきてイエスに言った、「パリサイ人たちが御言を聞いてつまずいたことを、ご存じですか」。13 イエスは答えて言われた、「わたしの天の父がお植えにならなかったものは、みな抜き取られるであろう。14 彼らをそのままにしておけ。彼らは盲人を手引きする盲人である。もし盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むであろう」。15 ペテロが答えて言った、「その譬を説明してください」。
- 弟子たちが問うのではなく、挿入がある。そして、ペテロがお願いをしている。しかし、このあとの、つながりから、パリサイ人たちが、躓いたのは、汚れについてであることと思われる。イエスのメッ

セージ、「聞いて悟るがよい。11 口にはいるものは人を汚すことはない。かえって、口から出るものが人を汚すのである」と、律法との関係を深く理解して、躓いたのかは、不明。

- 躓く（　　: to put a stumbling block or impediment in the way, upon which another may trip and fall, metaph. to offend; a) to entice to sin b) to cause a person to begin to distrust and desert one whom he ought to trust and obey, c) since one who stumbles or whose foot gets entangled feels annoyed）立ち上がれなくなるとの意味だろうが、価値観も入っているかもしれない。一般的には、イエスのことばは、まったく受け入れられないと反発したということか。

4. イエスは人を汚すものについてどのように説明していますか。（17-23）

- 17 イエスが群衆を離れて家にはいられると、弟子たちはこの譬について尋ねた。18 すると、言われた、「あなたがたも、そんなに鈍いのか。すべて、外から人の中にはいって来るものは、人を汚し得ないことが、わからないのか。19 それは人の心の中にはいるのではなく、腹の中にはいり、そして、外に出て行くだけである」。イエスはこのように、どんな食物でもきよいものとされた。20 さらに言われた、「人から出て来るもの、それが人をけがすのである。21 すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、22 姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴。23 これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである」。

- 「イエスが群衆を離れて家にはいられると、弟子たちはこの譬について尋ねた。」から始まっており、この部分、詳しい解説は、弟子たちに話したことになっている。おそらく、群衆には理解が難しく、パリサイ人や律法学者とは、激しい議論になってしまうことを避けたのかもしれない。争い以外生み出さないかもしれないので。

- 「あなたがたも、そんなに鈍いのか。」と始めているところからも、弟子たちは、悟るべきだったことがわかる。イエスは、神の子だからわかるのではなく、我々も、御心を求めていれば、理解できるはずというのが、イエスの論理なのだろう。

  - マタイでは、弟子たちが叱責されたようには、記述せず、パリサイ人が躓いたとして、ペテロに「その譬を説明してください」。（マタイ 15:15）と語らせている。

- 「人から出て来るもの、それが人をけがすのである。」ここに本質がある。

  - しかし、実によって木がわかるように、さらに、人の中に問題があるとも考えられる。

- [DQ] ここにある悪は、だれを汚すのでしょうか。悪い思いが出た人でしょうか、それとも、その周囲の人でしょうか。

  - 周囲の人が汚されるように見える。

  - おそらく、神との交わりが、危うくなることを言っているのだろう。明確ではない。

5.「不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴」が人を汚すのは、なぜでしょうか。

- イエスの頭にあるのは、神さまとの関係が壊れてしまう。神さまの御心がなる世界とは、まったく違うということなのかもしれない。神の国が近くない状態になる。
- 神との関係より、肉との関係を優先、または、神が愛される他者を犯す、傷付ける。
- (adultery), ((i) illicit sexual intercourse, (ii) metaph. the worship of idols) (murder, slaughter) (theft) (greedy desire to have more, covetousness, avarice) (craft, deceit, guile) (unbridled lust, excess, licentiousness, lasciviousness, wantonness, outrageousness, shamelessness, insolence) ((i) full of labours, annoyances, hardships, (ii) bad, of a bad nature or condition) ((i) slander, detraction, speech injurious, to another's good name. (ii) impious and reproachful speech injurious to divine majesty) ((i) pride, haughtiness, arrogance, (ii) the character of one who, with a swollen estimate of his own powers or merits, looks down on others and even treats them with insolence and contempt) ((i) foolishness, folly, senselessness, (ii) thoughtlessness, recklessness)
- 女郎買い、盗み、追剥ぎ、人殺し、人の女房さ手を出したり、よその男を引っ張り込むような外道の振る舞い、強欲、意地の悪い腐れ根性、嘘語りの悪巧み、際限のねぁ色好み、嫉妬、悪口に、我ばり立派ぶる威張った心、無分別、こんな碌でもねァごどづァみんな人の心の中がら、ゴダビダ出はって、人を汚く汚すのだ。

6. イエスの言う人を汚すとはどのようなことで、パリサイ人たちが考える汚れと何が違いますか。
   - イエスの言えう汚すとは、神のみ心をおこなうことから、離れさす。パリサイ人たちが考える汚れは、神のもとにいる清い自分たちが、神のもとにいないものと接触することによって、自分たちが汚れ、神のもとにいられなくなる。
   - [DQ] イエスは、人々や弟子たちに何を教えているのでしょうか。
     - 何が、本質的なことかを問うているように見える。
   - 神との関係を断つこと、神との交わりを大切にしないこと、パリサイ人も本来は、それを、求めている。
   - マカバイ一 1:62-64、マカバイ二 7:1-42

4.41.6 メモ

- 当時としては、非常に革命的な発言だったと思われる。そしてそれが、キリスト教会が世界宗教へとなっていった、鍵となる出来事でもある。異邦人の捉え方に、大きな影響を持つことになったのだから。
  - レビ記 11 章の長いリストの否定。おそらく、それを明確には、イエスは告げていない。イエスは、それよりも、上の次元、神さま目線での交わりを大切にされたのではないだろうか。神さまが大切な一

人ひとりをたいせつにすること、それを犯すことが、汚すということなのではないだろうか。そのレベルで理解できないと、パリサイ人や、律法学者の理解と、同じ地平となり、単なる分裂をうみだすだけとなってしまう。

– ユダヤ人が死をもいとわず、拒否したもの。食べ物のこと、その議論は、キリスト教会のなかでも続くが、それが最終的ではないことを、リーダーたちが確認できたことは、やはり、重要だったのだろう。コルネリオとのこと、エルサレム使徒会議に続く部分が、この次のシリア・フェニキアの女の信仰へとつながる。それ故に、独立であっても、ここに置かれたのだろう。マルコ的にはとても、得意な記事の挿入になっている。ペトロ由来として、たいせつな記事だったのだろう。

4.42 7:24-30 シリア・フェニキアの女の信仰

24 さて、イエスは、そこを立ち去って、ツロの地方に行かれた。そして、だれにも知れないように、家の
中にはいられたが、隠れていることができなかった。25 そして、けがれた霊につかれた幼い娘をもつ女
が、イエスのことをすぐ聞きつけてきて、その足もとにひれ伏した。26 この女はギリシヤ人で、スロ・フ
ェニキヤの生れであった。そして、娘から悪霊を追い出してくださいとお願いした。27 イエスは女に言
われた、「まず子供たちに十分食べさすべきである。子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よ
ろしくない」。28 すると女は答えて言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、食卓の下にいる小犬も、子
供たちのパンくずは、いただきます」。29 そこでイエスは言われた、「その言葉で、じゅうぶんである。お
帰りなさい。悪霊は娘から出てしまった」。30 そこで、女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝てお
り、悪霊は出てしまっていた。

4.42.1 マタイ 15:21-28

21 さて、イエスはそこを出て、ツロとシドンとの地方へ行かれた。22 すると、そこへ、その地方出のカ
ナンの女が出てきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦し
んでいます」と言って叫びつづけた。23 しかし、イエスはひと言もお答えにならなかった。そこで弟子た
ちがみもとにきて願って言った、「この女を追い払ってください。叫びながらついてきていますから」。24
するとイエスは答えて言われた、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされて
いない」。25 しかし、女は近寄りイエスを拝して言った、「主よ、わたしをお助けください」。26 イエスは
答えて言われた、「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」。27 すると女は言っ
た、「主よ、お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」。28
そこでイエスは答えて言われた、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになる
ように」。その時に、娘はいやされた。

マルコによる福音書 7 章 24-30 節福音書対照表

4.42.2　問い

1. イエスは、どこから、どこへ移動しますか。それは、なぜでしょうか。(24)
2. この女の人はどのようなひとで、どんな問題を持っていますか。(25,26)
3. この女の人と、イエスの対話は、どのように進みますか。(26b-29)
4. そしてどうなりますか。(30)
5. マタイからはさらにどのようなことがわかりますか。
6. イエスの対応から、あなたは、どのようなことを感じますか。

4.42.3　参照

- 地図 The ministry of Jesus beyond Galilee: https://www.seektheoldpaths.com/Maps/109.jpg
- 新約聖書にでてくるスロ・フェニキヤ（Syrophenician）は、どこのことだと考えられていますか。
  - Google Bard：新約聖書に登場するスロ・フェニキヤ（Syrophenician）は、シリアとフェニキアの両方に属する地域を指すと考えられています。具体的には、現在のレバノン、シリア、イスラエル北部にあたります。

    スロ・フェニキアの語源は、ギリシャ語で「シリア人」を意味する「Σ　（スュロス）」と、「フェニキア人」を意味する「Φ　（フォイニケス）」を組み合わせたものです。このことから、スロ・フェニキヤは、フェニキア人の住む地域であるシリアを含む地域を指すと考えられています。

    新約聖書のマルコによる福音書 7 章 24 節とマタイによる福音書 15 章 22 節には、イエス・キリストがスロ・フェニキアの地方で、汚れた霊にとりつかれた娘を持つ女性を癒したという記述があります。この女性は、ユダヤ人ではない異邦人であったため、イエスは最初は彼女の願いを拒みました。しかし、女性の信仰に心を動かされたイエスは、彼女の娘を癒しました。

    このエピソードは、イエス・キリストが異邦人にも救いの手を差し伸べたことを示すものとして、重要な意味を持っています。

  - Poe Assistant: 新約聖書における「スロ・フェニキヤ」(Syrophenician）という表現は、マルコによる福音書（マルコ 7:26）および[*308]。しかし、この表現については諸説あります。

    一般的には、「スロ・フェニキヤ」とは、シリア地方のフェニキヤ人（フェニキア人）出身の女性を指すと解釈されています。フェニキヤは古代の地域であり、現在のレバノンやシリアの一部に相当しま

[*308] 実際には、マタイには、ない。

す。この女性はギリシャ語で「カナン人の女」とも呼ばれています。

ただし、この表現については異論も存在します。一部の学者は、スロ・フェニキヤがフェニキヤ人ではなく、シリア人やスリア人（アラム人）を指す可能性もあると主張しています。これは、ギリシャ語の表現や文脈に基づく解釈です。

したがって、「スロ・フェニキヤ」が具体的にどの地域や民族を指しているのか正確に特定することは難しいです。ただし、この女性はイエス・キリストに対して求めていた癒しや恵みを受けるために頼み込んでいたことが記されており、彼女の信仰心とイエスへの信頼が強調されています。

4.42.4 記録

- 日時：2024 年 1 月 18 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）7 名

4.42.5 問いについて

1. イエスは、どこから、どこへ移動しますか。それは、なぜでしょうか。(24)
   - 24 さて、イエスは、そこを立ち去って（ (from thence) ” (arose) (went))、ツロの地方に行かれた。そして、だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れていることができなかった。
   - 「そこ」はどこかは、不明だが、おそらく、ガリラヤ。ツロは、カペナウムからは、北西へ 64km。シドンは、ツロの 41km 東北。
   - [DQ] イエスはなぜ、「だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れてい」たのでしょうか。
     - すでに危険な状態になっていたのかもしれない。
   - [DQ] イエスはなぜ、「だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れていることができなかった。」のでしょうか。
     - 群衆の支持はあったようなので、噂は、十分広がっていたと思われる。
     - 参照：マルコ 3:8 エルサレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シドンのあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞いて、みもとにきた。（マルコでは、ツロは、引用箇所と、7:24,31 のみ）
2. この女の人はどのようなひとで、どんな問題を持っていますか。(25,26)
   - 25 そして、けがれた霊につかれた幼い娘をもつ女が、イエスのことをすぐ聞きつけてきて、その足も

とにひれ伏した。26 この女はギリシヤ人で、スロ・フェニキヤの生れであった。そして、娘から悪霊を追い出してくださいとお願いした。

- 隠れていくることができなかったことにも関係している。
- 足元にひれ伏しは、一般的には、礼拝をしたことを意味する。
- ギリシャ人で、スロ・フェニキヤの生れ（スロ・フェニキヤは、ここだけ）
- 「娘から悪霊を追い出してくださいとお願いした。」この状態は、不明だが、「30 そこで、女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。」との対比により、多少の情報を与えている。わめいて、泣きじゃくったり、怒ったり、癇癪をおことしたり死て、床に大人しく寝ているような娘ではなかったのだろう。すくなくとも、平安をもって、神さまのみこころを求められるような状態ではなかったのだろう。

3. この女の人と、イエスの対話は、どのように進みますか。（26b-29）

- 26b そして、娘から悪霊を追い出してくださいとお願いした。27 イエスは女に言われた、「まず子供たちに十分食べさすべきである。子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」。28 すると女は答えて言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、食卓の下にいる小犬も、子供たちのパンくずは、いただきます」。29 そこでイエスは言われた、「その言葉で、じゅうぶんである。お帰りなさい。悪霊は娘から出てしまった」。
- 子犬：　（a little dog）27 も 28 も同じことば。マタイも同じ言葉を使っている。犬：　(i) a dog, ii) metaph. a man of impure mind, an impudent man - Mt 7:6, Luke 16:21, Phil 3:2, 2Pet 2:22, Rev 22:15）
- [DQ] イエスは、ユダヤ人を、子供たちと、異邦人を、犬または子犬と思っていたのでしょうか。
- [DQ] イエスは、なぜ「その言葉で、じゅうぶんである。お帰りなさい。（行きなさい。　）悪霊は娘から出てしまった」。と言えるほどの確信を持っていたのでしょうか。
- 「まず」が印象的、「子犬」も、差別的に取っていない。「食卓」の話をしているのは、女性のみ。神の食卓を思わされる。

4. そしてどうなりますか。（30）

- 30 そこで、女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。
- この記述にも、女の信仰が現れているように見える。マタイほど具体的には書かれていないが。
- 「女が帰ってみると」とある。その前には、イエスが「その言葉で、じゅうぶんである。お帰りなさい。悪霊は娘から出てしまった」と宣言している。実際に、悪霊が娘からでた証拠はなにも与えられていない。しかし、帰ってみるとの表現からは、疑いもあったかもしれないが、やはり信じて帰ったように見える。マタイでは、それを、「28 そこでイエスは答えて言われた、「女よ、あなたの信仰は見あげ

たものである。あなたの願いどおりになるように」。その時に、娘はいやされた。」と表現して、信仰のゆえに、いやされた表現になっている。

5. マタイからはさらにどのようなことがわかりますか。

- 「その地方出のカナンの女」と紹介している。
- 「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます」この表現もマルコとは、かなり異なる。ダビデの子は、救い主の通称だろうが、マルコでは、イエスを「ダビデの子」と呼んだのは、10:47,48 のみで、イエスはその呼称を不適切としている。
  - 10:47 ところが、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出した。48 多くの人々は彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」。
  - 12:35 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストを**ダビデの子**だと言うのか。37 このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。
  - 「わたしをあわれんでください」そして、さらに、25 しかし、女は近寄りイエスを拝して言った、「主よ、わたしをお助けください」。でも「わたしを」とあり、この女の苦しみ、訴えを中心に描いている。
  - この娘の存在が、この女性にたいする批判・非難にもつながっていたかもしれない。
- 23 しかし、イエスはひと言もお答えにならなかった。そこで弟子たちがみもとにきて願って言った、「この女を追い払ってください。叫びながらついてきていますから」。このことばは、かなり厳しいように見える。それゆえに、イエスも、それにつられて、24 するとイエスは答えて言われた、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。と言ったように見える。このあたりは、マルコと微妙にことなる。

6. イエスの対応から、あなたは、どのようなことを感じますか。

- 隠れていたかった理由があるのだろう。そして、イスラエルの民のことを、第一に考えていたのではないだろうか。なかなか受け入れられず、指導者からは、疑いの目で見られ、悪意をもたれ、おそらく、バプテスマのヨハネの処刑以降は、身の危険も感じはじめている。群衆には、必要はあり、求めてはくるものの、イエスをそして、神の国に関する、メッセージを理解せず、弟子たちも、神の国の奥義を理解するという意味では、十分な訓練を受けているとは、見えない。

4.42.6 メモ

- マタイでは、主導権を取っているのは、女のようにみえる。しかし、マルコでは、その度合は弱く、イエスの、正直であっても、こだわりがない、丁寧な対応が、浮き彫りにされているようにみえる。
- 引きこもりのイエスについては、しっかり考えたいと思った。非常に、珍しい表現であるように思う。「24 さて、イエスは、そこを立ち去って、ツロの地方に行かれた。そして、だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れていることができなかった。」
- 翻訳の関係もあるが、最後の「お帰りなさい。悪霊は娘から出てしまった」と「悪霊は出てしまっていた。」の呼応は単純ではあるが、印象的である。イエスは、なぜ、ここまで確信を持てたのだろうか。
- イエスのこの期間の行動は興味深い。しかし、あたらしい出発でもあるように見えるのは、その後の歴史を見ているからか。
- イエスは、自分が遣わされたユダヤ人たちの状態を見て、苦慮していたと思われる。それが、まさにイエスがこころをいためていた問題だった。そこでの女性との出会いである。あまり、イエスは神の子だから、最初から普遍性、すべてのひとの救いを考えていたなどと取ったり、逆に、差別的なユダヤ人てき考えを持っていたが、ここで変わったとか、そのように理解するのは、どちらも、問題があるように思われる。イエスの関心は、こどもたちに向けられていて、苦慮していただけである。しかしそんなときにも、この女に向き合われたことが記録され、そが、キリスト教として、普遍化へと進むときに、おおきな、支えとなったと考えたほうがよいように、思われる。

4.43 7:31-37 耳が聞こえず舌の回らない人を癒やす

31 それから、イエスはまたツロの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通りぬけ、ガリラヤの海べにこられた。32 すると人々は、耳が聞えず口のきけない人を、みもとに連れてきて、手を置いてやっていただきたいとお願いした。33 そこで、イエスは彼ひとりを群衆の中から連れ出し、その両耳に指をさし入れ、それから、つばきでその舌を潤し、34 天を仰いでため息をつき、その人に「エパタ」と言われた。これは「開けよ」という意味である。35 すると彼の耳が開け、その舌のもつれもすぐ解けて、はっきりと話すようになった。36 イエスは、この事をだれにも言ってはならぬと、人々に口止めをされたが、口止めをすればするほど、かえって、ますます言いひろめた。37 彼らは、ひとかたならず驚いて言った、「このかたのなさった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」。

4.43.1　マタイ 15:29-31（参照）

> 29 イエスはそこを去って、ガリラヤの海べに行き、それから山に登ってそこにすわられた。30 すると大ぜいの群衆が、足、手、目や口などが不自由な人々、そのほか多くの人々を連れてきて、イエスの足もとに置いたので、彼らをおいやしになった。31 群衆は、口のきけなかった人が物を言い、手や足が不自由だった人がいやされ、盲人が見えるようになったのを見て驚き、そしてイスラエルの神をほめたたえた。

マルコによる福音書 7 章 31-37 節福音書対照表

4.43.2　問い

1. イエスの移動経路を確認しましょう。どのような背景が考えられますか。（31）
2. 人々は、どんなひとを連れてきますか。何を願っていますか。（32）
3. イエスはどうしますか。そしてどうなりますか。（33-35）
4. イエスは、誰に対して、口止めをしていますか。それはなぜでしょうか。（36）
5. 人々の反応から、どのようなことがわかりますか。（37）
6. あなたは、この箇所から、どんなことを感じ、学びましたか。

4.43.3　参照

- 地図 The ministry of Jesus beyond Galilee: https://www.seektheoldpaths.com/Maps/109.jpg
- デカポリス：直接ローマ帝国スリヤ総督配下に属し、独自の貨幣を作っている十の異邦人都市地帯。（バークレイ）
- 手を置く：マルコ 7:32 「すると人々は、耳が聞えず口のきけない人を、みもとに連れてきて、手を置いてやっていただきたいとお願いした。」以外
  - ルカ 4:40 日が暮れると、いろいろな病気になやむ者をかかえている人々が、皆それをイエスのところに連れてきたので、そのひとりびとりに手を置いて、おいやしに（　　：i) to serve, do service, ii) to heal, cure, restore to health）なった。
  - ルカ 14:4 （安息日に水腫を患っている人を癒やす）彼らは黙っていた。そこでイエスはその人に手を置いていやし（　　：i) to cure, heal, ii) to make whole）てやり、そしてお帰しになった。マルコでは、　　は、5:29 一箇所のみ。
- つばきでのいやし：7 章 33 節以外

  - マルコ 8:23 イエスはこの盲人の手をとって、村の外に連れ出し、その両方の目につばきをつけ、両手を彼に当てて、「何か見えるか」と尋ねられた。
  - ヨハネ 9:6 イエスはそう言って、地につばきをし、そのつばきで、どろをつくり、そのどろを盲人の目に塗って言われた、
- スキナゾー　　：a sigh, to groan
  - 7:34 天を仰いで**ため息をつき**、その人に「エパタ」と言われた。これは「開けよ」という意味である。
  - ローマ 8:23 それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内で**うめきながら**、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる。
  - 2 コリント 5:2-4 そして、天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で**苦しみもだえ**ている。それを着たなら、裸のままではいないことになろう。この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って**苦しみもだえ**ている。それを脱ごうと願うからではなく、その上に着ようと願うからであり、それによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためである。
  - ヘブル 13:17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞きいれて、従いなさい。彼らは、神に言いひらきをすべき者として、あなたがたのたましいのために、目をさましている。彼らが**嘆かない**で、喜んでこのことをするようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならない。
  - ヤコブ 5:9 兄弟たちよ。互に**不平を言い合**ってはならない。さばきを受けるかも知れないから。見よ、さばき主が、すでに戸口に立っておられる。
- エパタ：アラム語の使用：[参照]
- 預言
  - イザヤ 29:18 その日、耳しいは書物の言葉を聞き、／目しいの目はその暗やみから、見ることができる。
  - イザヤ 35:6 その時、足の不自由な人は、しかのように飛び走り、／口のきけない人の舌は喜び歌う。それは荒野に水がわきいで、／さばくに川が流れるからである。

4.43.4　記録

- 日時：2024 年 1 月 25 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）5 名

4.43.5　問いについて

1. イエスの移動経路を確認しましょう。どのような背景が考えられますか。(31)
    - 31 それから、イエスはまたツロの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通りぬけ、ガリラヤの海べにこられた。
    - おそらく、ある程度の期間も要する旅だったろう。しばらく、ガリラヤにはいない。なにをした期間なのだろうか。
2. 人々は、どんなひとを連れてきますか。何を願っていますか。(32)
    - 32 すると人々は、耳が聞えず口のきけない人を、みもとに連れてきて、手を置いてやっていただきたいとお願いした。
    - 別訳「耳が聞こえないので、話すのに口ごもった」(ティンデル)
        - 原理的には、これが正しいだろう。
3. イエスはどうしますか。そしてどうなりますか。(33-35)
    - 33 そこで、イエスは彼ひとりを群衆の中から連れ出し、その両耳に指をさし入れ、それから、つばきでその舌を潤し、34 天を仰いでため息をつき、その人に「エパタ」と言われた。これは「開けよ」という意味である。35 すると彼の耳が開け、その舌のもつれもすぐ解けて、はっきりと話すようになった。
    - [DQ] なぜ、イエスは「彼ひとりを群衆の中から連れ出し」たのでしょうか。
        - 見世物ではない。聾者は、差別されていただろうか。舌がもつれているということは、長期間、聾者であったと思われる。
    - [DQ] なぜ、イエスは「その両耳に指をさし入れ、それから、つばきでその舌を潤し」などという行為をしたのでしょうか。
        - つばきは、通常の医療行為と思われる。天をあおぎ、神の国が近いことを求めたのだろうか。
    - [DQ] なぜ、イエスは「天を仰いでため息をつき」言われたのでしょうか。
        - 神の国、神の支配が見られないことへの嘆きであろうか。
        - ため息をつき：　　：a sigh, to groan
    - [DQ] なぜ、イエスは「エパタ」と言われたのでしょうか。
        - 弟子たちの耳には、鮮明に残っているということだろう。

4. イエスは、誰に対して、口止めをしていますか。それはなぜでしょうか。(36)
    - 36 イエスは、この事をだれにも言ってはならぬと、人々に口止めをされたが、口止めをすればするほど、かえって、ますます言いひろめた。
    - このひとだけではなく、人々に語っている。ニュースが広がることを願っていない。
5. 人々の反応から、どのようなことがわかりますか。(37)
    - 37 彼らは、ひとかたならず驚いて言った、「このかたのなさった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」。
        - 創世記 1:31 神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。夕となり、また朝となった。第六日である。
        - イエスの反応は書かれていない。反発が強くなり、排除されることを、恐れただけとは考えにくい。
    - [DQ] マタイによる福音書の記述からは、どんなことがわかりますか。
        - 31 群衆は、口のきけなかった人が物を言い、手や足が不自由だった人がいやされ、盲人が見えるようになったのを見て驚き、そしてイスラエルの神をほめたたえた。
        - いろいろな病人などがいて、それぞれいやされ、それが、「イスラエルの神」への賛美につながっている。
6. あなたは、この箇所から、どんなことを感じ、学びましたか。

4.43.6 メモ

- イエスの医療行為は、見せるためでも、魔術的な力の発揮でもない。通常のことをしているようにも見える。
- 「耳が聞えず口のきけない人」を連れてきたのは、人々であって、本人が願ったのではない。一般に、人は、障害などを取り除くことを優先して考え、それによって、問題が解決すると考える。目に見えるものによる判断が大きく優先されるということだろう。しかし、障害をもった本人、大きな課題をかかけたひとにとっては、その障害や課題を取り除くことで、幸せになるわけではないことは、理解できているだろう。それは、その人の一部になっているからだ。ここでも、この障害を負ったひとのことばは、ひとことも伝えられていない。障害が取り除けられることは、様々な課題と向き合うひとつのステップではあるかもしれないが、それをもって、問題の解決と考えるひとを前にすると、気後れがすることでもある。イエスのため息のなかには、それも含まれているのかもしれない。ひとりひとりの心の重荷を、イエスは受け取ろうとし、イエス様によって示される神さまも、同様だろう。その神さまにとって、イエス様にとって、この事件は、どのようなものだったのだろう。

- 「このかたのなさった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」。は、おそらく、キリスト教会にたいせつなメッセージとして伝えられただろう。そして、受け取った人の中には、これこそ、イザヤ書 29 章 18 節や、35 章 6 節の成就だと考えた人もいるだろう。さらには、ペトロなど、一緒に旅をして回ったと思われる、弟子たちにとっては、このような積み重ねが、イエスは、神の子、キリストだと確信することにつながっているのだろう。我々は、そこからスタートして、マルコを呼んではいけない。弟子たちとともに、そのように、確信する、歩みをしなければならない。同時に、ここでの表現が、イエスが望んでいた証であったかどうかも明らかではないことも、心すべきである。イエスと、パリサイ人や、律法学者、そして、ヘロデなどの政治的支配者に理解されていなかったことは、一般的に受け入れられている。しかし、群衆とのやり取りをみていると、イエスは、群衆に理解されていないこと、大きなズレがあることは、確信していたと思われる。ヨハネ 2:23-25「過越の祭の間、イエスがエルサレムに滞在しておられたとき、多くの人々は、その行われたしるしを見て、イエスの名を信じた。しかしイエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。それは、すべての人を知っておられ、また人についてあかしする者を、必要とされなかったからである。それは、ご自身人の心の中にあることを知っておられたからである。」によらずとも、マルコを読んでいるとたびたび示されること、そして、それが、このことを語らないようにいった大きな原因ではないかとも思わされる。そして、弟子たちの理解も遅い。他の人に比べると、イエスについて、まんでいったことを多いと思うが、人によっても異なるだろうし、その理解の形も様々だったろう。わたしたちは、マルコを通して、ペトロの理解の歩みを辿っている。ピリポカイザリアでの告白も、そこでのエピソードが伝えているように、十分な理解から、発せられているわけではない。ともに、イエスを、そして、神さまをすこしでも理解する歩みを続けたいものである。

4.44　8:1-10 四千人に食べ物を与える

1 そのころ、また大ぜいの群衆が集まっていたが、何も食べるものがなかったので、イエスは弟子たちを
呼び寄せて言われた、2 「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食
べるものがない。3 もし、彼らを空腹のまま家に帰らせるなら、途中で弱り切ってしまうであろう。それ
に、なかには遠くからきている者もある」。4 弟子たちは答えた、「こんな荒野で、どこからパンを手に入
れて、これらの人々にじゅうぶん食べさせることができましょうか」。5 イエスが弟子たちに、「パンはい
くつあるか」と尋ねられると、「七つあります」と答えた。6 そこでイエスは群衆に地にすわるように命
じられた。そして七つのパンを取り、感謝してこれをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟
子たちはそれを群衆に配った。7 また小さい魚が少しばかりあったので、祝福して、それをも人々に配る
ようにと言われた。8 彼らは食べて満腹した。そして残ったパンくずを集めると、七かごになった。9 人
々の数はおよそ四千人であった。それからイエスは彼らを解散させ、10 すぐ弟子たちと共に舟に乗って、
ダルマヌタの地方へ行かれた。

4.44.1 マタイ 15:32-39

32 イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒
にいるのに、何も食べるものがない。しかし、彼らを空腹のままで帰らせたくはない。恐らく途中で弱り
切ってしまうであろう」。33 弟子たちは言った、「荒野の中で、こんなに大ぜいの群衆にじゅうぶん食べ
させるほどたくさんのパンを、どこで手に入れましょうか」。34 イエスは弟子たちに「パンはいくつある
か」と尋ねられると、「七つあります。また小さい魚が少しあります」と答えた。35 そこでイエスは群衆
に、地にすわるようにと命じ、36 七つのパンと魚とを取り、感謝してこれをさき、弟子たちにわたされ、
弟子たちはこれを群衆にわけた。37 一同の者は食べて満腹した。そして残ったパンくずを集めると、七
つのかごにいっぱいになった。38 食べた者は、女と子供とを除いて四千人であった。39 そこでイエスは
群衆を解散させ、舟に乗ってマガダンの地方へ行かれた。

マルコによる福音書 8 章 1-10 節福音書対照表

4.44.2 問い

1. イエスたちと、群衆について、どのようなことがわかりますか。(1a)
2. イエスの弟子たちへのことばからどのようなことがわかりますか。(1b-3)
3. 弟子たちと、イエスは、どのような会話をしますか。(4,5)
4. イエスは、どうしますか。(6,7)
5. どうなりますか。(8-10)
6. 以前の五千人の給食の記事と比較し、気づいたことをあげてみましょう。(6:30-44)
7. 実際には、なにがおこったのだと思いますか。

4.44.3 参照

- 地図 The ministry of Jesus beyond Galilee: https://www.seektheoldpaths.com/Maps/109.jpg
- 新約聖書の「ダルマヌタ（Dalmanutha, mark 8:10)」はどこだと考えられているのでしょうか。
  - Google Bard: 新約聖書の「ダルマヌタ」は、マルコの福音書 8 章 10 節に登場する地名です。この節によると、イエスはガリラヤ湖畔の「ダルマヌタ」で弟子たちに、パリサイ人やヘロデ党員のパン種に注意するようにと教えました。

    ダルマヌタの地名は、他の聖書の書物には登場せず、マルコの福音書のこの一節にしか記されていま

せん。そのため、ダルマヌタの具体的な位置は、古くから聖書学者や考古学者によってさまざまな説が唱えられてきました。

主な説としては、以下のようなものが挙げられます。

  * ガリラヤ湖北岸の「タブハ」であるとする説
  * ガリラヤ湖南岸の「デカポリスの一都市」であるとする説
  * ガリラヤ湖南岸の「ガザリヤ」であるとする説
  * ガリラヤ湖北岸の「カイファリア」であるとする説

これらの説の中で、最も有力と考えられているのが、ガリラヤ湖北岸の「タブハ」であるとする説です。タブハは、ガリラヤ湖畔の町で、イエスの奇跡である「パンと魚の増加」の伝承が残る場所です。また、タブハの近くには、「ペテロの召命」の伝承が残る「ペテロの召命教会」があります。これらのことから、ダルマヌタはタブハであると考えられています。

なお、近年の考古学的調査では、タブハの近くに「ダルマヌタの丘」と呼ばれる丘があることが明らかになっています。この丘には、古代ローマ時代の集落の跡があり、ダルマヌタの町がここにあった可能性も指摘されています。

- マルコ 8:7 の小さな魚（　　）と、マルコ 6:41 などの魚（　）とはどのように違うのですか。
  - Google Bard: マルコの福音書 8 章 7 節と 6 章 41 節に登場する「魚」は、ギリシャ語でそれぞれ「　　（イクトュディオン）」と「　（イクトュス）」と書かれています。これらの言葉は、どちらも「魚」を意味しますが、具体的な大きさや種類には若干の違いがあります。

    「　　（イクトュディオン）」は、一般的に「小さな魚」を意味する言葉です。特に、食用として捕獲される魚よりも小さな魚を指すことが多いです。

    一方、「　（イクトュス）」は、一般的に「魚」を意味する言葉です。大きさや種類にかかわらず、魚全般を指すことができます。

    マルコの福音書 8 章 7 節では、イエスが弟子たちに、パンの残りを集めて、小さな魚と共に食べるように命じています。この小さな魚は、食用として捕獲される魚よりも小さな魚であると考えられます。これは、パンの残りが比較的多く、さまざまな種類の食べ物が含まれていたためと考えられます。

    一方、マルコの福音書 6 章 41 節では、イエスが弟子たちに、5000 人の人々に食事をふるまうために、魚を用意するように命じています。この魚は、一般的に「魚」を指す「　（イクトュス）」であると考えられます。これは、魚が大量に必要だったためと考えられます。

    なお、両者の違いについては、文献学的、考古学的な研究に基づいて、さまざまな説が唱えられていますが、一般的には、上記のような解釈がされています。

- かご（　　）5000 人のときのかごは（　　）
- マルコ 8:8 のかご（　　）と、マルコ 6:44 のかごは（　　）はどのような違いがあるのですか。
  - Google Bard: マルコの福音書 8 章 8 節と 6 章 44 節に登場する「かご」は、ギリシャ語でそれぞれ「　　（スプュリス）」と「　　（コフィノス）」と書かれています。これらの言葉は、どちらも「バスケット」や「かご」を意味しますが、具体的な形状や用途には若干の違いがあります。

    「　　（スプュリス）」は、一般的に「バスケット」や「かご」を意味する言葉です。特に、果物や野菜、魚介類などを運ぶために使われていました。また、葬儀の際に遺体を運ぶために使われることもありました。

    一方、「　　（コフィノス）」は、より具体的に「魚かご」を意味する言葉です。底が網で編まれているため、魚を捕獲したり、運んだりするのに適していました。また、乾燥させた果実や穀物を保管するために使われることもありました。

    マルコの福音書 8 章 8 節では、イエスが弟子たちに、パンの残りを集めて、かごに入れるように命じています。このかごは、一般的に「バスケット」や「かご」を意味する「　　（スプュリス）」であると考えられています。これは、パンの残りが比較的多く、さまざまな種類の食べ物が含まれていたためと考えられます。

    一方、マルコの福音書 6 章 44 節では、イエスが弟子たちに、5000 人の人々に食事をふるまうために、パンと魚を準備するように命じています。このかごは、より具体的に「魚かご」を意味する「　　（コフィノス）」であると考えられています。これは、魚が大量に必要だったためと考えられます。

    なお、両者の違いについては、文献学的、考古学的な研究に基づいて、さまざまな説が唱えられています。

  - Poe Assistant: マルコによる福音書 8 章 8 節と 6 章 44 節に登場する「かご」には、ギリシャ語で異なる単語が使用されています。これらの単語にはいくつかの違いがあります。

    1. マルコ 8:8 の「かご」（　　, spyris）: これは小さなかごやかご状の容器を指します。この場面では、イエス・キリストが多くの人々にパンを配るために使われたかごを指しています。このかごは、イエスが 5 つのパンと 2 つの魚を祝福し、それを使って多くの人々を満足させた奇跡的な出来事を記述しています。

    2. マルコ 6:44 の「かご」（　　, kophinos）: これはより大きなかごやかご状の容器を指します。この場面では、イエスが 5 つのパンと 2 つの魚を祝福して多くの人々を満足させた後、残ったパンと魚を集めるために使われたかごを指しています。このかごは、集められた残りの食べ物を入れるために使用されたものです。

    したがって、マルコ 8:8 の「かご」（　　）は配布に使用される小さなかごであり、マルコ 6:44 の「かご」（　　）は残りの食べ物を集めるために使用される大きなかごです。

- マタイ 4:1-4 さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。2 そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。3 すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」。4 イエスは答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」。
- マルコ 8:14-21 で再登場。

4.44.4 記録

- 日時：2024 年 2 月 1 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）4 名

4.44.5 問いについて

1. イエスたちと、群衆について、どのようなことがわかりますか。(1a)
    - 1 そのころ、また大ぜいの群衆が集まっていたが、何も食べるものがなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、
    - どこにいるのか不明。デカポリスのガリラヤ湖畔？このあと船で移動しているので、ガリラヤ湖畔。かつ、カペナウムなどではない。ダルマヌタの場所が不明であることからも、特定は難しいが、おそらく、前段の話の続きと思われる。
2. イエスの弟子たちへのことばからどのようなことがわかりますか。(1b-3)
    - 1 そのころ、また大ぜいの群衆が集まっていたが、何も食べるものがなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、2 「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。3 もし、彼らを空腹のまま家に帰らせるなら、途中で弱り切ってしまうであろう。それに、なかには遠くからきている者もある」。
    - ここでも、深く憐れんで（かわいそうである：　　）マルコ 6:34
    - [DQ] イエスはどのように弟子たちに語っていますか。これから、群衆の状況について、そして、イエスの関心事について何がわかりますか。
    - [DQ] イエスは、何を考えて、このように語っているのでしょうか。
    - イエスの、群衆に対する、思いやりが際立っている。
3. 弟子たちと、イエスは、どのような会話をしますか。(4,5)
    - 4 弟子たちは答えた、「こんな荒野で、どこからパンを手に入れて、これらの人々にじゅうぶん食べさ

せることができましょうか」。5 イエスが弟子たちに、「パンはいくつあるか」と尋ねられると、「七つあります」と答えた。

- [DQ] 弟子たちは、どのように状況を判断していますか。
- [DQ] イエスのことばから何がわかりますか。

4. イエスは、どうしますか。(6,7)

- 6 そこでイエスは群衆に地にすわるように命じられた。そして七つのパンを取り、感謝してこれをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟子たちはそれを群衆に配った。7 また小さい魚が少しばかりあったので、祝福して、それをも人々に配るようにと言われた。
- [DQ] イエスの行動からは、どのようなことがわかりますか。
- イエスは、何がおこるかを理解していたかはわからないが、神さまに信頼しているように見える。

5. どうなりますか。(8-10)

- 8 彼らは食べて満腹した。そして残ったパンくずを集めると、七かごになった。9 人々の数はおよそ四千人であった。それからイエスは彼らを解散させ、10 すぐ弟子たちと共に舟に乗って、ダルマヌタの地方へ行かれた。
- 満腹。パンくず、七カゴ。

6. 以前の五千人の給食の記事と比較し、気づいたことをあげてみましょう。(6:30-44)

- おきた場所：おそらくベツサイダの近くと、デカポリスのあたり、ユダヤ人が多い地域と、異邦人が多い地域
- 背景：弟子たちも疲れており、群衆は、「飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで」(6:34)、ここでも、「この群衆がかわいそうである。」どちらも、　　：to be moved as to one's bowels, hence to be moved with compassion, have compassion (for the bowels were thought to be the seat of love and pity)。
- 弟子たちとの対話：「あなたがたの手で食物をやりなさい」
- イエスの指示：39 そこでイエスは、みんなを組々に分けて、青草の上にすわらせるように命じられた。40 人々は、あるいは百人ずつ、あるいは五十人ずつ、列をつくってすわった。ここでは、「35 そこでイエスは群衆に、地にすわるようにと命じ、」
- 配布：41 それから、イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさき、弟子たちにわたして配らせ、また、二ひきの魚もみんなにお分けになった。ここでは、「そして七つのパンを取り、感謝してこれをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟子たちは

それを群衆に配った。7 また小さい魚（　　：a little fish）が少しばかりあったので、祝福して、それをも人々に配るようにと言われた。」

- 結果：42 みんなの者は食べて満腹した。43 そこで、パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。44 パンを食べた者は男五千人であった。ここでは、「8 彼らは食べて満腹した。そして残ったパンくずを集めると、七かごになった。9 人々の数はおよそ四千人であった。それからイエスは彼らを解散させ、」

7. 実際には、なにがおこったのだと思いますか。

- 石がパンになったというようなことは書かれていない。（マタイ 4:1-4）
- 実際に、何が起こったか、イエスの手の中で、パンが増えたのか、配っている間に変化が起こったのか、人々の間で、何かが起きたのかは書かれていない。

4.44.6　メモ

- 五千人養いのときとの対比が興味深い。共通なのは、深く憐れんだこと。自助に頼らなかったこと。石をパンに変えることもおそらくなかった。
- 表現が少しずつことなり、明らかな違いがあり、それがこのあとの、マルコ 8:14-21 にもつながっている。
- イエスは、そして、神さまも、深く憐れまれた。そして、それを、弟子たちと協働して、取り組まれた。そして、皆、満腹して、このまま帰らすことはできないと考えられた状態から、人々を安心して、解散させられる状態になったことは、確かめられる。また、残りのパンくずからも、これが、精神的な満足で満たされたのとは、異なるだろうことが推測される。まさに、神の国は来たことが、共有されたのだろう。ここには、現場にいた人が、4000 人、また、前には、5000 人は、いたことになる。その証言は、残されていない。また、この人たちが、これらの奇跡によって、イエスについてきたとは書かれていない。それも、不思議なことではある。

4.45　8:11-13 人々はしるしを欲しがる

11 パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求めた。12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。13 そして、イエスは彼らをあとに残し、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。

4.45.1　マタイ 16:1-4

1 パリサイ人とサドカイ人とが近寄ってきて、イエスを試み、天からのしるしを見せてもらいたいと言った。2 イエスは彼らに言われた、「あなたがたは夕方になると、『空がまっかだから、晴だ』と言い、3 また明け方には『空が曇ってまっかだから、きょうは荒れだ』と言う。あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら、時のしるしを見分けることができないのか。4 邪悪で不義な時代は、しるしを求める。しかし、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられないであろう」。そして、イエスは彼らをあとに残して立ち去られた。

マルコによる福音書 8 章 11-13 節福音書対照表

4.45.2　（参照）マタイ 12:38-42

38 そのとき、律法学者、パリサイ人のうちのある人々がイエスにむかって言った、「先生、わたしたちはあなたから、しるしを見せていただきとうございます」。39 すると、彼らに答えて言われた、「邪悪で不義な時代は、しるしを求める。しかし、預言者ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられないであろう。40 すなわち、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるであろう。41 ニネベの人々が、今の時代の人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、ニネベの人々はヨナの宣教によって悔い改めたからである。しかし見よ、ヨナにまさる者がここにいる。42 南の女王が、今の時代の人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果から、はるばるきたからである。しかし見よ、ソロモンにまさる者がここにいる。

4.45.3　（参照）ルカ 11:29-32

29 さて群衆が群がり集まったので、イエスは語り出された、「この時代は邪悪な時代である。それはしるしを求めるが、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられないであろう。30 というのは、ニネベの人々に対してヨナがしるしとなったように、人の子もこの時代に対してしるしとなるであろう。31 南の女王が、今の時代の人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために、地の果からはるばるきたからである。しかし見よ、ソロモンにまさる者がここにいる。32 ニネベの人々が、今の時代の人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、ニネベの人々はヨナの宣教によって悔い改めたからである。しかし見よ、ヨナにまさる者がここにいる。

4.45.4　問い

1. パリサイ人たちがイエスに議論をしかけた目的は何ですか。（11）

2. パリサイ人が求める「天からのしるし」とはどのようなものなのでしょうか。(11b)

3. イエスの応答からは、どのようなことが読み取れますか。(12)

4. イエスは「しるし」についてどう考えていたのでしょうか。

5. イエスはどうしますか。(13)

6. マタイ 16:1-4 や、その他の関連箇所(マタイ 12:38-42, ルカ 11:29-32)からは「しるし」について、どのようなことがわかりますか。

4.45.5 参照

- 地図 The ministry of Jesus beyond Galilee: https://www.seektheoldpaths.com/Maps/109.jpg
- マルコでの「しるし」についての二回目:マルコ 13 章、マタイ 24 章、ルカ 21 章
  - 13:1 イエスが宮から出て行かれるとき、弟子のひとりが言った、「先生、ごらんなさい。なんという見事な石、なんという立派な建物でしょう」。2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。4 「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。5 そこで、イエスは話しはじめられた、「人に惑わされないように気をつけなさい。
- しるし(　　: a sign, mark, token; a) that by which a person or a thing is distinguished from others and is known, b) a sign, prodigy, portent, i.e. an unusual occurrence, transcending the common course of nature, i) of signs portending remarkable events soon to happen, ii) of miracles and wonders by which God authenticates the men sent by him, or by which men prove that the cause they are pleading is God's)
  - マルコ 8:11, 12 パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求めた。12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。
  - マルコ 13:4 「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。
  - マルコ 13:22 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。
  - マルコ 16:17 信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、

  - マルコ 16:20 弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。〕
  - ルカ 23:8 ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。
  - マタイ 12:38, 39, 16:1, 3, 4, 24:3, 24, 30
  - マタイ 26:48
  - ヨハネ 2:11. 18, 23, 3:2, 4:48, 54, 6:2, 14, 26, 30, 7:31, 9:16, 10:41, 47, 12:18, 37, 20:30
- サドカイ派：名前の由来は不明。ギリシャ語（スンディコイ（財務管理人））のユダヤ化したものか。議会議員の意味。ユダヤの貴族の間に多く、特に宗教上の最高権威者である大祭司はサイドカイ派で、最高議会サンヘドリンの議員の多くもこの派に属していた。パリサイ派のように多くの伝承や規則を認めず、聖書だけを信じ、それも、合理的に解釈して、時のギリシャ・ローマ文化の流れに妥協していた。霊の実在も死人の復活も信じず、髪の聖定や摂理より、人間の自由意志と自由行動を重視。（榊原「マタイによる福音書中巻」）
  - 使徒 23：6-8 パウロは、議員の一部がサドカイ人であり、一部はパリサイ人であるのを見て、議会の中で声を高めて言った、「兄弟たちよ、わたしはパリサイ人であり、パリサイ人の子である。わたしは、死人の復活の望みをいだいていることで、裁判を受けているのである」。7 彼がこう言ったところ、パリサイ人とサドカイ人との間に争論が生じ、会衆は相分れた。8 元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊とかは、いっさい存在しないと言い、パリサイ人は、それらは、みな存在すると主張している。
- Zoom Earth [リンク]

4.45.6 記録

- 日時：2024 年 2 月 8 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）8 名、参加（遠隔）2 名

4.45.7 問いについて

1. パリサイ人たちがイエスに議論をしかけた目的は何ですか。（11）
   - 11 パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求めた。
   - 「出てきて」は、ここにも現れてということであろうか。イエスは、反対者から、距離をおくことはできなかったということか。

- 「試み」「議論」「しるし」いずれも、イエスの活動には、反するものだったのだろう。
- 「試み」からは、イエスの弱点を探ろうとする印象を受け、「議論」からは、自分たちの正当性を主張する雰囲気を感じる。「しるし」は、最初の「試み」とは異なるのか。なにの、しるしだろうか。

2. パリサイ人が求める「天からのしるし」とはどのようなものなのでしょうか。（11b）
   - 11b 天からのしるしを求めた。
   - 「何の」しるしなのか。権威？神の子であること、メシヤであることの天からのしるしだろうか。
   - 出エジプトにまつわるような、紅海が分かれたり、ヨルダン川が分かれたり、パン（マナ）のようなものが降ってきたりだろうか。それとも、エリヤや、エリシャのような預言者と同じようなことをするイエスだろうか。
   - しるし。神の国到来、メシヤ到来（外国（ローマ）の支配からの解放)、非常に驚くべき破壊的なことが起こる
     - ヨルダン川を二つにわけ、一言で城壁を崩壊（自然の法則を無視した、人々を驚かす破壊的な出来事）神の国の到来の無分別
3. イエスの応答からは、どのようなことが読み取れますか。（12）
   - 12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。
   - しるしはいらない。信じるからだろうか。
   - [DQ]「今の時代」と二回いっているが、これは何を意味しているのだろうか。
   - ファリサイ人の態度を批判しているのではなく、「今の時代」といっている。
4. イエスは「しるし」についてどう考えていたのでしょうか。
   - 与えられない。
   - 与えられないのでしょうか、与えられてもそれを天からのものと見分けられないのでしょうか。
   - イエスが伝えている、神の国の到来はどのようなものか、神の息吹でみちている。神を見出すために教会に行くのではなく、あらゆるところに神を見出す
5. イエスはどうしますか。（13）
   - 13 そして、イエスは彼らをあとに残し、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。
   - （参照）マルコ 8:10 10 すぐ弟子たちと共に舟に乗って、ダルマヌタの地方へ行かれた。マタイ 15:39 そこでイエスは群衆を解散させ、舟に乗ってマガダンの地方へ行かれた。

  - 不明の地にいるが、ユダヤ人が多い地域でのことだったのだろう。マタイのマガダンは、KJV では、マグダラ（Magdala）となっており、マグダラとすると、西岸である。カペナウムなどでは、ないが、ユダヤ人が多い地では、パリサイ人もおり、議論をふっかけられる。イエスはそれを好まなかったのだろう。
  - 向こう岸：ダルマヌタ、マガダンは不明だが、そこには、パリサイ人がいる。おそらく、向こう岸は、東岸だろう。そのあと、ベトサイダ、ピリポ・カイザリア。ユダヤ人、パリサイ人を避けている。
- イエスを試みるもの、議論をしかけるもの、しるしを求めるもの、それらを退けるのではなく、自分から退散している。とはいっても、ずっと、退散し続けるわけではない。

6. マタイ 16:1-4 や、その他の関連箇所（マタイ 12:38-42, ルカ 11:29-32）からは「しるし」について、どのようなことがわかりますか。
   - 何らかの「しるし」では、納得できないということか。
   - 同様の質問が、マタイ 12:38-42 にも含まれている。

4.45.8 メモ

- それなりに、弟子たちに含めても、大変になりつつある時期なのだおる。イエスは基本的にしるしを拒否している。
- キリスト教でも、しるしは、探し出そうとしていたように思い出される。それが、ヨナのしるしにあらわれ、この世の終わりのしるしに反映されている。しかし、イエスは、この世の終わりについても、気をつけていなさいが、メッセージであるように思われる。70 年のエルサレム陥落をうけて、さまざまな議論があったことは、容易に想像がつくが。
- イエスのしるしをみて、イエスの神の国の到来を知りたい。
- このあと、イエスは、どうして、また、エルサレムへの歩みを始めるのだろう。
- 科学的観察で天候を見分けることなどを否定はされていない。しかし、当時、わかることは、経験則に多少加わった程度だったのではないだろうか。現代の科学的知見については、イエスはむろん、判断してはいない。しかし、互いに愛し合うことのために、科学的知見をつかうことは、イエスは奨励されるのではないだろうか。
  - Quotation: Florence Nightingale [Link], “To understand God’s thoughts we must study statistics, for these are the measure of his purpose.” [Link]

4.46　8:14-21 ファリサイ派の人々とヘロデのパン種

14 弟子たちはパンを持って来るのを忘れていたので、舟の中にはパン一つしか持ち合わせがなかった。15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。16 弟子たちは、これを自分たちがパンを持っていないためであろうと、互に論じ合った。17 イエスはそれと知って、彼らに言われた、「なぜ、パンがないからだと論じ合っているのか。まだわからないのか、悟らないのか。あなたがたの心は鈍くなっているのか。18 目があっても見えないのか。耳があっても聞えないのか。また思い出さないのか。19 五つのパンをさいて五千人に分けたとき、拾い集めたパンくずは、幾つのかごになったか」。弟子たちは答えた、「十二かごです」。20 「七つのパンを四千人に分けたときには、パンくずを幾つのかごに拾い集めたか」。「七かごです」と答えた。21 そこでイエスは彼らに言われた、「まだ悟らないのか」。

4.46.1　マタイ 16:5-12

5 弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れていた。6 そこでイエスは言われた、「パリサイ人とサドカイ人とのパン種を、よくよく警戒せよ」。7 弟子たちは、これは自分たちがパンを持ってこなかったためであろうと言って、互に論じ合った。8 イエスはそれと知って言われた、「信仰の薄い者たちよ、なぜパンがないからだと互に論じ合っているのか。9 まだわからないのか。覚えていないのか。五つのパンを五千人に分けたとき、幾かご拾ったか。10 また、七つのパンを四千人に分けたとき、幾かご拾ったか。11 わたしが言ったのは、パンについてではないことを、どうして悟らないのか。ただ、パリサイ人とサドカイ人とのパン種を警戒しなさい」。12 そのとき彼らは、イエスが警戒せよと言われたのは、パン種のことではなく、パリサイ人とサドカイ人との教のことであると悟った。

マルコによる福音書 8 章 14-21 節福音書対照表

4.46.2　問い

1. どのような状況で、イエスは弟子たち「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われますか。(14,15)
2. 弟子たちは、イエスのことばをどのように受け取りますか。(16)
3. イエスは、どのように、弟子たちに問いますか。何に気づかせようとしているのでしょうか。(17-20)
4. マタイ 16:5-12 は、なにを伝えていますか。
5. 弟子たちは、何を悟らなければいけなかったのでしょうか。(21)
6. 最初のイエスの言葉は、どんなことに警戒せよと言っているのでしょうか。(15)

4.46.3 参照

- 地図 The ministry of Jesus beyond Galilee: https://www.seektheoldpaths.com/Maps/109.jpg
- パン種（yeast）：[リンク]
- パリサイ派とヘロデ党
  - マルコ 3:6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。
- サドカイ派とパリサイ派
  - 協力：マタイ 16:1 1 パリサイ人とサドカイ人とが近寄ってきて、イエスを試み、天からのしるしを見せてもらいたいと言った。
  - 対立：使徒 23：6-8 パウロは、議員の一部がサドカイ人であり、一部はパリサイ人であるのを見て、議会の中で声を高めて言った、「兄弟たちよ、わたしはパリサイ人であり、パリサイ人の子である。わたしは、死人の復活の望みをいだいていることで、裁判を受けているのである」。7 彼がこう言ったところ、パリサイ人とサドカイ人との間に争論が生じ、会衆は相分れた。8 元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊とかは、いっさい存在しないと言い、パリサイ人は、それらは、みな存在すると主張している。
  - サドカイ：名前の由来は不明。ギリシャ語、スンディコイ（財務管理人）のユダヤ化したものと言われる。つまり、議会議員の意味。Σ　（正しいの可能性も）
    - Σ　: Sadducees = “the righteous” a. a religious party at the time of Christ among the Jews, who denied that the oral law was a revelation of God to the Israelites, and who deemed the written law alone to be obligatory on the nation, as the divine authority. They denied the following doctrines: i) resurrection of the body, ii) immortality of the soul, iii) existence of spirits and angels, iv) divine predestination, affirmed free will
- ヘロデとピラト
  - ルカ 23:12 ヘロデとピラトとは以前は互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。
  - ルカ 9:9 そこでヘロデが言った、「ヨハネはわたしがすでに首を切ったのだが、こうしてうわさされているこの人は、いったい、だれなのだろう」。そしてイエスに会ってみようと思っていた。
- 異邦人とユダヤ人
  - 使徒 14:5 その時、異邦人やユダヤ人が役人たちと一緒になって反対運動を起し、使徒たちをはずかしめ、石で打とうとしたので、

- イザヤ 6:10 あなたはこの民の心を鈍くし、／その耳を聞えにくくし、／その目を閉ざしなさい。これは彼らがその目で見、／その耳で聞き、／その心で悟り、／悔い改めていやされることのないためである」。(マタイ 13:15 参照)
- 1 コリント 2:11-13 いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。12 ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。13 この賜物について語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである。
- ルカ 12:1 その間に、おびただしい群衆が、互に踏み合うほどに群がってきたが、イエスはまず弟子たちに語りはじめられた、「パリサイ人のパン種、すなわち彼らの偽善に気をつけなさい。
- 1 コリント 5:6-7 あなたがたが誇っているのは、よろしくない。あなたがたは、少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか。6 新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたは、事実パン種のない者なのだから。わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ。

4.46.4 記録

- 日時：2024 年 2 月 15 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）6 名

4.46.5 問いについて

1. どのような状況で、イエスは弟子たち「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われますか。（14,15）
   - 14 弟子たちはパンを持って来るのを忘れていたので、舟の中にはパン一つしか持ち合わせがなかった。15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。
   - [DQ] なぜ、弟子たちは、パンを持ってくるのを忘れたのでしょうか。（背景を復習しましょう）
     - 11 パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求めた。12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。13 そして、イエスは彼らをあとに残し、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。
     - ユダヤ人が住んでいる地域に久しぶりに行ったが、落ち着く暇もなく、パリサイ人たちが、イエ

スを試そうとして、天からのしるしをもとめ、議論をしかけてきたので、あまり重要なことはせずに、立ち去ったように思われる。

- [DQ] イエスは、どのような気持ちで、訪問した地を離れたのでしょうか。
  - 群衆との時間も持てなかった。イエスの、深く嘆息したなかに、イエスの心情が表れているように見える。

2. 弟子たちは、イエスのことばをどのように受け取りますか。(16)

- 16 弟子たちは、これを自分たちがパンを持っていないためであろうと、互に論じ合った。
- [DQ] 「互いに論じあった」はどんなことを意味しているでしょうか。
  - イエスは、議論をしかけてきた、パリサイ人たちをさけて、その地を去ってきた。ここで、もしかすると、弟子たちは、責任論などを議論していたのかもしれない。
- [DQ] なぜ、弟子たちは、自分たちがパンを持っていなかったためだと考えたのでしょうか。
  - イエスの関心事、イエスの心の痛みを理解しようとしていない。
  - 自分の責任・役割にだけ、関心を持っている。

3. イエスは、どのように、弟子たちに問いますか。何に気づかせようとしているのでしょうか。(17-20)

- 17 イエスはそれと知って、彼らに言われた、「なぜ、パンがないからだと論じ合っているのか。まだわからないのか、悟らないのか。あなたがたの心は鈍くなっているのか。18 目があっても見えないのか。耳があっても聞えないのか。また思い出さないのか。19 五つのパンをさいて五千人に分けたとき、拾い集めたパンくずは、幾つのかごになったか」。弟子たちは答えた、「十二かごです」。20 「七つのパンを四千人に分けたときには、パンくずを幾つのかごに拾い集めたか」。「七かごです」と答えた。
- [DQ] イエスは、かなり怒っているように見えますが、なにに怒っているのでしょうか。
- [DQ] 「五つのパンをさいて五千人に分けたとき、拾い集めたパンくずは、幾つのかごになったか」「七つのパンを四千人に分けたときには、パンくずを幾つのかごに拾い集めたか」は、何に気づかせようとしているのでしょうか。
  - 最初は、理由も示さず、イライラしているように見えるが、あとでは、一緒に経験したところに戻って、気づかせようとしている。
  - 物質的な不足が問題なのではない。それにとらわれてはいけない。
  - いまも、パンが一つしかない、物質的な欠乏に、こころがとらわれていたら、神様のみこころは理解できない。
- [DQ] 何を思い出させたいのでしょうか。

- イエスはスーパースターで何でもできること、 神様のめぐみに生きれば不足しないこと、 もっとたいせつなことに目を向けるべきこと。

- [DQ] イエスは、いくらでも、パンを生み出してくれることを、悟りなさいと言っているのでしょうか。
  - そうであれば、わたしたちとは、ほとんど、関係のないことのように見える。

4. マタイ 16:5-12 は、なにを伝えていますか。

- マタイでは、6 そこでイエスは言われた、「パリサイ人とサドカイ人とのパン種を、よくよく警戒せよ」。となっている。
  - 「そこで」には順接的な感じを受ける。 Φ Σ マルコでは、 *309 , Φ
  - パリサイ人とサドカイ人となっており、マルコの「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」とは異なる。

- [DQ] なぜ、マタイは、「パリサイ人とサドカイ人」としたのでしょうか。
  - おそらく、最後に鍵がある。「12 そのとき彼らは、イエスが警戒せよと言われたのは、パン種のことではなく、パリサイ人とサドカイ人との教のことであると悟った。」「教え」と理解すると、ヘロデは、そぐわない。

- [DQ] マタイが書いているように、本当に「教え」なのでしょうか。
  - 12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。ここに鍵があるように思う。パリサイ人のような、「イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求め」(11) を非難せず「今の時代」と言っている。
  - 対応箇所のマタイでは「1 パリサイ人とサドカイ人とが近寄ってきて、イエスを試み、天からのしるしを見せてもらいたいと言った。」と、パリサイ人とサドカイ人となっている。

- マタイでは「信仰の薄いものよ」と、信仰の問題にしている。ということは、マタイでは、物質的な欠乏は問題ないと言っているようにも取れる。

- 「11 わたしが言ったのは、パンについてではないことを、どうして悟らないのか。」が、教えを誘導しているようにも見える。マルコには、そのような表現はない。マルコの文章では理解できなかったのだろう。

5. 弟子たちは、何を悟らなければいけなかったのでしょうか。(21)

*309 : i) to draw asunder, divide, distinguish, dispose, order, ii) to open one's self i.e. one's mind, to set forth distinctly, iii) to admonish, order, charge

- 21 そこでイエスは彼らに言われた、「まだ悟らないのか」。
- パンの個数や人の人数ではないこと。 イエスはいくらでも、奇跡を起こされる方であること。 もっとたいせつなものがあること。
- [DQ] 弟子たちは、悟ることができたのでしょうか。
  - おそらく、その一つの解釈がマタイにある。
  - しかし、イエスは、マルコでは「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」。ここには「今の時代」も現れている。

6. 最初のイエスの言葉は、どんなことに警戒せよと言っているのでしょうか。(15)

- 「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」- 今の時代。
- [DQ] パリサイ人の問題点は、何だと、イエスは考えていたのでしょうか。ここまでに書かれていたことを振り返って考えてみましょう。
  - しるしを求める。(マルコ 8:11-13)
  - 神の戒めを棄てて、人間の言い伝えを固く守っている。(マルコ 7:8) 神のみこころを求めようとしない。(マルコ 3:35)
  - 聖霊を冒涜するもの。(マルコ 3:29) マルコではエルサレムから下ってきた律法学者たちとあるが、マタイではファリサイ派の人々。
  - 安息日に善いことをするのは許されているのにたいして、イエスを殺そうとする。(マルコ 3:4,6)
- [DQ] ヘロデの問題点は何だと、イエスは考えていたのでしょうか。ここまでに書かれていたことを振り返って考えてみましょう。
  - マルコでは、イエスが宣教をはじめたのは「ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、『時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ』。」(1:14,15) イエスたちが、カペナウムを離れたのは、ヨハネが殺された頃から。直後に、五千人の給食。ヘロデのことが関わっていることが描写されている。
  - マルコ 6:19,20 そこで、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。それはヘロデが、ヨハネは正しくて聖なる人であることを知って、彼を恐れ、彼に保護を加え、またその教を聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで聞いていたからである。
  - イエスの弟子たちと、ヨハネの弟子たちは、緊密な関係にあった。(ヨハネ 1:35-42, マタイ 9:14)
  - ヨハネを殺したヘロデについても、十分な情報を持っていただろう。
  -「教えを喜びながら、王としての力を捨ててまで、悔い改めて信じはしない。」

- このときの、イエスや、弟子たちについて、あなたはどのような印象を受けますか。

4.46.6 メモ

- イエスは、どのような状況だったのだろう。どのように状況を考えていたのだろう。おそらく、久しぶりに戻った、ガリラヤ（ガリラヤ湖西岸）で、深く嘆息するようなできごとがあり、そそくさと、ほとんど何もしないで、舟で立ち去ったその舟の中での出来事である。「今の時代」について嘆き、パリサイ人の失礼な態度をいかっているわけではない。更に、高いレベルでの嘆きがここにある。
- いろいろと考えた挙げ句、イエスが言った言葉が、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」である。やはり、パリサイ的なもの、ヘロデ的なものに注意せよ。それが、どんどん膨れて、腐らせてしまうと言いたかったのだろう。
- パンを買ってくること（を忘れた）できなかった、弟子たちが、その悔恨に互いに言い合っている有り様は、パリサイ派の議論とは違うにしても、やはり、イエスを、とてもがっかりさせることだったろう。最初は、明らかに、怒ってしまったイエス。こう怒られても、弟子たちがなにかを理解できるわけではない。そこで、次に、覚えていないのかといい、五千人養いと、四千人養いのときの、最後にパンくずをあつめたかご（五千人のときは大きなかご、四千人のときは小さなかご）の数を問うている。一緒に経験した、神の国の到来を思い出させたのだろう。
- マルコでは、どうも、弟子たちは、理解できなかったようである。それをすなおに表現している。（マタイではひとつの理解を書いている。そのために、パン種についても、パリサイ派とサドカイ派のパンだねと変化させ、向こう岸で、しるしをもとめるときも、パリサイ派とサドカイ派としている）考えさせる効果がある。
- 神の国についての理解、神の国の到来のひとつの例として、五千人養いと、四千人養いについてしるし、それは、パリサイがもとめるしるしや、ヘロデ的なものともことなることをも同時に伝えているのだろう。十分理解できているわけではないが、単純に理解してわかったきになってはいけないとも思う。
- この時期の、イエス、次に移っていくイエス。丁寧に見ていきたい。

4.47 8:22-26 ベトサイダで盲人を癒やす

22 そのうちに、彼らはベツサイダに着いた。すると人々が、ひとりの盲人を連れてきて、さわってやっていただきたいとお願いした。23 イエスはこの盲人の手をとって、村の外に連れ出し、その両方の目につばきをつけ、両手を彼に当てて、「何か見えるか」と尋ねられた。24 すると彼は顔を上げて言った、「人が見えます。木のように見えます。歩いているようです」。25 それから、イエスが再び目の上に両手を当てられると、盲人は見つめているうちに、なおってきて、すべてのものがはっきりと見えだした。26 そこでイエスは、「村にはいってはいけない」と言って、彼を家に帰された。

マルコによる福音書 8 章 22-26 節福音書対照表

4.47.1 問い

1. イエスと弟子たちは、どこにつきますか。それはどのような場所ですか。どのような経路で移動したのでしょう。(22a)
2. どのようなひとがイエスのもとに連れてこられますか。(22b)
3. イエスはどうしますか。(23-25)
4. なぜイエスは、このひとに、村にはいることを許されなかったのでしょうか。(26)
5. このときのイエスから、どのようなことがわかりますか。

4.47.2 参照

- 地図 The ministry of Jesus beyond Galilee: https://www.seektheoldpaths.com/Maps/109.jpg
- ベツサイダ (B : Bethsaida = "house of fish (hunting: hunter)", i) a small fishing village on the west shore of Lake Gennesaret, home of Andrew, Peter, Philip and John, ii) a village in lower Gaulanitis on the eastern shore of Lake Gennesaret, not far from where the Jordan empties into it)
  - マルコ 6:45 それからすぐ、イエスは自分で群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダへ先におやりになった。
    - ルカ 9:10 使徒たちは帰ってきて、自分たちのしたことをすべてイエスに話した。それからイエスは彼らを連れて、ベツサイダという町へひそかに退かれた。
    - ヨハネ 6:1 そののち、イエスはガリラヤの海、すなわち、テベリヤ湖の向こう岸へ渡られた。
  - マルコ 8:22 そのうちに、彼らはベツサイダに着いた。すると人々が、ひとりの盲人を連れてきて、さわってやっていただきたいとお願いした。
  - マタイ 11:21 「わざわいだ、コラジンよ。わざわいだ、ベツサイダよ。おまえたちのうちでなされた力あるわざが、もしツロとシドンでなされたなら、彼らはとうの昔に、荒布をまとい灰をかぶって、悔い改めたであろう。
    - ルカ 10:13 わざわいだ、コラジンよ。わざわいだ、ベツサイダよ。おまえたちの中でなされた力あるわざが、もしツロとシドンでなされたなら、彼らはとうの昔に、荒布をまとい灰の中にすわって、悔い改めたであろう。
  - ヨハネ 1:44,45 ピリポは、アンデレとペテロとの町ベツサイダの人であった。45 このピリポがナタ

ナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。

- ヨハネ 12:21 彼らはガリラヤのベツサイダ出であるピリポのところにきて、「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。
- 参照：ヨハネ 5:2 エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダ（B　：Bethesda = “house of mercy” or “flowing water”, the name of a pool near the sheep-gate at Jerusalem, whose waters had curative powers）と呼ばれる池があった。そこには五つの廊があった。

4.47.3 記録

- 日時：2024 年 2 月 22 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）6 名

4.47.4 問いについて

1. イエスと弟子たちは、どこにつきますか。それはどのような場所ですか。どのような経路で移動したのでしょう。（22a）
   - 22a そのうちに、彼らはベツサイダに着いた。
   - [DQ] ベッサイダとはどのような地ですか。過去にはどのようなことがありましたか。
     - 5000 人の給食はここであったのかもしれない。（マルコ 6:45 からすると、ヨルダン川西岸のガリラヤとも考えられる。しかし、ルカ 9:10 は明らかに、ベッサイダ、また、ヨハネ 6:1 の記述からは、ベッサイダの可能性が強い。西岸でも寂しいところはあるだろうが、記述からは、東岸のベッサイダ周辺の可能性が高い。）
     - ヨハネ 1:44,45 アンデレ、ペテロ、ピリポは、ベッサイダの出身。（ヨハネ 12:21 ピリポがベッサイダの出身であること再術）
     - マタイ 11:21、ルカ 10:13 「わざわいだ、コラジンよ。わざわいだ、ベツサイダよ。」ベッサイダで力あるわざがなされたことが強調され、ここには、カペナウムはない。
   - [DQ] なぜ、ここにいるのでしょうか。
     - ユダヤ人がたくさんいる（ファリサイ派の人が多い）地域をさけているように見える。また、このあとは、ピリポ・カイザリアに飛んでいる。舟を係留する地として、人が多いカペナウムではなく、ベッサイダを選んだ可能性もある。

- このあと、ピリポ・カイザリア、6日後に、高い山、ガリラヤを通り、カペナウム（議論）、10章では、ユダヤ地方とヨルダン川の向こう、10:32 エルサレムへ上る途上となる。

2. どのようなひとがイエスのもとに連れてこられますか。（22b）

- 22b すると人々が、ひとりの盲人を連れてきて、さわってやっていただきたいとお願いした。
- [DQ] なぜ人々が、この盲人を連れてきたのでしょうか。
  - 目が見えないから、手を引いてきた可能性もある。
  - 人々が、強いてそれをしたのかもしれない。このひとが、無理だと思っている時に。もう、これでいいと思っているときに。
  - ベッサイダは、イエスが、何度も来ている場所で、かつ小さな村でもある。

3. イエスはどうしますか。（23-25）

- 23 イエスはこの盲人の手をとって、村の外に連れ出し、その両方の目につばきをつけ、両手を彼に当てて、「何か見えるか」と尋ねられた。24 すると彼は顔を上げて[*310]言った、「人が見えます。木のように見えます。歩いているようです」。25 それから、イエスが再び目の上に両手を当てられると、盲人は見つめているうち[*311]に、なおってきて、すべてのものがはっきりと見えだした。
- [DQ] なぜ、イエスは、この盲人の手をとって、村の外に連れ出したのでしょうか。
- [DQ] なぜ、一回で、治さなかった、治らなかったのでしょうか。
- [DQ] なぜ、このように、記録されたのでしょうか。イエスが、さわられると、癒やされたではいけないのでしょうか。
  -「何か見えるか」と尋ねている。イエスがわからないことがあると考えるのが自然。
  -「なおってきて」には、イエスが、何回もさわるとそのたびに、良くなったと言うより、回復力、神様の力なあど、あるはたらきがそこにあるような印象をうける。

4. なぜイエスは、このひとに、村にはいることを許されなかったのでしょうか。（26）

- 26 そこでイエスは、「村にはいってはいけない」[*312]と言って、彼を家に帰された。
- 旅の途中で、寄っただけで、村の人に知られたくなかった。大げさにしたくなかった。いやしが中心的なしごとだと思われたくなかった。
- [DQ] 家はどこにあったのでしょうか。

---

*310 「みえるようになって」との翻訳もある。
*311 未完了形：動作の継続。
*312 「村でだれにも語らないように」との写本もある。

  - おそらく、村から程遠くない、村の外。
- [DQ] どうやって帰ってたのでしょうか。
  - 目が見えるようになったから？おそらく、ちょっと違うことが、そこに働いているのだろう。

5. このときのイエスから、どのようなことがわかりますか。
   - Available であることは、変わっていないが、どんどん、癒やす、村人の要求に答える感じではない。
   - イエスが、何を考えていたかは、あまりよくはわからない。

4.47.5　メモ

- マルコ 7 章 31-37 節　耳が聞こえず舌の回らない人を癒やすとの類似を指摘する人もいる。
- 長い、逃避行の中で、ユダヤ人のいる地域から、舟で移動している。どこかに係留して、ベッサイダに向かった可能性もあるが、おそらく、ペテロや、アンデレ、ピリポの故郷でもある、ベッサイダまで舟で戻ったのだろう。ここから、次は、ピリポ・カイザリアに向かう。ヨルダン川西側は、避けたように見える。
- この目の見えない人は、人々に連れてこられる。目が見えないからそうされた可能性もあるが、促されて来たのかもしれない。また、今度、読んでいて考えたのは、もしかすると、このとき一回の治療ではないかもしれないとも思った。縮約して書かれているのかもしれないということである。段階的に治ったこと、群衆や人々からは離れてなされたことも書かれているからである。このあとは、山上の変貌もあり、エルサレムに向かい始める。ベッサイダへはこれが最後だったかもしれないことを考えると、ここで、完全に癒やされたことは印象深い。
- マタイ、ルカに入っていないことの意味を考えるのも、興味深い。単純ではない、いやしの記事は不要だったのかもしれない。流れとして、なぜここにベッサイダの記事が入るのかも、不自然に思えたかもしれない。しかし、イエスらしさが、ペトロの目撃証言として、記されているのが、興味深い。

4.48　8:27-30 ペトロ、イエスがメシアであると告白する

27 さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられたが、その途中で、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は、わたしをだれと言っているか」。28 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。29 そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。30 するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。

4.48.1　マタイ 16:13-20

13 イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は人の子をだ
れと言っているか」。14 彼らは言った、「ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかし、ほか
の人たちは、エリヤだと言い、また、エレミヤあるいは預言者のひとりだ、と言っている者もあります」。
15 そこでイエスは彼らに言われた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。16 シモン・ペテ
ロが答えて言った、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」。17 すると、イエスは彼にむかって言われ
た、「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天
にいますわたしの父である。18 そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたし
はこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。19 わたしは、あなた
に天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解く
ことは天でも解かれるであろう」。20 そのとき、イエスは、自分がキリストであることをだれにも言って
はいけないと、弟子たちを戒められた。

4.48.2　ルカ 9:18-21

18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちが近くにいたので、彼らに尋ねて言われた、「群衆は
わたしをだれと言っているか」。19 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。しか
しほかの人たちは、エリヤだと言い、また昔の預言者のひとりが復活したのだと、言っている者もありま
す」。20 彼らに言われた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「神
のキリストです」。21 イエスは彼らを戒め、この事をだれにも言うなと命じ、そして言われた、

マルコによる福音書 8 章 27-30 節福音書対照表

4.48.3　（参考）ヨハネ 6:59-71

59 これらのことは、イエスがカペナウムの会堂で教えておられたときに言われたものである。60 弟子た
ちのうちの多くの者は、これを聞いて言った、「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておら
れようか」。61 しかしイエスは、弟子たちがそのことでつぶやいているのを見破って、彼らに言われた、
「このことがあなたがたのつまずきになるのか。62 それでは、もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、
どうなるのか。63 人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話
した言葉は霊であり、また命である。64 しかし、あなたがたの中には信じない者がいる」。イエスは、初
めから、だれが信じないか、また、だれが彼を裏切るかを知っておられたのである。65 そしてイエスは言
われた、「それだから、父が与えて下さった者でなければ、わたしに来ることはできないと、言ったのであ
る」。66　それ以来、多くの弟子たちは去っていって、もはやイエスと行動を共にしなかった。67 そこで
イエスは十二弟子に言われた、「あなたがたも去ろうとするのか」。68 シモン・ペテロが答えた、「主よ、
わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。69 わたした

ちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」。70 イエスは彼らに答えられた、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」。71 これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

4.48.4 問い

1. どのようなときに、イエスは、弟子たちに、自分について人々がだれだと言っているかと聞いていますか。（27）
2. 弟子たちは、どのように答えますか。（28）
3. それに対して、イエスはどのように尋ねますか。（29a）
4. だれがどのように答えますか。（29b）
5. イエスは、なぜ、自分のことをだれにも言ってはいけないと、弟子たちを戒めるのでしょうか。（30）
6. マタイや、ルカからはさらにどのようなことがわかりますか。
7. 弟子たちにとって、イエスは、どのような存在だったのでしょうか。

4.48.5 参照

- ヨハネ 6:59-71
- 地図 The ministry of Jesus beyond Galilee: https://www.seektheoldpaths.com/Maps/109.jpg
- ピリポ・カイザリア
  - ベツサイダから北へ 41km、ガリラヤ湖面から 520m 上。海抜 350m
  - パニアスと呼ばれ、パネアスという山に洞窟があり、パン（森・牧童の神）とニンフ（川、泉、洞穴、林の神）の誕生の地
  - ヘロデ・ピリポによって建てられた街で、地中海沿岸にある、カイザリアと区別するためにピリポ・カイザリアと呼ばれる。
- エリヤ
  - マラキ 4:5,6（3:23）見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。6 彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。
- キリスト（ギリシャ語）、メシヤ（ヘブル語）：油注がれたもの
  - 旧約聖書では、祭司（出エジプト記 29:7, 21）、王（サムエル記上 10:1）、預言者（列王記上 19:16）などが油を注がれた。特に、ダビデの子孫から王としてのメシヤが現れるという期待があった。（サムエル記下 7:12,13、詩篇 18:50、89:19-37、132:11,12、イザヤ 9:6,7、11:1-5、アモス 9:11,12）。この

期待は中間時代にも受け継がれ、マカベヤ時代のユダヤ人たちの間で、レビの部族から祭司であり王であるメシヤが出るとの期待が高まった。しかし、ダビデの子孫としてのメシヤに対する期待も依然として存続していた。（ソロモンの詩篇 17:5-8, 23-28, 18:6-8）。クムラン教団では、祭司としてのメシヤと、王としてのメシヤという、二人のメシヤに対する期待があった。イエスの時代にも、人々はダビデの王国を回復してくれるメシヤに対する期待を抱いた。しかし、このメシヤは、地上における、ダビデ王国を政治的に確立する人物であり、武力を持って、独立を獲得するものと考えられていた。イエスは、メシヤであったが、それは、地上の王国ではなく、霊の王国を確立し、武力による独立ではなく、十字架上のあがないの死によって、罪の力から霊を解放するかたであった。したがって、当時ユダヤ人の間に一般的に使われていた「メシヤ」という称号は誤った印象を与えるので、イエスはこれを用いることを避け「人の子」という表現を好んで用いた。しかし、旧約の預言において約束されていたメシヤの約束を真に成就するものとして、イエスは来られた。この意味において。ペテロの答えは正しかった。（マタイ 16:17）。イエスの使命は、真に神のことばを語る預言者であり、霊のイスラエルの罪を贖う祭司であり、新しい霊のイスラエル王国（キリスト者の群れ）を建設し支配する王である。しかし、ペテロのすぐあとの態度（32）を見ると、彼はイエスをキリストとして告白しながらも、依然として当時のユダヤ人と同様に、地上的、政治的メシヤとして考えていたことがわかる。（いのちのことば社「新聖書注解」マルコによる福音書山口昇）

- イザヤ 9:6,7 ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、／ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、／その名は、「霊妙なる議士、大能の神、／とこしえの父、平和の君」ととなえられる。7 そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、／ダビデの位に座して、その国を治め、／今より後、とこしえに公平と正義とをもって／これを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである。
- イザヤ 11:1-10 エッサイの株から一つの芽が出、／その根から一つの若枝が生えて実を結び、2 その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、／主を知る知識と主を恐れる霊である。3 彼は主を恐れることを楽しみとし、／その目の見るところによって、さばきをなさず、／その耳の聞くところによって、定めをなさず、4 正義をもって貧しい者をさばき、／公平をもって国のうちの／柔和な者のために定めをなし、／その口のむちをもって国を撃ち、／そのくちびるの息をもって悪しき者を殺す。5 正義はその腰の帯となり、／忠信はその身の帯となる。6 おおかみは小羊と共にやどり、／ひょうは子やぎと共に伏し、／子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、／小さいわらべに導かれ、7 雌牛と熊とは食い物を共にし、／牛の子と熊の子と共に伏し、／ししは牛のようにわらを食い、8 乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、／乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。9 彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、／やぶることがない。水が海をおおっているように、／主を知る知識が地に満ちるからである。10 その日、エッサイの根が立って、もろもろの民の旗となり、もろもろの国びとはこれに尋ね求め、その置かれる所に栄光がある。
- エレミヤ 22:4 もしあなたがたがこの言葉を真実に行うならば、ダビデの位にすわる王とその家臣、およびその民は、車と馬に乗って、この家の門にはいることができる。
- エレミヤ 23:5 主は仰せられる、見よ、わたしがダビデのために一つの正しい枝を起す日がくる。彼は王となって世を治め、栄えて、公平と正義を世に行う。
- エレミヤ 30:9 彼らはその神、主と、わたしが彼らのために立てるその王ダビデに仕える。

4.48.6　記録

- 日時：2024 年 2 月 29 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）7 名

4.48.7　問いについて

1. どのようなときに、イエスは、弟子たちに、自分について人々がだれだと言っているかと聞いていますか。（27）
    - 27 さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられたが、その途中で、弟子たちに尋ねて（繰り返し）言われた、「人々は、わたしをだれと言っているか」。
    - [DQ] なぜ、ピリポ・カイザリヤの村々への途中で、尋ねたのでしょうか。
        - ガリラヤから離れ、弟子たちだけがいるところで、聞いたのかもしれない。
        - パリサイ派の人などがいるところでの、議論とは違う場で、おちついて弟子たちに問いたかったのでは。
    - [DQ] なぜ、人々がだれだと言っているかを、まず聞いたのでしょうか。
        - ある程度は、理解していたと思うが、全体像を把握しておきたいと思ったのかもしれない。
        - パリサイ人などは、別として、人々の考えは様々だったろう。それを聞いておきたかったように思う。
    - 汚れた霊に憑かれたひと「神の聖者」（1:24）汚れた霊ども「神の子」（3:11）
    - エリヤ：マラキ 3:23 見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。
2. 弟子たちは、どのように答えますか。（28）
    - 28 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。
        - 過去の偉人の生まれ変わりまたは復活。旧約の預言の成就としてのメシヤの前ぶれ。
    - [DQ] これまでには、イエスについての人々の考えは、どのように書かれていましたか。
        - 6:14,15 14 さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。ある人々は「バプテスマのヨハネが、死人の中からよみがえってきたのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いて

いるのだ」と言い、15 他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者のような預言者だ」と言った。

  - ルカ 9:7,8 7 さて、領主ヘロデはいろいろな出来事を耳にして、あわて惑っていた。それは、ある人たちは、ヨハネが死人の中からよみがえったと言い、8 またある人たちは、エリヤが現れたと言い、またほかの人たちは、昔の預言者のひとりが復活したのだと言っていたからである。（対応するマタイでは、バプテスマのヨハネのみ）

- [DQ] これまで、弟子たちは、どのように表現していましたか。

3. それに対して、イエスはどのように尋ねますか。（29a）

- 29a そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。
- [DQ] イエスは、どのような応答を期待・想定していたのでしょうか。
- [DQ] 弟子たちは、この問いを、これまで考えてきていたでしょうか。
  - つねに問うていた（自問していた）のではないだろうか。
- [DQ] イエスは、なぜ、ここで、この時点で、このような問を弟子たちにしたのでしょうか。
  - イエス自身、弟子たちが、どこにいるのか、まだよくわかっていなかったかもしれない。
- [DQ] これまで、弟子たちは、どのように表現していましたか。
  - 4:41 一体この方はどなたなのだろう。風も、湖さえも従わせるとは。
- [DQ] イエスの苦しみは、どのようなものだったのでしょうか。
  - 自分は神様の使命を果たしうるのだろうか。現状が神様の御心なのだろうか。

4. だれがどのように答えますか。（29b）

- 29b ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。
  -「キリスト」という言葉は、どのような意味を持っているでしょうか。
- [DQ] これは「正解」、期待していた答えなのでしょうか。
  - そうかもしれないが、正確ではないのだろう。キリストということばは曖昧だから。
  - なぜ、ペテロは、キリストと答えたのでしょうか。ほかにも、答えはあるかもしれない。「神の子」
  - メシヤ、キリストについての真実を語る前に、弟子たちが、キリストとして受け入れていることが大切だったのかもしれない。

5. イエスは、なぜ、自分のことをだれにも言ってはいけないと、弟子たちを戒めるのでしょうか。（30）

- 30 するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。
- [DQ] イエスが、メシヤだということを言ってはいけないということでしょうか。
- [DQ] イエスが、恐れていたのはどのようなことでしょうか。
- [DQ] 「自分のことをだれにも言ってはいけない」ことは期限があるのでしょうか。
  - マルコ 9:9 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。
- 過去に、伝えるなと言った例。家に帰れも、それに近い。
  - 黙れ（1:25)、ものを言うことを許さない（1:34)、規定の病が癒やされた人（1:44)、汚れた霊（3:11)、ヤイロ（5:43)、耳の聞こえない人口の聞けない人（7:36）

6. マタイや、ルカからはさらにどのようなことがわかりますか。

- マタイ 16:13 イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は人の子をだれと言っているか」。
  - マルコでは、単に、その場に行った以上の内容が含まれているように見える。
    - 8:27 さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられたが、その途中で、弟子たちに尋ねて（繰り返し）言われた、「人々は、わたしをだれと言っているか」。
- ルカ 9:18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちが近くにいたので、彼らに尋ねて言われた、「群衆はわたしをだれと言っているか」。
  - 祈っているときに、尋ねたは、少し不自然に感じるが、おそらく、重要な決断を暗示しているのだろう。
- マタイ 16:14b また、エレミヤあるいは預言者のひとりだ、と言っている者もあります
  - [DQ] 預言者のひとりのような人だと言っているのか、または、エレミヤや旧約の預言者が復活したと言っているのか、
    - ルカ 9:19 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。しかしほかの人たちは、エリヤだと言い、また昔の預言者のひとりが復活したのだと、言っている者もあります」。
- マタイ 16:16 シモン・ペテロが答えて言った、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」。
  - このあとに、教会のことなど続く。
    - マタイ 16:17 すると、イエスは彼にむかって言われた、「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父であ

る。18 そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。19 わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」。

* 鍵（ a key: a) since the keeper of the keys has the power to open and to shut, b) metaph. in the NT to denote power and authority of various kinds）の複数形：
  - 黙示録 1:18 また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている。
  - 黙示録 3:7 ヒラデルヒヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『聖なる者、まことなる者、ダビデのかぎを持つ者、開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者が、次のように言われる。
  - イザヤ 22:22 わたしはまたダビデの家のかぎを彼の肩に置く。彼が開けば閉じる者なく、彼が閉じれば開く者はない。

- [DQ] なぜマタイには、このような記述が入っており、マルコや、ルカには入っていないのでしょうか。
- マタイ 14:33 舟の中にいた者たちはイエスを拝して、「ほんとうに、あなたは神の子です」と言った。
- マタイではこれが正解のような表現になっている。

7. 弟子たちにとって、イエスは、どのような存在だったのでしょうか。
   - [DQ] 人々の評価「バプテスマのヨハネ」「エリヤ」「預言者のひとり」だと思っていたでしょうか。
   - [DQ] なぜ人々の評価とは異なるのでしょうか。
   - [DQ] どのようなことによって、イエスをみていたのでしょうか。

4.48.8 メモ

- 地図を見ると、以前に、ツロ（7:24-30）、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け（7:31）ガリラヤの海べにこられたときに、経路からして、ピリポ・カイザリアを通り過ぎたかもしれない。そのような、ガリラヤの北での活動が、マタイ 11:21 「わざわいだ、コラジンよ。わざわいだ、ベツサイダよ。おまえたちのうちでなされた力あるわざが、もしツロとシドンでなされたなら、彼らはとうの昔に、荒布をまとい灰をかぶって、悔い改めたであろう。（ルカ 10:13）に反映しているのかもしれない。
- ここから大きな変化がある。イエスは、ヨハネ 2:22-25 「それで、イエスが死人の中からよみがえったと

き、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉とを信じた。23 過越の祭の間、イエスがエルサレムに滞在しておられたとき、多くの人々は、その行われたしるしを見て、イエスの名を信じた。24 しかしイエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。それは、すべての人を知っておられ、25 また人についてあかしする者を、必要とされなかったからである。それは、ご自身人の心の中にあることを知っておられたからである。」からもわかるように、ペテロがどの程度理解できていたかも知っていたろう。しかし、マタイにかかれているほどではないが、是としたのだろう。これから、その告白したことばのように、生きることについて、学んでいくことになる。告白は、ローマ 10:9,10 のように、大切ではあっても、それで完結ではない。

- ヨハネ 1:41 彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。ヨハネでは、すでに、シモン・ペテロの兄弟アンデレが、このように、メシヤであるとの証言をしている。バプテスマのヨハネの弟子だったアンデレにとって、このような証言は自然だったのだろうか。

4.49 8:31-38; 9:1 イエス、死と復活を予告する

31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32 しかもあからさまに、この事を話された。すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめたので、33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。34 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。36 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。37 また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。38 邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。9:1 また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

4.49.1 マタイ 16:21-28

21 この時から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられた。22 すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめ、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません」と言った。23 イエスは振り向いて、ペテロに言われた、「サタンよ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。24 それからイエスは弟子たちに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。25 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の

命を失う者は、それを見いだすであろう。26 たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。27 人の子は父の栄光のうちに、御使たちを従えて来るが、その時には、実際のおこないに応じて、それぞれに報いるであろう。28 よく聞いておくがよい、人の子が御国の力をもって来るのを見るまでは、死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

4.49.2 ルカ 9:22-27

22 「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日目によみがえる」。23 それから、みんなの者に言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。24 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救うであろう。25 人が全世界をもうけても、自分自身を失いまたは損したら、なんの得になろうか。26 わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、自分の栄光と、父と聖なる御使との栄光のうちに現れて来るとき、その者を恥じるであろう。27 よく聞いておくがよい、神の国を見るまでは、死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

マルコによる福音書 8 章 31-38 節, 9 章 1 節福音書対照表

4.49.3 問い

1. 背景を復習しましょう。どのようなことがありましたか。
2. イエスが伝えたことはどのようなことでしたか。(31,32a)
3. ペテロはどうしますか。また、イエスはそれに対してどのように応じますか。(32b,33)
4. イエスについてきたいと思うものに、どのようなことを伝えていますか。(34-37)
5. 自分を捨て、自分の十字架を負って、イエスに従っていくとはどのようなことでしょうか。(34)
6. 最後にイエスはどのようなことを語っていますか。(38,9:1)

4.49.4 参照

- この出来事から逆順にエピソードを段落ごとにたどる。福音書対照表
  - マルコ：8:27-30 ペトロ、イエスがメシアであること告白する。8:22-26 ベトサイダで盲人を癒やす。8:14-21 ファリサイ派の人々とヘロデのパン種。8:11-13 人々はしるしを欲しがる。8:1-10 四千人に食べ物を与える。7:31-37 耳が聞こえず舌の回らないひとを癒やす。7:24-30 シリア・フェニキアの女の信仰。7:1-22 昔の人の言い伝え。6:53-56 ゲネサレトで病人を癒やす。6:45-52 湖の上を歩く。

6:30-44 五千人に食べ物を与える。6:14-29 洗礼者ヨハネ、殺される。6:7-13 十二人を派遣する。6:1-6 ナザレで受け入れられない。

  - マタイ：16:9-25 ペトロ、イエスがメシアであると告白する。16:5-12 ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種。16:1-4 人々はしるしを欲しがる。15:32-39 四千人に食べ物を与える。15:29-31 大勢の病人を癒やす。15:21-28 カナンの女の信仰。15:1-20 昔の人の言い伝え。14:34-36 ゲネサレトで病人を癒やす。14:22-33 湖の上を歩く。14:13-21 五千人に食べ物を与える。14:1-12 洗礼者ヨハネ、殺される。14:53-58 ナザレで受け入れられない。

  - ルカ：9:18-20 ペトロ、イエスがメシアであると告白する。9:10-17 五千人に食べ物を与える。9:7-9 ヘロデ、困惑する。9:1-6 十二人を派遣する。

  - まとめ：マルコとマタイは、記述内容な多少ことなるが、ほぼ同じ時系列になっている。十二人の派遣の位置はマタイでは、10:1, 5-15 に置かれ、洗礼者ヨハネが殺される記事や、五千人に食べ物を食べさせる記事とは、分けている。ルカでは、ガリラヤから離れて、異邦人の地などを彷徨する記事は省略され、五千人に食べ物を与える記事の直後に、ペトロ、イエスがメシアであると告白する記事を置いている。この記事のあと、9 章の終わりまでは、マルコ、マタイ、ルカはほぼ並行して進む。

- マタイ 16:21 「この時から」

  - マタイ 4:17 この時からイエスは教を宣べはじめて言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた」。

- 死と復活の予告

  - 8:31-32a 31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32a しかもあからさまに、この事を話された。

  - 9:30-32 30 それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。

  - 10:32-34 32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。

- イザヤ 52:13-53:12

  - 52:13 見よ、わがしもべは栄える。彼は高められ、あげられ、ひじょうに高くなる。14 多くの人が彼

に驚いたように――／彼の顔だちは、そこなわれて人と異なり、／その姿は人の子と異なっていたからである――15 彼は多くの国民を驚かす。王たちは彼のゆえに口をつむぐ。それは彼らがまだ伝えられなかったことを見、／まだ聞かなかったことを悟るからだ。53:1 だれがわれわれの聞いたことを／信じ得たか。主の腕は、だれにあらわれたか。2 彼は主の前に若木のように、／かわいた土から出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、／われわれの慕うべき美しさもない。3 彼は侮られて人に捨てられ、／悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、／彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。4 まことに彼はわれわれの病を負い、／われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、／彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。5 しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、／われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、／われわれに平安を与え、／その打たれた傷によって、／われわれはいやされたのだ。6 われわれはみな羊のように迷って、／おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、／彼の上におかれた。7 彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、／口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、／また毛を切る者の前に黙っている羊のように、／口を開かなかった。8 彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、／彼はわが民のとがのために打たれて、／生けるものの地から断たれたのだと。9 彼は暴虐を行わず、／その口には偽りがなかったけれども、／その墓は悪しき者と共に設けられ、／その塚は悪をなす者と共にあった。10 しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、／主は彼を悩まされた。彼が自分を、とがの供え物となすとき、／その子孫を見ることができ、／その命をながくすることができる。かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。11 彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。義なるわがしもべはその知識によって、／多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。12 それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に／物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、／とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、／とがある者のためにとりなしをした。

- イエスの受難についての記述
  - マルコ 2:19, 20 するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。20 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう。
    - マタイ 9:15 するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒にいる間は、悲しんでおられようか。しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その時には断食をするであろう。
  - マルコ 3:6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。
  - マタイ 10:38, 39 また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。39 自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。
  - マタイ 12:40 すなわち、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中に

いるであろう。

  - ヨハネ 2:19 イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。

- パウロのエルサレム行きについて（使徒 21:10-14）

4.49.5 記録

- 日時：2024 年 4 月 11 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）4 名

4.49.6 問いについて

1. 背景を復習しましょう。どのようなことがありましたか。
   - 6 章から 9 章への構成を復習。ルカとの違いを確認。（参照）
   - 8:27-30 ペトロ、イエスがメシアであると告白するの直後。
     - 27 さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられたが、その途中で、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は、わたしをだれと言っているか」。28 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。29 そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。30 するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。
   - 「するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。」に続いている。
2. イエスが伝えたことはどのようなことでしたか。（31,32a）
   - 31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32 しかもあからさまに、この事を話された。
   - [DQ] 人の子とは誰のことでしょうか。弟子たちは、誰のことかわかったのでしょうか。
     - このあとのペテロの反応から、それがイエスであることを、弟子たちは理解していたろう。
     - 人の子（マルコ 15 件）：2:10, 28, 3:28, 8:38, 9:9, 12, 31, 10:33, 45, 13:26, 29, 14:21, 41, 62。マタイ 30 件、ルカ 26 件、ヨハネ 12 件、使徒 7:56、（黙示録 1:13, 14:14 人の子のような者）
   - [DQ] 具体的には、どのようなことを、どのような順番で述べていますか。

  - 多くの苦しみを受け、 長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、 殺され、 三日の後によみがえる（べきこと）

- [DQ] 「あらかさまにこの事を話された」とはどのようなことでしょうか。
  - だれにでも分かる言葉でということだろうか。

3. ペテロはどうしますか。また、イエスはそれに対してどのように応じますか。（32b,33）

- 32b すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめたので、33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。
- この記事は、ルカには欠けている。
- [DQ] ペテロは、なぜいさめたのでしょうか。それは、何を意味しているのでしょうか。
  - 「いさめる」 i) to show honour to, to honour, ii) to raise the price of, iii) to adjudge, award, in the sense of merited penalty, iv) to tax with fault, rate, chide, rebuke, reprove, censure severely; to admonish or charge sharply: Mark 1:25, 3:12, 4:39, 8:30, 32, 33, 9:25, 10:13, 48
  - 8:30 するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。
  - 8:30, 32b の対比からも、相互理解ができていないことがわかる。
  - イエスも言っているように、人間的な思いなのだろう。イエスがキリストであることは、神の思いであり、それが人の思いとなるかどうかが鍵なのだろう。
- マタイ 16:22 22 すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめ、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません」と言った。
  - 少し深く読むと、それが、神様のみこころではないことを言っているのだろう。
  - [DQ] イエスのことばの、なにが、ペテロにとって「とんでもないこと」なのでしょうか。
- [DQ] ペトロや弟子たちは「イエスがキリストである」ことをどのように考えていたのでしょうか。
  - 開放者。征服者。ダビデのような王。
  - [DQ] あなたは、救い主にどのようなことを期待しますか。
- [DQ] なぜ、イエスは、振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と言われたのでしょうか。
  - 生き生きと描かれている。直接的には、ペテロに対してであっても、本質的には、弟子たち全員、すなわち、わたしたちへのメッセージなのだろう。

- [DQ] なぜ、これほど、厳しい言葉で、ペテロを叱ったのでしょうか。
  - イエス自身も含めて、もっとも警戒していたことなのかもしれない。
  - マタイ 4:8-10 次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて 9 言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。10 するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。
  - この世を去ること（死）を望んでいなかったのかもしれない。
  - [DQ] ペテロが正しいということはあり得なかったのだろうか。

4. イエスについてきたいと思うものに、どのようなことを伝えていますか。(34-37)

- 34 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。36 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。37 また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。
- [DQ] だれに向かって言っていますか。
  -「それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて」弟子たちだけではなく、群衆もそこにいたことになる。(ルカでも「みんなの者に」(9:23)。マタイでは「弟子たちに」(16:24))
- 「イエスについてきたい」と願う人にむけて語っている。まとめると
  - 自分を捨て、 自分の十字架を負うて、 わたしに従ってきなさい。
  - いのちがたいせつ。
- 「だれでもわたしについてきたいと思うなら」
  - 弟子なら師についていくのは当然だとも言えるが、これは裏返すとイエスがどのようにこれから生きていこうかということを語っているのだろう。
- [DQ] 前半 34 節と、後半 35-37 の関係はどうなっているのだろうか。
- [DQ] ここで言われている「命」とは「命を失う」「命を救う」とは、なんだろうか。
  - 命は、代価を払って買い戻すことができないもの。
- [DQ] 「福音のため」とは何を意味するのだろうか。
  - 伝道して、反対にあい、迫害されて殺されることでしょうか。

– 「福音」とは何なのでしょうか。「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」(1:15)

5. 自分を捨て、自分の十字架を負って、イエスに従っていくとはどのようなことでしょうか。(34)

- 「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」
- [DQ] 「自分の十字架」とは何なのでしょうか。
  - イエスの十字架のように、それぞれに、十字架があるということなのだろう。

6. 最後にイエスはどのようなことを語っていますか。(38,9:1)

- 38 邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。9:1 また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。
- 後に追加されたものなのではないかと思わされる。あくまでも、核は、前半の部分であるように思われる。(2 回目、3 回目の告知と比較。唐突で、このことについては、何も語られていない。弟子たちの期待の現れ。しかし、おそらくなにか関連したことは言われたのかもしれない。)
  - マタイ 16:27,28 27 人の子は父の栄光のうちに、御使たちを従えて来るが、その時には、実際のおこないに応じて、それぞれに報いるであろう。28 よく聞いておくがよい、人の子が御国の力をもって来るのを見るまでは、死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。
  - ルカ 9:26,27 26 わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、自分の栄光と、父と聖なる御使との栄光のうちに現れて来るとき、その者を恥じるであろう。27 よく聞いておくがよい、神の国を見るまでは、死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。
  - 参照：ダニエル 7:13,14 わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、／見よ、人の子のような者が、／天の雲に乗ってきて、／日の老いたる者のもとに来ると、／その前に導かれた。14 彼に主権と光栄と国とを賜い、／諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、／なくなることがなく、／その国は滅びることがない。
- [DQ] これは、いつのことを言っているのでしょうか。
  - この次の記事の山上変貌
  - 終末の再臨
  - キリスト教会の設立をとおして、神の国の顕現を見る。
    - マタイ 16:18,19 18 そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。19 わ

たしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」。

4.49.7 メモ

- 3 つの部分に分かれている。
  1. 弟子への受難と死と復活の予告と、それをいさめるペテロの叱責（31-33）
  2. 弟子と群衆にむけたイエスに従うことについてのチャンレンジ（34-37）
  3. イエスとその言葉を恥じるものについて（38-39）
  - 3 は、要約も難しく、二文が関係しているのかどうかも不明である。
  - 死と復活の予告はあとからじっくりする選択肢もある。（二回目：9:30-32、三回目：10:32-34 は独立した学びをする予定）
  - 最後の部分もあとからじっくり考え、基本的な枠組みと、中心部分に集中するのがよいように思われる。（13 章で、神殿の崩壊の予告のあと、弟子の質問にこたえて、終末の予兆について語る）
- このエピソードのあと、山上の変貌の記事があり、ふもとでの、悪霊に憑かれた子を癒やす記事があり、ガリラヤに入り、カファルナウムにも行き、エルサレムに向かう。（10 章から）これまでとは雰囲気が変わっている。
- 「35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。」ここに非対称がある。自分の命を失おうとするわけではない。どのように、失うことになるのかは不明。
- イエスに従っていくものの大変さが書かれているようにも思うが、神の国は近い、このことを経験しながら生きることができるのは、まさに、福音に生きることであり、幸せなことなのだろう。

4.50 9:2-13 イエスの姿が変わる

2 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの
目の前でイエスの姿が変り、3 その衣は真白く輝き、どんな布さらしでも、それほどに白くすることはで
きないくらいになった。4 すると、エリヤがモーセと共に彼らに現れて、イエスと語り合っていた。5 ペ
テロはイエスにむかって言った、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わ
たしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのた
めに」。6 そう言ったのは、みんなの者が非常に恐れていたので、ペテロは何を言ってよいか、わからなか
ったからである。7 すると、雲がわき起って彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった、「これ
はわたしの愛する子である。これに聞け」。8 彼らは急いで見まわしたが、もはやだれも見えず、ただイエ

スだけが、自分たちと一緒におられた。9 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。10 彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。11 そしてイエスに尋ねた、「なぜ、律法学者たちは、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか」。12 イエスは言われた、「確かに、エリヤが先にきて、万事を元どおりに改める。しかし、人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか。13 しかしあなたがたに言っておく、エリヤはすでにきたのだ。そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった」。

4.50.1 マタイ 17:1-13

1 六日ののち、イエスはペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。2 ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった。3 すると、見よ、モーセとエリヤが彼らに現れて、イエスと語り合っていた。4 ペテロはイエスにむかって言った、「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。もし、おさしつかえなければ、わたしはここに小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。5 彼がまだ話し終えないうちに、たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。6 弟子たちはこれを聞いて非常に恐れ、顔を地に伏せた。7 イエスは近づいてきて、手を彼らにおいて言われた、「起きなさい、恐れることはない」。8 彼らが目をあげると、イエスのほかには、だれも見えなかった。9 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。10 弟子たちはイエスにお尋ねして言った、「いったい、律法学者たちは、なぜ、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか」。11 答えて言われた、「確かに、エリヤがきて、万事を元どおりに改めるであろう。12 しかし、あなたがたに言っておく。エリヤはすでにきたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かってに彼をあしらった。人の子もまた、そのように彼らから苦しみを受けることになろう」。13 そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと悟った。

4.50.2 ルカ 9:28-36

28 これらのことを話された後、八日ほどたってから、イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。29 祈っておられる間に、み顔の様が変り、み衣がまばゆいほどに白く輝いた。30 すると見よ、ふたりの人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤであったが、31 栄光の中に現れて、イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことについて話していたのである。32 ペテロとその仲間の者たちとは熟睡していたが、目をさますと、イエスの栄光の姿と、共に立っているふたりの人とを見た。33 このふたりがイエスを離れ去ろうとしたとき、ペテロは自分が何を言っているのかわからないで、イエスに言った、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。34 彼がこう言っている間に、雲がわき起って彼らをおおいはじめた。そしてその雲に囲まれたとき、彼らは

恐れた。35 すると雲の中から声があった、「これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け」。36 そして声が止んだとき、イエスがひとりだけになっておられた。弟子たちは沈黙を守って、自分たちが見たことについては、そのころだれにも話さなかった。

マルコによる福音書 9 章 2-13 節福音書対照表

4.50.3 問い

1. いつ、どこで、起きたことが記されていますか。そこにいたのは誰ですか。(2-4)
2. ペテロはどのような提案をしますか。その状況はどのように描かれていますか。(5-6)
3. 雲の中からの声については、どのように描かれていますか。(7-8)
4. イエスはどのように、命じますか。なぜでしょうか。(9-10)
5. 弟子たちはどのような質問をし、イエスはそれにどう答えますか。(11-13)
6. この記事は、何を伝えているのでしょう。マタイやルカの記述も参考にしましょう。

4.50.4 参照

- ヘルモン山：ヘルモン山（Mount Hermon, ヘブライ語:　　）シャイフ山（Jabal al-Shaykh[1], アラビア語:　　）は、レバノンとシリアの国境にあるアンチレバノン山脈の最高峰で、最高点の標高は 2,814m である。
- タボル山：タボル山（ヘブライ語:　　、英語: Mount Tabor）は、イスラエルの北部地区にある標高 575m の山。ヘブライ語で「Har Tavor」、アラビヤ語では「ジェベル・エト・トゥール」と呼ばれる。聖書の記述に関連して日本では変貌山とも書かれるが、これは他の山のことであるとする説もある。
  - ヨセフスはタボル山の頂上に要塞があったと証言している。
- マラキ 3:1　見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。
- マラキ 4:4-6 あなたがたは、わがしもべモーセの律法、すなわちわたしがホレブで、イスラエル全体のために、彼に命じた定めとおきてとを覚えよ。5 見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。6 彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。
- イザヤ 40:3　呼ばわる者の声がする、／「荒野に主の道を備え、／さばくに、われわれの神のために、／大路をまっすぐにせよ。

  - イザヤ 40:3-5 は、マタイ 3:3, マルコ 1:3、ルカ 3:4、ヨハネ 1:23 と四福音書にバプテスマのヨハネとの関連で引用されている

- 復活
  - マルコ 12:26-27 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている」。

- エリヤ
  - 列王記下 2:11 彼らが進みながら語っていた時、火の車と火の馬があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエリヤはつむじ風に乗って天にのぼった。
  - マルコ 6:15 他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者のような預言者だ」と言った。
  - マルコ 8:28 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。
  - マルコ 9:4,5 すると、エリヤがモーセと共に彼らに現れて、イエスと語り合っていた。5 ペテロはイエスにむかって言った、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。
  - マルコ 9:11-13 そしてイエスに尋ねた、「なぜ、律法学者たちは、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか」。12 イエスは言われた、「確かに、エリヤが先にきて、万事を元どおりに改める。しかし、人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか。13 しかしあなたがたに言っておく、エリヤはすでにきたのだ。そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった」。
  - マルコ 15:35,36 すると、そばに立っていたある人々が、これを聞いて言った、「そら、エリヤを呼んでいる」。36 ひとりの人が走って行き、海綿に酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとして言った、「待て、エリヤが彼をおろしに来るかどうか、見ていよう」。

- モーセ
  - 申命記 34:1-8 モーセはモアブの平野からネボ山に登り、エリコの向かいのピスガの頂へ行った。そこで主は彼にギレアデの全地をダンまで示し、2 ナフタリの全部、エフライムとマナセの地およびユダの全地を西の海まで示し、3 ネゲブと低地、すなわち、しゅろの町エリコの谷をゾアルまで示された。4 そして主は彼に言われた、「わたしがアブラハム、イサク、ヤコブに、これをあなたの子孫に与えると言って誓った地はこれである。わたしはこれをあなたの目に見せるが、あなたはそこへ渡って行く

ことはできない」。5 こうして主のしもべモーセは主の言葉のとおりにモアブの地で死んだ。6 主は彼をベテペオルに対するモアブの地の谷に葬られたが、今日までその墓を知る人はない。7 モーセは死んだ時、百二十歳であったが、目はかすまず、気力は衰えていなかった。8 イスラエルの人々はモアブの平野で三十日の間モーセのために泣いた。そしてモーセのために泣き悲しむ日はついに終った。

  - マルコ 1:44 「何も人に話さないように、注意しなさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセが命じた物をあなたのきよめのためにささげて、人々に証明しなさい」。
  - マルコ 7:10 モーセは言ったではないか、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。
  - マルコ 9:4,5 すると、エリヤがモーセと共に彼らに現れて、イエスと語り合っていた。5 ペテロはイエスにむかって言った、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。
  - マルコ 10:3-5 イエスは答えて言われた、「モーセはあなたがたになんと命じたか」。4 彼らは言った、「モーセは、離縁状を書いて妻を出すことを許しました」。5 そこでイエスは言われた、「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、あなたがたのためにこの定めを書いたのである。
  - マルコ 12:19 「先生、モーセは、わたしたちのためにこう書いています、『もし、ある人の兄が死んで、その残された妻に、子がない場合には、弟はこの女をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。
  - マルコ 12:26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。

- ペテロ後書 1:16-18 わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。17 イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。18 わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。
- デバーリーム・ラッバー（Devarim（申命記）Rabbah）3：メシヤの日には、モーセとエリヤが「一人のように」共に来るといった。（榊原康夫）未確認。

4.50.5 記録

- 日時：2024 年 4 月 18 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）4 名

4.50.6 問いについて

1. いつ、どこで、起きたことが記されていますか。そこにいたのは誰ですか。(2-4)

   - 2 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、3 その衣は真白く輝き、どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできないくらいになった。4 すると、エリヤがモーセと共に彼らに現れて、イエスと語り合っていた。

   -「六日の後」「高い山」「イエスの衣が白くなった」「エリヤとモーセがイエスと語り合っていた」「ペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて」

   - [DQ] いつから「六日の後」なのでしょうか。(ルカも参照)

     – ルカでは「八日ほどたって」。かつ「祈るために山に登られ」「祈っておられる間に」と祈りが強調されている。

   - [DQ] どのあたりの山でしょうか。

   - [DQ] なぜ、ペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて行ったのでしょうか。

     – マルコ 5:37,40 そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいって行かれた。

     – マルコ 14:33 (ゲッセマネ)そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、

     – 証人:申命記 19:15 どんな不正であれ、どんなとがであれ、すべて人の犯す罪は、ただひとりの証人によって定めてはならない。ふたりの証人の証言により、または三人の証人の証言によって、その事を定めなければならない。

   - [DQ] ここで描かれている状況は何を伝えているのでしょうか。

     –「彼らの目の前でイエスの姿が変わり」弟子たちは皆が認められるような変化だったことが、まさに、目撃証言として語られている。

     –「エリヤがモーセとともに彼らに現れて」とあり、イエスだけに現れたわけではない。

     – エリヤとモーセは生きているのでしょうか。(12:26 参照)

     – ルカでは「栄光の中に現れて」「イエスの栄光の姿と共に立っている二人の人とを見た」とあり、栄光が強調されている。これがキリスト教会で共有されていたことなのだろう。

- [DQ] なぜ、エリヤとモーセなのでしょうか。
  - 聖書は、「律法と預言者」と呼ばれていた。その代表？　なぜエリヤが先か。（マタイ、ルカはモーセが先）おそらく、このあとのエリヤ談義と関係があってそのように記憶されていたのだろう。

2. ペテロはどのような提案をしますか。その状況はどのように描かれていますか。（5-6）

- 5 ペテロはイエスにむかって言った、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。6 そう言ったのは、みんなの者が非常に恐れていたので、ペテロは何を言ってよいか、わからなかったからである。
- [DQ] なぜ小屋を建てると提案したのでしょうか。
  - 自分たちの「すばらしい」経験を形にして残したかった？
  - 非常におそれていて、自分でも何を言っているのかわからなかった。混濁状態。
  - 仮庵の祭りが近かったとの説もある。（9 月末から 10 月半ば）たとえそうだったとしても、それだけを理由にするのは、本質を外しているように見える。
- モーセと、エリヤを認識していたことが証言されている。
  - イエスのことばから推測したのだろうか。「エリヤがモーセと共に彼らに現れて」
- 非常に恐れていて、何を言ってよいかわからなかったとあり、混乱状態も考えられる。

3. 雲の中からの声については、どのように描かれていますか。（7-8）

- 7 すると、雲がわき起って彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった、「これはわたしの愛する子である。これに聞け」。8 彼らは急いで見まわしたが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが、自分たちと一緒におられた。
- 参照：マルコ 1:9-11 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。10 そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下って来るのを、ごらんになった。11 すると天から声があった、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。
- [DQ] 彼らをおおったの「彼ら」とは誰でしょうか。
  - 不明だが、「ただイエスだけが、自分たちと一緒におられた」という表現から、モーセとエリヤは、見えなくなったのだろう。
- [DQ] 「これはわたしの愛する子である。これに聞け」は、何を意味しているのでしょうか。ペテロの提案の答えだろうか。

- モーセとエリヤの実像がどのようなものだったかは不明だが、イエスが、モーセとエリヤと語り合っていたことはわかったのだろう。
- [DQ] だれにむけて、どのようなメッセージを語っているのでしょうか。
- [DQ] 「これに聞け」は、何を聞けと言っているのでしょうか。
  - おそらく、ペテロの提案に対する答えもあるだろうが、もっと大きな意味で、イエスに聞くことが、神の御心を知ることだと言っているようにも見える。
- 申命記 18:15 あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない。

4. イエスはどのように、命じますか。なぜでしょうか。(9-10)

- 9 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。10 彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。
- [DQ] なぜ「人の子が死人の中からよみがえるまで」なのでしょうか。
  - イエスも、受難と死と復活を告げていたので、そこまでが使命と考えていたのかもしれない。
  - 復活とは何なのかの問は難しい。イエスも、完全には理解できていなかったのかもしれない。
- [DQ] イエスが伝えたこと、弟子たちが理解したことは何だったのでしょうか。
- よみがえりで完結だと、イエスが理解していたのではないだろうか。
- 律法や、預言者から、神様のみこころを確認していたのだろうか。
- モーセやエリヤは、イエスとしては、生きている存在だったのだろう。

5. 弟子たちはどのような質問をし、イエスはそれにどう答えますか。(11-13)

- 11 そしてイエスに尋ねた、「なぜ、律法学者たちは、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか」。12 イエスは言われた、「確かに、エリヤが先にきて、万事を元どおりに改める。しかし、人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか。13 しかしあなたがたに言っておく、エリヤはすでにきたのだ。そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった」。
- エリヤが先にくるはずだという説について。
  - マルコ 1:2-4 預言者イザヤの書に、／「見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、／あなたの道を整えさせるであろう。3 荒野で呼ばわる者の声がする、／『主の道を備えよ、／その道筋を

まっすぐにせよ』」／と書いてあるように、4 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。

  - マラキ 3:1, 4:4-6 5 見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。6 彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。

- 「人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてある」と言っている。内容は、受難の告知と似ているが、書いてあるとは、旧約聖書を意味しているのだろう。
  - おそらく、イザヤ書を念頭においている。
  - 「なぜか。」と問うている、これは、イエス自身への問だったのかもしれない。弟子たちには、考えが及ぶことではないだろう。まさに、そのような問いについて、聖書のひとたちと、聖書箇所を思い出しながら、語り合い、神様とコミュニケーションしていたのかもしれない。
- [DQ]「そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった」は、何を意味しているのだろうか。
  - マタイ 11:7-19 13 すべての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までである。14 そして、もしあなたがたが受けいれることを望めば、この人こそは、きたるべきエリヤなのである。15 耳のある者は聞くがよい。16 今の時代を何に比べようか。それは子供たちが広場にすわって、ほかの子供たちに呼びかけ、17 『わたしたちが笛を吹いたのに、／あなたたちは踊ってくれなかった。弔いの歌を歌ったのに、／胸を打ってくれなかった』／と言うのに似ている。18 なぜなら、ヨハネがきて、食べることも、飲むこともしないと、あれは悪霊につかれているのだ、と言い、19 また人の子がきて、食べたり飲んだりしていると、見よ、あれは食をむさぼる者、大酒を飲む者、また取税人、罪人の仲間だ、と言う。しかし、知恵の正しいことは、その働きが証明する」。
  - ルカ 1:13-17 16 そして、イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであろう。17 彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう」。
- [DQ] エリヤの役割は何なのでしょうか。本当に、元どおりに改めたのでしょうか。
  - そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった。
  - それは書いてあるのだろうか。書いてあるとすると、イザヤ書。

6. この記事は、何を伝えているのでしょう。マタイやルカの記述も参考にしましょう。
   - 受難告知の裏側を示していることは確かだろう。
   - イエスにとって
     - モーセ（律法授与者）とエリヤ（偉大な預言者）に出会い、語り合った。

  - 神からのメッセージ：すると、雲がわき起って彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった、「これはわたしの愛する子である。これに聞け」。

- 弟子たちにとって
  - 理解できなくても、信頼すること。
  - 栄光の証人。
- マタイ 17:6-8 6 弟子たちはこれを聞いて非常に恐れ、顔を地に伏せた。7 イエスは近づいてきて、手を彼らにおいて言われた、「起きなさい、恐れることはない」。8 彼らが目をあげると、イエスのほかには、だれも見えなかった。

4.50.7 メモ

- 仮庵の祭り：9 月末から 10 月中旬（ザドク暦第七ホデシュの 15 日から 7 日間）
  - レビ記 23 章 34-43 節、ヨハネによる福音書 7 章 37-38 節
- だれがイエスと語り合っていますか。エリヤについて 9:11-13 とマタイ 17:10-13 を比べてみましょう。
- ルカでは「栄光の中に現れて」「イエスの栄光の姿と共に立っている二人の人とを見た」とあり、栄光が強調されている。これがキリスト教会で共有されていたことなのだろう。また、このことが、ペテロ後書からも見て取れる。イエスの再臨のときの、栄光の姿を垣間見る経験だったとしているのだろう。それが、8:38-9:1 とも関連している。
  - 38 邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。9:1 また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。
  - 2 ペテロ 1:16-18 わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。17 イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。18 わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。
- イエスにとって、バプテスマのヨハネの存在はとても大きかったのだろう。バプテスマのヨハネの役割は十分認識していた。それがエリヤの出現預言とつながっているように見える。マルコ冒頭でも、イザヤ預言と、マラキ預言を一緒にして、それを、預言者イザヤの書にこう書いてあるとしている。
- ２つに分けて学んだほうが良いかもしれない。内容が濃く、十分消化するのが難しい。

4.51　9:14-29 汚れた霊に取りつかれた子を癒やす

14 さて、彼らがほかの弟子たちの所にきて見ると、大ぜいの群衆が弟子たちを取り囲み、そして律法学者たちが彼らと論じ合っていた。15 群衆はみな、すぐイエスを見つけて、非常に驚き、駆け寄ってきて、あいさつをした。16 イエスが彼らに、「あなたがたは彼らと何を論じているのか」と尋ねられると、17 群衆のひとりが答えた、「先生、口をきけなくする霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。18 霊がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。19 イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。20 そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。21 そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。22 霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。23 イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。24 その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。25 イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。26 すると霊は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人は、死んだのだと言った。27 しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。28 家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。29 すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈によらなければ、どうしても追い出すことはできない」。

4.51.1　マタイ 17:14-21

14 さて彼らが群衆のところに帰ると、ひとりの人がイエスに近寄ってきて、ひざまずいて、言った、15 「主よ、わたしの子をあわれんでください。てんかんで苦しんでおります。何度も何度も火の中や水の中に倒れるのです。16 それで、その子をお弟子たちのところに連れてきましたが、なおしていただけませんでした」。17 イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な、曲った時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまであなたがたに我慢ができようか。その子をここに、わたしのところに連れてきなさい」。18 イエスがおしかりになると、悪霊はその子から出て行った。そして子はその時いやされた。19 それから、弟子たちがひそかにイエスのもとにきて言った、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。20 するとイエスは言われた、「あなたがたの信仰が足りないからである。よく言い聞かせておくが、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであ

ろう。21 〔しかし、このたぐいは、祈と断食とによらなければ、追い出すことはできない〕」。

4.51.2 ルカ 9:37-43a

37 翌日、一同が山を降りて来ると、大ぜいの群衆がイエスを出迎えた。38 すると突然、ある人が群衆の中から大声をあげて言った、「先生、お願いです。わたしのむすこを見てやってください。この子はわたしのひとりむすこですが、39 霊が取りつきますと、彼は急に叫び出すのです。それから、霊は彼をひきつけさせて、あわを吹かせ、彼を弱り果てさせて、なかなか出て行かないのです。40 それで、お弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。41 イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な、曲った時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか、またあなたがたに我慢ができようか。あなたの子をここに連れてきなさい」。42 ところが、その子がイエスのところに来る時にも、悪霊が彼を引き倒して、引きつけさせた。イエスはこの汚れた霊をしかりつけ、その子供をいやして、父親にお渡しになった。43a 人々はみな、神の偉大な力に非常に驚いた。

マルコによる福音書 9 章 14-29 節福音書対照表

4.51.3 問い

1. 背景を復習しましょう。(14)
2. どのような問題が起こっていますか。(15-18)
3. イエスはどうしますか。(19-22)
4. 父親とイエスの対話からどのようなことがわかりますか。(22-24)
5. イエスはどうしますか、そしてどうなりますか。(25-27)
6. 弟子たちは、イエスにどのような質問をし、イエスはどう答えますか。(28,29)
7. イエスは人々の「不信仰」に対して何を求めているのでしょうか。

4.51.4 参照

- 不信仰：9:24
  - ：i) unfaithfulness, faithless, ii) want of faith, unbelief, iii) weakness of faith
  - 6:6 そして、彼らの不信仰を驚き怪しまれた。それからイエスは、附近の村々を巡りあるいて教えられた。マタイ 13:58 そして彼らの不信仰のゆえに、そこでは力あるわざを、あまりなさらなかった。
  - 9:24 24 その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。

- 16:14 その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。
- マタイ 17:20 するとイエスは言われた、「あなたがたの信仰が足りないからである。よく言い聞かせておくが、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう。

4.51.5 記録

- 日時：2024 年 4 月 25 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）4 名

4.51.6 問いについて

1. 背景を復習しましょう。(14)
   - 14 さて、彼らがほかの弟子たちの所にきて見ると、大ぜいの群衆が弟子たちを取り囲み、そして律法学者たちが彼らと論じ合っていた。
   - 山上のイエスの栄光の姿への変貌と、現実の世界の喧騒の対比がある。
     - 9:5 5 ペテロはイエスにむかって言った、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。
   - [DQ] だれがいますか。
     - 山から降りてきたイエスとペテロ、ヤコブ、ヨハネ。他の弟子たち。群衆。律法学者。
   - [DQ] どのような光景が想像できますか。
     - 律法学者も群衆もいるので、ガリラヤ地方ではないかと思われる。すると、他の弟子たちを、ガリラヤの村に残して、イエスが三人だけつれて、山に行ったのかもしれない。（ルカでは「翌日、一同が山を降りてくると」となっている。）
   - [DQ] 律法学者と弟子たちは何を論じていたのでしょうか。
     - イエスはどこへ行ってしまったのか。ユダヤ人のもとには戻ってこないのかと考えていたかもしれない。ほどんど、ユダヤ人の前に現れていない時期が続いていた。しかし、弟子たちを見つけて、議論をふっかけたのだろうか。

  - 汚れた霊を追い出す権威を授けられていた弟子たちも、何もできなかったので、単に、誹謗されていたのか。

- [DQ] イエスと一緒に行った、ペテロ、ヤコブ、ヨセフは、どのようなことを感じたでしょうか。
  - イエスの栄光の姿、自分たちの見た幻とは非常に異なる、現実の喧騒だろうか。現実に引き戻されたことは確かだろう。

2. どのような問題が起こっていますか。(15-18)

- 15 群衆はみな、すぐイエスを見つけて、非常に驚き、駆け寄ってきて、あいさつをした。16 イエスが彼らに、「あなたがたは彼らと何を論じているのか」と尋ねられると、17 群衆のひとりが答えた、「先生、口をきけなくする霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。18 霊がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。
- [DQ] 群衆は、なぜ非常に驚いたのでしょうか。律法学者たちが、弟子たちと論じ合っていたこともあわせて考えてみましょう。
  - イエスは逃げていて戻ってこないのではないかと思っていたかもしれない。
  - 自分たちの問題を解決するために、奉仕されるイエスは、もういなくなったとおもっていたかもしれない。
- [DQ] この息子の状態はどのように描かれていますか。
  - 口をきけなくする霊につかれている息子を父親が連れてきた。
    * 症状：霊がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。
  - マタイではてんかん。ルカでは引き付け。
  - 癲癇（てんかん épilèpsy）：大脳の神経細胞が過剰に興奮することで発作症状を引き起こす慢性的な脳の疾患。突然意識を失い、四肢をピクピクさせたり硬直させたりする発作、体の一部が勝手に動いたり、会話の途中に意識を失う発作などもあります。年齢・性別・環境に関わらず発作は発症します。
- [DQ] 「それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」からは、どのようなことが伝えられていますか。
  - やっぱり、無理なのだろうかということだろうか。
  - 弟子たちが、汚れた霊を追い出すことが書かれている。

    * 6:12-13 12 そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、13 多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。(　　)

3. イエスはどうしますか。(19-22)

- 19 イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。20 そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。21 そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。22 霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。

- [DQ] 「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。」は誰に対して言っていますか。イエスの関心事は何ですか。

  –「あなたがた」とあるが、それに人々が対応しているところをみると、「人々」だろうか。それとも、弟子たちのことだろうか。時代と言っているので、課題の対応に関する人々の対応だろうか。

  – 何を不信仰と言っているのだろうか。

    * 魔術的な力に頼ることだろうか。

  – まずは、だれかを批判するようなことはしていない。「不信仰な時代」ということで、残念に思っていることは確か。それぞれの人達が、それぞれに受け取っただろう。

- [DQ] イエスはなぜ「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねたのでしょうか。

  – 丁寧に対応している。課題の正確な把握。

- [DQ] 父親のことばからは、どのようなことが感じられますか。

  – 20 そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。21 そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。22 霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。

  – 起こっていることであたふたしている。そこに目を囚われている。

4. 父親とイエスの対話からどのようなことがわかりますか。(22-24)

- 22 霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。23 イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。

信ずる者には、どんな事でもできる」。24 その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。

- イエスは、父親の言葉にツッコミを入れかつ、上の不信仰な時代ともつながっており、印象的なことばとして、そこにいるものが伝えたのだろう。ペテロなどによる証言だろうか。史実性が高い。
- [DQ] 父親はなんといえばよかったのでしょうか。
  - 1:40 ひとりの重い皮膚病にかかった人が、イエスのところに願いにきて、ひざまずいて言った、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。
  - おそらく、そのような技術的なことを言っているのではない。
- [DQ] 憐れみを受けるのは、なにが鍵だと言っていますか。
  - 神様に信頼すること？神様に責任をなすりつけているのだろうか。
  - なにかの因果なのだろうか。
- [DQ] イエスの、「信じるものにはどんなことでもできる」は何を伝えようとしているのでしょうか。本当になんでもできるのでしょうか。
  - 問題は何だったのでしょうか。弟子たちの不信仰、弟子たちが、イエスのような力を持っていなかったこと？父親の不信仰？神の国が近いことを見ようとすることだろうか。
  - バークレイ：あなたの子供をいやすことは、わたしではなく、あなたにかかっている。
- [DQ] 「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。は、信じることと、信仰を持っていない自分とを表現しているのでしょうか。
  - これがよけい、史実性を高めている。

5. イエスはどうしますか、そしてどうなりますか。(25-27)

- 25 イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。26 すると霊は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人は、死んだのだと言った。27 しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。
- ここでも汚れた霊に対して叱っている。汚れた霊に対する権威を示し、かつ、二度と入ってくるなと命じている。
- [DQ] 弟子たちも、確信をもって、このように言えばよかったのでしょうか。

6. 弟子たちは、イエスにどのような質問をし、イエスはどう答えますか。(28,29)

- 28 家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。29 すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈によらなければ、どうしても追い出すことはできない」。
- [DQ] 祈ればよいのでしょうか。
- [DQ] イエスはなにを伝えているのでしょうか。
  - バークレイ：あなたがたの生活は神にあまり近くない。
  - マルコ 6:7 また十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれた霊を制する権威を与え、
  - マルコ 6:13 多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした（　　）。
  - 注：断食が入っている写本もあるが、2:18-20 から重要視されていない。

7. イエスは人々の「不信仰」に対して何を求めているのでしょうか。
   - [DQ] 御心を求め続けることでしょうか。
     - わからない。
   - [DQ] この父親や、家族は、これから問題もなく、幸せに暮らしたのでしょうか。
     - 問題は、いくらでもあるだろう。

4.51.7 メモ

- 汚れた霊につかれていると捉えるか、てんかんのような現代的に考えると、大脳の神経の病気と捉えるかの差もあるように見える。ただ、マルコでは一貫して、汚れた霊であるとし、イエスもそのように扱っているので、そのまま扱ったほうがよいように思われる。神様のはたらきを妨げるものだろうか。なぜ、その働きがあるのかの判断は難しいが、イエスの「不信仰」発言をどの程度拡大して考えてよいかは不明だが、イエスは、不信仰が問題だと言っているように見える。ただ、神様に任せればよいのだろうか。おそらく、そうではない。
- このときに、癒やされればよいのかは、ひとつ重要な点のような気がする。問題は、いくらでも人生に起きるのだから。しかし、ここで、言っている信仰とは何かは、よくはわからない。
- 不信仰のやりとりから、弟子たちが癒せなかったことにたいして、イエスが怒っているのではないように見える。同時に、残された日々が短いことも、イエスは思っていることも確かだろう。
- イエスのスーパーパワーで汚れた霊が追い出されたとは言っていない。この父親の信仰でもなさそうである。弟子たちも、祈っていれば、このひとの息子が癒やされたわけではないのだろう。非常に興味深い。

4.52　9:30-32 再び自分の死と復活を予告する

30 それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。

4.52.1　マタイ 17:22-23

22 彼らがガリラヤで集まっていた時、イエスは言われた、「人の子は人々の手にわたされ、23 彼らに殺され、そして三日目によみがえるであろう」。弟子たちは非常に心をいためた。

4.52.2　ルカ 9:43b-45

43b みんなの者がイエスのしておられた数々の事を不思議に思っていると、弟子たちに言われた、44 「あなたがたはこの言葉を耳におさめて置きなさい。人の子は人々の手に渡されようとしている」。45 しかし、彼らはなんのことかわからなかった。それが彼らに隠されていて、悟ることができなかったのである。また彼らはそのことについて尋ねるのを恐れていた。

マルコによる福音書 9 章 30-32 節福音書対照表

マルコによる福音書 9 章 30-32 節福音書対照表（参照付）

4.52.3　問い

1. 背景を復習しましょう。
2. 彼らはどこへ向かっているのでしょうか。イエスについてどのように書かれていますか。（30）
3. イエスは弟子たちに何を伝えていますか。（31）
4. 弟子たちについては、どう描かれていますか。（32）
5. 一回目（8:31）、三回目（10:33,34）と比較するとどんな事がわかりますか。
6. イエスは、何を目指し、弟子たちには何を期待しているのでしょうか。

4.52.4　参照

- マルコにおけるエルサレム

- 1:5 そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民とが、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。
- 3:8 エルサレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シドンのあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞いて、みもとにきた。
- 3:22 また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼はベルゼブルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。
- 7:1 さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレムからきて、イエスのもとに集まった。
- 10:32,33 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。
- 11:1 さて、彼らがエルサレムに近づき、オリブの山に沿ったベテパゲ、ベタニヤの附近にきた時、イエスはふたりの弟子をつかわして言われた、
- 11:11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、すべてのものを見まわった後、もはや時もおそくなっていたので、十二弟子と共にベタニヤに出て行かれた。
- 11:15 それから、彼らはエルサレムにきた。イエスは宮に入り、宮の庭で売り買いしていた人々を追い出しはじめ、両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえし、
- 11:27 彼らはまたエルサレムにきた。そして、イエスが宮の内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、みもとにきて言った、
- 15:41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。

• イザヤ

- マルコ 1:2,3 預言者イザヤの書に、／「見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、／あなたの道を整えさせるであろう。3 荒野で呼ばわる者の声がする、／『主の道を備えよ、／その道筋をまっすぐにせよ』」／と書いてあるように、
  - イザヤ 40:3 呼ばわる者の声がする、／「荒野に主の道を備え、／さばくに、われわれの神のために、／大路をまっすぐにせよ。
- マルコ 7:6 イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、／『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。

    - イザヤ 29:13 主は言われた、／「この民は口をもってわたしに近づき、／くちびるをもってわたしを敬うけれども、／その心はわたしから遠く離れ、／彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、／そらで覚えた人の戒めによるのである。

  - マタイ 3:3 預言者イザヤによって、「荒野で呼ばわる者の声がする、／『主の道を備えよ、／その道筋をまっすぐにせよ』」／と言われたのは、この人のことである。(ルカ 3:4 それは、預言者イザヤの言葉の書に書いてあるとおりである。すなわち／「荒野で呼ばわる者の声がする、／『主の道を備えよ、／その道筋をまっすぐにせよ』。ヨハネ 1:23 彼は言った、「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばわる者の声』である」。)

  - ルカ 4:17 すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、

  - マタイ 4:14 これは預言者イザヤによって言われた言が、成就するためである。

  - マタイ 8:17 これは、預言者イザヤによって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためである。

  - マタイ 12:17 これは預言者イザヤの言った言葉が、成就するためである、

  - マタイ 13:14 こうしてイザヤの言った預言が、彼らの上に成就したのである。『あなたがたは聞くには聞くが、／決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。

  - マタイ 15:7 偽善者たちよ、イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預言をしている、

  - ヨハネ 12:39 こういうわけで、彼らは信じることができなかった。イザヤはまた、こうも言った、

  - ヨハネ 12:41 イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであって、イエスのことを語ったのである。

- 死と復活の予告

  - 8:31-32a 31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32a しかもあからさまに、この事を話された。

  - 9:30-32 30 それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。

  - 10:32-34 32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の

子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。

4.52.5 記録

- 日時：2024 年 5 月 2 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）4 名

4.52.6 問いについて

1. 背景を復習しましょう。
    - 8:27-30 ペトロ、イエスがメシアであると告白する
    - 8:31-38; 9:1 イエス、死と復活を予告する
    - 9:2-13 イエスの姿が変わる
    - 9:14-29 汚れた霊に取りつかれた子を癒やす
    - ガリラヤ以外の土地を周り、ガリラヤに帰ることを躊躇された時期に、イエスの決断、イエスの問に対する、ペテロの信仰告白、イエスの受難告知、山上の変貌を経て、山の下で待っている弟子たちが癒されなかった、不信仰を嘆き、汚れた霊につかれた息子を癒やす。その後での二回目の受難告知の記事である。
    - 受難告知に対して、メシヤだと信仰告白したペテロもイエスをいさめ、山上でイエスの栄光の姿への変貌を目撃したでしたちも、わからないことばかり。「9 一同が山を下って来るとき、イエスは『人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない』と、彼らに命じられた。10 彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。」
2. 彼らはどこへ向かっているのでしょうか。イエスについてどのように書かれていますか。（30）
    - 30 それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。
    - ここに至るまで：8:37 ピリポ・カイザリア、9:2 山上、
    - 9:14 さて、彼らがほかの弟子たちの所にきて見ると、大ぜいの群衆が弟子たちを取り囲み、そして律法学者たちが彼らと論じ合っていた。

- ガリラヤを通って、おそらく、エルサレムに向かっている。
  - 10:32,33 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。
- [DQ] なぜイエスは、旅行の行程を秘密にしたいのでしょうか。
  - [Q] 誰に「気づかれるのを好まれなかった」のでしょうか。
    - *「人」とあるが、弟子たち以外だろうか。パリサイ派、律法学者、群衆も含めて。
- [DQ] 人との交渉を避けられたのでしょうか。
  - ガリラヤを通っていかれたとあり、イエスとしては、おそらく、最後のガリラヤだと考えていただろう。これまで、どこに行っていたのか、これから、どこに行くのか、どうするのかといった議論をしたくなかったのか。では、人々の必要には答えたくなかったのだろうか。（奉仕については）
    - * このあとは、イエスは弟子たちを教え、人々も教えるが（10:1-16 離婚について教える、10:13-16 子どもを祝福する、17-22 金持ちの男）癒やしについては、10:46-52 盲人バルティマイを癒やすの記事のみ。
  - 理由は、次の節に秘められている。31 それは、… と言っておられたからである。
    - * 受難ことは、弟子たちには、話しているが、人々には、秘密にしている。
    - * [DQ] 受難については、弟子たちに、話してはいけないと命じているでしょうか。

3. イエスは弟子たちに何を伝えていますか。（31）

- 31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。
- 人々の手にわたされ、 殺され、 三日の後によみがえる
- [DQ] イエスが死と復活について語ったのは二度目ですが、一度目と比較して見ましょう。
  - 8:31-32a 31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32a しかもあからさまに、この事を話された。
  -「多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ」が欠けている。

- 「人々の手にわたされ」が加わっている。
    - わたされ（　　：to give into the hands (of another)）「誰かに」と「誰かによって」または「誰から」が背後にある。

- [DQ] 「誰に」の部分はどんな人が想定されているのでしょうか。
  - 8:31b 必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ
  - 直接的には、これらの民の指導者が想定されているだろうが、群衆・人々をも含んでいるのではないだろうか。

- [DQ] 「誰によって」の部分は、どのような人が想定されているのでしょうか。
  - ユダ？
    - ヨハネ 6:66-71 それ以来、多くの弟子たちは去っていって、もはやイエスと行動を共にしなかった。67 そこでイエスは十二弟子に言われた、「あなたがたも去ろうとするのか」。68 シモン・ペテロが答えた、「主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。69 わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」。70 イエスは彼らに答えられた、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」。71 これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

- [DQ] 前回と今回はそれぞれどのような時だったのでしょうか。
  - 前回はイエスの問に対する、ペテロの告白のあと。

- [DQ] イエスが教えたかったことは何なのでしょうか。
  - 前回：8:34 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。36 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。37 また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。38 邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。

4. 弟子たちについては、どう描かれていますか。(32)

- 32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。

- [DQ] 弟子たちはイエスの教えにどのように反応していますか。

- [DQ] なにを悟っていなかったのでしょうか。
  - 受難の意味だろうか。引き渡されるの具体的な内容までは、頭が回らなかったように思われる。ユダは、気づいていたのだろうか。
  - 受難の意味だとすると、イエスは明確に理解していたのだろうか。
- [DQ] なにを尋ねるのを恐れていたのでしょうか。
  - 死とよみがえりは何を意味しているかということだろうか。想像すらできないことは、当然であるように見える。
  - イエスは明確に理解していたのだろうか。
- [DQ] イエスはなにのために、弟子たちに伝えて（教えて）いたのでしょうか。（6 で考察）
  - 神様に信頼していたことは確かだろう。これも、神の国は近いことの一つだったのか。

5. 一回目（8:31）、三回目（10:33,34）と比較するとどんな事がわかりますか。（参考）
   - 一回目は、受難、二回目は、人の手に引き渡されること、三回目は、エルサレムで起こることと、祭司長、律法学者たちの手に渡され、彼らが死刑を宣告し、異邦人に引き渡され、あざけり、つばきをかけ、ついに殺してしまうとかなり細かく書かれている。
   - 毎回「三日の後によみがえる」ことが伝えられている。
6. イエスは、何を目指し、弟子たちには何を期待しているのでしょうか。
   - [DQ] イエスは、受難・受苦、人々の手に引き渡され、さらに、死とよみがえりの意味について、十分理解していたのだろうか。
   - [DQ] 死とよみがえりについては、毎回語られているが、それは、イエスはどのように理解していたのだろうか。
   - [DQ] わたしたちが、イエスにこのように伝えられたとき、どのように理解するか、悟ることができるか、考えてみましょう。
     - それほど、簡単ではない。イエスが、この道を選んだ、または、ここに主のみこころがあると確信したことは確かだろうが、どのように理解していたかは不明。
     - しかし、教えたということは、弟子たちになにかを託していることは確か。

4.52.7 メモ

- イエスから、もっと、この受苦・死・よみがえりについて聞いてほしかった。これだけ、教えられたということは、この事を通して、イエスが託した事があるのだろう。単に、未来を予知できる能力があると伝えたかったわけではないと思う。
- あらかじめ伝えられていることによって、短い期間で、立ち直ることができたことは確かだろう。五旬節は、50 日後、または 7 週間後だから、その間に、イエスの死と復活を消化できたと聖書は証言している。
- イエスについていくもの（8:34）に委ねたということだろう。それは、イエスのように歩む者である。正直に行って、イエスの十字架上での死による贖罪を宣べつたえるよりは、もっと広い意味をもつと思われる。

4.53 9:33-37 いちばん偉い者

33 それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられるとき、イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」。34 彼らは黙っていた。それは途中で、だれが一ばん偉いかと、互に論じ合っていたからである。35 そこで、イエスはすわって十二弟子を呼び、そして言われた、「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。36 そして、ひとりの幼な子をとりあげて、彼らのまん中に立たせ、それを抱いて言われた。37 「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。

4.53.1 マタイ 18:1-5

1 そのとき、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」。2 すると、イエスは幼な子を呼び寄せ、彼らのまん中に立たせて言われた、3 「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。4 この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。5 また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。

4.53.2 ルカ 9:46-48

46 弟子たちの間に、彼らのうちでだれがいちばん偉いだろうかということで、議論がはじまった。47 イエスは彼らの心の思いを見抜き、ひとりの幼な子を取りあげて自分のそばに立たせ、彼らに言われた、48 「だれでもこの幼な子をわたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そしてわたしを受けいれる者は、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである。あなたがたみんなの中で

いちばん小さい者こそ、大きいのである」。

マルコによる福音書 9 章 33-37 節福音書対照表

4.53.3 問い

1. どこにいますか。どのような状況でこの会話が始まりますか。(33a)
2. 弟子たちは、なにについて話していますか。(33b, 34)
3. イエスは、どのように答えていますか。(35)
4. イエスは、幼子を呼び寄せてどのように教えていますか。(36,37)
5. 弟子たちの議論と、幼子を受け入れることとはどのように関係しているのでしょうか。
6. イエスは弟子たちになにを教えているのでしょうか。

4.53.4 参照

- 10:13-16 13 イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。14 それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。15 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。16 そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。(マタイ 19:13-15, ルカ 18:15-17)
- 仕えるもの(　　) one who executes the commands of another, esp. of a master, a servant, attendant, minister；a) the servant of a king, b) a deacon, one who, by virtue of the office assigned to him by the church, cares for the poor and has charge of and distributes the money collected for their use, c) a waiter, one who serves food and drink
  - 　: 1) to make to run or flee, put to flight, drive away, 2) to run swiftly in order to catch a person or thing, to run after, 3) in any way whatever to harass, trouble, molest one, 4) without the idea of hostility, to run after, follow after: someone, 5) metaph., to pursue
- マタイではこの記事の直前に「神殿税を納める」記事が挿入されている。17:24-27
  - 24 彼らがカペナウムにきたとき、宮の納入金を集める人たちがペテロのところにきて言った、「あなたがたの先生は宮の納入金を納めないのか」。25 ペテロは「納めておられます」と言った。そして彼が家にはいると、イエスから先に話しかけて言われた、「シモン、あなたはどう思うか。この世の王たちは税や貢をだれから取るのか。自分の子からか、それとも、ほかの人たちからか」。26 ペテロが「ほかの人たちからです」と答えると、イエスは言われた、「それでは、子は納めなくてもよいわけで

ある。27 しかし、彼らをつまずかせないために、海に行って、つり針をたれなさい。そして最初につれた魚をとって、その口をあけると、銀貨一枚が見つかるであろう。それをとり出して、わたしとあなたのために納めなさい」。
  - 宮の納入金を集める人たちを躓かせないため？

- 九十九匹の羊
  - マタイ 19:12,13 （直後）あなたがたはどう思うか。ある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。13 もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。
  - ルカ 15:4 「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。
- 10:35-45 ヤコブとヨハネの願い
  - 35 さて、ゼベダイの子ヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようにお願いします」。36 イエスは彼らに「何をしてほしいと、願うのか」と言われた。37 すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。38 イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。39 彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。40 しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることである」。41 十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。42 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。43 しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、44 あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。45 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。
- ローマ 14:15 もし食物のゆえに兄弟を苦しめるなら、あなたは、もはや愛によって歩いているのではない。あなたの食物によって、兄弟を滅ぼしてはならない。キリストは彼のためにも、死なれたのである。
- マタイ 25:40 すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。

4.53.5　記録

- 日時：2024 年 5 月 9 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.53.6　問いについて

1. どこにいますか。どのような状況でこの会話が始まりますか。（33a）
    - 33 それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられるとき、イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」。
    - カペナウムの家
        - マルコ 1:29 それから（カペナウムの（21））会堂を出るとすぐ、ヤコブとヨハネとを連れて、シモンとアンデレとの家にはいって行かれた。
        - マルコ 2:1 幾日かたって、イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるというわさが立ったので、
        - マルコ 3:19 それからイスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。イエスが家にはいられると、
        - マルコ 7:17 イエスが群衆を離れて家にはいられると、弟子たちはこの譬について尋ねた。
        - マルコ 9:28 家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。
        - マルコ 10:10 家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。
    - 論じる（33）　: to bring together different reasons, to reckon up the reasons, to reason, revolve in one's mind, deliberate (34)　: i) to think different things with one's self, mingle thought with thought, ii) to converse, discourse with one, argue, discuss
        - 2:6-9 ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、7 「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。8 イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。9 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。

  - 8:15,17 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。16 弟子たちは、これを自分たちがパンを持っていないためであろうと、互に論じ合った。17 イエスはそれと知って、彼らに言われた、「なぜ、パンがないからだと論じ合っているのか。まだわからないのか、悟らないのか。あなたがたの心は鈍くなっているのか。18 目があっても見えないのか。耳があっても聞えないのか。また思い出さないのか。
  - 9:33 それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられるとき、イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」。

2. 弟子たちは、なにについて話していますか。(33b, 34)

- 33 それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられるとき、イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」。34 彼らは黙っていた。それは途中で、だれが一ばん偉いかと、互に論じ合っていたからである。
- [DQ] 「論じ合っていた」とはどのような状態を表現しているのでしょうか。
  - おそらく、評価が異なっていたのだろう。イエスは、その評価の仕方について述べることになる。
- [DQ] 弟子たちは、なぜ、黙っていたのでしょうか。
  - イエスの様子と、「人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえる」という覚悟は感じ、そのことと、だれがいちばん偉いかはそぐわないことは理解できた。
  - イエスが望むことではないことは理解していた。
- [DQ] イエスの心を占めていたことと、弟子たちの心を占めていたことをそれぞれまとめてみましょう。
- [DQ] あなたがイエスなら、どうしますか。
  - 親の心子知らずだなと怒り出しそう。
  - イエスは、まず、すわって、二段階で話をしている。
- ヤコブとヨハネ（その母）10:35-45 ヤコブとヨハネの願い（マタイ 20:20-28）

3. イエスは、どのように答えていますか。(35)

- 35 そこで、イエスはすわって十二弟子を呼び、そして言われた、「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。
- [DQ] イエスがすわって十二弟子を呼んだとありますが、なぜ、そのようにしたのでしょうか。
  - 瞬発的に、怒ったりはしていない。弟子たちの興味に、本質論で答えている。
- [DQ] 偉さについてどんなことが教えられていますか。

  - 「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」
  - 弟子たちは、すぐに理解できたでしょうか。
  - 弟子たちは、どのように考えていたのでしょうか。
- [DQ] 「みんな」とは、誰のことでしょうか。（聖書協会共同訳では「すべてのひと」）
- [DQ] いちばん先になろうと思うこと自体は、悪いことではないとうことでしょうか。
  - いちばん先になることが目的になってしまうことに問題があるのでは。
- [DQ] 「いちばんあとになる」とか「仕えるものになる」とはどのようなことを意味しているのでしょうか。
  - 仕えるもの（　　）one who executes the commands of another, esp. of a master, a servant, attendant, minister
  - 先頭をあるくことではないのだろう。
    * 10:32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、
    * イエスは、通常は、先頭を歩いてはいなかったようである。
    * あとから付いていくと、様子がわかり、仕えることができる。先頭を歩く人も必要だが、そのひとは様子はわからない。
  - イエスが目指したこと、神の子として目指したことだろうか。

4. イエスは、幼子を呼び寄せてどのように教えていますか。（36,37）

- 36 そして、ひとりの幼な子をとりあげて、彼らのまん中に立たせ、それを抱いて言われた。37 「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。
- [DQ] どのような様子が描かれていますか。
  - ひとりの幼な子をとりあげて、 彼らのまん中に立たせ、 それを抱いて（　　：to take into one's arms, embrace）言われた。
  - 「抱いて」とも書かれている。目撃証言として、やさしいイエスの姿が活写されている。
- [DQ] こどもとは、どのようなものだとされていたのでしょうか。

  - おとなより劣っている。不完全なもの。役に立たないもの。[参考]
  - 同時に、何があっても、親にとっては、大切な存在であると認識しているのでは。
- [DQ] なぜ「わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる」ことにそれほどの価値があるのでしょうか。
- [DQ] イエスはどのような子どもだったのでしょうか。
  - すくなくとも、父親に愛されたこどもではなかったのではないか。しかし、天の神様からは、あなたはわたしの愛する子ということばを二回聞き、そのことを意識していただろう。
    * 1:11 すると天から声があった、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。
    * 9:7 すると、雲がわき起って彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった、「これはわたしの愛する子である。これに聞け」。
  - イエスにとっては、神様のみこころを行うものが、神の子。きょうだい。家族。とはいえ、神様のみこころを知り、完璧におこなっているとの確信はなかったのではないだろうか。そのいみで、イエスは、神の子、幼子だったのだろう。そのイエスが、神様からの「あなたはわたしの愛する子」との声をうけとっている。それをもって、「わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れるものは、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。と伝えている。
    * 3:35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。
- [DQ] マタイでは、「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。4 この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。」とありますが、このことは何を伝えているのでしょうか。

5. 弟子たちの議論と、幼子を受け入れることとはどのように関係しているのでしょうか。
   - [DQ]「イエスの名のゆえに」受け入れるとはどういうことでしょうか。
     - たいせつなイエス様のたいせつなものをたいせつにすること。
   - [DQ] 最も小さいものが最も偉い（大きい）ものとはどういうことでしょうか。
   - [DQ] イエスは、なぜ、幼子を受け入れることを大切にしたのでしょうか。
     - 弟子たちが、考える機会にはなったろう。
6. イエスは弟子たちになにを教えているのでしょうか。
   - [DQ] だれがいちばん偉いか、「一ばん先になろうと思う」こととは、どのように関係しているのでしょうか。

- [DQ] 弟子たちは、理解できたのだろうか。
- [DQ] だれが、偉いかではなく、偉いとはどういうことか。

4.53.7 メモ

- 弟子たちをおしえることを大切にしていたことは読み取ることができる。
- 人に、神様に自分が評価されることを考えるなら、なにがその方にとってたいせつなのかを考えるべき。すくなくとも、自分を偉いと認めることをたいせつにしてはいないはず。
- イエスは、まず、直接的な応答をされ、さらに本質的なことを教えられる。この場合はどうだろうか。自分が偉いかどうかではなく、どうしたら、神様の御心を生きることができるかに注力することだろうか。つまり、神様は何を大切にされ、神様が大切にしておられるのはどのようなひとかを考えると、幼子を受け入れることだろうか。それは、イエスの象徴でもあるのかもしれないが、そこで止まってしまっては行けないのだろう。
- 未熟さからの不適切なことを議論することについて、嘆いたり、怒ったりではなく、その機会を捉えて、教えている。しかし、弟子たちは、理解できたのだろうか。
- イエスの神様像は、仕えてくださる方なのだろうか。
- 弟子たちも、イエスが、たいせつにされていることをだんだんと理解していったのではないだろうか。
- こどもをたいせつにすることは、当時は、それほど一般的ではなかったのだろう。名家の子女教育などは別として。しかし、イエスは、こどもをたいせつにしている。これは、おそらく、著しい特徴だろう。だれがいちばん偉いかの問に対しても、こどもと立てている。たとえばではない。パウロとはかなり異なるように見える。福音宣教者が偉い、聖書を教えるものが偉い、慈善事業をするものが偉いとは言わない。もっと本質的なものをこどもを受け入れることに見出し、それを教えておられるのだろう。自らが、こどもであることも、おそらく、認識していた。それは、みこころを十分知っているわけではないということではないだろうか。それでも、神様が、これはわたしの愛する子と言ってくださる。そのような関係をたいせつにすることが、ここで伝えられているのではないだろうか。福音の本質が、ここにあるように思う。

4.54 9:38-41 逆らわない者は味方

38 ヨハネがイエスに言った、「先生、わたしたちについてこない者が、あなたの名を使って悪霊を追い出
しているのを見ましたが、その人はわたしたちについてこなかったので、やめさせました」。39 イエスは
言われた、「やめさせないがよい。だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わ
たしをそしることはできない。40 わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方である。41 だれでも、
キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておく
が、決してその報いからもれることはないであろう。

4.54.1　ルカ 9:49-50

> 49 するとヨハネが答えて言った、「先生、わたしたちはある人があなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちの仲間でないので、やめさせました」。50 イエスは彼に言われた、「やめさせないがよい。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方なのである」。

マルコによる福音書 9 章 38-41 節福音書対照表

マルコによる福音書 9 章 38-41 節福音書対照表（ルカ参照付）

4.54.2　問い

1. どのような背景があるのでしょうか。ルカ 9:49 も参考にしましょう。
2. ヨハネは、どのようなことをイエスに伝えていますか。(38)
3. イエスはどのように答えますか。(39,40)
4. イエスはさらにどのようなことを伝えていますか。(41)
5. ルカ 9:51-56 からはどのようなことがわかりますか。
6. イエスはどのようなことを教えているのでしょうか。

4.54.3　参照

- ルカでは別のエピソードが続く
  - 9:51-56 さて、イエスが天に上げられる日が近づいたので、エルサレムへ行こうと決意して、その方へ顔をむけられ、52 自分に先立って使者たちをおつかわしになった。そして彼らがサマリヤ人の村へはいって行き、イエスのために準備をしようとしたところ、53 村人は、エルサレムへむかって進んで行かれるというので、イエスを歓迎しようとはしなかった。54 弟子のヤコブとヨハネとはそれを見て言った、「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」。55 イエスは振りかえって、彼らをおしかりになった。56 そして一同はほかの村へ行った。
- 寛容（口語訳）
  - エレミヤ 15:15 主よ、あなたは知っておられます。わたしを覚え、わたしを顧みてください。わたしを迫害する者に、あだを返し、／あなたの寛容によって、／わたしを取り去らないでください。わたしがあなたのために、／はずかしめを受けるのを知ってください。

- ローマ 2:4 それとも、神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか。
- ローマ 9:22 もし、神が怒りをあらわし、かつ、ご自身の力を知らせようと思われつつも、滅びることになっている怒りの器を、大いなる寛容をもって忍ばれたとすれば、
- コリント前書 13:4 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。
- コリント後書 6:6 真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、
- ガラテヤ 5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、
- エペソ 4:2 できる限り謙虚で、かつ柔和であり、**寛容**を示し、愛をもって互に忍びあい、
- ピリピ 4:5 あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。
- コロサイ 3:12 だから、あなたがたは、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者であるから、あわれみの心、慈愛、謙そん、柔和、寛容を身に着けなさい。
- テサロニケ前書 5:14 兄弟たちよ。あなたがたにお勧めする。怠惰な者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。
- テモテ前書 1:16 しかし、わたしがあわれみをこうむったのは、キリスト・イエスが、まずわたしに対して限りない寛容を示し、そして、わたしが今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範となるためである。
- テモテ前書 3:3 酒を好まず、乱暴でなく、寛容であって、人と争わず、金に淡泊で、
- テモテ後書 3:10 しかしあなたは、わたしの教、歩み、こころざし、信仰、寛容、愛、忍耐、
- テモテ後書 4:2 御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。
- テトス 3:2 だれをもそしらず、争わず、寛容であって、すべての人に対してどこまでも柔和な態度を示すべきことを、思い出させなさい。
- ヤコブ 3:17 しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りがない。
- ペテロ前書 2:18 僕たる者よ。心からのおそれをもって、主人に仕えなさい。善良で寛容な主人だけにでなく、気むずかしい主人にも、そうしなさい。
- ペテロ前書 3:20 これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった。

  - ペテロ後書 3:15 また、わたしたちの主の寛容は救のためであると思いなさい。このことは、わたしたちの愛する兄弟パウロが、彼に与えられた知恵によって、あなたがたに書きおくったとおりである。

- 寛容について：ウイリアム・バークレイ「マルコ福音書」
  - ウイリアム・ペン（1644-1718 クエーカー）：汝が理解できないものを軽蔑し、また反対するなかれ
  - キングズリ・ウイリアムズ訳ユダ 10：これらの人々は彼らの理解しないことをののしる（聖書協会共同訳：しかし、この人々は自分が知りもしないことをそしり、また、分別のない動物のように、ただ本能的な知識にあやまられて、自らの滅亡を招いている。）
  - テニソン：神やご自身を多くの方法で成就される。
  - セルバンテス：神は彼の民を天国に運ぶ多くの路を持ちたもう
  - ジョン・モーリー（1838-1923）：寛容は真理のあらゆる可能性に対する尊敬を意味する。真理は様々の家に住み、多彩な衣服を身にまとい、種々の聞き慣れない言葉で語るのを認めることを意味する。それは機械的な形式、公認の慣例、社会的勢力に対して、内在する良心の自由を率直に尊敬することである。それは、慈愛が信仰や希望よりも大きいことを意味する。
  - ヴォルテール（1694-1778）：わたしはあなたのいったことは大嫌いだ。しかし、わたしはそういうあなたの権利のためなら、死んでもよい。
  - チャルマーズ博士（17C スコットランド）：クリスチャンの良さを生み出す手段としての教会でなければ、いったい誰が教会に関心を示すだろうか。
  - 誰でもその指輪をはめると、その性質がやさしく誠実になり、すべての人々に愛された。ほかにふたつ作られこどもたちに贈った。どれが本物か判定を任された裁判官は「わたしにはどれが魔法の指輪かわからない。しかし、あなたが、それを証明できる。もし、本当の指輪が、それをはめる者の正確にやさしさを与えることが真実ならば、その人の善良なる生活によって、わたしもこの町にいる他の人々も本当の指輪をはめている人を見分けることができるだろう。だから、それぞれ自分の方法でやりなさい。親切、誠実、勇敢、正確でありなさい。これらのことを行った人が本当の指輪の持ち主なのだ。」
  - 彼はわたしを締め出す円を描いた。反逆者、異端者、あざける事柄。しかし愛とわたしは機知を持って勝ちを得た。われわれは彼を包み込む円を描いた。

- マタイ 12:30 わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。
  - ベルゼブル論争（マルコ 3:20-30、マタイ 12:22-32、ルカ 12:10）[参照]
  - ルカ 11:40 わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。

- マルコ 3:28-29 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。29 しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。

4.54.4 記録

- 日時：2024 年 5 月 16 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）2 名

4.54.5 問いについて

1. どのような背景があるのでしょうか。ルカ 9:49 も参考にしましょう。
   - 49a するとヨハネが答えて言った、（聖書協会共同訳：ヨハネが答えて言った。）
   - [DQ] （特にルカでは、）前の話とつながっているように、描かれていますが、もし、つながっているとすると、ヨハネは、イエスのどのような言葉に反応したのでしょうか。
     - イエスの名に関係しているのかもしれない。
       * 38b あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ました
       * [Q] この行為によって、受け入れる人がいるかもしれないということだろうか。
     - もしかすると、自分はこんなことをしたという偉さに関係しているのかもしれない。
     - イエスを受け入れるという言葉に反応したのだろうか。十分には理解しづらい。
       * 37 「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。
2. ヨハネは、どのようなことをイエスに伝えていますか。（38）
   - 38 ヨハネがイエスに言った、「先生、わたしたちについてこない者が、あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちについてこなかったので、やめさせました」。
   - [参考] ルカ 9:49 するとヨハネが答えて言った、「先生、わたしたちはある人があなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちの仲間でないので、やめさせました」。
     - 仲間ではない (: i) to follow one who precedes, join him as his attendant, accompany him, ii) to join one as a disciple, become or be his disciple, 1:18, 2:14,15, 3:7, 5:24, 6:1, 8:34, 9:38, 10:21, 28, 32, 52, 11:9, 14:13, 51, 54, 15:41)

- [DQ] なぜ、イエスの名を使って悪霊を追い出すものが登場したのでしょうか。
  - より有力な名前に抵抗できないと考えられていた。
  - 悪霊（汚れた霊）を追い出すことがいちばん人々が印象的だったことなのだろう。
  - イエスには従えないが、その力には興味があったのかもしれない。
- 参考：使徒 19:13-17 そこで、ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが、悪霊につかれている者にむかって、主イエスの名をとなえ、「パウロの宣べ伝えているイエスによって命じる。出て行け」と、ためしに言ってみた。14 ユダヤの祭司長スケワという者の七人のむすこたちも、そんなことをしていた。15 すると悪霊がこれに対して言った、「イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ」。16 そして、悪霊につかれている人が、彼らに飛びかかり、みんなを押えつけて負かしたので、彼らは傷を負ったまま裸になって、その家を逃げ出した。17 このことがエペソに住むすべてのユダヤ人やギリシヤ人に知れわたって、みんな恐怖に襲われ、そして、主イエスの名があがめられた。
- [DQ] ヨハネはなぜやめさせたのでしょうか。
  - 自分たちについてこない。イエスに従わない。
  - イエス（の教え）を受け入れる、神様を受け入れることとの区別がついていないのだろうか。
  - 何をもって仲間とするかの判断基準がここでも重要に思える。
- [DQ] 悪霊を追い出していた人たちはどのような人たちだと思いますか。
  - 律法学者やパリサイ派の人たちではありませんか。おそらく NO。
  - なぜそう考えるのでしょうか。では、どのような人たちですか。

3. イエスはどのように答えますか。（39,40）

- 39 イエスは言われた、「やめさせないがよい。だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしることはできない。40 わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方である。
- [DQ] 「だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしることはできない。」はどのようなことを伝えていますか。
  - ある意味で、（神様が与えられた）イエスの力（権威）に信頼していることを表現している。おそらく、律法学者やパリサイ派の人は、そのようにはしないだろう。
  - （ベルゼブル論争）「3:23b どうして、サタンがサタンを追い出すことができようか。24 もし国が内部で分れ争うなら、その国は立ち行かない。25 また、もし家が内わで分れ争うなら、その家は

立ち行かないであろう。26 もしサタンが内部で対立し分争するなら、彼は立ち行けず、滅んでしまう。

    * [Q] 内部分裂しないためでしょうか。

- [DQ] イエスの視点は、ヨハネの視点とどのようなところが異なっていますか。
  - 「わたしたちについてくるか」「かみさまの御心を行っているか」前者は、分かり易いが、後者はそのとおりだとしても、判断は難しい。
- [DQ] 一般的に「寛容」であれと言っているのでしょうか。
  - そうかも知れない。寛容が心の広さをもって受け入れることであるなら、
  - 愛は寛容であり（1 コリント 13:4）　: to be of a long spirit, not to lose heart (a) to persevere patiently and bravely in enduring misfortunes and troubles, (b) to be patient in bearing the offenses and injuries of others (Mat 18:26, 29, Luke 18:7, 1Thess 5:14, Heb 6:15, Jas 5:7, 8, 2Pet 3:9)
  - なぜ、寛容さが大切なのでしょうか。
- [DQ] 反対しないものは、ほんとうに、味方なのでしょうか。
- 反対しない、 悪霊を追い出す奉仕の業、 イエスの名を唱えている

4. イエスはさらにどのようなことを伝えていますか。（41）
   - 41 だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報いからもれることはないであろう。
   - [DQ] 「キリストについている者」かどうかが、重要なのでしょうか。
     - キリストについていない者に恵みの業を行っても報われないのでしょうか。（おそらくそう入っていない。）
   - 参照：マタイ 25:31-46 40 すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。
   - [DQ] 「報い」とはなんでしょうか。
5. ルカ 9:51-56 からはどのようなことがわかりますか。
   - [DQ] なぜサマリア人はイエスを歓迎しなかったのでしょう。
   - [DQ] 弟子達の派遣のときと、何が違うのでしょうか。

  - 6:11 また、あなたがたを迎えず、あなたがたの話を聞きもしない所があったなら、そこから出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに、足の裏のちりを払い落しなさい」。

- 参考：マルコ 3:17 またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。

6. イエスはどのようなことを教えているのでしょうか。

   - [DQ] マタイ 12:30 「わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。」と比較してどのように理解すればよいのでしょうか。

     - ベルゼブル論争では、23 そこでイエスは彼らを呼び寄せ、譬をもって言われた、「どうして、サタンがサタンを追い出すことができようか。24 もし国が内部で分れ争うなら、その国は立ち行かない。25 また、もし家が内わで分れ争うなら、その家は立ち行かないであろう。26 もしサタンが内部で対立し分争するなら、彼は立ち行けず、滅んでしまう。27 だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、その人の家に押し入って家財を奪い取ることはできない。縛ってからはじめて、その家を略奪することができる。28 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。29 しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。（マルコ）

     - マタイでは引用句が含まれている。本筋はまず、「もし国が内部で分れ争うなら、その国は立ち行かない。」と始めている。マタイでは、引用句が含まれるが、マルコでは含まれない。「ルカ 11:23 わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。」も参照。

4.54.6 メモ

- 背景は不明：ルカの「すると」のように、直接的につながっているのかは不明だが、ここに置かれたことは確かなので、ある程度の連続性は仮定して良いように思われる。すると、単純なのは、「イエスの名」だろうか。

- 全体として、ヨハネ 6 章 66-71 節にあるように、イエスから去っていくものが多かったのかもしれない。このあとの、ルカにあるサマリアのエピソードのように、イエスのメシヤとしての行動を理解するものはほとんどいなかったということもあるように思われる。

- 寛容は神様の性質、わたしたちを受け入れてくださっている。これが基本。歓迎は、受け入れがたいものを受け入れることなのだから。

- マタイ 12:30、ルカ 11:23 は、時代的背景もあるかもしれない。イエスの直接の教えは、マルコであるが、分断が初代教会時代にある程度広がったのかもしれない。

- ひとは、単純化バイアスから自由にはなれない。しかし、単純化バイアスにつねに繋ぎ止められるのでは

なく、それから、解き放たれることも可能で、それもひとのたいせつな部分。自由になれないとしても、それを、さばいてはならない。だれにとっても難しいこと。同時に、自由になることをもとめることも大切。

4.55 9:42-50 罪への誘惑

42 また、わたしを信じるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海に投げ込まれた方が、はるかによい。43 もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、片手になって命に入る方がよい。44 〔地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。〕45 もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい。46 〔地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。〕47 もし、あなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出しなさい。両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目になって神の国に入る方がよい。48 地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。49 人はすべて火で塩づけられねばならない。50 塩はよいものである。しかし、もしその塩の味がぬけたら、何によってその味が取りもどされようか。あなたがた自身の内に塩を持ちなさい。そして、互に和らぎなさい」。

4.55.1 マタイ 18:6-9

6 しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる。7 この世は、罪の誘惑があるから、わざわいである。罪の誘惑は必ず来る。しかし、それをきたらせる人は、わざわいである。8 もしあなたの片手または片足が、罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。両手、両足がそろったままで、永遠の火に投げ込まれるよりは、片手、片足になって命に入る方がよい。9 もしあなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。両眼がそろったままで地獄の火に投げ入れられるよりは、片目になって命に入る方がよい。

4.55.2 ルカ 17:1-2

1 イエスは弟子たちに言われた、「罪の誘惑が来ることは避けられない。しかし、それをきたらせる者は、わざわいである。2 これらの小さい者のひとりを罪に誘惑するよりは、むしろ、ひきうすを首にかけられて海に投げ入れられた方が、ましである。

マルコによる福音書 9 章 42-50 節福音書対照表

4.55.3 問い

1. これまでの部分とどのように関係していますか。

2.「小さいもの」とは、誰のことでしょうか。(42)

3. 描かれている、四つのことがらについて上げてみましょう。(42-47)

4. 片手、片足、片目が罪を犯させるとはどのようなことでしょうか。(43-47)

5. いのちに入る、神の国に入る、地獄に投げ入れられるとはどのようなことでしょうか。(43-48)

6.「塩を持ちなさい、互いに和らぎなさい」はなにを教えているのでしょうか。(49,50)

4.55.4 参照

- マタイではこのあと、「迷い出た羊」のたとえ(18:10-14)、きょうだいの忠告(18:15-20)、「仲間を赦さない家来」のたとえ(18:21-35)が挿入
- ルカでは、9 章の終わりから、16 章まで全く別構成になっている。
- 天国
  - 天国は地上における社会で、そこでは神の意志が天において行われているように、完全に地上で行われるところである。
- 塩
  - レビ記 2:13　あなたの素祭の供え物は、すべて塩をもって味をつけなければならない。あなたの素祭に、あなたの神の契約の塩を欠いてはならない。すべて、あなたの供え物は、塩を添えてささげなければならない。
  - 民数記 18:19　イスラエルの人々が、主にささげる聖なる供え物はみな、あなたとあなたのむすこ娘とに与えて、永久に受ける分とする。これは主の前にあって、あなたとあなたの子孫とに対し、永遠に変らぬ塩の契約である」。
  - 歴代誌下 13:5　あなたがたはイスラエルの神、主が塩の契約をもってイスラエルの国をながくダビデとその子孫に賜わったことを知らないのか。
  - ヨブ 6:6 味のない物は塩がなくて食べられようか。すべりひゆのしるは味があろうか。
  - エゼキエル 43:24 これを主の前に持ってきて、祭司らはその上に塩をまき、これらを燔祭として主にささげよ。
  - マタイ 5:13 あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。

- マルコ 9:49, 50 人はすべて火で塩づけられねばならない。50 塩はよいものである。しかし、もしその塩の味がぬけたら、何によってその味が取りもどされようか。あなたがた自身の内に塩を持ちなさい。そして、互に和らぎなさい」。
- ルカ 14:34 塩は良いものだ。しかし、塩もききめがなくなったら、何によって塩味が取りもどされようか。35 土にも肥料にも役立たず、外に投げ捨てられてしまう。聞く耳のあるものは聞くがよい」。
- コロサイ 4:6 いつも、塩で味つけられた、やさしい言葉を使いなさい。そうすれば、ひとりびとりに対してどう答えるべきか、わかるであろう。
- ヤコブ 3:12 わたしの兄弟たちよ。いちじくの木がオリブの実を結び、ぶどうの木がいちじくの実を結ぶことができようか。塩水も、甘い水を出すことはできない。

- 地獄（ゲヘナ）　：Hell is the place of the future punishment called “Gehenna” or “Gehenna of fire”. This was originally the valley of Hinnom, south of Jerusalem, where the filth and dead animals of the city were cast out and burned; a fit symbol of the wicked and their future destruction.
  - マルコ 9:43-48
  - マタイ 5:22 しかし、わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会に引きわたされるであろう。また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう。
  - マタイ 5:29,30 もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。30 もしあなたの右の手が罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に落ち込まない方が、あなたにとって益である。
  - マタイ 10:28 また、からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。
  - マタイ 18:9 もしあなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。両眼がそろったままで地獄の火に投げ入れられるよりは、片目になって命に入る方がよい。
  - マタイ 23:15 偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたはひとりの改宗者をつくるために、海と陸とを巡り歩く。そして、つくったなら、彼を自分より倍もひどい地獄の子にする。
  - マタイ 23:33 へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰をのがれることができようか。
  - ルカ 12:5 恐るべき者がだれであるか、教えてあげよう。殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかたを恐れなさい。そうだ、あなたがたに言っておくが、そのかたを恐れなさい。

  - ヤコブ 3:6 舌は火である。不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地獄の火で焼かれる。

- ベンヒンノム（ゲヒンノムの谷）
  - ヨシュア 15:8 またその境はベンヒンノムの谷に沿って、エブスびとの地、すなわちエルサレムの南のわきに上り、ヒンノムの谷の西にある山の頂に上る。これはレパイムの谷の北の果にあるものである。
  - ヨシュア 18:16 ついでその境は、レパイムの谷の北の端にあるベンヒンノムの谷を見おろす山の端に下り、進んでエブスびとのわきの南、ヒンノムの谷に下り、また下ってエンロゲルに至り、
  - 列王記下 23:10 王はまた、だれもそのむすこ娘を火に焼いて、モレクにささげ物とすることのないように、ベンヒンノムの谷にあるトペテを汚した。
  - 歴代誌下 28:3 ベンヒンノムの谷で香をたき、その子らを火に焼いて供え物とするなど、主がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の憎むべき行いにならい、
    - エレミヤ 7:31,32 またベンヒンノムの谷にあるトペテの高き所を築いて、むすこ娘を火に焼いた。わたしはそれを命じたことはなく、またそのようなことを考えたこともなかった。32 主は言われる、それゆえに見よ、その所をトペテ、またはベンヒンノムの谷と呼ばないで、ほふりの谷と呼ぶ日が来る。それはほかに場所がないので、トペテに葬るからである。
  - 歴代誌下 33:6 彼はまたベンヒンノムの谷でその子供を火に焼いて供え物とし、占いをし、魔法をつかい、まじないを行い、口寄せと、占い師を任用するなど、主の前に多くの悪を行って、その怒りをひき起した。
    - エレミヤ 32:35 またベンヒンノムの谷にバアルの高き所を築いて、むすこ娘をモレクにささげた。わたしは彼らにこのようなことを命じたことはなく、また彼らがこの憎むべきことを行って、ユダに罪を犯させようとは考えもしなかった。
  - エレミヤ 19:2 瀬戸かけの門の入口にあるベンヒンノムの谷へ行き、その所で、わたしがあなたに語る言葉をのべて、
  - エレミヤ 19:6 主は言われる、それゆえ、見よ、この所をトペテまたはベンヒンノムの谷と呼ばないで、虐殺の谷と呼ぶ日がくる。
- イザヤ書 66:24 「彼らは出て、わたしにそむいた人々のしかばねを見る。そのうじは死なず、その火は消えることがない。彼らはすべての人に忌みきらわれる」。

4.55.5 記録

- 日時：2024 年 5 月 23 日午後 7 時半〜9 時半

- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）1 名

4.55.6 問いについて

1. これまでの部分とどのように関係していますか。

    - 聖書協会共同訳では、38 節から新しい段落になっているが、口語訳では、38 節のヨハネの問からつながっている。

    - 山上の変貌とおしの霊につかれたこどもを癒やす記事以降

        - 9:30-32 再び自分の死と復活を予告する：30 イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。

        - 9:33-37 いちばん偉い者：37 だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。

        - 9:38-41 逆らわない者は味方：41 だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報いからもれることはないであろう。

        - このエピソードの背景は明確ではないが、弟子たちとイエスの間に十分な共通理解があったわけではないことも踏まえつつ、このように話が進んだと仮定して読んでみよう。イエスにとって、弟子たちにとって、なにがたいせつなのか、そのすり合わせをしているようなときのようにも見える。イエスにとっては、残された地上での日々が短いことを意識しつつ、弟子たちに託していくことについて考え、弟子たちにとっては、基本的に自分たちだけがイエスに従っているような状況の中で、どんな生き方が偉いのか、イエスに従っていくことが絶対ではないのか、おさなごを受け入れるとはどのようなことなのか、イエスからのメッセージを必死で受け取ろうとしてたように思われる。

    - [DQ] 前段の寛容とはかなりトーンが異なるように思われますが、誰に対して語られているのでしょうか。

        - 前後関係からすると、弟子たちに語られているように見える。マタイには、ヨハネの記事はないが、ほぼ同じ構成になっており、「いちばん偉い者」で、幼子を受け入れるに続いて描かれている。ルカでは、前後関係など、構成は異なるが、弟子たちに語られている。

        - マタイでは、「18:7 この世は、罪の誘惑があるから、わざわいである。罪の誘惑は必ず来る。しかし、それをきたらせる人は、わざわいである。」と書かれており。イエス様は、弟子たちや、その後の、リーダーたちに迫る、様々な困難を予想していたのだろう。もしかすると、イエス様も、悪魔の誘惑も含めて、様々な罪の誘惑と対峙していたのかもしれない。マタイによる福音書記者は、このようなことをすでにたくさん見てきたのかもしれない。

2.「小さいもの」とは、誰のことでしょうか。(42)

- 42 また、わたしを信じるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海に投げ込まれた方が、はるかによい。
  - 「41 だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報いからもれることはないであろう。」に続くと考えると、あなたがた、つまり弟子たちが意識されているように見える。しかし、ことばとしては、もっと一般的に響く。イエス(または神)が、または、イエス(または神)を、完全ではないが、愛そうとしているものだろうか。
  - 「36 そして、ひとりの幼な子をとりあげて、彼らのまん中に立たせ、それを抱いて言われた。37 k『だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである』。」に関係しているとすると、もっとずっと広いことが関係しているように見える。「幼子(またはイエス、または不完全な自分のような存在)を受け入れようとするもの」
- [DQ] 人をつまづかせるとはどのような事でしょうか。
  - おそらく、水いっぱいがとても嬉しいというひとに、水をあげることと対比されているのだろう。
- [DQ] 他の人との関係についてどんな警告が与えられていますか。
  - 「つまづかせる」は、だれか他者をつまづかせるように感じるが、このあとは、自分の手や足や目について言及されている。小さいものとして想定されていることと、罪を犯させるとの関係は、単純ではない。

3. 描かれている、四つのことがらについて上げてみましょう。(42-47)

- 42 また、わたしを信じるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海に投げ込まれた方が、はるかによい。43 もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、片手になって命に入る方がよい。44 〔地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。〕45 もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい。46 〔地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。〕47 もし、あなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出しなさい。両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目になって神の国に入る方がよい。
- 42 節から 47 節には四つの対比があります。それぞれの場合に何が何よりも良いのですか。
  1.「わたしを信じるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる」より「大きなひきうす(聖書協会共同訳:ロバの挽く石臼)を首にかけられて海に投げ込まれた方が、はるかによい」。

2.「あなたの片手が罪を犯させる」なら「切り捨てなさい」。「両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、片手になって命に入る方がよい。」

3.「あなたの片足が罪を犯させる」なら「切り捨てなさい」。「両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい。」

4.「あなたの片目が罪を犯させる」なら「抜き出しなさい」。「両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目になって神の国に入る方がよい。」

- [DQ]「つまづかせる」と「罪を犯させる」は、同じなのでしょうか。
  - 興味深い問である。「罪を犯す」は理解できても、ここでは、「罪を犯させる」「つまづかせる」ことが問われている。マタイ 18:7 の「罪の誘惑は必ず来る」と連動させると両方に視点がある。
  - 誰を想定しているか、混在しているように見える。前段では、「キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるもの」と言っているので、つまづかせられるのは、弟子たちであるように見えるが、このあとには、あなたの片手、片足、片目が罪を犯させるならとなっているので、つまづかせる主体は、弟子たちであるようにも見える。
- [DQ] なにを教えているのでしょうか。
  -「41 だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報いからもれることはないであろう。」とはいえ、あなたがたが、逆に、つまづかせる、罪を犯させるようなことは、絶対にいけないよ。と言っているかのようである。
- [DQ] 絶対にしてはならないことと、犠牲をともなっても、守るべきたいせつなことについて述べているようですが、それらはどのようなことなのでしょう。
  - 神の意志を行うためにするいかなる犠牲も、訓練も、自己否定も値打ちのあるものである。

4. 片手、片足、片目が罪を犯させるとはどのようなことでしょうか。(43-47)

- 43 もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、片手になって命に入る方がよい。44 〔地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。〕45 もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい。46 〔地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。〕47 もし、あなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出しなさい。両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目になって神の国に入る方がよい。
- [DQ] 手や足はどのようにその人に罪をおかさせうるでしょうか。罪の結果は何ですか。
  - おそらく、なにがあっても、イエスをしんじつ、小さいもの（完璧ではない弱いもの）を、指導者でもある、あなた方は、絶対に、躓かせてはいけない。もし、そのような要因があるなら、そ

れを断固切り捨てなさい。と言っているかのようである。

- [DQ] 今日の社会で、どんなことが、他の人に罪をおかさせるつまずきになりますか。
  - ちいさなものを無視。イエスの名のゆえに受け入れることの逆。
  - ちいさなものを愛しておられるかみさまを見逃す、みようとしない。
  - 神様の、よろこばれることを考えず、自分の名があげられることを求める。

5. いのちに入る、神の国に入る、地獄に投げ入れられるとはどのようなことでしょうか。(43-48)

- 43 もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、片手になって命に入る方がよい。44 〔地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。〕45 もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい。46 〔地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。〕47 もし、あなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出しなさい。両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目になって神の国に入る方がよい。48 地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。
- [DQ] いのちに入る、神の国に入るとは。
  - 神様の国(みこころがなる世界)に生きることを求めること。
  - 神のみこころとシンクロして生きること。
  - 神の意志を行うためにするいかなる犠牲も、訓練も、自己否定も値打ちのあるものである。
- [DQ] 地獄に投げ入れられるとは。
  - 神様のみこころを受け入れることを拒否した生活を送ること。
- [DQ] 火とはどのような意味に使われているのでしょうか。
  - 48 地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。49 人はすべて火で塩づけられねばならない。(イザヤ書 66:24 「彼らは出て、わたしにそむいた人々のしかばねを見る。そのうじは死なず、その火は消えることがない。彼らはすべての人に忌みきらわれる」。)

6.「塩を持ちなさい、互いに和らぎなさい」はなにを教えているのでしょうか。(49,50)

- 49 人はすべて火で塩づけられねばならない。50 塩はよいものである。しかし、もしその塩の味がぬけたら、何によってその味が取りもどされようか。あなたがた自身の内に塩を持ちなさい。そして、互に和らぎなさい」。
- [DQ] 塩はどのような意味に使われているのでしょうか。
  - 味をつける、防腐剤、

  - レビ記 2:13　あなたの素祭の供え物は、すべて塩をもって味をつけなければならない。あなたの素祭に、あなたの神の契約の塩を欠いてはならない。すべて、あなたの供え物は、塩を添えてささげなければならない。
  - 民数記 18:19　イスラエルの人々が、主にささげる聖なる供え物はみな、あなたとあなたのむすこ娘とに与えて、永久に受ける分とする。これは主の前にあって、あなたとあなたの子孫とに対し、永遠に変らぬ塩の契約である」。
  - 歴代誌下 13:5　あなたがたはイスラエルの神、主が塩の契約をもってイスラエルの国をながくダビデとその子孫に賜わったことを知らないのか。
- バークレイ：クリスチャンの生活が神に受け入れられるものとなるためには、ちょうど、すべての犠牲が塩で処理されたように、火で処理されなければならない。
- バークレイ：あなたがたのうちに、キリストの霊のきよめる力を持ちなさい。利己心、自我意識から、苦さ、怒り、妬みからきよめられなさい。焦燥、気まぐれ、自己中心から清められなさい。それによってのみ、あなたがたは自分の仲間と平和に過ごすことができるのである。
- 参考：
  - マタイ 5:13 あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。
  - ルカ 14:34 塩は良いものだ。しかし、塩もききめがなくなったら、何によって塩味が取りもどされようか。35 土にも肥料にも役立たず、外に投げ捨てられてしまう。聞く耳のあるものは聞くがよい」。
- [DQ] ここで、塩はなにを意味しているのでしょうか。
  - たいせつなものという漠然とした解釈でも良いかもしれない。あなたにとって、たいせつなもの失ってはいけないものは何でしょうか。
  - 十分理解できていない、幼子のような態度で、みこころを求め、生きることだろうか。
- [DQ] ここでなぜ「和らぎなさい」と言っているのでしょうか。
  - あとになり、仕えるものとなり、仕え合うことだろうか。
  - 水いっぱいを求めるものに与え、つまづきとなっていないか顧み、みこころを求め続けることか。

4.55.7 メモ

- なかなか難しい。どのように扱ったらよいのだろうか。バークレイは、「塩」や「火」で結び付けられた他の箇所の言葉が入り込んでいるとすらかいている。
- 塩・火：自分も、ひとりの、幼子のように、神様のみこころを十分は理解できていないことを自覚しつつ、生きることが求められている。しかし、みこころに生きることを求めるところが忘れられてしまったら、慈善活動も、福音宣教も、まったく、意味のないものになってしまうと言っているように感じる。
- 全体として、つながっているように見える。イエスが、弟子たちに伝えたかったこと。それが凝縮しているのだろう。ちいさいものとして、そして、たいせつなものをたいせつに、躓かせないようにと厳しく話すところには、ヨハネのような行為に、注意するようにとのメッセージが含まれているようにみえるし、また、最後に「たいせつなことをたいせつにすることによって、和らぎなさい」も、批判的にならず、自分を攻めるのでもなく、互いに、和らぐことを勧めている。塩がなにかは、明確ではないが、大切なものであることはわかる。

4.56 10:1-12 離婚について教える

1 それから、イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれたが、群衆がまた寄り
集まったので、いつものように、また教えておられた。2 そのとき、パリサイ人たちが近づいてきて、イ
エスを試みようとして質問した、「夫はその妻を出しても差しつかえないでしょうか」。3 イエスは答えて
言われた、「モーセはあなたがたになんと命じたか」。4 彼らは言った、「モーセは、離縁状を書いて妻を出
すことを許しました」。5 そこでイエスは言われた、「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、あな
たがたのためにこの定めを書いたのである。6 しかし、天地創造の初めから、『神は人を男と女とに造られ
た。7 それゆえに、人はその父母を離れ、8 ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたり
ではなく一体である。9 だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」。10 家にはいってか
ら、弟子たちはまたこのことについて尋ねた。11 そこで、イエスは言われた、「だれでも、自分の妻を出
して他の女をめとる者は、その妻に対して姦淫を行うのである。12 また妻が、その夫と別れて他の男に
とつぐならば、姦淫を行うのである」。

4.56.1 マタイ 19:1-12

1 イエスはこれらのことを語り終えられてから、ガリラヤを去ってヨルダンの向こうのユダヤの地方へ行
かれた。2 すると大ぜいの群衆がついてきたので、彼らをそこでおいやしになった。3 さてパリサイ人た
ちが近づいてきて、イエスを試みようとして言った、「何かの理由で、夫がその妻を出すのは、さしつかえ
ないでしょうか」。4 イエスは答えて言われた、「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初め
から人を男と女とに造られ、5 そして言われた、それゆえに、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたり

の者は一体となるべきである』。6 彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」。7 彼らはイエスに言った、「それでは、なぜモーセは、妻を出す場合には離縁状を渡せ、と定めたのですか」。8 イエスが言われた、「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、妻を出すことを許したのだが、初めからそうではなかった。9 そこでわたしはあなたがたに言う。不品行のゆえでなくて、自分の妻を出して他の女をめとる者は、姦淫を行うのである」。10 弟子たちは言った、「もし妻に対する夫の立場がそうだとすれば、結婚しない方がましです」。11 するとイエスは彼らに言われた、「その言葉を受けいれることができるのはすべての人ではなく、ただそれを授けられている人々だけである。12 というのは、母の胎内から独身者に生れついているものがあり、また他から独身者にされたものもあり、また天国のために、みずから進んで独身者となったものもある。この言葉を受けられる者は、受けいれるがよい」。

マルコによる福音書 10 章 1-12 節福音書対照表

4.56.2 問い

1. 状況と背景を確認しましょう。どこからどこへ向かっていますか。(1)
2. 誰が、どのような目的で、どのような質問をしますか。(2)
3. イエスはまずどのようなやり取りをしますか。(3,4)
4. イエスは、どのようなことを教えますか。(5-9)
5. さらに、弟子たちには、どのように教えますか。(10-12)
6. イエスは、なにをたいせつなこととして教えているのでしょうか。

4.56.3 参照

- 地図：ガリラヤからエルサレムへ
  - Jesus' Ministry in Galilee and Journey to Jerusalem [参照]
  - Jesus' Journeys from Gal1lee to Judea [参照]
- マタイでは、「罪への誘惑」(18:6-9、マルコ 9:42-48) のあと、「迷い出た羊」のたとえ、きょうだいの忠告、「仲間を赦さない家来」のたとえがあり、その後で、離縁について教える今回の記事が続く。このあとは、こどもを祝福する、金持ちの青年とマルコと同じ配列になっている。
- 6 しかし、天地創造の初めから、『神は人を男と女とに造られた。7 それゆえに、人はその父母を離れ、8 ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。

  - 創世記 1:27 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。
  - 創世記 2:18-25 また主なる神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」。19 そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。20 それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。21 そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。22 主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。23 そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、／わたしの肉の肉。男から取ったものだから、／これを女と名づけよう」。創世記 2:24 それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。25 人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。
  - エペソ 5:31-33 「それゆえに、人は父母を離れてその妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである」。32 この奥義は大きい。それは、キリストと教会とをさしている。33 いずれにしても、あなたがたは、それぞれ、自分の妻を自分自身のように愛しなさい。妻もまた夫を敬いなさい。
  - コリント前書 6:16-20 それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。17 しかし主につく者は、主と一つの霊になるのである。18 不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。19 あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。20 あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。
- 離縁状（マルコ 10:4, マタイ 19:7 以外）
  - 申命記 24:1-4 人が妻をめとって、結婚したのちに、その女に恥ずべきことのあるのを見て、好まなくなったならば、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせなければならない。2 女がその家を出てのち、行って、ほかの人にとつぎ、3 後の夫も彼女をきらって、離縁状を書き、その手に渡して家を去らせるか、または妻にめとった後の夫が死んだときは、4 彼女はすでに身を汚したのちであるから、彼女を去らせた先の夫は、ふたたび彼女を妻にめとることはできない。これは主の前に憎むべき事だからである。あなたの神、主が嗣業としてあなたに与えられる地に罪を負わせてはならない。
  - イザヤ 50:1-3 主はこう言われる、／「わたしがあなたがたの母を去らせたその離縁状は、／どこにあるか。わたしはどの債主にあなたがたを売りわたしたか。見よ、あなたがたは、その不義のために売られ、／あなたがたの母は、／あなたがたのとがのために出されたのだ。2 わたしが来たとき、／なぜひとりもいなかったか。わたしが呼んだとき、／なぜひとりも答える者がなかったか。わたしの手が短くて、／あがなうことができないのか。わたしは救う力を持たないのか。見よ、わたしが、しかると海はかれ、／川は荒野となり、／その中の魚は水がないために、／かわき死んで悪臭を放つ。3

わたしは黒い衣を天に着せ、／荒布をもってそのおおいとする」。

  - エレミヤ 3:8-10 わたしが背信のイスラエルを、そのすべての姦淫のゆえに、離縁状を与えて出したのをユダは見た。しかもその不信の姉妹ユダは恐れず、自分も行って姦淫を行った。9 彼女にとって姦淫は軽いことであったので、石と木とに姦淫を行って、この地を汚した。10 このすべての事があっても、なおその不信の姉妹ユダは真心をもってわたしに帰らない、ただ偽っているだけだ」と主は言われる。

    * エレミヤ 3:1 もし人がその妻を離婚し、／女が彼のもとを去って、他人の妻となるなら、／その人はふたたび彼女に帰るであろうか。その地は大いに汚れないであろうか。あなたは多くの恋人と姦淫を行った。しかもわたしに帰ろうというのか」と主は言われる。

  - マタイ 5:31-32 また『妻を出す者は離縁状を渡せ』と言われている。32 しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、不品行以外の理由で自分の妻を出す者は、姦淫を行わせるのである。また出された女をめとる者も、姦淫を行うのである。

    * マタイ 5:33-37 また昔の人々に『いつわり誓うな、誓ったことは、すべて主に対して果せ』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。34 しかし、わたしはあなたがたに言う。いっさい誓ってはならない。天をさして誓うな。そこは神の御座であるから。35 また地をさして誓うな。そこは神の足台であるから。またエルサレムをさして誓うな。それは『大王の都』であるから。36 また、自分の頭をさして誓うな。あなたは髪の毛一すじさえ、白くも黒くもすることができない。37 あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきだ。それ以上に出ることは、悪から来るのである。

- 姦淫（マルコ 10:11,12、マタイ 19:9 以外の福音書）

  - マルコ 7:20-23 さらに言われた、「人から出て来るもの、それが人をけがすのである。21 すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、22 姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴。23 これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである」。（マタイ 15:1-20）

  - マルコ 10:17-22 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」。18 イエスは言われた、「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。19 いましめはあなたの知っているとおりである。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。欺き取るな。父と母とを敬え』」。20 すると、彼は言った、「先生、それらの事はみな、小さい時から守っております」。21 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。22 すると、彼はこの言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。（マタイ 19:16-30、ルカ 18:18-30）

  - マタイ 5:27-30 『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。28 し

かし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。29 もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。30 もしあなたの右の手が罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に落ち込まない方が、あなたにとって益である。

  - ルカ 16:18 すべて自分の妻を出して他の女をめとる者は、姦淫を行うものであり、また、夫から出された女をめとる者も、姦淫を行うものである。
  - ルカ 18:11 パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。
  - ヨハネ 8:3-5 すると、律法学者たちやパリサイ人たちが、姦淫をしている時につかまえられた女をひっぱってきて、中に立たせた上、イエスに言った、4 「先生、この女は姦淫の場でつかまえられました。5 モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか」。
- 姦淫（日本国語大辞典）
  - かん - いん【姦淫・奸淫】

    〖名〗男女が道義に反する肉体関係を結ぶこと。不倫な情事。

    ＊読本・翁丸物語（1807）上

    「今年四十一歳なり。されど奸淫を好みて」
  - かんいん - ざい【姦淫罪】

    〖名〗姦淫をする罪。

    ㋑法律で、婦女の真意に反して性交を強制する罪をいう。強姦罪、準強姦罪および淫行勧誘罪の総称。旧法では姦通罪を含めていた。

    ＊民法（明治二九年）（1896）八一三条

    「夫婦の一方は左の場合に限り離婚の訴を提起することを得。〈略〉三、夫が姦淫罪に因りて刑に処せられたるとき」

    ㋺キリスト教などの宗教で、姦淫禁止の戒律を破る罪。

    ＊大津順吉（1912）〈志賀直哉〉一

    「私にとって教へでの最も不調和なものは姦淫罪の律おきてであった」
- 日本の離婚に関する法律
  - 協議離婚・調停離婚・審判離婚・裁判離婚

  - 法律上における 5 つの離婚の条件

    （1）配偶者に不貞行為があった

    （2）配偶者から悪意の遺棄を受けた

    （3）生死が 3 年以上不明

    （4）配偶者が強度の精神病で回復の見込みがない

    （5）その他婚姻関係を継続できない重大な事由

  - 第 770 条【裁判上の離婚】

    夫婦の一方は、次に掲げる場合に限り、離婚の訴えを提起することができる。

    一　配偶者に不貞な行為があったとき。

    二　配偶者から悪意で遺棄されたとき。

    三　配偶者の生死が 3 年以上明らかでないとき。

    四　配偶者が強度の精神病にかかり、回復の見込みがないとき。

    五　その他婚姻を継続し難い重大な事由があるとき。

    裁判所は、前項第一号から第四号までに掲げる事由がある場合であっても、一切の事情を考慮して婚姻の継続を相当と認めるときは、離婚の請求を棄却することができる。

4.56.4　記録

- 日時：2024 年 5 月 30 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）1 名

4.56.5　問いについて

1. 状況と背景を確認しましょう。どこからどこへ向かっていますか。（1）
   - 1 それから、イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれたが、群衆がまた寄り集まったので、いつものように、また教えておられた。
   - 一行はカペナウムに来て家にいたときに（33)、弟子たちを呼び寄せ、すわって教えられた。（35a）　みなに仕えるものとなるべきこと。（35b）　幼な子をイエスの名のゆえに受け入れるべきこと。（36,37）

ヨハネの応答に対して教え。（38-40）　イエスを信じるちいさなものをたいせつにするべきこと。（41-48）　自分のうちに塩を持ち、互いに和らげ。（49，50）

- 「イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれた」とあるが、マタイでは「1 イエスはこれらのことを語り終えられてから、ガリラヤを去ってヨルダンの向こうのユダヤの地方へ行かれた。2 すると大ぜいの群衆がついてきたので、彼らをそこでおいやしになった。」となっている。マルコには、いやしの記事はない。マルコでは、山を降りてきたときのいやしの記事以降は、エリコでの盲人バルティマイのいやしのみ。
- [DQ] どこでの出来事なのでしょうか。
  - マルコは、「そこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれた」とあるが、マタイでは「ガリラヤを去ってヨルダンの向こうのユダヤの地方へ行かれた。」とある。特定するのが、困難である。ただ、基本的には、地名や土地勘に関しては、マタイ記者のほうが正確な場合が多いようである。ペテロは、無論、土地勘があるが、マルコは、それが十分ではなかったのかもしれない。ヨルダンの向こうは、デカポリスや、ペレアと思われるが、川沿いは南の方は、ユダヤだったのかもしれない。また、ルカでは、サマリヤの地を通ったことになっているが、経路も不明である。すくなくとも、急いで、エルサレムに直行したのではなく、いくつかの町を通って、南下していかれたのだろう。
  - 10:32「さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。」とあるが、この時点では、どこにいるかは不明で、1 節は、大雑把な、導入なのかもしれない。10 節の「家」は、カペナウムのペトロに家を想起させる。すると、1 節はあるものの、カペナウムの可能性が高い。
- [DQ] どのような状況で、このことが起こりますか。ここには、だれがいますか。
  - 「群衆がまた寄り集まったので、いつものように、また教えておられた。」とあり、群衆に教えておられたなかで起こったこととして描かれている。具体的な問としてあるかうより、群衆に教えている中で、多少、裏のある、問が、パリサイ人から投げかけられたと見るのがよいように思われる。
- マタイでは 19:1「イエスはこれらのことを語り終えられてから、ガリラヤを去ってヨルダンの向こうのユダヤの地方へ行かれた。」と一つの区切りとしている。7:28「イエスがこれらの言を語り終えられると、群衆はその教にひどく驚いた。」, 11:1「イエスは十二弟子にこのように命じ終えてから、町々で教えまた宣べ伝えるために、そこを立ち去られた。」, 13:53「イエスはこれらの譬を語り終えてから、そこを立ち去られた。」, 26:1「イエスはこれらの言葉をすべて語り終えてから、弟子たちに言われた。」

2. 誰が、どのような目的で、どのような質問をしますか。（2）

- 2 そのとき、パリサイ人たちが近づいてきて、イエスを試みようとして質問した、「夫はその妻を出し

ても差しつかえないでしょうか」。

- [DQ] どのような質問ですか。
  - パリサイ人が、イエスを試みようとして、離婚の是非について問うている。
  - 表面的には、離婚の是非について一般的に問うているが、このあとのやり取りをみると、真意は、もう少し違うところにあるようにも見える。その背景をしっかり理解しなくてはいけないのだろう。
- [DQ] 「試そうとして」とありますが、どのようなことを試そうとしたのでしょうか。
  - 試みようとしてとあるが、このあとは、なにも、反論をしていないので、その意図がどの程度強かったのかは不明。すくなくとも、このあと弟子も「このことについて」おそらく、イエスが言われたことについて質問しているので、パリサイ人を批判したり、忌避したりという様子は見受けられない。パリサイ人の意図がどうであれ、イエスは、本質的な教えを説いている。
- [DQ] なぜ、離婚についての質問をしたのでしょうか。
  - おそらく、その理由は、このあとの、イエスとのやり取りにヒントがある。

3. イエスはまずどのようなやり取りをしますか。(3,4)

- 3 イエスは答えて言われた、「モーセはあなたがたになんと命じたか」。4 彼らは言った、「モーセは、離縁状を書いて妻を出すことを許しました」。
- [DQ] なぜ、イエスは、「モーセはあなたがたになんと命じたか」と問い返したのでしょうか。
  - 意図を明確にし、それから答える。共通の立脚点を確認する。
  - いつもの方法。問に問で返すことで、問の意味を深め、意図を明確にする。自ら考え始めるように促す。
    * 2:7-9 「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。8 イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。9 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。
    * 3:2-5 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。3 すると、イエスは片手のなえたその人に、「立って、中へ出てきなさい」と言い、4 人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。5 イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。

    - 3:32,33 ときに、群衆はイエスを囲んですわっていたが、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟、姉妹たちが、外であなたを尋ねておられます」と言った。33 すると、イエスは彼らに答えて言われた、「わたしの母、わたしの兄弟とは、だれのことか」。

- [DQ] どのように答えますか。
  - 「モーセは、離縁状を書いて妻を出すことを許しました」。
- [DQ] 申命記 24:1 からの引用のようですが、申命記 24:1 は何を教えているのでしょうか。
  - 申命記 24:1-4 1 人が妻をめとって、結婚したのちに、その女に恥ずべきことのあるのを見て、好まなくなったならば、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせなければならない。
  - 離縁状があれば、女性は他の男性と結婚することが可能となった。
- [DQ] 「モーセは、離縁状を書いて妻を出すことを許しました」。と答えていますが、では、なぜ、このひとたちは、イエスに問うたのでしょう。（最初の問の目的）
  - ユダヤ教の中で、ホットなトピックだったようだ、申命記の「恥ずべきこと（　：nakedness)」をどう取るかで、何でも理由にしうると考える派（ヒレル派）と、姦淫に限定する派（シャンマイ派）とがあったようだ。そのどちら側にたつかという質問の可能性もある。
  - バプテスマのヨハネがヘロデが妻を離縁して、ヘロデヤを娶ったことを避難したかどで、投獄されたとする節から、なにか、そのような立場をとるかとの質問かもしれない。
    - マルコ 6:17,18 このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤをめとったが、そのことで、人をつかわし、ヨハネを捕えて獄につないだ。18 それは、ヨハネがヘロデに、「兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。イエスはまずどのようなやり取りをしますか。（3,4）
  - イエスの教えを聞いていたのかもしれない。
    - マタイ 5:31-32 また『妻を出す者は離縁状を渡せ』と言われている。32 しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、不品行以外の理由で自分の妻を出す者は、姦淫を行わせるのである。また出された女をめとる者も、姦淫を行うのである。

4. イエスは、どのようなことを教えますか。（5-9）

- 5 そこでイエスは言われた、「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、あなたがたのためにこの定めを書いたのである。6 しかし、天地創造の初めから、『神は人を男と女とに造られた。7 それゆえに、人はその父母を離れ、8 ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。9 だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」。
- [DQ] 「あなたがたの心がかたくななので」は、何を意味しているのでしょうか。

  - 結婚を神のわざと考えず、離婚をしようとする。離婚によってもたらされる悲劇を最低限にするため。
- [DQ] 引用箇所を確認しましょう。どこに書かれていますか。
  - 創世記 1:27 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。
  - 創世記 2:18 また主なる神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」。
  - 創世記 2:20 それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。
  - 創世記 2:23 そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、／わたしの肉の肉。男から取ったものだから、／これを女と名づけよう」。
  - 創世記 2:24 それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。
- [DQ] イエスは結婚についてどのように教えていますか。
  - [Q] これは、新しい教えなのでしょうか。
  - [Q] 質問者は、これで満足したのでしょうか。

5. さらに、弟子たちには、どのように教えますか。(10-12)

- 10 家にはいってから、弟子たちはまたこのことについて尋ねた。11 そこで、イエスは言われた、「だれでも、自分の妻を出して他の女をめとる者は、その妻に対して姦淫を行うのである。12 また妻が、その夫と別れて他の男にとつぐならば、姦淫を行うのである」。
- [DQ] 弟子たちは、なぜ、家にはいってから、また尋ねたのでしょうか。何を知りたかったのでしょうか。
  - 身近な現実の問題なので、パリサイ人と、群衆と、弟子たち、関心はあまり差がなかったのかもしれない。
- [DQ] 「姦淫」とはどのようなことですか。これは、どのような罪なのでしょうか。
  - 日本国語大辞典：男女が道義に反する肉体関係を結ぶこと。不倫な情事。
  - マタイ 5:27-30 『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。28 しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。29 もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。

30 もしあなたの右の手が罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に落ち込まない方が、あなたにとって益である。

6. イエスは、なにをたいせつなこととして教えているのでしょうか。

- [DQ] どのようなことを正しているのでしょうか。
  - なには、赦されるのかを問うている。つまり、実際には、姦淫に興味がある。それを正当化する方法を探している。そのような、価値観に挑戦している。
  - ちいさきものに目を向けると同時に、ちいさなことには、目を向けないで、神様のみこころを求める。
- [DQ] パリサイ人は、何を最終根拠とし、イエスは、何を最終根拠としているのでしょうか。
  - パリサイ人は、律法に書いてあること、それをどう解釈するか、または解釈された律法を最終基準としているが、イエスは、神様のみこころを最終基準としているように見える。

4.56.6 メモ

- 場所は不明だが、なにか、緊張感が薄いようにも見える。ガリラヤなのか、離れた場所なのか。
- 結婚の神聖さについての、教えなのだろうか。最初に試そうとしてを正確に理解しないといけない。
- イエスは、正しいことをここで述べているとすると、ひとをさばくことにもつながる。しかし、より、一般的なことを述べているようにも、みえる。すなわち、かみさまのみこころとの向き合い方だろうか。自分の都合の良い解釈を選択するのはもってのほかだが、わからないことをも許容しないと、裁きとなる。
- 同時に、離婚があまりに、軽く考えられている現代に対して、問も投げかけている。なんでも理由をみつけて離婚にいたる（性格の不一致）ことでよいのだろうか。み心を求め続けるものでありたい。
- 山上の説教でも、姦淫のこと（マタイ 5:27-30)、離婚のこと（マタイ 5:31-32）について語っているので、パリサイ人も聞いて知っていたかもしれない。すなわち、イエスの答えも、知っていたかもしれない。しかし、ここでは、そのあと、あえて問うていないように見える。
- パリサイ人は、律法に書いてあること、それをどう解釈するか、または解釈された律法を最終基準としている（記録された神の御心と思われるもの）が、イエスは、神様のみこころを最終基準としているように見える。後者のように生きられればよいだろうが、それは、可能なのだろうか。おそらく、神のみこころを求めることを、大切にするということなのだろう。

4.57 10:13-16 子どもを祝福する

13 イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。14 それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。15 よく聞いておくがよい。だれでも

幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。16 そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。

4.57.1 マタイ 19:13-15

13 そのとき、イエスに手をおいて祈っていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。14 するとイエスは言われた、「幼な子らをそのままにしておきなさい。わたしのところに来るのをとめてはならない。天国はこのような者の国である」。15 そして手を彼らの上においてから、そこを去って行かれた。

4.57.2 ルカ 18:15-17

15 イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちはそれを見て、彼らをたしなめた。16 するとイエスは幼な子らを呼び寄せて言われた、「幼な子らをわたしのところに来るままにしておきなさい、止めてはならない。神の国はこのような者の国である。17 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受け入れる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。

マルコによる福音書 10 章 13-16 節福音書対照表

4.57.3 問い

1. このことは、どのような背景のもとで起きましたか。
2. 誰が、何の目的のために、幼な子らを連れてきますか。(13a)
3. 弟子たちはどうしますか。それは、なぜでしょうか。(13b)
4. イエスはどうしますか。(14,16)
5. イエスはさらにどのようなことを教えていますか。(14,15)
6. 人々にとって、弟子たちにとって、イエスにとって、あなたにとって、幼な子は、どのような存在ですか。

4.57.4 参照

- 幼な子 (　　：a young child, a little boy, a little girl, a) infants, b) children, little ones, c) an infant of a (male) child just recently born, of a more advanced child; of a mature child; metaph. children (like children) in intellect)

- マルコ 5:39,40,41 内にはいって、彼らに言われた、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいって行かれた。41 そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。
- マルコ 7:28 すると女は答えて言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、食卓の下にいる小犬も、子供たちのパンくずは、いただきます」。
- マルコ 9:24 その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。
- マルコ 9:36,37 そして、ひとりの幼な子をとりあげて、彼らのまん中に立たせ、それを抱いて言われた。37 「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。
- マルコ 10:13,14,15 イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。14 それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。15 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。
- ルカでは、幼な子は、　：i) an unborn child, embryo, a foetus, ii) a new-born child, an infant, a babe、しかし、マルコの記述からは、走り回っているように見える。

- こどもに関する聖書箇所
  - マタイ 21:16 イエスに言った、「あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか」。イエスは彼らに言われた、「そうだ、聞いている。あなたがたは『幼な子（　：i）an infant, little child，ii）a minor, not of age，iii）metaph. childish, untaught, unskilled）、乳のみ子たち（　：i）to give the breast, give suck, to suckle，ii）to suck）の口にさんびを備えられた』とあるのを読んだことがないのか」。

4.57.5　記録

- 日時：2024 年 6 月 6 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）4 名

4.57.6　問いについて

1. このことは、どのような背景のもとで起きましたか。

- 1 それから、イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれたが、群衆がまた寄り集まったので、いつものように、また教えておられた。ここから新しい設定。
- 1-13 「夫はその妻を出しても差しつかえないでしょうか」。の問に答えて。- おとなの事情のとりあつかい。
- 17-22 金持ちの男との対話
  - 17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」。
  - マタイ 19:22 では、「青年（　　：a young man, youth, used of a young attendant or servant）」マルコで使われているのは、14:51 と、16:5 のみ。
- 23-31 弟子たちへの教え。「子を捨てたもの」
  - 29-31 「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、30 必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。
- こどものことは、この前後では、意識に入っていないように見える。その中で唐突な、短いエピソードに見える。
- マタイでは「そのとき」（19:13）
- [DQ] イエスはどのようなときにありますか。
  - 10:1 それから、イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれたが、群衆がまた寄り集まったので、いつものように、また教えておられた。
  - 受難と死と復活の告知の二回目（9:30-32）と三回目（10:32-34）の間。（1 回目は 8:31）

2. 誰が、何の目的のために、幼な子らを連れてきますか。（13a）
   - 13a イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。
   - [DQ] 「さわっていただく」は、どのようなことを意味していますか。
     - 16 そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。
     - ユダヤ人は生後一年の赤ん坊を高名なラビに祝福してもらう習慣があった。（ルカ 2:22-33）（出エジプト 13 章）
3. 弟子たちはどうしますか。それは、なぜでしょうか。（13b）
   - 13b ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。

- [DQ] なぜ弟子たちは、幼な子らをイエスのもとに連れて来た人々をたしなめ（叱）るのでしょうか。
  - イエスの受難告知以降、緊張状態にあったと思われる。「空気を読めないのか。」
  - おとなの事情（離縁について）弟子たちが、より詳しく説明してもらいたい途中だった。「ちょっとあとにしてくれ。」
  - カペナウムでのイエスのメッセージを忘れていた。「こどもなんかにかかわってはいられない」
    * 9:33-37 それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられるとき、イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」。34 彼らは黙っていた。それは途中で、だれが一ばん偉いかと、互に論じ合っていたからである。35 そこで、イエスはすわって十二弟子を呼び、そして言われた、「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。36 そして、ひとりの幼な子をとりあげて、彼らのまん中に立たせ、それを抱いて言われた。37 「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。
    * このメッセージを真剣にうけとることには、困難もある。
- [DQ] イエスが、教えておられる途中であればどうでしょうか。
  - 10:1 それから、イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれたが、群衆がまた寄り集まったので、いつものように、また教えておられた。
  - 10:10 家にはいってから、弟子たちはまたこのことについて尋ねた。
  - [Q] 教会での説教中に、こどもが、入ってきて、だれかのもとに走り寄ってきたらどうしますか。

4. イエスはどうしますか。（14,16）

- 14 それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。
- 16 そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。
- [DQ] 幼な子らの様子についてなにかわかりますか。
  - わたしの所に来るままにしておきなさい。
    * なすがままにさせる。ここに大切な目があるように感じる。
  - イエスのもとに走ってくるものもいたのではないだろうか。まだ、カペナウム周辺にいたとすると、イエスを知っていたかもしれない。

- [DQ] イエスは、なぜ、受難告知以降も、このように振る舞われるのでしょうか。
- [DQ] 憤るとはどのようなことでしょうか。
  - ：to be indignant, moved with indignation, be very displeased
  - マタイ 20:24、21:15、26:8、マルコ 10:14、41、14:4、ルカ 13:14
- [DQ] 「神の国はこのような者の国である。」とは、どのような意味でしょうか。
  - [Q] なぜ、幼な子のような者の国なのでしょうか。
- [DQ] ここで言われている、幼な子のなにかの特色について言われているのでしょうか。
  - まだ、おとなになっていない、成長途中、成長している存在である。いきいきと生きることは成長し続けること、学び続けること。
  - バークレイ：謙遜、従順、信頼、長く覚えていない
  - 榊原：子どもの示す美徳の第一は、嬉々として贈り物を受け取る能力・受容力です。「ただほど高いものはない」というのがおとなの哲学ですから「こどものように神の国を受け入れる」ことができるのは、大変な能力です。その能力を強調すうるため、ルカは「幼子（嬰児)」とした。なんのためらいもなく「来る」平然とした態度。
- [DQ] イエスは最後に抱いて、祝福をしていますが、どのようなことを表していますか。
  - ：to take into one's arms, embrace（マルコ 9:36、10:16）
- [DQ] イエスの祝福はどのようなものなのでしょうか。
  -「あなたは愛されています。」by TV evangelist, Rex Humbard
  -「神の国はこの（あなたの）ような者の国である。」(14)
  -「あなたの人生が神様に祝福されたすばらしいものでありますように」

5. イエスはさらにどのようなことを教えていますか。(14,15)

- 14 それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。15 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。
- [DQ] 幼な子のように神の国を受け入れるとはどういうことでしょうか。
- [DQ] 「幼な子」の対極「幼な子ではない」とは、どのような人のことでしょうか。
  - 成長しないもの、成長しきったと思っているもの、変われないもの、不完全さを体さないもの。

  - おとなの事情をならべたてて、離縁をかんがえるひとたち。
  - 次のエピソードの「金持ち」?
- 離婚の話のあとに、こどもは、大切なものであることを、示している。
  - 教育ママ、育児ノイローゼとは異なる。

6. 人々にとって、弟子たちにとって、イエスにとって、あなたにとって、幼な子は、どのような存在ですか。
   - 不完全な存在。不完全さを知っていてときに応じて誰かに頼る。
   - 未来・将来の担うものたち
   - [DQ] あなたは、こどもたち、おさなごたちのために祈るとしたら、どのように祈りますか。

4.57.7 メモ

- 「離縁についての教え」と、「金持ちの男」の話に挟まれた、「子どもを祝福する」話。
  - 「先生、それらの事はみな、小さい時から守っております」という男に対するイエスのいつくしみ
- マルコの思い出としてのイエス
  - マルコもイエスに会ったことがあるのかもしれない。覚えていなくても、祝福してもらったよとか、もう少し大きくなっていたら、こどもをいつくしまれたイエスを覚えているのではないだろうか。
- イエスはどのような祝福の祈りをしたのだろうか。
  - このあとには、イエスの死があり、ステパノなどからのキリスト教会の迫害があり、AD70 には、エルサレム陥落、散り散りになってしまうときも来る。そのようなことを考えること自体が、この箇所からは離れてしまっているのかもしれない。イエスの祝福のいのりを、受け取りたい。
- こども、おさなごとは
  - 14 それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。15 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。
  - よくわからないが、離縁の正当化を考えたり、富のゆえに、イエスに従うことができなくなる、それは、幼子ではすでにないのだろう。考えさせられる。
- よいこどもとは
  - おとなにとって都合の良いこどもがよい子どもではないだろう。しかし、往々にして、良い子だねと言われる子は、おとなにとって都合の良い子どもの場合が多い。おとなの願いをかなえるこどもがよ

いこどもだろうか。おそらく、そうでもないだろう。ましてや、おとなの悔しさを晴らす存在がよいこどもでもないはずだ。しかし、同時に、おとなにとって都合が良くないこどもは、手間がかかり、周囲のおとなを疲弊させる存在でもある。社会的養護のための、児童養護施設でも、こどもをどのような存在とみるかは、とても難しい。現実は厳しいからである。どうじに、どんなこどもが、良い子どもなのか。イエス様が、おさなごのように、神の国を受け入れるものでなければと言われる、こどもとは、どのような存在なのかと考えてしまう。

4.58 10:17-31 金持ちの男

17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」。18 イエスは言われた、「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。19 いましめはあなたの知っているとおりである。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。欺き取るな。父と母とを敬え』」。20 すると、彼は言った、「先生、それらの事はみな、小さい時から守っております」。21 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。22 すると、彼はこの言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。

23 それから、イエスは見まわして、弟子たちに言われた、「財産のある者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう」。24 弟子たちはこの言葉に驚き怪しんだ。イエスは更に言われた、「子たちよ、神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。25 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。26 すると彼らはますます驚いて、互に言った、「それでは、だれが救われることができるのだろう」。27 イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」。

28 ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。29 イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、30 必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。

4.58.1 マタイ 19:16-30

16 すると、ひとりの人がイエスに近寄ってきて言った、「先生、永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」。17 イエスは言われた、「なぜよい事についてわたしに尋ねるのか。よいかたはただひとりだけである。もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい」。18 彼は言った、「どのいましめですか」。イエスは言われた、「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。19 父と母とを敬え』。また『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』」。20 この青年はイエスに言った、「それ

はみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょう」。21 イエスは彼に言われた、「もしあなたが完全
になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に
宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。22 この言葉を聞いて、青年は悲しみながら
立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。

23 それからイエスは弟子たちに言われた、「よく聞きなさい。富んでいる者が天国にはいるのは、むずか
しいものである。24 また、あなたがたに言うが、富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴
を通る方が、もっとやさしい」。25 弟子たちはこれを聞いて非常に驚いて言った、「では、だれが救われる
ことができるのだろう」。26 イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはそれはできないが、神にはなんで
もできない事はない」。

27 そのとき、ペテロがイエスに答えて言った、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなた
に従いました。ついては、何がいただけるでしょうか」。28 イエスは彼らに言われた、「よく聞いておく
がよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十
二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。29 おおよそ、わたしの名のために、家、兄
弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろ
う。30 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。

4.58.2 ルカ 18:18-30

18 また、ある役人がイエスに尋ねた、「よき師よ、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。19 イ
エスは言われた、「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。20 いましめはあ
なたの知っているとおりである、『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え』」。21
すると彼は言った、「それらのことはみな、小さい時から守っております」。22 イエスはこれを聞いて言わ
れた、「あなたのする事がまだ一つ残っている。持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けて
やりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。23 彼はこの
言葉を聞いて非常に悲しんだ。大金持であったからである。

24 イエスは彼の様子を見て言われた、「財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろ
う。25 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。26 これ
を聞いた人々が、「それでは、だれが救われることができるのですか」と尋ねると、27 イエスは言われた、
「人にはできない事も、神にはできる」。

28 ペテロが言った、「ごらんなさい、わたしたちは自分のものを捨てて、あなたに従いました」。29 イエ
スは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでも神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子を捨てた者は、
30 必ずこの時代ではその幾倍もを受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受けるのである」。

マルコによる福音書 10 章 17-31 節福音書対照表

4.59　10:17-22 金持ちの男（1）

17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永
遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」。18 イエスは言われた、「なぜわたしをよき者と言
うのか。神ひとりのほかによい者はいない。19 いましめはあなたの知っているとおりである。『殺すな、
姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。欺き取るな。父と母とを敬え』」。20 すると、彼は言った、「先生、
それらの事はみな、小さい時から守っております」。21 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、
「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさ
い。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。22 すると、彼はこの
言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。

4.59.1　マタイ 19:16-22

16 すると、ひとりの人がイエスに近寄ってきて言った、「先生、永遠の生命を得るためには、どんなよい
ことをしたらいいでしょうか」。17 イエスは言われた、「なぜよい事についてわたしに尋ねるのか。よいか
たはただひとりだけである。もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい」。18 彼は言った、「ど
のいましめですか」。イエスは言われた、「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。19 父と母と
を敬え』。また『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』」。20 この青年はイエスに言った、「それ
はみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょう」。21 イエスは彼に言われた、「もしあなたが完全
になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に
宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。22 この言葉を聞いて、青年は悲しみながら
立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。

4.59.2　ルカ 18:18-23

18 また、ある役人がイエスに尋ねた、「よき師よ、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。19 イ
エスは言われた、「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。20 いましめはあ
なたの知っているとおりである、『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え』」。21
すると彼は言った、「それらのことはみな、小さい時から守っております」。22 イエスはこれを聞いて言わ
れた、「あなたのする事がまだ一つ残っている。持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けて
やりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。23 彼はこの
言葉を聞いて非常に悲しんだ。大金持であったからである。

マルコによる福音書 10 章 17-22 節福音書対照表

4.59.3　問い

1. このことは、どのような背景のもとで起きましたか。
2. どのように、イエスに問うことから、はじまりますか。（17）
3. イエスは、どのように応答しますか。（18,19）
4. このひとの答えなどから、わかることをあげてみましょう。（20）
5. イエスは、どのようにこのひとに命じますか。（21）
6. このひとの求めていたものと、イエスが告げたこととには、どのような開きがあったのでしょうか。（22）

4.59.4　参照

- 弟子たちに語る後半が続き、マタイではこのあとに「ぶどう園の労働者」のたとえ（20:1-16）が挿入されている
- 十戒
  - 出エジプト記 34 章 28 節モーセは主と共に、四十日四十夜、そこにいたが、パンも食べず、水も飲まなかった。そして彼は契約の言葉、十誡（聖書協会共同訳：十の言葉）を板の上に書いた。
  - 出エジプト記 20 章 1-17 節 1 神はこのすべての言葉を語って言われた。2 「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。3 あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。4 あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。5 それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、6 わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。7 あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。8 安息日を覚えて、これを聖とせよ。9 六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。10 七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。11 主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。12 あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。13 あなたは殺してはならない。14 あなたは姦淫してはならない。15 あなたは盗んではならない。16 あなたは隣人について、偽証してはならない。17 あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない」。
  - 申命記 5:1-21 17 あなたは殺してはならない。18 あなたは姦淫してはならない。19 あなたは盗んで

はならない。20 あなたは隣人について偽証してはならない。21 あなたは隣人の妻をむさぼってはならない。また隣人の家、畑、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをほしがってはならない

- エペソ 6:1-3 子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことである。2 「あなたの父と母とを敬え」。これが第一の戒めであって、次の約束がそれについている、3 「そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであろう」。（約束を伴う戒め）
- ヒエロニムス『オリゲネスのマタイによる福音書注解ラテン語訳（偽オリゲネス）』ヘブル人による、と称されるある福音書に、（もし少なくともこれを権威の書としてではなく、今の問題に光を投げかけるものとして受け取る注意を払うなら）、次のように記されている。そこで主は彼に言われた。あなたはどうして、律法と預言者を守ったと言うのか。律法には『隣人を自分のように愛せよ』と書かれている。しかも見よ、おおぜいのあなたの同胞、アブラハムの子たちが、汚れをまとい、飢え死にしそうなのに、あなたの屋敷は多くの良き物で満ちていて、そのうちから何一つ彼らの手に渡らないのだ。それから、かたわらに座していたシモンに振り向いて言われた。バル・ヨナ・シモン。富めるものが天国にはいるよりも、らくだが針の穴を通るほうがたやすい。（榊原康夫著『聖書講解　ルカの福音書』より）

4.59.5　記録

- 日時：2024 年 6 月 13 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.59.6　問いについて

1. このことは、どのような背景のもとで起きましたか。
   - 離縁についてのパリサイ人の質問とイエスの答え、そして、弟子たちとの対話
     - 4b 「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、あなたがたのためにこの定めを書いたのである。6 しかし、天地創造の初めから、『神は人を男と女とに造られた。7 それゆえに、人はその父母を離れ、8 ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。9 だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」。
   - おさなごの祝福
     - 14b 神の国はこ（幼な子ら）のような者の国である。15 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない
   - 17 イエスが道に出て行かれると、
     - 家から出ていったように見える。

2. どのように、イエスに問うことから、はじまりますか。(17)

- 17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」。
- [DQ] このひとの様子はどのように描かれていますか。どのようなことを感じますか。
  - 「イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、」からは、特別な状態を感じる。ある程度若かったのではないか。(マタイでは青年) しかし、富を持ち、ルカでは「役人」としている。ある興奮状態も感じるが、ここを逃してはいけないという緊迫感、必死さも感じる。
- [DQ] イエスに何と呼びかけていますか。
  - 「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」Δ
    - : 1) a teacher, 2) in the NT one who teaches concerning the things of God, and the duties of man, i) one who is fitted to teach, or thinks himself so, ii) the teachers of the Jewish religion, iii) of those who by their great power as teachers draw crowds around them i.e. John the Baptist, Jesus, iv) by preeminence used of Jesus by himself, as one who showed men the way of salvation, v) of the apostles, and of Paul, vi) of those who in the religious assemblies of the Christians, undertook the work of teaching, with the special assistance of the Holy Spirit, vii) of false teachers among Christians
    - : 1) to receive a lot, receive by lot i) esp. to receive a part of an inheritance, receive as an inheritance, obtain by right of inheritance, ii) to be an heir, to inherit
- [DQ] 「永遠の生命を受ける (遺産として受ける)」とは、どのようなことを求めているのでしょうか。
  - [Q] 永遠の命とはどのようなものと理解していたのでしょうか。
    - 神の国にあずかるものに与えられるいのち。神様との交わり。
    - ヨハネ前書 1:1-4 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について——2 このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである——3 すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。4 これを書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。
- [DQ] このひとは、何によって、永遠の命を受けることができと考えていたでしょうか。

  - なにかをすることによって。
- [DQ] この節からは、この人についてどのようなことがわかりますか。
  -「ひざまずく」は礼拝に近い。一般的な「教師（ラビ）」に対するよりも、特別なものと認識している可能性もある。「走り寄り」からも、とくべつな思いが見て取れる。

3. イエスは、どのように応答しますか。（18,19）
   - 18 イエスは言われた、「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。19 いましめはあなたの知っているとおりである。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。欺き取るな。父と母とを敬え』」。
   - マタイ 19:18,19 彼は言った、「どのいましめですか」。イエスは言われた、「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。19 父と母とを敬え』。また『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』」。（レビ 19:18 を加えている。）
   - ルカ 18:20 いましめはあなたの知っているとおりである、『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え』」。
   - [DQ] 「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。」は、なにを気づかせようとしているのでしょうか。
     - 出鼻をくじいているようにも見える。
     - 師を見る（興奮する）のではなく、神をみなければならない。
     - バークレイ：とどまって感がえなさい。あたなは全く興奮しており、また感情が高ぶっている。わたしは、あなたが興奮して、わたしのところに来るのを好まない。あなたのしていることを冷静に考えなさい。わたしに対する感傷的な情熱ではクリスチャンになれない。神を見なければならない。
   - [DQ] 『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。欺き取るな。父と母とを敬え』この戒めを混燃えれば、永遠のいのちがえられるのでしょうか。
     - 通常は、父と母を敬えのほうが最初に来る。ここでは、最後になっている。マルコ 7:9-13 との関連で、特別なものとしたのか、それとも、すでに、財産を相続していたことを知っていたのかもしれない。
   - [DQ] イエスは、なにを気づかせようとしているのでしょうか。
4. このひとの答えなどから、わかることをあげてみましょう。（20）
   - 20 すると、彼は言った、「先生、それらの事はみな、小さい時から守っております」。
     - ピリピ 3:6 熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である。

- マタイ 19:20：「それはみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょう」
- 「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。欺き取るな。父と母とを敬え」をずっと守ってきた。
- [DQ] これらは、どのような教えですか。
  - 十戒からとったと思われるが、父と母を敬え以外は、何かをするなという禁止命令。守ってきたは、悪いことはしていないということか。
- このひとの応答を見る限りにおいて、永遠の命をえることができそうであることに鍵があるのだろう。

5. イエスは、どのようにこのひとに命じますか。(21)

- 21 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。
- マタイ 19:21 イエスは彼に言われた、「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。
- ルカ 18:22 イエスはこれを聞いて言われた、「あなたのする事がまだ一つ残っている。持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。
- [DQ] イエスは、なにが足りないと言っているのでしょうか。
  - 「あなたにたりないことが一つある。」といっているが、そこで、示しているのは、「帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。」である。しかし、それが、難しいことは、イエスもおそらく知っていただろう。
  - 続けて「そうすれば、天に宝を持つようになろう。」と言っている。まず、よき師よから、神様に目を向けるように指し示されたように、ここでも、指し示されているのは、天に（神様のもとに）宝を持つことなのだろう。どうしたら、神様のみこころのように生きられるか。み心を生きることができるか。
  - さらに、「そして、わたしに従ってきなさい」と言っている。このときに、イエスに従っているものは多くないだろう。そして、エルサレムに向かっている。イエスに従うということは、このような道であることを示して入るだろう。このときには、応答できなくても、後には、そのように、ある程度できたかもしれない。イエスは、その先をもみて、慈しんで（　　）言われたのではないだろうか。
  - 足りないというより、たいせつなことを教えておられるのだろう。最後のレッスンとして。
- [DQ] マタイやルカとも比較してみましょう。

  - マタイ 19:19b また『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』が挟まっている。
  - ルカ 18:22b あなたのする事がまだ一つ残っている。
- [DQ] イエスが伝えていることは何なのでしょうか。
  - バークレイ：因襲道徳のこだわりから抜け出しなさい。善とは、なにかをなすことによっては成り立っていないと考えるのはやめなさい。あなた自身の持ち物のすべてを他の人々のために、用いなさい。するとこの世においても、また永遠にいたるまで、真の幸せを見出すであろう。

6. このひとの求めていたものと、イエスが告げたこととには、どのような開きがあったのでしょうか。(22)
   - 22 すると、彼はこの言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。
   - 明らかに、このひとにそれはできなかった。なにをすればの答えを聞くと、それは、できないことだった。
   - [DQ] このひとが、永遠の命を受け継ぐにはどうしたらよいのでしょうか。

4.59.7 メモ

- 三回に分けるか、二回に分けるか：17-22 と 23-26, 27-31
- 「慈しんで」はなにを意味するのだろうか。
- 最初から「イエスに従いたい」とは言っていない。
- 場所は不明だが、家をカペナウムのペテロの家（カペナウムを本拠地とし、しばしば十二弟子とそこに泊まったとすると、ペテロの家ではないかもしれない。定宿があったのかもしれない。ゼベダイの子ヤコブとヨハネもこのあたりの出身で、網元でも会ったようにみえるから）だとすると、イエスは、このひとを以前から知っていたかもしれない。この熱心さにも、危うさもふくめて、このひとについて、知っていたのかもしれない。ときは、イエスが、エルサレムに向かっている特別なときである。そして、おそらく、十二弟子以外は（多少の女性はいたかもしれないが）離れ去ったときであることも、加味すべきだろう。このひとの願いも、最後の願い、イエスにとっても、最後の授業として教えたのではないだろうか。慈しみの眼差しは、もっと長い目で見た、イエスの愛なのかもしれない。一般論として、このときだけに限って、無理に解釈することには、注意すべきである。
- 以前のマタイによる福音書からの学びに「この人が持ち物を売り払い、貧しい人々に施すとどうなったと思いますか。」という問いがあったが、これも、興味深い問である。単純に、貧しくなった、貧しい人々の気持ちがわかるようになったかなど、どうなったかもあるだろう。しかし、ここで終わらず、イエスは、わたしに従ってきなさいと言っている、その部分がより際立つのかもしれないとも思う。

4.60　10:23-31 金持ちの男（2）

23 それから、イエスは見まわして、弟子たちに言われた、「財産のある者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう」。24 弟子たちはこの言葉に驚き怪しんだ。イエスは更に言われた、「子たちよ、神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。25 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。26 すると彼らはますます驚いて、互に言った、「それでは、だれが救われることができるのだろう」。27 イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」。

28 ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。29 イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、30 必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。

4.60.1　マタイ 19:23-30

23 それからイエスは弟子たちに言われた、「よく聞きなさい。富んでいる者が天国にはいるのは、むずかしいものである。24 また、あなたがたに言うが、富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。25 弟子たちはこれを聞いて非常に驚いて言った、「では、だれが救われることができるのだろう」。26 イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない」。

27 そのとき、ペテロがイエスに答えて言った、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるでしょうか」。28 イエスは彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。29 おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。30 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。

4.60.2　ルカ 18:24-30

24 イエスは彼の様子を見て言われた、「財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう。25 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。26 これを聞いた人々が、「それでは、だれが救われることができるのですか」と尋ねると、27 イエスは言われた、「人にはできない事も、神にはできる」。

28 ペテロが言った、「ごらんなさい、わたしたちは自分のものを捨てて、あなたに従いました」。29 イエ

スは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでも神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子を捨てた者は、30 必ずこの時代ではその幾倍もを受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受けるのである」。

マルコによる福音書 10 章 23-31 節福音書対照表

4.60.3 問い

1. 背景と、前半部分（13 節から 22 節）を復習しましょう。どのようなことがありましたか。
2. イエスは、誰にむかってどのように語っていますか。その反応はどのようなものでしたか。（23,24a）
3. 神の国にはいることについて、イエスはどのように語っていますか。（24b-27）
4. ペテロはどのようにイエスに言い、それにイエスはどう答えますか。（28-31）
5. 「多くの先の者はあとになり、あとの者は先になる」は、なにを教えているのでしょうか。（31）
6. あなたは、神の国について、永遠の命について何を学び、どのように考えますか。（10:14,15,17 参照）

4.60.4 参照

- マタイではこのあとに「ぶどう園の労働者」のたとえ（20:1-16）が挿入されている

4.60.5 記録

- 日時：2024 年 6 月 27 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.60.6 問いについて

1. 背景と、前半部分（13 節から 22 節）を復習しましょう。どのようなことがありましたか。
   - 10 章は、離縁についてからはじまり、幼な子の祝福の記事が続き、金持ちの男の話につながっている。
   - 22 すると、彼はこの言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。
   - [DQ] イエスと弟子たちはどのような眼差しでこのひとを見送っただろうか。
     - おそらく、しばらく、ずっと見ていたのではないだろうか。とても、印象的な姿だが、もしかすると、このひとほどはっきりはしていなくても、そのような姿を、イエスも、弟子たちも何回も見ていたかもしれない。

  - イエスはこの人に何を伝えようとしたのだろうか。それは、伝わったのだろうか。
  - ルカには、立ち去ったという記述はない。「23 彼はこの言葉を聞いて非常に悲しんだ。大金持であったからである。」

2. イエスは、誰にむかってどのように語っていますか。その反応はどのようなものでしたか。（23,24a）
   - 23 それから、イエスは見まわして、弟子たちに言われた、「財産のある者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう」。24 弟子たちはこの言葉に驚き怪しんだ。
   - [DQ] 弟子たちは、なぜ驚き怪しんだのでしょうか。
     - 参照：26 すると彼らはますます驚いて、互に言った、「それでは、だれが救われることができるのだろう」。
   - [DQ] 財産・富は、神様の祝福の証ではないのでしょうか。（因果応報）
     - 詩篇 37:25 わたしは、むかし年若かった時も、年老いた今も、／正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が／食物を請いあるくのを見たことがない。
   - [DQ] 財産のある者が神の国にはいるのがむずかしいのはなぜでしょうか。
     - 財産（　：a thing, a matter, affair, event, business, spec. money, riches）Mark 10:23,24, Luke 18:24
     - アリストテレス（BC384-322）貨幣制度によってその価値が評価されるすべてのもの。
     - [A] バークレイ： 物質的な所有物は、人の心をこの世に固定させる。 金銭で買えるものの価値がすべてになる。 富はひとを傲慢にする。大きな責任を負う。

3. 神の国にはいることについて、イエスはどのように語っていますか。（24b-27）
   - 24b イエスは更に言われた、「子たちよ、神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。25 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。26 すると彼らはますます驚いて、互に言った、「それでは、だれが救われることができるのだろう」。27 イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」。
   - 「それでは、だれが救われることができるのだろう」。は、インパクトを与えている。
   - [DQ] なぜ彼らは「それでは、だれが救われることができるのだろう」。と言ったのでしょうか。
     - 幼な子・金持ちの対比もある。当時の感覚か。
   - [DQ] 人にできないことに重点があるのだろうか、それとも、神にできることに重点があるのだろうか。

  - ひとにできないところが、重要なのかもしれない。ひとは、それを悟り、神により頼み、かつ、神に求めて生きることが教えられているのだろうか。

4. ペテロはどのようにイエスに言い、それにイエスはどう答えますか。(28-30)

- 28 ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。29 イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、30 必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。
  - 父だけ抜けている。単純に、「家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑」は、不要というわけではなく、捨てればよいものではなく、同種類のものを受けると言っている。
- [参考] マタイでは、19:27b,28「ついては、何がいただけるでしょうか」。28 イエスは彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。」が、挿入されている。
  -「ついては、何がいただけるでしょうか」は、浅ましいとも言えるが、自然でもある。
- [DQ] イエスは、どのような「約束?」「預言」をしていますか。必ずそうなるのでしょうか。
- [DQ] 「福音のために捨てる」とはどのようなことを意味しているのでしょうか。
  - マタイでは「29b わたしの名のため」
  - ルカでは「29b 神の国のために」
- [DQ] 「だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は」どうなると言っていますか。「百倍」の内容は?
  - [Q] 「今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け」とはどのような意味だろうか。
  - [Q] 「きたるべき世では永遠の生命を受ける」とはどのような意味だろうか。
- [DQ] 「受ける」のは、いつのことでしょうか。
  - 30b すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。
  - マタイ:世が改まって、人の子がその栄光の座につく時
  - ルカ:30 必ずこの時代ではその幾倍もを受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受けるのである」。

5.「多くの先の者はあとになり、あとの者は先になる」は、なにを教えているのでしょうか。(31)

- 31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。
- [DQ] 弟子たちに伝えたかったことは何なのでしょうか。
- マタイでは、ぶどう園の労働者のたとえがつづき、最後に、また、この言葉が続いている。すなわち、この言葉の説明として、たとえを挿入しているようにみえる。
- [DQ] だれが、先のもので、誰があとのものなのでしょうか。弟子たちは、先のものでしょうか、あとのものでしょうか。
  - 富めるものと貧しいもの、 イスラエルと異邦人、 敬虔さを誇ったパリサイ人と罪人や取税人、弟子たちとほかの人達、富めるものも加わるかもしれない。
    - イエスは更に言われた、「子たちよ、神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。25 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。
    - 27 イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」。
    - この二つのことばにすべてがあるのかもしれない。

6. あなたは、神の国について、永遠の命について何を学び、どのように考えますか。(10:14,15,17 参照)

- 10:14 それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。15 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。
- 17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」。
- [DQ] 幼な子と金持ちの人とはなにが違うのでしょうか。
- [DQ] 金持ちの人は、全財産を施せば、永遠のいのちを得ることができたのでしょうか。
  - おそらくそうではないだろう。「そして、わたしに従ってきなさい」ともついている。このことは、一つに過ぎないのだろう。イエスに、したがって学ぶことがある。しかし、本当にそうだろうか。イエスは、もうすぐ、死なれる。

4.60.7 メモ

- 「21 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、

わたしに従ってきなさい」。22 すると、彼はこの言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。」のあとどうなったかが、やはり気になる。それは、私だけではなく、イエス様もそうなのだろう。神様に委ねることは、勇気のいることである。そして、かならず、このひとが、神様の御心を知るに至るかどうかはわからない。それが、イエス様の「24b 子たちよ、神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。25 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」にあらわれているように見える。「21 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた」のイエス様のいつくしみの深さとともに、み心に生きることの難しさを感じる。このゆらぎ（Noise）だろうかをどう考えたらよいのだろうか。幸せにいきることは、永遠の命をもって生きることは難しい。

- 28 ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい（　）、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。
  - ペテロにとっては、これが彼の全てだったのだろう。その意味で、正直で、幼な子のような存在だとも言える。しかし、リーダー、弟子としては、それだけでは不十分なのだろう。
  - マルコ 1:16-18 さて、イエスはガリラヤの海べを歩いて行かれ、シモンとシモンの兄弟アンデレとが、海で網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。17 イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。18 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。
  - もっとほかに言うことはないのとも感じるが、これがペテロの富・財産の全てだったのだろう。それは、やはり素晴らしい。わたしには、いえないことのように思う。
- 教義としてとらえるのではなく、イエスが、伝えようとしたこと、弟子たちが、受け取ったことをまずは、理解したい。それは何なのだろう。
  - イエスは、弟子たちになにを伝えたかったのだろうか。弟子たちは、なにを受け取ったのだろうか。
- わたしたちは、救われるかどうか、神の国に入るかどうか、永遠の命を持つかどうかの二者択一のようなことを考えるが、イエス様にとっては、神様の御意を行う、そのように生きることがすべてなのかもしれない。
- このあとに、マタイでは、ぶどう園の労働者の話が続き、その最後にも、「このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」（20 章 16 節）がある。最初に弟子になったペテロは、朝 6 時に雇われた労働者なのかもしれない。そして、アリマタヤのヨセフのように、ニコデモのように、最後にあらわれた人もいる。じっくり考えたい課題である。
  - 20:9 そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつもらった。10 ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけであった。11 もらったとき、家の主人にむかって不平をもらして 12 言った、『この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに、あなたは一日じゅう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました』。13 そこで彼はそのひとりに答えて言った、『友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。14 自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。15 自分の物を自分がしたいようにするのは、当りまえではないか。それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか』。
  - マルコ 15:43 アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願っ

た。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。マタイ 27:57 夕方になってから、アリマタヤの金持で、ヨセフという名の人がきた。彼もまたイエスの弟子であった。ルカ 23:51 この人はユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。彼は議会の議決や行動には賛成していなかった。

– ヨハネ 19:38 そののち、ユダヤ人をはばかって、ひそかにイエスの弟子となったアリマタヤのヨセフという人が、イエスの死体を取りおろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトはそれを許したので、彼はイエスの死体を取りおろしに行った。39 また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。

4.61 10:32-34 イエス、三度自分の死と復活を予告する

32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。

4.61.1 マタイ 20:17-19

17 さて、イエスはエルサレムへ上るとき、十二弟子をひそかに呼びよせ、その途中で彼らに言われた、18 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に渡されるであろう。彼らは彼に死刑を宣告し、19 そして彼をあざけり、むち打ち、十字架につけさせるために、異邦人に引きわたすであろう。そして彼は三日目によみがえるであろう」。

4.61.2 ルカ 18:31-34

31 イエスは十二弟子を呼び寄せて言われた、「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子について預言者たちがしるしたことは、すべて成就するであろう。32 人の子は異邦人に引きわたされ、あざけられ、はずかしめを受け、つばきをかけられ、33 また、むち打たれてから、ついに殺され、そして三日目によみがえるであろう」。34 弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。この言葉が彼らに隠されていたので、イエスの言われた事が理解できなかった。

マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表

マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表（参照付）

4.61.3　問い

1. 背景を復習しましょう。どこから、どこに向かっていますか。（8:31, 9:30-33, 10:1）
2. イエスの様子についてどのように描かれていますか。（32）
3. 弟子たちは、なぜ、驚き、恐れ、イエスは、なぜ、自分の身に起ろうとすることについて語ったのでしょうか。（32）
4. 一回目（8:31）、二回目（9:31）と比較して、共通のことと、新しいことを挙げてみましょう。（33,34）
5. 少しずつ詳しくなっているように見えますが、それは、何を意味しているのでしょうか。
6. 弟子たちは、どのように、イエスの言葉を、受け取ったと思いますか。

4.61.4　参照

- イエス一行の同行者
  - マルコ 15:40,41 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。
  - マタイ 27:55,56 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。
  - ルカ 23:55,56 イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが納められる様子を見とどけた。56 そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。
    - ルカ 24:10 この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。
  - 参考：最初の頃の同行者ルカ 8:1-3 そののちイエスは、神の国の福音を説きまた伝えながら、町々村々を巡回し続けられたが、十二弟子もお供をした。2 また悪霊を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、3 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。
- 死と復活の予告：

  - 8:27-30 さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられたが、その途中で、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は、わたしをだれと言っているか」。28 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。29 そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。30 するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。
  - 8:31-37 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32 しかもあからさまに、この事を話された。すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめたので、33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。34 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。36 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。37 また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。
  - 9:30-32 30 それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。
  - 10:32-34 32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。
- ルカでは七回目：5:35、9:22、44、12:50、13:32、17:25、18:31-34
  - 5:35 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう」。（マルコ 2:20、マタイ 9:15）
  - 9:22 「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日目によみがえる」。（一回目、マルコ 8:31、マタイ 16:21）
  - 9:44 「あなたがたはこの言葉を耳におさめて置きなさい。人の子は人々の手に渡されようとしている」。（二回目、マルコ 9:31,32、マタイ 16:21）
  - 12:50 しかし、わたしには受けねばならないバプテスマがある。そして、それを受けてしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろう。

- 13:32 そこで彼らに言われた、「あのきつねのところへ行ってこう言え、『見よ、わたしはきょうもあすも悪霊を追い出し、また、病気をいやし、そして三日目にわざを終えるであろう。（三回目、マルコ 10:33,34、マタイ 20:18,19）
- 17:25 しかし、彼はまず多くの苦しみを受け、またこの時代の人々に捨てられねばならない。
- 18:32-33 32 人の子は異邦人に引きわたされ、あざけられ、はずかしめを受け、つばきをかけられ、33 また、むち打たれてから、ついに殺され、そして三日目によみがえるであろう」。

4.61.5 記録

- 日時：2024 年 6 月 27 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）0 名

4.61.6 問いについて

1. 背景を復習しましょう。どこから、どこに向かっていますか。（8:31, 9:30-33, 10:1）
   - [DQ] マルコが受難告知について記している一回目、二回目のときは、どのようなときですか。
   - 31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。
2. イエスの様子についてどのように描かれていますか。（32）
   - 32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、
   - [DQ] 「一同」「彼ら」「従う者たち」とは誰でしょうか。
     - 彼らは、単に、一同を受けたものであろうが、イエスが先頭に立っていかれたので、つぎに、いくつかの意味をこめて、従うものたちと言っているように思える。
   - [DQ] イエスと、弟子たち以外にもいたとすると、それは、どんなグループで、何を目的にして、エルサレムに向かっていたのでしょうか。
     - 過越のまつり：GPT-4o イエスの時代の過越の祭りは、宗教的な意味合いが非常に強く、エルサレムで盛大に祝われました。家庭でのセーデルの食事、神殿での儀式、そしてエルサレムへの巡礼が中心となり人々はこれらの行事を通じてエジプト脱出の出来事を記憶し、神への感謝と信仰を新たにしました。[リンク]
   - [DQ] イエスは、なぜ、先頭に立って行かれたのでしょうか。

  - 先頭と、後ろからまたは、真ん中にいてついていくのとどう違うのだろうか。
  - 先頭は、おそらく、ひとり、孤独。

3. 弟子たちは、なぜ、驚き、恐れ、イエスは、なぜ、自分の身に起ろうとすることについて語ったのでしょうか。(32)
   - 32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、
   - [DQ] なぜ、驚き怪しみ、おそれたのでしょうか。
     - 驚き怪しみ（　　：i) to be astonished, ii) to astonish, terrify）Mark 1:27, 10:24, 10:32, Acts 9:6
     - 恐れる（　　：i) to put to flight by terrifying (to scare away)）
     - イエスと一緒に受難にあうことを恐れたのでしょうか。
     - ルカ 19:11 人々がこれらの言葉を聞いているときに、イエスはなお一つの譬をお話しになった。それはエルサレムに近づいてこられたし、また人々が神の国はたちまち現れると思っていたためである。
   - [DQ] だれに、自分の身に起ろうとすることについて語っていますか。
     - ここでも、「するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、」とあり、十二弟子にのみ、話していたように見える。
     - マタイでは「17 さて、イエスはエルサレムへ上るとき、十二弟子をひそかに呼びよせ、その途中で彼らに言われた、」とある。

4. 一回目（8:31)、二回目（9:31）と比較して、共通のことと、新しいことを挙げてみましょう。(33,34)
   - 8:31-3a それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32 しかもあからさまに、この事を話された。
   - 9:31-32 30 それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。
   - 33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、

つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。

- 二回目には、「人々の手にわたされ」が加わっている。
- 三回目には、「彼ら（祭司長、律法学者たち）が死刑を宣告」「異邦人に引きわたす」「あざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう」が加わっている。
  - サンヘドリンの決定、ローマ人に引き渡す。主体は、祭司長、律法学者
  - あざけり、つばきをかけ、鞭打ち、殺してしまう。主体は、祭司長、律法学者
  - イエスがされることではなく、彼らがすることとして書かれている。
- イザヤ 50:6 わたしを打つ者に、わたしの背をまかせ、／わたしのひげを抜く者に、わたしのほおをまかせ、／恥とつばきとを避けるために、／顔をかくさなかった。
- 詩篇 22:7 すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、／くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、
- 弟子たちは登場しない。

5. 少しずつ詳しくなっているように見えますが、それは、何を意味しているのでしょうか。
   - [DQ] なぜ、少しずつ変化しているのでしょうか。
     - 順々に詳しくなっていくが、これは、イエスが意図的に、小出しにしたのだろうか。イエス自身がすこしずつ確信したことを伝えているのだろうか。それとも、弟子たちが受け取ったことが、少しずつ詳しくなっていくのでしょうか。
     - 上に書いた、どれかは、定かではないし、全てかもしれないが、マルコは、このことを明らかに意識して記述している。
6. 弟子たちは、どのように、イエスの言葉を、受け取ったと思いますか。
   - 一回目は、ペテロがいさめる。
     - 8:32b すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめたので、33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。
   - 二回目は、尋ねるのを恐れていた。
     - 9:32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。
   - 三回目は、イエスの行動に、「驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。」

  - 10:32a さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。
  - 以前とは、明らかにことなるものを感じたのだろう。決然としていたのか、鬼家が宿っていたのか。
- ルカでは、ペテロのことばへの応答に続けて言われているようにも取れる。イエスは、福音のため、神の国のために、捨てることの例示なのだろうか。
- ルカには、ゼベダイの子らの願いは記されず、以下の言葉で終わっている。ルカ 18:34 弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。この言葉が彼らに隠されていたので、イエスの言われた事が理解できなかった。

4.61.7 メモ

- イエスと弟子たちについて考えた。イエスは、なぜ弟子たちを呼び寄せ（マタイでは密かに呼び寄せ）語ったのだろうか。自ら、確信を得ていたことは確かだろうが、弟子と共有し、共に、そこに向かっていくことを意識し、そのときには、驚かないように、そして、イエスが十字架を負うように、それぞれが自分の十字架を負う、その模範となるためだろうか。
  - 8:34 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。36 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。37 また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。

4.62 10:35-45 ヤコブとヨハネの願い

35 さて、ゼベダイの子ヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようにお願いします」。36 イエスは彼らに「何をしてほしいと、願うのか」と言われた。37 すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。38 イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。39 彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。40 しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることである」。41 十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。42 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。43 しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あな

たがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、44 あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。45 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。

4.62.1 マタイ 20:20-28

20 そのとき、ゼベダイの子らの母が、その子らと一緒にイエスのもとにきてひざまずき、何事かをお願いした。21 そこでイエスは彼女に言われた、「何をしてほしいのか」。彼女は言った、「わたしのこのふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはあなたの右に、ひとりは左にすわれるように、お言葉をください」。22 イエスは答えて言われた、「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかっていない。わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか」。彼らは「できます」と答えた。23 イエスは彼らに言われた、「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになろう。しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、わたしの父によって備えられている人々だけに許されることである」。24 十人の者はこれを聞いて、このふたりの兄弟たちのことで憤慨した。25 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。26 あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、27 あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない。28 それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」。

マルコによる福音書 10 章 35-45 節福音書対照表

4.62.2 問い

1. このことは、どのような背景のもとで起きましたか。
2. ゼベダイの子ヤコブとヨハネはなにをイエスに願いますか。(35-37)
3. イエスはどのように応答しますか。(38-40)
4. 他の弟子たちは、どのように反応しますか。それは、なぜでしょう。(41)
5. イエスは、何を、どのように教えますか。(42-44)
6. 人の子が来た目的についてどのように語りますか。(45)

4.62.3 参照

- 同行者についての記述
  - マルコ 15:40,41 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコ

ブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。

    * マタイ 27:55,56 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。

  - マルコ 16:1 さて、安息日が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。

    * ルカ 23:55,56 イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが納められる様子を見とどけた。56 そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。

    * ルカ 24:10 この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。

    * マタイ 28:1 さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。

    * ヨハネ 20:1 さて、一週の初めの日に、朝早くまだ暗いうちに、マグダラのマリヤが墓に行くと、墓から石がとりのけてあるのを見た。

  - ヨハネ 19:25-27 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。26 イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。27 それからこの弟子に言われた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。

- さかずき

  - 詩篇 23:4,5 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、／わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。5 あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、／わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれます。

  - 詩篇 75:8 主の手には杯があって、／よく混ぜた酒があわだっている。主がこれを注ぎ出されると、／地のすべての悪しき者は／これを一滴も残さずに飲みつくすであろう。

  - イザヤ 51:17-23 17 エルサレムよ、起きよ、起きよ、立て。あなたはさきに主の手から憤りの杯をうけて飲み、／よろめかす大杯を、滓までも飲みほした。

  - エレミヤ 25:15-28 15 イスラエルの神、主はわたしにこう仰せられた、「わたしの手から、この怒りの杯を受けて、わたしがあなたをつかわす国々の民に飲ませなさい。

- 神の怒りのさかずき（その他）
  - エレミヤ 25:15-28、49:12、51:7、哀歌 4:21,22、エゼキエル 23:31-34、ハバクク 2:16、ゼカリア 12:2

- バプテスマ：溺れさせられた (N-ASN: immersion, submersion 1) of calamities and afflictions with which one is quite overwhelmed, 2) of John's, 3) of Christian) (V-PPI-1S): 1) to dip repeatedly, to immerse, to submerge (of vessels sunk), 2) to cleanse by dipping or submerging, to wash, to make clean with water, to wash one's self, bathe, 3) to overwhelm) (V-APN)
  - 詩篇 42:7 あなたの大滝の響きによって淵々呼びこたえ、／あなたの波、あなたの大波は／ことごとくわたしの上を越えていった。
  - 詩篇 124:4,5 また大水はわれらを押し流し、／激流はわれらの上を越え、5 さか巻く水はわれらの上を越えたであろう。
  - バークレイ：あなたがたは、わたしが通り抜けなければならないような、恐ろしい経験を堪え抜くことができるのか。あなたがたは、わたしが出会わなければならないような憎しみ、苦痛、死に沈むことに直面できるのか。

- ヤコブの殉教とヨハネの配流
  - ヨハネ、ペテロとともにむち打ち：使徒 4:3、彼らに手をかけて捕え、はや日が暮れていたので、翌朝まで留置しておいた。（4 章の記述から、「彼ら」は、ペテロとヨハネ）
  - パトモス島黙示録 1:9 あなたがたの兄弟であり、共にイエスの苦難と御国と忍耐とにあずかっている、わたしヨハネは、神の言とイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。
  - ヤコブの死：使徒 12:1-3、そのころ、ヘロデ王は教会のある者たちに圧迫の手をのばし、2 ヨハネの兄弟ヤコブをつるぎで切り殺した。3 そして、それがユダヤ人たちの意にかなったのを見て、さらにペテロをも捕えにかかった。それは除酵祭の時のことであった。

- あがない（ransom - : 1) the price for redeeming, ransom, a. paid for slaves, captives, b. for the ransom of life, 2) to liberate many from misery and the penalty of their sins. は、マタイ 20:28、マルコ 10:45 のみ。七十人訳では、以下のヘブル語の訳として使われる。: price of a life, ransom, bribe, asphalt, pitch (as a covering), the henna plant, name of a plant (henna?), village. 1 kindred, redemption, right of redemption, price of redemption, (kin, kindred, redemption, right of redemption, price of redemption, redemption price)) : a releasing effected by payment of ransom a. redemption, deliverance, b. liberation procured by the payment of a ransom
  - 共観福音書では、ここのみ

    * マルコ 10:45 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。
    * マタイ 20:28 それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」。
- ルカ 1:67-79 ザカリヤの預言
    * 67 父ザカリヤは聖霊に満たされ、預言して言った、68 「主なるイスラエルの神は、ほむべきかな。神はその民を顧みてこれをあがない、69 わたしたちのために救の角を／僕ダビデの家にお立てになった。
- 使徒 20:28 どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。
- パウロ書簡
    * ローマ 3:24,25 彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。25 神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、
    * コリント前書 1:30 あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。
    * ガラテヤ 3:13 キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、すべてのろわれる」と書いてある。
    * ガラテヤ 4:5 それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。
- パウロ由来文書
    * エペソ 1:7 わたしたちは、御子にあって、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである。
    * エペソ 1:14 この聖霊は、わたしたちが神の国をつぐことの保証であって、やがて神につける者が全くあがなわれ、神の栄光をほめたたえるに至るためである。
    * エペソ 4:30 神の聖霊を悲しませてはいけない。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである。
    * コロサイ 1:14 わたしたちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆるしを受けているのである。

    * テモテ前書 2:6 彼は、すべての人のあがないとしてご自身をささげられたが、それは、定められた時になされたあかしにほかならない。
    * テトス 2:14 このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない。
  - その他の新約文書
    * ヘブル 9:12 かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。
    * ヘブル 11:35 女たちは、その死者たちをよみがえらさせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。
    * ペテロ前書 1:18 あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、
    * ヨハネ前書 2:2 彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。
    * ヨハネ前書 4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。
    * 黙示録 5:9 彼らは新しい歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、
  - 旧約聖書多数
    * レビ 16:34 これはあなたがたの永久に守るべき定めであって、イスラエルの人々のもろもろの罪のために、年に一度あがないをするものである」。彼は主がモーセに命じられたとおりにおこなった。
    * 申命記 7:8 ただ主があなたがたを愛し、またあなたがたの先祖に誓われた誓いを守ろうとして、主は強い手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手から、あがない出されたのである。(9:26, 15:15)
    * 歴代誌上 17:21 また地上のどの国民が、あなたの民イスラエルのようでありましょうか。これは神が行って、自分のためにあがなって民とし、エジプトからあなたがあがない出されたあなたの民の前から国々の民を追い払い、大いなる恐るべき事を行って、名を得られたものではありませんか。

* 詩篇 19:14 わが岩、わがあがないぬしなる主よ、／どうか、わたしの口の言葉と、／心の思いが／あなたの前に喜ばれますように。
* 詩篇 25:22 神よ、イスラエルをあがない、／すべての悩みから救いだしてください。
* 詩篇 111:9 主はその民にあがないを施し、／その契約をとこしえに立てられた。そのみ名は聖にして、おそれおおい。
* 詩篇 130:7 イスラエルよ、主によって望みをいだけ。主には、いつくしみがあり、／また豊かなあがないがあるからです。
* イザヤ 44:23,24 天よ、歌え、主がこの事をなされたから。地の深き所よ、呼ばわれ。もろもろの山よ、林およびその中のもろもろの木よ、／声を放って歌え。主はヤコブをあがない、／イスラエルのうちに栄光をあらわされたから。24 あなたをあがない、／あなたを胎内に造られた主はこう言われる、／「わたしは主である。わたしはよろずの物を造り、／ただわたしだけが天をのべ、地をひらき、／――だれがわたしと共にいたか――
* イザヤ 48:7 イスラエルのあがない主、／イスラエルの聖者なる主は、／人に侮られる者、民に忌みきらわれる者、／つかさたちのしもべにむかってこう言われる、／「もろもろの王は見て、立ちあがり、／もろもろの君は立って、拝する。これは真実なる主、イスラエルの聖者が、／あなたを選ばれたゆえである」。
* エレミヤ 31:11 すなわち主はヤコブをあがない、／彼らよりも強い者の手から彼を救いだされた。
* ミカ 6:4 わたしはエジプトの国からあなたを導きのぼり、／奴隷の家からあなたをあがない出し、／モーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、／あなたに先だたせた。
* イザヤ 63:9 彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、／そのみ前の使をもって彼らを救い、／その愛とあわれみとによって彼らをあがない、／いにしえの日、つねに彼らをもたげ、／彼らを携えられた。

4.62.4 記録

- 日時：2024 年 7 月 11 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）0 名

4.62.5 問いについて

1. このことは、どのような背景のもとで起きましたか。
    - 三度目の受難告知の直後。

- [DQ] 一度目、二度目の受難告知のあとには、どのようなことが書かれていましたか。
  - 一度目の受難告知（8:31）の直後：ペテロが、いさめる。(8:32) 「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」（8:34）
  - 二度目の受難告知（9:31）の直後：だれが一ばん偉いかと、互に論じ合っていた（9:34）「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。（9:35）
  - 三度目の受難告知（10:33）の直後にこのエピソードがある。

2. ゼベダイの子ヤコブとヨハネはなにをイエスに願いますか。（35-37）

- 35 さて、ゼベダイの子ヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようにお願いします」。36 イエスは彼らに「何をしてほしいと、願うのか」と言われた。37 すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。
- [DQ] ゼベダイの子ヤコブとヨハネについて知っていることを上げてみましょう。どのような人たちですか。
  - 1:19,20 19 また少し進んで行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、舟の中で網を繕っているのをごらんになった。 20 そこで、すぐ彼らをお招きになると、父ゼベダイを雇人たちと一緒に舟において、イエスのあとについて行った。
  - 1:29,31 それから会堂を出るとすぐ、ヤコブとヨハネとを連れて、シモンとアンデレとの家にはいって行かれた。 30 ところが、シモンのしゅうとめが熱病で床についていたので、人々はさっそく、そのことをイエスに知らせた。31 イエスは近寄り、その手をとって起されると、熱が引き、女は彼らをもてなした。
  - 3:17 またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。
  - 5:35-37 イエスが、まだ話しておられるうちに、会堂司の家から人々がきて言った、「あなたの娘はなくなりました。このうえ、先生を煩わすには及びますまい」。36 イエスはその話している言葉を聞き流して、会堂司に言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい」。37 そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。
  - 9:2,3 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、3 その衣は真白く輝き、どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできないくらいになった。
  - 9:38 ヨハネがイエスに言った、「先生、わたしたちについてこない者が、あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちについてこなかったので、やめさせま

した」。

  - 13:3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。

  - 14:33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。

- [DQ] どのように描かれていますか。

  -「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようにお願いします」。

  - [Q] なぜ、このように頼んだのでしょうか。

- [DQ] マタイにはどのように書かれていますか。

  - 20 そのとき、ゼベダイの子らの母が、その子らと一緒にイエスのもとにきてひざまずき、何事かをお願いした。21 そこでイエスは彼女に言われた、「何をしてほしいのか」。彼女は言った、「わたしのこのふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはあなたの右に、ひとりは左にすわれるように、お言葉をください」。
  - ゼベダイの子らとせず、ゼベダイの子らの母としたのは、一般的には、ここに書かれている願いは、使徒には、ふさわしくないと考えたからだろうと思われる。

- [DQ] マタイでは、ゼベダイの子らの母が、ゼベダイの子らとともに来て願ったことが書かれていますが、ゼベダイの子らの母も一緒に居たのでしょうか。

  - マルコ 15:40,41 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。

  - マタイ 27:55,56 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。

  - ヨハネ 19:25-27 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。26 イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。27 それからこの弟子に言われた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。

  - この 2 つの記事を同じ場所の表現とすると、マグダラのマリアは同じ表現、小ヤコブとヨセの母マリアは、ヤコブとヨセフの母マリアと同一で、それは、イエスの母、サロメは、ゼベダイの子

たちの母で、母の姉妹となる。クロパの妻マリアは、クレオパ（ルカ 24:18）の妻ではないかとの説がある。

- [DQ] なぜこのようなことを願ったのでしょうか。「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」

3. イエスはどのように応答しますか。（38-40）

- 38 イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。39 彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。40 しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることである」。
- [DQ] なぜ、イエスは、怒らなかったのでしょうか。
  - 肯定しているようにも、見える。ヤコブや、ヨハネが、自分の十字架を負うことのたいへんさを思い「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。」と言ったのかもしれない。
- [DQ] 「イエスが飲む杯を飲む」とは「イエスが受けるバプテスマを受ける」とは、どのようなことを意味しているでしょうか。
  - 苦しむことだろうか。
- [DQ] 「わたしの右、左にすわらせること」の判断を逃げているのでしょうか。
  - 意識をそらして入るのだろう。神様に委ねつこととして。

4. 他の弟子たちは、どのように反応しますか。それは、なぜでしょう。（41）

- 41 十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。
- [DQ] 十人は、どのようなことを考えていたのでしょうか。
  - 自分たちをさしおいてということだろう。ペテロもそのうちのひとりであったことを、「十人の者」が指し示している。しかし、それではいけないことを、ペテロは、このときかどうかは別として、悟ったのだろう。
  - マタイ 19:28 「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。」は、イエスが、このようなことをに近いことをいわれたことを否定するものではないが、マタイ集団、マタイに近い、ユダヤ人グループは、やはり、この部分を確保しておきたいと願っていたのかもしれない。

5. イエスは、何を、どのように教えますか。（42-44）

- 42 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。43 しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、44 あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。
- [DQ] イエスは、どのような生き方を教えていますか。
  - ここで、それぞれに、天国での地位を、約束することはどのような結果をもたらすだろうか。
    - マタイ 19:28 イエスは彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。
    - 地位については、40 しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることである」。として判断をさけている。神様に委ねて、ここでは、逃げているようにも見える。そうではないことに、目を向けてほしいのだろう。
  - 8:34-37 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。36 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。37 また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。
  - 9:33-37 33 それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられるとき、イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」。34 彼らは黙っていた。それは途中で、だれが一ばん偉いかと、互に論じ合っていたからである。35 そこで、イエスはすわって十二弟子を呼び、そして言われた、「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。36 そして、ひとりの幼な子をとりあげて、彼らのまん中に立たせ、それを抱いて言われた。37 「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。

6. 人の子が来た目的についてどのように語りますか。(45)

- 45 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。
- [DQ] 多くの人のあがないとして、自分の命を与えるとは、どのような意味でしょうか。
  - 贖罪死を連想させるが、そうではないのかもしれない。(パウロ文書)
    - ローマ 3:24,25 彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。25 神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに

犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、

    * コリント前書 1:30 あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。

    * ガラテヤ 3:13 キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、すべてのろわれる」と書いてある。

    * ガラテヤ 4:5 それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。

  –「仕えるもの」の生き方として、多くのひとを救うための生き方としている。

    * イエスが勧めているのは、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。」(8:34)「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。(10:35)

    * 神様が、あがない主であられるという信仰を強く持っておられたのだろう。その神様のみこころに生きることが、イエスが生きられた道。申命記 7:8 ただ主があなたがたを愛し、またあなたがたの先祖に誓われた誓いを守ろうとして、主は強い手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手から、あがない出されたのである。(9:26, 15:15)
      詩篇 130:7 イスラエルよ、主によって望みをいだけ。主には、いつくしみがあり、／また豊かなあがないがあるからです。

4.62.6 メモ

- マタイによる福音書で、ゼベダイの子らの母、ゼベダイの妻だろうを、登場させたことは、この願いが、使徒にふさわしくないと考えたからもあるだろう。しかし、同時に、ここに、ゼベダイの子らの母、おそらく、サロメがいたこと、イエスの母などもいたと思われることは、重要である。

  – マルコ 15:40,41 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。

  – ここから見えることは、男たちはともかく、女たちが、多くいたということである。人数は不明だが、おそらく、男たち、12 弟子だけかどうかは不明だが、おそらく、それに近いとして、人数としても、匹敵する数がいたのかもしれない。すくなくとも、マグダラのマリア、イエスの母マリア、ゼベダイ

の子らの母がいたであろうことは、覚えるべきである。

  - 同行者、おんなたちは、イエスの受難を知っていただろうか。おそらく、知っていたのだろう。それが、マグダラのマリアの香油注ぎにもつながり、十字架の近くにいて、悲鳴をあげていないことからも、見て取れる。

  - しかし、実際にそこに、ゼベダイの子らの母がいたとしても、やはり、ヤコブとヨハネの願いでもあったのだろう。それが会話から読み取れる。正直に書いた、マルコに共感する。それは、ペテロが伝えたことなのかもしれない。男性の視点として。ヨハネの記述も勘案すると、ゼベダイの子らの母は、イエスの母マリアの姉妹の可能性がある。それが、ヨハネと思われる、愛弟子に、世話を頼むことにもつながっているのかもしれない。同時に、叔母である、ゼベダイの子らの母である、サロメに頼まれることは、人間的に考えると、十分な圧力であるようにも思えてくる。

- 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである。の「多くのひとのあがない」をどう理解するかはおそらく、議論になる箇所だろうが、イエスに従うものとして、仕えられるためではなく、仕えるために生きることが中心であり、自分の十字架を負って従っていくことが主であろう。マタイでは、同じ箇所を、「28 それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」と、一例であるように、書いている。犠牲としてささげる愛が、自分の十字架であると、すれば、そのような生き方もあるのだろうが、ここで言われていることは、もっとずっと広いように思われる。また、イエスの死だけに限っても、やはり、仕えられるためではなく、仕えるためなのだろう。

4.63 10:46-52 盲人バルティマイを癒やす

46 それから、彼らはエリコにきた。そしてイエスが弟子たちや大ぜいの群衆と共にエリコから出かけられたとき、テマイの子、バルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。47 ところが、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出した。48 多くの人々は彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」。49 イエスは立ちどまって、「彼を呼べ」と命じられた。そこで、人々はその盲人を呼んで言った、「喜べ、立て、おまえを呼んでおられる」。50 そこで彼は上着を脱ぎ捨て、踊りあがってイエスのもとにきた。51 イエスは彼にむかって言われた、「わたしに何をしてほしいのか」。その盲人は言った、「先生、見えるようになることです」。52 そこでイエスは言われた、「行け、あなたの信仰があなたを救った」。すると彼は、たちまち見えるようになり、イエスに従って行った。

4.63.1 マタイ 20:29-34

29 それから、彼らがエリコを出て行ったとき、大ぜいの群衆がイエスに従ってきた。30 すると、ふたりの盲人が道ばたにすわっていたが、イエスがとおって行かれると聞いて、叫んで言った、「主よ、ダビデの

子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。31 群衆は彼らをしかって黙らせようとしたが、彼らはますます叫びつづけて言った、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。32 イエスは立ちどまり、彼らを呼んで言われた、「わたしに何をしてほしいのか」。33 彼らは言った、「主よ、目をあけていただくことです」。34 イエスは深くあわれんで、彼らの目にさわられた。すると彼らは、たちまち見えるようになり、イエスに従って行った。

4.63.2 ルカ 18:35-43

35 イエスがエリコに近づかれたとき、ある盲人が道ばたにすわって、物ごいをしていた。36 群衆が通り過ぎる音を耳にして、彼は何事があるのかと尋ねた。37 ところが、ナザレのイエスがお通りなのだと聞かされたので、38 声をあげて、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんで下さい」と言った。39 先頭に立つ人々が彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子よ、わたしをあわれんで下さい」。40 そこでイエスは立ちどまって、その者を連れて来るように、とお命じになった。彼が近づいたとき、41 「わたしに何をしてほしいのか」とおたずねになると、「主よ、見えるようになることです」と答えた。42 そこでイエスは言われた、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った」。43 すると彼は、たちまち見えるようになった。そして神をあがめながらイエスに従って行った。これを見て、人々はみな神をさんびした。

マルコによる福音書 10 章 46-52 節福音書対照表

4.63.3 問い

1. このことは、どのような背景のもとで、どこで起きましたか。(46a)
2. どのような人が、なにを訴えますか。(46b-48)
3. イエスは、どう対応しますか。(49-50)
4. イエスは、どのように、この人に聞き、この人はどのように答えますか。(51)
5. どうなりますか。(52)
6. あなたは、このことから、どのようなことを受け取りましたか。

4.63.4 参照

- エリコ
  - エルサレムから、約 24km（バークレイ）、約 27km（GPT-4o）
  - ユダヤ人男性でエルサレムから 24km 以内に住むものは、誰でも、過越の祭りに参加（バークレイ）

    * 祭司やレビ人（全体で、2 万人＋ 2 万人程度）で、神殿の仕事に従事していないときは、エリコに居住（バークレイ）

  - エルサレムから一日で移動できる距離で、通常のルートを取ると、ヨルダン川の東側から、西側に移った場所にある、非常に古い街であり、主要ルートが通ることもあり、栄えていた。

- バルテマイ：　T　B
  - T　：Timaeus = “highly prized”, Chaldee Origin　(unclean, impure)
  - B　：Bartimaeus = “son of Timaeus” 汚れたものの子とも読める。
  - マタイでは、二人、20:30 すると、ふたりの盲人が道ばたにすわっていたが、イエスがとおって行かれると聞いて、叫んで言った、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。
    * もともとは、テマイとバルテマイとペテロは言っていたのかもしれない。
  - 榊原康夫：ひとりかふたりかの違いの調和解釈例
    1. 三回の奇蹟があった。
    2. エリコ入りのとき、バルテマイは叫び、もうひとりと合してエリコでのときに癒やされた。
    3. エリコ入りのときバルテマイが癒やされ、エリコ出のとき、もうひとりが癒やされた。
    4. 旧エリコと、新エリコの区別があった。
    5. エリコに近い頃（まだ遠ざからぬうちに）と訳す
  - ルカでは、ザアカイの物語との関係もあり、編集したのでは（榊原）

- ヨハネには、ベタニヤ村での、ラザロの蘇りの記事が入っている。
  - 11:53-55 彼らはこの日からイエスを殺そうと相談した。54 そのためイエスは、もはや公然とユダヤ人の間を歩かないで、そこを出て、荒野に近い地方のエフライムという町に行かれ、そこに弟子たちと一緒に滞在しておられた。55 さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、多くの人々は身をきよめるために、祭の前に、地方からエルサレムへ上った。

- ダビデの子
  - マルコ 10:47,48 ところが、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出した。48 多くの人々は彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「**ダビデの子**イエスよ、わたしをあわれんでください」。（マルコ初出）
    * マタイ 20:30,31 すると、ふたりの盲人が道ばたにすわっていたが、イエスがとおって行かれると聞いて、叫んで言った、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。31 群衆は彼

らをしかって黙らせようとしたが、彼らはますます叫びつづけて言った、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。

  * ルカ 18:38,39 声をあげて、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんで下さい」と言った。39 先頭に立つ人々が彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子よ、わたしをあわれんで下さい」。

- マルコ 12:35-37 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。36 ダビデ自身が聖霊に感じて言った、／『主はわが主に仰せになった、／あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、／わたしの右に座していなさい』。37 このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。

  * マタイ 22:42 「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。

  * マタイ 22:45 このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。

  * ルカ 22:41 イエスは彼らに言われた、「どうして人々はキリストをダビデの子だと言うのか。

  * ルカ 22:44 このように、ダビデはキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。

- マタイ 1:1 アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。

- マタイ 1:20 彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。

- マタイ 9:27 そこから進んで行かれると、ふたりの盲人が、「ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」と叫びながら、イエスについてきた。

- マタイ 12:23 すると群衆はみな驚いて言った、「この人が、あるいはダビデの子ではあるまいか」。

- マタイ 15:22 すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます」と言って叫びつづけた。

- マタイ 21:9 そして群衆は、前に行く者も、あとに従う者も、共に叫びつづけた、／「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。

- マタイ 21:15 しかし、祭司長、律法学者たちは、イエスがなされた不思議なわざを見、また宮の庭で「ダビデの子に、ホサナ」と叫んでいる子供たちを見て立腹し、

  - ヨハネ 7:42 キリストは、ダビデの子孫から、またダビデのいたベツレヘムの村から出ると、聖書に書いてあるではないか」と言った。
  - （使徒 13:23 神は約束にしたがって、このダビデの子孫の中から救主イエスをイスラエルに送られたが、）
  - （ローマ 1:3 御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、）
  - （2 テモテ 2:8 ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である。）
- なにをしてほしいのか
  - 列王記上 3:3-9 ソロモンは主を愛し、父ダビデの定めに歩んだが、ただ彼は高き所で犠牲をささげ、香をたいた。4 ある日、王はギベオンへ行って、そこで犠牲をささげようとした。それが主要な高き所であったからである。ソロモンは一千の燔祭をその祭壇にささげた。5 ギベオンで主は夜の夢にソロモンに現れて言われた、「あなたに何を与えようか、求めなさい」。6 ソロモンは言った、「あなたのしもべであるわたしの父ダビデがあなたに対して誠実と公義と真心とをもって、あなたの前に歩んだので、あなたは大いなるいつくしみを彼に示されました。またあなたは彼のために、この大いなるいつくしみをたくわえて、今日、彼の位に座する子を授けられました。7 わが神、主よ、あなたはこのしもべを、わたしの父ダビデに代って王とならせられました。しかし、わたしは小さい子供であって、出入りすることを知りません。8 かつ、しもべはあなたが選ばれた、あなたの民、すなわちその数が多くて、数えることも、調べることもできないほどのおびただしい民の中におります。9 それゆえ、聞きわける心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ、わたしに善悪をわきまえることを得させてください。だれが、あなたのこの大いなる民をさばくことができましょう」。
  - マルコ 10:17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」。
  - マタイ 19:27 そのとき、ペテロがイエスに答えて言った、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるでしょうか」。
    - マルコ 10:28 ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。
  - マルコ 10:35-37 さて、ゼベダイの子ヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようにお願いします」。36 イエスは彼らに「何をしてほしいと、願うのか」と言われた。37 すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。

4.63.5　記録

- 日時：2024 年 7 月 18 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.63.6　問いについて

1. このことは、どのような背景のもとで、どこで起きましたか。（46a）
    - 46 それから、彼らはエリコにきた。そしてイエスが弟子たちや大ぜいの群衆と共にエリコから出かけられたとき、
    - [DQ] エリコについたときですか。出ていくときですか。
        - マルコ「46 それから、彼らはエリコにきた。」とルカ「35 イエスがエリコに近づかれたとき、」マタイは、「29 それから、彼らがエリコを出て行ったとき、」と、している。マルコでは、エリコから出かけられたとき、としているので、異なっているのは、ルカである。ルカでは、このあと、ザアカイの話を入れている。
        - このひとは、エリコに来たときから、イエスについて聞いていたのかもしれない。そして、出ていかれるとき。
        - [Q] エリコではどのようなことがあったのでしょうか。
    - [DQ] 大勢の群衆はどのような人たちでしょうか。
        - 巡礼のひともいたろう。エリコから、エルサレムは幹線道路、過越の祭りも近い。ただ、ヨハネでのベタニアでの記事などを考えると、ガリラヤからエルサレムへの途上で立ち寄ったということではないかもしれない。しかし、このときには、他の群衆も一緒になったのだろう。
2. どのような人が、なにを訴えますか。（46b-48）
    - 46b テマイの子、バルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。47 ところが、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出した。48 多くの人々は彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」。
    - [DQ] どのような人ですか。「テマイの子、バルテマイという盲人のこじき」
        - こじきは、たくさんいたのではないだろうか。
        - [Q] なぜ、テマイの子、バルテマイと書いているのでしょうか。

    * 「テマイ」は、カルデア語源の汚れたという意味だとおもわれるが、それから、盲人ととる学者もいる。盲人の子、盲人、すくなくとも、蔑まれた存在のその子で、その二人がそこにいたのかもしれない。「テマイとその子バルテマイ」だったのではないだろうか。

- [DQ] バルテマイは、なにを叫んでいますか。
  - 「ダビデの子イエスよ」この前に「ナザレのイエスだと聞いて」とあり、その対比がある。
  - 「わたしをあわれんでください。」「叫び出した。」「彼はますます激しく叫びつづけた、」とあり、非常なる必死さが伝わってくる。この機会にかけているのだろう。
- [DQ] なぜ、ダビデの子イエスよと叫んだのでしょうか。
  - おそらく、それを咎めるひともいただろうが、そんなことは、お構いなし。救い主、または、その可能性がある方と信じていた、期待していたのだろう。
    * 「ダビデの子」は、マルコ初出。多いのはマタイのみ。
  - ヨハネ 11:53 彼らはこの日からイエスを殺そうと相談した。
- [DQ] マタイによる福音書には、どのように書かれていますか。
  - 20:29 それから、彼らがエリコを出て行ったとき、大ぜいの群衆がイエスに従ってきた。30 すると、ふたりの盲人が道ばたにすわっていたが、イエスがとおって行かれると聞いて、叫んで言った、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。31 群衆は彼らをしかって黙らせようとしたが、彼らはますます叫びつづけて言った、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。
  - 「ふたりの盲人」「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」二人であり、主よが加わっている。
- [DQ] バルテマイは、なにを期待し、なにを、あわれみと思っていたのでしょうか。
  - 主が憐れみ深いかたで、このイエスをとおして、憐れんでくださると信じていたのだろう。または、信じるしかなかったのかもしれない。
- [DQ] なぜ、群衆は、この人をしかって黙らせようとするのでしょうか。
  - 「ダビデの子イエス」という政治的指導者を匂わせることばに反応したか。
  - イエスの特別なときであることを思うひとたちが、黙らせようとしたのか。
  - ルカでは 18:39 先頭に立つ人々が彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子よ、わたしをあわれんで下さい」。「先頭に立つ人々」とある。この人たちはどのような人たちだったのだろう。

3. イエスは、どう対応しますか。(49-50)

- 49 イエスは立ちどまって、「彼を呼べ」と命じられた。そこで、人々はその盲人を呼んで言った、「喜べ、立て、おまえを呼んでおられる」。50 そこで彼は上着を脱ぎ捨て、踊りあがってイエスのもとにきた。
- [DQ] なぜ、「彼を呼べ」と命じられた。と言ったのでしょうか。
  - 自分で彼のもとに行っても良かったのではないでしょうか。
- [DQ] この盲人の様子はどのように描かれていますか。
  - 上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのもとにきた。

4. イエスは、どのように、この人に聞き、この人はどのように答えますか。(51)

- 51 イエスは彼にむかって言われた、「わたしに何をしてほしいのか」。その盲人は言った、「先生、見えるようになることです」。
- [DQ] なぜ、「わたしに何をしてほしいのか」と聞いたのでしょうか。
- [DQ] なぜ、このように素直に答えられたのでしょうか。
- [DQ] あわれみと、見えるようになることは、つながっていたのでしょうか。

5. どうなりますか。(52)

- 52 そこでイエスは言われた、「行け、あなたの信仰があなたを救った」。すると彼は、たちまち見えるようになり、イエスに従って行った。
- [DQ] 「行け、あなたの信仰があなたを救った」とは、どのような意味でしょうか。
  - マタイでは、「34 イエスは深くあわれんで（　　：to be moved as to one's bowels, hence to be moved with compassion, have compassion (for the bowels were thought to be the seat of love and pity))、彼らの目にさわられた。」とある。
- [DQ] このひとの信仰とは何でしょうか。
- [DQ] 「行け」といわれて、従っていったとは、どういうことでしょうか。
  - イエス一行には、障害者（だったひと）もいたことがわかる。

6. あなたは、このことから、どのようなことを受け取りましたか。

- [DQ] あなたは、イエスに出会ったら、なにを求めますか。

4.63.7　メモ

- これが、エルサレムに入る前の最後のエピソードである。
- ラザロの復活、ザアカイの物語など、どのような、時間的経過なのかも、興味深い。
- 盲人が、目が見えるようになることを求めるのは自然だと考えてしまうが、そうではないかもしれない。障害者の気持ちを理解できていないのかもしれない。そして、自分に当てはめてみると、なにを求めるかはわからないとしか言えない。主に従うことは、自分の十字架を負うて従っていくこと。

4.64　11:1-11 エルサレムに迎えられる

1 さて、彼らがエルサレムに近づき、オリブの山に沿ったベテパゲ、ベタニヤの附近にきた時、イエスは
ふたりの弟子をつかわして言われた、2 「むこうの村へ行きなさい。そこにはいるとすぐ、まだだれも乗
ったことのないろばの子が、つないであるのを見るであろう。それを解いて引いてきなさい。3 もし、だ
れかがあなたがたに、なぜそんな事をするのかと言ったなら、主がお入り用なのです。またすぐ、ここへ
返してくださいますと、言いなさい」。4 そこで、彼らは出かけて行き、そして表通りの戸口に、ろばの子
がつないであるのを見たので、それを解いた。5 すると、そこに立っていた人々が言った、「そのろばの子
を解いて、どうするのか」。6 弟子たちは、イエスが言われたとおり彼らに話したので、ゆるしてくれた。7
そこで、弟子たちは、そのろばの子をイエスのところに引いてきて、自分たちの上着をそれに投げかける
と、イエスはその上にお乗りになった。8 すると多くの人々は自分たちの上着を道に敷き、また他の人々
は葉のついた枝を野原から切ってきて敷いた。9 そして、前に行く者も、あとに従う者も共に叫びつづけ
た、／「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝
福あれ。いと高き所に、ホサナ」。11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、すべ
てのものを見まわった後、もはや時もおそくなっていたので、十二弟子と共にベタニヤに出て行かれた。

4.64.1　マタイ 21:1-11

1 さて、彼らがエルサレムに近づき、オリブ山沿いのベテパゲに着いたとき、イエスはふたりの弟子をつ
かわして言われた、2 「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつながれていて、子ろばがそばにい
るのを見るであろう。それを解いてわたしのところに引いてきなさい。3 もしだれかが、あなたがたに何
か言ったなら、主がお入り用なのです、と言いなさい。そう言えば、すぐ渡してくれるであろう」。4 こう
したのは、預言者によって言われたことが、成就するためである。5 すなわち、／「シオンの娘に告げよ、
／見よ、あなたの王がおいでになる、／柔和なおかたで、ろばに乗って、／くびきを負うろばの子に乗っ
て」。6 弟子たちは出て行って、イエスがお命じになったとおりにし、7 ろばと子ろばとを引いてきた。そ
してその上に自分たちの上着をかけると、イエスはそれにお乗りになった。8 群衆のうち多くの者は自分
たちの上着を道に敷き、また、ほかの者たちは木の枝を切ってきて道に敷いた。9 そして群衆は、前に行

く者も、あとに従う者も、共に叫びつづけた、／「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。10 イエスがエルサレムにはいって行かれたとき、町中がこぞって騒ぎ立ち、「これは、いったい、どなただろう」と言った。11 そこで群衆は、「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである」と言った。

4.64.2 ルカ 19:28-40

28 イエスはこれらのことを言ったのち、先頭に立ち、エルサレムへ上って行かれた。29 そしてオリブという山に沿ったベテパゲとベタニヤに近づかれたとき、ふたりの弟子をつかわして言われた、30 「向こうの村へ行きなさい。そこにはいったら、まだだれも乗ったことのないろばの子がつないであるのを見るであろう。それを解いて、引いてきなさい。31 もしだれかが『なぜ解くのか』と問うたら、『主がお入り用なのです』と、そう言いなさい」。32 そこで、つかわされた者たちが行って見ると、果して、言われたとおりであった。33 彼らが、そのろばの子を解いていると、その持ち主たちが、「なぜろばの子を解くのか」と言ったので、34 「主がお入り用なのです」と答えた。35 そしてそれをイエスのところに引いてきて、その子ろばの上に自分たちの上着をかけてイエスをお乗せした。36 そして進んで行かれると、人々は自分たちの上着を道に敷いた。37 いよいよオリブ山の下り道あたりに近づかれると、大ぜいの弟子たちはみな喜んで、彼らが見たすべての力あるみわざについて、声高らかに神をさんびして言いはじめた、38 「主の御名によってきたる王に、／祝福あれ。天には平和、／いと高きところには栄光あれ」。39 ところが、群衆の中にいたあるパリサイ人たちがイエスに言った、「先生、あなたの弟子たちをおしかり下さい」。40 答えて言われた、「あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」。

4.64.3 ヨハネ 12:12-19

12 その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、13 しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、／「ホサナ、／主の御名によってきたる者に祝福あれ、／イスラエルの王に」。14 イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは 15 「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王が／ろばの子に乗っておいでになる」／と書いてあるとおりであった。16 弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。17 また、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした。18 群衆がイエスを迎えに出たのは、イエスがこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。19 そこで、パリサイ人たちは互に言った、「何をしてもむだだった。世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」。

マルコによる福音書 11 章 1-11 節福音書対照表

4.64.4　問い

1. イエスたちは、どこにいますか。背景も復習しましょう。(1)
2. イエスは弟子の二人にどんな指示をしていますか。(2,3)
3. そして、どうなりますか。(3-6)
4. イエスは、どうしますか。そのようすは、どのように描かれていますか。(7-10)
5. これは、どのようなことを伝えているのでしょうか。他の福音書から人々の反応もみてみましょう。
6. この日の、イエスの様子は、どのように描かれていますか。(11)

4.64.5　参照

- 受難週のエルサレムの地図 [The Passion Week in Jerusalem]
- ベテパゲ（B　　：“house of unripe figs” 熟していないいちじくの家または、単に、fig house いちじくの家）
  - エリコからエルサレムに向かう途中にあるベタニヤに近い小村。(the name of a hamlet between Jericho and Jerusalem, close to Bethany)
  - 聖書では、マルコ 11:11、マタイ 21:1、ルカ 19:29 すなわち今回の箇所のみ。
  - 安息日に旅することが可能。1.6km 以内。巡礼者の宿泊所
- ベタニヤ（B　　：“house of dates” or, “house of misery”）ナツメヤシの家
  - a village at the Mount of Olives, about two miles (3 km) from Jerusalem, on or near the normal road to Jericho
- ろば：山を旅するには馬よりも強く、女子供でも乗りやすい背丈であることから、ろばが愛用された。
  - 民数記 22 章 21 節明くる朝起きてバラムは、ろばにくらをおき、モアブのつかさたちと一緒に行った。
  - 士師記 5 章 9-10 節わたしの心は民のうちの喜び勇んで／進み出たイスラエルのつかさたちと共にある。主をさんびせよ。茶色のろばに乗るもの、／毛氈の上にすわるもの、／および道を歩むものよ、共に歌え。
  - サムエル記上 9 章 3 節サウルの父キシの数頭のろばがいなくなった。そこでキシは、その子サウルに言った、「しもべをひとり連れて、立って行き、ろばを捜してきなさい」。

- サムエル記下 16 章 1-2 節ダビデが山の頂を過ぎて、すこし行った時、メピボセテのしもべヂバは、くらを置いた二頭のろばを引き、その上にパン二百個、干ぶどう百ふさ、夏のくだもの一百、ぶどう酒一袋を載せてきてダビデを迎えた。王はヂバに言った、「あなたはどうしてこれらのものを持ってきたのですか」。ヂバは答えた、「ろばは王の家族が乗るため、パンと夏のくだものは若者たちが食べるため、ぶどう酒は荒野で弱った者が飲むためです」。
- 参照：列王紀上 10 章 28-29 節ソロモンが馬を輸入したのはエジプトとクエからであった。すなわち王の貿易商はクエから代価を払って受け取ってきた。エジプトから輸入される戦車一両は銀六百シケル、馬は百五十シケルであった。このようにして、これらのものが王の貿易商によって、ヘテびとのすべての王たちおよびスリヤの王たちに輸出された。

- ゼカリヤ 9:8-14
  - その時わたしは、わが家のために営を張って、見張りをし、行き来する者のないようにする。しえたげる者は、かさねて通ることがない。わたしが今、自分の目で見ているからである。9 シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。10 わたしはエフライムから戦車を断ち、エルサレムから軍馬を断つ。また、いくさ弓も断たれる。彼は国々の民に平和を告げ、その政治は海から海に及び、大川から地の果にまで及ぶ。11 あなたについてはまた、あなたとの契約の血のゆえに、わたしはかの水のない穴から、あなたの捕われ人を解き放す。12 望みをいだく捕われ人よ、あなたの城に帰れ。わたしはきょうもなお告げて言う、必ず倍して、あなたをもとに返すことを。13 わたしはユダを張って、わが弓となし、エフライムをその矢とした。シオンよ、わたしはあなたの子らを呼び起して、ギリシヤの人々を攻めさせ、あなたを勇士のつるぎのようにさせる。14 その時、主は彼らの上に現れて、その矢をいなずまのように射られる。主なる神はラッパを吹きならし、南のつむじ風に乗って出てこられる。
    - 背景を考えると難しい。捕囚のあと一部が帰還したエルサレムでの預言である。ここでは、周囲の海の民（ペリシテなど）からの圧迫に苦しむ必要はないとして、9 節、10 節が語られているように見える。エルサレムに、諸国民に平和を告げる王がくることを預言している。
    - おそらく「彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。」が、イエスのイメージと、エルサレム入城に適合していることを主張した人たちがおり、さらに、「わたしはエフライムから戦車を断ち、エルサレムから軍馬を断つ。また、いくさ弓も断たれる。彼は国々の民に平和を告げ、その政治は海から海に及び、大川から地の果にまで及ぶ。」に期待を抱いたのかもしれない。

- マカバイ記一 13 章 51 節第百七十一年の第二の月の二十三日、ユダヤの人々は賛美のうちにしゅろの枝をかざし、竪琴、シンバル、十二絃を鳴らし、賛歌と歌を歌いながら要塞に入った。イスラエルから大敵が根絶されたからである。

- 列王記下 9 章 13 節すると彼らは急いで、おのおの衣服をとり、それを階段の上のエヒウの下に敷き、ラ

ッパを吹いて「エヒウは王である」と言った。

- ルカにはこのあと挿入（19:41-44）
  - 41 いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣いて言われた、42「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている。43 いつかは、敵が周囲に塁を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、44 おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」。
- イエスのエルサレム訪問
  - ルカ 2:22 それから、モーセの律法による彼らのきよめの期間が過ぎたとき、両親は幼な子を連れてエルサレムへ上った。
  - ルカ 2:41 さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた。
  - ヨハネ 2:13 さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた。
  - ヨハネ 5:1,2 こののち、ユダヤ人の祭があったので、イエスはエルサレムに上られた。2 エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があった。そこには五つの廊があった。
  - ヨハネ 7:10 しかし、兄弟たちが（仮庵の）祭に行ったあとで、イエスも人目にたたぬように、ひそかに行かれた。
  - [参照] マタイ 23:37 ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに、おまえたちは応じようとしなかった。
  - [参考] エルサレムの周辺 30km 以内に住む成人男性は、この祭りに参加する定めになっていたと言われている。
- ヨハネには、エルサレムでの活動がたびたび書かれている。
  - 2:13-25 （過越祭の折）神殿から商人を追い出す。（共観福音書では、これを今回の記事のあとに置いている）
  - 3:1-21 （または 15 節まで）のニコデモとの会話も、エルサレムである可能性が高い。（イエスの葬りのときに現れ（19:39）、サンヘドリンの議員であるかは不明だが、議員はファリサイ派の人の中に登場する。（7:50））
  - 3:22 以降も、4:42 まで、ユダヤ、サマリアに弟子たちと、滞在している。（4:43-54 は、ガリラヤに滞在）

- 5:1-47 ユダヤ人の祭りにエルサレムに登り、ベテスダの池で病人を癒やす。（6:1-71 五千人の給食はガリラヤ。）
- 7:1-10:42-12:11 （エルサレム入城の直前まで）明確にはわからないが、エルサレムまたは周辺のユダヤに滞在していると思われる。
- ガリラヤでの活動の記事は、非常に限定的で、エルサレムでの活動ばかり書かれている。ガリラヤでは、カナでの活動が、二回と、五千人の給食のみ。共観福音書にかかれているから書かないとも考えられないこともないが、記述が詳細であることから、目撃者証言と言えるものも多い。カナ、五千人給食の地、エルサレムをつなぐ線上に、証言者がいるように見える。また、マリアとの関係も、最初のカナでの婚礼、そして、最後にイエスの愛しておられる弟子に、マリアを委ねるところからも、特別なものであったように見える。五千人給食に関しては、ピリポ、アンデレが登場し、バプテスマのヨハネのところでの、仲間だった可能性もあり、そこから、得た情報なのかもしれない。

4.64.6 記録

- 日時：2024 年 9 月 12 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）2 名

4.64.7 問いについて

1. イエスたちは、どこにいますか。背景も復習しましょう。(1)
   - 1 さて、彼らがエルサレムに近づき、オリブの山に沿ったベテパゲ、ベタニヤの附近にきた時、イエスはふたりの弟子をつかわして言われた、
   - [DQ] どこを出発して、どこへ向かい、今いる場所はどこでしょうか。
     - [A] 彼らがエルサレムに近づき、オリブの山に沿ったベテパゲ、ベタニヤの附近にきた時
       * マタイでは、ベテパゲとしているが、ルカは、マルコを引き継いでいる。おそらく、マタイは、それがベテパゲであることを知っていたのだろう。
       * では、なぜ、ベタニヤも入っているかが気になる。ヨハネによると、この前には、ラザロの復活の記事、マルタ、マリア、ラザロの家での宴会の記事、マリアが油を注いだ記事、そして、そのことが人々に衝撃を与えたことが書かれている。
       * マルコはなぜ、そのような記事をとばしているのだろうか。
   - [DQ] イエスは、弟子たちと共にエルサレムに何度も来ていたのだろうか。それとも、これが初めてだろうか。

- ルカには幼い頃に、両親と、エルサレムに来た記事がある。(2:22, 41) しかし、共観福音書には、書かれていないので、このときが最初であるような印象を受ける。一般的には、エルサレムから 30km 程度の範囲内の住人（成人男性）は、過越祭にエルサレムに上ることが義務と考えられており、熱心なひとは、遠くにいても、祭りのとき、特に、過越祭には、エルサレムに上っていた。このことが、ルカ 2:41 でも表現されている。「イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた。」
- ヨハネは、「(イエスの) 愛する」弟子が著者とされているが、エルサレムでの活動が中心に書かれている。自分が、その場にいた、目撃者であれば、目撃したこと以外については、確実なことしか、書かないだろう。むろん、実際に起こったときから、かなりの年月がたってからだと、混乱もあるかもしれないが。

2. イエスは弟子の二人にどんな指示をしていますか。(2,3)

- 2 「むこうの村へ行きなさい。そこにはいるとすぐ、まだだれも乗ったことのないろばの子が、つないであるのを見るであろう。それを解いて引いてきなさい。3 もし、だれかがあなたがたに、なぜそんな事をするのかと言ったなら、主がお入り用なのです。またすぐ、ここへ返してくださいますと、言いなさい」。
- [DQ] 「むこうの村」とは、どこでしょうか。
  - [A] おそらく、ベテパゲ。マタイでは、ベテパゲだけがあげられている。
  - [Q] ではなぜ、ベタニヤが入っているのか。
- [DQ] イエスはどんな指示をしていますか。
  - 配慮もあるように見える。「またすぐ、ここへ返してくださいます」(確認は次の問でもよい)
- [DQ] ろばは、どんなろばですか。なぜ、そのようなろばを選ばれたのでしょう。
  - [A] まだだれも乗ったことのないろばの子 (2)
    - 聖なる目的のためには、未使用のものを。
      - 民数記 19 章 02 節「主の命じられた律法の定めは次のとおりである。すなわち『イスラエルの人々に告げて、完全で、傷がなく、まだくびきを負ったことのない赤い雌牛を、あなたのもとに引いてこさせ、
      - 申命記 21 章 03 節そしてその殺された者のある所に最も近い町の長老たちは、まだ使わない、まだくびきを負わせて引いたことのない若い雌牛をとり、
    - マタイでは、ろばところばとなっている。(マタイ 21:2,5,7)

  - マタイ 21:4,5 4 こうしたのは、預言者によって言われたことが、成就するためである。5 すなわち、／「シオンの娘に告げよ、／見よ、あなたの王がおいでになる、／柔和なおかたで、ろばに乗って、／くびきを負うろばの子に乗って」。
  - ヨハネ 12:15,16 「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王が／ろばの子に乗っておいでになる」／と書いてあるとおりであった。16 弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。
  - ゼカリヤ 9:8-14 参照

3. そして、どうなりますか。(3-6)

- 3 もし、だれかがあなたがたに、なぜそんな事をするのかと言ったなら、主がお入り用なのです。またすぐ、ここへ返してくださいますと、言いなさい」。4 そこで、彼らは出かけて行き、そして表通りの戸口に、ろばの子がつないであるのを見たので、それを解いた。5 すると、そこに立っていた人々が言った、「そのろばの子を解いて、どうするのか」。6 弟子たちは、イエスが言われたとおり彼らに話したので、ゆるしてくれた。
- [DQ] イエスとこの村の人との関係はどのようなものだったのでしょうか。
  - [A] ベテパゲは、ここにしか登場しないので、不明だが、ベタニヤに近いことからも、このあたりには、イエスは何回も来ていたと思われる。ヨハネによるとこの直前にも、ベタニヤに滞在していた。
- [DQ] イエスと村の人の間には事前に打ち合わせがあったのでしょうか。
  - [A] その証拠はないが、ベタニヤに近いということは、ラザロの事件も知っていたろうから、事前の打ち合わせがなくても、これらのことばで通じたかもしれない。同時に、ある信頼関係のあるひとがいたことも十分考えられる。そして、これらのことばで、その意味も通じた可能性が高い。
- [DQ] 「イエスが言われた通り」とは、どんなことを指していますか。
  - [A] 「主がお入り用なのです。またすぐ、ここへ返してくださいます」
- ルカでは『主がお入り用なのです』の部分が強調されている。(ルカ 19:31,34)

4. イエスは、どうしますか。そのようすは、どのように描かれていますか。(7-10)

- 7 そこで、弟子たちは、そのろばの子をイエスのところに引いてきて、自分たちの上着をそれに投げかけると、イエスはその上にお乗りになった。8 すると多くの人々は自分たちの上着を道に敷き、また他の人々は葉のついた枝を野原から切ってきて敷いた。9 そして、前に行く者も、あとに従う者も共に叫びつづけた、／「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。

- [DQ] どのような人々がイエスの入城に立ち会いますか。
  - 弟子たち、多くの人々、他の人々、前に行く者、あとに従う者
  - この人たちは、どのような人たちでしょうか。
    - 弟子とそのお付き？ガリラヤから来た人々？エルサレムの人々？
- [DQ] イエスはどのようにしてエルサレムに入城しますか。
  - [Q] エルサレム凱旋のようなイメージがあるが、本当に、そのように、マルコは描いたいるのだろうか。ろばの子というのは、興味深い。

5. これは、どのようなことを伝えているのでしょうか。他の福音書から人々の反応もみてみましょう。

- マルコでは「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。だが、他の福音書では、意味が付け加えられている。
- [DQ] エルサレムの人たちに対して、群衆はどのようにイエスを紹介しますか。
  -「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。
  -「今きたる、われらの父ダビデの国に」は、旧約聖書に対応箇所がない。ダビデの子とすることを、避けていることは確かなように思われる。
- [参照] 詩篇 118:25,26 主よ、どうぞわれらをお救いください。主よ、どうぞわれらを栄えさせてください。26 主のみ名によってはいる者はさいわいである。われらは主の家からあなたをたたえます。
- 他の福音書からの考察
  - [DQ] マタイは、「王」についてイエスについて、どのような事を伝えていますか。
    - 21:4,5 4 こうしたのは、預言者によって言われたことが、成就するためである。5 すなわち、／「シオンの娘に告げよ、／見よ、あなたの王がおいでになる、／柔和なおかたで、ろばに乗って、／くびきを負うろばの子に乗って」。
      - ゼカリヤ 9:9 シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。
    - 21:9 そして群衆は、前に行く者も、あとに従う者も、共に叫びつづけた、／「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。
- [DQ] 人々は、どのようにして、イエスを迎えますか。それぞれの福音書を比較してみましょう。
  - 弟子たち、群衆、エルサレムの人々、パリサイ派の人々

- [DQ] イエスは、なぜ、ろばの子に乗って、エルサレムに入城したのでしょうか。
  - ゼカリヤ 9:9-10 との関係はどのように理解したらよいのだろうか。
- [参照] 旧約聖書のゼカリヤ書 9 章 9 節を読んでみましょう。イエスはご自身をどういう人物として、人々に紹介しようとしていますか。
  - [Q] なぜ、マルコには書かれていないのか。ヨハネをみると、弟子たちはわからなかったということだろう。すなわち、イエスは、ゼカリヤ 9：9 を知っていても、それを強調はしない。預言に制約される方ではない。
- 戦いのときには、馬で、平和のときには、ろばで。
- [ルカ] イエスはなぜ、都を見て泣くのでしょう。（41 節〜42 節）
- [ヨハネ] 弟子たちが、あとから気づいたのはどのようなことでしょうか。
- この日はいつだったのでしょうか。棕櫚の聖日。

6. この日の、イエスの様子は、どのように描かれていますか。（11）
   - 11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、すべてのものを見まわった後、もはや時もおそくなっていたので、十二弟子と共にベタニヤに出て行かれた。
   - [DQ] それぞれの福音書は何を伝えているのでしょうか。
     - ヨハネはこの背景を丁寧に伝えているように見える。マルコの時代には、それは危険が伴い、マタイや、ルカは、マルコをそのまま引き継いだか。ヨハネの時代には、このことが明かされても安全だったのかもしれない。

4.64.8 メモ

- ベテパゲ、ベタニヤは、正確にはわからないが、イエスは何度も、この地域を訪ねていることは確かである。
- マルコは非常にあっさり描いている。そのようにしか、描けなかったのかもしれないが、同時に、大きな騒ぎはなかったのかもしれない。ただ、ヨハネの記述とのギャップは感じる。
- マタイでは、流れは、マルコと同じく、エリコでの（マタイでは二人の）盲人の癒やしのあとに置かれ、場所は、ベテパゲと断言している。これは、ベタニヤではないことを証言し、ベタニヤとあるのは、別の理由で入っていることを知っているものが執筆に関わっていたのだろう。またろばについては、二回にわたり、ろばと子ろばとの表現になっている。そして、イエスがどちらに乗られたか明確ではない。ゼカリヤ預言が挿入され、そこでもろばに乗って、くびきを負うろばの子に乗ってとなっている。群衆の声には「ダビデの子」が挿入されている。マルコにはそれはない。最後は、「イエスがエルサレムにはいって行か

れたとき、町中がこぞって騒ぎ立ち、「これは、いったい、どなただろう」と言った。そこで群衆は、「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである」と言った。」と締めくくっている。群衆の、認識としては、預言者である。

- ルカには、エリコでのザアカイの話が挿入されており、そのあとで、ムナの譬えがあり、一ムナを布に包んでしまっておいたものへのかなり厳しい裁きを宣告し、つづけて、「イエスはこれらのことを言ったのち、先頭に立ち、エルサレムへ上って行かれた。」と続けている。先頭に立ちは、マルコ 10:32 「さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。」を思い起こさせる。場所に関しては、「オリブという山に沿ったベテパゲとベタニヤに近づかれたとき」とし、多少不自然な、マルコを踏襲しているように見える。「主がお入り用なのです」が二回繰り返され（マルコ、マタイでは一回）、それに応じたことが印象的に、伝えられている。「いよいよオリブ山の下り道あたりに近づかれると」の記述はあるが、エルサレム入城については、書かれていない。呼びかけには「王」と入っている。逆に、パリサイ人とのやり取り（拒否といってもよいだろう）が挿入されている。そして、この記事のあとには、「いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣いて言われた」に続けて、エルサレムの破壊について語り、「それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」。と結んでいる。エルサレム入城の記事とは、違う表現になっている。

  - 33 . ; 34 . . [NA28:LK19]

    * [私訳] 彼らが、その子ろばを解いていると、その子ろばの主人たちは（ ）彼らに、なぜ、子ろばを解くのかと言うと、彼らは、その主人が（ ）、必要としているのですと言った。

- ヨハネでは、11 章、12 章前半にラザロのことが書かれており、エルサレム入城（過越の祭りの 5 日前）のときにも、人々がそのことを知っていて、イエスを、迎えたことが書かれている。しかし、マルコでは、ベタニヤという言葉を出すだけで、そのことには言及しない。ロバを引いてきたのはおそらくマタイにもあるように、ベテパゲなのだろう。すると、マルコにある、ベタニヤは意味深である。ボウカムの「イエスとその目撃者たち」から学んだことだが、マルコが書かれた時代、または、ペテロが説教した時代には、そのことを語る危険性がまだ会ったのかもしれない。実際、ラザロをも殺そうとする動きがあったことも書かれているのだから。

  - ヨハネ 12:9-11 大ぜいのユダヤ人たちが、そこにイエスのおられるのを知って、押しよせてきた。それはイエスに会うためだけではなく、イエスが死人のなかから、よみがえらせたラザロを見るためでもあった。10 そこで祭司長たちは、ラザロも殺そうと相談した。11 それは、ラザロのことで、多くのユダヤ人が彼らを離れ去って、イエスを信じるに至ったからである。

- マルコを読んでいると、イエスは、ゼカリヤ預言を自分のことに当てはめてはいなかったように思う。たしかに、ある部分、イエスに適合する部分はあるが、ラザロの復活以降は特に、エルサレムでは、すでに、お尋ね者になっている、イエスは、正々堂々とエルサレムに向かうことだけを考えて、人混みに紛れてではなく、ろばに乗って、エルサレムに向かったのではないだろうか。ヨハネで、ゼカリヤ預言については、弟子たちは、気づいていなかったことが書かれている。イエスは、そのことを言わなかった証拠でもある。すくなくとも、凱旋のようなイメージで捉えるのは、間違っていると思う。すぐ返すことや、最後のエル

サレムを見て回ったことなども、マルコにしか書かれておらず、興味深い。そのあとに、ひとが、様々に、意味づけしたことが、他の福音書に含まれているのだろう。生のイエスではなくなっているようにみえる。

4.65 11:12-14 いちじくの木を呪う

12 翌日、彼らがベタニヤから出かけてきたとき、イエスは空腹をおぼえられた。13 そして、葉の茂ったいちじくの木を遠くからごらんになって、その木に何かありはしないかと近寄られたが、葉のほかは何も見当らなかった。いちじくの季節でなかったからである。14 そこで、イエスはその木にむかって、「今から後いつまでも、おまえの実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。

4.65.1 マタイ 21:18-19

18 朝はやく都に帰るとき、イエスは空腹をおぼえられた。19 そして、道のかたわらに一本のいちじくの木があるのを見て、そこに行かれたが、ただ葉のほかは何も見当らなかった。そこでその木にむかって、「今から後いつまでも、おまえには実がならないように」と言われた。すると、いちじくの木はたちまち枯れた。

マルコによる福音書 11 章 12-26 節福音書対照表

4.65.2 メモ

- マルコ 11:20-26 と一緒に学ぶ

4.66 11:15-19 神殿から商人を追い出す

15 それから、彼らはエルサレムにきた。イエスは宮に入り、宮の庭で売り買いしていた人々を追い出しはじめ、両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえし、16 また器ものを持って宮の庭を通り抜けるのをお許しにならなかった。17 そして、彼らに教えて言われた、「『わたしの家は、すべての国民の祈の家ととなえらるべきである』と書いてあるではないか。それだのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしてしまった」。18 祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、どうかしてイエスを殺そうと計った。彼らは、群衆がみなその教に感動していたので、イエスを恐れていたからである。19 夕方になると、イエスと弟子たちとは、いつものように都の外に出て行った。

4.66.1 マタイ 21:12-17

12 それから、イエスは宮にはいられた。そして、宮の庭で売り買いしていた人々をみな追い出し、また両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえされた。13 そして彼らに言われた、「『わたしの家は、祈の家

ととなえらるべきである』と書いてある。それだのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている」。14 そのとき宮の庭で、盲人や足なえがみもとにきたので、彼らをおいやしになった。15 しかし、祭司長、律法学者たちは、イエスがなされた不思議なわざを見、また宮の庭で「ダビデの子に、ホサナ」と叫んでいる子供たちを見て立腹し、16 イエスに言った、「あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか」。イエスは彼らに言われた、「そうだ、聞いている。あなたがたは『幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた』とあるのを読んだことがないのか」。17 それから、イエスは彼らをあとに残し、都を出てベタニヤに行き、そこで夜を過ごされた。

4.66.2 ルカ 19:45-48

45 それから宮にはいり、商売人たちを追い出しはじめて、46 彼らに言われた、「『わが家は祈の家であるべきだ』と書いてあるのに、あなたがたはそれを盗賊の巣にしてしまった」。47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長、律法学者また民衆の重立った者たちはイエスを殺そうと思っていたが、48 民衆がみな熱心にイエスに耳を傾けていたので、手のくだしようがなかった。

4.66.3 ヨハネ 2:13-22

13 さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた。14 そして牛、羊、はとを売る者や両替する者などが宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、15 なわでむちを造り、羊も牛もみな宮から追いだし、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし、16 はとを売る人々には「これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」と言われた。17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が、わたしを食いつくすであろう」と書いてあることを思い出した。18 そこで、ユダヤ人はイエスに言った、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」。19 イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。20 そこで、ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。それだのに、あなたは三日のうちに、それを建てるのですか」。21 イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである。22 それで、イエスが死人の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉とを信じた。

マルコによる福音書 11 章 15-19 節福音書対照表

マルコによる福音書 11 章 12-26 節福音書対照表

4.66.4 問い

1. 背景を復習しましょう。前日について、この日についてどんなことがわかりますか。(11:1-14)
2. イエスは、どこで、どんなことをしますか。(15,16)

3. イエスは、どのように言っていますか。(17)
4. イエスの行動は弟子たちに、人々にどううつったでしょうか。祭司長や律法学者たちはどう考えましたか。(18)
5. イエスは、このあとどうしますか。(19)
6. 他の福音書、特に、ヨハネによる福音書の記事と比較してみましょう。どんなことがわかりますか。

4.66.5 参照

- ベタニヤ（ナツメヤシの家）について（ヨハネ 1:28 にある、ヨルダン川付近のベタニヤは省略）エリコから、エルサレムへ向かう途上の、エルサレムから 3km ほどの村。
  - マルコ 14:3-9 3 イエスがベタニヤで、重い皮膚病の人シモンの家にいて、食卓についておられたとき、ひとりの女が、非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、それをこわし、香油をイエスの頭に注ぎかけた。（マタイ 26:6-13）
    * ヨハネ 12 章 1-11 節 1 過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた。そこは、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロのいた所である。
  - ルカ 10:38-42 （マルタとマリアについて）一同が旅を続けているうちに、イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。（ベタニヤとは明確には書かれていない）
  - ルカ 24:50-53 昇天 50 それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。
  - ヨハネ 11 章全体 1 さて、ひとりの病人がいた。ラザロといい、マリヤとその姉妹マルタの村ベタニヤの人であった。
- エルサレムについては、エルサレム入城 [参考]
  - 宣教活動を始めたからは、ヨハネのみに記載：2:13-25、3:1-21、5:1-47 ユダヤが中心で、サマリヤについても、記述がある。
- 受難週のエルサレムの地図 [The Passion Week in Jerusalem]
- ヘロデ神殿　[Herod's Temple]
  - BC20/19 ごろ、BC520-515 ごろの、ゼルバベルの神殿の改築を開始、AD63 に完成、AD70 にテトスにより破壊。
- The Temple at Jerusalem in Jesus' Day, Clyde W. Votaw [pdf]

- イザヤ 56:7 わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、／わが祈の家のうちで楽しませる、／彼らの燔祭と犠牲とは、／わが祭壇の上に受けいれられる。わが家はすべての民の／祈の家ととなえられるからである」。
- エレミヤ 7:11 わたしの名をもって、となえられるこの家が、あなたがたの目には盗賊の巣と見えるのか。わたし自身、そう見たと主は言われる。
- ヨハネにはこのあと、イエスは人の心を知っておられる、の記事が入っている。（ヨハネ 2:23-25）
  - 23 過越の祭の間、イエスがエルサレムに滞在しておられたとき、多くの人々は、その行われたしるしを見て、イエスの名を信じた。24 しかしイエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。それは、すべての人を知っておられ、25 また人についてあかしする者を、必要とされなかったからである。それは、ご自身人の心の中にあることを知っておられたからである。
- 宮・神殿
  - コリント前書 3:16-17 あなたがたは神の神殿であり、神の霊が自分の内に住んでいることを知らないのですか。17 神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。
  - 申命記 14:24-26 しかし、あなたの神、主があなたを祝福しても、あなたの神、主がその名を置くために選ぶ場所が遠く離れ、その道のりが長すぎて、それを携えて行くことができないなら、25 あなたはそれを銀に換え、その銀を携え、あなたの神、主が選ぶ場所に向かい、26 その銀であなたの望むもの、すなわち、牛でも羊でもぶどう酒でも麦の酒でも、何でもあなたの好きなものを求め、あなたの神、主の前で食べ、あなたも家族も楽しみなさい。

4.66.6 記録

- 日時：2024 年 9 月 19 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）2 名、参加（遠隔）3 名

4.66.7 問いについて

1. 背景を復習しましょう。前日について、この日についてどんなことがわかりますか。（11:1-14）
   - 子ろばに乗りエルサレム入城。その後、「11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、すべてのものを見まわった後、もはや時もおそくなっていたので、十二弟子と共にベタニヤに出て行かれた。」
   - 12 翌日、彼らがベタニヤから出かけてきたとき、イエスは空腹をおぼえられた。
   - [DQ] ベタニヤについてどのようなことが聖書には書かれていますか。

  - マルコ 14:3-9（香油）（マタイ 26:6-13、ヨハネ 12:1-11）、ルカ 10:38-42（マルタとマリア）、ルカ 24:50-53（昇天）、ヨハネ 11 章（ラザロの復活）、
  - [考察] ベタニアの滞在先などについては、語らない。イエスと弟子の一団は、おそらく、弟子と女性たちもふくめると、20 人は降らず、もっと多かったかもしれないので、十分、打ち合わせもあったはずである。すくなくとも、マルタ、マリア、ラザロの家などがあったと思われるが、おそらく、ペテロが語った時点では、このようなエピソードを語ることは、ベタニヤのひとたちに危険があった可能性もあったのだろう。それもあって、ベタニヤについては、語らないのかもしれない。
- [DQ] 「すべてのものを見回った」とありますが、どんなことを観察したと思いますか。
  - [A] おそらく、宮のことも観察したはずである。
- [DQ] すべてのものを見まわったとき、イエスは、神殿（宮）について、どう見ておられたのでしょうか。そのときは、憤りをもっても、なにもしないことにして、十分考えてから以下の行動をしたのだろうか。

2. イエスは、どこで、どんなことをしますか。（15,16）

- 15 それから、彼らはエルサレムにきた。イエスは宮に入り、宮の庭で売り買いしていた人々を追い出しはじめ、両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえし、16 また器ものを持って宮の庭を通り抜けるのをお許しにならなかった。
- [A]　宮の庭で売り買いしていた人々を追い出し　　両替人の台や、はとを売る者の腰掛けをくつがえし　　器ものをもって宮の庭を通り抜けるのを許さない。
  - 律法通り、シケル税を納めるには、外国貨幣の使われていた当時には必須だった。（出エジプト 30:12-16 30:13 すべて数に入る者は聖所のシケルで、半シケルを払わなければならない。一シケルは二十ゲラであって、おのおの半シケルを主にささげ物としなければならない。参照：レビ記 5:15, 27:3, 25、民数記 3:47,50,7:13,19,25,31,37,43,49,55,61,67,73,79,85,86,18:16）
  - 物の売買申命記 14:25,26 あなたはその物を金に換え、その金を包んで手に取り、あなたの神、主が選ばれる場所に行き、26 その金をすべてあなたの好む物に換えなければならない。すなわち牛、羊、ぶどう酒、濃い酒など、すべてあなたの欲する物に換え、その所であなたの神、主の前でそれを食べ、家族と共に楽しまなければならない。
  - 鳩を売る者たち：レビ記 5:7 もし小羊に手のとどかない時は、山ばと二羽か、家ばとのひな二羽かを、彼が犯した罪のために償いとして主に携えてきて、一羽を罪祭に、一羽を燔祭にしなければならない。
    - レビ記 12:8 もしその女が小羊に手の届かないときは、山ばと二羽か、家ばとのひな二羽かを取って、一つを燔祭、一つを罪祭とし、祭司はその女のために、あがないをしなければな

らない。こうして女は清まるであろう』」。

- [DQ] それぞれ、どのようなことをしている人なのでしょうか。
  - [A] 宮の庭で商売をしていたひとの邪魔をした。
    - おそらく、ささげ物を売っている人々や、神殿に納めるお金のための換金であろう。
  - [Q] 売り買いをしているのと、はとを売るのは、違うのでしょうか。
- [DQ] このイエスの行為は、（公的に認められている商売を邪魔をする）犯罪ではないのでしょうか。
  - メシアの権威？
- [DQ] かなり、乱暴に見えますが、もっと、他の方法はなかったのでしょうか。The Lesser Evil？

3. イエスは、どのように言っていますか。（17）

- 17 そして、彼らに教えて言われた、「『わたしの家は、すべての国民の祈の家ととなえらるべきである』と書いてあるではないか。それだのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしてしまった」。
- イザヤ 56:7 わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、／わが祈の家のうちで楽しませる、／彼らの燔祭と犠牲とは、／わが祭壇の上に受けいれられる。わが家はすべての民の／祈の家ととなえられるからである」。
  - 主が喜ぶひとのことが書かれ、そのあとに、その人達を導き、その結果として、主の家が、祈りの家と唱えられるとしている。
  - [注] すべての民、すべての国民は、一般的には異邦人を含む。マタイでは省略。また、商売は、異邦人の庭で開かれていたとされる。
- エレミヤ 7:11 わたしの名をもって、となえられるこの家が、あなたがたの目には盗賊の巣と見えるのか。わたし自身、そう見たと主は言われる。
  - 主が喜ばれることをしていないことを指摘しており、商売などについて、言っているわけではない。
- [DQ] イエスが伝えたかったことは、何なのでしょうか。イエスにとって神の宮（神殿）とは、どのようなものなのでしょうか。
  - [A] 神が臨在される場所、聖霊が住む場所（?）
  - [A] 神殿にふさわしい状況ではなかったかもしれないが、そこまで、怒ることもなかったのではないだろうか。ただ、不適切な状況があることを、指摘した面はあるように見える。乱暴だが。他の改善があってよいのではないかと思われるし、イエスの伝えたいメッセージの中心では、ないように見える。

- 神の宮（神殿）について：宗教行事を行う場所ではなく、より普遍的な神殿を意識していたのかもしれない。
  - 1 コリ 3:16,17 あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。17 もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。
  - 1 コリ 6:19 あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。
  - 2 コリ 6:16 神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、／「わたしは彼らの間に住み、／かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、／彼らはわたしの民となるであろう」。
  -（より抽象的）エペソ 2:21 このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、

4. イエスの行動は弟子たちに、人々にどううつったでしょうか。祭司長や律法学者たちはどう考えましたか。（18）
   - 18 祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、どうかしてイエスを殺そうと計った。彼らは、群衆がみなその教に感動していたので、イエスを恐れていたからである。
   - [DQ] イエスのどんな教えに群衆は感動し、イエスを恐れていたのでしょうか。
     - [A] ここには、神殿のことしか、書かれていない。ガリラヤから来た人々は、すでに、いろいろと聞いてかもしれないが、エルサレムの人々、ここではじめてイエスにであったひとたちは、どんな教えを聞いたのだろうか。
     - [Q] イエスを恐れる（　：恐怖を感じる、心配をする、畏れかしこむ）とは、どんな状態を言っているのでしょうか。
   - [DQ] 弟子たちは、いつものイエス様として、当然と思ったでしょうか。ガリラヤでは、似たことはありましたか。かたくなさを嘆いたことはあった。
   - [DQ] 祭司長や、律法学者が、イエスを殺そうとまで思ったのは、何が理由なのでしょうか。
     - [A] 宗教活動の本質を、変えようとしたことかもしれない。宮きよめは、関係はしているが、それがコアだとは、思えない。
   - [考察] イエスを殺そうと計る理由は、いくつかあっただろうが、ほんとうに、この宮清めが、祭司長や、律法学者の怒りをかったとは思えない。むろん、イエスの行為は、問題だと感じただろうが。
5. イエスは、このあとどうしますか。（19）

- 19 夕方になると、イエスと弟子たちとは、いつものように都の外に出て行った。
- [DQ] なにか、あっさり書かれていますが、この日は、宮清めだけだったのでしょうか。
- [DQ] いつものようにとは、なにを意味しているのでしょうか。都では、このようなことがしばしばあったのでしょうか。エルサレムには、何回も来ていますか。
  - [A] マルコでは、このときが、初めてであるが、ヨハネでは、何回も、エルサレムに来ていることが書かれている。なにかを飛ばしているように思われる。
- [考察] エルサレムに来ていたことを、書かない理由が何かしらあったのだろう。そして、「いつものように都の外に出て行った」としか書けなかった理由があったのだろう。
- [DQ] マタイと、ルカでは、どのようなことが最後に書かれていますか。
  - マタイ 21:14-16 14 そのとき宮の庭で、盲人や足なえがみもとにきたので、彼らをおいやしになった。15 しかし、祭司長、律法学者たちは、イエスがなされた不思議なわざを見、また宮の庭で「ダビデの子に、ホサナ」と叫んでいる子供たちを見て立腹し、16 イエスに言った、「あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか」。イエスは彼らに言われた、「そうだ、聞いている。あなたがたは『幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた』とあるのを読んだことがないのか」。
  - ルカ 19:47,48 47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長、律法学者また民衆の重立った者たちはイエスを殺そうと思っていたが、48 民衆がみな熱心にイエスに耳を傾けていたので、手のくだしようがなかった。
  - [A] マタイと、ルカでは、祭司長、律法学者たちが、イエスを殺そうとする、または、反対する、それなりに、理解できる理由が、書かれている。(マルコを読んだひとには、理解できなかったから、書いたのだろう。)
    - マタイ：不思議なわざ、こどもたちが、ダビデの子に、ホサナと叫んでいる。
    - ルカ：毎日宮で教えておられた。民衆は、それに、熱心に耳を傾けていた。

6. 他の福音書、特に、ヨハネによる福音書の記事と比較してみましょう。どんなことがわかりますか。

- [DQ] ヨハネ 2:17：「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」とはどのような意味ですか。
- [DQ] ヨハネ 2:18-22：ユダヤ人、イエスでどのようなやり取りをしますか。弟子たちは、どう理解しますか。
- [DQ] ヨハネでは、いつ頃のこととして書かれていますか。
  - かなり初期のことだとされている。過越の祭りが近いことは同じ。(2:13)
  - この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。(2:20b)

    * BC19 から、ヘロデが再建を始めたと言われている。AD28 頃と思われる。

  - [注] マタイとルカには、日付（翌日）の記述はない。「それから」としており、エルサレム入場時のこととしている。そのほうが、自然にも見える。しかし、マルコの記述が不自然とした、編集とも考えられる。

- [DQ] ヨハネでは、イエスが、どのようなことをし、その行為の理由は何だと言っていますか。

  - 2:14-16 14 そして牛、羊、はとを売る者や両替する者などが宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、15 なわでむちを造り、羊も牛もみな宮から追いだし、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし、16 はとを売る人々には「これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」と言われた。

  - [A] 自分の父の家だと考えている。

  - 2:17-22 17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が、わたしを食いつくすであろう」と書いてあることを思い出した。18 そこで、ユダヤ人はイエスに言った、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」。19 イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。20 そこで、ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。それだのに、あなたは三日のうちに、それを建てるのですか」。21 イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである。22 それで、イエスが死人の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉とを信じた。

  - [A] 「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。とまで言っている。ちょっと早すぎるように思う。

  - [参照] マルコ 14:58 「わたしたちはこの人が『わたしは手で造ったこの神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建てるのだ』と言うのを聞きました」。マルコ 15:29 そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって言った、「ああ、神殿を打ちこわして**三日**のうちに建てる者よ、（マタイ 26:61, 27:64）（これが実際いつの時点でどのように言われたかはマルコには書かれていない。訴えられた理由でもあるので、明言は避けたのか。）

  - [参照] 詩篇 69:9 (または 10) あなたの家を思う熱心がわたしを食いつくし、／あなたをそしる者のそしりが／わたしに及んだからです。

  - [参照] 46 年（BC20/19 年開始）このとき、AD28 年頃となる。イエスの十字架は　AD30 の過越祭頃と思われる。

- [DQ] 同じ時のことなのでしょうか。それとも、こんなことが、何度もあったのでしょうか。

4.66.8 メモ

- 個人的には、宮清めは、ヨハネの記述のように、受難週とよばれる最後の週ではなく、早い時期に、あったほうが自然であるように、感じる。マルコの記述をみると、エルサレム入城を堂々とおこない、宮を見て回られてから、そのままベタニヤに帰り、次の朝、早くに、エルサレムに戻ったように書いてあるが、この日にしたこととしては、宮清めだけである。不自然にも感じる。それと、メッセージをこめて、これだけの行為をするなら、前の日に見て回ったときに、しても良さそうである。そのときには、なにもせず、次の日の朝、このような行為をするのは、不自然である。ここでは、祭司長、律法学者との緊張関係（イエスを殺そうとする）と、群衆の様子を描くために、この記事を、入れたように見える。ヨハネは「さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた。」（2:13）と始まり、このときに、何人かの弟子たちも同行したかもしれない。「アンデレと、もう一人の弟子」（1:10）は、一緒にいたのではないだろうか。目撃証言として書かれている。マルコでは、エルサレムや、ベタニヤの人たちを、守る必要があったからだろうか、エルサレム入城を書いたヨハネに登場するラザロのことは、なにも書かれていない。しかし、何らかの背景をかかないと、緊張状態を描けなかったのではないだろうか。それが、この記事であると思われる。ただし、ヨハネでは、エルサレム入城を日曜日に設定しているようだが、そのあとは、ギリシャ人、イエスに会いに来る。人の子はあげられる。イエスを信じない者たち。イエスの言葉による裁きと、12 章にあるが、すぐ木曜日の夜と思われる、13 章に突入し、ほとんど、時系列的な、出来事は記していない。拙速には、判断しにくいのかもしれない。

- イエスの行為として、最初の頃なら、激昂してということも、理解できる。ヨハネが、記す「17 弟子たちは、『あなたの家を思う熱心が、わたしを食いつくすであろう』と書いてあることを思い出した。」も、ある程度の興奮状態を表現しているとも見える。一方、最後のエルサレム入城のときは、イエスは、隠れて入るつもりは、まったくないことを示すためもあり、ふさわしいと考えた、子ろばに乗って入ったのであろうが、イエスの行為は「いつものように」と、ふつうなのだろう。神殿を壊したらも、このころに言うのは、預言としては、早いように思うが、イエスの中では、神殿についての思い、自分という神殿、さまざまなものが、ここで結びついたのかもしれない。マルコでは、イザヤからの引用を中心として描いている。それは、正統にみえるので。マルコの不自然な記述を考え、それに、マタイや、ルカが、注をつけていることを考えると、当時も、不自然と考えたのだろう。それは、致し方ないことだったのだろう。ベタニヤや、エルサレム周辺のひとたちを危険にさらさないために。

4.67 11:12-14, 20-26 いちじくの木を呪う/枯れたいちじくの木の教訓

12 翌日、彼らがベタニヤから出かけてきたとき、イエスは空腹をおぼえられた。13 そして、葉の茂ったいちじくの木を遠くからごらんになって、その木に何かありはしないかと近寄られたが、葉のほかは何も見当らなかった。いちじくの季節でなかったからである。14 そこで、イエスはその木にむかって、「今から後いつまでも、おまえの実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。

20 朝はやく道をとおっていると、彼らは先のいちじくが根元から枯れているのを見た。21 そこで、ペテ
ロは思い出してイエスに言った、「先生、ごらんなさい。あなたがのろわれたいちじくが、枯れています」。
22 イエスは答えて言われた、「神を信じなさい。23 よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出し
て、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成
るであろう。24 そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じな
さい。そうすれば、そのとおりになるであろう。25 また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事が
あるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、
ゆるしてくださるであろう。26 〔もしゆるさないならば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあ
やまちを、ゆるしてくださらないであろう〕」。

4.67.1 マタイ 21:18-19, 20-22

18 朝はやく都に帰るとき、イエスは空腹をおぼえられた。19 そして、道のかたわらに一本のいちじくの
木があるのを見て、そこに行かれたが、ただ葉のほかは何も見当らなかった。そこでその木にむかって、
「今から後いつまでも、おまえには実がならないように」と言われた。すると、いちじくの木はたちまち枯
れた。

20 弟子たちはこれを見て、驚いて言った、「いちじくがどうして、こうすぐに枯れたのでしょう」。21 イ
エスは答えて言われた、「よく聞いておくがよい。もしあなたがたが信じて疑わないならば、このいちじ
くにあったようなことが、できるばかりでなく、この山にむかって、動き出して海の中にはいれと言って
も、そのとおりになるであろう。22 また、祈のとき、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」。

マルコによる福音書 11 章 12-14, 20-26 節福音書対照表

マルコによる福音書 11 章 12-26 節福音書対照表

4.67.2 問い

1. 背景を確認しましょう。どのようなときのことですか。(12)
2. イエスは、どのようなことをしますか。(13-14)
3. このいちじくは、どうなりますか。(20,21)
4. いちじくのことから、イエスは弟子たちにどのようなことを教えていますか。(22-24)
5. 祈りとゆるしにはどのような関係があるのでしょか。(25,(26))
6. あなたは、このいちじくの話から何を学びますか。

4.67.3 参照

- [バークレイ] 過越の季節は 4 月の半ばごろ、日陰の場所にあるいちじくの木は、3 月早々には葉をつけるだろうが、しかし、5 月の終わりか、6 月にならないと実をつけないものである。マルコは、いちじくの季節ではなかったと言っている。
- 旧約/新約聖書におけるいちじく
  - 創世記 3:7 すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。
  - 民数記 13:23 ついに彼らはエシコルの谷に行って、そこで一ふさのぶどうの枝を切り取り、これを棒をもって、ふたりでかつぎ、また、ざくろといちじくをも取った。
  - 民数記 20:3 どうしてあなたがたはわれわれをエジプトから上らせて、この悪い所に導き入れたのですか。ここには種をまく所もなく、いちじくもなく、ぶどうもなく、ざくろもなく、また飲む水もありません」。
  - 士師記 9:10,11 もろもろの木はまたいちじくの木に言った、『きてわたしたちの王になってください』。しかしいちじくの木は彼らに言った、『わたしはどうしてわたしの甘味と、わたしの良い果実とを捨てて行って、もろもろの木を治めることができましょう』。
  - サムエル記上 25:18 その時、アビガイルは急いでパン二百、ぶどう酒の皮袋二つ、調理した羊五頭、いり麦五セア、ほしぶどう百ふさ、ほしいちじくのかたまり二百を取って、ろばにのせ、
  - サムエル記上 30:12 また彼らはほしいちじくのかたまり一つと、ほしぶどう二ふさを彼に与えた。彼は食べて元気を回復した。彼は三日三夜、パンを食べず、水を飲んでいなかったからである。
  - 列王紀上 4:25 ソロモンの一生の間、ユダとイスラエルはダンからベエルシバに至るまで、安らかにおのおの自分たちのぶどうの木の下と、いちじくの木の下に住んだ。
  - 列王紀下 18:31 あなたがたはヒゼキヤの言葉を聞いてはならない。アッスリヤの王はこう仰せられる、『あなたがたはわたしと和解して、わたしに降服せよ。そうすればあなたがたはおのおの自分のぶどうの実を食べ、おのおの自分のいちじくの実を食べ、おのおの自分の井戸の水を飲むことができるであろう。
  - 列王紀下 20:7 そしてイザヤは言った、「干しいちじくのひとかたまりを持ってきて、それを腫物につけさせなさい。そうすれば直るでしょう」。（ヒゼキヤへのことば）
  - 歴代志上 12:40 また彼らに近い人々はイッサカル、ゼブルン、ナフタリなどの遠い所の者まで、ろば、らくだ、騾馬、牛などに食物を負わせて来た。すなわち麦粉の食物、干いちじく、干ぶどう、ぶどう酒、油、牛、羊などを多く携えて来た。これはイスラエルに喜びがあったからである。

- ネヘミヤ記 13:15 そのころわたしはユダのうちで安息日に酒ぶねを踏む者、麦束を持ってきて、ろばに負わす者、またぶどう酒、ぶどう、いちじくおよびさまざまの荷を安息日にエルサレムに運び入れる者を見たので、わたしは彼らが食物を売っていたその日に彼らを戒めた。
- 詩篇 78:47 神はひょうをもって彼らのぶどうの木を枯らし、／霜をもって彼らのいちじく桑の木を枯らされた。（出エジプト時のしるし）
- 詩篇 105:33 主は彼らのぶどうの木と、いちじくの木とを撃ち、／彼らの国のもろもろの木を折り砕かれた。（出エジプト時のしるし）
- 箴言 27:18 いちじくの木を守る者はその実を食べる、／主人を尊ぶ者は誉を得る。
- 雅歌 2:13 いちじくの木はその実を結び、／ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放つ。わが愛する者よ、わが麗しき者よ、／立って、出てきなさい。
- イザヤ書 28:4 肥えた谷のかしらにある／しぼみゆく花の美しい飾りは、／夏前に熟した初なりのいちじくのようだ。人がこれを見ると、取るやいなや、食べてしまう。
- イザヤ書 34:4 天の万象は衰え、／もろもろの天は巻物のように巻かれ、／その万象はぶどうの木から葉の落ちるように、／いちじくの木から葉の落ちるように落ちる。（国々への裁き）
- イザヤ書 36:16 あなたがたはヒゼキヤの言葉を聞いてはならない。アッスリヤの王はこう仰せられる、『あなたがたは、わたしと和ぼくして、わたしに降服せよ。そうすれば、あなたがたはめいめい自分のぶどうの実を食べ、めいめい自分のいちじくの実を食べ、めいめい自分の井戸の水を飲むことができる。
- イザヤ書 38:21 イザヤは言った、「干いちじくのひとかたまりを持ってこさせ、それを腫物につけなさい。そうすれば直るでしょう」。
- エレミヤ書 5:17 彼らはあなたが刈り入れた物と、／あなたの糧食とを食い尽し、／あなたのむすこ娘を食い尽し、／あなたの羊と牛を食い尽し、／あなたのぶどうの木といちじくの木を食い尽し、／またつるぎをもって、あなたが頼みとする／堅固な町々を滅ぼす」。
- エレミヤ書 8:13 主は言われる、わたしが集めようと思うとき、／ぶどうの木にぶどうはなく、／いちじくの木に、いちじくはなく、／葉さえ、しぼんでいる。わたしが彼らに与えたものも、／彼らを離れて、うせ去った」。
- エレミヤ書 24:1-8 バビロンの王ネブカデレザルがユダの王エホヤキムの子エコニヤおよびユダの君たちと工匠と鍛冶をエルサレムからバビロンに移して後、主はわたしにこの幻をお示しになった。見よ、主の宮の前に置かれているいちじくを盛った二つのかごがあった。2 その一つのかごには、はじめて熟したような非常に良いいちじくがあり、ほかのかごには非常に悪くて食べられないほどの悪いいちじくが入れてあった。3 主はわたしに、「エレミヤよ、何を見るか」と言われた。わたしは、「いちじくです。その良いいちじくは非常によく、悪いほうのいちじくは非常に悪くて、食べられません」

と答えた。4 主の言葉がまたわたしに臨んだ、5 「イスラエルの神、主はこう仰せられる、この所からカルデヤびとの地に追いやったユダの捕われ人を、わたしはこの良いいちじくのように顧みて恵もう。6 わたしは彼らに目をかけてこれを恵み、彼らをこの地に返し、彼らを建てて倒さず、植えて抜かない。7 わたしは彼らにわたしが主であることを知る心を与えよう。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らは一心にわたしのもとに帰ってくる。8 主はこう仰せられる、わたしはユダの王ゼデキヤとそのつかさたち、およびエルサレムの人の残ってこの地にいる者、ならびにエジプトの地に住んでいる者を、この悪くて食べられない悪いいちじくのようにしよう。

- エレミヤ書 29:17 『万軍の主はこう言われる、見よ、わたしは、つるぎと、ききんと、疫病を彼らに送り、彼らを悪くて食べられない腐ったいちじくのようにしてしまう。

- ホセア書 2:12 わたしはまた彼女が先に『これはわたしの恋人らが、／わたしに与えた報酬だ』と言った彼女の／ぶどうの木と、いちじくの木とを荒し、／これを林とし、／野の獣にこれを食わせる。

- ホセア書 9:10 わたしはイスラエルを荒野のぶどうのように見、／あなたがたの先祖たちを、／いちじくの木の初めに結んだ初なりのように見た。ところが彼らはバアル・ペオルへ行き、／身をバアルにゆだね、／彼らが愛した物と同じように憎むべき者となった。

- ヨエル書 1:12 ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、／ざくろ、やし、りんご、野のすべての木はしぼんだ。それゆえ楽しみは人の子らからかれうせた。

- ヨエル書 2:22 野のもろもろの獣よ、恐るな。荒野の牧草はもえいで、木はその実を結び、／いちじくの木とぶどうの木とは豊かに実る。

- アモス書 4:9 「わたしは立ち枯れと腐り穂とをもって／あなたがたを撃ち、／あなたがたの園と、ぶどう畑とを荒した。いちじくの木とオリブの木とは、いなごが食った。それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と／主は言われる。

- アモス書 7:14 アモスはアマジヤに答えた、「わたしは預言者でもなく、また預言者の子でもない。わたしは牧者である。わたしはいちじく桑の木を作る者である。

- ミカ書 4:4 彼らは皆そのぶどうの木の下に座し、／そのいちじくの木の下にいる。彼らを恐れさせる者はない。これは万軍の主がその口で語られたことである。

- ミカ書 7:1 わざわいなるかな、わたしは夏のくだものを集める時のように、／ぶどうの収穫の残りを集める時のようになった。食らうべきぶどうはなく、／わが心の好む初なりのいちじくもない。

- ナホム 3:12 あなたのとりでは皆／初なりの実をもつ、いちじくの木のようだ。これをゆすぶればその実は落ちて、／食べようとする者の口にはいる。

- ハバクク書 3:17 いちじくの木は花咲かず、／ぶどうの木は実らず、／オリブの木の産はむなしくなり、／田畑は食物を生ぜず、／おりには羊が絶え、／牛舎には牛がいなくなる。

  - ハガイ書 2:19 種はなお、納屋にあるか。ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリブの木もまだ実を結ばない。しかし、わたしはこの日から、あなたがたに恵みを与える」。
  - ゼカリヤ書 3:10 万軍の主は言われる、その日には、あなたがたはめいめいその隣り人を招いて、ぶどうの木の下、いちじくの木の下に座すのである」。
  - マタイによる福音書 7:16 あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があろうか。(ルカ 6:44 木はそれぞれ、その実でわかる。いばらからいちじくを取ることはないし、野ばらからぶどうを摘むこともない。)
  - ルカによる福音書 19:4 それでイエスを見るために、前の方に走って行って、いちじく桑の木に登った。そこを通られるところだったからである。
  - ヨハネによる福音書 1:48-50 ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて言われた、「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。49 ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。50 イエスは答えて言われた、「あなたが、いちじくの木の下にいるのを見たと、わたしが言ったので信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう」。
  - ヤコブの手紙 3:12 わたしの兄弟たちよ。いちじくの木がオリブの実を結び、ぶどうの木がいちじくの実を結ぶことができようか。塩水も、甘い水を出すことはできない。
  - ヨハネの黙示録 6:13 天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた。

- いちじくに関する他の記述（マルコ 13:28-32、マタイ 24:32-35、ルカ 21:29-33）28 いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。29 そのように、これらの事が起るのを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。30 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。31 天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。32 その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。
- ルカ 13:6-9 それから、この譬を語られた、「ある人が自分のぶどう園にいちじくの木を植えて置いたので、実を捜しにきたが見つからなかった。7 そこで園丁に言った、『わたしは三年間も実を求めて、このいちじくの木のところにきたのだが、いまだに見あたらない。その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか』。8 すると園丁は答えて言った、『ご主人様、ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから。9 それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください』」。
  - ルカのみのもの、またルカには、枯れたいちじくの話は含まれていない。
- イエスのが十字架に架かった日

- [Gemini-1.5-Pro] AD30 年説：この年は、福音書に記されている出来事と、当時の歴史的な出来事 (例：ピラトのユダヤ総督在任期間、カヤパの大祭司在任期間) との整合性が比較的高い。特に、ルカによる福音書 3 章 1 節では、ヨハネがバプテスマを始めたのが「ティベリウス皇帝の治世の 15 年」と記されており、これは AD28 年または 29 年に当たると考えられています。イエスはヨハネからバプテスマを受けた後、宣教を開始したとされているため、十字架刑が AD30 年頃であった可能性が出てきます。AD30 年の過越の祭りは、ユダヤ暦ニサンの月 15 日にあたり、グレゴリオ暦では 4 月 7 日 (金曜日) にあたります。
- [GPT-4o] ルカの福音書によれば、ヨハネの洗礼活動はティベリウス帝の治世 15 年目に始まったとされています（ルカ 3:1-3)。ティベリウス帝は AD 14 に即位したため、15 年目は AD 28-29 に該当します。イエスの公生涯がこの頃に始まったと考えられます。イエスの公生涯が約 3 年だったとすると、AD 28-29 に始まり、AD 30 に十字架に架けられたと計算されます。AD 30 の過越の祭りが金曜日に当たるため、イエスが金曜日に十字架に架けられたという伝統的な考えと一致します。
- 春分のあとの満月の日：紀元 28 年: 4 月 17 日、紀元 29 年: 4 月 6 日、紀元 30 年: 4 月 6 日、紀元 31 年: 4 月 25 日、紀元 32 年: 4 月 17 日紀元 33 年: 4 月 6 日（個人的には、紀元 30 年: 4 月 6 日が一番可能性が高いと考えてている。）

- とうごまや、いちじくが、虫などに食われて、急に枯れることはあるのでしょうか。
  - [Gemini-1.5-Pro] はい、トウゴマもイチジクも、虫害によって急に枯れることがあります。

    トウゴマの場合:

    * 主な害虫: ワタノメイガ、ハスモンヨトウ、フタテンチビヨコバイなど
    * 被害状況: これらの害虫は、葉や茎を食害したり、吸汁したりすることで、植物を弱らせます。大量発生すると、短期間で枯死することもあります。

    イチジクの場合:

    * 主な害虫: カミキリムシ類（ゴマダラカミキリ、キボシカミキリなど)、クワカミキリ、イチジクヒトリモドキなど
    * 被害状況: カミキリムシ類の幼虫は、幹や枝に侵入して内部を食害するため、樹勢が著しく衰え、枯死に至ることもあります。イチジクヒトリモドキは、葉を大量に食害し、樹勢を弱らせます。

- 「神を信じなさい」「心に疑わないで信じる」
  - 22 . . 23 . ,
    , .
  - 神を信じるとは、信じるとは、一体どういうことだろう。

- 「ゆるし」　: i. to send away, ii. to permit, allow, not to hinder, to give up a thing to a person, iii. to leave, go way from one = 「いいよ」「いいことにしてあげなさい」ぐらいな感じ。
  - 24　,　,　,　. 25K　,　,　.
  - 　: The KJV translates Strong's G863 in the following manner: leave (52x), forgive (47x), suffer (14x), let (8x), forsake (6x), let alone (6x), miscellaneous (13x)
    * Mark 1:18, 20, 31, 34, 2:5, 7, 9, 10, 11, 3:28, 4:12, 36, 6:19, 37, 7:8, 12, 27, 8:13, 10:14, 29, 11:6, 16, 25, 12:12, 19, 20, 22, 13:2, 34, 14:6, 50, 15:36, 37
  - 　: i. to fall beside or near something, ii. a lapse or deviation from truth and uprightness = 「ちょっとそれてしまう」あやまちまで強くない。

4.67.4　記録

- 日時：2024 年 9 月 26 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.67.5　問いについて

1. 背景を確認しましょう。どのようなときのことですか。(12)
   - 12 翌日、彼らがベタニヤから出かけてきたとき、イエスは空腹をおぼえられた。
   - [DQ] 朝食は摂らなかったのでしょうか。弟子たちは空腹を覚えなかったのでしょうか。
   - [A] 翌日とは、エルサレム入城の次の日である。入城のあと、「11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、すべてのものを見まわった後、もはや時もおそくなっていたので、十二弟子と共にベタニヤに出て行かれた。」とあり、この節につながっている。ベタニヤは、エルサレムから 3km 程度とされているので、当時としては、それほど、遠い距離ではなかったろう。1 節に登場する、ベテファゲは、いちじくの家または、未熟ないちじくの家を意味するので、このあたりには、いちじくの木が何本も生えていたのだろう。
   - [A] マタイでは、宮きよめを先に記し、そのあとで、「21:18 朝はやく都に帰るとき、イエスは空腹をおぼえられた。」と始めている。朝早くなのだろう。朝食はとらなかったと思われる。ただ、イエスだけが、空腹を覚えたとの記述は、少し奇異に感じられる。弟子たちは、空腹を覚えなかったのだろうか。
   - [Q] 朝だと思われるが、この日は、昼食はどうするつもりだったのでしょうか。ほしいちじくや、ほしぶどうなど、何ももっていなかったのでしょうか。弟子たちはどうするつもりだったのでしょうか。

- [A] いろいろと不自然。おそらく、空腹は、それほど重要ではない。よくは、わからないが。
- このあとに、挟まる形で、宮きよめの記事がある。時系列が、このままであるとすると、この日は、イエスは、かなり癇癪持ち、ご機嫌ななめであったように見える。十分な理解をしたかどうかは別として、このエピソードが語られた時、イエスがご機嫌ななめとして、この記事を挿入し、宮きよめの記事を入れ、あとから、弟子たちを教えられた記事を入れたのかもしれない。不自然に感じされる記事ではあるが、意図的にそうしたのかもしれない。
- [参考] 空腹について（　　：i. to hunger, be hungry a. to suffer want, b. to be needy, ii. metaph. to crave ardently, to seek with eager desire）
  - マルコ 8:3 もし、彼らを空腹のまま家に帰らせるなら、途中で弱り切ってしまうであろう。それに、なかには遠くからきている者もある」。（マタイ 15:32）
  - マタイ 4:2 そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。（ルカ 4:2）
  - マタイ 5:6 義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、／彼らは飽き足りるようになるであろう。
  - マタイ 12:1 そのころ、ある安息日に、イエスは麦畑の中を通られた。すると弟子たちは、空腹であったので、穂を摘んで食べはじめた。（マルコ 2:23-28 においても空腹が想定されている）
  - マタイ 25:35,37,42,44 わたしが空腹のとき
  - ルカ 1:53 飢えている者を良いもので飽かせ、／富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます。（聖書協会共同訳では何も持たせずに追い払い）

2. イエスは、どのようなことをしますか。（13-14）

- 13 そして、葉の茂ったいちじくの木を遠くからごらんになって、その木に何かありはしないかと近寄られたが、葉のほかは何も見当らなかった。いちじくの季節でなかったからである。14 そこで、イエスはその木にむかって、「今から後いつまでも、おまえの実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。
- [DQ] いちじくとはどのような木ですか。
  - [A] 日本国語大辞典（精選版）いちじく【無花果・映日果】〖名〗

    クワ科の落葉小高木。小アジア原産で江戸初期に渡来し、各地で栽植される。高さ二〜五メートル。樹皮は褐色。多く分枝し、幹、枝は湾曲する。葉は掌状に三〜五裂し、裏面に細毛をもつ。春から夏に倒卵形で肉厚の花嚢をつける。花嚢は中に無数の白い小さな花をもち、暗紫色か白緑色に熟し、食用となる。乾した茎、葉、実は駆虫、緩下剤、下痢止めになり、液汁は疣いぼ、うおのめなどに効くという。とうがき。ほろろいし。《季・秋》

    植物「いぬびわ（犬枇杷）」の異名。〔大和本草（1709）〕

- 過越の季節は 4 月の半ばごろ、日陰の場所にあるいちじくの木は、3 月早々には葉をつけるが、5 月の終わりか、6 月にならないと実をつけない。イエスが十字架に架けられる年として、有力とされる AD30 年説を用いると、過越の日は、4 月 7 日（金）、もし、この記事が月曜日であるなら、4 月 3 日（月）となり、おそらく、いちじくで実をならしているものは非常に少ないと思われる。
- 6 月ごろ初生りのいちじく、8,9 月に秋いちじく、年に二三回収穫された。

- [DQ] 実がないのは、いちじくの季節ではなかったからと書いてありますが、イエスは、それを知らなかったのでしょうか。
  - [Q] マタイには、この記述がありません（省略してあります）が、それは、なぜだと思いますか。
  - [参照] マルコ 13:28-32、28 いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。（マタイ 24:32-35、ルカ 21:29-33）
  - ここには、実がなる時期については書かれていないし、このいちじくを呪ったときに弟子たちに教えてもらったという可能性を否定はできないが、ここでは「あなたがたがそう言っている」という言い方はせず、一般的に、このような記述があるということは、イエスは、十分知識を持っていたのだろう。いちじくは、パレスチナでは一般的な植物だから。
- [DQ] イエスは実のないいちじくの木に対してどのように言われますか。
  - [A] 「今から後いつまでも、おまえの実を食べる者がないように」
    - マタイは「そこでその木にむかって、「今から後いつまでも、おまえには実がならないように」と言われた。すると、いちじくの木はたちまち枯れた。」
  - かなり厳しい言葉である。イエスは、どのような気持ちで、このようなことを言ったのだろうか。宮きよめの前に、このようなことを記載した可能性もあるが、ほかにもあるのだろう。あとで、祈りのことを語っていることからして、もう少し、他の意味もあると思われる。何らかの実がならないことへの失望であろうか。自分が十分、使命を果たせなかったとの意識が入っているか。
  - 悪魔の試みのときも含め、自分のためには、奇跡的な方法を使われないイエスの呪い、魔術的なとも言える力によって、いちじくが枯れてしまったように見える。（マルコでは翌日、マタイではたちまち枯れている。）
- [DQ] 役に立たないものは滅ぼされるということでしょうか。
  - そのようにも取れる。これに関しては、ルカ 13:6-9 参照。
  - 空腹のときに食べさせるというのは、素晴らしいこと。（マタイ 25）

3. このいちじくは、どうなりますか。（20,21）

- 20 朝はやく道をとおっていると、彼らは先のいちじくが根元から枯れているのを見た。21 そこで、ペテロは思い出してイエスに言った、「先生、ごらんなさい。あなたがのろわれたいちじくが、枯れています」。
- [DQ] ペテロはなぜこのように言ったのでしょうか。
  - [A] 驚いたから？イエスの行動の意味をいつも知りたいから？
- 朝早くとあるが、翌日とは書かれていない。ペテロは、まず、思い出してと言い、イエスはいちじくを呪ったと認識している。根本から枯れているというのは、「今から後いつまでも、おまえの実を食べる者がないように」の、完全な実現。
- [DQ] 具体的には、何が起こったのでしょうか。
- [A] 一般的には、「葉の茂ったいちじくの木」が、急に枯れるというのは、現実的ではない。しかし、この会話から、それが奇跡だとは、言っていないようである。
  - 虫害は可能性あり：
    * 主な害虫：カミキリムシ類（ゴマダラカミキリ、キボシカミキリなど）、クワカミキリ、イチジクヒトリモドキなど
    * カミキリムシ類の幼虫は、幹や枝に侵入して内部を食害するため、樹勢が著しく衰え、枯死に至ることもあります。イチジクヒトリモドキは、葉を大量に食害し、樹勢を弱らせます。
  - 詩篇 78:47 神はひょうをもって彼らのぶどうの木を枯らし、／霜をもって彼らのいちじく桑の木を枯らされた。
  - 詩篇 105:33 主は彼らのぶどうの木と、いちじくの木とを撃ち、／彼らの国のもろもろの木を折り砕かれた。
  - アモス書 4:9 「わたしは立ち枯れと腐り穂とをもって／あなたがたを撃ち、／あなたがたの園と、ぶどう畑とを荒した。いちじくの木とオリブの木とは、いなごが食った。それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と／主は言われる。

4. いちじくのことから、イエスは弟子たちにどのようなことを教えていますか。（22-24）

- 22 イエスは答えて言われた、「神を信じなさい。23 よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう。24 そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう。
- [A]「心に疑わないで神を信じる」ことを、まずは、説いている。そして、「祈り求めることは、すでにかなえられたと信じる」ことでもある。しかし、このことは、神をどのような方と捉えるかによっては、課題も生じる。

- 弟子たちを教える、通常モードに戻っている。特殊なことから、重要なこと、そして、一番伝えたいことへと深くなっていくのは、イエスの教えかたの特徴のようにも見える。
- [DQ] 山に『立ち上がって、海に飛び込め』といえば本当に、そのとおりになるのでしょうか。
  - [A] 祈りの力というより、神の力を示しているのだろう。だから、「神を信じなさい」と言っている。
  - 「山」は困難の象徴か、また、オリーブ山からは、死海を望むことができたと言われている。’
- [DQ] すでに得られたと信じればよいのでしょうか。
  - [A] 信じることなしには、かなえられないのだろう。しかし、何を信じるかがたいせつ。神様がそのことをお望みなら、実現するのだろう。
  - おそらく、そう単純ではない。神を信じるとは、神様に信頼することであり、それは、神様がどのような方かをよく知っていることとも関係していると思われる。イエスにとっては、日々の交わりから、明らかなのだろうが、一般的にはそうではない。

5. 祈りとゆるしにはどのような関係があるのでしょか。(25,(26))

- 25 また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるしてくださるであろう。26 〔もしゆるさないならば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるしてくださらないであろう〕」。
- [DQ] なぜ、ゆるしのことが出てくるのでしょうか。
- [A] わたし（イエス）のようなことをしてはいけないよと言っているのだろうか。
- [A] 最初の、いちじくのことにもどり、勝手な解釈をしてはいけないことを戒めているのだろう。また、神を信じることとは、神様との関係を確認すること、神様に赦していただいている存在であることの認識だろうか。
- 「ゆるし」とひらがなで書かれているが、非常に一般的な、アフィエーミ「いいことにしてあげなさい」ぐらいの意味と捉えたほうがよいのかもしれない。「あやまち」パラプトーマも「ちょっとそれてしまう」という軽い意味にもとれる。ずれが本質と理解することもできないことはないが。日常的な課題を問うているようにも見える。
- [参照] 立って祈る
  - ネヘミヤ記 9:4 その時エシュア、バニ、カデミエル、シバニヤ、ブンニ、セレビヤ、バニ、ケナニらはレビびとの台の上に立ち、大声をあげて、その神、主に呼ばわった。
  - エレミヤ書 18:20 悪をもって善に報いるべきでしょうか。しかもなお彼らはわたしの命を取ろうとして／穴を掘りました。わたしがあなたの前に立って、／彼らのことを良く言い、／あなたの

憤りを止めようとしたのを／覚えてください。

  - マタイ 6:5 また祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。
  - ルカ 18:11-14 パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。12 わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようともしないで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしください』と。14 あなたがたに言っておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。

- [参照] マタイ 6:12 わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、／わたしたちの負債をもおゆるしください。

6. あなたは、このいちじくの話から何を学びますか。

- 「宮きよめ」の挿入に問題があったのかもしれない。それが、ペテロなのかどうかは、不明だが。すくなくとも、間違った理解をしないように、最後に、神様との関係に戻っている。
- 実りのない、イスラエルに対する神のさばきとする解釈もある。そのようなイメージがイエスにもあったかもしれない。
- このいちじくを枯らす記事は、不自然に感じる。宮きよめと連動し、ユダヤや、エルサレム付近の人々を守るために、そこでの出来事を書かないために、起こっている不自然さをぬぐうためであるかもしれない。いずれにしても、最後には、祈りと、神への信頼と、ゆるしというイエスの本来的な教えにつなげている。

4.67.6 メモ

- ルカ 13:6-9 は、いちじくの話に関し、実がならないと、すぐイエスに呪われて、根こそぎ、枯れてしまう、すなわち、滅びてしまうのかという問いにこたえるための、物語であるように思われる。ルカが見つけてきたのか。イエスの性質から、このようなことも言われたとしているのか、祈りの教えから、こちらに導かれたのか。悔い改めなければ滅びるというメッセージのあとに置かれており、それは、自然だとも言える。
- 個人的には、この地域の信仰者を守るため、ユダヤやエルサレムでの活動を書かなかったしわ寄せが背景にあったので、宮きよめの直前に連動させてここに置かれているのではないかと思うが、実際に、このようなこともあったのかもしれない。すなわち、イエスが空腹のゆえに、不機嫌になり、それがゆえに、乱暴なこともしてしまう。イエスは、「食をむさぼる者、大酒を飲む者（マタイ 11:18,19、ルカ 7:33,34）」だとも言われており、あまり、聖人君主にしないほうが良いのかもしれない。それを、弟子たちは眺めている。同時に、そうであっても、不機嫌ではおわらずに、かならず、大切なことを教えてくださるのが、イ

エスだったのだろう。最後の部分は、罪の赦しのように大げさに考えず、身近なことと結びつけたほうが良いかもしれない。神様との信頼関係こそが大切なのだろう。

- 祈りについて、または、願いの実現について、簡単には、語れない。ここでは、最初に、「神を信じなさい」とはじめ、「よく聞いておくがよい。」という重要なことを語るときの、慣用句ではじめ、まずは、神に信頼することから、「だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう。」と続ける。おそらく、眼の前に、オリーブ山があり、死海が見えているかどうかは別として、その光景も想像できる場所だったのだろう。つづけて「24 そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう。」というが、危険も伴う。神様への信頼、そして、神様が何を望まれるかが理解できていなければ、利己的に、祈りを使ってしまう可能性もあるからである。ここで、「25 また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるしてくださるであろう。」と日常に引き戻すように、ゆるしについて語っている。ここでは、恨み事とあるので、それはなにかと考えてしまうが、「だれかに対して何らかのわだかまり (anything you have against someone)」ぐらいの意味で、それを、許容（　　）しなさいとしているように見える。つづけて「あなたがたのあやまち（　　）」とあるものも、英語では、trespasses とも訳されている。それが、神様のご性質なのだろう。常に、小さな過誤も、ゆるしてくださっているということなのだろう。

4.68　11:27-33 権威についての問答

27 彼らはまたエルサレムにきた。そして、イエスが宮の内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、みもとにきて言った、28 「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。29 そこで、イエスは彼らに言われた、「一つだけ尋ねよう。それに答えてほしい。そうしたら、何の権威によって、わたしがこれらの事をするのか、あなたがたに言おう。30 ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。31 すると、彼らは互に論じて言った、「もし天からだと言えば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。32 しかし、人からだと言えば……」。彼らは群衆を恐れていた。人々が皆、ヨハネを預言者だとほんとうに思っていたからである。33 それで彼らは「わたしたちにはわかりません」と答えた。するとイエスは言われた、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい」。

4.68.1　マタイ 21:23-27

23 イエスが宮にはいられたとき、祭司長たちや民の長老たちが、その教えておられる所にきて言った、「何の権威によって、これらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。24 そこでイエスは彼らに言われた、「わたしも一つだけ尋ねよう。あなたがたがそれに答えてくれたなら、わたしも、何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言おう。25 ヨハネのバプテスマはどこからきたのであったか。天からであったか、人からであったか」。すると、彼らは互に論じて言った、「もし天から

だと言えば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。26 しかし、もし人からだと言えば、群衆が恐ろしい。人々がみなヨハネを預言者と思っているのだから」。27 そこで彼らは、「わたしたちにはわかりません」と答えた。すると、イエスが言われた、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい。

4.68.2 ルカ 20:1-8

1 ある日、イエスが宮で人々に教え、福音を宣べておられると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと共に近寄ってきて、2 イエスに言った、「何の権威によってこれらの事をするのですか。そうする権威をあなたに与えたのはだれですか、わたしたちに言ってください」。3 そこで、イエスは答えて言われた、「わたしも、ひと言たずねよう。それに答えてほしい。4 ヨハネのバプテスマは、天からであったか、人からであったか」。5 彼らは互に論じて言った、「もし天からだと言えば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。6 しかし、もし人からだと言えば、民衆はみな、ヨハネを預言者だと信じているから、わたしたちを石で打つだろう」。7 それで彼らは「どこからか、知りません」と答えた。8 イエスはこれに対して言われた、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい」。

マルコによる福音書 11 章 27-33 節福音書対照表

4.68.3 問い

1. 背景を復習しましょう。これまで、エルサレムの宮ではどのようなことがありましたか。(15-19)
2. 祭司長、律法学者、長老たちは、なぜこのような質問をするのでしょうか。(27,28)
3. イエスはどのように答えますか。(29,30)
4. 祭司長、律法学者、長老たちは、どのようなことを考えますか。(31-33)
5. 祭司長、律法学者、長老たちは、なぜバプテスマのヨハネを受け入れなかったのでしょうか。
6. イエスがこの人たちに問うていることは何なのでしょうか。

4.68.4 参照

- 受難週のエルサレムの地図 [The Passion Week in Jerusalem]
- ヘロデ神殿　[Herod's Temple]
  - The Temple at Jerusalem in Jesus' Day, Clyde W. Votaw [pdf]
  - 2 つの回廊、ソロモンの回廊（東）と王の回廊（南）コリント式の約 12 メートルの高さの円柱で、王の回廊のものは、直径二メートル、162 本の柱（バークレイ）

- [参考] ストア学派（ゼノン BC343-262）は、ストア・ポイキレ（Π (Stoa Poikile) Painted Portico 柱廊）を歩きながら教えた。
- [正統なラビ] 最低三人のラビの前で、恩師のラビによって按手される必要がある。（新聖書注解：マタイ：増田誉雄）
- 議員・役人たちは、イエスをどう見ていたか。
  - [参考] 15:43 アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。
  - [参考] ヨハネ 7:25,26 さて、エルサレムのある人たちが言った、「この人は人々が殺そうと思っている者ではないか。26 見よ、彼は公然と語っているのに、人々はこれに対して何も言わない。役人たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知っているのではなかろうか。
  - [参考] ヨハネ 7:45-51 さて、下役どもが祭司長たちやパリサイ人たちのところに帰ってきたので、彼らはその下役どもに言った、「なぜ、あの人を連れてこなかったのか」。46 下役どもは答えた、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」。47 パリサイ人たちが彼らに答えた、「あなたがたまでが、だまされているのではないか。48 役人たちやパリサイ人たちの中で、ひとりでも彼を信じた者があっただろうか。49 律法をわきまえないこの群衆は、のろわれている」。50 彼らの中のひとりで、以前にイエスに会いにきたことのあるニコデモが、彼らに言った、51 「わたしたちの律法によれば、まずその人の言い分を聞き、その人のしたことを知った上でなければ、さばくことをしないのではないか」。52 彼らは答えて言った、「あなたもガリラヤ出なのか。よく調べてみなさい、ガリラヤからは預言者が出るものではないことが、わかるだろう」。
  - [参考] ヨハネ 12:42,43 しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。43 彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。
    - [参考] ヨハネ 18:15-18 シモン・ペテロともうひとりの弟子とが、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いであったので、イエスと一緒に大祭司の中庭にはいった。16 しかし、ペテロは外で戸口に立っていた。すると大祭司の知り合いであるその弟子が、外に出て行って門番の女に話し、ペテロを内に入れてやった。17 すると、この門番の女がペテロに言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではありませんか」。ペテロは「いや、そうではない」と答えた。18 僕や下役どもは、寒い時であったので、炭火をおこし、そこに立ってあたっていた。ペテロもまた彼らに交じり、立ってあたっていた。

4.68.5 記録

- 日時：2024 年 10 月 3 日午後 7 時半〜9 時半

- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）1 名

4.68.6 問いについて

1. 背景を復習しましょう。これまで、エルサレムの宮ではどのようなことがありましたか。（15-19）
    - マルコ：エルサレム入城後は、中を見て回り、宮きよめのみ。
        - （入城）「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、すべてのものを見まわった後、もはや時もおそくなっていたので、十二弟子と共にベタニヤに出て行かれた。
        - （宮きよめ）11:15-17 15 それから、彼らはエルサレムにきた。イエスは宮に入り、宮の庭で売り買いしていた人々を追い出しはじめ、両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえし、16 また器ものを持って宮の庭を通り抜けるのをお許しにならなかった。17 そして、彼らに教えて言われた、「『わたしの家は、すべての国民の祈の家ととなえらるべきである』と書いてあるではないか。それだのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしてしまった」
            * 追い出し始めの、「はじめ」が気になる。完璧に、なくしたのではないのかもしれない。
            * いちじくの挿入記事でも「いのり」について教えている。さらに赦しについての述べられている。主の御心を聞くことこそが、たいせつだと言っているのかもしれない。
        - 27 彼らはまたエルサレムにきた。そして、イエスが宮の内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、みもとにきて言った、
            * 教えていたことに対して問われているのかもしれない。正式な教師ではない。ガリラヤでは巡回教師。預言者であれば、おそらく、問題はないだろうが、それは、サンヘドリンとはぶつかるであろう。
    - マタイ 21（直前には、エルサレム入城、いちじくの木を呪う）:「ダビデの子にホサナ」との言葉をもってエルサレム入城、直後に、宮きよめ。以下が追加されている。
        - 14 そのとき宮の庭で、盲人や足なえがみもとにきたので、彼らをおいやしになった。15 しかし、祭司長、律法学者たちは、イエスがなされた不思議なわざを見、また宮の庭で「ダビデの子に、ホサナ」と叫んでいる子供たちを見て立腹し、16 イエスに言った、「あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか」。イエスは彼らに言われた、「そうだ、聞いている。あなたがたは『幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた』とあるのを読んだことがないのか」。
    - ルカ 19（直前には、エルサレム入城、都の陥落・崩壊、宮きよめ、その直後が権威についての問答）:
        - 38 「主の御名によってきたる王に、／祝福あれ。天には平和、／いと高きところには栄光あれ」。

39 ところが、群衆の中にいたあるパリサイ人たちがイエスに言った、「先生、あなたの弟子たちをおしかり下さい」。40 答えて言われた、「あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」。との声とともに、エルサレム入城

  - 47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長、律法学者また民衆の重立った者たちはイエスを殺そうと思っていたが、48 民衆がみな熱心にイエスに耳を傾けていたので、手のくだしようがなかった。

- ヨハネ 12（参考：エルサレム入城、ギリシャ人、イエスに会いに来る、人の子は上げられる、イエスを信じない者たち、イエスの言葉による裁き、弟子の足を洗うにつながる。月曜日から木曜日までほとんど記されていない。）

2. 祭司長、律法学者、長老たちは、なぜこのような質問をするのでしょうか。(27,28)

- 27 彼らはまたエルサレムにきた。そして、イエスが宮の内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、みもとにきて言った、28 「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。

- [DQ] 「祭司長、律法学者、長老たち」とはどのような人たちですか。

  - (: chief priest, high priest) (: a clerk, scribe, esp.a public servant, secretary, recorder, whose office and influence differed in different states, in the Bible, a man learned in the Mosaic law and in the sacred writings, an interpreter, teacher.) (: i. elder, of age, ii. a term of rank or office, among the Jews, members of the great council or Sanhedrin (because in early times the rulers of the people, judges, etc., were selected from elderly men))

  - いずれも複数で書かれている。祭司長は退任しても、祭司長と言われていたようだが、それでも、異常に感じる。集合的に、最高議会をあらわし、そこから、派遣された人たちだろうか。

  - 書記、ラビ、長老たち、サンヘドリン（最高議会）からの代理人？

- [DQ] イエスが何をしているときに、この人たちは質問をしますか。

  - [A] 「イエスが宮の内を歩いておられると」とあるが、これは、おそらく、教えておられた時なのだろう。（マタイ 21:23a, ルカ 20:1）スコラ（柱廊）

    * マタイ 21:23 イエスが宮にはいられたとき、祭司長たちや民の長老たちが、その教えておられる所にきて言った、

    * ルカ 20:1 1 ある日、イエスが宮で人々に教え、福音を宣べておられると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと共に近寄ってきて、

    * 歩きながら教えるのが通常。

- [DQ] 「これらの事」とは何を指しているのでしょうか。
  - [A] 宮きよめをさすと考えるのが自然。しかし、この時、どのような状況であったかは書かれておらず不明。
    * 15 それから、彼らはエルサレムにきた。イエスは宮に入り、宮の庭で売り買いしていた人々を追い出しはじめ、両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえし、16 また器ものを持って宮の庭を通り抜けるのをお許しにならなかった。
  - マルコでは、宮きよめ以外何もしてない。弟子たちを引き連れて歩き回っているのは目立ったかもしれないが。
- [DQ] どのような答えが想定されているのでしょうか。
  - [A] 神殿は祈りをする場所で売り買いはよくない。　自分の判断（人から）　だれがその権威を授けたか　神は現状を望んでおられない（神（天）から）　神の神殿での騒ぎを神は喜ばれるのか。

3. イエスはどのように答えますか。(29,30)

- 29 そこで、イエスは彼らに言われた、「一つだけ尋ねよう。それに答えてほしい。そうしたら、何の権威によって、わたしがこれらの事をするのか、あなたがたに言おう。30 ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。
- [A] ヨハネのバプテスマは天からか、人からか？
- [DQ] バプテスマのヨハネについて知っていることを上げてみましょう。活動、教え、その後。マルコから。
  - マルコ 1:1-8 洗礼者ヨハネ、悔い改めの洗礼を述べ伝える。(マタイ 3:1-12, ルカ 3:1-9, 15-17, ヨハネ 1:19-28)
    * 1:4 罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。
    * 1:7 わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。
    * 1:6 このヨハネは、らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物としていた。(これは何を意味しているのでしょう）もともとは、祭司の家系？(ルカ 1)
  - マルコ 1:9-11 イエス、洗礼を受ける（マタイ 3:13-17, ルカ 3:21-22）
  - マルコ 1:14,15 ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、15 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。(マタイ 4:12-17, ルカ 4:14-15)
  - マルコ 2:18-22 断食についての問答（マタイ 9:14-17, ルカ 5:33-39）

    * 2:18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。

  - マルコ 6:14-29 洗礼者ヨハネ、殺される。（マタイ 14:1-12, ルカ 9:7-9）

    * 6:14-16 さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。ある人々は「バプテスマのヨハネが、死人の中からよみがえってきたのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」と言い、15 他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者のような預言者だ」と言った。16 ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」と言った。

  - マルコ 8:28 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。（マタイ 16:14, ルカ 9:19）

  - マルコ 11:30-32 ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。31 すると、彼らは互に論じて言った、「もし天からだと言えば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。32 しかし、人からだと言えば……」。彼らは群衆を恐れていた。人々が皆、ヨハネを預言者だとほんとうに思っていたからである。（マタイ 21:25,26, ルカ 20:4-6）

- [DQ] なぜ、イエスは、問いに答えないのでしょう。

  - [A] マタイ 7:6 聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう。（これが理由だろうか）

  - [A] 良心に問いかけている？

- [DQ] 答えても良かったのではないでしょうか。

  - [参考] 使徒 4:7 そして、そのまん中に使徒たちを立たせて尋問した、「あなたがたは、いったい、なんの権威、また、だれの名によって、このことをしたのか」。4:10 あなたがたご一同も、またイスラエルの人々全体も、知っていてもらいたい。この人が元気になってみんなの前に立っているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。

- [DQ] 「ヨハネのバプテスマ」について、聞いていますが、「バプテスマのヨハネ」とは、どう違うのでしょうか。

  - [A] 人についてではなく、もう少し本質的なことに目を向けるためか。

4. 祭司長、律法学者、長老たちは、どのようなことを考えますか。（31-33）

- 31 すると、彼らは互に論じて言った、「もし天からだと言えば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。32 しかし、人からだと言えば……」。彼らは群衆を恐れていた。人々が皆、ヨハ

ネを預言者だとほんとうに思っていたからである。33 それで彼らは「わたしたちにはわかりません」と答えた。するとイエスは言われた、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい」。

- [A] 天から：なぜ彼（が自分を指し示していること）を信じなかったのか。人から：群衆は、天から、神から遣わされた預言者だと信じていた。
- [DQ] このひとたちは、結局どうしますか。
  - [A] 「わたしたちにはわかりません」
  - [Rep] イエス：「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい」
- [DQ] 問いの本質は何だったのでしょうか。
  - [A] 真理（神の御心をもとめて）に向き合うかどうか。表面的なことではなく、本質を問うている。
- [DQ] この人たちは、何を知りたかったのでしょうか。
  - [A] 言葉尻を捉えるだけで、なにかを知りたいわけではなかったのだろうか。
  - [A] 求める気持ちよりも、排除の根拠が欲しかったのだろう。真理を探求することはしない。
- [DQ] 議員たちは、イエスについてどう見ていたのだろうか。一致した見解を持っていたのだろうか。
  - [参考] 15:43 アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。
  - [参考] ヨハネ 7:1 そののち、イエスはガリラヤを巡回しておられた。ユダヤ人たちが自分を殺そうとしていたので、ユダヤを巡回しようとはされなかった。
  - [参考] ヨハネ 7:25-27, 32, 40-52
  - [参考] ヨハネ 12:42,43 しかし、役人（　　：a ruler, commander, chief, leader）たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。43 彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。

5. 祭司長、律法学者、長老たちは、なぜバプテスマのヨハネを受け入れなかったのでしょうか。
   - [A] 大きな問題がないと考えていたときに、悔い改めを説いていたからか。
   - [A] 本質的な問い、神からのメッセージとして悔い改めるかどうか。その問いに向き合えない。
   - 自分たちは、神の御心、真理を知っている。少なくとも、群衆とは比較にならない知識をもっている。
   - 真理を探求するのではなく、自分たちがもっている知識で判断しようとする。
   - 自分たちの優越によって、築いてきたものを手放せない。したがって、悔い改めには至れない。

6. イエスがこの人たちに問うていることは何なのでしょうか。
    - [A] 神の御心（真理）を求めて、それに従う生き方。祈り。
    - [A] 自分の弱さを知り、悔い改めて生きる生き方。
    - [A] 悔い改めて、神の国（神の支配）の中に身を委ねる生き方。
    - わたしたちにも問うている。単なるレトリックとして、この問いを受け取ってはいけない。
    - [DQ] ヨハネのバプてスマは、人からであったか、天からであったか。
        - [A] ヨハネの問いとまずは、向き合うこと。それは、我々にとって何を意味しているのだろうか。
    - [DQ] イエスはこの問いについてはどう考えていたのでしょうか。
        - [A] 結局のところ、一人ひとりの信仰告白、真理との向き合い方が問われている。

4.68.7 メモ

- エルサレム入城から、マルコによる福音著の筆致が変化しているように見える。今回の箇所などは、3 つの福音書が非常に似通っている。議論にしっかり向き合っている。いままでの、行動中心、Jesus in Action の記述とは異なるように見える。軽々に判断はできないが、マルコのもとにすでに、共通の伝承があったのかもしれない。
- 何の権威によってこれらのことをするのか。とは、何を聞いているのだろう。答えることが難しい問いに、問いで返すという技術として捉えてはいけないのだろう。文脈からすると、宮きよめ、神殿での礼拝の改革のように見える。本当にそうなのだろうか。もう少し、本質的な問いをしているのかもしれない。なぜ、教えるのか。なぜ、いやしなどの行為をおこなうのか。
- この前の、宮きよめも、いちじくも、祈りについて教えている。この権威についての箇所も、結局、謙虚に、神様のみこころを求めることを教えているのか。祭司長、律法学者、長老たちには、まさに、御心に聴く部分が欠けていたと言っているのだろうか。おそらく、わたしたちも同じだろう。すくなくとも、イエスにとっては、神様との交わりのなかで、神様の御心をもとめる日常がたいせつだったのではと思う。
- 「互いに論じて言った」とあるが、そう簡単に、答えが出なかったのだろうか。正直な思いと、立場上のことなど、さまざまに入り混じっていたのだろうか。

4.69 12:1-12 「ぶどう園の農夫」のたとえ

1 そこでイエスは譬で彼らに語り出された、「ある人がぶどう園を造り、垣をめぐらし、また酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。2 季節になったので、農夫たちのところへ、ひとりの僕を送って、ぶどう園の収穫の分け前を取り立てさせようとした。3 すると、彼らはその

僕をつかまえて、袋だだきにし、から手で帰らせた。4 また他の僕を送ったが、その頭をなぐって侮辱した。5 そこでまた他の者を送ったが、今度はそれを殺してしまった。そのほか、なお大ぜいの者を送ったが、彼らを打ったり、殺したりした。6 ここに、もうひとりの者がいた。それは彼の愛子であった。自分の子は敬ってくれるだろうと思って、最後に彼をつかわした。7 すると、農夫たちは『あれはあと取りだ。さあ、これを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と話し合い、8 彼をつかまえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。9 このぶどう園の主人は、どうするだろうか。彼は出てきて、農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう。10 あなたがたは、この聖書の句を読んだことがないのか。『家造りらの捨てた石が／隅のかしら石になった。11 これは主がなされたことで、／わたしたちの目には不思議に見える』」。12 彼らはいまの譬が、自分たちに当てて語られたことを悟ったので、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。そしてイエスをそこに残して立ち去った。

4.69.1 マタイ 21:33-46

33 もう一つの譬を聞きなさい。ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。34 収穫の季節がきたので、その分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫のところへ送った。35 すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。36 また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。37 しかし、最後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。38 すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。39 そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。40 このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか」。41 彼らはイエスに言った、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」。42 イエスは彼らに言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、／『家造りらの捨てた石が／隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、／わたしたちの目には不思議に見える』。43 それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。44 またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」。45 祭司長たちやパリサイ人たちがこの譬を聞いたとき、自分たちのことをさして言っておられることを悟ったので、46 イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者だと思っていたからである。

4.69.2 ルカ 20:9-19

9 そこでイエスは次の譬を民衆に語り出された、「ある人がぶどう園を造って農夫たちに貸し、長い旅に出た。10 季節になったので、農夫たちのところへ、ひとりの僕を送って、ぶどう園の収穫の分け前を出させようとした。ところが、農夫たちは、その僕を袋だたきにし、から手で帰らせた。11 そこで彼はもうひとりの僕を送った。彼らはその僕も袋だたきにし、侮辱を加えて、から手で帰らせた。12 そこで更に三人

目の者を送ったが、彼らはこの者も、傷を負わせて追い出した。13 ぶどう園の主人は言った、『どうしようか。そうだ、わたしの愛子をつかわそう。これなら、たぶん敬ってくれるだろう』。14 ところが、農夫たちは彼を見ると、『あれはあと取りだ。あれを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と互に話し合い、15 彼をぶどう園の外に追い出して殺した。そのさい、ぶどう園の主人は、彼らをどうするだろうか。16 彼は出てきて、この農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう」。人々はこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。17 そこで、イエスは彼らを見つめて言われた、「それでは、／『家造りらの捨てた石が／隅のかしら石になった』／と書いてあるのは、どういうことか。18 すべてその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」。19 このとき、律法学者たちや祭司長たちはイエスに手をかけようと思ったが、民衆を恐れた。いまの譬が自分たちに当てて語られたのだと、悟ったからである。

マルコによる福音書 12 章 1-12 節福音書対照表

4.69.3 問い

1. エルサレムではこれまでにどのようなことがありましたか。
2. 1 節から 8 節のたとえの要点をまとめてみましょう。(1-8)
3. ある人（ぶどう園の主人)、ぶどう園、農夫たち、僕たち、ぶどう園の主人（彼）の息子はそれぞれだれを表していますか。(1-8)
4. イエスはこのたとえのなかで、どんな預言をしていますか。(9)
5. 旧約聖書からの引用は何をあらわしていますか。(10,11)
6. イエスは、このたとえで、何を伝えているのでしょうか。(12)

4.69.4 参照

- マタイは、この前に、「二人息子」のたとえ（21:28-32）
  - あなたがたはどう思うか。ある人にふたりの子があったが、兄のところに行って言った、『子よ、きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ』。29 すると彼は『おとうさん、参ります』と答えたが、行かなかった。30 また弟のところにきて同じように言った。彼は『いやです』と答えたが、あとから心を変えて、出かけた。31 このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか」。彼らは言った、「あとの者です」。イエスは言われた、「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。32 というのは、ヨハネがあなたがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった。
- ぶどう園：

  - イザヤ 5:1-7 わたしはわが愛する者のために、／そのぶどう畑についてのわが愛の歌をうたおう。わが愛する者は土肥えた小山の上に、／一つのぶどう畑をもっていた。2 彼はそれを掘りおこし、石を除き、／それに良いぶどうを植え、／その中に物見やぐらを建て、／またその中に酒ぶねを掘り、／良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ。ところが結んだものは野ぶどうであった。3 それで、エルサレムに住む者とユダの人々よ、／どうか、わたしとぶどう畑との間をさばけ。4 わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、／何かなすべきことがあるか。わたしは良いぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、／どうして野ぶどうを結んだのか。5 それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、／あなたがたに告げる。わたしはそのまがきを取り去って、／食い荒されるにまかせ、そのかきをとりこわして、／踏み荒されるにまかせる。6 わたしはこれを荒して、／刈り込むことも、耕すこともせず、／おどろと、いばらとを生えさせ、／また雲に命じて、その上に雨を降らさない。7 万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、／主が喜んでそこに植えられた物は、／ユダの人々である。主はこれに公平を望まれたのに、／見よ、流血。正義を望まれたのに、／見よ、叫び。
  - レビ 19:23-25 あなたがたが、かの地にはいって、もろもろのくだものの木を植えるときは、その実はまだ割礼をうけないものと、見なさなければならない。すなわち、それは三年の間あなたがたには、割礼のないものであって、食べてはならない。24 四年目には、そのすべての実を聖なる物とし、それをさんびの供え物として主にささげなければならない。25 しかし五年目には、あなたがたはその実を食べることができるであろう。こうするならば、それはあなたがたのために、多くの実を結ぶであろう。わたしはあなたがたの神、主である。
- たとえの要点（バークレイ）
  - 譬えの背景
    1. 神の寛大さ、準備が整えられている
    2. 神の信頼：農夫たちを信頼している
    3. 神の忍耐：幾度も送る
    4. 究極的な正義の勝利
  - 譬えにおけるイエス
    1. イエスは子
    2. イエスは死ぬ、殺される
    3. 究極的な神への信頼
  - 譬えにおける人間
    1. 神への背き、甘え
    2. 他のものに与えられる
- 詩篇 118:22-23 家造りらの捨てた石は／隅のかしら石となった。23 これは主のなされた事で／われらの目には驚くべき事である。
  - 使徒 4:11 このイエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となった石』なのである。
  - ペテロ前書 2:3-9 あなたがたは、主が恵み深いかたであることを、すでに味わい知ったはずである。4 主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。5 この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・

キリストにより、神によろこばれる霊のいけにえを、ささげなさい。6 聖書にこう書いてある、／「見よ、わたしはシオンに、／選ばれた尊い石、隅のかしら石を置く。それにより頼む者は、／決して、失望に終ることがない」。7 この石は、より頼んでいるあなたがたには尊いものであるが、不信仰な人々には「家造りらの捨てた石で、隅のかしら石となったもの」、8 また「つまずきの石、妨げの岩」である。しかし、彼らがつまずくのは、御言に従わないからであって、彼らは、実は、そうなるように定められていたのである。9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。
  - ローマ 9:32-33 なぜであるか。信仰によらないで、行いによって得られるかのように、追い求めたからである。彼らは、つまずきの石につまずいたのである。33 「見よ、わたしはシオンに、／つまずきの石、さまたげの岩を置く。それにより頼む者は、失望に終ることがない」／と書いてあるとおりである。
  - エペソ 2:20 またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。
- イザヤ 8:14,15 主はイスラエルの二つの家には聖所となり、またさまたげの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には網となり、わなとなる。15 多くの者はこれにつまずき、かつ倒れ、破られ、わなにかけられ、捕えられる」。
- ローマ 11:22 神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。そうでないと、あなたも切り取られるであろう。

4.69.5 記録

- 日時：2024 年 10 月 10 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）3 名

4.69.6 問いについて

1. エルサレムではこれまでにどのようなことがありましたか。
   - [A] エルサレム入城、宮きよめ - 神殿から商人を追い出す（11:18 18 祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、どうかしてイエスを殺そうと計った。）、権威についての問答、「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。（11:28）「ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか」（30）
   - [DQ] このたとえは誰に向けて語られましたか。（1a）
     - [Q] 「そこでイエスは譬で彼らに語り出された」の「彼ら」とは。
   - [DQ] どのような人たちとのやりとりの後にこのたとえが語られますか。これは、前の権威について

の問答からつながっているのでしょうか。

- [A] 祭司長、律法学者、長老たち。おそらくつながっている。
  - 「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。（11:28）「ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか」（11:30）
- マタイでは「二人の息子」のたとえ（21:28-32）が挟まり、「32 というのは、ヨハネがあなたがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった。」と結んでいる。そうであっても、マタイでは、このたとえの中の「どうするだろうか」に「彼ら」が答えている。マルコとルカは、この挿入はない。ただ、ルカでは「そんなことがあってはなりません。」（20:16）の句が挿入されている。
- いずれの場合も、前段の「権威についての問答」からつながっており、そこでは、イエスは、答えておられないが、ここでは、ヨハネのバプテスマは、天からか、人からかにも、ここで暗にではあるが、答えている。

2. 1 節から 8 節のたとえの要点をまとめてみましょう。（1-8）

- [DQ] 登場人物を上げてみましょう。
- [A] ある人（ぶどう園の主人）、ぶどう園、農夫たち、僕たち、ぶどう園の主人（彼）の息子
- [DQ] それぞれどのようなことをしたとされていますか。主人、農夫たち。しもべたちの役割は何ですか。
  - [Q] ぶどう園の主人は、ぶどう園にたいして、どのようにしていますか。
    - ある人（ぶどう園の主人）：ある人がぶどう園を造り、垣をめぐらし、また酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して（　　：give out, let out something）、旅に出かけた（　　：to go away into foreign parts, go abroad）。2 季節になった（　　：i due measure, ii. a measure of time, a larger or smaller portion of time）ので、農夫たちのところへ、ひとりの僕を送って、ぶどう園の収穫の分け前を取り立てさせようとした。（中略）6 ここに、もうひとりの者がいた。それは彼の愛子であった。自分の子は敬ってくれるだろうと思って、最後に彼をつかわした。
    - [参考] イザヤ 5:1-7 わたしはわが愛する者のために、／そのぶどう畑についてのわが愛の歌をうたおう。わが愛する者は土肥えた小山の上に、／一つのぶどう畑をもっていた。2 彼はそれを掘りおこし、石を除き、／それに良いぶどうを植え、／その中に物見やぐらを建て、／またその中に酒ぶねを掘り、／良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ。ところが結んだものは野ぶどうであった。

- 農夫たち：3 すると、彼らはその僕をつかまえて、袋だだきにし、から手で帰らせた。4 また他の僕を送ったが、その頭をなぐって侮辱した。5 そこでまた他の者を送ったが、今度はそれを殺してしまった。そのほか、なお大ぜいの者を送ったが、彼らを打ったり、殺したりした。（中略）7 すると、農夫たちは『あれはあと取りだ。さあ、これを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と話し合い、8 彼をつかまえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。
  - [Q] 農夫たちは、なぜこれほどひどいことをするのでしょうか。
    - 3 すると、彼らはその僕をつかまえて、袋だだきにし、から手で帰らせた。
    - 4 また他の僕を送ったが、その頭をなぐって侮辱した。
    - 5 そこでまた他の者を送ったが、今度はそれを殺してしまった。
    - そのほか、なお大ぜいの者を送ったが、彼らを打ったり、殺したりした。
    - 6 ここに、もうひとりの者がいた。それは彼の愛子であった。自分の子は敬ってくれるだろうと思って、最後に彼をつかわした。7 すると、農夫たちは『あれはあと取りだ。さあ、これを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と話し合い、8 彼をつかまえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。
  - [A] 主人について理解できていない。主人が農夫たちのことをよくわかっていない。お人好し。
- 僕たち：ぶどう園の収穫の分け前を取り立て
  - [Q] 僕の役割は何ですか。
  - [A] 収穫を得る。
- ぶどう園の主人（彼）の息子
- [DQ] なぜ、息子は敬ってくれると考えたのでしょうか。
- [A] 主には熱心だったのかもしれない。だから、欲はかいても、主には適切に対応してくれると思ったのだろうか。

3. ある人（ぶどう園の主人）、ぶどう園、農夫たち、僕たち、ぶどう園の主人（彼）の息子はそれぞれだれを表していますか。（1-8）

- ある人がぶどう園を造り、垣をめぐらし、また酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。2 季節になったので、農夫たちのところへ、ひとりの僕を送って、ぶどう園の収穫の分け前を取り立てさせようとした。3 すると、彼らはその僕をつかまえて、袋だだきにし、から手で帰らせた。4 また他の僕を送ったが、その頭をなぐって侮辱した。5 そこでまた他の者を送ったが、今度はそれを殺してしまった。そのほか、なお大ぜいの者を送ったが、彼らを打ったり、殺し

たりした。6 ここに、もうひとりの者がいた。それは彼の愛子であった。自分の子は敬ってくれるだろうと思って、最後に彼をつかわした。7 すると、農夫たちは『あれはあと取りだ。さあ、これを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と話し合い、8 彼をつかまえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。9 このぶどう園の主人は、どうするだろうか。彼は出てきて、農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう。

- ある人（ぶどう園の主人）：神
- ぶどう園：イスラエルの人々、神が愛するものたち
- 農夫たち：イスラエルの支配者たち、指導することを神に委ねられているものたち
- 僕たち：預言者たち、神の御心、直接の指示、指導に関する修正点を伝える人
  - しもべ：モーセ（ヨシュア 1:1,2,7,13,15　主のしもべモーセ）、ヨシュア（ヨシュア 24:29 これらの事の後、主のしもべ、ヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ、）、ダビデ（サムエル記下 3:18 わたしのしもべダビデ）、
  - アモス 3:7 まことに主なる神は／そのしもべである預言者にその隠れた事を／示さないでは、何事をもなされない。
  - エレミヤ 7:25 あなたがたの先祖がエジプトの地を出た日から今日まで、わたしはわたしのしもべである預言者たちを日々彼らにつかわした。
  - ゼカリヤ 1:6 しかしわたしのしもべである預言者たちに命じたわが言葉と、わが定めとは、あなたがたの先祖たちに及んだではないか。それで彼らは立ち返って言った、『万軍の主がわれわれの道にしたがい、おこないに従って、われわれに、なそうと思い定められたように、そのとおりされたのだ』と」。
  - [DQ] 民の指導者や、人々は、多くの預言者を殺したのでしょうか。
    - [A] 聞き従わなかったことは、書かれている。
    - バプテスマのヨハネは、どうでしょうか。やはり、民の指導者に殺されたのでしょうか。
- ぶどう園の主人（彼）の息子：イエス
- [DQ] 主人が、ぶどう園にしたことは、何に対応しているのでしょうか。
  - イザヤ 5:1-7 わたしはわが愛する者のために、／そのぶどう畑についてのわが愛の歌をうたおう。わが愛する者は土肥えた小山の上に、／一つのぶどう畑をもっていた。2 彼はそれを掘りおこし、石を除き、／それに良いぶどうを植え、／その中に物見やぐらを建て、／またその中に酒ぶねを掘り、／良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ。ところが結んだものは野ぶどうであった。3 それで、エルサレムに住む者とユダの人々よ、／どうか、わたしとぶどう畑との間をさばけ。4 わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、／何かなすべきことがあるか。わたしは良いぶどうの結ぶのを待

ち望んだのに、／どうして野ぶどうを結んだのか。5 それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、／あなたがたに告げる。わたしはそのまがきを取り去って、／食い荒されるにまかせ、そのかきをとりこわして、／踏み荒されるにまかせる。6 わたしはこれを荒して、／刈り込むことも、耕すこともせず、／おどろと、いばらとを生えさせ、／また雲に命じて、その上に雨を降らさない。7 万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、／主が喜んでそこに植えられた物は、／ユダの人々である。主はこれに公平を望まれたのに、／見よ、流血。正義を望まれたのに、／見よ、叫び。

  - [比較] ある人がぶどう園を造り、垣をめぐらし、また酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。

    * 彼はそれを掘りおこし、石を除き、[ぶどう園を造り、垣をめぐらし] ／それに良いぶどうを植え、／その中に物見やぐらを建て、[やぐらを立て] ／またその中に酒ぶねを掘り、[酒ぶねの穴を掘り] ／良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ。

    * イザヤでは、よいぶどうを植えたのに、野ぶどうを結んだとなっている。ここでは、収穫を主人に与えないことが言われている。

- [DQ] 主人は、なぜ、農夫に、管理を委ねるのでしょうか。直接、人々に伝えないのでしょうか。

- [A] 時代的、特質があるかもしれないが、一般的には、難しいのかもしれない。どの時代にも、指導者は必要。

- [DQ] もし、祭司長、律法学者、長老たちが、農夫に、人々がぶどう園に、譬えられているとすると、どんな事をしたと言っているのでしょうか。

- [A] 預言者（主の御心を伝えるもの）のことばに向き合わなかった。御心、主が喜ばれることをうけとって、人々にそのことを伝える役割を果たすのではなく、自分たちの優位性を主張したということだろうか。

- [DQ] なぜ、このようなことになってしまったのでしょうか。

- [A] ヨハネ 12:43 彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。

4. イエスはこのたとえのなかで、どんな預言をしていますか。(9)

- 9 このぶどう園の主人は、どうするだろうか。彼は出てきて、農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう。

- [DQ] マタイとルカも見てみましょう。どのように描かれていますか。

  - マタイ 21:40,41 40 このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか」。41 彼らはイエスに言った、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」。

    - 彼らが答えている。
  - ルカ 20:15b,16 そのさい、ぶどう園の主人は、彼らをどうするだろうか。16 彼は出てきて、この農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう」。人々はこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。
    - イエスが答えているが、人々の言葉が追加されている。
  - この答えの部分は、なかったのではないだろうか。
- [DQ] 「農夫を殺し」とあるが、それは、何を意味しているのだろうか。
- [A] 基本的には不明だが、すくなくとも、ぶどう園の管理（貸すこと）はしなくなることは確かだろう。
- [DQ] 他の人々はどのような人を指すのでしょうか。
- [A] マルコには「他の人々」とあるだけで、書かれていない。
  - マタイ: 41b 季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たち。43b 御国にふさわしい実を結ぶような異邦人
  - ルカでも、「他の人々」とあるだけだが、同時に、「そんなことがあってはなりません」との人々のコメントが追加されている。

5. 旧約聖書からの引用は何をあらわしていますか。(10,11)

- 10 あなたがたは、この聖書の句を読んだことがないのか。『家造りらの捨てた石が／隅のかしら石になった。11 これは主がなされたことで、／わたしたちの目には不思議に見える』」。
- [DQ] 家造りはなにに譬えられていますか。隅の頭石はなにに譬えられていますか。
- [A] 家造り：祭司長、律法学者、長老たちなど、民の指導者。しかし、同時に、背後に神様がおられる。隅の頭石：イエス。しかし、具体的にどうされるかは書かれていない。背後におられる家造りの神様が最後に置かれる大切な Corner Stone、Cap Stone となる。
- [Q] マタイや、ルカの引用は何を言っているのでしょうか。
  - [A] 石につまづき、打たれて、滅ぼされるということか。
  - マタイ 21:44 またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」。ルカ 20:18 すべてその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」。
  - イザヤ 8:14 主はイスラエルの二つの家には聖所となり、またさまたげの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には網となり、わなとなる。

  - ローマ 9:33 「見よ、わたしはシオンに、／つまずきの石、さまたげの岩を置く。それにより頼む者は、失望に終ることがない」／と書いてあるとおりである。
  - ペテロ前 2:8 また「つまずきの石、妨げの岩」である。しかし、彼らがつまずくのは、御言に従わないからであって、彼らは、実は、そうなるように定められていたのである。
  - ダニエル 2:44 それらの王たちの世に、天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他の民にわたされず、かえってこれらのもろもろの国を打ち破って滅ぼすでしょう。そしてこの国は立って永遠に至るのです。45 一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と、青銅と、粘土と、銀と、金とを打ち砕いたのを、あなたが見られたのはこの事です。大いなる神がこの後に起るべきことを、王に知らされたのです。その夢はまことであって、この解き明かしは確かです」。

6. イエスは、このたとえで、何を伝えているのでしょうか。(12)

- 12 彼らはいまの譬が、自分たちに当てて語られたことを悟ったので、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。そしてイエスをそこに残して立ち去った。
- [A] 直接的には、祭司長、律法学者、長老たちにむけて語られている。
- [DQ] 祭司長、律法学者、長老たちには、何を伝えているのでしょうか。
  - 神から委ねられたもの（神様の御心を行うこと）にたいして、忠実ではなく、背いている。
  - 神の、様々な配慮のもとで、委ねられているにもかかわらず、そのことを忘れてしまっている。
- [DQ] 「権威についての問答」(11:27-33) と関連しているとすると、イエスは、祭司長、律法学者、長老たちの問い、そしてイエスが発した問いに、どのように語っているのでしょうか。
  - 28 「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。
  - 30 ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。
- [A] イエスは、神の子で、祭司長、律法学者、長老たちによって殺されることになる。しかし、神は、イエスを、隅のかしら石とされる。さらに、民の指導者たちを滅ぼし、すなわち、神の仕事を担う責任から解き、人々を他の指導者のもとに置くことなる。
- [DQ] では、祭司長、律法学者、長老たちは、どうすればよかったのでしょうか。
- [A] 神の配慮に感謝し、委ねられているものに忠実に、御心を行うこと。このもとで、民を愛し、導き、民がみ心を行うことによって、神様に喜んでいただくこと。

4.69.7 メモ

- マタイは、権威についての問答と、「ぶどう園と農夫」のたとえの間に「二人の息子」のたとえを挟んでいる。民の指導者たちは、ヨハネの（悔い改めの）バプテスマ（バプテスマのヨハネではない）を信じなかったが、群衆はヨハネが預言者だとほうとうに思っていた（マルコ 11:32、マタイ 21: 26、ルカ 20:6（ルカでは信じていた））。その心のうちをのぞきみた応答として、二人の息子のたとえを入れており、その最後には、イエスの言葉として「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。32 というのは、ヨハネがあなたがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった。」（マタイ 21:31b,32）と、あからさまに、語ってから、ぶどう園のたとえを「もう一つの譬を聞きなさい。」と始めている。たしかに、そのほうが、わかりやすい。実際には、どの時点でこれらのたとえが語られたかは不明だが。なお、ルカは、マルコと同様、権威についての問答の直後に、「ぶどう園と農夫」のたとえが置かれている。

- イエスは、なにを気づかせようとしたのだろうか。委ねられたものに忠実ではなかった？十分な配慮のもで委ねられたことに気付けなかった。神様との関係の中で、生かされていることを気づかない。自分たちへの愛を受け止められない。

4.70 12:13-17 皇帝への税金

13 さて、人々はパリサイ人やヘロデ党の者を数人、イエスのもとにつかわして、その言葉じりを捕えようとした。14 彼らはきてイエスに言った、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、はばかられないことを知っています。あなたは人に分け隔てをなさらないで、真理に基いて神の道を教えてくださいます。ところで、カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。15 イエスは彼らの偽善を見抜いて言われた、「なぜわたしをためそうとするのか。デナリを持ってきて見せなさい」。16 彼らはそれを持ってきた。そこでイエスは言われた、「これは、だれの肖像、だれの記号か」。彼らは「カイザルのです」と答えた。17 するとイエスは言われた、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。彼らはイエスに驚嘆した。

4.70.1 マタイ 22:15-22

15 そのときパリサイ人たちがきて、どうかしてイエスを言葉のわなにかけようと、相談をした。16 そして、彼らの弟子を、ヘロデ党の者たちと共に、イエスのもとにつかわして言わせた、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたであって、真理に基いて神の道を教え、また、人に分け隔てをしないで、だれをもはばかられないことを知っています。17 それで、あなたはどう思われますか、答えてください。カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」。18 イエスは彼らの悪意を知って言われた、「偽善者たちよ、なぜわたしをためそうとするのか。19 税に納める貨幣を見せなさい」。彼らはデナリ一つを持っ

てきた。20 そこでイエスは言われた、「これは、だれの肖像、だれの記号か」。21 彼らは「カイザルのです」と答えた。するとイエスは言われた、「それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。22 彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

4.70.2 ルカ 20:20-26

20 そこで、彼らは機会をうかがい、義人を装うまわし者どもを送って、イエスを総督の支配と権威とに引き渡すため、その言葉じりを捕えさせようとした。21 彼らは尋ねて言った、「先生、わたしたちは、あなたの語り教えられることが正しく、また、あなたは分け隔てをなさらず、真理に基いて神の道を教えておられることを、承知しています。22 ところで、カイザルに貢を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」。23 イエスは彼らの悪巧みを見破って言われた、24 「デナリを見せなさい。それにあるのは、だれの肖像、だれの記号なのか」。「カイザルのです」と、彼らが答えた。25 するとイエスは彼らに言われた、「それなら、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。26 そこで彼らは、民衆の前でイエスの言葉じりを捕えることができず、その答に驚嘆して、黙ってしまった。

マルコによる福音書 12 章 13-17 節福音書対照表

4.70.3 問い

1. 神殿でのイエスが語り合ったことについて復習しましょう。(11:27-12:12)
2. ここでは、どのような人たちが、どのような動機から、どのような質問をしますか。(13-14)
3. 「税を納めるべきだ」または「税を納めないべきだ」と答えた場合どのようなことが予想されますか。
4. イエスはどのように対応し、どのように答えますか。(15-17a)
5. この人たちは、なぜ驚嘆したのでしょうか。(17b)
6. イエスは、どのようなことを教えているのだと思いますか。

4.70.4 参照

- マタイはこの前に「婚礼の祝宴」のたとえ(マタイ 22:1-14、参照ルカ 14:15-24)
- パリサイ派
  - **荒井献「イエスとその時代」**(p.33-34):「パリサイ派」は「分離者」を意味するヘブライ語「ベルーシーム」に由来すると言われる。彼らは実際、律法を守らない者、いわゆる「地の民(アム・ハ・アレツ)」の不浄から自己を「分離する」ことによって、宗教的清浄の理念を世俗内に貫徹し、その場を彼らの同志的結合「ハーベール」の中に形成していった。その際、彼らがとった手段は「律法」の敷衍解釈であった。その目的は元来、古き律法からその「理念」(ラティオ)を取り出し、それを解釈す

ることに依って新しい時代に生かそうとする、律法のいわゆる「合理化」（ラティオナリジールング）にあったのである（M. ヴェーバー）。彼らが、サドカイ派と違って、天使論や復活信仰を積極的に受け入れたのも、モーセ五書に固有な「神の使い」（天使）の概念や一元的人間観を、ペルシアから導入された新思想や、マカベア戦争（対シリア解放戦争（BC168-164））による殉教者の排出という新事態に即応せしめて解釈した結果なのである。このような法理念の現実的解釈に依拠する彼らの合理主義は、他国支配勢力に寄りかかった法の精神を曖昧にするサドカイ派、また、法を遵守しない「地の民」から自らを分離しただけではなく、マカベア戦争時代にともに「敬虔派」（ハシーディーム）としてシリアに対する抵抗運動を担ったかつての彼らの同志、いわゆる黙示文学的ラディカリストたちからも袂を分かっていた。このラディカリストたちはー後述するように彼らの中にも種々の分派が存在するがー終末の時に救世主（マスーアハ（メシア）＝キリスト（ギリシャ語）、本来は油注がれた者、つまり「王」の意）によって導入される神の国の故に、現実における一切の政治的・宗教的妥協を拒否し、その結果として霊的熱狂に基づく予言活動を行っていた。これに対してパリサイ派は、預言者の時代は既に終わったという認識に立ち、法理念のこの世における貫徹の中に神の国の建設を期待したのである。その結果、律法とその解釈に基づく細則を守らない者は救われないという、いわゆる律法主義に陥る傾向は十分にあったが、この傾向が前景に出てくるのは紀元後 70 年以後に、この派がユダヤ教正統派の位置についた以後のことであって、イエスの時代にこの傾向を読み取ることについては、慎重でなければならない。なお、主としてパリサイ派出身の律法学者たちは、「教師（ラビ）」と呼ばれて、ガリラヤを含む地方の各地に設立された「会堂（シュナゴーゲー）」で礼拝を司どり、民衆に律法の教育を与えた。最高法院においては、長老たちが保守勢力を代表したのに対して、彼らは都市（主としてエルサレム）の小市民階級を背景に革新勢力を代表した。彼ら自身多くの場合その日常生活においては、皮鞣（なめし）工・天幕作り、大工などの手工に携わっていたのである。

– [パリサイ人] マルコでは 2:18, 24, 3:6, 7:3, 5, 8:11, 15, 10:2, 12:13
  * 2:18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。
  * 2:24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った、「いったい、彼らはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのですか」。
  * 3:6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。
  * 7:1 さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレムからきて、イエスのもとに集まった。
  * 7:3 もともと、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝えをかたく守って、念入りに手を洗ってからでないと、食事をしない。
  * 7:5 そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。
  * 8:11 パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求めた。
  * 8:15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。

    * 10:2 そのとき、パリサイ人たちが近づいてきて、イエスを試みようとして質問した、「夫はその妻を出しても差しつかえないでしょうか」。
    * 12:13 さて、人々はパリサイ人やヘロデ党の者を数人、イエスのもとにつかわして、その言葉じりを捕えようとした。
- 歴史的背景（バークレー）
  - BC4 ローマの属国としてパレスチナ全域を治めていたヘロデ大王の死
    * ガリラヤとペレア：ヘロデ・アンティパス
    * 荒野の地方、東北のテラコニテスとイツリアとアビレネ：ヘロデ・ピリポ
    * ユダヤとサマリア：アケラオ
      · 失政のためローマが介入、行政長官を置いて直轄
      · 課税のため人口調査
      · ガウロナイトのユダス「課税は奴隷制度導入より悪い」として反乱
  - 賦課された税
    * 地租：すべての穀物の十分の一、産出されたぶどう酒や果実の五分の一（一部は現物、また一部は金銭）
    * 所得税：人の収入の１％
    * 人頭税：十四才から六十五歳までのすべての男子と、十二歳から六十五歳までのすべての女子に一人一デナリ
  - 皇帝ティベリウス（第二代 14-37）アウグスト・ティベリウス・カエサル
    * 貨幣の表には、名前、裏には、ポンティフェクス・マクシムス（最高の神祇官）
  - 貨幣
    * 権力の象徴
    * 貨幣が通用するところでは主権がよく維持されていた
    * 皇帝名が刻まれており、皇帝のもの
  - 国家のもとでの個人
    * 国家は神によって制定され、法によって統治される
    * 国家が人に与えるすべての恩恵を受け入れておきながら、すべての責任を拒否することはできない。
    * もし、国家が正当な領域の中にとどまり、正当な要求をするなら、個人はそれに対して誠実と奉仕を尽くさなければならない。しかし、要するに国家と人は共に神に属する。ゆえに、国家と神の要求が重なるなら、神への忠誠が優先する。しかし、通常の環境の下においては、ある人のキリスト教信仰は、彼を他の人々よりもよき市民にすべきである、ということも真理である。
- デナリオン銀貨（Denarius 何種類かある）[CoinArchives], [Roman Coins]
  - 表：ティベリウス帝 TI CAESAR DIVI AVG F AVGVSTVS (ティベリウス・カエサル神君アウグストゥスの息子にして皇帝) Tiberius Caesar Divi Augusti Filius Augustus, Tiberius Caesar, son of divine Augustus, emperor (Augustus)
  - 裏：リウィア坐像 PONTIF MAXIM (The pontifex maximus (Latin for “supreme pontiff”) was the chief high priest of the College of Pontiffs (Collegium Pontificum) in ancient Rome.)

- カイザル：イエスを訴える口実
  - そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。（ルカ 23:2）
  - これを聞いて、ピラトはイエスを許そうと努めた。しかしユダヤ人たちが叫んで言った、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。(ヨハネ 19:12)
  - すると彼らは叫んだ、「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」。祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。(ヨハネ 19:15)
  - その人たちをヤソンが自分の家に迎え入れました。この連中は、みなカイザルの詔勅にそむいて行動し、イエスという別の王がいるなどと言っています」。(使徒 17:7)
  - パウロは「わたしは、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、またカイザルに対しても、なんら罪を犯したことはない」と弁明した。（使徒 25:8）
  - パウロは言った、「わたしは今、カイザルの法廷に立っています。わたしはこの法廷で裁判されるべきです。よくご承知のとおり、わたしはユダヤ人たちに、何も悪いことをしてはいません。もしわたしが悪いことをし、死に当るようなことをしているのなら、死を免れようとはしません。しかし、もし彼らの訴えることに、なんの根拠もないとすれば、だれもわたしを彼らに引き渡す権利はありません。わたしはカイザルに上訴します」。そこでフェストは、陪席の者たちと協議したうえ答えた、「おまえはカイザルに上訴を申し出た。カイザルのところに行くがよい」。(使徒 25:10-12)
- しかし、彼らをつまずかせないために、海に行って、つり針をたれなさい。そして最初につれた魚をとって、その口をあけると、銀貨一枚が見つかるであろう。それをとり出して、わたしとあなたのために納めなさい」。（マタイ 17:27）
- 取税人
  - マルコ 2:15,16 それから彼の家で、食事の席についておられたときのことである。多くの取税人や罪人たちも、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。こんな人たちが大ぜいいて、イエスに従ってきたのである。パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。(マタイ 9:10,11、ルカ 5:29,30)
  - マタイ 11:19 また人の子がきて、食べたり飲んだりしていると、見よ、あれは食をむさぼる者、大酒を飲む者、また取税人、罪人の仲間だ、と言う。しかし、知恵の正しいことは、その働きが証明する」。(ルカ 7:34)
  - ルカ 19:2 ところが、そこにザアカイという名の人がいた。この人は取税人のかしらで、金持であった。
  - マタイ、ルカでは、取税人を罪人としているが、マルコはそのような表現はない。
    - マタイ 5:46 あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあろうか。そのようなことは取税人でもするではないか。
    - マタイ 18:17 もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい。
    - マタイ 21:31,32 このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか」。彼らは言った、「あと

の者です」。イエスは言われた、「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。というのは、ヨハネがあなたがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった。

- 異邦人に従うこと
  - エレミヤ 29:7 わたしがあなたがたを捕え移させたところの町の平安を求め、そのために主に祈るがよい。その町が平安であれば、あなたがたも平安を得るからである。
  - テモテ一 2:1-2 そこで、まず第一に勧める。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、感謝とをささげなさい。それはわたしたちが、安らかで静かな一生を、真に信心深くまた謹厳に過ごすためである。
  - ローマ 13:1 すべての人は、上に立つ権威に従うべきである。なぜなら、神によらない権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたものだからである。
  - ローマ 13:6-7 あなたがたが貢を納めるのも、また同じ理由からである。彼らは神に仕える者として、もっぱらこの務に携わっているのである。あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果しなさい。すなわち、貢を納むべき者には貢を納め、税を納むべき者には税を納め、恐るべき者は恐れ、敬うべき者は敬いなさい。
- 神のもの
  - 創世記 1:27 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。
  - ヨハネ 8:31-34 イエスは自分を信じたユダヤ人たちに言われた、「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。32 また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」。33 そこで、彼らはイエスに言った、「わたしたちはアブラハムの子孫であって、人の奴隷になったことなどは、一度もない。どうして、あなたがたに自由を得させるであろうと、言われるのか」。34 イエスは彼らに答えられた、「よくよくあなたがたに言っておく。すべて罪を犯す者は罪の奴隷である。
- 驚いた（ : to wonder, wonder at, marvel, to be wondered at, to be had in admiration, Mk 5:20, 6:6, 12:17, 15:5, 44. : i. to strike out, expel by a blow, drive out or away, ii. to cast off by a blow, to drive out, iii. to be struck with amazement, astonished, amazed, Mk 1:22, 6:2, 7:37, 10:26, 11:18, : i. to be astonished, ii. to astonish, terrify, Mk 1:27,10:24, 10:32, : to throw out of position, displace, to amaze, to astonish, throw into wonderment, to be amazed, astounded, to be out of one's mind, besides one's self, insane, Mk 2:12, 3:21, 5:42, 6:51, : to throw into terror or amazement, to be struck with amazement. Mk 9:15, 14:33, 16:5, 16:6）
  - マルコ 5:20 そこで、彼は立ち去り、そして自分にイエスがしてくださったことを、ことごとくデカポリスの地方に言いひろめ出したので、人々はみな驚き怪しんだ。（レギオン）
  - マルコ 6:6　そして、彼らの不信仰を驚き怪しまれた。それからイエスは、附近の村々を巡りあるいて教えられた。（ナザレで）
  - マルコ 12:17 するとイエスは言われた、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。彼らはイエスに驚嘆した。

- マルコ 15:5 しかし、イエスはピラトが不思議に思うほどに、もう何もお答えにならなかった。
- マルコ 15:44 ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。
- マルコ 1:22 人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。
- マルコ 6:2 そして、安息日になったので、会堂で教えはじめられた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これらのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵はどうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、どうしてか。
- マルコ 7:37 彼らは、ひとかたならず驚いて言った、「このかたのなさった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」。
- マルコ 10:26 すると彼らはますます驚いて、互に言った、「それでは、だれが救われることができるのだろう」。
- マルコ 1:27 人々はみな驚きのあまり、互に論じて言った、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」。
- マルコ 2:12 すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。
- マルコ 5:42 すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。
- マルコ 6:51 そして、彼らの舟に乗り込まれると、風はやんだ。彼らは心の中で、非常に驚いた。
- マルコ 9:15 群衆はみな、すぐイエスを見つけて、非常に驚き、駆け寄ってきて、あいさつをした。
- マルコ 10:24 弟子たちはこの言葉に驚き怪しんだ。イエスは更に言われた、「子たちよ、神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。
- マルコ 10:32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、
- マルコ 16:5,6 墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚いた。するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。

4.70.5 記録

- 日時：2024 年 10 月 17 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）1 名

4.70.6　問いについて

1. 神殿でのイエスが語り合ったことについて復習しましょう。（11:27-12:12）
    - 権威についての問答
        - 11:28「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。
        - 11:30 ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。
    - 「ぶどう園の農夫」のたとえ
        - 12:9a このぶどう園の主人は、どうするだろうか。
        - 12:12 彼らはいまの譬が、自分たちに当てて語られたことを悟ったので、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。そしてイエスをそこに残して立ち去った。
2. ここでは、どのような人たちが、どのような動機から、どのような質問をしますか。（13-14）
    - 13 さて、人々はパリサイ人やヘロデ党の者を数人、イエスのもとにつかわして、その言葉じりを捕えようとした。14 彼らはきてイエスに言った、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、はばかられないことを知っています。あなたは人に分け隔てをなさらないで、真理に基いて神の道を教えてくださいます。ところで、カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。
    - (it is lawful) K ; ;
    - [DQ]「人々はパリサイ人やヘロデ党の者を数人、イエスのもとにつかわし」とありますが、この「人々」とは誰のことでしょうか。
        - 祭司長、律法学者、長老たち（11:27）ではないだろうか。前段の最後には、「そしてイエスをそこに残して立ち去った。」とあることを考えると、直後にこのことがあったとは考えにくい。まとめられているのだろう。
    - [DQ] 実際に遣わされた人たちはどのような人たちですか。（マタイ、ルカも確認しましょう）
        - [A] 数人とあるだけで、不明、しかし、祭司長、律法学者、長老たちが直接問うたわけではない。また、マタイでは「パリサイ人たちが、彼らの弟子を、ヘロデ党の者たちと共に」イエスのもとに遣わしたとある。また、ルカでは、「彼らは、義人を装うまわし者ども」を送ったとある。
    - [DQ] パリサイ人とヘロデ党のひとたちは、それぞれどのような人たちですか。
        - [パリサイ人] マルコでは 2:18, 24, 3:6, 7:3, 5, 8:11, 15, 10:2, 12:13

  - [ヘロデ党] パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。(3:6) - ヘロデ党については、今回の箇所と対応するマタイの箇所以外は、3:6 のみ。
  - イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。(8:15b)
- [DQ] その言葉じりを捕えようとした。とありますが、これは、どのようなことでしょうか。
  - マタイ：どうかしてイエスを言葉のわなにかけようと、相談をした。
  - ルカ：彼らは機会をうかがい、義人を装うまわし者どもを送って、イエスを総督の支配と権威とに引き渡すため、その言葉じりを捕えさせようとした。
- [DQ] どのような質問ですか。質問の仕方からどのようなことが伺われますか。
- [A] 「先生、わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、はばかられないことを知っています。あなたは人に分け隔てをなさらないで、真理に基いて神の道を教えてくださいます。ところで、カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。
  - かなり露骨に慇懃無礼（表面の態度は丁寧だが，心の中では相手を軽くみている・こと（さま））
  - 税を納めてよいかいけないか、納めるべきか、納めてはならないかと聞いている。
  - マタイ：「先生、わたしたちはあなたが真実なかたであって、真理に基いて神の道を教え、また、人に分け隔てをしないで、だれをもはばかられないことを知っています。17 それで、あなたはどう思われますか、答えてください。カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」。
  - ルカ：「先生、わたしたちは、あなたの語り教えられることが正しく、また、あなたは分け隔てをなさらず、真理に基いて神の道を教えておられることを、承知しています。22 ところで、カイザルに貢を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」。

3.「税を納めるべきだ」または「税を納めないべきだ」と答えた場合どのようなことが予想されますか。

- 基本的には、支配者には、従うべきかどうか、自由を保持すべきかどうかが問われている。
- [DQ] 納めてよい、納めるべき、納めなくてよい、納めるべきでない、それぞれについて考えましょう。
  - [Q] 税金を納めないかどうか議論できるのでしょうか。なぜ、このような質問が出てきたのでしょうか。
- [DQ] この人たちはどのような答えを期待していたのでしょうか。

  - [A] 神以外のもの、異邦人、異教徒に従うことは、拒否するはず、それが、主に対する熱心さだと考えていたのだろうか。
  - [参照] ヨハネ 8:33 そこで、彼らはイエスに言った、「わたしたちはアブラハムの子孫であって、人の奴隷になったことなどは、一度もない。どうして、あなたがたに自由を得させるであろうと、言われるのか」。
  - [参照] そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。（ルカ 23:2）
- [DQ] この人たち（パリサイ人やヘロデ党の者）が一緒に質問したことには、どのような意味があるのでしょうか。
  - [A] パリサイ人は、熱心党のようではないが、それでも、税を納めたくない。ヘロデ党は、ローマの支配に阿（おもね）って、ある地位を維持している人たちで、税を納めない反逆者は、取り締まるだろう。

4. イエスはどのように対応し、どのように答えますか。（15-17a）

- 15 イエスは彼らの偽善を見抜いて言われた、「なぜわたしをためそうとするのか。デナリを持ってきて見せなさい」。16 彼らはそれを持ってきた。そこでイエスは言われた、「これは、だれの肖像、だれの記号か」。彼らは「カイザルのです」と答えた。17 するとイエスは言われた、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。
- [DQ] 偽善（15 節）とはこの場合どのようなことでしょうか。
  - ある目的のために、自分の信条とは異なることをすること。意のままにならないひとを、貶めるために、本心にないことを言い、手段を選ばず、言葉尻を捉えようとすること。
- [DQ] まず、イエスはどうしますか。これは、どのような意味がありますか。
  - 「なぜわたしをためそうとするのか。デナリを持ってきて見せなさい」。「これは、だれの肖像、だれの記号か」。
    * 実物から確認する？
  - コインには、おそらく、表には、ティベリウス帝の横顔があり、周囲に TI CAESAR DIVI AVG F AVGVSTVS と書かれていた。これは、ティベリウス・カエサル、神君アウグストゥスの息子にして皇帝。とあり、裏には、母リヴィアの坐像があり、周囲に、PONTIF MAXIM と書かれていた。これは、最高司祭という意味である。デナリ銀貨 [CoinArchives], [Roman Coins]
    * 像（イメージ）を忌避し、かつ、他の神を認めないユダヤ人にとって、デナリ自体が挑戦だと受け取られていたかもしれない。
- [DQ] 神のものを神に返すとはどのような意味でしょうか。

  - 対比とすると、一義的には、神殿税を意味するかもしれないが、もっと本質的な意味が含まれているだろう。ここには、カイザルのものと、神のものをどう考えるかという問いも含まれている。
  - [参考] しかし、彼らをつまずかせないために、海に行って、つり針をたれなさい。そして最初につれた魚をとって、その口をあけると、銀貨一枚が見つかるであろう。それをとり出して、わたしとあなたのために納めなさい」。（マタイ 17:27）
  - [参考] 創世記 1:27 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。
- [DQ] 税金は国に、心は教会にでしょうか。

5. この人たちは、なぜ驚嘆したのでしょうか。（17b）
   - 17a 彼らはイエスに驚嘆した。
     - マルコでは、驚いたがいくつかの言葉を使って多く表現されている。参考を参照
     - [『驚』で口語検索] マタイ 10 件（7:28, 8:27, 9:33, 12:23, 13:54, 15:31, 19:25, 21:20, 22:22, 33)、ルカ 13 件（2:47, 48, 4:32, 36, 5:9, 26, 8:25, 56, 9:43, 20:26, 24:5, 22, 37)、ヨハネ 3 件（実質的には 7:15 のみ）マルコ 16 件
     - マルコ 1:22, 27, 2:12, 5:20, 42, 6:2, 6, 51, 7:37, 9:15, 10:24, 26,32, 12:12, 16:5, (6)
   - [DQ] 問と、答えはどのように対応しているのでしょうか。
     - 問い：「カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」（14b）
       * 言葉じりを捕らえることは、まったくできなかったと思われる。
     - 回答：「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」（17a）
       * 直接的な答えは、税金はカイザルに納めなさい。納めるべき。
       * 同時に、貨幣がカイザルのものであるように、すべて、神様のものは、神様にお返ししなさい。
       * 神様にお返しするとは？
6. イエスは、どのようなことを教えているのだと思いますか。
   - 「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」（17a）
     - 難しい問いは、神に引き寄せて、神の支配のもとにあるとして考えなさい。
     - 神のもの「すべて」をどのようにお返しするか考えなさい。

- 熱心党のシモンもおり、取税人レビ、マタイもいたはずであろう。そして、このイエスのことばを聞いていただろう。
  - 徴税のしごとを尊重したことも含められているように思われる。

4.70.7 メモ

- 税金が課せられているということは、その支配下にある。かつ逃れられないことが前提だと思うが、質問者は、そう単純には、考えていないところをまずは、理解しなければならないのだろう。
  - 貨幣に書かれていた銘や、ヨハネ 8:33 の「わたしたちはアブラハムの子孫であって、人の奴隷になったことなどは、一度もない。どうして、あなたがたに自由を得させるであろうと、言われるのか」。にヒントが有るのかもしれない。
- イエスを捕らえ殺そうと機会を狙っている人たちにたいする痛快な対応ではあるが、それを喜んでいるだけで良いのだろうか、イエスは、質問者に、そして我々になにを語りかけているのだろうか。
- 「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」で、イエスは何を教えているのだろうか。
  - 「カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。(14b)
  - 「神様のものは神様にお返しすべきでしょうか。お返ししなければならないでしょうか。」
  - 「すべてのものが神様のものであるなら、神様のものを神様にお返しするにはどのようにしたら良いのでしょうか。」
- 現代的問いに何らかのヒントを与えているのだろうか。
  - 国または統治者と信仰の問題、政治・経済と宗教だろうか、神様のもとでの自由も関係するだろうか。
  - 困難な問題が目の前にあるときに、神様の視点で見てみることが促されているのだろうか。自分の置かれた状況や、その他の障壁に困難や苦しみや理不尽さの原因を求めるのではなく、神様がなにを求めておられるか、わたしたちが、どのような応答をすべきかは、問われているように思う。神のものが、神様のしるしが付いているものに囲まれているならば。
- このひとたちが考えていたことと、イエスのこたえには、どのような相違があったのだろうか。
  - イエスに質問をしにきた人たちは、どのような答えを期待していたのだろうか。
  - イエスを殺そうとするなら、反逆罪が手っ取り早い。実際、法定でも、そのような訴えが出されている。ということは、税金は納めなくて良い。納めることは適切ではないということの言質をとることが期待されていたのだろう。それは、パリサイ人が考えていたことと大きくは異ならない。つまり何が正しいかの議論がここでされているわけではない。

4.71　12:18-27 復活についての問答

18 復活ということはないと主張していたサドカイ人たちが、イエスのもとにきて質問した、19 「先生、モーセは、わたしたちのためにこう書いています、『もし、ある人の兄が死んで、その残された妻に、子がない場合には、弟はこの女をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。20 ここに、七人の兄弟がいました。長男は妻をめとりましたが、子がなくて死に、21 次男がその女をめとって、また子をもうけずに死に、三男も同様でした。22 こうして、七人ともみな子孫を残しませんでした。最後にその女も死にました。23 復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。24 イエスは言われた、「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか。25 彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている」。

4.71.1　マタイ 22:23-33

23 復活ということはないと主張していたサドカイ人たちが、その日、イエスのもとにきて質問した、24 「先生、モーセはこう言っています、『もし、ある人が子がなくて死んだなら、その弟は兄の妻をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。25 さて、わたしたちのところに七人の兄弟がありました。長男は妻をめとったが死んでしまい、そして子がなかったので、その妻を弟に残しました。26 次男も三男も、ついに七人とも同じことになりました。27 最後に、その女も死にました。28 すると復活の時には、この女は、七人のうちだれの妻なのでしょうか。みんながこの女を妻にしたのですが」。29 イエスは答えて言われた、「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている。30 復活の時には、彼らはめとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。31 また、死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を読んだことがないのか。32 『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と書いてある。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」。33 群衆はこれを聞いて、イエスの教に驚いた。

4.71.2　ルカ 20:27-40

27 復活ということはないと言い張っていたサドカイ人のある者たちが、イエスに近寄ってきて質問した、28 「先生、モーセは、わたしたちのためにこう書いています、『もしある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだなら、弟はこの女をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。29 ところで、ここに七人の兄弟がいました。長男は妻をめとりましたが、子がなくて死に、30 そして次男、三男と、次々に、その女をめとり、31 七人とも同様に、子をもうけずに死にました。32 のちに、その女も死にました。33 さて、

復活の時には、この女は七人のうち、だれの妻になるのですか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。34 イエスは彼らに言われた、「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、35 かの世にはいって死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、とついだりすることはない。36 彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。37 死人がよみがえることは、モーセも柴の篇で、主を『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、これを示した。38 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。人はみな神に生きるものだからである」。39 律法学者のうちのある人々が答えて言った、「先生、仰せのとおりです」。40 彼らはそれ以上何もあえて問いかけようとしなかった。

マルコによる福音書 12 章 18-27 節福音書対照表

4.71.3 問い

1. これまで、神殿でどのような人たちとどのようなことについて話したか復習しましょう。(11:27-12:17)
2. サドカイ人は、どのような人たちですか。復活についてはどう考えていますか。(18)
3. サドカイ人たちは、どんな質問をしますか。(19-23)
4. イエスはサドカイ人たちがどんな思い違いをしていると言っていますか。(24, 25)
5. イエスは、復活について、どのような聖書を引用していますか。(26,27)
6. イエスは、この箇所で復活についてどのようなことを教えているのでしょうか。

4.71.4 参照

- サドカイ派
  - 聖書箇所
    - マルコ 12:8 復活ということはないと主張していた**サドカイ**人たちが、イエスのもとにきて質問した、(マタイ 22:23、ルカ 20:27)
    - マタイ 3:7 ヨハネは、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けようとしてきたのを見て、彼らに言った、「まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、おまえたちはのがれられると、だれが教えたのか。
    - マタイ 16:1 パリサイ人とサドカイ人とが近寄ってきて、イエスを試み、天からのしるしを見せてもらいたいと言った。
    - マタイ 16:6 そこでイエスは言われた、「パリサイ人とサドカイ人とのパン種を、よくよく警戒せよ」。

* マタイ 16:11,12 わたしが言ったのは、パンについてではないことを、どうして悟らないのか。ただ、パリサイ人とサドカイ人とのパン種を警戒しなさい」。12 そのとき彼らは、イエスが警戒せよと言われたのは、パン種のことではなく、パリサイ人とサドカイ人との教のことであると悟った。

* マタイ 22:34 さて、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを言いこめられたと聞いて、一緒に集まった。（最も重要な戒め冒頭）

* 使徒 4:1-3 彼ら（ペテロとヨハネ）が人々にこのように語っているあいだに、祭司たち、宮守がしら、サドカイ人たちが近寄ってきて、2 彼らが人々に教を説き、イエス自身に起った死人の復活を宣伝しているのに気をいら立て、3 彼らに手をかけて捕え、はや日が暮れていたので、翌朝まで留置しておいた。

* 使徒 5:17 そこで、大祭司とその仲間の者、すなわち、サドカイ派の人たちが、みな嫉妬の念に満たされて立ちあがり、

* 使徒 23:6-8 パウロは、議員の一部がサドカイ人であり、一部はパリサイ人であるのを見て、議会の中で声を高めて言った、「兄弟たちよ、わたしはパリサイ人であり、パリサイ人の子である。わたしは、死人の復活の望みをいだいていることで、裁判を受けているのである」。7 彼がこう言ったところ、パリサイ人とサドカイ人との間に争論が生じ、会衆は相分れた。8 元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊とかは、いっさい存在しないと言い、パリサイ人は、それらは、みな存在すると主張している。

– **荒井献「イエスとその時代」**(p.33) サドカイ派の呼称は、イスラエルにおける最古・最大の大祭司「サドク」に由来するといわれる。また、一説によるとこの呼称は、「義を行使する」意味のヘブライ語「サドゥク」に遡るとも言われる。いずれにしても彼らは、伝統主義・保守主義の立場をとり、「モーセ律法」ないしは「モーセ五書」のみを聖文書として、ここに認められない、あるいはこれ以後の時代に成立したと言われる新思想ー例えば律法の敷衍解釈による法の細則・天使論・復活思想などーを一切認めなかった。もっとも、政治的には、彼らがユダヤ社会の経済的上層と密着していただけに、外国支配勢力に対しては一般的に協調策をとっている。そのために、たとえば復活思想の否認は、当時における世界体制の思想であるヘレニズム・ローマ思想を受容した結果であるとも説明できる。その意味で、サドカイ派の保守的国民主義は自由主義として機能することもできたのである。実際この派は、紀元前 66 年にはローマ軍から神殿祭儀を守り、信教の自由を確保してはいる。しかし、イエスの時代には、ローマの傀儡的存在であったアンナス家の大祭司、祭司長たち、長老たちと密着することにより、体制を思想的に擁護する役割を果たしていたのである。

– **榊原康夫「マタイによる福音書下巻」**（p.77）「サドカイ人」というのは、前の「パリサイ人」と、あらゆる点で正反対の人々でした。パリサイ派が純宗教団体であるのに対して、サドカイ派は、むしろ政治団体に近く、当時の最高議会議員の大半を占めていました。彼らはそのように、時の権力者と結びつく世俗主義者であるために、時代の流行に敏感な進歩主義者・合理主義者でもありました。それで、一応ユダヤ教を信じはしても、モーセの律法にしるされた明白な定め以外は何者も、ーラビの学

説も伝承も一権威を認めません。従って、パリサイ人や一般民衆が長い間信じ込んできたことも、この一派の手にかかると、「律法に明記されていない」という理由で否定されてしまいました。使徒行伝 23 章 8 節に「元来、サドカイ人は、復活とか霊とかは、一切存在しないと言い、パリサイ人は、それらはみな存在すると主張している」とあるとおりです。要するに、彼らは、まったく現代的な合理的唯物主義の立場に立っていました。

- **山口昇「新聖書注解**（いのちのことば社）」貴族階級に属し、大祭司や、エルサレムの有力者からなっていた。彼らは経済的に恵まれ、富裕であったが、この世的でもあった。彼らはモーセ五書だけを律法として認めていたので、復活の教理は受け入れなかった。（Cf 使徒 23:6-8）なぜなら、死人の復活に関する教えはイザヤ 26:19、ダニエル 12:2 に至るまで現れなかったからである。
  - イザヤ 26:19　あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの露は光の露であって、／それを亡霊の国の上に降らされるからである。
  - ダニエル 12:2　また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう。
- **ヨセフス「ユダヤ人古代史」**
  - 13-10-6 ヨナタンという人がヒルカノスの非常に親しい友人だったが、サドカイ派に属していて、その考えはパリサイ人とは全く正反対であった。ヨナタンはヒルカノスに、エレアザルがパリサイ人全員の共通の考えに従ってヒルカノスにそのような非難をしたこと、そして、パリサイ人全員に「彼らはこの男にどんな罰がふさわしいと思うか」と尋ねさえすれば、それが明らかになるだろう、と言った。彼らが彼の罪にふさわしい罰を与えたとしても、非難は彼らの承認によって彼に下されたのではないことは、彼が確信できるからである。そこでパリサイ人は、彼は鞭打ちと縄目に値したが、非難を死で罰するのは正しくないだろうと答えた。実際、パリサイ人は他の場合でさえ、罰を厳しくする傾向はない。この穏やかな判決にヒルカノスは非常に怒り、この男が彼らの承認によって彼を非難したのだと思った。このヨナタンこそが、ヨナタンを最も怒らせ、ヨナタンに影響を与えたため、ヨナタンはヨナタンをパリサイ派から離脱させ、彼らが民衆に課した法令を廃止させ、それを守る者を罰した。このことから、ヨナタンとその息子たちが民衆から受けた憎悪が生じたのである。しかし、これらの事柄については、これから述べることにする。私が今説明したいのは、パリサイ人は、モーセの律法には書かれていない、先祖から受け継いだ多くの慣習を民衆に伝えてきたということである。そのため、サドカイ人はそれを拒絶し、書かれた言葉にある慣習は義務であるとみなすべきだが、先祖の伝統に由来するものは守るべきではないと言うのである。そして、これらのことに関して、彼らの間には大きな論争と不和が生じており、サドカイ派は富裕層以外を説得できず、民衆の支持も得られないが、パリサイ派は大衆の支持を得ている。しかし、この二つの宗派とエッセン派については、ユダヤ事情第二巻で正確に扱っている。(Google Chrome 翻訳)
  - 18-1-4 しかし、サドカイ派の教えはこうです。魂は肉体と共に死ぬということです。彼らは、律法が命じていること以外は何事も守ろうとしません。なぜなら、彼らは、よく会う哲学の教師た

ちと議論することが美徳であると考えているからです。しかし、この教えを受け入れるのは少数の人たち、それでも最も高貴な人たちだけです。しかし、彼らは自分ではほとんど何もすることができません。なぜなら、時には不本意に、そして強制的にそうならざるを得ないのですが、行政官になると、彼らはパリサイ人の観念に溺れるからです。そうでなければ、大衆はそれを受け入れないでしょうから。(Google Chrome 翻訳)

- 復活に関する当時のユダヤ教会の意見（榊原康夫）
  - パリサイ派・エッセネ派・一般大衆：人の霊魂は死後も存在し続け、従って、その霊魂はいつかからだをとりもどす、すなわち復活する。
  - サドカイ派：人間はしにおいて体が朽ちる時、一切が終わり、従って復活もない。
- 復活・よみがえりに関する記事
  - イエス自身についての証言（マルコを中心に）よみがえる（　　：i. to cause to rise up, raise up, ii. to rise, stand upto rise, stand up, iii. at arise, appear, stand forth）他の意味にも使われるマルコ 1:35, 2:14, 3:26, 5:42, 7:24, 9:27, 10:1, 10:50.
    * 8:31,32a それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、しかもあからさまに、この事を話された。（マタイ 16:21）
    * 9:9,10 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。(マタイ 17:9)
    * 9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。(マタイ 17:23)
    * 10:34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。(マタイ 20:19)
    * 参照：「長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。（マタイ 27:63）
  - 「復活（　　：i. a raising up, rising (e.g. from a seat), a rising from the dead)」口語訳（福音書）
    * マルコ 12:18 復活ということはないと主張していたサドカイ人たちが、イエスのもとにきて質問した、（マタイ 22:23, ルカ 20:27）
    * マルコ 12:23 復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。（マタイ 22:28, ルカ 20:33）

* マタイ 22:30,31 復活の時には、彼らはめとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。31 また、死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を読んだことがないのか。（ルカ 20:35,36）
* マタイ 27:53 そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。
* ルカ 9:8 またある人たちは、エリヤが現れたと言い、またほかの人たちは、昔の預言者のひとりが復活したのだと言っていたからである。
* ルカ 9:19 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。しかしほかの人たちは、エリヤだと言い、また昔の預言者のひとりが復活したのだと、言っている者もあります」。
* ルカ 14:14 そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」。
* ヨハネ 5:29 善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。
* ヨハネ 11:24,25 マルタは言った、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。25 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。
* 使徒 1:22, 2:31, 4:2, 33, 17:18, 32, 23:6, 8, 24:15, 21, 26:23
* パウロ書簡
  - ローマ 1:4 聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである。
  - ローマ 6:5 もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にもひとしくなるであろう。
  - 1 コリント 15:12,13 さて、キリストは死人の中からよみがえったのだと宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死人の復活などはないと言っているのは、どうしたことか。13 もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかったであろう。
  - 1 コリント 15:21 それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければならない。
  - 1 コリント 15:35-44 しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。36 おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。37 また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦であっても、ほかの種であっても、ただの種粒にすぎない。38 ところが、

神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。39 すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。40 天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。41 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。42 死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、43 卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、44 肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。

- ピリピ 3:10 すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、(11 なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである。)

- 2 テモテ 2:18 彼らは真理からはずれ、復活はすでに済んでしまったと言い、そして、ある人々の信仰をくつがえしている。

* その他の書簡

- ヘブル 6:2 洗いごとについての教と按手、死人の復活と永遠のさばき、などの基本の教をくりかえし学ぶことをやめようではないか。

- 1 ペテロ 3:21 この水はバプテスマを象徴するものであって、今やあなたがたをも救うのである。それは、イエス・キリストの復活によるのであって、からだの汚れを除くことではなく、明らかな良心を神に願い求めることである。

- 黙示録 20:5,6 （それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった。）これが第一の復活である 6 この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。

– よみがえ（って）（ : to arouse, cause to rise, i. to arouse from sleep, to awake, ii. to arouse from the sleep of death, to recall the dead to life, iii. to cause to rise from a seat or bed etc., iv to raise up, produce, cause to appear）Mt 9:25, 10:8, 11:5, 14:2, 16:21, 17:9, 23, 20:19, 26:32, 27:52, 27:63, 64, 28:6, Mk 5:41, 6:16, 12:26, 14:28, 16:6, 14. Lk 7:14, 7:22, 8:54, 9:7, 22, Jn 2:19, 20, 5:21, 12:1, 9, 17, 21:14, Acts 5:30, 10:40, 13:30, 37, 26:8, Rm 4:24, 25, 6:4, 9, 7:4, 8:11, 8:34, 10:9, 1Cor 6:14, 15:4, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 20, 29, 32, 35, 42, 43, 44, 52, 2Cor 1:9, 2Cor 1:9, 4:14, 5:15, Gal 1:1, Eph 1:20, 5:14, Phil 1:17, Co 2:12, 1Th 1:10, 2Ti 2:8, Heb 11:19, Jas 5:15?, 1Pet 1:21

  * マルコ 5:41 そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。

* マルコ 6:14-16 さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。ある人々は「バプテスマのヨハネが、死人の中からよみがえってきたのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」と言い、15 他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者のような預言者だ」と言った。16 ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」と言った。

* マルコ 12:26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。

* マルコ 14:28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。

* マルコ 16:6 するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。

* マルコ 16:14 その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。

* ヨハネ 12:1 過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた。そこは、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロのいた所である。

* ヨハネ 12:9 大ぜいのユダヤ人たちが、そこにイエスのおられるのを知って、押しよせてきた。それはイエスに会うためだけではなく、イエスが死人のなかから、よみがえらせたラザロを見るためでもあった。

* ヨハネ 21:14 イエスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

* ローマ 4:24, 25, 6:4, 9, 7:4, 8:11, 8:34, 10:9

* ローマ 6:4 すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。

* ローマ 6:9 キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことを、知っているからである。

* ローマ 7:4 わたしの兄弟たちよ。このように、あなたがたも、キリストのからだをとおして、律法に対して死んだのである。それは、あなたがたが他の人、すなわち、死人の中からよみがえられたかたのものとなり、こうして、わたしたちが神のために実を結ぶに至るためなのである。

    * ローマ 8:11 もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるであろう。

    * ローマ 8:34 だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。

    * ローマ 10:9 すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。

    * 1 コリント 6:14 そして、神は主をよみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。

    * 1 コリント 15:4, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 20, 29, 32, 35, 42, 43, 44, 52

- 旧約聖書からの引用

  – 申命記 25:5-10 兄弟が一緒に住んでいて、そのうちのひとりが死んで子のない時は、その死んだ者の妻は出て、他人にとついではならない。その夫の兄弟が彼女の所にはいり、めとって妻とし、夫の兄弟としての道を彼女につくさなければならない。6 そしてその女が初めに産む男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名をイスラエルのうちに絶やさないようにしなければならない。7 しかしその人が兄弟の妻をめとるのを好まないならば、その兄弟の妻は町の門へ行って、長老たちに言わなければならない、『わたしの夫の兄弟はその兄弟の名をイスラエルのうちに残すのを拒んで、夫の兄弟としての道をつくすことを好みません』。8 そのとき町の長老たちは彼を呼び寄せて、さとさなければならない。もし彼が固執して、『わたしは彼女をめとることを好みません』と言うならば、9 その兄弟の妻は長老たちの目の前で、彼のそばに行き、その足のくつを脱がせ、その顔につばきして、答えて言わなければならない。『兄弟の家をたてない者には、このようにすべきです』。10 そして彼の家の名は、くつを脱がされた者の家と、イスラエルのうちで呼ばれるであろう。

    * 以下の規定に関する例外事項としてしるされている。レビ 18:16 あなたの兄弟の妻を犯してはならない。それはあなたの兄弟をはずかしめることだからである。レビ 20:21 人がもし、その兄弟の妻を取るならば、これは汚らわしいことである。彼はその兄弟をはずかしめたのであるから、彼らは子なき者となるであろう。

  – 出エジプト 3:1-10 モーセは妻の父、ミデヤンの祭司エテロの羊の群れを飼っていたが、その群れを荒野の奥に導いて、神の山ホレブにきた。2 ときに主の使は、しばの中の炎のうちに彼に現れた。彼が見ると、しばは火に燃えているのに、そのしばはなくならなかった。3 モーセは言った、「行ってこの大きな見ものを見、なぜしばが燃えてしまわないかを知ろう」。4 主は彼がきて見定めようとするのを見、神はしばの中から彼を呼んで、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼は「ここにいます」と言った。5 神は言われた、「ここに近づいてはいけない。足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」。6 また言われた、「わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。モーセは神を見ることを恐れたので顔を隠した。6 また言わ

れた、「わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。モーセは神を見ることを恐れたので顔を隠した。7 主はまた言われた、「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを、つぶさに見、また追い使う者のゆえに彼らの叫ぶのを聞いた。わたしは彼らの苦しみを知っている。8 わたしは下って、彼らをエジプトびとの手から救い出し、これをかの地から導き上って、良い広い地、乳と蜜の流れる地、すなわちカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとのおる所に至らせようとしている。9 いまイスラエルの人々の叫びがわたしに届いた。わたしはまたエジプトびとが彼らをしえたげる、そのしえたげを見た。10 さあ、わたしは、あなたをパロにつかわして、わたしの民、イスラエルの人々をエジプトから導き出させよう」。

- ヨハネ 11:25-36 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。27 マルタはイエスに言った、「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」。28 マルタはこう言ってから、帰って姉妹のマリヤを呼び、「先生がおいでになって、あなたを呼んでおられます」と小声で言った。29 これを聞いたマリヤはすぐに立ち上がって、イエスのもとに行った。30 イエスはまだ村に、はいってこられず、マルタがお迎えしたその場所におられた。31 マリヤと一緒に家にいて彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、彼女は墓に泣きに行くのであろうと思い、そのあとからついて行った。32 マリヤは、イエスのおられる所に行ってお目にかかり、その足もとにひれ伏して言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう」。33 イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、34 「彼をどこに置いたのか」。彼らはイエスに言った、「主よ、きて、ごらん下さい」。35 イエスは涙を流された。36 するとユダヤ人たちは言った、「ああ、なんと彼を愛しておられたことか」。
- バークレイ
  - サドカイ人たちは、この世の像のなかに天を作り出す過ちを犯した。彼らは、この世の事物の言葉の中で天を考えた。人々は常にそうするものである。
    - ＊ １コリント 2:9 しかし、聖書に書いてあるとおり、／「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、／人の心に思い浮びもしなかったことを、／神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」／のである。
    - ＊ イザヤ 64:4 いにしえからこのかた、／あなたのほか神を待ち望む者に、／このような事を行われた神を聞いたことはなく、／耳に入れたこともなく、目に見たこともない。
  - イエスは復活についての確信を、神と善人との関係はなにものも破ることができないという事実に基礎づけた。一度、ひとが永遠なる神との人格的関係にはいると、その関係は永遠である。神は、アブラハム、イサク、ヤコブが生きていた時、彼らの友であられた。
    - ＊ 神は、神に仕え、神を愛するひとにたいして、神であることをやめることができない。（ロアジ 1857-1940）

    * 詩篇 73:23-24 けれどもわたしは常にあなたと共にあり、／あなたはわたしの右の手を保たれる。24 あなたはさとしをもってわたしを導き、／その後わたしを受けて栄光にあずからせられる。

- エノク書 10:17-19
  - その時、すべての義人はまぬがれて、何千人の子を生むに至るまで生きながらえ、その若き日と老年のすべての日を、彼らは平安のうちにまっとうする。その時、全地は義によって耕され、くまなく木々がうえられて祝福に満ちる。すべて望ましい木はそこに植えられ、ぶどうが飢えられる。そこに飢えたぶどうはおびただしい酒を生じ、まかれたすべての種は、一マスが千マスを生じ、一マスのオリーブは十マスの油をもたらす。
- クムラン宗規要覧
  - すべてこれ（真実の霊）によって歩むものへの報いは、いやし、長命にともなう豊かな平安、永遠の祝福をもつ多くの子供、永遠の命による永久の喜び、栄光の冠と永久の光に輝く衣である。
- ヨセフス
  - ユダヤ人古代史 18:1:3 パリサイ人は、霊魂はそのうちに不滅の力をもち、ひとが現世で有徳に生きたかよこしまに生きたかに応じて、地下で報酬と刑罰があり、後者は永遠の獄屋に閉じ込められるのに対して、前者は生まれ変わって再び生きる力を持つと信じる。
  - ユダヤ戦記 2:8:11 エッセネ派の教えは次の通り。肉体は朽つべきもので、それが作られている物質もまた永遠でないが、霊魂は永続する。それは最も微妙な大気から出て、獄に入るように体に結合される。一種自然ないざないによって引き込まれるのである。しかし、肉のかせから解き放たれるときには、年久しい奴隷のくびきからすくわれたかのように、喜んで上に昇る。
- タルムード
  - あの世では女は毎日子をうむとか（シャッバス 30b）、復活者は死人に触れたのだから清めの儀式が必要いなかまで論じられる。（ニッダー 70b、サンヘドリン 70b）
- レビラト婚（Levirate marriage）
  - Wikipedia (日)（E）寡婦が死亡した夫の兄弟と結婚する慣習。レビラトは、ラテン語で夫の兄弟を意味するレウィル (levir) に由来する。レビレート婚とも。Levirate marriage is a type of marriage in which the brother of a deceased man is obliged to marry his brother's widow. Levirate marriage has been practiced by societies with a strong clan structure in which exogamous marriage (i.e. marriage outside the clan) is forbidden.
- 天使
  - 旧約聖書
    * ヨブ記 4:18 見よ、彼はそのしもべをさえ頼みとせず、／その天使をも誤れる者とみなされる。

* ヨブ記 33:23 もしそこに彼のためにひとりの天使があり、／千のうちのひとりであって、仲保となり、／人にその正しい道を示すならば、
* 詩篇 78:25 人は天使のパンを食べた。神は彼らに食物をおくって飽き足らせられた。
* 詩篇 78:49 神は彼らの上に激しい怒りと、憤りと、／恨みと、悩みと、滅ぼす天使の群れとを放たれた。
* 詩篇 91:11 これは主があなたのために天使たちに命じて、／あなたの歩むすべての道で／あなたを守らせられるからである。
* 詩篇 148:2 その天使よ、みな主をほめたたえよ。その万軍よ、／みな主をほめたたえよ。
* ダニエル 10:13 ペルシャの国の君が、二十一日の間わたしの前に立ちふさがったが、天使の長のひとりであるミカエルがきて、わたしを助けたので、わたしは、彼をペルシャの国の君と共に、そこに残しておき、

– 福音書

* ルカ 20:36 彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。

– その他の新約聖書

* 使徒 6:15 議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた。
* 使徒 23:8, 9 元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊とかは、いっさい存在しないと言い、パリサイ人は、それらは、みな存在すると主張している。9 そこで、大騒ぎとなった。パリサイ派のある律法学者たちが立って、強く主張して言った、「われわれは、この人には何も悪いことがないと思う。あるいは、霊か天使かが、彼に告げたのかも知れない」。
* ローマ 8:38 わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、
* 1 コリント 4:9 わたしはこう考える。神はわたしたち使徒を死刑囚のように、最後に出場する者として引き出し、こうしてわたしたちは、全世界に、天使にも人々にも見せ物にされたのだ。
* 1 コリ 11:10 それだから、女は、かしらに権威のしるしをかぶるべきである。それは天使たちのためでもある。
* 2 コリ 11:14 しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。
* ガラテヤ 3:19 それでは、律法はなんであるか。それは違反を促すため、あとから加えられたのであって、約束されていた子孫が来るまで存続するだけのものであり、かつ、天使たちをとおし、

仲介者の手によって制定されたものにすぎない。

* コロサイ 2:18 あなたがたは、わざとらしい謙そんと天使礼拝とにおぼれている人々から、いろいろと悪評されてはならない。彼らは幻を見たことを重んじ、肉の思いによっていたずらに誇るだけで、
* 1 テサロニケ 4:16 すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、
* 2 テサロニケ 1:7 それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。
* ヘブル 2:16 確かに、彼は天使たちを助けることはしないで、アブラハムの子孫を助けられた。
* ヘブル 12:22 しかしあなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の天使の祝会、
* 1 ペテロ 3:22 キリストは天に上って神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられるのである。

4.71.5 記録

- 日時：2024 年 10 月 24 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）1 名

4.71.6 問いについて

1. これまで、神殿でどのような人たちとどのようなことについて話したか復習しましょう。（11:27-12:17）
   - [DQ] どのようなグループの人たちとの話かも同時に復習しましょう。
   - 権威についての問答（11:27-33）vs 祭司長、律法学者、長老たち（27）
     - 問：11:28「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。
     - イエス：11:30 ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。
   - 「ぶどう園の農夫」のたとえ（12:1-12）vs （おそらく）祭司長、律法学者、長老たち（27）
     - イエス：12:9 このぶどう園の主人は、どうするだろうか。彼は出てきて、農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう。

  - 人々：12:12 彼らはいまの譬が、自分たちに当てて語られたことを悟ったので、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。そしてイエスをそこに残して立ち去った。

- 皇帝への税金（12:13-17）vs パリサイ人やヘロデ党の者数人
  - 12:14b カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか
  - 12:17b カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい

2. サドカイ人は、どのような人たちですか。復活についてはどう考えていますか。（18）

- 18 復活ということはないと主張していたサドカイ人たちが、イエスのもとにきて質問した、
- 荒井献：伝統主義・保守主義の立場をとり、「モーセ律法」ないしは「モーセ五書」のみを聖文書として、ここに認められない、あるいはこれ以後の時代に成立したと言われる新思想ー例えば律法の敷衍解釈による法の細則・天使論・復活思想などーを一切認めなかった。もっとも、政治的には、彼らがユダヤ社会の経済的上層と密着していただけに、外国支配勢力に対しては一般的に協調策をとっている。そのために、たとえば復活思想の否認は、当時における世界体制の思想であるヘレニズム・ローマ思想を受容した結果であるとも説明できる。
- 榊原康夫：政治団体に近く、当時の最高議会議員の大半を占めていました。彼らはそのように、時の権力者と結びつく世俗主義者であるために、時代の流行に敏感な進歩主義者・合理主義者でもありました。それで、一応ユダヤ教を信じはしても、モーセの律法にしるされた明白な定め以外は認めません。
- 使徒行伝 23 章 8 節元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊とかは、いっさい存在しないと言い、パリサイ人は、それらは、みな存在すると主張している。
- ヨセフス「ユダヤ人古代史」
  - 13-10-6 後半：パリサイ人は、モーセの律法には書かれていない、先祖から受け継いだ多くの慣習を民衆に伝えてきたということである。そのため、サドカイ人はそれを拒絶し、書かれた言葉にある慣習は義務であるとみなすべきだが、先祖の伝統に由来するものは守るべきではないと言うのである。そして、これらのことに関して、彼らの間には大きな論争と不和が生じており、サドカイ派は富裕層以外を説得できず、民衆の支持も得られないが、パリサイ派は大衆の支持を得ている。(Google Chrome 翻訳)
  - 18-1-4 しかし、サドカイ派の教えはこうです。魂は肉体と共に死ぬということです。彼らは、律法が命じていること以外は何事も守ろうとしません。なぜなら、彼らは、よく会う哲学の教師たちと議論することが美徳であると考えているからです。しかし、この教えを受け入れるのは少数の人たち、それでも最も高貴な人たちだけです。しかし、彼らは自分ではほとんど何もすることができません。なぜなら、時には不本意に、そして強制的にそうならざるを得ないのですが、行

政官になると、彼らはパリサイ人の観念に溺れるからです。そうでなければ、大衆はそれを受け入れないでしょうから。(Google Chrome 翻訳)

- 死人の復活に関する教えはイザヤ 26:19、ダニエル 12:2 に至るまで現れなかったからである。
  - イザヤ 26:19　あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの露は光の露であって、／それを亡霊の国の上に降らされるからである。
  - ダニエル 12:2　また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう。

3. サドカイ人たちは、どんな質問をしますか。(19-23)

- 19 「先生、モーセは、わたしたちのためにこう書いています、『もし、ある人の兄が死んで、その残された妻に、子がない場合には、弟はこの女をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。20 ここに、七人の兄弟がいました。長男は妻をめとりましたが、子がなくて死に、21 次男がその女をめとって、また子をもうけずに死に、三男も同様でした。22 こうして、七人ともみな子孫を残しませんでした。最後にその女も死にました。23 復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。
- [DQ] どのようなモーセのことばに言及していますか。
- [A] 申命記 25:5(-10) 兄弟が一緒に住んでいて、そのうちのひとりが死んで子のない時は、その死んだ者の妻は出て、他人にとついではならない。その夫の兄弟が彼女の所にはいり、めとって妻とし、夫の兄弟としての道を彼女につくさなければならない。
- 目的
  1. 家族の名称が継続された。
  2. 家族の財産が家族の内部にとどまった。
- レビラト婚（Levirate marriage）
  - Wikipedia (日)（E）寡婦が死亡した夫の兄弟と結婚する慣習。レビラトは、ラテン語で夫の兄弟を意味するレウィル (levir) に由来する。レビレート婚とも。
- [DQ] この人たちはなぜこのような質問をするのですか。
- [A] モーセ五書には書いておらず、今の世には何も関係がない合理性がない。
- [A] 未亡人の救済の法律が、かえってあの世で彼女を困らせるのは妙だ。(榊原康夫)
- [DQ] 霊魂不滅という、哲学思想からの問いなのでしょうか。

4. イエスはサドカイ人たちがどんな思い違いをしていると言っていますか。(24, 25)

- 24 イエスは言われた、「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか。25 彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。
- 復活が起こり、ひとがよみがえるとき、肉体的生活の古い法則はもはや通用しない、よみがえったものは、天使のようであり、結婚するとか、結婚したとかいうような肉体的な事柄は、その事柄の中に入っていない。（バークレイ）
  - エノク書、バルクの黙示の中にも似たような記述あり。（エノク書 10:17-19）
  - 来たるべき命は、この世の言葉では考えることができない。
- 来世では、出産がなく、したがって結婚はない。その生命は神から受けるので、だれがしかの子といわれず、「神の子」と呼ばれる。この相違を知らないのは、聖書も神の力も知らぬ宗教的無知から生じている。（榊原康夫）
- [参照] ルカ 20:36 彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。

5. イエスは、復活について、どのような聖書を引用していますか。（26,27）

- 26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている」。
- [DQ] イエスは旧約聖書からの引用でなにを伝えているのでしょうか。
- [Ref] 出エジプト 3:6 また言われた、「わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。モーセは神を見ることを恐れたので顔を隠した。
- もし、神がこれらの族長たちの神であれば、生きています神は生きている人々の神であり、存在せず、死んだ者の神ではないので、それは、彼らがなお生きておらねばならないことを意味する。（バークレイ）
- [DQ] 「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。」は何を伝えているのでしょうか。
- 生きるのはすべて神に対して生きる。（榊原康夫）
  - ヨハネ 11:25-26 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。
  - （真に生きるということ）2 テサロニケ 3:11 ところが、聞くところによると、あなたがたのうちのある者は怠惰な生活を送り、働かないで、ただいたずらに動きまわっているとのことである。

- （生ける屍とは異なる生きから）1 テモテ 5:6 これに反して、みだらな生活をしているやもめは、生けるしかばねにすぎない。
- （永遠の神との関係）ハバクク 1:12 わが神、主、わが聖者よ。あなたは永遠からいますかたではありませんか。わたしたちは死んではならない。主よ、あなたは彼らをさばきのために備えられた。岩よ、あなたは彼らを懲らしめのために立てられた。

- 今、生命の源泉たる神との関わり方をかえるべき。
  - 彼らはもう死ぬことができない。
    - ルカ 20:36 彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。

6. イエスは、この箇所で復活についてどのようなことを教えているのでしょうか。
   - [DQ] マタイとルカには、どのような反応が描かれていますか。
     - マタイ 22:33 群衆はこれを聞いて、イエスの教に驚いた。
     - ルカ 20:39,40 律法学者のうちのある人々が答えて言った、「先生、仰せのとおりです」。40 彼らはそれ以上何もあえて問いかけようとしなかった。
   - [DQ] イエスの復活、神理解について、この箇所から分かることを上げてみましょう。
   - [DQ] 死んだひとが生き返ること、イエスの復活、一般の（イエス以外の）ひとの死後の復活、神との関係において、生き続けること、それぞれの関係と、それぞれの意味についてはどう考えたらよいのでしょうか。

4.71.7 メモ

- 問い：サドカイ人は、復活を信ぜず、パリサイ人は、それを信じていたようだが（使徒 23:6）なぜ、そのように信じ、何を根拠にそう信じていたのだろうか。そのように信じるような経緯もしりたい。復活を信じる、パリサイ人は、サドカイ人の 12:19-23 節の問いに、どう答えていたのだろうか。
- 問い：アブラハム、イサク、ヤコブは生きていると証言しているようだが、イエスは復活についてどのような理解をもっていたのだろうか。イエス自身が「よみがえる」ことについて何回か述べられているが（マルコ 8:31, 9:9-10, 9:31, 10:34）、イエスは自身の復活についてどのように認識していたのだろうか。
- 共観福音書（マルコとの）差異：マタイは、最後に反応を記述した「33 群衆はこれを聞いて、イエスの教に驚いた。」のみが加わっているが、本文は基本的に同じとしてよい。ルカは、イエスの答えの中に、復活に関する理解の差異がある。最後の反応が異なるが、これは、ルカでは、次の「最も重要な戒め」が欠けており、並行箇所が「善いサマリア人」の前半に対応しており、議論としては、最後にしているので、マ

ルコでは、「最も重要な戒め」の最後にある「それから後は、イエスにあえて問う者はなかった。」で閉じられている。復活に関する記述の違いは、重要である。まず、35 節では、死人からの復活はすべての人ではなく「復活にあずかるにふさわしい者たち」となっている点、さらに、36 節には「天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ない」と、マルコにはないことがが付け加えられている。

  - ルカ 20:35 かの世にはいって死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、とついだりすることはない。36 彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。

  - ルカ 20:38b 人はみな神に生きるものだからである」。39 律法学者のうちのある人々が答えて言った、「先生、仰せのとおりです」。40 彼らはそれ以上何もあえて問いかけようとしなかった。

- イエスは二種類の応答をしている。1 つ目は、「死人の中からよみがえるときは、天にいる御使いのようなもので、めとったり、とついだりしない。」ということ、2 つ目は、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神であり、アブラハム、イサク、ヤコブも（神に対して）生きているのだということ、である。1 つ目は、宣言であり、説明としては理解できるが、2 つ目は、混乱を来すように思える。

- イエスと共に生きる、神の子として生きるいのちは、この世の社会的な制度や規則に縛られるものではなく、復活を考える時には、拘束されない。また、主（神、神の子イエス）との交わり、主との結びつきは、現在から続く、永遠のものである。

- イエスの聖書解釈には、驚かされる。本当に、これが、死人がよみがえることについて語られている箇所なのだろうか。

  - 37 死人がよみがえることは、モーセも柴の篇で、主を『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、これを示した。38 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。人はみな神に生きるものだからである」。

4.72 12:28-34 最も重要な戒め

28 ひとりの律法学者がきて、彼らが互に論じ合っているのを聞き、またイエスが巧みに答えられたのを認めて、イエスに質問した、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」。29 イエスは答えられた、「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。30 心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。31 第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。32 そこで、この律法学者はイエスに言った、「先生、仰せのとおりです、『神はひとりであって、そのほかに神はない』と言われたのは、ほんとうです。33 また『心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また自分を愛するように隣り人を愛する』ということは、すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです」。34 イエスは、彼が適切な答をしたのを見て言われた、「あなたは神の国から遠くな

い」。それから後は、イエスにあえて問う者はなかった。

4.72.1 マタイ 22:34-40

34 さて、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを言いこめられたと聞いて、一緒に集まった。35 そして彼らの中のひとりの律法学者が、イエスをためそうとして質問した、36 「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。37 イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。38 これがいちばん大切な、第一のいましめである。39 第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。40 これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。

4.72.2 ルカ 10:25-28

25 するとそこへ、ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。26 彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか」。27 彼は答えて言った、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。28 彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。

マルコによる福音書 12 章 28-34 節福音書対照表

4.72.3 問い

1. これまで、神殿でどのような人たちとどのようなことについて話したか復習しましょう。(11:27-12:27)
2. この律法学者はどのような動機からどのような質問をしていますか。(28)
3. イエスはなんと答えていますか。(29-31)
4. 「あなたの神である主を愛せよ」「隣人を自分と同じように愛せよ」とはどのようないましめですか。(29-31)
5. この律法学者は、イエスの答えを聞いて、どのように語り、イエスはこの律法学者にどう伝えますか。(32-34)
6. あなたは、イエスが神殿で語ったことから、どのようなことを学びましたか。

4.72.4 参照

- 出エジプト記 20:3-17 あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。4 あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあ

るものの、どんな形をも造ってはならない。5 それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、6 わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。7 あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。8 安息日を覚えて、これを聖とせよ。9 六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。10 七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。11 主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。12 あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。13 あなたは殺してはならない。14 あなたは姦淫してはならない。15 あなたは盗んではならない。16 あなたは隣人について、偽証してはならない。17 あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない」。

- バークレイ
  - ヒルレル（片足で立っている間に律法の全体を教えてくれるようにとの依頼にこたえ）：あなたが自分自身にされるのを憎むことを、あなたの隣人にするな。これが律法の全体である。残りはその注解である。行って学べ。
  - アキバ：『隣人をあなた自身のように愛せよ』ーこれが一番大きい、一般的な律法である。
  - 義人シモン：三つのことの上に世界は成り立っているー律法と、礼拝と、愛の働きの上に。
  - サムラー：モーセがシナイ山によいて６１３の法則を授けられた、それは太陽年の日数に従って３６５（榊原：禁止命令），人間の世代数に従って２４８（榊原：積極命令）を受けた。
  - ダビデ（詩篇１５篇）主よ、あなたの幕屋に宿るものはだれですか、あなたの聖なる山に住むべき者はだれですか。
    1. 直く歩む者。
    2. 義を行う者。
    3. 心から真実を語る者。
    4. その舌をもってそしらぬ者。
    5. その友に悪をなさざる者。
    6. その隣り人に対するそしりを取りあざける者。
    7. その目が神に捨てられた者を卑しめる者。
    8. 主を恐れる者を尊ぶ者。

9. 誓ったことは自分の損害になっても変えない者。
10. 利益をとって金銭を貸さない者。
11. 罪のない者の不利をはからない者。

– イザヤ（イザヤ 33:15）
  1. 正しく歩む者。
  2. 正直に語る者。
  3. しえたげて得た利を卑しめる者。
  4. 手を振って、まいないを取らない者。
  5. 耳をふさいで地を流す謀略を聞かない者。
  6. 目を閉じて悪を見ない者。

– ミカ（ミカ 6:8）主のあなたに求められることは、
  1. 公義をおこない。
  2. いつくしみを愛し。
  3. へりくだってあなたの神と共に歩むことである。

– イザヤ（イザヤ 56:1）
  1. あなたがたは公平を守れ。
  2. そして正義を行え。

– ハバクク（ハバクク 2:4）
  * 義人はその信仰によって生きる。

– アウグスティヌス（354-430）
  * 神を愛しーそして、あなたの好きなようにしなさい。

– 十二族長の遺訓（Early Christian Writings: The Testaments of the Twelve Patriarchs）
  * イッサカルの遺訓（THE TESTAMENT OF ISSACHAR, THE FIFTH SON OF JACOB AND LEAH）5:2：主を愛し、あなたの隣人を愛せよ。貧しき者と弱き者に同情せよ。But love the Lord and your neighbour, Have compassion on the poor and weak.

    * イッサカルの遺訓（THE TESTAMENT OF ISSACHAR, THE FIFTH SON OF JACOB AND LEAH）7:6：わたしは主を愛した、同様に、すべての人々を心を尽くして愛した。I loved the Lord; Likewise also every man with all my heart.

    * ダンの遺訓（THE TESTAMENT OF DAN, THE SEVENTH SON OF JACOB AND BILHAH.）5:3：あなたの全生涯をかけて主を愛せよ。また、真実の心をもってお互いに愛し合え。Love the Lord through all your life, And one another with a true heart.

- シェマ（聞け）聖句箱（小さな革の小箱）の中に入れ、祈る時に、身につけた。
  - 申命記 6:4-9 イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。5 あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。6 きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、7 努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。8 またあなたはこれをあなたの手につけてしるしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし、9 またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない。
  - 申命記 11:13-21 もし、きょう、あなたがたに命じるわたしの命令によく聞き従って、あなたがたの神、主を愛し、心をつくし、精神をつくして仕えるならば、14 主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨ともに、時にしたがって降らせ、穀物と、ぶどう酒と、油を取り入れさせ、15 また家畜のために野に草を生えさせられるであろう。あなたは飽きるほど食べることができるであろう。16 あなたがたは心が迷い、離れ去って、他の神々に仕え、それを拝むことのないよう、慎まなければならない。17 おそらく主はあなたがたにむかい怒りを発して、天を閉ざされるであろう。そのため雨は降らず、地は産物を出さず、あなたがたは主が賜わる良い地から、すみやかに滅びうせるであろう。18 それゆえ、これらのわたしの言葉を心と魂におさめ、またそれを手につけて、しるしとし、目の間に置いて覚えとし、19 これを子供たちに教え、家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、それについて語り、20 また家の入口の柱と、門にそれを書きしるさなければならない。21 そうすれば、主が先祖たちに与えようと誓われた地に、あなたがたの住む日数およびあなたがたの子供たちの住む日数は、天が地をおおう日数のように多いであろう。
  - 民数記 15:37-41 主はまたモーセに言われた、38 「イスラエルの人々に命じて、代々その衣服のすその四すみにふさをつけ、そのふさを青ひもで、すその四すみにつけさせなさい。39 あなたがたが、そのふさを見て、主のもろもろの戒めを思い起して、それを行い、あなたがたが自分の心と、目の欲に従って、みだらな行いをしないためである。40 こうして、あなたがたは、わたしのもろもろの戒めを思い起して、それを行い、あなたがたの神に聖なる者とならなければならない。41 わたしはあなたがたの神、主であって、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの国から導き出した者である。わたしはあなたがたの神、主である」。
  - シェマについて
    * 夕方の何時からシェマをとなえればよいか。祭司たちが挙祭を食べにはいってから第一の刻の初

めまで。そうラビ・エリエゼルは言った」（ミシュナー：ベーラーコート 1:1）朝の何時からシェマをとなえればよいか。青と白とを見分けられるようになったら即刻。ラビ・エリエゼルは、青と緑をと言う。そして日の出前に終わらねばならぬ。(2)

  - ヤコブ 2:19 あなたは、神はただひとりであると信じているのか。それは結構である。悪霊どもでさえ、信じておののいている。

- レビ記 19:18 あなたはあだを返してはならない。あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。わたしは主である。
  - 本来の背景としては、自分の仲間のユダヤ人について。
  - ローマ 13:9 「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というこの言葉に帰する。
  - ガラテヤ 5:14 律法の全体は、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」というこの一句に尽きるからである。
  - ヤコブ 2:8 しかし、もしあなたがたが、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」という聖書の言葉に従って、このきわめて尊い律法を守るならば、それは良いことである。

4.72.5 記録

- 日時：2024 年 10 月 31 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.72.6 問いについて

1. これまで、神殿でどのような人たちとどのようなことについて話したか復習しましょう。(11:27-12:27)
   - 権威についての問答（11:27-33）vs 祭司長、律法学者、長老たち（27）
     - 問：11:28「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。
     - イエス：11:30 ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。
   - 「ぶどう園の農夫」のたとえ（12:1-12）vs （おそらく）祭司長、律法学者、長老たち（27）
     - イエス：12:9 このぶどう園の主人は、どうするだろうか。彼は出てきて、農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう。

  - 人々：12:12 彼らはいまの譬が、自分たちに当てて語られたことを悟ったので、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。そしてイエスをそこに残して立ち去った。

- 皇帝への税金（12:13-17）vs パリサイ人やヘロデ党の者数人
  - 12:14b カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか
  - 12:17b カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい
- 復活についての問答（12:18-27）vs サドカイ人たち
  - 問：12:23 復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。
  - イエス：12:24,25 24 イエスは言われた、「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか。25 彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。
  - イエス：12:26,27 26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている」。

2. この律法学者はどのような動機からどのような質問をしていますか。(28)

- 28 ひとりの律法学者がきて、彼らが互に論じ合っているのを聞き、またイエスが巧みに答えられたのを認めて、イエスに質問した、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」。
- [DQ] 何を聞きたいのでしょう。質問の意図は何でしょうか。マタイと、ルカではどのように表現していますか。
  - マルコ：イエスが巧みに答えられたのを認めて、- 敬意が現れている。
  - マタイ：イエスをためそうとして質問した
  - ルカ：イエスを試みようとして
- [A] マルコの文章からは悪意は感じられない。マタイやルカでは「ためそうとして、試みようとして」とあるが、質問からすると、受け取り方の問題であり、悪意がなかった可能性もある。マルコが最初に書かれたとすると、ルカは背景が異なるかもしれないが、マタイにおいては、喜捨の、律法学者に対する敵愾心があるのかもしれない。
- [DQ] 質問については、マタイと、ルカからは、どのようなことがわかりますか。
  - マルコ：先生、すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか

  - マタイ：先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか
  - ルカ：先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか

3. イエスはなんと答えていますか。(29-31)

- 29 イエスは答えられた、「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。30 心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。31 第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。
- 申命記 6:4,5 イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。5 あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。
- レビ記 19:18 あなたはあだを返してはならない。あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。わたしは主である。
  - 「あなたの民」とあり、基本的には、隣人は「同胞」を意味すると理解されており、それが当然であったと思われる。
- マルコは、シェマーの「イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。」から初めているが、マタイでは、それが省略されている。また、「力を尽くし」も省略されている。また、マルコ、マタイ、ルカとも、申命記にない「思いをつくし」が挿入されている。しかし、律法学者のことばは、旧約聖書に従っているのか、「思いをつくし」がない。
- [DQ] この違いは、大したことはないのだろうか。どのような意図があるのだろうか。
- [DQ]「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」とはどのような意味でしょうか。

4.「あなたの神である主を愛せよ」「隣人を自分と同じように愛せよ」とはどのようないましめですか。(29-31)

- 29 イエスは答えられた、「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。30 心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。31 第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。
- [DQ] なぜ第一の（最も重要な）戒めは一つではなく二つなのでしょうか。なぜ二つとも必要なのでしょうか。
- [DQ] 2 つ独立のいましめでしょうか。関連しているのでしょうか。
- [HS] たいせつなひと（かた）をたいせつにすることは、たいせつなひと（かた）のたいせつなひとをたいせつにすること。

- [参照] 1ヨハネ 4:19-21 わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。20 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授かっている。

5. この律法学者は、イエスの答えを聞いて、どのように語り、イエスはこの律法学者にどう伝えますか。（32-34）

- 32 そこで、この律法学者はイエスに言った、「先生、仰せのとおりです、『神はひとりであって、そのほかに神はない』と言われたのは、ほんとうです。33 また『心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また自分を愛するように隣り人を愛する』ということは、すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです」。34 イエスは、彼が適切な答をしたのを見て言われた、「あなたは神の国から遠くない」。それから後は、イエスにあえて問う者はなかった。

- [参照] サムエル記上 15:22 サムエルは言った、／「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、／燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、／聞くことは雄羊の脂肪にまさる。

- [参照] ホセア 6:6 わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。燔祭よりもむしろ神を知ることを喜ぶ。

- [DQ] 律法学者はどのように理解したのでしょうか。（32-33）

- [DQ] 「あなたは神の国から遠くない」とは、どのような意味なのでしょうか。（34b）

  - [A] 文脈からは、十分な称賛だと考えてよいだろう。しかし、同時に、完璧ではないこと、つまり、イエスの理解からは、まだ、離れていることを示した言葉なのだろう。

- [DQ] なぜ人々は、イエスにこれ以上質問をしないのですか。（34c）

6. あなたは、イエスが神殿で語ったことから、どのようなことを学びましたか。

- イエスが、それぞれの反対勢力からの問いに対して、適切に伝え（反論し）ていることを伝えている。

- ヨハネのバプテスマとも関連しており、主のみこころ、主の働きが背後にあることを伝えている。

- 復活も、人間の興味よりも、神が生きているものの神であることを伝えることにより、神について伝えている。

- 最後に、中心的な、生き方について伝えている。

4.72.7 メモ

- 共観福音書の差異：マルコでは、「イエスが巧みに答えられたのを認めて、イエスに質問した」と始め、最後に、イエスが「あなたは神の国から遠くない」と言い、「それから後は、イエスにあえて問う者はなかった。」と書かれて対話が終わっている。しかし、マタイでは、「イエスをためそうとして質問した」と始めている。ルカでは、別の箇所、善いサマリア人のたとえの前におかれ、かつ、「何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」（10:25b）との問いから始まり、イエスは、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか」（10:26b）と問い、律法学者が同じような答えをしている。まずこのことから、律法学者と、イエスが考える、最も重要ないましめは、共通していたことがわかる。

- 細かいことだが、イエスの答えも微妙に異なる。「思いをつくして with thy mind」が、申命記にないのに、共観福音書ではすべて入っていることに特別な意味があるとすると、驚きである。もし、そうであれば、感情や霊的なものだけでなく、知的、または理性的な面も含めているということだろうか。

- イエスが「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」と問われて答えている箇所である。「わたしたちの神は、唯一の神である。その主をあなたのすべてをもって愛せよ。自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ。」（要約）が、聖書の中心的な教えということだろうか。

- 「イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。」で、聖書は、そして、イエスは何を伝えているのだろうか。他の神を認めない、排他的であることを奨励しているのだろうか。

- なぜ最も重要な戒めは一つではなく二つなのだろうか。二つとも絶対的に必要なのだろうか。二つのいましめは関連しているのだろうか、それとも独立なのだろうか。

- [HS] 隣人とは、唯一の神、主の前で、わたしと、同じ関係のおかれているひとのこと。つまり、神様が愛しておられる一人ひとりのことである。たいせつなひと（かた）をたいせつにすることは、たいせつなひと（かた）のたいせつなひとをたいせつにすること。

  - ヨハネ 7:44-49 彼らのうちのある人々は、イエスを捕えようと思ったが、だれひとり手をかける者はなかった。45 さて、下役どもが祭司長たちやパリサイ人たちのところに帰ってきたので、彼らはその下役どもに言った、「なぜ、あの人を連れてこなかったのか」。46 下役どもは答えた、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」。47 パリサイ人たちが彼らに答えた、「あなたがたまでが、だまされているのではないか。48 役人たちやパリサイ人たちの中で、ひとりでも彼を信じた者があっただろうか。49 律法をわきまえないこの群衆は、のろわれている」。

  - 一般大衆「アム・ハーアレツ（土民・無学の衆）」イエスにとっては、深く憐れむ対象。

- イエスが、それぞれの反対勢力からの問いに対して、適切に伝え（反論し）ていること、を伝えていて、ローマ帝国に処刑されたひとを救い主とする批判・非難に対して、当時のキリスト者に対する護教的な面も含まれているように思われる。

4.73　12:35-37 ダビデの子についての問答

35 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子
だと言うのか。36 ダビデ自身が聖霊に感じて言った、／『主はわが主に仰せになった、／あなたの敵をあ
なたの足もとに置くときまでは、／わたしの右に座していなさい』。37 このように、ダビデ自身がキリス
トを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。大ぜいの群衆は、喜んでイ
エスに耳を傾けていた。

4.73.1　マタイ 22:41-45(-46)

41 パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、42 「あなたがたはキリストを
どう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。43 イエスは言われた、「それではど
うして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。44 すなわち／『主はわが主に仰せになっ
た、／あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、／わたしの右に座していなさい』。45 このように、
ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。46 イエスに
ひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。

4.73.2　ルカ 20:41-44

41 イエスは彼らに言われた、「どうして人々はキリストをダビデの子だと言うのか。42 ダビデ自身が詩篇
の中で言っている、／『主はわが主に仰せになった、43 あなたの敵をあなたの足台とする時までは、／わ
たしの右に座していなさい』。44 このように、ダビデはキリストを主と呼んでいる。それなら、どうして
キリストはダビデの子であろうか」。

マルコによる福音書 12 章 35-37 節福音書対照表

4.73.3　問い

1. イエスは、どこで、どのようなことについて話し始めますか。(35)
2. ダビデは、どのようなひとですか。
3. イエスは、これまでに、ダビデの子と呼ばれたことはありますか。
4. イエスは、どのように説明しますか。(36,37a)
5. イエスは、何を伝えているのでしょうか。(36,37a)
6. 群衆は、どのように、イエスのことばを聞いていますか。(37b)

4.73.4 参照

- メシア　（ギリシャ語はキリスト、油注がれたもの。ここでは定冠詞がつき、 X　）マルコにおける「キリスト」
  - マルコ 1:1　神の子イエス・キリストの福音のはじめ。
  - マルコ 8:29　そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。
  - マルコ 9:41　だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報いからもれることはないであろう。
  - マルコ 12:35　イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。
  - （マルコ 12:37 このように、ダビデ自身がキリスト（彼）を主と呼んでいる。それなら、どうしてキリスト（彼）はダビデの子であろうか」。大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。）
  - マルコ 13:21　このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。
  - マルコ 14:61　しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。
  - マルコ 15:32　イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」。また、一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。
  - 他の福音書：マタイ 1:1, 16, 17, 18, 2:4, 11:2, 16:20, 22:42, 23:8, 23:10, 24:5, 23, 26:63, 68, 27:17, 22、ルカ 2:11, 26, 3:15, 4:41, 9:20, 20:41, 23:2, 35, 39, 24:26, 46、ヨハネ多数
    * マタイ 11:2　さて、ヨハネは獄中でキリストのみわざについて伝え聞き、自分の弟子たちをつかわして、
    * マタイ 16:20　そのとき、イエスは、自分がキリストであることをだれにも言ってはいけないと、弟子たちを戒められた。
    * ルカ 23:2 そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。
    * ルカ 24:46 言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。

- メシア　について信じられていたこと
  - イザヤ 9:1-7 しかし、苦しみにあった地にも、やみがなくなる。さきにはゼブルンの地、ナフタリの地にはずかしめを与えられたが、後には海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤに光栄を与えられる。2 暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。3 あなたが国民を増し、その喜びを大きくされたので、／彼らは刈入れ時に喜ぶように、／獲物を分かつ時に楽しむように、／あなたの前に喜んだ。4 これはあなたが彼らの負っているくびきと、／その肩のつえと、しえたげる者のむちとを、／ミデアンの日になされたように折られたからだ。5 すべて戦場で、歩兵のはいたくつと、／血にまみれた衣とは、／火の燃えくさとなって焼かれる。6 ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、／ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、／その名は、「霊妙なる議士、大能の神、／とこしえの父、平和の君」ととなえられる。7 そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、／ダビデの位に座して、その国を治め、／今より後、とこしえに公平と正義とをもって／これを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである。
  - イザヤ 11:1-9 エッサイの株から一つの芽が出、／その根から一つの若枝が生えて実を結び、2 その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、／主を知る知識と主を恐れる霊である。3 彼は主を恐れることを楽しみとし、／その目の見るところによって、さばきをなさず、／その耳の聞くところによって、定めをなさず、4 正義をもって貧しい者をさばき、／公平をもって国のうちの／柔和な者のために定めをなし、／その口のむちをもって国を撃ち、／そのくちびるの息をもって悪しき者を殺す。5 正義はその腰の帯となり、／忠信はその身の帯となる。6 おおかみは小羊と共にやどり、／ひょうは子やぎと共に伏し、／子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、／小さいわらべに導かれ、7 雌牛と熊とは食い物を共にし、／牛の子と熊の子と共に伏し、／ししは牛のようにわらを食い、8 乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、／乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。9 彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、／やぶることがない。水が海をおおっているように、／主を知る知識が地に満ちるからである。
  - エレミヤ 23:5-8 主は仰せられる、見よ、わたしがダビデのために一つの正しい枝を起す日がくる。彼は王となって世を治め、栄えて、公平と正義を世に行う。6 その日ユダは救を得、イスラエルは安らかにおる。その名は『主はわれわれの正義』ととなえられる。7 主は言われる、それゆえ見よ、人々は『イスラエルの民をエジプトの地から導き出された主は生きておられる』とまた言わないで、8 『イスラエルの家の子孫を北の地と、そのすべて追いやられた地から導き出された神は生きておられる』という日がくる。その時、彼らは自分の地に住んでいる」。
  - エレミヤ 33:14-18 主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家に約束したことをなし遂げる日が来る。15 その日、その時になるならば、わたしはダビデのために一つの正しい枝を生じさせよう。彼は公平と正義を地に行う。16 その日、ユダは救を得、エルサレムは安らかにおる。その名は『主はわれわれの正義』ととなえられる。17 主はこう仰せられる、イスラエルの家の位に座する人がダビデの子孫のうちに欠けることはない。

- エゼキエル 34:23-27 わたしは彼らの上にひとりの牧者を立てる。すなわちわがしもべダビデである。彼は彼らを養う。彼は彼らを養い、彼らの牧者となる。24 主なるわたしは彼らの神となり、わがしもべダビデは彼らのうちにあって君となる。主なるわたしはこれを言う。25 わたしは彼らと平和の契約を結び、国の内から野獣を追い払う。彼らは心を安んじて荒野に住み、森の中に眠る。26 わたしは彼らおよびわが山の周囲の所々を祝福し、季節にしたがって雨を降らす。これは祝福の雨となる。27 野の木は実を結び、地は産物を出す。彼らは心を安んじてその国におり、わたしが彼らのくびきの棒を砕き、彼らを奴隷とした者の手から救い出す時、彼らはわたしが主であることを悟る。
- 詩篇 89:20-24 わたしはわがしもべダビデを得て、／これにわが聖なる油をそそいだ。21 わが手は常に彼と共にあり、／わが腕はまた彼を強くする。22 敵は彼をだますことなく、／悪しき者は彼を卑しめることはない。23 わたしは彼の前にもろもろのあだを打ち滅ぼし、／彼を憎む者どもを打ち倒す。24 わがまことと、わがいつくしみは彼と共にあり、／わが名によって彼の角は高くあげられる。

- （福音書における）ダビデ
  - マルコ 2:25 そこで彼らに言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが食物がなくて飢えたとき、ダビデが何をしたか、まだ読んだことがないのか。
  - マルコ 11:10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。
  - マタイ 1:6 エッサイはダビデ王の父であった。ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父であり、
  - マタイ 1:17 だから、アブラハムからダビデまでの代は合わせて十四代、ダビデからバビロンへ移されるまでは十四代、そして、バビロンへ移されてからキリストまでは十四代である。
  - マタイ 1:20 彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。
  - マタイ 12:3 そこでイエスは彼らに言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが飢えたとき、ダビデが何をしたか読んだことがないのか。(Cf. マルコ 2 :25)
  - ルカ 1:27 この処女はダビデ家の出であるヨセフという人のいいなづけになっていて、名をマリヤといった。
  - ルカ 1:32 彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、
  - ルカ 1:69 わたしたちのために救の角を／僕ダビデの家にお立てになった。
  - ルカ 2:4 ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

- ルカ 2:11 きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。
- ルカ 3:31 メレヤ、メナ、マタタ、ナタン、ダビデ、
- ルカ 6:3 そこでイエスが答えて言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが飢えていたとき、ダビデのしたことについて、読んだことがないのか。(Cf. マルコ 2 :25)

- ダビデの子（イエスに関して）
  - マルコ 10:47,48　ところが、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出した。48 多くの人々は彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」。
  - マルコ 12:35-37 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。36 ダビデ自身が聖霊に感じて言った、／『主はわが主に仰せになった、／あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、／わたしの右に座していなさい』。37 このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。
  - マタイ 1:1 アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。
  - マタイ 9:27 そこから進んで行かれると、ふたりの盲人が、「ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」と叫びながら、イエスについてきた。（Cf. マルコ 10:47,48）
  - マタイ 12:23 すると群衆はみな驚いて言った、「この人が、あるいはダビデの子ではあるまいか」。
  - マタイ 15:22 すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます」と言って叫びつづけた。
  - マタイ 20:30,31 すると、ふたりの盲人が道ばたにすわっていたが、イエスがとおって行かれると聞いて、叫んで言った、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。31 群衆は彼らをしかって黙らせようとしたが、彼らはますます叫びつづけて言った、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。
  - マタイ 21:9 そして群衆は、前に行く者も、あとに従う者も、共に叫びつづけた、／「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。(Cf. マルコ 11:9)
  - マタイ 21:15 しかし、祭司長、律法学者たちは、イエスがなされた不思議なわざを見、また宮の庭で「ダビデの子に、ホサナ」と叫んでいる子供たちを見て立腹し、(Cf. マルコ 11:9)
  - マタイ 22:42,43 「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。43 イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。(Cf. マルコ 12:35-37)

- ルカ 18:38,39 声をあげて、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんで下さい」と言った。39 先頭に立つ人々が彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子よ、わたしをあわれんで下さい」。（Cf. マルコ 10:47,48）
- ルカ 20:41-44 イエスは彼らに言われた、「どうして人々はキリストをダビデの子だと言うのか。42 ダビデ自身が詩篇の中で言っている、／『主はわが主に仰せになった、43 あなたの敵をあなたの足台とする時までは、／わたしの右に座していなさい』。44 このように、ダビデはキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。(Cf. マルコ 12:35-37)
- ヨハネ 7:42 キリストは、ダビデの子孫から、またダビデのいたベツレヘムの村から出ると、聖書に書いてあるではないか」と言った。
- ローマ 1:3 御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、
- テモテへの第二の手紙 2:8 ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である。

- サムエル記下 7:8-17（ナタンの預言）
  - 8 それゆえ、今あなたは、わたしのしもべダビデにこう言いなさい、『万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを牧場から、羊に従っている所から取って、わたしの民イスラエルの君とし、9 あなたがどこへ行くにも、あなたと共におり、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去った。わたしはまた地上の大いなる者の名のような大いなる名をあなたに得させよう。10 そしてわたしの民イスラエルのために一つの所を定めて、彼らを植えつけ、彼らを自分の所に住ませ、重ねて動くことのないようにするであろう。11 また前のように、わたしがわたしの民イスラエルの上にさばきづかさを立てた日からこのかたのように、悪人が重ねてこれを悩ますことはない。わたしはあなたのもろもろの敵を打ち退けて、あなたに安息を与えるであろう。主はまた「あなたのために家を造る」と仰せられる。12 あなたが日が満ちて、先祖たちと共に眠る時、わたしはあなたの身から出る子を、あなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。13 彼はわたしの名のために家を建てる。わたしは長くその国の位を堅くしよう。14 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう。もし彼が罪を犯すならば、わたしは人のつえと人の子のむちをもって彼を懲らす。15 しかしわたしはわたしのいつくしみを、わたしがあなたの前から除いたサウルから取り去ったように、彼からは取り去らない。16 あなたの家と王国はわたしの前に長く保つであろう。あなたの位は長く堅うせられる』」。17 ナタンはすべてこれらの言葉のように、またすべてこの幻のようにダビデに語った。

- ソロモンの詩篇（BC 1世紀または2世紀）外典 17 章の一部（sacred-text.com における英文の和訳）
  - 主よ、見よ、ダビデの子を彼らのために王として立ててください。神よ、あなたが見る時に、彼はあなたのしもべイスラエルを治めます。彼に力を授け、不義の支配者たちを打ち砕き、エルサレムを踏みにじって滅ぼす国々からエルサレムを清めさせてください。彼は知恵と正義をもって罪人を相続地から追い出し、陶器師の器のように罪人の高慢さを滅ぼします。彼は鉄の杖で彼らの財産をすべて打

ち砕き、口の言葉で神を恐れない国々を滅ぼします。彼の叱責によって国々は彼の前から逃げ去り、彼は心の思いについて罪人を責めます。

- （中略）そして彼は異邦の民を自分のくびきの下に従わせ、全世界に見られる場所で主の栄光をたたえ、エルサレムを清めて、昔のように聖なる所とする。

4.73.5 記録

- 日時：2024 年 11 月 7 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）1 名

4.73.6 問いについて

1. イエスは、どこで、どのようなことについて話し始めますか。（35）
   - 35 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。$_{35}$ K · Δ ;
   - [DQ] 「キリスト」は何ですか。イエスのことですか。
   - [A] となっていて、イエスのことではない。そのことを含めて訳すと「どうして学者は、来たるべき神の油注がれた王が、ダビデの子であると言えるか。」
2. ダビデは、どのようなひとですか。
   - ダビデについては、サムエル記上 16-サムエル記下全体-列王記上 2:11 参照
   - サムエル記下 7:8-17（ナタンの預言）一部抜粋
     - 12 あなたが日が満ちて、先祖たちと共に眠る時、わたしはあなたの身から出る子を、あなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。13 彼はわたしの名のために家を建てる。わたしは長くその国の位を堅くしよう。14 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう。もし彼が罪を犯すならば、わたしは人のつえと人の子のむちをもって彼を懲らす。15 しかしわたしはわたしのいつくしみを、わたしがあなたの前から除いたサウルから取り去ったように、彼からは取り去らない。16 あなたの家と王国はわたしの前に長く保つであろう。あなたの位は長く堅うせられる』」。
   - イザヤ 9:6,7 ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、／ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、／その名は、「霊妙なる議士、大能の神、／とこしえの父、平和の君」ととなえられる。7 そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、／ダビデの位に座して、

その国を治め、／今より後、とこしえに公平と正義とをもって／これを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである。

- イザヤ 11:1,2 エッサイの株から一つの芽が出、／その根から一つの若枝が生えて実を結び、2 その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、／主を知る知識と主を恐れる霊である。
- エゼキエル 23:23,24 わたしは彼らの上にひとりの牧者を立てる。すなわちわがしもべダビデである。彼は彼らを養う。彼は彼らを養い、彼らの牧者となる。24 主なるわたしは彼らの神となり、わがしもべダビデは彼らのうちにあって君となる。主なるわたしはこれを言う。
- 詩篇 89:20 わたしはわがしもべダビデを得て、／これにわが聖なる油をそそいだ。

3. イエスは、これまでに、ダビデの子と呼ばれたことはありますか。

- マルコ 10:47,48　ところが、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出した。48 多くの人々は彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」。（マタイ 20:30,31、ルカ 18:38,39）
- [A] マルコでは、エリコでの、盲人叫びの中でしか使われていない。しかし、マタイ、ルカでは他にもある。
  - マタイ 1:1 アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。
  - マタイ 12:23 すると群衆はみな驚いて言った、「この人が、あるいはダビデの子ではあるまいか」。（ベルゼブル論争の箇所で、並行箇所のマルコ 3 章ではダビデの子という言葉は出てこない。）
  - マタイ 15:22 すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます」と言って叫びつづけた。（フェニキアの女の箇所で、並行箇所のマルコ 7 章ではダビデの子という言葉は出てこない。）
  - マタイ 21:9 そして群衆は、前に行く者も、あとに従う者も、共に叫びつづけた、／「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。(エルサレム入城の箇所で、並行箇所のマルコ 11:10 では、「今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」となっており、ダビデの子という言葉は出てこない。)
- （参照）ヨハネ 7:42 キリストは、ダビデの子孫から、またダビデのいたベツレヘムの村から出ると、聖書に書いてあるではないか」と言った。
- （参照）ローマ 1:3 御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、（テモテへの第二の手紙 2:8）

4. イエスは、どのように説明しますか。（36,37a）

- 36 ダビデ自身が聖霊に感じて言った、／『主はわが主に仰せになった、／あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、／わたしの右に座していなさい』。37 このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。
- [DQ] 詩篇 110 篇の引用は、どのようなことを言っているのでしょうか。
- 詩篇 110:0-1 ダビデの歌 1 主はわが主に言われる、／「わたしがあなたのもろもろの敵を／あなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。
- イエスはダビデとメシヤ（キリスト）の関係についてどのように言っていますか。
- [A] 「主」と「わが主」とダビデが想定されていると思われる「わたし」がいる。主は、神ととるのが自然であろう。我が主は、明らかではないが、特別な存在で、主が、わたしの右に座していなさいという存在である。それも、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでと、ある期間限定である。その後、どうなるのかは明確ではないが、主の右の座よりも高い場所が用意されているように見える。
- [参考] ヘブル 1:3,4　御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の現れであって、万物をその力ある言葉によって支えておられます。そして、罪の清めを成し遂げて、天の高い所におられる大いなる方の右の座に着かれました。御子は、天使たちより優れた者となられました。天使たちにまさる名を受け継がれたからです。

5. イエスは、何を伝えているのでしょうか。
   - [DQ] イエスは、キリストはダビデの子ということを否定しているのでしょうか。
     - [A] 表面的には否定しているように見える。
   - [DQ] イエスは、自分がダビデの子であることを否定しているのでしょうか。
     - [A] 明確には、イエスがメシアであるかには、触れていない。
   - [DQ] キリストは、ダビデの子を超えるものである。ということでしょうか。
     - [A] マタイ、ルカでは、イエスがダビデの子であるという記述を肯定しているように見えるので、聖書全体としては、キリスト・イエスはダビデの子を超えるものということを伝えていると考えるのが穏当であろう。しかし、マルコだけで考えると、イエスがダビデの子であることは、否定しているように見えるので、ここだけから、ダビデの子を超えるものとすることはできない。
6. 群衆は、どのように、イエスのことばを聞いていますか。（37b）
   - 37b 大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。
   - マタイ 22:46 イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。

- ルカ 20:40 彼らはそれ以上何もあえて問いかけようとしなかった。（復活についての問いの後、ルカは、最も大切な戒めはここには入れていない）
- マルコ 12:34b それから後は、イエスにあえて問う者はなかった。（最も重要な戒めの最後）

- [A] 大ぜいの群衆が喜んでと書いてあり、最も重要な戒めにある「ひとりの律法学者がきて、彼らが互に論じ合っているのを聞き、またイエスが巧みに答えられたのを認め」（12:28a）と似た表現のように見える。ただ、無論、これは、マルコの記述で、マルコが伝えられたことなのだろう。しかし、それが、マタイやルカでは、このような群衆の取り方が書かれていない。

4.73.7 メモ

- 共観福音書の差異：三つの共観福音書とも、イエスがこの問いを語りだしている。しかし、マタイでは、「パリサイ人たちが集まっていたとき」（マタイ 22:41）となっており、さらに、イエスが「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」と問うたときに、パリサイ人が「ダビデの子です」と答えたように書かれている。マルコでは、そのように言っているのが「律法学者」であるとしており、マタイと通じる面があるが、ルカでは「人々」と一般化している。そのルカには、最後に人々の反応は書かれておらず、マルコでは「大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。」とこのトピックを閉じ、マタイでは、「イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。」として、イエスの答えが素晴らしかったところに力点がおかれ、人々の反応とは、少し異なる表現になっている。ただ、マルコも、マタイも、ルカもこのあと、律法学者に注意せよとのくだりに移る。マタイは、そこでも「律法学者とパリサイ人」として、パリサイ人を明示している。

- 問い：キリストはダビデの子かという問いに対して三つの共観福音書ともイエスは否定している。イエスがダビデの子かという問いに関しては、福音書によってどのように記述されているのだろうか。

- 問い：マルコにおいても、一箇所、エリコで盲人が「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」（10 章 47 節、48 節では「イエス」が省略）と叫んでいる箇所があるが、他の福音書と比較して非常に注意して「ダビデの子」とは書かれていないように見える。この箇所でも、ひとびとは、必ずしもメシアをダビデの子だとは考えてないように見える。実際には、どうだったのだろうか。
  - マルコは、イエスがダビデの子かということに、一貫して否定しているように見える。次の項にあるように、ダビデの子と登場するのは、この箇所以外は、エリコで盲人が読んだ箇所だけである。ダビデのような、または、ダビデの家系から、救い主が現れることは、預言書には、書いてあるように見える。しかし、イエスは、そのような表現をここで、否定し、神に油注がれたメシアは、ダビデの子ではないと言っているように見える。
  - マタイや、ルカの誕生物語などから見ると、生まれにおいては、イエスはダビデの系列、末裔であることが書かれており、かつ、ダビデの子と、キリストを明確に区別しているようには見えず、マルコとの差が見え、あまり注意していないように見える。単純に、ダビデの子キリストという定式のもと

でキリストについて語られているように見える。パウロ文書においても、肉において、つまり生まれが、ダビデの末裔であることは、書かれており、そのことを強調はしないものの、この箇所を深く認識しているようには見えない。その意味でも、この箇所は、たいせつなのであろう。

- 榊原（マタイによる福音書下 p.95）で、「『わが主』という呼び方は、場合によっては、自分より目下の者にでもあてはめられました。ヨセフも、彼の王パロの『父、その全家の主』と呼ばれ（創世記 45:8)、アロンも弟モーセに『わが主よ』と呼びかけました（出エジプト 32:22、民数記 12:11)。ですから、ダビデがメシヤを『わが主』と呼んだこと自体は、メシアがダビデの『子』ではないかどうかを立証しません。つまり、イエスの論証は、ダビデがメシヤを『子』と呼んで見下したか、『主』と呼んで見上げたか、というような断片的な言葉じりにこだわった論証ではないのです。むしろ、『キリストをどう思うか。だれの子なのか』と問い、『どうしてダビデの子であろうか』と打ち消して、ダビデならざるかたの『子』つまり神の子である、と答えを出す議論なのである。」としていますが、これは、共観福音書の中で、イエスをダビデの子と呼び、パウロ書簡でも、肉によればダビデの子孫とよんでいることを肯定し、そのうえで、ここを説明しているためと思われます。「このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」（マルコ 12:37、この部分はマタイ、ルカもほぼ同文）から考えると、ダビデの子という呼称自体も否定している、マルコの注意深さが背景にあるように思う。実際に、血筋として、ダビデの子孫かどうかは、「作り話やはてしのない系図などに気をとられることもないように、命じなさい。そのようなことは信仰による神の務を果すものではなく、むしろ論議を引き起させるだけのものである。」（テモテ前書 1:4、参照：テトス 3:9、ヘブル 7:3）から、重視しないのがよいように思われる。むろん、そうするとイエスの降誕に関する、マタイと、ルカの記述について、議論をしないといけないのだが。

- なぜ、マルコでは、注意深く書かれているか。ルカ 23:2 そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。マルコがペテロや他のイエスと行動をともにした弟子たちの証言を元にしているとすると、イエスが訴えられたことに対する反証を記すことも重要だったと思われる。すこしあとに書かれたルカでは、引用句のように書かれている。軽々しく、キリストだと証言することは、憚られたのではないかと思われる。

4.74 12:38-40 律法学者を非難する

38 イエスはその教の中で言われた、「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣を着て歩くことや、広場であいさつされることや、39 また会堂の上席、宴会の上座を好んでいる。40 また、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。彼らはもっときびしいさばきを受けるであろう」。

4.74.1 マタイ 23:1-36

1 そのときイエスは、群衆と弟子たちとに語って言われた、2 「律法学者とパリサイ人とは、モーセの座
にすわっている。3 だから、彼らがあなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい。しかし、彼らの
することには、ならうな。彼らは言うだけで、実行しないから。4 また、重い荷物をくくって人々の肩に
のせるが、それを動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない。5 そのすることは、すべて人に見
せるためである。すなわち、彼らは経札を幅広くつくり、その衣のふさを大きくし、6 また、宴会の上座、
会堂の上席を好み、7 広場であいさつされることや、人々から先生と呼ばれることを好んでいる。8 しか
し、あなたがたは先生と呼ばれてはならない。あなたがたの先生は、ただひとりであって、あなたがたは
みな兄弟なのだから。9 また、地上のだれをも、父と呼んではならない。あなたがたの父はただひとり、す
なわち、天にいます父である。10 また、あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はた
だひとり、すなわち、キリストである。11 そこで、あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人で
なければならない。12 だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。
13 偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、天国を閉ざして
人々をはいらせない。自分もはいらないし、はいろうとする人をはいらせもしない。14 〔偽善な律法学
者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、やもめたちの家を食い倒し、見
えのために長い祈をする。だから、もっときびしいさばきを受けるに違いない。〕15 偽善な律法学者、パ
リサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたはひとりの改宗者をつくるために、海と陸
とを巡り歩く。そして、つくったなら、彼を自分より倍もひどい地獄の子にする。16 盲目な案内者たち
よ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは言う、『神殿をさして誓うなら、そのままでよいが、神
殿の黄金をさして誓うなら、果す責任がある』と。17 愚かな盲目な人たちよ。黄金と、黄金を神聖にする
神殿と、どちらが大事なのか。18 また、あなたがたは言う、『祭壇をさして誓うなら、そのままでよいが、
その上の供え物をさして誓うなら、果す責任がある』と。19 盲目な人たちよ。供え物と供え物を神聖にす
る祭壇とどちらが大事なのか。20 祭壇をさして誓う者は、祭壇と、その上にあるすべての物とをさして
誓うのである。21 神殿をさして誓う者は、神殿とその中に住んでおられるかたとをさして誓うのである。
22 また、天をさして誓う者は、神の御座とその上にすわっておられるかたとをさして誓うのである。23
偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。はっか、いのんど、クミンなどの薬
味の十分の一を宮に納めておりながら、律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のがして
いる。それもしなければならないが、これも見のがしてはならない。24 盲目な案内者たちよ。あなたがた
は、ぶよはこしているが、らくだはのみこんでいる。25 偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがた
は、わざわいである。杯と皿との外側はきよめるが、内側は貪欲と放縦とで満ちている。26 盲目なパリサ
イ人よ。まず、杯の内側をきよめるがよい。そうすれば、外側も清くなるであろう。27 偽善な律法学者、
パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美し
く見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。28 このようにあなたがたも、外
側は人に正しく見えるが、内側は偽善と不法とでいっぱいである。29 偽善な律法学者、パリサイ人たち
よ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こう言っ

ている、30 『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。31 このようにして、あなたがたは預言者を殺した者の子孫であることを、自分で証明している。32 あなたがたもまた先祖たちがした悪の枡目を満たすがよい。33 へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰をのがれることができようか。34 それだから、わたしは、預言者、知者、律法学者たちをあなたがたにつかわすが、そのうちのある者を殺し、また十字架につけ、そのある者を会堂でむち打ち、また町から町へと迫害して行くであろう。35 こうして義人アベルの血から、聖所と祭壇との間であなたがたが殺したバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上に流された義人の血の報いが、ことごとくあなたがたに及ぶであろう。36 よく言っておく。これらのことの報いは、みな今の時代に及ぶであろう。

4.74.2 ルカ 20:45-47, (11:37-54)

45 民衆がみな聞いているとき、イエスは弟子たちに言われた、46 「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣を着て歩くのを好み、広場での敬礼や会堂の上席や宴会の上座をよろこび、47 やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。彼らはもっときびしいさばきを受けるであろう」。

（参考）ルカ 11:37-54 37 イエスが語っておられた時、あるパリサイ人が、自分の家で食事をしていただきたいと申し出たので、はいって食卓につかれた。38 ところが、食前にまず洗うことをなさらなかったのを見て、そのパリサイ人が不思議に思った。39 そこで主は彼に言われた、「いったい、あなたがたパリサイ人は、杯や盆の外側をきよめるが、あなたがたの内側は貪欲と邪悪とで満ちている。40 愚かな者たちよ、外側を造ったかたは、また内側も造られたではないか。41 ただ、内側にあるものをきよめなさい。そうすれば、いっさいがあなたがたにとって、清いものとなる。42 しかし、あなた方パリサイ人は、わざわいである。はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を宮に納めておりながら、義と神に対する愛とをなおざりにしている。それもなおざりにはできないが、これは行わねばならない。43 あなたがたパリサイ人は、わざわいである。会堂の上席や広場での敬礼を好んでいる。44 あなたがたは、わざわいである。人目につかない墓のようなものである。その上を歩いても人々は気づかないでいる」。45 ひとりの律法学者がイエスに答えて言った、「先生、そんなことを言われるのは、わたしたちまでも侮辱することです」。46 そこで言われた、「あなたがた律法学者も、わざわいである。負い切れない重荷を人に負わせながら、自分ではその荷に指一本でも触れようとしない。47 あなたがたは、わざわいである。預言者たちの碑を建てるが、しかし彼らを殺したのは、あなたがたの先祖であったのだ。48 だから、あなたがたは、自分の先祖のしわざに同意する証人なのだ。先祖が彼らを殺し、あなたがたがその碑を建てるのだから。49 それゆえに、『神の知恵』も言っている、『わたしは預言者と使徒とを彼らにつかわすが、彼らはそのうちのある者を殺したり、迫害したりするであろう』。50 それで、アベルの血から祭壇と神殿との間で殺されたザカリヤの血に至るまで、世の初めから流されてきたすべての預言者の血について、この時代がその責任を問われる。51 そうだ、あなたがたに言っておく、この時代がその責任を問われるであろう。52 あなたがた律法学者は、わざわいである。知識のかぎを取りあげて、自分がはいらないばかりか、はいろうとする人たちを妨げてきた」。53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者やパリサイ人は、激しく詰め寄り、いろいろな事を問いかけて、54 イエスの口から何か言いがかりを得ようと、ねらいはじめた。

マルコによる福音書 12 章 38-40 節福音書対照表

4.74.3　問い

1. イエスは、どのような場で誰に対して誰に気をつけなさいといいますか。(38ab)
2. イエスは、この人たちはどのようなことを好んでいると言っていますか。(38c,39)
3. イエスは、この人たちはどのようなことをしていると言っていますか。(40a)
4. イエスは、この人たちはどうなると言っていますか。(40b)
5. マタイでは、他にどのようなことがこの人たちについて語られていますか。
6. イエスは、何をこのひとたちについて語りながら、何を、伝えているのでしょうか。

4.74.4　参照

- 大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。(37b) は、ここにつなげて読んだほうが良いかもしれない。
  - バークレイ：新約聖書の節の区分は、16 世紀にステファヌスによって最初に書き入れられた。彼は馬で印刷所に行く途中、それを書き入れたといわれている。
- 偽善（　　: i. an answering, ii. an answer, iii. the acting of a stage player, iv. dissimulation, hypocrisy ）・偽善者（　　: i. one who answers, an interpreter, ii. an actor, stage player, iii. a dissembler, pretender, hypocrite)
  - マルコ 7:6 イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、／『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。(マルコはこの一回のみ)
  - マルコ 12:15 イエスは彼らの偽善を見抜いて言われた、「なぜわたしをためそうとするのか。デナリを持ってきて見せなさい」。
  - マタイ 6:2 だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならすな。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。
  - マタイ 6:5 また祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。
  - マタイ 6:16 また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく言っておくが、彼らはそ

の報いを受けてしまっている。

  - マタイ 7:5 偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。
  - マタイ 15:7 偽善者たちよ、イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預言をしている、
  - マタイ 22:18 イエスは彼らの悪意を知って言われた、「偽善者たちよ、なぜわたしをためそうとするのか。
  - マタイ 23:13, 14,15, 23, 25, 27, 28, 29 偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。
    * 23:28 このようにあなたがたも、外側は人に正しく見えるが、内側は偽善と不法とでいっぱいである。
  - マタイ 24:51 彼を厳罰に処し、偽善者たちと同じ目にあわせるであろう。彼はそこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。
  - ルカ 6:42 自分の目にある梁は見ないでいて、どうして兄弟にむかって、兄弟よ、あなたの目にあるちりを取らせてください、と言えようか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい、そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にあるちりを取りのけることができるだろう。
  - ルカ 12:1 その間に、おびただしい群衆が、互に踏み合うほどに群がってきたが、イエスはまず弟子たちに語りはじめられた、「パリサイ人のパン種、すなわち彼らの偽善に気をつけなさい。
  - ルカ 12:56 偽善者よ、あなたがたは天地の模様を見分けることを知りながら、どうして今の時代を見分けることができないのか。
  - ルカ 13:51 主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。
  - ガラテヤ 2:13 そして、ほかのユダヤ人たちも彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのような偽善に引きずり込まれた。
  - テモテ第一 4:2 それは、良心に焼き印をおされている偽り者の偽善のしわざである。
  - ペテロ第一 2:1 だから、あらゆる悪意、あらゆる偽り、偽善、そねみ、いっさいの悪口を捨てて、
  - 詩篇 26:4 わたしは偽る人々と共にすわらず、／偽善者と交わらず、
- 律法学者・パリサイ（マルコ）
  - マルコ 1:22 人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。

- マルコ 2:6 ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、（体の麻痺した人を癒やす）
- マルコ 2:16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。（レビを弟子にする）
- マルコ 2:18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。（断食についての問答）
- マルコ 2:24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った、「いったい、彼らはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのですか」。（安息日に麦の穂を摘む）
- マルコ 3:6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。（手の萎えた人を癒やす）
- マルコ 3:22 また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼はベルゼブルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。（ベルゼブル論争）
- マルコ 7:1 さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレムからきて、イエスのもとに集まった。（昔の人の言い伝え）
- マルコ 7:3 もともと、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝えをかたく守って、念入りに手を洗ってからでないと、食事をしない。（昔の人の言い伝え）
- マルコ 7:5 そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。（昔の人の言い伝え）
- マルコ 8:11 パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求めた。（人々はしるしを欲しがる）
- マルコ 8:15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。（パリサイ人のパン種とヘロデのパン種）
- マルコ 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、（イエス死と復活を予告する）
- マルコ 9:11 そしてイエスに尋ねた、「なぜ、律法学者たちは、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか」。（イエスの姿が変わる）

- マルコ 9:14 さて、彼らがほかの弟子たちの所にきて見ると、大ぜいの群衆が弟子たちを取り囲み、そして律法学者たちが彼らと論じ合っていた。（汚れた霊にとりつかれた子を癒やす）
- マルコ 10:2 そのとき、パリサイ人たちが近づいてきて、イエスを試みようとして質問した、「夫はその妻を出しても差しつかえないでしょうか」。（離婚について教える）
- マルコ 10:33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。（イエス三度自分の使徒復活を予告する）
- マルコ 11:18 祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、どうかしてイエスを殺そうと計った。彼らは、群衆がみなその教に感動していたので、イエスを恐れていたからである。（神殿から商人を追い出す）
- マルコ 11:27 彼らはまたエルサレムにきた。そして、イエスが宮の内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、みもとにきて言った、（権威についての問答）
- マルコ 12:13 さて、人々はパリサイ人やヘロデ党の者を数人、イエスのもとにつかわして、その言葉じりを捕えようとした。（皇帝への税金）
- マルコ 12:28 ひとりの律法学者がきて、彼らが互に論じ合っているのを聞き、またイエスが巧みに答えられたのを認めて、イエスに質問した、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」。（最も重要な戒め）
- マルコ 12:32 そこで、この律法学者はイエスに言った、「先生、仰せのとおりです、『神はひとりであって、そのほかに神はない』と言われたのは、ほんとうです。（最も重要な戒め）
- マルコ 12:35 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。（ダビデの子についての問答）
- マルコ 12:38 イエスはその教の中で言われた、「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣を着て歩くことや、広場であいさつされることや、（律法学者を非難する）
- マルコ 14:1 さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。（イエスを殺す計画）
- マルコ 14:43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二弟子のひとりのユダが進みよってきた。また祭司長、律法学者、長老たちから送られた群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。（裏切られ逮捕される）
- マルコ 14:53 それから、イエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長、長老、律法学者たちがみな集まってきた。（最高法院で裁判を受ける）
- マルコ 15:1 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは長老、律法学者たち、および全議会と協議をこらした末、イエスを縛って引き出し、ピラトに渡した。（ピラトから尋問される）

- ローマ 10:2,3 わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。3 なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。
- マタイ 11:28-30 すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。29 わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。
- 使徒 15:5-11 ところが、パリサイ派から信仰にはいってきた人たちが立って、「異邦人にも割礼を施し、またモーセの律法を守らせるべきである」と主張した。6 そこで、使徒たちや長老たちが、この問題について審議するために集まった。7 激しい争論があった後、ペテロが立って言った、「兄弟たちよ、ご承知のとおり、異邦人がわたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようにと、神は初めのころに、諸君の中からわたしをお選びになったのである。8 そして、人の心をご存じである神は、聖霊をわれわれに賜わったと同様に彼らにも賜わって、彼らに対してあかしをなし、9 また、その信仰によって彼らの心をきよめ、われわれと彼らとの間に、なんの分けへだてもなさらなかった。10 しかるに、諸君はなぜ、今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかったくびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか。11 確かに、主イエスのめぐみによって、われわれは救われるのだと信じるが、彼らとても同様である」。
- 1 コリント 7:35,36 わたしがこう言うのは、あなたがたの利益になると思うからであって、あなたがたを束縛するためではない。そうではなく、正しい生活を送って、余念なく主に奉仕させたいからである。36 もしある人が、相手のおとめに対して、情熱をいだくようになった場合、それは適当でないと思いつつも、やむを得なければ、望みどおりにしてもよい。それは罪を犯すことではない。ふたりは結婚するがよい。
- 2 コリント 10:17,18 誇る者は主を誇るべきである。18 自分で自分を推薦する人ではなく、主に推薦される人こそ、確かな人なのである。
- ユダヤ古代誌（フライビウス・ヨセフス）XVII-2-4
  - ヘロデの情勢が私が述べたような状況にあったとき、すべての公務はアンティパトロスにかかっていた。そして彼の権力は、彼が望むだけ誰に対しても善行を施すことができたほどで、これは彼の父の許可を得て、彼の善意と忠誠を期待してのことだった。そして彼は、彼の邪悪な計画が父に隠され、彼が言うことをすべて信じさせたので、さらに権力を行使することを敢えてした。彼はまた、権力と権威のためというよりも、その前の卑劣な企ての抜け目なさのため、すべての人にとって恐ろしい存在だった。しかし、彼と友情を育んだのは主にフェロラスであり、フェロラスは彼の友情の同様のしるしを受けた。一方、アンティパトロスは女性たちを巧みに取り囲み、護衛として配置した。フェロラスは妻とその母、そして妹にひどく隷属していたからである。そして、処女の娘たちに対する侮辱に対して、彼は彼女たちを憎んでいたにもかかわらず、それでも、彼は彼女たちを我慢し、この男を仲間に加えた女性たちなしでは何もできなかった。彼女たちは、あらゆることで互いに助け合い続けた。アンティパトロスは、自分自身も母親も、彼女たちに完全に依存していた。この 4 人の女性は、二人はみな同じことを言ったが、フェロラスとアンティパトロスの意見は、重要でないいくつかの点

で異なっていた。しかし、王の妹 [サロメ] は彼らの敵対者で、かなり前から彼らのすべての事柄に目を光らせており、この友情がヘロデに危害を加えるためになされたことを知り、王にそれを告げるつもりだった。そして、この人々は、彼らの友情がヘロデにとって非常に不快で、危害を加えやすいことを知っていたので、会っていることがバレないようにした。そこで、彼らは互いに憎み合い、時が来たら悪口を言い合った。特にヘロデが同席しているか、彼に告げ口する人がそこにいるときはそうだった。しかし、二人の親密さは、二人きりのときは、これまで以上に強固だった。これが彼らが取ったやり方だった。しかし、彼らは、最初の計画も、計画に着手したときも、計画が進んだときも、サロメには隠し切れなかった。しかし、彼女はすべてを探り出した。そして、兄との関係を悪化させ、秘密の会合や交渉、秘密裏に行われた協議についても兄に告げた。もしそれが兄を破滅させるためでなければ、公然と公にしていたかもしれない。しかし、一見すると彼らは意見が食い違っており、お互いに悪意を持っているかのように話しているが、群衆の目から離れたところでは、とても仲が良い。というのは、二人きりになると、彼らは協調して行動し、友情を絶やさず、計画を隠している相手には戦うと公言しているからである。こうして彼女はこれらのことを調べ上げ、完全に理解し、兄に伝えた。兄も彼女の言ったことをかなり理解していたが、妹の誹謗中傷を疑っていたため、それを信じる勇気はなかった。というのは、ユダヤ人の中には、父祖の律法を熟知していることを高く評価し、神に大いに恵まれていると人々に信じ込ませる一派がいたからである。この一派は、この一団の女性たちを騙したのである。この一派はパリサイ派と呼ばれ、王たちに激しく反対する立場にあった。彼らは狡猾な一派で、すぐに公然と戦い、悪事を働くレベルにまで高められた。したがって、ユダヤ人の民が皆、カエサルと王の政府に善意を誓ったとき、この男たちは 6000 人以上だったので、誓いを立てなかった。王が彼らに罰金を課したとき、フェロラスの妻が彼らに代わって罰金を支払った。彼女の親切に報いるために、彼らは神の啓示によって将来を予知していると信じられていたので、神がヘロデの統治は終わり、その子孫はそれを奪われるが、王国は彼女とフェロラス、そして彼らの子供たちに渡ると定めたことを予言した。これらの予言はサロメに隠されておらず、王に伝えられた。また、彼らが宮殿の周りの何人かの人々を堕落させたことも伝えられた。そこで王は、主に告発されたパリサイ人、宦官バゴアス、当時のすべての男性よりも容姿が優れていたカルス、そして彼の従妹の一人を殺した。王はまた、パリサイ人の予言に同意した自分の家族全員を殺した。バゴアスに関しては、予言によって彼らの任命された王になると予言された人物の父親であり恩人であると称されるかのように、パリサイ人によって誇張されていた。というのは、この王はすべてのものを自分の力で掌握し、バゴアスが結婚し、自分の子供を産むことを可能にするだろうからである。

4.74.5　記録

- 日時：2024 年 11 月 14 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）2 名、参加（遠隔）1 名

4.74.6 問いについて

1. イエスは、どのような場で誰に対して誰に気をつけなさいといいますか。(38ab)

   - 37b 大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。38ab イエスはその教の中で言われた、「律法学者に気をつけなさい。(37b もこの段落の一部と考えたほうがよいかもしれない。)
   - [DQ] 聴衆はどのような人たちですか。
     - [A] 前の段落から続いており、「大ぜいの群衆」でしょう。
     - 批判が中心ではなく、「教の中で」が重要で、大ぜいの群衆に理解してもらいたかったのでしょう。
   - [DQ] 誰に対して気をつけなさいと言っていますか。
     - [A] 律法学者。ただし、マタイでは「律法学者とパリサイ人」について語っているように見える。
   - [DQ] 律法学者とはどのような人たちですか。いままでに、登場している箇所を覚えていますか。パリサイ派の人とは同じですか。
     - 律法の専門家だが、民から尊敬され、律法を守る基準を与えてくれる人と考えられていたと思われる。悩みや問いがある時に、このひとたちに聞けば、丁寧な解釈が聞けるような先生。
     - [A: 律法学者。聖書協会共同訳巻末用語解説] 律法を専門に研究し、解釈して民に教えた教師。優れた学者は多くの弟子を持ち、最高法院の議員など、社会的に尊敬される立場にあった。律法学者の多くはファイサイ派に属していたと思われる(マルコ 2:16、使徒 5:34、23:9)。
     - [A: ファリサイ派。聖書協会共同訳巻末用語解説] 起源はマカバイ時代の敬虔派(ハジディム)にあるとされ、イエスの時代にはサドカイ派と共に民衆に大きな影響力を持ち、イエスに敵対した。律法学者の多くはファリサイ派に属していたと思われる。(マタイ 23:2 など)。律法を守ること、特に安息日や断食、施しを行うことや宗教的な清めを強調し、口伝の律法を重視するとともに、復活、天使、霊を認めていた(使徒 23:8)。語源のヘブライ語「ペルシム」は「分離される者」の意である。また、ルカによる福音書ではイエスを食事に招いたファリサイ派の人もいた(ルカ 7:36)。また、パウロは、自らをファリサイ派と名乗っている。(使徒 23:6、フィリピ 3:5)。
   - [DQ] 気をつけなさいとはどのようなことを伝えているのでしょうか。
     - 警戒・批判・注意・顧み - マルコでは戦闘モードではない。
     - このあとを読むと、危害を加えるというような意味ではない。

2. イエスは、この人たちはどのようなことを好んでいると言っていますか。(38c,39)

- 38c 彼らは長い衣を着て歩くことや、広場であいさつされることや、39 また会堂の上席、宴会の上座を好んでいる。
- [DQ] 「長い衣を着て歩くこと」の何が悪いのでしょうか。
  - マタイ 23:5 そのすることは、すべて人に見せるためである。すなわち、彼らは経札を幅広くつくり、その衣のふさを大きくし、
  - 民数記 15:37,38 主はまたモーセに言われた、38 「イスラエルの人々に命じて、代々その衣服のすその四すみにふさをつけ、そのふさを青ひもで、すその四すみにつけさせなさい。（神の民であることを思い起こさせるため）
  - [A] 敬虔の自己主張・誇示だろうか。
- [DQ] 「広場であいさつされること」の何が悪いのでしょうか。
  - [A] 人からの称賛と尊敬を受けることが目的化されている。
  - ラビ「わたしの偉大なる方」
- [DQ] 「また会堂の上席、宴会の上座を好（むこと）」の何が悪いのでしょうか。
  - [A] 人からの称賛と尊敬を受けることが目的化されている。
- [DQ] 具体的な表現になっていますが、これらが問題なのでしょうか。もし、このようなことの背後にあることであるなら、どのように表現しますか。
  - [A] 神様との関係を、人の中の評価に変えてしまっている。

3. イエスは、この人たちはどのようなことをしていると言っていますか。（40a）
   - 40a また、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。
   - [DQ] 「やもめたちの家を食い倒し」とは具体的にどのようなことでしょうか。
   - [参考] 1 テモテ 6:5 また知性が腐って、真理にそむき、信心を利得と心得る者どもの間に、はてしのないいがみ合いが起るのである。
   - [Q] 利得を求めることを言っているのかもしれないが、これがひどいことはすぐわかるのではないか。なにを言っているのか。
   - [DQ]「見えのために長い祈をする」とは具体的にはどのようなことで、どうしたら良いのでしょうか。
4. イエスは、この人たちはどうなると言っていますか。（40b）
   - 40b 彼らはもっときびしいさばきを受けるであろう」。
   - [DQ] さばきとは、死んだあとのことでしょうか。

- [A] おそらく、今の世でも、来たるべき世でも。
- [DQ] なぜ、ことさら「律法学者」が重い裁きを受けるのでしょうか。
- [A] 律法、神のみこころを教えるひとたちで、民は信頼しているから。
  - [参照] ヤコブ 3:1 わたしの兄弟たちよ。あなたがたのうち多くの者は、教師にならないがよい。わたしたち教師が、他の人たちよりも、もっときびしいさばきを受けることが、よくわかっているからである。
- [DQ] なぜだろうか。第一の（最も大切な）戒めから考えるとどうでしょうか。
  - 12:29 イエスは答えられた、「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。30 心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。31 第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。
  - 神を愛し、神が愛される隣人を愛する。神を愛することから始めたことが、そこには向かっていない。隣人を愛することからはじめたことが、隣人を愛することからそれてしまっている。

5. マタイでは、他にどのようなことがこの人たちについて語られていますか。

- 「律法学者とパリサイ人とは、モーセの座にすわっている。」（23:2）とはどのような意味でしょうか。
- 「彼らがあなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい。しかし、彼らのすることには、ならうな。彼らは言うだけで、実行しないから。」（23:3）とはどんなことを伝えていますか。
  - [Q] 彼らのいうことを実行するなとは言っていない。「ならうな」と言っている、その意味は何であろうか。
  - [参考] ローマ 10:2,3 わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。3 なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。
- 「重い荷物をくくって人々の肩にのせるが、それを動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない。」（23:4）はどのようなことを批判しているのでしょうか。
  - [参考] マタイ 11:(28-)30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。
  - [参考] 使徒 15:10 しかるに、諸君はなぜ、今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかったくびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか。
- 「8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはならない。あなたがたの先生は、ただひとりであって、あなたがたはみな兄弟なのだから。9 また、地上のだれをも、父と呼んではならない。あなたがたの父

はただひとり、すなわち、天にいます父である。10 また、あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただひとり、すなわち、キリストである。」は、何を伝えようとしていますか。

- なぜ仕えることがたいせつなのでしょうか。
- 「自分もはいらないし、はいろうとする人をはいらせもしない。」とは実際にどのようなことをしていたのでしょうか。
- 偽善とは何で、偽善者とはどのような人のことでしょうか。

6. イエスは、何をこのひとたちについて語りながら、何を、伝えているのでしょうか。
   - この箇所で、イエスはどのような生き方に対して警告し、どのような生き方を指し示しているのでしょうか。
   - [DQ] 偽善とはどのようなものだとあなたは定義しますか。「偽善」の反対は。
   - [参考] 偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。（マタイ 23:13, 14, 15, 23, 25, 27, 29）
   - [DQ] 律法学者の対極を示そうとすると、どうなりますか。
     - [A] イエスに従うこと

4.74.7 メモ

- 共観福音書の差異：マルコの律法学者非難は簡素で短く、マタイは非常に長く、ルカは異なる形にまとめてあるようだがそれは何を意味するのだろうか。
  - マタイが書かれた状況の中ではそれがとても大切だったということか。ユダヤ人が多い地域、シリアあたりが可能性として高いといわれているようだが、ユダヤ教との関係をどうするかは、重要だったろう。認識は「ナザレ人の異端」から「キリスト者」という呼称に変わっていく頃だろうか。その中でも、律法学者批判は、重要だと考えたひとが編集したのかもしれない。
- 関連箇所にはあがっていないが、マルコ 7:1-23（昔のひとの言い伝え）も、関連箇所ルカ 11:37-54、マタイ 23:1-36 と関連している。まずは、マルコ 7:1-23 を復習して、具体的な批判を学んでから、この箇所を学んだほうが良いかもしれない。この箇所だけでは、内容があまりなく理解しにくい。ただ、マルコ 7:1-23（昔のひとの言い伝え）では、確かにある程度批判しているが、マタイ、ルカの対照箇所ほどの批判は感じられない。意図が異なるのかもしれない。マルコでは、このあとの、スロ・フェニキアの女のところにつながる異邦人との関係について述べられ、コルネリオのこととの関連が意識されているように思われる。
- 調べてみると、マルコでは、イエスがパリサイということばを出す箇所は、マルコ 8:15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。だけの

ように思われる。イエスの受難告知でも、律法学者としている。たしかに、律法学者の多くがパリサイ人ともされているが、それは、一つの派なので、律法の専門家と理解し、注意しなさいと考えるのが良いのだろう。そして、これは、おおぜいの群衆に向けた話である。マタイでは、このような論争が拡大しているのだろうが、マルコでは、敵をつくるようなことはしていないようにみえる。人々に、目的が、神様を愛すること、隣人を愛することからズレてしまっていることを指摘しているのではないだろうか。それを示すには、この短い箇所で十分なのかもしれない。同時に、それは、キリスト者にも同じ危険があることを示しても入るだろう。

- なぜ（ことさら）律法学者を非難する記事が入っているのだろう。
  - おそらく、私たちにもとても関係があるということなのだろう。律法学者のようになる可能性が強いと。

4.75　12:41-44 やもめの献金

41 イエスは、さいせん箱にむかってすわり、群衆がその箱に金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持は、たくさんの金を投げ入れていた。42 ところが、ひとりの貧しいやもめがきて、レプタ二つを入れた。それは一コドラントに当る。43 そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。44 みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」。

4.75.1　ルカ 21:1-4

1 イエスは目をあげて、金持たちがさいせん箱に献金を投げ入れるのを見られ、2 また、ある貧しいやもめが、レプタ二つを入れるのを見て 3 言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。4 これらの人たちはみな、ありあまる中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」。

マルコによる福音書 12 章 41-44 節福音書対照表

41K . ·42
, . 43 ·
·44 ,
.

4.75.2　問い

1. イエスは、どこで何をしていますか。（41a）

2. どのようなことが起こりますか。(41b,42)

3. イエスは、だれにどのようなことを教えていますか。(43,44)

4. 捧げるのは何のためにすることでなにをたいせつにしたらよいのでしょうか。

5. イエスは、この箇所で何を教えているのでしょうか。

4.75.3 参照

- The Temple at Jerusalem in Jesus' Day, Clyde W. Votaw, University of Chicago [pdf]
  - p.172,3 A10 The thirteen circular objects ranged on either side of the Women's Court in front of the columns are the trumpet-mouthed money-boxes for receipt of alms. [賽銭箱]
- 貨幣：レプタ (　: i. thin, small, ii. a small brass coin, equivalent to the eighth part of an "as", worth about a 1/5 of a cent) 、コドラント (　: a quadrans (about the fourth part of an "as"); in the NT a coin equal to one half the Attic chalcus worth about 3/8 of a cent)（聖書協会共同訳巻末「度量衡および通貨」より）
  - アサリオン：ローマの青銅貨で、一デナリオンの十六分の一（1/16 デナリオン）[マタイ 10:29 二羽の雀は一アサリオン、ルカ 12:6 五羽の雀は二アサリオン]
  - クァドランス：ローマの青銅貨で、一デナリオンの六十四分の一（1/64 デナリオン）[マルコ 12:42 レプトン銅貨二枚、すなわち一クァドランス、マタイ 5:26 最後の一クァドランスを支払うまで]
  - タラントン：ギリシャで用いた計算用の単位で、6,000 ドラクメに相当　[マタイ 18:24 一万タラントン借金している家来、マタイ 25:14-30 それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて、旅に出た。黙示録 16:21 一タラントンほどの重さもある大粒の雹]
  - デナリオン：ローマの銀貨で、1 デナリオンは、1 ドラクメと等価（1 日の賃金に当たる）[マルコ 6:37 二百デナリオンものパンを買いに行って、マルコ 12:15 デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。マルコ 14:5 この香油は三百デナリオン以上に売って、マタイ 18:28 百デナリオン貸している仲間の一人、マタイ 20:1-16 一日につき一デナリオンの約束で、マタイ 22:19 彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、ルカ 7:41 一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオン、ルカ 10:35 翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、ルカ 20:24 デナリオン銀貨を見せなさい。ヨハネ 6:7 二百デナリオンのパンでは足りないでしょう。ヨハネ 12:5 この香油を三百デナリオンで売って。黙示録 6:6 小麦一コイニクスを一デナリオン、大麦三コイニクスを一デナリオンとする。]
  - ドラクメ：ギリシャの銀貨で、重さ約 4.3g、デナリオンと等価　[ルカ 15:8 ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、他に、エズラ記 2:69、ネヘミヤ記 7:69-71]

  - ムナ：ギリシャの銀貨で、１ムナが 100 ドラクメに相当 [ルカ 19:11-27 十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し]
  - レプトン：最小の銅貨で、１デナリオンの 1/128 [マルコ 12:42 レプトン銅貨二枚、ルカ 12:59 最後の一レプトンを支払うまで、ルカ 21:2 レプトン銅貨二枚]
  - 参考（旧約）：
    * シェケル銀貨：もともとは、ペルシャの銀貨で、重さ約 5.6g。ダリク金貨の 1/20 に相当
      · シェケル自体は重さの単位で、発見されている分銅の平均値では、11.4g
    * ダリク金貨：前 6 世紀以来、ペルシャ帝国の金貨で重さ約 8.4g
- 榊原康夫（ルカによる福音書）：ネロ時代、過越祭の神殿巡礼者は 270 万 200 人に達したと、ヨセフォスは計算した。（ユダヤ戦役 6:9:3）その献金は、たいへんな額に上ったはずです。ポンペイウス将軍が神殿金庫から奪った金は 2000 タラント（約 7 億 2000 万円）もあったと言います。（ユダヤ古代史 14:4:4）。ですから、貧乏やもめの「レプタ（薄っぺらなの意）銅貨二つ」など、献金しなくてもなんということはなかったはずです。二レプタは、ささげることを許された最低額でした。（タルムード、ババ・バスラ 10b）
- 聞きなさい（ [Of Hebrew origin [）
  - マルコ 3:28 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる
  - マルコ 8:12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。
  - マルコ 9:1 また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。
  - マルコ 9:41 だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報いからもれることはないであろう。
  - マルコ 10:15 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。
  - マルコ 10:29 イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、
  - マルコ 11:23 よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう。
  - マルコ 12:43 そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。

- マルコ 13:30 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。
- マルコ 14:9 よく聞きなさい。全世界のどこででも、福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」。
- マルコ 14:18 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。
- マルコ 14:25 あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。
- マルコ 14:30 イエスは言われた、「あなたによく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そう言うあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」。

- キリスト教 Q&A（日本基督教団用賀教会）
  - Q.7「献金」って何ですか？
    - 礼拝の献金時，司式者が「『感謝と献身のしるし』として献金をささげましょう」と言います．その言葉の通りです．つまり，献金は神の恵みへの感謝であり，更には自分自身を献げるという信仰の証しです．神様は天地万物をお造りになりました．その中には私たち人間も含まれています．すべての被造物は造り主である神様のものであります．私たちも例外ではありません．「私」という存在そのものは神様のものなのです．特にキリスト者は，造られた存在だけに留まらず，神の独り子イエス・キリストが十字架上でご自分の命をささげるという尊い代価を払って神様に買い取られた存在です（コリント一 6 章 19-20 節）．神様のものである「この私」を献げるという信仰の表れが献金であります．また，私のためのイエス様が尊い命を十字架の上で献げてくださったことを感謝し，更には，教会生活ができる恵みが与えられていることを感謝する．これらを目に見える形で表すのは「献金」です．
  - Q.8　献金はどのように使われますか？
    - 献金の祈りの時，「御用のためにお使いください」という言葉をお聞きになったことがあるかと思います．この言葉が意味するのは，申し上げるまでもなく，神様の御用のためにお使いください，ということです．では，神様の御用のためにとは，具体的にどういうことでしょうか．「神様の御用」とは，何と言っても「福音を宣べ伝えること」です．この一点のために，教会は存在し，牧師は存在します．献金は，目に見える形としては，牧師の謝儀，建物の維持運営，諸々の会の活動，対外支援などに「お金」として使われます．しかし，教会におけるこれらのすべては専ら神様の福音を伝えるためのものです．その限りにおいては「神様の御用のために」ということになります．
  - Q.9　月定献金と席上献金の違いは何ですか？

    * 月定献金は，他に「維持献金」と呼ばれることもあります．この言葉の通り，教会の維持・運営のために献げるものです．席上献金の意味は，「感謝と献身のしるし」です．神の恵みに感謝し，神の栄光と宣教の奉仕のために，時間を献げ，賜物を献げ，人生を献げる．その「しるし」が主日礼拝の席上献金です．席上献金や月定献金は決して礼金

- 榊原康夫（ルカによる福音書）真の献金
  1. 犠牲を払う献金（有り余る中から投げ入れた vs 乏しい中から、生活費の全部を投げ入れ）
  2. 心から喜んでするもの
  3. 生きがいそのものを神に見出すもの（隠れた所で見ておられる父：マタイ 6:4）

4.75.4 記録

- 日時：2024 年 11 月 21 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）0 名

4.75.5 問いについて

1. イエスは、どこで何をしていますか。（41a）
   - 41a イエスは、さいせん箱にむかってすわり、群衆がその箱に金を投げ入れる様子を見ておられた。
   - [DQ] どのように描写されていますか。イエスの様子からどんなことがわかりますか。
     - [Q] 休憩だろうか。どこにいたのだろうか。異邦人の庭の回廊近くから、婦人の庭の入口にある、賽銭箱をみていたのだろうか。
     - 賽銭箱に金を投げ入れる様子とあり、何らかの特徴的なしぐさが見て取れたのだろう。献金袋などでは、そのようなことは起きないが、13 個のおそらく金属製のラッパ型をした投入口にがらんがらんと入れていたのを音とともに見ていたのかもしれない。
       * The Temple at Jerusalem in Jesus' Day [pdf] p.172,3 A10
     - [参照] マタイ 6:2 だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならすな。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。
2. どのようなことが起こりますか。（41b,42）
   - 41b 多くの金持は、たくさんの金を投げ入れていた。42 ところが、ひとりの貧しいやもめがきて、レプタ二つを入れた。それは一コドラントに当る。

- 「多くの金持」が「たくさんの金を投げ入れていた」。ところが「ひとりの貧しいやもめがきて、レプタ二つを入れた。」（タルムードによると）捧げることのできる最低限度を捧げた。
- [DQ] この様子を、あなたは、どのように想像しますか。
  - 金持ちは、金属のラッパの形をした賽銭箱に投げ入れ、ラッパを吹き鳴らすようなことをしていた。大金なら、ゴロンゴロンと大きな音がしたでしょう。このとき、こっそりかどうかはわかりませんが、チャランとレプタ二枚投げ入れた、おそらく見るからに、みすぼらしい格好をしていて想像できたのか、その女性やその痛み・苦しみについてご存知だったのかは不明ですが、そのような女性がいたのでしょう。もしかすると、そのとき、祈っていたかもしれない。周囲からは、冷たい目で見られていたかもしれない。その様子をイエスは見ていたということだろう。
- [DQ] このとき、そこにいる人々はどのように見ていたでしょうか。あなたなら、どう見ますか。
  - 見えるもの、聞こえる音から、想像したり、捧げ物がどう使われるかを思い、その価値を値踏みしていたかもしれない。ヘロデの神殿と呼ばれているが、まだ、改築中であったから、神殿（教会）のために使ったり、または、祭司職、レビ人などに支給したり、日常の祭儀に使ったりすることを考えていたかもしれないし、そのお金を貧しい人に施すことに使っていたのかもしれない。

3. イエスは、だれにどのようなことを教えていますか。（43,44）

- 43 そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。44 みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」。
- 「よく聞きなさい。」で始まっている。重要な教え。
  - イエスの口癖とも言える。　　ほんとうに、わたしは、あなたがたに言います。（直訳）「よく言い聞かせておくが」「よく聞いておくがよい」「よく言っておくが」「よく聞きなさい」「よく聞いておきなさい」「特にあなたがたに言っておくが」「あなたがたによく言っておく」「あなたによく言っておく」と、マルコでは、少しずつ違うことばで訳されている。
- [DQ] イエスはなぜ「乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部」と判断できたのでしょうか。
  - 身なりや様子から、周囲のひとにもある程度想像できるものだったのだろうか。
- [DQ] イエスは金持ちたちの献金とまずしいやもめの献金をどのように比較していますか。（44）貧しいやもめと金持ちはなにが違うのでしょう。
  - みんなの者はありあまる中から vs あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部

  - 神様から与えられているものに対する神様の御用のために捧げるまたは感謝のために捧げる献身の度合いだろうか。与えらているすべてを捧げていることが評価されている。
- [DQ] 多数者（Majority）はどのような人たちで、少数者（Minority）はどのような人たちでしょうか。
  - 「多くの金持」vs 「ひとりの貧しいやもめ」
  - 「ありあまる中から投げ入れた」「みんなの者」vs 「その乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れた」「あの婦人」
  - [Q] わたしは、どちら側にいるだろうか。

4. 捧げるのは何のためにすることでなにをたいせつにしたらよいのでしょうか。
   - [DQ] 神様に捧げるとは、献金とは、寄付とは。どのようなことなのでしょうか。
     - [A] 全体としては、神様の御用のため
       * 律法に書いてある義務・責任（什一献金だけでなく様々な規定がある）
       * 神様の恵みと憐れみに対する感謝
       * 神様を礼拝することを共同で支える
       * 神様の働き・愛の行為のため、貧しい人を助けるなど
   - [DQ] 神様は、すべてのものを持っておられるのではないでしょうか。なにか、欠乏があるのでしょうか。
   - [DQ] なにのために、捧げますか。
   - [DQ] イエスの目から見て（神様の秤で）やはりたくさんいれることがよいのでしょうか。

5. イエスは、この箇所で何を教えているのでしょうか。
   - 前段では、律法学者に気をつけなさいとイエスは教えました。では、どのようなことを倣うべきなのでしょうか。
     - 38 イエスはその教の中で言われた、「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣を着て歩くことや、広場であいさつされることや、39 また会堂の上席、宴会の上座を好んでいる。40 また、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。彼らはもっときびしいさばきを受けるであろう」。
     - 家を食い倒されたやもめであれば、本当に悲惨。このやもめに、救いはあるのだろうか。
     - [DQ] イエスは、この女のひとに、あなたは「だれよりもたくさん入れたのだ」と言ってあげたら、この女の人も、幸せになるのではないでしょうか。

    * 隠れたところをみておられる主に委ねるのは、とても難しい。

- [DQ] 「あらゆる持ち物、その生活費全部」を捧げなさいと言っているのだろうか。
  - そのように取れないことはないが、おそらく、違うのだろう。
  - ルカ 19:1-10 8 ザアカイは立って主に言った、「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれかから不正な取立てをしていましたら、それを四倍にして返します」。9 イエスは彼に言われた、「きょう、救がこの家にきた。この人もアブラハムの子なのだから。10 人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」。（ザアカイは半分捧げている。）
- [DQ] 神様は、どのような視点で、人々の行為、たとえば献金を見ているのでしょうか。
  - イエス様は、神の子、神様のこころを知るものとして、神様の視点を教えているのではないだろうか。
  - 逆に、人々はどう見ているのだろうか。
- [DQ] ここで教えているのは、ここまでで、このやもめは、明日から生きていけないのだろうか。
  - [Q] なにか、緊急支援の手をさしのべないといけないのではないだろうか。
  - 神さまに委ねるとすることで良いのだろうか。おそらく、それは、正しい答えを見つけるのではなく、わたしたち一人ひとりが、神様の御心を行うことによって、神様とともに働くことに加えさせていただくことに、委ねられているのだろう。

4.75.6 メモ

- 共観福音書の差異：マルコと、ルカは、ほぼ同じ構成で、やもめの献金を、ダビデの子についての問答、律法学者を非難するのあと、神殿の崩壊を予告するの前においてる。教える相手について、マルコでは、途中で「弟子たちを呼び寄せて」語られるが、ルカでは、その記述はなく、その前の律法学者を非難する箇所の冒頭の、「民衆が皆聞いているとき、イエスは弟子たちにいわれた。」（20:15）から続いているように思われる。内容を見ると他にもマルコとルカの違いがある。マルコには「さいせん箱にむかってすわり K (over against) 」とあるがその部分はルカにはない。そのあとも「多くの金持ち 」「ひとりの貧しいやもめ 」とマルコではなっているが、ルカでは「金持ちたち」「ある貧しいやもめ」となっている。短い箇所ではあるが全体として、ルカには、マルコの現場を切り取ったような表現が欠け、話し、または教えとしてまとめられているように見える。マタイでは、ダビデの子についての問答のあとは、律法学者とファリサイ派の人々を非難するが殆ど一章続き、最後にルカでは別の箇所に含まれ、マルコにはない、エルサレムのために嘆く記事（マタイ 23:37-38, ルカ 13:34-35）があり、このやもめの献金についての記事はない。すなわち、律法学者やファリサイ派の人々は批判しても、やもめの献金に対して最大の評価をする記事は入れられなかった背景があるとも考えられる。ユダヤ人キリスト者の指導的な立場の人達が著書だったということか。

- やもめはなにかの象徴だろうか。やもめのようになれと言っているのだろうか。それとも、そうではないひとを非難しているのだろうか。
  - おそらくそう単純ではないだろうが、少数者（minority）として描かれ、多数者（majority）には、「多くの金持ち」だけでなく、「ありあまる中から投げ入れた」「みんなの者」が含まれ、さらに、弟子たち、クリスチャンにも呼びかけられているのだろう。それ故に、マタイはこの箇所を加えず、律法学者やパリサイ人への批判・呪でとめておいたのか。そう考えると、キリスト者自身として、心配になり、恐ろしくもなる。
- 律法学者を非難する前段では、律法学者が律法の真意をそれを守ることによって神様の御心を行い、人々に教えることから離れて、またはそれて違った方向にいってしまったことが問題であったように思われるが、このやもめの献金の箇所でも、献金や寄付の本来の意味からそれてしまっていることが指摘されているのかもしれない。では、献金とは寄付の目的は何なのだろうか。それをまず考えなければならない。「神様の恵みと憐れみに対する感謝の応答として神様の業に捧げ物と奉仕によって加えさせていただくこと」だろうか。同時に、対比が強烈である。イエスの「だれよりもたくさん入れた」という根拠が、「みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」となっている点である。それは、イエスの目から見て（神様の秤で）やはりたくさんいれることがよいのかという問いにも結びつくが、おそらく、それも少し違うように思う。おそらく、神様がどう見ておられるかをイエス様の視点から教えているのではないだろうか。しかし、それだけでよいのだろうか。このやもめに「安心して行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」（マルコ 5:34,10:52）と言えるだろうか。神さまに委ねるとすることで良いのだろうか。おそらく、それは、正しい答えを見つけるのではなく、わたしたち一人ひとりが、神様の御心を行うことによって、神様とともに働くことに加えさせていただくことに、委ねられているのだろう。Savior Complex （わたしが助けなければいけないという強い感情）はどうしたら良いのだろうか。

4.76 13:1-2 神殿の崩壊を予告する

1 イエスが宮から出て行かれるとき、弟子のひとりが言った、「先生、ごらんなさい。なんという見事な
石、なんという立派な建物でしょう」。2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめて
いるのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。

4.76.1 マタイ 24:1-2

1 イエスが宮から出て行こうとしておられると、弟子たちは近寄ってきて、宮の建物にイエスの注意を促
した。2 そこでイエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたは、これらすべてのものを見ないか。よく
言っておく。その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」。

4.76.2 ルカ 21:5-6

5 ある人々が、見事な石と奉納物とで宮が飾られていることを話していたので、イエスは言われた、6「あなたがたはこれらのものをながめているが、その石一つでもくずされずに、他の石の上に残ることもなくなる日が、来るであろう」。

マルコによる福音書 13 章 1-2 節福音書対照表

マルコによる福音書 13 章 1-2,3-13 節福音書対照表

4.77 13:3-13 終末の徴

3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。4 「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。5 そこで、イエスは話しはじめられた、「人に惑わされないように気をつけなさい。6 多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がそれだと言って、多くの人を惑わすであろう。7 また、戦争と戦争のうわさとを聞くときにも、あわてるな。それは起らねばならないが、まだ終りではない。8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに地震があり、またききんが起るであろう。これらは産みの苦しみの初めである。9 あなたがたは自分で気をつけていなさい。あなたがたは、わたしのために、衆議所に引きわたされ、会堂で打たれ、長官たちや王たちの前に立たされ、彼らに対してあかしをさせられるであろう。10 こうして、福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。11 そして、人々があなたがたを連れて行って引きわたすとき、何を言おうかと、前もって心配するな。その場合、自分に示されることを語るがよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。12 また兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを殺させるであろう。13 また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。

4.77.1 マタイ 24:3-14

3 またオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、「どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」。4 そこでイエスは答えて言われた、「人に惑わされないように気をつけなさい。5 多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。6 また、戦争と戦争のうわさとを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない。7 民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。8 しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである。9 そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎

まれるであろう。10 そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう。11 また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。12 また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。14 そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。

4.77.2 ルカ 21:7-19

7 そこで彼らはたずねた、「先生、では、いつそんなことが起るのでしょうか。またそんなことが起るような場合には、どんな前兆がありますか」。8 イエスが言われた、「あなたがたは、惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたし名を名のって現れ、自分がそれだとか、時が近づいたとか、言うであろう。彼らについて行くな。9 戦争と騒乱とのうわさを聞くときにも、おじ恐れるな。こうしたことはまず起らねばならないが、終りはすぐにはこない」。10 それから彼らに言われた、「民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。11 また大地震があり、あちこちに疫病やききんが起り、いろいろ恐ろしいことや天からの物すごい前兆があるであろう。12 しかし、これらのあらゆる出来事のある前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害をし、会堂や獄に引き渡し、わたしの名のゆえに王や総督の前にひっぱって行くであろう。13 それは、あなたがたがあかしをする機会となるであろう。14 だから、どう答弁しようかと、前もって考えておかないことに心を決めなさい。15 あなたの反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、わたしが授けるから。16 しかし、あなたがたは両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られるであろう。また、あなたがたの中で殺されるものもあろう。17 また、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう。18 しかし、あなたがたの髪の毛一すじでも失われることはない。19 あなたがたは耐え忍ぶことによって、自分の魂をかち取るであろう。

マルコによる福音書 13 章 3-13 節福音書対照表

マルコによる福音書 13 章 1-2,3-13 節福音書対照表

4.77.3 問い

1. この会話はいつどこでどのように始まりますか。(1)
2. イエスは、宮について何と言っていますか。(2)
3. 誰が何をイエスに聞いていますか。(3,4)
4. イエスはどんなことが起こると言っていますか。(5-13)
5. イエスはそれぞれについて、どのようなことを注意し、教えていますか。(5-13)
6. わたしたちは、これらのことについて、どのように考え、何に注意し、生きていったら良いのでしょうか。

4.77.4 参照

- ユダヤ戦記（The Wars of the Jews - Or, the history of the destruction of Jerusalem, by Flavius Josephus, Translated by William Whiston in Project Gutenberg）V-5-5 寺院の説明。Google Chrome の日本語への翻訳機能を利用。（2024.11.28）
  - 1. さて、この神殿は、すでに述べたように、堅固な丘の上に建てられました。最初、頂上の平地は、聖なる家と祭壇を置くにはほとんど十分ではありませんでした。周囲の土地は非常に不均一で、断崖のようでした。しかし、神殿を建てたソロモン王が東側に壁を築いたとき、神殿のために築かれた土手の上に一つの回廊が加えられ、他の部分には聖なる家は何もなかったのです。しかし、後の時代に、人々は新しい土手を加え、12 丘はより広い平地になりました。その後、北側の壁を壊し、神殿全体の周囲に十分なだけの土地を確保しました。そして彼らは丘の麓から神殿の周囲 3 面に壁を築き、期待以上の大工事を終えると (この工事に長い年月が費やされ、神聖な財宝はすべて使い果たされたが、それでもなお、居住可能な全地から神に送られた貢物によって補充されていた)、上庭を回廊で囲んだ。これは神殿の最下庭を後から行ったのと同じである。この回廊の最下部分は 300 キュビトの高さに建てられ、場所によってはそれ以上になった。しかし、基礎の深さ全体は見えなかった。彼らは土を運び、谷を埋め立て、町の狭い通りと同じ高さにしようとしたからである。そこでは 40 キュビトの大きさの石が使われた。当時彼らが持っていた莫大な資金と人々の寛大さにより、この試みは信じられないほど成功した。そして、達成されることは期待もできなかったが、忍耐と長い時間によって、完成に至った。

    2. さて、これらの基礎の上にある作品は、そのような基礎に値しないものではありませんでした。すべての回廊は二重で、それらに属する柱は高さが 25 キュビトで、回廊を支えていました。これらの柱はそれぞれ 1 つの完全な石でできており、その石は白い大理石でした。屋根は奇妙な彫刻が施された杉で飾られていました。これらの回廊の自然の壮麗さと優れた磨き、そして継ぎ目の調和は、非常に注目すべき眺めを提供しました。また、外側には画家や彫刻家の作品で飾られていませんでした。回廊（最外庭）の幅は 30 キュビトで、アントニアの塔を含めてその全体の周囲は 6 ファーロングでした。空気にさらされた中庭全体にはあらゆる種類の石が敷かれていました。これらの [最初の] 回廊を通り抜けて神殿の第二の中庭に行くと、周囲は石で造られた仕切りがあり、その高さは 3 キュビトでした。その造りは非常に優美で、その上には等間隔で柱が立っていました。柱には、ギリシャ文字とローマ文字で「外国人は聖域に入ってはならない」という清浄の掟が記されていました。神殿の第二の中庭は「聖域」と呼ばれ、第一の中庭から 14 段の階段で上がれる場所でした。この中庭は四角形で、周囲には独特の壁がありました。建物の高さは、外側は 40 キュビトでしたが、13 階段で隠されており、内部の高さはわずか 25 キュビトでした。丘のより高い部分に面して階段で建てられているため、丘自体に覆われて内部を完全には見分けることができませんでした。この 13 段の向こうには 10 キュビトの距離があり、これはすべて平らでした。そこからさらに 5 キュビトの階段があり、門に通じていました。門は北側と南側に 8 つ、その両側にそれぞれ 4 つ、東側には必然的に 2 つありました。その側には女性のための仕切りが建てられていたため、女性のための 2 番目の門が必要で

した。この門は最初の門の向かい側の壁から切り取られました。他の側にも南側の門と北側の門が 1 つずつあり、そこから女性の庭への通路がありました。他の門に関しては、女性はそこを通ることは許されていませんでした。また、女性が自分の門を通るときも、自分の壁の外に出ることはできませんでした。この場所は、我が国の女性にも、他の国の女性にも、同じ国の女性であれば平等に割り当てられた。この中庭の西側には門は全くなく、壁はそっち側に完全に建てられていた。しかし、門の間にある回廊は壁から部屋の前まで内側に伸びていた。回廊は非常に美しく大きな柱で支えられていた。これらの回廊は単一で、その大きさを除けば、下庭の回廊に劣るものではなかった。

3. これらの門のうちの九つは、そのすべての側面が金銀で覆われており、その戸口の側柱や鴨居も同様であった。しかし、聖なる宮の外にある一つの門は、コリントの青銅でできていて、銀と金で覆われているだけの門よりはるかに優れていた。それぞれの門には二つの扉があり、その高さはそれぞれ三十キュビト、幅は十五キュビトであった。しかし、それらの門の内側には三十キュビトの広い空間があり、それぞれの側に部屋があり、その幅と長さはともに塔のように建てられており、その高さは四十キュビト以上あった。また、これらの部屋を支えている二本の柱があり、その周囲は十二キュビトあった。他の門の大きさはどれも同じであったが、聖なる宮の門の東側に開いているコリントの門の上の門は、それよりずっと大きく、その高さは五十キュビトであった。その扉は 40 キュビトあり、他の扉よりもずっと豪華で厚い銀と金の板で覆われ、非常に高価な方法で装飾されていました。これらの 9 つの門には、ティベリウスの父であるアレクサンダーによって銀と金が注がれました。さて、女性の庭の壁からこの大きな門まで 15 段の階段がありましたが、他の門からそこに続く階段は 5 段短かったです。

4. 神殿の最も神聖な部分である、中庭の中央に置かれた聖なる家は、12 段の階段で上がれ、正面の高さと幅は等しく、それぞれ 100 キュビトであったが、後ろは 40 キュビト狭かった。正面には、両側に肩と呼ばれるものがあり、さらに 20 キュビト続いていた。最初の門は高さ 70 キュビト、幅 25 キュビトであったが、この門には扉がなかった。なぜなら、それは天国の普遍的な可視性を表し、どこからも排除できないことを表していたからである。正面は全面が金で覆われており、そこから家のより内側の最初の部分が全て見えた。その部分は非常に大きかったので、より内側の門の周りの部分はすべて、それを見る人々には輝いて見えた。しかし、家全体が内部で二つに分かれていたため、私たちの目に見えていたのは最初の部分だけでした。その高さは、全体にわたって 90 キュビト、長さは 50 キュビト、幅は 20 キュビトでした。しかし、家の最初の部分のこの端にあった門は、すでに述べたように、その周囲の壁全体と同様に、全体が金で覆われていました。門の上には金のブドウの木があり、そこから人の背丈ほどもあるブドウの房が垂れ下がっていました。しかし、この家は二つに分かれていたため、内側の部分は外側よりも低く、高さ 55 キュビト、幅 16 キュビトの金の扉がありました。しかし、これらの扉の前には、扉と同じ大きさのベールがありました。それはバビロニアのカーテンで、青、上質の亜麻布、緋色、紫で刺繍されており、その織り目は本当に素晴らしいものでした。また、この色の混合には神秘的な解釈が伴うのではなく、宇宙のある種のイメージである。緋色は謎めいた火を、上質の亜麻は大地を、青は空気を、紫は海を意味しているようであった。この類似性の基礎となる色は、この二つの色であるが、上質の亜麻と紫はそれぞれ独自の基礎の起源を持ち、一方は大地から、他方は海から生まれた。このカーテンには、生き物を表す十二の星座を除いて、天の神秘的なものすべてが刺繍されていた。

5. 誰かが神殿に入ると、その床が彼らを迎えた。神殿のこの部分の高さは六十キュビト、長さも同じであったが、幅はわずか二十キュビトであった。しかし、その六十キュビトの長さはまた分割され、その最初の部分は四十キュビトで切り取られ、その中には、すべての人々の間で非常に素晴らしく有名な三つのもの、すなわち、燭台、供えのパンのテーブル、および香の祭壇があった。七つのともしびは七つの惑星を意味していた。燭台からはたくさんのともしびが出ていたのである。テーブルの上の十二のパンは、黄道十二宮と一年を意味していた。しかし、香の祭壇は、海から補給された 13 種類の甘い香りのする香料によって、神が地球上の居住不可能な部分と居住可能な部分の両方にあるすべてのものの所有者であり、それらはすべて神の使用のために捧げられるべきであることを意味しました。しかし、すべての神殿の中で最も奥まった部分は 20 キュビトでした。これもまた、幕によって外側の部分から分離されていました。そこには何もありませんでした。そこは近づくことも侵すこともできず、誰にも見られず、至聖所と呼ばれていました。さて、神殿の下の部分の両側には小さな家があり、そこから他の家へと通じる通路がありました。それらの数は非常に多く、3 階建てでした。また、神殿の門からそれらの両側に入口がありました。しかし、神殿の上部には、そのような小さな家はありませんでした。神殿はそこでは狭く、40 キュビト高く、下部よりも小さい本体であったからです。したがって、床から 60 キュビトを含む全体の高さは、100 キュビトであったことがわかります。
6. さて、神殿の正面の外面には、人々の心や目を驚かせるようなものは何もありませんでした。なぜなら、神殿は重厚な金の板で全面が覆われていて、太陽が昇る最初の瞬間に、非常に燃えるような輝きを反射し、無理やり見ようとする人たちは、太陽の光線を見るときと同じように、目をそらしたからです。しかし、この神殿は、遠くから近づいてくると、見知らぬ人には、雪に覆われた山のように見えました。金メッキされていない部分は、非常に白かったからです。その頂上には、鳥が止まって汚れないように、先の尖った釘が付いていました。その石の中には、長さが 45 キュビト、高さが 5 キュビト、幅が 6 キュビトのものもありました。この神殿の前には、高さ 15 キュビトの祭壇があり、長さと幅は同じで、それぞれの寸法は 50 キュビトでした。神殿は四角形で、角は角のようであった。そこに至る通路は、知覚できないほどの傾斜をなしていた。それは鉄の道具を使わずに造られ、いかなる鉄の道具もそれに触れることはなかった。また、高さ約 1 キュビトの仕切り壁があり、それは良質の石で造られ、見栄えがよいようになっており、聖なる家と祭壇を囲み、外にいる人々を祭司たちから遠ざけていた。さらに、淋病やらい病にかかっている者は完全に町から締め出され、女性も月経が続くと神殿から締め出され、その不浄から解放されたときも、前述の限度を超えることは許されなかった。男性も、完全に清浄でない者は神殿の内庭に入ることを禁じられ、清浄でない祭司たち自身も神殿に入ることを禁じられた。
7. さて、身体に何らかの欠陥があるために奉仕できない祭司の家系の者たちは皆、そのような欠陥のない者たちとともに仕切りの内側に入り、家系のゆえに彼らと分け前をもらいましたが、それでも自分の私服以外は何も着ませんでした。なぜなら、奉仕する者以外は誰も聖なる衣を着ていなかったからです。しかし、身に何の傷もない祭司たちは、上等な亜麻布を着て祭壇に上りました。彼らは、奉仕の規則に違反する恐れがあるため、主に酒を控えました。大祭司も彼らとともに上りました。もちろんいつもというわけではなく、七日目と新月、そして毎年祝う私たちの国に属する祭りがあるときだけでした。彼が儀式を行うとき、彼は股下から股下まで届くズボンを履き、亜麻布の内衣と、青い衣を着ていた。その衣は丸く、縫い目がなく、房飾りが付いていて、足まで届いていた。房飾りには

金の鈴も付いており、その中にはざくろが混じっていた。鈴は雷を、ざくろは稲妻を意味していた。しかし、その衣を胸に結びつける帯には、金、紫、緋色、また上等の亜麻布と青色の様々な色の五列の刺繍が施されていた。その色は、神殿の垂れ幕にも刺繍が施されていたことを、私たちが以前あなた方に話したとおりである。エポデにも同様の刺繍が施されていたが、金の量はもっと多かった。その形は、胸にかけるストマッカーの形をしていた。その上には、小さな盾のような二つの金のボタンが付いていて、エポデを衣に留めていた。これらのボタンには、その国の部族の名前が刻まれた、非常に大きくて非常に優れた 2 つの赤縞瑪瑙がはめ込まれていました。反対側には、一方に 3 つ、もう一方に 4 つの、合計 12 の石がぶら下がっていました。赤縞瑪瑙、トパーズ、エメラルド、カーバンクル、ジャスパー、サファイア、瑪瑙、紫水晶、リグレ、縞瑪瑙、緑柱石、貴石で、そのそれぞれに前述の部族の名前が刻まれていました。また、上等な亜麻布のミトラが彼の頭を囲み、青いリボンで結ばれていました。その周囲には別の金の冠があり、その中に神聖な名前（神の）が刻まれていました。それは 4 つの母音で構成されています。しかし、大祭司は他の時にはこれらの衣服を着用せず、より簡素な服装をしていました。彼がそれをしたのは、神殿の最も神聖な場所に入ったときだけで、それは年に一度、私たち全員が神への断食を行う習慣がある日にだけだった。これが町と神殿に関することのすべてである。ただし、これに関連する習慣と法律については、より正確な話はまた別の機会にしましょう。ここでは触れられていない、これに関連する多くの事柄が残っているからです。

8. さて、アントニアの塔は、神殿の庭の二つの回廊の角、すなわち西側と北側の回廊の角に位置していた。それは高さ五十キュビトの岩の上に建てられ、大きな断崖の上にあった。それはヘロデ王の作品であり、彼はそこに彼の生まれながらの寛大さを示した。第一に、岩自体は、装飾のため、また登ろうとする者も降りようとする者も足を踏み入れることができないように、基礎から滑らかな石片で覆われていた。その隣、そして塔自体の建物に来る前に、高さ三キュビトの壁があったが、アントニアの塔自体の空間全体は、その壁の内側、高さ四十キュビトまで建てられていた。内部は宮殿のような広さと形をしており、中庭や水浴場、野営地用の広い空間など、あらゆる種類の部屋や設備に分かれていた。そのため、都市に必要な設備がすべて整っていることから、複数の都市で構成されているように見えるが、壮麗さから宮殿のようであった。また、全体の構造は塔に似ており、四隅にはさらに 4 つの塔があった。他の塔の高さはわずか 50 キュビトであったが、南東の角にある塔は 70 キュビトあり、そこから神殿全体を眺めることができた。しかし、神殿の 2 つの回廊とつながる角には、両方の回廊に下りる通路があり、そこを通って警備員 [この塔には常にローマ軍団が駐留していた] が、ユダヤ人の祭りのときには武器を持って回廊の間を何度も行き来し、人々が何か新しいことをしようとしないよう監視した。神殿は町を守る要塞であり、アントニアの塔は神殿を守るものであった。そして、その塔には、これら三つの守備隊がいた。14また、上部の町に属する特別な要塞があり、それはヘロデの宮殿であった。しかし、すでに述べたように、ベゼタの丘のために、アントニアの塔とは分けられていた。そして、アントニアの塔が立っていたその丘は、これら三つの中で最も高かったので、新しい町に隣接しており、北側の神殿の視界を遮る唯一の場所であった。そして、今のところは、町とその周囲の城壁について述べたので十分であろう。なぜなら、私は、それについて、他の場所でより正確な説明をしようと考えたからである。

- 神殿の破壊：ヨハネ 2:18-22 13 さて、ユダヤ人の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた。14 そして牛、羊、はとを売る者や両替する者などが宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、15 な

わでむちを造り、羊も牛もみな宮から追いだし、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし、16 はとを売る人々には「これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」と言われた。17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が、わたしを食いつくすであろう」と書いてあることを思い出した。18 そこで、ユダヤ人はイエスに言った、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」。19 イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。20 そこで、ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。それだのに、あなたは三日のうちに、それを建てるのですか」。21 イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである。22 それで、イエスが死人の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉とを信じた。

- 主の日について：2 テサロニケ 2:1-12 さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの来臨と、わたしたちがみもとに集められることとについて、あなたがたにお願いすることがある。2 霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。3 だれがどんな事をしても、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。4 彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。5 わたしがまだあなたがたの所にいた時、これらの事をくり返して言ったのを思い出さないのか。6 そして、あなたがたが知っているとおり、彼が自分に定められた時になってから現れるように、いま彼を阻止しているものがある。7 不法の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま阻止している者が取り除かれる時までのことである。8 その時になると、不法の者が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう。9 不法の者が来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、10 また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである。11 そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、12 こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである。
- 産みの苦しみ
  - 創世記 3:16 つぎに女に言われた、／「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い、／彼はあなたを治めるであろう」。
  - 詩篇 48:6 おののきは彼らに臨み、／その苦しみは産みの苦しみをする女のようであった。
  - 雅歌 8:5 自分の愛する者によりかかって、／荒野から上って来る者はだれですか。りんごの木の下で、わたしはあなたを呼びさました。あなたの母上は、かしこで、／あなたのために産みの苦しみをなし、／あなたを産んだ者が、かしこで産みの苦しみをした。
  - イザヤ 45:10 父にむかって／『あなたは、なぜ子をもうけるのか』と言い、／あるいは女にむかって／『あなたは、なぜ産みの苦しみをするのか』と／言う者はわざわいだ」。
  - イザヤ 54:1 「子を産まなかったうまずめよ、歌え。産みの苦しみをしなかった者よ、／声を放って歌いよばわれ。夫のない者の子は、／とついだ者の子よりも多い」と主は言われる。
  - イザヤ 67:7,8 シオンは産みの苦しみをなす前に産み、／その苦しみの来ない前に男子を産んだ。だれがこのような事を聞いたか、／だれがこのような事どもを見たか。一つの国は一日の苦しみで生れるだろうか。一つの国民はひと時に生れるだろうか。しかし、シオンは産みの苦しみをするやいなや

／その子らを産んだ。
  - マルコ 13:8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに地震があり、またききんが起るであろう。これらは産みの苦しみの初めである。
  - マタイ 24:8 しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである。
  - ローマ 8:22 実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。
  - ガラテヤ 4:19 ああ、わたしの幼な子たちよ。あなたがたの内にキリストの形ができるまでは、わたしは、またもや、あなたがたのために産みの苦しみをする。
  - ガラテヤ 4:27 すなわち、こう書いてある、／「喜べ、不妊の女よ。声をあげて喜べ、産みの苦しみを知らない女よ。ひとり者となっている女は多くの子を産み、／その数は、夫ある女の子らよりも多い」。
  - 1 テサロニケ 5:3 人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してできない。
  - 黙示録 12:2 この女は子を宿しており、産みの苦しみと悩みとのために、泣き叫んでいた。
- にせキリスト、にせ預言者
  - マルコ 13:22 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。
  - マタイ 24:24 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。
  - マタイ 7:15 にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。
  - マタイ 24:11 また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。
  - ルカ 6:26 人が皆あなたがたをほめるときは、あなたがたはわざわいだ。彼らの祖先も、にせ預言者たちに対して同じことをしたのである。
  - 使徒 13:6 島全体を巡回して、パポスまで行ったところ、そこでユダヤ人の魔術師、バルイエスというにせ預言者に出会った。
  - 2 ペテロ 2:1 しかし、民の間に、にせ預言者が起ったことがあるが、それと同じく、あなたがたの間にも、にせ教師が現れるであろう。彼らは、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、すみやかな滅亡を自分の身に招いている。
  - 1 ヨハネ 4:1 愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである。
  - 黙示録 16:13 また見ると、龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた。
  - 黙示録 19:20 しかし、獣は捕えられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者も、獣と共に捕えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。
  - 黙示録 20:10 そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。
- 耐え忍ぶ（　　：i. to remain, ii. to remain i.e. abide, not recede or flee）

- マルコ 13:13 また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
- マタイ 10:22 またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
- マタイ 24:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
- ルカ 21:19 あなたがたは耐え忍ぶことによって、自分の魂をかち取るであろう。
- 2 テモテ 2:10 それだから、わたしは選ばれた人たちのために、いっさいのことを耐え忍ぶのである。それは、彼らもキリスト・イエスによる救を受け、また、それと共に永遠の栄光を受けるためである。
- 2 テモテ 2:12 もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。
- ヤコブ 1:12 試錬を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。
- ヤコブ 5:10 兄弟たちよ。苦しみを耐え忍ぶことについては、主の御名によって語った預言者たちを模範にするがよい。
- 1 ペテロ 2:19 もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を耐え忍ぶなら、それはよみせられることである。

- ユダヤ社会の背景（バークレイ：マルコによる福音書　p.367）
  - ユダヤ人たちは、自分らが選民であることを決して疑わなかった。また彼らはいつか、選民にふさわしく、選民に約束されている世界における場所を占めるだろうと、決して疑わなかった。その場所を人間的な手段によって獲得するという考えを捨ててから、ずいぶん月日を経過していた。神の介入される日が主の日であった。主の日の前に恐怖と苦難の時があるだろう。それは世界がその基まで動かされる破壊のときであるだろう。そして審判のときであろう。しかし、それに新しい世界、新しい時代、新しい栄光が続くだろう。と。ある意味では、この思想はおさえることのできない楽天主義の産物であり。ユダヤ人は神が突入してこられるのを確信していた。ある意味ではそれは冷たい厭世主義の産物である。なぜなら、この世は完全に悪であり、ただその完全な破壊と新しい世界の現出があれば満足であるという思想に基づいていたからである。彼らは改革を待ち望まなかった。事柄の全機構において完全に再形成され、再生産されるのを待ち望んだ。
  - アモス 5:16-20 それゆえ、主なる万軍の神、／主はこう言われる、／「すべての広場で泣くことがあろう。すべてのちまたで人々は／『悲しいかな、悲しいかな』と言う。また彼らは農夫を呼んできて嘆かせ、／巧みな泣き女を招いて泣かせ、17 またすべてのぶどう畑にも泣くことがあろう。それはわたしがあなたがたの中を／通るからである」と主は言われる。18 わざわいなるかな、主の日を望む者よ、／あなたがたは何ゆえ主の日を望むのか。これは暗くて光がない。19 人がししの前を逃れてもくまに出会い、／また家にはいって、手を壁につけると、／へびにかまれるようなものである。20 主の日は暗くて、光がなく、／薄暗くて輝きがないではないか。
  - イザヤ 13:6-16 あなたがたは泣き叫べ。主の日が近づき、／滅びが全能者から来るからだ。7 それゆえ、すべての手は弱り、／すべての人の心は溶け去る。8 彼らは恐れおののき、苦しみと悩みに捕えられ、／子を産まんとする女のようにもだえ苦しみ、／互に驚き、顔を見あわせ、／その顔は炎のようになる。9 見よ、主の日が来る。残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒し、／その中か

ら罪びとを断ち滅ぼすために来る。10 天の星とその星座とはその光を放たず、／太陽は出ても暗く、／月はその光を輝かさない。11 わたしはその悪のために世を罰し、／その不義のために悪い者を罰し、／高ぶる者の誇をとどめ、／あらぶる者の高慢を低くする。12 わたしは人を精金よりも、／オフルのこがねよりも少なくする。13 それゆえ、万軍の主の憤りにより、／その激しい怒りの日に、／天は震い、地は揺り動いて、その所をはなれる。14 彼らは追われた、かもしかのように、／あるいは集める者のない羊のようになって、／おのおの自分の民に帰り、／自分の国に逃げて行く。15 すべて見いだされる者は刺され、／すべて捕えられる者はつるぎによって倒され、16 彼らのみどりごはその目の前で投げ砕かれ、／その家はかすめ奪われ、その妻は汚される。

- ヨエル 2:1-3 あなたがたはシオンで／ラッパを吹け。わが聖なる山で警報を吹きならせ。国の民はみな、／ふるいわななけ。主の日が来るからである。それは近い。2 これは暗く、薄暗い日、／雲の群がるまっくらな日である。多くの強い民が／暗やみのようにもろもろの山をおおう。このようなことは昔からあったことがなく、／後の代々の年にも再び起ることがないであろう。3 火は彼らの前を焼き、／炎は彼らの後に燃える。彼らのこない前には、／地はエデンの園のようであるが、／その去った後は荒れ果てた野のようになる。これをのがれうるものは一つもない。
- ヨエル 2:28-32 その後わたしはわが霊を／すべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、／あなたがたの老人たちは夢を見、／あなたがたの若者たちは幻を見る。29 その日わたしはまた／わが霊をしもべ、はしためにに注ぐ。30 わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。31 主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変る。32 すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある。
- ヨエル 3:14 群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。15 日も月も暗くなり、星もその光を失う。16 主はシオンから大声で叫び、／エルサレムから声を出される。天も地もふるい動く。しかし主はその民の避け所、／イスラエルの人々のとりでである。17 「そこであなたがたは知るであろう、／わたしはあなたがたの神、主であって、／わが聖なる山シオンに住むことを。エルサレムは聖所となり、／他国人は重ねてその中を通ることがない。18 その日もろもろの山にうまい酒がしたたり、／もろもろの丘は乳を流し、／ユダのすべての川は水を流す。泉は主の家から出て、／シッテムの谷を潤す。19 エジプトは荒れ地となり、エドムは荒野となる。彼らはその国でユダの人々をしえたげ、／罪なき者の血を流したからである。20 しかしユダは永遠に人の住む所となり、／エルサレムは世々に保つ。

4.77.5 記録

- 日時：2024 年 11 月 28 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）1 名

4.77.6 問いについて

1. この会話はいつどこでどのように始まりますか。(1)

- 1 イエスが宮から出て行かれるとき、弟子のひとりが言った、「先生、ごらんなさい。なんという見事な石、なんという立派な建物でしょう」。

- [DQ] どのようなことに注目していますか。

  - ヘロデ神殿（第三神殿と呼ばれる。ソロモン神殿、バビロン帰還後に再建した神殿、そして、ヘロデ大王が建て始めこのときも建設が続いていた神殿。AD70 にユダヤの反乱を収めたローマ軍によって徹底的に「その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなる」ように破壊される）の壮麗さ。
  - ユダヤ戦記 V-5-6a さて、神殿の正面の外面には、人々の心や目を驚かせるようなものは何もありませんでした。なぜなら、神殿は重厚な金の板で全面が覆われていて、太陽が昇る最初の瞬間に、非常に燃えるような輝きを反射し、無理やり見ようとする人たちは、太陽の光線を見るときと同じように、目をそらしたからです。しかし、この神殿は、遠くから近づいてくると、見知らぬ人には、雪に覆われた山のように見えました。金メッキされていない部分は、非常に白かったからです。その頂上には、鳥が止まって汚れないように、先の尖った釘が付いていました。その石の中には、長さが 45 キュビト、高さが 5 キュビト、幅が 6 キュビトのものもありました。この神殿の前には、高さ 15 キュビトの祭壇があり、長さと幅は同じで、それぞれの寸法は 50 キュビトでした。神殿は四角形で、角は角のようであった。そこに至る通路は、知覚できないほどの傾斜をなしていた。それは鉄の道具を使わずに造られ、いかなる鉄の道具もそれに触れることはなかった。また、高さ約 1 キュビトの仕切り壁があり、それは良質の石で造られ、見栄えがよいようになっており、聖なる家と祭壇を囲み、外にいる人々を祭司たちから遠ざけていた。

- [DQ] 壮麗なものをほめてはいけないのでしょうか。

  - やもめの献金（12:41-44）と関連があるかもしれない。神の視点を教えておられる。
  - 43b イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。44 みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」。
  - イエスには、やはり教えるべき、神様の視点があったのだろう。このあとのイエスの言葉でも、禁止しているわけではない。単に、儚いものだよということだけを伝えている。

- [DQ] マルコでは、誰が言ったと書いてありますか。マタイ、ルカと比較してみましょう。

  -「弟子のひとり」マタイでは「24:1 イエスが宮から出て行こうとしておられると、弟子たちは近寄ってきて、宮の建物にイエスの注意を促した。」ルカでは「21:5 ある人々が、見事な石と奉納

物とで宮が飾られていることを話していたので、」。

  - マルコでは、弟子の一人で、このあと 3 節以降のことにも名前が出てくるが、マタイでは、弟子たちとぼやかし、ルカでは、人々としている。マタイでは、これらは、弟子集団に語られたように書かれ、ルカでは、人々に対してより一般的に語られたこととして記述されている。時代的要請がことなるのだろう。おそらく、実際に起こったことは、マルコが近いのではないかと思われる。一般から具体に移行することは難しい。

2. イエスは、宮について何と言っていますか。(2)

- 2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。
- [DQ] イエスは、どのような思いで、このようなことを言ったのでしょうか。
  - 壮麗な物質を称賛することに対する虚しさは弟子たちには伝えたかったのではないだろうか。
  - ヨハネ 2:19 イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。
    * 神殿に関して、いくつかの言葉が混入されている可能性も排除できない。共観福音書では、宮きよめは、受難週伝承に入っているが、2:19 はイエスの言葉としては入っておらず、逆に「『あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこわし、モーセがわたしたちに伝えた慣例を変えてしまうだろう』などと、彼が言うのを、わたしたちは聞きました」。（使徒 6:14 ステパノの逮捕）「言った、「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。」（マタイ 27:40）と、イエスを非難することに用いられている。
    * 神殿破壊についてが一般的で、マルコ 13:2 は、（実際に神殿が破壊された）後からの加筆だったかもしれない。
- [DQ] 具体的な神殿崩壊の預言をしているのでしょうか。それともより一般的な物質の壮麗さに目を奪われることについてでしょうか。
  - おそらく、後者のほうに、中心があるように思われる。ヨハネ 2:19 のように言ったか、それとも、13:2 のように、言われたかは不明だが。

3. 誰が何をイエスに聞いていますか。(3,4)

- 3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。4 「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。
- [DQ] 質問した様子はどのように描かれていますか。どのようなことがわかりますか。

  - 3b ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。4a 「わたしたちにお話しください。
  - 1 節の「弟子の一人」は誰かは不明だが、この四人が「ひそかに」「わたしたちに」と聞いた場面は、多少秘密を独占しようという感じが受け取れる。「弟子の一人」とは差別化しているのかもしれない。
- [DQ] マタイと、ルカも確認してみましょう。どんな違いがありますか。それは、なぜでしょう。
  - マタイ 24:3b 弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、ルカ 21:7 そこで彼ら（ある人々）はたずねた
  - [Q] この人たち（ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ）は、どのような人たちですか。
    * 共観福音書によると最初にイエスの弟子になった二組の兄弟。十二弟子の一員。ヨハネによる福音書によると、アンデレは最初バプテスマのヨハネの弟子で、最初にイエスをメシアと呼んだひとである。
      · ヨハネ 1:40,41 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとりは、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。41 彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。
    * ヤイロの娘
      · マルコ 5:37 そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟**ヨハネ**のほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。
    * 高い山に三人だけ連れて登る。
      · マルコ 9:2 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、**ヨハネ**だけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、
    * ゲッセマネ
      · マルコ 14:33 そしてペテロ、ヤコブ、**ヨハネ**を一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、
- [DQ] 何を聞いていますか。
  -「いつ、そんなことが起る（か）」「（そんなことがことごとく成就するような場合には、）どんな前兆がありますか」
  - 直接的には、「神殿崩壊は、いつ起こり、どんな前兆があるか。」
- [DQ] このあとのイエスの答えからすると、神殿崩壊がいつかと、その前兆を意識して話しているのでしょうか。それとも、終わりの時？

  - おそらくそうではない。「そんなこと」からもっと深い意味を受け取っているように見える。
  - 共感福音書成立年とも関係する記事で、たしかに、マルコの 2 節の記述が、実際にそのことが起こったあとに書かれたとされている、マタイ、ルカでもほとんど正確に受け継がれている。マルコのこの部分は、AD70 以降に書かれたものなのだろうか。エルサレムにのぼるまでの活動はペテロ由来と思われ、古いのではないかと思われるが、受難週の伝承は別かもしれない。その意味で、最終的に今の形になったのは、AD70 頃なのかもしれない。

4. イエスはどんなことが起こると言っていますか。(5-13)

- 5 そこで、イエスは話しはじめられた、「人に惑わされないように気をつけなさい。6 多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がそれだと言って、多くの人を惑わすであろう。
- [DQ] イエスの名を名乗って現れるとはどのようなことですか。
  - おそらく意味は広い。再臨のイエスだというものもあるかもしれないし、イエスの生まれ変わり、群れの指導者であることを示そうとしたりする。
  - [Q] 「にせ預言者」（マタイ 24:11）とはどのような人でしょうか。
    * マルコ 13:22 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。
    * マタイ 24:24 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。
  - 2 テサロニケ 2:2 霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。
- 7 また、戦争と戦争のうわさとを聞くときにも、あわてるな。それは起らねばならないが、まだ終りではない。8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに地震があり、またききんが起るであろう。これらは産みの苦しみの初めである。9a あなたがたは自分で気をつけていなさい。
- [DQ] 戦争や自然災害や飢饉については、どのように言われていますか。
  - 戦争（民と民、国と国、人間同士の争い）、地震（自然災害）、飢饉（社会的な問題）、
  - [Q] 「産みの苦しみの始まり」は、どのようなことを伝えているのでしょうか。
    * 突然起こり、いつまで続くかわからず、命を生み出す、命にに関わる痛み。
- 9b あなたがたは、わたしのために、衆議所に引きわたされ、会堂で打たれ、長官たちや王たちの前に立たされ、彼らに対してあかしをさせられるであろう。10 こうして、福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。11 そして、人々があなたがたを連れて行って引きわたすとき、何を言おうかと、前もって心配するな。その場合、自分に示されることを語るがよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。
- [DQ] 弟子たち（あなたがた）に対してはどのようなことが起こると言われていますか。

  - イエス（キリスト）のために、 衆議所に引きわたされ、 会堂で打たれ、 長官たちや王たちの前に立たされ、 彼らに対してあかしをさせられる
  - [Q] どんな証でしょうか。
    * 福音？
- [DQ]「福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。」は、何を伝えているのでしょうか。（ルカにはない）
  - それまでは、おわりは来ない。
- [DQ] 福音が全世界に宣べ伝えられまで、終わりは来ないのでしょうか。
- 12 また兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを殺させるであろう。13 また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
- [DQ] 家族などすべての人に憎まれるとは、どんなことが言われているのでしょうか。
  - 兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡、 子は両親に逆らって立ち、彼らを殺させる、 わたしの名のゆえに、すべての人に憎まれる

5. イエスはそれぞれについて、どのようなことを注意し、教えていますか。(5-13)

- [DQ] イエスの名を名乗って現れるとき
  - 人に惑わされないように気をつけなさい。
- [DQ] 戦争や自然災害が起こる時
  - 産みの苦しみの初めにおいて、自分で気をつけていなさい。
- [DQ] 福音のために証言を求められるとき
  - 自分に示されることを語るがよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。
  - [Q] 迫害のときはどのような機会になると言ってますか。またどのような約束を与えていますか。
- [DQ] 家族などすべての人に憎まれるとき
  - 最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
  - [Q] なぜ愛が冷えるのでしょうか。（マタイ 24:12）
    * 12 また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。
- [DQ] 愛の宗教であるキリスト教なはずなのに、なぜ「すべての人に憎まれる」のでしょうか。

  - 福音が宣べつらえられても、平和になるとは言っていない。

6. わたしたちは、これらのことについて、どのように考え、何に注意し、生きていったら良いのでしょうか。

- 「いつ」かはわからない。 たいへんなことが起こっても惑わされるな。 神・聖霊が助けてくださる。 耐え忍びなさい。
  - 神殿崩壊を相対化している。
  - マルコ 13:32 その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。
  - マタイ 24:36 その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。
  - ルカ 19:44 おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」。
- [DQ] 耐え忍ぶとは、どのようなことでしょうか。
  - マルコ 13:13 また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイ 24:13)
  - マタイ 10:22 またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
  - ルカ 21:19 あなたがたは耐え忍ぶことによって、自分の魂をかち取るであろう。
- 耐え忍ぶ（　　：i. to remain, ii. to remain i.e. abide, not recede or flee）
  - 希望を持ち続けること !? 我慢することとは違うように思われる。

4.77.7 メモ

- 共観福音書の差異：マタイ、ルカにも並行記事があるが、全体的には似ている。しかし、マルコが具体的で、元々の形だと思われる。まず、「弟子のひとりが言った」とマルコではなっているが、マタイでは、「弟子たち（略）イエスの注意を促した」、ルカでは「ある人々（略）話していた。」となっており、特に、ルカでは、その後も、「あなたがた」となっていて、当時のキリスト者に語りかけているように書かれている。最後も、マルコとマタイは「最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」であるが、ルカは「あなたがたは耐え忍ぶことによって、自分の魂をかち取るであろう。」（21:19）である。また、マタイには「世の終わり」（24:3）という言葉があるが、ルカでは「時（　　：due measure, a fixed and definite time, the time when things are brought to crisis, the decisive epoch waited for)」（21:8, 参照マルコ 13:33「気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである。」）は使われている箇所があるが、マルコとルカでは「終わり」と抽象的なことばが使われている。マルコと、ルカでは、「自分がそれだと言って、多くのひとを惑わす」とあるところを、マタイには「自分がキリストだと言って、多くの人を惑わす」としている。マルコ 13:10「こうして、福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。」は、マタイには「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」（24:14）と対応する箇所があるが、ルカにはない。

- イエスは「いつ」と「前兆」との問いのうち、「いつ」という問いには、答えていないように見える。イエスが気にかかっていたことは、どんなことだったのだろうか。
  - 神殿崩壊ととられる内容を語ったことで、問いが発せられている。しかし、3 節以降では、起こることを、それに対する備えに中心が置かれている。
    - 自分がそれだというような人に惑わされるな：5 そこで、イエスは話しはじめられた、「人に惑わされないように気をつけなさい。6 多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がそれだと言って、多くの人を惑わすであろう。
      - 人に惑わされないように気をつけなさい。
    - 戦争や自然災害や飢饉：7 また、戦争と戦争のうわさとを聞くときにも、あわてるな。それは起らねばならないが、まだ終りではない。8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに地震があり、またききんが起るであろう。これらは産みの苦しみの初めである。9 あなたがたは自分で気をつけていなさい。
      - 産みの苦しみの初めにおいて、自分で気をつけていなさい。
    - 福音のために証言を求められる：あなたがたは、わたしのために、衆議所に引きわたされ、会堂で打たれ、長官たちや王たちの前に立たされ、彼らに対してあかしをさせられるであろう。10 こうして、福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。11 そして、人々があなたがたを連れて行って引きわたすとき、何を言おうかと、前もって心配するな。その場合、自分に示されることを語るがよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。
      - 自分に示されることを語るがよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。
    - 家族などすべての人に憎まれる：12 また兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを殺させるであろう。13 また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
      - 最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
- G.K. チェスタートン：天国を頭の中に入れようとするのは愚か者のすることであり、彼の頭が破壊するのも当然である。賢い者は、その頭を天国の中に入れることで満足する。
- 榊原康夫：7 つの前兆
  - にせキリスト、戦争と戦争のうわさ、ききん、地震、教会迫害、教会内での背教と腐敗、全世界への福音のあかし、

4.78　13:14-23 大きな苦難を予告する

14 荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ)、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。15 屋上にいる者は、下におりるな。また家から物を取り出そうとして内にはいるな。16 畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。17 その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。18 この事が冬おこらぬように祈れ。19 その日には、神が万物を造られた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような患難が起るからである。20 もし主がその期間を縮めてくださらないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選ばれた選民のために、その期間を縮めてくださったのである。21 そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、『見よ、あそこにいる』と言っても、それを信じるな。22 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。23 だから、気をつけていなさい。いっさいの事を、あなたがたに前もって言っておく。

4.78.1　マタイ 24:15-28

15 預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ)、16 そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。17 屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりるな。18 畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。19 その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。20 あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ。21 その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである。22 もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選民のためには、その期間が縮められるであろう。23 そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。24 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。25 見よ、あなたがたに前もって言っておく。26 だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。27 ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう。28 死体のあるところには、はげたかが集まるものである。

4.78.2　ルカ 21:20-24

20 エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたとさとりなさい。21 そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。市中にいる者は、そこから出て行くがよい。また、いなかにいる者は市内にはいってはいけない。22 それは、聖書にしるされたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ 23 その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。地上には大きな苦難があり、この民にはみ怒りが臨み、24 彼らはつるぎの刃に倒れ、また捕えられて諸国へ引きゆかれるであろう。そしてエルサレムは、異邦人の時期が満ちるまで、彼らに踏みにじられているであろう。

マルコによる福音書 13 章 14-23 節福音書対照表

マルコによる福音書 13 章 14-23,24-27 節福音書対照表

4.79　13:24-27 人の子が来る

24 その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、25 星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。26 そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。27 そのとき、彼は御使たちをつかわして、地のはてから天のはてまで、四方からその選民を呼び集めるであろう。

4.79.1　マタイ 24:29-31

29 しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。30 そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。31 また、彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう。

4.79.2　ルカ 21:25-28

25 また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み、海と大波とのとどろきにおじ惑い、26 人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が揺り動かされるからである。27 そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。28 これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」。

マルコによる福音書 13 章 24-27 節福音書対照表

マルコによる福音書 13 章 14-23,24-27 節福音書対照表

4.79.3　問い

1. 前の箇所で、イエスは、どのような質問に、どのように答えていましたか。(1-13)
2. どんなことが起こると言っていますか。(14-20)
3. どのようなことに注意するように言われていますか。(14-20)
4. にせ預言者やにせメシアとはどのようなひとたちですか。(21-23)

5. 人の子が来るときはどのように描かれてますか。(24-27)

6. あなたは、この箇所から、何を学びましたか。

4.79.4 参照

- 荒らす憎むべきもの (abomination of desolation, spoken of by Daniel the prophet;)：
  (a foul thing, a detestable thing, i.e., of idols and things pertaining to idolatry), (a making desolate, desolation) 「ヘブル語：ぞっとさせる涜神」
  - ダニエル 9:27 彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう。また荒す者が憎むべき者の翼に乗って来るでしょう。こうしてついにその定まった終りが、その荒す者の上に注がれるのです」。
  - ダニエル 11:31 彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。
  - ダニエル 12:11 常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、千二百九十日が定められている。
- 荒らす憎むべきもの
  - シリアのアンティオコス王による弾圧
    * マカバイ記一 1:54-64 第百四十五年、キスレウの月の十五日には、王は祭壇の上に「荒廃をもたらす憎むべきもの」を建てた。人々は周囲のユダの町々に異教の祭壇を築き、55 家々の戸口や大路で香をたき、56 律法の巻物を見つけてはこれを引き裂いて火にくべた。57 契約の書を隠していることが発覚した者、律法に適った生活をしている者は、王の裁きにより処刑された。58 悪人たちは毎月、町々でイスラエル人を見つけては彼らに暴行を加えた。59 そして月の二十五日には主の祭壇上にしつらえた異教の祭壇でいけにえを献げた。60 また、子どもに割礼を受けさせた母親を王の命令で殺し、61 その乳飲み子を母親の首につるし、母親の家の者たちや割礼を施した者たちをも殺した。62 だがイスラエル人の多くはそれにも屈せず、断固として不浄のものを口にしなかった。63 彼らは、食物によって身を汚して聖なる契約に背くよりは、死を選んで命を落としていった。64 大いなる怒りがイスラエルの上に激しく臨んだ。
  - カリグラ
    * AD40 エルサレムに自分の像を立てることを計画。AD41 没で、実行されなかった。
- バークレイ「荒らす憎むべきもの」について：
  - ヘブル語の表現の文字通りの意味は「ぞっとさせる涜神」である。その句の起源はアンティオコスに関連していた。すでに彼が、ユダヤの宗教を根絶させ、ギリシャ思想とギリシャ風とを導入しようとして、豚の肉を大祭壇に供え、聖域に公娼を置いて神殿を汚した。聖所そのものの前にオリンピアの

ゼウスの大きな像を末、ユダヤ人たちにそれを礼拝するように命じた。「荒らす憎むべきもの」「ぞっとさせる涜神」と言う句は、本来、異教の像と、アンティオコスが神殿を汚すためにそれに付属させたものとを書き表したものである。それとおなじようなことが再び起きようとしているというのが、この箇所である。

- アンティオコス・エピファネス
  - スリアのセレウコス王朝（BC312-）の王、アンティオコス四世（BC175-163）自ら、ゼウスの権化と称した。
  - マカバイ記一 1:54 第百四十五年、キスレウの月の十五日には、王は祭壇の上に「荒廃をもたらす憎むべきもの」を建てた。人々は周囲のユダの町々に異教の祭壇を築き、
  - マカバイ記二 6:1,2 程なくして王は、アテネ人の一人の長老を派遣した。ユダヤ人を強いて、父祖の律法から離れさせ、神の律法によって生きることをやめさせ、2 エルサレムの神殿を汚してオリンポスのゼウスの神殿と名付けさせ、ゲリジム山の神殿を、そこに住む者たちがたまたまそう呼んでいたように、ゼウス・クセニオスの神殿と名付けさせるためである。
  - ユダヤ古代誌 12:5 大祭司職をめぐる争いが続く中、アンティオコスはエルサレムに遠征し、町を占領して神殿を略奪した。ユダヤ人を苦しめたこと、また多くのユダヤ人が自国の法律を捨てたこと、サマリア人がギリシャ人の習慣に従ってゲリジム山の神殿をユピテルヘレニウス神殿と名付けたことなど。
    * 1. この頃、大祭司オニアスが死ぬと、人々は彼の兄弟であるイエスに大祭司の職を与えた。オニアスが残した息子 [またはオニアス 4 世] はまだ幼かったからである。この子に起こったすべての出来事については、しかるべきところで読者に知らせよう。しかし、オニアスの兄弟であったこのイエスは、彼に腹を立てた王によって大祭司の職を剥奪され、その弟であるオニアスにその職を与えた。シモンには 3 人の息子がいて、すでに読者に知らせたように、それぞれに祭司職が与えられた。このイエスは名前をジェイソンに変えたが、オニアスはメネラオスと呼ばれた。さて、前の大祭司であるイエスが、彼の後に叙階されたメネラオスに対して反乱を起こしたので、群衆は両者に分かれた。そしてトビアスの息子たちはメネラオスの側についたが、民衆の大部分はジェイソンを支持した。メネラオスとトビアスの息子たちは、そのことで困惑し、アンティオコスのもとに退き、自分たちの国の法律とそれに従ったユダヤ人の生活様式を捨て、王の法律とギリシャ人の生活様式に従いたいと申し出た。そこで彼らは、エルサレムに体育館を建てる許可を求めた。15 許可が下りると、彼らは性器の割礼も隠した。裸のときでもギリシャ人に見えるようにするためである。こうして、彼らは自分たちの国の習慣をすべて捨て、他の国の習慣を真似した。

      2. さて、アンティオコスは、王国の情勢が好転したので、エジプトへの遠征を決意した。エジプトを手に入れたいという願望があったからと、プトレマイオスの息子が弱体化し、まだそのような重大な問題を扱う能力がないと見なしたからである。そこで彼は大軍を率いてペルシウムに向かい、裏切りによってプトレマイオス・フィロメトルを迂回し、エジプトを占領した。次に彼は

メンフィス周辺の場所に到達し、そこを占領すると、包囲してそこを占領し、そこで統治していたプトレマイオスを征服しようとして、急いでアレクサンドリアに向かった。しかし、彼は、その国に手を出すなと命じたローマ人の布告によって、アレクサンドリアだけでなくエジプト全土から追い出された。これは私が以前に別のところで述べたとおりである。これから、この王がユダヤと神殿をどのように征服したかについて、具体的に述べよう。というのは、私は以前の著作の中でそれらの事柄について非常に簡単に触れたので、今その歴史をもう一度、しかも非常に正確に検討する必要があると考えたからです。

3. アンティオコス王はエジプトから帰国し、ローマ人を恐れてエルサレム市に遠征した。セレウコス王国の百四十三年、彼はエルサレムに滞在していたが、自分の党派が門を開いたため、戦うことなくその市を占領した。エルサレムを占領すると、敵対する党派の多くを殺害し、多額の金銭を奪ってアンティオキアに戻った。

4. それから二年後、第百四十五年、われわれがカスレウと呼び、マケドニア人がアペレウスと呼ぶ月の二十五日、第百五十三オリンピアードの年、王はエルサレムに上陸し、平和を装いながら裏切りによってその町を占領した。その時、王は神殿に眠る財宝のせいで、町に入るのを許した者たちを容赦しなかった。しかし、貪欲な性癖に駆られて（神殿には大量の金と、非常に高価な多くの装飾品が奉納されていたのを見て）、その富を略奪するために、結んだ同盟を破ろうとした。そこで彼は神殿を荒らし、金の燭台、金の祭壇（香の祭壇）、供えのパンの食卓、全焼の供え物の祭壇を取り除いた。また、亜麻布と緋色の布で作った垂れ幕さえも手放さなかった。また、神殿の秘宝を空にして、何も残さなかった。こうしてユダヤ人を大いに嘆かせた。律法に従って神に毎日捧げていた犠牲を捧げることを禁じたからである。そして、彼は町全体を略奪した後、住民の何人かを殺し、何人かを妻子とともに捕虜にした。生きたまま捕らえられた捕虜の数はおよそ一万人に上った。また、最も立派な建物を焼き払い、町の城壁を倒した後、町の下部に城塞を建てた。17 その場所は高台にあり、神殿を見下ろしていたため、王は高い壁と塔で要塞化し、マケドニア人の守備隊を置いた。しかし、その城塞にはユダヤ人の民衆のうち不信心で邪悪な者が住んでおり、市民が多くのひどい災難に見舞われたのは、彼らによるものであった。王は神の祭壇の上に偶像の祭壇を築き、その上で豚を殺し、律法にもその国のユダヤ教の礼拝にも従わない犠牲を捧げた。また、王は人々に、自分たちの神に捧げていた礼拝を捨て、自分が神とみなした者たちを崇拝するよう強要した。そして、神殿を建てさせ、あらゆる町や村に偶像の祭壇を建てさせ、毎日豚を捧げさせた。また、息子に割礼を施してはならないと命じ、命令に違反した者には罰を与えると脅した。彼はまた、監督者を任命し、彼らに彼の命令に従うよう強制した。そして実際、自発的に、あるいは宣告された罰を恐れて、王の命令に従ったユダヤ人はたくさんいた。しかし、最も優れた人々、そして最も高貴な魂の人々は彼を尊敬せず、不従順な者たちに彼が脅した罰よりも、自分たちの国の慣習にもっと敬意を払った。そのため彼らは毎日、大きな悲惨と苦難を味わった。彼らは棒で打たれ、体は引き裂かれ、まだ生きていて息をしているうちに十字架につけられた。彼らはまた、王の命令に従って割礼を施した女性とその息子たちを絞め殺し、十字架にかけられたまま息子たちを首にかけた。そして、律法の聖なる書物が見つかった場合は、それは破壊され、一緒に見つかった人々も惨めに死んだ。

5. サマリア人は、ユダヤ人がこのような苦難を受けているのを見て、もはや自分たちが同族であると告白せず、ゲリジム山の神殿が全能の神のものであるとも告白しませんでした。これは、すでに述べたように、彼らの性質によるものでした。そして、彼らは今や自分たちがメディア人とペルシャ人の植民地であると言いました。実際、彼らは彼らの植民地でした。そこで彼らは使節をアンティオコスに送り、次のような内容の手紙を送った。「シケムに住むシドン人から、神アンティオコス王エピファネスへの記念品。私たちの先祖は、ある疫病が頻繁に起こることと、ある古い迷信に従って、ユダヤ人が安息日と呼ぶ日を守る習慣がありました。18 そして、ゲリジムと呼ばれる山に、名前のない神殿を建て、そこで適切な犠牲を捧げました。今、これらの邪悪なユダヤ人に対する正当な扱いについて、彼らの管理人は、私たちが彼らの親族であり、彼らと同じように行動していると仮定し、公文書から明らかなように、私たちはもともとシドン人であるにもかかわらず、私たちも同じ告発を受けるに値します。したがって、私たちの恩人であり救世主であるあなたに、この地域の知事アポロニウスと、その地域の知事ニカノルに命令を下すようお願いします。汝の事務の長官に、我々を煩わせたり、ユダヤ人が告発されていることを我々に押し付けたりしないで下さい。我々は彼らの民族や習慣から疎外されているのですから。しかし、現在名前のない我々の神殿をユピテル・ヘレニウス神殿と名付けて下さい。そうすれば、我々はもう煩わされることはなく、むしろ静かにして自分たちの仕事に専念し、より多くの収入を汝にもたらすでしょう。」サマリア人がこのことを嘆願すると、王は手紙で次のような返答を彼らに送り返した。「アンティオコス王よりニカノルへ。シケムに住むシドン人から、同封の告発状が送られてきました。それで、我々が友人たちとこの件について相談していたところ、彼らから送られた使者は、ユダヤ人に属する告発には全く関心がなく、ギリシア人の習慣に従って生きることを選ぶと我々に告げました。したがって、我々は彼らがそのような告発から解放されたと宣言し、彼らの請願に応じて、彼らの神殿をユピテル・ヘレニウス神殿と名付けるよう命じます。」彼はまた、46 年、ヘカトラベオンの月 18 日に、その地域の知事アポロニウスに同様の手紙を送りました。

– ユダヤ戦記 I:1:1-2 1. エピファネスと呼ばれたアンティオコスが、シリア全土に対する権利をめぐって第 6 代プトレマイオスと口論していたのと時を同じくして、ユダヤの権力者たちの間で大きな反乱が起こり、彼らは政権獲得をめぐって争いました。一方、高位の者たちは、それぞれが同等の者に従うことに耐えられませんでした。しかし、大祭司のひとりであるオニアスが優勢に立ち、トビアスの息子たちを町から追い出しました。彼らはアンティオコスのもとに逃げ、彼らを指導者として利用し、ユダヤに遠征するよう懇願しました。王は事前にそのように準備していたので、彼らの要求に従い、大軍を率いてユダヤ人を襲撃し、力ずくで町を占領し、プトレマイオスを支持する大勢の人々を殺害し、兵士たちを派遣して容赦なく略奪しました。彼はまた神殿を略奪し、3 年 6 か月間、毎日罪の償いの犠牲を捧げるという習慣を止めさせました。しかし、大祭司オニアスはプトレマイオスのもとに逃げ、ヘリオポリスのノムスで彼から地位を与えられ、そこにエルサレムに似た都市と、その神殿に似た神殿を建てました。これ については、後で適切な場所でさらに詳しく説明します。

2. アンティオコスは、この都市を思いがけず占領したり、略奪したり、そこで大虐殺を行ったりしても満足せず、激しい怒りに駆られ、包囲中に受けた苦しみを思い出し、ユダヤ人にその国の法律を破

棄させ、幼児に割礼を受けさせず、祭壇に豚の肉を捧げるように強要した。ユダヤ人は皆これに反対し、最も有能な者たちは死刑に処された。要塞の守備に派遣されたバッキデスもまた、これらの邪悪な命令を受け、生来の蛮行に加わり、あらゆる種類の極悪非道な行為にふけり、住民の中でも最も立派な者たちを一人ずつ苦しめ、毎日公然と都市を破壊すると脅し、ついには極悪非道な行為によって貧しい人々を刺激して復讐させた。

- バークレイ「にせキリストたちや、にせ預言者たち」異端について
  1. 自分自身に都合の良い教義を作る
  2. 真理の一部を強調する
  3. 人々に魅力的に映るようにする
  4. 交わりから離れさせる、分断を生じさせる
  5. 完全に理解できるものにする
- その日：終末における主の定められた日
  - エレミヤ 3:16-18 主は言われる、あなたがたが地に増して多くなるとき、その日には、人々はかさねて「主の契約の箱」と言わず、これを思い出さず、これを覚えず、これを尋ねず、これを作らない。17 そのときエルサレムは主のみ位ととなえられ、万国の民はここに集まる。すなわち主の名のもとにエルサレムに集まり、かさねて、かたくなに自分の悪い心に従うことはしない。18 その日には、ユダの家はイスラエルの家と一緒になり、北の地から出て、わたしがあなたがたの先祖たちに嗣業として与えた地に共に来る。
  - エレミヤ 31:29 その時、彼らはもはや、／『父がすっぱいぶどうを食べたので、／子どもの歯がうく』／とは言わない。
  - エレミヤ 33:15,16 その日、その時になるならば、わたしはダビデのために一つの正しい枝を生じさせよう。彼は公平と正義を地に行う。16 その日、ユダは救を得、エルサレムは安らかにおる。その名は『主はわれわれの正義』ととなえられる。
  - ヨエル 3:1,2 見よ、わたしがユダとエルサレムとの幸福をもとに返すその日、その時、2 わたしは万国の民を集めて、これをヨシャパテの谷に携えくだり、その所でわが民、わが嗣業であるイスラエルのために彼らをさばく。彼らがわが民を諸国民のうちに散らして、わたしの地を分かち取ったからである。
  - ゼカリヤ 8:23　万軍の主は、こう仰せられる、その日には、もろもろの国ことばの民の中から十人の者が、ひとりのユダヤ人の衣のすそをつかまえて、『あなたがたと一緒に行こう。神があなたがたと共にいますことを聞いたから』と言う」。
  - イザヤ 13:9-11 見よ、主の日が来る。残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒し、／その中

から罪びとを断ち滅ぼすために来る。10 天の星とその星座とはその光を放たず、／太陽は出ても暗く、／月はその光を輝かさない。11 わたしはその悪のために世を罰し、／その不義のために悪い者を罰し、／高ぶる者の誇をとどめ、／あらぶる者の高慢を低くする。

  - イザヤ 34:4 天の万象は衰え、／もろもろの天は巻物のように巻かれ、／その万象はぶどうの木から葉の落ちるように、／いちじくの木から葉の落ちるように落ちる。
  - エゼキエル 32:7,8 わたしはあなたを滅ぼす時、／空をおおい、星を暗くし、／雲で日をおおい、月に光を放たせない。8 わたしは空の輝く光を、／ことごとくあなたの上に暗くし、／あなたの国をやみとすると／主なる神は言う。
  - ヨエル 2:30,31 わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。31 主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変る。
  - アモス 8:9 主なる神は言われる、／「その日には、／わたしは真昼に太陽を沈ませ、／白昼に地を暗くし、
  - ダニエル 7:13,14 わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、／見よ、人の子のような者が、／天の雲に乗ってきて、／日の老いたる者のもとに来ると、／その前に導かれた。14 彼に主権と光栄と国とを賜い、／諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、／なくなることがなく、／その国は滅びることがない。

- 選びの民を集める
  - 申命記 30:3,4 あなたの神、主はあなたを再び栄えさせ、あなたをあわれみ、あなたの神、主はあなたを散らされた国々から再び集められるであろう。4 たといあなたが天のはてに追いやられても、あなたの神、主はそこからあなたを集め、そこからあなたを連れ帰られるであろう。
  - イザヤ 60:4 あなたの目をあげて見まわせ、／彼らはみな集まってあなたに来る。あなたの子らは遠くから来、／あなたの娘らは、かいなにいだかれて来る。
  - エレミヤ 32:37 見よ、わたしは、わたしの怒りと憤りと大いなる怒りをもって、彼らを追いやったもろもろの国から彼らを集め、この所へ導きかえって、安らかに住まわせる。
  - エゼキエル 34:13 わたしは彼らをもろもろの民の中から導き出し、もろもろの国から集めて、彼らの国に携え入れ、イスラエルの山の上、泉のほとり、また国のうちの人の住むすべての所でこれを養う。
  - エゼキエル 36:24 わたしはあなたがたを諸国民の中から導き出し、万国から集めて、あなたがたの国に行かせる。
  - ゼカリヤ 2:6 主は仰せられる、さあ、北の地から逃げて来なさい。わたしはあなたがたを、天の四方の風のように散らしたからである。

- 支配の座につく

- マタイ 19:28 イエスは彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。
- ルカ 22:30 わたしの国で食卓について飲み食いをさせ、また位に座してイスラエルの十二の部族をさばかせるであろう。

4.79.5 記録

- 日時：2024 年 12 月 5 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）4 名

4.79.6 問いについて

1. 前の箇所で、イエスは、どのような質問に、どのように答えていましたか。(1-13)
   - 2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。4 「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。
   - にせのイエスに惑わされるな。戦争や自然災害や飢饉は起こっても、それで終わりではないこと。福音のために証言を求められる。そして、家族などすべての人に憎まれる。
   - [DQ] わたしたちには、どのように勧められていましたか。
     - 人に惑わされないように気をつけなさい。（5）あわてるな。(6) あなたがたは自分で気をつけていなさい。（9）自分に示されることを語るがよい。（11）最後まで耐え忍ぶ者は救われる。（13）
     - 福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。（10）
2. どんなことが起こると言っていますか。(14-20)
   - 14 荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。
     - 15 屋上にいる者は、下におりるな。また家から物を取り出そうとして内にはいるな。16 畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。17 その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。18 この事が冬おこらぬように祈れ。19 その日には、神が万物を造られた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような患難が起るからである。20 もし主がその期間

を縮めてくださらないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選ばれた選民のために、その期間を縮めてくださったのである。

- [A] （その日には、）神が万物を造られた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような患難が起る
- [DQ] 「荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば」は具体的な事件を指しているのでしょうか。
  - [参照] ダニエル 11:31 彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。
  - [参照] マカバイ記一 1:54 第百四十五年、キスレウの月の十五日には、王は祭壇の上に「荒廃をもたらす憎むべきもの」を建てた。人々は周囲のユダの町々に異教の祭壇を築き、
    - アンティオコス四世（BC175-163）アンティオコス・エピファネス
  - [参照] ユダヤ戦記 I:1:2 アンティオコスは、この都市を思いがけず占領したり、略奪したり、そこで大虐殺を行ったりしても満足せず、激しい怒りに駆られ、包囲中に受けた苦しみを思い出し、ユダヤ人にその国の法律を破棄させ、幼児に割礼を受けさせず、祭壇に豚の肉を捧げるように強要した。(BC167) ユダヤ人は皆これに反対し、最も有能な者たちは死刑に処された。要塞の守備に派遣されたバッキデスもまた、これらの邪悪な命令を受け、生来の蛮行に加わり、あらゆる種類の極悪非道な行為にふけり、住民の中でも最も立派な者たちを一人ずつ苦しめ、毎日公然と都市を破壊すると脅し、ついには極悪非道な行為によって貧しい人々を刺激して復讐させた。
  - [参照] AD40 カリグラがエルサレムに自分の像を建てようとした。（AD41 没）
  - [Q] これが 70 年のエルサレムの破壊を意味しているとすると、何を教えようとしているのでしょうか。
  - [Q] エルサレムの破壊以降の人には、どのような意味があるのでしょうか。
- [DQ] それは、かなり先のことですか。それとも、AD66-70 のユダヤ戦役のことでしょうか。
  - [Q] いつ起こるのでしょうか。
  - [A] 13:32 その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。
- [DQ] どのようなことがおき、それは人々にどのような影響を及ぼすと言っていますか。

3. どのようなことに注意するように言われていますか。（14-20）

- [DQ] （荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば）どう行動するように、描かれていますか。また、どのような備えが必要なのでしょうか。

1. ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。14 （荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ)、そのとき、）ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。
    - AD66-70 のユダヤ戦争のときは、ペレア地方に逃れたと、エウセビオスは教会史に書いている。
2. 身を守ることを優先せよ。15 屋上にいる者は、下におりるな。また家から物を取り出そうとして内にはいるな。16 畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。
3. たいへんなときに起こらぬよう祈れ。17 その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。18 この事が冬おこらぬように祈れ。

4. にせ預言者やにせメシアとはどのようなひとたちですか。(21-23)

- 21 そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、『見よ、あそこにいる』と言っても、それを信じるな。22 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。23 だから、気をつけていなさい。いっさいの事を、あなたがたに前もって言っておく。
- [A] しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとする
    - [参照] 申命記 13:1-3 あなたがたのうちに預言者または夢みる者が起って、しるしや奇跡を示し、2 あなたに告げるそのしるしや奇跡が実現して、あなたがこれまで知らなかった『ほかの神々に、われわれは従い仕えよう』と言っても、3 あなたはその預言者または夢みる者の言葉に聞き従ってはならない。あなたがたの神、主はあなたがたが心をつくし、精神をつくして、あなたがたの神、主を愛するか、どうかを知ろうと、このようにあなたがたを試みられるからである。
- [DQ] 偽預言者や、偽メシアは、見分けることができるのでしょうか。
- [DQ] イエスはどのようなことをすすめていますか。
    - 気をつけていなさい。(23)

5. 人の子が来るときはどのように描かれてますか。(24-27)

- 24 その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、25 星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。26 そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。27 そのとき、彼は御使たちをつかわして、地のはてから天のはてまで、四方からその選民を呼び集めるであろう。
- [DQ] 人の子が現れる徴としてどのようなことが起こると言われていますか。
- [参照 - その日] エレミヤ 33:15,16 その日、その時になるならば、わたしはダビデのために一つの正しい枝を生じさせよう。彼は公平と正義を地に行う。16 その日、ユダは救を得、エルサレムは安らかにおる。その名は『主はわれわれの正義』ととなえられる。

- [参照 - その日] ヨエル 3:1,2 見よ、わたしがユダとエルサレムとの幸福をもとに返すその日、その時、2 わたしは万国の民を集めて、これをヨシャパテの谷に携えくだり、その所でわが民、わが嗣業であるイスラエルのために彼らをさばく。彼らがわが民を諸国民のうちに散らして、わたしの地を分かち取ったからである。

- [参照 - 主の日、天の万象]　イザヤ 13:9-11 見よ、主の日が来る。残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒し、／その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る。10 天の星とその星座とはその光を放たず、／太陽は出ても暗く、／月はその光を輝かさない。11 わたしはその悪のために世を罰し、／その不義のために悪い者を罰し、／高ぶる者の誇をとどめ、／あらぶる者の高慢を低くする。

- [参照 - 主の日、天の万象]　イザヤ 34:4 天の万象は衰え、／もろもろの天は巻物のように巻かれ、／その万象はぶどうの木から葉の落ちるように、／いちじくの木から葉の落ちるように落ちる。

- [参照 - 主の日、天の万象]　ヨエル 2:30,31 わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。31 主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変る。

- [参照 - 人の子・雲に乗って]　ダニエル 7:13,14 わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、／見よ、人の子のような者が、／天の雲に乗ってきて、／日の老いたる者のもとに来ると、／その前に導かれた。14 彼に主権と光栄と国とを賜い、／諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、／なくなることがなく、／その国は滅びることがない。

6. あなたは、この箇所から、何を学びましたか。

- [DQ] 弟子たちの問いに関するイエスの答えは、どのようなものだったのでしょうか。

4.79.7　メモ

- 共観福音書の差異：
  - 「大きな苦難を予告する」は、マルコとマタイは共通点が多いが、ルカはかなり異なる。マルコとマタイの相違点は「荒らす憎むべき者」について「預言者ダニエルによって言われた」が追加されていること、「この事が冬おこらぬように祈れ。」（18）の部分が、「あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ。」と安息日が加わっていること、「もし主がその期間を縮めてくださらないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選ばれた選民のために、その期間を縮めてくださったのである。」（20）が、「もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選民のためには、その期間が縮められるであろう。」と表現が変えられていること、あとは、結びが異なり、マルコでは「だから、気をつけていなさい。いっさいの事を、あなたがたに前もって言っておく。」（23）とだけある部分を、「25 見よ、あなたがたに前もって言っておく。26 だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。27 ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう。28 死体のあるところには、はげたかが集まるものである。」と、人の子が現れることへと繋げら

れている。ルカでは、まず、「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたとさとりなさい。」と歴史的におそらく、だれでも認識できることが具体的に書かれ、「それは、聖書にしるされたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ」として、「そしてエルサレムは、異邦人の時期が満ちるまで、彼らに踏みにじられているであろう。」と結ばれている。並行箇所とは言えないのかもしれない。

  –「人の子が来る」においても、マルコとマタイは共通点が多いが、ルカの記述は異なる。マルコとマタイの相違点は、マルコでは「この患難の後」となっている箇所に「たちまち」が追加され、さらにマルコで「そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。」(26）となっている部分は「そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。」と表現され、最後の節も「ラッパ」が加わり、マルコより詳細になっている。ルカでは、これらのことが、世界規模で起こることともに、「これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救（　　: a releasing effected by payment of ransom, redemption, deliverance, liberation procured by the payment of a ransom, Rm 3:24, 8:23, 1Cor 1:30 etc）が近づいているのだから」と結んでいる。まだこのあとに、続きが予測されている。

- 「荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ)、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。」(14）と始まるこの箇所は、まず、二重の意味があることを理解しなければいけないのだろう。すなわち、直接的には、神殿破壊がされる、ユダヤ戦役（AD66-70）のときのことであり、そして、そこで終わらない、将来のことについて語られている二重の構造である。実際、「荒らす憎むべきもの」は一義的には、ユダヤ教を冒涜し棄教させるために、神殿におぞましいものをもちこんだシリアのアンティオコスによるギリシャ化が想定されている。しかし、それは、イエスの時代にすでに終わっていることでもある。マルコが書かれた時代がユダヤ戦役の前か後かは不明だが、いずれにしても、それこそがこの箇所の預言ではないのだろう。もし、その預言のために書かれたのであれば、その時をもって、意味を失う。実際、「山へ逃げよ」と語られ、ユダヤにいた、その教えゆえに、キリスト者の多くは、山に逃げ、ローマによって滅ぼされなかったことも伝えられている。さらに、ここには「ユダヤにいる人」と限定的にも語られており、キリスト者は、すでに、広い範囲に広がっていたことも想定されている。つまり、ローマによるエルサレムの破壊、神殿崩壊は、ここで語られていることと重なると言えども、それが終わりではないことも確かである。それを理解して、読まなければならない。

- また、イエスの再臨、世の終わりといわれるものが、来ないとは言っていない。まさに、「24 その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、25 星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。26 そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。」である。このことに注意を向けなければいけない。

- 苦難のときをどのように生きれば良いのだろうか。

- 人の子が来ることを通して、なにを教えているのだろうか。

4.80　13:28-32 いちじくの木の教え

28 いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。29 そのように、これらの事が起るのを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。30 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。31 天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。32 その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。

4.80.1　マタイ 24:32-35

32 いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。33 そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。34 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。35 天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。

4.80.2　ルカ 21:29-33

29 それから一つの譬を話された、「いちじくの木を、またすべての木を見なさい。30 はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。31 このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。32 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。33 天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は決して滅びることがない。

マルコによる福音書 13 章 28-32 節福音書対照表

マルコによる福音書 13 章 28-32,33-37 節福音書対照表

4.81　13:33-37 目を覚ましていなさい

33 気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである。34 それはちょうど、旅に立つ人が家を出るに当り、その僕たちに、それぞれ仕事を割り当てて責任をもたせ、門番には目をさましておれと、命じるようなものである。35 だから、目をさましていなさい。いつ、家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、にわとりの鳴くころか、明け方か、わからないからである。36 あるいは急に帰ってきて、あなたがたの眠っているところを見つけるかも知れない。37 目をさましていなさい。わたしがあなたがたに言うこの言葉は、すべての人々に言うのである」。

4.81.1　マタイ 24:36-44

36 その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。37 人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。38 すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。39 そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう。40 そのとき、ふたりの者が畑にいると、ひとりは取り去られ、ひとりは取り残されるであろう。41 ふたりの女がうすをひいていると、ひとりは取り去られ、ひとりは残されるであろう。42 だから、目をさましていなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか、あなたがたには、わからないからである。43 このことをわきまえているがよい。家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら、目をさましていて、自分の家に押し入ることを許さないであろう。44 だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。

4.81.2　（参考）ルカ 21:34-38

34 あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。35 その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから。36 これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」。37 イエスは昼のあいだは宮で教え、夜には出て行ってオリブという山で夜をすごしておられた。38 民衆はみな、み教えを聞こうとして、いつも朝早く宮に行き、イエスのもとに集まった。

マルコによる福音書 13 章 33-37 節福音書対照表

マルコによる福音書 13 章 28-32,33-37 節福音書対照表

マルコによる福音書 13 章 33-37 節福音書対照表 + 参考

マルコによる福音書 13 章 28-32,33-37 節福音書対照表 + 参考

4.81.3　問い

1. この章の弟子たちとイエスとの問答を確認しましょう。(1-13)
2. いちじくの木からなにを学ぶように命じていますか。（28,29）
3. 「これらの事」は、何を意味しているのでしょうか。（29）
4. 「その日」について、何を伝えていますか。（30-32）

5. イエスはどのように命じていますか。(33-37)

6. 弟子たちの「いつ」と「前兆」についての問い（4）に、イエスはどのように答えていますか。

4.81.4 参照

- ルカには、このあと「目を覚ましていなさい」(21:34-37)
- このあとマタイは、充実な僕と悪い僕（マタイ 24:45-51、参照：ルカ 12:41-48）
- いちじく（無花果、映日果、一熟、学名：Ficus carica）
  - 果樹として世界中で広く栽培されている。小さな花が多数入った花嚢をつけ、雌雄異株で、雌株の花嚢が果嚢になる。これがいわゆるイチジクの果実とよばれており、古くから食用にされている。「南蛮柿」などの別名もある。
  -「無花果」の字は、花を咲かせずに実をつけるように見えることに由来する
  - 完熟いちじくを育てる [リンク]
    * 原産地：西アジア・アラビア南部
    * まるで野菜感覚で栽培できる、手っ取り早い果樹の代表格
    * 栽培は非常に簡単
    * イチジクの実はデリケートで完熟果は流通が難しいため、正真正銘の樹上完熟果を味わえるのは家庭園芸ならでは
    * 無農薬で植え付け 2 年目から収穫できるという栽培カンタンな果樹
    * イチジクの果実には、丈夫な歯や骨を作るミネラルであるカルシウムが、200g 中、生果で 52mg、乾果では 260mg 含まれています。また、カルシウムと併せて摂取すると吸収率が高くなるというマグネシウムも 28mg と多く含まれており、カルシウム不足が気になる人にもおすすめです。また、水溶性の食物繊維も豊富に含まれているので、腸の運動を活発にして働きを整えてくれるともいわれます。生食はもちろん、甘露煮やジュース、ジャムにしたり、また、ドライフルーツは栄養成分や旨みもぎゅっと凝縮され、青果の不足する時期の栄養源としても重宝します。
  - 創世記 3:7 すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。
  - 民数記 13:23 ついに彼らはエシコルの谷に行って、そこで一ふさのぶどうの枝を切り取り、これを棒をもって、ふたりでかつぎ、また、ざくろといちじくをも取った。
  - 民数記 20:5 どうしてあなたがたはわれわれをエジプトから上らせて、この悪い所に導き入れたのですか。ここには種をまく所もなく、いちじくもなく、ぶどうもなく、ざくろもなく、また飲む水もありません」。
  - 士師記 9:10,11 もろもろの木はまたいちじくの木に言った、『きてわたしたちの王になってください』。11 しかしいちじくの木は彼らに言った、『わたしはどうしてわたしの甘味と、わたしの良い果実とを捨てて行って、もろもろの木を治めることができましょう』。
  - サムエル記上 25:18 その時、アビガイルは急いでパン二百、ぶどう酒の皮袋二つ、調理した羊五頭、いり麦五セア、ほしぶどう百ふさ、ほしいちじくのかたまり二百を取って、ろばにのせ、

  - サムエル記上 30:12 また彼らはほしいちじくのかたまり一つと、ほしぶどう二ふさを彼に与えた。彼は食べて元気を回復した。彼は三日三夜、パンを食べず、水を飲んでいなかったからである。
  - 列王紀上 4:25 ソロモンの一生の間、ユダとイスラエルはダンからベエルシバに至るまで、安らかにおのおの自分たちのぶどうの木の下と、いちじくの木の下に住んだ。
  - 列王紀上 10:27 王はエルサレムで、銀を石のように用い、香柏を平地にあるいちじく桑のように多く用いた。
  - 列王紀下 18:31 あなたがたはヒゼキヤの言葉を聞いてはならない。アッスリヤの王はこう仰せられる、『あなたがたはわたしと和解して、わたしに降服せよ。そうすればあなたがたはおのおの自分のぶどうの実を食べ、おのおの自分のいちじくの実を食べ、おのおの自分の井戸の水を飲むことができるであろう。
  - 列王紀下 20:7 そしてイザヤは言った、「干しいちじくのひとかたまりを持ってきて、それを腫物につけさせなさい。そうすれば直るでしょう」。
  - マルコ 11:13 そして、葉の茂ったいちじくの木を遠くからごらんになって、その木に何かありはしないかと近寄られたが、葉のほかは何も見当らなかった。いちじくの季節でなかったからである。
  - マルコ 11:20,21 朝はやく道をとおっていると、彼らは先のいちじくが根元から枯れているのを見た。21 そこで、ペテロは思い出してイエスに言った、「先生、ごらんなさい。あなたがのろわれたいちじくが、枯れています」。
  - マルコ 13:28 いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。
  - マタイ 7:16 あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があろうか。
  - ルカ 13:6,7 それから、この譬を語られた、「ある人が自分のぶどう園にいちじくの木を植えて置いたので、実を捜しにきたが見つからなかった。7 そこで園丁に言った、『わたしは三年間も実を求めて、このいちじくの木のところにきたのだが、いまだに見あたらない。その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか』。
  - ルカ 19:4 それでイエスを見るために、前の方に走って行って、いちじく桑の木に登った。そこを通られるところだったからである。
  - ヨハネ 1:48-50 ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて言われた、「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。49 ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。50 イエスは答えて言われた、「あなたが、いちじくの木の下にいるのを見たと、わたしが言ったので信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう」。
- 主の日・終わりの日
  - 1 テサロニケ 5:1-3 兄弟たちよ。その時期と場合とについては、書きおくる必要はない。2 あなたがた自身がよく知っているとおり、主の日は盗人が夜くるように来る。3 人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してできない。
  - 2 テサロニケ 2:1-2 さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの来臨と、わたしたちがみも

とに集められることとについて、あなたがたにお願いすることがある。2 霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。
  - 2 ペテロ 3:4「主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない」と言うであろう。
  - ピリピ 4:5 あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。
  - 1 ペテロ 4:7 万物の終りが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい。

4.81.5 記録

- 日時：2024 年 12 月 12 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）0 名

4.81.6 問いについて

1. この章の弟子たちとイエスとの問答を確認しましょう。(1-13)
   - 1 イエスが宮から出て行かれるとき、弟子のひとりが言った、「先生、ごらんなさい。なんという見事な石、なんという立派な建物でしょう」。2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。4 「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。
   - 美しい神殿に注意を促した弟子に、イエスは、神殿の崩壊を示唆する。これに対して、四人の弟子たちが、「いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」と質問し、それに、イエスが、いろいととたいへんなことが起こるが、それは起こらなければならないが、最後ではない。惑わされず、注意していなさいと、答えている。
   - 神殿が崩壊するような大変なこと、そして、世の終わり、再臨などは、いつなのか。どんな予兆があるかと弟子たちはイエスに質問し、イエスは、そのときまでに起こるさまざまなことについてと、気をつけるべきことを教えた。
2. いちじくの木からなにを学ぶように命じていますか。(28,29)
   - 28 いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。29 そのように、これらの事が起るのを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。29 , , .
   - [DQ] いちじくの木について、どのようなことが書かれていますか。

  - [A] その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。
- [DQ] いちじくの木となにが対比されていますか。
  - [A] いちじくの木におこることと季節が、人の子が戸口まで近づいている。
- [DQ] 「人の子が戸口まで近づいている」とはどのようなことでしょうか。
  - 24 その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、25 星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。26 そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。27 そのとき、彼は御使たちをつかわして、地のはてから天のはてまで、四方からその選民を呼び集めるであろう。
  - この「その日」のことを指しているのだろうか。
  - 原文には「人の子」はない。　(それが扉（たち：複数）に近いことを知りなさい。)
  - マルコ 1:14,15 ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。
    - 神の国は近づいたということだろうか。
- [DQ] 結局、世の終わり（や、人の子の来臨のとき）は、わかるのでしょうか。
  - [A] 「近いこと」は、わかる。「知りなさい」と言っているということは、知ることができる。どんなことから、なにを知ることができるのでしょうか。
    - 終わりや、再臨を想定はしているのだろう。ただ、近いというだけであれば、最初のイエスの宣教メッセージと変わりないとも言える。すべてが一瞬にして素晴らしい状態になると期待することについては、戒めている。

3.「これらの事」は、何を意味しているのでしょうか。(29)

- 29 そのように、これらの事が起るのを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。
  -「その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。」に対応している。
- 神殿崩壊（2）　キリストの苦難と復活　終わりの時（31）
- [A] たくさんのことが描いてあるように見える。
- [A] ある程度「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。(4) と対応しているが、エルサレム陥落以上のことが語られている。

4.「その日」について、何を伝えていますか。(30-32)

- 30 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。31 天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。32 その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。

- [DQ] 「その日」とは、どのような時のことですか。

  - [A] 直接的には、「24 その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、25 星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。26 そのとき、大いなる力と栄光とをもっ

て、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。27 そのとき、彼は御使たちをつかわして、地のはてから天のはてまで、四方からその選民を呼び集めるであろう。」を指すと思われるが、最初の問の、「そんなことが起る」（4）ときが、意識されているのかもしれない。

- [DQ]「31 天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。」は何を伝えていますか。
  - [Q] わたしの言葉は、どれだろうか。一般的にイエスのことばだろうか。それとも、「これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。」も含んでいるだろうか。
  - [A] すくなくとも、終わりの日まで有効だと主張しているように見える。すると、そう簡単には終わりの日は、来ない。
  - [榊原康夫] イエスの預言したことが起こることは移ろいやすいこの時代（世代）が過ぎ去るよりもやすく、イエスの言葉が過ぎ去ることは不動の天地が過ぎ去るよりも難しい。

5. イエスはどのように命じていますか。（33-37）

- 33 気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである。34 それはちょうど、旅に立つ人が家を出るに当り、その僕たちに、それぞれ仕事を割り当てて責任をもたせ、門番には目をさましておれと、命じるようなものである。35 だから、目をさましていなさい。いつ、家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、にわとりの鳴くころか、明け方か、わからないからである。36 あるいは急に帰ってきて、あなたがたの眠っているところを見つけるかも知れない。37 目をさましていなさい。わたしがあなたがたに言うこの言葉は、すべての人々に言うのである」。
- [DQ] 「気をつけて、目をさましていなさい。」は、わたしたちに、なにを命じているのでしょうか。
- [注] 夕方か、夜中か、にわとりの鳴くころか、明け方か　四交代制だった、ローマの夜景の時間区分
- [参照] 1 テサロニケ 5:1-3 兄弟たちよ。その時期と場合とについては、書きおくる必要はない。2 あなたがた自身がよく知っているとおり、主の日は盗人が夜くるように来る。3 人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してできない。
- [参照] 2 テサロニケ 2:1-2 さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの来臨と、わたしたちがみもとに集められることとについて、あなたがたにお願いすることがある。2 霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。
- マタイとルカではどのように描かれていますか。
  - [参照] マタイ 24:36-44 36 その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。37 人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。38 すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつ

ぎなどしていた。39 そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう。40 そのとき、ふたりの者が畑にいると、ひとりは取り去られ、ひとりは取り残されるであろう。41 ふたりの女がうすをひいていると、ひとりは取り去られ、ひとりは残されるであろう。42 だから、目をさましていなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか、あなたがたには、わからないからである。43 このことをわきまえているがよい。家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら、目をさましていて、自分の家に押し入ることを許さないであろう。44 だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。

    *「ノアの時と同じ」とありますが、どのように同じなのでしょうか。

    * ノアの時代の人たちは何を知らされており、何を理解していなかったのでしょうか。

  - [参照] ルカ 21: 34 あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。35 その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから。36 これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」。

6. 弟子たちの「いつ」と「前兆」についての問い（4）に、イエスはどのように答えていますか。

   - 3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。4 「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。

   - [DQ] 結局、どのような前兆がおこるのでしょうか。いつだかはわかるのでしょうか。

   - [DQ] イエスは、明確には、こんなことがおこっても「まだまだ」というだけで、「いつ」かについて答えていないように見えますが、それはなぜでしょうか。

     - [A] イエスに従って、神の御心を生きようとする、夜警として、忠実な僕として、気をつけて、生きることを勧めている。エルサレムやローマを絶対化するのではなく、住む場所に関わらず、たとえ、戦争や、地震や、飢饉や、迫害がおこるなど、世も終わりだと見えることが起こったとしても、御心をもとめ、従って生きることを勧めているのだろう。

4.81.7 メモ

- 共観福音書の差異：マルコとマタイでは「人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」としているが、ルカでは、「神の国が近いのだとさとりなさい。」としている。しかし、「30 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。」は、三つの福音書とも共通している。マルコと、マタイには「その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、た

だ父だけが知っておられる。」があるが、ルカにはそれはない。しかし、「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。」は、三つの福音書とも共通である。「目を覚ましていなさい」の部分は、マルコと、マタイのみで、ルカには欠けている。マルコでは、「気をつけて、目をさましていなさい。」が強調され二度繰り返されているが、マタイでは、「ノアの時」のことの描写や、「盗賊」に対する備えなどを加えて、より具体的になっている。ルカでは、並行箇所は、ないが、関連する段落が続いている。

- その日、その時は、重要とされてきた。旧約・新約の最後は次のことばになっている。
  - マラキ 4:5,6 見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。6 彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。
  - ヨハネの黙示録 22:20,21 これらのことをあかしするかたが仰せになる、「しかり、わたしはすぐに来る」。アァメン、主イエスよ、きたりませ。21 主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように。
  - 使徒信条：かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまはん
  - ICU 教会
    - われらは全能の父なる神とその子イエス・キリストを信ずる。われらはイエス・キリストに現れた神の啓示をうけいれ、キリストの教えた生活態度や人生生の目的は人類のための神の経綸示すものであると信ずる。われらは聖書をとおして働き、また神につける人々の経験を介して示される聖霊の導きを信ずる。われらはイエス・キリストの宣べた神の国こそ神意による人類と世界とのまことの姿であると信ずる。われらはイエス・キリストに従う者の霊の交わりを信じ、神の国を全世界にひろめすすめる責任のあることを信ずる。（この信仰宣言言は 1954 年年本教会設立立立の際、慎重審議の結果採用用されたもので、創立立立当時の会員の確信の中核をあらわしている。）

4.82 14:1-2 イエスを殺す計略

1 さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。2 彼らは、「祭の間はいけない。民衆が騒ぎを起すかも知れない」と言っていた。

4.82.1 マタイ 26:1-5

1 イエスはこれらの言葉をすべて語り終えてから、弟子たちに言われた。2 「あなたがたが知っているとおり、ふつかの後には過越の祭になるが、人の子は十字架につけられるために引き渡される」。3 そのとき、祭司長たちや民の長老たちが、カヤパという大祭司の中庭に集まり、4 策略をもってイエスを捕えて殺そうと相談した。5 しかし彼らは言った、「祭の間はいけない。民衆の中に騒ぎが起るかも知れない」。

4.82.2 ルカ 22:1-2

1 さて、過越といわれている除酵祭が近づいた。2 祭司長たちや律法学者たちは、どうかしてイエスを殺そうと計っていた。民衆を恐れていたからである。

4.82.3 ヨハネ 11:45-53

45 マリヤのところにきて、イエスのなさったことを見た多くのユダヤ人たちは、イエスを信じた。46 しかし、そのうちの数人がパリサイ人たちのところに行って、イエスのされたことを告げた。47 そこで、祭司長たちとパリサイ人たちとは、議会を召集して言った、「この人が多くのしるしを行っているのに、お互は何をしているのだ。48 もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう」。49 彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った、「あなたがたは、何もわかっていないし、50 ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないようになるのがわたしたちにとって得だということを、考えてもいない」。51 このことは彼が自分から言ったのではない。彼はこの年の大祭司であったので、預言をして、イエスが国民のために、52 ただ国民のためだけではなく、また散在している神の子らを一つに集めるために、死ぬことになっていると、言ったのである。53 彼らはこの日からイエスを殺そうと相談した。

マルコによる福音書 14 章 1-2 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 1-2,10-11 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

4.83 14:3-9 ベタニアで香油を注がれる

3 イエスがベタニヤで、重い皮膚病の人シモンの家にいて、食卓についておられたとき、ひとりの女が、非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、それをこわし、香油をイエスの頭に注ぎかけた。4 すると、ある人々が憤って互に言った、「なんのために香油をこんなにむだにするのか。5 この香油を三百デナリ以上にでも売って、貧しい人たちに施すことができたのに」。そして女をきびしくとがめた。6 するとイエスは言われた、「するままにさせておきなさい。なぜ女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。7 貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときにはいつでも、よい事をしてやれる。しかし、わたしはあなたがたといつも一緒にいるわけではない。8 この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。9 よく聞きなさい。全世界のどこででも、福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」。

4.83.1 マタイ 26:6-13

6 さて、イエスがベタニヤで、重い皮膚病の人シモンの家におられたとき、7 ひとりの女が、高価な香油
が入れてある石膏のつぼを持ってきて、イエスに近寄り、食事の席についておられたイエスの頭に香油を
注ぎかけた。8 すると、弟子たちはこれを見て憤って言った、「なんのためにこんなむだ使をするのか。9
それを高く売って、貧しい人たちに施すことができたのに」。10 イエスはそれを聞いて彼らに言われた、
「なぜ、女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。11 貧しい人たちはいつもあなたがたと一
緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。12 この女がわたしのからだにこの香油を注いだ
のは、わたしの葬りの用意をするためである。13 よく聞きなさい。全世界のどこででも、この福音が宣べ
伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」。

4.83.2 ヨハネ 12:1-8

1 過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた。そこは、イエスが死人の中からよみがえらせた
ラザロのいた所である。2 イエスのためにそこで夕食の用意がされ、マルタは給仕をしていた。イエスと
一緒に食卓についていた者のうちに、ラザロも加わっていた。3 その時、マリヤは高価で純粋なナルドの
香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、香油のかおりが家に
いっぱいになった。4 弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、5「な
ぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。6 彼がこう言ったのは、貧しい
人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をご
まかしていたからであった。7 イエスは言われた、「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬り
の日のために、それをとっておいたのだから。8 貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいるが、わたし
はいつも共にいるわけではない」。

4.83.3 （参考）ルカ 7:36-50

36 あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、そのパリサイ人の家にはいって食卓
に着かれた。37 するとそのとき、その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓に着いておら
れることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、38 泣きながら、イエスのうしろでその
足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油
を塗った。39 イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、「もしこの人が預言者であるな
ら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。40 そこで
イエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言うことがある」。彼は「先生、おっしゃってくださ
い」と言った。41 イエスが言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりは五百デナリ、
もうひとりは五十デナリを借りていた。42 ところが、返すことができなかったので、彼はふたり共ゆる
してやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。43 シモンが答えて言った、「多く

ゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい」。44 それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいってきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。45 あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家にはいった時から、わたしの足に接吻をしてやまなかった。46 あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。47 それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。48 そして女に、「あなたの罪はゆるされた」と言われた。49 すると同席の者たちが心の中で言いはじめた、「罪をゆるすことさえするこの人は、いったい、何者だろう」。50 しかし、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。

マルコによる福音書 14 章 3-9 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

4.83.4 問い

1. 1–11 節のできごとをまとめてみましょう。イエスに対してどのような態度の人が登場しますか。
2. 女の人は、どこで、どのようなことをしますか。(3)
3. 女の人に対して、どのような人が、どのような対応をしますか。それは、なぜですか。(4,5)
4. イエスは、どのように、言われますか。(6-9)
5. 他の福音書からは、さらにどのようなことがわかりますか。
6. あなたは、この女の人の行為、人々の対応、イエスのことばについてどう思いますか。

4.83.5 参照

- 過越と除酵との祭の二日前（マタイ 26:2 過越の祭、ルカ 22:1 過越といわれている除酵祭）
  - 過越の祭：ニサンの月の十四日（4 月 14 日頃)、大祭で安息日のような日
    - ペンテコステ、仮庵の祭とともに三大祭。これらには、ユダヤの成年男子でエルサレムから 24 キロ以内に居住するものは、参加する義務があった。
    - 意義 1：出エジプト 12 章、エジプトでの奴隷身分からの解放。子羊の血を入口のかもいに塗ってある家以外の長子は死の天使によって殺された。種入れぬパンをたべて祝った。

    * 意義２：農業的意義、大麦の取り入れのしるし（レビ 23:10-11）
    * 巡礼者のエルサレム、ベタニヤとベテパゲでの宿泊は無料
    * ヨセフスの記録、AD65 256500 頭の子羊が殺された、一頭 10 人が最小単位であったので、300 万人の巡礼者と推定されている。
  - 除酵の祭：過越の祭に続く七日間。小祭で、その期間中に新しい働きは始められなかったが「大衆の利益のために必要なもの、個人の損失を防ぐ働き」は許された。
  - 実際には、二つの祭りは明確に区別するものではあるが、ヨセフスにも「われわれは種入れぬパンの祭りと呼ばれる八日間の祭りを守る」（ユダヤ古代史 II.15.1）との記述もあり、ひとまとめに言われることもあった。
- 祭司長たち：大祭司（　　）の複数形（　　）、chief priest, high priest
  - 旧約聖書では世襲終身職だが、ヘロデ時代は引退も他家への移動もある。ボエトスの子エレアザル（BC4-3）、セツの子イエス（BC3-6）、ボエトスの子ヨアザル（6）、セツの子アンナス（6-15）、バビの子イシマエル（15-16）、アンナスの子エレアザル（16-17）、カミの子シメオン（17-18）、アンナスの養子ヨセフ・カヤパ（18-36）
- ルカ 7:36-50 にも似た記述があるが、どう考えたら良いか。
  - たとえがあり、その実例のようなものとして書かれている。
  - 場面もことなり、別のことを記述しているのだろう。
- 食事の姿勢：右の手で食物を取れるように、左の肘で長椅子に寄りかかって横になった。
- ナルド油
  - インドから来た珍しい植物で作られ、客人が家に到着したとき、あるいは食事の席についたとき、その人に数滴の香油をかける習慣があった。
  - 割ることですべてを使い切ることを意味していると思われる。
- [Q to Gemini-1.0-Pro] ナルド（　　）について教えてください。
  - [Gemini-1.0-Pro]
  - スタクテスについてスタクテスは、古代ギリシャ語で「　　」と書かれ、特定の種類のナルドを指します。ナルドは、インド原産の常緑低木から抽出された、非常に珍重されていた芳香性樹脂です。
  - 特徴:

    香り: スタクテスは、甘く、温かく、ウッディな香りが特徴です。色: 濃い黄色から茶褐色です。粘稠度: 粘稠度の高い液体です。用途: スタクテスは、古代世界では、香水、軟膏、薬として広く使用され

ていました。また、宗教的な儀式や埋葬にも使われていました。歴史:

スタクテスは、古代エジプト、ギリシャ、ローマで高く評価されていました。聖書にも登場し、ヨハネによる福音書 12:3 では、マリヤがイエスの足にスタクテスを塗ったことが記されています。

- 現代での使用:

  今日でも、スタクテスは、香水、アロマセラピー、伝統的な医学で使用されています。また、高級な香料として珍重されています。

- その他の情報:

  スタクテスは、インド、ネパール、ブータンで栽培されています。スタクテスの抽出には、水蒸気蒸留法が使用されます。スタクテスの精油は、非常に濃縮されているため、希釈して使用する必要があります。参考資料:

- Wikipedia: Nard （植物）Spikenard（香料）

- 追加情報:

  スタクテスは、鎮静、抗炎症、抗菌などの薬効があるとされています。スタクテスは、不安、不眠症、頭痛などの症状を緩和するのに役立つと言われています。

- 香油の量（1 リトラ= 327.5g）
  - [Gemini-1.0-Pro] 香油の量
  - ヨハネによる福音書 12:3 は次のように述べています。

    > 「すると、マリヤは、約一リトラの本物のナルド、高価な香油を取り、イエスの足に注ぎ、自分の髪の毛でその足を拭いた。家は香油の香りに満たされた。」

    元のギリシャ語のテキストでは、「　」(リトラ) という単語が使われており、これは約 12 オンスまたは 340 グラムに相当する重量単位です。しかし、英語の翻訳である「pint」(パイント) は体積の単位であり、測定する液体によって異なる場合があります。

    したがって、マリヤが使用した香油の正確な量を判断するのは難しいです。しかし、香油の高価さと家がその香りで満たされたことを考えると、かなりの量であったと推定できます。

    マリヤが使用した香油についての追加情報は次のとおりです。

    香油の種類: ギリシャ語の「　」(スタクテス) は、その香りや薬効で高く評価されていた特定の種類のナルドを指します。香油の価値: マルコによる福音書 14:5 は、ナルドの価値が 300 デナリであったと述べており、これは労働者にとって 1 年分の賃金に相当します。行為の意義: マリヤが香油でイエスを塗った行為は、彼への献身と愛の象徴的なジェスチャーでした。また、ナルドは死者の体に塗るために使用されたため、彼の死と埋葬も予兆していました。

- １デナリ：労働者１日分の賃金
- 貧しい人
  - 申命記 15:7-11 あなたの神、主が賜わる地で、もしあなたの兄弟で貧しい者がひとりでも、町の内におるならば、その貧しい兄弟にむかって、心をかたくなにしてはならない。また手を閉じてはならない。8 必ず彼に手を開いて、その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない。9 あなたは心に邪念を起し、『第七年のゆるしの年が近づいた』と言って、貧しい兄弟に対し、物を惜しんで、何も与えないことのないように慎まなければならない。その人があなたを主に訴えるならば、あなたは罪を得るであろう。10 あなたは心から彼に与えなければならない。彼に与える時は惜しんではならない。あなたの神、主はこの事のために、あなたをすべての事業と、手のすべての働きにおいて祝福されるからである。11 貧しい者はいつまでも国のうちに絶えることがないから、わたしは命じて言う、『あなたは必ず国のうちにいるあなたの兄弟の乏しい者と、貧しい者とに、手を開かなければならない』。
- よい事： beautiful, handsome, excellent, eminent, choice, surpassing, precious, useful, suitable, commendable, admirable 生き生きとした美しいこと、 は、道徳的に善なること。
  - 6 . . ; . 7 ,
    , .
  - ここでのよい事は、愛と通じるものであろうか。それとも、美しいというところに、焦点があるのだろうか。
- ヨハネによる福音書直前の記事 11:17-45
  - 17 さて、イエスが行ってごらんになると、ラザロはすでに四日間も墓の中に置かれていた。18 ベタニヤはエルサレムに近く、二十五丁ばかり離れたところにあった。19 大ぜいのユダヤ人が、その兄弟のことで、マルタとマリヤとを慰めようとしてきていた。20 マルタはイエスがこられたと聞いて、出迎えに行ったが、マリヤは家ですわっていた。21 マルタはイエスに言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう。22 しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています」。23 イエスはマルタに言われた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。24 マルタは言った、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。25 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。27 マルタはイエスに言った、「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」。28 マルタはこう言ってから、帰って姉妹のマリヤを呼び、「先生がおいでになって、あなたを呼んでおられます」と小声で言った。29 これを聞いたマリヤはすぐに立ち上がって、イエスのもとに行った。30 イエスはまだ村に、はいってこられず、マルタがお迎えしたその場所におられた。31 マリヤと一緒に家にいて彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、彼女は墓に泣きに行くのであろ

うと思い、そのあとからついて行った。32 マリヤは、イエスのおられる所に行ってお目にかかり、その足もとにひれ伏して言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう」。33 イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、34 「彼をどこに置いたのか」。彼らはイエスに言った、「主よ、きて、ごらん下さい」。35 イエスは涙を流された。36 するとユダヤ人たちは言った、「ああ、なんと彼を愛しておられたことか」。37 しかし、彼らのある人たちは言った、「あの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせないようには、できなかったのか」。38 イエスはまた激しく感動して、墓にはいられた。それは洞穴であって、そこに石がはめてあった。39 イエスは言われた、「石を取りのけなさい」。死んだラザロの姉妹マルタが言った、「主よ、もう臭くなっております。四日もたっていますから」。40 イエスは彼女に言われた、「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。41 人々は石を取りのけた。すると、イエスは目を天にむけて言われた、「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します。42 あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています。しかし、こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるためであります」。43 こう言いながら、大声で「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばわれた。44 すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。イエスは人々に言われた、「彼をほどいてやって、帰らせなさい」。45 マリヤのところにきて、イエスのなさったことを見た多くのユダヤ人たちは、イエスを信じた。

4.83.6 記録

- 日時：2025 年 1 月 9 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）1 名

4.83.7 問いについて

1. 1–11 節のできごとをまとめてみましょう。イエスに対してどのような態度の人が登場しますか。
   - 1 さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。2 彼らは、「祭の間はいけない。民衆が騒ぎを起すかも知れない」と言っていた。
   - [DQ] いつのことだと書かれていますか。
     - [A] 過越と除酵との祭の二日前（マタイ 26:2 過越の祭、ルカ 22:1 過越といわれている除酵祭）
   - 過越と除酵との祭の二日前、策略をもってイエスを捕らえ殺そうとしている民の指導者たち、そして、この女、さらに、イスカリオテのユダ
2. 女の人は、どこで、どのようなことをしますか。(3)

- 3 イエスがベタニヤで、重い皮膚病の人シモンの家にいて、食卓についておられたとき、ひとりの女が、非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、それをこわし、香油をイエスの頭に注ぎかけた。
- [DQ] 場所
  - [A] ベタニヤの重い皮膚病の人シモンの家の食卓
  - [Q] 当時はどのようにして食事をしていましたか。
    - [A] 右の手で食物を取れるように、左の肘で長椅子に寄りかかって横になってたべていた。
- [DQ] 行為
  - [A] 非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼをこわし、イエスの頭に注ぎかける。
  - [Q] なぜ、つぼをこわしたのでしょうか。
    - [A] 残しておくことを考えてない。
    - [A] イエスにのみささげる。
- [DQ] この行為は、イエスには迷惑ではなかったのでしょうか。
  - 量は書かれていないが、ヨハネによると、一斤（600g, 1 pound = 450g）おそらく、0.5 リットルより少ない量
- [DQ] この女の人は、なぜ、このようなことをしたのでしょうか。

3. 女の人に対して、どのような人が、どのような対応をしますか。それは、なぜですか。(4,5)

- 4 すると、ある人々が憤って互に言った、「なんのために香油をこんなにむだにするのか。5 この香油を三百デナリ以上にでも売って、貧しい人たちに施すことができたのに」。そして女をきびしくとがめた。
- [DQ] だれが、咎めていますか。
  - [A] 「ある人々」（マタイ「弟子たち」、ヨハネ「イスカリオテのユダ」）
- [DQ] どのように咎めていますか。
  - [A] 「貧しい人たちに施すべきだ」
  - [A] 「売れば、三百デナリ以上になる」勿体（もったい）ない。
- [DQ] なぜ、そのようなことをいって、この女のひとを咎めるのでしょうか。
  - [A] この女の人の行為を、値踏みしている。他の行為と取り替え可能だと考えている。

4. イエスは、どのように、言われますか。(6-9)

- 6 するとイエスは言われた、「するままにさせておきなさい。なぜ女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。7 貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときにはいつでも、よい事をしてやれる。しかし、わたしはあなたがたといつも一緒にいるわけではない。8 この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。9 よく聞きなさい。全世界のどこででも、福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」。
- [DQ] イエスは、まずどのように言われますか。(6,7)

  - イエスは、あきらかにこの女性をかばっている。
  - するままにさせておきなさい。なぜ女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。一人の兄弟・姉妹が自ら良しと定めたことについて、とやかく批判して、彼女を「困らせる」べきではない。
  - 貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときにはいつでも、よい事をしてやれる。しかし、わたしはあなたがたといつも一緒にいるわけではない。
- [DQ] イエスは、この女のひとは自分にどのようなことをしてくれたと言っていますか。
  - よい事をしてくれた。
  - できる限りの事をした
  - わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれた
- [DQ] 記念として語られると言ってますが、なぜ、名前を出さないのでしょうか。
  - [A] マルコが書かれた時点では、この女は生きていて、危険に晒されないように、名前を出さなかったのでは。

5. 他の福音書からは、さらにどのようなことがわかりますか。

   - マタイ 26:6-13
   - ヨハネ 12:1-8：19-29, 1-18, 30, 31-42 の順が正しいとも言われる。
   - 参考：ルカ 7:36-50 罪の赦しと愛のことが書かれている。

6. あなたは、この女の人の行為、人々の対応、イエスのことばについてどう思いますか。

   - [DQ] この女の人は、なぜ、このようなことをしたのでしょうか。この女の人はどこまで理解してこの行為に至ったのでしょうか。
     - [A] マルコでは不明としか言えない。
     - [A] ヨハネでは、兄弟ラザロの復活の直後に位置付けられているので、その感謝もあったのでは。
     - [A] ルカ 10:38-42 のマルタとマリヤの話などからすると、マリヤは、イエスの真意を受け取っていたのかもしれない。
   - [DQ] この女のしたことは愛の行為なのでしょうか。

4.83.8 メモ

- 福音書の差異：ヨハネはかなり異なっている。油注ぎはヨハネでは、「過越の祭の六日まえ」（12:1）としている。おそらく、そちらが正しく、流れとして、マルコやマタイでは、油注ぎを、ここに置いているのだろう。マタイでは、「イエスはこれらの言葉をすべて語り終えてから」とはじまる（7:28, 11:1, 13:53, 18:1, 26:1 にありこれによって、イエスの説教を五つに分けているともとれる）十字架の死の予告をイエ

スがしている。「あなたがたが知っているとおり、ふつかの後には過越の祭になるが、人の子は十字架につけられるために引き渡される」。

- 重い皮膚病のシモン：不明だが、ヨハネの記述をみると、ラザロや、マリヤと近い存在であることもわかる。
- マリヤ：ヨハネによると香油を注いだのは、ベタニアのマリヤ、すなわち、マルタ、ラザロの兄弟のマリヤである。マリヤは、ルカ 10:38-41 にも登場するが、言葉を発するのは、一箇所のみで、「マリヤは、イエスのおられる所に行ってお目にかかり、その足もとにひれ伏して言った、『主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう』。」（ヨハネ 11:32）のみである。そして、このことばは、マルタが語った言葉と同じである。

  人間関係に関してある特性をもった女性であった可能性もあるようにみえる。その女性の行動を、イエスは弁護し「よい（うつくしい）事」と言っておられるように見える。

- マルコ 12:42,43 との比較：
  - 42 ところが、ひとりの貧しいやもめがきて、レプタ二つを入れた。それは一コドラントに当る。43 そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。
- マリヤのしたことは、無駄遣い、馬鹿な事だったのだろうか。そうかもしれない。しかし、イエス様は、それを弁護しておられる。その背後には、このマリヤへの愛があったのではないだろうか。マリヤの行動をみていると、ヨハネ 11 章、ルカ 10 章など、非常に限られてはいるが、静かに座り、そして、今回の大胆な行動をしている。ある障害特性をもっていたのかもしれないとさえ思う。しかし、そのことを、美しい事とイエスは評価され、困らせてはいけないといい、特別な歴史的できごとに変えておられる。驚きである。

4.84 14:10-11 ユダ、裏切りを企てる

10 ときに、十二弟子のひとりイスカリオテのユダは、イエスを祭司長たちに引きわたそうとして、彼らの所へ行った。11 彼らはこれを聞いて喜び、金を与えることを約束した。そこでユダは、どうかしてイエスを引きわたそうと、機会をねらっていた。

4.84.1 マタイ 26:14-16

14 時に、十二弟子のひとりイスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところに行って 15 言った、「彼をあなたがたに引き渡せば、いくらくださいますか」。すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。16 その時から、ユダはイエスを引きわたそうと、機会をねらっていた。

4.84.2　ルカ 22:3-6

> 3 そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれていたユダに、サタンがはいった。4 すなわち、彼は祭司長たちや宮守がしらたちのところへ行って、どうしてイエスを彼らに渡そうかと、その方法について協議した。5 彼らは喜んで、ユダに金を与える取決めをした。6 ユダはそれを承諾した。そして、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、機会をねらっていた。

マルコによる福音書 14 章 10-11 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 1-2,10-11 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

(マルコ 14:1-2, 10-11 を中心に)

4.84.3　問い

1. 1–11 節のできごとを復習しましょう。
2. いつ、どのような人たちが、どのようなことを計画しますか。(1)
3. なぜ、祭りの間に計画を実行することを避けたのでしょうか。(2)
4. ユダは、どのような人で、どのようなことをしますか。(10)
5. ユダは、なぜこのような決断をしたのだと思いますか。(11 その他)
6. それぞれのひとたちは、イエスについてどのように考えていたのでしょうか。

4.84.4　参照

- マルコ 14:1-2 1 さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。2 彼らは、「祭の間はいけない。民衆が騒ぎを起すかも知れない」と言っていた。
  - 1 . . 2 . , .
  - 1 After two days was the feast of the passover, and of unleavened bread: and the chief priests and the scribes sought how they might take him by craft, and put him to death. 2 But they said, Not on the feast day, lest there be an uproar of the people.
- 過越と除酵との祭の二日前（マタイ 26:2 過越の祭、ルカ 22:1 過越といわれている除酵祭）
  - 過越の祭：ニサンの月の十四日（4 月 14 日頃)、大祭で安息日のような日

    * ペンテコステ、仮庵の祭とともに三大祭。これらには、ユダヤの成年男子でエルサレムから 24 キロ以内に居住するものは、参加する義務があった。
    * 意義１：出エジプト 12 章、エジプトでの奴隷身分からの解放。子羊の血を入口のかもいに塗ってある家以外の長子は死の天使によって殺された。種入れぬパンをたべて祝った。
    * 意義２：農業的意義、大麦の取り入れのしるし（レビ 23:10-11）
    * 巡礼者のエルサレム、ベタニヤとベテパゲでの宿泊は無料
    * ヨセフスの記録、AD65 256500 頭の子羊が殺された、一頭 10 人が最小単位であったので、300 万人の巡礼者と推定されている。
  - 除酵の祭：過越の祭に続く七日間。小祭で、その期間中に新しい働きは始められなかったが「大衆の利益のために必要なもの、個人の損失を防ぐ働き」は許された。
  - 実際には、二つの祭りは明確に区別するものではあるが、ヨセフスにも「われわれは種入れぬパンの祭りと呼ばれる八日間の祭りを守る」（ユダヤ古代史 II.15.1）との記述もあり、ひとまとめに言われることもあった。
  - 出エジプト 23 章 14-17 節 14 あなたは年に三度、わたしのために祭を行わなければならない。15 あなたは種入れぬパンの祭を守らなければならない。わたしが、あなたに命じたように、アビブの月の定めの時に七日のあいだ、種入れぬパンを食べなければならない。それはその月にあなたがエジプトから出たからである。だれも、むなし手でわたしの前に出てはならない。16 また、あなたが畑にまいて獲た物の勤労の初穂をささげる刈入れの祭と、あなたの勤労の実を畑から取り入れる年の終りに、取入れの祭を行わなければならない。17 男子はみな、年に三度、主なる神の前に出なければならない。
  - 参照（ユダヤの祭りについて）：日本イスラエル親善協会 [リンク]・ミルトス（イスラエル・ユダヤ文化の出版社）[リンク]
- サタンの働き：
  - ルカ 22:3 そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれていたユダに、サタンがはいった。
  - ヨハネ 13:27 27 この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。
- ユダ：[十二弟子]
  - イスカリオテのユダは、共観福音書すべての、十二弟子のリストに含まれ、それも、みな、最後に入れている。（マルコ 3:13–19、マタイ 10:1–4、ルカ 6:12-16、マルコとマタイは「イエスを裏切った」ルカは「後に裏切り者となった」参照：使徒言行録 1:13）
    * マルコ 3:19a それからイスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。（3:19 , (V-AAI-3S) ）

    * マタイ 10:4 熱心党のシモンとイスカリオテのユダ。このユダはイエスを裏切った者である。(10:4 Σ K , (V-2AAP-NSM))

    * ルカ 6:16b それからイスカリオテのユダ。このユダが裏切者となったのである。（6:16 , (a betrayer, traitor N-NSM)）

  - イスカリオテのユダについては、共感福音書では、十二弟子のリスト以外は、祭司長たちに引き渡すことを、相談に行った箇所、最後の晩餐、イエスの捕縛、ユダの死のみである。このうちマルコであり、最後の晩餐では、裏切るものがマルコであること特定されてはいない。また、ユダの死については、言及されていない。ヨハネにおいては、６章に裏切ることになったユダについての言及があり、マリヤが香油を注ぐ箇所での弟子の発言を、イスカリオテのユダと特定している。

  - ヨハネ 6:70-71 イエスは彼らに答えられた、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」。71 これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

  - ヨハネ 12:3-6 3 その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、香油のかおりが家にいっぱいになった。4 弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、5 「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。6 彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。7 イエスは言われた、「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。8 貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない」。

  - ヨハネ 13:26 イエスは答えられた、「わたしが一きれの食物をひたして与える者が、それである」。そして、一きれの食物をひたしてとり上げ、シモンの子イスカリオテのユダにお与えになった。

  - ヨハネ 13:29 ある人々は、ユダが金入れをあずかっていたので、イエスが彼に、「祭のために必要なものを買え」と言われたか、あるいは、貧しい者に何か施させようとされたのだと思っていた。

- 弟子である（ユダ）の裏切りに関する旧約預言

  - 詩篇 41:9 わたしの信頼した親しい友、／わたしのパンを食べた親しい友さえも／わたしにそむいてくびすをあげた。

  - 詩篇 109:8 その日を少なくし、／その財産をほかの人にとらせ、

  - ゼカリヤ 11:12,13 わたしは彼らに向かって、「あなたがたがもし、よいと思うならば、わたしに賃銀を払いなさい。もし、いけなければやめなさい」と言ったので、彼らはわたしの賃銀として、銀三十シケルを量った。13 主はわたしに言われた、「彼らによって、わたしが値積られたその尊い価を、宮のさいせん箱に投げ入れよ」。わたしは銀三十シケルを取って、これを主の宮のさいせん箱に投げ入れた。

- ユダはイエスの死を望んでいたか？
  - （バークレイ）人々の心は、ユダがイエスの死を全然望んでいなかったであろうという考えに魅惑されて来た。ユダが狂信的な愛国者であり、彼がイエスのうちに、彼の夢である民族の力と栄光を実現させる最後の企ての一つとして、イエスに行動を強いるために、イエスを裏切ったのであろう。彼が当局者にイエスを引き渡したのは、そのことによって、今やイエスは、ご自身を救うためには、行動に出ざるを得ないようにさせられるだろう、そしてその行動は、彼が夢にていた勝利的な作戦の始まりになるだろう、という考えからであった。そのユダの考えは、つぎの事実によって裏づけられるだろう。すなわち、彼は自分のしたことがわかったとき、出かけて行って、ユダの当局者の足元に、その非難される金を投げつけた。そして、外に出て行き、首を吊り、自殺したからである（マタイ 27:3-5)。もし、そうであるなら、ユダの悲劇は歴史上の最大の悲劇である。
    - マタイ 27:1- 1 夜が明けると、祭司長たち、民の長老たち一同は、イエスを殺そうとして協議をこらした上、2 イエスを縛って引き出し、総督ピラトに渡した。3 そのとき、イエスを裏切ったユダは、イエスが罪に定められたのを見て後悔し、銀貨三十枚を祭司長、長老たちに返して 4 言った、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」。しかし彼らは言った、「それは、われわれの知ったことか。自分で始末するがよい」。5 そこで、彼は銀貨を聖所に投げ込んで出て行き、首をつって死んだ。6 祭司長たちは、その銀貨を拾いあげて言った、「これは血の代価だから、宮の金庫に入れるのはよくない」。7 そこで彼らは協議の上、外国人の墓地にするために、その金で陶器師の畑を買った。8 そのために、この畑は今日まで血の畑と呼ばれている。
      - 使徒 1:15-22 15 そのころ、百二十名ばかりの人々が、一団となって集まっていたが、ペテロはこれらの兄弟たちの中に立って言った、16 「兄弟たちよ、イエスを捕えた者たちの手びきになったユダについては、聖霊がダビデの口をとおして預言したその言葉は、成就しなければならなかった。17 彼はわたしたちの仲間に加えられ、この務を授かっていた者であった。18 （彼は不義の報酬で、ある地所を手に入れたが、そこへまっさかさまに落ちて、腹がまん中から引き裂け、はらわたがみな流れ出てしまった。19 そして、この事はエルサレムの全住民に知れわたり、そこで、この地所が彼らの国語でアケルダマと呼ばれるようになった。「血の地所」との意である。）20 詩篇に、／『その屋敷は荒れ果てよ、／そこにはひとりも住む者がいなくなれ』／と書いてあり、また／『その職は、ほかの者に取らせよ』／とあるとおりである。21 そういうわけで、主イエスがわたしたちの間にゆききされた期間中、22 すなわち、ヨハネのバプテスマの時から始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日に至るまで、始終わたしたちと行動を共にした人たちのうち、だれかひとりが、わたしたちに加わって主の復活の証人にならねばならない」。
  - コリント前書 15:1-8 1 兄弟たちよ。わたしが以前あなたがたに伝えた福音、あなたがたが受けいれ、それによって立ってきたあの福音を、思い起してもらいたい。2 もしあなたがたが、いたずらに信じないで、わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を固く守っておれば、この福音によって救われるのである。3 わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、4 そして葬られた

こと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。6 そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。7 そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、8 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。

- マルコ 14:17-21 17 夕方になって、イエスは十二弟子と一緒にそこに行かれた。18 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。19 弟子たちは心配して、ひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。20 イエスは言われた、「十二人の中のひとりで、わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者が、それである。21 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。
- 野心：シェークスピア『ヘンリー八世』の中でもウルジーのことば「クロムウェル。わたしはあなたに、野心を捨てよと勧める。その罪によって天使たちも堕落した。それなら、創造主の似姿である人は、野心によって勝てるだろうか。決しておのれを愛してはならない。」
- 銀貨：明確には書かれていないので不明だが、おそらく、デンリオン銀貨か、ドラクメ銀貨。それぞれについて、聖書協会共同訳から引用する。
  - デナリオン銀貨：ローマの銀貨で、１デナリオンは、１ドラクメと等価（1 日の賃金にあたる）
  - ドラクメ銀貨：ギリシャの銀貨で、重さ約 4.3g、デナリオンと等価

4.84.5 記録

- 日時：2024 年 1 月 16 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）0 名

4.84.6 問いについて

1. 1–11 節のできごとを復習しましょう。
   - [DQ] いつのことですか。
     - 過越と除酵との祭の二日前（共観福音書ではこの時期としている。）
   - [DQ] どのような人たちが登場しますか。
     - 民の指導者たち（祭司長たちや律法学者たち）
     - ベタニヤの女のひと：油を注ぐ（イエスの葬りの準備）
     - ユダ：祭司長たちに、引き渡す、他の弟子たち。
     - 周囲の人々：ヨハネによるとラザロのことのあと人気が高まっていた

  - イエス：神に委ねて抵抗していない（ヨハネ 11:45-57）

2. いつ、どのような人たちが、どのようなことを計画しますか。(1)
   - 1 さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。
   - [DQ] いつ頃から、イエスを捕らえ、殺す計画が始まっていたのでしょうか。
     - このマルコの箇所からだけでは不明。しかし、イエスを殺そうと言う計画は、かなり以前からあった。
     - マルコ 3:1-6 イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人がいた。2 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。3 すると、イエスは片手のなえたその人に、「立って、中へ出てきなさい」と言い、4 人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。5 イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。（存在を抹殺、居てほしくない存在というレベルだったかもしれない）
     - マルコ 11:18 祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、どうかしてイエスを殺そうと計った。彼らは、群衆がみなその教に感動していたので、イエスを恐れていたからである。(宮清めのあと。ただ、マルコで、これだけで判断するのは、難しい。おそらく、ラザロの復活など、関係者が生きていて、マルコには収録しにくいことが存在したのだろう。)
     - 参照: イエスの予告
       * マルコ 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、（一回目の予告）
       * マルコ 9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。（二回目の予告）
       * マルコ 10:34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。（三回目の予告）
       *「ぶどう園と農夫」のたとえ：マルコ 12:1-12 7 すると、農夫たちは『あれはあと取りだ。さあ、これを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と話し合い、8 彼をつかまえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。
   - [DQ] なぜ、民の指導者たちは、捕らえ、殺そうとまで考えたのでしょうか。
     - マルコだけでは明確ではない。群衆の人気には、注意していたかもしれない。
     - ヨハネ 11:45-48 45 マリヤのところにきて、イエスのなさったことを見た多くのユダヤ人たちは、イエスを信じた。46 しかし、そのうちの数人がパリサイ人たちのところに行って、イエスのされたことを告げた。47 そこで、祭司長たちとパリサイ人たちとは、議会を召集して言った、「この人が多くのしるしを行っているのに、お互は何をしているのだ。48 もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土

地も人民も奪ってしまうであろう」。
    * ヨハネによると、ローマ人が脅威だと感じ、指導者たちに任せておかなくなることを恐れていたと言っているようだ。
3. なぜ、祭りの間に計画を実行することを避けたのでしょうか。(2)
   - 2 彼らは、「祭の間はいけない。民衆が騒ぎを起すかも知れない」と言っていた。
   - [DQ] 恐れていたのは、どんなことだったのでしょうか。
     - 「祭司長たちとパリサイ人たちとは、イエスを捕えようとして、そのいどころを知っている者があれば申し出よ、という指令を出していた。」(ヨハネ 11:57)
     - ルカ 11:6 群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、機会をねらっていた。
4. ユダは、どのような人で、どのようなことをしますか。(10)
   - 10 ときに、十二弟子のひとりイスカリオテのユダは、イエスを祭司長たちに引きわたそうとして、彼らの所へ行った。
   - [DQ] ユダは「引き渡す」ことを計画しますが、これは、どのようなことを意図したのでしょうか。
5. ユダは、なぜこのような決断をしたのだと思いますか。(11 その他)
   - 11 彼らはこれを聞いて喜び、金を与えることを約束した。そこでユダは、どうかしてイエスを引きわたそうと、機会をねらっていた。
   - [DQ] ユダが、イエスを祭司長たちに引き渡そうとしたのは、なぜなのでしょうか。
     - サタンが入った：
       * ルカ 22:3 そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれていたユダに、サタンがはいった。
       * ヨハネ 13:27 27 この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。
     - ヨハネ 12:3 その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、香油のかおりが家にいっぱいになった。4 弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、5 「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。6 彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。
   - [DQ] ユダは弟子たちの中で特別だったのでしょうか。他の弟子たちと比較して違いがあるとすると、それは、何なのでしょうか。
     - マルコ 14:18-21 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。19 弟子たちは心配して、ひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。20 イエスは言われた、「十二人の中のひとりで、わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者が、それである。21 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。
6. それぞれのひとたちは、イエスについてどのように考えていたのでしょうか。

- 支配者たち（ピラト、ヘロデ）
- 民の指導者（祭司長たち、長老たち、律法学者）
- 一般のひとたち（エルサレムのひとたち、ガリラヤのひとたち）
- 弟子たち（ユダを含む十二弟子、同行している女性たち、他の弟子たち）

4.84.7 メモ

- 福音書の差異（1-2 など）：油注ぎについては、ヨハネは過越祭の 6 日前としているが、共観福音書では、過越祭の前の日曜日ごろに、エルサレム入城で、すべて、それ以降のこととしているので、エルサレムの民の指導者たちが、イエスと捕らえた上、殺そうと計画したのも、最後の一週間に入れている。背景を考えると、ヨハネの記述の方が実際に近いと思われる。マタイによる福音書によると、イエスは、26:2 「あなたがたが知っているとおり、ふつかの後には過越の祭になるが、人の子は十字架につけられるために引き渡される」。と告げ（預言し）、一方、26:3-5 「そのとき、祭司長たちや民の長老たちが、カヤパという大祭司の中庭に集まり、4 策略をもってイエスを捕えて殺そうと相談した。5 しかし彼らは言った、「祭の間はいけない。民衆の中に騒ぎが起るかも知れない」。としている。実際には、祭りの間に処刑されたと記録されている。マルコとマタイでは、捕らえて、殺すことが書かれているが、ルカでは、殺すことの計画のみが書かれている。マルコとマタイには、民衆の中の騒ぎをおそれて、祭りの間を回避することが、図られたことが、書かれているが、ルカには、殺そうと計った理由に、民衆を恐れていたとあるが、祭りの間を避ける記述はない。
- 福音書の差異（10-11）：マルコでは、イスカリオテのユダからは、金のことは要求していないが、マタイでは、ユダからの提案になっている。マルコには、金額は書かれていないが、マタイには書かれている。マルコ、マタイでは「引き渡す」と書かれているがルカでは「渡す」となっている。ただし、動詞はいずれも (to give into the hands (of another), to give over into (one's) power or use)、ヨハネには、ユダの行為についての記述がない。しかし、ユダの行為の裏側を暗示させることばはある。「祭司長たちとパリサイ人たちとは、イエスを捕えようとして、そのいどころを知っている者があれば申し出よ、という指令を出していた。」（11:57）
- ヨハネ 11:45-53 には、なぜ、民の指導者が、イエスを殺すことを計ったかが書かれている。
  - （ラザロの復活によってイエスを信じるものが増えたことを背景に）民衆がイエスを信じるようになることを恐れた。
  - （カリスマ性がある指導者に民衆が率いられると）ローマ人がやってきて、民の指導者たちが指導力を発揮している、イスラエルの土地も人民も奪ってしまうだろう。
  - （これらのことを元に大祭司カヤパは）「あなたがたは、何もわかっていないし、50 ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないようになるのがわたしたちにとって得だということを、考えてもいない」。という。
    - （しかしこの言葉は）イエスが国民のためにや、散在している神の子らを一つに集めるために、死ぬことになっているという、神の言葉の預言だとも言える。
- ユダがイエスを引き渡した背景

- マルコ 14:1 さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。
- ヨハネ 11:53 53 彼らはこの日からイエスを殺そうと相談した。
- ヨハネ 11:57「祭司長たちとパリサイ人たちとは、イエスを捕えようとして、そのいどころを知っている者があれば申し出よ、という指令を出していた。」
- ルカ 11:6 群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、機会をねらっていた。
- ルカ 22:3、ヨハネ 13:27 27：サタンがユダに入った

- 榊原康夫『ルカによる福音書』
  - 貪欲説：地所ほしさか、会計横領の穴埋めの金欲しさ。疑問点：なぜ後悔して自殺したか説明不能（マタイ 27:3-5）
    - ヨハネ 12:6 彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。
    - 使徒 1:18 （彼は不義の報酬で、ある地所を手に入れたが、そこへまっさかさまに落ちて、腹がまん中から引き裂け、はらわたがみな流れ出てしまった。
  - 単純な信仰喪失説または師の末路を見越しての寝返り説。疑問点：なぜ裁判証人にたたなかったか（マルコ 14:55-59）なぜ、師の死刑判決に後悔したか説明不能。
  - 熱心党起爆剤説（政治的メシヤを）期待して入門したのに、イエスの優柔不断に業を煮やし、危地ににおいやって奇跡力を発揮させようとして仕組んだ芝居。ヨハネ 12:4 などの古代語写本に「スカリオテのユダ」とあるので、「シカリ（刺客）」出身だと想像。
  - ルカの説明は明快だが神秘です、「サタンがユダに入った」（ルカ 22:3）サタンの再攻撃
    - ルカ 22:31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。
    - ルカ 22:53 毎日あなたがたと一緒に宮にいた時には、わたしに手をかけなかった。だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」。
  - アリマタヤのヨセフ物語：そこで彼らは、イスカリオテのユダのもとの言い送った。彼はカヤパの兄弟の子で、ユダヤ人たちから、イエスの弟子になって彼の教えには従わずに裏切るようにと、説得されていた人物であった。人々は、ユダに 1 日あたり、 2 ドラクマの金を支給したので、、イエスの弟子ヨハネの言うとおり 2 年の間イエスと共にいた。

4.85 14:12-21 過越の食事をする

12 除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊をほふる日に、弟子たちがイエスに尋ねた、「わたしたちは、過越の食事をなさる用意を、どこへ行ってしたらよいでしょうか」。13 そこで、イエスはふたりの弟子を使いに出して言われた、「市内に行くと、水がめを持っている男に出会うであろう。その人について行きなさい。14 そして、その人がはいって行く家の主人に言いなさい、『弟子たちと一緒に過越の食事をする座敷はどこか、と先生が言っておられます』。15 するとその主人は、席を整えて用意された二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために用意をしなさい」。16 弟子たちは出かけて市内に行って見る

と、イエスが言われたとおりであったので、過越の食事の用意をした。17 夕方になって、イエスは十二弟子と一緒にそこに行かれた。18 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。19 弟子たちは心配して、ひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。20 イエスは言われた、「十二人の中のひとりで、わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者が、それである。21 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。

4.85.1 マタイ 26:17-25

17 さて、除酵祭の第一日に、弟子たちはイエスのもとにきて言った、「過越の食事をなさるために、わたしたちはどこに用意をしたらよいでしょうか」。18 イエスは言われた、「市内にはいり、かねて話してある人の所に行って言いなさい、『先生が、わたしの時が近づいた、あなたの家で弟子たちと一緒に過越を守ろうと、言っておられます』」。19 弟子たちはイエスが命じられたとおりにして、過越の用意をした。20 夕方になって、イエスは十二弟子と一緒に食事の席につかれた。21 そして、一同が食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。22 弟子たちは非常に心配して、つぎつぎに「主よ、まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。23 イエスは答えて言われた、「わたしと一緒に同じ鉢に手を入れている者が、わたしを裏切ろうとしている。24 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。25 イエスを裏切ったユダが答えて言った、「先生、まさか、わたしではないでしょう」。イエスは言われた、「いや、あなただ」。

4.85.2 ルカ 22:7-14; 21-23

7 さて、過越の小羊をほふるべき除酵祭の日がきたので、8 イエスはペテロとヨハネとを使いに出して言われた、「行って、過越の食事ができるように準備をしなさい」。9 彼らは言った、「どこに準備をしたらよいのですか」。10 イエスは言われた、「市内にはいったら、水がめを持っている男に出会うであろう。その人がはいる家までついて行って、11 その家の主人に言いなさい、『弟子たちと一緒に過越の食事をする座敷はどこか、と先生が言っておられます』。12 すると、その主人は席の整えられた二階の広間を見せてくれるから、そこに用意をしなさい」。13 弟子たちは出て行ってみると、イエスが言われたとおりであったので、過越の食事の用意をした。14 時間になったので、イエスは食卓につかれ、使徒たちも共に席についた。

21 しかし、そこに、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に食卓に手を置いている。22 人の子は定められたとおりに、去って行く。しかし人の子を裏切るその人は、わざわいである」。23 弟子たちは、自分たちのうちだれが、そんな事をしようとしているのだろうと、互に論じはじめた。

4.85.3　ヨハネ 13:21-30

21 イエスがこれらのことを言われた後、その心が騒ぎ、おごそかに言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。22 弟子たちはだれのことを言われたのか察しかねて、互に顔を見合わせた。23 弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についていた。24 そこで、シモン・ペテロは彼に合図をして言った、「だれのことをおっしゃったのか、知らせてくれ」。25 その弟子はそのままイエスの胸によりかかって、「主よ、だれのことですか」と尋ねると、26 イエスは答えられた、「わたしが一きれの食物をひたして与える者が、それである」。そして、一きれの食物をひたしてとり上げ、シモンの子イスカリオテのユダにお与えになった。27 この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。28 席を共にしていた者のうち、なぜユダにこう言われたのか、わかっていた者はひとりもなかった。29 ある人々は、ユダが金入れをあずかっていたので、イエスが彼に、「祭のために必要なものを買え」と言われたか、あるいは、貧しい者に何か施させようとされたのだと思っていた。30 ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。

4.85.4　（参照：主の晩餐）ルカ 22:15-20

15 イエスは彼らに言われた、「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた。16 あなたがたに言って置くが、神の国で過越が成就する時までは、わたしは二度と、この過越の食事をすることはない」。17 そして杯を取り、感謝して言われた、「これを取って、互に分けて飲め。18 あなたがたに言っておくが、今からのち神の国が来るまでは、わたしはぶどうの実から造ったものを、いっさい飲まない」。19 またパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。20 食事ののち、杯も同じ様にして言われた、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である。

マルコによる福音書 14 章 12-21 節福音書対照表

4.85.5　問い

1. 1-11 節を復習しましょう。どんなことがありましたか。(1-11)
2. イエスが弟子たちと過ぎ越しの食事をする場所の準備はどのように描かれていますか。（12-16）
3. イエスは食事をしているときに、弟子たちに何を伝えますか、また、弟子たちはどんな反応をしますか。（18,19）
4. イエスはなぜこのことを告げ、弟子たちは、なぜこのような反応をしたのでしょうか。

5. イエスはさらに、どのように伝えますか。(20,21)

6. イエスの思いはどのようなものだったのでしょうか。(特に 21)

4.85.6 参照

- ルカでは、途中に、聖餐の記事がはさまり、このあと「いちばん偉いもの」の記事挿入（ルカ 22:24-30）
- ヨハネではこの前に、イエスが弟子たちの足を洗う記事があり、このあとに「新しい戒め」（ヨハネ 13:31-35）について書かれている。
- [荒井献（直）訳] 人の子を裏切るその人は = 彼を介して人の子が引き渡されるその人は
- ペテロとヨハネ（ルカのみ）
  - ルカ 22:8 イエスはペテロとヨハネとを使いに出して言われた、「行って、過越の食事ができるように準備をしなさい」。
  - 使徒 3:1-4 1 さて、ペテロとヨハネとが、午後三時の祈のときに宮に上ろうとしていると、2 生れながら足のきかない男が、かかえられてきた。この男は、宮もうでに来る人々に施しをこうため、毎日、「美しの門」と呼ばれる宮の門のところに、置かれていた者である。3 彼は、ペテロとヨハネとが、宮にはいって行こうとしているのを見て、施しをこうた。4 ペテロとヨハネとは彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。5 彼は何かもらえるのだろうと期待して、ふたりに注目していると、6 ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。7 こう言って彼の右手を取って起してやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、8 踊りあがって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいって行った。
  - 使徒 3:11 彼がなおもペテロとヨハネとにつきまとっているとき、人々は皆ひどく驚いて、「ソロモンの廊」と呼ばれる柱廊にいた彼らのところに駆け集まってきた。
  - 使徒 4:13 人々はペテロとヨハネとの大胆な話しぶりを見、また同時に、ふたりが無学な、ただの人たちであることを知って、不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であることを認め、
  - 使徒 4:19 ペテロとヨハネとは、これに対して言った、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。
  - 使徒 8:14 エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が、神の言を受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネとを、そこにつかわした。
- 過越の儀式（バークレイ「マルコによる福音書」からを中心に）
  - 最初は、パンだねの儀式的な捜索。過越の前には、パンだねのいかなる細片も家から放逐しなければ

ならなかった。それは、エジプトでの最初の過越（出エジプト記 12 章）で、種入れぬパンが食されたからである。種入れぬパンは全然パンのようではない。それは薄くて硬いビスケットのようである。それがエジプトで用いられたのは、パンだねをいれたパンよりもよほど早く焼くことができたからであった。そして、最初の過越は、エジプトからの脱出の過越で、大急ぎで食べなければならなかった。また、みんなは、旅路の準備をしなければならなかった。それに加えて、パンだねは腐敗のシンボルであって。パンダねは発酵した生パンであり、ユダヤ人は発酵と腐敗とを同一視していた。それゆえ、パンだねは、腐敗と破壊を意味していた。過越の祭りの前日に、家の主人は、火を灯した蝋燭をもって、家の中のパンダねを儀式的に探した。その捜索の前に彼は祈った。

  * 汝エホバ、わが神、宇宙の王をたたえまつる。汝は、その戒めによって、われらを聖別なしたまい、パンだねを除くように命じられた。

- また捜索の終わりに家の主人は言った。

  * わたしの所有にかかる、わたしが見たことのあるもの、またみたことのない全てのパンだねは、無効になれ。また、それは大地の塵として数えられよ。

- つぎに、過越の夕に先んずる午後に、過越の子羊の犠牲があった。すべての人々は神殿にやってきた。それによって、あたかも彼自身を犠牲にささげているように、参拝者は自分の子羊を殺さなければならなかった。

- 血は注ぎ出され、内臓と脂肪は捧げ物、ざくろの木で作った焼き串で、裸火の上で焼かなければならなかった。その焼き串は、子羊の口から尻へ刺し貫かれ、子羊は、頭、四肢、尾をからだにつけたままで丸焼きにしなければならなかった。

- 食事内容

  * 子羊：過越

  * たね入れぬパン：いそいで食したパン

  * 一鉢の塩水（カソーレト、煉瓦色のスープ）：エジプトでかれらが流した涙と、奇跡的にわたって危機を脱した紅海の水

  * 苦菜：わさび、キクニガナ、キクヂシャ、レタス、ニガハッカ、奴隷の苦味

  * ハロシュス：りんご、なつめ、ざくろ、ナッツをまぜたものにシナモンの小片がつきさしてある。煉瓦の泥と、藁

  * 四杯の葡萄酒：約 0.6L で、五分の三が葡萄酒、五分の二が水。四つの盃は、食事の他の段階で飲まれたが、それは人々に出エジプト記 5:6-7 の四つの約束を想起させるため。

    · 6 それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい、『わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプトびとの労役の下から導き出し、奴隷の務から救い、また伸べた腕と大いなるさばき

をもって、あなたがたをあがなうであろう。7 わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。わたしがエジプトびとの労役の下からあなたがたを導き出すあなたがたの神、主であることを、あなたがたは知るであろう。

- 聖餐式における自己吟味：コリント前書 11:27-29 27 だから、ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すのである。28 だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである。29 主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによって自分にさばきを招くからである。

- たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。（21a, マタイ 26:24a）
  - 詩篇 41:9 わたしの信頼した親しい友、／わたしのパンを食べた親しい友さえも／わたしにそむいてくびすをあげた。(1 貧しい者をかえりみる人はさいわいである。主はそのような人を悩みの日に救い出される。から始まる詩篇)
  - マタイ 26:31　そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。
    - ゼカリヤ 13:7 万軍の主は言われる、「つるぎよ、立ち上がってわが牧者を攻めよ。わたしの次に立つ人を攻めよ。牧者を撃て、その羊は散る。わたしは手をかえして、小さい者どもを攻める。
  - マタイ 26:54 しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」。
  - マタイ 26:56 しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書いたことが、成就するためである」。そのとき、弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。
  - マルコ 9:12 イエスは言われた、「確かに、エリヤが先にきて、万事を元どおりに改める。しかし、人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか。
  - ルカ 24:25-27 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。
  - ルカ 14:46,47 言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。47 そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。
  - 1 コリント 15:3 わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、
  - 1 ペテロ 1:10,11 この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。11 彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦

難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。

- イエスの愛しておられた弟子
  - ヨハネ 13:23 23 弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についていた。
  - ヨハネ 19:26,27 26 イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。27 それからこの弟子に言われた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。
  - ヨハネ 20:2 そこで走って、シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子のところへ行って、彼らに言った、「だれかが、主を墓から取り去りました。どこへ置いたのか、わかりません」。
  - ヨハネ 21:7 イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとって海にとびこんだ。
  - ヨハネ 21:20 ペテロはふり返ると、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのを見た。この弟子は、あの夕食のときイエスの胸近くに寄りかかって、「主よ、あなたを裏切る者は、だれなのですか」と尋ねた人である。21 ペテロはこの弟子を見て、イエスに言った、「主よ、この人はどうなのですか」。22 イエスは彼に言われた、「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」。23 こういうわけで、この弟子は死ぬことがないといううわさが、兄弟たちの間にひろまった。しかし、イエスは彼が死ぬことはないと言われたのではなく、ただ「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか」と言われただけである。24 これらの事についてあかしをし、またこれらの事を書いたのは、この弟子である。そして彼のあかしが真実であることを、わたしたちは知っている。25 イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う。
- 「いや、あなただ」(　　) ‘You have said so.’ (NIV)「いや、そうかもしれない」(塚本虎二訳)
  - マタイ 26:25 イエスを裏切ったユダが答えて言った、「先生、まさか、わたしではないでしょう」。イエスは言われた、「いや、あなただ」。
  - マタイ 26:63,64 63 しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言った、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」。64 イエスは彼に言われた、「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。(64　　.　.　.’ . [NIV] ‘You have said so,’ Jesus replied. ‘But I say to all of you: from now on you will see the Son of Man sitting at the right hand of the Mighty One and coming on the clouds of heaven.’)
  - マタイ 27:11 さて、イエスは総督の前に立たれた。すると総督はイエスに尋ねて言った、「あなた

がユダヤ人の王であるか」。イエスは「そのとおりである」と言われた。($_{11}$ · · ; · . [NIV] $_{11}$Meanwhile Jesus stood before the governor, and the governor asked him, ‘Are you the king of the Jews?’ ‘You have said so,’ Jesus replied.)

– マルコ 15:2 ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは、「そのとおりである」とお答えになった。($_{2}$K Π · ; · . [NIV] ‘Are you the king of the Jews?’ asked Pilate. ‘You have said so,’ Jesus replied.)

– ルカ 22:70 彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。($_{70}$ · ; · . [NIV] $_{70}$They all asked, ‘Are you then the Son of God?’ He replied, ‘You say that I am.’)

4.85.7 記録

- 日時：2025 年 1 月 23 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）0 名

4.85.8 問いについて

1. 1-11 節を復習しましょう。どんなことがありましたか。(1-11)
   - 祭司長、律法学者たちが、策略をもってイエスを捕らえ、どうにかして殺そうとしていた。
   - ベタニヤで、女が葬りの準備として油をイエスに注ぐ。
   - イスカリオテのユダが祭司長たちのもとへ行き、イエスを引き渡すことを約束する。
2. イエスが弟子たちと過ぎ越しの食事をする場所の準備はどのように描かれていますか。（12-16）
   - 12 除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊をほふる日に、弟子たちがイエスに尋ねた、「わたしたちは、過越の食事をなさる用意を、どこへ行ってしたらよいでしょうか」。13 そこで、イエスはふたりの弟子を使いに出して言われた、「市内に行くと、水がめを持っている男に出会うであろう。その人について行きなさい。14 そして、その人がはいって行く家の主人に言いなさい、『弟子たちと一緒に過越の食事をする座敷はどこか、と先生が言っておられます』。15 するとその主人は、席を整えて用意された二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために用意をしなさい」。16 弟子たちは出かけて市内に行って見ると、イエスが言われたとおりであったので、過越の食事の用意をした。17 夕方になって、イエスは十二弟子と一緒にそこに行かれた。
   - [DQ] なぜこのような記事が記録されているのでしょうか。

  - [Q] 他にもイエスが用意周到だった箇所がありますか。(11:1-11) [A] ろばの子。
  - 夕方から新しい日。（木曜日夜６時以降）
- [DQ] 「16 弟子たちは出かけて市内に行って見ると、イエスが言われたとおりであったので、過越の食事の用意をした。」とありますが、これは、イエスの予言的能力を表現しているのでしょうか。
  - おそらく、前もって、手配してあったのではないか。
  - [参照] マタイ 26:18 イエスは言われた、「市内にはいり、かねて話してある人の所に行って言いなさい、『先生が、わたしの時が近づいた、あなたの家で弟子たちと一緒に過越を守ろうと、言っておられます』」。（18 . . . , . (NIV) 18He replied, ‘Go into the city to a certain man and tell him, “The Teacher says: my appointed time is near. I am going to celebrate the Passover with my disciples at your house.” ’）
    - ∗「かねて話してある人のところに行って」と書かれている。また「わたしの時が近づいた」ということは、言っていたとある。
- [DQ] このときの背景を考え、イエスがなぜこのようにしたか考えてみましょう。
  - 水瓶を運ぶのは女の仕事。ここでは、男となっている。
  - おそらく外側からの梯子でのぼる、静思と瞑想の場所、客室、集会所

3. イエスは食事をしているときに、弟子たちに何を伝えますか、また、弟子たちはどんな反応をしますか。（18,19）
   - 18 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。19 弟子たちは心配して（悲しみはじめて）、ひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。
   - [DQ] どのような人たちと食事を共にしていますか。
     - [A] 弟子たちとあるが、イエスと一緒に行動していた女性たちも一緒だったろうし、十二弟子以外にも、とくにエルサレムまたはその周辺に居た弟子たちもいたかもしれない。同時に、危険もあるので、ある程度人数を制限していたとも思われる。
   - [DQ] 「まさか、わたしではないでしょう」はどのような弟子たちの心を伝えているのでしょうか。
     - [A] 自分ではないと、はっきりとは言い切れない。心を見透かされているような気持ちになっている。
4. イエスはなぜこのことを告げ、弟子たちは、なぜこのような反応をしたのでしょうか。
   - [DQ] イエスは、なぜ「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」（マルコ 14:18b）と弟子たちに告げたのだろ

うか。

- [DQ] 弟子たちは、イエスのことばを、どのように受け取っただろうか。

5. イエスはさらに、どのように伝えますか。(20,21)

- 20 イエスは言われた、「十二人の中のひとりで、わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者が、それである。21 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。

- [DQ] 「十二人の中のひとりで、わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者」とは何を意味しているのでしょうか。

  - [A] 他にも、その場、または階下にひとはいたかもしれないが、十二人と限定することは、十二弟子にとっては、とても、大きなチャレンジだったろう。共に食事をすることは、とくに、この時は、親しさ、信頼関係のもとでもあったろう。

  - 他にもひとはいたかもしれないが、十二弟子に限定されている。おそらく、もう逃れられない状況があったろう。ユダはなおさらである。ユダには、最後の悔い改めの機会だったかもしれない。

- [DQ] 21 節では、自分についての「予定」と「裏切るその人」について、それぞれどのようなことを言っていますか。

  - たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。

    * 詩篇 41:9 わたしの信頼した親しい友、／わたしのパンを食べた親しい友さえも／わたしにそむいてくびすをあげた。

  - しかし、人の子を裏切るその人（彼を介して人の子が引き渡されるその人は）は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう

    * 自分について書いてあるとおりに去ることになることと、そのことをもたらすことの評価は別だと言っているように見える。

    * 主の定めどおりに起こることを手伝っている忠実な僕とは描いていない。

- [参照] マタイではどのように描かれていますか。ユダとイエスの間のどのような会話が記録されていますか。

  - マタイ 26:25 イエスを裏切ったユダが答えて言った、「先生、まさか、わたしではないでしょう」。イエスは言われた、「いや、あなただ」。(25 ・ , ; ・ . [NIV] Then Judas, the one who would betray him, said, ‘Surely you don’t mean me, Rabbi?’ Jesus answered, ‘You have said so.’)

    *「それはあなたの言ったこと」はあまりにも、日本語としておかしいので「いや、あなただ」と訳されているが、うちに秘めた言い方であることは確かだろう。「いや、そうかもしれな

い」（塚本虎二訳）

    * いくつかの用例がある。マルコ 15:2、マタイ 26:25、64、27:11、ルカ 22:70

- [参照] ヨハネはどう描いていますか。
  - ヨハネ 13:23-27 23 弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についていた。24 そこで、シモン・ペテロは彼に合図をして言った、「だれのことをおっしゃったのか、知らせてくれ」。25 その弟子はそのままイエスの胸によりかかって、「主よ、だれのことですか」と尋ねると、26 イエスは答えられた、「わたしが一きれの食物をひたして与える者が、それである」。そして、一きれの食物をひたしてとり上げ、シモンの子イスカリオテのユダにお与えになった。27 この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。
    * その場にいたひとたちも、やはり理解できなかったとするのが適切だろう。
  - [Q] イエスの愛しておられた者と、イエスと、ユダの位置は、どのような関係だったと思いますか。
    * [A] おそらく、イエスの右に、イエスの愛しておられたもの、左に、ユダ。
    * イエスの愛しておられたもの：ヨハネ 13:23、19:26、20:2、21:7、20

6. イエスの思いはどのようなものだったのでしょうか。(特に 21)
   - 21 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。
   - [DQ] 「生まれなかった方がよかった」と言うような人生があるのでしょうか。
     - 単純に辛い人生だというように取ることもできるように思える。
   - [DQ] ここでイエスは、なぜ、ユダが裏切ろうとしていると明確に告げなかったのでしょうか。ユダが裏切ろうとしていると告げたらどうなったでしょうか。

4.85.9 メモ

- 福音書の差異：ルカは、配餐の記事が挟まっており、ユダもそのときにいたことになっている。また、過越の食事の準備のために遣わされたのは、マルコでは二人、マタイでは弟子たち、ペテロとヨハネであったことが、ルカにのみ書かれている。ペテロとヨハネは、ルカが書いたとされる、使徒行伝で、ほとんど最初からリーダー的に描かれている。ほどなく、ヨハネの兄弟ヤコブが殺されたことも関係しており、その後、イエスの兄弟ヤコブが力を持ってくる中で、ここでは、その二人にしたということもあるかもしれない。いずれにしても、ペテロやヨハネのような弟子の中でも主要なメンバーにも、秘密にして、場所が

設定されたことは事実だろう。裏切りも予想でき、それだけ、危険が差し迫っていたということか。この準備自体も秘密で、マタイのように、弟子たちみなが関わるような状況にはなかったのかもしれない。「その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」は、ルカにはない。「わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者」の表現は、ルカにはない。ヨハネには「弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者」の存在がクローズアップされているが、結局、その質問に、イエスが答えたように書かれているものの、ユダが裏切ろうとしているという確信に至っていないということは、やはり明確な行為ではなかったと考えるほうが適切であろう。

4.86 14:22-25 主の晩餐

22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、
「取れ、これはわたしのからだである」。23 また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯か
ら飲んだ。24 イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。25 あな
たがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造
ったものを飲むことをしない」。

4.86.1 マタイ 26:26-30

26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、
「取って食べよ、これはわたしのからだである」。27 また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、「み
な、この杯から飲め。28 これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の
血である。29 あなたがたに言っておく。わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日までは、
わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。30 彼らは、さんびを歌った後、
オリブ山へ出かけて行った。

4.86.2 ルカ 22:15-20

15 イエスは彼らに言われた、「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、
切に望んでいた。16 あなたがたに言って置くが、神の国で過越が成就する時までは、わたしは二度と、こ
の過越の食事をすることはない」。17 そして杯を取り、感謝して言われた、「これを取って、互に分けて飲
め。18 あなたがたに言っておくが、今からのち神の国が来るまでは、わたしはぶどうの実から造ったも
のを、いっさい飲まない」。19 またパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「これ
は、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。
20 食事ののち、杯も同じ様にして言われた、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられ
る新しい契約である。

4.86.3 （参照）ヨハネ 13:31-35

31 さて、彼が出て行くと、イエスは言われた、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光を
お受けになった。32 彼によって栄光をお受けになったのなら、神ご自身も彼に栄光をお授けになるであ
ろう。すぐにもお授けになるであろう。33 子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。
あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あ
なたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。34 わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、
互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。35 互に愛
し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。

4.86.4 （参照）コリント人への第一の手紙 11:23-28

23 わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡され
る夜、パンをとり、24 感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、わたしのか
らだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。25 食事ののち、杯をも同じようにして言
われた、「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように
行いなさい」。26 だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこ
られる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。27 だから、ふさわしくないままでパンを食し主
の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すのである。28 だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食
べ杯を飲むべきである。29 主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによって自分
にさばきを招くからである。

マルコによる福音書 14 章 22-25 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 22-25 節福音書対照表（参照付き）

マルコによる福音書 14 章 22-25 節福音書対照表（参照付き（２））

4.86.5 問い

1. 12–21 節を復習しましょう。イエスは、どのようなことを弟子たちに語っていましたか。
2. 22–25 節で、イエスは、何をしていますか。
3. パンがイエスのからだだというのは、どのような意味があるのでしょうか。(22)
4. 杯が多くの人のために流すわたしの契約の血であるとは、どのような意味でしょうか。(23,24)
5. 最後に、イエスはどんな宣言をしていますか。(25)

6. イエスは、弟子たちに何を伝えているのでしょうか。（参照：１コリント 11:23-29、ヨハネ 13:31-35）

4.86.6　参照

- 過越祭の食事（バークレイ「マルコによる福音書」からを中心に。イエスとその弟子たちが席についていた食事が、過越の食事であったなら、イエスが取ってご自分のものとされたのは、13 と 14 の二つの事項であったに違いない。そして、16 はオリブ山に出ていくときに歌った賛美歌に違いない。）
  1. キドゥシュな杯。キドゥシュは、神聖なあるいは聖別されたという意味である。これは、いわばこの食事を他のすべての食事から区別するためのものであった。家長が盃をとって祈り、次にすべてのものがそれを飲んだ。
  2. 第一の手の洗い。これは、食事を祝おうとする人だけによって行われた。定められた方法に従って、両手を三度洗わなければならなかった。（7 章）
  3. パセリ、またはレタスの一片が取り上げられ、塩水の鉢にひたして食された。これは、食事の一種の前菜であった。しかし、パセリは柱を血で塗るのに用いたヒソプをあらわしていた。また、塩はエジプトの涙と、それを越えてイスラエルが安全にされた紅海の海水をあらわしていた。
  4. パンをさく。パンを割くときに二つの賛美がなされた。「ほむべきかな、汝、おお主よ。わが神、宇宙の王、大地から物を作り出される方」。あるいは、「ほむべきかな、汝、天にいますわれらの父、今日、われわれに必要なパンを与えられる方」。テーブルの上には種入れぬパンが三箇所に置かれた。中央のものが取ってさかれた。ここでは、ほんの少しだけが食べられた。それは、ユダヤ人たちに、彼らがエジプトで食べた苦難のパンを思い起こさせるためであった。そして、奴隷は決して丸のままパンが得られず、ただくずのみを食べることができたことを想起させるために、パンを割いた。パンを割きながら家長はいった。「これは、われわれの先祖たちが、エジプトの地において食べた苦難のパンである。飢えた者があれば、来たりて食さしめよ。困窮するものがあれば、来たりてわれわれと共に過越を守らしめよ」と。（異国における現代の祝いにおいては、これに有名な祈りが加らる。「この年は、この地で過越を祝いますが、来るべき年には、イスラエルの地において。この年は奴隷として祝いますが、来るべき年には自由人として」）。
  5. つぎに、解放の物語が語られる。そこにいた一番若いものが、何がこの日を他の日々とことならしめているのか、どうしてこのようなことを行っているのかを、問わなければならない。そして、家長は、それから、過越が記念としている偉大な解放に至るまでのイスラエルの全歴史を語らなければならない。ユダヤ人にとって、過越を単なる儀式にしてしまうことは決してできない。それは常に神の力と、あわれみの記念祭なのである。
  6. 詩篇 113 篇、134 篇が歌われる。詩篇 113 篇-114 篇は、神の賛美という意味のハレルとして知られていた。これら諸詩篇はすべて賛美の詩篇である。これらは、ユダヤ人の少年が非常に早い時期に暗記しなければならないものの一つであった。
  7. 第二の杯が飲まれる。それはハガダーの杯とよばれ、説明の杯、あるいは宣言の杯との意味である。
  8. 列席しているものは皆、食事の準備のために手を洗う。
  9. 感謝がとなえられる。「汝をほめたたう。おお主よ、わが神よ、あなたは大地から果実を生み出され

た。汝をほめたたう。おお神よ、あなたはその戒めをもってわれらを聖別し、種入れぬパンを食することを命じたもうた」と。その後、種入れぬパンの小片が配られる。

10. 苦菜が二個の種入れぬパンの間にはさまれ、つぎハロシュスに浸されて、食べられる。これがソップと呼ばれているものである。それは、奴隷状態と、かつて彼らが強制的に造らせられた煉瓦を想起させるものであった。
11. それに本来の食事が続く。子羊は全部食べなければならず、残ったものは、すべて始末し、普通の食事に用いてはならない。
12. 再び手が清められる。
13. 残りの種入れぬパンを食べる。[ここでパンを割いたのか？]
14. 感謝の祈り。その中にメシヤの使者としてのエリヤの到来の祈りが含まれている。それから第三の杯が飲まれる。これは感謝の杯と呼ばれる。杯に対する賛美は、「ほめたたえよ、汝、おお主よ、わが神、宇宙の王、ぶどうの実を作られた方」である。[ここで杯か?]
15. ハレルの第二部ー詩篇 115 篇-118 篇。
16. 第四の杯が飲まれ、そして詩篇 136 篇、すなわち偉大なハレルとして知られるものが歌われる。
17. 二つの祈りが唱えられる。
    - 汝のすべたの働きは汝、おお主よ、わが神をたたえる。また汝の聖徒、義しき者、汝の善き喜びを果たすもの、また汝の民、イスラエルの家に、喜びの歌をもって、おお神、われらの主、み名を崇め、ほめたたえ、賛美し、栄光をたたえ、ほめ、尊び、聖別し、み国を書かしめたまえ。なぜならば、汝をほめたたえるはよきことであり、汝のみ名を歌い、たたえるは、喜びである。汝は永遠から永遠にわたり神にいます。
    - 生きるすべてのものの息吹が汝のみ名をたたえる、おお主よ、わが神よ。また、すべての生きものの魂は、汝んぼ記念、おお神、わが王を常にたたえ、ほめまつる。永遠から永遠にわたって汝は神に在し、汝を他にして、われらは王、あがない主、救い主を持たない。

- 過越祭の食事（榊原康夫「マタイ福音書講解（下巻)」）
  1. 初めに、第一の杯が、祝福の言葉を伴って回された。
  2. 次に、エジプトの苦役の思い出として、苦菜が配られました。
  3. 種入れぬパン（マッツォート）と、れんが色のスープ（カソーレト）と、焼いた過越の子羊と、他のいけにえの肉（カギーガー）が出されます。
  4. 家長が祝福して苦菜をスープに浸して食べ、一同も食べます。
  5. 第二の杯が注がれ、子供または最年少者が、この儀式の由来を質問し、家長が過越祭の意義を教えます。（出エジプト記 12:26-27, 13:8, 14-15）
  6.「小ハレル」と呼ばれる詩篇 113-114 が詠唱され、賛美と祈祷の後、第二の杯が飲み干されます。
  7. 家長が手を洗い、パンをとって裂き、祝福して食べます。
  8. 一同が食事を始め、[一同が食事をしているとき]
  9. 家長が最後の子羊の肉切れを食べ終わると第三の杯が回されます。
  10. 最後に、「大ハレル」すなわち、詩篇 115-118 篇が詠唱され、第四の杯が回されてから「ハレルの結び」である、詩篇 120-137 篇が詠唱されます。
- 古い契約（律法を守る）：出エジプト 24:3-8

- 3 モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。民はみな同音に答えて言った、「わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行います」。4 そしてモーセは主の言葉を、ことごとく書きしるし、朝はやく起きて山のふもとに祭壇を築き、イスラエルの十二部族に従って十二の柱を建て、5 イスラエルの人々のうちの若者たちをつかわして、主に燔祭をささげさせ、また酬恩祭として雄牛をささげさせた。6 その時モーセはその血の半ばを取って、鉢に入れ、また、その血の半ばを祭壇に注ぎかけた。7 そして契約の書を取って、これを民に読み聞かせた。すると、彼らは答えて言った、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」。8 そこでモーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った、「見よ、これは主がこれらのすべての言葉に基いて、あなたがたと結ばれる契約の血である」。

- 新しい契約
  - エレミヤ 31:31-34 31 主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る。32 この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であったのだが、彼らはそのわたしの契約を破ったと主は言われる。33 しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。34 人はもはや、おのおのその隣とその兄弟に教えて、『あなたは主を知りなさい』とは言わない。それは、彼らが小より大に至るまで皆、わたしを知るようになるからであると主は言われる。わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」。
- ハレル
  - 詩篇 113:1 主をほめたたえよ。主のしもべたちよ、ほめたたえよ。主のみ名をほめたたえよ。2 今より、とこしえに至るまで主のみ名はほむべきかな。3 日のいずるところから日の入るところまで、／主のみ名はほめたたえられる。4 主はもろもろの国民の上に高くいらせられ、／その栄光は天よりも高い。5 われらの神、主にくらぶべき者はだれか。主は高き所に座し、6 遠く天と地とを見おろされる。7 主は貧しい者をちりからあげ、／乏しい者をあくたからあげて、8 もろもろの君たちと共にすわらせ、／その民の君たちと共にすわらせられる。9 また子を産まぬ女に家庭を与え、／多くの子供たちの喜ばしい母とされる。主をほめたたえよ。
  - 詩篇 114:1 イスラエルがエジプトをいで、／ヤコブの家が異言の民を離れたとき、2 ユダは主の聖所となり、／イスラエルは主の所領となった。3 海はこれを見て逃げ、／ヨルダンはうしろに退き、4 山は雄羊のように踊り、／小山は小羊のように踊った。5 海よ、おまえはどうして逃げるのか、／ヨルダンよ、おまえはどうしてうしろに退くのか。6 山よ、おまえたちはどうして雄羊のように踊るのか、／小山よ、おまえたちはどうして小羊のように踊るのか。7 地よ、主のみ前におののけ、／ヤコブの神のみ前におののけ。8 主は岩を池に変らせ、／石を泉に変らせられた。
- あがない
  - マルコ 10:45 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。
    - マタイ 20:28 それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」。
    - (参照) ルカ 1:68「主なるイスラエルの神は、ほむべきかな。神はその民を顧みてこれをあがない、

  - 使徒 20:28 どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。
  - ローマ 3:24, 25 彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。25 神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、
  - ガラテヤ 3:13 キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、すべてのろわれる」と書いてある。
  - ガラテヤ 4:5 それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。
  - コリント前書 10:16 わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかることではないか。わたしたちがさくパン、それはキリストのからだにあずかることではないか。
  - レビ 17:11 肉の命は血にあるからである。あなたがたの魂のために祭壇の上で、あがないをするため、わたしはこれをあなたがたに与えた。血は命であるゆえに、あがなうことができるからである。
  - ヘブル 9:22 こうして、ほとんどすべての物が、律法に従い、血によってきよめられたのである。血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない。
- 神の国での食事
  - マタイ 8:11,12 なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、12 この国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」。
  - ルカ 14:15 列席者のひとりがこれを聞いてイエスに「神の国で食事をする人は、さいわいです」と言った。
  - ルカ 22:29,30 それで、わたしの父が国の支配をわたしにゆだねてくださったように、わたしもそれをあなたがたにゆだね、30 わたしの国で食卓について飲み食いをさせ、また位に座してイスラエルの十二の部族をさばかせるであろう。

4.86.7 記録

- 日時：2025 年 1 月 30 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）4 名

4.86.8 問いについて

1. 12–21 節を復習しましょう。イエスは、どのようなことを弟子たちに語っていましたか。
   - 祭司長、律法学者たちに、イエスを捕らえ殺す計画があり、十二人の一人であるイスカリオテのユ

ダがイエスを引き渡すことを、祭司長に約束しているなか、注意して、過越祭の食事の準備をする。(12-16)

- 一緒に食事をしている、十二人のひとりがイエスを裏切ろうとしていることを一同に告げる。(18)
- 弟子たちは、ひとりひとり「まさか、私ではないでしょう」と言い出す。(19)
- イエスは、「人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」（21）と告げる。
- [DQ] イエスは、弟子たちとのこの食事をたいせつにしていた（と思われますが)、このことは、どのようなことから伺われますか。
- [DQ] イエスは、どのような意味で、このときがたいせつだと考えたのでしょうか。
  - [A] 受難と死と復活については、すでに伝えているが、その意味については、伝えていない。
  - 参照: イエスの予告
    * マルコ 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、（一回目の予告）
    * マルコ 9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。（二回目の予告）
    * マルコ 10:34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。（三回目の予告）
    *「ぶどう園と農夫」のたとえ：マルコ 12:1-12 7 すると、農夫たちは『あれはあと取りだ。さあ、これを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と話し合い、8 彼をつかまえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。
- [Q] このまま、ただ、殺されるだけなら、悲劇の預言者というだけではないのか。メシヤ（油注がれた、特別な任務を負った助け主ではありえない。）
  - このことを告げるのであれば、あまりに簡素。もっと、イエスは伝えていたのではないか。

2. 22–25 節で、イエスは、何をしていますか。

- 22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。
- 23 また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。24 イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。

- 25 あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。
- [DQ] これは、どのような食事のときですか。[参照：過越の祭り・食事]
  - [A] 過越祭の夕食。（ニサンの月の十四日の夜、ユダヤ暦としては十五日、除酵祭の第一日目が始まってから）（以下は W. バークレイと榊原康夫から編集）
    1. 第一の杯：家長が祈り、杯が、祝福の言葉を伴って回される。
    2. エジプトの苦役の思い出として、苦菜（塩水の浸けられたパセリかレタスの一片（血をかもいに塗るヒソプの代わり））、種入れぬパン（マッツォート）、れんが色のスープ（カソーレト）、焼いた過越の子羊と、他のいけにえの肉（カギーガー）。
    3. 家長が祝福して苦菜をスープに浸して食べ、一同も食べます。（「一同が席について食事をしているとき」(18)）
    4. 第二の杯：子供または最年少者が、この儀式の由来を質問し、家長が過越祭の意義を教える。（出エジプト記 12:26-27, 13:8, 14-15）
       * 出エジプト記 12:26-27 もし、あなたがたの子供たちが『この儀式はどんな意味ですか』と問うならば、27 あなたがたは言いなさい、『これは主の過越の犠牲である。エジプトびとを撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越して、われわれの家を救われたのである』」。民はこのとき、伏して礼拝した。
       * 出エジプト記 13:8 その日、あなたの子に告げて言いなさい、『これはわたしがエジプトから出るときに、主がわたしになされたことのためである』。
       * 出エジプト記 13:14-15 後になって、あなたの子が『これはどんな意味ですか』と問うならば、これに言わなければならない、『主が強い手をもって、われわれをエジプトから、奴隷の家から導き出された。15 そのときパロが、かたくなで、われわれを去らせなかったため、主はエジプトの国のういごを、人のういごも家畜のういごも、ことごとく殺された。それゆえ、初めて胎を開く男性のものはみな、主に犠牲としてささげるが、わたしの子供のうちのういごは、すべてあがなうのである』。
    5. 「小ハレル」詩篇 113-114 が詠唱、賛美と祈祷の後、第二の杯が飲み干されます。
       * 詩篇 114:1-8 （イスラエルがエジプトを出た時の詩）
    6. 家長がパンをとって裂き、祝福して食べ、一同が食事。家長が最後の子羊の肉切れを食べ終わると第三の杯（「一同が食事をしているとき」（22））
    7. 「大ハレル」詩篇 115-118 篇の詠唱され、第四の杯が回され「ハレルの結び」詩篇 120-137 篇が詠唱

    * マルコ 14:26-28 26 彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。27 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。

    * マタイ 26:30 彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。

3. パンがイエスのからだだというのは、どのような意味があるのでしょうか。(22)

- 22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。
- イエスのからだ、イエスの裂かれたからだを食すことにより、イエスの犠牲を受け入れ、イエスとの霊的な交わりに入ること。
  - 「種なしパン」罪のない純粋さ
  - イエスは「いのちのパン」霊的な命を与える存在。
    * ヨハネ 6:35 イエスは彼らに言われた、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。

4. 杯が多くの人のために流すわたしの契約の血であるとは、どのような意味でしょうか。(23,24)

- 23 また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。24 イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。
- ヨハネ 6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。
- イスラエルの救いの歴史、神との契約の確認。
  - 古い契約（律法を守る）：出エジプト 24:3-8 3 モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。民はみな同音に答えて言った、「わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行います」。4 そしてモーセは主の言葉を、ことごとく書きしるし、朝はやく起きて山のふもとに祭壇を築き、イスラエルの十二部族に従って十二の柱を建て、5 イスラエルの人々のうちの若者たちをつかわして、主に燔祭をささげさせ、また酬恩祭として雄牛をささげさせた。6 その時モーセはその血の半ばを取って、鉢に入れ、また、その血の半ばを祭壇に注ぎかけた。7 そして契約の書を取って、これを民に読み聞かせた。すると、彼らは答えて言った、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」。8 そこでモーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った、「見よ、これは主がこれらのすべての言葉に基いて、あなたがたと結ばれる契約の血である」。

5. 最後に、イエスはどんな宣言をしていますか。(25)

- 25 あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。
- [DQ] これは、どのような意味でしょうか。
  - [A] この世で飲むぶどう酒は最後（食事は最後？ぶどう酒は一般的だが、高価だったのでいつもあったわけではない。希釈して飲んでいた。）

  - [A] いずれ、神の国で、ぶどう酒を新たに飲む時が想定されている。（どのようなものかは不明確）
- （参照）マルコ 15:23 そしてイエスに、没薬をまぜたぶどう酒をさし出したが、お受けにならなかった。

6. イエスは、弟子たちに何を伝えているのでしょうか。（参照：１コリント 11:23-29、ヨハネ 13:31-35）

- １コリント 11:23-29 も読んでみましょう。
  - 23 わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、24 感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。25 食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい」。26 だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。
- ヨハネ 13:31-35 も読んでみましょう。
  - 34 わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。35 互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。
  - [Q] なぜ、ヨハネは、パンと盃のことを書かなかったのでしょうか。
    * すでに述べている。カニバリズム（cannibalism）の批判を避けるため
    * ヨハネ 6:35 イエスは彼らに言われた、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。
    * ヨハネ 6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。
  - [Q] 新しい戒めはなにを意味しているでしょうか。
    * 戒めを守ることが古い契約でもあった、それを新しい契約に取り替えているとも考えられる。

4.86.9 メモ

- 福音書の差異：共観福音書は、ほぼ、コリント人への第一の手紙 11:23-28 の記述と似ている。ただし、ルカでは、まず「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた。」と、あり、さらに、マルコ、マタイでは最後にきている言葉が最初に、「あなたがたに言って置くが、神の国で過越が成就する時までは、わたしは二度と、この過越の食事をすることはない」と述べられている。パンと、ぶどう酒の部分も、詳細にみていくと、マルコでは、パンについて、「取れ」とあり、マタイでは「取って食べよ。」ルカでは、弟子たちに与えてとなっている。杯に関しては、マルコでは、単純に「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」としているが、マタイでは「罪のゆるしを得させるようにと」という目的が加わっている。マルコとマタイは「契約の血」としているが、ルカでは「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である。」としている。パンと、杯については、最初に述べたように、コリント人への第一の手紙 11:23-28 の記述と似ているものが中心となっているが、ヨハネではこれが省かれている。おそらく、とてもキリスト教会ではたいせつにされていた

と思われるが、それが省かれたことには、特別な意図があったと思われる。ひとつは、「契約の血」では不十分で、背後にあるイエスの死の目的が明確ではない。また、おそらく、聖餐式での、パン割きなどから、人肉食（カニバリズム（英語: cannibalism））をしているとの批判があったことも関係しているかもしれない。その上で、新しい契約について明確にしようとした時に、旧約では、十戒などを中心とした戒め、掟、律法を守ることが中心であったろうから、それを、新しい戒めとして、ヨハネの伝えている中心とも言える「互いに愛し合いなさい」で置き換えているように見える。人肉食の説明によって、否定的なことをかわすのではなく、互いに愛し合うというより積極的な世界を提示しているように見える。さらに、十二弟子たちは、この晩餐のときには、イエスの死の意味について十分理解することはできなかったのではないかとも思う。それゆえに伝承も、非常に単純化されている。しかし、この最後の晩餐がとても重要だというなかで、パウロが伝えたことを踏まえて、新しい契約について考えていく中で、パウロのつたえたものと、福音書が伝えてきたものを、融合する形で、「互いに愛し合いなさい」が中心に置かれたのではないかと思われる。あまり、そのようなことは、一般的には言われていないので、今後とも、探究を続けるべきなのだろう。

- 「なぜ、パンとぶどう酒を配餐し、イエスの死について語る前に、弟子の裏切りのことを語ったのだろうか。」イエスの死の意味をどう考えるかが、イエスに従っていくことの鍵となっているからだろうか。同時に、イエスに従うことなしには、理解できないのかもしれない。イエスがどこまで伝えたかは、正確には、わからない。しかし、パウロが、「わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜」と、珍しく、イエスの言葉、行動を明示して、新しい契約について語っていることを考えると、これには、明確な根拠があったろう。もしかすると、このことは、共通に記憶されていていて、そこから、パウロは、贖罪を理解したのかもしれない。そして、その背後にある主の愛を。経緯の理解は、これだけからは、十分ではないように思われるが。

- 「パンはイエスのからだ、ぶどう酒は契約の血は、何を意味しているのだろうか。」多くのひとのために流すとは書かれているが、すべての人とは書かれていない。マタイには、「罪のゆるしを得させる」とあるが、マルコや、ルカにはないだけでなく、コリントにもない。贖罪だけではないのかもしれない。これをどう受け取るかは、信仰者に任せられているのだろうか。難しい。

4.87　14:26-31 ペトロの離反を予告する

26 彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。27 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。29 するとペテロはイエスに言った、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」。30 イエスは言われた、「あなたによく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そう言うあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」。31 ペテロは力をこめて言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。みんなの者もまた、同じようなことを言った。

4.87.1 マタイ 26:31-35

31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。32 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。33 するとペテロはイエスに答えて言った、「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」。34 イエスは言われた、「よくあなたに言っておく。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。35 ペテロは言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。弟子たちもみな同じように言った。

4.87.2 ルカ 22:31-34

31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。33 シモンが言った、「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」。34 するとイエスが言われた、「ペテロよ、あなたに言っておく。きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。

4.87.3 ヨハネ 13:36-38

36 シモン・ペテロがイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのですか」。イエスは答えられた、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになろう」。37 ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。38 イエスは答えられた、「わたしのために命を捨てると言うのか。よくよくあなたに言っておく。鶏が鳴く前に、あなたはわたしを三度知らないと言うであろう」。

マルコによる福音書 14 章 26-31 節福音書対照表

4.87.4 問い

1. 12–25 節を復習しましょう。イエスは、どのようなことを弟子たちに語っていましたか。
2. 晩餐のあとのようすは、どのように描かれていますか。(26)
3. イエスはどのように語りますか。(27,28)
4. このあと、ペテロはどのように主張し、イエスはどう応答しますか。(29-31)
5. ペテロは、なぜこれほど強く言い切るのでしょうか。

6. イエスには、どのような思いがあるのでしょうか。

4.87.5 参照

- 地図（Map）：受難週のエルサレム（The Passion Week in Jerusalem）[参照]
- ペトロ、イエスを知らないと言うマルコ 14:66-72（マタイ 26:69-75、ルカ 22:56-62、ヨハネ 18:15-18; 25-27）
  - マルコ 14:66 ペテロは下で中庭にいたが、大祭司の女中のひとりがきて、67 ペテロが火にあたっているのを見ると、彼を見つめて、「あなたもあのナザレ人イエスと一緒だった」と言った。68 するとペテロはそれを打ち消して、「わたしは知らない。あなたの言うことがなんの事か、わからない」と言って、庭口の方に出て行った。69 ところが、先の女中が彼を見て、そばに立っていた人々に、またもや「この人はあの仲間のひとりです」と言いだした。70 ペテロは再びそれを打ち消した。しばらくして、そばに立っていた人たちがまたペテロに言った、「確かにあなたは彼らの仲間だ。あなたもガリラヤ人だから」。71 しかし、彼は、「あなたがたの話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓いはじめた。72 するとすぐ、にわとりが二度目に鳴いた。ペテロは、「にわとりが二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われたイエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。
- ルカではこのあと「財布と袋と剣」の記事の挿入（ルカ 22:35-38）
  - 35 そして彼らに言われた、「わたしが財布も袋もくつも持たせずにあなたがたをつかわしたとき、何かこまったことがあったか」。彼らは、「いいえ、何もありませんでした」と答えた。36 そこで言われた、「しかし今は、財布のあるものは、それを持って行け。袋も同様に持って行け。また、つるぎのない者は、自分の上着を売って、それを買うがよい。37 あなたがたに言うが、『彼は罪人のひとりに数えられた』としるしてあることは、わたしの身に成しとげられねばならない。そうだ、わたしに係わることは成就している」。38 弟子たちが言った、「主よ、ごらんなさい、ここにつるぎが二振りございます」。イエスは言われた、「それでよい」。
- 賛美：「大ハレル」詩篇 115-118 篇の詠唱され、第四の杯が回され「ハレルの結び」詩篇 120-137 篇が詠唱が通常の過越祭の晩餐とすると、この最後の部分が、歌われた可能性がある。
  - 詩篇 115-118 篇は、一般的な賛美だが、詩篇 120-137 篇はそれぞれに特別な意味がある賛美であるように思われる。
  - 詩篇 120 都もうでの歌 1 わたしが悩みのうちに、主に呼ばわると、／主はわたしに答えられる。2 「主よ、偽りのくちびるから、／欺きの舌から、わたしを助け出してください」。3 欺きの舌よ、おまえに何が与えられ、／何が加えられるであろうか。4 ますらおの鋭い矢と、／えにしだの熱い炭とである。5 わざわいなるかな、わたしはメセクにやどり、／ケダルの天幕のなかに住んでいる。6 わたしは久しく平安を憎む者のなかに住んでいた。7 わたしは平安を願う、／しかし、わたしが物言うと

き、彼らは戦いを好む。
  - 詩篇 121 都もうでの歌 1 わたしは山にむかって目をあげる。わが助けは、どこから来るであろうか。2 わが助けは、天と地を造られた主から来る。3 主はあなたの足の動かされるのをゆるされない。あなたを守る者はまどろむことがない。4 見よ、イスラエルを守る者は／まどろむこともなく、眠ることもない。5 主はあなたを守る者、／主はあなたの右の手をおおう陰である。6 昼は太陽があなたを撃つことなく、／夜は月があなたを撃つことはない。7 主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、／またあなたの命を守られる。8 主は今からとこしえに至るまで、あなたの出ると入るとを守られるであろう。

- エルサレムからゲッセマネまで（榊原康夫「マタイ福音書講解（下巻)」より）
  - エルサレムの家々ではあかりがついており、ある家では、真夜中に扉の開かれる神殿に参詣しようと、支度をととのえています。にぎやかな町中を過ぎ、北の門をでると、都の東を、ケデロンの谷川が流れています。過越のいけにえの血が混じって、ひときわどす黒い水は、満月の光のきらめきを浮かべています。そこを渡って、ダラダラ坂を四、五十メートルも上ると、道の右手に、今も「ゲッセマネの園」として観光客に指さされる一画があり、イエスが祈られたときの、オリブの木と言われる老木さえ、指摘されます。

- ゼカリヤ 13:1-9
  - 1 その日には、罪と汚れとを清める一つの泉が、ダビデの家とエルサレムの住民とのために開かれる。2 万軍の主は言われる、その日には、わたしは地から偶像の名を取り除き、重ねて人に覚えられることのないようにする。わたしはまた預言者および汚れの霊を、地から去らせる。3 もし、人が今後預言するならば、その産みの父母はこれにむかって、『あなたは主の名をもって偽りを語るゆえ、生きていることができない』と言い、その産みの父母は彼が預言している時、彼を刺すであろう。4 その日には、預言者たちは皆預言する時、その幻を恥じる。また人を欺くための毛の上着を着ない。5 そして『わたしは預言者ではない、わたしは土地を耕す者だ。若い時から土地を持っている』と言う。6 もし、人が彼に『あなたの背中の傷は何か』と尋ねるならば、『これはわたしの友だちの家で受けた傷だ』と、彼は言うであろう」。7 万軍の主は言われる、「つるぎよ、立ち上がってわが牧者を攻めよ。わたしの次に立つ人を攻めよ。牧者を撃て、その羊は散る。わたしは手をかえして、小さい者どもを攻める。8 主は言われる、全地の人の三分の二は断たれて死に、三分の一は生き残る。9 わたしはこの三分の一を火の中に入れ、銀をふき分けるように、これをふき分け、金を精錬するように、これを精錬する。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『彼らはわが民である』と言い、彼らは『主はわが神である』と言う」。

- つまずかせる（　　: to put a stumbling block or impediment in the way, upon which another may trip and fall, metaph. to offend）
  - マルコ 6:3 この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。

  - マルコ 9:42-47 42 また、わたしを信じるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海に投げ込まれた方が、はるかによい。43 もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、片手になって命に入る方がよい。44 (地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。) 45 もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい。46 (地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。) 47 もし、あなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出しなさい。両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目になって神の国に入る方がよい。
  - マルコ 14:27-29 27 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。29 するとペテロはイエスに言った、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」。

- ヨハネ 6:60 弟子たちのうちの多くの者は、これを聞いて言った、「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」。61 しかしイエスは、弟子たちがそのことでつぶやいているのを見破って、彼らに言われた、「このことがあなたがたのつまずきになるのか。62 それでは、もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、どうなるのか。63 人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。64 しかし、あなたがたの中には信じない者がいる」。イエスは、初めから、だれが信じないか、また、だれが彼を裏切るかを知っておられたのである。65 そしてイエスは言われた、「それだから、父が与えて下さった者でなければ、わたしに来ることはできないと、言ったのである」。66 それ以来、多くの弟子たちは去っていって、もはやイエスと行動を共にしなかった。67 そこでイエスは十二弟子に言われた、「あなたがたも去ろうとするのか」。68 シモン・ペテロが答えた、「主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。69 わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」。70 イエスは彼らに答えられた、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」。71 これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

- テルトリアヌス『ディダスカリア 2:8』弟子たちは、眠りに陥ったので試みられ、そこで彼らは、主が捕えられる時に主を捨てた。主と共に踏みとどまって剣を振るった者さえも。そこで、彼は、三度も主をしらないと言いさえした。なぜなら『聖書は「試みられない人はだれも受け入れられない」と言っている』
  - The Didascalia apostolorum in English [Link1] [Link2]

- ルイス：我知れりと思っている人を教えるのは、なんと難しいことだろう。（中略）もっとも信頼できないものは自分に対する信頼であり、あらゆる賜物のうちでもっとも欲しいものは教えを受けるのに素直な心である。

- コリント人への第二の手紙 13:5

  あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・

キリストがあなたがたのうちにおられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる。

- 詩篇 94:17,18 もしも主がわたしを助けられなかったならば、／わが魂はとくに音なき所に住んだであろう。18 しかし「わたしの足がすべる」と思ったとき、／主よ、あなたのいつくしみは／わたしをささえられました。

4.87.6　記録

- 日時：2025 年 2 月 6 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）7 名、参加（遠隔）3 名

4.87.7　問いについて

1. 12–25 節を復習しましょう。イエスは、どのようなことを弟子たちに語っていましたか。
    - 13 そこで、イエスはふたりの弟子を使いに出して言われた、「市内に行くと、水がめを持っている男に出会うであろう。その人について行きなさい。14 そして、その人がはいって行く家の主人に言いなさい、『弟子たちと一緒に過越の食事をする座敷はどこか、と先生が言っておられます』。15 するとその主人は、席を整えて用意された二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために用意をしなさい」。
    - 18 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。
    - 20 イエスは言われた、「十二人の中のひとりで、わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者が、それである。21 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。
    - 22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。
    - 24 イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。25 あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。
    - 主として三つのことが伝えられている。
        1. 十二人の一人が裏切ろうとしている。（誰かは明かされていない）
        2. イエスは去っていく。

3. パンと杯を、イエスの体、血、（新しい）契約として共に、食す。（イエスの死の意味）

2. 晩餐のあとのようすは、どのように描かれていますか。（26）

- 彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。
- 通常の過越祭の晩餐と似た雰囲気でもある。
- 「ハレル（の結び）」詩篇 120-137 篇または、詩篇 113-118 編などの詠唱。詩篇 150 篇までは、賛美が続く。
- [DQ] 弟子たち、どのような気持ちだったのだろうか。
  - 不吉さを感じつつも、過越祭の晩餐を感謝していたのではないだろうか。それ以上のことは、受け取る余裕がなかったかもしれない。

3. イエスはどのように語りますか。（27,28）

- 27 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。
- [A] あなた方は皆といっている。羊飼いは、イエス、羊は、弟子たちだろう。さらに、イエスはよみがえりまで、通して語っており、「あなたがたより先にガリラヤへ行く」とも言っている。
- ゼカリヤ 13:7 万軍の主は言われる、「つるぎよ、立ち上がってわが牧者を攻めよ。わたしの次に立つ人を攻めよ。牧者を撃て、その羊は散る。わたしは手をかえして、小さい者どもを攻める。
  - 引照箇所とされるが、本当にそうだろうか。ゼカリヤの文脈に必ずしもあっているとは限らない。イエスはほんとうに、この旧約聖書のことばから、自分が撃たれることをのべたのだろうか。
- [参照] 14:21 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。
- [参照] 14:50 弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。
- [参照] 16:7 今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。
- [DQ] 裏切る（18）ことと、つまづくことと、見捨てることは、本質的に異なるのでしょうか。
- [DQ] 前半は、なにを伝えているのでしょうか。
  - つまずかせる（　　: to put a stumbling block or impediment in the way, upon which another may trip and fall, metaph. to offend）

- [DQ] 後半の部分は、どのように理解したら良いでしょうか。昔と同じ状態に戻るということでしょうか。
  - [A] イエスも、正確には理解できていなかったのかもしれない。
  - [A] よみがえってからでないと、イエスの死と復活について伝わらないと考えたのだろうか。
  - （参照）マルコ 16:7 今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。（マタイ 28:10）
  - （参照）マルコ 1:14,15 ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、15 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。
  - （備考）ルカやヨハネには、ガリラヤに行くことは書かれていない。また、復活も、ルカでは、エルサレム周辺でのことのみ描かれ、昇天も、ベタニヤ（ルカ 24:50-53）または、エルサレム周辺となっている。
    - （参照）使徒 1:3,4 イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。4 そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。
    - ヨハネでは、エルサレム（20 章）とガリラヤ（21 章）で復活後弟子たちに現れている。しかし、昇天については、描かれていない。

4. このあと、ペテロはどのように主張し、イエスはどう応答しますか。（29-31）
   - 29 するとペテロはイエスに言った、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」。30 イエスは言われた、「あなたによく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そう言うあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」。31 ペテロは力をこめて言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。みんなの者もまた、同じようなことを言った。
   - [A] みなと自分を比較している。
   - [A] 最後に、「みんなのもの」のことばもついている。

5. ペテロは、なぜこれほど強く言い切るのでしょうか。
   - [DQ] ペテロは、14:19 で、「まさか、わたしではないでしょう」と言った中にはいなかったのでしょうか。どのような気持ちで、イエスの言葉を聞いていたでしょうか。
     - 14:18,19 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとし

ている」。19 弟子たちは心配して、ひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。

- [DQ] ルカやヨハネはこのときのことをどのように伝えていますか。
  - ルカ：ペテロの焦点をあてている。そして、立ち直ったあとのことについても伝えている。
    - 31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。
    - 1 ペテロ 5:8,9 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。9 この悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい。あなたがたのよく知っているとおり、全世界にいるあなたがたの兄弟たちも、同じような苦しみの数々に会っているのである。
    - ペテロたちの高慢の印象は弱められ、彼らの挫折には悪魔の暗躍が、立ち直りには、主の祈りがあることが強調される。超自然的なもの。
  - ヨハネ：どこにいくかがわからないことに焦点があたっている。
    - 36 シモン・ペテロがイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのですか」。イエスは答えられた、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになろう」。37 ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。
    - ヨハネ 14:28 『わたしは去って行くが、またあなたがたのところに帰って来る』と、わたしが言ったのを、あなたがたは聞いている。もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるであろう。父がわたしより大きいかたであるからである。

6. イエスには、どのような思いがあるのでしょうか。
   - [DQ] 弟子たちが、裏切る、見捨てる、知らないということを、イエスはどのように考えておられたのでしょうか。
     - [Q] そのあと戻ってくることを知っていたから、べつに大したことではなかったのでしょうか。
   - [DQ] ヨハネ 6 章の記事どはどのような関係にあるのでしょうか。
     - ヨハネ 6:66 それ以来、多くの弟子たちは去っていって、もはやイエスと行動を共にしなかった。67 そこでイエスは十二弟子に言われた、「あなたがたも去ろうとするのか」。
   - [DQ] イエスにとって、イスカリオテのユダと、ペテロなど他の弟子たちとには、決定的な違いがあったのでしょうか。
     - [A] 一般的にはあると考えられていると思う。

    - ユダは計画的、ペテロなど、弟子たちは、とっさのこと。無計画。
  - [A] 差はないのではないか。
    - マルコでは、不明としか言えない。ただ、情報は仕入れていたかも知れない。
- [DQ] イエスは、誰が、裏切るか、だれは、戻ってくるか知っていたのでしょうか。
  - ヨハネ 6:64 しかし、あなたがたの中には信じない者がいる」。イエスは、初めから、だれが信じないか、また、だれが彼を裏切るかを知っておられたのである。
  - ヨハネ 6:70,71 イエスは彼らに答えられた、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」。71 これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。
  - ヨハネ 13:24 そこで、シモン・ペテロは彼に合図をして言った、「だれのことをおっしゃったのか、知らせてくれ」。25 その弟子はそのままイエスの胸によりかかって、「主よ、だれのことですか」と尋ねると、26 イエスは答えられた、「わたしが一きれの食物をひたして与える者が、それである」。そして、一きれの食物をひたしてとり上げ、シモンの子イスカリオテのユダにお与えになった。27 この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。

4.87.8 メモ

- 福音書の差異：マタイは、マルコと非常に似ている。かろうじてことなるのは、マルコでは「にわとりが二度鳴く前に」とある「二度」を削除、ペテロが「力をこめて」言った部分の「力をこめて」が削除されていることのみである。ルカでは、全員に語られたと思われる、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。」から始まる部分はなく、また、「しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」も書かれていない。また、ルカには「31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。が付け加えられている。また、ペテロのことばに「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」(33) と、修正が加えられている。ヨハネでは「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。」(マルコ 14:21) に呼応するように、または、ヨハネの新しい戒めの項「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」(ヨハネ 13:34,35) のひとつ前にある、「子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできな

い』。」（ヨハネ 13:33）に関連づけるように、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。（ヨハネ 13:37）と言っている。イエスが去っていくことと、裏切ろうとしているものがいる、そして、新しい契約という、重大なことが語られているなかで、最初の部分に反応していることになる。死の意味や、新しい契約には、まだ心が行っていないということなのだろう。

4.88　14:32-42 ゲッセマネで祈る

32 さて、一同はゲツセマネという所にきた。そしてイエスは弟子たちに言われた、「わたしが祈っている
間、ここにすわっていなさい」。33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおの
のき、また悩みはじめて、彼らに言われた、34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っ
ていて、目をさましていなさい」。35 そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この
時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、36 「アバ、父よ、あなたには、でき
ないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではな
く、みこころのままになさってください」。37 それから、きてごらんになると、弟子たちが眠っていたの
で、ペテロに言われた、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったの
か。38 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。
39 また離れて行って同じ言葉で祈られた。40 またきてごらんになると、彼らはまだ眠っていた。その目
が重くなっていたのである。そして、彼らはどうお答えしてよいか、わからなかった。41 三度目にきて言
われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。もうそれでよかろう。時がきた。見よ、人の子は罪人ら
の手に渡されるのだ。42 立て、さあ行こう。見よ。わたしを裏切る者が近づいてきた」。

4.88.1　マタイ 26:36-46

36 それから、イエスは彼らと一緒に、ゲツセマネという所へ行かれた。そして弟子たちに言われた、「わ
たしが向こうへ行って祈っている間、ここにすわっていなさい」。37 そしてペテロとゼベダイの子ふたり
とを連れて行かれたが、悲しみを催しまた悩みはじめられた。38 そのとき、彼らに言われた、「わたしは
悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」。39 そして
少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯
をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさっ
て下さい」。40 それから、弟子たちの所にきてごらんになると、彼らが眠っていたので、ペテロに言われ
た、「あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか。41
誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。42 ま
た二度目に行って、祈って言われた、「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこ
ころが行われますように」。43 またきてごらんになると、彼らはまた眠っていた。その目が重くなってい
たのである。44 それで彼らをそのままにして、また行って、三度目に同じ言葉で祈られた。45 それから
弟子たちの所に帰ってきて、言われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った。人の
子は罪人らの手に渡されるのだ。46 立て、さあ行こう。見よ、わたしを裏切る者が近づいてきた」。

4.88.2　ルカ 22:39-46

39 イエスは出て、いつものようにオリブ山に行かれると、弟子たちも従って行った。40 いつもの場所に着いてから、彼らに言われた、「誘惑に陥らないように祈りなさい」。41 そしてご自分は、石を投げてとどくほど離れたところへ退き、ひざまずいて、祈って言われた、42 「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」。43 そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。44 イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。45 祈を終えて立ちあがり、弟子たちのところへ行かれると、彼らが悲しみのはて寝入っているのをごらんになって 46 言われた、「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい」。

マルコによる福音書 14 章 32-42 節福音書対照表

4.88.3　問い

1. 12–31 節をよみ、イエスと弟子たちについて復習しましょう。
2. イエスは、弟子たちにどのようなことを期待していますか。(32-34)
3. イエスはどのように祈りますか。(35-36)
4. イエスは弟子たちにどのように言っていますか。(37-41)
5. イエスは、最後になんと言っていますか。(42)
6. イエスの恐れ (33)、悲しみ (34)、そして願い (35,36) は、どのようなものだと思いますか。(33-36 を中心に)

4.88.4　参照

- 地図 (Map)：受難週のエルサレム (The Passion Week in Jerusalem) [参照]
- ゲッセマネ (Γ　　：from　press, and　oil)：油搾り
  - ヨハネ 18:2 イエスを裏切ったユダは、その所をよく知っていた。イエスと弟子たちとがたびたびそこで集まったことがあるからである。
- ペテロ、ヤコブ、ヨハネ
  - マルコ 5:37 そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。(ルカ 8:51)
  - マルコ 9:2 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、(マタイ 17:1「ペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネ」、

ルカ 9:28)
  - マルコ 14:33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、（マタイは、ゼベタイの子ら）
  - [参照] マルコ 13:3 またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。
- 目をさましていなさい。（「目をさま」で検索）　　：i. watch, ii. metaph. give strict attention to, be cautious, active. Strong Definition: be vigilant, wake, (be) watch(-ful).
  - マルコ 14:34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。(マタイ 26:38)
  - マルコ 14:37,38 37 それから、きてごらんになると、弟子たちが眠っていたので、ペテロに言われた、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったのか。38 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。(マタイ 26:40,41)
    * 肉体が弱い？夜通し漁をする：ルカ 5:5, ヨハネ 21:3、夜通し漕ぐマタイ 14:24-35
  - マルコ 13:33-37 33 気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである。34 それはちょうど、旅に立つ人が家を出るに当り、その僕たちに、それぞれ仕事を割り当てて責任をもたせ、門番には目をさましておれと、命じるようなものである。35 だから、目をさましていなさい。いつ、家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、にわとりの鳴くころか、明け方か、わからないからである。36 あるいは急に帰ってきて、あなたがたの眠っているところを見つけるかも知れない。37 目をさましていなさい。わたしがあなたがたに言うこの言葉は、すべての人々に言うのである」。（マタイ 24:42,43）
    * ルカ 21:36 これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」。
  - マタイ 25:13 だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。
  - ルカ 9:32 ペテロとその仲間の者たちとは熟睡していたが、目をさますと、イエスの栄光の姿と、共に立っているふたりの人とを見た。
  - 1 コリント 16:13 目をさましていなさい。信仰に立ちなさい。男らしく、強くあってほしい。
  - エペソ 5:13 絶えず祈と願いをし、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさましてうむことがなく、すべての聖徒のために祈りつづけなさい。
  - コロサイ 4:2 目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい。
  - 1 テサロニケ 5:6 だから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう。
  - 1 ペテロ 5:8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。
  - 使徒 20:31 だから、目をさましていなさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい。
  - 黙示録 3:2,3 2 目をさましていて、死にかけている残りの者たちを力づけなさい。わたしは、あなたのわざが、わたしの神のみまえに完全であるとは見ていない。3 だから、あなたが、どのようにして受けたか、また聞いたかを思い起して、それを守りとおし、かつ悔い改めなさい。もし目をさまして

いないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない。
  - 黙示録 16:15 （見よ、わたしは盗人のように来る。裸のままで歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身に着けている者は、さいわいである。）
  - （参考）箴言 6:9 なまけ者よ、いつまで寝ているのか、／いつ目をさまして起きるのか。
- 恐れおののき、また悩みはじめて「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。」
  - 詩篇 42:5 わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。神を待ち望め。わたしはなおわが助け、／わが神なる主をほめたたえるであろう。
  - 詩篇 42:11 わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。神を待ち望め。わたしはなおわが助け、／わが神なる主をほめたたえるであろう。
  - 詩篇 43:5 わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。神を待ち望め。わたしはなおわが助け、／わが神なる主をほめたたえるであろう。
  - ヨナ 4:9 しかし神はヨナに言われた、「とうごまのためにあなたの怒るのはよくない」。ヨナは言った、「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」。
  - （参考）詩篇 22:15 わたしの力は陶器の破片のようにかわき、／わたしの舌はあごにつく。あなたはわたしを死のちりに伏させられる。
  - （参考）詩篇 116:3 死の綱がわたしを取り巻き、／陰府の苦しみがわたしを捕えた。わたしは悩みと悲しみにあった。
  - ヘブル 5:7-10 7 キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。8 彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、9 そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源となり、10 神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられたのである。
  - 2 コリント 5:21 神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。
- [Q] マルコ 14:33,34 には「33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。とありますが、この恐れ慄き、死ぬほどの悲しみの内容については、どのように考えられていますか。いくつかの説や引用なども教えてください。
  - ChatGPT: マルコ 14:33-34 で描かれるイエスの「恐れおののき」「死ぬほどの悲しみ」の内容について、いくつかの解釈があります。以下に代表的な説を紹介します。
    1. 迫りくる十字架の苦しみ（伝統的解釈）
       - （1）肉体的苦痛の恐れ: この場面はゲツセマネの園での祈りのシーンであり、イエスは十字架にかかる直前の心境を表しています。伝統的なキリスト教の解釈では、イエスはこれから受けるむち打ち、嘲笑、十字架刑という極度の肉体的苦痛を思い、恐れおののいたとされます。
         - ルカ 22:44 では「汗が血のしずくのように地に落ちた」と記されており、極度のストレスが原因で毛細血管が破れる「血汗症（ヘマトヒドローシス）」の可能性も示唆されています。

- イザヤ 53:5「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれた」とあるように、受難の預言と関連づけられます。

* (2) 霊的苦痛（罪の担い手としての苦しみ）: 単なる肉体的な苦痛だけでなく、イエスは全人類の罪を背負い、神の裁きを受けることへの恐れを抱いていたとも解釈されます。
  - コリント 5:21「神は、罪を知らない方を、私たちのために罪とされました。」
  - マタイ 27:46「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」

    イエスは罪そのものとなり、父なる神との交わりが断たれる苦しみを感じていたと考えられます。

2. サタンの攻撃（霊的戦い）: 一部の神学者や解釈では、このゲツセマネの場面はサタンとの最終的な霊的戦いとされています。
   * ルカ 4:13 では「悪魔はすべての試みを終え、時が来るまでイエスを離れた」とあり、ゲツセマネで再びサタンがイエスを誘惑した可能性があります。
   * イエスが「父よ、できることなら、この杯をわたしから取り除いてください」（マルコ 14:36）と祈ることからも、葛藤が見られます。

     しかし、イエスは最終的に「御心のままに」と神の意志に従う決断をされました。
3. 弟子たちの裏切りと孤独: イエスは人間的な感情としても、最も親しい弟子たちに裏切られ、孤独になることを悲しんでいたと考えられます。
   * マルコ 14:50「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げ去った。」
   * マルコ 14:72「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう（ペテロの裏切り）」

     イエスは人間的な愛をもって弟子たちを愛していましたが、彼らの弱さによって見捨てられることも悲しみの一因であったとされます。
4. 人類の救いへの愛: もう一つの解釈は、イエスが「死ぬほどの悲しみ」を感じたのは、人類の罪とその滅びを思う悲しみだったというものです。
   * ルカ 19:41「エルサレムのために涙を流された」
   * ヨハネ 3:16「神は、そのひとり子を賜ったほどに、世を愛された」

     イエスは単に自身の苦しみを恐れていたのではなく、人類の救いのために深い悲しみを覚えていたという見方もあります。
5. 神の御心への従順の葛藤: イエスは完全な神でありながら完全な人間でもありました。そのため、「この杯を取り除いてください」（マルコ 14:36）と祈ることは、神の御心に完全に従うことへの葛藤を表していると考えられます。
   * ヘブル 5:7-8「キリストは、その苦しみの中で涙をもって祈り、神に従うことを学ばれた。」
   * イエスは最終的に「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに」と祈り、神の意志に従われました。

     これは、信仰者が苦しみの中で神に従う姿勢の模範ともされています。

* 結論: マルコ 14:33-34 の「恐れおののき、死ぬほどの悲しみ」には、複数の要素が絡んでいると考えられます。
  1. 十字架の肉体的苦しみ（伝統的解釈）

    2. 全人類の罪を背負う霊的苦しみ（神の裁きを受ける）
    3. サタンの誘惑と霊的戦い
    4. 弟子たちの裏切りと孤独
    5. 人類の救いへの愛と悲しみ
    6. 神の御心への従順の葛藤
- バークレイ『マルコによる福音書』(p.413-414)
  1. イエスは死を望んでいなかった。
  2. どうしてこうならなければならないかをイエスは完全には理解しておられなかった。
  3. イエスは神の意志に服従した。
- ヨハネにはないが、イエスの祈りは、17 章に記録されている。
  - 1b 父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。
  - 2,3 あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。3 永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。
  - 11 わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。
  - 21-23 父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。22 わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。23 わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります。
  - 26 そしてわたしは彼らに御名を知らせました。またこれからも知らせましょう。それは、あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らのうちにあり、またわたしも彼らのうちにおるためであります
- 誘惑に陥らないようには、福音書では、ここのみ。
  - マルコ 14:38 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。
  - ガラテヤ 6:1 兄弟たちよ。もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人を正しなさい。それと同時に、もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省しなさい。
  - ヤコブ 1:13,14 13 だれでも誘惑に会う場合、「この誘惑は、神からきたものだ」と言ってはならない。神は悪の誘惑に陥るようなかたではなく、また自ら進んで人を誘惑することもなさらない。14 人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。
- マタイ最後のたとえ（25 章）
  - 11-13 そのあとで、ほかのおとめたちもきて、『ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけてください』と言った。12 しかし彼は答えて、『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』と言った。13 だか

ら、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。
  - 30 この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』。
  - 40 すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。
  - 45 そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』。
- 杯
  - マルコ 10:38,39 38 イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。39 彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。（マタイ 20:22,23）
  - マルコ 14:23 また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。（マタイ 26:27、ルカ 22:17,20）
  - ヨハネ 18:11 すると、イエスはペテロに言われた、「剣をさやに納めなさい。父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」。
  - イザヤ 51:17 エルサレムよ、起きよ、起きよ、立て。あなたはさきに主の手から憤りの杯をうけて飲み、／よろめかす大杯を、滓までも飲みほした。
  - イザヤ 51:22 あなたの主、おのが民の訴えを弁護される／あなたの神、主はこう言われる、／「見よ、わたしはよろめかす杯を／あなたの手から取り除き、／わが憤りの大杯を取り除いた。あなたは再びこれを飲むことはない。
  - エレミヤ 25:15 イスラエルの神、主はわたしにこう仰せられた、「わたしの手から、この怒りの杯を受けて、わたしがあなたをつかわす国々の民に飲ませなさい。
  - エレミヤ 25:17 こうしてわたしは主の手から杯を受け、主がわたしをつかわされた国々の民に飲ませた。
  - エゼキエル 23:31 あなたはその姉の道を歩んだので、わたしも彼女の杯をあなたにわたす。
  - ハバクク 2:16 あなたは誉の代りに恥に飽き、／あなたもまた飲んでよろめけ。主の右の手の杯は、あなたに巡り来る。恥はあなたの誉に代る。
  - ゼカリヤ 12:2 「見よ、わたしはエルサレムを、その周囲にあるすべての民をよろめかす杯にしようとしている。これはエルサレムの攻め囲まれる時、ユダにも及ぶ。
- マルコ 10:24-31
  - 24 弟子たちはこの言葉に驚き怪しんだ。イエスは更に言われた、「子たちよ、神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。25 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。26 すると彼らはますます驚いて、互に言った、「それでは、だれが救われることができるのだろう」。27 イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」。28 ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。29 イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、30

必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。

4.88.5 記録

- 日時：2025 年 2 月 13 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.88.6 問いについて

1. 12–31 節をよみ、イエスと弟子たちについて復習しましょう。
    - 木：準備の日、夜（ユダヤのカレンダーでは金）過越祭の食事
        - 十二弟子以外にも、女性たちや、家の人たちもいたかもしれない。
            * 皆にとって過越祭の食事は重要（どこかでは必ず食べる）
            *「あなたがたの中のひとり」→「十二人の中のひとり」裏切ろうとしている。
            * ヨハネのイエスの愛しておられた弟子（ヨハネ 13:23）もいたことは確か（ヨハネ 21:2「ゼベダイの子ら」とは異なる人と思われる）
    - 主として以下のことが伝えられている。
        1. 十二人の一人が裏切ろうとしている。（誰かは明かされていない）
        2. イエスは去っていく。
        3. パンと杯を、イエスの体、血、（新しい）契約として共に、食す。（イエスの死の意味）
        4. 皆が、つまづくこと、そして、イエスは、よみがえってから、先にガリラヤに行く。
        5. ペテロが他のひとがつまずいても、自分はつまずかないと強く主張。他の弟子も、同調する。
    - [DQ] イエスにとっては、この食事は、どのような意味があったのでしょうか。
        - 最後の特別の晩餐。弟子たちに、たいせつなことをすべて伝えたいと思っていたと思われる。しかし、十分は伝わらないこともおそらくある程度知っていた。
    - [DQ] 弟子たちにとっては、この晩のことは、どのようなものとして記憶されていたのだろうか。

  - イエスとの最後の晩餐、夜であるにもかかわらず、結局、確信をもって従えず、躓かないといいつつ、イエスを否み、イエスが捕まる時には見捨てて逃げてしまった失敗体験の日。

2. イエスは、弟子たちにどのようなことを期待していますか。(32-34)

- 32 さて、一同はゲツセマネという所にきた。そしてイエスは弟子たちに言われた、「わたしが祈っている間、ここにすわっていなさい」。33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。
- [DQ] 「ここにすわっていなさい」とは何を意味しているのでしょうか。
  - [Q] 目をさましているのとは、違う？
- [DQ] 「目をさましていなさい」とは何を意味しているのでしょうか。
  - 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである(14:38)
- [DQ] ペテロ、ヤコブ、ヨハネには、どうしますか。
  - 34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。
- [DQ] 「ここに座っていなさい」、「ここに待っていて、目を覚ましていなさい」はなにを求めているのでしょうか。
  - 共にいることを願っているように見える。
  - [Q] マタイ 26:38b では「ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」
  - マルコ 13:33-37 気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである。(33)
  - マタイ 25:13 だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。
  - 1 ペテロ 5:8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。
  - [A] おそらく、箴言 6:9 のような一般的なことや、マルコ 13 章、マタイ 25:13 などの、最後の時・再臨の時のような特別なときではなくても、目を覚ましているべき時があり、このときも、おそらく、そのような時だったのだろう。イエスとの特別な時を共に、恐れ慄き、悩み、悲しみを共にする時。
- [DQ] 「恐れおののき、また悩みはじめて」とはどのようなことを伝えているのでしょうか。
  - 最後に残った弟子たちの中にも裏切ろうとしているもがおり、皆も、つまづこうとする中で、ひとり、未知の困難に向き合うこと。(だれにでもありそうなこと。)
  - 神から離れて、呪われた存在となることの恐怖からおそれ慄き、悩み始めたのか。(人には、理解できない、イエスならではの、苦しみ。)
- (参考) マタイ 26:38b わたしと一緒に目をさましていなさい。
- (参考) マタイ 26:40b あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか。
- (参考) ルカ 22:28-30 28 (シモンに語りかける直前) あなたがたは、わたしの試錬のあいだ、わたし

と一緒に最後まで忍んでくれた人たちである。29 それで、わたしの父が国の支配をわたしにゆだねてくださったように、わたしもそれをあなたがたにゆだね、30 わたしの国で食卓について飲み食いをさせ、また位に座してイスラエルの十二の部族をさばかせるであろう。

3. イエスはどのように祈りますか。(35-36)

- 35 そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時（　）を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、36 「アバ（　：　）、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。

- [DQ] イエスは、何を願っているのでしょうか。
  - この時を過ぎ去らせてくださるように
    - 復活への期待。その前に何を恐れていたのか。
  - この杯をわたしから取りのけてください。
  - [Q] 杯とは何ですか。
    - マルコ 10:38,39 38 イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。39 彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。(マタイ 20:22,23)
    - マルコ 14:23 また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。(マタイ 26:27、ルカ 22:17,20)
    - ヨハネ 18:11 すると、イエスはペテロに言われた、「剣をさやに納めなさい。父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」。
    - 旧約では杯＝裁き
      - イザヤ 51:17,22、エレミヤ 25:15,17
  - [DQ] 「わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」すなわち、御心に委ねるということは何を意味しているのだろうか。御心に委ねたにということは、なにを意味しているのだろうか。
    - [A] 単に、最善を祈るということではなく、さまざまなひとの動き、その背後にある、神様に委ねると言う面もあり、非常に複雑なものを引き受けることになる。
  - [DQ] 神（祈る対象）は、どのような方だと認識していたのでしょうか。
  - アバ、父よ、あなたには、できないことはありません
    - おそらく、神が選択しないことと、言う意味でできないことがあることは知っていたと思われる
  - みこころは完全

4. イエスは弟子たちにどのように言っていますか。(37-41)

- 37 それから、きてごらんになると、弟子たちが眠っていたので、ペテロに言われた、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったのか。38 誘惑（　　：an experiment, attempt, trial, proving）に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。39 また離れて行って同じ言葉で祈られた。40 またきてごらんになると、彼らはまだ眠っていた。その目が重くなっていたのである。そして、彼らはどうお答えしてよいか、わからなかった。41 三度目にきて言われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。もうそれでよかろう。時がきた。見よ、人の子は罪人らの手に渡されるのだ。
- [DQ] これは、どのような言葉なのでしょうか。
  - 叱責
  - 訓練
  - 憐れみ
  - その他
- [DQ] 弟子たちは、なぜ、目を覚ましていることができなかったのでしょうか。
  - 心は熱しているが、肉体が弱い
  - （参考）ルカ 22:43 そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。
- [DQ] 弟子たちは、あとから、このときのことをどのように振り返ったでしょうか。
  - 失敗。弱さの自覚
  - マタイ 25:13 のように、目を覚ましていることができなかった。これらのもっとも小さいもの。
- [DQ] ここで「誘惑」とはどのようなものなのでしょうか。
  - たいせつなものから、目をそらせるもの。
- [DQ] 「心は熱しているが、肉体が弱いのである」とは、どのような意味でしょうか。
  - 夜を徹して、船を漕いだり、魚をとったりは、できていた。

5. イエスは、最後になんと言っていますか。（42）

- 42 立て、さあ行こう。見よ。わたしを裏切る者が近づいてきた」。
  - [参照] マルコ 10:49 イエスは立ちどまって、「彼を呼べ」と命じられた。そこで、人々はその盲人を呼んで言った、「喜べ、立て、おまえを呼んでおられる」。
- [DQ] イエスの、どのような気持ちを表しているのでしょうか。
- [DQ] 弟子たちには、どのような印象を与えたでしょうか。
- マルコ 10:32-34 32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。
  - このときの様子と似ている。
  - この前には、「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。すると彼らはますます驚いて、互に言った、「それでは、だれが救われることができるの

だろう」。イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」。ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。(10:25-28)
  - [Q] このすべてを捨てて従ったペテロと、このときのイエスとは何が違うのか。
    * [HS] 自分の責任を果たすことで十分か、神の御心に従うことを目指すかだろうか。

6. イエスの恐れ (33)、悲しみ (34)、そして願い (35,36) は、どのようなものだと思いますか。(33-36 を中心に)

- 33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。35 そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、36 「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。
- ChatGPT 概要
  1. 十字架の肉体的苦しみ（伝統的解釈）
  2. 全人類の罪を背負う霊的苦しみ（神の裁きを受ける）
  3. サタンの誘惑と霊的戦い
  4. 弟子たちの裏切りと孤独
  5. 人類の救いへの愛と悲しみ
  6. 神の御心への従順の葛藤
- [DQ] 弟子たちが、マタイ 25 章の三つのたとえを読んだとしたら、自分は、どの娘、どの僕だと思うだろうか。もっとも小さいものは、誰なのだろうか。
- [DQ] イエスにとって気にかかること・たいせつなことはどのようなことだったのだろうか。
  - 弟子たちのこと
  - 群衆や、さまざまな苦しむひとたちのこと
  - 祭司長や指導者たちのこと
  - 自分が直接関係していないひとたちのこと

4.88.7 メモ

- 福音書の差異：マタイは、マルコに似ているが、説明が加えられている。ルカは短いが、マルコ、マタイにはない、特別な表現が加えられている。まず、マルコでは「わたしが祈っている間」だが、マタイでは「わたしが向こうに行って祈っている間」である。マルコでは、三人の名前を上げているが、マタイでは、ヤコブとヨハネは、「ゼベダイの子ふたり」としている。「恐れおののき、また悩みはじめて」は、マタイでは「悲しみを催しまた悩みはじめられた」。また、「地にひれ伏し」は、「うつぶしになり」、「そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、

そして言われた、『アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください』。」（35,36）は、マタイでは、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」。となっている。37 節で、マルコでは、ペテロに「シモンよ」と語っているが、マタイでは、ペテロにと書きながら、「あなたがたは」と複数に語っている。「また離れて行って同じ言葉で祈られた。」（39）とあるところは、マタイでは「また二度目に行って、祈って言われた、『わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように』。」（26:42）とより詳しく説明している。ルカでは、ゲッセマネに行くところも、「いつものようにオリブ山に行かれると」としている。おそらく、狭い場所名を出すことに意味が感じられなかったのであろう。弟子たちに最初から、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と伝えている。どのぐらい離れたかについては「ご自分は、石を投げてとどくほど離れたところへ退き、ひざまずいて、祈って言われた」としている。祈りの場面も、単純に「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」と書いた後に、「そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。」（43,44）が追加されている。最後も「祈を終えて立ちあがり、弟子たちのところへ行かれると、彼らが悲しみのはて寝入っているのをごらんになって言われた、『なぜ眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい』。」（22:45,46）と閉じている。ヨハネは、ゲッセマネでの祈りは書かれていないが、17 章全体が、イエスの祈りとして書かれている。

- マタイでは、25 章の三つのたとえが、最後の晩餐、そのまえの、イスカリオテのユダの裏切り、そして油注ぎの直前に置かれている。エルサレムでの論争や、律法学者や、パリサイ人非難、終末についてのことよりあとである。最後の譬えとして語られたかどうかは不明だが、弟子たちが、印象に残って覚えていたことであるとも思われる。Q 資料については、詳細にはわかっていないが、マタイが記録したとも言われている、イエスの説教、譬えなどを集めた文書の最後にあったのかもしれない。イエスを裏切るかもしれないこころのうちをのぞから、まさか私ではないでしょうとイエスに聞くでしたち、そして、みなわたしにつまづくといわれて、実際、起きていることもできず、イエスを残して逃げ去り、イエスを否むでしたちが、最初に思い出したのは、この三つの譬えだったのかもしれない。そこでは、弟子たちは、だれと、自分を同一視しただろうか。おそらく、もっとも小さいもの、すなわち、油の準備もできていない、いただいたタラントも十分活用できない、外に放り出されるものだったのではないだろうか。そして、それが、もっとも小さいもの、そのもっともちいさいものに、することは、イエスにすること、これは、とても印象に残ったのではないだろうか。そして、たちあがり、そのようなイエスに従うものになっていった可能性もある。それが、復活の、内実だったかもしれない。聖餐の内実が互いに愛し合うことであったように。
- 全体的な問いについて
  - 弟子たちに期待したことはどのようなことなのだろうか。
    - 少しでも、御心を求める、イエスの苦しみ、悲しみと共にいてほしい。
    - すなわち、御心を共に求めるものであってほしい。

- 恐れ慄（おのの）きとあるが、イエスの悲しみのないようななになのだろうか。
    - 神のみこころを知る恐れ、理解できない怖さ
- イエスのいのりはどのようなものだったのだろうか。何を求めているのだろうか。
    - 上の二つが入り混じったものだったのではないだろうか。

4.89 14:43-50 裏切られ、逮捕される

43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二弟子のひとりのユダが進みよってきた。また祭司長、律法学者、長老たちから送られた群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。44 イエスを裏切る者は、あらかじめ彼らに合図をしておいた、「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえて、まちがいなく引っぱって行け」。45 彼は来るとすぐ、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。46 人々はイエスに手をかけてつかまえた。47 すると、イエスのそばに立っていた者のひとりが、剣を抜いて大祭司の僕に切りかかり、その片耳を切り落した。48 イエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたは強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕えにきたのか。49 わたしは毎日あなたがたと一緒に宮にいて教えていたのに、わたしをつかまえはしなかった。しかし聖書の言葉は成就されねばならない」。50 弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。

4.89.1 マタイ 26:47-56

47 そして、イエスがまだ話しておられるうちに、そこに、十二弟子のひとりのユダがきた。また祭司長、民の長老たちから送られた大ぜいの群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。48 イエスを裏切った者が、あらかじめ彼らに、「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえろ」と合図をしておいた。49 彼はすぐイエスに近寄り、「先生、いかがですか」と言って、イエスに接吻した。50 しかし、イエスは彼に言われた、「友よ、なんのためにきたのか」。このとき、人々は進み寄って、イエスに手をかけてつかまえた。51 すると、イエスと一緒にいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、そして大祭司の僕に切りかかって、その片耳を切り落した。52 そこで、イエスは彼に言われた、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。53 それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。54 しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」。55 そのとき、イエスは群衆に言われた、「あなたがたは強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕えにきたのか。わたしは毎日、宮ですわって教えていたのに、わたしをつかまえはしなかった。56 しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書いたことが、成就するためである」。そのとき、弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。

4.89.2　ルカ 22:47-53

47 イエスがまだそう言っておられるうちに、そこに群衆が現れ、十二弟子のひとりでユダという者が先
頭に立って、イエスに接吻しようとして近づいてきた。48 そこでイエスは言われた、「ユダ、あなたは接
吻をもって人の子を裏切るのか」。49 イエスのそばにいた人たちは、事のなりゆきを見て、「主よ、つるぎ
で切りつけてやりましょうか」と言って、50 そのうちのひとりが、祭司長の僕に切りつけ、その右の耳を
切り落した。51 イエスはこれに対して言われた、「それだけでやめなさい」。そして、その僕の耳に手を触
れて、おいやしになった。52 それから、自分にむかって来る祭司長、宮守がしら、長老たちに対して言わ
れた、「あなたがたは、強盗にむかうように剣や棒を持って出てきたのか。53 毎日あなたがたと一緒に宮
にいた時には、わたしに手をかけなかった。だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」。

4.89.3　ヨハネ 18:3-12

3 さてユダは、一隊の兵卒と祭司長やパリサイ人たちの送った下役どもを引き連れ、たいまつやあかりや
武器を持って、そこへやってきた。4 しかしイエスは、自分の身に起ろうとすることをことごとく承知し
ておられ、進み出て彼らに言われた、「だれを捜しているのか」。5 彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。
イエスは彼らに言われた、「わたしが、それである」。イエスを裏切ったユダも、彼らと一緒に立っていた。
6 イエスが彼らに「わたしが、それである」と言われたとき、彼らはうしろに引きさがって地に倒れた。7
そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスを」と言った。
8 イエスは答えられた、「わたしがそれであると、言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人
たちを去らせてもらいたい」。9 それは、「あなたが与えて下さった人たちの中のひとりも、わたしは失わ
なかった」とイエスの言われた言葉が、成就するためである。10 シモン・ペテロは剣を持っていたが、そ
れを抜いて、大祭司の僕に切りかかり、その右の耳を切り落した。その僕の名はマルコスであった。11 す
ると、イエスはペテロに言われた、「剣をさやに納めなさい。父がわたしに下さった杯は、飲むべきではな
いか」。12 それから一隊の兵卒やその千卒長やユダヤ人の下役どもが、イエスを捕え、縛りあげて、

マルコによる福音書 14 章 43-50 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表（2 頁）

マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表（1 頁）

4.90　14:51-52 一人の若者、逃げる

51 ときに、ある若者が身に亜麻布をまとって、イエスのあとについて行ったが、人々が彼をつかまえよ
うとしたので、52 その亜麻布を捨てて、裸で逃げて行った。

マルコによる福音書 14 章 51-52 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表（2 頁）

マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表（1 頁）

4.90.1 問い

1. 26 節から 42 節を復習しましょう。イエスと弟子たちはどこでどのようなことをしていますか。
2. イエスはどのようにして捕まえられますか。（43-46）
3. イエスのそばにいたものはどのような行動をしますか。（47）
4. イエスはどのように応じますか。（48,49）
5. 弟子たちはどうしましたか。（50）
6. 51 節から 52 節にはどのようなことが書かれていますか。（51-52）

4.90.2 参照

- 地図（Map）: 受難週のエルサレム（The Passion Week in Jerusalem）[参照]
- この日の天候
  - ChatGPT: 過越祭（ペサハ）は、ユダヤ暦のニサンの月の 14 日から始まり、これは太陰暦に基づいているため、毎年満月の時期と一致します。そのため、過越祭の期間中、エルサレムでは夜空に満月が輝いています。
    エルサレムの 4 月中旬の天候は、平均的に晴天の日が多く、降水量も少ない傾向があります。しかし、具体的な晴天や曇天の割合に関する詳細なデータは見つかりませんでした。一般的には、過越祭の時期は乾燥した気候で、夜間は満月が見られることが多いとされています。
  - Perplexity: エルサレムでの過越祭（ペサハ）の時期は、ユダヤ暦ニサン月 14 日から始まり、通常グレゴリオ暦では 3 月末から 4 月初旬にあたります。この時期は春にあたり、エルサレムの天候は比較的穏やかで、晴れの日が多い傾向にあります。天候の特徴
    * 晴れと曇りの割合: エルサレムでは春の時期に快晴または晴れの日が多く、曇天の日は少ないです。具体的な割合として、快晴や晴れの日が 70〜80% 程度を占めることが一般的です。
    * 気温: 平均気温は日中で 15〜20℃、夜間で 7〜10℃ 程度と過ごしやすい気候です。
    * 降水量: 春は雨季の終わりにあたり、降水量は少なくなりますが、まれに短時間の雨が降ることもあります。満月について過越祭はユダヤ暦に基づいており、満月の夜から始まるため、この時期の夜空には満月が見えることが特徴です。ただし、天候によって雲に覆われる可能性もありますが、春のエルサレムでは晴れる確率が高いです。このように、過越祭の時期には比較的穏やかで晴れた天候が期待できるため、屋外での活動や宗教行事にも適した気候となっています。
- 接吻

- : i. to love, ii. to show signs of love, iii. to be fond of doing（マルコ 14:44）
- : to kiss much, kiss again and again, kiss tenderly (マルコ 14:45、マタイ 26:49)
  * マルコ 14:45 彼は来るとすぐ、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。
    · マタイ 26:49 49 彼はすぐイエスに近寄り、「先生、いかがですか」と言って、イエスに接吻した。
  * ルカ 7:38 泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。
    · ルカ 7:45 あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家にはいった時から、わたしの足に接吻をしてやまなかった。
  * ルカ 15:20 そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。
  * 使徒 20:37 みんなの者は、はげしく泣き悲しみ、パウロの首を抱いて、幾度も接吻し、
- [45] . , .
  * ChatGPT: ユダがイエスに対して「 」を使ったことは、単なる儀礼的な挨拶を超えた行為として描写されています。これはイエスを裏切る合図であると同時に、見た目には弟子としての敬愛を示す偽善的な行為でもありました。ギリシャ語の強調形は、この裏切り行為の皮肉さと、見せかけの熱情を強調しています。[2025.02.20]

- しかし聖書の言葉は成就されねばならない」。（49b）
  - 詩篇 22:7-19 すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、／くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、8 「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。9 しかし、あなたはわたしを生れさせ、／母のふところにわたしを安らかに守られた方です。10 わたしは生れた時から、あなたにゆだねられました。母の胎を出てからこのかた、／あなたはわたしの神でいらせられました。11 わたしを遠く離れないでください。悩みが近づき、助ける者がないのです。12 多くの雄牛はわたしを取り巻き、／バシャンの強い雄牛はわたしを囲み、13 かき裂き、ほえたけるししのように、／わたしにむかって口を開く。14 わたしは水のように注ぎ出され、／わたしの骨はことごとくはずれ、／わたしの心臓は、ろうのように、胸のうちで溶けた。15 わたしの力は陶器の破片のようにかわき、／わたしの舌はあごにつく。あなたはわたしを死のちりに伏させられる。16 まことに、犬はわたしをめぐり、／悪を行う者の群れがわたしを囲んで、／わたしの手と足を刺し貫いた。17 わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。18 彼らは互にわたしの衣服を分け、／わたしの着物をくじ引にする。19 しかし主よ、遠く離れないでください。わが力よ、速く来てわたしをお助けください。
  - イザヤ 53:3-12 彼は侮られて人に捨てられ、／悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、／彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。4 まことに彼はわれわれの病を負い、／われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、／彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。5 しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、／われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、／われわれに平安を与え、／その打たれた傷によって、／われわれはいやされたのだ。6 われわれはみな羊のように迷って、／おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、／彼の上におかれた。7 彼はしえたげられ、

苦しめられたけれども、／口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、／また毛を切る者の前に黙っている羊のように、／口を開かなかった。8 彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、／彼はわが民のとがのために打たれて、／生けるものの地から断たれたのだと。9 彼は暴虐を行わず、／その口には偽りがなかったけれども、／その墓は悪しき者と共に設けられ、／その塚は悪をなす者と共にあった。10 しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、／主は彼を悩まされた。彼が自分を、とがの供え物となすとき、／その子孫を見ることができ、／その命をながくすることができる。かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。11 彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。義なるわがしもべはその知識によって、／多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。12 それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に／物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、／とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、／とがある者のためにとりなしをした。

  - ルカ 22:37 あなたがたに言うが、『彼は罪人のひとりに数えられた』としるしてあることは、わたしの身に成しとげられねばならない。そうだ、わたしに係わることは成就している」。
  - ルカ 24:44 それから彼らに対して言われた、「わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」。

- Q. マルコ 14:51 の亜麻布はどのようなものですか。一般的な人が着るものですか、それとも、ある程度裕福な人が着るものでしょうか。
  - ChatGPT

    マルコ 14:51 には、「ある若者が裸になって、亜麻布を身にまとってイエスについて行ったが、群衆に捕まえられた。彼は亜麻布を捨てて裸で逃げた。」という記述があります。この「亜麻布」についてですが、当時の背景を考えるといくつかのことがわかります。

    * 亜麻布の特徴
      · 高価な素材：亜麻布（ギリシャ語で「シンドン」）は、上質なリネン布を指しています。これは、エジプトなどで生産され、高価であり、主に裕福な人々が使用していました。
      · 用途：この布は、寝巻きや下着、または埋葬用の布として用いられることが多かったです。特に、埋葬用の布としての使用は、イエスの埋葬の際にも記述されています（マルコ 15:46）。
    * 裕福な人の象徴？
      · 亜麻布は高価だったため、ある程度裕福な人が使用していたと考えられます。一般庶民は、より粗い羊毛や綿の衣服を着ていました。そのため、この若者は、経済的に余裕があった可能性があります。
    * 特別な状況？
      · マルコ 14:51 の状況を考えると、この若者は寝巻きのまま急いで飛び出してきたとも解釈できます。これは、イエスの逮捕が夜中に急に行われたため、急いで家を出たことを示唆しているのかもしれません。
    * まとめ
      · 亜麻布は高価で、裕福な人が身につけることが多かった。
      · この若者は、ある程度の経済的な余裕があった可能性がある。

        - イエスの逮捕の状況から、寝巻きのまま急いで出てきた可能性もある。
    - この解釈により、当時の社会状況や文化背景が少し見えてきます。他にも疑問点があれば、遠慮なく聞いてください。

4.90.3 記録

- 日時：2025 年 2 月 20 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）3 名

4.90.4 問いについて

1. 26 節から 42 節を復習しましょう。イエスと弟子たちはどこでどのようなことをしていますか。
    - 41 三度目にきて言われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。もうそれでよかろう。時がきた。見よ、人の子は罪人らの手に渡されるのだ。42 立て、さあ行こう。見よ。わたしを裏切る者が近づいてきた」。
    - [DQ] いつのことですか。
        - ニサンの月の 14 日が暮れて、15 日、おそらく AD30 年 4 月 7 日（太陽暦）の夜、満月で、晴れの日が多い（快晴や晴れの日が 70〜80% 程度）。平均気温は日中で 15〜20℃、夜間で 7〜10℃ 程度と過ごしやすい気候。
    - [DQ] どこにいますか。それは、どのような場所ですか。
        - ルカ 22:39 イエスは出て、いつものようにオリブ山に行かれると、弟子たちも従って行った。40 いつもの場所に着いてから、彼らに言われた、「誘惑に陥らないように祈りなさい」。
        - ヨハネ 18:1,2 イエスはこれらのことを語り終えて、弟子たちと一緒にケデロンの谷の向こうへ行かれた。そこには園があって、イエスは弟子たちと一緒にその中にはいられた。2 イエスを裏切ったユダは、その所をよく知っていた。イエスと弟子たちとがたびたびそこで集まったことがあるからである。
        - オリーブの木が茂っていた。油搾り（ゲッセマネ）おそらく、富裕なユダヤ人所有の園
    - [DQ] 最後はどのような場面で終わっていますか。
        - 42 立て、さあ行こう。見よ。わたしを裏切る者が近づいてきた」。
2. イエスはどのようにして捕まえられますか。（43-46）
    - 43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二弟子のひとりのユダが進みよってきた。ま

た祭司長、律法学者、長老たちから送られた群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。44 イエスを裏切る者は、あらかじめ彼らに合図をしておいた、「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえて、まちがいなく引っぱって行け」。45 彼は来るとすぐ、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。46 人々はイエスに手をかけてつかまえた。

- [DQ] どのような人たちがどのようにして現れますか.
  - 43b 十二弟子のひとりのユダが進みよってきた。また祭司長、律法学者、長老たちから送られた群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。
    - マタイでは「イエスを裏切った者が」
    - 過越祭の晩餐のあとなので、一般の人は、家族や近しい人との時を過ごした後である。おそらく、特別なことがなければ、市中を歩き回ってはいない。
  - ヨハネ 18:3 さてユダは、一隊の兵卒と祭司長やパリサイ人たちの送った下役どもを引き連れ、たいまつやあかりや武器を持って、そこへやってきた。
    - ヨハネでは、18:12 それから一隊の兵卒やその千卒長やユダヤ人の下役どもが、イエスを捕え、縛りあげて、
  - （参考）マルコ 14:10,11 10 ときに、十二弟子のひとりイスカリオテのユダは、イエスを祭司長たちに引きわたそうとして、彼らの所へ行った。11 彼らはこれを聞いて喜び、金を与えることを約束した。そこでユダは、どうかしてイエスを引きわたそうと、機会をねらっていた。
- [DQ] ユダはどのようにイエスに近づきますか。
  - 「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえて、まちがいなく引っぱって行け」。彼は来るとすぐ、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。
    - （参考）マタイ 26:50 しかし、イエスは彼に言われた、「友よ、なんのためにきたのか」。このとき、人々は進み寄って、イエスに手をかけてつかまえた。
  - [DQ] なぜ、接吻で裏切るようにしたのだろうか。
    - 満月の日だが、晴れていたかは不明。やはり夜なので、弟子たちも似たような格好をしているとすると、スムーズにことを運ぶには、このようなことは必要だったかもしれない。
    - 最初「接吻する者」では、　　が用いられ、「接吻した（何度も何度も激しく接吻した）」は、　　(マルコ 14:45、マタイ 26:49、ルカ 7:38,45、ルカ 15:20、使徒 20:37 のみ)
    - イエスの口を封じた？
  - [DQ] なぜ、イスカリオテのユダは（このようにして）裏切ったのでしょうか。
    - 貪欲：ヨハネ 12:3-6、マタイ 26:15

* サタンが入った：ルカ 22:3、ヨハネ 13:2, 13:27 [参考：サタンと悪魔]

3. イエスのそばにいたものはどのような行動をしますか。(47)

- 47 すると、イエスのそばに立っていた者のひとりが、剣を抜いて大祭司の僕に切りかかり、その片耳を切り落した。
- [DQ] 「イエスのそばに立っていた者のひとりが、剣を抜いて大祭司の僕に切りかかり、その片耳を切り落した」にもかかわらず、逮捕されたようには書かれていないのはなぜなのでしょうか。
- [DQ] 他の福音書には、どのようなことが記されていますか。
  - マタイ 26:52 そこで、イエスは彼に言われた、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。53 それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。54 しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」。
  - ルカ 22:49 イエスのそばにいた人たちは、事のなりゆきを見て、「主よ、つるぎで切りつけてやりましょうか」と言って、50 そのうちのひとりが、祭司長の僕に切りつけ、その右の耳を切り落した。51 イエスはこれに対して言われた、「それだけでやめなさい」。そして、その僕の耳に手を触れて、おいやしになった。
  - ヨハネ 18:10 シモン・ペテロは剣を持っていたが、それを抜いて、大祭司の僕に切りかかり、その右の耳を切り落した。その僕の名はマルコスであった。11 すると、イエスはペテロに言われた、「剣をさやに納めなさい。父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」。
- [DQ] なぜ、マルコでは、ペテロだと書かないのでしょうか。
  - 危険が伴った可能性がある。

4. イエスはどのように応じますか。(48,49)

- 48 イエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたは強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕えにきたのか。49 わたしは毎日あなたがたと一緒に宮にいて教えていたのに、わたしをつかまえはしなかった。しかし聖書の言葉は成就されねばならない」。
- [A] 1. 強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕えにきたのか。2. わたしは毎日あなたがたと一緒に宮にいて教えていたのに、わたしをつかまえはしなかった。3 しかし聖書の言葉は成就されねばならない
- [DQ] なぜ、宮にいるときに、捕まえなかったのでしょうか。
- [DQ] イエスはなぜ、自分の身を任せたのでしょうか。イエスがたいせつにしたことはなんですか。

- [参照] ヨハネ 18:3-9 6 イエスが彼らに「わたしが、それである」と言われたとき、彼らはうしろに引きさがって地に倒れた。7 そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスを」と言った。8 イエスは答えられた、「わたしがそれであると、言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人たちを去らせてもらいたい」。9 それは、「あなたが与えて下さった人たちの中のひとりも、わたしは失わなかった」とイエスの言われた言葉が、成就するためである。

5. 弟子たちはどうしましたか。（50）

- 50 弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。
- [DQ] 弟子たちはなぜイエスを見捨てて逃げてしまうのでしょうか。
- [DQ] 戦う意思も持っていたようですが、弟子たちは、なぜ、逃げたのだろうか。

6. 51 節から 52 節にはどのようなことが書かれていますか。（51-52）

- 51 ときに、ある若者が身に亜麻布をまとって、イエスのあとについて行ったが、人々が彼をつかまえようとしたので、52 その亜麻布を捨てて、裸で逃げて行った。
- [DQ] なぜこのようなことが書かれているのでしょうか。
- マルコに書かれていて、他の福音書、特に、マタイ、ルカに書かれていない箇所は、少ない。
  - 3:7-12 湖の岸辺の群衆
  - 4:26-29 「成長する種」のたとえ
  - 7:31-37 耳が聞こえず舌の回らない人を癒やす
  - 8:22-26 ベトサイダで盲人を癒やす
  - 14:51-52 一人の若者、逃げる
- ヨハネ・マルコか？
  - 使徒 12:12 ペテロはこうとわかってから、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に行った。その家には大ぜいの人が集まって祈っていた。
  - （バークレイ「マルコ福音書」）ユダが、最後の晩餐の場所に戻ってきて（ヨハネ 13:30 ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。）、そのあと、ゲッセマネに向かった、そのときに、家の若者がついて行った可能性がある。
- 亜麻布：上質の麻、裕福な人が着ていたと言われている。
  - 高価な素材：亜麻布（ギリシャ語で「シンドン」）は、上質なリネン布を指しています。これは、エジプトなどで生産され、高価であり、主に裕福な人々が使用していました。

- 用途：この布は、寝巻きや下着、または埋葬用の布として用いられることが多かったです。特に、埋葬用の布としての使用は、イエスの埋葬の際にも記述されています（マルコ 15:46）。

4.90.5 メモ

- 福音書の差異：マタイは、マルコに近いが、大祭司の僕に切りかかった場面でのイエスの言葉を記している。「52b あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。53 それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。」（マタイ 26:52b,53）ルカには、ユダが接吻をしようとして近づいてきた時、「ユダ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか」（22:48）とあり、さらに、耳を切り落とした時「51 イエスはこれに対して言われた、「それだけでやめなさい」。そして、その僕の耳に手を触れて、おいやしになった。」（22:51）と癒した記事が書かれている。また最後に、「だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」（22:53b）が付け加わっている。ヨハネは、イエスの積極的な姿勢が描かれており、「4 しかしイエスは、自分の身に起ろうとすることをことごとく承知しておられ、進み出て彼らに言われた、「だれを捜しているのか」。5 彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。イエスは彼らに言われた、「わたしが、それである」。イエスを裏切ったユダも、彼らと一緒に立っていた。」（ヨハネ 18:4,5）とあり、ユダの近づき方も変化している。このあとにも、6 イエスが彼らに「わたしが、それである」と言われたとき、彼らはうしろに引きさがって地に倒れた。7 そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスを」と言った。8 イエスは答えられた、「わたしがそれであると、言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人たちを去らせてもらいたい」。9 それは、「あなたが与えて下さった人たちの中のひとりも、わたしは失わなかった」とイエスの言われた言葉が、成就するためである。とあり、弟子たちを逃すことがまず書かれ、このあとに、切りつけたのは、ペテロであると証言し、切りつけられたのは、マルコスだとしている。（ヨハネ 18:10）
- マルコでは「イエスを裏切る者」（PAP-NSM）、マタイは「イエスを裏切った者」（PAP-NSM）で同じ形のようである。
- なぜ、繰り返し、接吻したのだろうか。偽善の表現なのだろうか。先ほどまで会っていたことを考えると、別れの挨拶、本当は愛していることの表現、何かを期待する動作かもしれない。
  - 参考：マタイ 26:14-16, 25, 47-56, 27:3-10（ユダの自殺）使徒 1:18,19 （ユダの自殺）
  - ヨハネにはこのことは書かれていない。
  - 1 コリント 15:5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。
  - 裏切ったことは、四つの福音書で証言しており、間違いないだろう。しかし、死など、その後については、不明なのではないだろうか。一定の期間のあとには、いくつかの伝承が共有されていただろうが。
  - ユダの人生は「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」（14:21）

と表現される人生だったのではないだろうか。

4.91　14:53-65 最高法院で裁判を受ける

53 それから、イエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長、長老、律法学者たちがみな集まってきた。54 ペテロは遠くからイエスについて行って、大祭司の中庭まではいり込み、その下役どもにまじってすわり、火にあたっていた。55 さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするために、イエスに不利な証拠を見つけようとしたが、得られなかった。56 多くの者がイエスに対して偽証を立てたが、その証言が合わなかったからである。57 ついに、ある人々が立ちあがり、イエスに対して偽証を立てて言った、58 「わたしたちはこの人が『わたしは手で造ったこの神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建てるのだ』と言うのを聞きました」。59 しかし、このような証言も互に合わなかった。60 そこで大祭司が立ちあがって、まん中に進み、イエスに聞きただして言った、「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」。61 しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。62 イエスは言われた、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。63 すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「どうして、これ以上、証人の必要があろう。64 あなたがたはこのけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは皆、イエスを死に当るものと断定した。65 そして、ある者はイエスにつばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたいて、「言いあててみよ」と言いはじめた。また下役どもはイエスを引きとって、手のひらでたたいた。

4.91.1　マタイ 26:57-68

57 さて、イエスをつかまえた人たちは、大祭司カヤパのところにイエスを連れて行った。そこには律法学者、長老たちが集まっていた。58 ペテロは遠くからイエスについて、大祭司の中庭まで行き、そのなりゆきを見とどけるために、中にはいって下役どもと一緒にすわっていた。59 さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするため、イエスに不利な偽証を求めようとしていた。60 そこで多くの偽証者が出てきたが、証拠があがらなかった。しかし、最後にふたりの者が出てきて、61 言った、「この人は、わたしは神の宮を打ちこわし、三日の後に建てることができる、と言いました」。62 すると、大祭司が立ち上がってイエスに言った、「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」。63 しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言った、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」。64 イエスは彼に言われた、「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。65 すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「彼は神を汚した。どうしてこれ以上、証人の必要があろう。あなたがたは今このけがし言を聞いた。66 あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは答えて言った、「彼は死に当るものだ」。67 それから、彼らはイエスの顔につばきをかけて、こぶしで打ち、またある人は手のひらでたたいて言った、68 「キリストよ、言いあてて

みよ、打ったのはだれか」。

4.91.2 ルカ 22:54-55; 63-71

54 それから人々はイエスを捕え、ひっぱって大祭司の邸宅へつれて行った。ペテロは遠くからついて行った。55 人々は中庭のまん中に火をたいて、一緒にすわっていたので、ペテロもその中にすわった。

63 イエスを監視していた人たちは、イエスを嘲弄し、打ちたたき、64 目かくしをして、「言いあててみよ。打ったのは、だれか」ときいたりした。65 そのほか、いろいろな事を言って、イエスを愚弄した。66 夜が明けたとき、人民の長老、祭司長たち、律法学者たちが集まり、イエスを議会に引き出して言った、67「あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」。イエスは言われた、「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。68 また、わたしがたずねても、答えないだろう。69 しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」。70 彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。71 すると彼らは言った、「これ以上、なんの証拠がいるか。われわれは直接彼の口から聞いたのだから」。

4.91.3 ヨハネ 18:13-14; 19-24

13 まずアンナスのところに引き連れて行った。彼はその年の大祭司カヤパのしゅうとであった。14 カヤパは前に、ひとりの人が民のために死ぬのはよいことだと、ユダヤ人に助言した者であった。

19 大祭司はイエスに、弟子たちのことやイエスの教のことを尋ねた。20 イエスは答えられた、「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。何事も隠れて語ったことはない。21 なぜ、わたしに尋ねるのか。わたしが彼らに語ったことは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。わたしの言ったことは、彼らが知っているのだから」。22 イエスがこう言われると、そこに立っていた下役のひとりが、「大祭司にむかって、そのような答をするのか」と言って、平手でイエスを打った。23 イエスは答えられた、「もしわたしが何か悪いことを言ったのなら、その悪い理由を言いなさい。しかし、正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか」。24 それからアンナスは、イエスを縛ったまま大祭司カヤパのところへ送った。

マルコによる福音書 14 章 53-65 節福音書対照表

4.91.4 問い

1. 捕縛後の様子はどのように描かれていますか。(53,54)
2. 祭司長と全議会の目的は何で、そのためにどうしますか。(55,56)
3. どのような証言が書かれていますか。(57-59)

4. 大祭司はどのような尋問をし、イエスはどのように答えますか。（60-62）

5. どのような理由から、どのような判断が下されますか。（63-64）

6. 人々はイエスをどのように扱いますか。それは、なぜでしょうか。（65）

4.91.5 参照

- 裁判について：Grok3 beta 応答 [2025.2.21]

  1. 前大祭司アンナス（AD6-15）の家（ヨハネ 18:12-14,19-24）

     – ヨハネ 18:12-15 12 それから一隊の兵卒やその千卒長やユダヤ人の下役どもが、イエスを捕え、縛りあげて、13 まずアンナスのところに引き連れて行った。彼はその年の大祭司カヤパのしゅうとであった。14 カヤパは前に、ひとりの人が民のために死ぬのはよいことだと、ユダヤ人に助言した者であった。シモン・ペテロともうひとりの弟子とが、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いであったので、イエスと一緒に大祭司の中庭にはいった。

  2. カヤパ（AD18-36）とサンヘドリン議員の前での裁き（マタイ 26:57-68, マルコ 14:53-65, ルカ 22:54,63-65）

     – マルコ 14:53-65 最高法院で裁判を受ける（今回の箇所）

  3. サンヘドリンの公式法廷（マタイ 27:1, マルコ 15:1, ルカ 22:66-71）

     – マルコ 15:1 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは長老、律法学者たち、および全議会と協議をこらした末、イエスを縛って引き出し、ピラトに渡した。

  4. 総督ピラトのもとでの裁判（マタイ 27:2,11-14, マルコ 15:1-5, ルカ 23:1-5, ヨハネ 18:28-38）

     – マルコ 15:1-5 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは長老、律法学者たち、および全議会と協議をこらした末、イエスを縛って引き出し、ピラトに渡した。2 ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは、「そのとおりである」とお答えになった。3 そこで祭司長たちは、イエスのことをいろいろと訴えた。4 ピラトはもう一度イエスに尋ねた、「何も答えないのか。見よ、あなたに対してあんなにまで次々に訴えているではないか」。5 しかし、イエスはピラトが不思議に思うほどに、もう何もお答えにならなかった。

  5. ガリラヤ領主ヘロデ・アンティパス（ルカ 23:6-12）

     – ルカ 23:5 ところが彼らは、ますます言いつのってやまなかった、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」。6 ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人かと尋ね、7 そしてヘロデの支配下のものであることを確かめたので、ちょうどこのころ、ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そちらへイエスを送りとどけた。8

ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。9 それで、いろいろと質問を試みたが、イエスは何もお答えにならなかった。10 祭司長たちと律法学者たちとは立って、激しい語調でイエスを訴えた。11 またヘロデはその兵卒どもと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえした。12 ヘロデとピラトとは以前は互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。

6. 総督ピラトでの裁き（マタイ 27:15-26, マルコ 15:6-15, ルカ 23:13-25, ヨハネ 18:39-19:16）

   - マルコ 15:6-15 さて、祭のたびごとに、ピラトは人々が願い出る囚人ひとりを、ゆるしてやることにしていた。7 ここに、暴動を起し人殺しをしてつながれていた暴徒の中に、バラバという者がいた。8 群衆が押しかけてきて、いつものとおりにしてほしいと要求しはじめたので、9 ピラトは彼らにむかって、「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」と言った。10 それは、祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからである。11 しかし祭司長たちは、バラバの方をゆるしてもらうように、群衆を煽動した。12 そこでピラトはまた彼らに言った、「それでは、おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの人は、どうしたらよいか」。13 彼らは、また叫んだ、「十字架につけよ」。14 ピラトは言った、「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」。すると、彼らは一そう激しく叫んで、「十字架につけよ」と言った。15 それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。
   - ルカ 23:13-16 ピラトは、祭司長たちと役人たちと民衆とを、呼び集めて言った、14 「おまえたちは、この人を民衆を惑わすものとしてわたしのところに連れてきたので、おまえたちの面前でしらべたが、訴え出ているような罪は、この人に少しもみとめられなかった。15 ヘロデもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。16 だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」。

- 最高議会（サンヘドリン）[参照]

  - アリマタヤのヨセフは不賛成：ルカ 23:51 この人はユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。彼は議会の議決や行動には賛成していなかった。

  - ニコデモ：ヨハネ 3:1 パリサイ人のひとりで、その名をニコデモというユダヤ人の指導者があった。ヨハネ 7:50 彼らの中のひとりで、以前にイエスに会いにきたことのあるニコデモが、彼らに言った、ヨハネ 19:39 また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。

- 最高議会での裁判

  - ミシュナー（Mishnah）サンヘドリン 4:1 死刑以外の事件は 1 日で終わることもありますが、死刑の場合、裁判官は判決を下す前に一晩待つ必要があります。そのため、死刑事件は安息日や祭日の前日に判決を下すことはありません。安息日や祭日に刑を執行しなければならなくなり、その日に刑を執

行することは安息日や祭日の法律違反とみなされるからです。さらに、金曜日に裁判を行い、安息日に有罪を宣告し、日曜日まで処刑を待たなければならないようなことは避けたかったのです。そのような待ち時間は、死刑に処される人の精神的苦痛を長引かせることになります。[参照]

  - バークレイ：ミシュナーに規定がある。
    * サンヘドリンの公式の集会の場所は切石の間であり、それは神殿の庭の中にあった。またサンヘドリンの決定は、その集会が、その場所で開かれたものでない限り有効ではなかった。法廷は夜間開廷できなかったし、大きな祭りの期間には開けなかった。証拠を集めるときに証人たちは個別に調べられた。そして、証拠が有効になるためには、細部に至るまで一致しなければならなかった。サンヘドリンの個々の成員は、意見を個別的に述べなければならなかった。これは、最若年の人からはじまって、最年長の人にお読んだ。もし、評決が死刑の決定であれば、それを実行する前に一夜を経過させなければならなかった。それは、法廷がその決心と決定を、慈悲深いほうへ帰る機会を持つことができるためであった。つぎからつぎへと、サンヘドリンが自分の規定を破っているのが見られるであろう。
    * それは、夜間に開かれた。そこには個々の人の意見が述べられたという記述がない。死刑を科す前に一夜経過させなかった。ユダヤの当局者はイエスを無きものにしたいと熱心に願ったので、躊躇なく、自分たちの律法を破るという屈辱に堪えた。
  - 民数記 35:30 人を殺した者、すなわち故殺人はすべて証人の証言にしたがって殺されなければならない。しかし、だれもただひとりの証言によって殺されることはない。
  - 申命記 17:6 ふたりの証人または三人の証人の証言によって殺すべき者を殺さなければならない。ただひとりの証人の証言によって殺してはならない。
  - 申命記 19:15 どんな不正であれ、どんなとがであれ、すべて人の犯す罪は、ただひとりの証人によって定めてはならない。ふたりの証人の証言により、または三人の証人の証言によって、その事を定めなければならない。

- 神殿を打ち壊す
  - マルコ 13:2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。
    * マタイ 24:2 そこでイエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたは、これらすべてのものを見ないか。よく言っておく。その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」。
    * ルカ 21:6 6 「あなたがたはこれらのものをながめているが、その石一つでもくずされずに、他の石の上に残ることもなくなる日が、来るであろう」。
  - ヨハネ 2:13-22 13 さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた。14

そして牛、羊、はとを売る者や両替する者などが宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、15 なわでむちを造り、羊も牛もみな宮から追いだし、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし、16 はとを売る人々には「これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」と言われた。17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が、わたしを食いつくすであろう」と書いてあることを思い出した。18 そこで、ユダヤ人はイエスに言った、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」。19 イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。20 そこで、ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。それだのに、あなたは三日のうちに、それを建てるのですか」。21 イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである。22 それで、イエスが死人の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉とを信じた。

  - 使徒 6:13 それから、偽りの証人たちを立てて言わせた、「この人は、この聖所と律法とに逆らう言葉を吐いて、どうしても、やめようとはしません。14 『あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこわし、モーセがわたしたちに伝えた慣例を変えてしまうだろう』などと、彼が言うのを、わたしたちは聞きました」。

- イエスの受難と死と復活の予告
  - マルコ 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、（一回目の予告）
  - マルコ 9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。（二回目の予告）
  - マルコ 10:34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。（三回目の予告）
- イエスの答え
  - マルコ 14:62 62 イエスは言われた、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。62 ・ ,

    ・

    * 詩篇 110:1 主はわが主に言われる、／「わたしがあなたのもろもろの敵を／あなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。
    * ダニエル 7:13 わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、／見よ、人の子のような者が、／天の雲に乗ってきて、／日の老いたる者のもとに来ると、／その前に導かれた。
  - マタイ 26:64 イエスは彼に言われた、「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。64

. . . ’

.

- ルカ 22:70 彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。 70 . ; . .
- イザヤ 53:7 彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、／口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、／また毛を切る者の前に黙っている羊のように、／口を開かなかった。

- 神の子：61 「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか（ ;)」（「ほむべき者（ : blessed, praised）」はここのみ。）
  - マルコ 1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。
  - マルコ 3:11 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。
  - マルコ 5:17 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。
  - マルコ 15:39 イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。
  - マタイ 4:3 すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」。
  - マタイ 4:6 言った、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから」。
  - マタイ 5:9 平和をつくり出す人たちは、さいわいである、／彼らは神の子と呼ばれるであろう。
  - マタイ 8:29 すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。
  - マタイ 14:33 舟の中にいた者たちはイエスを拝して、「ほんとうに、あなたは神の子です」と言った。
  - マタイ 16:16 シモン・ペテロが答えて言った、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」。
  - マタイ 26:63 しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言った、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」。
  - マタイ 27:40 言った、「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。

- マタイ 27:43 彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらうがよい。自分は神の子だと言っていたのだから」。
- マタイ 27:54 百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、「まことに、この人は神の子であった」と言った。
- ルカ 1:35 御使が答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。
- ルカ 4:3 そこで悪魔が言った、「もしあなたが神の子であるなら、この石に、パンになれと命じてごらんなさい」。
- ルカ 4:9 それから悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、「もしあなたが神の子であるなら、ここから下へ飛びおりてごらんなさい。
- ルカ 4:41 悪霊も「あなたこそ神の子です」と叫びながら多くの人々から出ていった。しかし、イエスは彼らを戒めて、物を言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスはキリストだと知っていたからである。
- ルカ 8:28 この人がイエスを見て叫び出し、みまえにひれ伏して大声で言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。お願いです、わたしを苦しめないでください」。
- ルカ 20:36 彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。
- ルカ 22:70 彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。
- ヨハネ 1:12 しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。
- ヨハネ 1:34 わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである」。
- ヨハネ 1:49 ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。
- ヨハネ 5:25 よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。
- ヨハネ 5:28 このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、
- ヨハネ 10:36 父が聖別して、世につかわされた者が、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『あなたは神を汚す者だ』と言うのか。
- ヨハネ 11:4 イエスはそれを聞いて言われた、「この病気は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」。

  - ヨハネ 11:52 ただ国民のためだけではなく、また散在している神の子らを一つに集めるために、死ぬことになっていると、言ったのである。
  - ヨハネ 19:7 ユダヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。
  - ヨハネ 20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。
- キリスト
  - マルコ 1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。
  - マルコ 8:29 そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。
  - マルコ 9:41 だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報いからもれることはないであろう。
  - マルコ 12:35-37 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。36 ダビデ自身が聖霊に感じて言った、／『主はわが主に仰せになった、／あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、／わたしの右に座していなさい』。37 このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。
  - マルコ 13:21,22 そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、『見よ、あそこにいる』と言っても、それを信じるな。22 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。
  - マルコ 14:61 しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。
  - マルコ 15:32 イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」。また、一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。
- 侮辱
  - マルコ 14:65 そして、ある者はイエスにつばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたいて、「言いあててみよ」と言いはじめた。また下役どもはイエスを引きとって、手のひらでたたいた。
    * マタイ 26:67 それから、彼らはイエスの顔につばきをかけて、こぶしで打ち、またある人は手のひらでたたいて言った、68 「キリストよ、言いあててみよ、打ったのはだれか」。
    * ルカ 22:63 イエスを監視していた人たちは、イエスを嘲弄し、打ちたたき、64 目かくしをして、「言いあててみよ。打ったのは、だれか」ときいたりした。65 そのほか、いろいろな事を言って、

イエスを愚弄した。

  - ヨハネ 18:22 イエスがこう言われると、そこに立っていた下役のひとりが、「大祭司にむかって、そのような答をするのか」と言って、平手でイエスを打った。23 イエスは答えられた、「もしわたしが何か悪いことを言ったのなら、その悪い理由を言いなさい。しかし、正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか」。
  - イザヤ 50:5,6 主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは、そむくことをせず、／退くことをしなかった。6 わたしを打つ者に、わたしの背をまかせ、／わたしのひげを抜く者に、わたしのほおをまかせ、／恥とつばきとを避けるために、／顔をかくさなかった。
  - 1 ペテロ 2:20 悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。21 あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。22 キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。23 ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。24 さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。25 あなたがたは、羊のようにさ迷っていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもとに、たち帰ったのである。
- ルカ 22:54-62 およびヨハネ 18:15-18 ペテロ、イエスを知らないという。

4.91.6 記録

- 日時：2025 年 2 月 27 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）2 名

4.91.7 問いについて

1. 捕縛後の様子はどのように描かれていますか。（53,54）
   - 53 それから、イエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長、長老、律法学者たちがみな集まってきた。54 ペテロは遠くからイエスについて行って、大祭司の中庭まではいり込み、その下役どもにまじってすわり、火にあたっていた。
   - [DQ] イエスはどこに連れて行かれますか。そこには誰がいますか。
     - 大祭司、祭司長、長老、律法学者がいる、大祭司の中庭
     - メンバーは最高議会のだが、公式の最高議会の場ではない。

- [DQ] だれが付いていきますか。
  - ペテロが遠くからイエスについて行った。
  - （参照）ヨハネ 18:15 シモン・ペテロともうひとりの弟子とが、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いであったので、イエスと一緒に大祭司の中庭にはいった。
  - （参照）マタイ 26:58 ペテロは遠くからイエスについて、大祭司の中庭まで行き、そのなりゆきを見とどけるために、中にはいって下役どもと一緒にすわっていた。58 Π

.

2. 祭司長と全議会の目的は何で、そのためにどうしますか。（55,56）

- 55 さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするために、イエスに不利な証拠を見つけようとしたが、得られなかった。56 多くの者がイエスに対して偽証を立てたが、その証言が合わなかったからである。
- [A] イエスを死刑にするために、イエスに不利な証拠を見つけようとした
  - （参考）マルコ 14:1,2 さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。2 彼らは、「祭の間はいけない。民衆が騒ぎを起すかも知れない」と言っていた。
- [DQ] 「その証言が合わなかった」とあるが、正当な裁判だったのだろうか。
  - [A] 通常の最高議会（サンヘドリン）は、昼間、神殿で行われ、証人なども丁寧に一人ずつ、誘導尋問などは禁止されていたという。

3. どのような証言が書かれていますか。（57-59）

- 57 ついに、ある人々が立ちあがり、イエスに対して偽証を立てて言った、58 「わたしたちはこの人が『わたしは手で造ったこの神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建てるのだ』と言うのを聞きました」。59 しかし、このような証言も互に合わなかった。
- [DQ] 「わたしは手で造ったこの神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建てるのだ」はどのようなことを証言しているのでしょうか。
  - （参考）マルコ 13:2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。
- [DQ] 他の福音書には、どのようなことが書かれていますか。
  - マタイ 26:61 言った、「この人は、わたしは神の宮を打ちこわし、三日の後に建てることができる、と言いました」。
  - （参照）ヨハネ 2:13-22 19 イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。

4. 大祭司はどのような尋問をし、イエスはどのように答えますか。(60-62)

- 60 そこで大祭司が立ちあがって、まん中に進み、イエスに聞きただして言った、「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」。61 しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。62 イエスは言われた、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。

- [DQ] 大祭司はどのように質問しますか。
  - 「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」
    - マルコ 1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。
    - マルコ 3:11 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。
    - マルコ 5:17 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。
    - マルコ 8:29 そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。
    - マルコ 15:39 イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。
  - [Q] 神の子、キリストは当時どのように考えられていたのか。

- [DQ] イエスはどのように答えますか。
  - 「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。
  - [Q] これは、イエスが、弟子たちや、群衆に教えていたことなのだろうか。

5. どのような理由から、どのような判断が下されますか。(63-64)

- 63 すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「どうして、これ以上、証人の必要があろう。64 あなたがたはこのけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは皆、イエスを死に当るものと断定した。

- [DQ] なぜイエスのことばが死に値することなのでしょうか。
  - [A] 神の冒涜、人を神とした。
  - (参照) レビ 24:16 主の名を汚す者は必ず殺されるであろう。全会衆は必ず彼を石で撃たなければならない。他国の者でも、この国に生れた者でも、主の名を汚すときは殺されなければならない。
  - (参照) ヨハネ 18:31 そこでピラトは彼らに言った、「あなたがたは彼を引き取って、自分たちの律法でさばくがよい」。ユダヤ人らは彼に言った、「わたしたちには、人を死刑にする権限があり

ません」。

  –「人が神にならないために　説教集」荒井献著　新教出版社（ISBN978-4-400-52150-1, 2016.4.1 発行）

6. 人々はイエスをどのように扱いますか。それは、なぜでしょうか。（65）

   - 65 そして、ある者はイエスにつばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたいて、「言いあててみよ」と言いはじめた。また下役どもはイエスを引きとって、手のひらでたたいた。
   - イエスの受難と死と復活の予告
     – マルコ 10:34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。（三回目の予告）

4.91.8　メモ

- イエスは自分が神の子キリストだとは、明確には伝えていなかったように見えるが、ここでは、どのような気持ちで、大祭司の「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」との問いに、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」と肯定的に答えたのだろうか。
  –（ほむべき者）神の子も、キリストも、明確には、定義できないこともあり、ひとによってイメージが異なる。それを独り歩きさせたくなかったのだろう。それが伝えなかった理由なのだろう。
  – ここでは、そのような揺れがあっても、明確に肯定することをよしとしたのだろう。理由は、正確には、わからないが。
- 福音書の差異：「ペテロ、イエスを知らないという」をどこに入れるかで、福音書ごとに差異がある。また、ヨハネでは、まずは、この時の大祭司カヤパのしゅうとのアンナスのところに、まず行ったことが書かれている。「わたしたちはこの人が『わたしは手で造ったこの神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建てるのだ』と言うのを聞きました」（58）の部分が、マタイでは、「この人は、わたしは神の宮を打ちこわし、三日の後に建てることができる、と言いました」（61）とあり、ルカと、ヨハネでは省略されている。マタイには、大祭司が「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」（62）と言った記述が挿入されている。「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」（61）と聞く部分は、マタイでは、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」（63）ルカは「あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」（67）これに対するイエスの応答「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」（62）は、マタイでは、「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」（64）ルカは「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。68 また、わたしがたずねても、答えないだろう。しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」。（68,69）だがそのあとに、彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」が続いている。これに対してヨハネは、 大祭司はイエスに、弟子たちのことやイエスの教のことを尋ねた。イエスは

答えられた、「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。何事も隠れて語ったことはない。なぜ、わたしに尋ねるのか。わたしが彼らに語ったことは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。わたしの言ったことは、彼らが知っているのだから」（18:19-21）とだけ書いており、かなり印象がことなる。

4.92　14:66-72 ペトロ、イエスを知らないと言う

66 ペテロは下で中庭にいたが、大祭司の女中のひとりがきて、67 ペテロが火にあたっているのを見ると、彼を見つめて、「あなたもあのナザレ人イエスと一緒だった」と言った。68 するとペテロはそれを打ち消して、「わたしは知らない。あなたの言うことがなんの事か、わからない」と言って、庭口の方に出て行った。69 ところが、先の女中が彼を見て、そばに立っていた人々に、またもや「この人はあの仲間のひとりです」と言いだした。70 ペテロは再びそれを打ち消した。しばらくして、そばに立っていた人たちがまたペテロに言った、「確かにあなたは彼らの仲間だ。あなたもガリラヤ人だから」。71 しかし、彼は、「あなたがたの話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓いはじめた。72 するとすぐ、にわとりが二度目に鳴いた。ペテロは、「にわとりが二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われたイエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。

4.92.1　マタイ 26:69-75

69 ペテロは外で中庭にすわっていた。するとひとりの女中が彼のところにきて、「あなたもあのガリラヤ人イエスと一緒だった」と言った。70 するとペテロは、みんなの前でそれを打ち消して言った、「あなたが何を言っているのか、わからない」。71 そう言って入口の方に出て行くと、ほかの女中が彼を見て、そこにいる人々にむかって、「この人はナザレ人イエスと一緒だった」と言った。72 そこで彼は再びそれを打ち消して、「そんな人は知らない」と誓って言った。73 しばらくして、そこに立っていた人々が近寄ってきて、ペテロに言った、「確かにあなたも彼らの仲間だ。言葉づかいであなたのことがわかる」。74 彼は「その人のことは何も知らない」と言って、激しく誓いはじめた。するとすぐ鶏が鳴いた。75 ペテロは「鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われたイエスの言葉を思い出し、外に出て激しく泣いた。

4.92.2　ルカ 22:56-62

56 すると、ある女中が、彼が火のそばにすわっているのを見、彼を見つめて、「この人もイエスと一緒にいました」と言った。57 ペテロはそれを打ち消して、「わたしはその人を知らない」と言った。58 しばらくして、ほかの人がペテロを見て言った、「あなたもあの仲間のひとりだ」。するとペテロは言った、「いや、それはちがう」。59 約一時間たってから、またほかの者が言い張った、「たしかにこの人もイエスと一緒だった。この人もガリラヤ人なのだから」。60 ペテロは言った、「あなたの言っていることは、わたしにわからない」。すると、彼がまだ言い終らぬうちに、たちまち、鶏が鳴いた。61 主は振りむいてペテロを

見つめられた。そのときペテロは、「きょう、鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われた主のお言葉を思い出した。62 そして外へ出て、激しく泣いた。

4.92.3 ヨハネ 18:15-18; 25-27

15 シモン・ペテロともうひとりの弟子とが、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いであったので、イエスと一緒に大祭司の中庭にはいった。16 しかし、ペテロは外で戸口に立っていた。すると大祭司の知り合いであるその弟子が、外に出て行って門番の女に話し、ペテロを内に入れてやった。17 すると、この門番の女がペテロに言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではありませんか」。ペテロは「いや、そうではない」と答えた。18 僕や下役どもは、寒い時であったので、炭火をおこし、そこに立ってあたっていた。ペテロもまた彼らに交じり、立ってあたっていた。

25 シモン・ペテロは、立って火にあたっていた。すると人々が彼に言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではないか」。彼はそれをうち消して、「いや、そうではない」と言った。26 大祭司の僕のひとりで、ペテロに耳を切りおとされた人の親族の者が言った、「あなたが園であの人と一緒にいるのを、わたしは見たではないか」。27 ペテロはまたそれを打ち消した。するとすぐに、鶏が鳴いた。

マルコによる福音書 14 章 66-72 節福音書対照表

マルコによる福音書 14 章 26-31, 66-72 節福音書対照表

4.92.4 問い

1. 14 章 12 節から 54 節を、十二弟子の一人であるペテロに焦点をあてて復習しましょう。
2. いつ、どのような場所で、このことは起こりますか。
3. ペテロがイエスを否認する箇所は、どのように記されていますか。
4. ペテロは、なぜこのように、答えたのでしょうか。
5. 他の福音書では、どのように記されていますか。
6. イエスの言葉を思い出したペテロの心のうちを想像してみましょう。(72)

4.92.5 参照

- ペトロ離反の予告：マルコ 14:26 彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。27 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。29 するとペテロはイエスに言った、「たとい、みんなの者がつ

まずいても、わたしはつまずきません」。30 イエスは言われた、「あなたによく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そう言うあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」。31 ペテロは力をこめて言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。みんなの者もまた、同じようなことを言った。[ペトロの離反を予告する：引用]

  - マタイ 26:31-35　31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。32 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。33 するとペテロはイエスに答えて言った、「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」。34 イエスは言われた、「よくあなたに言っておく。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。35 ペテロは言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。弟子たちもみな同じように言った。
  - ルカ 22:31-34　31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。33 シモンが言った、「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」。34 するとイエスが言われた、「ペテロよ、あなたに言っておく。きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。
  - ヨハネ 13:36-38　36 シモン・ペテロがイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのですか」。イエスは答えられた、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになろう」。37 ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。38 イエスは答えられた、「わたしのために命を捨てると言うのか。よくよくあなたに言っておく。鶏が鳴く前に、あなたはわたしを三度知らないと言うであろう」。

- 12 弟子について：参照
- ChatGPT [カヤパ・アンナスの館について]・[広間と中庭の位置関係・鶏・ガリラヤ訛]
- バークレイ『マルコ福音書』（p.423）ローマの夜は午後 6 時から午前 6 時までを四つの更にわけている。第三更の終わり、午前 3 時に番兵が交代した。番兵が交代した時に、ラテン語で、鶏鳴をあらわすガリキニウムと呼ばれるラッパが吹かれた。おそらく、ペテロが第三番目の否認をしたとき、ラッパの澄んだ調べが静かな都になりわたり、ペテロの耳を打った。そしてペテロは想い起こし、悲しみに沈んだのだろう。
- バークレイ『ヨハネ福音書』（p.306-7）ユダヤ教の祭儀律法によれば、聖都内に鶏を飼うことは正当なことではなかった。もっとも、その律法が実際に守られていたかどうかについては定かではない。さらに、鶏が鳴くということは、決して決まっていることではない。他方、ローマにはある軍隊の精度があった。夜は四つの当直時間に区分され、その区分は午後 6 時から真夜中の 12 時まで、真夜中の 12 時から午前 3 時まで、午前 3 時から午前 6 時までであった。第三の当直時間が終わると、番兵が交替し、番兵の交替を知らせるために、午前 3 時にらっぱが吹かれた。らっぱの音はラテン語でガリキニウム、ギリシャ語でアレクトロフォニアと呼ばれ、どちらも鶏の鳴き声を意味する。イエスは、ペテロにこう言ったのかもしれない。「鶏の鳴き声であるらっぱの音がする前に、おまえはわたしを三度いなむであろう。」と。エルサレムの住民は、みな、午前 3 時のらっぱの音を知っていたに違いない。その夜も、それは町中にひびきわた

り、それが鳴ったとき、ペテロは思い出したのである。

- ナザレ人イエス
  - マルコ 1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。
  - マルコ 1:24 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。
    - ルカ 4:34 「ああ、ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。
  - マルコ 10:47 ところが、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出した。
    - ルカ 18:37 ところが、ナザレのイエスがお通りなのだと聞かされたので、
  - マルコ 14:67 ペテロが火にあたっているのを見ると、彼を見つめて、「あなたもあのナザレ人イエスと一緒だった」と言った。
    - マタイ 26:71 そう言って入口の方に出て行くと、ほかの女中が彼を見て、そこにいる人々にむかって、「この人はナザレ人イエスと一緒だった」と言った。
  - マルコ 16:6 するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。
  - マタイ 2:23 ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちによって、「彼はナザレ人と呼ばれるであろう」と言われたことが、成就するためである。
  - マタイ 4:13 そしてナザレを去り、ゼブルンとナフタリとの地方にある海べの町カペナウムに行って住まわれた。
  - マタイ 21:11 そこで群衆は、「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである」と言った。
  - ルカ 1:26 六か月目に、御使ガブリエルが、神からつかわされて、ナザレというガリラヤの町の一処女のもとにきた。
  - ルカ 2:4 ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。
  - ルカ 2:39 両親は主の律法どおりすべての事をすませたので、ガリラヤへむかい、自分の町ナザレに帰った。
  - ルカ 2:51 それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになった。母はこれらの事をみな心に留めていた。
  - ルカ 4:16 それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。
  - ルカ 24:19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、
  - ヨハネ 1:45,46 このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。46 ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、なんのよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。

- ヨハネ 18:5 彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。イエスは彼らに言われた、「わたしが、それである」。イエスを裏切ったユダも、彼らと一緒に立っていた。
- ヨハネ 18:7 そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスを」と言った。
- ヨハネ 19:19 ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。
- 使徒 2:22, 3:6, 4:10, 6:14, 10:38, 22:8, 24:9.

4.92.6 記録

- 日時：2025 年 3 月 6 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）1 名

4.92.7 問いについて

1. 14 章 12 節から 54 節を、十二弟子の一人であるペテロに焦点をあてて復習しましょう。

    1. 裏切ろうとしている：14:18,19 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。19 弟子たちは心配して、ひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。

    2. パンと杯：14:22-24 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。23 また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。24 イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。

    3. 否認予告：14:27,29-31 27 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。29 するとペテロはイエスに言った、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」。30 イエスは言われた、「あなたによく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そう言うあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」。31 ペテロは力をこめて言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。みんなの者もまた、同じようなことを言った。

    4. ゲッセマネ：14:32-34,37-38,40 32 さて、一同はゲツセマネという所にきた。そしてイエスは弟子たちに言われた、「わたしが祈っている間、ここにすわっていなさい」。33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。37 それから、きてごら

んになると、弟子たちが眠っていたので、ペテロに言われた、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったのか。38 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。40 またきてごらんになると、彼らはまだ眠っていた。その目が重くなっていたのである。そして、彼らはどうお答えしてよいか、わからなかった。

5. イエスの逮捕時：14:47 すると、イエスのそばに立っていた者のひとりが、剣を抜いて大祭司の僕に切りかかり、その片耳を切り落した。50 弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。

6. 大祭司の庭：14:54 ペテロは遠くからイエスについて行って、大祭司の中庭まではいり込み、その下役どもにまじってすわり、火にあたっていた。

2. いつ、どのような場所で、このことは起こりますか。

- [DQ] このことはいつ起こりますか。
  - 53 それから、イエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長、長老、律法学者たちがみな集まってきた。
  - 大祭司宅での裁判時
  - [Q] ペトロはどのようにして門の中に入りますか。
- [DQ] ペテロはどこにいますか。
  - 54 ペテロは遠くからイエスについて行って、大祭司の中庭まではいり込み、その下役どもにまじってすわり、火にあたっていた。
  - 66 ペテロは下で中庭にいたが、大祭司の女中のひとりがきて、
- [DQ] このとき、イエスは、何をしていますか。
  - 偽証をたてられ、大祭司に、問い詰められていた。
  - 62 すると、大祭司が立ち上がってイエスに言った、「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」。63 しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言った、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」。64 イエスは彼に言われた、「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。65 すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「彼は神を汚した。どうしてこれ以上、証人の必要があろう。あなたがたは今このけがし言を聞いた。66 あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは答えて言った、「彼は死に当るものだ」。67 それから、彼らはイエスの顔につばきをかけて、こぶしで打ち、またある人は手のひらでたたいて言った、68 「キリストよ、言いあててみよ、打ったのはだれか」。

  - すべて見えてはいなかったかもしれないが、イエスが侮辱されている、まさにそのときに、「あなたがたの話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓いはじめた。のかもしれない。

3. ペテロがイエスを否認する箇所は、どのように記されていますか。

- １回目 66 ペテロは下で中庭にいたが、大祭司の女中のひとりがきて、67 ペテロが火にあたっているのを見ると、彼を見つめて、「あなたもあのナザレ人イエスと一緒だった」と言った。68 するとペテロはそれを打ち消して、「わたしは知らない。あなたの言うことがなんの事か、わからない」と言って、庭口の方に出て行った。
  -「あのナザレ人イエス」
- ２回目 69 ところが、先の女中が彼を見て、そばに立っていた人々に、またもや「この人はあの仲間のひとりです」と言いだした。70a ペテロは再びそれを打ち消した。
- ３回目 70b しばらくして、そばに立っていた人たちがまたペテロに言った、「確かにあなたは彼らの仲間だ。あなたもガリラヤ人だから」。71 しかし、彼は、「あなたがたの話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓いはじめた。

4. ペテロは、なぜこのように、答えたのでしょうか。

- [DQ] ペテロの否認をみなさんは、どう考えますか。
  - ある程度、勇気のいる行動をしている。
  -「しかし、彼は、『あなたがたの話しているその人のことは何も知らない』と言い張って、激しく誓いはじめた。」（71）の否認は尋常ではない。

5. 他の福音書では、どのように記されていますか。

- マタイ：２回目は他の女中 26:71 そう言って入口の方に出て行くと、ほかの女中が彼を見て、そこにいる人々にむかって、「この人はナザレ人イエスと一緒だった」と言った。
  - 予告時は弟子たち皆に語られている。　31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。32 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。
- ルカ：[１回目] 56 すると、ある女中が、彼が火のそばにすわっているのを見、彼を見つめて、「この人もイエスと一緒にいました」と言った。57 ペテロはそれを打ち消して、「わたしはその人を知らない　　,　　(woman).」と言った。[2 回目] 22:58 しばらくして、ほかの人がペテロを見て言った、「あなたもあの仲間のひとりだ」。するとペテロは言った、「いや、それはちがう　　,　　.」。[3 回目] 22:59 約一時間たってから、またほかの者が言い張った、「たしかにこの人もイエスと一緒だっ

た。この人もガリラヤ人なのだから」。60 ペテロは言った、「あなたの言っていることは、わたしにわからない　　,　　.」。

  –「主は振りむいてペテロを見つめられた。」（22:61）が印象的。[56 節、彼を見つめてと対応]

  – 予告時のことば参照 31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

  – ペテロに復活のイエスが現れる：ルカ 24:33,34 そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、34 「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなさった」と言っていた。

- ヨハネ：18:16,17 1 回目：しかし、ペテロは外で戸口に立っていた。すると大祭司の知り合いであるその弟子が、外に出て行って門番の女に話し、ペテロを内に入れてやった。17 すると、この門番の女がペテロに言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではありませんか」。ペテロは「いや、そうではない」と答えた。2 回目：25 シモン・ペテロは、立って火にあたっていた。すると人々が彼に言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではないか」。彼はそれをうち消して、「いや、そうではない」と言った。 3 回目：26 大祭司の僕のひとりで、ペテロに耳を切りおとされた人の親族の者が言った、「あなたが園であの人と一緒にいるのを、わたしは見たではないか」。27 ペテロはまたそれを打ち消した。するとすぐに、鶏が鳴いた。

  – 予告時には、36 シモン・ペテロがイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのですか」。イエスは答えられた、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになろう」。37 ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。

6. イエスの言葉を思い出したペテロの心のうちを想像してみましょう。（72）

- 72 するとすぐ、にわとりが二度目に鳴いた。ペテロは、「にわとりが二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われたイエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。

- [DQ] ペテロは何を学んだでしょうか。

- [DQ] あなたは、ここから何を学びますか。

- 直近のことから、逃げてしまったこと、つるぎで切りつけた時のこと、ゲッセマネでのイエスの祈りと、寝てしまった自分、イエスのことば、イエスの否認予告、その他さまざまな教え

4.92.8 メモ

- 福音書の差異：マルコとマタイは似ているが、マタイでは、強化されている点がいくつかある。マルコでは、二回目も同じ女中（先の女中）とあるが、マタイでは、「ほかの女中」としている。これは、二人または三人の証言がたいせつであることと関係しているのかもしれない。一方、マルコでは「にわとりが二度目に鳴いた」と書かれているが、マタイでは「するとすぐ鶏が鳴いた。」としている。最後は、マルコでは「イエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。」となっているが、その最後の部分は、「外に出て激しく泣いた。」としている。ルカは、多少、マタイに近いように思われる。ただし、マルコでが単に「そう言って入口の方に出て行くと」とあるところが「約一時間たってから」が挿入され、さらに、「主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、『きょう、鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われた主のお言葉を思い出した。」が挿入されている。ヨハネは情報が多い。まず、なぜ、ペテロが中庭に入れたかについての説明があり、さらに、女中は、門番であったことも書かれている。火についても、炭火とあり、そこにいる人の説明もかかれている。また、二回目と三回目の間には、大祭司アンナスの尋問が挿入されている。
- 問い：
  - 四つの福音書がみな、このことを伝えているが、すべて微妙に異なっている。これは、何を意味しているのだろうか。
  - 十分、勇気のいる行動をしているようにも見えるが、なぜ、ペテロは、イエスを知らないと言ってしまうのだろうか。
  - ペテロは、このあとどのように、立ち直ったのだろうか。

4.93 15:1-5 ピラトから尋問される

1 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは長老、律法学者たち、および全議会と協議をこらした末、イエスを縛って引き出し、ピラトに渡した。2 ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは、「そのとおりである」とお答えになった。3 そこで祭司長たちは、イエスのことをいろいろと訴えた。4 ピラトはもう一度イエスに尋ねた、「何も答えないのか。見よ、あなたに対してあんなにまで次々に訴えているではないか」。5 しかし、イエスはピラトが不思議に思うほどに、もう何もお答えにならなかった。

4.93.1 マタイ 27:1-2; 11-14

1 夜が明けると、祭司長たち、民の長老たち一同は、イエスを殺そうとして協議をこらした上、2 イエスを縛って引き出し、総督ピラトに渡した。

11 さて、イエスは総督の前に立たれた。すると総督はイエスに尋ねて言った、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは「そのとおりである」と言われた。12 しかし、祭司長、長老たちが訴えている間、イエスはひと言もお答えにならなかった。13 するとピラトは言った、「あんなにまで次々に、あなたに不利

な証言を立てているのが、あなたには聞えないのか」。14 しかし、総督が非常に不思議に思ったほどに、イエスは何を言われても、ひと言もお答えにならなかった。

4.93.2 ルカ 23:1-5

1 群衆はみな立ちあがって、イエスをピラトのところへ連れて行った。2 そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。3 ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは「そのとおりである」とお答えになった。4 そこでピラトは祭司長たちと群衆とにむかって言った、「わたしはこの人になんの罪もみとめない」。5 ところが彼らは、ますます言いつのってやまなかった、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」。

4.93.3 ヨハネ 18:28-38

28 それから人々は、イエスをカヤパのところから官邸につれて行った。時は夜明けであった。彼らは、けがれを受けないで過越の食事ができるように、官邸にはいらなかった。29 そこで、ピラトは彼らのところに出てきて言った、「あなたがたは、この人に対してどんな訴えを起すのか」。30 彼らはピラトに答えて言った、「もしこの人が悪事をはたらかなかったなら、あなたに引き渡すようなことはしなかったでしょう」。31 そこでピラトは彼らに言った、「あなたがたは彼を引き取って、自分たちの律法でさばくがよい」。ユダヤ人らは彼に言った、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」。32 これは、ご自身がどんな死にかたをしようとしているかを示すために言われたイエスの言葉が、成就するためである。33 さて、ピラトはまた官邸にはいり、イエスを呼び出して言った、「あなたは、ユダヤ人の王であるか」。34 イエスは答えられた、「あなたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか」。35 ピラトは答えた、「わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか」。36 イエスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。37 そこでピラトはイエスに言った、「それでは、あなたは王なのだな」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」38 ピラトはイエスに言った、「真理とは何か」。こう言って、彼はまたユダヤ人の所に出て行き、彼らに言った、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない。

マルコによる福音書 15 章 1-5 節福音書対照表

4.93.4 問い

1. 祭司長たちと全議会のもとでの審問について復習しましょう。(14:53-65)

2. 夜が明けると、どのようなことが起こりますか。(1)
3. ピラトはイエスにどんな尋問をし、イエスはそれにどのように答えますか。(2)
4. 祭司長たちは、どのようなことを訴えたでしょう。(3)
5. ピラトは、そして、イエスはどうしますか。(4,5)
6. 他の福音書からは、どのようなことがわかりますか。

4.93.5 参照

- 裁判について：Grok3 beta 応答 [2025.2.21]
- マタイでは、ユダ、自殺するが挿入されている（マタイ 27:3-10、自殺については他に使徒 1:18,19）
- ピラト：ChatGPT [参照リンク] (2025.3.13)
  - (榊原康夫『マタイ福音書講解（下)』p.290）ローマの属国ユダヤは、ヘロデ大王の死後、その子らに分割されていましたが、南にある狭義のユダヤ地方は、領主ヘロデ・アケラオが暴政をしいたため退けられると、ローマ帝国スリヤ領総督配下のユダヤ地方総督直轄地となりました。それが、ここにで出てくる「総督」でピラトは 26 年から 36 年まで勤めた第 5 代目総督です。後の総督では、使徒行伝に、第 11 代目のペリクス（23:24）や、その次のポルキオ・フェスト（24:27）などが出てきます。これらのユダヤ地方総督は、平素はカイザリヤに駐在しましたが（23:23）祭りの時などには、エルサレムに来て、治安を守りました。ピラトがエルサレムにいたのも、過越祭の治安のためです。
  - かなりの乱暴者：ちょうどその時、ある人々がきて、ピラトがガリラヤ人たちの血を流し、それを彼らの犠牲の血に混ぜたことを、イエスに知らせた。(ルカ 13:1）記録に残っていない。
  - カイザリヤからローマ軍をエルサレムに差し向け、カイザルの肖像のついて軍旗を強引に、エルサレムに立て、ユダヤの律法を廃止しようとして激しく国民と対立。(ユダヤ人古代史 18:3:1、ユダヤ戦記 2:9:2-3）
  - 宮の献金で、エルサレムに水路を引こうとして市民と対立し、大勢のユダヤ人を虐殺。(ユダヤ人古代史 18:3: 2、ユダヤ戦記 2:9:4）
  - 謀反を企ててもいないサマリヤ市民を騎兵や歩兵をもって虐殺。(ユダヤ人古代史 18:4:2）
  - 妻：プロクラまたはクラウディア・プログラといい、神を敬う女、ユダヤ教改宗者であったと言われている。
- 生と死に関する裁判権
  - 剣の権限：ユース・グラデイイ、ローマに

  - タルムード：生と死に関わることの裁判権は、神殿崩壊の 40 年前に、イスラエルから剥奪された。
  - 初代執政官：コポニウス、カエサルから生死の権限をその手に委ねられた（ユダヤ戦記）
- ルカでは、ヘロデから尋問される（23:6-12）
  - 6 ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人かと尋ね、7 そしてヘロデの支配下のものであることを確かめたので、ちょうどこのころ、ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そちらへイエスを送りとどけた。8 ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。9 それで、いろいろと質問を試みたが、イエスは何もお答えにならなかった。10 祭司長たちと律法学者たちとは立って、激しい語調でイエスを訴えた。11 またヘロデはその兵卒どもと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえした。12 ヘロデとピラトとは以前は互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。
- 1 テモテ 6:12-14 信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである。13 わたしはすべてのものを生かして下さる神のみまえと、またポンテオ・ピラトの面前でりっぱなあかしをなさったキリスト・イエスのみまえで、あなたに命じる。14 わたしたちの主イエス・キリストの出現まで、その戒めを汚すことがなく、また、それを非難のないように守りなさい。
- さまざまな沈黙について（ウイリアム・バークレイ）
  - 驚きと、賛美の沈黙ー拍手は場違い
  - 軽蔑の沈黙ー答えるに値しない
  - 恐怖の沈黙ー話すことを恐れて
  - 傷ついた心の沈黙ー深い悲しみ
  - 悲劇の沈黙ー語るべきことがない。
    - イエスは、ご自身とユダヤの指導者との間に橋渡しするものがないのをご存知であった。イエスはピラトのなかには、ご自分が究極的に訴え得るもののないのを知っておられた。イエスは医師を伝える方法が破られているのを知っておられた。ユダヤ人たちの憎しみは、鉄のカーテンであり、いかなる言葉も通すことがなかった。群衆に向かったピラトの臆病は、言葉を通さない壁であった。イエスでさえ、語ることができないというような状態に人間の心がなるとは、恐ろしいことである。神がわれわれをそのようなことから救ってくださるように。
- エルサレム入城の記述
  - 11:9「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」は、ユダヤ人の王を想起させる。

  - （参照）この箇所で、マタイは、「シオンの娘に告げよ、／見よ、あなたの王がおいでになる、／柔和なおかたで、ろばに乗って、／くびきを負うろばの子に乗って」。（マタイ 21:5）とゼカリヤ 9:9 を引用している。
  - （参照）ルカ 19:38-40「主の御名によってきたる王に、／祝福あれ。天には平和、／いと高きところには栄光あれ」。39 ところが、群衆の中にいたあるパリサイ人たちがイエスに言った、「先生、あなたの弟子たちをおしかり下さい」。40 答えて言われた、「あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」。
  - （参照）ヨハネ 12:12 その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、13 しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、／「ホサナ、／主の御名によってきたる者に祝福あれ、／イスラエルの王に」。14 イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは 15 「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王が／ろばの子に乗っておいでになる」／と書いてあるとおりであった。16 弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。
- イエスを「王」とする
  - マルコ 15:9-13 ピラトは彼らにむかって、「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」と言った。10 それは、祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからである。11 しかし祭司長たちは、バラバの方をゆるしてもらうように、群衆を煽動した。12 そこでピラトはまた彼らに言った、「それでは、おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの人は、どうしたらよいか」。13 彼らは、また叫んだ、「十字架につけよ」。
  - マルコ 15:18 「ユダヤ人の王、ばんざい」と言って敬礼をしはじめた。
  - マルコ 15:26 イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。
  - ヨハネ 19:19-22 19 ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。20 イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。21 ユダヤ人の祭司長たちがピラトに言った、「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」。22 ピラトは答えた、「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」。
  - 使徒 17:7 その人たちをヤソンが自分の家に迎え入れました。この連中は、みなカイザルの詔勅にそむいて行動し、イエスという別の王がいるなどと言っています」。（テサロニケで）
- 国民を惑わす罪・扇動（ルカ 23:2,5）
  - そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」(ルカ 23:2)

  - （ユダヤ人の王であるかについて肯定したあと）4 そこでピラトは祭司長たちと群衆とにむかって言った、「わたしはこの人になんの罪もみとめない」。5 ところが彼らは、ますます言いつのってやまなかった、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」。（ルカ 23:4,5）とある。
  - 使徒 16:20 それから、ふたりを長官たちの前に引き出して訴えた、「この人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、
  - 使徒 17:6 しかし、ふたりが見つからないので、ヤソンと兄弟たち数人を、市の当局者のところに引きずって行き、叫んで言った、「天下をかき回してきたこの人たちが、ここにもはいり込んでいます。
  - 使徒 21:38 では、もしかおまえは、先ごろ反乱を起した後、四千人の刺客を引き連れて荒野へ逃げて行ったあのエジプト人ではないのか」。
  - 使徒 24:5 さて、この男は、疫病のような人間で、世界中のすべてのユダヤ人の中に騒ぎを起している者であり、また、ナザレ人らの異端のかしらであります。
- イエスについての証言
  - 1 テモテ 6:13 わたしはすべてのものを生かして下さる神のみまえと、またポンテオ・ピラトの面前でりっぱなあかしをなさったキリスト・イエスのみまえで、あなたに命じる。
- アリマタヤのヨセフ
  - 43 アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。44 ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。45 そして、百卒長から確かめた上、死体をヨセフに渡した。46 そこで、ヨセフは亜麻布を買い求め、イエスをとりおろして、その亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納め、墓の入口に石をころがしておいた。（マルコ 15:43）
    * 57 夕方になってから、アリマタヤの金持で、ヨセフという名の人がきた。彼もまたイエスの弟子であった。58 この人がピラトの所へ行って、イエスのからだの引取りかたを願った。そこで、ピラトはそれを渡すように命じた。59 ヨセフは死体を受け取って、きれいな亜麻布に包み、60 岩を掘って造った彼の新しい墓に納め、そして墓の入口に大きい石をころがしておいて、帰った。（マタイ 27:57）
    * 50 ここに、ヨセフという議員がいたが、善良で正しい人であった。51 この人はユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。彼は議会の議決や行動には賛成していなかった。52 この人がピラトのところへ行って、イエスのからだの引取り方を願い出て、53 それを取りおろして亜麻布に包み、まだだれも葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた。54 この日は準備の日であって、安息日が始まりかけていた。（ルカ 23:50-54）

* 38 そののち、ユダヤ人をはばかって、ひそかにイエスの弟子となったアリマタヤのヨセフという人が、イエスの死体を取りおろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトはそれを許したので、彼はイエスの死体を取りおろしに行った。39 また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。40 彼らは、イエスの死体を取りおろし、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料を入れて亜麻布で巻いた。（ヨハネ 19:38-40）

4.93.6　記録

- 日時：2025 年 3 月 13 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）2 名、参加（遠隔）4 名

4.93.7　問いについて

1. 祭司長たちと全議会のもとでの審問について復習しましょう。（14:53-65）
   - （イエスに不利な証拠をみつけ死刑にしようとする）55 祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするために、イエスに不利な証拠を見つけようとしたが、得られなかった。
   - （イエスは沈黙を守る）60 そこで大祭司が立ちあがって、まん中に進み、イエスに聞きただして言った、「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」。61 しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。
   - （神の子・キリストか。わたしがそれである。）61 大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。62 イエスは言われた、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。
   - （この汚しごとは、死に値する）63 すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「どうして、これ以上、証人の必要があろう。64 あなたがたはこのけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは皆、イエスを死に当るものと断定した。
     - 議決のようなことは書かれていない。「彼らは皆」ともあり、雰囲気としては、同意していただろう。
   - （嘲笑をあびる）65 そして、ある者はイエスにつばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたいて、「言いあててみよ」と言いはじめた。また下役どもはイエスを引きとって、手のひらでたたいた。
     - ヨハネ（18:3,12）によると、ローマ兵もいたように書かれている。
2. 夜が明けると、どのようなことが起こりますか。（1）
   - 1 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは長老、律法学者たち、および全議会と協議をこらした末、イエス

を縛って引き出し、ピラトに渡した。

- [DQ] 14:55 にも「祭司長と全議会」と書かれているが、今回とは異なるのだろうか。
  - おそらく、正式な会議となったのだろう。または、議決のような決定はされていなかったのかもしれない。祭りの間だから、通常は、開催されなかったと思われる。
- [DQ] なぜ、全議会は、イエスをピラトに引き渡したのでしょうか。
  -「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」。（ヨハネ 18:32）
  - 正式な決定ではなく、ピラトに決定させる方が、一般群衆のたまえ安全だと考えたかもしれない。
  -（参考）ルカ 23:50 ここに、ヨセフという議員がいたが、善良で正しい人であった。51 この人はユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。彼は議会の議決や行動には賛成していなかった。

3. ピラトはイエスにどんな尋問をし、イエスはそれにどのように答えますか。(2)

- 2 ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは、「そのとおりである」とお答えになった。
- [DQ] イエスは、なぜ、「あなたがユダヤ人の王であるか」にたいして、「そのとおりである」と答えたのだろうか。
  - イエスは、自分を、ユダヤ人の王だと認識していたのだろうか。
  -（参照）エルサレム入場の記述、11:9「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。10 今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」は、ユダヤ人の王を想起させる。他の、福音書も参照。マタイ 21:5、ルカ 19:38-40、ヨハネ 12:12-16。
- [DQ] イエスが十字架にかかる罪状は何なのですか。
  - 不明。ただし、15:10 ピラトはねたみと見ている。（これは罪状ではない）
  - マルコ 15:26 イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。（ヨハネ 19:19-22 参照）

4. 祭司長たちは、どのようなことを訴えたでしょう。(3)

- 3 そこで祭司長たちは、イエスのことをいろいろと訴えた。
- [DQ] 全議会と、ピラトのもとの審議はなにが違いますか。（確認）
  - 総督ピラトのローマ法廷では、神の子、キリストだとしたような、冒涜罪で死刑にすることは難しい。

- [DQ] 王であることを認めただけでは不十分なのでしょうか。なにか、不満があったのでしょうか。
  - 困惑もあったかもしれない。
  - （参照）ヨハネ 19:21 ユダヤ人の祭司長たちがピラトに言った、「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」。

5. ピラトは、そして、イエスはどうしますか。（4,5）
   - 4 ピラトはもう一度イエスに尋ねた、「何も答えないのか。見よ、あなたに対してあんなにまで次々に訴えているではないか」。5 しかし、イエスはピラトが不思議に思うほどに、もう何もお答えにならなかった。
   - [DQ] イエスの沈黙の理由はなんだろうか。
     - 説明して理解されることを目指していなかった。
   - [DQ] イエスは、どう考えていたのでしょうか。
     - 罪を負うこと以外は、考えられなかったのか。そこに御心があると考えていたのか。
     - [Q] イエスは、ピラトを、そして、イエスを訴えている人たちを愛していなかったのか。
       * おそらくそうではない。ただ、説得すること、理解を得ることが愛することではないのだろう。
6. 他の福音書からは、どのようなことがわかりますか。
   - [DQ] マタイは、マルコに似ていますが、加えてどのようなことが書かれていますか。
     -「イエスを殺そうとして」（マタイ 27:1）が挿入されている。
   - [DQ] ルカは何を伝えていますか。
     - そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」(ルカ 23:2)
     - （ユダヤ人の王であるかについて肯定したあと）4 そこでピラトは祭司長たちと群衆とにむかって言った、「わたしはこの人になんの罪もみとめない」。5 ところが彼らは、ますます言いつのってやまなかった、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」。（ルカ 23:4,5）とある。
   - [DQ] ヨハネは何を伝えていますか。
     - 彼らは、けがれを受けないで過越の食事ができるように、官邸にはいらなかった。（ヨハネ 18:28）とある。

– （死刑が目的であることについて）29 そこで、ピラトは彼らのところに出てきて言った、「あなたがたは、この人に対してどんな訴えを起すのか」。30 彼らはピラトに答えて言った、「もしこの人が悪事をはたらかなかったなら、あなたに引き渡すようなことはしなかったでしょう」。31 そこでピラトは彼らに言った、「あなたがたは彼を引き取って、自分たちの律法でさばくがよい」。ユダヤ人らは彼に言った、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」。32 これは、ご自身がどんな死にかたをしようとしているかを示すために言われたイエスの言葉が、成就するためである。（ヨハネ 18:29-32）

– （ピラトとイエスのやりとり）35 ピラトは答えた、「わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか」。36 イエスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。37 そこでピラトはイエスに言った、「それでは、あなたは王なのだな」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」38 ピラトはイエスに言った、「真理とは何か」。こう言って、彼はまたユダヤ人の所に出て行き、彼らに言った、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない。（ヨハネ 18:35-38）

4.93.8 メモ

- 福音書の差異：マタイは、マルコに非常に近い。1 節に「イエスを殺そうとして」と目的を追加。マルコでは、4 節で、ピラトに「何も答えないのか。見よ、あなたに対してあんなにまで次々に訴えているではないか」と言わせているが、3 節の「そこで祭司長たちは、イエスのことをいろいろと訴えた。」は、マタイでは、削除し、「あんなにまで次々に、あなたに不利な証言を立てているのが、あなたには聞えないのか」としている。細かなことだが、マルコではピラトとだけ書かれているが、マタイでは、総督ピラトとし、そのあとの総督としている。マルコは、ピラトが総督であることは、だれでも知っていると想定しているのだろう。それだけ証言としては古いと思われる。ルカでは、訴えた内容として、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」（2）としている。また、ピラトに、「わたしはこの人になんの罪もみとめない」と言わせ、これに対して、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」とピラトの厳しい判決を誘導しているように見える。ヨハネには、もっと情報が多い。まず、ピラトのところを、官邸とよび、「けがれを受けないで過越の食事ができるように、官邸にはいらなかった。」としている。過越の食事は、この晩に食べると想定している。さらに、死刑を要求していることを、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と主張し、律法で裁く内容とは区別しているように見える。さらに、「あなたは、ユダヤ人の王であるか」の問いについても、最後には、「それでは、あなたは王なのだな」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。」としているが、その前に、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従

っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。を付け加え、さらに、ユダヤ人の王であることを肯定した後にも、わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」と付け加え、ピラトに「真理とは何か」と問わせ、さらに「わたしには、この人になんの罪も見いだせない。」と言わせている。いずれにしても、かなり詳細になっている。

- 問い：
  - なぜ、全議会は、ピラトにイエスを引き渡したのだろうか。
  - ピラトの問い「あなたはユダヤ人の王であるか」に対して、なぜイエスは肯定したのだろうか。（共観福音書とヨハネを比較）

4.94 15:6-15 死刑の判決を受ける

6 さて、祭のたびごとに、ピラトは人々が願い出る囚人ひとりを、ゆるしてやることにしていた。7 ここに、暴動を起し人殺しをしてつながれていた暴徒の中に、バラバという者がいた。8 群衆が押しかけてきて、いつものとおりにしてほしいと要求しはじめたので、9 ピラトは彼らにむかって、「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」と言った。10 それは、祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからである。11 しかし祭司長たちは、バラバの方をゆるしてもらうように、群衆を煽動した。12 そこでピラトはまた彼らに言った、「それでは、おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの人は、どうしたらよいか」。13 彼らは、また叫んだ、「十字架につけよ」。14 ピラトは言った、「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」。すると、彼らは一そう激しく叫んで、「十字架につけよ」と言った。15 それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。

4.94.1 マタイ 27:15-26

15 さて、祭のたびごとに、総督は群衆が願い出る囚人ひとりを、ゆるしてやる慣例になっていた。16 ときに、バラバという評判の囚人がいた。17 それで、彼らが集まったとき、ピラトは言った、「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか。バラバか、それとも、キリストといわれるイエスか」。18 彼らがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにはよくわかっていたからである。19 また、ピラトが裁判の席についていたとき、その妻が人を彼のもとにつかわして、「あの義人には関係しないでください。わたしはきょう夢で、あの人のためにさんざん苦しみましたから」と言わせた。20 しかし、祭司長、長老たちは、バラバをゆるして、イエスを殺してもらうようにと、群衆を説き伏せた。21 総督は彼らにむかって言った、「ふたりのうち、どちらをゆるしてほしいのか」。彼らは「バラバの方を」と言った。22 ピラトは言った、「それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいか」。彼らはいっせいに「十字架につけよ」と言った。23 しかし、ピラトは言った、「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」。すると彼らはいっそう激しく叫んで、「十字架につけよ」と言った。24 ピラトは手のつけようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った、「この人の血について、わた

しには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい」。25 すると、民衆全体が答えて言った、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」。26 そこで、ピラトはバラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。

4.94.2 ルカ 23:13-25

13 ピラトは、祭司長たちと役人たちと民衆とを、呼び集めて言った、14 「おまえたちは、この人を民衆を惑わすものとしてわたしのところに連れてきたので、おまえたちの面前でしらべたが、訴え出ているような罪は、この人に少しもみとめられなかった。15 ヘロデもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。16 だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」。17 〔祭ごとにピラトがひとりの囚人をゆるしてやることになっていた。〕18 ところが、彼らはいっせいに叫んで言った、「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」。19 このバラバは、都で起った暴動と殺人とのかどで、獄に投ぜられていた者である。20 ピラトはイエスをゆるしてやりたいと思って、もう一度かれらに呼びかけた。21 しかし彼らは、わめきたてて「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と言いつづけた。22 ピラトは三度目に彼らにむかって言った、「では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全くみとめられなかった。だから、むち打ってから彼をゆるしてやることにしよう」。23 ところが、彼らは大声をあげて詰め寄り、イエスを十字架につけるように要求した。そして、その声が勝った。24 ピラトはついに彼らの願いどおりにすることに決定した。25 そして、暴動と殺人とのかどで獄に投ぜられた者の方を、彼らの要求に応じてゆるしてやり、イエスの方は彼らに引き渡して、その意のままにまかせた。

4.94.3 ヨハネ 18:39-19:16

39 過越の時には、わたしがあなたがたのために、ひとりの人を許してやるのが、あなたがたのしきたりになっている。ついては、あなたがたは、このユダヤ人の王を許してもらいたいのか」。40 すると彼らは、また叫んで「その人ではなく、バラバを」と言った。このバラバは強盗であった。

1 そこでピラトは、イエスを捕え、むちで打たせた。2 兵卒たちは、いばらで冠をあんで、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着せ、3 それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。そして平手でイエスを打ちつづけた。4 するとピラトは、また出て行ってユダヤ人たちに言った、「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。5 イエスはいばらの冠をかぶり、紫の上着を着たままで外へ出られると、ピラトは彼らに言った、「見よ、この人だ」。6 祭司長たちや下役どもはイエスを見ると、叫んで「十字架につけよ、十字架につけよ」と言った。ピラトは彼らに言った、「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」。7 ユダヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。8 ピラトがこの言葉を聞いたとき、ますますおそれ、9 もう一度官邸にはいってイエスに言った、「あなたは、もともと、どこからきたのか」。しかし、イエスはなんの答もなさらなかった。10 そこでピラトは言った、

「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」。11 イエスは答えられた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」。12 これを聞いて、ピラトはイエスを許そうと努めた。しかしユダヤ人たちが叫んで言った、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。13 ピラトはこれらの言葉を聞いて、イエスを外へ引き出して行き、敷石（ヘブル語ではガバタ）という場所で裁判の席についた。14 その日は過越の準備の日であって、時は昼の十二時ころであった。ピラトはユダヤ人らに言った、「見よ、これがあなたがたの王だ」。15 すると彼らは叫んだ、「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」。祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。16 そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取った。

マルコによる福音書 15 章 6-15 節福音書対照表

4.94.4 問い

1. イエスの裁判について復習しましょう。（14:53-65, 15:1-5）
2. 群衆は、ピラトに何を求め、ピラトはどう応じますか。（6-10）
3. 祭司長たちはどうしますか。（11-13）
4. 群衆はどうしますか。（12-14）
5. ピラトはどうしますか。それはなぜですか。（14-15）
6. あなたは、この箇所から何を学びますか。他の、福音書も参考にしましょう。

4.94.5 参照

- イエスの裁判の概要
  - アンナス [ヨハネのみ 18:13,14]・ カヤパ 14:53-65・（ペテロイエスを否む 14:66-72）・ 公式サンヘドリン 15:1・（ユダの自殺マタイのみ 26:3-10）・ ピラト 15:2-5・ ヘロデ [ルカのみ 23:6-12]・ ピラトによる死刑宣告 15:6-14
- アントニオ・チセリ（**1821–1891**）「この人を見よ」Ecce homo by Antonio Ciseri [画像]
- ピラトについて [参照]
- バラバ

- 使徒 3:14,15 あなたがたは、この聖なる正しいかたを拒んで、人殺しの男をゆるすように要求し、15 いのちの君を殺してしまった。しかし、神はこのイエスを死人の中から、よみがえらせた。わたしたちは、その事の証人である。

- 小説「バラバ」ラーゲルクヴィスト作尾崎　義訳、岩波文庫赤 757-1
  - ゴルゴタの丘で十字架にかけられたイエスをじっと見守る一人の男があった．その名はバラバ．死刑の宣告を受けながらイエス処刑の身代わりに釈放された極悪人．現代スウェーデン文学の巨匠ラーゲルクヴィスト（一八九一 - 一九七四）は，人も神をも信じない魂の遍歴を通して，キリストによる救い，信仰と迷いの意味をつきとめようとする．[リンク]

- 群衆（　）について
  - エルサレム入城（マルコ 11:1-11, マタイ 21:1-11, ルカ 19:28-40, ヨハネ 12:12-19 [リンク]）以前
    - マルコ 2:4 ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。
    - マルコ 2:13 イエスはまた海べに出て行かれると、多くの人々がみもとに集まってきたので、彼らを教えられた。
    - マルコ 3:7-9 それから、イエスは弟子たちと共に海べに退かれたが、ガリラヤからきたおびただしい群衆がついて行った。またユダヤから、8 エルサレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シドンのあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞いて、みもとにきた。9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。
    - マルコ 3:20 群衆がまた集まってきたので、一同は食事をする暇もないほどであった。
    - マルコ 3:32 ときに、群衆はイエスを囲んですわっていたが、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟、姉妹たちが、外であなたを尋ねておられます」と言った。
    - マルコ 4:1 イエスはまたも、海べで教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。
    - マルコ 4:36 そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。
    - マルコ 5:21 イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大ぜいの群衆がみもとに集まってきた。イエスは海べにおられた。
    - マルコ 5:24 そこで、イエスは彼と一緒に出かけられた。大ぜいの群衆もイエスに押し迫りながら、ついて行った。
    - マルコ 5:27 この女がイエスのことを聞いて、群衆の中にまぎれ込み、うしろから、み衣にさわった。
    - マルコ 5:30,31 イエスはすぐ、自分の内から力が出て行ったことに気づかれて、群衆の中で振り向き、「わたしの着物にさわったのはだれか」と言われた。31 そこで弟子たちが言った、「ごらんのとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか」。
    - マルコ 6:33,34 ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町

々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。

* マルコ 6:45,46 それからすぐ、イエスは自分で群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダへ先におやりになった。46 そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた。
* マルコ 7:14 それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた、「あなたがたはみんな、わたしの言うことを聞いて悟るがよい。
* マルコ 7:17 イエスが群衆を離れて家にはいられると、弟子たちはこの譬について尋ねた。
* マルコ 7:33 そこで、イエスは彼ひとりを群衆の中から連れ出し、その両耳に指をさし入れ、それから、つばきでその舌を潤し、
* マルコ 8:1,2 そのころ、また大ぜいの群衆が集まっていたが、何も食べるものがなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、2 「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。
* マルコ 8:6 そこでイエスは群衆に地にすわるように命じられた。そして七つのパンを取り、感謝してこれをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟子たちはそれを群衆に配った。
* マルコ 8:34 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。
* マルコ 9:14,15 さて、彼らがほかの弟子たちの所にきて見ると、大ぜいの群衆が弟子たちを取り囲み、そして律法学者たちが彼らと論じ合っていた。15 群衆はみな、すぐイエスを見つけて、非常に驚き、駆け寄ってきて、あいさつをした。
* マルコ 9:17 群衆のひとりが答えた、「先生、口をきけなくする霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。
* マルコ 9:25 イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。
* マルコ 10:1 それから、イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨルダンの向こう側へ行かれたが、群衆がまた寄り集まったので、いつものように、また教えておられた。
* マルコ 10:46 それから、彼らはエリコにきた。そしてイエスが弟子たちや大ぜいの群衆と共にエリコから出かけられたとき、テマイの子、バルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。

– エルサレム入城（マルコ 11:1-11, マタイ 21:1-11, ルカ 19:28-40, ヨハネ 12:12-19 [リンク]）後
  * マルコ 11:18 祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、どうかしてイエスを殺そうと計った。彼らは、群衆がみなその教に感動していたので、イエスを恐れていたからである。
  * （マルコ 11:32 しかし、人からだと言えば……」。彼らは [群衆 (people)] を恐れていた。人々が皆、ヨハネを預言者だとほんとうに思っていたからである。）
  * マルコ 12:12 彼らはいまの譬が、自分たちに当てて語られたことを悟ったので、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。そしてイエスをそこに残して立ち去った。

    * マルコ 12:37 このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。
    * マルコ 12:41 イエスは、さいせん箱にむかってすわり、群衆がその箱に金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持は、たくさんの金を投げ入れていた。
    * マルコ 14:43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二弟子のひとりのユダが進みよってきた。また祭司長、律法学者、長老たちから送られた群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。
    * マルコ 15:8 群衆が押しかけてきて、いつものとおりにしてほしいと要求しはじめたので、
    * マルコ 15:11 しかし祭司長たちは、バラバの方をゆるしてもらうように、群衆を煽動した。
    * マルコ 15:15 それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。

- ユダの死（マタイ 27:1-10）マタイのみ（使徒 1:16-20 参照）
  - 1 夜が明けると、祭司長たち、民の長老たち一同は、イエスを殺そうとして協議をこらした上、2 イエスを縛って引き出し、総督ピラトに渡した。3 そのとき、イエスを裏切ったユダは、イエスが罪に定められたのを見て後悔し、銀貨三十枚を祭司長、長老たちに返して 4 言った、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」。しかし彼らは言った、「それは、われわれの知ったことか。自分で始末するがよい」。5 そこで、彼は銀貨を聖所に投げ込んで出て行き、首をつって死んだ。6 祭司長たちは、その銀貨を拾いあげて言った、「これは血の代価だから、宮の金庫に入れるのはよくない」。7 そこで彼らは協議の上、外国人の墓地にするために、その金で陶器師の畑を買った。8 そのために、この畑は今日まで血の畑と呼ばれている 9 こうして預言者エレミヤによって言われた言葉が、成就したのである。すなわち、「彼らは、値をつけられたもの、すなわち、イスラエルの子らが値をつけたものの代価、銀貨三十を取って、10 主がお命じになったように、陶器師の畑の代価として、その金を与えた」。
    * 祭司長たちが、イエスを殺そうと協議をし、総督ピラトに引き渡すと、ユダは後悔
    * 銀貨を返して「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」。と告白
    * 祭司長たちが受け取らないので、首をつって死んだ。

- ヘロデ（ピラトがヘロデにイエスを送ったことを書いているのはルカ 23:6-12 のみ）
  - 6 ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人かと尋ね、7 そしてヘロデの支配下のものであることを確かめたので、ちょうどこのころ、ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そちらへイエスを送りとどけた。8 ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。9 それで、いろいろと質問を試みたが、イエスは何もお答えにならなかった。10 祭司長たちと律法学者たちとは立って、激しい語調でイエスを訴えた。11 またヘロデはその兵卒どもと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえした。12 ヘロデとピラトとは以前は互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。
    * ピラトはイエスがヘロデの支配下のものであることを確かめたので、ヘロデのもとに送る。

    * ヘロデは、会ってみたい、奇跡を行うのを見たいと望んでいた。イエスは、何も答えず。
    * 兵卒と一緒にイエスを侮辱・嘲弄し、はなやかな着物を着せてピラトに送り返す。
    * ヘロデとピラトは互いに敵視していたが、この日に親しい仲になる。
  - 榊原「ルカの福音書」
    * ルカがヘロデ法廷もしるすのは、前後関係から必然であるばかりか（ルカ 9:9, 使徒 4:27）、イエスの無罪の証人をふたりたてるためでもある。（23:15）
    * ヘロデは、ピラトより罪深い者として描かれています。ヘロデの責任強調の傾向は二世紀には、もっと露骨になります。「時にヘロデ王が主を彼らの手に渡すように命じて言った、私が彼にせよとお前たちに命じたことをみな行なえと」（ペテロ福音書 1:2）

- 手を洗う
  - 申命記 21:6,7 そしてその殺された者のある所に最も近い町の長老たちは皆、彼らが谷でくびを折った雌牛の上で手を洗い、7 証言して言わなければならない、『われわれの手はこの血を流さず、われわれの目もそれを見なかった。

- 使徒行伝の証言
  - 使徒 4:25-28 あなたは、わたしたちの先祖、あなたの僕ダビデの口をとおして、聖霊によって、こう仰せになりました、／『なぜ、異邦人らは、騒ぎ立ち、／もろもろの民は、むなしいことを図り、26 地上の王たちは、立ちかまえ、／支配者たちは、党を組んで、／主とそのキリストとに逆らったのか』。27 まことに、ヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人らやイスラエルの民と一緒になって、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、28 み手とみ旨とによって、あらかじめ定められていたことを、なし遂げたのです。

- ローマ時代の主な刑罰の種類（ChatGPT 2025.4.17）[リンク]

刑罰	内容	適用例
十字架刑（Crucifixio）	十字架に磔にして長時間かけて処刑。極めて苦痛を伴う。	奴隷、反乱者、重罪人など。特に**ローマ市民には適用されない**。
剣による処刑（Decapitatio）	首切りなど迅速な死刑方法。	ローマ市民の重罪に適用。比較的「名誉ある」処刑法。
火刑（Combustio）	火で焼かれる処刑。	重罪、異端、魔術などに関係する犯罪。
投獣刑（Damnatio ad bestias）	闘技場で猛獣に襲わせて処刑。	奴隷、キリスト教徒、敵対者。見せ物としての側面も強い。
追放刑（Exilium）	都市または帝国からの追放。	軽罪や政治的処分として用いられる。
鉱山労働刑（Damnatio ad metalla）	強制的に鉱山で働かせる。実質的には死刑に近い過酷な労働。	奴隷、重罪人、キリスト教徒など。

刑罰	内容	適用例
鞭打ち（Flagellatio）	むち打ち。公開処刑の一部でも使われた。	あらゆる階級に課せられたが、市民には制限あり。

4.94.6　記録

- 日時：2025 年 4 月 17 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）3 名

4.94.7　問いについて

1. イエスの裁判について復習しましょう。（14:53-65, 15:1-5）
   - マルコでは、三つの部分に分かれている。
     - 14:53-65 最高法院で裁判をうける [参照]
       - 大祭司のもとに集まってきた、祭司長、長老、律法学者のもとで、証言をあつめる
       - 61b 「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。62 イエスは言われた、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。
     - 15:1-5 ピラトから尋問を受ける [参照]
       - 2 ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは、「そのとおりである」とお答えになった。
     - 15:6-15 死刑の判決を受ける [参照]
       - 14 ピラトは言った、「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」。すると、彼らは一そう激しく叫んで、「十字架につけよ」と言った。15 それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。
2. 群衆は、ピラトに何を求め、ピラトはどう応じますか。（6-10）
   - 6 さて、祭のたびごとに、ピラトは人々が願い出る囚人ひとりを、ゆるしてやることにしていた。7 ここに、暴動を起し人殺しをしてつながれていた暴徒の中に、バラバという者がいた。8 群衆が押しかけてきて、いつものとおりにしてほしいと要求しはじめたので、9 ピラトは彼らにむかって、「おま

えたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」と言った。10 それは、祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからである。

- [DQ] バラバについて何がわかりますか。
  - 7b 暴動を起し人殺しをしてつながれていた暴徒
  - 人殺しの暴徒
- [DQ] ピラトはどのように考えていますか。
  - [Q] なぜ、ピラトは「祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためである」と考えたのでしょうか。
  - [A] 内輪もめに見えた。排除のためのうったえ。群衆がイエスやイエスの教えに惹かれていたことを知っていた。

3. 祭司長たちはどうしますか。(11-13)

- 11 しかし祭司長たちは、バラバの方をゆるしてもらうように、群衆を煽動した。12 そこでピラトはまた彼らに言った、「それでは、おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの人は、どうしたらよいか」。13 彼らは、また叫んだ、「十字架につけよ」。
- [DQ] 祭司長たちは、なぜ、群衆を扇動したのでしょうか。
- [A] 中には、イエスに同調するものもいたのかもしれない。そうでなければ、扇動する必要はない。さらに、それによって、バラバに課せられると考えられていた、十字架刑をイエスに課せられる。

4. 群衆はどうしますか。(12-14)

- 12 そこでピラトはまた彼らに言った、「それでは、おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの人は、どうしたらよいか」。13 彼らは、また叫んだ、「十字架につけよ」。14 ピラトは言った、「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」。すると、彼らは一そう激しく叫んで、「十字架につけよ」と言った。
- [DQ] 群衆は、どうして、祭司長たちに従うのでしょうか。
- [DQ] この群衆は、どのような人たちですか。
  - エルサレム入場のときの群集(11:1-11(7-10), マタイ 21:1-11, ルカ 19:28-40, ヨハネ 12:12-19)、教えを喜んで聴く群衆(12:37, Cf. 11:18, 32, 12:12, 41)、イエスをとらえに来た群衆(14:43)、恩赦を願う群衆(15:8)、祭司長たちに扇動される群衆(15:11, 15)は同じなのか、これらの人々の、その心にあったものは、一つなのか。

5. ピラトはどうしますか。それはなぜですか。(14-15)

- 14 ピラトは言った、「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」。すると、彼らは一そう激しく叫んで、「十字架につけよ」と言った。15 それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。
- [DQ] ピラトは、なにをたいせつにしていますか。恐れていたことは何なのでしょうか。
  - [A] ユダヤ人の暴動（赴任時に皇帝像つき軍旗をもちこもうとしたが、陳情で不可能に、神殿の金で水道工事をしようとして失敗。）地元民に上訴権があり、実際、サマリヤの村人の上訴で失職。（ユダヤ人古代史）
  - [A] 悪事をしたとは、考えていない。
  - [A] ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。
- （共観福音書は）ピラトを好意的に描いているようにみえる。
- 使徒 3:13 アブラハム、イサク、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光を賜わったのであるが、あなたがたは、このイエスを引き渡し、ピラトがゆるすことに決めていたのに、それを彼の面前で拒んだ。(使徒 13:28 参照)

6. あなたは、この箇所から何を学びますか。他の、福音書も参考にしましょう。

- マタイ 27:15-26
  - マタイ 27:1-10 に、ユダの自殺のことが挿入されている。
  - ピラトの妻の言葉が挿入され、さらに、手を洗い、責任回避を宣言する、ピラトの言葉が入っている。
    - マタイ 27:19 また、ピラトが裁判の席についていたとき、その妻が人を彼のもとにつかわして、「あの義人には関係しないでください。わたしはきょう夢で、あの人のためにさんざん苦しみましたから」と言わせた。
    - 「あの義人」使徒 3:14, 7:52, 22:14, 1 ヨハネ 3:7
    - マタイ 27:24 ピラトは手のつけようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った、「この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい」。
- ルカ 23:13-25
  - 23:6-12 に、ヘロデからの尋問が挿入されている。イエスは何も答えない。
  - 「死に当たる罪」がないことが何回（23:15,22, Cf 4,14）も繰り返されているように見える。

    * （二人の証人・証言として、訴え出ているような罪は、認められないとしている）14「おまえたちは、この人を民衆を惑わすものとしてわたしのところに連れてきたので、おまえたちの面前でしらべたが、訴え出ているような罪は、この人に少しもみとめられなかった。15 ヘロデもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。

  - 釈放提案も繰り返ししている。（23:16,20,22）
  - むちうちを釈放条件として提案している。（23:16,22）
  -「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。(23:2)　「国民を惑わし」は、ローマ帝国内のキリスト者への批判（使徒 16:20, 17:6, 21:38,24:5）

- ヨハネ 18:39-19:16
  - ピラトは、イエスを捕え、むちで打たせた。(1)
  - 兵卒たちは、いばらで冠をあんで、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着せ、それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。そして平手でイエスを打ちつづけた。（2,3）
  - ピラトは、また出て行ってユダヤ人たちに言った、「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。（4b）
  - 5 イエスはいばらの冠をかぶり、紫の上着を着たままで外へ出られると、ピラトは彼らに言った、「見よ、この人だ」。(5)
  - ユダヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。(7)
  - もう一度官邸にはいってイエスに言った、「あなたは、もともと、どこからきたのか」。しかし、イエスはなんの答もなさらなかった。(9)
  - イエスは答えられた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」。(11)
  - これを聞いて、ピラトはイエスを許そうと努めた。しかしユダヤ人たちが叫んで言った、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。(12)
  - 祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。(15b)
  - [Q] ヨハネは、十字架刑の判決を通して、何を伝えているのでしょうか。

- [DQ] イエスはなぜ、十字架にかかることになったのでしょうか。

4.94.8 メモ

- 福音書の差異：基本的にマルコでは、前段（15:1-5）において、ピラトの「あなたがユダヤ人の王であるか」（2）との問いに対して、イエスは「そのとおりである」（2）と答え、そのあとは、なにも答えていない。それを受けて、「いつものとおり」のおそらく祭りのときの、恩赦（6）を求めた群衆に対して「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」（9）と問い、さらに、「それは、祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからである。」（10）と理由も付加されている。このため、最初に、恩赦を願った群衆と、このあと、祭司長たちの意向をうけて、「十字架につけよ」と叫ぶ群衆が同じなのか、違うのかも、区別がつかない。しかし、全体として、ピラトは「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」（14）とまで、言ったと記録されているが、結局、ピラトも「群衆を満足させようと思って」（15a）「バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。」（15b）と書かれている。マタイと、ルカは、基本史料は、マルコ、または、マルコとおなじのようであるが、多少異なる点がある。
- 福音書の差異（マタイ）：恩赦についての背景説明の後「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか。バラバか、それとも、キリストといわれるイエスか」（マタイ 27:17b）と、バラバかイエスのどちらかが恩赦を受けるという単純化が行われている。特徴的なこととしては、ピラトの妻のことば「あの義人には関係しないでください。わたしはきょう夢で、あの人のためにさんざん苦しみましたから」（マタイ 27:19）が挿入されている。また、「24 ピラトは手のつけようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った、『この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい」。25 すると、民衆全体が答えて言った、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい』。」（マタイ 27:24,25）と、責任の所在に関するやりとりが記録されている。
- 福音書の差異（ルカ）：ルカでは、すこし枠組みに変化があり「14 『おまえたちは、この人を民衆を惑わすものとしてわたしのところに連れてきたので、おまえたちの面前でしらべたが、訴え出ているような罪は、この人に少しもみとめられなかった。15 ヘロデもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。16 だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう』。」（ルカ 23:14-16）と、祭司長たちと役人と民衆を呼び出して告げるところから始めている。さらに、「ピラトはイエスをゆるしてやりたいと思って、もう一度かれらに呼びかけた。」（ルカ 23:20）「ピラトは三度目に彼らにむかって言った、『では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全くみとめられなかった。だから、むち打ってから彼をゆるしてやることにしよう』。」（ルカ 23:22）とまで描いている。しかしピラト詰め寄る（ルカ 23:23b）強行な彼らに押し切られて、彼らの願い通りにしたと書かれている。
- 福音書の差異（ヨハネ）：まず、恩赦の枠組みが説明され、次に、「1 そこでピラトは、イエスを捕え、むちで打たせた。2 兵卒たちは、いばらで冠をあんで、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着せ、3 それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。そして平手でイエスを打ちつづけた。」（ヨハネ 19:1-3）と始めている。共観福音書では、鞭打ったり侮辱を与えるのは、判決後である。このあとに

「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。（ヨハネ 19:4b）と言った後「見よ、この人だ」（ヨハネ 19:5b）というあたりは印象的である。さらに「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」（ヨハネ 19:6）とピラトが言った後に、ユダヤ人たちが、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」といい、これに対して、ピラトはさらに「あなたは、もともと、どこからきたのか」（ヨハネ 19:9）と問い、「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」に対して、イエスが「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」（11b）といい、さらに、赦そうとするピラトにたいして、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。（ヨハネ 19:12b）「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」（15b）の声を聞き、ユダヤ人に引き渡すことを決めたことが記録されている。ユダヤ人たちも貶められ、なんとも残念な結末である。

- マルコでは、明確とは言えないが、基本的には、暴動を起こし殺人をしたバラバが赦され、ピラとはなんら罪を認めることができなかったイエスが十字架刑にされることが書かれている。特に、ルカや、ヨハネでは、罪がないことが強調されているが、マタイと、ヨハネでは、責任についても述べられている。形式的には、ユダヤ人の責任としているが、枠組みは、死刑の権限を持っている、ピラトが総督である、ローマ帝国政府であることも揺るがない事実であるが、ヨハネには、そのような権威も、神のもとにあることが述べられ、人々が、神の権威か、人の権威のどちらに従うかが問われている関係になっている。

4.95 15:16-20 兵士から侮辱される

16 兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の内に連れて行き、全部隊を呼び集めた。17 そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、18 「ユダヤ人の王、ばんざい」と言って敬礼をしはじめた。19 また、葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ、ひざまずいて拝んだりした。20 こうして、イエスを嘲弄したあげく、紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを十字架につけるために引き出した。

4.95.1 マタイ 27:27-31

27 それから総督の兵士たちは、イエスを官邸に連れて行って、全部隊をイエスのまわりに集めた。28 そしてその上着をぬがせて、赤い外套を着せ、29 また、いばらで冠を編んでその頭にかぶらせ、右の手には葦の棒を持たせ、それからその前にひざまずき、嘲弄して、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。30 また、イエスにつばきをかけ、葦の棒を取りあげてその頭をたたいた。31 こうしてイエスを嘲弄したあげく、外套をはぎ取って元の上着を着せ、それから十字架につけるために引き出した。

4.95.2　ルカ 22:63-65

63 イエスを監視していた人たちは、イエスを嘲弄し、打ちたたき、64 目かくしをして、「言いあててみよ。打ったのは、だれか」ときいたりした。65 そのほか、いろいろな事を言って、イエスを愚弄した。

4.95.3　ヨハネ 19:2-3

2 兵卒たちは、いばらで冠をあんで、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着せ、3 それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。そして平手でイエスを打ちつづけた。

マルコによる福音書 15 章 16-20 節福音書対照表（ルカを加えたもの）

マルコによる福音書 15 章 16-20 節福音書対照表（オリジナル）

4.95.4　問い

1. イエスの裁判について復習しましょう。（14:53-65, 15:1-15）
2. 裁判のあとどうなりますか。(16)
3. イエスは、誰に、どのようにされますか。(17-19)
4. このひとたちは、なぜ、イエスに対して、このようにするのでしょうか。(17-19)
5. イエスが、以前、弟子たちに伝えていたことと比較してみましょう。（10:33,34 など）
6. イエスは、最終的にはどうされますか。（20）

4.95.5　参照

- 地図（Map）：受難週のエルサレム（The Passion Week in Jerusalem）[参照]
- ルカでは、イエスが捕えられ、朝に裁判が始まるまえに記述があり、ヨハネでは、ピラトによる裁判の途中に、嘲弄の記述がある。
- 「聖母マリヤとともに歩む　十字架の道行」[リンク]
- 受難告知（?!）
  - 8:31-37 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32 しかもあからさまに、この事を話された。すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめたので、33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。34 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼ら

に言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。36 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。37 また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。
  - 9:30-32 30 それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。
  - 10:32-34 32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。
- マルコによる福音書におけるイエスの使命と（十字架上での）死の意味
  1. 1:11 すると天から声があった、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。（主の心にかなう神の子であるとの召命）
  2. 1:13 イエスは四十日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた。そして獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた。（御使に仕えられていると意識）
  3. 1:14,15 ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。（終末への備えと神の国の宣教開始）
  4. 1:17 イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。（弟子の育成の開始）
  5. 1:22 人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。（権威ある者のように教える）
  6. 1:23-25 ちょうどその時、けがれた霊につかれた者が会堂にいて、叫んで言った、「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。すると、けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。
  7. 1:38,39 イエスは彼らに言われた、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教を宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」。そして、ガリラヤ全地を巡りあるいて、諸会堂で教えを宣べ伝え、また悪霊を追い出された。（ガリラヤ各地での宣教）
  8. 1:40-42 ひとりの重い皮膚病にかかった人が、イエスのところに願いにきて、ひざまずいて言った、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると、重い皮膚病が直ちに去って、その人はきよくなった。（汚れていると思われ・思っているものを清める）
  9. 2:9-11 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うの

と、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。（罪を赦すことができるのは神のみと考えられていたときに、罪をゆるし、中風の者をいやす）

10. 2:16,16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。（罪人を招くため）
11. 2:19,20 するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう。（花婿が取り去られる時を予定）
12. 2:21,22 だれも、真新しい布ぎれを、古い着物に縫いつけはしない。もしそうすれば、新しいつぎは古い着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなる。まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそうすれば、ぶどう酒は皮袋をはり裂き、そして、ぶどう酒も皮袋もむだになってしまう。〔だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである〕」。（新しい葡萄酒は新しい皮袋に）
13. 2:27,28 また彼らに言われた、「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」。（安息日は人のため、イエスは、安息日の主）
14. 3:4-6 人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。（安息日にひとをいやし、パリサイ人・ヘロデ党の者、イエスを殺す計画を相談）
15. 3:11,12 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。イエスは御自身のことを人にあらわさないようにと、彼らをきびしく戒められた。（けがれた霊の神の子告白と証言の禁止）
16. 3:13-15 さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。（十二人を立て、使命を与える）
17. 3:28,29 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。（イエスの使命の正しい認知と聖霊を汚す罪）
18. 3:35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。（神のみこころを行う者）
19. 4:11 そこでイエスは言われた、「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。（たとえで語られる）
20. 4:39-41 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。（風も波も従わせるイエス）

21. 5:7 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。（対話をしていやす）
22. 5:17 そこで、人々はイエスに、この地方から出て行っていただきたいと、頼みはじめた。（イエス追い出される）
23. 5:34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。（長血の女をいやす）
24. 5:39-41 内にはいって、彼らに言われた、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいって行かれた。そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。（死んだ少女を生き返らす）
25. 6:2,3 そして、安息日になったので、会堂で教えはじめられた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これらのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵はどうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、どうしてか。この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。（故郷で受け入れられない）
26. 6:7 また十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれた霊を制する権威を与え、（けがれた霊を制する権威をさずけ弟子を派遣）
27. 6:34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。（憐れみ・奉仕・教育）
28. 6:42-44 みんなの者は食べて満腹した。そこで、パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。パンを食べた者は男五千人であった。（五千人をやしなう）
29. 7:5-8 そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、／『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教として教え、／無意味にわたしを拝んでいる』。あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」。（パリサイ人と律法学者たちを批判）
30. 7:15 すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人をけがすのである。（ユダヤ教の実践を批判）
31. 7:24 さて、イエスは、そこを立ち去って、ツロの地方に行かれた。そして、だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れていることができなかった。（異邦人の地、ツロで、異邦人スロ・フェニキヤの女の女を癒す）
32. 7:37 彼らは、ひとかたならず驚いて言った、「このかたのなさった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」。（ガリラヤにもどり耳が聞えず口のきけない人を癒す）
33. 8:5,6 イエスが弟子たちに、「パンはいくつあるか」と尋ねられると、「七つあります」と答えた。そこ

でイエスは群衆に地にすわるように命じられた。そして七つのパンを取り、感謝してこれをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟子たちはそれを群衆に配った。（四千人を養う）

34. 8:12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。（ガリラヤ湖西岸でも受け入れられず撤退）
35. 8:15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。（パリサイとヘロデのパン種を警戒するように注意）
36. 8:22 そのうちに、彼らはベツサイダに着いた。すると人々が、ひとりの盲人を連れてきて、さわってやっていただきたいとお願いした。（盲人をいやす）
37. 8:29 そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。（ピリポ・カイザリアでの告白）
38. 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、（受難告知・イエスに従う者）
39. 9:2,3 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、（山上の変貌）
40. 9:7 すると、雲がわき起って彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった、「これはわたしの愛する子である。これに聞け」。（弟子たちも聞く）
41. 9:9-13 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。そしてイエスに尋ねた、「なぜ、律法学者たちは、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか」。イエスは言われた、「確かに、エリヤが先にきて、万事を元どおりに改める。しかし、人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか。しかしあなたがたに言っておく、エリヤはすでにきたのだ。そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった」。（時は満ちたか）
42. 9:25 イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。（おしの霊に憑かれたこどもをいやす）
43. 9:35 そこで、イエスはすわって十二弟子を呼び、そして言われた、「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。（仕えるものに）
44. 10:21,22 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。すると、彼はこの言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。（金持ちの青年）
45. 10:31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。（イエスに従う者）
46. 10:32-34 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわ

たすであろう。また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。（イエスの姿勢）

47. 10:42-45 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。（あがないの死）
48. 10:48 多くの人々は彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」。（テマイの子、バルテマイという盲人のこじきをいやす）
49. 11:2,3 「むこうの村へ行きなさい。そこにはいるとすぐ、まだだれも乗ったことのないろばの子が、つないであるのを見るであろう。それを解いて引いてきなさい。もし、だれかがあなたがたに、なぜそんな事をするのかと言ったなら、主がお入り用なのです。またすぐ、ここへ返してくださいますと、言いなさい」。（主がお入りようなのです）
50. 11:8-10 すると多くの人々は自分たちの上着を道に敷き、また他の人々は葉のついた枝を野原から切ってきて敷いた。そして、前に行く者も、あとに従う者も共に叫びつづけた、／「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。（主の御名によって、エルサレム入場）
51. 11:14 そこで、イエスはその木にむかって、「今から後いつまでも、おまえの実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。（いちじくへの予言）
52. 11:17 そして、彼らに教えて言われた、「『わたしの家は、すべての国民の祈の家ととなえらるべきである』と書いてあるではないか。それだのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしてしまった」。（宮潔め）
53. 11:25 また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるしてくださるであろう。（基本）
54. 12:6-9 ここに、もうひとりの者がいた。それは彼の愛子であった。自分の子は敬ってくれるだろうと思って、最後に彼をつかわした。すると、農夫たちは『あれはあと取りだ。さあ、これを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と話し合い、彼をつかまえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。このぶどう園の主人は、どうするだろうか。彼は出てきて、農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう。（イスラエルはどうなるか）
55. 12:17 するとイエスは言われた、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。彼らはイエスに驚嘆した。（「カイザルに税金を納めてよいでしょうか」との問いに答えて）
56. 12:27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている」。（復活、神は生きている者の神）
57. 12:34 イエスは、彼が適切な答をしたのを見て言われた、「あなたは神の国から遠くない」。それから後は、イエスにあえて問う者はなかった。（聖書の核心）
58. 12:35 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。（キリストはダビデの子か）
59. 12:42,43 そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、

さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」。（主の見方）

60. 13:2 イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。（残るもの）
61. 13:30-33 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである。（終わりはいつか）
62. 14:1 さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。（いつ殺すか）
63. 14:3 イエスがベタニヤで、重い皮膚病の人シモンの家にいて、食卓についておられたとき、ひとりの女が、非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、それをこわし、香油をイエスの頭に注ぎかけた。（葬りの用意）
64. 14:10 ときに、十二弟子のひとりイスカリオテのユダは、イエスを祭司長たちに引きわたそうとして、彼らの所へ行った。（イエスを引き渡す計画）
65. 14:18 そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。（裏切るものの存在）
66. 14:22-25 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。（死の意味）
67. 14:27 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。（散らされる羊）
68. 14:33-36 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。（ゲッセマネでのイエス）
69. 14:48,49 イエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたは強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕えにきたのか。わたしは毎日あなたがたと一緒に宮にいて教えていたのに、わたしをつかまえはしなかった。しかし聖書の言葉は成就されねばならない」。（イエスの捕縛）
70. 14:61,62 しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。イエスは言われた、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。（大祭司の前で）

71. 15:2 ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは、「そのとおりである」とお答えになった。（ピラトの前で）
72. 15:15 それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。（判決）
73. 15:26 イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。（ユダヤ人の王として処刑）
74. 15:34 そして三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。（イエスの死）
75. 15:39 イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。（百卒長の証言）
76. 16:6 するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。（空の墓・復活）
77. (16:15,16 そして彼らに言われた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。（追記））

4.95.6 記録

- 日時：2025 年 4 月 24 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）3 名

4.95.7 問いについて

1. イエスの裁判について復習しましょう。（14:53-65, 15:1-15）
   - [DQ] 最終的に、誰のもとで、どのような判決が出ましたか。
     - 「それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。」（15:15）
   - [DQ] 罪状は何ですか。
     - [A] 反乱罪？ユダヤ人の王であることをみとめ、ユダヤ人社会を、混乱させる要因となるもの。
     - ユダヤ人の王（マルコ 15:2,9,12）
     - ルカ 23:14b 民衆を惑わすもの
     - ヨハネ 18:7 ユダヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。
2. 裁判のあとどうなりますか。(16)

- 16 兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の内に連れて行き、全部隊を呼び集めた。
- [A] 総督官邸は邸宅とよばれ、大きな公務用の家があったということであろう。全部隊（　　）は、どのくらいの数か不明。
  - [参考] スペイラ（　：a military cohort; the tenth part of legion, i. the tenth part of legion, ii. if auxiliaries either 500 or 1000, iii. a maniple, or the thirtieth part of a legion）レギオンの 10 分の 1 とされる。レギオンは、4000 人ないし、6000 人の軍団。

3. イエスは、誰に、どのようにされますか。(17-19)

- 17 そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、18 「ユダヤ人の王、ばんざい」と言って敬礼をしはじめた。19 また、葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ、ひざまずいて拝んだりした。
- [DQ] だれが、どのようにイエスをあざけっていますか。
- [A] ローマ兵だと思われる。
  - 「紫の衣」（王の着る衣）「いばらの冠」は王の嘲笑なのかもしれない。それゆえ、
  - 「ユダヤ人の王、ばんざい」（アヴェ・カエサル（Ave Caesar）「カエサルばんざい」をもじったもの）と言って敬礼をしはじめた。（18）となるのだろう。(“ave” is a salutation meaning “hail” or “be well”)
  - その形式が、「葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ、ひざまずいて拝んだりした。」
- [DQ] 兵は、単に、仕事の一部として、行ったのだろうか。
  - 鞭打ち（15）は、決められていたのかもしれない。しかし、ここには、遊び的な要素を感じる。
- [DQ] ルカ 22:63 では、どうしていますか。
  - イエスを監視していた人たちは、イエスを嘲弄し、打ちたたき、64 目かくしをして、「言いあてみよ。打ったのは、だれか」ときいたりした。
  - 預言者性をためしているのだろう。
    - ルカ 13:33 しかし、きょうもあすも、またその次の日も、わたしは進んで行かねばならない。預言者がエルサレム以外の地で死ぬことは、あり得ないからである』。

4. このひとたちは、なぜ、イエスに対して、このようにするのでしょうか。(17-19)

- [DQ] 兵士たちは、どのような思いから、このような行為をしているのでしょうか。
- [A] うさばらし？

5. イエスが、以前、弟子たちに伝えていたことと比較してみましょう。(10:33,34 など)

   - 33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。

   - [DQ] イエスは、なぜ、このことを受け入れ、十字架の道・悲しみの道（via dororosa）へと向かって言ったのでしょうか。

   - [参考：最後の晩餐] 14:22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。23 また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。24 イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。25 あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。

   - [参考：ゲッセマネ] 14:34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。35 そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、36 「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。37 それから、きてごらんになると、弟子たちが眠っていたので、ペテロに言われた、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったのか。38 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。

     - 「神の国」で食卓を共に囲む期待と、「多くのひとのために流すわたしの契約の血」ということは、マルコでも明確

     - イエスは、自分が向かっていく道を喜んではいなかったが、苦しみつつ、主に委ねている。

6. イエスは、最終的にはどうされますか。(20)

   - 20 こうして、イエスを嘲弄したあげく、紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを十字架につけるために引き出した。

   - [DQ] 他の福音書の記述からは何がわかりますか。

   - [DQ] イエスにとって、兵士たちにとって、どのような意味があるのでしょうか。

4.95.8 メモ

- 福音書の差異：十字架刑判決後のイエスの嘲弄・侮蔑の記事は、マルコとマタイにはあるが、ルカと、ヨハネにはない。ルカに記されているのは、イエスの捕縛後、ペテロの否認が挟まれ、次の、ユダヤ人議会での朝の審問の直前の記事である。さらに、嘲弄、侮蔑をした主体は、おそらく、兵士たちであったろう

が、内容も、異なる。ヨハネは、前回学んだ、ピラトの裁判の最中の出来事として書かれ、十字架刑の一部としての、刑罰としてではない。

- 裁判は終結し、最後には、「それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。」（15:15）が書かれている。厳密に考えるなら、鞭打ち後となる。総督官邸は邸宅とよばれ、大きな公務用の家があったということであろう。紫の衣と、荊棘の冠は、おそらく、王の表彰であろう。ゆえに、「『ユダヤ人の王、ばんざい』と言って敬礼をしはじめた。」と書いている。つぎは、「葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ、ひざまずいて拝んだりした。」（19b）であるが、まさに、「嘲弄」（20）（馬鹿にしてなぶること。あざけりもてあそぶこと。）なのだろう。最後は「こうして、イエスを嘲弄したあげく、紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを十字架につけるために引き出した。」（20）である。

4.96　15:21-32 十字架につけられる

21 そこへ、アレキサンデルとルポスとの父シモンというクレネ人が、郊外からきて通りかかったので、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。22 そしてイエスをゴルゴタ、その意味は、されこうべ、という所に連れて行った。23 そしてイエスに、没薬をまぜたぶどう酒をさし出したが、お受けにならなかった。24 それから、イエスを十字架につけた。そしてくじを引いて、だれが何を取るかを定めたうえ、イエスの着物を分けた。25 イエスを十字架につけたのは、朝の九時ごろであった。26 イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。27 また、イエスと共にふたりの強盗を、ひとりを右に、ひとりを左に、十字架につけた。28 〔こうして「彼は罪人たちのひとりに数えられた」と書いてある言葉が成就したのである。〕29 そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって言った、「ああ、神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ、30 十字架からおりてきて自分を救え」。31 祭司長たちも同じように、律法学者たちと一緒になって、かわるがわる嘲弄して言った、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。32 イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」。また、一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

4.96.1　マタイ 27:32-44

32 彼らが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に負わせた。33 そして、ゴルゴタ、すなわち、されこうべの場、という所にきたとき、34 彼らはにがみをまぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはそれをなめただけで、飲もうとされなかった。35 彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いて、その着物を分け、36 そこにすわってイエスの番をしていた。37 そしてその頭の上の方に、「これはユダヤ人の王イエス」と書いた罪状書きをかかげた。38 同時に、ふたりの強盗がイエスと一緒に、ひとりは右に、ひとりは左に、十字架につけられた。39 そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって 40 言った、「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。41 祭司長たちも同じように、律法学者、長老たちと一緒になって、嘲弄して言った、42 「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれが

イスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。43 彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらうがよい。自分は神の子だと言っていたのだから」。44 一緒に十字架につけられた強盗どもまでも、同じようにイエスをののしった。

4.96.2 ルカ 23:26-43

26 彼らがイエスをひいてゆく途中、シモンというクレネ人が郊外から出てきたのを捕えて十字架を負わせ、それをになってイエスのあとから行かせた。27 大ぜいの民衆と、悲しみ嘆いてやまない女たちの群れとが、イエスに従って行った。28 イエスは女たちの方に振りむいて言われた、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい。29 『不妊の女と子を産まなかった胎と、ふくませなかった乳房とは、さいわいだ』と言う日が、いまに来る。30 そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。31 もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」。32 さて、イエスと共に刑を受けるために、ほかにふたりの犯罪人も引かれていった。33 されこうべと呼ばれている所に着くと、人々はそこでイエスを十字架につけ、犯罪人たちも、ひとりは右に、ひとりは左に、十字架につけた。34 そのとき、イエスは言われた、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。人々はイエスの着物をくじ引きで分け合った。35 民衆は立って見ていた。役人たちもあざ笑って言った、「彼は他人を救った。もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい」。36 兵卒どももイエスをののしり、近寄ってきて酢いぶどう酒をさし出して言った、37 「あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい」。38 イエスの上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札がかけてあった。39 十字架にかけられた犯罪人のひとりが、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と、イエスに悪口を言いつづけた。40 もうひとりは、それをたしなめて言った、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。41 お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」。42 そして言った、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。43 イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。

4.96.3 ヨハネ 19:17-27

17 イエスはみずから十字架を背負って、されこうべ（ヘブル語ではゴルゴタ）という場所に出て行かれた。18 彼らはそこで、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十字架につけた。19 ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。20 イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。21 ユダヤ人の祭司長たちがピラトに言った、「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」。22 ピラトは答えた、「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」。23 さ

て、兵卒たちはイエスを十字架につけてから、その上着をとって四つに分け、おのおの、その一つを取った。また下着を手に取ってみたが、それには縫い目がなく、上の方から全部一つに織ったものであった。24 そこで彼らは互に言った、「それを裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう」。これは、「彼らは互にわたしの上着を分け合い、わたしの衣をくじ引にした」という聖書が成就するためで、兵卒たちはそのようにしたのである。25 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。26 イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。27 それからこの弟子に言われた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。

マルコによる福音書 15 章 21-32 節福音書対照表

4.96.4 問い

1. シモンというキレネ人はどのようなことをすることになりますか。(21)
2. 十字架につけられるまでについてについてどのようなことが書かれていますか。(22-24)
3. 十字架刑についてほかにどのようなことが書かれていますか。(25-28)
4. 周囲のひとたちの様子はどのように描かれていますか。(29-32)
5. ルカには、さらにどのようなことが書かれていますか。
6. ヨハネには、さらにどのようなことが書かれていますか。

4.96.5 参照

- 十字架刑
  - ウイリアム・バークレイ（ヨハネ福音書 p.333）：
    - キケロ：最も残酷で身の毛のよだつ死刑
      - ローマ市民の場合、犯罪者は縛られるだけである。もっと悪質な犯罪の場合には、むちうち刑にされる。殺されるのは、反逆罪に当たる場合のみ。ローマ市民が十字架上で殺されるなどもってのほかだ。そのような極悪行為は、言語道断である。いかなる言葉もそれを言い表すことはできない。
    - タキトゥス：卑劣極まる刑
    - もともとペルシャの死刑方法だった。ペルシャ人にとって地面は神聖なものだったので、罪人や悪人の死体で冒涜されるのを避けようとする考えからだった。
    - カルタゴをへて、ローマでも用いられたが、それは、イタリア本国以外、奴隷に限られていた。
  - ウイリアム・バークレイ（マルコ福音書 p.431）：十字架刑の所定の手続きは変更されなかった。十

字架の準備ができた時、囚人は刑場まで、それを自分でかついでいかなければならなかった。彼は四人の兵士たちの中空方陣の真ん中に入れられた。その前にひとりの兵士が、囚人が有罪でああるという罪状を書いたいたを持って進んだ。その板はあとで十字架に取り付けられた。かれらは、形状に至るのに最短距離でなく、最長距離をとった。できるだけ多くの人々が見て警告を受けるように、可能な限り多くの大道や小径を通った。かれらが十字架刑の場所についたとき、十字架は地面に平らに置かれた。囚人はその上に体を伸ばさせられ、その手は、釘で十字架に打ち付けられた。足は釘付けにされず、ただゆるく縛られた。囚人の両足の間に座と呼ばれる、木の出っ張りがあった。それは十字架がまっすぐにたてられたとき、彼の重量を受けるためであった。さもないと、釘が手の肉を裂いて、しまうだろう。次に、十字架がまっすぐに起こされ、そして穴の中に入れられたーそして、囚人は死ぬまで放置された。十字架は高いものではなかった。それは、T 字の形であった。そして上の部分が全然なかった。ときには囚人は一週間もの間かけられていた。空腹、かわきで気が狂うまで苦しんで死んだ。

- 悲しみの道（via dolorosa: The Via Dolorosa, meaning “Sorrowful Way” in Latin, is a route in the Old City of Jerusalem that Christians believe Jesus walked on his way to the crucifixion. It’s a path of great religious significance, and pilgrims walk it, especially on Good Friday, marking the Stations of the Cross.）[リンク]
- アレキサンデルとルポスとの父シモンというクレネ人（21）
  - シモン：イスラエルの男性で多い名前。シメオンのギリシャ語化したもの。苦しみを聞かれた（shame on となったとの節あり）ヤコブの子 12 兄弟の 2 番目
    - 創世記 29:33 彼女はまた、みごもって子を産み、「主はわたしが嫌われるのをお聞きになって、わたしにこの子をも賜わった」と言って、名をシメオンと名づけた。
  - クレネ（現在のチュニジアやリビア）人：
    -「クレネ人」とは、北アフリカの地中海に面したところにあるクレネに住んでいる者という意味です。「クレネ」をマルコもルカも「いなか」と称しています。シモンはそこに離散したユダヤ人でした。クレネ島に住むユダヤ人シモンが、過越の祭りに、二人の息子を連れてエルサレムに巡礼に来ていたと思われます。（空知太栄光キリスト教会：銘形秀則牧師）
  - 使徒 13:1 さて、アンテオケにある教会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、およびサウロなどの預言者や教師がいた。
  - ローマ 16:13 主にあって選ばれたルポスと、彼の母とに、よろしく。彼の母は、わたしの母でもある。
  - 同一人物なのだろうか
  -「郊外からきて通りかかったので（　　）」　: land (i. the field, the country, ii. a piece of land, bit of tillage, iii. the farms, country seats, neighbouring hamlets)
- ゴルゴタ（されこうべ）
  - 榊原康夫「マタイ福音書講解」：アラム語「グルガルター」。「されこうべ」のブルガタ・ラテン語訳「カルヴァリウム」から、英語の「カルヴァリ」が由来した。ここが山または丘であった証拠はなく、町の外、しかも近くにあった以外、何もわかっていない。
    - イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので（ヨハネ 19:20a）
- 没薬をまぜたぶどう酒

  - 榊原康夫「マタイ福音書講解」:『タルムード』によれば、箴言 31:6「濃い酒を滅びようとしている者に与え、／酒を心の苦しむ人に与えよ。」に基づいて始まった、エルサレム市婦人団体の慈善的慣行。
- 着物
  - 内側の衣、外衣、サンダル、帯、ターバン
- 詩篇 22 編
  - 聖歌隊の指揮者によってあけぼののめじかのしらべにあわせてうたわせたダビデの歌
  - 1 わが神、わが神、／なにゆえわたしを捨てられるのですか。なにゆえ遠く離れてわたしを助けず、／わたしの嘆きの言葉を聞かれないのですか。2 わが神よ、わたしが昼よばわっても、／あなたは答えられず、／夜よばわっても平安を得ません。3 しかしイスラエルのさんびの上に座しておられる／あなたは聖なるおかたです。4 われらの先祖たちはあなたに信頼しました。彼らが信頼したので、あなたは彼らを助けられました。5 彼らはあなたに呼ばわって救われ、／あなたに信頼して恥をうけなかったのです。6 しかし、わたしは虫であって、人ではない。人にそしられ、民に侮られる。7 すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、／くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、8 「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。9 しかし、あなたはわたしを生れさせ、／母のふところにわたしを安らかに守られた方です。10 わたしは生れた時から、あなたにゆだねられました。母の胎を出てからこのかた、／あなたはわたしの神でいらせられました。11 わたしを遠く離れないでください。悩みが近づき、助ける者がないのです。12 多くの雄牛はわたしを取り巻き、／バシャンの強い雄牛はわたしを囲み、13 かき裂き、ほえたけるししのように、／わたしにむかって口を開く。14 わたしは水のように注ぎ出され、／わたしの骨はことごとくはずれ、／わたしの心臓は、ろうのように、胸のうちで溶けた。15 わたしの力は陶器の破片のようにかわき、／わたしの舌はあごにつく。あなたはわたしを死のちりに伏させられる。16 まことに、犬はわたしをめぐり、／悪を行う者の群れがわたしを囲んで、／わたしの手と足を刺し貫いた。17 わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。18 彼らは互にわたしの衣服を分け、／わたしの着物をくじ引にする。19 しかし主よ、遠く離れないでください。わが力よ、速く来てわたしをお助けください。20 わたしの魂をつるぎから、／わたしのいのちを犬の力から助け出してください。21 わたしをししの口から、／苦しむわが魂を野牛の角から救い出してください。22 わたしはあなたのみ名を兄弟たちに告げ、／会衆の中であなたをほめたたえるでしょう。23 主を恐れる者よ、主をほめたたえよ。ヤコブのもろもろのすえよ、主をあがめよ。イスラエルのもろもろのすえよ、主をおじおそれよ。24 主が苦しむ者の苦しみをかろんじ、いとわれず、／またこれにみ顔を隠すことなく、／その叫ぶときに聞かれたからである。25 大いなる会衆の中で、／わたしのさんびはあなたから出るのです。わたしは主を恐れる者の前で、／わたしの誓いを果します。26 貧しい者は食べて飽くことができ、／主を尋ね求める者は主をほめたたえるでしょう。どうか、あなたがたの心がとこしえに生きるように。27 地のはての者はみな思い出して、主に帰り、／もろもろの国のやからはみな、／み前に伏し拝むでしょう。28 国は主のものであって、／主はもろもろの国民を統べ治められます。29 地の誇り高ぶる者はみな主を拝み、／ちりに下る者も、／おのれを生きながらえさせえない者も、／みなそのみ前にひざまずくでしょう。30 子々孫々、主に仕え、／人々は主のことをきたるべき代まで語り伝え、31 主がなされたその救を／後に生れる民にのべ伝えるでしょう。

- イエスが十字架にかかった時刻の不一致について（ChatGPT 2025.05.01 [リンク]）
  - 【時間体系の違い】—「ユダヤ式」と「ローマ式」時間の使用説（有力説）
    - ユダヤ式時間：日の出（午前 6 時）を一日の始まりとし、1 時間ごとに進める。
    - ローマ式時間：午前 0 時を一日の始まりとする現代に近い時間計算法。
  - この説の内容：
    - マルコはユダヤ式時間を使用（第 3 時＝午前 9 時）
    - ヨハネはローマ式時間を使用（第 6 時＝午前 6 時ごろ）
    - → ピラトの裁判は早朝に終わり、十字架刑はその後すぐ。
- イエスの奇跡（マルコ）
  - 8:11-13 人々はしるしを欲しがる
    - 11 パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をしかけ、天からのしるしを求めた。12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。13 そして、イエスは彼らをあとに残し、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。
  - 1:21-28 汚れた霊に取りつかれた男を癒やす
  - *1:29-34* 多くの病人を癒やす
  - 1:40-45 規定の病を患っている人を清める
  - 2:1-12 体の麻痺した人を癒やす
  - 3:1-6 手の萎えた人を癒やす
  - 4:35-41 突風を静める
  - 5:1-20 悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす
  - 5:21-43 ヤイロの娘とイエスの服に触れる女
  - 6:30-44 五千人に食べ物を与える
  - 6:45-52 湖の上を歩く
  - 6:53-56 ゲネサレトで病人を癒やす
  - 7:24-30 シリア・フェニキアの女の信仰
  - 7:31-37 耳が聞こえず舌の回らない人を癒やす
  - 8:1-10 四千人に食べ物を与える
  - 8:22-26 ベトサイダで盲人を癒やす
  - *9:2-13* イエスの姿が変わる
  - 9:14-29 汚れた霊に取りつかれた子を癒やす
  - *11:12-14, 20-26* いちじくの木を呪う/枯れたいちじくの木の教訓
  - *15:33-41* イエスの死
  - *16:1-8* 復活する
- 十字架のそばにいた女性たち
  - ヨハネ 19:25 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。
    - イエスの母、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ

    - 母の姉妹、サロメ、ゼベダイの子たちの母
    - クロパの妻マリヤ
    - マグダラのマリヤ
  - マルコ 15:40,41 40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。
  - マタイ 27:55,56 55 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。
  - ルカ 23:49 49 すべてイエスを知っていた者や、ガリラヤから従ってきた女たちも、遠い所に立って、これらのことを見ていた。
  - [参考] マルコ 6:3 この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。
  - [参考] ルカ 8:1-3 そののちイエスは、神の国の福音を説きまた伝えながら、町々村々を巡回し続けられたが、十二弟子もお供をした。2 また悪霊を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、3 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。
  - [参考] ルカ 24:8 そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。

4.96.6 記録

- 日時：2025 年 5 月 1 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）2 名

4.96.7 問いについて

1. シモンというキレネ人はどのようなことをすることになりますか。（21）
   - 21 そこへ、アレキサンデルとルポスとの父シモンというクレネ人が、郊外からきて通りかかったので、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。
     - [DQ] シモンについては、どのようなことがわかりますか。
       - シモン：イスラエルの男性で多い名前。シメオンのギリシャ語化したもの。苦しみを聞かれた（shame on となったとの節あり）ヤコブの子 12 兄弟の 2 番目

        - 創世記 29:33 彼女はまた、みごもって子を産み、「主はわたしが嫌われるのをお聞きになって、わたしにこの子をも賜わった」と言って、名をシメオンと名づけた。
    - アレキサンデルとルポスとの父：
        - 使徒 13:1 さて、アンテオケにある教会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、およびサウロなどの預言者や教師がいた。
        - ローマ 16:13 主にあって選ばれたルポスと、彼の母とに、よろしく。彼の母は、わたしの母でもある。
    - クレネ人：現在のチュニジアやリビア
    - 郊外からきて通りかかった：いなか？
    - 人々はイエスの十字架を無理に負わせた：徴用（　　：to employ a courier）
- [DQ] なぜ、シモンに、「イエスの十字架を無理に負わせた」のでしょうか。
    - 人々とあるが、無理に（　　：to employ a courier, dispatch a mounted messenger, press into public service, compel to go 強制的に労働させること）は、強制をいみするので、その権限を持っているのは兵隊。槍の先の平らな部分で頭をさわると、従わないといけなかった。（W.B.）
    - [参照] マタイ 5:41 もし、だれかが、あなたをしいて一マイル行かせようとするなら、その人と共に二マイル行きなさい。
- [DQ] シモンにとっては、これはどのような経験だったと思いますか。
    - ルカでは「彼らがイエスをひいてゆく途中、シモンというクレネ人が郊外から出てきたのを捕えて十字架を負わせ、それをになってイエスのあとから行かせた。」（ルカ 23:26）十字架を負ってついていく姿が印象的に描かれている。
        - マルコ 8:34 それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい。
            - マタイ 16:24 それから、弟子たちに言われた。「私に付いて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい。
        - ルカ 9:23 それから、イエスは皆に言われた。「私に付いて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を負って、私に従いなさい。
        - ルカ 14:27 自分の十字架を負って、私に付いて来る者でなければ、私の弟子ではありえない。

2. 十字架につけられるまでについてについてどのようなことが書かれていますか。（22-24）

- 22 そしてイエスをゴルゴタ、その意味は、されこうべ、という所に連れて行った。23 そしてイエスに、没薬をまぜたぶどう酒をさし出したが、お受けにならなかった。24 それから、イエスを十字架につけた。そしてくじを引いて、だれが何を取るかを定めたうえ、イエスの着物を分けた。
- [DQ] どこで、どのように十字架にかけられますか。
  - ゴルゴタ、その意味は、されこうべ、という所に連れて行った。
  - 髑髏の形の丘か？髑髏が散らかっているとは考えられていない。
- [DQ] なぜ、イエスは、没薬をまぜたぶどう酒を飲まなかったのでしょうか。
  - [参照] 14:25 あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。
- [DQ] 着物はどのようなものを分けたのでしょうか。
  - サンダル、ターバン、帯、衣、上衣（ヨハネではより詳しく）
  - ヨハネ 19:23,24 23 さて、兵卒たちはイエスを十字架につけてから、その上着をとって四つに分け、おのおの、その一つを取った。また下着を手に取ってみたが、それには縫い目がなく、上の方から全部一つに織ったものであった。24 そこで彼らは互に言った、「それを裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう」。これは、「彼らは互にわたしの上着を分け合い、わたしの衣をくじ引にした」という聖書が成就するためで、兵卒たちはそのようにしたのである。
    - 詩篇 22:18 彼らは互にわたしの衣服を分け、／わたしの着物をくじ引にする。

3. 十字架刑についてほかにどのようなことが書かれていますか。(25-28)

- 25 イエスを十字架につけたのは、朝の九時ごろであった。26 イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。27 また、イエスと共にふたりの強盗を、ひとりを右に、ひとりを左に、十字架につけた。28 〔こうして「彼は罪人たちのひとりに数えられた」と書いてある言葉が成就したのである。〕
- [DQ] 何時ごろとされていますか。
  - （第 3 時）
  - ヨハネ 19:14 その日は過越の準備の日であって、時は昼の十二時ころであった。ピラトはユダヤ人らに言った、「見よ、これがあなたがたの王だ」。
  - 有力な説：マルコはユダヤ式時間を使用（第 3 時＝午前 9 時)、ヨハネはローマ式時間を使用（第 6 時＝午前 6 時ごろ）
- [DQ] 28 節は？

  - イザヤ 53:12 それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に／物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、／とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、／とがある者のためにとりなしをした。
  - とがある者と共に数えられたからである。

4. 周囲のひとたちの様子はどのように描かれていますか。（29-32）

- 29 そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって言った、「ああ、神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ、30 十字架からおりてきて自分を救え」。31 祭司長たちも同じように、律法学者たちと一緒になって、かわるがわる嘲弄して言った、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。32 イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」。また、一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。
- [DQ] どのようなひとたちが、どのように、イエスを嘲弄（馬鹿にしてなぶること。あざけりもてあそぶこと。ridicule ; mockery ; derision ; a scoff ; scorn.）しますか。
  - そこを通りかかった者たち：29b イエスをののしって言った、「ああ、神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ、30 十字架からおりてきて自分を救え」。’
  - 祭司長たち、律法学者たち：31b かわるがわる嘲弄して言った、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。32 イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」。
  - 一緒に十字架につけられた者たち：イエスをののしった
- [DQ] 「いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」とありますが、ひとは、何によって、何を信じるのでしょうか。
  - [Q] 降りてきたら、信じるのでしょうか。
    * 「イエスが十字架からおりてこなかったので、我々は彼を信じるのである。」（ウイリアム・ブース 1829-1912）
  - [Q] イエスも奇跡といわれることをいくつかしていることが、マルコにも書かれています。これらの目的は何だったのでしょうか。
  - 悪霊：1:21-28 汚れた霊に取りつかれた男を癒やす
  - 病気・けが・障害：
    * らい病：1:40-45 規定の病を患っている人を清める
    * 中風：2:1-12 体の麻痺した人を癒やす
    * 手の萎えたひと：3:1-6 手の萎えた人を癒やす

  - 重い病・死：5:21-43 ヤイロの娘とイエスの服に触れる女
  - 病人：6:53-56 ゲネサレトで病人を癒やす
  - 障害者：
    * 耳が聞こえずしたが回らない：7:31-37 耳が聞こえず舌の回らない人を癒やす
    * 盲人：8:22-26 ベトサイダで盲人を癒やす
  - 汚れた霊に憑かれた子：9:14-29 汚れた霊に取りつかれた子を癒やす、7:24-30 シリア・フェニキアの女の信仰
  - その他：
    * 給食：6:30-44 五千人に食べ物を与える、8:1-10 四千人に食べ物を与える
    * 変貌：6:45-52 湖の上を歩く、9:2-13 イエスの姿が変わる
- マタイ 4:5-7 それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて 6 言った、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから」。7 イエスは彼に言われた、「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」。（ルカ 4:9-12）
- [参照] 1 ペテロ 2:23 ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。
- 詩篇 22 篇を読んでみましょう。
  - 7,8 7 すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、／くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、8 「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。(30-32)
  - 18 彼らは互にわたしの衣服を分け、／わたしの着物をくじ引にする。（24）

5. ルカには、さらにどのようなことが書かれていますか。

- [DQ] どのような人たちがイエスたちについてきますか。(27)
  - 27 大ぜいの民衆と、悲しみ嘆いてやまない女たちの群れとが、イエスに従って行った。
  - [参照] ルカ 8:52 人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。イエスは言われた、「泣くな、娘は死んだのではない。眠っているだけである」。
    * マルコ 5:38 彼らが会堂司の家に着くと、イエスは人々が大声で泣いたり、叫んだりして、騒いでいるのをごらんになり、

    - マタイ 9:23 それからイエスは司の家に着き、笛吹きどもや騒いでいる群衆を見て言われた。
  - [Q] イエスは婦人たちに何を伝えていますか。(28-31)
    - 28 イエスは女たちの方に振りむいて言われた、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい。29 『不妊の女と子を産まなかった胎と、ふくませなかった乳房とは、さいわいだ』と言う日が、いまに来る。30 そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。31 もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」。
- [DQ] イエスはどのように祈っていますか。(34)
  - 「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」
    - ステパノの祈り：使徒 7:59,60 こうして、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」。そして、ひざまずいて、大声で叫んだ、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」。こう言って、彼は眠りについた。
- [DQ] イエスと一緒に十字架にかけられた犯罪人に対し、イエスはどのように答えていますか。(39-43)
  - 39 十字架にかけられた犯罪人のひとりが、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と、イエスに悪口を言いつづけた。40 もうひとりは、それをたしなめて言った、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。41 お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」。42 そして言った、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。43 イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。

6. ヨハネには、さらにどのようなことが書かれていますか。

- [DQ] 罪状書には何語でどのように書かれていますか。（ヨハネ 19:19-22）
  - 19 ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。20 イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。21 ユダヤ人の祭司長たちがピラトに言った、「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」。22 ピラトは答えた、「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」。
- イエスの衣服はどのようにされますか。
- 衣服のことはどのような聖書の言葉の実現だとしていますか。

- そこで彼らは互に言った、「それを裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう」。これは、「彼らは互にわたしの上着を分け合い、わたしの衣をくじ引にした」という聖書が成就するためで、兵卒たちはそのようにしたのである。
- 詩篇 22:8 彼らは互にわたしの衣服を分け、／わたしの着物をくじ引にする。

- [DQ] だれが一緒にいますか。
  - ヨハネ 19:25 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。
  - マルコ 15:40,41 40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。
  - マタイ 27:55,56 55 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。
  - ルカ 23:49 49 すべてイエスを知っていた者や、ガリラヤから従ってきた女たちも、遠い所に立って、これらのことを見ていた。
- ヨハネは、この箇所を通して何を伝えているのでしょうか。What does John tell us?

4.96.8 メモ

- 問い
  - アレキサンデルとルポスとの父シモンはなぜイエスの十字架を負わされることになったのだろう。
  - イエスの十字架は、どのようなもので、人々の目には、どのように映ったのだろうか。
- 「こうして、イエスを嘲弄したあげく、紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを十字架につけるために引き出した。」（15:20）に続けて、「そこへ、アレキサンデルとルポスとの父シモンというクレネ人が、郊外からきて通りかかったので、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。」（21）と始まる。たまたま通りかかったという表現である。「アレキサンデルとルポスとの父」とあるが、ローマ 16:13 の「主にあって選ばれたルポス」とは同一人物だろうか。何らかの関係がないと、名前を出して書かれることは拒否していたかもしたかもしれない。連れて行った先は「ゴルゴタ、その意味は、されこうべ」。エルサレムの城壁外、北西の地のようである。に「そしてイエスに、没薬をまぜたぶどう酒をさし出したが、お受けにならなかった。」（23）一般的に、痛み止めと言われるが、それを受けられたなったことが記録されている。くじをひいて、イエスの着物を分けたことが書かれている。これが、イエスの着物なのか、ヘロデが与えたものかは不明。「イエスを十字架につけたのは、朝の九時ごろであった。イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。また、イエスと共にふたりの強盗を、ひとりを右に、

ひとりを左に、十字架につけた。」とある。罪状は、この程度で十分だったのかもしれない。「ああ、神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ、十字架からおりてきて自分を救え」（15:29,30）とあり、裁判では、明確にならなかったようだが（14:58）この件が重要視されたということだろう。つづけて、祭司長たちや、律法学者たちが、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」。（31,32）であったことが記録されている。さらに、「一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。」（32）とある。興味深いのは、「ユダヤ人の王」「イスラエルの王」と両方が用いられ、かつ、他人を救ったとも、証言されていることである。それが、自分の関係しなければ、嘲笑の対象でしかないということだろうか。

- 福音書の差異：マタイは、微細な違いはあるが、基本的に、マルコを踏襲している。ルカでは、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな」（23:26）から始まる、終末または、エルサレム陥落の預言と思われることばが、挿入され、さらに、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。（23:34）が付加されている。これは、使徒行伝 7:60 のステパノの祈りに通じる。さらに、イエスとともに十字架にかかった、たの二人の受刑者との会話が付加され、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。（42,43）の美しい言葉でおわっている。ヨハネは、罪状書についてより詳しく、「ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。ユダヤ人の祭司長たちがピラトに言った、「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」。ピラトは答えた、『わたしが書いたことは、書いたままにしておけ』。」（ヨハネ 19:19-22）と詳細に書かれ、さらに、最後に、イエスの母についての言葉などが付け加えられれいる。「さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、『婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です』。それからこの弟子に言われた、『ごらんなさい。これはあなたの母です』。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。」（ヨハネ 19:25-27）

4.97　15:33-41 イエスの死

33 昼の十二時になると、全地は暗くなって、三時に及んだ。34 そして三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。35 すると、そばに立っていたある人々が、これを聞いて言った、「そら、エリヤを呼んでいる」。36 ひとりの人が走って行き、海綿に酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとして言った、「待て、エリヤが彼をおろしに来るかどうか、見ていよう」。37 イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた。38 そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。39 イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコ

ブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。

4.97.1 マタイ 27:45-56

45 さて、昼の十二時から地上の全面が暗くなって、三時に及んだ。46 そして三時ごろに、イエスは大声で叫んで、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言われた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。47 すると、そこに立っていたある人々が、これを聞いて言った、「あれはエリヤを呼んでいるのだ」。48 するとすぐ、彼らのうちのひとりが走り寄って、海綿を取り、それに酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとした。49 ほかの人々は言った、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」。50 イエスはもう一度大声で叫んで、ついに息をひきとられた。51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。また地震があり、岩が裂け、52 また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。53 そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。54 百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、「まことに、この人は神の子であった」と言った。55 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。

4.97.2 ルカ 23:44-49

44 時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は暗くなって、三時に及んだ。45 そして聖所の幕がまん中から裂けた。46 そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。47 百卒長はこの有様を見て、神をあがめ、「ほんとうに、この人は正しい人であった」と言った。48 この光景を見に集まってきた群衆も、これらの出来事を見て、みな胸を打ちながら帰って行った。49 すべてイエスを知っていた者や、ガリラヤから従ってきた女たちも、遠い所に立って、これらのことを見ていた。

4.97.3 ヨハネ 19:28-30

28 そののち、イエスは今や万事が終ったことを知って、「わたしは、かわく」と言われた。それは、聖書が全うされるためであった。29 そこに、酢いぶどう酒がいっぱい入れてある器がおいてあったので、人々は、このぶどう酒を含ませた海綿をヒソプの茎に結びつけて、イエスの口もとにさし出した。30 すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「すべてが終った」と言われ、首をたれて息をひきとられた。

マルコによる福音書 15 章 33-41 節福音書対照表

4.97.4　問い

1. イエスの十字架について、復習しましょう。(21-32)
2. イエスが大声で叫んだ時の様子はどのように描かれていますか。(33,34)
3. 周囲の人たちについては、どのように描かれていますか。(35,36)
4. イエスの死については、どのように描かれていますか。(37,38)
5. その場にどのような人がいますか。百卒長は、なぜこのように告白したのでしょうか。(39-41)
6. 他の福音書からは、さらに、どのようなことがわかりますか。

4.97.5　参照

- 受難週のエルサレムの地図 [The Passion Week in Jerusalem]
- 暗闇
  - 出エジプト記 10:21-23 主はまたモーセに言われた、「天にむかってあなたの手をさし伸べ、エジプトの国に、くらやみをこさせなさい。そのくらやみは、さわれるほどである」。22 モーセが天にむかって手をさし伸べたので、濃いくらやみは、エジプト全国に臨み三日に及んだ。23 三日の間、人々は互に見ることもできず、まただれもその所から立つ者もなかった。しかし、イスラエルの人々には、みな、その住む所に光があった。
  - 過越祭は、満月の時なので、新月におこる、日食はあり得ない。
  - アモス 8:9,10 主なる神は言われる、／「その日には、／わたしは真昼に太陽を沈ませ、／白昼に地を暗くし、10 あなたがたの祭を嘆きに変らせ、／あなたがたの歌をことごとく悲しみの歌に変らせ、／すべての人に荒布を腰にまとわせ、／すべての人に髪をそり落させ、／その日を、ひとり子を失った喪中のようにし、／その終りを、苦い日のようにする」。
- イエスの死について
  - 最後の晩餐：マルコ 14:22-25 [リンク]　22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。23 また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。24 イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。25 あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。

- 仕えるものとなる：マルコ 10:45 [リンク] 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。

- 「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」E （「わが神」のアラム語の音をギリシャ語で表記したもの） （アラム語） （ヘブル語） （「なぜ」のアラム語の音をギリシャ語で表記したもの） （ヘブル語） or （カルデヤの発音） （「わたしをお見捨てになった」thou hast forsaken me の） （ カルデヤの発音）
  - 詩篇 22:1a)わが神、わが神、／なにゆえわたしを捨てられるのですか。) ヘブル語では、エーリー、エーリー、ラーマー、アザブターニー、聖書朗読のアラム語訳は、エリ、エリ、メトゥル、マ、サバクタニ
  - 詩篇 22:1-11 わが神、わが神、／なにゆえわたしを捨てられるのですか。なにゆえ遠く離れてわたしを助けず、／わたしの嘆きの言葉を聞かれないのですか。2 わが神よ、わたしが昼よばわっても、／あなたは答えられず、／夜よばわっても平安を得ません。3 しかしイスラエルのさんびの上に座しておられる／あなたは聖なるおかたです。4 われらの先祖たちはあなたに信頼しました。彼らが信頼したので、あなたは彼らを助けられました。5 彼らはあなたに呼ばわって救われ、／あなたに信頼して恥をうけなかったのです。6 しかし、わたしは虫であって、人ではない。人にそしられ、民に侮られる。7 すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、／くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、8 「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。9 しかし、あなたはわたしを生れさせ、／母のふところにわたしを安らかに守られた方です。10 わたしは生れた時から、あなたにゆだねられました。母の胎を出てからこのかた、／あなたはわたしの神でいらせられました。11 わたしを遠く離れないでください。悩みが近づき、助ける者がないのです。
  -「神に見捨てられる」ことは、罪の結果。
    * 14:24b これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。
    * 10:45 多くの人のあがないとして、自分の命を与えるため
    * わたしたちの罪を担われた。
    * イザヤ 53:12b 彼が自分の命を死に至るまで注ぎ出し／背く者の一人に数えられたからだ。／多くの人の罪を担い／背く者のために執り成しをしたのは／この人であった。
  - イエスの生理的激痛を描かない。
    * [10] 彼らは二人の悪事を働く者を連れて来て、彼らの真ん中で主を十字架につけた。しかし主は痛みも感じていないかのように黙っていた。（ペテロの福音書 [リンク]）
  - 榊原康夫『マタイ福音書講解（下巻)』この「神に見捨てられた」体験は、弟子の裏切りとか、サンヘドリンの判決とか、異邦の兵士による十字架処刑とかいうような、外面的な不運のことではありません。なぜなら、のちのキリスト教殉教者たちは、イエスの肉体的苦痛にまさるとも劣らぬ極刑にあい

ながらも、神の守りと助けを疑わずに死んでいったからです。また、イエスはすでに、ゲッセマネの祈りにおいて、十字架上で死ぬことこそ神の見定めであることを確認しておられたからです。ですから、「見捨てられた」というのは、むしろ、死というできごとにおいて、父なる神が、イエスの父また味方という立場から、イエスの敵の立場に移りたもうたということ、イエスの慈父ではなくて、罪人に怒りとのろいを注ぐ審判者の立場をとっておられることなのです。そうしてそこに、人間が戦々兢々として怯える死の正体があります。人間の死とは、人が神をのけものにして生きてきた自分の後ろめたい人生に対して、死後、神の報復と審判がありはしまいか、いや、あるにちがいないと、恐る恐る覗き込む、不気味な真っ暗な穴なのです。（中略）だからこそ、人には死が怖いのです。イエスが死によって罪人の罪を償ってくださるということは、罪人たちが立たされるこの神との対決の場に、わたしたちにん代わって立ってくださる、ということに他なりません。神のひとり子である彼が、このとき、愛と信頼に満ちた父子関係から離れて、義なる審判者と罰せられる罪人という関係に入っておられるのです。それが、「わたしを見捨てられた」という体験であります。（中略）「19 すなわち、神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである。20 神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。21 神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。」（コリント後書 5:19-21）

- 「38 そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。」
  - 神への道が広く開かれた。それまでは、至聖所には、大祭司のみが、一年一度贖いの日にのみ入ることができた。
  - 神と顔と顔をあわせて見ることができるようになった。
  - 垂れ幕：出エジプト記 26:31-35 また青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で垂幕を作り、巧みなわざをもって、それにケルビムを織り出さなければならない。32 そして金でおおった四つのアカシヤ材の柱の金の鉤にこれを掛け、その柱は四つの銀の座の上にすえなければならない。33 その垂幕の輪を鉤に掛け、その垂幕の内にあかしの箱を納めなさい。その垂幕はあなたがたのために聖所と至聖所とを隔て分けるであろう。34 また至聖所にあるあかしの箱の上に贖罪所を置かなければならない。35 そしてその垂幕の外に机を置き、幕屋の南側に、机に向かい合わせて燭台を置かなければならない。ただし机は北側に置かなければならない。出エジプト記 25:21-22 あなたは贖罪所を箱の上に置き、箱の中にはわたしが授けるあかしの板を納めなければならない。22 その所でわたしはあなたに会い、贖罪所の上から、あかしの箱の上にある二つのケルビムの間から、イスラエルの人々のために、わたしが命じようとするもろもろの事を、あなたに語るであろう。
  - ヘブル 10:19,20 兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかることなく聖所にはいることができ、20 彼の肉体なる幕をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいって行くことができるのであり、
- 十字架上の七言（どの順番かは不明）

1. ルカ 23:34b 「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。
2. ルカ 23:43 「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。
3. ヨハネ 19:26,27 「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。「ごらんなさい。これはあなたの母です」。
4. マルコ 15:34b「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 27:46b）
5. ヨハネ 19:28b 「わたしは、かわく」
6. ヨハネ 19:30b 「すべてが終った」
7. ルカ 23:46 「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。

- 百卒長
  - 15:43-45 43 アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。44 ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。45 そして、百卒長から確かめた上、死体をヨセフに渡した。
  - マタイ 8:5-13 さて、イエスがカペナウムに帰ってこられたとき、ある百卒長がみもとにきて訴えて言った、6 「主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています」。7 イエスは彼に、「わたしが行ってなおしてあげよう」と言われた。8 そこで百卒長は答えて言った、「主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。9 わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいまして、ひとりの者に『行け』と言えば行き、ほかの者に『こい』と言えばきますし、また、僕に『これをせよ』と言えば、してくれるのです」。10 イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、「よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。11 なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、12 この国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」。13 それからイエスは百卒長に「行け、あなたの信じたとおりになるように」と言われた。すると、ちょうどその時に、僕はいやされた。
    * 百卒長のはなしを聞いていたかもしれない。（ルカ 7:1-10、参照ヨハネ 4:43-54 役人）
- 目撃者比較
  - マルコ 15:40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。

    - マルコ 16:1 さて、安息日が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。
  - マタイ 27:55 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。
    - マタイ 28:1 さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。
  - ヨハネ 19:25 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。
    - マグダラのマリヤ
    - 小ヤコブとヨセとの母マリヤ = ヤコブとヨセフとの母マリヤ = イエスの母
    - サロメ = またゼベダイの子たちの母＝イエスの母の姉妹
    - クロパの妻マリヤ（ほかのマリヤ？）
- ヨハネは、イエスの死のあとに、19:32-37
  - 32 そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。33 しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。34 しかし、ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。35 それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人は、自分が真実を語っていることを知っている。それは、あなたがたも信ずるようになるためである。36 これらのことが起ったのは、「その骨はくだかれないであろう」との聖書の言葉が、成就するためである。37 また聖書のほかのところに、「彼らは自分が刺し通した者を見るであろう」とある。

4.97.6 記録

- 日時：2025 年 5 月 8 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）4 名

4.97.7 問いについて

1. イエスの十字架について、復習しましょう。（21-32）
   - 21 そこへ、アレキサンデルとルポスとの父シモンというクレネ人が、郊外からきて通りかかったので、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。22 そしてイエスをゴルゴタ、その意味は、されこう

べ、という所に連れて行った。23 そしてイエスに、没薬をまぜたぶどう酒をさし出したが、お受けにならなかった。24 それから、イエスを十字架につけた。そしてくじを引いて、だれが何を取るかを定めたうえ、イエスの着物を分けた。

- 25 イエスを十字架につけたのは、朝の九時ごろであった。26 イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。27 また、イエスと共にふたりの強盗を、ひとりを右に、ひとりを左に、十字架につけた。

- 29 そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって言った、「ああ、神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ、30 十字架からおりてきて自分を救え」。31 祭司長たちも同じように、律法学者たちと一緒になって、かわるがわる嘲弄して言った、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。32 イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」。また、一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

1. クレネ人シモンに十字架を無理に負わせ、ゴルゴタへ（21,22）
2. 没薬をまぜた葡萄酒を差し出すが、イエスは受け取らず（23）
3. イエスを十字架につけ、その着物をくじで分ける（24）
4. 朝 9 時ごろ二人の強盗とともに、十字架につけられ、罪状書きには、「ユダヤ人の王」と記してあった（25-27）
5. 「そこを通りかかった者たち」、「祭司長たちも同じように、律法学者たちと一緒に」、「一緒に十字架につけられた者たちも」そこにいたすべてのものたち（イエスについてきた女性たちは別だろうが）は、イエスをののしり、嘲笑した（29-32）

2. イエスが大声で叫んだ時の様子はどのように描かれていますか。（33,34）

- 33 昼の十二時になると、全地は暗くなって、三時に及んだ。34 そして三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

- [榊原康夫『マタイ講解』詩篇 22:1a　　)わが神、わが神、／なにゆえわたしを捨てられるのですか。)　ヘブル語では、エーリー、エーリー、ラーマー、アザブターニー、聖書朗読のアラム語訳は、エリ、エリ、メトゥル、マ、サバクタニ
  - ヘブル語を英語、アラム語を日本語とすると「わが神、わが神! Why? わたしをお見捨てになられたのですか。」アラム語の発音としても問題はない。
  - 　　：アラム語の動詞「　」（šəvaq, 「捨てる」「見捨てる」）の完了形（2 人称）

- [DQ] 昼の 12 時から 3 時まで、全地が暗くなったことは、なにを伝えているのか。
  - 自然現象か、心象的なものの表現か。

  - 満月なので、日食ではありえない。日食は新月のときにおこる。

- [DQ] イエスは神に見捨てられたのだろうか。
  - 肉体的苦痛は描かれていない。殉教者はこのイエス以上の肉体的・精神的苦しみを味わうものもいた。
  - ゲッセマネで、神からの召命（このことが主（イエスの父なる神）からきていること）については解決済み：14:36 「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」
  - 罪を担った結果、（父なる神の御心に生きてきた、神の子イエスが）神から引き離された。
    * マルコ 14:24b これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。
    * マルコ 10:45 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである

- [DQ] 神はなぜイエスに答えないのでしょう。
  - 神がよしとされることだった。
  - 愛する子をとおして、罪人であるすべての人々と和解した。
    * コリント後書 5:19-21 19 すなわち、神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである。20 神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。21 神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。

3. 周囲の人たちについては、どのように描かれていますか。（35,36）

- 35 すると、そばに立っていたある人々が、これを聞いて言った、「そら、エリヤを呼んでいる」。36 ひとりの人が走って行き、海綿に酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとして言った、「待て、エリヤが彼をおろしに来るかどうか、見ていよう」。
- [DQ] これは、どのようなことを伝えているのだろうか。
  - そばに立っていたある人々は、ユダヤ人で、アラム語の発音を聞き間違い、エリヤと言っているととることはあり得ない。
  - 神の使いとして、エリヤが助けに来るかもしれないと考えていた。
  - 興味本位。酢い葡萄酒も、気付のためで、（信仰的に）神に心が向いているわけではない。
- エリヤ：マルコ 9:11-13 そしてイエスに尋ねた、「なぜ、律法学者たちは、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか」。12 イエスは言われた、「確かに、エリヤが先にきて、万事を元どおりに改め

る。しかし、人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか。13 しかしあなたがたに言っておく、エリヤはすでにきたのだ。そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった」。

- 酢いぶどう酒：詩篇 69:22 彼らはわたしの食物に毒を入れ、／わたしのかわいた時に酢を飲ませました。

4. イエスの死については、どのように描かれていますか。(37,38)

- 37 イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた。38 そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。
- [DQ] イエスは、どのように叫んだのでしょうか。
  - 「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」
  - ヨハネ 19:28b 「わたしは、かわく」19:30b 「すべてが終った」
  - ルカ 23:46 「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。
- [DQ] 神殿の幕のことはなにを意味していると思いますか。
  - ヘブル 10:19,20 兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかることなく聖所にはいることができ、20 彼の肉体なる幕をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいって行くことができるのであり、
  - 基本的には、神との関係に関して特別のことが起こったことを意味しているのだろう。物質的な障壁、または、特別な人（大祭司）を介してでないと、神との交わりが許されない状況が変化したことを伝えているのだろう。物理的に、神殿の幕が裂けたかどうかは、確認が困難。

5. その場にどのような人がいますか。百卒長は、なぜこのように告白したのでしょうか。(39-41)

- 39 イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。
- [DQ] 「まことに、この人は神の子であった」。は、どう考えたら良いのだろうか。
  - [Q] なぜ、このような告白に至ったのか。
    - 百卒長は、たくさんの人の死をみていた可能性がある。
    - マタイ 27:51-54 51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。また地震があり、岩が裂け、52 また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。53 そしてイ

エスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。54 百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、「まことに、この人は神の子であった」と言った。

  - [Q] なぜ、百人隊長？
    * 中間管理職。ある程度世の中を知っている。異邦人。
    * マタイ 8:5-13　百卒長のはなしを聞いていたかもしれない。（ルカ 7:1-10、参照ヨハネ 4:43-54 役人）

- [DQ] なぜ、ここで、名前まで出して、女性たちのことが書かれているのだろうか。
  - 空の墓につながる？複数の証人が必要だったのだろうか。
  - 男性の弟子はここにはいない。ヨハネによる福音書記者のみか？

6. 他の福音書からは、さらに、どのようなことがわかりますか。

- マタイ：イエスの死に際して、他にどのようなことがあったと書かれていますか。
  - 51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。また地震があり、岩が裂け、52 また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。53 そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。54 百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、「まことに、この人は神の子であった」と言った。
  - 百卒長および彼と一緒にイエスの番をしていた人々が「まことに、この人は神の子であった」根拠として、特別な事象について描いている。

- ルカ：イエスや百卒長のことばは、どのように記録されていますか。
  - 46 そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。47 百卒長はこの有様を見て、神をあがめ、「ほんとうに、この人は正しい人であった」と言った。48 この光景を見に集まってきた群衆も、これらの出来事を見て、みな胸を打ちながら帰って行った。
  - ギリシャ語以外の言語も入り混じって理解も難しい「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」を記録していない。
  - イエスの最後の叫びを、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」であると解釈している。そして、百卒長の「ほんとうに、この人は正しい人であった」の告白によって、自分をも、正しくない側に置いている。
  - イエスの死は、他の人にとっても、特別なものであったことを伝えている。

- ヨハネ：

- 28 そののち、イエスは今や万事が終ったことを知って、「わたしは、かわく」と言われた。それは、聖書が全うされるためであった。29 そこに、酢いぶどう酒がいっぱい入れてある器がおいてあったので、人々は、このぶどう酒を含ませた海綿をヒソプの茎に結びつけて、イエスの口もとにさし出した。30 すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「すべてが終った」と言われ、首をたれて息をひきとられた。
- ルカと同様に、ギリシャ語以外の言語も入り混じって理解も難しい「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」を記録していない。
- [DQ] 「わたしは、かわく（Δ　: to suffer thirst, suffer from thirst）」とは、どのような意味でしょうか。
  - 欠乏を訴えているが、たんに、喉が乾いたということではないだろう。
  - 詩篇 22:15 わたしの力は陶器の破片のようにかわき、／わたしの舌はあごにつく。あなたはわたしを死のちりに伏させられる。
- [DQ] 「すべてが終った（　　: to bring to a close, to finish, to end）」とは、どのような意味でしょうか。
  - 地上における、使命が終わったことを意味しているのだろう。
  - 葡萄酒を受け、このように叫んで死んでいく人生を、わたしも許されれば幸せ。
  - ヨハネ 17:4 わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。

4.97.8　メモ

- 問い
  - 「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と言われたイエスの心の中はどのようなものだったのだろうか。
  - 「神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた」は何を伝えているのだろうか。
  - 百卒長は、なぜ、「まことに、この人は神の子であった」と言ったのだろうか。
  - 「遠くの方から見ている女たちもいた。」なぜここで女性たちのことを書いているのだろうか。
- 概要
  - 前段では、イエスが十字架に架かり、さまざまな人々が、イエスを罵ったり、嘲弄したりする様子が最後に書かれていたが、まず、「昼の十二時になると、全地は暗くなって、三時に及んだ。」（33）とあり、昼の正午に暗くなり、それは、三時までとある。日食のときとは、あっていないようなので、単に、暗雲が立ち込めたことが言われているのだろう。「そして三時に、イエスは大声で、『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになっ

たのですか』という意味である。」（34）とある。マタイには、書かれているが、ルカと、ヨハネにはない。衝撃的すぎると考えられたのかもしれない。この段落の中心は、これをどう受け取るかだろう。そのあとには、「すると、そばに立っていたある人々が、これを聞いて言った、『そら、エリヤを呼んでいる』。ひとりの人が走って行き、海綿に酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとして言った、『待て、エリヤが彼をおろしに来るかどうか、見ていよう』。」（35,36）とあり、エリヤを呼んでいると受け取ったようだ。そして、「イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた。」（37）消耗刑なので、非常に早い死だと言わざるを得ない。イエスの死因も考えるべき課題だろう。さらに「そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。」（38）とあるが、これがどのようにどこから見えたかなど、疑問点も残り、象徴的な意味として、宣言されているのだろう。このときに、「イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、『まことに、この人は神の子であった』。」（39）これは、どう受け取ったらよいのだろうか。そして最後に「また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。」（40,41）と女性たちのことが書かれているが、これは何のためだろうか。

- 福音書の差異：
  - マタイ：『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』は、マタイにしかない。マタイは、加えて、「また地震があり、岩が裂け、52 また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。」（27:51b-53）とあり、このことを根拠にして、百人隊長が「まことに、この人は神の子であった」（54b）としている。基本的には、マルコを踏襲しているので、最後の女性たちについての記述は、同じ人について言っていると考えて良いだろう。すなわち、「小ヤコブとヨセとの母マリヤ」は「ヤコブとヨセフとの母マリヤ」、「サロメ」は「ゼベダイの子たちの母」。
  - ルカ：イエスの最後の言葉を「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」（46b）としている。マルコでは、「イエスは声高く叫んで」だけ書かれている。その補完であろう。百人隊長のことばは、「ほんとうに、この人は正しい人であった」（47b）に変更され、最後に、「この光景を見に集まってきた群衆も、これらの出来事を見て、みな胸を打ちながら帰って行った。」（48）としている。女性たちの名前を書かないのは、危険を避けるためよりも、読者にとって価値がないと判断したのだろうか。
  - ヨハネ：言葉が変更されている。「わたしは、かわく」「すべてが終った」である。
  - それぞれが、酸い葡萄酒についての記述がちょっと違っている。

4.98　15:42-47 墓に葬られる

42 さて、すでに夕がたになったが、その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、43 アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。44 ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。45 そして、百卒長から確かめた上、死体を

ヨセフに渡した。46 そこで、ヨセフは亜麻布を買い求め、イエスをとりおろして、その亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納め、墓の入口に石をころがしておいた。47 マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスが納められた場所を見とどけた。

4.98.1 マタイ 27:57-61

57 夕方になってから、アリマタヤの金持で、ヨセフという名の人がきた。彼もまたイエスの弟子であった。58 この人がピラトの所へ行って、イエスのからだの引取りかたを願った。そこで、ピラトはそれを渡すように命じた。59 ヨセフは死体を受け取って、きれいな亜麻布に包み、60 岩を掘って造った彼の新しい墓に納め、そして墓の入口に大きい石をころがしておいて、帰った。61 マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓にむかってそこにすわっていた。

4.98.2 ルカ 23:50-56

50 ここに、ヨセフという議員がいたが、善良で正しい人であった。51 この人はユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。彼は議会の議決や行動には賛成していなかった。52 この人がピラトのところへ行って、イエスのからだの引取り方を願い出て、53 それを取りおろして亜麻布に包み、まだだれも葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた。54 この日は準備の日であって、安息日が始まりかけていた。55 イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが納められる様子を見とどけた。56 そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。

4.98.3 ヨハネ 19:38-42

38 そののち、ユダヤ人をはばかって、ひそかにイエスの弟子となったアリマタヤのヨセフという人が、イエスの死体を取りおろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトはそれを許したので、彼はイエスの死体を取りおろしに行った。39 また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。40 彼らは、イエスの死体を取りおろし、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料を入れて亜麻布で巻いた。41 イエスが十字架にかけられた所には、一つの園があり、そこにはまだだれも葬られたことのない新しい墓があった。42 その日はユダヤ人の準備の日であったので、その墓が近くにあったため、イエスをそこに納めた。

マルコによる福音書 15 章 42-47 節福音書対照表

4.98.4 問い

1. イエスの十字架上での死について復習しましょう。(33-41)

2. アリマタヤのヨセフは、どのような人で、いつどのようなことをしますか。(42,43)

3. ピラトは、どのように対応しますか。(44,45)

4. ヨセフはどうしますか。(46)

5. 女性たちについてはどのようなことが書かれていますか。(47)

6. 他の福音書からは、さらに、どのようなことがわかりますか。

4.98.5 参照

- アリマタヤ(Arimathea)[地図] ヨッパの東、エルサレムの北西
- マタイにはこのあと、番兵、墓を見張る記事(27:62-66, 28:11-15)
  - 27:62 あくる日は準備の日の翌日であったが、その日に、祭司長、パリサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、63 「長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。64 ですから、三日目まで墓の番をするように、さしずをして下さい。そうしないと、弟子たちがきて彼を盗み出し、『イエスは死人の中から、よみがえった』と、民衆に言いふらすかも知れません。そうなると、みんなが前よりも、もっとひどくだまされることになりましょう」。65 ピラトは彼らに言った、「番人がいるから、行ってできる限り、番をさせるがよい」。66 そこで、彼らは行って石に封印をし、番人を置いて墓の番をさせた。
  - 28:11 女たちが行っている間に、番人のうちのある人々が都に帰って、いっさいの出来事を祭司長たちに話した。12 祭司長たちは長老たちと集まって協議をこらし、兵卒たちにたくさんの金を与えて言った、13「『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』と言え。14 万一このことが総督の耳にはいっても、われわれが総督に説いて、あなたがたに迷惑が掛からないようにしよう」。15 そこで、彼らは金を受け取って、教えられたとおりにした。そしてこの話は、今日に至るまでユダヤ人の間にひろまっている。
  - 番人がどのような人たちだったのか気になる。ユダヤ人で、ローマに雇われていた人たちだろうか。イエスが復活したと装うために、死体を盗み出したのではないかとの疑惑を否定するために、ユダヤ人社会と近いマタイ記者がこの記述を加えた可能性がある。ここまで、祭司長、パリサイ人たちが、予見して行動することも疑わしいこともあり、真偽の程は不明。
- ヨハネは、イエスの死のあとに、19:32-37
  - 32 そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。33 しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。34 しかし、ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。35 それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人は、自分が真実を語っていることを知っている。それは、あなたがたも信ずるようになるためである。36 これらのことが起ったのは、「その骨はくだかれないであろう」との聖書の言葉が、成就するためである。37 また聖書のほかのところに、「彼らは自分が刺し通した者を見るであろう」とある。

- 足を折る理由とイエスの死因：ChatGPT 2025.5.13 [リンク]
  - 十字架刑と足を折る意味：足を折る（＝脛骨を砕く）と、呼吸のために体を持ち上げることができなくなり、急速に窒息死に至ることになります。したがって、これは処刑を早める、あるいは確実に死に至らせるための措置です。
  - 血と水とが流れ出た：心膜・胸膜の液体の流出説（最有力）
    - 十字架上での苦しみにより、心臓周囲や胸腔内に体液（血漿や胸水、心膜液など）が溜まる可能性があります。
    - 死後あるいは死に際して、槍が心臓またはその周囲（心膜嚢）を貫いたことで、水様の液体と血液が同時に出たという解釈です。
    - この場合の「水」は実際には「体液の一種で透明ないし淡黄色」と考えられます。
- William D. Edwards et al. (1986), “On the Physical Death of Jesus Christ”, Journal of the American Medical Association (JAMA), Vol. 255, No. 11, pp. 1455–1463. [リンク]
  - 十字架上での死の要因
    十字架にかけられた者は、窒息死（asphyxiation）に近い形で死亡する。
    吊るされた状態で体を支えるためには足で体を押し上げなければならず、筋肉疲労と痛みにより呼吸が困難に。
    論文では、イエスは「低酸素血症と循環ショックによる心停止」で死亡した可能性が高いと推定。
  - 槍による脇腹の刺傷（ヨハネ 19:34）
    ローマ兵がイエスの脇腹を槍で刺した場面では、「血と水」が流れ出たと記録されている。
    これは心膜液や胸腔内液（胸水）と考えられ、既に心臓が停止していた証拠とされる。
    医学的には、胸腔内の液体が血液と分離して出るのは死後の徴候と一致する。
- コリント前書 15:3-8 3 わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、4 そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。6 そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。7 そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、8 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。
- 14:3-9 ベタニアで香油を注がれる [リンク]
  - 8 この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。
- マタイ 12:40 すなわち、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるであろう。
- コリント前書 15:55 「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」。
- 使徒信条
  - 我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。
    我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。
    主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、

ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、
死にて葬られ、陰府にくだり[*313]、三日目に死人の内よりよみがえり、
天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。
かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。
我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、
からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。
アーメン

- 使徒信条とは（Wikipedia より）
  * 使徒信条（しとしんじょう、ラテン語: Symbolum Apostolicum, 英語: Apostles' Creed）は、キリスト教のうち、西方教会（カトリック教会、聖公会、プロテスタント）における基本信条のひとつ。使徒信経（しとしんきょう）とも。ラテン語原文の冒頭の語をとってクレド (Credo) とも呼ばれる。東方を含む世界公会議での承認は受けていない。
    なお、東方教会（正教会、東方諸教会）では使用されない。東西両教会で使用されるという意味でより広く使われる基本信条には、ニケヤ信条（ニカイア・コンスタンティノポリス信条 [Wikipedia Link]）がある。
  * The Apostles' Creed (Latin: Symbolum Apostolorum or Symbolum Apostolicum), sometimes titled the Apostolic Creed or the Symbol of the Apostles, is a Christian creed or "symbol of faith".
    The creed most likely originated in 5th-century Gaul as a development of the Old Roman Symbol: the old Latin creed of the 4th century. It has been used in the Latin liturgical rites since the 8th century and, by extension, in the various modern branches of Western Christianity, including the modern liturgy and catechesis of the Catholic Church, Lutheranism, Anglicanism, Presbyterianism, Moravianism, Methodism, and Congregational churches.
    It is shorter than the full Niceno-Constantinopolitan Creed adopted in 381, but it is still explicitly trinitarian in structure, with sections affirming belief in God the Father, God the Son, and God the Holy Spirit. It does not address some Christological issues defined in the Nicene Creed. It thus says nothing explicitly about the divinity of either Jesus or the Holy Spirit. For this reason, it was held to predate the Nicene Creed in medieval Latin tradition.
    The expression "Apostles' Creed" is first mentioned in a letter from the Synod of Milan dated AD 390, referring to a belief at the time that each of the Twelve Apostles contributed an article to the twelve articles of the creed.

- ICU 教会信仰告白
  - われらは全能の父なる神とその子イエス・キリストを信ずる。
    われらはイエス・キリストに現れた神の啓示をうけいれ、キリストの教えた生活態度や人生の目的は人類のための神の経綸を示すものであると信ずる。われらは聖書をとおして働き、また神につける人

[*313] ニケア信条では「陰府にくだり」を欠く。「ポンティオ・ピラトのもとで、わたしたちのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおり三日目に復活し、天に昇り、父の右の座に着いておられます。」

々の経験を介して示される聖霊の導きを信ずる。われらはイエス・キリストの宣べた神の国こそ神意による人類と世界とのまことの姿であると信ずる。われらはイエス・キリストに従う者の霊の交わりを信じ、神の国を全世界にひろめすすめる責任のあることを信ずる。
（この信仰宣言は 1954 年本教会設立の際、慎重審議の結果採用されたもので、創立当時の会員の確信の中核をあらわしている。）

- 仮死説についての検証
  - ChatGPT 4o-Latest: 2025.5.11,12 [リンク]
- W. バークレイ『ヨハネ福音書（下）』死体の処理
  - 申命記 21:22-23 もし人が死にあたる罪を犯して殺され、あなたがそれを木の上にかける時は、23 翌朝までその死体を木の上に留めておいてはならない。必ずそれをその日のうちに埋めなければならない。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。あなたの神、主が嗣業として賜わる地を汚してはならない。
  - ミシュナー：だれでも死体を夜中留めおくものは、現行の戒律を犯すものである。
  - サンヘドリンは死刑を受けた者のために用意された墓地の管理をしていた。彼らが父祖たちの墓に埋められない場合には、そこに埋められた。この箇所の場合、死体を夜中かけておいてはならないということは、一段と重要なことであった。というのは、翌日が安息日であり、しかも、過越節の安息日という特別な安息日だったからである。
  - 容易に死なないでいる罪人を片付けるために、残忍な方法が取られた。彼らの足は木槌で打ち砕かれ、それは彼らが死ぬまで続いた。それはイエスと一緒に十字架にかけられた罪人たちに実施された。が、イエスは幸いにもそれを免れた。すでにイエスは死んでいたからである。イエスがそれを免れたことを、ヨハネは旧約聖書のもう一つの箇所の印とみなしている。過越の子羊について、その骨の一本でも折ってはならない、と規定されている。ここでもまた、ヨハネは、イエスを、その民を死から救う過越の子羊と見ている。
    * 民数記 9:12 これを少しでも朝まで残しておいてはならない。またその骨は一本でも折ってはならない。過越の祭のすべての定めにしたがってこれを行わなければならない。
  - 彼らのひとりが、おそらくイエスの死んだことを確かめるためだったであろうが、やりでその脇を突き刺した。すると水と血が流れ出た。ヨハネはそのことに特別な重点をおいている。彼は、その中に、ゼカリヤ書 12 章 10 節にある預言の成就を見ている。「わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に、恵みと祈の霊とを注ぐ。彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういごのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ。」しかも、彼はわさわざ、これは実際におこったことの目撃者による報告であり、自分もそれが真実であることを保証する、と断っている。
  - とりあえず、一体何が起こったのかを検討してみよう。それはわたしたちには正確につかみ得ないことだが、おそらくイエスは文字通り心臓破裂をおこして死んだのであろう。普通はもちろん、死体から血は流れないものである。その事態はイエスの体験が肉体的にも感覚的にもあまりに恐ろしい者だったので、イエスの心臓が破裂したことによって生じたものと考えられる。それが起こると、心臓の血は心臓を取りまいている心包の分泌液と混ぜ合わされる。兵卒の槍はその心包を突き、分泌液と地の混合物が流れ出た。イエスが文字通りの意味で心臓破裂を起こして死んだと考えるのは本当に胸が痛くなることである。

    - イエスが真の体をもった真の人間であることの証拠：対グノーシス主義
    - 罪から救うために流された血と、バプテスマの浄化の水
- 榊原康夫『マタイ福音書講解（下巻）』p.330-331
  - 普通、十字架上の囚人は、早くとも 36 時間以上、遅ければ、2,3 日も息絶えない。マルコ 15:44「ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。」イエスの例外的な速さは、
    1. 前夜来ぶっ通しで、異例の侮辱を受けてきたこと、
    2. 罪人の身代わりとして、他人への神のみ怒りを集中的にひきうけるという、異常な、精神的・肉体的苦悩の中におかれたこと、
    3. 主権的に「わたしの霊をみ手にゆだねます」と言って死んだことによって、説明される。
  - ローマでは、十字架刑の囚人は野晒しにされたが、身内の者の引き取り願いが出れば、痛いは返された。
  -『ペテロの福音書』2:3 さて、そこに、ピラトと主との友であるヨセフが立っていた。人々が主を十字架につけようとしているのを知って、ピラトの所に来て、種のみからだを葬りたいとたのんだ。
  -『ミシュナー』サンヘドリン 6:5 彼らは、その父祖の墓地に葬ることはしなかった。法廷によって二つの墓地が用意されていた。一つは、首をきられたか、絞め殺された者どものため、一つは、石で撃たれたか、焼かれた者どものため。
- イザヤ 53:9
  - 口語：彼は暴虐を行わず、／その口には偽りがなかったけれども、／その墓は悪しき者と共に設けられ、／その塚は悪をなす者と共にあった。
  - 聖書協会共同訳：彼は暴虐をなさず／口には偽りがなかったのに／その墓は悪人どもと共にされ／富める者と共に葬られた。
- 異邦人（百卒長）、女性たち、弟子であることを隠していた人たち
  - ヨハネ 12:32 そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」。
  - マルコ 10:31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。
    - マタイ 19:30 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。
    - マタイ 20:16 このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」。

4.98.6 記録

- 日時：2025 年 5 月 15 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）3 名、参加（遠隔）3 名

4.98.7 問いについて

1. イエスの十字架上での死について復習しましょう。（33-41）

- 33 昼の十二時になると、全地は暗くなって、三時に及んだ。
- 34 そして三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。
- 35 すると、そばに立っていたある人々が、これを聞いて言った、「そら、エリヤを呼んでいる」。36 ひとりの人が走って行き、海綿に酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとして言った、「待て、エリヤが彼をおろしに来るかどうか、見ていよう」。
- 37 イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた。
- 38 そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。
- 39 イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。
- 40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。

2. アリマタヤのヨセフは、どのような人で、いつどのようなことをしますか。(42,43)

- 42 さて、すでに夕がたになったが、その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、43 アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。
- [DQ] ヨセフはどのような人でしょうか。(他の福音書も参考にして)
  - マルコ：アリマタヤのヨセフ、マタイ：アリマタヤの金持、ルカ：ユダヤの町アリマタヤの出身
    - ラマタイム(サムエル記上 1:1 フライムの山地のラマタイム・ゾピムに、エルカナという名の人があった。エフライムびとで、エロハムの子であった。エロハムはエリウの子、エリウはトフの子、トフはツフの子である。)と同一か？アリマタヤ(Arimathea)[地図] ヨッパの東、エルサレムの北西
  - マルコ：地位の高い議員、ルカ：ヨセフという議員、善良で正しい人、議会の議決や行動には賛成していなかった
  - マルコ：神の国を待ち望んでいる人、ルカ：神の国を待ち望んでいた
  - マタイ：イエスの弟子、ヨハネ：ユダヤ人をはばかって、ひそかにイエスの弟子となった
- [DQ] ピラトに何を願い出ますか。なぜそうしたのでしょう。
  - 安息日の前日で、日が暮れかかっていた。安息日になるとなにもできないので、急いで、ピラトに、「イエスのからだの引取りかたを願った。」　(<　: to ask, beg, call for, crave, desire,

require [AMI-3S]）

    * 申命記 21:22-23 もし人が死にあたる罪を犯して殺され、あなたがそれを木の上にかける時は、23 翌朝までその死体を木の上に留めておいてはならない。必ずそれをその日のうちに埋めなければならない。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。あなたの神、主が嗣業として賜わる地を汚してはならない。

    * [Q] なぜ、このようなことが定められたのでしょうか。

- [DQ] 「大胆にも」にはどのような気持ちが表れていますか。
  - 通常は、許されない。晒し者にしておくべきもの。
  - 逃げてしまった弟子たちからみると、身分もあるものが危険を犯すことは驚きだったかもしれない。
    * 百卒長、そして、アリマタヤのヨセフ、ニコデモ

3. ピラトは、どのように対応しますか。（44,45）
   - 44 ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。45 そして、百卒長から確かめた上、死体をヨセフに渡した。
   - [DQ] なぜ、ピラトは「イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思」ったのでしょうか。
     - 晒し者として消耗するまで、放置するのが普通。
     - そんなに、早く死ぬとは思われなかった。
   - [DQ] 百卒長はどうしますか。
     - 確認する。仮死状態だったかもしれない。
     - この百卒長はおそらく「まことに、この人は神の子であった」と言った人。
4. ヨセフはどうしますか。（46）
   - 46 そこで、ヨセフは亜麻布を買い求め、イエスをとりおろして、その亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納め、墓の入口に石をころがしておいた。
   - イエスをとりおろし
   - 亜麻布で包み
   - 岩を掘って作った墓に納め、墓の入口に石をころがしておいた。
5. 女性たちについてはどのようなことが書かれていますか。（47）

- 47 マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスが納められた場所を見とどけた。
- ヨセの母マリヤについて。GPT-4o 2025.5.15 [リンク]
- 不明だが、イエスの母の可能性もある。
- 16:1 さて、安息日が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。
  - マタイ 28:1　マグダラのマリヤとほかのマリヤ
  - ルカ 24:1 女たち
  - ヨハネ 20:1 マグダラのマリヤ

6. 他の福音書からは、さらに、どのようなことがわかりますか。

- 墓：
  - マルコ：岩を掘って造った墓
  - マタイ：岩を掘って造った彼の新しい墓に納め、そして墓の入口に大きい石をころがしておいて、帰った
  - ルカ：亜麻布に包み、まだだれも葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた。
  - ヨハネ：40 彼らは、イエスの死体を取りおろし、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料を入れて亜麻布で巻いた。41 イエスが十字架にかけられた所には、一つの園があり、そこにはまだだれも葬られたことのない新しい墓があった。42 その日はユダヤ人の準備の日であったので、その墓が近くにあったため、イエスをそこに納めた。
- 事後のこと：マタイ 27:62-66 参照
  - イエスが復活したと装うために、死体を盗み出したのではないかとの疑惑を否定するために、ユダヤ人社会と近いマタイ記者がこの記述を加えた可能性がある。ここまで、祭司長、パリサイ人たちが、予見して行動することも疑わしいこともあり、真偽の程は不明。
  - ただ、共観福音書をみると、基本的に、弟子たちは逃げてしまい、このようなことを企画する小賢しさはなかったと思われる。
    * マルコ 14:27 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。[リンク]
  - イエス自身が自ら抜け出したかどうかを検証するのは困難。
  - 安息日を挟んで、遠藤周作によると、謎の 36 時間、マタイのエピソードは疑わしいようにも感じる。『ペテロの福音書』参照。

4.98.8 メモ

- 問い：
  - アリマタヤのヨセフはなにを思いこのような行動をとったのだろうか。
  - ピラトはなぜイエスの死の確認をしたのだろうか。百卒長の役割は？
- 概要：
  - 安息日になる前に、地位の高い議員であったアリマタヤのヨセフは、ピラトのもとに行き、イエスの死体の引き取り方を願いにいく。イエスがすでに死んでしまったか不審におもったピラトは、百卒長に確かめ、死体をヨセフにわたす。ヨセフは亜麻布に死体を包み、岩を掘って作った墓に納め、石をころがしておく。マグダラの母マリヤと、ヨセの母マリヤはイエスの納められた場所を見届ける。
- 福音書の差異：
  - マルコでは、ヨセフについて「地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人」としているが、マタイでは、「アリマタヤの金持で、イエスの弟子であった。」とし、ルカでは、「善良で正しい人、ユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。」とし、ヨハネでは「ユダヤ人をはばかって、ひそかにイエスの弟子となったアリマタヤのヨセフ」と紹介し、微妙にことなっている。ピラトが「イエスがすでに死んでしまったか不審におもって百卒長に確かめ」たとの記事は、マルコにしかない。
  - 墓について、マタイは「新しい」とし、ルカでは、「まだだれも葬ったことのない」とし、ヨハネでは、「だだれも葬られたことのない新しい墓」と形容している。
  - ヨハネには、「また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。」とニコデモの記事を入れ、埋葬は二人の共同作業としている。
  - ルカには、最後に「イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが納められる様子を見とどけた。そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。」（23:55,56）を加えている。
  - ルカとヨハネでは、安息日を休んだ記事で終わっている。
- 異なる物語
  - 足を木槌で死ぬまで打ち叩かれ、殺される
  - アリマタヤのヨセフがこなければ、サンヘドリン管轄の、共同墓地にその日のうちに葬られる。

4.99　16:1-8 復活する

1 さて、安息日が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。2 そして週の初めの日に、早朝、日の出のころ墓に行った。3 そして、彼らは「だれが、わたしたちのために、墓の入口から石をころがしてくれるのでしょうか」と話し合っていた。4 ところが、目をあげて見ると、石はすでにころがしてあった。この石は非常に大きかった。5 墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚いた。6 するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。7 今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。8 女たちはおののき恐れながら、墓から出て逃げ去った。そして、人には何も言わなかった。恐ろしかったからである。

4.99.1　マタイ 28:1-8

1 さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。2 すると、大きな地震が起った。それは主の使が天から下って、そこにきて石をわきへころがし、その上にすわったからである。3 その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。4 見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。5 この御使は女たちにむかって言った、「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、6 もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をごらんなさい。7 そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』。あなたがたに、これだけ言っておく」。8 そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。

4.99.2　ルカ 24:1-12

1 週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った。2 ところが、石が墓からころがしてあるので、3 中にはいってみると、主イエスのからだが見当らなかった。4 そのため途方にくれていると、見よ、輝いた衣を着たふたりの者が、彼らに現れた。5 女たちは驚き恐れて、顔を地に伏せていると、このふたりの者が言った、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。6 そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。7 すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか」。8 そこで女たちはその言葉を思い出し、9 墓から帰って、これらいっさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した。10 この女たちという

のは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。11 ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。12〔ペテロは立って墓へ走って行き、かがんで中を見ると、亜麻布だけがそこにあったので、事の次第を不思議に思いながら帰って行った。〕

4.99.3 ヨハネ 20:1-10

1 さて、一週の初めの日に、朝早くまだ暗いうちに、マグダラのマリヤが墓に行くと、墓から石がとりのけてあるのを見た。2 そこで走って、シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子のところへ行って、彼らに言った、「だれかが、主を墓から取り去りました。どこへ置いたのか、わかりません」。3 そこでペテロともうひとりの弟子は出かけて、墓へむかって行った。4 ふたりは一緒に走り出したが、そのもうひとりの弟子の方が、ペテロよりも早く走って先に墓に着き、5 そして身をかがめてみると、亜麻布がそこに置いてあるのを見たが、中へははいらなかった。6 シモン・ペテロも続いてきて、墓の中にはいった。彼は亜麻布がそこに置いてあるのを見たが、7 イエスの頭に巻いてあった布は亜麻布のそばにはなくて、はなれた別の場所にくるめてあった。8 すると、先に墓に着いたもうひとりの弟子もはいってきて、これを見て信じた。9 しかし、彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、まだ悟っていなかった。10 それから、ふたりの弟子たちは自分の家に帰って行った。

マルコによる福音書 16 章 1-8 節福音書対照表

4.99.4 問い

1. イエスの死と埋葬について復習しましょう。(15:21-47)
2. だれが、いつ、墓に行きますか。何を心配していますか。(1-3)
3. 墓は、どのようになっていましたか。(4,5)
4. どのようなことを告げられますか。(6,7)
5. どうしますか。(8)
6. 他の福音書からは、さらに、どのようなことがわかりますか。

4.99.5 参照

- **Q.** イエスの復活の証言を四つの福音書からリストし同じ時と思われるものをまとめ出来るだけ時系列にし、ガリラヤかエルサレムかも考慮してまとめてください。**Grok3 beta** 応答
  - ChatGPT Deep Research (2025.5.20) [リンク]

- 古い写本では、マルコによる福音書は、この「空の墓」段落で、おわっている。ChatGPT Deep Research [リンク]
  - 含まれていない主要写本

    マルコ 16:9–20 が欠落している最も重要なギリシア語写本は以下の通りです：シナイ写本（Codex Sinaiticus, 01）バチカン写本（Codex Vaticanus, B03）

    これらは 4 世紀の写本であり、最古の完全な新約聖書写本として高く評価されています。また、古ラテン語のボビエンシス写本（Codex Bobiensis）や、シリア語のシナイ写本（Sinaitic Syriac)、さらに約 100 のアルメニア語写本でも 16:9–20 が欠落しています。これらの証拠は、長い結びが初期の多くの伝統に含まれていなかった可能性を示唆しています。

  - 含まれている多数派写本

    一方で、現存するギリシア語写本の 99% 以上（約 1,600 以上）には 16:9–20 が含まれています。また、ラテン語訳（ウルガタ)、シリア語訳（ペシッタ)、コプト語訳など、多くの初期翻訳にもこの部分が存在します。さらに、2 世紀末の教父イレナイオス（『異端反駁』3.10.6）や、3 世紀のヒッポリュトスもこの節を引用しており、古くから教会で用いられていたことがわかります。

- このあとの復活と昇天に関する新しい写本の記述
  - ヨハネの対応箇所は、20:1,2 あたりまでである。このあとの箇所の対応は以下の通り。
  - 16:9-11 （結び一）マグダラのマリヤに現れる：マタイ 28:9-10、ヨハネ 20:11-18
    - ヨハネ 20:3-10 は、このあとに含まれる挿入、「シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子」には報告している。
  - 16:12-13 二人の弟子に現れる：ルカ 24:13-35
  - 16:14-18 弟子たちを派遣する：マタイ 28:16-20、ルカ 24:36-49、ヨハネ 20:19-23
  - 16:19-20 天に上げられる：ルカ 24:50-53、使徒行伝 1:9-11

- マタイは、28:11-15 番人の大祭司への報告の部分のみ、欠落。ルカはすべてカバーされている。
  - 28:11-15 女たちが行っている間に、番人のうちのある人々が都に帰って、いっさいの出来事を祭司長たちに話した。12 祭司長たちは長老たちと集まって協議をこらし、兵卒たちにたくさんの金を与えて言った、13「『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』と言え。14 万一このことが総督の耳にはいっても、われわれが総督に説いて、あなたがたに迷惑が掛からないようにしよう」。15 そこで、彼らは金を受け取って、教えられたとおりにした。そしてこの話は、今日に至るまでユダヤ人の間にひろまっている。

- ヨハネには、マルコとの対応箇所のあと、
  - 20:24-29 トマスにも現れる
  - 20:30-31 結び

  - 21:1-14 ティベリアス湖畔で弟子たちに現れる
  - 21:15-25 イエスと、ペテロの会話と、イエスの愛しておられた弟子について

- W. バークレイ『マルコ福音書』(p.440-441)

  1. イエスは書物の中の一人物ではない。イエスは生きている臨在である。
  2. イエスは思い出ではなく臨在。思い出は、最も大切な思い出でも色あせていく。イエスが永遠に我々とともに生きる臨在でなければ、はるか前に、時がイエスの思い出を拭い去ってしまったであろう。イエスは、我々が議論をするかたではなく、われわれが出会う方である。
  3. クリスチャンの生活は、イエスについて知っている人の生活ではなく、イエスを知っている人の生活を意味する。人について知っているのと、人を知っていることの間には全くの相違がある。
  4. クリスチャンの信仰については無限の価値があることを意味する。クリスチャンの信仰は、立ち止まっていない。主が生きた主であるが故に、新しい驚きと、新しい心理が発見されるように、いつでも待っている。

  - 今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と「イエスについて一番有難いことは、われわれが犯した失敗の面で、イエスは我々を信頼してくださることである。」

- AD54 年・55 年ごろのパウロの文書：コリント前書 15:3-8

  - 3 わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、4 そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。6 そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。7 そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、8 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。

- 死と復活の予告：

  - 8:27-30 さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられたが、その途中で、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は、わたしをだれと言っているか」。28 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。29 そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。30 するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。

  - 8:31-37 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、32 しかもあからさまに、この事を話された。すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめたので、33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。34 それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼ら

に言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。36 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。37 また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。

  - 9:30-32 30 それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。32 しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。

  - 10:32-34 32 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、33 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。

- 榊原康夫『マタイ講解（下巻）』(p.333-344)

  - 四福音書復活の記述まとめ
  - 天使について：イエスの誕生（マタイ 1:20,2:13,19）、悪魔の誘惑（マタイ 4:11）、十字架にかかる前ゲッセマネの祈り（ルカ 22:43）復活の時（マタイ 28:1-8）、昇天（使徒 1:10）
  - しめ切った部屋の中にも自由に出入りできるので、墓から石を取り除ける必要はない。

- 『ペテロの福音書』[33]-[44]

- 婦人たち

  - マルコ 15:40,41 40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。

    * マタイ 27:55,56 55 また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。

    * ルカ 23:49 49 すべてイエスを知っていた者や、ガリラヤから従ってきた女たちも、遠い所に立って、これらのことを見ていた。

    * ヨハネ 19:25 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。

    * [参考] マルコ 6:3 この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。

  - マルコ 15:47 マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスが納められた場所を見とどけた。

  - ルカ 8:1-3 そののちイエスは、神の国の福音を説きまた伝えながら、町々村々を巡回し続けられたが、十二弟子もお供をした。2 また悪霊を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、3 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。

4.99.6 記録

- 日時：2025 年 5 月 22 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）5 名、参加（遠隔）5 名

4.99.7 問いについて

1. イエスの死と埋葬について復習しましょう。（15:21-47）

    - 24 それから、イエスを十字架につけた。そしてくじを引いて、だれが何を取るかを定めたうえ、イエスの着物を分けた。25 イエスを十字架につけたのは、朝の九時ごろであった。26 イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。27 また、イエスと共にふたりの強盗を、ひとりを右に、ひとりを左に、十字架につけた。
    - 33 昼の十二時になると、全地は暗くなって、三時に及んだ。
    - 34 そして三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。
    - 35 すると、そばに立っていたある人々が、これを聞いて言った、「そら、エリヤを呼んでいる」。36 ひとりの人が走って行き、海綿に酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとして言った、「待て、エリヤが彼をおろしに来るかどうか、見ていよう」。
    - 37 イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた。
    - 38 そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。
    - 39 イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。

- 40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。
- 42 さて、すでに夕がたになったが、その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、43 アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。
- 44 ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。45 そして、百卒長から確かめた上、死体をヨセフに渡した。
- 46 そこで、ヨセフは亜麻布を買い求め、イエスをとりおろして、その亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納め、墓の入口に石をころがしておいた。
- 47 マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスが納められた場所を見とどけた。
- 過越の準備の日の朝９時に十字架に架けられ、衣服は兵士たちによって分けられ、さまざまな人々の嘲弄を受けた。12 時から 3 時ごろまでは、全地が暗くなり、３時ごろ「我が神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫び、さらに、声高く叫んで息を引き取った。アリマタヤのヨセフがピラトにイエスの体の引き取り方を願い、ピラトは死んだことを百卒長に確認して、引き渡す。ヨセフは、亜麻布につつみ、岩を掘って造った墓に納め、入り口に石をころがしておいた。

2. だれが、いつ、墓に行きますか。何を心配していますか。(1-3)

- 1 さて、安息日が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。2 そして週の初めの日に、早朝、日の出のころ墓に行った。3 そして、彼らは「だれが、わたしたちのために、墓の入口から石をころがしてくれるのでしょうか」と話し合っていた。
- [DQ] いつのことですか。
  - 土曜日（過越の祭りの日）の夜（日没後、6 時以降）「イエスに塗るために、香料を買い求めた。」除酵祭初日。
    - ルカ 23:56 56 そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。
    - ヨハネ 19:39 また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。40 彼らは、イエスの死体を取りおろし、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料を入れて亜麻布で巻いた。
  - 日曜日早朝（日の出の頃）週の初めの日に、早朝（ : i) in the morning, early, ii) the fourth watch of the night, from 3 o'clock in the morning until 6 o'clock approximately)、日の出のころ

- [DQ] だれが墓に行きますか。このひとたちは、どのような人たちですか。
  - マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメが、香料を買い求めたのか、墓にいったかは不明。しかし、複数で書かれている。ヨハネはマグダラのマリヤ
    * マタイは「マグダラのマリヤとほかのマリヤ」、ルカは「女たち」
    * ヨハネはマグダラのマリヤ、おそらく、復活の目撃証言につながるためか。
  - 15:40,41 40 また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。41 彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。
    * マグダラのマリヤ・小ヤコブとヨセとの母マリヤ・サロメ・イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たち
  - 15:47 マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスが納められた場所を見とどけた。
    * マグダラのマリヤ・ヨセの母マリヤ
- [DQ] 墓が塞がれていたら、どうしようと思っていたのでしょうか、
  - [Q] 墓は、なぜ塞がれたのでしょうか。
    * マタイ 27:60 岩を掘って造った彼の新しい墓に納め、そして墓の入口に大きい石をころがしておいて、帰った。
  - [Q] なぜ、アリマタヤのヨセフに頼まないのでしょうか。
- [DQ] 女たちは、どのような気持ちで、墓に向ったのでしょうか。
  - [Q] 男の弟子たちとは、何が違ったのでしょうか。
  - イエスや弟子たちの日常に「奉仕していた」教えや、行動に仕えていたのではないのだろう。

3. 墓は、どのようになっていましたか。（4,5）

- 4 ところが、目をあげて見ると、石はすでにころがしてあった。この石は非常に大きかった。5 墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚いた。
- [DQ] 婦人たちは、何を見ましたか。
  - （非常に大きかった）石はすでにころがしてあった
  - 墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっていた
- [DQ] 婦人たちは、どのような反応をしますか。どのように考えたでしょうか。

  - 非常に驚いた。このようにしてしか表現できなかった。

4. どのようなことを告げられますか。(6,7)

- 6 するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。7 今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。
- [DQ] どのようなことが告げられていますか。
  - ナザレ人イエス（1:24）はよみがえって、墓の中（ここ）にはおられない。
  - 弟子たちとペテロとの所へ行き「イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう」と伝えよ。
    * 14:27,28 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。
- [DQ] 婦人たちは、何を理解し、何を理解できなかったでしょうか。
  - 墓の中にはおられないことは理解したろう。ただ、そのことと「よみがえった」ことを結びつけるのは困難であったろう。
  - イエスが自分について言っていたことを思い出していただろう。
  - ガリラヤで会えるところまで考えたかは不明。
- [DQ] ペテロは、ここで、イエスがペテロの名前をあげたことをどのように受け取っただろうか。
  -「弟子たちとペテロ」とあるが、ペテロはここに含まれなくても良い。
  - ペテロは、自分の名前がだされたことには、感動があったろう。
- [DQ] 「かねて、あなたがたに言われたとおり」はなにを思い出させているのでしょうか。
  - 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、
  - 9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである
  - 10:33,34 「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。34 ま

た彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。

  - つねに「よみがえるであろう」が付属しているが、その意味は理解できていなかっただろう。このときから、考え始めたのか？

5. どうしますか。(8)

- 8 女たちはおののき恐れながら、墓から出て逃げ去った。そして、人には何も言わなかった。恐ろしかったからである。
- [DQ] 何が恐ろしかったのでしょうか。
  - おそらく、誰かと認識はできない「真白な長い衣を着た若者」に会い、不可解な事件。
  - イエスの体がないことも、信じられない、恐ろしいことだったろう。

6. 他の福音書からは、さらに、どのようなことがわかりますか。

- マタイ：
  - 墓に行った女性たちは、「マグダラのマリヤとほかのマリヤ」大きな地震が起こったことが書かれ、その理由として、「主の使」が石をころがし、その上に座ったからとしている。「その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。」とその姿も形容されている。
  - 見張りのことが先に書かれていたので（27:62-66、参照 28:11-15）「見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。」（28:4）とある。
  - ペテロの名前は使わず「弟子たち」
  - 末尾も「そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」としている。
- ルカ
  - 女たちとして、最初には名前をあげないが、最後に「この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。」とある。
    - ルカ 8:3 ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。
  - まず、墓が空であることを確認し「途方にくれていると、見よ、輝いた衣を着たふたりの者が、彼らに現れた。」と、ここでは、二人となっている。
  - 女たちに告げた内容には、ガリラヤに行かれることは述べられていない。

  - イエスが頻繁に語っていたことを思い出し「使徒たちに話した。」とあるが、「ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。」が、続いている。
  - 最後に、おそらく重要な写本にない〔ペテロは立って墓へ走って行き、かがんで中を見ると、亜麻布だけがそこにあったので、事の次第を不思議に思いながら帰って行った。〕が追記されている。
- ヨハネ
  -「マグダラのマリヤが、墓から石がとりのけてあるのを発見。」
  - シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子に報告。かれらが、空の墓を確認、同時に、「しかし、彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、まだ悟っていなかった。」と記している。

4.99.8 メモ

- 問い：
  - 女たちが受け取ったものは何なのだろうか。
  - なぜ、女たちは、何も言わなかったのだろうか。
- 概要：安息日があけ、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメが、イエスに塗るために、香料を買い求め、週の初めの日（日曜日）の早朝、日の出のころ、墓の入り口の石をだれが転がしてくれるか心配しながら、墓に行った。ところが、すでに、石はすでにころがしてあり、墓の中には、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっていた。そして「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。伝えられたが、女たちはおののき恐れ、墓から出て逃げ去り、人には何も言わなかった。
- 福音書の差異：
  - マタイでは、墓に行った女性たちは、「マグダラのマリヤとほかのマリヤ」であったと書いている。大きな地震が起こったことが書かれ、その理由として、「主の使」が石をころがし、その上に座ったからとしている。「その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。」とその姿も形容され、マタイでは見張りのことが書かれていたので（27:62-66、参照 28:11-15）「見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。」（28:4）とも書かれている。女性たちに伝えた言葉は、マルコとほぼ同じだが、ペテロの名前は使わず「弟子たち」となっている。また末尾も「そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」としている。
  - ルカでは、女たちとして、最初には名前をあげないが、最後に「この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。」とあり、何人もいたことが想定されている。まず、墓が空であることを確

認し「途方にくれていると、見よ、輝いた衣を着たふたりの者が、彼らに現れた。」とあり、ここでは、二人となっている。女たちに告げた内容には、ガリラヤに行かれることは述べられていない。しかし、イエスが頻繁に語っていたことを思い出し「使徒たちに話した。」とあるが、「ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。」が、続いている。最後に、おそらく重要な写本にない〔ペテロは立って墓へ走って行き、かがんで中を見ると、亜麻布だけがそこにあったので、事の次第を不思議に思いながら帰って行った。〕が追記されている。

  - ヨハネでは、「マグダラのマリヤが、墓から石がとりのけてあるのを発見。」シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子に報告。かれらが、空の墓を確認したことが書かれているが、同時に、「しかし、彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、まだ悟っていなかった。」と記している。
  - もしかすると、実際には、ペテロと、一緒にいた、もう一人の弟子には、伝えたが、他の人には伝えなかったことを、マルコは表現しているのかもしれない。

- 女性たち
  - マルコだけでも、「マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメ」(1)「また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。」(15:40)、「マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスが納められた場所を見とどけた。」(15:47) と記述に揺れがある。しかし、おそらく、「ヤコブの母マリヤ」と「小ヤコブとヨセとの母マリヤ」と「ヨセの母マリヤ」は同一人物だろう。そして、定説には反して、わたしは、イエスの母だと考える。最後の段階で、修正してく中で揺れが生じたのではないだろうか。おそらく、最初はイエスに従ってはいなかったと思われる、ヤコブの扱いが背景にあるのではないだろうか。
    * 3:20,21 群衆がまた集まってきたので、一同は食事をする暇もないほどであった。21 身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。
    * 3:31-35 さて、イエスの母と兄弟たちとがきて、外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。32 ときに、群衆はイエスを囲んですわっていたが、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟、姉妹たちが、外であなたを尋ねておられます」と言った。33 すると、イエスは彼らに答えて言われた、「わたしの母、わたしの兄弟とは、だれのことか」。34 そして、自分をとりかこんで、すわっている人々を見まわして、言われた、「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。
    * 6:3 この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。

4.100 16:9-11 （結び一）マグダラのマリヤに現れる

9 〔週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた。イエスは以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたことがある。10 マリヤは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいる所に行って、それを知らせた。11 彼らは、イエスが生きておられる事と、彼女に御

自身をあらわされた事とを聞いたが、信じなかった。

4.100.1　マタイ 28:9-10

9 すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて
拝した。10 そのとき、イエスは彼らに言われた、「恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤに行
け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい」。

4.100.2　ヨハネ 20:11-18

11 しかし、マリヤは墓の外に立って泣いていた。そして泣きながら、身をかがめて墓の中をのぞくと、12
白い衣を着たふたりの御使が、イエスの死体のおかれていた場所に、ひとりは頭の方に、ひとりは足の方
に、すわっているのを見た。13 すると、彼らはマリヤに、「女よ、なぜ泣いているのか」と言った。マリ
ヤは彼らに言った、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないの
です」。14 そう言って、うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それが
イエスであることに気がつかなかった。15 イエスは女に言われた、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを
捜しているのか」。マリヤは、その人が園の番人だと思って言った、「もしあなたが、あのかたを移したの
でしたら、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」。16 イ
エスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と
言った。それは、先生という意味である。17 イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。
わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、
わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上っ
て行く』と、彼らに伝えなさい」。18 マグダラのマリヤは弟子たちのところに行って、自分が主に会った
こと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、報告した。

マルコによる福音書 16 章 9-11 節福音書対照表

4.100.3　問い

1. イエスの埋葬と週の初めの日の朝のできごと確認しましょう。(15:42-16:8)
2. マルコでは、イエスは、だれに、どのように顕れたと書いていますか。(9)
3. マルコでは、他の人たちの受け止めについてどのように書かれていますか。(10,11)
4. ヨハネでは、マリヤはどこで、何をしていて、何が起こりますか。(ヨハネ 20:11-14)
5. イエスは何と語りかけ、マリヤはどのように応答しますか。(ヨハネ 20:15,16)
6. イエスは、何を伝えることをマリヤに託しますか。(ヨハネ 20:17,18)

4.100.4　参照

イエスの復活の証言：ChatGPT Deep Research (2025.5.20) [リンク]（参照：Grok3 beta [リンク]）

出来事	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ	場所（ガリラヤ/エルサレム）
空の墓の発見（主日未明）	28:1-5 （マグダラのマリヤ、他のマリヤ）	16:1-5 （マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤなど）	24:1-4 （マグダラのマリヤ、ヨアンナ、他の女たち）	20:1-2 （マグダラのマリヤ）	エルサレム付近
墓の中の天使の告知	天使一人が「復活した」(28:5-7)	若者（天使）が「復活した」(16:5-7)	天使二人が「復活した」(24:4-7)	天使二人（女性が泣くのを問う）(20:11-13)	エルサレム付近
女性へのイエスとの最初の出会い	（墓を出た）女性たちにイエスが現れる (28:8-10)	記載なし（※16:9以降に追加と考えられる節に登場）16:9-11	記載なし（空の墓での女性への顕現なし）	マグダラのマリヤにイエスが現れる (20:14-18)	（マタイ予告：ガリラヤへ）/エルサレム
エマオ途上での顕現	記載なし	記載なし（※16:9以降に追加と考えられる節に登場）16:12,13	弟子二人にイエスが現れる (24:13-35)	記載なし	エルサレム近郊
同日夜、エルサレムの弟子への顕現	記載なし	記載なし	弟子に（不信仰なまま）イエスが現れる (24:36-43)	鍵のかかった室内でイエスが「平安あれ」と現れる (20:19-23)	エルサレム
トマスを含む弟子への顕現	記載なし	記載なし（※16:9以降に追加と考えられる節に登場）16:14-18	記載なし	八日後にトマスにも現れる（20:24-29）	エルサレム
ガリラヤでの弟子への顕現	11 弟子に山上で大宣教 (28:16-20)	墓の天使が弟子に「ガリラヤへ行け」(16:7)	記載なし	ガリラヤ湖畔で 7 人の弟子に現れる (21:1-23)	ガリラヤ

出来事	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ	場所（ガリラヤ/エルサレム）
昇天	記載なし	記載なし（※16:9 以降に追加と考えられる節に登場）16:19,20	復活後すぐに昇天（24:50-53）使徒行伝 1:6-11	記載なし	エルサレム周辺（伝承上はオリーブ山）

- マタイにはこのあと、番兵、報告する記事（28:11-15）
- イエスの復活後の時間軸としては、最初の目撃証言
- 記録として早期のもの
  - コリント前書 15:3-8 わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、4 そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。6 そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。7 そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、8 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。
  - コリント前書 15:35-44 しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。36 おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。37 また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦であっても、ほかの種であっても、ただの種粒にすぎない。38 ところが、神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。39 すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。40 天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。41 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。42 死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、43 卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、44 肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。
- イエスが語る復活
  - イエス自身についての証言（マルコを中心に）
    - 8:31,32a それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、しかもあからさまに、この事を話された。（マタイ 16:21）

      9:9,10 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。(マタイ 17:9)

    * 9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。(マタイ 17:23)
    * 10:34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。(マタイ 20:19)
    * 参照：「長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。（マタイ 27:63）
  - 高い山で：9:2-13 イエスの姿が変わる（マタイ 17:1-13、ルカ 9:28-36）[リンク]
    * 9 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。10 彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。
  - エルサレムで：12:18-27 復活についての問答（マタイ 22:23-33、ルカ 20:27-40）[リンク] 復活についての箇所がまとめられている。
    * 25 彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている」。
- W. バークレイ著『マルコ福音書』教会の任務（16:9-20）p.442-443
  - マルコによる福音書は本来は、16 章 8 節で終わっている。われわれはただこの説が、福音書の他の部分とどれほど違っているかを見るために読むのである。これは福音書の最もすぐれた諸写本の中には見あたらない。これは後期の要約であり、マルコが書き終えるまで生きていなかったか、あるいは、いつの間にか紛失した最後の部分の書き換えである。
  - 最大の興味は、それがわれわれに与える教会の義務の描写である。この結論の部分を書いた人は、教会は、イエスによって命じられたある役割を持っていると明らかに信じていた。
    1. 教会には説教する義務があった。それを今まで聞いたことのない人に、イエスのよきおとずれの物語を話すことは、教会の義務であった。すなわち、それは、すべてのクリスチャンの義務であった。クリスチャンの務めはイエス・キリストの使者となることである。
    2. 教会にはいやしの任務があった。ここにはわれわれがたびたび見てきた事実がある。キリスト教は、人間の心と同様に、人間のかだらの関心をもっている。イエスはからだに健康を、また魂に健康をもたらすことを望まれた。
    3. 教会は力の教会であった。われわれは、すべてを文字通りに取る必要はない。われわれは、クリスチャンが毒蛇を持ち上げ、毒のある飲み物を飲んでも傷つかない、と文字通りに考える必要はない。しかし、この絵画的な言葉の背後には、クリスチャンは他の人々にはできない、また持てない、人生をうまく処理し、人生を処理しうる力で満たされているという確信がある。
    4. 教会は、ひとりでその任務を果たすように放置されることは決してない。常にキリストが教会と共に、教会にあって、教会を通じて働かれる。教会の主は今もなお教会の中におられ、今もなお力の主である。

    そして、その福音は、クリスチャンの人生は、十字架にかかり、またよみがえられた方の臨在と力の

中にある生活である、というメッセージで終わっている。

- W. バークレイ著『ヨハネ福音書』（20:11-18）p.355-356　なぜマリヤはイエスに気づかなかったか。
  1. マリヤは涙のためにイエスを認めることができなかった。わたしたちが愛する者を失う時、心にはいつも悲しみがあり、眼には涙がある。だが、忘れてならないことは、そのようなとき、わたしたちの悲しみは本質的にわがままなののだということである。わたしたちが考えるのは、自分の孤独、自分の悲しみ、自分の損失、自分の荒廃である。神の客人となるべく逝った人のために、わたしたちは泣くことができない。人生の苦痛から解放されて、こよなき眠りについた人のために泣くことはできない。わたしたちは、自分のために泣くのである。それは、当然であり、避け難いことである。が、それと同時に、わたしたちの涙が、天国の永遠の生命の栄光に対して、私たちを盲目にしてはならない。涙はあってしかるべきだ。だがその涙を通してわたしたちは栄光を垣間見なくてはならない。
  2. マリヤは間違った方向に固執していたから、イエスを認めることができなかった。彼女は墓から目を離すことができず、イエスに背を向けていた。わたしたちもしばしばそれと同じことをする。そのようなとき、わたしたちの目は冷たい墓の土に注がれている。しかし、目をそこからそらす努力をしなくてはならない。愛する者はもはやそこにはいない。そこにあるのは彼らの使いは果たした亡骸なのだ。その亡骸は人格ではない。真の人格は、天国にあって、イエスと顔と顔をあわせて相まみえている。それは。神の栄光の中にある。
- ラボニ（ヨハネ 20:16）ラビのアラム語の形
  - **STRONGS G4462:**

    (so Rec. in Mark 10:51) and (WH , see references under , at the beginning) (Chaldean , lord; , master, chief, prince; cf. Levy, Chald. WB. üb. d. Targumim, ii., p. 401), **Rabboni, Rabbuni** (apparently (yet cf. references below) the Galilaean pronunciation of ,(a title of honor and reverence by which Jesus is addressed; as interpreted by John, equivalent to : John 20:16; Mark 10:51 (see). Cf. Keim, iii., p. 560 (English translation, vi., p. 311f); Delitzsch in the Zeitschr. f. d. luth. Theol. for 1876, pp. 409 and 606; also for 1878, p. 7; (Ginsburg and Hamburger, as in the preceding word; Kautzsch, Gram. d. Biblical-Aram., p. 10).
  - マルコ 10:51 イエスは彼にむかって言われた、「わたしに何をしてほしいのか」。その盲人は言った、「先生、見えるようになることです」。
  - ヨハネ 20:16 イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。
- イエスが行くところ:
  - ヨハネ 20:17 イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい」。
  - ヨハネ 13:33 子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。

- ヨハネ 13:36 シモン・ペテロがイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのですか」。イエスは答えられた、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになろう」。

4.100.5 記録

- 日時：2024 年 5 月 29 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）6 名、参加（遠隔）4 名

4.100.6 問いについて

1. イエスの埋葬と週の初めの日の朝のできごと確認しましょう。（15:42-16:8）
   - イエスは、過越の準備の日の３時過ぎ「我が神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫び、さらに、声高く叫んで息を引き取った。アリマタヤのヨセフがピラトにイエスの体の引き取り方を願い、ピラトは死んだことを百卒長に確認して、引き渡す。ヨセフは、亜麻布につつみ、岩を掘って造った墓に納め、入り口に石をころがしておいた。
   - 安息日が終わり、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求め、週の初めの日の早朝、日の出のころ墓の入口を塞いでいる石のことを気にしながら、墓に行った。ところが、石はすでにころがしてあり、墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚く。この若者に、す「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう」と伝えられ、女たちはおののき恐れながら、墓から出て逃げ去り、人には何も言わなかった。
2. マルコでは、イエスは、だれに、どのように顕れたと書いていますか。（9）
   - 〔週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた。イエスは以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたことがある。
   - [DQ] マグダラのマリヤ（M　　M　　）とはどのような人ですか。
     - イエスに、7 つの悪霊を追い出してもらった。
     - ルカ 8:2 また悪霊を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、（この直前ルカ 7:36-50 に罪深い女がイエスの足に香油を塗った記事があるので、この記事とのマグダラのマリアとの関連性を指摘するものもいる）

  - Magdalene = “a tower”: a name given to Mary Magdalene, identifying her as from Magdala マタイ 27:56, 61, 28:1, マルコ 15:40, 47, 16:9, ルカ 8:2, 24:10, ヨハネ 19:25, 20:1, 20:18

- [DQ] どのように、表現されていますか。
  - 週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた。

3. マルコでは、他の人たちの受け止めについてどのように書かれていますか。（10,11）

- 10 マリヤは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいる所に行って、それを知らせた。11 彼らは、イエスが生きておられる事と、彼女に御自身をあらわされた事とを聞いたが、信じなかった。
- [DQ] イエスと一緒にいたひとたちは、どのような状態でしたか。
  - 泣き悲しんでいる。（実はマリヤもつい先程まで、泣き悲しんでいた。）
- [DQ] 「それ」とは何ですか。
  -「イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた。」ことだろう。
- [DQ] みなの反応は、どうでしたか。
  - イエスが生きておられる事と、彼女に御自身をあらわされた事とを聞いた。
  - 信じなかった。

4. ヨハネでは、マリヤはどこで、何をしていて、何が起こりますか。（ヨハネ 20:11-14）

- 11 しかし、マリヤは墓の外に立って泣いていた。そして泣きながら、身をかがめて墓の中をのぞくと、12 白い衣を着たふたりの御使が、イエスの死体のおかれていた場所に、ひとりは頭の方に、ひとりは足の方に、すわっているのを見た。13 すると、彼らはマリヤに、「女よ、なぜ泣いているのか」と言った。マリヤは彼らに言った、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」。14 そう言って、うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。

- [DQ] マリヤはどこにいますか。前回の箇所からの行動をまとめてみましょう。
  - ヨハネによる福音書に従うと、ペテロとイエスの愛しておられた弟子の二人には、伝え、二人は走って、墓に来る。そして、マリヤも追いかけて、もう一度きたのだろう。
  - 他の福音書からは、最初複数女性たちがいたことが書かれているので、整合性をとると、墓にもう一度戻ったのは、マグダラのマリヤだけだったのかもしれない。

- [DQ] 天使たちは、マリヤにどのように話しかけますか。マリヤはどのように答えますか。
  - 白い衣を着たふたりの御使「女よ、なぜ泣いているのか」マリヤ「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」。
  - 御使は事情を理解しているとすると、マリヤの内面を問うているのかもしれない。「女よ、なぜ泣いているのか」と。

  - [Q]「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」。には、どのような気持ちが表れていますか。
  - マリヤには、まだ、マリヤの主、遺体、体にしか、思いが至っていなかったのだろう。
- [DQ] 「うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。」とあるが、なぜ、気づかなかったのでしょう。
  - [Q] 位置関係はどうなっているのだろうか。
  - 涙で目が霞んでいた。
  - それが、イエスだとの可能性を拒絶していた。

5. イエスは何と語りかけ、マリヤはどのように応答しますか。（ヨハネ 20:15,16）

- 15 イエスは女に言われた、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」。マリヤは、その人が園の番人だと思って言った、「もしあなたが、あのかたを移したのでしたら、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」。16 イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。
- [DQ] イエスの「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」。は何を意味しているのでしょうか。
  - 泣く時ではないよ。わたしはあなたにとって誰なの？
  - 目をさましなさい。
- [DQ] マリヤは「もしあなたが、あのかたを移したのでしたら、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」。と言っていますが、何を願い、何をどうしたかったのでしょうか。
  - 遺体、イエスの体に執着がある。将来的なことまで考えているわけではない。ショック。
- [DQ] イエスは、どのように呼びかけ、マリヤはどのように、答えますか。
  - ·M . · , .（16 イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。）
  - M はアラム語の発音、 もアラム語系の発音。

6. イエスは、何を伝えることをマリヤに託しますか。（ヨハネ 20:17,18）

- 17 イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい」。18 マグダラのマリヤは弟子たちのところに行って、自分が主に会ったこと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、報告した。

- [DQ] イエスはマリヤにどのようなことを伝えますか。（17）
  - 「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。」これは、父の身元に行ったら触っても良いということでしょうか。
- [DQ] なぜ、イエスは「わたしにさわってはいけない。（すがりついてはいけません。）」とマリヤに命じるのでしょうか。
  - [Q] それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。（ヨハネ 20:27）では、触ることを求めている。なにが違うのでしょうか。
  - （参照）マタイ 28:9 すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。
  - （参照）ルカ 24:39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。
- [DQ] マリヤに託した伝言は何を伝えているのでしょうか。
  - 『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい
  - [Q] だれに伝えるように言われていますか。:「わたしの兄弟たち」＝「弟子たち」
- [DQ] それから、マリヤはどうしますか。
  - 18 マグダラのマリヤは弟子たちのところに行って、自分が主に会ったこと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、報告した。
- [DQ] ヨハネは、全体として、なにを伝えようとしているのでしょうか。
  - 「わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」つまり、別れの挨拶が中心？
  - しかし、マリヤにとっては、主に会ったことが中心。ここにも乖離がある。
  - おそらく、主は、生きて、神のみもとにいる、ということが中心。そして、その主との交わりに開かれていることが伝えられているように思われる。
- [DQ] 神のみもとで何をしておられるのでしょうか。
  - ヘブル 7:25 そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。
  - ヨハネでは、十字架をとおして、神のみもとに行くが、昇天は描かない。

4.100.7　メモ

問い：

- マタイにも少し書かれているが、詳細はヨハネのみにあるのは、なぜなのだろう。
- どのようにして、マグダラのマリヤはイエスだと気づいたのだろうか。

概要（福音書の比較を含む）：

- イエス自身の復活後の最初の顕現の記事である。マルコ以外に、マタイとヨハネに含まれるが、マルコはマグダラのマリヤについて、これまで三回（15:40,47,16:1）登場させていてこれが四回目だが、説明がなかったこともあり「イエスは以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたことがある。」（16:9）と説明している。そして、「マリヤは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいる所に行って、それを知らせた。」（10）とあるが、「彼らは、イエスが生きておられる事と、彼女に御自身をあらわされた事とを聞いたが、信じなかった。」（11）と結んでいる。マグダラのマリヤが墓にいることの記述は前の節 16:8 にはなく、つながりは良くない。
- マタイは、前の空の墓およびイエスの顕現の記述の後に、番兵の報告の記事（28:11-15）が置かれている。しかし、「そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」（マタイ 28:8）に続いて「すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。」（マタイ 28:9）とあり、走っていく途中なのかと思うが、やはり、つながりが良いとは言えない。イエスが「彼ら」と複数に「平安あれ」と語って顕現され、彼らは拝したことが書かれ、ここで、ガリラヤに行くべきことが伝えられている。
- 詳しいのは、ヨハネである。全体として、マグダラのマリヤを中心に描かれており、空の墓については、知らせを受けた、ペテロとイエスの愛しておられた弟子が確認する記事が入り、それから、おそらく、ペテロたちのあとを追って、もう一度墓に行ったと思われる、マグダラのマリヤへの顕現が描かれている。墓の中の「白い衣を着たふたりの御使が」イエスの死体の置かれた場所に、座っていて、「女よ、なぜ泣いているのか」と語りかけ、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と答えて、後ろを振り向いたらそこにイエスが立っていたが、それがイエスであるとは気づかなかったとある。そして、先ほどど同様の会話のあと、イエスが「マリヤよ」と語りかけて、はじめて、イエスであることを認識し、「ラボニ（わたしの先生）」と答え、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と伝えられ、弟子たちに報告したことが書かれている。
- マルコとヨハネが直接証言に近いものを収録した可能性が高く、マタイとルカは間接証言を収録した可能性が高いと考えると、三人程度の女性たちが空の墓に驚き、ペテロとイエスの愛しておられた弟子に伝え、その後、マグダラのマリヤだけが、ペテロたちが去った墓に戻り、泣いているときに、復活のイエスに出会ったとするのが整合性からは可能性が高いように思われる。

- ヨハネは、他の福音書に書かれていない証言を収録している可能性もある。ヨハネにおける福音宣教開始を 2:13 とすると、エルサレムであり、ルカと同様に、復活に関しても、付加とされる 21 章を除き、復活後の顕現をエルサレムにまとめているともいえる。ヨハネ記者が、エルサレムの住人であったことも、示唆しているように見える。

4.101　16:12-13 二人の弟子に現れる

12 この後、そのうちのふたりが、いなかの方へ歩いていると、イエスはちがった姿で御自身をあらわされた。13 このふたりも、ほかの人々の所に行って話したが、彼らはその話を信じなかった。

4.101.1　ルカ 24:13-35

13 この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、14 このいっさいの出来事について互に語り合っていた。15 語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。16 しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。17 イエスは彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。18 そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。22 ところが、わたしたちの仲間である数人の女が、わたしたちを驚かせました。というのは、彼らが朝早く墓に行きますと、23 イエスのからだが見当らないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。24 それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行って見ますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。25 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。28 それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、イエスがなお先へ進み行かれる様子であった。29 そこで、しいて引き止めて言った、「わたしたちと一緒にお泊まり下さい。もう夕暮になっており、日もはや傾いています」。イエスは、彼らと共に泊まるために、家にはいられた。30 一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、31 彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなくなった。32 彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。33 そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、34 「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなさった」と言っていた。35 そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさき

になる様子でイエスだとわかったことなどを話した。

マルコによる福音書 16 章 12-13 節福音書対照表

4.101.2 問い

1. 週の初めの日の朝のことを、復習してみましょう。(1-11, ヨハネ 20:1-18)
2. マルコには、この時のことが、どのように書かれていますか。(12,13)
3. 以下はルカから考えましょう。だれがどんなことを話していましたか。そしてイエスにどのように説明をしていますか。(13-24)
4. イエスは、どのように、そして何について話しますか。(25-27)
5. 二人はどのようにして、イエスであると分かりましたか。(28-31)
6. そのあと、二人は、どうしますか。(32-35)

4.101.3 参照

- 地図(エマオ：Emmaus)：[Palestine in the Time of Jesus (1)], [Jesus in Judea and Jerusalem], [Jesus' Journeys from Galilee to Judia]
  - ,
  - 60 スタディオン(　：about 600 feet (185 m))　11,100m = 11.1km (現在考えられている場所でみると、もう少し遠いように見える。25km~30km 程度)不明とするのが適切。(榊原康夫：新聖書註解)
  - [参考] ベタニヤはエルサレムから、15 スタディオン(ヨハネ 11:18)　2,775m
- 讃美歌 39 番(讃美歌 21 218 番)[*314]
  1. 日くれて四方はくらく　わがたまはいとさびし　よるべなき身のたよる　主よともに宿りませ
  2. 人生(いのち)のくれちかづき　世のいろかうつりゆく　とこしえにかわらざる　主よともに宿りませ
  3. 世の闇おしせまりて　いざないの声しげし　時のまも去りまさで　主よともに宿りませ

[*314] スコットランド人の聖公会信徒ヘンリー・フランシス・ライトが作った詞を、ウィリアム・ヘンリー・モンクの「Eventide」(夕暮れ)という曲にあわせて歌う。
ライトは 1847 年に詩作した。結核で死の床にいるときにメロディーを完成し、3 週間後に亡くなった。[Wikipedia]

4. 死の刺（はり）いずこにある　主のちかくましまさば　われ勝ちてあまりあらん　主よともに宿りませ

5. 十字架のくしきひかり　閉ずる目にあおがしめ　みさかえにさむるまで　主よともに宿りませ

[English] by Scottish Anglican cleric Henry Francis Lyte (1793–1847)

1. Abide with me; fast falls the eventide; The darkness deepens; Lord, with me abide; When other helpers fail and comforts flee, Help of the helpless, oh, abide with me.

2. Swift to its close ebbs out life's little day; Earth's joys grow dim, its glories pass away; Change and decay in all around I see— O Thou who changest not, abide with me.

3. I need Thy presence every passing hour; What but Thy grace can foil the tempter's pow'r? Who, like Thyself, my guide and stay can be? Through cloud and sunshine, Lord, abide with me.

4. I fear no foe, with Thee at hand to bless; Ills have no weight, and tears no bitterness; Where is death's sting? Where, grave, thy victory? I triumph still, if Thou abide with me.

5. Hold Thou Thy cross before my closing eyes; Shine through the gloom and point me to the skies; Heav'n's morning breaks, and earth's vain shadows flee; In life, in death, O Lord, abide with me.

- クレオパ（K　）
  - 榊原康夫『聖書講解ルカの福音書』p.467：「クレオパ」はギリシャ語名「クレオパトロス（K < (rumor, glory, praise) + (generator or male ancestor, God is called the Father)）」の短縮系。「クロパ（ヨハネ 19:25）」はセム的な名前と思われるが、よく似た名として併用されえたろう。「それから彼ら全員で、ヤコブの後継適任者にだれを選定すべきかを討論し、福音書物語に述べられたクロパの子シメオンがエルサレム監督座を占める適任者であると、満場一致で選出した。彼は救い主のいとこであったといわれている。ヘゲシッポスが、クロパはヨセフの兄弟であったと告げているからである。」（エウセビオス『教会史』3:11）「ふたり」のうちの他のひとりはこのシメオンであるとの説も生じた。（オリゲネス『ケルソス反駁論』2:62,68）ナタナエルとする伝説もある（エピファニオス『異端駁論』23:6、4 世紀）

- ナザレのイエス、ナザレ人イエス
  - マルコ 1:24 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。（ナザレのイエスと呼ばれていたと思われる）
  - マルコ 10:47 ところが、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出した。

- マルコ 14:67 ペテロが火にあたっているのを見ると、彼を見つめて、「あなたもあのナザレ人イエスと一緒だった」と言った。
- マルコ 16:6 するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。
- マタイ 26:71 そう言って入口の方に出て行くと、ほかの女中が彼を見て、そこにいる人々にむかって、「この人はナザレ人イエスと一緒だった」と言った。
- ルカ 4:34 「ああ、ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。
- ルカ 18:37 ところが、ナザレのイエスがお通りなのだと聞かされたので、
- ルカ 24:19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、
- ヨハネ 1:45 このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。
- ヨハネ 18:5 彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。イエスは彼らに言われた、「わたしが、それである」。イエスを裏切ったユダも、彼らと一緒に立っていた。
- ヨハネ 18:7 そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスを」と言った。
- ヨハネ 19:19 ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。
- 使徒 2:22 イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きなさい。あなたがたがよく知っているとおり、ナザレ人イエスは、神が彼をとおして、あなたがたの中で行われた数々の力あるわざと奇跡としるしとにより、神からつかわされた者であることを、あなたがたに示されたかたであった。
- 使徒 3:6 ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。
- 使徒 4:10 あなたがたご一同も、またイスラエルの人々全体も、知っていてもらいたい。この人が元気になってみんなの前に立っているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。
- 使徒 6:14 『あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこわし、モーセがわたしたちに伝えた慣例を変えてしまうだろう』などと、彼が言うのを、わたしたちは聞きました」。

  - 使徒 10:38 神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら、また悪魔に押えつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回されました。
  - 使徒 22:8 これに対してわたしは、『主よ、あなたはどなたですか』と言った。すると、その声が、『わたしは、あなたが迫害しているナザレ人イエスである』と答えた。
  - 使徒 26:9 わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、思っていました。
- 力あるわざ
  - 使徒 2:22 イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きなさい。あなたがたがよく知っているとおり、ナザレ人イエスは、神が彼をとおして、あなたがたの中で行われた数々の力あるわざと奇跡としるしとにより、神からつかわされた者であることを、あなたがたに示されたかたであった。
  - 使徒 7:22 モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、言葉にもわざにも、力があった。
- 預言者（19b わざにも言葉にも力ある預言者でした）
  - マタイ 21:11 そこで群衆は、「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである」と言った。
  - ヨハネ 6:14,15 人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。(五千人養いのあと)
  - 使徒 3:22 モーセは言った、『主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟の中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう。その預言者があなたがたに語ることには、ことごとく聞きしたがいなさい。
- イスラエルの解放
  - マタイ 1:21 彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。
  - ルカ 1:68,69 「主なるイスラエルの神は、ほむべきかな。神はその民を顧みてこれをあがない、わたしたちのために救の角を／僕ダビデの家にお立てになった。
  - ルカ 2:38 この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝をささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた。
  - ヨハネ 3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。

  - ローマ 11:26 こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある、／「救う者がシオンからきて、／ヤコブから不信心を追い払うであろう。

- 25 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。
  - 預言者たちが説いたすべての事
    * イザヤ 7:14 それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられる。
    * ルカ 16:29 アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう』。
    * ルカ 24:44 それから彼らに対して言われた、「わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」。
    * ヨハネ 1:45 このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。
    * ヨハネ 5:46 もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう。モーセは、わたしについて書いたのである。
    * 使徒 3:18 神はあらゆる預言者の口をとおして、キリストの受難を予告しておられたが、それをこのように成就なさったのである。
    * 使徒 3:24 サムエルをはじめ、その後つづいて語ったほどの預言者はみな、この時のことを予告した。
    * 1 ペテロ 1:10,11 この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。11 彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。
  - 苦難を受け
    * イザヤ 53:6-8 われわれはみな羊のように迷って、／おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、／彼の上におかれた。7 彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、／口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、／また毛を切る者の前に黙っている羊のように、／口を開かなかった。8 彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、／彼はわが民のとがのために打たれて、／生けるものの地から断たれたのだと。

* マタイ 8:17 これは、預言者イザヤによって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためである。
* マタイ 16:21 この時から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられた。
* マルコ 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、
* ルカ 9:22 「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日目によみがえる」。
* 使徒 1:3 イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。
* 使徒 17:3 キリストは必ず苦難を受け、そして死人の中からよみがえるべきこと、また「わたしがあなたがたに伝えているこのイエスこそは、キリストである」とのことを、説明もし論証もした。
* 使徒 26:23 すなわち、キリストが苦難を受けること、また、死人の中から最初によみがえって、この国民と異邦人とに、光を宣べ伝えるに至ることを、あかししたのです」。
* ヘブル 2:10 なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君を、苦難をとおして全うされたのは、彼にふさわしいことであったからである。
* ヘブル 13:12 だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである。
* 1 ペテロ 1:11 彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。

– 預言者からはじめて

* ミカ 5:1,2 今あなたは壁でとりまかれている。敵はわれわれを攻め囲み、／つえをもってイスラエルのつかさのほおを撃つ。2 しかしベツレヘム・エフラタよ、／あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、／イスラエルを治める者があなたのうちから／わたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである。
* ゼカリヤ 9:9 シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。

* マタイ 2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、／おまえはユダの君たちの中で、／決して最も小さいものではない。おまえの中からひとりの君が出て、／わが民イスラエルの牧者となるであろう』」。
* マタイ 21:4 こうしたのは、預言者によって言われたことが、成就するためである。
* 使徒 13:27 エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めずに刑に処し、それによって、安息日ごとに読む預言者の言葉が成就した。

- （< : to cause to rise up, raise up, to rise, stand up, at arise, appear, stand forth）

  - マタイ 9:9, 12:41, 17:9, 20:19, 22:24, 26:62, マルコ 1:35, 2:14, 3:26, 5:42, 7:24, 8:31, 9:9, 10, 27, 31, 10:1, 34, 50, 12:23, 25, 14:57, 60, 16:9, ルカ 1:39, 4:16, 29, 39, 5:25, 28, 6:8, 8:55, 9:8, 19, 10:25, 11:7, 8, 32, 15:18, 20, 16:31, 17:19, 18:33, 22:45, 46, 23:1, 7, 24:12, 33, 46, ヨハネ 6:39, 40, 44, 54, 11:23, 24, 31, 20:9
  - マタイ 17:9 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。
  - マタイ 20:19 そして彼をあざけり、むち打ち、十字架につけさせるために、異邦人に引きわたすであろう。そして彼は三日目によみがえるであろう」。
  - マタイ 22:24 「先生、モーセはこう言っています、『もし、ある人が子がなくて死んだなら、その弟は兄の妻をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。
  - マルコ 5:42 すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。
  - マルコ 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、
  - マルコ 9:9,10 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。10 彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。
  - マルコ 9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。
  - マルコ 10:34 また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。
  - マルコ 12:23 復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。
  - マルコ 12:25 彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。

– 〔週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた。イエスは以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたことがある。

– ルカ 8:55 するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。

– ルカ 9:8 またある人たちは、エリヤが現れたと言い、またほかの人たちは、昔の預言者のひとりが復活したのだと言っていたからである。

– ルカ 9:19 彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。しかしほかの人たちは、エリヤだと言い、また昔の預言者のひとりが復活したのだと、言っている者もあります」。

– ルカ 16:31 アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』」。

– ルカ 18:33 また、むち打たれてから、ついに殺され、そして三日目によみがえるであろう」。

– ルカ 23:1 群衆はみな立ちあがって、イエスをピラトのところへ連れて行った。

– ルカ 24:7 すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか」。

– ルカ 24:12 〔ペテロは立って墓へ走って行き、かがんで中を見ると、亜麻布だけがそこにあったので、事の次第を不思議に思いながら帰って行った。〕

– ルカ 24:33 そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、

– ルカ 24:46 言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。

– ヨハネ 6:39,40 わたしをつかわされたかたのみこころは、わたしに与えて下さった者を、わたしがひとりも失わずに、終りの日によみがえらせることである。40 わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」。

– ヨハネ 6:44 わたしをつかわされた父が引きよせて下さらなければ、だれもわたしに来ることはできない。わたしは、その人々を終りの日によみがえらせるであろう。

– ヨハネ 6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。

– ヨハネ 11:23,24 イエスはマルタに言われた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。マルタは言った、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。

  - ヨハネ 20:9 しかし、彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、まだ悟っていなかった。

- : to arouse, cause to rise - Matthew 1:24; 2:13; 2:14; 2:20; 2:21; 3:9; 8:15; 8:26; 9:5; 9:19; 11:5; 11:11; 12:11; 12:42; 14:2; 16:21; 17:7; 17:9; 17:23; 20:19; 24:7; 24:11; 24:24; 25:7; 26:32; 26:46; 27:63; 27:64; 28:7 Mark 2:9; 4:27; 4:38; 5:41; 6:16; 6:16; 9:27; 10:46; 10:49; 13:8; 13:22; 14:42; 16:6 Luke 1:69; 3:8; 7:14; 7:16; 7:22; 8:24; 8:54; 8:54; 9:7; 11:31; 20:37; 21:10; 24:6; 24:34 John 2:19; 2:22; 5:8; 5:21; 7:52; 11:20; 11:29; 12:1; 12:9; 13:4; 14:31; 21:14

  - マルコ 1:31 イエスは近寄り、その手をとって起されると、熱が引き、女は彼らをもてなした。

  - マルコ 2:9 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。

  - マルコ 16:6 するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。

  - マルコ 16:14 その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。

  - マタイ 28:6,7 もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をごらんなさい。7 そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』。あなたがたに、これだけ言っておく」。

  - ルカ 24:34 「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなさった」と言っていた。

  - ヨハネ 21:14 イエスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

- パンを割く

  - マルコ 6:41 それから、イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさき、弟子たちにわたして配らせ、また、二ひきの魚もみんなにお分けになった。

    * マタイ 14:19 そして群衆に命じて、草の上にすわらせ、五つの**パン**と二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、**パン**をさいて弟子たちに渡された。弟子たちはそれを群衆に与えた。

    * ルカ 9:16 イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福してさき、弟子たちにわたして群衆に配らせた。

    * ヨハネ 6:11 そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。

- マルコ 8:6 そこでイエスは群衆に地にすわるように命じられた。そして七つのパンを取り、感謝してこれをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟子たちはそれを群衆に配った。

    * マタイ 15:36 七つのパンと魚とを取り、感謝してこれをさき、弟子たちにわたされ、弟子たちはこれを群衆にわけた。

- マルコ 14:22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。

    * マタイ 26:26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取って食べよ、これはわたしのからだである」。

- ルカ 24:30 イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福してさき、弟子たちにわたして群衆に配らせた。

- ルカ 24:35 そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した。

- ヨハネ 21:13 イエスはそこにきて、パンをとり彼らに与え、また魚も同じようにされた。

- 使徒 2:42 そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた。

- 使徒 2:46 そして日々心を一つにして、絶えず宮もうでをなし、家ではパンをさき、よろこびと、まごころとをもって、食事を共にし、

- 使徒 20:7 週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集まった時、パウロは翌日出発することにしていたので、しきりに人々と語り合い、夜中まで語りつづけた。

- 使徒 20:11 そして、また上がって行って、パンをさいて食べてから、明けがたまで長いあいだ人々と語り合って、ついに出発した。

- 使徒 27:35 彼はこう言って、パンを取り、みんなの前で神に感謝し、それをさいて食べはじめた。

- 1 コリント 11:23-29 わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、24 感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。25 食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい」。26 だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。27 だから、ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すのである。28 だ

れでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである。29 主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによって自分にさばきを招くからである。

4.101.4　記録

- 日時：2024 年 6 月 5 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）8 名、参加（遠隔）3 名

4.101.5　問いについて

1. 週の初めの日の朝のことを、復習してみましょう。（1-11, ヨハネ 20:1-18）
    - 週の初めの日の朝早くに、女たち（マルコでは、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤとサロメ）が「墓の入り口を塞いでいる石について心配して」墓に行くと、石は取り除けられ、そこで、真白な長い衣を着た若者（マルコの記述）が「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。7 今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」告げる。
    - 弟子たちのいく人か（ヨハネでは、シモンとイエスの愛しておられた弟子）が空の墓を確認。
    - マグダラのマリアが、イエスに出会う。最初は気づかないが、「マリヤよ」と声をかけられて、イエスだと気づき「ラボニ」先生と答える。
2. マルコには、この時のことが、どのように書かれていますか。（12,13）
    - 12 この後、そのうちのふたりが、いなかの方へ歩いていると、イエスはちがった姿で御自身をあらわされた。13 このふたりも、ほかの人々の所に行って話したが、彼らはその話を信じなかった。12M（the other, another, other）。13 。。
    - [DQ] ルカとの関係を考えるとどのような位置づけでしょうか。
        - ルカの記述の概要。
    - [DQ] なにか他に気づいたことはありますか。
        -「ちがった姿」
        -「ご自身をあらわされた」

* （参考）16:9a 週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた。 (< : to bring forth into the light, cause to shine, shed light) M M

* （参考）16:12 この後、そのうちのふたりが、いなかの方へ歩いていると、イエスはちがった姿で御自身をあらわされた。M (< : to make manifest or visible or known what has been hidden or unknown, to manifest, whether by words, or deeds, or in any other way) .

- ここでも、他の人々は、「その話を信じなかった」とある。

  * （参考）マルコ 16:11 彼らは、イエスが生きておられる事と、彼女に御自身をあらわされた事とを聞いたが、信じなかった。

3. 以下はルカから考えましょう。だれがどんなことを話していましたか。そしてイエスにどのように説明をしていますか。（13-24）

   - 13 この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、14 このいっさいの出来事について互に語り合っていた。15 語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。16 しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。17 イエスは彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。18 そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。22 ところが、わたしたちの仲間である数人の女が、わたしたちを驚かせました。というのは、彼らが朝早く墓に行きますと、23 イエスのからだが見当らないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。24 それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行って見ますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。

   - [DQ] いつのことですか。

     - この日とあり、おそらく、週の初めの日。エルサレムから目的地（エマオ）に行き、戻ってきていることを考えると、11km ぐらいは適当な距離であるが、現在想定されている村はちょっと遠い。戻ったのは、実際には、次の日かもしれない。

   - [DQ] だれの経験ですか。

     - クレオパ（クレオパトロスの短縮系）ともうひとり。

- クロパ（セム的な名）の妻かもしれない。
  - ヨハネ 19:25 さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。
- 週の初めの日の朝の出来事（女たちが空の墓のことを報告。仲間の何人かが確認）を知っている。

- [DQ] どこでのことですか。
  - 「エルサレムから七マイル（60 スタディオン = 約 11.1km）ばかり離れたエマオ（エルサレムの西北西）という村へ行きながら」
  - 地図（エマオ：Emmaus (Nicopolis)）：[Palestine in the Time of Jesus (1)]
  - エマオは、自分たちの村かもしれない。食事は、イエスと二人のようで、すぐさまエルサレムに戻っている。（ルカ 24:33）
- [DQ] どんなことを話していますか。
  - 「14 このいっさいの出来事について互に語り合っていた。15 語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。16 しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。」
- [DQ] 目がさえぎられて？認めることができなかった？とはどのようなことでしょうか。
  - [A] 通常の出会いではない。
  - ルカ 9:45 しかし、彼らはなんのことかわからなかった。それが彼らに隠されていて、悟ることができなかったのである。また彼らはそのことについて尋ねるのを恐れていた。（山上での変貌の直後）
  - ルカ 18:34 弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。この言葉が彼らに隠されていたので、イエスの言われた事が理解できなかった。（受難告知のあと）
  - ヨハネ 20:14 そう言って、うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。
  - ヨハネ 21:4 夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。
- [DQ] なぜ、彼らは「悲しそうな顔をして立ちどまった。」のでしょうか。
  - [Q] イエスの「どんなことか」からはどのような印象をうけますか。
    - マタイ 6:16 また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく言って

おくが、彼らはその報いを受けてしまっている。

- [DQ] イエスにどう語りますか。
  - 「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。22 ところが、わたしたちの仲間である数人の女が、わたしたちを驚かせました。というのは、彼らが朝早く墓に行きますと、23 イエスのからだが見当らないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。24 それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行って見ますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。
    - 朝早くのことなので、他の弟子たちと一緒にいた可能性が強い。最後の晩餐でも一緒だったかもしれない。
    - （参考）マルコ 1:24 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。（ナザレのイエスと呼ばれていたと思われる）
  - [Q] ここからこのひとたちについてどんなことがわかりますか。
    - 死んだらおしまい。

4. イエスは、どのように、そして何について話しますか。（25-27）

- 25 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。
- [DQ] どのような状況を説明しているのでしょうか。
  - 話を聞き、整理するような会話があったのかもしれない。
- [DQ] イエスはなぜ（旧約）聖書全体から説明されたのでしょうか。またどのようなことを説明しましたか。
  - 話している間に、整理できていったのかもしれえない。
- [DQ] クロパたちが語ったことと、イエスが語ったことには何か違いがありますか。
  - 「十字架につけた」「望みをかけていました」「イエスは見当りませんでした」と語っている。途中「御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです」との不思議なことを挿入して。

  - イエスは「愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。」と語りかけ、「キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」について、「聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事ども」を、論理的説明をされている。

- [DQ] イエスは、何を伝えようとしているのでしょうか。
  - 聖書は持っているでしょう、聞いているでしょう。
  - 神様に希望をおきなさい。
  - この人たちが、目が開かれ、信じ、立ち上がり、復活することがたいせつ。
- [DQ] なぜ、イエスは、自分が復活したイエスだと言わないのでしょうか。

5. 二人はどのようにして、イエスであると分かりましたか。(28-31)

- 28 それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、イエスがなお先へ進み行かれる様子であった。29 そこで、しいて引き止めて言った、「わたしたちと一緒にお泊まり下さい。もう夕暮になっており、日もはや傾いています」。イエスは、彼らと共に泊まるために、家にはいられた。30 一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、31 彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなくなった。
  - わたしたちと一緒にお泊まり下さい。
  - 一緒に食卓につかれた
  - パンを取り、祝福してさき、彼らに渡した
    * マルコ 6:41 それから、イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさき、弟子たちにわたして配らせ、また、二ひきの魚もみんなにお分けになった。(マタイ 14:19, ルカ 9:16, ヨハネ 6:11)
    * マルコ 8:6 そこでイエスは群衆に地にすわるように命じられた。そして七つのパンを取り、感謝してこれをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟子たちはそれを群衆に配った。(マタイ 15:36)
    * マルコ 14:22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのからだである」。
  - [DQ] なぜ、ここで目が開けたのでしょうか。説明のときではなく。
    * 説明も大切。

6. そのあと、二人は、どうしますか。(32-35)

- 32 彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。33 そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、34 「主は、ほんとうによみがえって（　：to arouse, cause to rise)、シモンに現れなさった」と言っていた。35 そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した。
- [DQ] なぜ二人はエルサレムに戻ったのでしょうか。
- [DQ] どのような別の情報を得ますか。
  - シモンに現れなさった（1 コリント 15:5）
    - ルカ 22:32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。
    - ルカ 24:12 〔ペテロは立って墓へ走って行き、かがんで中を見ると、亜麻布だけがそこにあったので、事の次第を不思議に思いながら帰って行った。〕
  - そして、すぐに立ってエルサレムに帰って　K　（<　：to cause to rise up, raise up, to rise, stand up, at arise, appear, stand forth）　（<　：to turn back, to return）
  - このあとに、続く。

4.101.6　メモ

- 質問
  - イエスであることがわかったのは、いつでしょうか。それは、そのようにして、分かったのでしょうか。
  - 「シモンに現れなさった」とあるが、それは、いつの、どのようなことについて述べているのだろうか。
- 概要
  - マグダラのマリヤが、イエスが生きておられることと、彼女にご自身を顕されたことを、弟子たちのところへ行って（マルコでは伝えた相手は不明瞭）伝えたが、信じなかったとあるが、マルコでは、「そのうちのふたりが」と始まる。（ヨハネでは、弟子たちのところへ行って、報告したとだけ書かれている）そのうちのふたりが、「いなかの方へ歩いていると、イエスはちがった姿で御自身をあらわされた。」とある。エルサレムにいたので、エルサレム以外は、みないなかであろうが、みやこを離れたことが、明記されているのだろう。（ルカでは、場所も明確に書かれている。後述。）印象的なのは「ちがった姿」の部分である。マルコには、なにも書かれていない。しかし、これに続けて「このふた

りも、ほかの人々の所に行って話したが、彼らはその話を信じなかった。」と、マグダラのマリヤの場合と同様に、「彼らは、信じなかった。」として終わっている。

– この並行箇所として書かれていると思われるのは、ルカで、詳細に書かれている。

週の初めの日の朝、墓に「女たち」が向かい、空の墓を見ていると「輝いた衣を着たふたりの者」に、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか」。(24:5b-7) と言われ、「女たちはその言葉を思い出し、墓から帰って、これらいっさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した。」が「使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。」(14:11) これにつづけて、今回の記事が、入っている。「この日」とはじまり、ふたりの弟子（一人はクレオパ K　　であることが 18 節に書かれている。もう一人は不明だが、ヨハネ 19:15 にある、クロパ K　　を、クレオパと同一人物として、もう一人をその妻とする説もある。また、このクロパの妻マリヤは、十字架のもとに立っていた女性の一人として描かれていて、それは、イエスの母マリアの姉妹であるとか、小ヤコブをアルパヨの子ヤコブととる説もあるので、全体として、もう一人は不明とするのが適切）が、「エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、このいっさいの出来事について互に語り合っていた。語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。」(13-15)「しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。」(16) とある。そこから、イエスとの会話が「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。(17) と始まる。そこで、彼らは「悲しそうな顔をして立ちどまった。」とあり、説明が書かれ (18-20)、さらに「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。」(21) との信仰告白も付け加えている。また、「わたしたちの仲間である数人の女が朝早く墓に行きますと、イエスのからだが見当らないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行って見ますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。(22-24) との話が続き、ここでイエスが、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。」(25-27) とあり、このあとに、イエスを引き留め、「彼らと共に泊まるために、家にはいられた。一緒に食卓につかれ」(28,29)「パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。」(30,31) とあるが、「すると、み姿が見えなくなった。」書かれており、このあとに、「彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。(32) と互いに確認し合い、「すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなさった」と言っていた。」中で、「そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した。」(35) とこの報告をしたことが書かれている。

4.102　16:14-18 弟子たちを派遣する

14 その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことを
お責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。15
そして彼らに言われた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。16 信じてバ
プテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。17 信じる者には、このようなし
るしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、18 へびをつかむであろ
う。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」。

4.102.1　マタイ 28:16-20

16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、イエスが彼らに行くように命じられた山に登った。17
そして、イエスに会って拝した。しかし、疑う者もいた。18 イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わ
たしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。19 それゆえに、あなたがたは行っ
て、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、20 あなたがた
に命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと
共にいるのである」。

4.102.2　ルカ 24:36-49

36 こう話していると、イエスが彼らの中にお立ちになった。〔そして「やすかれ」と言われた。〕37 彼ら
は恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。38 そこでイエスが言われた、「なぜおじ惑っているのか。ど
うして心に疑いを起すのか。39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。
霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。40 〔こう言って、手と足とを
お見せになった。〕41 彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここ
に何か食物があるか」と言われた。42 彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、43 イエスはそれを取っ
て、みんなの前で食べられた。44 それから彼らに対して言われた、「わたしが以前あなたがたと一緒にい
た時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしに
ついて書いてあることは、必ずことごとく成就する」。45 そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの
心を開いて 46 言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみ
がえる。47 そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろも
ろの国民に宣べ伝えられる。48 あなたがたは、これらの事の証人である。49 見よ、わたしの父が約束され
たものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていな
さい」。

4.102.3　ヨハネ 20:19-23

19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。21 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。

マルコによる福音書 16 章 14-18 節福音書対照表

4.102.4　問い

1. 週の初めの日のことについてマルコとヨハネとルカから復習しましょう。（1-13, ヨハネ 20:1-18, ルカ 24:1-35）
2. それぞれの福音書で、「いつ」のことかと「どこ」で起こったことか確認しましょう。
3. マルコでは、イエスは弟子たちに何を伝えていますか。（14）
4. マルコとマタイでは、それぞれどのようなことを弟子たちに伝えていますか。（15-18, マタイ 28:18-20）
5. ルカでは、どのように書かれていますか。（ルカ 24:36-49）
6. ヨハネには、どのように書かれていますか。（ヨハネ 20:19-23）

4.102.5　参照

- ヨハネによるトマスに関する追記（ヨハネ 20:24-29）
  - 24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

  - 本来は「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。が中心メッセージなのだろう。目の前に目で確認することではない信仰の目で、メッセージを受け取ることが肝要なのだろう。
  - 結語：30 イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。
  - このあとに、21 章が続く。
- 復活信仰：榊原康夫『マタイ福音書講解 = 下巻 =』
  - イエスが、十字架にかかったままでなく、葬られたままでもなく、今は生きて働いておられるという信仰（339 頁）
- 身体性（ギリシャ的霊肉二元論に基づくキリスト仮現論への復活においても反論している箇所）
  - マタイ 28:9 すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。
    * ヨハネ 20:17 イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。
  - ルカ 24:38,39 そこでイエスが言われた、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。40 〔こう言って、手と足とをお見せになった。〕
  - ヨハネ 20:20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。
    * ヨハネ 20:19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。
  - ヨハネによるトマスに関する追記（ヨハネ 20:24-29）
  - （参考）1 ヨハネ 1:1 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について——
  - （参考）1 ヨハネ 4:2,3 あなたがたは、こうして神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、反キリストの霊である。あなたがたは、それが来るとかねて聞いていたが、今やすでに世にきている。
- 食事をすることに関して（ギリシャ的霊肉二元論に基づくキリスト仮現論への復活においても反論している箇所）

  - ルカ 24:41-43 彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここに何か食物があるか」と言われた。42 彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、43 イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。
  - （参考）ヨハネ 21:9 彼らが陸に上って見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。10 イエスは彼らに言われた、「今とった魚を少し持ってきなさい」。（イエスも食べたかは不明）
  - （参考）トビト 12:19 私が実際には何も食べなかったことは今お分かりでしょう。食べているように見えていただけです。
- 山について：マタイ 28:16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、イエスが彼らに行くように命じられた山に登った。
  - 山上の垂訓（マタイ 5:1）イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。
    - マタイ 8:1 イエスが山をお降りになると、おびただしい群衆がついてきた。
  - デカポリスの病院のいやしと四千人の養い（マタイ 15:29）イエスはそこを去って、ガリラヤの海べに行き、それから山に登ってそこにすわられた。
  - 山上の変貌（マタイ 17:1）六日ののち、イエスはペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。
    - マルコ 9:2 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、
    - ルカ 9:28 これらのことを話された後、八日ほどたってから、イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。
    - ルカ 9:37 翌日、一同が山を降りて来ると、大ぜいの群衆がイエスを出迎えた。
  - 十二人を選ぶ（ルカ 6:12）このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた。
    - マルコ 3:13 さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。
    - ルカ 6:12 このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた。
    - ルカ 6:17 そして、イエスは彼らと一緒に山を下って平地に立たれたが、大ぜいの弟子たちや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロとシドンの海岸地方などからの大群衆が、
  - 五千人の養い（ヨハネ 6:3）イエスは山に登って、弟子たちと一緒にそこで座につかれた。
    - マルコ 6:45 そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた。

    - マタイ 14:23 そして群衆を解散させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。
    - ヨハネ 6:15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。
- 権威について
  - マルコ 1:22 人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。
    - マタイ 7:29 それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。
    - ルカ 4:32 その言葉に権威があったので、彼らはその教に驚いた。
  - マルコ 1:27 人々はみな驚きのあまり、互に論じて言った、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」。
    - ルカ 4:36 みんなの者は驚いて、互に語り合って言った、「これは、いったい、なんという言葉だろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じられると、彼らは出て行くのだ」。
  - マルコ 2:10 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、
    - マタイ 9:6 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言い、中風の者にむかって、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。
    - マタイ 9:8 群衆はそれを見て恐れ、こんな大きな権威を人にお与えになった神をあがめた。
    - ルカ 5:24 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威を持っていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに対して言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取り上げて家に帰れ」と言われた。
  - マルコ 3:15 また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。
  - マルコ 6:7 また十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれた霊を制する権威を与え、
    - マタイ 10:1 そこで、イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威をお授けになった。
    - ルカ 9:1 それからイエスは十二弟子を呼び集めて、彼らにすべての悪霊を制し、病気をいやす力と権威とをお授けになった。

    - ルカ 10:19 わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう。

  - ルカ 23:42 そして言った、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。

  - ヨハネ 5:27 そして子は人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった。

  - ヨハネ 17:2 あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。

  - ヨハネ 19:10,11 そこでピラトは言った、「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」。11 イエスは答えられた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」。

  - エペソ 1:20-22 神はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ、21 彼を、すべての支配、権威、権力、権勢の上におき、また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名の上におかれたのである。22 そして、万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。

  - ピリピ 2:6-11 キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、7 かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、8 おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。9 それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。10 それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、11 また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

  - ヘブル 2:9 ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。

  - 1 ペテロ 1:21 あなたがたは、このキリストによって、彼を死人の中からよみがえらせて、栄光をお与えになった神を信じる者となったのであり、したがって、あなたがたの信仰と望みとは、神にかかっているのである。

- バプテスマ

  - マルコ 1:4,5 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。5 そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民とが、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。

    - ルカ 3:3 彼はヨルダンのほとりの全地方に行って、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを

宣べ伝えた。

  - マルコ 1:8,9 わたしは水でバプテスマを授けたが、このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けになるであろう」。そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。
  - マルコ 16:16 信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。
  - マタイ 28:19 それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、
  - ヨハネ 4:1,2 イエスが、ヨハネよりも多く弟子をつくり、またバプテスマを授けておられるということを、パリサイ人たちが聞き、それを主が知られたとき、2 （しかし、イエスみずからが、バプテスマをお授けになったのではなく、その弟子たちであった）
  - 使徒 2:8 すると、ペテロが答えた、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。
  - ローマ 6:3,4 それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。4 すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。
  - 1 コリント 12:13 なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである。
  - ガラテヤ 3:27 キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。
  - コロサイ 2:12 あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされたのである。
- 教えること
  - ヨハネ 14:25,26 これらのことは、あなたがたと一緒にいた時、すでに語ったことである。26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。
- 共にいる
  - ピリピ 3:12 わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。
- トマス

- ヨハネ 11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。
- ヨハネ 14:5 トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。
- ヨハネ 20:24-29

4.102.6 記録

- 日時：2024 年 6 月 12 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）4 名、参加（遠隔）5 名

4.102.7 問いについて

1. 週の初めの日のことについてマルコとヨハネとルカから復習しましょう。（1-13, ヨハネ 20:1-18, ルカ 24:1-35）
   - 安息日が終わり、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求め、週の初めの日の早朝、日の出のころ墓の入口を塞いでいる石のことを気にしながら、墓に行った。ところが、石はすでにころがしてあり、墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚く。この若者に、すると「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう」と伝えられ、女たちはおののき恐れながら、墓から出て逃げ去り、人には何も言わなかった。（マルコはここで古い写本は終わっている）
   - ペテロとイエスの愛しておられたもう一人の弟子が墓に行き、空の墓を確認。そのあとマグダラのマリアにイエスが現れる。
   - クレオパともう一人がエマオの向かう途中、ひとりのひとと道連れとなり、イエスのことを話していると、聖書から、イエスについて書いてあることを解き明かされる。共に泊まるよう誘い、食事をしていると、イエスがパンを割いているとき、彼らの目が開かれ、イエスだとわかり、エルサレムにもどり、弟子たちに報告した。
2. それぞれの福音書で、「いつ」のことかと「どこ」で起こったことか確認しましょう。
   - マルコ：「その後」となっており、いつかは不明。また、場所については、書かれていない。
   - マタイ：「さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、イエスが彼らに行くように命じられた山に登

った。」と始まり、いつかは、定かではないが、エルサレムではなく、ガリラヤのそれも、イエスが指定した山と書かれており、イエスが復活したとされる、週の初めの日よりは、かなりあとと思われる。山の指定があったとすると、書かれてある以外にも、イエスの顕現があったことが想定されている。

- ルカ：「こう話していると」とはじまり、この前のエマオの途上で、二人の弟子が復活のイエスに出会ったことが、書かれ、最後に「そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると」と繋がっているので、週の初めの日だと思われる。そうでなかったとしても、その次の日ぐらいであろう。そして、場所はエルサレムということになる。
- ヨハネ：「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方」とあり、場所は、エルサレムである。
- [まとめ] マルコは曖昧、マタイはイエスの約束を強調し「命じられた山」でのこととしている。ルカは、エマオ途上でイエスと出会ったという二人の弟子の証言に結びつけている。ヨハネは、エルサレムで、ルカと近い位置付けに見える。

3. マルコでは、イエスは弟子たちに何を伝えていますか。(14)

- 14 その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。
- [DQ] 「十一弟子」とは、誰のことですか。
  - おそらく、十二弟子のうち、イスカリオテのユダを除いた、十一人と思われる。[十二人を選ぶ]
- [DQ] 何を信じよと言っているのでしょうか。イエスに会ったときの様子はどのように描かれていますか。How do they meet Jesus?
  - マルコで書かれていることだけから推察すると、マグダラのマリヤと、二人の弟子が「よみがえられたイエスを見た人々」ということになる。

4. マルコとマタイでは、それぞれどのようなことを弟子たちに伝えていますか。(15-18, マタイ 28:18-20)

- マルコ 16:15 そして彼らに言われた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。16 信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。17 信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、18 へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」。
- マタイ 28:18 イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。19 それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、20 あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。

- [DQ] マルコでは何を命じていますか。(15,16)
  - 「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」(15) 福音宣教
    - [Q] 「全世界」という視野はどこから出ているのだろうか。
    - マルコ 7:24-30 [リンク] (特に 27 節)「まず子供たちに十分食べさすべきである。子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」
    - マルコ 13:10 こうして、福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。
    - マルコ 14:9 よく聞きなさい。全世界のどこででも、福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」。
    - ヨハネ 20:23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。
  - 「信じてバプテスマを受ける者は救われる。」(16) 新しい命に生き始める。
- [DQ] マルコでは信じる者に対するしるしとしては、どのようなことが書かれていますか。(17,18)
  - 「彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる。」(17,18) いやし。さまざまなチャレンジをうけても滅びることがない。
  - [Q]「新しい言葉を語り」は何を意味しているのだろうか
    - 使徒 2:4 (ペンテコステ) すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。
    - 使徒 10:46 それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである。そこで、ペテロが言い出した、
    - コリント前書 12:20 またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。28 そして、神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた。
  - [Q] 「蛇をもつかみ」
    - 使徒 28:3-6 3 そのとき、パウロはひとかかえの柴をたばねて火にくべたところ、熱気のためにまむしが出てきて、彼の手にかみついた。4 土地の人々は、この生きものがパウロの手からぶら下がっているのを見て、互に言った、「この人は、きっと人殺しに違いない。海からはのがれたが、ディケーの神様が彼を生かしてはおかないのだ」。5 ところがパウロは、まむ

しを火の中に振り落して、なんの害も被らなかった。6 彼らは、彼が間もなくはれ上がるか、あるいは、たちまち倒れて死ぬだろうと、様子をうかがっていた。しかし、長い間うかがっていても、彼の身になんの変ったことも起らないのを見て、彼らは考えを変えて、「この人は神様だ」と言い出した。

- [DQ] マタイでは、イエスはどのような「権威」を授けられたと言っていますか。（マタイ 28:18）
  - [Q]「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。」とはどういうことを言っているのでしょうか。
- [DQ] マタイでは、どのようなことを告げていますか。マタイが伝えたかったことは、何なのでしょうか。（マタイ 28:19-20）
  - 19 それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、20 あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。（命令と約束）

5. ルカでは、どのように書かれていますか。（ルカ 24:36-49）

- 36 こう話していると、イエスが彼らの中にお立ちになった。〔そして「やすかれ」と言われた。〕37 彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。38 そこでイエスが言われた、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。40 〔こう言って、手と足とをお見せになった。〕41 彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここに何か食物があるか」と言われた。42 彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、43 イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。44 それから彼らに対して言われた、「わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」。45 そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて 46 言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。47 そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。48 あなたがたは、これらの事の証人である。49 見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。
- イエスは驚いている弟子達にどのように語りかけていますか。
  -「霊を見ているのだと思った。」（37）を
- ルカはイエスの復活がどのようなものであったと記述しているのでしょうか。
  -「手や足を」（39）みせ、「彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。」（43）と身体性を証明している。（ヨハネ参照）

  - （参考）しかし神はイエスを三日目によみがえらせ、全部の人々にではなかったが、わたしたち証人としてあらかじめ選ばれた者たちに現れるようにして下さいました。わたしたちは、イエスが死人の中から復活された後、共に飲食しました。（使徒 10:40,41）
- イエスは、ここで弟子達にどのような事を教えていますか。まとめてみましょう。
  -「モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」（ルカ 24:44）
  -「キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。」と聖書にも書かれている。（46）心を開いて悟らせた。（45）
  -「その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。」（47）
  - [Q] 「その名によって」とはどのようなことでしょうか。
  -（参考）使徒 1:8 ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。
  - あなたがたは、これらの事の証人である。49 見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。（48）
  - [Q] 「これらの事の証人」とはどのような事でしょうか。

6. ヨハネには、どのように書かれていますか。（ヨハネ 20:19-23）

- 19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。21 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。
- ヨハネ 20:1-18, 24-29 も合わせて読んでみましょう。何が教えられていますか。
- [DQ] 弟子たちは、なぜ、ユダヤ人を恐れているのですか。
  - 自分たちも捉えられると思っていたのだろうか。おそれによって自由をうしなう。
- [DQ] イエスは、どのように、現れますか。
  - 自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。

  - コリント前書 15 章 35-44 （特に 40-44）参照：地に属する、朽ちる、卑しい、弱い肉のからだ vs 天に属する、朽ちない、栄光ある、強い霊のからだ。

- [DQ] イエスはなぜ、手と、わき腹を見せるのでしょう。弟子たちは、どのような反応をしますか。
  - 単なる霊ではないという意味か。または、苦しみをうけた、イエス自身だということか。

- [DQ] イエスは、まず、何を、弟子たちに告げますか。
  -「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。
  - 父なる神がイエスを遣わした目的は何ですか。
  - ヨハネ 3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。
  - ヨハネ 6:38,39 わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。わたしをつかわされたかたのみこころは、わたしに与えて下さった者を、わたしがひとりも失わずに、終りの日によみがえらせることである。
  -（参考）ヨハネ 4:34 イエスは彼らに言われた、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである。

- [DQ] イエスは、次に、どのように、何を告げますか。
  - 22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。
  - [Q] 弟子たちは罪を裁く権威が与えられたと言うことでしょうか。
  - [Q] ヨハネは、この箇所で、何を証言しているのでしょうか。
  -（参考）ヨハネ 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。
  -（参考）ヨハネ 15:26 わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。

- [DQ] どうして、これほど、まとめの部分が四つの福音書で異なっているのでしょうか。
  - [A] 書かれた背景にいるひとたちがたいせつなものとして受け取ったと信じていることが違っていたのではないだろうか。多様性ともいえる。

4.102.8 メモ

- 復活に関するギリシャ語についてのまとめ ChatGPT Deep Research (2025.06.120 [リンク]
- コリント前書 15 章 3-18 （特に 5-8）で、復活の主が現れた記述：5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。6 そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。7 そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、8 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。
  - ケパ、十二人、五百人以上の兄弟たちに同時に、ヤコブ、すべての使徒、パウロ
  - 男性のみが書かれている。ケパ（シモン・ペテロ）に現れたことの証言は、ルカ 24:34 に記録があるのみ。十一人に現れた記述は、マルコ 16:14-18、マタイ 28:16-20 にあるが、十二人とすると、記述がないだけでなく、十二人目は、イスカリオテのユダかどうかが疑問としてあがる。五百人以上の兄弟たちに同時に、またヤコブとあることの記録はない。これらは、イエスが復活したとの確信を共有したことなのかもしれない。
  - パウロについては、使徒行伝 9:1-19、22:6-16、26:12-18 にあり、使徒行伝記者とされる、ルカは、何度もこのことを聞かされていたと思われる。
- コリント前書 15 章 35-44 （特に 40-44）40 天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。41 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。42 死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、43 卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、44 肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。
  - 地に属する、朽ちる、卑しい、弱い肉のからだ vs 天に属する、朽ちない、栄光ある、強い霊のからだ。
- マルコ 12:18-27（マタイ 22:23-33、ルカ 20:27-40）[リンク]（特に 25-27）25 25 彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている」。
  - よみがえると、天にいる御使のようなものである。「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」とあるように、アブラハム、イサク、ヤコブも生きており、神は、生きているものの神である。
- マルコ 9:2-13（マタイ 17:1-13、ルカ 9:28-36）[リンク]（特に 2b-4, 9,10）2b ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、3 その衣は真白く輝き、どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできないく

らいになった。4 すると、エリヤがモーセと共に彼らに現れて、イエスと語り合っていた。

9 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。10 彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどういうことかと、互に論じ合った。

  - イエスの姿が変わり、衣は真白く輝き、エリヤとモーセが「彼ら（おそらくペテロ・ヤコブ・ヨハネを含む)」に現れて、イエスと語り合う。彼らは、このことと、死人の中からのよみがえりを結びつけ考えている。

- ヨハネによる福音書における「命」（口語では 45 件「いのち」はヨハネにはない。そのうち「命じる」は省略）
  - ヨハネ 1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。
  - ヨハネ 3:15,16 それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。
  - ヨハネ 3:36 御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである」。
  - ヨハネ 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」。
  - ヨハネ 4:36 刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まく者も刈る者も、共々に喜ぶためである。
  - ヨハネ 5:21 すなわち、父が死人を起して命をお与えになるように、子もまた、そのこころにかなう人々に命を与えるであろう。
  - ヨハネ 5:24 よくよくあなたがたに言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。
  - ヨハネ 5:26 それは、父がご自分のうちに生命をお持ちになっていると同様に、子にもまた、自分のうちに生命を持つことをお許しになったからである。
  - ヨハネ 5:29 善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。
  - ヨハネ 5:39,40 あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。40 しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこようともしない。

- ヨハネ 6:27 朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい。これは人の子があなたがたに与えるものである。父なる神は、人の子にそれをゆだねられたのである」。
- ヨハネ 6:33 神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」。
- ヨハネ 6:35 イエスは彼らに言われた、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。
- ヨハネ 6:40 わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」。
- ヨハネ 6:47,48 よくよくあなたがたに言っておく。信じる者には永遠の命がある。48 わたしは命のパンである。
- ヨハネ 6:51 わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」。
- ヨハネ 6:53,54 イエスは彼らに言われた、「よくよく言っておく。人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。
- ヨハネ 6:53 人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。
- ヨハネ 6:68 シモン・ペテロが答えた、「主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。
- ヨハネ 8:12 イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。
- ヨハネ 10:10,11 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。11 わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。
- ヨハネ 10:15 それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである。
- ヨハネ 10:17 父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。
- ヨハネ 10:28 わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。
- ヨハネ 11:25 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。

- ヨハネ 12:25 自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう。
- ヨハネ 12:49,50 わたしは自分から語ったのではなく、わたしをつかわされた父ご自身が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったのである。50 わたしは、この命令が永遠の命であることを知っている。それゆえに、わたしが語っていることは、わたしの父がわたしに仰せになったことを、そのまま語っているのである」。
- ヨハネ 13:37,38 ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。38 イエスは答えられた、「わたしのために命を捨てると言うのか。よくよくあなたに言っておく。鶏が鳴く前に、あなたはわたしを三度知らないと言うであろう」。
- ヨハネ 14:6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。
- ヨハネ 14:31 しかし、わたしが父を愛していることを世が知るように、わたしは父がお命じになったとおりのことを行うのである。立て。さあ、ここから出かけて行こう。
- ヨハネ 15:13 人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。
- ヨハネ 17:2,3 あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。3 永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。
- ヨハネ 20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

概要

- 「その後」とあり、時期や場所は不明。イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。」と続いている。「十一弟子」という表現は、マルコでははじめてで、マタイや、ルカ文書によっているように見える。イエスを見たという証言を信じなかったことを責めたとある。マルコでは、マグダラのマリヤの顕現、二人の弟子への顕現において、証言を信じなかったことが書かれていた。それを指しているのだろうか。このあとに、宣教命令と信じる者にたいするしるしが書かれている。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」。唐突な感じがする。
- マルコの、追記と思われる部分の記述であり、他の記事を知っていてあいまいにしている可能性が高い。また、信じるか、信じないかが大きな分かれ道であることを強調し、復活信仰のたいせつさを述べた後で、

大宣教命令がなされており、信じるもの、信じないものの区別も明確である。バプテスマのことも明示されており、ある程度形が整ってからのもののような印象を受ける。

他の福音書との比較

- マタイ：「十一弟子たち」とはじめ、場所をガリラヤの、かつイエスが行けと命じた山となっている。この山についての命令は、イエスの復活後のマタイの記事にもなく、以前から言われていたことなのか、そのようなイエスとの約束の山があったのか不明。また、「イエスに会って拝した」とある一方、疑うものもいたことが書かれている。このあとに、権威授与と、宣教命令が書かれているが、マルコとは内容がかなり異なる。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。これだけ明確なことばで書かれている。「教えを中心においた」完璧な宣教命令である。「疑うものもいた」という表現は、一般的には整合性がない。これも、あとで、イエスのメッセージを思い出し、まとめると、ということなのかもしれない。ただ、ガリラヤでということは、マルコ（16:7, 14:28）にも書かれており（マタイ 26:32 参照）、女たちもふくめて（マルコ 15:41、マタイ 27:55）ガリラヤ出身のひとが多く、主として、ガリラヤでイエスも宣教したと思われるので、その場所での出会いは、重要だと思われる。山に関しても、山上の説教（マタイ 5-7 章）や、「イエスはそこを去って、ガリラヤの海べに行き、それから山に登ってそこにすわられた。」（マタイ 15:29）など、山や、ガリラヤの海辺は、イエスを思い出す、ともに行動した重要な場所だったろう。

- ルカ：「こう話していると」と始まり、クレオパともう一人が報告した直後とされており、場所は、エルサレム、かつ、マグダラのマリアにも顕れた、週の初めの日と思われる。驚いている様子が書かれ、イエスが「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」と、ご自分について「霊」ではないと、証言ししている。さらに、「ここに何か食物があるか」と言い、彼らが差し出した「焼いた魚の一きれを」を皆の前で食べたことが記されている。「モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」こと。さらに、「キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である。見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。と告げる。使徒行伝 2 章の、聖霊降臨につながるのであろう。

- ヨハネ：「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方」とあり、ルカと一致している。「弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると」イエスは、「安かれ」と言われ、「手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。」とある。信じることができたようである。また、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」と遣わし、「息を吹きかけて」「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」と伝えている。ヨハネでは二度の「安かれ」が印象的であり、これが「おそれ」に対抗し、聖霊を受けることが、重視されているが、ここで「息を吹きかけ」ておられ、使

徒行伝 2 章は想定していないようにみえる。

- 問い：
  - 復活証言においては、繰り返し信じないものがいたことが書かれている。これをどう理解すれば良いのか。
    - マルコ 16:11 彼らは、イエスが生きておられる事と、彼女に御自身をあらわされた事とを聞いたが、信じなかった。
    - マルコ 16:13 このふたりも、ほかの人々の所に行って話したが、彼らはその話を信じなかった。
    - （参考）マルコ 16:14 その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。
    - マタイ 28:17 そして、イエスに会って拝した。しかし、疑う者もいた。
    - ルカ 24:11 ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。
    - ルカ 24:16 しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。
    - （参考）ルカ 24:25 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。
    - ルカ 24:37,38 37 彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。38 そこでイエスが言われた、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。
    - （参考）ルカ 24:41 彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここに何か食物があるか」と言われた。
    - （参考）ルカ 24:45 そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて
    - （参考）ヨハネ 20:8,9 8 すると、先に墓に着いたもうひとりの弟子もはいってきて、これを見て信じた。9 しかし、彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、まだ悟っていなかった。
    - ヨハネ 20:14 そう言って、うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。
    - ヨハネ 20:25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。
    - （参考）ヨハネ 20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

* ヨハネ 21:4 夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。
* （参考）ヨハネ 21:12 イエスは彼らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。

– 同じ時のこととは同定できないほど、記述が異なっている。別々の伝承があるように思われる。

4.103 16:19-20 天に上げられる

19 主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。20 弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。〕

4.103.1 ルカ 24:50-53

50 それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。51 祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた。〕52 彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、53 絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。

4.103.2 使徒行伝 1:6-12

6 さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。9 こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。10 イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて 11 言った、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」。12 それから彼らは、オリブという山を下ってエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにある。

マルコによる福音書 16 章 19-20 節福音書対照表

4.103.3 問い

1. イエスの復活に関する記事を復習しましょう。（16:1-18）

2. ヨハネによる福音書から復活についてさらにどのようなことがわかりますか。（ヨハネ 20:24-29, 参考ヨハネ 21:1-25）
3. マルコでは昇天とその後の弟子たちの活動についてどのように描いていますか。（19,20）
4. ルカでは、どのように描いていますか。（ルカ 24:50-53）
5. 使徒行伝には、さらに、どのように書いていますか。（使徒 1:6-12）
6. 復活と昇天を、聖書はどのように描いており、なにを伝えようとしているのでしょうか。

4.103.4 参照

- ヨハネによるトマスの記事の学び：（参照）ヨハネによる福音書 20 章 19-29 節
  - ヨハネ 20 章 19-23 19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。21 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。
  - ヨハネ 20 章 24-29 24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。
  - トマスについて
    * ヨハネ 11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。
    * ヨハネ 14:5 トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。
- ヨハネによる福音書 21 章：ヨハネ 21 章 1-25 1 そののち、イエスはテベリヤの海べで、ご自身をまた弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。2 シモン・ペテロが、デドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子らや、ほかのふたりの弟子たちと一緒にいた時のことである。3 シモン・ペテロは彼らに「わたしは漁に行くのだ」と言うと、彼らは「わたしたちも一

緒に行こう」と言った。彼らは出て行って舟に乗った。しかし、その夜はなんの獲物もなかった。4 夜が
明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。5 イエ
スは彼らに言われた、「子たちよ、何か食べるものがあるか」。彼らは「ありません」と答えた。6 すると、
イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう」。彼ら
は網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。7 イエスの愛しておられ
た弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、
上着をまとって海にとびこんだ。8 しかし、ほかの弟子たちは舟に乗ったまま、魚のはいっている網を引
きながら帰って行った。陸からはあまり遠くない五十間ほどの所にいたからである。9 彼らが陸に上って
見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。10 イエスは彼らに
言われた、「今とった魚を少し持ってきなさい」。11 シモン・ペテロが行って、網を陸へ引き上げると、百
五十三びきの大きな魚でいっぱいになっていた。そんなに多かったが、網はさけないでいた。12 イエスは
彼らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも
「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。13 イエスはそこにきて、パンをとり彼らに与え、
また魚も同じようにされた。14 イエスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、こ
れで既に三度目である。15 彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、「ヨハネの子
シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。ペテロは言った、「主よ、そうです。
わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言
われた。16 またもう一度彼に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。彼はイエスに言っ
た、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に言われた、
「わたしの羊を飼いなさい」。17 イエスは三度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。
ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あ
なたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは
彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい。18 よくよくあなたに言っておく。あなたが若かった時には、
自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことに
なろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」。19 これは、
ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こう話してか
ら、「わたしに従ってきなさい」と言われた。20 ペテロはふり返ると、イエスの愛しておられた弟子がつ
いて来るのを見た。この弟子は、あの夕食のときイエスの胸近くに寄りかかって、「主よ、あなたを裏切る
者は、だれなのですか」と尋ねた人である。21 ペテロはこの弟子を見て、イエスに言った、「主よ、この
人はどうなのですか」。22 イエスは彼に言われた、「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていること
を、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」。
23 こういうわけで、この弟子は死ぬことがないといううわさが、兄弟たちの間にひろまった。しかし、イ
エスは彼が死ぬことはないと言われたのではなく、ただ「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残ってい
ることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか」と言われただけである。24 これ
らの事についてあかしをし、またこれらの事を書いたのは、この弟子である。そして彼のあかしが真実で
あることを、わたしたちは知っている。25 イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしい
ちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う。

- 「手をあげて」福音書では、「それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。」（24:50）のみ。
  - 創世記 14:22 アブラムはソドムの王に言った、「天地の主なるいと高き神、主に手をあげて、わたしは誓います。
  - レビ 9:22 アロンは民にむかって手をあげて、彼らを祝福し、罪祭、燔祭、酬恩祭をささげ終って降りた。エフンネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアのほかは、わたしがかつて、あなたがたを住まわせようと、手をあげて誓った地に、はいることができないであろう。
  - 申命記 32:40 わたしは天にむかい手をあげて誓う、／「わたしは永遠に生きる。
  - サムエル記下 20:21 事実はそうではなく、エフライムの山地の人ビクリの子、名をシバという者が手をあげて王ダビデにそむいたのです。あなたがたが彼ひとりを渡すならば、わたしはこの町を去ります」。女はヨアブに言った、「彼の首は城壁の上からあなたの所へ投げられるでしょう」。
  - 列王記上 11:26,27 ゼレダのエフライムびとネバテの子ヤラベアムはソロモンの家来であったが、その母の名はゼルヤといって寡婦であった。彼もまたその手をあげて王に敵した。27 彼が手をあげて、王に敵した事情はこうである。ソロモンはミロを築き、父ダビデの町の破れ口をふさいでいた。
  - ネヘミヤ 8:6 エズラは大いなる神、主をほめ、民は皆その手をあげて、「アァメン、アァメン」と言って答え、こうべをたれ、地にひれ伏して主を拝した。
  - 詩篇 10:12 主よ、立ちあがってください。神よ、み手をあげてください。苦しむ者を忘れないでください。
  - 詩篇 63:4 わたしは生きながらえる間、あなたをほめ、／手をあげて、み名を呼びまつる。
  - 詩篇 106:26 それゆえ、主はみ手をあげて、彼らに誓い、／彼らを荒野で倒れさせ、
  - ゼカリヤ 14:13 その日には、主は彼らを大いにあわてさせられるので、彼らはおのおのその隣り人を捕え、手をあげてその隣り人を攻める。
  - 1 テモテ 2:8 男は、怒ったり争ったりしないで、どんな場所でも、きよい手をあげて祈ってほしい。
- 使徒たちのその後の活動
  - ヘブル 2:3,4 わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、4 さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである。
  - 使徒 14:3 それにもかかわらず、ふたりは長い期間をそこで過ごして、大胆に主のことを語った。主は、彼らの手によってしるしと奇跡とを行わせ、そのめぐみの言葉をあかしされた。

  - ローマ 15:19 しるしと不思議との力、聖霊の力によって、働かせて下さったことの外には、あえて何も語ろうとは思わない。こうして、わたしはエルサレムから始まり、巡りめぐってイルリコに至るまで、キリストの福音を満たしてきた。
  - 2 コリント 12:12 わたしは、使徒たるの実を、しるしと奇跡と力あるわざとにより、忍耐をつくして、あなたがたの間であらわしてきた。
- 不在の主
  - ルカ 12:34-52 35 腰に帯をしめ、あかりをともしていなさい。36 主人が婚宴から帰ってきて戸をたたくとき、すぐあけてあげようと待っている人のようにしていなさい。37 主人が帰ってきたとき、目を覚しているのを見られる僕たちは、さいわいである。よく言っておく。主人が帯をしめて僕たちを食卓につかせ、進み寄って給仕をしてくれるであろう。38 主人が夜中ごろ、あるいは夜明けごろに帰ってきても、そうしているのを見られるなら、その人たちはさいわいである。39 このことを、わきまえているがよい。家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら、自分の家に押し入らせはしないであろう。40 あなたがたも用意していなさい。思いがけない時に人の子が来るからである」。
  - マタイ 24:45-51 45 主人がその家の僕たちの上に立てて、時に応じて食物をそなえさせる忠実な思慮深い僕は、いったい、だれであろう。46 主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。47 よく言っておくが、主人は彼を立てて自分の全財産を管理させるであろう。48 もしそれが悪い僕であって、自分の主人は帰りがおそいと心の中で思い、49 その僕仲間をたたきはじめ、また酒飲み仲間と一緒に食べたり飲んだりしているなら、50 その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰ってきて、51 彼を厳罰に処し、偽善者たちと同じ目にあわせるであろう。彼はそこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。
  - マタイ 25:14-30 （タラントのたとえ）14 また天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。15 すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて、旅に出た。（25 章全体が不在の主について語られているとも言える）
  - ルカ 19:11-27 （ミナのたとえ）11 人々がこれらの言葉を聞いているときに、イエスはなお一つの譬をお話しになった。それはエルサレムに近づいてこられたし、また人々が神の国はたちまち現れると思っていたためである。12 それで言われた、「ある身分の高い人が、王位を受けて帰ってくるために遠い所へ旅立つことになった。13 そこで十人の僕を呼び十ミナを渡して言った、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』。
- イエス・キリストの証人（ : a witness; i. in a legal sense, ii. an historical sense, iii. in an ethical sense）GPT4.1 （2025.6.18）[リンク]
  - ルカ 24:48 あなたがたは、これらの事の証人である。 .
  - 使徒 1:8 ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマ

リヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。

- 使徒 1:22 すなわち、ヨハネのバプテスマの時から始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日に至るまで、始終わたしたちと行動を共にした人たちのうち、だれかひとりが、わたしたちに加わって主の復活の証人にならねばならない」。
- 使徒 2:32 このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。
- 使徒 3:15 いのちの君を殺してしまった。しかし、神はこのイエスを死人の中から、よみがえらせた。わたしたちは、その事の証人である。
- 使徒 5:32 わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまた、その証人である」。
- 使徒 6:13 それから、偽りの証人たちを立てて言わせた、「この人は、この聖所と律法とに逆らう言葉を吐いて、どうしても、やめようとはしません。
- 使徒 7:58 彼を市外に引き出して、石で打った。これに立ち合った人たちは、自分の上着を脱いで、サウロという若者の足もとに置いた。
- 使徒 10:39 わたしたちは、イエスがこうしてユダヤ人の地やエルサレムでなさったすべてのことの証人であります。人々はこのイエスを木にかけて殺したのです。
- 使徒 10:41 全部の人々にではなかったが、わたしたち証人としてあらかじめ選ばれた者たちに現れるようにして下さいました。わたしたちは、イエスが死人の中から復活された後、共に飲食しました。
- 使徒 13:31 イエスは、ガリラヤからエルサレムへ一緒に上った人たちに、幾日ものあいだ現れ、そして、彼らは今や、人々に対してイエスの証人となっている。
- 使徒 22:15 それはあなたが、その見聞きした事につき、すべての人に対して、彼の証人になるためである。
- 使徒 22:20 また、あなたの証人ステパノの血が流された時も、わたしは立ち合っていてそれに賛成し、また彼を殺した人たちの上着の番をしていたのです』。
- 使徒 26:16 さあ、起きあがって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしに会った事と、あなたに現れて示そうとしている事とをあかしし、これを伝える務に、あなたを任じるためである。
- ローマ 1:9 わたしは、祈のたびごとに、絶えずあなたがたを覚え、いつかは御旨にかなって道が開かれ、どうにかして、あなたがたの所に行けるようにと願っている。このことについて、わたしのためにあかしをして下さるのは、わたしが霊により、御子の福音を宣べ伝えて仕えている神である。
- 2 コリント 1:23 わたしは自分の魂をかけ、神を証人に呼び求めて言うが、わたしがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに対して寛大でありたいためである。

- 2 コリント 13:1 わたしは今、三度目にあなたがたの所に行こうとしている。すべての事がらは、ふたりか三人の証人の証言によって確定する。
- ピリピ 1:8 わたしがキリスト・イエスの熱愛をもって、どんなに深くあなたがた一同を思っていることか、それを証明して下さるかたは神である。
- 1 テサロニケ 2:5 わたしたちは、あなたがたが知っているように、決してへつらいの言葉を用いたこともなく、口実を設けて、むさぼったこともない。それは、神が**あかし**して下さる。
- 1 テサロニケ 2:10 あなたがたも**あかし**し、神も**あかし**して下さるように、わたしたちはあなたがた信者の前で、信心深く、正しく、責められるところがないように、生活をしたのである。
- 1 テモテ 5:19 長老に対する訴訟は、ふたりか三人の証人がない場合には、受理してはならない。
- 1 テモテ 6:12 信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである。
- 2 テモテ 2:2 そして、あなたが多くの証人の前でわたしから聞いたことを、さらにほかの者たちにも教えることのできるような忠実な人々に、ゆだねなさい。
- ヘブル 10:28 モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、二、三の人の証言に基いて死刑に処せられるとすれば、
- ヘブル 12:1 こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。
- 1 ペテロ 5:1 そこで、あなたがたのうちの長老たちに勧める。わたしも、長老のひとりで、キリストの苦難についての証人であり、また、やがて現れようとする栄光にあずかる者である。
- 黙示 1:5 また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、
- 黙示 2:13 わたしはあなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの座がある。あなたは、わたしの名を堅く持ちつづけ、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住んでいるあなたがたの所で殺された時でさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。
- 黙示 3:14 ラオデキヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『アァメンたる者、忠実な、まことの証人、神に造られたものの根源であるかたが、次のように言われる。
- 黙示 11:3 そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言することを許そう」。

- 黙示 17:6 わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。この女を見た時、わたしは非常に驚きあやしんだ。

- 「福音」　　: good tidings - the glad tidings of the kingdom of God soon to be set up, and subsequently also of Jesus the Messiah, the founder of this kingdom. After the death of Christ, the term comprises also the preaching of (concerning) Jesus Christ as having suffered death on the cross to procure eternal salvation for the men in the kingdom of God, but as restored to life and exalted to the right hand of God in heaven, thence to return in majesty to consummate the kingdom of God
  - マルコ 1:1　神の子イエス・キリストの福音のはじめ。
  - マルコ 1:14,15　ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、15 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。
  - マルコ 8:35 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。
  - マルコ 10:29 イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、
  - マルコ 13:10 こうして、福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。
  - マルコ 14:9 よく聞きなさい。全世界のどこででも、福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」。
  - マルコ 16:15 そして彼らに言われた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。
  - (参考) マルコ 16:20 弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。〕
  - マタイ 4:23　イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。
  - マタイ 9:35　イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。
  - (参考) マタイ 11:5 盲人は見え、足なえは歩き、重い皮膚病にかかった人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。
  - マタイ 24:14　そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。
  - マタイ 26:13　よく聞きなさい。全世界のどこででも、この福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」。

- 神の右
  - マルコ 16:19 主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。
  - ルカ 22:69 しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」。
  - 使徒 2:33 それで、イエスは神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに注がれたのである。このことは、あなたがたが現に見聞きしているとおりである。
  - 使徒 7:55,56 しかし、彼は聖霊に満たされて、天を見つめていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた。そこで、彼は「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と言った。
  - ローマ 8:34 だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。
  - コロサイ 3:1 このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。
  - ヘブル 10:12 しかるに、キリストは多くの罪のために一つの永遠のいけにえをささげた後、神の右に座し、
  - 1 ペテロ 3:22 キリストは天に上って神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられるのである。
  - （参考）創世記 48:17,18 ヨセフは父が右の手をエフライムの頭に置いているのを見て不満に思い、父の手を取ってエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。そしてヨセフは父に言った、「父よ、そうではありません。こちらが長子です。その頭に右の手を置いてください」。
  - （参考）出エジプト 15:6 主よ、あなたの右の手は力をもって栄光にかがやく、／主よ、あなたの右の手は敵を打ち砕く。
  - （参考）出エジプト 15:12 あなたが右の手を伸べられると、／地は彼らをのんだ。

4.103.5 記録

- 日時：2024 年 6 月 19 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席（対面）8 名、参加（遠隔）3 名

4.103.6 問いについて

1. イエスの復活に関する記事を復習しましょう。（16:1-18）

- 安息日が終わり、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求め、週の初めの日の早朝、日の出のころ墓の入口を塞いでいる石のことを気にしながら、墓に行った。すると、石はすでにころがしてあり、墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚く。この若者に、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう」と伝えられ、女たちはおののき恐れながら、墓から出て逃げ去り、人には何も言わなかった。（マルコはここで古い写本は終わっている）
- （ヨハネによると）ペテロとイエスの愛しておられたもう一人の弟子が墓に行き、空の墓を確認。そのあとマグダラのマリアにイエスが現れる。
- （ルカによると）クレオパともう一人がエマオの向かう途中、ひとりのひとと道連れとなり、イエスのことを話していると、聖書から、イエスについて書いてあることを解き明かされる。共に泊まるよう誘い、食事をしていると、イエスがパンを割いているとき、彼らの目が開かれ、イエスだとわかり、エルサレムにもどり、弟子たちに報告した。
- （ルカ、ヨハネではエルサレムで「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、『安かれ』と言われた。」と書き始めている。（20:19））みなが集まっているところに、イエスが現れ、復活のイエスにあった証言を信じない頑なさをとがめ、さらに「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。16 信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。17 信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、18 へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」。と告げる。（ルカ、ヨハネでは、ことばは一定していない。マタイでは、ガリラヤの山での顕現が書かれている。）

2. ヨハネによる福音書から復活についてさらにどのようなことがわかりますか。（ヨハネ 20:24-29, 参考ヨハネ 21:1-25）
   - 24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。
   - [DQ] トマスはなぜ一緒にいなかったのでしょうか。
     - （参考）ヨハネ 11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。

  - （参考）ヨハネ 14:5 トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。
- [DQ] トマスにイエスはどのようなメッセージを語っているのでしょうか。
  - 本来は「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。が中心メッセージなのだろう。目の前に目で確認することではない信仰の目で、メッセージを受け取ることが肝要なのだろう。

3. マルコでは昇天とその後の弟子たちの活動についてどのように描いていますか。（19,20）
   - 19 主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。20 弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。
   - [DQ] 「いつ」「どこで」起こったことなのでしょうか。
     - 不明。ルカ、使徒行伝には書かれている。
   - [DQ] なにを伝えているのでしょうか。神様とその右に座っておられるイエスが見えたのでしょうか。
     - 執筆者のまとめであって、具体的な証言ではないかもしれない。
     - 神の右：ルカ 22:66-71 69 しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう 70 彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。71 すると彼らは言った、「これ以上、なんの証拠がいるか。われわれは直接彼の口から聞いたのだから」。
4. ルカでは、どのように描いていますか。（ルカ 24:50-53）
   - 50 それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。51 祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた。〕52 彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、53 絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。
   - [DQ] 場所はどこですか。
     - ベタニヤの近く
     - [参考] ベタニヤはエルサレムから、15 スタディオン（ヨハネ 11:18）　2,775m
   - [DQ] 「手をあげて祝福された」はなにを意味しているのでしょうか。
     - GPT-4.1 2025.06.17「手をあげて祈る」は、聖書において神への信頼、賛美、従順、願いを表す豊かな象徴的行為です。新約聖書では記述が少ないですが、根底にある意味は変わらず、信者が神の前に心も体も開くことを表しています。
   - [DQ] 「彼らを離れた。」までだとすると、これは、復活のイエスの顕現のひとつということでしょうか。
     - おそらく、そうではなく、特別な時として表現していることが、52,53 節からも伺い知れる。
   - [DQ] 「非常な喜び」の内容は何なのでしょうか。
5. 使徒行伝には、さらに、どのように書いていますか。（使徒 1:6-12）
   - 6 さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人

となるであろう」。9 こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。10 イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて 11 言った、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」。12 それから彼らは、オリブという山を下ってエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにある。

- [DQ] 場所はどこですか。(1:12)
  - それから彼らは、オリブという山を下ってエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにある。(ユダヤ教の律法では、安息日に歩いてはならない距離は 2000 キュビト(約 900 メートル)とされています。)
    - 出エジプト 16:29 見よ、主はあなたがたに安息日を与えられた。ゆえに六日目には、ふつか分のパンをあなたがたに賜わるのである。おのおのその所にとどまり、七日目にはその所から出てはならない」
    - 民数記 35:5 あなたがたは町の外で東側に二千キュビト、南側に二千キュビト、西側に二千キュビト、北側に二千キュビトを計り、町はその中央にしなければならない。彼らの町の放牧地はこのようにしなければならない。
    - ミシュナー『エルビン』4:3 もし人が許される用事で安息日の限度の外に出、しかも必要な行為はもう済まされたと言われたが、彼はどの方角でも二千キュビトの範囲内で移動してよろしい。
- [DQ] 弟子たちは、どのような問いをしていますか。
  - 「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。(1:6b)
  - (参考)ルカ 24:21a わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。
- [DQ] イエスはどう答えていますか。
  - 「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。
  - [Q] どのような証人でしょうか。「わたし(キリスト)の証人」とはなにを意味しているのでしょうか。
  - (参考)ルカ 24:46-48 「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。47 そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。48 あなたがたは、これらの事の証人である。
- [DQ] 全体として何を伝えているのでしょうか。
  - 時期や場合ではなく、イエスの証人となること。

6. 復活と昇天を、聖書はどのように描いており、なにを伝えようとしているのでしょうか。
   - [DQ] あなたは、復活と昇天と再臨について、どのようなメッセージを受け取りましたか。
   - 11 言った、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるで

あろう」。

- [A] 中心は、再臨ではなく、イエスを証しすることのように思われる。

4.103.7 メモ

- まず、「主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。」とあり、このあとの弟子たちの活動の様子と主の働きが、「弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。」と書かれている。

- 他の福音書としては、ルカにのみ書かれ、使徒行伝にさらに追記されている。まずルカには「それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた。〕彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。とその後の弟子たちの様子で終わっている。使徒行伝では、いつの事とは書かず「さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、『主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか』。彼らに言われた、『時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう』。こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、『ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう』。」となっている。

- ルカのキリスト教史観としてまとめられている傾向があるが、ヨハネ 20 章の「聖霊を受けよ」などをみると、聖霊をうけることは、個人的な体験が基本で、一人一人によって異なるのではないかと思われる。復活のイエスの地上でのはたらきと、聖霊の働きを区別するには、昇天について記録することも重要であったと思われるが、ルカでは、ベタニヤ、使徒行伝では場所は明確ではないが、エルサレムを起点としていることから、エルサレムのように見える。ルカと、使徒行伝で書かれた目的が異なっていると思われるが、違いも気になる。

第 5 章

マルコ（2003-2005）

それぞれの箇所の聖書は（日本聖書協会）口語訳、引用は共同訳が多いと思います。ホームページへのリンク

マルコによる福音書を学んで行くにあたって

マルコによる福音書は、一般的に福音書の中で最も古いと言われている。マルコと呼ばれるヨハネは聖書の中で 8 回出てくる。使徒 12:12, 12:25, 15:37, 15:39, コロサイ 4:10, 2 テモテ 4:11, ピレモン 24, 1 ペテロ 5:13。

- テキストから何が分かるかを中心に学びましょう。
- 共観福音書 (synoptic) [*1]の他の箇所は時に応じて参考にしていきましょう。
- 著者が何を伝えたいと思っているかを中心に学びましょう。

5.1　マルコによる福音書　第 1 章

5.1.1　1 節-8 節

> 1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。 2 預言者イザヤの書に、／「見よ、わたしは使をあなたの
> 先につかわし、／あなたの道を整えさせるであろう。3 荒野で呼ばわる者の声がする、／『主の道を備え
> よ、／その道筋をまっすぐにせよ』」／と書いてあるように、4 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の
> ゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。 5 そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民と
> が、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。
> 6 このヨハネは、らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物としていた。
> 7 彼は宣べ伝えて言った、「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。わたしはかがんで、そ

[*1] マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書のこと。この三巻は同じできごとについて扱っている部分（並行記事）が多く、「共通の観点を持つ福音書」としてこう呼ばれます。

のくつのひもを解く値うちもない。 8 わたしは水でバプテスマを授けたが、このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けになるであろう」。

- マルコによる福音書はどのような言葉で始まりますか。
  - 「神の子イエス・キリストの福音の初め。」

    福音= Good News= Gospel= ユーアンゲリオン = evangelism

    イエス: Joshua = Yahaweh is salvation

    キリスト：メシヤ = 油注がれたもの（旧約では王、祭司、預言者など特別な使命に任命されるものに注がれた。）
- 2,3 節では「使（つかい)」について何といっていますか。使命・働く場所・メッセージ。
  - マラキ 3:1　見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。あなたたちが待望している主は／突如、その聖所に来られる。あなたたちが喜びとしている契約の使者／見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。
  - [DQ] 旧約聖書におけるバプテスマのヨハネの役割・仕事は？
  - イザヤ 40:3　呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。
- ヨハネはどんな人ですか。どんな働きをしますか。
  - [DQ] バプテスマのヨハネは何をし何を語ったか。
- バプテスマのヨハネは、「使」について上で考えた旧約聖書の予言をどのように成し遂げていますか。
- ヨハネの働きは、メシヤを迎えるために人々の心をどのように整えるのでしょうか。悔い改めることは、救い主を迎えるのにどう整えるのでしょうか。やがて来る方とどのような違いがありますか。

5.1.2　9 節-15 節

1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。10 そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下って来るのを、ごらんになった。 11 すると天から声があった、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。12 それからすぐに、御霊がイエスを荒野に追いやった。 13 イエスは四十日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた。そして獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた。14 ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、15 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。

- そのころとはどういう時のことですか。地図で、ナザレ、エルサレムと、ヨルダン川を確認（探）しましょう。
  - ルカ 3:1-2 1: 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、2: アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。
- イエスのバプテスマの時どんな事がおきましたが。何を表しているのでしょう。
- マルコは、このときの誘惑についてどんなことを強調していますか。
  - [DQ] イエスはなぜサタンの試みにあわれたのだろうか。
- イエスはどこで宣教を始めますか。
  - [DQ] イエスの宣教では何が語られたか。
- イエスの 15 節の教えと、4,7,8 節のバプテスマのヨハネの教えとを比べてみましょう。どんな相違点と類似点がありますか。

5.1.3 16 節-20 節

1:16 さて、イエスはガリラヤの海べを歩いて行かれ、シモンとシモンの兄弟アンデレとが、海で網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。17 イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。 18 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。 19 また少し進んで行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、舟の中で網を繕っているのをごらんになった。 20 そこで、すぐ彼らをお招きになると、父ゼベダイを雇人たちと一緒に舟において、イエスのあとについて行った。

- 最初の弟子たちはどんな人たちでしたか。
  - [DQ] イエスの弟子の特徴をあげよ。
- イエスに声をかけられたときこの人たちはそれぞれ何をしていましたか。
- この人たちは、何をするために招かれていますか。
- この人たちはどのように反応しますか。

5.1.4 21 節-28 節

1:21 それから、彼らはカペナウムに行った。そして安息日にすぐ、イエスは会堂にはいって教えられた。 22 人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからであ

る。 23 ちょうどその時、けがれた霊につかれた者が会堂にいて、叫んで言った、24 「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。 25 イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。26 すると、けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。27 人々はみな驚きのあまり、互に論じて言った、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」。 28 こうしてイエスのうわさは、たちまちガリラヤの全地方、いたる所にひろまった。

- イエスの教えに対する人々の反応はどうでしたか。
  - 何に、なぜ人々は驚いたのでしょうか。
  - 律法学者はどのように教えていたのでしょうか。
- 汚れた霊につかれた者は何を叫んでいますか。イエスは、これに対し、なんと言っていますか。
- 27 節に、人々の 2 回目の驚きが記されていますが、ここでは特に何に驚いたのでしょうか。
  - [DQ] 権威あるもののように教えるとはどういうことでしょうか。
  - [DQ] 奇跡はなぜ行なわれたのでしょうか。

5.1.5 29 節-34 節

1:29 それから会堂を出るとすぐ、ヤコブとヨハネとを連れて、シモンとアンデレとの家にはいって行かれた。 30 ところが、シモンのしゅうとめが熱病で床についていたので、人々はさっそく、そのことをイエスに知らせた。31 イエスは近寄り、その手をとって起されると、熱が引き、女は彼らをもてなした。 32 夕暮になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのところに連れてきた。 33 こうして、町中の者が戸口に集まった。 34 イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。

- シモンとアンデレの家ではどんな問題がありましたか。そして、人々は何をしますか。
- 姑の回復の様子はどのように記されていますか。
- なぜ、日没後病人たちをつれてきたのでしょうか。（この日はどんな日でしたか。）
- イエスは何をしますか。
- 25 節と同じようにここでもなぜイエスは悪霊を黙らせるのでしょうか。

5.1.6　35 節-39 節

1:35 朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。 26
すると、シモンとその仲間とが、あとを追ってきた。37 そしてイエスを見つけて、「みんなが、あなたを
捜しています」と言った。 38 イエスは彼らに言われた、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこで
も教を宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」。 39 そして、ガリラヤ全地を巡りあるい
て、諸会堂で教えを宣べ伝え、また悪霊を追い出された。

- 安息日の出来事を思い起こしながら次のことを考えてみましょう。
  - どこで祈っていますか。
  - なぜ祈るのでしょうか。
  - [DQ] イエスのいのりについて何がわかりますか。
- 人々はイエスにどんな事を求めて探しているのでしょう。
- イエスは教えといやしの働きのどちらに重点を置いていますか。イエスにとってこの二つにはどんなつながりがあるのでしょうか。

5.1.7　40 節-45 節

1:40 ひとりの重い皮膚病にかかった人が、イエスのところに願いにきて、ひざまずいて言った、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。41 イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。42 すると、重い皮膚病が直ちに去って、その人はきよくなった。 43 イエスは彼をきびしく戒めて、すぐにそこを去らせ、こう言い聞かせられた、 44 「何も人に話さないように、注意しなさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセが命じた物をあなたのきよめのためにささげて、人々に証明しなさい」。 45 しかし、彼は出て行って、自分の身に起ったことを盛んに語り、また言いひろめはじめたので、イエスはもはや表立っては町に、はいることができなくなり、外の寂しい所にとどまっておられた。しかし、人々は方々から、イエスのところにぞくぞくと集まってきた。

- 40 節のらい病人の言葉にはどんな気持ちが表れていますか。
- イエスはどう対応しますか。
- イエスはらい病人にどんな事を命令しますか。
  - [DQ] イエスはなぜ語らないように注意したのでしょうか。
- なぜ、らい病人はイエスの命令に背くのでしょうか。そしてどうなりますか。

5.1.8　1 章まとめ

- マルコは、「神の子イエスキリストの福音のはじめ」としてこの福音書を書きだし、私達は、いま第一章の終わりまで学んできましたが、この一章にはイエスがどんな方だと書かれていたでしょうか。貴方はどんな印象を受けましたか。

5.2　マルコによる福音書　第 2 章

5.2.1　1 節-12 節

2:1 幾日かたって、イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるというううわさが立ったので、2 多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。3 すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。4 ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。6 ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、7 「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。8 イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。9 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。10 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、11 「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。12 すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

- イエスはカペナウムに戻ってきますが、以前カペナウムではどんなことをしたでしょうか。
- イエスはみことばを話しておられましたが、どんなことで、どのように中断されますか。その状況を想像してみましょう。
- イエスはそれにどう対応しますか。4 人の人と、その人たちに担がれてきた人の気持ちもあわせて考えてみましょう。
- 律法学者は、どう反応しますか。なぜ、そんな反応をするのでしょうか。
- イエスは、どんなことを気付かせるために 9 節の質問をしていますか。
  - [DQ] 中風の人に「あたなの罪はゆるされた」というのと、「起きて寝床をたたんで歩け」というのとどちらがあなたはやさしいと思いますか。律法学者はどう思っていたでしょう。イエスはどう思っていたでしょう。

- 中風の人はどのようにして信仰を表明しますか。
- イエスはなぜ、5 節の様な対応のされ方をしたのでしょうか。
  - この当時、病気、特に不治のやまいは罪のゆえの神の怒りが原因だと思われていました。
- このいやしに対して、どのような反応がおこりますか。

5.2.2 13 節-17 節

2:13 イエスはまた海べに出て行かれると、多くの人々がみもとに集まってきたので、彼らを教えられた。14 また途中で、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをごらんになって、「わたしに従ってきなさい」と言われた。すると彼は立ちあがって、イエスに従った。15 それから彼の家で、食事の席についておられたときのことである。多くの取税人や罪人たちも、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。こんな人たちが大ぜいいて、イエスに従ってきたのである。16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。17 イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

- ここでイエスの弟子として 4 人の漁師にどんな人が加えられますか。
- どんな人たちがこの人の家の食卓についていますか。
- 誰が誰に向かってどんな苦情を言っていますか。
- イエスはこれに対して何と言っていますか。

5.2.3 18 節-22 節

2:18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。19 するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。20 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう。21 だれも、真新しい布ぎれを、古い着物に縫いつけはしない。もしそうすれば、新しいつぎは古い着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなる。22 まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそうすれば、ぶどう酒は皮袋をはり裂き、そして、ぶどう酒も皮袋もむだになってしまう。〔だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである〕」。

- 断食についての質問にイエスは何と答えていますか。
- パリサイ人たちやヨハネの弟子たちの断食についての考えとどう言うところが違っていたと思いますか。

- 21 節、22 節の 2 つのたとえは、何を言おうとしていますか。断食についての問答とあわせて考えてみましょう。
  - イエスはどういう時には断食をせず、どういう時には断食をすると言っていますか。
  - 花婿とはだれのことだと思いますか。花婿が取り去られる時とはいつのことでしょうか。

5.2.4　23 節-28 節

2:23 ある安息日に、イエスは麦畑の中をとおって行かれた。そのとき弟子たちが、歩きながら穂をつみはじめた。24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った、「いったい、彼らはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのですか」。25 そこで彼らに言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが食物がなくて飢えたとき、ダビデが何をしたか、まだ読んだことがないのか。26 すなわち、大祭司アビアタルの時、神の家にはいって、祭司たちのほか食べてはならぬ供えのパンを、自分も食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。27 また彼らに言われた、「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。28 それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」。

- イエスは安息日の目的をどのように説明していますか。
- イエスは麦畑の出来事について何を言おうとしているのでしょうか。

5.2.5　2 章まとめ

- イエスに対する反対が次第に強まっています（3 章 6 節）。どのような人がどのような理由でイエスを批判しているのでしょうか。
- イエスにであって弟子となったり、いやされたりした人と、反対者とは何が違うのでしょうか。

5.3　マルコによる福音書　第 3 章

5.3.1　1 節-6 節

3:1 イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人がいた。2 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。3 すると、イエスは片手のなえたその人に、「立って、中へ出てきなさい」と言い、4 人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。5 イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。6 パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。

- この出来事はどんな状況の中でおこりますか。

- イエスは片手の萎えた人を真ん中に立たせなんと言っていますか。
- 「人々」は安息日をどんな日だと思っていたのでしょうか。
- なぜイエスは怒り嘆くのでしょうか。
- この出来事の結果どんなことがおこりますか。
- もう一度 4 節を読んでイエスがこの言葉をどのように行動によって示したか考えてみましょう。
- あなたにとって安息日とはどういうものでしょうか。

5.3.2　7 節-12 節

3:7 それから、イエスは弟子たちと共に海べに退かれたが、ガリラヤからきたおびただしい群衆がついて行った。またユダヤから、8 エルサレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シドンのあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞いて、みもとにきた。9 イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるために、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。10 それは、多くの人をいやされたので、病苦に悩む者は皆イエスにさわろうとして、押し寄せてきたからである。11 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。12 イエスは御自身のことを人にあらわさないようにと、彼らをきびしく戒められた。

- 大勢の人たちがイエスのもとに集まってきたとありますが、地図で調べてみましょう。1 章 28 節からどんな進展が見られますか。
- なぜそんな大勢の人がイエスに魅力を感じているのでしょうか。
- 11, 12 節での汚れた霊に対処するイエスと 1 章 23 節-26 節での対処について類似点をあげてみましょう。
- なぜイエスは、汚れた霊に宣伝されたくないのでしょう。

5.3.3　13 節-19 節

3:13 さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。14 そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、15 また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。16 こうして、この十二人をお立てになった。そしてシモンにペテロという名をつけ、17 またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。18 つぎにアンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、19 それからイスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。イエスが家にはいられると、

- 12 弟子が任命されたのはどんな目的のためでしょうか。

- イエスはどんな人たちにどんなニックネームをつけていますか。
- 弟子たちのリストについて気付いたことをあげてみましょう。

5.3.4　20 節-30 節

3:20 群衆がまた集まってきたので、一同は食事をする暇もないほどであった。21 身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。22 また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼はベルゼブルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。23 そこでイエスは彼らを呼び寄せ、譬をもって言われた、「どうして、サタンがサタンを追い出すことができようか。24 もし国が内部で分れ争うなら、その国は立ち行かない。25 また、もし家が内わで分れ争うなら、その家は立ち行かないであろう。26 もしサタンが内部で対立し分争するなら、彼は立ち行けず、滅んでしまう。27 だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、その人の家に押し入って家財を奪い取ることはできない。縛ってからはじめて、その家を略奪することができる。28 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。29 しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。30 そう言われたのは、彼らが「イエスはけがれた霊につかれている」と言っていたからである。

- エルサレムから下ってきた律法学者たちはどのようにイエスを批判していますか。
- もしイエスが悪霊の頭の力によって悪霊を追い出しているとするとどんな矛盾が起こるとイエスは言っていますか。
- 27 節のたとえはそれぞれ何をたとえているのでしょうか。
- 聖霊を汚す罪とはどんな罪でしょうか。30 節も含めて考えてみましょう。

5.3.5　31 節-35 節

3:31 さて、イエスの母と兄弟たちとがきて、外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。32 ときに、群衆はイエスを囲んですわっていたが、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟、姉妹たちが、外であなたを尋ねておられます」と言った。33 すると、イエスは彼らに答えて言われた、「わたしの母、わたしの兄弟とは、だれのことか」。34 そして、自分をとりかこんで、すわっている人々を見まわして、言われた、「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。

- この段落の状況を描写してみましょう。20 節の様子も一緒に考えてみましょう。
- イエスの母や兄弟姉妹はイエスのことをどう思っていたのでしょうか。21 節も含めて考えてみましょう。
- イエスは自分の家族はどんな人たちの事だと言っていますか。

5.4　マルコによる福音書　第 4 章

5.4.1　1 節-20 節

4:1 イエスはまたも、海べで教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。2 イエスは譬で多くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、3 「聞きなさい、種まきが種をまきに出て行った。4 まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。5 ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、6 日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種はいばらの中に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまったので、実を結ばなかった。8 ほかの種は良い地に落ちた。そしてはえて、育って、ますます実を結び、三十倍、六十倍、百倍にもなった」。9 そして言われた、「聞く耳のある者は聞くがよい」。10 イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子と共に、これらの譬について尋ねた。11 そこでイエスは言われた、「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。12 それは／『彼らは見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、悟らず、／悔い改めてゆるされることがない』／ためである」。13 また彼らに言われた、「あなたがたはこの譬がわからないのか。それでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。14 種まきは御言をまくのである。15 道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼らの中にまかれた御言を、奪って行くのである。16 同じように、石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、17 自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。そののち、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。18 また、いばらの中にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くが、19 世の心づかいと、富の惑わしと、その他いろいろな欲とがはいってきて、御言をふさぐので、実を結ばなくなる。20 また、良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである」。

- イエスはどんな場所でどんな人たちにどんな方法で教えていますか。
- 3 節から 8 節のたとえの中でまかれた種は落ちた場所によりそれぞれどうなったと書いてありますか。
- 10 節からのところでこの解説を受けているのはだれですか。なぜ解説を聞くことが出来るのでしょうか。
- ここに現れる 4 種類の人に共通の事は何ですか。
- ここに現れる 4 種類の人はそれぞれどんな人ですか。
- それぞれ何が違うのでしょうか。
- 4 種類の土地、み言葉を聞いたそれぞれの人たちの受け取り方はそれぞれ私達のどのような受け取り方を意味しているでしょうか。
- イエスはこのたとえと、ときあかしを通して私達に一番何を語りたかったのでしょうか。

5.4.2　21 節-34 節

4:21 また彼らに言われた、「ますの下や寝台の下に置くために、あかりを持ってくることがあろうか。燭台の上に置くためではないか。22 なんでも、隠されているもので、現れないものはなく、秘密にされているもので、明るみに出ないものはない。23 聞く耳のある者は聞くがよい」。24 また彼らに言われた、「聞くことがらに注意しなさい。あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられ、その上になお増し加えられるであろう。25 だれでも、持っている人は更に与えられ、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう」。26 また言われた、「神の国は、ある人が地に種をまくようなものである。27 夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。28 地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。29 実がいると、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである」。30 また言われた、「神の国を何に比べようか。また、どんな譬で言いあらわそうか。31 それは一粒のからし種のようなものである。地にまかれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、32 まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる」。33 イエスはこのような多くの譬で、人々の聞く力にしたがって、御言を語られた。34 譬によらないでは語られなかったが、自分の弟子たちには、ひそかにすべてのことを解き明かされた。

- 21, 22 節がたとえについて語っているとすると、イエスは何と言っているのでしょうか。
- 24, 25 節でイエスは神の言葉に注意して耳を傾けることの重要性をどのように強調していますか。
- わたしたちが神の言葉に注意しなくなるとどんなことがおこりますか。
- 26–29 節のたとえでイエスは私達に何を悟らせようとしていますか。
- このたとえは神の国の成長についてどんなことを教えていますか。
- 30–32 節のたとえでは神の国のどういう面について教えているのでしょうか。
- このたとえは個人の中にある神の国の成長について言っているとするとそれはどのようなことでしょうか。
- 神の国がこの世界の中で成長していくことにはどう当てはまりますか。

5.4.3　35 節-41 節

4:35 さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。36 そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。38 ところが、イエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしど

もがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。39 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。40 イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。41 彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。

- 35 節に「その日」とありますがこの日はどんな日だったでしょうか。
- 彼らはいつ出発しますか。出かけようと言い出したのはだれですか。
- ガリラヤ湖は突然暴風が起こることで有名です。マルコはこの嵐の激しさをどのように述べて強調していますか。
- だれが船の舵を取っていると思いますか。
- 弟子たちはなぜイエスを起こすのですか。弟子たちの気持ちになって考えてみましょう。
- イエスはどうされますか。
- 弟子たちはこの事件からイエスについて何を感じ何を知ったでしょうか。

5.5　マルコによる福音書　第 5 章

5.5.1　1 節-20 節

- 3 節-5 節からこの人の状態についてどんなことが分かりますか。その地方の人々はこの人のことをどんなふうに思っているでしょうか。
- 8 節のイエスの言葉から判断して 7 節で話しているのは誰でしょう。なんと言っていますか。
- 8 節-13 節で汚れた霊について新しくどんなことが分かりますか。
- 悪霊につかれた人にどんな変化が起こりますか。
- 15 節-17 節で、人々はどんな反応をしますか。それはなぜでしょうか。
- 悪霊にとりつかれていた人は何を望みますか。
- イエスはこの人にどんな使命を与えていますか。
- そしてこの人はどうしますか。

5.5.2　21 節-43 節

- ヤイロはどんな人ですか。また、イエスに何を願っていますか。

- 24 節以降の事件はどんな状況のもとでおきましたか。
- この女の人についてわかることを上げてみましょう。またイエスをどのように考えていたのでしょうか。
- この女の人はなぜヤイロのように公然と願わなかったのでしょう。
- どんなことがおこりますか。またイエスはどのように対応しますか。
- この女の人はなぜ恐れおののくのでしょう。
- イエスはこの女の人に何と言っていますか。
- ヤイロは、イエスが女の人と話している時、また使いが来た時、何を感じ、また思っていたでしょうか。
- 36 節のことばでイエスはヤイロに何を求めていますか。
- ヤイロの家はどんな状況でしたか。
- どんなことがおきますか。
- なぜイエスは少数の人しか立ちあわせなかったのでしょう。
- あなたはこの二つの事件を通して、イエスについてどんなことを学びましたか。

5.6 マルコによる福音書 第 6 章

5.6.1 1 節-6 節

- このできごとの起きた場所、登場人物、その反応をまとめてみましょう。
- 町の人々の態度は何に基づいていますか。
- なぜイエスは力あるわざをすることができなかったのでしょう。
  - クリスチャンを通して聖書で語られていることの評価をすることの良い点と問題点について話してみましょう。
  - [DQ] 街の人々はイエスのことをどのように考えていましたか。

5.6.2 7 節-13 節

- イエスは弟子たちにどのような権威を与え、どのような命令（指導）をしていますか。
- ひとつひとつの命令について、どのような意味があるのか考えてみましょう。
- 弟子たちは使わされた先でどんな働きをしましたか。

5.6.3　14 節-29 節

- イエスのことを一般の人々はどのように考えていましたか。
  - [DQ] 4:41 では弟子たちもイエスはだれかを疑問としていた。
- ヘロデはイエスをどう思っていましたか。
- ヘロデはなぜバプテスマのヨハネをとらえ殺してしまったのでしょうか。
  - [DQ] ヘロデは殺すことを望んでいたでしょうか。

5.6.4　30 節-44 節

- 旅から戻った弟子たちが感じていることを想像してみましょう。
  - [DQ] イエスはどんなことを勧めていますか。
- 弟子たちが戻ってきたところの状態はどのようでしたか。イエスはどう対処しますか。
- 弟子たちはどんなことをイエスに提案し、イエスはどう応答し、それに弟子たちは応えていったか一つ一つのステップをまとめてみましょう。
- このできごとを通して、あなたはイエスがどんな方だと思いますか。

5.6.5　45 節-52 節

- イエスは次に何をしますか。それはなぜでしょうか。（ヨハネ６：１５）
- この夜どんなことがおこりますか。
- パンのことを悟っていないとはどういうことでしょうか。

5.6.6　53 節-56 節

- ゲネサレでの滞在はどのようなことを示していますか。

5.7　マルコによる福音書　第 7 章

5.7.1　1 節-8 節

- 5 節からの議論はどのような人たちの間で、何が原因で始まりますか。
- パリサイ人と律法学者たちは何を大切にしていますか。それはなぜでしょうか。
- イエスは、どのように批判していますか。イエスの批判の中心点は何ですか。

5.7.2　9 節-13 節

- この例では、6 節- 8 節で指摘した要点のどのような面を説明しているのでしょうか。どのような対比がありますか。

5.7.3　14 節-23 節

- 汚れの源は何だとイエスは言っていますか。
- イエスの言う汚れはどんなことでしょうか。パリサイ人たちが考えるものと何が違いますか。

5.7.4　24 節-30 節

- この女の人はどんな人ですか。
- イエスと女の応対からどんなことが分かりますか。

5.7.5　31 節-37 節

- この人の癒しにはどんな段階がありますか。
- この人のイエスの言葉に対する対応、人々のそれに対する反応はどうでしたか。

5.8　マルコによる福音書　第 8 章

5.8.1　1 節-10 節

- この出来事は 6 章 30 ー 44 節の出来事と似ていますが、違いは何でしょうか。
- イエスはこれら二つの出来事において、人々とその必要にそれぞれどのように対応しますか。

5.8.2　11 節-21 節

- 11 ー 13 節でパリサイ人はどのようなしるしを考えていたと思いますか。なぜしるしを求めるのでしょう。
- イエスはどのような対応をしますか。それはなぜでしょうか。
- イエスはパリサイ人とヘロデのパンだねということばでどのようなことについて警告したのでしょうか。どのような生き方が危険だと言っているのでしょうか。

- 弟子たちは何を心配していますか。イエスは弟子たちに何を悟らせようとしていますか。

5.8.3　22 節-26 節

- この盲人のいやしについて特徴的なことをあげてみましょう。
- イエスはなぜこのようにされたのでしょうか。

5.8.4　27 節-30 節

- ここに書かれているのはどこでの出来事ですか。
- イエスは弟子たちにどんな二つの質問をしますか。
- 弟子たちは最初の質問にどう答えますか。
- ペテロは二つめの質問にどう答えますか。

5.8.5　31 節-38 節

- イエスはどのようなことを教えはじめますか。
- ペテロはどのように反応しますか。なぜでしょうか。弟子たちの希望はどのようなものだったのでしょうか。
- ペテロの反応はどんな意味で「神のことを思わないで人のことを思っている」のでしょうか。
- 34 節のことばは誰に向かって語られていますか。
- 「自分を捨て、自分の十字架を負う」とはどういうことでしょうか。
- イエスは 35-38 節で、どんなことを求めていますか。

第 1 章〜第 8 章復習

- バプテスマのヨハネについて。
  - メッセージ、働き、イエスについての証言、死。
- イエスは自分はだれかということについて何を教えていますか。
  - 使命、自分の行く手にあるもの。
- イエスは次のことについて何と教えていますか。
  - 神の国について、安息日について、汚れとは何かについて、イエスの弟子になることについて。
- イエスは個人やグループにどのように接し、自分について何を示していますか。

- 弟子たちはどんな人ですか。
  - 何を見、どのように反応し、イエスをどのような人だと考えているでしょう。
- 弟子以外の人たちは、イエスに対してどのように応答していますか。
  - どんな肯定的な反応と否定的な反応が見られますか。イエスに対する反応の違いはどうしておこるのでしょう。
- あなたは、8 章までのイエス、弟子たち、人々の応答を学んできて、どのようなことを感じますか。

5.9　マルコによる福音書　第 9 章

5.9.1　1 節-13 節

- 変貌と言われているこの出来事はいつ、どこでおこりますか。目撃者はだれですか。
- どうしてペテロは 5 節にあるような反応をしていると思いますか。雲の中からの声は何と言ってますか。
- イエスはどんな命令をしていますか。
- 弟子たちはどんな疑問を持っていますか。
- エリヤについて 9:11-13 とマタイ 17:10-13 を比べてみましょう。

5.9.2　14 節-29 節

- どのようなことが起こってますか。弟子たちは、どう対応していますか。
- 弟子たちが追い出せなかったことは、この父親の進行にどう影響していますか。
- イエスはこの場にいる人たちの一番の問題は何だと見ているのでしょう。
- 子供がイエスのもとに連れてこられた時、何がおこりますか。イエスはなぜ子供の状態について父親と話しているのでしょう。
- イエスはが信じるように迫った時、父親はどう答えますか。
- ここで、父親が経験したこと、弟子たちが経験したことを順をおって分析してみましょう。
- 弟子にとって本当にたりなかったのは、何でしょうか。弟子たちは祈るかわりに何をしていましたか。

5.9.3　30 節-41 節

- なぜイエスは、旅行の行程を秘密にしたいのでしょうか。
- 弟子たちはイエスの教えにどのように反応していますか。

- イエスの心を占めていたことと、弟子たちの心を占めていたことをそれぞれまとめてみましょう。
- 偉さについてどんなことが教えられていますか。
- 「イエスの名のゆえに」受け入れるとはどういうことでしょうか。
- 37 節の言葉を聞いて、ヨハネは何を思い出しましたか。
- なぜ弟子たちはこの人を咎めたのですか。
- イエスは、人の行為に対する神の評価について何を教えていますか。
- なぜイエス・キリストとの関係によってだけ人は評価されるのですか。イエスの名が強調してあることに注意しましょう。

5.9.4　42 節-50 節

- 42 節から 47 節には四つの対比があります。それぞれの場合に何が何よりも良いのですか。
- 他の人との関係についてどんな警告が与えられていますか。
- 小さいものたちとは、誰のことですか。
- 今日の社会で、どんなことが、他の人に罪をおかさせるつまずきになりますか。
- 手や足はどのようにその人に罪をおかさせうるでしょうか。罪の結果は何ですか。
- 塩はどのような意味に使われているのでしょうか。

5.10　マルコによる福音書　第 10 章

5.10.1　1 節-12 節

- だれが、どんな目的で、イエスに質問していますか。
- イエスは離婚についてのモーセの扱い方をどのように説明していますか。
- イエスは結婚についてどのように教えていますか。弟子たちへのことばとあわせて考えてみましょう。

5.10.2　13 節-16 節

- なぜ弟子たちは、子供たちをイエスのもとに連れてくる人たちを叱るのでしょうか。
- 幼子のように神の国を受け入れるとはどういうことでしょうか。

5.10.3　17 節-31 節

- このひとについてどんなことがわかりますか。イエスをどう思っているか。イエスはどう見ているか。
- イエスはこの人に何を教えようとしているのでしょうか。
- 金持ちが神の国にはいるのがむずかしいのはなぜでしょうか。
- イエスは弟子たちにどのようなことを伝えていますか。

5.10.4　32 節-34 節

- この箇所と 8:31, 9:31 をくらべて共通のことと、新しいことを挙げてみましょう。

5.10.5　35 節-45 節

- ヤコブとヨハネ、そして弟子たちは何を考えていますか。
- イエスはどのように答えていますか。
- イエスがきた一番の目的は何だと言っていますか。
- この目的はイエスの教えや活動によって達せられるものですか、それともそうではないものですか。

5.10.6　46 節-52 節

- バルテマイの願いは何ですか。
- イエスは「行け、あなたの信仰があなたを救った」と言っていますが、バルテマイの信仰とはどんなことでしょうか。

5.11　マルコによる福音書　第 11 章

5.11.1　1 節-11 節

- イエスは弟子の二人にどんな指示をしていますか。
- イエスのエルサレム入場と人々の反応をまとめてみましょう。

5.11.2　12 節-26 節

- エルサレムに戻る途中でどんなことがおこりますか。
- 宮ではどのようなことがおこりますか。
- イエスの行動は弟子たちに、人々にどううつったでしょうか。祭司長たちはどう考えましたか。
- いちじくのことから、イエスは弟子たちにどのようなことを教えていますか。
- イエスは祈りについてどんなことを教えていますか。祈りとゆるしにはどのような関係があるのでしょうか。

5.11.3　27 節-33 節

- 祭司長たちは、なぜこのような質問をするのでしょうか。
- イエスはどのように答えられますか。
- 祭司長たちは、なぜバプテスマのヨハネを受け入れなかったのでしょうか。

5.12　マルコによる福音書　第 12 章

5.12.1　1 節-12 節

- 1 節から 9 節のたとえの要点をまとめてみましょう。
- イエスはこのたとえのなかで、どんな預言をしていますか。ぶどう園の主人、農夫、しもべ、ぶどう園の主人の息子はそれぞれだれを表していますか。
- 旧約聖書からの引用は何をあらわしていますか。
- イエスは、11:28 の質問にどう答えていますか。

5.12.2　13 節-17 節

- パリサイ人とヘロデ党のひとたちは、どんな動機から、どのような質問をしますか。
- 「納めるべきだ」または「納めないべきだ」と答えた場合どのようなことが予想されますか。
- 偽善（15 節）とはこの場合どのようなことでしょうか。

- イエスはどのように答えていますか。
- わなにかけようとした人たちは、なぜ驚嘆したのでしょうか。

5.12.3　18 節-27 節

- サドカイ人たちは、どんな質問をしますか。復活についての彼らはどう思っていましたか。
- イエスはサドカイ人たちがどんな思い違いをしていると言っていますか。
- イエスは、復活があることを証明するためにどのように聖書を引用していますか。

5.12.4　28 節-34 節

- この律法学者はどのような動機からどのような質問をしていますか。何を聞きたいのでしょう。
- イエスはなんと答えていますか。（申命記 6:4,5、レビ記 19:18、出エジプト記 20:3-17）
- 「あなたの神である主を愛せよ」「隣人を自分と同じように愛せよ」とはどんな意味でしょうか。
- この律法学者は、イエスの答えにどう反応しますか。この律法学者についてどんなことが分かりますか。
- なぜ人々は、イエスにこれ以上質問をしないのですか。

5.12.5　35 節-37 節

- ここでイエスはどのような質問をしますか。
- イエスはダビデとメシヤ（キリスト）の関係についてどのように言っていますか。

5.12.6　38 節-44 節

- イエスはどのようなことに注意しなさいと言っていますか。
- 貧しいやもめと金持ちはなにが違うのでしょう。
- イエスはどのようなことを教えていますか。

5.13　マルコによる福音書　第 13 章

5.13.1　1 節-13 節

- この会話はいつどこでどのように始まりますか。
- イエスは、宮について何と言っていますか。
- 四人の弟子たちは何を知りたがっていますか。
- イエスはどんなことが起こると言っていますか。
- 弟子たちに何を伝えようとしているのでしょうか。
- イエスに従うものたちにはさらにどんなことが起こると言っていますか。
- 弟子たちはどのように生きるべきでしょうか。

5.13.2　14 節-23 節

- 14–16 節をルカ 21:20–22 と比較してみましょう。
- どんなことが起こると言っていますか。それは、かなり先のことですか。
- 肉体的な危険のほかに、どんな危険について警告していますか。
- 偽預言者や、偽メシアは、見分けることができるのでしょうか。

5.13.3　24 節-27 節

- 人の子は、どのような時に来ますか。
- 人の子は何をしますか。

5.13.4　28 節-37 節

- これらのことの起きるタイミングについて、イエスは何と言っていますか。
- 31 節は何を言っているのでしょうか。
- イエスはどのような命令を与えていますか。
- イエスがあげている例は何を強調していますか。

5.14　マルコによる福音書　第 14 章

5.14.1　1 節-11 節

- 1–11 節のできごとをまとめてみましょう。それぞれ、イエスに対してどのような態度の人が登場しますか。
- イエスに香油を注いだ女に対する人々の態度、それに対するイエスの言葉からあなたは、どんなことを思いますか。マタイ 26:6–13、ヨハネ 12:1–8 と比べてみましょう。
- ユダについて、マルコはあまり書いていませんが、ユダはなぜ裏切ったのだと思いますか。

5.14.2　12 節-25 節

- イエスは弟子たちと過ぎ越しの食事をするために、どのような準備をしておきましたか。それは何故でしょう。
- イエスは食事中に何を弟子たちに知らせますか。弟子たちはどんな反応をしますか。それは何故でしょう。
- 22–25 節で、イエスは、何をしていますか。どのような意味があるのでしょうか。
- イエスはどんな預言をしていますか。

5.14.3　26 節-31 節

- ペテロは、なぜこれほど強く言い切るのでしょうか。
- イエスは、そのペテロに何と言っていますか。

5.14.4　32 節-42 節

- イエスはどのように祈っていますか。
- 弟子たちは、どうしていますか。

5.14.5　43 節-52 節

- この場面を描いてみましょう。
- イエスはどのように対応しますか。

- ペテロや他の弟子たちはなぜ逃げてしまったのでしょう。

5.14.6　53 節-65 節

- ユダヤの最高裁判所である、議会の目的は何ですか。どのような告発が書いてありますか。
- 大祭司は、どのような尋問をしますか。

5.14.7　66 節-72 節

- ペテロの裏切りの記事を一回一回追ってみましょう。どのように言われ、ペテロはどのように答えますか。
- あなたならどうするでしょうか。

5.15　マルコによる福音書　第 15 章

5.15.1　1 節-15 節

- 議会はなぜ、ピラトに引き渡すのでしょうか。
- ピラとはどんな尋問をし、イエスはどのように答えますか。
- ピラトが問題にしているのはどんなことでしょうか。
- ピラトが群衆を静めようとして利用したのはどんな習慣ですか。バラバについて何がわかりますか。
- ピラトはどのような価値観から行動していると思いますか。

5.15.2　16 節-32 節

- 10:33, 34 と比較してみましょう。
- だれが、どのようにイエスをあざけっていますか。
- シモンというキレネ人はどのようなことをすることになりますか。

（使徒 13:1, ローマ 16:13）

- 十時架刑についてどのようなことが書かれていますか。
- 詩篇 22 篇と比べてみましょう。
- 人が信じるために必要なものは何でしょうか。

5.15.3　33 節-41 節

- イエスの死をどのように描いていますか。
- イエスの叫びからあなたは、どのようなことを感じますか。
- 神殿の幕のことはなにを意味していると思いますか。
- その場にどのような人がいますか。百卒長は、なぜこのように告白したのでしょうか。

5.15.4　42 節-47 節

- ヨセフについてどんなことがわかりますか。
- どのようなことをしますか。急いでしたのは何故でしょうか。

5.16　マルコによる福音書　第 16 章

5.16.1　1 節-8 節

- 婦人たちが、墓に近付いたときのことを考えてみましょう。どんなことを心配していますか。
- 墓の中には何があり、婦人たちはなにを告げられますか。
- 婦人たちは、どうしますか。

5.16.2　ルカによる福音書第 24 章 1 節-35 節

- どのようなことが、ルカには書かれていますか。
- なぜ弟子たちは婦人たちの話しを信じないのでしょうか。
- エマオに向かっている弟子たちはどんな様子ですか。
- イエスはこの人たちにどのように自分のことを示していますか。

なぜ聖書を学ぶことが必要なのでしょうか。

- かれらは、いつ、どんなことで、イエスだとわかりますか。そしてどうしますか。
- エルサレムではどんなことが知らされますか。

5.16.3　ルカによる福音書第 24 章 36 節-53 節

- 弟子たちの真中に現れた時、彼らはどんな反応を見せますか。
- 弟子たちは、どんなことを確信するようになりますか。なぜ、このように変化するのでしょう。。
- さらにイエスはどんなことをしますか。それは、どんな効果があったでしょうか。
- 弟子たちがすべきことは何ですか。
- 弟子たちが伝えるべきことと、イエスのメッセージとはどのような相違がありますか。
- 別れをどのように描いていますか。

第 6 章

ルカ（2005-2008）

質問票：ディスカッション・クエスチョン（PDF）

ルカによる福音書を学んで行くにあたって

ルカによる福音書は、パウロの伝道旅行に伴って行った医者ルカ（コロサイ 4:14）によると言われている。4 福音書の著者の中で唯一の異邦人（非ユダヤ人）。2 世紀の伝承では、シリアのアンティオケの生まれだと言われている。ルカについては、上記の箇所以外聖書には 2 度現れる。ピレモン２４, II テモテ４：１１

- テキストから何が分かるかを中心に学びましょう。

共観福音書 (synoptic)[*1] の他の箇所は時に応じて参考にしていきましょう。

- 著者が何を伝えたいと思っているかを中心に学びましょう。

6.1　ルカによる福音書　第 1 章

6.1.1　1 節 - 4 節

1. ルカはこの福音書に書かれている情報をどのように調べていますか。
2. どのような目的でこの書は書かれていますか。

6.1.2　5 節 - 25 節

1. 時代を特定するどのような情報が書かれていますか。

[*1] マタイ、ルカ、ルカの三つの福音書のこと。この三巻は同じできごとについて扱っている部分（並行記事）が多く、「共通の観点を持つ福音書」としてこう呼ばれます。

2. 5-13 節に書かれていることから、ゼカリヤとエリザベツについてどんなことがわかりますか。あげてみましょう。
3. 生まれる子供についてどのような予告をしていますか。
4. ゼカリヤはどのように考えどのように応答しますか。
5. なぜ信じることが難しいのでしょうか。

6.1.3　26 節 - 38 節

1. マリヤはどのような人物ですか。
2. マリヤは御使いが彼女に現れたことをごく自然に受け止めていますが、何故だと思いますか。
3. ガブリエルは何を告げ、それにマリヤはどのような反応を示していますか。
4. マリヤに生まれる子に対してどんな事がわかりますか。
5. なぜマリヤがこのような重要なことのために選ばれたと思いますか。
6. マリヤはこの知らせをどのように受け止めようとしますか。
7. 処女であるマリヤの胎に宿る実は、どのようにして宿る胎児だと言われていますか。このことから、マリヤから生まれたイエスがどのような方であることがわかりますか。
8. マリヤはこの知らせをどう受け入れますか。このような彼女の信仰について、あなたは、どのように思いますか。

6.1.4　39 節 - 56 節

1. エリザベツはどのようにマリヤを祝福しますか。
2. マリヤは¥どう応答しますか。気づいたことをあげてみましょう。

6.1.5　57 節 - 80 節

1. ザカリヤとエリザベツの子にヨハネと名をつけた経緯を考えてみましょう。
2. ガブリエルの告知とザカリヤの預言からヨハネについてどのようなことがわかりますか。

6.2　ルカによる福音書　第 2 章

6.2.1　1 節 - 7 節

1. マリヤとヨセフはどこへ向かい、マリヤはどこで出産しますか。

6.2.2　8 節 - 20 節

1. 御使いは、羊飼に、どのようなことを告げますか。
2. 羊飼は、どのような行動をしますか。
3. なぜ羊飼に告げられたのでしょうか。

6.2.3　21 節 - 39 節

1. 8 日が過ぎてから、マリヤとヨセフはどうしますか。
2. シメオンはどのような人ですか。
3. シメオンはイエスについてどのようなことを預言しますか。
4. アンナはどのような人で何をしますか。

6.2.4　40 節 - 52 節

1. イエスの成長のようすはどのように描かれていますか。(v.40, v.52)
2. イエスが 12 歳のときのエルサレム上京のとき、何が起きますか。
3. 両親はそれにどのように応答しますか。

6.2.5　2 章まとめ

1. この章に描かれている、イエスの誕生と成長からあなたはどのようなことを感じ、思いますか。普通の人間の誕生と成長と変わらないこと、異なることをあげて考えてみましょう。
2. 「心に留め」という表現が 19 節と 51 節にありますが、マリヤはこれらのできごとからどのようなことを考えていたでしょうか。

6.3　ルカによる福音書　第 3 章

6.3.1　1 節 - 14 節

1. ヨハネの宣教開始の時期をルカはどのように記していますか。
2. 預言者イザヤの言葉から考えると、ヨハネの役割はどのようなものでしょうか。
3. ヨハネはどのような警告を群衆に与えますか。その目的は何でしょうか。
4. ヨハネのメッセージからすると神が望んでおられることはどういうことでしょうか。
5. どのような人たちがヨハネのメッセージに応答し、ヨハネはその人たちにどのような勧めをしますか。
6. あなたには、ヨハネはどのようなことを勧めると思いますか。

6.3.2　15 節 - 22 節

1. ヨハネの宣教は、民衆の間にどのような問いを引き起こさせ、それに、ヨハネはどのように答えますか。ヨハネの答えによると「あとから来る方」とヨハネは何が違うのでしょうか。
2. ヨハネは投獄されますが、それは、どのような理由によりますか。
3. イエスもバプテスマを受けますが、そのとき、どのようなことが起こりますか。

6.3.3　23 節 - 38 節

1. なぜ、系図が挿入され、それも誕生のときではなく、ここに納められているのでしょうか。

6.4　ルカによる福音書　第 4 章

6.4.1　1 節 - 13 節

1. イエスは悪魔（サタン）の試みを受けたとありますが、どのような誘惑だったでしょうか。
2. これら一つ一つは、悪魔ができることなのでしょうか。イエスができることなのでしょうか。
3. なぜイエスは試みを受けたのでしょう。その必要性と意味について考えてみましょう。

6.4.2　14 節 - 30 節

1. 御霊の力に満ちあふれて（帯びて）とは、どういう状態を言っているのでしょうか。
2. イザヤ書 (61:1-2) を朗読しますが、ここでの「わたし」はどのような人でどのようなことをしますか。
3. あなたが想像する「主のめぐみの年」とはどのような年でしょう。
4. イエスは、自分の説教を聞いた人に対して、どのように対応しますか。
5. なぜイエスの説教を聞いた人たちは感嘆から憤りへと変わったのでしょう。

6.4.3　31 節 - 37 節

1. カペナウムの会堂で、汚れた悪霊につかれた人にどんなことが起こりますか。
2. 32, 36 節に「驚き」が書かれていますが、どのような驚きでしょうか。現代に場所を変えてみるとそれはどのような驚きだと表現できますか。

6.4.4　38 節 - 39 節

1. シモンのしゅうとをいやすのに「熱がひくように命じて」いますが、それはどういうことを表現しているのでしょう。

6.4.5　40 節 - 41 節

1. 悪霊はイエスが「神の子」「キリスト（メシヤ）」だと知っていたと書いてありますが、この証言は何を意味するのでしょう。

6.4.6　42 節 - 44 節

1. イエスと共にいることを願う群衆からどんなことがわかりますか。
2.「他の町々にも」とはどういうことでしょうか。

6.5　ルカによる福音書　第 5 章

6.5.1　1 節 - 11 節

1. 1〜7 節を読んで、気づいたことをあげてみましょう。
2. なぜシモンは 8 節のような言葉を発したのだと思いますか。5 節の時と変化がありますか。
3. 10 節の言葉でイエスは何を伝えようとしているのでしょうか。また、4 人はそれをどのように受けとったと思いますか。

6.5.2　12 節 - 16 節

1. らい病（重い皮膚病）の人はどのようにして、どのような言葉でイエスに願いましたか。
2. イエスはこの人にどのように対応しますか。
3. イエスはいやされた人にどのように命じていますか。それはなぜだと思いますか。
4. 16 節には、イエスが集まってきた群衆からはなれて、さびしいところに退いて祈っていたとありますが、それは何故でしょうか。

6.5.3　17 節 - 26 節

1. パリサイ人や律法学者は何のために来ていると思いますか。
2. そこでどんなことが起こりますか。
3. 罪はゆるされたというのと、起きて歩けというのとどちらが簡単なのでしょうか。（23 節）
4. そこにいた人にとって 26 節にある「驚くべきこと」は何だったのでしょう。

6.5.4　27 節 - 32 節

1. レビはどのような人ですか。またイエスの招きに対してどうしますか。
2. レビがイエスのためにしたことは何ですか。
3. 現代においてあなたがレビのように招かれたらあなたはどうしますか。イエスは何を望んでいるでしょうか。

4. 31, 32 節の言葉で、イエスは何を私たちに語っているのでしょうか。あなたの隣人は健康な人ですか、病気の人ですか。

6.5.5　33 節 - 39 節

1. 断食についてイエスはどのように答えていますか。
2. 新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるとはここでは何を意味しているのでしょうか。

6.6　ルカによる福音書　第 6 章

6.6.1　1 節 - 5 節

1. 弟子たちは、どこで、なにをしましたか。
2. パリサイ人は、なぜ弟子たちをとがめたのでしょう。
3. それに対してイエスは何と答えていますか。

6.6.2　6 節 - 11 節

1. この事件はどこで起きますか。イエスのまわりには、どんな人たちがいますか。
2. 8 節のイエスの言葉は、イエスのどのような心をあらわしていますか。
3. パリサイ人は、どうしてイエスに対して分別を失うほど怒っているのでしょう。

6.6.3　12 節 - 16 節

1. イエスが選んだ 12 人は、どのような人たちでしたか。
2. イエスは、どのようにして彼らを選びましたか。

6.6.4　17 節 - 19 節

1. 山からおりたイエスを、どんな人たちが待っていましたか。
2. 彼らの目的は何ですか。

6.6.5　20 節 - 26 節

1. イエスは、どんな人が幸いだと言っていますか。
2. どんな人が、哀れ（不幸）だと言っていますか。

6.6.6　27 節 - 36 節

1. イエスは人々にどのような勧めをしてますか。
2. イエスの勧めのように生きるとどうなると言っていますか。

6.6.7　37 節 - 42 節

1. イエスはどんな 2 つのことを戒めていますか。また、どんな 2 つのことをするように教えていますか。(37, 38 節)
2. そうすると、どんなことがおきると言っていますか。
3. イエスは 39〜42 節のたとえ話では、指導者（批判者）のどんな 3 つの例をあげていますか。それは、どんなことを教えていると思いますか

6.6.8　43 節 - 45 節

1. 木と実、心の倉、人の口のたとえから、人と人から出てくる感化について、どんなことがわかりますか。

6.6.9　46 節 - 49 節

1. また、家と土台のたとえから、私たちは何をもとめられていると思いますか。

6.7　ルカによる福音書　第 7 章

6.7.1　1 節 - 10 節

1. 百人隊長は、どのような人だと思いますか。(社会的、人間的、宗教的に)
2. 百人隊長は、どのような問題をもっていますか。そして、それをどのように解決しようとしていますか。
3. 百人隊長は，イエスに対して、何を信じていたと思いますか。

4. イエスはこの百人隊長の何を賞賛したのでしょうか。

6.7.2　11 節-17 節

1. イエスの一行は、どこで、だれと出会いますか。（12 節）
2. この母親の心の内は、どのようなものだったでしょうか。
3. イエスは、この母親をどのよう思われたでしょうか。また、この母親に対してどうされますか。
4. あなたは、このようなイエスをどう思いますか。

6.7.3　18 節 - 35 節

1. バプテスマのヨハネはどのような人ですか。(3:19-20)
2. イエスはどのようなことから判断するように言っていますか。
3. 神の国で最も小さい者でも、バプテスマのヨハネより偉大だとはどういうことでしょうか。
4. 31 節からのたとえからイエスは何を言おうとしているのでしょうか。

6.7.4　36 節 - 50 節

1. どこで何が起こりますか。
2. イエスを招いたファリサイ派の人はどのように思ったでしょう。
3. イエスは、誰に向かってどのようなたとえを話しますか。
4. あなたは 47 節のイエスの言葉をどう思いますか。
5. 50 節でイエスは「あなたの信仰があなたを救った」と言っていますが、この女の信仰とはどのようなものですか。

6.8　ルカによる福音書　第 8 章

6.8.1　1 節 - 3 節

1. イエスと共に宣教の旅をしていた人たちにはどのような人たちがいますか。

6.8.2　4 節 - 18 節

1. 種がまかれた４種類の土地について書かれていますが、これらの土地の特徴、そしてその種がどうなったかについてまとめてみましょう。どうしてそのような結果になったのでしょうか。
2. この種はみことばだと書かれていますが、みことばに対するそれぞれの土地・聞き手の受け入れ方についてまとめてみましょう。
3. 道ばた：
4. 岩の上（石地）：
5. いばらの中：
6. 良い地：
7. この種まきのたとえを通してイエスは何を教えようとしておられるのでしょうか。
8. 「ともし火」のたとえで、「ともし火」「燭台」「秘められたもの」とは何でしょうか。イエスは何を教えようとしておられるのでしょうか。
9. 11 節からのたとえの解き明かしは弟子達向けに語られたようですが、なぜ、群衆にはたとえで語られ、弟子達には解き明かしをされるのでしょうか。

6.8.3　19 節 - 21 節

1. イエスはなぜ 21 節のような応答をされたのでしょうか。（マルコ 3:21 参照）

6.8.4　22 節 - 25 節

1. この出来事の起こった状況について分かることをあげてみましょう。
2. 弟子達は何に「恐れ驚いた」のでしょう。

6.8.5　26 節 - 39 節

1. 悪霊に取りつかれている人は、どのような状態でしたか。
2. この人（悪霊？）は、イエスに対してどのような反応を示していますか。
3. イエスは、どうされましたか。

4. 町の人たちは何を心配し、何を恐れたのでしょうか。

5. イエスはなぜこの人についてくることを許されなかった（39 節）のでしょうか。

6.8.6　40 節 - 56 節

1. ヤイロはどのような人で、どんな問題をかかえていますか。

2. 43 節の女性は、どのような問題をかかえていますか。

3. この女性は、どのように行動し、それに対して、イエスはどうされましたか。

4. イエスの求めにこの女性はどのようにし、それに対して、イエスは、彼女に何と言われていますか。

5. ヤイロの家から知らせが来たとき、イエスはヤイロに対してどのような言葉をかけていますか。（50 節）ヤイロの心の内も考えてみましょう。

6. ヤイロの家ではどのようなことがおきますか。

6.9　ルカによる福音書　第 9 章

6.9.1　1 節 - 6 節

1. この箇所から以下の事柄についてまとめてみましょう。

    1. 授けられたもの

    2. 遣わされた目的

    3. 持って行くもの

    4. とどまるところ

    5. すべき抗議

    6. 実際に行ったこと

2. 神の国を宣べ伝えることと、病人をいやすことにはどのような関係があるのでしょうか。

6.9.2　7 節 - 9 節

1. ヘロデは何に戸惑っていた（口語：あわて惑っていた、新改訳：ひどく当惑していた）のでしょうか。

6.9.3　10 節 - 17 節

1. このことはどのようなときに起こりますか (v10, 11)。
2. 何が起こったのか順を追ってまとめてみましょう。
3. このことを通してイエスは何を教えようとされているのでしょうか。

6.9.4　18 節 - 27 節

1. どのようなときに、このことは起こりますか。
2. イエスはどのような二つの問いを弟子達にしていますか。
3. ２１節で言われている「このこと」とは何でしょうか。また、何故誰にも話さないように命じたのでしょうか。
4. どのようなことが起こると弟子達に告げていますか。(v. 22)
5. ２３節から２７節では何を言っているのでしょうか。

6.9.5　28 節 - 36 節

1. どのようなときに、このことが起こりますか。
2. モーセ・エリヤ・イエスは、何について語り合っていたと言っていますか。
3. ペテロは何を考えて、この様に提案したのでしょうか。
4. ペテロの提案のあと何がおこりますか。

6.9.6　37 節 - 43 節

1. 山を下りるとどのようなことが起こっていますか。
2. イエスは何について嘆いていますか。
3. 人々はなぜ神の偉大さに心を打たれたのでしょうか。

6.9.7　44 節 - 48 節

1. ２回目の告白ではどのように言っていますか。

2. これに対する弟子達の反応はどうでしたか。
3. 弟子達の関心事は何でしたか。
4. 「この子供を受け入れる」とは、どういうことでしょうか。そしてそれがなぜイエスを受け入れること、さらに、イエスを遣わされた方を受け入れることになるのでしょうか。
5. 最も小さいものが最も偉い（大きい）ものとはどういうことでしょうか。

6.9.8　49 節 - 56 節

1. ここでイエスは何を教えているのでしょうか。
2. なぜサマリア人はイエスを歓迎しなかったのでしょう。
3. 弟子達の派遣のときと、何が違うのでしょうか。

6.9.9　57 節 - 62 節

1. ここで弟子としての覚悟として、イエスはどのようなことを言っていますか。

6.10　ルカによる福音書　第 10 章

6.10.1　1 節 - 24 節

1. イエスは 72 人\footnote{ある写本では 70 人、新改訳では 70 を派遣しますが、その目的は何でしょうか。
2. イエスはどのような指示を与えていますか。
3. 9 章 1–6 節の記事と比べてみましょう。
4. 13 節から 16 節に書かれている怒りをどう受け止めれば良いでしょうか。
5. なぜ、悪霊が服従することを喜んではいけないのでしょうか。
6. イエスはどのように祈っていますか。
7. 23 節の「あなた方の見ているもの」とは何でしょうか。

6.10.2　25 節 - 37 節

1. 律法の専門家はどのような質問をしますか。

2. イエスは彼の質問にどう返答しましたか。
3. 彼は、律法によると、どのような答えを自分の質問に対して持っていましたか。
4. イエスはそれになんと答えましたか。
5. 律法の専門家はイエスの答えを聞いてどう思ったでしょうか。
6. 強盗に襲われた「ある人」は道ばたでどんな様子で倒れていたと思いますか。想像してみましょう。
7. 祭司とレビ人はそれぞれどうしますか。
8. サマリヤ人は、どうしたと書いてありますか。
9. たとえを話したあと、イエスはこの人になんと命じていますか。
10. あなたは、イエスと律法の専門家とのやりとりから、永遠の命と隣人を愛することについて、どんなことを学びましたか。

6.10.3　38 節 - 42 節

1. マルタは何を願い、イエスはそれにどのように答えていますか。
2.「必要なことはただ一つだけ」それは何なのでしょうか。

6.11　ルカによる福音書　第 11 章

6.11.1　1 節 - 13 節

1. どのような事を契機としてイエスは弟子たちに祈りについて教えることになりましたか。
2. 祈りの内容をまとめてみましょう。
3. 5 節からのたとえから、祈りについてどのようなことが言われていますか。
4. 9 節から 13 節では祈りについてどのようなことが教えられていますか。

6.11.2　14 節 - 32 節

1. 悪霊を追い出すイエスを見ていた群衆は、イエスに対してどんな反応をしていますか。(vs 14-16)
2. イエスはそのような反応に何と答えていますか。
3. イエスはしるしについてどのように言っていますか。

6.11.3　33 節 - 36 節

1.「あかり」と「光」のたとえから、イエスは私たちに何を教えていますか。

6.11.4　37 節 - 54 節

1. イエスはパリサイ人にどんな注意をしていますか。（vs 37-44）
2. 律法の専門家にはどんな注意をしていますか。（vs 45-52）

6.12　ルカによる福音書　第 12 章

6.12.1　1 節 - 12 節

1. どのような状況で誰に対してイエスは語っていますか。(Describe the background and the audience.)
2. 4 節から 12 節でイエスはどのような事を言っていますか。(What did Jesus try to communicate in vs 4 -12?)

6.12.2　13 節 - 34 節

1. 群衆の中の一人はどんな理由でイエスのところに来ましたか。(What was the problem the man in vs 13 has?)
2. なぜイエスは人々にたとえを話そうとされたのですか。(Why did Jesus tell a parable to people?)
3. たとえの中で、金持ちが考えていたことは何ですか。(What did the rich in the parable plan?)
4. なぜどん欲を警戒するのですか。(Why do we need to be on our guard against every kind of greed?)
5. 神はなぜ、この金持ちに「愚か者」と言われたのですか。(Why God said to the rich ‘You fool!.’)
6. 金持ちの最後はどうでしたか。(What was planned to the rich?)
7.「神の前に富む」とは、具体的にどういうことですか。(What do you think is to be rich toward God?)
8. 最初にイエスに相談に来た人にイエスは何を言いたかったのでしょうか。(What did Jesus want to tell the person who came in vs 13?)
9. 22〜34 節で、イエスが私たちにやめるようにすすめていることは何ですか。(What does Jesus tell us not to do in vs 22 - 34?)

10. イエスが私たちにするように求めていることは何ですか。(What does Jesus tell us to do?)

6.12.3　35 節 - 53 節

1. 聴衆がしもべにたとえられているようですが、しもべのつとめは何でしょうか。(What are the responsibilities of a servant (or a slave)?)
2. どのようなしもべが幸いだと言っていますか[*2]。(What sort of servants are blessed?)
3. 管理人は、何によって評価されますか[*3]。(What do you think is the key characteristic of a steward (or a slave) described in vs 42-48.)
4. イエスがもたらす分裂とはどのようなものでしょうか。(Why and how does Jesus bring division on earth?)

6.12.4　54 節 - 59 節

1. 今の時を見分けるとはどういう事でしょうか[*4]。(What does 'analyzing this present time' mean in vs 56?)
2. 57 節から 59 節のたとえでは、イエスはどのようなことを勧めているのでしょうか[*5]。(What is the point about the court case in vs 57-59? What warning is implied?)

6.13　ルカによる福音書　第 13 章

6.13.1　1 節 - 9 節

1. どのようなことがイエスに報告されていますか。報告した人たちの考えはどのようなものだったと考えられますか。(What is reported to Jesus? What question from them is implied?)
2. イエスは、それにどのように答えていますか。(How does Jesus answer?)
3. 旧約聖書ではユダヤ人の国はイチジクの木にたとえられています。このたとえからどのような警告が与えられていると思いますか。ユダヤ人はどうすべきでしょうか。そのようにしないとどうなるでしょうか。(Using Old Testament imagery of the fig tree as a picture of the Jewish nation, what warning does Jesus give the nation in this parable? What should they do? What will happen if they don't?)

[*2] Why are faithfulness to Christ and readiness for his coming so important?
[*3] Why are those who know the will of God through his Word held more responsible?
[*4] How would they we live differently if they we had spiritual discernment?
[*5] Why does Jesus want men to realize the need for settling their spiritual accounts with him by responding to him now?

6.13.2　10 節 - 17 節

1. 会堂でどのような事がおきましたか。会堂長は何に対して（なぜ）腹をたてどのような行動をしましたか。(Describe this incident on the sabbath in the synagogue. Why the synagogue leader became indignant?)

2. イエスは会堂長（たち）の偽善をどのように指摘していますか。(How does Jesus show that the attitude of the synagogue ruler is hypocritical and selfish?)

6.13.3　18 節 - 21 節

1. ここでの二つのたとえは神の国についてどのようなことを教えていますか。(What do the two illustrations teach about the kingdom of God?)

6.13.4　22 節 - 30 節

1.「救われる人が少ないのか」という質問にイエスはどのように答えていますか。(How does Jesus answer the question about the number of the saved?)

2. イエスはどのような人に対しては救いのドアが閉じられると言っていますか。(How Jesus describes those who are shut out?)

6.13.5　31 節 - 35 節

1. ヘロデが殺そうとしている」という警告にイエスはどのように応答していますか。(How does Jesus respond to the warning that Herod intends to kill him?)

2. この箇所からイエスについて、これからのイエスの進む道についてどのような事が分かりますか。(What do we learn about Jesus from these verses?)

6.14　ルカによる福音書　第 14 章

6.14.1　1 節 - 6 節

1. 食事の場でどんなことがおきましたか。なぜ律法の専門家たちやファリサイ派の人たちはイエスに答えることができなかったのでしょうか。(Describe the incident that occurs at the dinner. Why are the lawyers unable to respond to Jesus.)

6.14.2　7 節 - 14 節

1. イエスは招待を受けた人についてどのようなことを指摘していますか。イエスがいいたかったことはどのようなことでしょうか。(What does Jesus observe about the people at the party? What is the point of the parable he tells them?)

2. イエスは招待する側の人にどのようなことを助言していますか。裕福な人ではなく、貧しい人や障害を持っている人を招くようにと勧めている理由は何ですか。(What does Jesus address to the host of the party? What reason does he give for inviting the needy instead of the rich?)

6.14.3　15 節 - 24 節

1. 神の国で宴会の席に着く人の幸いについていった人にイエスはどのようなたとえを語っていますか。(What does Jesus say in this parable to the one who says the blessings of those who dine in the kingdom of God?

2. たとえの中の人はどんなことをより大切にしていますか。私たちは優先順位をどのように決めるべきでしょうか。(How are the priorities of the people in the parable expressed? What are our priorities and how should we decide?)

6.14.4　25 節 - 33 節

1. 弟子の条件としてイエスはどのようなことをあげていますか。(What does it cost to follow Jesus?)

2. 塔を建てる人のたとえと戦争に臨む王のたとえを通してイエスはどのようなことを教えようとしているのでしょうか。(What does Jesus teach using two illustrations from building construction and from warfare?)

6.14.5　34 節 - 35 節

1.「塩気」を失うとはどういうことでしょうか。この箇所を通してイエスは何を教えているのでしょうか。(Why is something that looks like salt but is not salt of no worth?)

6.15　ルカによる福音書　第 15 章

6.15.1　1 節 - 10 節

1. どのような人たちが何についてイエスに不平を言っていますか。それは何故でしょう。

2. イエスはたとえでこれにどのように答えていますか。

3. 前のたとえとの相違点を考えてみましょう。

6.15.2　11 節 - 32 節

1. このたとえはどのような背景で語られていますか。

2. 弟が家を出た理由はなんだったと想像しますか。

3. 弟は遠い国でどのようなことをしていましたか。

4.「我に返った」とはどういうことだと思いますか。また、その前後の弟の変化について書いて下さい。

5. なぜ弟は 18 節で「天に対して罪を犯し、父の前に罪を犯した。」と言ったのでしょうか。

6. 父は帰って来た弟をどのようにして迎えますか。またその様子がよく現れているところを全部列挙して下さい。

7. 父が家を出て帰ってきた弟をそのように迎えたのはなぜだと思いますか。

8. 弟は、天と父の前で罪を犯したことを自覚したとき、どのようにしましたか。

9. 兄は、弟が帰ってきたことを知ったとき、どのようなことをしましたか。

10. あなたは、このたとえでからどのようなことを新たに学びましたか。

11. このたとえをとおして、イエスは、パリサイ人や、私たちになにを語りかけているのでしょうか。

6.16　ルカによる福音書　第 16 章

6.16.1　1 節 - 18 節

1. この箇所はだれに対して語られていますか。

2. この管理人のしたことをまとめてみましょう。

3.「この世の子ら」、「光の子ら」とは、誰のことでしょうか。

4. イエスはこのたとえで何を教えようとしていますか。

5. イエスはパリサイ人にどんな警告をしていますか。

6.16.2　19 節 - 31 節

1. 金持ちとラザロのこの世での生活を比べ、分かることをあげてみましょう。
2. 死んだ後の金持ちとラザロについてどんなことがわかりますか。
3. 不正な管理人のたとえと、金持ちとラザロのたとえには、どんな共通点が有ると思いますか。

6.17　ルカによる福音書　第 17 章

6.17.1　1 節 - 10 節

1. つまづきをもたらす者、罪を犯した兄弟への対し方、赦しについてイエスは、どのように教えていますか。（1〜4 節）
2. イエスの教えている信仰とは、どのようなものですか。（5, 6 節）
3. 主人としもべのたとえから、仕える者はどのような心構えでいるべきだと言われていますか。（7〜9 節）

6.17.2　11 節 - 19 節

1. 重い皮膚病を患っている人たちはどのようにしてイエスに訴えますか。
2. 重い皮膚病を癒された 10 人のうち，なぜ，この人は戻って来たのでしょう。

6.17.3　20 節 - 37 節

1.「神の国はいつ来るのか」というパリサイ人の質問に、イエスは神の国についてどのように教えていますか。
2.「人の子の日」とはどのような日で、どんなことが起こると言っていますか。
3. その時、私たちはどうすべきだとイエスは言っていますか。

6.18　ルカによる福音書　第 18 章

6.18.1　1 節 - 8 節

1. このたとえを通してイエスは誰のためにどのような事を教えていますか。
2. この裁判官はどのような人だと思いますか。やもめはどんな立場にありますか

3. イエスによると、神は私たちに何を約束してくださっていますか。

6.18.2　9 節 - 14 節

1. イエスは 10 節以下の話を誰に向かってしていますか。
2. パリサイ人と取税人の祈りの違いを見てみましょう。

パリサイ人はどのような祈りをしましたか？

1. 取税人はなぜ、遠くに離れて立って祈ったのですか。
2. パリサイ人と取税人の祈りは違っていました。あなたはこの二人の祈りで、どこが最も違うところだと思いましたか？

6.18.3　15 節 - 17 節

1. 幼子の性格や特質から，子どものように神の国を受け入れるとは、どうすることでしょうか。(What does Jesus mean by receiving the kingdom of God like a little child?)

6.18.4　18 節 - 30 節

1. イエスとの対話からこの役人はどのような人だと思いますか。(What can you tell about this ruler?)
2. イエスはこの人の問題にどう答えていますか。(What is Jesus' response?)
3. イエスはどんな約束をくださっていますか。（29, 30 節）(What is the promise given by Jesus in vs 29-30?)

6.18.5　31 節 - 34 節

1. 以前にもイエスは死と復活を予告しています。それらと比べてみましょう。(Compare these verses with Lk 9:21, 22 or other verses.)

6.18.6　35 節 - 43 節

1. この盲人は、イエスのことを何と呼んでいますか。(How does the blind man call Jesus?)
2. この盲人は、イエスに何を期待していましたか。(What does the blind man expect from Jesus?)

3. この章に登場した人たちからあなたはどのような事を学びましたか。(What have you leaned from those introduced in this chapter?)

6.19　ルカによる福音書　第 19 章

6.19.1　1 節 - 10 節

1. ザアカイは、どのような人ですか。なぜ、イエスを見たいと思ったのでしょう。(Describe who Zacchaeus is. Why did he want to see Jesus?)
2. イエスはザアカイにどんな言葉をかけていますか。(5 節)

イエスの呼びかけにザアカイはどうしますか。(How did Jesus approach Zacchaeus? How did Zacchaeus respond?)

1. イエスの言った「救い」とはどのような事だと思いますか？(What is the salvation Jesus claimed in verse 9?)

6.19.2　11 節 - 27 節

1. イエスがこのたとえを話したのには、どんな目的がありましたか。(What are the reasons Jesus has for telling this parable?)
2. たとえの中にどんな人たちが登場していますか。(List up the people in the parable.)
3. このたとえでイエスはどのようなことを教えていますか。(What does Jesus teach people by this parable?)
4. 私たちにとって、「ミナ（ムナ)」とは何でしょうか。

6.19.3　28 節 - 44 節

1. ベテパゲとベタニアに近づかれたとき、イエスは弟子たちに何を命じていますか。(What does Jesus ask disciple to prepare for his entry into the city?)
2. 旧約聖書のゼカリヤ書 9 章 9 節を読んでみましょう。イエスはご自身をどういう人物として、人々に紹介しようとしていますか。(Read Zachariah 9:9. What is Jesus presenting himself as being?)
3. イエスを取り巻く人々は、どんな反応をしていますか。(What are the responses of the people around Jesus?)
4. イエスはなぜ、都を見て泣くのでしょう。(41 節〜42 節) (Why does Jesus weep for Jerusalem?)

6.19.4　45 節 - 48 節

1. 神殿でイエスはどのような事をしましたか。そしてそれはなぜでしょう。(What does Jesus do at the temple? Why?)

6.20　ルカによる福音書　第 20 章

6.20.1　1 節 - 8 節

1. 神殿の境内で教えているとき、イエスはどのような人たちからどのような質問を受けますか。(What challenge is put to Jesus as he teaches in the temple? Who challenged him?)
2. イエスはどのように答えますか、そしてどうなりましたか。(What does Jesus' question about their estimate of John's ministry put them into dilemma?)

6.20.2　9 節 - 19 節

1. このたとえでイエスはどのようなことを主張していますか。(What does Jesus claim about himself in this parable?)
2. 旧約聖書からの引用は何を示していますか。(What truth does Jesus show them about himself from the Old Testament?)

6.20.3　20 節 - 26 節

1. 律法学者たちはどのような罠を仕掛けていますか。(Into what political trap is their first question (verse 22) intended to snare Jesus?)
2. イエスはどのように答えますか。イエスの答えはどのように受け取ったらよいでしょうか。(How dies Jesus confound them by his answer? What do you think about Jesus' answer?)

6.20.4　27 節 - 40 節

1. だれがどのような質問をしますか。(Who challenges Jesus and how?)
2. イエスはこれにどう答えられますか。(How does Jesus answer it?)

6.20.5　41 節 - 44 節

1. イエスはどのような質問をしていますか。どのような人にむけた質問でしょうか。(What and to whom does Jesus ask a question?)

6.20.6　45 節 - 47 節

1. イエスは律法学者をどのように非難していますか。ぞれぞれどのような事を指摘しているのか考えてみましょう。(How is Jesus criticizing the scribes?)
2. なぜこのような人たちが人一倍厳しい裁きを受けるのでしょう。(Why is it dangerous to be responsible for “turning people off” spiritually?)

6.21　ルカによる福音書　第 21 章

6.21.1　1 節 - 4 節

1. イエスは金持ちたちの献金とまずしいやもめの献金をどのように比較していますか。(How does Jesus compare the gifts of the rich with the gift of the poor widow?)

6.21.2　5 節 - 6 節

1. どのような状況でイエスは神殿の崩壊について告げますか。(Under what circumstances does Jesus tell about the destruction of the temple?)

6.21.3　7 節 - 19 節

1. 聴衆たちは何について知りたいと思い、イエスはそれにどのように答えますか。(What do the hearers want to know and how does Jesus answer?)
2. イエスはどのようなことがおこると言っていますか。また、聴衆はどのようなことに注意するように言われていますか。(What danger must Jesus’ followers avoid? What would happen in those days?)
3. 迫害のときはどのような機会になると言ってますか。またどのような約束を与えていますか。(What opportunity comes with persecution? What does Jesus give his persecuted followers?)

6.21.4　20 節 - 24 節

1. どのようなことがおこると言われていますか。(Describe the events fortold in this paragraph.)
2. それはいつまでだと言っていますか。(How long will Jerusalem be in Gentile hands?)

6.21.5　25 節 - 28 節

1. どのようなことがおき、それは人々にどのような影響を及ぼすと言っていますか。(What things will begin to happen? What effect will these events have on people?)
2. イエスはどのようなことをすすめていますか。(What causes for rejoicing do verses 27, 28?)

6.21.6　29 節 - 33 節

1. どのようなことが必要だと言っていますか。(What does Jesus emphasize the need for watchfulness?)

6.21.7　34 節 - 38 節

1. どのようなとき、私たちの心は鈍くなりますか。(How do our hearts become weghed down?)
2. どのように準備したらよいでしょうか。(How should we prepare for that day?)
3. イエスはどのようなパターンで日々を過ごしていますか。(What pattern does Jesus follow during the week after his triunphal entrance into Jerusalem?)

6.22　ルカによる福音書　第 22 章

6.22.1　1 節 - 13 節

1. 過越祭はユダヤ人達にとってどのような意味を持っていたでしょうか（出エジプト記 12:1-39 ）。(What does the Passover feast mean to Jews? (Read Ex. 12:1-39))
2. ユダはどのような事を約束しますか。(What arrangement is made between the Jewish readers and Judas?)
3. なぜイエスは過越の食事をする場所を弟子達にも知らせなかったのでしょうか。(What reason do you see for Jesus' secrecy about the place where he will have the Passover supper?)

6.22.2　14 節 - 23 節

1. 食事の席でイエスが弟子達に告げたことをまとめてみましょう。(What does Jesus reveal to his disciples at the supper?)
2. 裏切るものがいるとのイエスの言葉に弟子達はどのように反応しますか。(How and to what do disciples react?)

6.22.3　24 節 - 34 節

1. 弟子達が望んでいたことはどのような事だったでしょうか。(What is the disciples' concern?)
2. イエスはここで弟子達にどのような事を教えていますか。(What does Jesus teach on the greatness?)
3. イエスはシモンにどのような事を告げますか。それに対してシモンはどのように答えていますか。(What is foretold about Peter and what is his reaction?)

6.22.4　35 節 - 38 節

1. どのような変化が弟子達の生活に起こると告げていますか。(What drastic change is about to come into the disciples' lives?)

6.22.5　39 節 - 46 節

1. イエスは弟子達に祈りの前と後でどのような事を告げていますか。(What does Jesus tell his disciples before and after he prays?)
2. イエスはどのように祈っていますか。(What is Jesus' prayer?)

6.22.6　47 節 - 53 節

1. ここで起こったことをあげてみましょう。(Describe the events in this paragraph.)
2. イエスは、ここでユダ、弟子達、民のリーダー達にどのようなことを伝えていますか。(What does Jesus tell each of Judas, his disciples and the leaders of the Jews through this incident?)

6.22.7　54 節 - 62 節

1. ペトロはなぜイエスを知らないと言ってしまうのでしょうか。(Why do you think Peter disowns Jesus?)

6.22.8　63 節 - 71 節

1. 見張りをしていた人たちにとってイエスはどのような存在なのでしょう。(Who is Jesus for those who watched him?)
2. イエスは最高法院でどのような証言をしていますか。(What claims does Jesus make at the assembly of elders?)

6.23　ルカによる福音書　第 23 章

6.23.1　1 節 - 5 節

1. 人々は、イエスのどのような罪をピラトに訴えていますか。(What accusations does the Jewish council make against Jesus before Pilate?)

6.23.2　6 節 - 12 節

1. なぜ、ピラトはイエスをヘロデに送ったのだと思いますか。(Why do you think Pilate sends Jesus to Herod?)
2. ヘロデは何を期待していましたか。イエスはどのように応じますか。(What is Herod's attitude, how does Jesus respond and why is Herod frustrated?)

6.23.3　13 節 - 25 節

1. ピラトが結論を出すまでの経過を追ってみましょう。(Trace the decisions Pilate makes, and the reasons for his decision (see v. 4, 14, 16, 22).)
2. 人々はなぜイエスを十字架に付けることを要求したのでしょうか。(Why do people want Jesus to be crusified?)

6.23.4　26 節 - 43 節

1. イエスは婦人たちに何を伝えているのでしょうか。(What is Jesus' message to women of Jerusalem?)
2. v34 のイエスの祈りからあなたはどのようなメッセージを受け取りますか。(What message do you receive in Jesus' prayer in v34?)

3. イエスと一緒に十字架にかけられた犯罪人に対し、イエスはどのように答えていますか。(How does Jesus respond to the criminal?)

6.23.5　44 節 - 49 節

1. イエスの死にあたり、どのような特別なことがおきますか。そして人々はどのように反応しますか。(What unusual events does Luke record in verse 44-45 at Jesus' death? How do people respond?)

6.23.6　50 節 - 56 節

1. ヨセフからどのようなことを学びますか。(What do you learn about Joseph?)
2. なぜ婦人達はすぐに、イエスの体に香油などを塗ることができなかったのでしょう。(Why can the women do nothing immediately about Jesus' body?)

6.24　ルカによる福音書　第 24 章

6.24.1　1 節 - 12 節

1. 婦人達はどのような気持ちで、どのような事を考えて、何をしに墓に行きましたか。(What emotions, thought and intention do you imagine the women have as they go to the tomb?)
2. 婦人達は、そこで何を見、どのようなことを経験しますか。(What do the women experience there?)
3. 婦人達の報告に対する弟子達の反応から考えると、弟子達はこのとき、どのような状態でどのような事を考えていたでしょうか。(What report do the women make to the other disciples and how is it received? What does this indicate about the expectation of the eleven and the rest?)

6.24.2　13 節 - 35 節

1. 二人の弟子達はどんなことを話していましたか。このときの様子を思い描いて見ましょう。(What are the two discussing on their way to Emmaus? What do you think would be included in their conversation?)
2. イエスはなぜ旧約聖書から説明されたのでしょうか。またどのようなことを説明しましたか。(Why would Jesus want to interpret to them the Old Testament prophecies about himself before they recognize him? What is the scope of his teaching?)
3. 二人はどのようにして、イエスであると分かりましたか。(Why do you think they recognized Jesus when they were at the table?)

4. なぜ二人はエルサレムに戻ったのでしょうか。(Why do they return to Jerusalem?)

6.24.3　36 節 - 49 節

1. イエスは驚いている弟子達にどのように語りかけていますか。(What does Jesus understand about his troubled disciples? How does he ally their fears and questions?)
2. ルカはイエスの復活がどのようなものであったと記述しているのでしょうか。(What does this section indicate about the kind of resurrection Luke reports?)
3. イエスは、ここで弟子達にどのような事を教えていますか。まとめてみましょう。(List things Jesus teaches.)

6.24.4　50 節 - 53 節

1. イエスの昇天についてまとめてみましょう。(Describe Jesus' departure and the disciples' reaction to it.)

第 7 章

マタイ（2011-2015）

7.1　マタイによる福音書　第 1 章

7.1.1　マタイによる福音書 Matthew 1:1 - 17

- この系図で気づいたことを挙げてみましょう。List what you notice in this genealogy.
- マタイはなぜ系図から始めたのでしょうか。Why do you think Matthew stats from this genealogy?
- この系図を通してマタイが伝えたかったことは何なのでしょうか。What does Matthew communicate through this genealogy.

7.1.2　マタイによる福音書 Matthew 1:18 - 25

1. イエスキリストの誕生について 18 節はどのように書いてありますか。What were the unusual things that happened? (v18) What do you think about that?
2. ヨセフはどのような人ですか。What can you learn about Joseph?
3. 天使はヨセフに何を伝えますか。What did the angel of the Lord tell Joseph?
4. 生まれてくる男の子は、将来どのような人になると言われていますか。What is prophesied about the boy?
5. あなたがヨセフならそのような気持ちを抱き、天使の言葉にどのように応答するでしょうか。If you were Joseph, what do you feel and how do you respond to angel.
6. この章で、イエスについて何を伝えようとしているのでしょうか。What can you tell about Jesus through this chapter?

7.2　マタイによる福音書　第 2 章

7.2.1　マタイによる福音書 Matthew 2:1 - 12

1. イエスの生まれた場所について、博士たちについてどんなことが分かりますか。What do you learn about where Jesus was born? What do you learn about the wise men?
2. ヘロデやエルサレムの人たちの反応はどのようなものでしたか。How do King Herod and the people of Jerusalem respond?
3. ヘロデはどうしますか。なぜ密かに博士たちに尋ねたのでしょうか。What did Herod do? What might be the reason why he kept it as a secret? (v7, 8)
4. 博士たちのその後について記されていることをあげてみましょう。What did the wise men do?

7.2.2　マタイによる福音書 Matthew 2:13 - 23

1. なぜヨセフは家族とエジプトに行きますか。Why Joseph takes his family and goes to Egypt?
2. ヘロデについてはどんなことがわかりますか。Make a list of the things that you learn about Herod. What sort of person was Herod?
3. ヘロデが死んでからのイエスの家族についてどんなことが分かりますか。What do you learn about the family after the death of Herod?
4. この家族についてこの章でどのようなことが分かりますか。What do you learn about the family through this chapter?

7.3　マタイによる福音書　第 3 章

7.3.1　マタイによる福音書 Matthew 3:1 - 12

1. 洗礼者ヨハネは、どこで、どのようなメッセージを語りますか。Where does John the Baptist teach and about what does John teach?
2. イザヤの言葉の引用はどのような人のことを語っていますか。What had Isaiah said about the person?
3. ヨハネの生活からどんなことが分かりますか。What do you learn from John's clothes and life?
4. どのような人たちがヨハネのもとに来ますか。Who come to John?

5. ヨハネのファリサイ派やサドカイ派の人々へのメッセージをまとめてみましょう。What is the message of John to Pharisees and Sadducees?

6. ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々に、なぜ 7 節から 12 節のように語るのでしょうか。Why does John say to Pharisees and Sadducees these words?

7.3.2 マタイによる福音書 Matthew 3:13 - 17

1. 洗礼者ヨハネは、イエスが洗礼をうけるのをなぜ思いとどまらせるのでしょうか。Why does John stop Jesus to be baptized?

2. イエスはなぜ洗礼者ヨハネから洗礼を受けるのでしょうか。Why does Jesus get baptized?

3. イエスが洗礼を受けたときどんなことが起こりますか。What happens when Jesus is baptized?

7.4 マタイによる福音書　第 4 章

7.4.1 マタイによる福音書 Matthew 4:1 - 11

7.4.2 問い

1. イエスはどこでどのように誰によって試みられますか。Describe where, how and by whom Jesus was tested.

2. 三つの試みが記されていますが、最初にサタンはどのようにイエスに言っていますか。イエスはそれにどのように答えますか。What did the devil suggest first? How did Jesus say to the devil?

3. 次にサタンはイエスをどこへ連れて行きどのように言いますか。イエスはどのように答えますか。Where did the devil bring Jesus and what did the devil suggest him? How did Jesus say to the devil?

4. 次にサタンは、イエスをどこへ連れて行きますか。そしてどのように言い、イエスはどのように答えますか。Where did the devil bring Jesus next and what did the devil suggest him? How did Jesus say to the devil?

5. 結果としてどのようになったと書いてありますか。What was the result?

6. イエスのあった試みはあなたにはどのような意味があると思いますか。To you, what is the meaning of this test Jesus went through?

7.4.3 参照

7.4.4 メモ

7.4.5 マタイによる福音書 Matthew 4:12 - 25

1. イエスはなぜガリラヤに行きますか。Why did Jesus go to Galilee?
2. ガリラヤについて、どんなことが分かりますか。What do you learn about Galilee?
3. イエスの宣教はどのようにして始まりますか。What was the first message of Jesus?
4. シモンとアンデレについてどのような事が分かりますか。What do you learn about Simon and Andrew?
5. ヤコブとヨハネについてどのような事が分かりますか。What do you learn about James and John?
6. イエスのガリラヤ宣教についてまとめてみましょう。What do you learn about Jesus' ministry in Galilee?

7.5 マタイによる福音書　第 5 章

7.5.1 マタイによる福音書 Matthew 5:1 - 12

1. イエスはどのような状況で誰に対してこのメッセージを語っていますか。When, to whom and where did Jesus give this message?
2. 「心の貧しい人たち」とはどのような人々でしょうか。Who are the poor in spirit?
3. 「悲しむ人々」とはどのような人々でしょうか。Who are those who mourn?
4. 「柔和な人々」とはどのような人々でしょうか。Who are the meek?
5. 「義に飢え渇く人々」とはどのような人々でしょうか。Who are those who hunger and thirst for righteousness?
6. 「憐れみ深い人々」とはどのような人々でしょうか。Who are the merciful?
7. 「心の清い人々」とはどのような人々でしょうか。Who are the pure in heart?
8. 「平和を実現する人々」とはどのような人々でしょうか。Who are the peacemakers?
9. 「義のために迫害される人々」とはどのような人々でしょうか。Who are those who are persecuted because of righteousness?

7.5.2 マタイによる福音書 Matthew 5:13-16

1. 地の塩とはどのようなひとのことでしょうか。What is meant by ‘salt’?
2. 塩のききめを失うとどうなると言っていますか。What happens if the salt loses saltiness?
3. なぜ「あなたがたは、世の光である」と呼ばれているのでしょうか。Why does Jesus call the disciples the light of the world?
4. 16 節にはどのような命令が書かれていますか。あなたは、どのように感じますか。What does Jesus tell disciples? What is your reaction?

7.5.3 マタイによる福音書 Matthew 5:17 - 20

1. イエスは「律法や預言者」についてどのように言っていますか。What does Jesus tell about the Law and the Prophets?
2. 20 節で言われている「律法学者やファリサイ派の人々の義」というのは、どのような義のことでしょうか。そしてそれよりまさる義とはどのような義でしょうか。What does Jesus mean by ‘’the righteousness surpasses that of the Pharisees and the teachers of the law”?

7.5.4 マタイによる福音書 Matthew 5:21 - 26

1. イエスは『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』という言葉をひいてどのように教えていますか。What does Jesus teach by referring to ‘You shall not murder, and anyone who murders will be subject to judgment’?
2. 23 節から 26 節で、イエスはどのようなことを勧めていますか。What does Jesus say in vs 23 - 26?

7.5.5 マタイによる福音書 Matthew 5:27 - 32

1. イエスは『姦淫するな』という言葉をひいてどのように教えていますか。What does Jesus teach by referring to ‘You shall not commit adultery’?
2. イエスは『妻を離縁する者は、離縁状を渡せ』という言葉をひいてどのように教えていますか。What does Jesus teach by referring to ‘Anyone who divorces his wife must give her a certificate of divorce’?

7.5.6 マタイによる福音書 Matthew 5:33 - 42

1. イエスは『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』という言葉をひいてどのように教えていますか。What does Jesus teach by referring to ‘Do not break your oath, but fulfill to the Lord the vows you have made’?
2. イエスは『目には目を、歯には歯を』という言葉をひいてどのように教えていますか。What does Jesus teach by referring to ‘Eye for eye, and tooth for tooth.’?

7.5.7 マタイによる福音書 Matthew 5:43 - 48

1. イエスは『隣人を愛し、敵を憎め』という言葉をひいてどのように教えていますか。What does Jesus teach by referring to ‘Love your neighbor and hate your enemy.’?
2. なぜ、「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」がここで書かれているのでしょうか。
3. 最後にイエスは何を勧めていますか。

7.6 マタイによる福音書　第 6 章

7.6.1 マタイによる福音書 Matthew 6:1 - 4

1. 5 章で語られてきた義を行う私たちの態度について 1 節ではどのようなことが述べられていますか。What does Jesus teach about our attitude to do right things in verse 1?
2. 2 節から 18 節までにはそれぞれどのようなトピックについて述べられていますか。What topics are discussed in verse 2 to 18?
3. 施しについてどんなことが教えられていますか。What is taught on giving?
4. 結局、義は報酬のために行うのでしょうか。Do we give for reward?
5. 5:16 の人々の前で光を輝かすこととの関係はどう考えたらよいでしょうか。What is the relation between 5:16 and 6:1?

7.6.2 マタイによる福音書 Matthew 6:5 - 15

1. 5 - 8 節で、祈りについてどんなことが教えられていますか。What is taught in verses 5 - 8 about prayer?

2. なぜ密室で祈るのですか。Why are we to go into our room, close the door and pray?

3. 8 節は祈りについて何を言っているのでしょうか。What does verse 8 tell us about prayer?

4. 14, 15 節で、赦しについてどのようなことが語られていますか。What is taught about forgiveness in verses 14 and 15?

7.6.3 マタイによる福音書 Matthew 6:9 - 13 主の祈り Lord's Prayer

1. ルカによる福音書にあるものと比べてみましょう。(ルカ 11:1 - 4) Compare with the corresponding verses in Luke 11:1 - 4.

2. イエスが祈り方を教えていますが、教えられてはじめて祈る事ができるのでしょうか。Can we pray only when we are taught to pray?

3. 一節ずつみてみましょう。どんなことに気づきますか。（新共同訳）Share your observations on each verse. (NIV)

4. 天におられるわたしたちの父よ、／御名が崇められますように。(v9) Our Father in heaven,

hallowed be your name,

1. 御国が来ますように。御心が行われますように、／天におけるように地の上にも。(v10) your kingdom come, your will be done, on earth as it is in heaven.

2. わたしたちに必要な糧を今日与えてください。(v11) Give us today our daily bread.

3. わたしたちの負い目を赦してください、／わたしたちも自分に負い目のある人を／赦しましたように。(v12) And forgive us our debts, as we also have forgiven our debtors.

4. わたしたちを誘惑に遭わせず、／悪い者から救ってください。(v13) And lead us not into temptation, but deliver us from the evil one.

5. 祈りと 14, 15 節はどのように関係しているのでしょうか。What is the relation between the prayer and verses 14 and 15?

7.6.4 マタイによる福音書 Matthew 6:16 - 18

1. 断食はどのようなときにするのでしょうか。When do people fast?

2. ここでは断食についてどんなことが教えられていますか。What is taught here about fasting?

7.6.5 マタイによる福音書 Matthew 6:19 - 24

1. 自分の宝を蓄えることについてどんなことを教えていますか。What does Jesus say on treasures?
2. 天に宝を蓄えるとはどういう事でしょうか。How do we store up our treasures in heaven?
3. 目についてどんなことを教えていますか。What does Jesus say about eyes?
4. 神と富とに仕えるとはどういうことでしょうか。What do you think is to serve God and money?
5. この箇所は全体として何を言っているのでしょうか。What does Jesus teach in verses 19 - 24?

7.6.6 マタイによる福音書 Matthew 6:23 - 34

1. どんな煩いについて語られていますか。What kind of worries Jesus points here?
2. なぜ思い煩ってはいけないのでしょうか。その理由を挙げてみましょう。List up the reasons why we do not need to worry.
3. 天の父がわたしたちに必要なものをすべて知っているということは、あなたの生き方にどう影響しますか。What does it mean if our heavenly father knows everything you need?
4. 神の国と神の義をと求めるとはどのようなことでしょうか。What is to seek the kingdom and the righteousness of our heavenly father?
5. あなたはどのようなことに思い煩いますか？What do you worry about?

7.7 マタイによる福音書　第 7 章

7.7.1 マタイによる福音書 Matthew 7:1 - 6

1. 「人を裁く」とはどういうことでしょうか。なぜ裁いてはいけないのでしょうか。What does it mean to judge. Why does Jesus say ''Do not judge"?
2. 誰をさばくのでしょうか。誰に裁かれるのでしょうか。Judge who? Who will judge us?
3. 6 節をみるとやはり判断は必要なのではないでしょうか。According to verse 6, we have to judge, don't we?
4. 2 節にある「自分の量る秤で量り与えられる」とはどういうことでしょうか。What does verse mean?
5. 3, 4 節はどんな状況を言っていますか。What does Jesus say in verses 3 and 4?

6. ではどうすれば良いのでしょうか。What should we do?

7. 6 節にある、犬、豚、神聖なもの、真珠はなにを意味しているのでしょうか。What do dogs, swines, what is sacred and pearls mean?

7.7.2 マタイによる福音書 Matthew 7:7 - 12

1.「求めなさい\ldots (v7)」は、だれがだれになにを求めることについて言っているのでしょうか。Who asks to whom and what?

2. ルカによる福音書ではどのような背景でこの言葉が語られているでしょうか。(11:1-13) Find the background of this verse in Luke 11:1 - 13.

3.「求めよ」「さがせ」「門をたたけ」はそれぞれどんなことを言っているのでしょうか。What does ‘ask’, ‘seek’ and ‘knock’ mean here?

4. 9 節から 11 節では「あなたがた」と「天の父」についてどのような対比がなされていますか。What are explained by comparing ‘you’ and ‘heavenly father’ in verses 9 to 11?

5.「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」は黄金律とも言われますが、具体的にどのようなことを言っていると思いますか。Verse 12 is often called ‘Golden Rule’. What do you think it means here?

6.「己の欲せざる所、人に施すことなかれ。」と同じことでしょうか。Is this same as ‘’Do not do unto other what you do not want others to do unto you.” of Confucius?

7. この節は文脈の中でなにを言っているのでしょうか。What does this verse 12 say in this paragraph?

7.7.3 マタイによる福音書 Matthew 7:13 - 14

1. 狭い門、細い道とはここでは何を意味しているのでしょうか。What does narrow gate and narrow path mean?

2. 命に至る道とは何をさしているのでしょうか。What does ‘the road that leads to life’ mean?

7.7.4 マタイによる福音書 Matthew 7:15 - 23

1. 偽預言者とはどのような人のことでしょうか。What is the characteristic of false prophets?

2. 実とは何を意味しているのでしょうか。What are fruits?

3. 偽預言者を見分けることができるのでしょうか。Can we recognize who false prophets are?

4.「主よ、主よ」と言うこと自体が問題なのでしょうか。Is it a problem to say ‘’Lord. Lord.’

7.7.5 マタイによる福音書 Matthew 7:24 - 29

1. ここで家を建てた二人の人のたとえが書かれていますが、共通点は何で、何が違っているのでしょうか。What are the same and what are the differences in the actions of the two in this parable?
2. 土台とは何でしょうか。What is the foundation?
3. 三つのたとえのメッセージをまとめてみましょう。Let us summarize three parables.
4. 権威ある者として教えたとはどのようなことを言っているのでしょうか。What does it mean to teach as one who had authority.

7.8 マタイによる福音書 第 8 章

7.8.1 マタイによる福音書 Matthew 8:1 - 4

1. 山を下りてくると、どのようなことが起きますか。What happens when Jesus and the followers go down from the mountainside?
2. どうして、もっと単純に、治して下さいと言わないのでしょうか。Why he does not simply ask Jesus to cure his disease?
3. イエスはなぜだれにも話さないようにと注意したのでしょうか。Why does Jesus warn him not to tell anyone?
4. イエスはなぜモーセの定めの実行を命じたのでしょうか。Why does Jesus tell him to follow what Moses commanded?

7.8.2 マタイによる福音書 Matthew 8:5 - 13

1. どのようなことが起きますか。What happens in Capernaum?
2. この百人隊長についてどんなことが分かりますか。What can you tell about this centurion?
3. 百人隊長はイエスについてなにを信じていますか。What does this centurion believe in Jesus?
4. イエスはこの百人隊長の信仰をほめていますが、実際何をほめているのでしょうか。What is Jesus amazed at?
5. イエスは 11, 12 節で何を言っているのでしょうか。What Jesus tell us in verses 11 and 12?

7.8.3 マタイによる福音書 Matthew 8:14 - 17

1. ペテロの家ではどのようなことが起きますか。What happens at Peter's house?
2. 夕方にはどんなことが起きますか。What happens in the evening?
3. イザヤ書のことばがイエスにおいて実現しているとするとそれは何を言っていますか。If what Isaiah prophesied is fulfilled in Jesus, what does it mean?

7.8.4 マタイによる福音書 Matthew 8:18 - 22

1. どのような状況でこの会話が始まりますか。Describe the scene when the talk started.
2. イエスは何を伝えようとしているのでしょうか。What do you think about that instruction?

7.8.5 マタイによる福音書 Matthew 8:23 - 27

1. 湖でどのようなことが起きますか。What happens on the lake?
2. 人々はなにに驚いたのでしょうか。What surprises the people about these events?

7.8.6 マタイによる福音書 Matthew 8:28 - 34

1. ガダラ人の地方で何がおきますか。What happens in the region of the Gadarenes?
2. イエスはどのようにして悪霊を追い出しますか。How does Jesus expell the demmons?
3. なぜ町の人たちは、イエスにその地方から出ていってほしいと願ったのでしょうか。Whay does the people plead Jesus to leave their region?

7.9 マタイによる福音書　第 9 章

7.9.1 マタイによる福音書 Matthew 9:1 - 8

1. どこで、どのようなときに、このことが起こりましたか。When and where does this happen?
2. 「その人たち（彼ら）の信仰」とは誰のどのような信仰なのでしょうか。What does ''their faith" mean? Whose faith? What kind of faith?

3. なぜイエスは「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言ったのでしょうか。Why does Jesus say ‘’Take heart, son; your sins are forgiven?”

4. 『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいのでしょうか。Which is easier: to say, ‘Your sins are forgiven,’ or to say, ‘Get up and walk’?

7.9.2 マタイによる福音書 Matthew 9:9 - 13

1. マタイはどのような人で、どのようにしてイエスの弟子になりますか。Who is Matthew? How does he become a disciple?

2. イエスはどこでどのような人たちと食事をしていますか。Where does Jesus have a dinner? Who are there with him?

3. ファリサイ人たちは、なぜこのように弟子達に聞くのでしょうか。Why do Pharisees ask these questions to Jesus’ disciples?

4. イエスはどのように答えていますか。How does Jesus respond to them?

5. イエスはどのような意図で『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』と言っているのでしょうか。Why does Jesus say ‘’Go and learn what this means: {’I desire mercy, not sacrifice.” ’

6. 「罪人を招く」とはどのような意味でしょうか。What does it mean to call sinners?

7.9.3 マタイによる福音書 Matthew 9:14 - 17

1. 14 節の質問は、誰がしていますか。なぜそのような質問をするのでしょうか。Who asked the question in verse 14?

2. イエスはどのように答えていますか。How did Jesus answer to the question?

3. 布きれと服、葡萄酒と革袋のたとえはどのようなことを説明しているのでしょうか。What are a patch of unshrunk cloth on an old garment and new wine in old wineskins?

7.9.4 マタイによる福音書 Matthew 9:18 - 26

1. 指導者はイエスに何を願いますか。What is the request of the leader?

2. 途中でどんなことがありますか。What happens on the way?

3. イエスはこの女性になんと言っていますか。What does Jesus tell this woman?

4. イエスは少女にたいしてどうしますか。What does Jesus do to the girl?

7.9.5 マタイによる福音書 Matthew 9:27 - 34

1. 二人の盲人は、イエスにどのように訴えますか。How do two blind appeal to Jesus?
2. イエスは、どう対応しますか。How does Jesus respond to these blind.
3. イエスはなぜ誰にも知らせてはいけないと言うのでしょうか。Why does Jesus tell these blind not to tell the story.
4. イエスが悪霊を追い出すとどんなことがおきますか。What happens when Jesus drives out demons?

7.9.6 マタイによる福音書 Matthew 9:35 - 38

1. イエスが町や村を巡回したときのことをどのようにまとめていますか。How does Mattew summarize Jesus' ministry?
2. イエスは群衆をどう見ていますか。How does Jesus see the crowds.
3. イエスは弟子たちにどのように命じていますか。What does Jesus command to his disciples?

7.10 マタイによる福音書　第 10 章

7.10.1 マタイによる福音書 Matthew 10:1 - 4

1. イエスは 12 人の弟子を呼び寄せどうしますか。What does Jesus do with his twelve disciples?
2. このリストからどんなことが分かりますか。What do you find from this list?
3. 他のリストと比較してみましょう。Please compare this with other lists.'

7.10.2 マタイによる福音書 Matthew 10:5 - 15

1. イエスは 12 人を誰に遣わしていますか。メッセージは何ですか。To whom 12 disciples are sent? What is the message.
2. 8 節から 10 節でどのような指示を与えていますか。What instructions are given to disciples in vs 8-10?
3. 11 節から 15 節は何を言っているのでしょうか。What does vs 11-15 mean?

7.10.3 マタイによる福音書 Matthew 10:16 - 25

1. 「蛇のように賢く、鳩のように素直」とはどのようなことが求められているのでしょうか。What does ‘be as shrewd as snakes and as innocent as doves’ mean?
2. どのような困難を経験するといわれていますか。What difficulties are waiting for disciples?
3. なぜ「何をどう言おうかと心配してはいけない」のでしょうか。Why they should not worry about what to say or how to say it?
4. なぜイエスのために憎まれるのでしょう。Why are they hated?
5. 迫害されたときのことについてどのように指示されていますか。What is instructed for the days of persecution?
6. 「弟子は師にまさるものではない」とは何のための説明でしょうか。What does the saying ‘the student is not above the teacher’ explain?

7.10.4 マタイによる福音書 Matthew 10:26 - 31

1. 誰をおそれなくてよいのですか、そしてそれはなぜですか。Whom are they not afraid of, and why?
2. 「たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」とはどういうことでしょうか。What does ‘you are worth more than many sparrows’ mean?

7.10.5 マタイによる福音書 Matthew 10:32 - 33

1. イエスの仲間であると言い表すとはどのようなことでしょうか。What does it mean to ‘acknowledge before my Father in heaven’?

7.10.6 マタイによる福音書 Matthew 10:34 - 39

1. 「平和ではなく、剣をもたらすため」とはどういう意味でしょうか。What does it mean to say ‘I did not come to bring peace, but a sword.’?
2. イエスに従っていく人とはどのような人でしょうか。Who are the followers of Jesus?

7.10.7　マタイによる福音書 Matthew 10:40 - 42

1. イエスの弟子を受け入れることはなぜイエスを受け入れることになるのでしょうか。Why is to accept Jesus' disciples to accept Jesus?

7.11　マタイによる福音書　第 11 章

7.11.1　マタイによる福音書 Matthew 11:1 - 19

1. マタイによる福音書 3 章からバプテスマのヨハネについて復習してみましょう。

   Read Matthew 3 and review John the Baptist.

2. なぜ、ヨハネはこのような質問を弟子たちにさせたのでしょうか。Why did John ask this question by sending his disciples?

3. イエスはどのように答えていますか。What was Jesus' answer?

4. イエスは、ヨハネのことをどのような人だと言っていますか。What does Jesus say about John?

5.「天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」とはどういうことでしょうか。

What does ''whoever is least in the kingdom of heaven is greater than he (John the baptist)" mean?

1. 17 節の『笛を吹いたのに、／踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、／悲しんでくれなかった。』はどのような状況を描写しているのでしょうか。What is described in verse 17?

7.11.2　マタイによる福音書 Matthew 11:20 - 24

1. イエスはなぜ、これらの町を叱っているのでしょうか。Why does Jesus scold these towns?

7.11.3　マタイによる福音書 Matthew 11:25 - 30

1. イエスは 25 - 27 節でなにを言おうとしているのでしょうか。What does Jesus mean say in verses 25 - 27?

2. イエスはどのような人を招いていますか。Who are invited by Jesus?

3.「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」とはどのような意味でしょうか。What does ''For my yoke is easy and my burden is light" mean?

7.12　マタイによる福音書　第 12 章

7.12.1　マタイによる福音書 Matthew 12:1 - 8

1. 弟子たちは「いつ」「どこで」「なに」をしていますか。それはなぜですか。When and what do disciples do? and Why?
2. ファリサイ派の人々は誰に何を訴えていますか。To whom and what do Pharisees tell Jesus?
3. イエスはどんな二つの例をあげて答えていますか。What are the two examples Jesus used for explanation?
4. 7 節は何を気づかせようとしているのでしょうか。What does Jesus mean by quoting a verse from the Bible?
5. 「人の子は安息日の主なのである。」は何を言っているのでしょうか。What does Jesus mean by saying ‘’For the Son of Man is Lord of the Sabbath?”

7.12.2　マタイによる福音書 Matthew 12:9 - 21

1. 会堂にはどんな人がいますか。人々の質問の意図は何ですか。Who are there at the synagogue? Why do the people ask a question in verse 10 to Jesus?
2. イエスはどのように答えますか。How does Jesus answer to the question?
3. 人々はなぜイエスを殺そうとまで思ったのでしょうか。Why do the people plot to kill Jesus?
4. イエスはこの企みを知ってどうしますか。What does Jesus do when he knows the plot?
5. イザヤ書からの引用は、イエスについてどのようなことを表現していますか。What does the quote from Isaiah tell about Jesus?

7.12.3　マタイによる福音書 Matthew 12:22 - 37

1. どんなことがおきますか。What happened?
2. 群衆やファリサイ人はそれぞれどのような反応をしますか。What were the responses of the people and the Pharisees?
3. イエスはファリサイ派の人の批判にどのように答えますか。How did Jesus respond to the Pharisees?

4. 神の国が来ていることはどのようにして分かると言っていますか。How can they tell that the kingdom of God has come upon them? What was Jesus' explanation?

5. 30 節は、中立はないと言うことでしょうか。なぜでしょうか。Is there a neutral position? Why?

6. 聖霊に言い逆らうとはどのようなことでしょうか。What is blasphemy against the Spirit?

7. なぜここで木と実や倉のたとえが語られているのでしょうか。Why does Jesus tell the parables of a tree and its fruit and a storage?

8. 実とは何のことでしょうか。倉とは何を意味しているのでしょうか。What are a tree, a fruit and a storage?

9. イエスはここで誰に何を伝えたいのでしょうか。What and whom does Jesus want to tell through this message?

7.12.4 マタイによる福音書 Matthew 12:38 - 45

1. 律法学者とファリサイ人はしるしを求めますが、なにの証拠を求めているのでしょうか。What is the sign these Pharisees want Jesus?

2. イエスはこれにどのように答えていますか。How does Jesus answer them?

3. 「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがる」とはどういういみでしょうか。What does it mean to say ''A wicked and adulterous generation asks for a sign"?

4. ニネベの人たち、南の女王を引用して、イエスは何を伝えようとしていますか。What does Jesus tries to tell them by quoting the men of Nineveh and the Queeen of the South?

5. 汚れた霊のたとえを通してイエスは何を伝えようとしているのでしょうか。What does Jesus tell by this parable?

6. 43 節にあるこのひとがある人たちを象徴しているとすると、それはどんな人のことでしょうか。If this person in verse 43 represent a kind of people, who are they?

7.12.5 マタイによる福音書 Matthew 12:46 - 50

1. イエスの家族たちが話したいこととは何のことだと思いますか。What do you think Jesus' family members want to tell?

2. イエスはどのように答えられますか。What is Jesus' response?

3. イエスの兄弟、姉妹、母はどのような人だと言っていますか。Who are Jesus's brothers, sisters and mother?

7.13　マタイによる福音書　第 13 章

7.13.1　マタイによる福音書 Matthew 13:1 - 23

1. イエスはこのたとえをいつ、どこで、誰に対して話していますか。When, where and to whom does Jesus tell this parable?
2. 一般的にたとえ話にはどのような特徴・効果がありますか。In general why and when are parables used?
3. イエスはたとえ話をどのように話し始めますか。How does Jesus start this parable?
4. 種はどのようなところに落ちましたか。Where do seeds fall?
5. なぜイエスはたとえを用いるのでしょうか。Why does Jesus use parables?
6. 弟子たちと群衆はなにが違うのでしょうか。What is the difference between the disciples and the crowds?
7. イザヤ書からの引用はなにを言っているのでしょうか。What does the quote from Isaiah say?
8. 17 節の「預言者や正しい人たち」が見たかったこと、聞きたかったこととは何なのでしょうか。What are many prophets and righteus people longed to see and hear?
9. 種は何だと言っていますか。What are the seeds sown?
10. 「道端に蒔かれたもの」とはどのような人だと言っていますか。What are the seeds sown along the path like?
11. 「石だらけの所に蒔かれたもの」とはどのような人だと言っていますか。What are the seeds sown on rocky ground like?
12. 「茨の中に蒔かれたもの」とはどのような人だと言っていますか。What are the seeds sown among the thorns like?
13. 「良い土地に蒔かれたもの」についてはどのように書かれていますか。What are the seeds sown on good soil like?
14. 結局、ここでは何が教えられているのでしょうか。What is the message of this parable?
15. 種がみことば以外のものをも表しているとすると、それは、どのような可能性があるでしょうか。If the seeds sown represents something else as well, what are the possibilities?

7.13.2 マタイによる福音書 Matthew 13:24 - 43

1. 24 節から 43 節には三つの譬えが書かれていますが、これらは何についてのたとえですか。There are three parables in 24 - 43. What are the topics?

2. 毒麦のたとえでは、どんなことがおきますか。What happens in the parable of the weeds?

3. 天の国はからし種に似ている、と言われていますが、どんなところが似ているのでしょう。

Jesus says ‘’The kingdom of heaven is like a mustard seed.” Which characteristic of mustard seeds is similar to the kingdom of heaven?

1. 天の国はパン種に似ている、と言われていますが、どんなところが似ているのでしょう。

Jesus says ‘’The kingdom of heaven is like yeast.” Which characteristic of yeast is similer to the kingdom of heaven?

1. 「からし種」と「パン種」のたとえから、天の国についてどんなことが分かりますか。What can you tell about the kingdom of heaven by the parables of a mustard seed and yeast?

2. 34, 35 節では、イエスがたとえで語る理由をどのように言っていますか。Why does Jesus tell in parables? (v 34, 35)

3. 解き明かしはどのような時になされましたか。When does Jesus explain the meaning of the parable?

4. 37 節からの解き明かしによると、たとえで語られているものは、それぞれ何に対応していると言っていますか。By Jesus’ explanation, who is the sower, the field, the good seed, the weeds, the devil, the harvest and the harvesters?

5. 世の終わりにはどのようになると言っていますか。What happens at the end of the age?

6. これらのたとえは、いまを生きる私たちに何を言っているのでしょうか。What is the message of these parables to us?

7.13.3 マタイによる福音書 Matthew 13:44 - 52

1. 44 節から 50 節には三つの譬えが書かれていますが、これらは何についてのたとえですか。There are three parables in 44 - 50. What are the topics?

2. 宝が隠されている畑をみつけたひとはどうすると言っていますか。When a man found treasure hidden in a field, what does he do?

3. このたとえは、天の国について、どのようなことを言っているのでしょうか。What does this parable tell about the kingdom of heaven?

4. 高価な真珠を見つけた商人は、どうすると言っていますか。When a merchant found a pearl of great value, what does he do?

5. 高価な真珠をみつけたひとのたとえから天の国についてどのようなことがわかりますか。What does the parable of a merchant looking for fine pearls tell about the kingdom of heaven?

6. 網をおろして漁をするたとえでは、天の国について何を伝えていますか。What does the parable of the net tell about the kingdom of heaven?

7. 毒麦のたとえも、世の終わりについて語られていましたが、網をおろして漁をするたとえと何が同じで、何が違うでしょうか。Parable of the weed also tells about the end of the age. What are the similarities and differences?

8. 天の国のことを学んだ学者はどのようなものだと言っていますか。What is the teacher of the law who learned the kingdom of heaven like?

9. イエスは、天の国について、いくつかの譬えで語られました。どのようなことがわかりますか。What do we understand the kingdom of heaven?

7.13.4 マタイによる福音書 Matthew 13:53 - 58

1. イエスは、たとえを語り終えてから、どこへ向かいますか。After Jesus finished these parables, where did he go?

2. イエスは、郷里で何をしますか。What did he do in his hometown?

3. 郷里のひとは、何に驚いていますか。What are the people of Jesus' hometown amazed at?

4. 郷里の人はイエスについて何を知り、なにを知りませんか。What do they know, and what do they not know?

5. なぜ、郷里や、家族は簡単には受け入れられないのでしょうか。Why do they not accept Jesus?

6. イエスはこれに対してどのように言っていますか。How does Jesus respond to this?

7. なぜ、イエスは、あまり奇跡をなさらなかったのでしょうか。Why did Jesus not do many miracles there?

8. この前の譬えと比較してみましょう。なぜ、このひとたちには、隠されていたのでしょうか。Recall the preceding parables. Why do the treasures hidden to these people?

7.14　マタイによる福音書　第 14 章

7.14.1　マタイによる福音書 Matthew 14:1 - 12, 13

1. 領主ヘロデはイエスについてどのように思っていますか。Who does Herod think of Jesus?
2. なぜ王は、イエスがヨハネの生まれ変わりだと思ったのでしょうか。Why did Herod the tetrarch think that Jesus is John the Baptist risen from the dead?
3. 領主ヘロデはなぜヨハネを牢に入れましたか。Why did Herod the tetrarch put John the Baptist into prison?
4. なぜ、ヘロデはヨハネを殺す決断をしたのでしょう。Why did Herod the tetrarch make decision to kill John the Baptist?
5. なぜ、王は心を痛めたのでしょうか。Why was Herod the tetrarch distressed?
6. マルコによる福音書 6 章 14 節から 20 節には、どのように書かれていますか。What is written in Mark 6:14 - 20.
7. なぜヘロデは、ヨハネを、イエスを受け入れられなかったのでしょうか。Why do you think Herod could not believe in neither John the Baptist nor Jesus?
8. イエスはなぜ人里離れたところに退かれたのでしょうか。Why did Jesus withdraw from there? (v13)

7.14.2　マタイによる福音書 Matthew 14:13 - 21

1. イエスはなぜ人里離れたところに退かれたのでしょうか。Why did Jesus withdraw from there?
2. 群衆は何を求めてイエスの後を追いかけたのでしょうか。Why did the crowds follow Jesus?
3. イエスは大勢の群衆をみてなぜ深く憐れまれたのでしょうか。Why did Jesus have compassion on the crowds?
4. 弟子たちはどのような進言をイエスにし、イエスはそれにどう答えますか。What proposal did disciples make to Jesus, and how did Jesus respond?
5. 弟子たちはどのような情報をイエスに伝えますか。What did the disciples tell Jesus?
6. イエスはどうしますか。What did Jesus do?
7. どうなったと書かれていますか。What were the results?

8. 他の福音書の記事から情報を得てみましょう。Get information from other gospels. (Mark 6:30 - 44, Luke 9:10 - 17, John 6:1 - 15)

9. この記事からなにを伝えようとしているのでしょうか。What do the gospel writers want to communicate to us?

7.14.3 マタイによる福音書 Matthew 14:22 - 33

1.「それからすぐ」イエスは群衆や弟子たちをどうしますか。What did Jesus do with the crowds and his disciples immediately after the previous event?

2. イエス自身はどうしますか。What did Jesus do?

3. 舟に乗った弟子たちにはどのようなことが起こりますか。What happened to the disciples on the boat?

4. イエスはどうしますか。What did Jesus do?

5. イエスをみて弟子たちはどのような反応をしますか。What were the responses of the disciples when they saw Jesus?

6. 怯えている弟子たちに、イエスはどのように話しかけますか。What did Jesus do to the terrified disciples?

7. ペテロはどうしますか。イエスはどう応じられますか。What did Peter say? How did Jesus respond to Peter?

8. どうなりますか。What happened?

9. 舟にいた人たちはどうしますか。What did the people on the boat do?

7.14.4 マタイによる福音書 Matthew 14:34 - 36

1. 一行が舟からあがるとどのようなことが起こりますか。What happened when they landed?

2. ひとびとはイエスに何を求めているのでしょうか。What did the crowds want?

7.15 マタイによる福音書　第 15 章

7.15.1 マタイによる福音書 Matthew 15:1 - 20

1. どのような人がイエスのもとに来ますか。Who come to Jesus?

2. どのような質問をしますか。What are their questions?

3. イエスはどのように答えますか。How does Jesus reply to them?
4. イザヤ書の言葉は、どんなことを言っていますか。What is the message of Isaiah?
5. イエスは群衆になにを伝えますか。What does Jesus tell the people to do?
6. 弟子たちは、なにをイエスに伝え、イエスはそれにどう答えますか。What is the disciples' report? What does Jesus reply to them?
7. ペテロの質問に、イエスは譬えについてどのように説明しますか。
8. イエスの言う「人を汚す」とはどういうことなのでしょうか。What does Jesus mean by 'defiling a person'?
9. イエスは律法の汚れに関する規定を否定しているのでしょうか。Does Jesus nullify the regulations concerning 'defiling a person' in the law?

7.15.2 マタイによる福音書 Matthew 15:21 - 28

1. 地図でティルスとシドンの場所を確認してみましょう。Find Tyre and Sidon in a map.
2. 女のひとはなにをどのように訴えますか。What and how does this woman ask for?
3. イエスは最初どうしますか。弟子たちはどうしますか。How does Jesus reply? What do the disciples do?
4. 24, 26 節を見てみましょう。イエスはなぜこのように答えるのでしょうか。Read verses 24 and 26. What do you think about Jesus' response?
5. それに対して、カナンの女は 25, 27 節で、どのように答えていますか。Read verses 25 and 27. What is the response of this woman? What do you think?
6. イエスは最後にどのように答えますか。What does Jesus tell the woman in verse 28?
7. あなたが弟子のひとりとしてその場にいたとしたらどんなことを感じ、学んだと思いますか。Suppose you are a disciple attending there. What do you think you feel and learn?

7.15.3 マタイによる福音書 Matthew 15:29 - 31

1. イエスはどこからどこに移動していますか。Where is Jesus? Where does he travel?
2. どのような人がイエスのもとに来ますか。イエスはどうしますか。Who come to Jesus? What does he do to them?

3. 群衆はどのような反応をしますか。What reaction do the crowd have?

7.15.4 マタイによる福音書 Matthew 15:31 - 39

1. どんな問題が起こりますか。イエスは、弟子たちにどのように言いますか。What happens? What does Jesus tell his disciples?
2. 弟子たちはどのように答えますか。What do disciples reply?
3. イエスは、弟子たちにどのように聞きますか。弟子たちはどう答えますか。How does Jesus ask his disciples? What is their response?
4. イエスはどのように指示し、どうしますか。What is Jesus' instruction? What does Jesus do?
5. 結果はどうなりすか。What is the result?
6. 14:13-21 の記事と比較してみましょう。Compare with Mt 14:13-21?

7.16 マタイによる福音書 第 16 章

7.16.1 マタイによる福音書 Matthew 16:1 - 4

1. どのようなひとたちがイエスのもとに来て、イエスに何を求めますか。それは、なぜですか。Who come to Jesus? What do they ask Jesus? Why?
2. イエスはどのように答えますか。How does Jesus reply?
3. 「ヨナのしるし」とは何をさしているのでしょうか。What is the sign of Jonah?
4. 現代のひとには、イエスはどのように語られるでしょうか。What is the message of Jesus to the people of our age?

7.16.2 マタイによる福音書 Matthew 16:5 - 12

1. 弟子たちには、どのような問題がおこっていましたか。What is the problem Jesus' disciples have?
2. イエスは弟子たちにどのように言いますか。そして、弟子たちは、それをどう理解しますか。What does Jesus say to his disciples? What do the disciples think?
3. イエスは、どのような過去のできごとを弟子たちに思い出させますか。What does Jesus want his disciples to recall?
4. 弟子たちは、どのようなことだと悟りますか。What do the disciples understand?

5. 注意すべき「ファリサイ派とサドカイ派の人々の教え」とは何でしょうか。What are the teaching of the Pharisees and Sadducees disciples have to be careful of?

7.16.3 マタイによる福音書 Matthew 16:13 - 20

1. どこでのできごとですか。地図を見て確かめてみましょう。Where does this event happen? Consult your map.
2. イエスはまずどのように弟子たちに尋ねますか。What is Jesus' first question to his disciples?
3. 弟子たちはどのように答えますか。What are their answers?
4. イエスは次にどのように弟子たちに質問しますか。What is the next question of Jesus?
5. これに対してだれがどのように答えますか。Who responds to Jesus' question? What is his answer?
6. イエスは、ペトロにどのように、答えますか。How does Jesus respond to Peter?
7. この岩の上に教会を建てるとはどのような事でしょうか。What does it mean to say ''on this rock I will build my church"?
8. イエスが与えるという鍵はどのようなものですか。What is the key given by Jesus?
9. 他の弟子たちは、どう聞いていたでしょうか。ペテロだけ特別なのでしょうか。What do you think other disciples are thinking about? Is Peter special?
10. なぜ、イエスは、自分がメシアであることをだれにも話さないようにと言ったのでしょうか。Why does Jesus order his disciples not to tell anyone that he is the Messiah?

7.16.4 マタイによる福音書 Matthew 16:21 - 28

1. 21 節の「このときから」とはどのような時のことですか。What refers to ''From that time on" in verse 21?
2. イエスは弟子たちにどのようなことを打ち明け始めますか。What does Jesus begin to explain to his disciples?
3. これを聞いて、ペトロはどうしますか。What does Peter do?
4. イエスはどうしますか。How does Jesus respond?
5. 自分を捨て、自分の十字架を負って従うとはどのような事でしょうか。What do you think ''deny themselves and take up their cross and follow me." is?

6. ここでいわれている「自分の命」とは何でしょうか。What is ‘’one’s life”?

7.「行いに応じて報いる」とはどのような行いのことでしょうか。What does it mean by ‘’he will reward each person according to what they have done.”?

8. 28 節のことばはなにを言っているのでしょうか。すでに、そのときは、来たのでしょうか。What does verse 28 say?

7.17　マタイによる福音書　第 17 章

7.17.1　マタイによる福音書 Matthew 17:1 - 13

1. イエスは誰を連れて山に登りますか。Who does Jesus invite to go up onto a mountain?

2. イエスはどのように変貌しますか。How does Jesus change?

3. だれがイエスと語り合っていますか。Who are talking with Jesus?

4. どのような声が聞こえてきますか。What do they hear?

5. この声を聞いて、弟子たちはどうしますか。また、イエスはどうしますか。What do the disciples do? What does Jesus do to his disciples?

6. イエスは弟子たちにどのようなことを注意しますか。What does Jesus warn his disciples?

7. 弟子とイエスはどのようなことについて語りますか。What do Jesus and his disciples discuss?

8. 13 節で弟子たちは何を悟ったと書いてありますか。What do the disciples understand in verse 13?

9. このできごとは、弟子たちにとって、どのような意味があったでしょうか。What does this mean to his disciples?

7.17.2　マタイによる福音書 Matthew 17:14 - 21

1. この人は、イエスにどんなことを訴えますか。What does this person ask Jesus?

2. イエスは、何を嘆かれますか。What does Jesus’ feel sad?

3. イエスはどうしますか。What does Jesus do?

4. 弟子たちはどうしますか。What do Jesus’ disciples do?

5. イエスはどのように答えますか。What is Jesus’ answer?

6. マルコによる福音書 9:14-29 によると、他にどのようなことが分かりますか。What can you tell from Mark 9:14-29?

7. マルコと、ルカはそれぞれ何を伝えようとしているのでしょうか。What do you think are the messages of Mrk and Luke?

8. 弟子たちに欠けていたのは何だったのでしょうか。どうすれば良かったのでしょう。What should Jesus' disciples have done?

7.17.3 マタイによる福音書 Matthew 17:22 - 23

1. イエスが死と復活について語ったのは二度目ですが、一度目と比較して見ましょう。This is the second time that Jesus tells of his death and resurrection. Compare with the first.

2. 前回と今回はそれぞれどのような時だったのでしょうか。Describe the first and the second time when Jesus tells of his death to his disciples.

3. 弟子たちの反応はどのように書かれていますか。What is the disciple's response?

7.17.4 マタイによる福音書 Matthew 17:24 - 27

1. ペトロは、どこで誰にどんな質問を受けますか。Where and what Peter is asked?

2. ペトロはどのように答えますか。What is Peter's answer?

3. イエスはペトロにどのような質問をしますか。What is Jesus's question to Peter?

4. 「彼らをつまずかせないようにしよう」(v27) とはどのような事でしょうか。What does it mean to say ''so that we may not cause offense"?

5. イエスは、ペトロにどんな指示を与えますか。What instruction does Jesus give to Peter?

6. この記事は、なにを私たちに伝えようとしているのでしょうか。What is the message of this paragraph?

7.18 マタイによる福音書　第 18 章

7.18.1 マタイによる福音書 Matthew 18:1 - 5

1. どんなときに、弟子たちの質問が始まりますか。When does this happen?

2. 弟子たちはイエスにどのような質問をしますか。What do the disciples ask Jesus?

3. イエスはどのようにしますか。What does Jesus do?

4. イエスは、どのようなことを弟子たちに告げますか。What does Jesus say?

5.「子供のようになる」とか「わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる」とはどのようなことを言っているのでしょうか。What does it mean to become like little children, or to welcome one such child in my name?

6. なぜ「子供のようになる」とか「わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる」ことにそれほどの価値があるのでしょうか。Why is it so critical to become like little children, or to welcome one such child in my name?

7.18.2 マタイによる福音書 Matthew 18:6 - 9

1. 6 節ではどのような人のことが語られていますか。Who is mentioned in verse 6?

2. 人をつまづかせるとはどのような事でしょうか。What does it mean to stumble a person?

3. なぜ、8 節、9 節のように厳しく言っているのでしょうか。Why does Jesus give harsh words in verses 8 and 9?

4. 命にあずかるとはどのような事でしょうか。What is to enter life?

7.18.3 マタイによる福音書 Matthew 18:10 - 14

1. 10 節では「小さな者」についてどのように書かれていますか。What is said about 'little ones'?

2. 一匹の迷い出た羊のたとえは、どのような目的のために挿入されていますか。Why is the parable of the wandering sheep inserted?

3. 1 節から 14 節で最も大切なことが言われている節を選ぶとするとあなたはどれを選びますか。If you are to select the most important verse, which verse do you select?

4. なぜ、へりくだることが大切なのでしょうか。Why we need to be humble to enter the kingdom of God?

7.18.4 マタイによる福音書 Matthew 18:15 - 20

1. ここでは、どのような問題について語られていますか。What is the problem dealt here?

2. まず、どのようにするように書かれていますか。What should we do first?

3.「兄弟を得る」とはどのようないみでしょうか。What does it mean to win a brother and a sister over?

4. 16 節には「聞き入れないとき」どのようにしなさいと書いてありますか。What should we do if they will not listen?

5. 17 節には「それでも聞き入れなければ」どのようにするように言っていますか。What should we do if they still refuse to listen?

6. 18 節はどのようなことを言っているのでしょうか。What does verse 18 mean?

7.「二人が地上で心を一つにして求める」とどのようなことが起こると言っていますか。What happens if two of the disciples on earth agree about anything they ask for?

8. イエスの名によって集まるところには、イエスもいるとはどのような事でしょうか。What does it mean that ‘’For where two or three gather in my name, there am I with them”?

9. ここのコンテクストで考えるなら、どんな「罪」が想定され、そしてどんな、ことをこころをあわせていのるのだろうか。From context what should we pray?

7.18.5 マタイによる福音書 Matthew 18:21 - 35

1. ペトロはイエスにどんな質問をしますか。What is the question of Peter to Jesus?

2. イエスは何と答えますか。What is Jesus’ response?

3. たとえについて考えてみましょう。イエスは何のたとえだと言っていますか。What does Jesus say about this parable?

4. たとえの前半部分 23-27 にはどのような事が言われていますか。Explain the first part vs22-27 of this parable.

5. たとえの中間部分 28-30 にはどのような事が言われていますか。Explain the second part vs28-30 of this parable.

6. たとえの最後の部分 31-34 にはどのような事が言われていますか。Explain the last part vs31-34 of this parable.

7. イエスは赦すことについてどんなことを告げていますか。What is the teaching of Jesus about forgiveness?

8. 18 章全体から考えると、赦しについてのこの箇所からどんなことが語られているのでしょうか。Considering the context in chapater 18, what is the message about forgiveness?

7.19　マタイによる福音書　第 19 章

7.19.1　マタイによる福音書 Matthew 19:1 - 12

1. イエスはどこに行き、なにをしますか。Where does Jesus go? What does he do?
2. だれが、どのような質問をイエスにしますか。Who asks Jesus a question? What is it?
3. イエスは、どのように答えられますか。What is Jesus' answer?
4. この人たちは、イエスの答えに対してどのような質問をしますか。What do these people respond to Jesus' answer?
5. イエスは離縁についてどのように言っていますか。What does Jesus say about divorce?
6. 弟子たちは、どのような質問をしますか。What do disciples ask Jesus?
7. イエスは、結婚しないことについて、どのように言っていますか。What does Jesus say those who choose to live like eunuchs?

7.19.2　マタイによる福音書 Matthew 19:13 - 15

1. 人々は何の目的で子どもたちを連れてきましたか。Why do the people bring little children to Jesus?
2. 弟子たちはどうしますか。How do the disciples respond to them?
3. イエスはどうしますか。How does Jesus respond?
4. 「天の国はこのような者たちのもの」とはどのような意味でしょうか。What does 'he kingdom of heaven belongs to such as these children'?

7.19.3　マタイによる福音書 Matthew 19:16 - 30

1. この人はイエスにどんな質問をしますか。What is the question of this man?
2. イエスはどのように答えますか。What is Jesus' answer?
3. どの掟かとの質問にイエスはどのように答えますか。How does Jesus reply when the man inquires "Which commandments?"
4. 20 節のこの人の言葉からどのようなことが分かりますか。What can you tell from this man's reply in verse 20?

5. イエスは 21 節でこの人にどのように答えますか。What does Jesus say to this man?
6. この人が持ち物を売り払い、貧しい人々に施すとどうなったと思いますか。What do you think happens if this man sells his possessions and gives to the poor?
7. この青年はどうしますか。What does this your man do?
8. イエスは弟子たちにどのように告げますか。What does Jesus tell his disciples?
9. 弟子たちは、なぜ驚くのでしょうか。Why are the disciples amazed?
10. イエスの 27 節の答えは、何を言っているのでしょうか。What does Jesus' reply in verse 27 mean?
11. 幼子と金持ちの青年はなにが違うのでしょうか。What is the difference between little children and this rich man?
12. イエスは何と答えますか。What is Jesus' reply?
13. 「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」とはどのような意味でしょうか。What does it mean ''many who are first will be last, and many who are last will be first."?

7.20 マタイによる福音書　第 20 章

7.20.1 マタイによる福音書 Matthew 20:1 - 16

1. この主人は、どんな目的のために何をしますか。What does this landowner do? Why?
2. 主人は、九時、十二時、三時にどのような事をしますか。What does this man do at 9 in the morning, 12 noon and 3 in the afternoon?
3. 五時頃に出会った人はなぜ働いていないのですか。Why is the man the landowner meet at 5 unemployed?
4. 主人はどのような順序で給与を払いますか。How does the landowner pay the wage to each worker?
5. 最初に雇われた人たちはなぜ不平を言うのでしょう。Why do the workers employed first complain?
6. 主人は、それにどのように応答していますか。What is the response of the landowner?
7. どのような事を教える譬えだと言っていますか。What is this parable for?
8. 弟子たちは、この譬えからなにを学んだでしょうか。What do you think Jesus' disciples learn from this parable?
9. あなたは、この主人について、どのようなことを思いますか。What do you think about this landowner?

10. 結局、16 節の「先の者」「後の者」はどのようなひとを指しているのでしょうか。Who are the last and who are the first in verse 16.

7.20.2 マタイによる福音書 Matthew 20:17 - 19

1. いつ、だれに、どのようにして、エルサレムでのことを話しますか。When, how and to whom does Jesus tell what happens in Jerusalem?
2. イエスはどのような事を告げますか。What does Jesus tell his disciples?

7.20.3 マタイによる福音書 Matthew 20:20 - 28

1. どのようときに、だれがイエスのもとに来ますか。Who comes to Jesus? What happens?
2. この人はなにを願いますか。What does this person ask Jesus?
3. イエスはどのように答えますか。What is Jesus' response?
4. イエスの杯を飲むとはどのようなことを意味しているでしょうか。What does it mean to drink Jesus' cup?
5. ほかの弟子はどのような反応をしますか。What do other disciples do?
6. 弟子たちは、どうすべきだと言っていますか。What should the disciples do?
7. イエスは何のために来たと言っていますか。What is the purpose of Jesus' life?
8. 身代金として命を捧げるとはどういうことでしょうか。What does it mean to dedicate his life for the ransom of many?

7.20.4 マタイによる福音書 Matthew 20:29 - 34

1. どこでなにが起きますか。What happens? Where does this happen?
2. マルコ、ルカの記事と比較して見ましょう。Compare this story with those in Mark and Luke.
3. なぜ、群衆は、この人たちを黙らせようとするのでしょうか。Why do the people stop these blind men?
4. イエスはどのような質問をし、この人たちはどう答えますか。What does Jesus ask them? What is the response of these men?
5. イエスはどうしますか。そして、この人たちはどうしますか。What does Jesus do? What do they do?
6. あなたは、なにかイエスに求めるものがありますか。Do you have anything to ask for Jesus?

7.21　マタイによる福音書　第 21 章

7.21.1　マタイによる福音書 Matthew 21:1 - 11

1. イエスはどこでどのような指示を弟子たちにしますか。What does Jesus instruct his disciples, and where?
2. イエスと村の人の間には事前に打ち合わせがあったのでしょうか、無かったのでしょうか。Do you think that Jesus had communication with the villagers in advance?
3. 5 節の引用は「王」についてイエスについて、どのような事を伝えていますか。What does the verse 5 describe about the King and Jesus?
4. イエスはどのようにしてエルサレムに入城しますか。How does Jesus enter Jerusalem? Describe it.
5. 群衆はどのようにし、そして叫びますか。How do the crowds do and what do they shout?
6. エルサレムの人たちに対して、群衆はどのようにイエスを紹介しますか。How do the crowds introduce Jesus to the people of Jerusalem?
7. イエス、弟子たち、イエスを出迎えた群衆、エルサレムの人たち、それに答えた群衆は、それぞれこのことをどのように捉えていたのでしょうか。How do they see this entry, Jesus, his disciples, the welcoming crowds, the people of Jerusalem, and the crowds responded?

7.21.2　マタイによる福音書 Matthew 21:12 - 17

1. イエスは境内でどのようなことをしますか。What does Jesus do in the temple?
2. イエスはどのように言いますか。What does Jesus say?
3. イエスは境内で次になにをしますか。What does Jesus do next in the temple?
4. 祭司長や律法学者たちは、何に腹を立てますか。What do the chief priests and the scribes get angry at?
5. なぜ腹を立てるのでしょうか。Why are they angry?
6. イエスは、どのように答えますか。How does Jesus respond?
7. イエスは神殿とはどのようなものだと伝えようとしているのでしょうか。What is Jesus' message about the temple of God?
8. イエスはどのあとどうしますか。What does he do after this?

7.21.3　マタイによる福音書 Matthew 21:18 - 22

1. これはいつどのようなときのできごとですか。When does this happen?
2. いちじくとはどのような木でしょうか。What is fig tree?
3. イエスは実のないいちじくの木に対してどのように言われますか。そしてどうなりますか。What does Jesus say to the fig tree without fruits? What happens to the fig tree?
4. 役に立たないものは滅ぼされるということでしょうか。Does this mean that useless will perish?
5. 弟子たちの質問にイエスはどのように答えますか。How does Jesus respond to the question of his disciples?
6. 山に『立ち上がって、海に飛び込め』といえば本当に、そのとおりになるのでしょうか。If we say to the mountain 'Be taken up and thrown into the sea,' will it really happen?
7. 「山」を動かすことが全く不可能に見えることを意味しているとすると、ここではどのようなことを意味してイエスは言われたと思いますか。If moving the mountain means something impossible, what do you think Jesus has in mind here?
8. イエスはここで何を教えているのでしょうか。What is the Jesus' teaching here?

7.21.4　マタイによる福音書 Matthew 21:23 - 27

1. どのようなときに、誰が、どのような質問をしますか。When and who ask Jesus, and what is the question?
2. イエスはどのように答えますか。How does Jesus respond?
3. これに対して、この人たちはどうしますか。How do they argue and respond?
4. イエスはなぜ答えないのでしょうか。Why does not Jesus answer?

7.21.5　マタイによる福音書 Matthew 21:28 - 32

1. このたとえは、どのような場で、誰に対して語られていますか。When and to whom is this parable spoken?
2. どのような話しですか。まとめてみましょう。What is the story?

3. イエスはたとえを話したあとどのような質問をしますか。そしてそれに、この人たちはどう答えますか。What is the question of Jesus to these people? What is their response?
4. イエスはこのたとえをつかってどのような説明をしますか。What message does Jesus relate to them using the parable?
5. イエスが伝えたかったメッセージは何なのでしょうか。What is the message Jesus wants to tell?

7.21.6 マタイによる福音書 Matthew 21:33 - 46

1. どのような人たちとのやりとりの後にこのたとえが語られますか。What are the topics of the preceding dialogues and who are the people discussing?
2. たとえの登場人物をあげてみましょう。List who are in the parable.
3. 主人はどのようなことをしていますか。What does the lord do?
4. 農夫たちはどうしますか。What do the farmers do?
5. たとえの最後にイエスはどのような質問を投げかけますか。そしてこの人たちはどう答えますか。What does Jesus ask at the end of the parable? What is their answer?
6. イエスは聖書を引用してどのようなことを伝えますか。What is the message of Jesus by a quotation of the Bible?
7. この人たちはどうしますか。What is their response?
8. イエスはこのたとえで、何を伝えているのでしょうか。What are the messages of Jesus?

7.22 マタイによる福音書　第 22 章

7.22.1 マタイによる福音書 Matthew 22:1 - 14

1. このたとえは、いつ、どのようなときに、だれに対して話されましたか。When and to whom does Jesus speak of this parable?
2. 前半（2 節から 7 節）ではどのようなことが語られていますか。Describe the first half (vs 2-7) of the story?
3. いままでのたとえから考えるとたとえの登場人物はそれぞれどのような人たちを表しているのでしょうか。Based on the previous parables, who are the corresponding people in this parable?
4. 婚宴に来ようとしない人々にこの王はまずどうしますか。What does the king do to those who are not willing to come?

5. 招かれた人たちは、どのような理由から、婚宴に出席しないのでしょうか。Why don't they come to the banquet?
6. 王はなぜこの人たちを滅ぼしてしまうのでしょうか。Why does the King murder them?
7. 王はそれからどのような人を招きますか。The who does the King invite?
8. 婚礼の礼服を着ていない人とはどのような人のことを言っているのでしょうか。Who are those without wedding clothes?
9. ぶどう園の農夫のたとえと似ていますが、どのような事が同じで、どのような新しいことが加わっていますか。Compare with the parable of tenants. What are the differences?
10. イエスは、このたとえで、聞いている人たちに、何を伝えようとしているのでしょうか。What is the message of Jesus to each of them there?

7.22.2 マタイによる福音書 Matthew 22:15 - 22

1. 誰がどのような計略を企てますか。Who plot against Jesus, and what?
2. 彼らの弟子たちがヘロデ党の人々と一緒に行ったのは何故でしょうか。Why do their disciples go along with the Herodians?
3. どのような質問をしますか。What is their question?
4. この人たちはどのような答えを期待していたのでしょうか。What answer do they expect from Jesus?
5. イエスはどうしますか。How does Jesus respond to them?
6. 最後にイエスはどのように答えますか。What is Jesus' answer to their question?
7. イエスの答えからすると、イエスは最初のこの人たちの質問に対してはどのように言っているのでしょうか。From Jesus' response, what is his answer to their question?
8. 神のものを神に返すとはどのような意味でしょうか。What does it mean to give back to God what is God's?
9. 彼らの反応はどのようなものでしたか。What is their response?

7.22.3 マタイによる福音書 Matthew 22:23 - 33

1. いつ、どのような人が、イエスに質問をしますか。When and who ask Jesus a question?
2. どのようなモーセのことばに言及していますか。What do they quote from Moses?

3. この人たちの質問はどのようなものですか。What is their question?
4. この人たちはなぜこのような質問をするのですか。Why do they ask this question?
5. イエスはどのように答えますか。What is Jesus' response?
6. イエスは旧約聖書からの引用でなにを伝えようとしているのでしょうか。What does Jesus tell them by quoting from the Bible?
7. イエスの「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」は何を伝えているのでしょうか。What does Jesus want to communicate with them by saying ''He is not the God of the dead but of the living"?
8. 人々の反応はどのようなものでしたか。そしてそれはなぜでしょう。What is the result?

7.22.4 マタイによる福音書 Matthew 22:34 - 40

1. ファリサイ派の人たちは、どのような目的で集まったのでしょうか。Why do the Pharisees get together?
2. そのうちのひとりは、イエスにどんな質問をしますか。What is the question of an expert in the law among them?
3. マルコ 12:28-34 と比較して見ましょう。どのような違いがありますか。Compare with Mark 12:28-34. What are the differences?
4. イエスはどのように答えますか。What does Jesus respond?
5. なぜ最も重要な戒めは一つではなく二つなのでしょうか。なぜ二つとも必要なのでしょうか。Why are there two greatest commandments and not one? Why do we need both?
6. 他に重要な戒めについての問答を知っていますか。Do you know any other discussion on the greatest commandments?
7. 「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」とはどのような意味でしょうか。What does ''All the Law and the Prophets hang on these two commandments." mean?

7.22.5 マタイによる福音書 Matthew 22:41 - 46

1. 聴衆はどのような人たちですか。Who are the audience?
2. イエスはどのような質問をし、彼らはどう答えますか。What is Jesus's question and what is their answer?
3. イエスはどのように答えますか。How does Jesus respond?

4. イエスは何を伝えたかったのでしょうか。What does Jesus want to teach them?

5. 結果としてどうなりましたか。What is the result?

7.23 マタイによる福音書　第 23 章

7.23.1 マタイによる福音書 Matthew 23:1 - 12

1. 聴衆はどのような人たちですか。Who is the audience?

2.「モーセの座についている」とはどのような意味でしょうか。What does ‘’sit in Moses’ seat’ ’ mean?

3.「彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで、実行しないからである。」とはどういうことでしょうか。何を行い、何を実行していないのでしょうか。What does ‘’You must be careful to do everything they tell you. But do not do what they do, for they do not practice what they preach.” mean? What do they do and what don’t they do?

4. 4 節ではどのようなことを批判しているのでしょうか。What does Jesus point out in verse 4?

5. 5 節から 7 節ではどのような批判をしていますか。What does Jesus point out in verses 5 to 7?

6. 8 節から 10 節でイエスは何を伝えようとしているのでしょうか。What is the Jesus’ message in verses 8 to 10?

7. なぜ仕えることがたいせつなのでしょうか。Why will the greatest be a servant?

8. この箇所で、イエスはどのような生き方に対して警告し、どのような生き方を指し示しているのでしょうか。What does Jesus critices here? How should we live?

7.23.2 マタイによる福音書 Matthew 23:13 - 33

1. これらは誰に対して嘆いていますか。To whom is Jesus giving words of warnings?

2. どのような事を嘆いていますか。いくつかに分けることができますか。What is Jesus warning these people about? Can you classify them?

3.「自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない。」とは実際にどのようなことをしていたのでしょうか。What does ‘’You yourselves do not enter, nor will you let those enter who are trying to.” mean? What are they doing?

4.「ものの見えない者たち」（口語・新改訳：盲目な案内者たち）は、何が見えていないのでしょうか。What can’t these people see?

5. 内側のことが言われていますが、なにを指摘しているのでしょうか。What does Jesus point out by cleaning inside?

6.「預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったり」するのは良くないことなのでしょうか。Is it not good to ''build tombs for the prophets and decorate the graves of the righteous"?

7. どうしたら「地獄の罰を免れること」ができるのでしょうか。How is it possible to ''escape being condemned to hell"?

8. 偽善とは何でしょうか。What do you think is hypocrisy?

7.23.3 マタイによる福音書 Matthew 23:32 - 39

1. 32 節の「32: 先祖が始めた悪事の仕上げをしたらどうだ。（口語 (v32)：あなたがたもまた先祖たちがした悪の枡目を満たすがよい。）」とはどのような意味でしょうか。What does verse 32 ''Go ahead, then, and complete what your ancestors started!" mean?

2. 前の文章とはどのようにつながっていますか。「だから」とはどういうことですか。How is the verse 34 related to 32-33 by the word 'therefore'?

3. 34 節ではどんなことが起こると言われていますか。According to verse 34, what will happen?

4. アベルの血からゼカルヤの血とはどのようなものでしょうか。What does 'the blood of righteous Abel and Zecharia'?

5.「これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちにふりかかってくる」とはどういう意味でしょうか。What does verse 36 'all this will come on this generation' mean?

6. エルサレムについてどんなことを嘆いていますか。What does Jesus say about Jerusalem in verse 37?

7.「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。」はどんなことを言っていますか。What does 'a hen gathers her chicks under her wings' mean?

8.「お前たちの家」は何のことでしょうか。What does 'your house' mean?

9. これでおしまいなのでしょうか。Is there no hope?

7.24 マタイによる福音書　第 24 章

7.24.1 マタイによる福音書 Matthew 24:1 - 2

1. 弟子は、なぜ、神殿の建物を指さしたのでしょうか。Why do you think Jesus' disciples called his attention to the buildings of the temple.

2. イエスは神殿について何と言っていますか。What does Jesus prophesy against the temple?

3. イエスはなにを伝えようとしているのでしょうか。What is the message of Jesus?

7.24.2 マタイによる福音書 Matthew 24:3 - 14

1. どのような状況で、だれが質問をしますか。When does it happen? Who ask a question?

2. どんな質問をしますか。What is the question?

3. イエスはまずどのように注意しますか。What is Jesus' response?

4. 「産みの苦しみの始まり」としてどのようなことが起こると言っていますか。As ''the beginning of the birth pains" what would happen?

5. 弟子たちに対してはどのようなことが起こると言われていますか。What happens to the dsciples?

6. 偽預言者とはどのような人でしょうか。Who are false prophets?

7. なぜ愛が冷えるのでしょうか。Why would the love of most grow cold?

8. 堪え忍ぶとは、どのようなことでしょうか。What does 'stand firm' mean?

9. 「御国のこの福音が証として宣べ伝えられる」とはどのような意味でしょうか。What does 'this gospel of the kingdom will be preached as a testimony' mean?

10. なぜ福音が全世界に宣べ伝えられまで、終わりは来ないのでしょうか。Why do the people have to wait until the gospel of the kingdom will be preached in the whole world?

7.24.3 マタイによる福音書 Matthew 24:15 - 28

1. 「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら」は具体的な事件を指しているのでしょうか。Does ''standing in the holy place 'the abomination that causes desolation"' indicate a specific historical incidence?

2. これが 70 年のエルサレムの破壊を意味しているとすると、何を教えようとしているのでしょうか。If this relates to the destruction of Jerusalem in 70, what is the message Jesus wants to tell?

3. エルサレムの破壊以降の人には、どのような意味があるのでしょうか。What is the message to the people after the destruction of Jerusalem?

4. どのような備えが必要なのでしょうか。How should we prepare for the end?

5. 人の子はどのように来ると言っていますか。How will the coming of the Son of Man occur?

7.24.4　マタイによる福音書 Matthew 24:29 - 31

1. 人の子が現れる徴としてどのようなことが起こると言われていますか。What will come about as the sign of the Son of Man?
2. 人の子が来ることは、人々にとって悲しい事なのでしょうか。Why do the people of the earth mourn when they see the Son of Man coming?
3. 31 節では、人の子が来るときに起こることについてどのように述べていますか。In verse 31, how is the coming of the Son of Man described?
4. 弟子たちの問いに関するイエスの答えは、どのようなものだったのでしょうか。What is the answer to the question of the disciples in verse 3?

7.24.5　マタイによる福音書 Matthew 24:32 - 35

1. いちじくの木から学ぶべきことは何ですか。What lesson do we learn from the fig tree?
2. 33,34 節の「これらのこと」とは何を指しているのでしょうか。What are ‘all these things’ in verses 33 and 34?
3. 「天地が滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」とはどのような意味でしょうか。What does ‘my words will never pass away’ mean when heaven and earth passes away?

7.24.6　マタイによる福音書 Matthew 24:36 - 44

1. 「その日、その時」とはどんな時のことですか。What is ‘that day or hour’?
2. 32 節,33 節では「その時」が分かると言っているのではないでしょうか。Why cannot we tell that day, when we know that he is at the door? See verses 32, 33.
3. 「ノアの時と同じ」とありますが、どのように同じなのでしょうか。In what point, it is in the days of Noah?
4. ノアの時代の人たちは何を知らされており、何を理解していなかったのでしょうか。What do the people know in the days of Noah, and what do they not understand?
5. 目を覚ましているとか、用意しているとはどのようなことを言っているのでしょうか。What does it mean to ‘keep watch’ or ‘be ready’?

7.24.7　マタイによる福音書 Matthew 24:45 - 51

1.「忠実で賢い僕」とはどのような人だと言っていますか。Who is the faithful and wise servant?

2. この僕はどのようにされると言ってますか。What is his reward?

3.「悪い僕」についてはどのようなことが書かれていますか。

4.「偽善者たちと同じ目に遭わせる」とはどのようなことを言っているのでしょうか。What does 'he will cut him to pieces and assign him a place with the hypocrites' mean?

5. 私たちの生き方・備えについて言っているとすると、どのようなことをイエスは教えているのでしょうか。What is the message of Jesus to us?

7.25　マタイによる福音書　第 25 章

7.25.1　マタイによる福音書 Matthew 25:1 - 13

1. 最初に「そこで」とありますが、どのような話の中でこのたとえが語られていますか。When is this parable given?

2. 天の国はどのようにたとえられていますか。What is the king of heaven like?

3. たとえのストーリを説明してください。Explain the story of the parable.

4. 賢いおとめたちと、愚かなおとめたちの違いはなんですか。What is the difference between the wise and the foolish?

5. 花婿は誰のことでしょうか。Who is the bridegroom?

6. 油とはいったい何なのでしょうか。What is oil in this parable?

7. イエスはなにを伝えようとしているのでしょうか。What is message of this parable?

7.25.2　マタイによる福音書 Matthew 25:14 - 30

1. 天の国はどのようにたとえられていますか。What is the king of heaven like?

2. 五タラントン、二タラントン、一タラントン与えられた僕はそれぞれどうしますか。What does the one who receives five talents, two talents, and one talent?

3. 主人は、五タラントン、二タラントン預かったものに、それぞれにどのように対応しますか。How does the Lord respond to servants who are entrusted five and two talents?

4. 一タラントン預かった僕と他の僕は何が違っていたのでしょうか。What is the difference between the servants received 5 and 2 talents, and the one received one talent?
5. 主人は、最後にどのようにこの僕にしますか。How does the Lord deal with this person?
6. ルカ 19 章のムナ（ミナ）のたとえと比較してみましょう。Compare this parable with the parable of Ten Minas in Luke 19.
7. タラントンとは何なのでしょうか。What is the talent?
8. イエスはなにを伝えようとしているのでしょうか。What is message of this parable?

7.25.3 マタイによる福音書 Matthew 25:31 - 46

1. どのような時のことを語っていますか。When is it?
2. だれがどのようにしますか。Who does what?
3. 王は、右側にいるひとたちにどのように告げ、その人達はどのように答えますか。What does the king tell the people on the right? What do they respond?
4. 王は、左側にいるひとたちにどのように告げ、その人達はどのように答えますか。What does the king tell the people on the left? What do they respond?
5. 「飢えていたとき」「のどが渇いていたとき」「旅をしていたとき」「裸のとき」「病気のとき」「牢にいたとき」でなにを表しているのでしょうか。What do ‘hungry’, ‘thirsty’, ‘being a stranger’, ‘needed clothes’, ‘sick’, ‘in prison’ represent?
6. 「わたしの兄弟であるこの最も小さいものの一人」とはどのような人のことを言っているのでしょうか。Who is the one of the least of these brothers and sisters of mine?
7. 羊と山羊を分けるかぎとなることは何ですか。What is key to separate the sheep from the goats?
8. イエスはなにを伝えようとしているのでしょうか。What is message of this parable?

7.25.4 マタイによる福音書 25 章（Part II）

1. 最初のたとえで言われている「賢さ」とはどのようなものなのでしょうか。
2. 二つめのたとえで言われている「忠実さ」とはどのようなものなのでしょうか。
3. 三番目の話しでは、どのような生き方が問われているのでしょうか。
4. イエスが最後の三つのメッセージで伝えてたかったのは何なのでしょうか。

5. キリストが世の終わりにもう一度来られることがなければ、ここで語られていることは意味がないのでしょうか。

7.26 マタイによる福音書　第 26 章

7.26.1 マタイによる福音書 Matthew 26:1 - 5

1. イエスは、弟子たちに、どのような時に、どのようなことを伝えますか。When and what does Jesus tell his disciples?
2. 同じ頃、祭司長たちや、民の長老たちは、どのようなことを話しますか。About the same time, what do the chief priests and the elders of the people discuss?
3. なぜ、祭りの間は避けようとするのでしょうか。Why don't they avoid doing it during the festival?

7.26.2 マタイによる福音書 Matthew 26:6 - 13

1. いつ、どこで、どのようなことが起きますか。What does it happen? When and where is it?
2. 他の福音書の記事と比較してみましょう。Compare this with the story in other gospels?
3. 女性はなぜ油を注いだのでしょうか。Why does this woman pours very expensive perfume on Jesus's head?
4. 女性の行為に対して、だれがどのようなことを言いますか。Who say what against this woman?
5. イエスはなんと言われますか。What does Jesus tell them?
6. 13 節にあるように、なぜそれほどまでに、この女の行為は記念として語り伝えられると言っているのでしょうか。Why will this woman's action to be told?
7. わたしたちには、どのような価値判断が必要なのでしょうか。What is valuable to us?

7.26.3 マタイによる福音書 Matthew 26:14 - 16

1. ユダはどのような時に、どのようなことをしますか。When and what does Judas do?
2. ユダの動機は何だったのでしょうか。What makes Judas to betray Jesus?
3. ユダはお金をもらってから、どうしますか。What does Judas do after he received money.

7.26.4　マタイによる福音書 Matthew 26:17 - 25

1. 弟子たちは、どのような質問をイエスにしますか。What do the disciples ask Jesus?
2. イエスはそれにどのように答えますか。What is Jesus' response?
3. 食事の席でイエスはなんと言いますか。What does Jesus say at the table?
4. 弟子たちの反応はどのようなものでしたか。What do the disciples react?
5. イエスはどのように答えますか。What does Jesus say?
6. 「生まれなかった方がよかった」と言うような人生があるのでしょうか。What does it mean to say ''it would be better for hime if he had not been born?"
7. ユダとイエスの間のどのような会話が記録されていますか。What does Jesus tell Judas?

7.26.5　マタイによる福音書 Matthew 26:26 - 30

1. イエスは食事のときパンをどのようにして配りますか。How does Jesus give bread to his disciples?
2. 杯はどのようにして渡しますか。How does Jesus give a cup?
3. 「契約の血」とありますが、どのような契約なのでしょうか。What does the blood of covenant mean?
4. 29 節は何を伝えているのでしょうか。What does verse 29 mean?
5. それからどうしますか。What do they do?

7.26.6　マタイによる福音書 Matthew 26:31 - 35

イエスは弟子たちにどのような二つのことを告げますか。What are the two messages Jesus tells his disciples?

1. ペトロはどのように言いますか。What does Peter say?
2. イエスはペトロにどのように答えますか。What does Jesus say?
3. これに対して、ペトロはどのように言いますか。What does Peter say to Jesus?

7.26.7　マタイによる福音書 Matthew 26:36 - 46

1. いつ誰がゲッセマネに行きますか。When and who go to Gethsemane?

2. マルコ、ルカと比較して見ましょう。Compare with Mark and Luke.
3. イエスは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネにどのように言いますか。What does Jesus tell Peter, James and John?
4. イエスはどのように祈りますか。How does Jesus pray?
5. イエスは何に苦しみ、何を信じ、何を願っていたのでしょうか。What does Jesus want, believe and pray?
6. イエスが祈っている間、弟子たちはどうしていますか。What are his disciples doing while Jesus is praying?
7. イエスは、三度目に戻ってきて、弟子たちにどう伝えますか。What does Jesus tell as he returns the third time?
8. あなたは、イエスの祈りから何を学びますか。What do you learn from Jesus' prayer?

7.26.8 マタイによる福音書 Matthew 26:47 - 56

1. どのような状況でこの場面が始まりますか。When does this happen?
2. どのような人たちがどのようにして現れますか。Who come to Jesus and how is it described?
3. 他の福音書の記事と比較して見ましょう。Compare with other gospels.
4. ユダはどのようにイエスに近づきますか。How does Judas come to Jesus?
5. イエスはどのように答えますか。How does Jesus reply?
6. 人々がイエスを捕らえようとするときどのようなことが起きますか。What happens when the people are trying to arrest Jesus?
7. イエスは剣で立ち向かったひとにどのように告げていますか。What does Jesus tell the one who fights with a sword?
8. イエスは、群衆にはどのように言われますか。What does Jesus tell the people?
9. 弟子たちはどうしますか。What do the disciples do?
10. イエスはなぜ、自分の身を任せたのでしょうか。Why does Jesus give himself to the people?
11. イエスは何を願っていたでしょうか。What does Jesus wish as he is arrested?

7.26.9 マタイによる福音書 Matthew 26:57 - 68

1. イエスはどこに連れて行かれますか。そこには誰がいますか。After arrested, where do the people take Jesus?
2. だれが付いていきますか。Who follows after the people?
3. 他の福音書の記事と比較して見ましょう。Compare with other gospels.
4. 最高法院ではどのようなことをしていますか。What are the high priests and the Sanhedrin trying to do?
5. イエスは「神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てることができる」と言っていたというのは真実ですか。Is it true that Jesus told that he is able to destroy the temple of God and rebuild it in three days?
6. イエスはなぜ黙っていたのでしょうか。Why does Jesus remain silent?
7. 大祭司はどのように質問しますか。What is the question of the high priest?
8. イエスはどのように答えますか。How does Jesus reply?
9. なぜイエスのことばが神を冒涜することなのでしょうか。Why is what Jesus said blasphemy?
10. イエスはどのようにされますか。Why happens to Jesus?

7.26.10 マタイによる福音書 Matthew 26:69 - 75

1. このことはいつ起こりますか。When does this happen?
2. ペテロはどこにいますか。Where is Peter?
3. 他の福音書の記事と比較して見ましょう。Compare with other gospels.
4. 最初（69 節）では、ペテロに誰がどのように言いますか。ペテロはどう答えますか。In verses 69 and 70, what happens?
5. 次（71 節）に、誰がどのように言いますか。ペテロはどう答えいますか。In verses 71 and 72, what happens?
6. 三度目（73 節）には、誰がどのように言いますか。ペテロはどう答えますか。In verses 73 and 74, what happens?
7. 鶏が鳴いたとき、ペテロはどうしますか。What happened to Peter when a rooster crowed?

8. ペテロはなぜイエスを知らないと言ってしまったのでしょうか。Why does Peter disown Jesus?

9. ペテロはなにを学んだでしょうか。What do you think Peter learned?

7.27 マタイによる福音書 第 27 章

7.27.1 マタイによる福音書 Matthew 27:1 - 2

1. 夜が明けるとどのようなことが起こりますか。What happens early in the morning?

7.27.2 マタイによる福音書 Matthew 27:3 - 10

1. イエスが有罪となったことを知ったユダはどうしますか。When Judas saw that Jesus was condemned, what did he do?

2. ユダはイエスが有罪になると考えなかったのでしょうか。

3. ユダはどうしますか。What does Judas do?

4. ペテロの裏切りを比較して見ましょう。Compare with Peter's betrayal.

5. 祭司長たちは、お金をどうしますか。What do the people do with the money?

6. 聖書はこの血はだれの血だといっていますか。Whose blood is it?

7.27.3 マタイによる福音書 Matthew 27:11 - 14

1. イエスは誰の前に立っていますか。その人はどのような人ですか。なぜその人の前に連れてこられたのでしょう。Before whom does Jesus stand? What do we know about him? Why is Jesus brought before him?

2. その人は何を問い、イエスはどのように答えますか。What does he ask? What does Jesus reply?

3. 他の福音書と比較して見ましょう。What do other gospels tell us?

4. 告訴理由は何だったのでしょうか。What do they accuse against Jesus?

5. イエスはなぜ、祭司長や長老たちの訴えになにも答えないのでしょうか。Why does not Jesus give answer when Jesus is accused by the chief priests and the elders?

7.27.4　マタイによる福音書 Matthew 27:15 - 26

1. バラバはどのような人として登場しますか。Who is Barabas?
2. ピラトはイエスをどのように考えていますか。What does Pilate think of Jesus?
3. ピラトはなぜ「人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと」考えたのでしょう。Why does Pilate think, it was out of self-interest that they had handed Jesus over to him?
4. 群衆は、ピラトの言葉に、どのように応答しますか。それは何故ですか。What is the response of the crowd? Why?
5. なぜピラトは、十字架につける決断をするのでしょうか。Why does Pilate decide to crucify Jesus?
6. イエスはなぜ、十字架にかかることになったのでしょうか。Why is Jesus sentenced to be crucified?

7.27.5　マタイによる福音書 Matthew 27:27 - 31

1. イエスはだれにどこに連れて行かれますか。Who take Jesus to where?
2. 兵士たちは、イエスをどのように扱いますか。How do the soldiers treat Jesus?
3. このひとたちが、侮辱しようとしているのは、何なのでしょうか。What do they try to mock?

7.27.6　マタイによる福音書 Matthew 27:32 - 44

1. 十字架はだれが担ぐことになりますか。Who take up the cross?
2. 他の福音書の記事と比較して見ましょう。Compare with other gospels?
3. どこで、どのように、十字架につけられますか。Where do they crucify Jesus? And how?
4. イエスの罪状書きは何でしたか。What is Jesus' charge written at the cross?
5. イエスと一緒にはどのような人が十字架に架けられますか。Who are crucified with Jesus?
6. 人々はそれぞれどのようにイエスをののしりますか。What do the people say to Jesus?
7. なぜ人々はののしったり、侮辱したりするのでしょうか。Why do they insult and mock Jesus?
8. 聖書記者は何を伝えようとしているのでしょうか。What do the Bible writers tell us?

7.27.7 マタイによる福音書 Matthew 27:45 - 56

1. イエスの死はだれが目撃しますか。Who see the death of Jesus?
2. どのようなことが起こりますか。What happens?
3. イエスは、何時頃十字架に架けられ、何時頃息を引き取るのでしょうか。About what time is Jesus crucified and what time does he gives up his spirit?
4. イエスは何と叫びますか。What does Jesus cry out?
5. 人々は、どのような叫びと考えましたか。それは、なぜでしょう。What do the people think of this cry?
6. 神はなぜイエスに答えないのでしょう。Why does not God respond to Jesus?
7. イエスの最後はどのようなものでしたか。How does Jesus breathe his last?
8. どのようなことが起こったと書かれていますか。What does it happen at the death of Jesus?
9. ひとびとは、イエスの死に際してどのように告白しますか。What do the people say at Jesus' death?
10. マタイはイエスの死をとおして何を伝えようとしていますか。What does Matthew tell us about Jesus' death?

7.27.8 マタイによる福音書 Matthew 27:57 - 61

1. イエスの遺体をひきとったヨセフはどんな人ですか。Who is Joseph who takes Jesus' body?
2. 遺体をひきとるにはどのようなことが必要だったと思いますか。What do you think is required to take Jesus' body?
3. 他の福音書にはどのようなことが書かれていますか。What do other gospels tell us?
4. この日はどのような日でしたか。What does this happen?
5. ヨセフはイエスの遺体をどうしますか。What does Joseph do to Jesus' body?
6. だれが目撃していますか。Who are watching this?
7. マタイはなにを伝えようとしているのでしょうか。What does Matthew tell us?

7.27.9 マタイによる福音書 Matthew 27:62 - 66

1. いつ誰がどこに集まりますか。When and who gather together, and where?

2. 何を願い出ますか。それは何故ですか。What are their request?

3. 墓はどのような状態になっていますか。Describe the tomb.

4. マタイはなぜこのことを記したのでしょうか。Why does Matthew record this?

7.28 マタイによる福音書　第 28 章

7.28.1 マタイによる福音書 Matthew 28:1 - 10

1. いつ誰が墓を見に行きますか。When and who go to the tomb?

2. どんなことがおきますか。What happens?

3. 婦人たちはどうしますか。What do they do?

4. なにが起こりますか。What happens?

5. マタイは復活についてなにを伝えていますか。What does Matthew tell about Jesus' resurrection?

6. 他の聖書の箇所で復活について調べてみましょう。What does other gospels tell about Jesus' resurrection?

7. 復活は、弟子たちにとって、婦人たちにとってどのようなことだったのでしょうか。What does resurrection mean to the disciples and these women?

7.28.2 マタイによる福音書 Matthew 28:11 - 15

1. 番兵たちはどうしますか。What do the guards do?

2. 祭司長たちは、どうしますか。What do the chief priests do?

3. 結果はどうなったと書いてありますか。What is the result?

7.28.3 マタイによる福音書 Matthew 28:16 - 20

1. だれがいつどこへ行きますか。それはなぜですか。Who go to where? When is it, and why?

2. イエスに会ったときの様子はどのように描かれていますか。How do they meet Jesus?

3. イエスはどのようなことを告げますか。What does Jesus tell them?

4. 「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。」とはどういうことを言っているのでしょうか。What does ''All authority in heaven and on earth has been given to me." mean?

5. イエスの弟子にするとはどういう意味でしょうか。What does making disciples of all nations mean?
6. イエスは最後にどのような約束で締めくくっていますか。What is the promise Jesus makes at the end?
7. 他の福音書では、どのようなことを、弟子たちに託していますか。What is the last commission of Jesus to his disciples in other gospels.
8. マタイが伝えたかったことは、何なのでしょうか。What is the message Matthew wanted to tell us?
9. あなたは、マタイによる福音書からなにを学びましたか。What did you learn from Matthew?
10. 聖書を少しずつ共に読む経験は、あなたにとって、どのようなものでしたか。What does reading the Bible little by little with others mean to you?

第 8 章

ヨハネ（2015-2018）

質問票：ディスカッション・クエスチョン（PDF）

8.1 ヨハネ第 1 章

8.1.1 ヨハネによる福音書 John 1:1-5

> 1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。 2 この言は初めに神と共にあった。3 すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。 4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

- 21 章 20 - 24 節から著者についてどんなことがわかりますか。What can you say about the author from 21:20 - 24?
- 20 章 31 節には、この書の目的は何だと書いてありますか。What does it say about the purpose of this book in 20:31?
- ヨハネによる福音書はどのようにはじまりますか。How does Gospel according to John begin?
- 「言（ことば）」について（5 節までに）書かれていることを列挙してみましょう。List what is written about the Word (in verses 1 - 5).
- 「言」とは誰のことでしょうか。Who is the Word?
- 「初め」とはいつのことでしょうか。When is ‘the beginning’?
- 「神と共にある」とはどういうことでしょうか。What does ‘with God’ mean?
- 「ことばは神であった」とはどういうことでしょうか。What does ‘the Word was God’ mean?

- 「ことばによって成った」とはどういうことでしょうか。What does ‘through the Word all things were made’ mean?
- 「光」について書かれていることを列挙してみましょう。List what is written about the light.

8.1.2 ヨハネによる福音書 John 1:6-18

6 ここにひとりの人があって、神からつかわされていた。その名をヨハネと言った。 7 この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである。8 彼は光ではなく、ただ、光についてあかしをするためにきたのである。 9 すべての人を照すまことの光があって、世にきた。10 彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。 11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。 12 しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。13 それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。15 ヨハネは彼についてあかしをし、叫んで言った、「『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである」。16 わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた。17 律法はモーセをとおして与えられ、めぐみとまこととは、イエス・キリストをとおしてきたのである。 18 神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである。

- 6 節から 9 節で、ヨハネはどのような人だと言っていますか。What is said about John in verses 6 - 9?
- バプテスマのヨハネとはどのような人でしょうか。聖書の他の箇所から見てみましょう。What is written about John the Baptist?
- 10 節から 14 節には言についてどのように書かれていますか。What does it say about the Word in verses 10 - 14?
- 「神の子となる資格」とはどのようなものでしょうか。‘What is the right’ to become children of God?
- 「ことばが肉となる」とはどのようなことを表現しているのでしょうか。What does ‘the Word became flesh’ means?
- 神のひとり子としての栄光をみたとは、どのような意味でしょうか。What does it mean to see the glory of the Son of God?
- 「わたしたち」はどのようなことを経験したと言っていますか。What did ‘we’ experience?
- 15 節から 18 節で、イエス・キリストについて何を伝えようとしていますか。What do these verses tell about Jesus Christ in verses 15 - 18?

- どの節が印象に残りましたか。Which verse is impressive to you?

8.1.3 ヨハネによる福音書 John 1:19-28

19 さて、ユダヤ人たちが、エルサレムから祭司たちやレビ人たちをヨハネのもとにつかわして、「あなたはどなたですか」と問わせたが、その時ヨハネが立てたあかしは、こうであった。 20 すなわち、彼は告白して否まず、「わたしはキリストではない」と告白した。 21 そこで、彼らは問うた、「それでは、どなたなのですか、あなたはエリヤですか」。彼は「いや、そうではない」と言った。「では、あの預言者ですか」。彼は「いいえ」と答えた。 22 そこで、彼らは言った、「あなたはどなたですか。わたしたちをつかわした人々に、答えを持って行けるようにしていただきたい。あなた自身をだれだと考えるのですか」。 23 彼は言った、「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばわる者の声』である」。 24 つかわされた人たちは、パリサイ人であった。 25 彼らはヨハネに問うて言った、「では、あなたがキリストでもエリヤでもまたあの預言者でもないのなら、なぜバプテスマを授けるのですか」。 26 ヨハネは彼らに答えて言った、「わたしは水でバプテスマを授けるが、あなたがたの知らないかたが、あなたがたの中に立っておられる。27 それがわたしのあとにおいでになる方であって、わたしはその人のくつのひもを解く値うちもない」。 28 これらのことは、ヨハネがバプテスマを授けていたヨルダンの向こうのベタニヤであったのである。

- どのような人たちが、どこで、ヨハネに質問しますか。Who ask John questions?　Where?
- どのような質問をしますか。What is their question?
- ヨハネはどのように答えますか。What is John's answer?
- メシア、エリヤ、あの預言者とはそれぞれどのような人たちですか。Who are Messaiah, Elijah, and the Prophet?
- この人たちは何を知りたいのでしょうか。そしてそれは何故でしょうか。What do they truly want to know, and why?
- ヨハネは結局自分をどのような者だと証言していますか。ヨハネは何を伝えたいのでしょう。Who does John claim is he? What does he want to tell the people?
- ファリサイ派の人たちとはどのような人たちですか。Who are the Pharisees?
- 洗礼についての質問は何を聞いているのでしょうか。What is the question about baptism?
- ヨハネはどのように答えますか。What is John's answer?
- 今日の箇所で、ヨハネはどのように「自分が光ではないこと」を証言し「光について」証ししていますか。How does John testify in vs 19-28 that he himself is not the light and he comes only as a witness to the light? (Cf. 1:8)

- 他の福音書の記述と比較して見ましょう。Compare these verses in John with other gospels.

8.1.4 ヨハネによる福音書 John 1:29 - 34

29 その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。
30 『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからで
ある』とわたしが言ったのは、この人のことである。31 わたしはこのかたを知らなかった。しかし、この
かたがイスラエルに現れてくださるそのことのために、わたしはきて、水でバプテスマを授けているので
ある」。 32 ヨハネはまたあかしをして言った、「わたしは、御霊がはとのように天から下って、彼の上に
とどまるのを見た。 33 わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わ
たしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを
見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。 34 わたしはそれを見たので、こ
のかたこそ神の子であると、あかしをしたのである」。

- いつのことが記されていますか。When is it?
- 他の福音書の記述を見てみましょう。Read other gospels.
- ヨハネは、イエスについてどのように証言していますか。What does John testify about Jesus?
- ヨハネはどのような意味で「神の小羊」と呼んだのでしょうか。Why does John call Jesus the Lamb of God?
- 15 節と 30 節はどのような関係になっていますか。What is the relation between verse 15 and verse 30?
- 31 節では、ヨハネはどのように言っていますか。What does John tell in verse 31?
- ヨハネはイエスがそれまで証言していた方だとどうしてわかったのですか。How does John tell that Jesus is the one he testifies?
- 聖霊によって洗礼を授けるとはどのような意味でしょうか。What does baptizing with the Holy Sprit mean?
- なぜヨハネは「神の子」であると証ししているのでしょうか。Why does John testify that he is the Son of God, or God's Chosen One?
- この箇所から、ヨハネについて、そしてイエスについてどんなことが分かりますか。What can you tell from these verses about John and Jesus?

8.1.5 ヨハネによる福音書 John 1:35 - 42

35 その翌日、ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていたが、36 イエスが歩いておられるのに目
をとめて言った、「見よ、神の小羊」。37 そのふたりの弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いて、イエスにつ
いて行った。 38 イエスはふり向き、彼らがついてくるのを見て言われた、「何か願いがあるのか」。彼ら
は言った、「ラビ（訳して言えば、先生）どこにおとまりなのですか」。39 イエスは彼らに言われた、「き
てごらんなさい。そうしたらわかるだろう」。そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所
を見た。そして、その日はイエスのところに泊まった。時は午後四時ごろであった。 40 ヨハネから聞い
て、イエスについて行ったふたりのうちのひとりは、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。41 彼はま
ず自分の兄弟シモンに出会って言った、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。 42
そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。イエスは彼に目をとめて言われた、「あなたはヨハネの子シ
モンである。あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」。

- いつ、どのような状況で、ヨハネはイエスに対して「見よ、神の小羊だ」と言いますか。When and under what circumstances John tell “Look, the Lamb of God!” about Jesus?
- 弟子たちはどうしますか。なぜでしょうか。What do they do, and why?
- イエスはどうしますか。What does Jesus do?
- 弟子たちと、イエスの対話からどのようなことがわかりますか。What can you tell from the conversation of Jesus and the disciples of John?
- あなたは、イエスに「あなたは何を求めているのか」と聞かれたら、どのように答えますか。If you are asked what you want, what is your response?
- アンデレはどのような人ですか。Who is Adrew?
- アンデレは、シモンに何と言っていますか。What does Andrew tell Simon?
- アンデレは、それからどうしますか。What does Andrew do after telling this to Simon?
- イエスは、なぜシモンに別の名前をつけたのでしょうか。Why does Jesus give Simon a new name?

8.1.6 ヨハネによる福音書 John 1:43-51

43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会って言われた、「わたしに従ってきな
さい」。 44 ピリポは、アンデレとペテロとの町ベツサイダの人であった。 45 このピリポがナタナエルに
出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセ
フの子、ナザレのイエスにいま出会った」。 46 ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、なんのよいもの
が出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。47 イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、

彼について言われた、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない」。48 ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて言われた、「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。 49 ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。 50 イエスは答えて言われた、「あなたが、いちじくの木の下にいるのを見たと、わたしが言ったので信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう」。 51 また言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」。

- いつ、どのようなときに、イエスはフィリポと出会いどうしますか。When and what occasion does Jesus meet Phillip? What does he do to Phillip?
- フィリポについてどんなことがわかりますか。What do you tell about Phillip?
- フィリポはナタナエルにイエスをどのように紹介していますか。How does Phillip introduce Jesus to Nathanael?
- ナタナエルの 47 節の応答からどのようなことがわかりますか。そしてピリポはどうしますか。What can you tell from Nathaniel's response in verse 47? What does Phillip do are a response?
- 47-49 でイエスはどのようにナタナエルに話しかけ、ナタナエルはどのように告白するに至りますか。In verses 47-49, how does Jesus talk to Nathnael and how does he confess as his response?
- ナタナエルはなぜこのように告白したのでしょうか。Why does Nathanael confess like this?
- イエスは、50 節でどのようにナタナエルに言っていますか。What does Jesus tell Nathanael in verse 50?
- 51 節はどのような光景を伝えているのでしょうか。What does Jesus tell in verse 51?

8.2 ヨハネ第 2 章

8.2.1 ヨハネによる福音書 John 2:1-12

- いつ、どこで、何がありましたか。そこには、どのような人がいますか。What happens? When and where? Who are there?
- どのような問題がおきますか。What happens there?
- イエスはどのように答えますか。What is Jesus' response?
- イエスの母はイエスの応答を聞いてどうしますか。What does Jesus' mother do as her response?
- イエスはどのように命じ、どのようなことが起きますか。What does Jesus do, and what happens?

- 「最初のしるし」とはどのような意味でしょうか。What does the first of the signs mean?
- 弟子たちにとってこれはどのような経験でしたか。What kind of experience this is to Jesus' disciples?
- なにを伝えようとしているのでしょうか。What is the message of this story? What is the sign.
- 12 節にはどのようなことが書かれていますか。What is recorded in verse 12?

8.2.2 ヨハネによる福音書 John 2:13-25

- いつ、どこで、このことが起こりますか。When does it happen and where?
- イエスはどのような状況で何をしますか。What does Jesus do?
- 他の福音書の記述と比較してみましょう。Compare with other gospels.
- 16 節のイエスのことばから、どのようなことがわかりますか。What do you tell from the words of Jesus in verse 16?
- 「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」とはどのような意味ですか。What does 'Zeal for your house will consume me' mean?
- ユダヤ人たちは、どうしますか。What is the response of the Jews? (v18)
- イエスはそれにどのように答えますか。What is Jesus' response? (v19)
- 弟子たちは、イエスの言葉をどのように理解しますか。What is the disciples' interpretation of Jesus' words?
- イエスはなぜこのような行為をしたのでしょうか。Why does Jesus do this?
- イエスの過越祭での活動をどのように記述していますか。What does Jesus do during this Passover? What is the result? (v23)
- イエスはそれに対してどうしたと書いてありますか。What does Jesus do?
- その理由はどのように説明されていますか。Why doesn't Jesus entrust himself to the people?
- なぜ信じた人たちを信用せずご自身をおまかせにならなかったか、自分の言葉で説明してみましょう。Explain the reason by your own words.

8.3 ヨハネ第 3 章

8.3.1 ヨハネによる福音書 John 3:1-15

- ニコデモはどのようなひとですか。Who is Nicodemus?
- ニコデモはいつイエスのもとにきて、どのように告白しますか。When does Nicodemus come to Jesus and what does he tell Jesus?
- イエスはまずなにを伝えますか。What does Jesus say first? (v.3)
- ニコデモはこれにどのように応答しますか。What is the response of Nicodemus? (v.4)
- イエスは、新たに生まれるということを、どのように説明していますか。How does Jesus interpret 'born again'? (vs. 5-8)
- 風のたとえは、なにを伝えようとしているのでしょうか。What does Jesus tell by the wind? (v.8)
- ニコデモは、何を理解し、何を理解できなかったのでしょうか。What does Nicodemus understand and what does not? (v.9)
- イスラエルの教師であるニコデモと、イエスの違いは何だと言っていますか。What is the difference between Nicodemus, Israel's teacher and Jesus?
- 何が「地上のこと」で、何が「天上のこと」なのでしょうか。What are earthly things and what are heavenly things?
- 14, 15 節で、イエスはどのようなことをニコデモに伝えていますか。What does Jesus tell Nicodemus in verses 14 and 15?
- イエスのニコデモとの対話から、どのようなことがわかりますか。What do you tell from the dialogue between Jesus and Nicodemus?

8.3.2 ヨハネによる福音書 John 3:16-21

- 1 節から 13 節においてイエスはニコデモにどのようなことを語っていますか。What does Jesus tell Nicodemus in verses 1 to 13?
- 14, 15 節で、イエスはどのようなことをニコデモに伝えていますか。What does Jesus tell Nicodemus in verses 14 and 15?
- 15 節で言われている永遠の命とはどのようなものでしょうか。What is eternal life in verse 15?

- 16 節からわかることをリストしてみましょう。List up what you can tell from verse 16?
- 「神は、世を愛された」とはどのような意味でしょうか。What does ‘God so loved the world’ mean?
- 独り子を信じるとはどのような意味でしょうか。What is to believe in God’s one and only Son?
- なぜ、神は無条件に永遠のいのちを与えないのでしょうか。Why doesn’t God give eternal life without condition?
- 神が御子を遣わした目的は何だと言っていますか。What is the purpose of God to send his Son into the world?
- どのような人が裁かれるのだと言っていますか。Who will be condemned?
- 光の方に来るとは、何を意味していますか。What is to come into the light?
- ニコデモは、どのようなメッセージを受け取ったでしょうか。What did Nicodemus learn from Jesus?

8.3.3 ヨハネによる福音書 John 3:22-30

- イエスとその弟子たち、ヨハネは、それぞれどこで何をしていますか。What are Jesus and his disciples and John the baptist doing? Where are they?
- どのようなことから、議論が持ち上がりますか。When does this conversation start?
- この人たちが、26 節のように言ったのは何故だと思いますか。What is the reason they told John the words in verse 26?
- ヨハネはどのように答えますか。What was John’s response?
- 「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。」とはどのような意味でしょうか。What does ‘’A person can receive only what is given them from heaven.” mean?
- 質問をした人たちの役目は、何だと言っていますか。What is the role of the people around John?
- ヨハネは、自分自身について、どのように証言していますか。What does John testify about himself?
- なぜ、衰えないといけないでしょうか。Why must he less?
- このようなヨハネの姿勢はその後にどのように影響したと思いますか。What do you think is the effect of his attitude?

8.3.4 ヨハネによる福音書 John 3:31-36

- 「上から来られる方」とか「地から出る者」とは誰かを指し示しているのでしょうか。Who are ‘The one who comes from above’ and ‘the one who is from the earth’?
- ここでは、遣わされた方について、他にどのようなことが証言されていますか。What else is testified here about whom God has sent?
- 永遠の命について、何が語らえていますか。What is told about eternal life?

8.4 ヨハネ第 4 章

8.4.1 ヨハネによる福音書 John 4:1-15

- イエスたちは、なぜユダヤを去りますか。Why do Jesus and his disciples leave Judea?
- イエスたちは、なぜ、サマリヤの町に行きますか。Why do they visit a town of Samaria?
- いつ、どのような状況でイエスは、サマリアの女性と出会いますか。How does Jesus meet a Samaritan woman? What time is it?
- イエスはどのように女性に話しかけ、それに女性はどのように応じますか。How does the conversation start? What is the reply of the woman?
- イエスの 10 節のことばの意図は何なのでしょうか。What does Jesus intend to communicate by the words in verse 10?
- 「生きた水」とは何でしょうか。この女性はどのように理解していますか。What is the living water? How does this woman understand the word?
- イエスが与える水はどのようなものだと言っていますか。What is the water Jesus gives?
- 女性はどう応じますか。What does she reply?

8.4.2 ヨハネによる福音書 John 4:16-26

- 1 節から 15 節をふり返ってみましょう。どのような変化がありますか。Review verses 1 - 15. Any changes?
- イエスは 16 節でどのように尋ねていますか。What does Jesus ask this woman?
- 女性の応答に対しイエスはどのように言いますか。As she replies, what does Jesus tell her?

- 女性はなぜ、礼拝する場所についての話しを始めるのでしょうか。Why does she change the topic to the place to worship?
- イエスはどのように答えますか。How does Jesus reply her?
- 礼拝について、イエスがもっとも大切な事として伝えようとしているのはどんなことでしょうか。What is the key in the message of Jesus about worshiping God?
- 女性はどのように答えますか。What does the woman reply?
- イエスはどう応じますか。What does Jesus answer her?
- 女性は何を理解したでしょうか。What does she understand?

8.4.3 ヨハネによる福音書 John 4:27-42

- 1 節から 26 節をふり返ってみましょう。この出会いは、女性と、イエスにとってどのようなものだったのでしょうか。Review verses 1 - 26. What does this meeting mean to the woman and Jesus?
- 帰ってきた弟子たちは、何に驚きますか。When the disciples came back, why are they surprised?
- 女性はどうしますか。What does women do?
- 弟子たちが食事を勧めると、イエスはどのように答えますか。それはなぜでしょう。When his disciples urge Jesus to eat, how does Jesus respond? Why is it?
- イエスの食べ物とは何ですか。What is Jesus' food?
- イエスは弟子たちに何を教えますか。What does Jesus teach his disciples?
- サマリア人たちは、どのような反応をしますか。What is Samaritan's response?
- なぜこれほど素直に信じるのでしょうか。Why do many of the Samaritans believe?
- 42 節でサマリアの人たちはどのように言っていますか。What do the Samaritans say in verse 42?
- シカルでの人々との出会いから、どのようなことを学びましたか。What do you learn from the story at Sycal in Samaria?

8.4.4 ヨハネによる福音書 John 4:43-56

- イエスはどこからどこへ向かわれましたか。それは、どのような場所ですか。Where did Jesus move from and to?

- ガリラヤの人は、イエスをどのように迎えますか。それは、なぜでしょう。Do the Galileans welcome Jesus? Why is it?
- カナのイエスのもとにどのような人が頼み事を持ってきますか。Who comes to Jesus in Cana?
- イエスはどのように応答しますか。How does Jesus reply to this man?
- この人はどう答えますか。How does he respond?
- イエスはどうしますか。そして役人はどうしますか。How does Jesus respond to this man? What does this man do?
- この人は、何を信じたのでしょうか。What does this man believe?
- どうなりますか。What happens?
- ヨハネはこのことをどのようにまとめていますか。How does the writer close this paragraph?

8.5 ヨハネ第 5 章

8.5.1 ヨハネによる福音書 John 5:1-18

- この出来事はどこで起きますか。Where does it happen?
- 池の周りの回廊には、どのような人がちがいますか。Who are there around the pool called Bethesda?
- イエスはどのような人にどのように声をかけますか。Whom does Jesus talk to?
- この人は、どのように答えますか。What is his reply?
- イエスはこの人にどのように命じますか。What does Jesus tell this person?
- この人はどうなりますか。What happens to this person?
- ユダヤ人たちは、この人になんと言いますか。What do the Jews tell this person?
- この人は、どのように答えますか。What does this person say?
- この人と再会したイエスは、この人にどのようなことを告げますか。What does Jesus tell this person when he meets him again?
- ユダヤ人はイエスにどのように対し、それに、イエスはどのように答えますか。What is the Jews response? What does Jesus tell them?
- ユダヤ人たちがイエスを殺そうとまでする理由は何ですか。Why do the Jews try to kill Jesus?
- あなたはこの話から何を学びましたか。What do you learn from this story?

8.5.2 ヨハネによる福音書 John 5:19-30

- 17 節-18 節で、イエスは安息日に働く理由についてどのように答え、ユダヤ人たちはどのようにそれを受け取りますか。How does Jesus tell the reason why he works on Sabbath, and how do the Jews take it? (verses 17, 18)
- 19 節でイエスは子がすることと、父がすることの関係についてどのように述べていますか。What does Jesus tell about what the Son does and what his Father does? (verse 19)
- イエスはなぜそのようにできるのですか。Why can Jesus do so?
- 聞いている人たちは何に、どのようなことに驚くと言っていますか。What will they be amazed?
- 21, 22 節では、イエスはどのようなことをすると言っていますか。What will Jesus do? (verses 21 and 22)
- それによってどのようになると 23 節では言っていますか。What would be the outcome of this? (verse 23)
- 24 節はどのような意味でしょうか。What does verse 24 mean?
- 25 節の「死んだ者が神の子の声を聞く」とはどのような意味でしょうか。What does 'the dead will hear the voice' mean? (verse 25)
- イエスが命を与えることができるのは、なぜだと言っていますか。Why can Jesus give life? (verse 26)
- さばきについてどのように言っていますか。What does Jesus say about judgement?

8.5.3 ヨハネによる福音書 John 5:31-38

- 19 節から 30 節を読んで、イエスの証言についてまとめてみましょう。What does Jesus testify in verses 19 to 30.
- 31 節でイエスは何について語っていますか。What does Jesus tell in verse 31?
- 32 節の「わたしについて証しをなさる方」とは誰のことでしょうか。Who is the one that testifies about Jesus in verse 32.
- ヨハネはどのような証しをしましたか。What is John's testimony about Jesus?
- ヨハネの証しはだれのためのどのような証しだと言っていますか。For whom John's testimony is given? How does Jesus describe John's work?

- 36 節の「ヨハネの証しにまさる証し」とは何ですか。What is the testimony weightier than that of John?
- なぜ、イエスの行っている業がイエスを遣わした方のことを証言することになるのですか。Why does the works Jesus is doing testify that God sent him?
- イエスを遣わしたかたの証言について、イエスはどのように言っていますか。What does Jesus tell about the testimony of the one who sent him?
- わたしたちが、自分の正しさを証明するにはどうしたらよいのでしょうか。How can we testify the validity of ourself?

8.5.4 ヨハネによる福音書 John 5:39-47

- 31 節から 38 節からイエスはどのように証言しているか復習してみましょう。Review what does Jesus say in verses 31 to 38.
- 聖書の証しについてイエスはどのように言っていますか。What does Jesus tell about the testimony of the Scripture?
- 聖書がイエスについて証ししているとはどのような意味でしょうか。What does ''the Scriptures testify Jesus" mean?
- 命を得るためにイエスのもとに来ない理由は何だと言っていますか。What is the reason why they refuse come to Jesus to have life?

- 訴えるのは、モーセだと言っていますが、それはなぜですか。Why does Moses accuse those who refuse to come to Jesus?
- ユダヤ人たちが、神について証しをすると信じているものは、何ですか。イエスはそれについてどのように言っているのでしょう。What do you think the Jews believe to testify God? What does Jesus tell about ti?
- どうすればイエスが神から来たことがわかるのでしょうか。How can we tell Jesus if from God?
- 聖書とは何なのでしょうか。What is the Bible?

8.6 ヨハネ第 6 章

8.6.1 ヨハネによる福音書 John 6:1-15 (Part I)

- いつ、イエスは、どこからどこへ移動しますか。When and where did Jesus go?

- 他の福音書は背景についてどのように記していますか。What do other gospels say?
- 群衆は何を求めてイエスの後を追いかけたのでしょうか。Why did the crowds follow Jesus?
- この時の状況を、ヨハネは 3-5 節にどのように描いていますか。How does John describe the scene in verses 3 - 5?
- イエスはフィリポにどのように声をかけますか。How did Jesus say to Philip?
- フィリポは何と答えますか。What was Philip's answer?
- このとき、誰がどのような情報をもたらしますか。Who brought extra information? What is it?
- この少年は、とてもたくさんパンと魚をもっていたのでしょうか。Did this boy have many loaves of bread and many fish?
- イエスはどうしますか。What did Jesus do?
- どうなったと書かれていますか。What were the results?
- 人々は、これをどのように受け止め、どのような行動に出たと書かれていますか。What did the crowds take this and what did they do? (verses 14, 15)
- イエスはどうしますか。What did Jesus do?

8.6.2 ヨハネによる福音書 John 6:1-15 (Part II)

- もういちど、最初から確認してみましょう。Let us review the story from the beginning.
- 五つのパンと二匹の魚の出来事がどのように扱われているか 6 章の中からリストしてみましょう。How is this incidence treated in John 6?
- 人々は、最初イエスのもとに来たとき（6 章のはじめ）何を求めていたのでしょうか。What did the people seek when they came to Jesus in the beginning of John 6?
- 五つのパンと二匹の魚で五千人が満腹した後、人々は、何を求めていますか。What did the people seek after they were fed by five loaves of bread and two fish?
- イエスは、何を人々に求めていますか。What does Jesus want of the people?
- 何が起こったのでしょうか。What actually happened?
- この記事を通して福音書記者はそれぞれ何を伝えようとしているのでしょうか。What do the gospel writers want to communicate to us?

8.6.3 ヨハネによる福音書 John 6:16 - 21

- 弟子たちはどのような状況で舟にのりますか。Describe the disciples when they got into a boat.
- 他の福音書にはどのように書かれていますか。What can you find from other gospels?
- 弟子たちが、イエスと一緒にいることといないことは、どのような差があったのでしょうか。What makes a difference if the disciples were there with Jesus?
- 舟に乗った弟子たちにはどのようなことが起こりますか。そしてイエスはどうしますか。What happened to the disciples on the boat?　What did Jesus do?
- イエスをみて弟子たちはどのような反応をしますか。What were the responses of the disciples when they saw Jesus?
- イエスはなんと声をかけますか。What did Jesus say to his disciples?
- マタイによる福音書にはどのようなことが記されていますか。What is written in Mathew? %(Matt 14:28)
- ヨハネはこの話しをどのように締めくくっていますか。How does John close this paragraph?
- ヨハネは、この出来事を通してなにを伝えているのでしょうか。What does John tell us using this story?

8.6.4 ヨハネによる福音書 John 6:22-40

- 群衆、イエス、その弟子たちは、それぞれどこにいますか。Where are the crowds, Jesus and his disciples?
- 群衆は、なぜイエスを探しているのでしょうか。Why do the crowds seek Jesus?
- イエスは、群衆にどのように語っていますか。What does Jesus tell the crowds? (verses 26, 27)
- 「いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」とはどのような意味でしょうか。What does ‘’to work for food that endures to eternal life” mean?
- 群衆はどのような質問をし、イエスはどのように答えていますか。What do the crowds ask Jesus? How does Jesus respond? (verses 28, 29)
- これに対して、群衆は何を求めていますか。What do the crowds request? (verses 30, 31)
- これに対してイエスはどのように答えますか。How does Jesus respond to them? (verses 32, 33)
- 群衆はイエスの答えをどのように理解していますか。How do the crowds understand Jesus’ message?

- イエスが命のパンであるとはどのような意味なのでしょうか。What does ‘’Jesus is the bread of life” mean?
- イエスにとっての神の使命とは何なのでしょうか。What is Jesus’ misson?
- 永遠の命を得ることと、終わりの日に復活することはどのような関係にあるのでしょうか。What is the relation between to have eternal life and to be risen up at the last day?

8.6.5 ヨハネによる福音書 John 6:41-59

- この会話は、いつどのような時に、どのような人の間でなされたものですか。Who are talking? When and where are they talking?
- ユダヤ人たちは、イエスのことでどのようにつぶやきますか。それはなぜですか。Why and how do the Jews grumble about Jesus?
- イエスの答えをまとめてみましょう。Summarize what Jesus responded. (verses 43 - 51)
- イエスが命のパンであるとは、どのようなことを意味しているのでしょうか。What does it mean that ’’Jesus is the bread of life”?
- 「わたしが与えるパン」は、「命のパン」や、「生きたパン」と同じでしょうか。Is the bread Jesus will give us same as the bread of life or the living bread?
- ユダヤ人たちは、どのような議論を始めますか。What do the Jews argue sharply?
- イエスは、生きたパンをたべることについてさらにどのようにユダヤ人たちに伝えますか。What does Jesus tell the Jews about eating the living bread?
- イエスの肉を食べ、その血を飲むとは、なにを言っているのでしょうか。What does ‘eating Jesus’ flesh and drinking his blood mean?
- 先祖が食べたマナと、生きたパンは、何が共通点で、なにが異なるのでしょうか。Compare the manna the ancestors ate and the bread of life.
- イエスが、そして、聖書記者が伝えたかったことはどのようなことなのでしょうか。What does Jesus and/or John want to communicate?

8.6.6 ヨハネによる福音書 John 6:60-71

- これまでのイエスのメッセージを復習してみましょう。Review the message of Jesus.
- 弟子たちは、何をひどいといっているのでしょうか。Which teaching is it the disciples cannot accept?

- これに対してイエスはどのように答えますか。How does Jesus respond?
- イエスが語ったことばは霊であり、命であるとはどのような意味でしょうか。What does ‘’The words I have spoken to you are full of the Spirit and life” mean?
- イエスは、64 節・65 節で信じない者について、どのようなことを告げますか。What does Jesus say about those who do not believe?
- 弟子たちの多くがイエスを離れ去りますが、それはなぜでしょう。Why do many of Jesus’ disciples turn back?
- イエスの問いに、ペトロはどのように答えますか。How does Peter respond to Jesus?
- 残った十二弟子と、去って行った弟子たちでは、なにが違っていたのでしょうか。What are the differences between the twelve disciples and those who do not follow?
- イエスは、ここでどのように十二弟子に言いますか。What does Jesus say to the twelve disciples?
- イエスは、悪魔を選んだのでしょうか。Does Jesus choose a devil?
- イエスを求めて従ってきた人を、イエスは追い返しているようにも見えますが、それはなぜでしょうか。イエスは何を望んでいるのでしょうか。Jesus seems not to accept followers. Why is it? What does he want us?

8.7 ヨハネ第 7 章

8.7.1 ヨハネによる福音書 John 7:1-13

- イエスはどこにいますか。それは何故ですか。Where is Jesus and why?
- いつのできごとですか。When is it?
- イエスの兄弟たちは、イエスにどのように進言しますか。それは、何故ですか。What do Jesus’ brothers suggest Jesus and why?
- イエスはこれに対して、どのように答えますか。How does Jesus respond to them? (verses 6 - 8)
- 「時」とは何でしょうか。わたしたちにもそのような「時」があるのでしょうか。What is ‘my time’? Is there a special time for us?
- イエスは 7 節は何を伝えているのでしょうか。What does Jesus tell in verse 7?
- イエスは結局どのように行動しますか。それは何故でしょう。What does Jesus do after all, and why?
- ユダヤ人は、どのようにイエスを見ていますか。What do Jews think of Jesus?

- なぜ人々は、公然と語れないのでしょうか。Why do the people whisper and would not say publicly?
- この章には、どのような人たちの、イエスに対する評価が書かれていますか。Make a list of groups of people in this chapter, and their assessment of Jesus.

8.7.2 ヨハネによる福音書 John 7:14-24

- イエスはどこにいて何をしていますか。それはどのような時ですか。Where is Jesus, what is he doing and when is it?
- ユダヤ人たちは、何に驚いていますか。What are the Jews amazed at?
- イエスは 16 節から 18 節で自分の教えについてどのようなことを述べていますか。What does Jesus tell about his teacihng in verses 16 to 18?
- イエスは、なぜ自分が教えていることが神の教えであることがわかるのでしょうか。How does Jesus know that his teaching is from God?
- 「自分の栄光を求める」・「神の栄光を求める」は、それぞれどのようなことでしょうか。What is to gain personal glory, and to seek the glory of God?
- イエスは、19 節で、この人たちをどのように批判していますか。How does Jesus criticize the people in verse 19?
- 群衆はどのように、答えていますか。What is their response?
- イエスはこれに対して、どのように教えていますか。What does Jesus teach them as a response?
- 24 節の「うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。」は何を教えているのでしょうか。What does ''Stop judging by mere appearances, but instead judge correctly." in verse 24 mean?

8.7.3 ヨハネによる福音書 John 7:25-36

- イエスはどこにいますか。イエスの周囲にはどのような人たちがいますか。Where is Jesus? Who else are there?
- エルサレムの人々の間ではイエスについてどのような議論をしていますか。What do the people of Jerusalem ask about Jesus?
- イエスはこれに対して、どのように語っていますか。What does Jesus respond to the them?
- 人々はどうしますか。そしてどうなりますか。What do the people do? What happens?

- 31 節では、どのようなひとがどのような事を言っていますか。What do people say about Jesus in verse 31?
- 祭司長たちとファリサイ派の人々はどうしますか。What do the chief priests and the Pharisees do?
- イエスは、33 節・34 節でどのように言っていますか。このことから何がわかりますか。In verses 33 and 34, what does Jesus say? What can you tell from his message?
- ユダヤ人たちは、イエスの言葉についてどのような議論をしていますか。What do the Jews talk about Jesus' words?
- 本当に見つけることができないのでしょうか。Is it impossible to find Jesus?

8.7.4 ヨハネによる福音書 John 7:37-39

- イエスはどこにいますか。また、どのような時ですか。Where is Jesus? When is it?
- イエスは、この祭りの間、どのようなことを教え、どのようなことを語っていますか。During this festival, what does Jesus teach and tell.
- イエスは大声で何を言いますか。What does Jesus say in a loud voice?
- 渇いている人とはどのような人たちでしょうか。Who do you think is thirsty?
- イエスのもとで何が得られるのでしょうか。What do we get if we come to Jesus?
- 生きた水が川となって流れ出るとはどのような意味でしょうか。What does ''rivers of living water will flow from within them" mean?
- 39 節はどのようなことを言っていますか。What does verse 29 tell?
- 霊とは何でしょうか。What is the Sprit?

8.7.5 ヨハネによる福音書 John 7:40-52

- この場には、どのような人たちがいますか。Who are there with Jesus?
- 37 節, 38 節のイエスのことばを復習してみましょう。Review Jesus' words in verses from 37 to 38.
- 群衆はどのような反応をしますか。What was the responses of the crowds?
- メシヤの出身地について、どのようなことが議論されていますか。What is argued among the crowds about the birth of the Messaiah?
- イエス自身は、自分はどこから来たと言っていますか。What does Jesus say about where he is from?

- 人々の判断の根拠は何ですか。何に信頼しているのでしょうか。What is the basis of their belief? What do they trust?
- なぜ、イエスに手をかける者はなかったのでしょうか。Why don't they arrest Jesus?
- 祭司長たちやファリサイ人たちの問いに、下役たちはどのように答えますか。How do the temple guards respond to the chief priests and the Phar- isees?
- ファリサイ派のひとたちはどういいますか。その根拠は何ですか。What do the Pharisees say to them? What are their bases?
- このとき、だれがどのような発言をしますか。Who gives a comment? What is it?
- ニコデモは、このとき、どう考えていたのでしょうか。What does Nicodemus believe at this moment?

8.8 ヨハネ第 8 章

8.8.1 ヨハネによる福音書 John 7:53-8:11

- 人々とイエスはそれぞれどこへ行きますか。Where do the people go? Where does Jesus go?
- イエスは、いつ、どこで何をしていますか。Where is Jesus? When is it? What is he doing?
- どのようなことが起こりますか。What happens?
- 女性についてどのようなことがわかりますか。What can you tell about this woman?
- 女性をつれてきた本当の目的はなんですか。What is the real purpose to bring this woman to Jesus?
- イエスは、どのように応じますか。How does Jesus respond?
- イエスはなんと言いますか。What does Jesus say?
- 人々はどうします。What happens to the people?
- イエスはどうしますか。What does Jesus do?
- 女性はどのようなメッセージを受け取ったでしょうか。What does this woman understand?
- イエスは、なにを伝えていますか。What does Jesus tell?

8.8.2 ヨハネによる福音書 John 8:12-20

- イエスはどこにいますか。これは、いつのことでしょうか。Where is Jesus? When is it?

- 12 節で「再び（また）」と言っていますが、これまでに、イエスは、自分について、どんなことを言っていましたか。Verse 12 says ‘again’. What has Jesus claimed about himself?
- 「イエスが世の光である」とはどのような意味でしょうか。What does ‘’Jesus is the light of the world” mean?
- 「イエスに従う」とは、「命の光を持つ」とはどのような意味でしょうか。What do ‘to follow Jesus’ and ‘to have the light of the life’ mean?
- ファリサイ派の人たちはどのように反論しますか。How do the Pharisees criticize Jesus?
- イエスはこれにどのように答えていますか。How does Jesus respond to it?
- 「どこから来たのか、そしてどこへ行くのか、知っている」とは何を意味しているのでしょうか。What does ‘’I know where I came from and where I am going” mean?
- 「肉に従って裁く」とは何を言っているのでしょうか。What does ‘You judge by human standards’ mean?
- なぜイエスは誰をも裁かないのでしょうか。Why does not Jesus judge anyone?
- イエスの裁きが真実であることの根拠はなんですか。Why is Jesus’ decision true?
- ファリサイ派の人たちはどのように答えていますか。How do the Pharisees respond?
- 時が来ていないとはどのような意味でしょうか。What does ‘Jesus’ hour had not yet come’ mean?

8.8.3 ヨハネによる福音書 John 8:21-30

- イエスはどこでだれに対して話していますか。そこには、どのようなひとがいるでしょうか。Whom does Jesus talk? Where are they? Who are there?
- イエスは自分の行き先について、聞いている人たちについてどのように言っていますか。What does Jesus say about his and their destiny?
- 人々はイエスの言葉をどのように理解しますか。How do the people respond to Jesus’ claim?
- イエスは 23 節、24 節で何と言っていますか。What does Jesus say in verses 23 and 24?
- 25 節の人々の質問からどのようなことがわかりますか。What can you tell from the question of the people in verse 25?
- イエスはこれに対して、どのように答えていますか。How does Jesus reply to their question?
- 人々はなぜ悟ることができないのでしょうか。 Why don’t the people understand?

- イエスは、引き続き、何を伝えていますか。What does Jesus say in verses 28 and 29?
- 24 節、28 節にある、「『わたしはある』ということ」何を意味しているのでしょうか。What does 'I am he' in verses 24 and 28 mean?
- イエスは何を伝えようとしているのでしょうか。What does Jesus tell the people?

8.8.4 ヨハネによる福音書 John 8:30 - 38

- イエスはどこで誰に対して話していますか。そこにはどんな人たちがいるでしょうか。Whom does Jesus talk? Where are they? Who are there?
- イエスの言葉にとどまるとはどのような意味でしょうか。What does it mean to 'hold to Jesus' teaching'?
- 「真理が自由にする」とはどのような意味でしょうか。What does 'the truth will set you free' mean?
- 「真理」をほかの言葉で言うとどうなりますか。What is Truth in other words?
- 「自由」をほかの言葉でいうどうなりますか。What is Freedom in other words?
- 「自由になる」と聞いて、ユダヤ人たちは、どのような反応を示しますか。What is the response of the Jews when they hear the words 'to be free'?
- イエスはこれにまず 34 節でどのように答えますか。How does Jesus respond to them first?
- なぜ、罪を犯す者は罪の奴隷なのでしょうか。Why is anyone who sins a slave to sin?
- 35 節 36 節の奴隷と子の違いはなにを伝えているのでしょうか。What is the difference between the son and the slave explained in verses 35 and 36?
- 37 節 38 節は何を言っているのでしょうか。What does Jesus tell in verses 37 and 38?

8.8.5 ヨハネによる福音書 John 8:39 - 47

- 31 節からの箇所を復習してみましょう。どのようなことで議論していますか。Review a paragraph starting from verse 31. What is the topic the Jews are arguing with Jesus?
- ユダヤ人たちはなにを主張していますか。What do the Jews claim? - verse 39.
- イエスは、どのように言われますか。How does Jesus respond? - verses 39b, 40, 41a
- ユダヤ人たちは、次になにを主張しますか。What do the Jews claim next? - verse 41
- ユダヤ人たちの父が神であるとの主張に対して、イエスはどのように反論していますか。How does Jesus argue on the Jews' claim that their Father is God? - verses s42 - 45

- イエスは、ユダヤ人たちが、わからない理由は何だと言っていますか。Why is the language of Jesus not clear to the Jews?
- なぜ、ユダヤ人たちは、イエスの言葉を聞くことができないのですか。Why are the Jews unable to hear what Jesus say?
- イエスは、神の子と、悪魔の子をどのように区別していますか。How does Jesus distinguish the children of God and those of the Devil?
- イエスは真理と偽りについてどのように言っていますか。What does Jesus say about the truth and the lies?
- イエスは、人々に 46 節でどのように、訴えていますか。How does Jesus challenge the Jews in verse 46?
- イエスは、なにを伝えようとしているのでしょうか。What does Jesus tell the Jews?

8.8.6 ヨハネによる福音書 John 8:48 - 59

- 31 節からの箇所を復習してみましょう。どのようなことで議論していますか。Review a paragraph starting from verse 31. What is the topic the Jews are arguing with Jesus?
- ユダヤ人たちは、何と言ってイエスを非難しますか。その根拠は何ですか。What do the Jews say against Jesus? Why is it?
- イエスはこれに何と答えますか。What is Jesus' response? (verses 49, 50)
- 「わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬ（死をみる）ことがない。」とは、どのようなことを言っているのでしょうか。What does Jesus mean by saying ''whoever obeys my word will never see death"?
- ユダヤ人たちはどのように、反論しますか。How do the Jews question Jesus? (verses 52, 53)
- イエスはこれにどのように答えますか。How does Jesus reply to this?
- 56 節はどのような意味なのでしょうか。What does verse 56 mean?
- ユダヤ人は、これにどのように、反応しますか。How do the Jews respond to the word of Jesus in verse 56?
- イエスは、どのように宣言しますか。What does Jesus claim? (verse 58)
- どうなりますか。What happens?
- イエスはなにを伝えようとし、ユダヤ人たちは、なにが受け入れられなかったのでしょうか。What does Jesus tell the Jews and what is the Jesus unable to accept?

8.9 ヨハネ第 9 章

8.9.1 ヨハネによる福音書 John 9:1-12

- どのような状況で、弟子たちはイエスに質問しますか。When do the disciples ask Jesus a question?
- 弟子たちは、どんな質問をしますか。What is the question?
- 当時の人たちは、どのように考えていたのでしょうか。What do you think the Jews were thinking about?
- このような問題を、現代のひとはどのように考えているでしょうか。What do the people in modern world think about?
- イエスはどう答えますか。What is Jesus' answer?
- イエスはつづけてどのように言われますか。What does Jesus add to it? (verses 4, 5)
- イエスは、この盲人のひとにどうしますか。どうなりますか。What does Jesus do to this person? What happens?
- 人々はどのような反応をしますか。そして、この人はどのように答えますか。What was the responses of the people? How does this person respond?
- この人は何を知り、何を知りませんか。What does this person know? What does he not know?
- 「神の業がこの人に現れる」とは、このひとが癒やされると言うことなのでしょうか。Is the healing of this person ''the works of God being displayed"?
- イエスは、このひとに、そして、人々に、弟子たちに、何を望んでいたのでしょうか。What is the message of Jesus to this person, the people and his disciples?

8.9.2 ヨハネによる福音書 John 9:13-34

- 9 章 1 節から 12 節を復習しましょう。Review from verse 1 to 12.
- 盲人だった人は、どこに連れて行かれますか。なぜでしょう。Where is the man who had been blind brought?
- どのような議論がおこりますか。What do they argue about?
- 盲人だった人は、イエスとどのような人だと考えていますか。Who does the man who had been blind think Jesus is?

- ユダヤ人たちは、どうして信じられないのでしょうか。Why are the Jews unable to believe?
- 両親には、どのようなことを確かめますか。両親はどのように答えますか。What do they ask his parents? What do the parents respond?
- この人はどうなりますか。What happens to this person?
- ユダヤ人たちは、何を知り、何を知らないと言っていますか。What do the Jews claim to know and what do not?
- 盲人だった人はどんな証言をしていますか。What is his testimony?
- この人はどうなりますか。What happens to Jesus?
- この人には、どのような変化がみられますか。What is changed in this person?

8.9.3 ヨハネによる福音書 John 9:35-46

- 9 章 1 節から 34 節を復習しましょう。Review from verse 1 to 34.
- どのようにイエスは盲人だった人に出会いますか。How does Jesus meet the man who was blind.
- イエスはまずどのように聞きますか。What is the first question of Jesus?
- なんと答えますか。What is his response? (verse 36)
- イエスは、どのように答えますか。What is Jesus' reply? (verse 37)
- この人は、どのように応答しますか。What is his reply? (verse 38)
- イエスは、何と言われますか。What does Jesus tell?
- イエスの裁きとはどのようなものなのでしょうか。What is Jesus' judgement?
- ファリサイ派のひとたちは、どのように言いますか。What do the Pharisees say?
- イエスの 41 節の言葉は、何を伝えていますか。What is Jesus' message in verse 41?
- 盲人だった人は、見えるようになったのでしょうか。命を得たのでしょうか。Can the man who was blind see? Does he have eternal life?

8.10 ヨハネ第 10 章

8.10.1 ヨハネによる福音書 John 10:1-10

- イエスは誰に対して話していますか。To whom is Jesus telling this?

- 1 節から 18 節の間でイエスは自分を何に譬えていますか。In the parables from verse 1 to 18, what is Jesus compared to?
- 羊の門とはどのようなものだと言っていますか。What is the function of the gate of the sheep?
- 羊飼いとはどのような者だと言っていますか。How is the shepherd of the sheep described?
- 羊の門と羊飼い以外にどのようなものや人たちが登場しますか。What are the other casts besides the gate and the shepherd in this parable?
- たとえの中のものや人は何に譬えられているのでしょうか。What are these casts compared to?
- 6 節に彼らは何のことかわからなかったとありますが、伝えようとしたことは何だったのでしょうか。What is the message Jesus told 'them'? %6 節にファリサイ派の人々に話されたとありますが、それはどのようなメッセージなのでしょうか。What is the message Jesus told the Pharisees? (verse 6)
- イエスが羊の門であるとは、どのような意味でしょうか。What does 'Jesus is the gate for the sheep' mean?
- 「わたしより前に来た者」とはどのような人のことでしょうか。Who are those came before Jesus in verse 8?
- 羊についてはどのようなことが言われていますか。What is said about the sheep?
- イエスが来た目的は何ですか。What is the purpose of Jesus's coming?

8.10.2 ヨハネによる福音書 John 10:11-21

- 1 節から 10 節を復習してみましょう。誰に対して話していますか。イエスは自分を何にたとえていますか。Review verses 1 to 10. Whom is Jesus talking this parable. What is Jesus compared himself to?
- イエスは 11 節で自分を何にたとえていますか。What is Jesus compared himself to in verse 11?
- 雇い人との違いをどのように言っていますか。What is the difference with the hired hand?
- 良い羊飼いについて他にどのようなことを言っていますか。What is said about the good shepherd?
- 「この囲いに入っていないほかの羊」とは何を意味しているのでしょうか。What does 'other sheep that are not of this sheep pen' mean?
- 「命を捨てる」とは何を意味しているのでしょうか。What does it mean for Jesus to lay down his life?
- 「父から受けた掟」とはどのような意味でしょうか。What does 'the command Jesus received from His Father' mean?

- イエスが伝えたかったことは、何なのでしょうか。What is the message of Jesus?
- この話を聞いた人たちにはどのようなことが起こりますか。What happen to those who hear this message?
- この人たちを分けたのは何ですか。What divides the people in two groups?

8.10.3 ヨハネによる福音書 John 10:22-30

- 10 章 1 節から 21 節のできごとを復習してみましょう。どのようなことが分かりますか。Review John 10:1-21. What can you tell?
- いつ、どこでのできごとだと書かれていますか。When and where does this happen?
- ユダヤ人たちは、イエスにどのように迫りますか。How do the Jews challenge Jesus?
- イエスは、どのように答えていますか。How does Jesus respond to them?
- イエスの業は何を証ししているのでしょうか。What does Jesus' work testify?
- イエスの羊かどうかは、どのようにして分かると言っていますか。How can they tell whether or not they are Jesus' sheep?
- イエスの羊はどうなると言っていますか。What does Jesus say about his sheep?
- 29 節で偉大なものと言っているのは、何なのでしょうか。What is greater than all in verse 29? % イエスの父がイエスに下さったものとは、何なのでしょうか。What are those his Father gave Jesus?
- 「わたしと父とは一つである」とはどのような意味なのでしょうか。What does it mean to say ''I and the Father are one".
- ユダヤ人たちは、これを聞いてどうしますか。What do the Jews do?

8.10.4 ヨハネによる福音書 John 10:(28-) 31-42

- イエスは、いつ、どのような場所で、どのような人と話していますか。When and where is Jesus talking? Who are there?
- ユダヤ人たちは、イエスの話を聞いてどうしますか。What do the Jews do when they hear Jesus say?
- 石打にしようとしたユダヤ人たちに、イエスはどのように言っていますか。What does Jesus say when the Jews picked up stones to stone him?
- ユダヤ人たちは何と答えますか。What do the Jews reply?

- 34 節のイエスの言葉はどのような意味でしょうか。What does Jesus mean by his quote?
- 「父の業」はどのようなことを意味しているのでしょうか。What does the works of the Father mean?
- ユダヤ人たちはどうしますか。What do the Jews do?
- そしてどうなりますか。And what happens?
- イエスは、それから、どこへ向かいますか。Where does Jesus go?
- そこでは、人々はどのように証言しますか。What do the people there testify?

8.11 ヨハネ第 11 章

8.11.1 ヨハネによる福音書 John 11:1 - 16

- ラザロについては、どのように紹介されていますか。What can you tell about Lazarus?
- 姉妹たちはイエスに病気のことをどのように伝えますか。What do Mary and Martha tell Jesus about their brother?
- この知らせを聞いて、イエスはどのように応答しますか。What does Jesus say when he received the message?
- なぜなお二日間同じところに滞在したのでしょうか。Why does Jesus stayed where he was two more days?
- ユダヤに行くことはなにを意味していたのでしょうか。What does it mean for Jesus and his disciples to go to Judea?
- 9, 10 節のイエスの言葉は何を伝えているのでしょうか。What does Jesus mean by his words in verses 9 and 10?
- それからイエスはどのように弟子たちに告げますか。(11 節) What does Jesus tell his disciples then? (verse 11)
- 弟子たちはどのように反応しますか。How do his disciples respond?
- イエスは、どのように、弟子たちに答えますか。（14,15 節）How does Jesus respond to his disciples? (verses 14, 15)
- トマスはどのように応答しますか。How does Thomas respond?

8.11.2 ヨハネによる福音書 John 11:17 - 32

- 1 節から 16 節を復習してみましょう。Review verses from 1 to 16.
- イエスが到着したとき、ラザロはどのような状態でしたか。What did Jesus find out about Lazarus as he arrived?
- ベタニアはどこにあると書かれていますか。Where is Bethany?
- マルタとマリアのところには、どのようなひとたちがいますか。Who are there with Martha and Mary?
- だれがイエスを迎えに来ますか。Who came out to meet Jesus?
- マルタはイエスに会うとどのように言いますか。What does Matha tell Jesus when they meet? (vs 21, 22)
- イエスはどのように答えますか。How does Jesus reply to Martha? (v23)
- マルタはどのように答えますか。How does Martha reply? (v24)
- 25, 26 節のイエスの言葉は、何を伝えているのでしょうか。What does Jesus mean by his words in verses 25 and 26?
- マルタはこれにどのように応答しますか。How does Martha reply? (v27)
- マリアはどのように、イエスを迎えますか。How does Maria meet Jesus?

8.11.3 ヨハネによる福音書 John 11:33 - 44

- 17 節から 32 節を復習しましょう。Review the verses from 17 to 32.
- どのような人たちがいますか。Who are there?
- イエスは皆の様子を見てどうしますか。What does Jesus do? (verses 33-35)
- あなたは、イエスはなぜ、心に憤りを覚え、興奮したのだと思いますか。Why do you think was Jesus deeply moved in spirit and troubled?
- イエスはなぜ涙を流されたのでしょうか。Why did Jesus weep?
- ユダヤ人たちは、どのように考えますか。What do the Jews see this? (verses 36, 37)
- イエスが石を取りのけるように命じると、マルタはどのように言い、それに対して、イエスはどのように言いますか。When Jesus said ‘’Take away the stone’‘, what did Martha say? What was Jesus’ reply?

(verses 39, 40)

- イエスはどのように祈りますか。How did Jesus pray then?
- それからイエスはどのように行動し、どうなりますか。What did Jesus do next, and what happened?
- この出来事は、何を伝えているのでしょうか。What is the message of this story?

8.11.4 ヨハネによる福音書 John 11:45-57

- イエスのなさったことを復習してみましょう。Review what Jesus had done in Bethany. (verses 17-44)
- イエスのなさったことを目撃したユダヤ人は、どうしましたか。What did the Jews who had seen what Jesus did do?
- ファリサイ派の人々に告げた目的は何でしょうか。Why did some Jews go to the Pharisees to tell what Jesus had done?
- 祭司長たちとファリサイ派の人々は状況をどのように見ていますか。What is the assessment of the situation by the chief priests and the Pharisees?
- カイアファはどのような発言をしますか。What did Caiaphas say?
- 51, 52 節はどのような意味でしょうか。What do verses 51 and 52 mean?
- どのような結論を出しましたか。What was their decision?
- これに対して、イエスはどうしますか。How dioes Jesus respond to this?
- 過越の祭についてどのような事が書かれていますか。What is written about the Jewish Passover?
- イエスがなさったことと、祭司長たちや、ファリサイ派の人たちの行動にについてあなたはどう思いますか。What is your thoughts on what Jesus had done and what the high priests and the Pharisees had done?

8.12 ヨハネ第 12 章

8.12.1 ヨハネによる福音書 John 12:1 - 11

- いつ、どこで、どのようなことが起きますか。また、そこには、どのような人たちがいますか。What does it happen? When and where is it? Who are there? (verses 1 - 3)
- 他の福音書の記事と比較してみましょう。Compare this with the story in other gospels?
- マリアの行為はどのように記述されていますか。How is Maria's action described?

- マリアはなぜ油を注いだのでしょうか。Why does this woman pours very expensive perfume on Jesus's head?
- マリアの行為に対して、だれがどのようなことを言いますか。Who say what against Maria?
- 他の人たちはどのように考えていたでしょうか。What do you think other people around them want to say?
- イエスはなんと言われますか。What does Jesus tell them?
- わたしたちには、どのような価値判断が必要なのでしょうか。What is your assessment?
- 何が目的で、多くのユダヤ人が訪ねてきますか。For what purpose do many Jews come and visit them?
- 祭司長たちはどうしますか。それななぜですか。What do the high priest do? What is the reason?

8.12.2 ヨハネによる福音書 John 12:12 - 19

- いつ、どこで、どのようなことが起きますか。また、そこには、どのような人たちがいますか。What does it happen? When and where is it? Who are there? (verses 12 - 14)
- イエスを取り巻く状況について確認しましょう。Review the situation of Jesus? (11:45-57)
- 群衆はどのように、イエスを迎えますか。How do the crowd welcome Jesus?
- イエスは、なぜ、ろばの子に乗って、エルサレムに入城したのでしょうか。Why does Jesus enter Jerusalem on a donkey's colt?
- 他の福音書の記事と比較してみましょう。Compare this with the story in other gospels. (Mt 21:1-11, Mk 11:1-11, Lk 19:28-44)
- 弟子たちが、あとから気づいたのはどのようなことでしょうか。What do the disciples understand later?
- 群衆の動機についてどのように書かれていますか。What is written about the motivation of the crowd?
- ファリサイ派の人々は、どのように反応しますか。How do the Pharisees respond?
- ヨハネは、どんなことを伝えているのでしょうか。What does John tell us by this story?

8.12.3 ヨハネによる福音書 John 12:20-36

- だれが、いつ、どのようにして、イエスに面会を求めますか。Who come to meet Jesus? When is it? How do they request?
- この人たちは、なぜイエスに会いたいのでしょうか。Why do they want to meet Jesus?

- イエスはどのように答えますか。How does Jesus respond? (verses 23-26)
- 「人の子が栄光を受ける時が来た」とは何をさしているのでしょうか。What does ‘’The hour has come for the Son of Man to be glorified” mean?
- 24 節、25 節は、どのようなことを伝えていると思いますか。What does the message in verses 24 and 25 communicate?
- 26 節はなにを伝えていますか。What does verse 26 mean?
- イエスの 27 節の言葉はなにを意味しているのでしょうか。What does Jesus’ words in verse 27 mean?
- このとき、どのようなことが起こりますか。What happens then?
- イエスは、31 節から 32 節でどのようなことを言っていますか。What does Jesus tell in verses 31 and 32?
- 人々はどのような疑問を呈しますか。How do the people respond?
- イエスはどのように、忠告しますか。What does Jesus tell the people?

8.12.4 ヨハネによる福音書 John 12:36b-50

- イエスは、どうしますか。What does Jesus do?
- 誰から身を隠したのでしょうか。それは、いつまででしょうか。From whom does Jesus hide himself? Until when?
- イエスを信じなかったということをどのようにヨハネは記していますか。What is written about unbelief of them?
- 最初のイザヤの預言はどのようなことについて言っていますか。What does the first prophesy of Isaiah tell?
- 二つ目のイザヤの預言はどのようなことについて言っていますか。What does the second prophesy of Isaiah tell?
- 「イザヤがイエスの栄光を見た」とはどのようなことを指しているのでしょうか。What does ‘Isaiah saw Jesus’ glory’ mean?
- イエスを信じた議員については、どのように書かれていますか。What is written about the leaders who believed?
- イエスは、どこで、誰に対して、叫んでいますか。Where does Jesus cry out? To whom is he telling verses 44 to 50?

- 44 節から 50 節までイエスが言っていることをまとめてみましょう。Summarize what Jesus tells in verses 44 to 50.
- イエスの遣わされた目的は何でしょうか。What is the purpose sending Jesus?

8.13 ヨハネ第 13 章

8.13.1 ヨハネによる福音書 John 13:1-11

- 12 章にはどのような事が書かれていましたか。Review chapter 12.
- 12 章から 13 章への大きな変化は何ですか。What changed from chapter 12 to chapter 13?
- いつのことですか。イエスは、このときをどのようなときだと認識していますか。When is it? How does Jesus recognize the moment?
- イスカリオテのシモンの子ユダについては、どのようなことが書かれていますか。What is written about Judas, the son of Simon Iscariot?
- イエスはどのような行動をしますか。What does Jesus do? (verses 4, 5)
- 3 節のことばは、イエスの行為とどのように関係しているのでしょうか。How does the verse 3 relate to Jesus' action?
- ペテロはどのような質問をし、イエスはどのように答えますか。What does Peter ask Jesus? How does Jesus respond?
- このあと、ペトロとイエスは、どのような会話をしますか。What does Peter argue with Jesus? (verses 8-10)
- イエスのことば「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」はどのような意味でしょうか。What does Jesus mean by saying, ''Unless I wash you, you have no part with me."
- 11 節にはどのようなことが記されていますか。What is recorded in verse 11?

8.13.2 ヨハネによる福音書 John 13:12-20

- 1 節から 11 節を復習しましょう。Review verses from one to eleven.
- 席に着くとまずイエスは何と問いかけますか。What does Jesus ask his disciples when he returns to his place? (verse 12)

- イエスは弟子たちにとってどのような存在だと言っていますか。What is Jesus to his disciples? (verse 13)
- 「互いに足を洗い合わなければならない」と義務のように言われていますが、根拠は何ですか。What is the reason why the disciples should wash one another's feet?
- 「足を洗う」とは何を意味しているのでしょうか。What does 'wash one another's feet' mean?
- 「模範」とはどのような「模範」なのでしょうか。What kind of example Jesus showed to them?
- 「僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。」は何を伝えようとしているのでしょうか。What does 'no servant is greater than his master, nor is a messenger greater than the one who sent him' mean?
- なぜ急に『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』を引用するのでしょうか。Why does Jesus quote 'He who shared my bread has turned against me.' suddenly?
- 19 節は何を言っているのでしょうか。What does verse 19 say?
- イエスは足を洗うことを通して何を伝えたかったのでしょうか。What does Jesus want his disciples to understand?

8.13.3 ヨハネによる福音書 John 13:21-30

- 13 章 1 節から 20 節を復習しましょう。Review verses from 13:1 - 20.
- イエスは 21 節でどのように言っていますか。What does Jesus say in verse 21?
- 弟子たちは、どのように反応しますか。How does his disciples respond?
- シモン・ペトロはどうしますか。What does Simon Peter do?
- イエスはどうしますか。How does Jesus respond?
- 「ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った。」は何を伝えようとしているのでしょうか。What does ''As soon as Judas took the bread, Satan entered into him." mean?
- 「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」は、何を意味しているのでしょうか。What does ''What you are about to do, do quickly." mean?
- 他の弟子たちは、このことを、どのように理解しますか。How do other disciples understand what Jesus said to Judas?
- ユダはどうしますか。What does Judas do?

- 21 節から 30 節で福音書記者はなにを伝えているのでしょうか。What does the writer of the gospel tell us by verses from 21 to 30?

8.13.4 ヨハネによる福音書 John 13:31-38

- 「ユダが出て行くと」とありますが、ユダは何をしに出て行ったのでしょうか。What does Judas do after he goes out?
- 「人の子」と「神」について栄光を受ける、または与えることが書かれていますが、これらはどのような関係なのでしょうか。What is the relation between ‘’the Son of Man is glorified and God is glorified in him”?
- イエスが去って行くことを、弟子たちにどのように伝えていますか。How does Jesus tell his disciples about his leaving them?
- イエスは、ここでどのような掟を与えていますか。What commandment does Jesus give his disciples?
- 「互いに愛し合う」ことと「自分自身のように、隣人を愛すること」は同じでしょうか。Is there a difference between ‘’to love one another” and ‘’to love your neighbor as yourself”?
- 「互いに愛し合う」ことと「イエスの弟子である」ことはなぜ関係しているのでしょうか。Why are ‘to love one another” and ‘’to be Jesus’ disciple’ ’ related? (verse 34)
- ペトロは、どのような質問をイエスにしていますか。イエスはどう答えられますか。What does Peter ask Jesus? How does Jesus respond?
- 37 節のペトロの質問から、ペトロのどのような疑問と心情が想像されますか。What can you tell about Peter from his words in verse 37?
- イエスは、ペトロに何を伝えていますか。What does Jesus tell Peter as his response?
- イエスが、ペトロや弟子たちに求めたことは、何だったのでしょうか。What does Jesus want his diciples to do?

8.14 ヨハネ第 14 章

8.14.1 ヨハネによる福音書 John 14:1-11

- 13 章から背景を復習しましょう。Review the background from Chapter 13.
- どのような状況に対して「心を騒がせるな。」と言っているのでしょうか。Why does Jesus say ‘’Do not let your hearts be troubled?” What is the background?

- 「神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」とはどのような意味でしょうか。What does ‘’You believe in God; believe also in me” mean? (verse 1)
- イエスは「場所を用意しに行く」と言っていますが、それは、どのような場所なのでしょうか。What does Jesus mean by ‘preparing a place’? (verses 2, 3)
- イエスが「場所を用意しに行く」目的は何ですか。Why is Jesus going to prepare a place? (verse 3)
- イエスは「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」と言っていますが、これに対して、トマスは、どのように質問しますか。When Jesus tell his disciples ‘’You know the way to the place where I am going”, what does Thomas ask Jesus? (verses 4, 5)
- イエスは「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」と言っていますが、これに対して、トマスは、どのように質問しますか。When Jesus tells his disciples ‘’You know the way to the place where I am going”, what does Thomas ask Jesus? (verses 4, 5)
- イエスは、どのように答えますか。How does Jesus reply Thomas? (verses 6, 7)
- フィリポはどのような質問をしますか。What does Philip ask Jesus? (verse 8)
- イエスは、どのように、答えますか。What is Jesus’ answer? (verses 9 - 11)
- 「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを信じる」とは、どのようなことでしょうか。What does Jesus mean by saying ‘’Believe that I am in the Father, and that the Father is in me”? (verses 10, 11)

8.14.2 ヨハネによる福音書 John 14:12-21

- 14 章 1 節から 11 節を復習しましょう。Review verses from 1 to 11 in John 14.
- 12 節でイエスはどのような宣言をしていますか。What does Jesus tell his disciples in verse 12?
- 「イエスが行う業を行い、もっと大きな業を行うようになる」とはどのようなことを言っているのでしょうか。What do ‘they will do the works I have been doing’ and ‘even greater things than these’ mean?
- イエスの名によって願うことはかなえられるとありますが、何でもかなえられるのでしょうか。Can we simply believe that ‘Jesus will do whatever you ask in his name’? (verses 13, 14)
- 「わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。」は前後とどのように関係しているのでしょうか。How should we understand ‘If you love me, keep my commands’ in the context? (verse 15)
- イエスは「別の弁護者（助け主)」を遣わしてくださるようにお願いしてくださるとありますが、この「弁護者（助け主)」について分かることをあげてみましょう。Jesus will ask the Father that he would give

the disciples another advocate (helper). What can you tell about this advocate (helper)? (verses 16 and 17)

- イエスは戻ってくると言っていますが、いつのことを言っているのでしょうか。Jesus tell his disciples ‘’you will see me”. When will it be? (verses 18 and 19)
- 「わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。」とは何を伝えているのでしょうか。What does ‘’Because I live, you also will live.” mean?
- 「かの日に」どのようなことが分かると言っていますか。What do Jesus’ disciples realize on ‘that day’? (verse 20)
- 「イエスを愛する人」はどのような人だと言っていますか。Who is the one who loves Jesus? (verse 21)

8.14.3 ヨハネによる福音書 John 14:22-31

- 1 節から 21 節を復習しましょう。Review verses from 1 to 21.
- 弟子の一人からどのような質問が出されますか。What does a disciple ask Jesus?
- イエスはこの質問にどのように答えていますか。What is Jesus’ answer?
- 「父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。」とはどのようなことを言っているのでしょうか。What does ‘we will come to them and make our home with them’ mean?
- 「弁護者（助け手)」について書いてありますが、新たにどのようなことが書かれていますか。What is new about ‘the advocate’?
- イエスはさらに、何を残し、与えると言ってますか。What does Jesus leave and give his disciples?
- イエスは、28 節、29 節で何を伝えていますか。What does Jesus tell his disciples?
- 「世の支配者が来る」とは何のことを言っているのでしょうか。What does ‘the prince of this world is coming’ mean?
- 最後にイエスはどのようなことを告げていますか。What does Jesus tell his disciples at the end?
- このあと、どのようなことが書かれていますか。What is written after this?

8.15 ヨハネ第 15 章

8.15.1 ヨハネによる福音書 John 15:1-11

- いつ、どこで、だれに、話していますか。When, where and whom does Jesus tell this message?

- 「わたしはまことのぶどうの木」でイエスは何を伝えているのでしょうか。What does Jesus tell us by ‘’I am the true vine” ?
- 農夫としての父の仕事はどのようなものですか。What does Father do as the gardener?
- イエスの言葉によって、清くなっているとは、どういうことでしょうか。What does ’’you are already clean by the word of Jesus” mean?
- 「イエスとつながっている」は何を意味していますか。What does ’’Remain in Jesus” mean?
- イエスから離れては「何も」できないのでしょうか。Cannot we do anything apart from Jesus?
- 「わたしにつながっていない」ひととはどのような人ですか。Who are those who do not remain in Jesus?
- 「つながり続けている」ひとについては、どのようなことが書かれていますか。What is written about those who reman in Jesus?
- イエスの愛にとどまることは、どのようなことだとイエスは言っていますか。How does Jesus tell about ‘’to remain in Jesus’ love’’?
- イエスはこれらのことを話した目的は何だと言っていますか。What is the reason Jesus tells this message to his disciples?

8.15.2 ヨハネによる福音書 John 15:12-17

- 15 章 1 節から 11 節を復習しましょう。Review verses from 1 to 11.
- イエスの掟とはどのようなものですか。What is Jesus’ command?
- イエスの掟をまもることは、1 節から 11 節のどのようなことと関係していますか。Which words in verses 1 to 11 are related to observe Jesus’ command?
- 「友のために自分の命を捨てること」は何を意味しているのでしょうか。What does ‘to lay down one’s life for one’s friends’ mean?
- イエスの友とはどのような人ですか。Who are Jesus’ friends? (verses 14, 15)
- 「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」とは何を伝えているのでしょうか。What does Jesus tell by ‘You did not choose me, but I chose you’?
- イエスは弟子たちを選んだ、任命した理由をどのように語っていますか。What is the reason Jesus appoints his disciples?
- 「実」とは何なのでしょうか。What is the fruit?

- 「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるように」とはどのようなことを言っていますか。What does ‘whatever you ask in my name the Father will give you’ mean?
- なぜもう一度「互いに愛し合いなさい。」と繰り返しているのでしょうか。Why does Jesus repeat his command ‘Love each other’?

8.15.3 ヨハネによる福音書 John 15:18-27

- 15 章 1 節から 17 節を復習しましょう。Review verses from 1 to 17.
- 世に憎まれたら、何を覚えなさいと行っていますか。What should his disciples keep in mind if the world hates them?
- なぜ、世は憎むのですか。Why does the world hate Jesus’ disciples?
- 「世に属していない」とはどのような意味でしょうか。What does ‘they do not belong to the world’ mean?
- 『僕は主人にまさりはしない』とはここではどのような意味ですか。What does ‘A servant is not greater than his master.’ mean in this context?
- 人々が「これらのこと（21 節）」をする理由をどのように述べていますか。Why do the people treat Jesus’ disciples ‘this way’? (verse 21)
- イエスはこの人たちについてどのように述べていますか。What does Jesus tell about these people? (verses 22-24)
- 25 節はどのような意味ですか。What does verse 25 mean?
- 「弁護者（助け主）」について新たにどのようなことが言われていますか。What does Jesus tell about the Advocate here?
- 最後にイエスは弟子たちについてどのようなことを述べていますか。What does Jesus tell about his disciples in verse 27?

8.16 ヨハネ第 16 章

8.16.1 ヨハネによる福音書 John 16:1-15

- 「これらのことを話した」とありますが、それはどのようなことですか。What does it mean by ‘all this’ in verse 1?

- 躓（つまず）かせないためとありますが、躓くとはどのようなことでしょうか。What does falling away mean?
- 迫害するものが、自分は神に奉仕していると考える理由は何だと言っていますか。What does Jesus say about the reason they think they are offering a service to God, when anyone who kills the disciples?
- 4 節に「思い出させるため」とありますが、何を思い出させるためなのでしょうか。What do the disciples remember when their time comes? (verse 4)
- 一緒にいるときと、いないときはどう違うのでしょうか。What is the difference whether Jesus is with them or not?
- 弟子たちはなぜ悲しいのでしょうか。Why are the disciples filled with grief?
- イエスはなぜ去っていることが良いことだと言っていますか。Why is it good for them that Jesus is going away?
- 弁護者（助け手）が来ると、どのようなことが明らかにされますか。What does the Advocate prove them?
- なぜ、弟子たちは、今は理解できないのでしょうか。Why don't the disciples understand?
- 弁護者（助け手）はどこからきて、誰から受けたことを、弟子たちに告げるのですか。Where does the Advocate, helper, come? From whom does it receive messages?

8.16.2 ヨハネによる福音書 John 16:16-24

- イエスはどのような話の中で 16 節のことばを語りますか。What was Jesus talking about when he said the message in verse 16?
- 弟子たちは、どのような疑問を持ちますか。What are the questions of his disciples?
- 「イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って」とありますが、なぜ弟子たちは、尋ねなかったのでしょうか。Why don't the disciples ask when 'Jesus saw that they wanted to ask him about this'?
- 20 節前半の「あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。」は何を伝えているのでしょうか。What does 'you will weep and mourn while the world rejoices' in the first half of verse 20 mean?
- 20 節後半の「あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」ことを 21 節ではどのような状態だと説明していますか。How does verse 21 explain 'You will grieve, but your grief will turn to joy' in the latter half of verse 20?
- 22 節では「あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」ことをどのように説明していますか。How does verse 22 eplain 'You will grieve, but your grief will turn to joy'?

- 「その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」とは何を伝えているのでしょうか。What does ‘no one will take away your joy’ mean?
- 「何も尋ねなくなること」「父に願うことは、父がお与えになること」と喜びはどのように関係しているのでしょうか。How does the joy relate to ‘no longer ask me anything’ or ‘my Father will give you whatever you ask in my name’?
- イエスが伝えている「あなたがたは喜びで満たされる」とは、どのようなことなのでしょうか。What does Jesus mean by ‘your joy will be complete’?
- 弟子たちの疑問は、解けたのでしょうか。Were the questions of the disciples resolved?

8.16.3 ヨハネによる福音書 John 16:25-33

- イエスはこれまで何を伝え、弟子たちはどんな疑問を持っていましたか。What does Jesus tell his disciples? What are the questions of them?
- 「たとえを用いて話してきた」と言ってますが、それは、どんなことを伝えているのでしょうか。What does Jesus mean by ‘speaking figuratively’?
- 「イエスの名によって願う」とはどのようなことを意味していますか。What does ‘asking in Jesus’ name’ mean?
- なぜ「イエスの名によって」願うことになると言っているのですか。Why do the disciples ask in Jesus’ name?
- イエスは、28 節でどのようなことを伝えていますか。What does Jesus say in verse 28?
- 弟子たちは、なんと応答しますか。What do his disciples respond? (verses 29, 30)
- 「あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないこと」とはどのようなことを言っているのでしょうか。What do his disciples mean by saying ‘you know all things and that you do not even need to have anyone ask you questions’ ?
- 31 節のイエスのことばから、あなたは、何を受け取りますか。What can you tell by Jesus’ words in verse 31?
- 32 節の「あなた方が散らされて自分の家に帰ってしまう」ことは、具体的にどのようなことを意味しているのでしょうか。What does the time ‘you will be scattered, each to your own home’ actually mean?
- イエスは、最後のことばで、弟子たちにどのようなメッセージを送っているのでしょうか。What is the last message of Jesus to his disciples in verse 33?

8.17　ヨハネ第 17 章

8.17.1　ヨハネによる福音書 John 17:1-8

- 「イエスはこれらのことを話してから」（v1）とありますが、いつ、どのような場で、だれに対して、どんなことを話しましたか。We read in verse 1, ‘After Jesus said this’. When, where, to whom and what did Jesus tell?
- イエスは「時が来ました」と言っていますが、それはどのような時なのでしょうか。What does ‘the hour has come’ mean?
- 「栄光を現す」とか「栄光を与える」とは何を言っているのでしょうか。What does ‘glorify your son’ or ‘glorify you’ mean?
- 2 節に「すべての人を支配する権能」とありますが、このことと「永遠の命を与える」ことはどのような関係にあるのでしょうか。What is the relation between ‘the authority over all people’ and ‘to give eternal life’ in verse 2?
- 3 節に「永遠の命」の定義がありますが「命」が「知ること」とはどういうことでしょうか。In verse 3, eternal life is defined ‘to know’. What does it mean?
- 4 節に「業を成し遂げた」とありますが、どのような業を成し遂げたのでしょうか。What is the work Jesus is finishing [or has accomplished] on earth? (verse 4)
- 「世界が造られる前に持っていた栄光を与えてください」とはどういうことでしょうか。What does Jesus ask for Father in verse 5? ‘The glory Jesus had with Father before the world began?’
- 「世から選び出してわたしに与えてくださった人々」とは誰のことですか。Who are ‘those who Father gave Jesus out of the world’?
- この人たちは、どのようなことを知り、どのようなことを信じていますか。What do these people know and what do they believe?
- イエスが父から受けるといっている栄光と、このひとたちが、御言葉を守り、イエスについて、イエスを遣わした方について知っていることは、関係しているのでしょうか。Is the glory Jesus receives related to these people written in verses 6 to 8?%Does the glory Jesus receives from Father have something to do with these people?

8.17.2 ヨハネによる福音書 John 17:9-19

- 1 節から 8 節を復習しましょう。9 節の「彼ら」「わたし」「あなた」とはそれぞれ誰のことですか。Review verses from 1 to 8. Who are 'them', 'I' and 'you' in verse 9.
- 「彼ら」はだれに属する存在だと言っていますか。To whom do 'they' belong to?
- 「彼らによって栄光を受けた」とありますが、それはどういうことでしょうか。What does it mean that 'glory has come to me through them'?
- 彼らが一つになるとは何を意味しているのでしょうか。What does 'they may be one' mean?
- 彼らを守ったと言っていますが、誰から守ったのでしょうか。From whom Jesus protected them?
- イエスの喜びが満ちあふれるとは何を言っているのでしょうか。What does it mean that the full measure of my joy within them?
- 彼らと世とはどのような関係ですか。What is the relationship between 'them" and 'the world'?
- 「聖なるものとする」「世に遣わす」はそれぞれ何を意味していますか。What does 'sanctify' and 'send' mean in verses 17 and 18?
- 19 節は何を意味しているのでしょうか。What does verse 19 mean?
- イエスが、彼らについて、願っていることは、何ですか。What does Jesus pray for them?

8.17.3 ヨハネによる福音書 John 17:20-26

- イエスはこんどはだれのためにお願いしていますか。For whom does Jesus pray?
- 「一つにしてください」とはどのような意味で「ひとつ」なのでしょうか。What does it mean that 'they may be one'?
- なぜ、世は、神様がイエスを遣わしたことを信じるようになるのですか。Why do the world believe that Father sent Jesus?
- 「あなたがくださった栄光」とは何ですか。What is the glory that Father gave Jesus?
- 23 節は何を言っていますか。21 節の繰り返しですか。What does verse 23 mean? Is it same as the verse 21?
- 24 節ではこんどはイエスは何を祈っていますか。What does Jesus pray for them in verse 24?
- 25 節の「この人々」はだれのことですか。Who are 'they' in verse 25?

- 26 節の「御名を彼ら知らせました」とはどのような意味ですか。What does ‘I have made you known to them’ mean in verse 26?
- イエスが祈っているのはどのようなことですか。What does Jesus pray for them?
- あなたは、17 章のイエスの祈りから、なにを学びましたか。What do you learn from Jesus’ prayer in Chapter 17?

8.18 ヨハネ第 18 章

8.18.1 ヨハネによる福音書 John 18:1-11

- イエスと弟子たちは、どこから、どこへ向かいますか。その場所については、どのようなことが分かりますか。Where do Jesus and his disciples go? What do you know about the place they go to?
- どのような人たちがどのようにして現れますか。どのようなことが分かりますか。Who appear? What do you tell from verse 3?
- 他の福音書の記述と比較してみましょう。Compare with the descriptions in other Gospels?
- イエスはどのようにこの人たちを迎えますか。（4 節）How does Jesus respond when they come? (verse 4)
- 4 節から 6 節のイエスと彼らの会話のあとどのようなことが起こりますか。What happens after the conversation between Jesus and them in verses four to six?
- イエスはここでどのような要求をしますか。（8 節）What does Jesus request them? (v.9)
- 9 節からヨハネは何を伝えようとしているのでしょうか。What does John tell us in verse 9?
- このとき、シモン・ペトロはどうしますか。What does Peter do then?
- イエスは、ペトロにどのように言いますか。What does Jesus tell Peter?
- ヨハネが、他の福音書の記述を知っているとすると、ここで何を伝えようとしているのでしょうか。Suppose John knows other Gospels. What does John tell us in this story?

8.18.2 ヨハネによる福音書 John 18:12 - 27 (1)

- イエスが捕らえられる時の状況を復習しましょう。Review how Jesus is arrested.
- 誰のところへ連れて行かれますか。Where do they bring Jesus?
- 誰がついて行きますか。Who follow the arrested Jesus?

- イエスの裁判はだれのもとで行われますか。（18,19 章）Who questions Jesus in the court? (Chapters 18 and 19)
- 他の福音書では裁判をどのように書いていますか。What do other Gospels tell us about the trial of Jesus?
- 大祭司はイエスに何を尋問しますか。What does the high priest ask Jesus?
- イエスはどのように答えますか。How does Jesus respond him?
- なぜイエスはこのように答えるのでしょうか。Why does Jesus respond in this way?
- どのようなことが起きますか。（22,23 節）How do the people respond? (verse 22, 23)
- イエスは誰の元に送られますか。To whom do they send Jesus?

8.18.3 ヨハネによる福音書 John 18:12 - 27 (2)

- 背景となっている、イエスが捕らえられたあとの箇所を確認しましょう。Review the background after the arrest of Jesus. （vs. 12-14, 19-24）
- ペトロの離反の予告の箇所を復習しましょう。Review what Jesus said about Peter's denial. (13:36-38)
- ペトロはどのようにして門の中に入りますか。How does Peter enter the gate?
- だれがペトロになんと聞きますか。Who ask Peter and what?
- ペトロはなんと答えますか。How does Peter respond?
- このあとペトロはどうしますか。What does Peter do after his first denial?
- 他の福音書と比較してみましょう。Compare with other Gospels.
- 今度は、だれがペトロに聞き、ペトロはどのように答えますか。Who ask Peter and how does he respond?
- 三度目に、だれがどのように証言し、それにペトロはどのように答えますか。Who testify then and what? How does Peter respond?
- この箇所を通してヨハネは何を伝えているのでしょうか。What does John tell us from this story?

8.18.4 ヨハネによる福音書 John 18:28-40

- 人々はイエスをどこから、誰の元へ連れて行きますか。Where do the Jewish leaders take Jesus?

- 人々と、ピラトとの間には、どのような会話がありますか。What do the Jewish leaders and Pilate discuss?
- なぜ、自分たちで死刑にしないのですか。Why do they not execute Jesus?
- ピラトはイエスにどのような質問をしますか。（33 節）What does Pilate ask Jesus?
- イエスはどのように応答しますか。（34 節）How does Jesus respond?
- このあと（35-38 節）、ピラトと、イエスの間には、どのような会話がありますか。What do they talk after this? (vs 35-38)
- 39, 40 節を見てみましょう。人々の望んでいることは何なのでしょうか。What do these people want? (verses 39, 40)
- ピラトはどう考え、判断しているでしょうか。そして、何を望んでいるのでしょうか。What does Pilate think of Jesus? What does he want?
- イエスは、ピラトに何を伝えていますか。What does Jesus tell Pilate?
- ヨハネは、何を伝えようとしているのでしょうか。What does John tell us?

8.19 ヨハネ第 19 章

8.19.1 ヨハネによる福音書 John 19:1-16

- 総督ピラトの官邸での様子を復習しましょう。Review Jesus at the palace of the Roman governor Pilate in 18:28-40.
- ピラトはイエスをどうしますか。What does Pilate do to Jesus? (verses 1 - 3)
- 他の福音書ではどのように書かれていますか。How do the other gospels describe the scene?
- ピラトは、なぜイエスをユダヤ人の前に引き出すのでしょうか。Why does Pilate bring Jesus in front of the Jews?
- ピラトは「神の子と自称した」と聞いてどうしますか。When the Jews say that Jesus claims to be the Son of God, what does Pilate do?
- イエスはピラトの権限についてどのように言っていますか。What does Jesus talk about the power of Pilate.
- ピラトはなぜ釈放しようとしたのでしょうか。Why does Pilate try to release Jesus?
- これに対してユダヤ人たちはどうしますか。What do the Jews respond to it?

- ピラトはどのような判決をくだしますか。What verdict does Pilate give Jesus?
- ヨハネは、十字架刑の判決を通して、何を伝えているのでしょうか。What does John tell us through this verdict?

8.19.2 ヨハネによる福音書 John 19:17 - 24

- 16 節までのいきさつを確認しましょう。Review 19:1-16.
- 刑場までのことはどのように書かれていますか。What does John describe Jesus on the way to Golgotha?
- 他の福音書の記述を確認しましょう。Compare John with the other Gospels.
- イエスはどのようにして十字架につけられますか。How do they crucify Jesus? (vs17-19)
- 罪状書にはどのように書かれていますか。What is written on the sign?
- 罪状書の文言に関してユダヤ人たちとピラトのどのようなことが記録されていますか。What do the Jews request and how does Pilate respond to it?
- イエスの衣服はどのようにされますか。How do they do with Jesus' garments?
- 衣服のことはどのような聖書の言葉の実現だとしていますか。Which verse of the Bible is fulfilled by the incident on Jesus' garments?
- ヨハネは、この箇所を通して何を伝えているのでしょうか。What does John tell us?

8.19.3 ヨハネによる福音書 John 19:25-30

- 17 節から 24 節を復習しましょう。Review 19:17-24.
- イエスの十字架のそばには、どのような人たちがいますか。Who are there near the cross of Jesus?
- 他の福音書の記述を確認しましょう。Compare John with the other Gospels.
- 四人の女性たちはどのような人たちですか。What do you tell about these four women?
- イエスは弟子にどのように伝えますか。What does Jesus tell his disciple?
- 28 節に「成し遂げられた」とありますが、何のことを言っているのでしょうか。What had been finished? (v. 28)

-「渇く」と言われますが、何に渇いているのでしょうか。What is Jesus thirsty for?

- 人々はどうしますか。What do they do to Jesus? (v29)
- イエスの最後をヨハネはどのように描いていますか。How does John describe Jesus' last?
- ヨハネは十字架でのイエスの死について何を伝えているのでしょうか。What does John tell us about Jesus' death on the cross?

8.19.4 ヨハネによる福音書 John 19:31-37

- 17 節から 30 節までを復習しましょう。Reivew 19:17-30.
- イエスが十字架にかけられた日はどのような日でしたか。What can you tell about the day Jesus is crucified?
- ユダヤ人たちは何をピラトに願いますか。それはなぜですか。What do the Jews ask Pilate? Why?
- 兵士たちはどうしますか。What do the soldiers do to them?
- そのときのイエスの状態についてはどのようなことが分かりますか。What do you tell about Jesus' body?
- イエスの死因は何だったのでしょうか。What is the cause of death of Jesus?
- 35 節には証言者についてどのように書かれていますか。What can you read about the one testifies it in verse 35?
- 骨が砕かれないことはどのような意味を持っているのでしょうか。What is the significance of ''Not one of his bones will be broken"?
- 37 節はどのような意味でしょうか。What does the verse 37 mean?
- ヨハネはイエスの死についてなにを伝えているのでしょうか。What does John tell us about the death of Jesus?

8.19.5 ヨハネによる福音書 John 19:38 - 42

- 19 章 17 節から 37 節を復習しましょう。Review 19:17 - 37.
- まずだれがイエスの遺体を取り降ろすことを願い出ますか。Who asked Pilate for the body of Jesus?
- なぜ、この人が、ピラトに願い出ることができたのでしょうか。Why could he dare to ask Pilate?
- ヨハネはなぜわざわざこの人にとって不名誉なことを書いたのでしょうか。Why did John introduce this person in this way?

- 他に、だれがイエスの遺体の引き取り、埋葬に加わりますか。Who else joined to take Jesus' body and bury it?
- 埋葬についてわかることをあげてみましょう。How did they bury Jesus' body?
- 他の福音書にはどのように書かれていますか。Compare with other gospels.\marginpar{Mt 27:57-61, Mk 15:42-47, Lk 23:50-56
- ヨハネは、何を伝えているのでしょうか。What does John tell us about Jesus' burial?

8.20 ヨハネ第 20 章

8.20.1 ヨハネによる福音書 John 20:1-10

- イエスの埋葬について復習しましょう。Review the burial of Jesus' body. (John 19:38-42)
- いつ、誰が、どこへ行き、何を発見しますか。Who went to the tomb? When was it? What was the discovery?
- マグダラのマリアはどのような人ですか。Who is Mary Magdalene?
- この人は、誰に、どのように報告しますか。Who did she tell?
- 報告を聞いたひとたちはどうしますか。What did they do when they heard the news?
- 墓の中はどのような状態でしたか。Describe the place where Jesus' body was laid.
- 8 節に「もう一人の弟子も見て信じた」とありますが、何を信じたのでしょうか。What did he see and believe? (verse 8)
- 9 節は何を伝えているのでしょうか。What does verse 9 tell?
- 他の福音書と比較してみましょう。Compare with other gospels.
- ヨハネは何を伝えているのでしょうか。What does John tell us from this?

8.20.2 ヨハネによる福音書 John 20:11-18

- 1 節から 10 節を復習しましょう。Review verses 1 to 10.
- マリアはどこで、何をしていて、何を発見しますか。Where is Mary? What is she doing? What does she find?
- 天使たちは、マリアにどのように話しかけますか。マリアはどのように答えますか。What do the angels ask Mary? How does she answer?

- なぜ気づかなかったのでしょう。Why didn't she recognize Jesus? (verse 14)
- イエスは何と語りかけ、マリアはどのように応答しますか。How does Jesus talk to Mary? How does Mary respond to him? (verses 15, 16)
- イエスはマリアにどのようなことを伝えますか。What does Jesus tell Mary? (verse 17)
- なぜ、イエスは「すがりついてはいけません。」とマリアに命じるのでしょうか。Why does Jesus tell Mary 'Do not cling to me'?
- マリアに託した伝言は何を伝えているのでしょうか。What is Jesus' message entrusted to Mary?
- それから、マリアはどうしますか。What does Mary do?
- ヨハネはこの場面から何を伝えているのでしょうか。What does John tell us from this scene?

8.20.3 ヨハネによる福音書 John 20:19-23

- 1 節から 18 節を復習しましょう。Review verses 1 to 18.
- イエスは、いつ、弟子たちに現れますか。When does Jesus appear to his disciples?
- 弟子たちは、なぜ、ユダヤ人を恐れているのですか。Why do they fear the Jews?
- イエスは、どのように、現れますか。How does Jesus appear to his disciples?
- イエスはなぜ、手と、わき腹を見せるのでしょう。弟子たちは、どのような反応をしますか。Why does Jesus show his hands and side. How do they respond?
- イエスは、まず、何を、弟子たちに告げますか。What does Jesus tell his disciples first?
- 父なる神がイエスを遣わした目的は何ですか。What is the purpose Father sent Jesus?
- イエスは、次に、どのように、何を告げますか。What does Jesus tell his disciples next?
- 弟子たちは罪を裁く権威が与えられたと言うことでしょうか。Do they receive authority to judge sins?
- ヨハネは、この箇所で、何を証言しているのでしょうか。What does John testify through this scene?

8.20.4 ヨハネによる福音書 John 20:24 - 29

- 19 節から 23 節を復習しましょう。どんなことがありましたか。Review verses from 19 to 23. What happened?

- 弟子たちは、どのように、トマスに告げ、トマスは、どのように応えますか。What do the disciples tell Thomas? How does he respond?
- トマスはどのような人ですか。What do you know about Thomas?
- いつ、どのような時に、イエスはどのように、現れますか。When and how does Jesus appear to his disciples?
- イエスはトマスにどのように言いますか。What does Jesus tell Thomas?
- トマスはどう応答しますか。How does Thomas respond?
- イエスは、さらに、どのように伝えますか。What does Jesus further tell Thomas?
- ヨハネは何を伝えようとしているのでしょうか。What does John tell the reader?

8.20.5 ヨハネによる福音書 John 20:30 - 31

- 21 章を読んでみましょう。20 章までと書き方に変化がありますか。Read Chapter 21. Any differences with Chapters 1 - 20 in writing?
- 21 章は付録でしょうか。Is Chapter 21 an appendix?
- なぜ「この書物には書いてない」などということを書いたのでしょう。Why does John write that Jesus performed many other signs?
- 「しるし」とは何でしょうか。What are signs?
- なぜ、すべて書かないのでしょうか。Why he does not write everything?
- この書が書かれた目的は何ですか。What is the purpose of this book?
- 「イエスは神の子メシアであると信じる」とはどのようなことでしょうか。
- 「いのちを受ける」とは、どのようなこととして、ヨハネは伝えているのでしょうか。
- 本書の目的は達成されていますか。Is the purpose of this book achieved?

8.21 ヨハネ第 21 章

8.21.1 ヨハネによる福音書 John 21:1 - 14

- 20 章には、どのようなことが記録されていますか。What is written in Chapter 20?
- いつ、どこで、なにが起こりますか。What happened? Where and When?

- だれが、その場にいますか。Who are there?
- 彼らは、なぜ、漁に行くのでしょう。Why do they go fishing?
- イエスはどのように彼らに現れ、どのように話しかけますか。How does Jesus appear himself to his disciples? What does he talk to them?
- ペトロは「主だ」と聞くと、どうしますか。それは、なぜでしょう。When Peter heard ‘’It is the Lord” how does he respond?
- 他の弟子たちは、どうしますか。What do other disciples do?
- イエスは、どのような指示を弟子たちにあたえますか。What does Jesus tell his disciples?
- 何が伝えられているのでしょうか。What does the writer want to tell us?
- この部分があとから加えられたとしたら、それは、なぜでしょうか。Why do you think this story becomes a part of the gospel?

8.21.2 ヨハネによる福音書 John 21:15-19

- 1 節から 14 節を復習しましょう。どのような時にイエスはシモン・ペトロに話しかけますか。Review verses 1 - 14. When does Jesus talk to Simon Peter?
- ヨハネによる福音書には\marginpar{1;40-42, 6:66-69, 13:6-11, 24, 36-38, 18:10, 11, 15-18, 25-27, 20:1-10, 21:2, 3, 7, 11、ペトロについてどのように書かれていましたか。What is written about Peter in John?
- まずイエスはどのようにシモン・ペトロに言い、ペトロはどのように答えますか。What does Jesus talk to Simon Peter and how does he respond?
- イエスは二度目、三度目にペトロに話しますが、イエスの言葉に何か変化がありますか。Jesus talks to Peter two more times. Any changes?
- ペトロの答えに何か変化がありますか。Any changes in Peter’s response?
- ペトロの否認とは関係していますか。関係しているとすると、それはどのようなことでしょうか。Is it related to Peter’s denial? If so, how?
- このあと、イエスは、ペトロに何を告げますか。What does Jesus tell Peter next?
- イエスがペトロに伝えたかったことは何でしょうか。What does Jesus want to tell Peter?

%- ペトロだけへのメッセージでしょうか。Is this a special message to Peter?

- この記事が伝えていることは、何ですか。What is the message?

8.21.3 ヨハネによる福音書 John 21:20-25

- 21 章の最初から復習しましょう。Review Chapter 21:1-19.
- ペトロは、だれが、どのようにしていることを発見しますか。What does Peter see?
- ペトロは、何と、イエスに質問しますか。それは、なぜでしょう。What does Peter ask Jesus? Why?
- ペトロは「イエスが愛された弟子」についてどう考えていたのでしょうか。What do you think is the disciple Jesus loved to Peter?
- イエスはどのように答えますか。What is Jesus' response?
- イエスが伝えたかったことはなんですか。What does Jesus want to tell Peter?
- 23 節からどのようなことがわかりますか。What does verse 23 tell us?
- 著者についてどのように書かれていますか。Who is the author of this gospel?
- ヨハネによる福音書は、最後、どのようなメッセージで終わっていますか。What is the ending message of the gospel?
- 「イエスの愛しておられた弟子」の使命は何だったのでしょうか。What is the mission of the disciple whom Jesus loved?

8.21.4 ヨハネによる福音書 John 1:1 - 18

- 21 章 20 - 25 節には著者についてどのように書かれていますか。What do you tell about the author from 21:20 - 25?
- 20 章 30, 31 節には、この書の目的についてどのように書かれていますか。What do you tell about the the purpose of this book in 20:30,31?
- ヨハネによる福音書に登場する主要人物をあげてみましょう。List main figures in John's gospel.
- ヨハネによる福音書はどのようにはじまりますか。How does John's gospel begin?
- 「言（ことば)」についてどのように書かれていますか。List what is written about the Word.
- 「言葉」と「命」と「光」についてどのように書かれていますか。List what is written about the word, the life and the light.
- ヨハネの役割は何ですか。What is the roll of John?

- 「わたしたち」は何を証言していますか。What do ‘we’ testify?
- 冒頭部分は何を伝えているのでしょうか。What is the message of ‘the beginning’?
- この福音書からあなたは何を学びましたか。What did you learn from John’s gospel?

第 9 章

使徒言行録（2008-2011）

質問票（8 章以降のみ）：ディスカッション・クエスチョン（PDF）

使徒言行録を学んで行くにあたって

使徒言行録（使徒行伝, Acts）は、パウロの伝道旅行に伴って行った医者ルカ（コロサイ 4:14）によると言われている。4 福音書の一つルカによる福音書の著者で四福音書の中では、唯一の異邦人（非ユダヤ人）。2 世紀の伝承では、シリアのアンティオケの生まれだと言われている。ルカについては、上記の箇所以外聖書には 2 度現れる。ピレモン２４, II テモテ４：１１。

- テキストから何が分かるかを中心に学びましょう。
- 著者が何を伝えたいと思っているかを中心に学びましょう。

9.1 使徒言行録第 1 章

9.1.1 使徒言行録 Acts 1:1–11

- ルカの福音書と書との働きとは、ルカが初期の教会の出来事を記録してその 1, 2 巻として書いたものです。良書尾序言（ルカ 1:1–4, 使徒 1:1–5）を読みましょう。a. この報道の資料の出所と記述の目的をルカはどのように述べていますか。b. この二つの文書の受取人について、どんなことがわかりますか。
- a. 1:1-11 の情報しかないとしたら、イエスについてどんなこ t がわかりますか、あげてみましょう。b. ルカはイエスの復活の真実性をどのように強調していますか。
- a. 復活したイエスは、弟子になにを命じますか（4 節）b. イエスはこの命令にどんな約束を加えますか。c. この箇所とマルコ 1:6–8, ルカ 24:49 を比べてみましょう。

9.1.2 使徒言行録 Acts 1:12–36

9.2 使徒言行録第 2 章

9.2.1 使徒言行録 Acts 2:1-13

- a. ペンテコステの日に起きたことを順を追ってあげていきましょう。b. “ような’’（2, 3 節）ということばは、聖霊の来臨について何を湿していますか。c. そのことは、弟子たちにまずどんな結果となって現れますか。（4 節）
- a. どんな人々が集まっていますか。b. 傍観者たちはなぜ驚くのですか。c. 聴衆はどんな内容の話を聞いていますか。d. それぞれどんな反応を示しますか。e. 今日、人は神の力と栄光の証明を見ると、どんな反応をしますか、なぜですか。
- a. ペンテコステの日にそこに居合わせて人々の出身地を地図（40, 41 ページ）で探してみましょう。b. このことはキリストの教えの広まりに、どんな影響をするでしょうか。

9.2.2 使徒言行録 Act 2:14-21

- a. ペテロは目前で起きた出来事をどう説明していますか

9.2.3 使徒言行録 Act 2:22-36

9.2.4 使徒言行録 Act 2:37-47

9.3 使徒言行録第 3 章

9.3.1 使徒言行録 Act 3:1-10

9.3.2 使徒言行録 Act 3:11-26

9.4 使徒言行録第 4 章

9.4.1 使徒言行録 Act 4:1-22

9.4.2 使徒言行録 Act 4:23-31

9.4.3 使徒言行録 Act 4:32-47

9.5 使徒言行録第 5 章

9.5.1 使徒言行録 Act 5:1-11

9.5.2 使徒言行録 Act 5:12-26

9.5.3 使徒言行録 Act 5:27-42

9.6 使徒言行録第 6 章

9.6.1 使徒言行録 Act 6:1-7

9.6.2 使徒言行録 Act 6:8-15

9.7 使徒言行録第 7 章

9.7.1 使徒言行録 Act 7:1-53

9.7.2 使徒言行録 Act 7:54-60

9.8 使徒言行録第 8 章

9.8.1 使徒言行録 Acts 8:1–25

- ステファノの事件をきっかけに起こった大迫害によってどのようなことが起こりましたか。What happened by the persecution following Stephen's martyrdom?

- なぜ散らされていった人たちはみことばをのべつたえるのでしょうか。Why did those who scattered preached the word wherever they went?
- シモンについてどのようなことがわかりますか。What can you tell about Simon in verse 9?
- ペテロとヨハネは何のためにサマリヤに来たのでしょうか。Why did Peter and John come to Samaria?
- シモンは何をほしかったのでしょうか。What do you think Simon wanted to have?
- シモンの何が神の前に正しくないのでしょうか。What is not right in Simon before God?

9.8.2 使徒言行録 Acts 8:26-40

- ピリポが遣わされたのはどのような人ですか。Who was Philip sent to?
- ピリポはどうしますか。How did Philip approach him?
- なぜこの人は、バプテスマを受けたいと思ったのでしょう。Why did he want to be baptized?
- なぜ主の霊はピリポをさらっていったのでしょうか。Why did the Sprit of the Lord took Philip away?

9.9 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 9 章

9.9.1 使徒言行録 Acts 9:1–19

- これまでにサウロについてわかっていることを復習しましょう。Review what is known about Saul. (7:58-8:3)
- なぜサウロは教会をこれまで激しく迫害するのでしょうか。Why does Saul try to destroy the church?
- サウロはダマスコ途上でどのような経験をしますか。What does Saul experience on the way to Damascus?
- アナニヤはどのような働きをしますか。What does Ananias do to Saul?
- サウロの回心にとって鍵となったことはどのようなことでしょうか。What are the keys to Saul's conversion?

9.9.2 使徒言行録 Acts 9:20–31

- v19b–25 の記述からダマスコにおけるその後のサウロについてどんなことがわかりますか。What can you find about Saul in Damascus after his conversion?
- サウロのメッセージの中心は何ですか。What is the message of Saul there?

- サウロはエルサレムでどのような事を経験しますか。What does Saul experience in Jerusalem?
- v31 の教会についての記述から何がわかりますか。What can you tell about Church described in v31?

9.9.3 使徒言行録 Acts 9:32–43

- リダ（ルダ）でペテロはどのような人をどのようにいやしますか。Who and how does Peter heal in Lydda?
- タビタについてどんなことがわかりますか。What can you tell about Tabitha?
- 二つの記事からどのようなことがわかりますか。What do you learn from these?

9.10 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 10 章

9.10.1 使徒言行録 Acts 10:1–23

- コルネリウスについてどんなことがわかりますか。What can you find about Cornelius?
- コルネリウスはどのような信仰を持っていたと思いますか。How do you describe Cornelius' faith?
- ペテロは心中で何と戦っていますか。What is Peter fighting against in his heart?
- 神はどのように働いておられますか。How is God working here?

9.10.2 使徒言行録 Acts 10: 23–33

- ペテロには、結局どうしますか、また、だれが同行しますか。What does Peter do? Who accompany Peter?
- コルネリオはどのようにしてペテロたちを迎えますか。How does Cornelius welcome Peter?
- 彼らの出会いは、特別に準備されたことだと知ることは、ふたりにとってどんな意味がありますか。What does it mean to Peter and Cornelius that God is working behind?

9.10.3 使徒言行録 Acts 10:34–48

- ペテロにが強調していることはどんなことですか。What is the main points of Peter's message?
- 人はどのようにして罪のゆるしをうけるのですか。How can a man receive forgiveness of sins?

- 「異邦人にも」ということはなぜそれほど重要なのでしょうか。Why is it important that the Holy Sprit is poured out ‘even on the Gentiles’?

9.11 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 11 章

9.11.1 使徒言行録 Acts 11:1–18

- 異邦人が神の言葉を受け入れたと聞いたときの使徒や兄弟たちの反応はどのようなものでしたか。How did the apostles and the brothers react when they heard that Gentiles had received the word of God.
- なぜ素直に喜ぶことができないのでしょうか。Why did they fail to accept the news with joy?
- ペテロは非難に対してどのように説明していますか。How did Peter explain it to them?
- 結果はどのようなものだったでしょう。What was the outcome?

9.11.2 使徒言行録 Acts 11:19–30

- この時点まで福音が広まっていった過程を段階ごとに確認してみましょう。Review how the gospel prevailed up until this time step by step.
- エルサレム教会はなぜ、バルナバをアンテオキアに派遣したのでしょうか。Why did the the church at Jerusalem send Barnabas to Antioch?
- バルナバはアンテオキアでどのような働きをしますか。What did Barnabas do in Antioch?
- バルナバはなぜパウロをアンテオキアに連れて行くのでしょうか。Why did Barnabas brought Saul to Antioch?
- クラウディウス帝の時に起こった飢饉についてどのようなことが記されていますか。What is recorded about the famine during the reign of Claudius?

9.11.3 バルナバとサウロ - Barnabas and Saul\\ Acts 11:25, 26, 30

1. Acts 4:36-37
2. Acts 7:58-8:3
3. Acts 9:1-30

9.11.3.1 使徒 12 章以後のバルナバ - Barnabas after Acts 12

Acts 12:25, 13:1-4, 7, 9, 14, 42, 50, 14:1, 12, 14, 20, 15:2, 12, 22, 25-26, 35-40, 1Cor 9:6, Gal 2:1, 9, 13, Col 4:10[*1]

9.12 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 12 章

9.12.1 使徒言行録 Acts 12:1–19

- これまでの迫害について復習してみましょう。Review the persecutions against the disciples. (Acts 4:1–31, 5:17–32, 6:8–15, 7:54–60, 8:1–3)
- ヘロデが弟子たちを迫害した理由は何だったでしょうか。What is the reason Hedod persecuted the disciples?
- ペテロはいつ、どのようにして救い出されますか。When and how was Peter rescued?
- ペテロがマリヤの家に着いたとき、人々はなにをしていますか。What were the disciples doing when Peter visited the house of Mary?
- なぜこれほどまでに驚いているのでしょうか。Why were they surprised so much?
- 奇跡的なペテロの救出の結果、さらにどんなことが起こりますか。What followed after the Peter's miraculous rescue? (v18, 19)

9.12.2 使徒言行録 Acts 12:20–25

- ヘロデはなぜ主の使いに打たれたのでしょう。Why was Herod struck by the angel of the Lord?
- この章の最後にどのようなことが記されていますか。What is recorded at the closing of this chapter? (v24, 25)

9.13 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 13 章

9.13.1 使徒言行録 Acts 13:1–3

- アンティオキアの教会はどのような教会で、どのような人たちがいますか。List the members of the church at Antioch.

[*1] Acts 使徒言行録, 1 Cor コリント人への第一の手紙, Gal ガラテヤ人への手紙, Col コロサイ人への手紙

- バルナバとサウロはどのようにして宣教旅行に出発しますか。How do Barnabas and Saul start their mission trip?

9.13.2 使徒言行録 Acts 13:4-12

- 彼らは第一回伝道旅行を、どこから始めますか。何か理由が考えられますか。Which city do they visit first? Why?
- なぜ、最初にはユダヤ人の会堂を訪ねるのでしょうか。またそこにはどのような人がいますか。Why do they visit the synagogue first? Who do they meet there?
- パフォスではどのようなことが起こりますか。What happens in Paphos?
- サウロはエルマがしていることをどのように咎めていますか。How does Saul accuse Elymas?
- その結果どうなりますか。What is the outcome?

9.13.3 使徒言行録 Acts 13:13-43

- v13 のヨハネはどのような人ですか。なぜ、エルサレムに帰ってしまうのでしょう。Who is John in v13? Why do you think he returns to Jerusalem?
- パウロの説教の中で、歴史の中で神はどのようなことをして下さったと語っていますか。How does Paul describe God's action in history?
- バプテスマのヨハネのしたことは、どんなことだと言っていますか。What is Paul's claim on John the Baptist?
- パウロは、ダビデとイエスについてどのようなことを言っていますか。What does Paul say about David and Jesus?
- パウロの説教の要点は何でしょうか。What is the point of Paul's message?
- パウロの説教の結果、どのようなことが起こりますか。What is the outcome of Paul's message?
- ユダヤ人はどんな反応をしますか。なぜですか。What is the Jews' response? Why?
- 異邦人は、どんな反応をしますか。What is the gentile's response?
- アンティオケアでの宣教の結果はどうでしたか。あなたはどう評価しますか。How do you assess the result of the ministry in Antioch?

9.14　使徒言行録 Acts 第 14 章

9.14.1　使徒言行録 Acts 14:1–7

- イコニオンでのことをまとめてみましょう。

Summarize what happened in Iconium.

- なぜこのような激しい分裂が起こるのでしょうか。

Why were the people of the city divided?

9.14.2　使徒言行録 Acts 14:8–20

- 生まれつき足いひとがいやされたことについてどう記されていますか。

What is recorded about the healing of a crippled man from birth?

- リストラの人々はパウロの行ったことを見てどのように反応しますか。

How did the people of Lystra react to what Paul did?

- これに対して、パウロはどのようなメッセージを語っていますか。

How did Paul respond to them?

- アンティオキアとイコニオンから来たユダヤ人たちはどのような事をしますか。

What did the Jews from Antioch and Iconium did?

9.14.3　使徒言行録 Acts 14:21–28

- 二人がどのような道をとおり、何をしながらアンティオキアまで戻っていきましたか。

What did Paul and Barnabus do on their way back to Antioch?

- 二人はアンティオキアでどのような報告をしましたか。

What was the report of the two in Antioch?

9.15　使徒言行録（使徒行伝, Acts）　第 15 章

9.15.1　使徒言行録 Acts 15:1–5

- アンテオケ教会ではどのような問題が持ち上がりますか。What is the problem at the church of Antioch?
- どのような提案が為されますか。What was proposed to solve the problem?
- 3 節のフェニキアとサマリヤアの兄弟たちと 5 節のファリサイ派から信仰に入った人たちの反応からどのような事がわかりますか。What can you tell from the reactions of the brothers in Phenicia and Samaria in v3 and those of the believers belonged to the Pharisees in v5 ?

9.15.2　使徒言行録 Acts 15:6–21

- エルサレムでの会議にはどのような人たちが出席していますか。Who attend the counsil in Jerusalem?
- ペテロの発言の要点をまとめてみましょう。Summarize the points Peter presented.
- 「主の恵みによって救われる」とはどういう事でしょうか。What does it mean to be saved through the grace of our Lord?
- パウロとバルナバはどのような役割を果たしていますか。What is the role of Paul and Barnabus at the meeting.
- ヤコブの発言の要点をまとめてみましょう。Summarize the points James presented?
- 三つの規則を異邦人に求めていますが、それはどのような目的があったと思いますか。What is the reason the gentiles should observe the three regulations.

9.15.3　使徒言行録 Acts 15:22–35

- 会議の結果を書面にし、かつユダとシラスも派遣することにしますが、それはなぜでしょうか。Why do they send Jude and Silas with the document agreed at the meeting?
- 手紙からはどのようなことがわかりますか。What can you tell from the document?
- この手紙はアンテオケの人々にどのように迎えられますか。How does the church in Antioch receive the message.

9.15.4 使徒言行録 Acts 15:36–41

- パウロはどのような提案をしますか。What does Paul propose to Barnabas?
- パウロとバルナバの意見が食い違うのは何が原因ですか。Why cannot they agree?
- 結局どうすることになりますか。What do they choose to do?

9.16 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 16 章

9.16.1 使徒言行録 Acts 16:1–5

- ルステラでは以前どのような事がありましたか。What had happened in Lystra? (14:8-23)
- テモテはどのような人ですか。What can you tell about Timothy?
- 一方でエルサレムでの決定を伝えながら、なぜテモテに割礼を受けさすのでしょうか。Why do you think Paul circumcised Timothy?

9.16.2 使徒言行録 Acts 16:6–15

- パウロたちはどのような経緯でマケドニアに向かうことにしますか。How did Paul decide to leave for Macedonia?
- ピリピはどんな町ですか。What can you tell about the city Philippi?
- ルデヤの回心についてどんなことがわかりますか。How do you describe Lydia's Conversion?

9.16.3 使徒言行録 Acts 16:16–34

- 女奴隷はどのようにして変えられますか。そしてそのことでどんな事件がおきますか。How was a slave girl changed?
- 牢獄でどのようなことがおきますか。What had happened in the prison?
- 看守は何をおそれ、そしてどんな救いを得ますか。What was the jailer afraid of and what did he receive for his salvation?

9.16.4 使徒言行録 Acts 16:35–40

- なぜパウロは長官たちが謝罪することを要求したのでしょうか。Why did Paul demanded the magistrates to apologize?
- ルデヤと女奴隷と看守に神はどのように働いていますか。How God was working for Lydia, the slave girl and the jailer?

9.17 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 17 章

9.17.1 使徒言行録 Acts 17:1–9

- テサロニケでの働きとピリピでの働きとを比べてみましょう。違いは何ですか。What are the differences of Paul's ministry in Thessalonica and in Philippi?
- パウロはどのようなメッセージを伝えますか。What is Paul's message?
- 結果としてどのようなことが起こりますか。What are the consequences?
- 何が原因で何を理由として訴えますか。訴えた人たちが大切にしていたものは何でしょうか。Why and by what reason, the people sue Jason and others? What do they want to protect?

9.17.2 使徒言行録 Acts 17:10–15

- ベレアはテサロニケとはどんな点で違っていますか。What is different in Berea compared with Thessalonica?
- テサロニケのユダヤ人たちがベレヤにも押しかけてくるのはなぜでしょうか。Why the Jews in Thessalonica run after Paul to Berea?

9.17.3 使徒言行録 Acts 17:16–34

- パウロはアテネでどのような人たちに話しかけていますか。Who does Paul talk to in Athens?
- パウロからどんな話しを聞きたかったのでしょうか。What do they want to hear from Paul?
- パウロのアテネでのメッセージ (v22-31) について気づいたことを挙げてみましょう。List what you notice in Paul's message in Athens.
- パウロは神についてどのようなことを述べていますか。What does Paul tell about God?

- パウロはアテネの人たちに、どうすることを求めていますか。What does Paul urge those who hear the message to do?
- 結果はどうでしたか。What was the outcome?

9.18 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 18 章

9.18.1 使徒言行録 Acts 18:1–11

- アクラとプリスキラはどのような人たちですか。Who and what are Aquila and Priscilla?
- パウロはコリントでどのような活動をしていますか。What is Paul doing in Corinth?
- パウロの 6 節の言葉をあなたはどう受け取りますか。What do you think about Paul's words in verse 6?
- パウロにどのような激励を受けますか。How is Paul encouraged?

9.18.2 使徒言行録 Acts 18:12–22

- パウロは誰にどのような理由で訴えられていますか。Who accuses Paul to the proconsul, and by what reason?
- どうなりますか。What is the result?
- パウロはコリントを発ってどこへ向かいますか。Where does Paul go after Corinth?

9.18.3 使徒言行録 Acts 18:23–28

- アポロについてどんなことがわかりますか。What can you tell about Apollos?
- プリスキラとアクラそして、弟子達はアポロにどのように接しますか。How do Priscilla, Aquila and other disciples treat Apollos?
- アポロのその後についてどんなことがわかりますか。What can you tell about Apollos after he leaves Ephesus?

9.19 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 19 章

9.19.1 使徒言行録 Acts 19:1–20

- パウロはエペソでどのような弟子達と会いますか。What kind of disciples does Paul meet in Ephesus?

- パウロはバプテスマのヨハネの働きについてどのように述べていますか。How does Paul explain the ministry of John the Baptist?
- この弟子達にどのような変化が起きますか。What happens to the disciples when Paul places his hands on them?
- vs 8–10 からパウロの活動について何がわかりますか。What can you tell about the activities of Paul in Ephesus?
- 魔術を行っていた人々にどのようなことが起きますか。What happens to those who are practicing sorcery?
- 魔術の本を焼くことはこの人たちにとってどのような意味があったのでしょうか。Why do they burn their scrolls?

9.19.2 使徒言行録 Acts 19:21–41

- パウロはどのような計画をたて、そのためにどんな事をしますか。(vs 21–22) What does Paul plan to do and what preparation does he do?
- どのような騒動が起きますか。その理由は何ですか。What disturbance about the Way arises and what is the reason?
- なぜそれほどまでに群衆は腹を立てたのでしょうか。Why do the multitude become so furious?
- アレキサンデルはどんな役割を持って群衆に話そうとしたと思いますか。What is the role of Alexander and what do you think he tries to communicate?
- 役人はどのようにして群衆を解散させますか。How does the officer dismiss the multitude?

9.20 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 20 章

9.20.1 使徒言行録 Acts 20:1–12

- エペソからトロアスまでのパウロの旅行の跡をたどりましょう。(Trace the route of Paul's journey from Ephesus to Troas.)
- この時代のキリスト者に必要だった励ましの言葉はどのようなものだったと思いますか。(What encouragements do young Christisna need that time?) (v1, 2)
- トロアスでは、何曜日に、何を目的として集まっていますか。(What day of the week and for what purpose do they get together in Troas?)

- トロアスからの出発の日の前夜どのような事が起こりますか。(What happens on the day before Paul set out to Syria?)

9.20.2 使徒言行録 Acts 20:13–38

- パウロの旅程をたどってみましょう。パウロはどんな理由で旅路を急ぐのですか。(Trace the route of Paul's journey. Why is Paul in a hurry?)
- 8-35 節のパウロのメッセージは、誰に対して、どのような状況で、何を伝えるために、なされたのでしょうか。(What is the purpose, the background and the main listener of the Paul's message in 18-35?)
- 以下のことについてまとめてみましょう。(Summarize the following.)

1. パウロのエペソでの活動について。(Paul's activities in Ephesus.) (v18-21)
2. パウロの態度と目的。(Paul's manner and aim.) (19, 20, 26, 27, 33-35)
3. パウロのメッセージ。(Paul's message.) (21, 24, 25, 27)
4. パウロの伝道の方法。(Paul's methods of evangelism.) (20, 21, 25, 34, 35)
5. パウロの直面した困難。(Faced difficulties.) (19)

- パウロが大切にした究極の目的は何だったのでしょうか。(What is the goal of Paul's life?)
- パウロは自分の将来にどんなことを予見していますか。(What does Paul foresee in his future?)
- パウロはエペソ教会の将来にどのようなことを予見していますか。What does Paul foresee in the future of the church in Ephesus?)
- パウロは、どのような訓戒を与えていますか。(What is Paul's advise?)
- 32 節の「神（主）とその恵みの言葉に委ねる。」とはどのような意味でしょうか。(What does 'Now I commit you to God and to the word of his grace" mean?)

9.21 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 21 章

9.21.1 使徒言行録 Acts 21: 1–16

- パウロのエルサレムまでの旅程をたどってみましょう。(Trace the route of Paul's journey to Jerusalem.)
- ティルス（ツロ）とカイサリアではどのようなことがありましたか。(What happened to Paul and his company in Tyre and Caesarea?)

- クリスチャンたちはなにを心配し、どんなことをパウロに願っていますか。(What are the Christians concern and what do they plead with Paul?)
- パウロはクリスチャンたちに止められても、なぜエルサレムに行こうとするのでしょうか。(Whay is Paul determined to go up to Jerusalem?)

9.21.2 使徒言行録 Acts 21: 17–26

- エルサレムでパウロはまずどんなことをしますか。(What does Paul do first in Jerusalem?)
- 長老たちはなにを心配し、どんな提案をしますか。(What do the elders worry about and give as a proposal to Paul?)
- パウロはどう応答しますか。(What is Paul's response?)
- ここで問題になっていることと 15 章で問題にされたことを比較してみましょう。(Compare the problems here and those in Chapter 15.)

9.21.3 使徒言行録 Acts 21: 27–36

- パウロが千人隊長に逮捕されるまでのことをまとめてみましょう。(Summarize what has happened by the time Paul was arrested.)
- なぜ民衆はパウロを殺そうとまでするのでしょうか。(Why do the people try to kill Paul?)
- 千人隊長はこの問題をどのように扱おうとしますか。(How does the commander of the Roman troops handle the problem?)

9.21.4 使徒言行録 Acts 21: 37–40

- パウロはなぜ民衆に話すことが許されたのでしょうか。(Why is Paul able to talk to the people?)

9.22 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 22 章

9.22.1 使徒言行録 Acts 22: 1–21

- パウロはどんな状況で話し始めますか。(Review the background information when Paul starts talking before the people.)
- 告発の理由は何ですか。パウロはなぜそれに対する弁明とは違うことを話すのでしょうか。(What is Paul accused of? Why Paul does not defend on the accusation directly?)

- なぜ民衆はパウロの話に耳を傾けるのでしょうか。(Why are the people listening to Paul quietly?)
- パウロは何について話していますか。(What is Paul's message about?)
- パウロはなにを伝えようとしているのでしょうか。(What does Paul want to communicate?)
- パウロは 22 節以降も話し続けるとするとどんなことを話したと思いますか。(What would Paul say if he could continue after verse 22?)

9.22.2 使徒言行録 Acts 22: 22–30

- 群衆はなぜこの時点で声をはりあげて生かしておくべきではないとまで言うのでしょうか。(Why does the people uproar at this moment saying ''Rid the earth of him! He's not fit to live!")
- 千人隊長はどのように対応し、またそれに対してパウロはどうしますか。(How does the commander of the Roman troops treat the case?)
- 翌日千人隊長はどのようにしますか。(How does he do on the next day?)

9.23 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 23 章

9.23.1 使徒言行録 Acts 23: 1–11

- ここではパウロはどのような場所でどのような人を相手に話していますか。(Where and to whom is Paul speaking to?)
- パウロの第一声に対して大祭司はどのような行動をとりますか。それはなぜでしょうか。(How does high priest reacted to Paul's first words? Why?)
- 議会は何が理由で分裂してしまいますか。(Why the people split into two parties?)
- パウロの議会でなぜこのように行動したのでしょうか。(Why do you think Paul acted like this there?)
- 神はパウロに何をつたえ何を保証しましたか。(What is the message of God? What was guaranteed?)

9.23.2 使徒言行録 Acts 23: 12–22

- パウロに対してどんな陰謀が起きますか。(What is plotted against Paul?)
- パウロはどのようにしてこの陰謀から救い出されますか。(How is Paul rescued from the plot?)

9.23.3 使徒言行録 Acts 23: 23–31

- 千人隊長はどのようにしてパウロを護送しますか。(How does the commander of the Roman troops transport Paul?)
- 総督フェリクスへの手紙からどのようなことがわかりますか。(What can you tell by a letter to Governor Felix?)
- 総督フェリクスはどのように対処しますか。(How does Felix treat Paul?)

9.23.4 使徒言行録 Acts 24:1–21

- いつ誰がどのようなメンバーでパウロを訴えますか。(When and who come down to sue Paul?)
- どのように何を訴えていますか。(What are the contents of their accusation?)
- パウロは何について反論しますか、(On what account does Paul defend himself?)
- パウロは何については認めていますか。(On what account does Paul admit?)
- パウロはここで何を伝えようとしているのでしょうか。(What does Paul relate in his defense?)

9.23.5 使徒言行録 Acts 24:22–27

- フェリクスはどのような対応をしますか。(What is the decision of Felix at this court?)
- フェリクスのパウロに関する扱いからどのような事がわかりますか。(What can you tell about Felix by his treatment of Paul?)
- フェリクスは何を求め、パウロは何を求めていたでしょうか。(What are the desires of Felix and Paul?)

9.24 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 25 章

9.24.1 使徒言行録 Acts 25:1–12

- 祭司長達はどのような機会になにをフェストゥスに願いますか。(When and what do the chief priest and elders request Festus?)
- フェストゥスについてどんなことがわかりますか。(What can you tell about Festus?)

- ユダヤ人の裁判での訴えの様子からどんなことがわかりますか。(What can you tell from the Jews at the court?)
- パウロはフェストゥスの前でどのような主旨の弁明をしますか。(How does Paul defend himself in front of Festus?)
- なぜパウロは皇帝に上訴するのでしょうか。(Why does Paul appeal to Caesar?)
- フェストゥスはどのような判決を下しますか。それは何故でしょう。(What is the judgement of Festus?)

9.24.2 使徒言行録 Acts 25:13–27

- なぜパウロはアグリッパとベルニケの前で話しをする事になりますか。この聴聞会の目的は何でしょうか。(Why does Paul talk to Agrippa and Bernice? What is the purpose of this hearing?)
- フェストゥスはパウロをどう見ていますか。(What is the view of Festus about Paul?)

9.25 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 26 章

9.25.1 使徒言行録 Acts 26:1–11

- 何が目的で聴聞がなされますか。聴衆はどのような人たちですか。(What is the purpose of this hearing? Who are the audience?) (25:23-27)
- アグリッパはどのような言葉でパウロの弁明をうながし、パウロはアグリッパにどのように話し始めますか。(How does Agrippa open the hearing and how does Paul respond to it?)
- パウロは何のための裁判を受けていると言ってしますか。(How does Paul testify about the reason of this trial?) (6,7)
- パウロは 8 節でどのような挑戦を聴衆に与えていますか。(How does Paul challenge the audience in verse 8?)
- パウロは 9-11 節でどんなことを証言していますか。(What does Paul testify in vs. 9-11?)

9.25.2 使徒言行録 Acts 26:12–23

- パウロの回心についてどのようなことが強調されていますか。9 章、22 章と比較してみましょう。(How does Paul describe his conversion? Compare with the description in Chapters 9 and 22.)
- パウロを遣わす目的はなんだと言っていますか。(What is the mission given to Paul?)

- パウロはイエスのことばにどのように応えたと言っていますか。(How does Paul respond to Jesus' calling?)
- パウロは旧約聖書（預言者たちやモーセ）がどのような事を預言していると言っていますか。(How does Paul describe what the prophets and Moses said would happen?)

9.25.3 使徒言行録 Acts 26:24–32

- フェストはどんな反応をしますか。なぜですか。(How does Festus respond to Paul? Why?)
- パウロはフェストゥスとアグリッパにどのように語りかけていますか。(How does Paul talk to Festus and Agrippa?)
- アグリッパはどう応答し、パウロはそれに対してどう言いますか。(How does Agrippa respond to Paul, and Paul to Agrippa?)
- 王、総督、ベルニケは、どのように結論しますか。(What is the conclusion of Agrippa, Bernice and Festus?)

9.26 使徒言行録（使徒行伝, Acts） 第 27 章

9.26.1 使徒言行録 Acts 27:1–20

- 旅程を確認してみましょう。(Check the route of Paul's voyage.)
- パウロはどのような提案をしていますか。(What is Paul's proposal?)
- 暴風雨とそれに対する対処についてまとめてみましょう。(Review about the storm and how the people react to it?)

9.26.2 使徒言行録 Acts 27:21–38

- パウロはどのような状況でどんな提案をしますか。(When and what does Paul propose?)

9.26.3 使徒言行録 Acts 27:39–44

- どんなことがおき、どのようにして助かりますか。(What does happen? How are they saved?)
- なぜ助かったのでしょうか。(Why do they reach the island safely?)

9.27　使徒言行録（使徒行伝, Acts）　第 28 章

9.27.1　使徒言行録 Acts 28:1–10

- マルタではどのような事件が起きましたか。(What happens in Martha?)
- パウロはマルタでどのようなことをし、どのような結果を引き起こしましたか。(What does Paul do in Martha and what is the result?)

9.27.2　使徒言行録 Acts 28:11–16

- パウロはローマについたときどんな気持ちだったと思いますか。(What is the meaning of Paul's arrival in Rome?)
- ローマのユダヤ人たちは、パウロをどのように迎えますか。(How does Jews in Rome welcome Paul?)

[DQ] なぜユダヤ人たちは、このように囚人パウロを迎えたのでしょうか。

9.27.3　使徒言行録 Acts 28:17–31

- パウロはどんな目的で重だったユダヤ人たちを集めますか。(What is the purpose of Paul to invite the Jews?)
- ユダヤ人たちはどのように対応しますか。(What is the response of the Jews?)
- パウロのメッセージの中心は何ですか。(What is the center of Paul's message?)
- パウロはイザヤ書からの引用をどのように使っていますか。(Why does Paul quote from Isaiah?)
- 最後はどのように結ばれていますか。(What is recorded at the end of this book?)

第 10 章

聖書の会 @ 万座温泉

10.1　過去の会について

ホームページを参照してください。[リンク]

10.2　第七回

10.2.1　概要

日程：2023 年 11 月 3 日〜11 月 5 日

参加人数：11 人

10.2.2　スケジュール

11/3 バス 8:50 新宿駅西口都庁横大型バス専用駐車場集合、9:00 出発

昼食：ドライブイン

ホテル到着：15:00 頃着（以前より遅くなりました。チェックインが15:00になりました）連休で渋滞の可能性あり

（軽井沢からは、ホテル到着 16:00頃）

夕食：ホテルバイキング

聖書の会 第一：「汚れた霊が戻ってくる」（マタイ12:43-45、ルカ11:24-26）

11/4 朝食：ホテルバイキング

聖書の会 第二：「愚かな金持ち」のたとえ（ルカ12:13-21）

昼食

自由時間：交流のとき

（お一人、ホテル到着 15:00頃）

夕食：ホテルバイキング

聖書の会 第三：「思い煩うな」（マタイ6:25-34、ルカ12:22-32）

11/5 朝食：ホテルバイキング

（軽井沢行きバス：11:00）

聖書の会 第四：「ぶどう園の労働者」のたとえ（マタイ 20:1-16）

昼食：万座温泉日進舘レストランなど

ホテル出発：15:00

新宿駅西口：19:30 頃着予定、解散（連休であるため遅くなる可能性もあります）

10.2.3 大雑把なキリスト教年表

確定は困難ですが、目安として書いておきます。

- BC6-BC4 イエスの誕生
- AD30-33 イエスの十字架上での死（復活、昇天）
- AD50 年代パウロ書簡（テサロニケの信徒への手紙一、ガラテヤの信徒への手紙、コリントの信徒への手紙一・二、ローマの信徒への手紙、ピレモンへの手紙、ピリピの信徒への手紙、他にもパウロ由来の手紙あり）
- AD70 前後マルコによる福音書（ペテロの通訳のマルコ由来）
- AD70 エルサレム陥落（AD66〜AD70（7 ヶ月の包囲後陥落）〜AD74）
- AD80 前後ルカによる福音書（パウロの同行者の医者ルカ由来）、マタイによる福音書（マタイ由来の文

書を中心に編纂）

- AD90 年代ヨハネによる福音書（ヨハネ由来、21 章はヨハネの死後）

10.2.4　用語解説（日本聖書協会共同訳巻末付録から）

- 悪魔（サタン）:「中傷する者」の意味で、人間を誘惑して神に反逆させる者。
- 悪霊：「汚れた霊」と同じで、新約聖書では精神的、肉体的病気の原因であって、人に過ちや罪を犯させる霊。ベルゼブルは悪霊の支配者。神の霊と対比。
- 聖霊：神の霊の別名。特に新約聖書において頻繁に用いられ、重要な事柄を表している。
- 神の国（マタイでは天の国）：場所や領土の意味ではなく、神が王として恵みと力をもって支配されること。
- デナリ（デナリオン）：ローマの銀貨で、１デナリは、１ドラクメと等価（一日の賃金に当たる）

10.2.5　聖書の会（１）汚れた霊が戻ってくる

10.2.5.1　ルカ 11 章 24-26 節

24 汚れた霊が人から出ると、休み場を求めて水の無い所を歩きまわるが、見つからないので、出てきた元の家に帰ろうと言って、25 帰って見ると、その家はそうじがしてある上、飾りつけがしてあった。26 そこでまた出て行って、自分以上に悪い他の七つの霊を引き連れてきて中にはいり、そこに住み込む。そうすると、その人の後の状態は初めよりももっと悪くなるのである」。

10.2.5.2　マタイ 12 章 43-45 節

43 汚れた霊が人から出ると、休み場を求めて水の無い所を歩きまわるが、見つからない。44 そこで、出てきた元の家に帰ろうと言って帰って見ると、その家はあいていて、そうじがしてある上、飾りつけがしてあった。45 そこでまた出て行って、自分以上に悪い他の七つの霊を一緒に引き連れてきて中にはいり、そこに住み込む。そうすると、その人ののちの状態は初めよりももっと悪くなるのである。よこしまな今の時代も、このようになるであろう」。

ルカによる福音書 11 章 24-26 節福音書対照表

10.2.5.3　問い

1. 汚れた霊とはどのような存在で、どこで、何を目的として活動する（と考えられていた）のでしょうか。（ルカ 11:24, マタイ 12:43）

2. 元の家がそうじがしてあって、飾り付けがしてあったとは、どのような状態を言っているのでしょうか。（ルカ 11:25, マタイ 12:44）

3. なぜ、その人の後の状態が初めよりもっと悪くなったのでしょうか。（ルカ 11:26, マタイ 12:45）

4. マタイでは、いまの時代について何を伝えていますか。（マタイ 12:45）

5. ベルゼブル論争（マルコ 3:20-30、マタイ 12:22-32、ルカ 11:14-23）と関係しているとすると、それは、どのようなことですか。

6. イエスは、このたとえで、なにを教えているのでしょうか。

10.2.5.4 参照

- ルカ 11:20-22 しかし、わたしが神の指によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。21 強い人が十分に武装して自分の邸宅を守っている限り、その持ち物は安全である。22 しかし、もっと強い者が襲ってきて彼に打ち勝てば、その頼みにしていた武具を奪って、その分捕品を分けるのである。23 わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。（ここに続く）

- マタイ 12:28 しかし、わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。29 まただれでも、まず強い人を縛りあげなければ、どうして、その人の家に押し入って家財を奪い取ることができようか。縛ってから、はじめてその家を掠奪することができる。30 わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである。

- イエスの悪霊追放・いやし・ゆるし
  - マルコ 9:25 イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。
  - マルコ 5:34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。
  - ヨハネ 5:14 そののち、イエスは宮でその人に出会ったので、彼に言われた、「ごらん、あなたはよくなった。もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」。
  - ヨハネ 8:11 女は言った、「主よ、だれもございません」。イエスは言われた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」。〕

- 聖霊（神様の心）
  - 1 コリント 2:10-12 そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。11 いったい、人間の思いは、

その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。12 ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。

10.2.5.5　記録

- 日時：2023 年 11 月 3 日午後 8 時半〜10 時半
- 出席 9 名

10.2.5.6　問いについて

1. 汚れた霊について：その活動目的と、活動場所。
    - 神の支配（神の国、御心がなること）に逆らい、人々に害を与えたり、病気を引き起こしたりする存在。
    - 活動場所：人および人々の中。または、ひとと神との間。
2. 元の家がきれいになっているとは。
    - （聖霊によって生きる）神との関係がなく、いつでも、神の支配に逆らうことができる状態。
    - [DQ] 空っぽで、なににも、囚われていないほうが良いのではないでしょうか。
        - 神の支配に逆らう悪霊ではなく、神の霊で満たされることが大切だと示唆されている？
        - 空っぽがよいということは、自分がすべてを判断できるとすることと同じ。おそらくそれは不可能なのだろう。
3. なぜ、悪くなったのか。
    - 満たされていない。
    - 何か、しっかりした、信仰や、汚れた霊に立ち向かうものを持たなければいけないということでしょうか。
    - [DQ] どうしていなければいけなかったのでしょうか。
4. マタイ：いまの時代について？
    - マタイでは、ベルゼブル論争に続いて、「実によって木を知る」と「人々はしるしを欲しがる」のあとに置かれている。
    - イエスが、来たのに、悔い改めない。ニネベの人たち、南の女王が糾弾するときとなる。
5. ベルゼブル論争との関係

- ルカ 11:20-22: 20 しかし、わたしが神の指によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。21 強い人が十分に武装して自分の邸宅を守っている限り、その持ち物は安全である。22 しかし、もっと強い者が襲ってきて彼に打ち勝てば、その頼みにしていた武具を奪って、その分捕品を分けるのである。
- マタイ 12:28: しかし、わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。29 まただれでも、まず強い人を縛りあげなければ、どうして、その人の家に押し入って家財を奪い取ることができようか。縛ってから、はじめてその家を掠奪することができる。

6. なにを教えているのか。
   - 汚れた霊が出ていったかどうかが問題ではなく、聖霊に満たされ、神様の国を求め続けることがたいせつ。

10.2.5.7 メモ

- ルカもマタイもどちらも、ベルゼブル論争のあとに置かれている。大雑把にいうと、ルカは、その直後に、この「汚れた霊が戻ってくる」が置かれ「真の幸い」の短い記事を挟んで「人々はしるしを欲しがる」記事が続く。マタイでは、ベルゼブル論争のあと、実によって木を知る記事が挟まれ、そのあとに、「人々はしるしを欲しがる」そして「汚れた霊が戻ってくる」となっている。つながりとしては自然に見えるマルコ 3 章には、「汚れた霊が戻ってくる」記事も、「人々はしるしを欲しがる」記事もなく、単純に、ベルゼブル論争のあとに、その背景にある、3 章 20 節を受ける形で、「イエスの母、きょうだい」の記事が続いている。マタイには、同様に、「汚れた霊が戻ってくる」の直後に、「イエスの母、きょうだい」の記事が続くことから、本来の伝承は、おそらく、ペテロによって語られていた、マルコの繋がりであり、ベルゼブル論争を受けて、関連する記事が挿入されたものと思われる。ベルゼブル論争のあとに、「人々はしるしを欲しがる」と、「汚れた霊が戻ってくる」が挿入されるのは、ベルゼブル論争の性格から、自然であるように見える。
- 悪霊を追い出すだけではなく、「天の父が、求める人たちに、どうして聖霊をくださらないことがありましょう。」（ルカ 11:13）に続く、新たなあゆみが整えられなければいけないことを述べているのかもしれない。「しかし、わたしが神の指によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。」（ルカ 11:20）「しかし、わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである。 」（マタイ 12:28）
- このあとは、ルカでは、「しかしイエスは言われた、『いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである』。」（ルカ 11:28）マタイでは、「そして、弟子たちの方に手をさし伸べて言われた、『ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである』。」（マタイ 12:49,50）
- 現代では、おそらく、どんな宗教にもとらわれない、自分をしっかりと持つことが、推奨されるのだろう。

それで本当に良いのだろうか。同時に、なにかに頼ることは、悪霊が入り込む隙をつくる。神の霊に満たされていればたしかによいが、それが神の霊であるかはどのように判断すれば良いのだろうか。それは「実によってわかる」ことなのかも知れない。むろん、すぐには、判断できないかも知れない。交わりを持ち続けながら、検証もすることだろうか。丁寧に、学んでいきたい。

10.2.6 聖書の会（2）「愚かな金持ち」のたとえ

10.2.6.1 ルカ 12 章 13-21 節

13 群衆の中のひとりがイエスに言った、「先生、わたしの兄弟に、遺産を分けてくれるようにおっしゃってください」。14 彼に言われた、「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか」。15 それから人々にむかって言われた、「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである」。16 そこで一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。17 そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思いめぐらして 18 言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。19 そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。20 すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。21 自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

ルカによる福音書 12 章 13-21 節

10.2.6.2 問い

1. 群衆の中のひとりのどのような依頼から始まりますか。（13）
2. イエスはどのように答えていますか。（14,15）
3. たとえの中で、金持ちは、どのように、考えていますか。（16-19）
4. 神はなぜ、この金持ちに「愚か者よ」と言われたのですか。（20）
5. 「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい」とはどういう意味でしょうか。（15）
6. 「神に対して富む」とは、具体的にどういうことですか。（21）
7. 最初にイエスに相談に来た人や群衆にイエスは何を伝えたかったのでしょうか。

10.2.6.3 参照

- シラ書（集会の書）11:18-19 用心と節約によって金持ちになる人がいる。／しかし、そういう者の受ける報いはこうだ。19「もう安心して休める。／これで、自分の財産で食べていけるぞ」と言っても／それがいつまで続くのか、知る由もなく／財産を他人に残して、死んでいくのだ。

- 愚か者：生活上神がいないかのようにふるまう実際的無神論
  - ヨブ 2:10 しかしヨブは彼女に言った、「あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」。すべてこの事においてヨブはそのくちびるをもって罪を犯さなかった。
  - 詩篇 14:2 愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。彼らは腐れはて、憎むべき事をなし、／善を行う者はない。
  - サムエル記下 25:25 わが君よ、どうぞ、このよこしまな人ナバルのことを気にかけないでください。あの人はその名のとおりです。名はナバルで、愚か者です。あなたのはしためであるわたしは、わが君なるあなたがつかわされた若者たちを見なかったのです。
  - 黙示録 3:17 あなたは、自分は富んでいる。豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。
  - アモス 4:12 「それゆえイスラエルよ、／わたしはこのようにあなたに行う。わたしはこれを行うゆえ、／イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ」。
  - コリント下 8:9 あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである。
  - ヤコブ 2:5 愛する兄弟たちよ。よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富ませ、神を愛する者たちに約束された御国の相続者とされたではないか。
- 人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか
  - 出エジプト記 2:14 彼は言った、「だれがあなたを立てて、われわれのつかさ、また裁判人としたのですか。エジプトびとを殺したように、あなたはわたしを殺そうと思うのですか」。モーセは恐れた。そしてあの事がきっと知れたのだと思った。
  - 使徒 7:27 すると、仲間をいじめていた者が、モーセを突き飛ばして言った、『だれが、君をわれわれの支配者や裁判人にしたのか。
  - 使徒 7:35 こうして、『だれが、君を支配者や裁判人にしたのか』と言って排斥されたこのモーセを、神は、柴の中で彼に現れた御使の手によって、支配者、解放者として、おつかわしになったのである。
  - 参考：使徒 18:15 これは諸君の言葉や名称や律法に関する問題なのだから、諸君みずから始末するがよかろう。わたし（アカヤの総督ガリオ）はそんな事の裁判人にはなりたくない」。
- 裁く

  - ローマ 2:1-3 だから、ああ、すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである。2 わたしたちは、神のさばきが、このような事を行う者どもの上に正しく下ることを、知っている。3 ああ、このような事を行う者どもをさばきながら、しかも自ら同じことを行う人よ。あなたは、神のさばきをのがれうると思うのか。

- 死ぬ時は
  - 詩篇 49:17-19 彼が死ぬときは何ひとつ携え行くことができず、／その栄えも彼に従って下って行くことは／ないからである。 18 たとい彼が生きながらえる間、自分を幸福と思っても、／またみずから幸な時に、人々から称賛されても、19 彼はついにおのれの先祖の仲間に連なる。彼らは絶えて光を見ることがない。

- 喜び裁き：伝道の書 11:9 若い者よ、あなたの若い時に楽しめ。あなたの若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心の道に歩み、あなたの目の見るところに歩め。ただし、そのすべての事のために、神はあなたをさばかれることを知れ。

- 富んでいる者よ：ヤコブ 5:1-5 富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。あなたがたは、自分の身に降りかかろうとしているわざわいを思って、泣き叫ぶがよい。2 あなたがたの富は朽ち果て、着物はむしばまれ、3 金銀はさびている。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、あなたがたの肉を火のように食いつくすであろう。あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。4 見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している。5 あなたがたは、地上でおごり暮し、快楽にふけり、「ほふらるる日」のために、おのが心を肥やしている。

- 誰に富むか
  - 詩篇 39:7 主よ、今わたしは何を待ち望みましょう。わたしの望みはあなたにあります。
  - 箴言 27:1 あすのことを誇ってはならない、／一日のうちに何がおこるかを／知ることができないからだ。
  - エレミヤ 17:11 しゃこが自分が産んだのではない卵を抱くように、／不正な財産を得る者がある。その人は一生の半ばにそれから離れて、／その終りには愚かな者となる。
  - シラ書 11:19 「もう安心して休める。／これで、自分の財産で食べていけるぞ」と言っても／それがいつまで続くのか、知る由もなく／財産を他人に残して、死んでいくのだ。
  - コリント前書 15:32 もし、わたしが人間の考えによってエペソで獣と戦ったとすれば、それはなんの役に立つのか。もし死人がよみがえらないのなら、「わたしたちは飲み食いしようではないか。あすもわからぬいのちなのだ」。

- 愚かさ

  - ヨブ 20:22 （ナアマびとゾパル、悪しき人について）その力の満ちている時、彼は窮境に陥り、／悩みの手がことごとく彼の上に臨むであろう。
  - ハバクク 2:9 わざわいなるかな、／災の手を免れるために高い所に巣を構えようと、／おのが家のために不義の利を取る者よ。
  - ルカ 12:33 自分の持ち物を売って、施しなさい。自分のために古びることのない財布をつくり、盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえなさい。
- 神に富む
  - ルカ 12:33 自分の持ち物を売って、施しなさい。自分のために古びることのない財布をつくり、盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえなさい。
  - マタイ 6:20 むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。
  - テモテ前書 6:18,19 また、良い行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び、19 こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げるように、命じなさい。
  - ヤコブ 2:5 愛する兄弟たちよ。よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富ませ、神を愛する者たちに約束された御国の相続者とされたではないか。
  - 黙示録 3:17 あなたは、自分は富んでいる。豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。

10.2.6.4 記録

- 日時：2023 年 11 月 4 日午前 9 時半〜11 時半
- 出席 9 名

10.2.6.5 問いについて

1. 群衆の中のひとりの依頼（13）
   - 「先生、わたしの兄弟に、遺産を分けてくれるようにおっしゃってください」。
   - [DQ] なぜ、このような依頼を、この人はイエスにしたのでしょうか。
2. イエスの応答（14,15）

- 14 彼に言われた、「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか」。15 それから人々にむかって言われた、「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである」。
- [DQ] なぜ、イエスは、直接的な応答を拒んだのでしょうか。
- [DQ] ここでイエスが、たいせつなこととして伝えているのは何でしょうか。

3. 金持ちの考え（16-19）

- 16 そこで一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。17 そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思いめぐらして 18 言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。19 そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。
- [DQ] 何か、違和感を感じることはありますか。何が問題なのでしょう。
- [DQ] あなたなら、このようなとき、どうしますか。特別収入？　宝くじ？
- [DQ] 将来に備えることは、立派なことではないでしょうか。

4. 愚か者？(20)

- 20 すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。
- [DQ] いのち（健康）にも気を遣えば、それで良いでしょうか。
- [DQ] 魂がとられとは、どのような事を言っているのでしょうか。

5. あらゆる貪欲に警戒しなさい（15）

- 15 それから人々にむかって言われた、「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである」。
- 貪欲：次々と欲を出し満足しないこと。
- [DQ] あなたは、どんなことに、貪欲になりますか。
- [DQ] 「いのち（神様・イエス様との交わり？ヨハネ 17:3)」のことに貪欲になるのは良いのでしょうか。

6.「神の対して富む」とは、具体的にどういうことですか。(21)

- 21 自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

- [DQ] 神か、富、どちらも独占欲が強い。一方しか選べないということでしょうか。
- [DQ] たくさん、献金しなさいということでしょうか。

7. 最初にイエスに相談に来た人や群衆にイエスは何を伝えたかったのでしょうか。
   - いのちに関すること、神に対して富むことに、心を配るように。
   - [DQ] 遺産分与については、結局どうすれば良いのでしょうか。

10.2.6.6 メモ

- 構造：簡潔な教え（14,15)、たとえ（16-21)、積極的な勧告（22-34）
  - 起点：13 群衆の中のひとりがイエスに言った、「先生、わたしの兄弟に、遺産を分けてくれるようにおっしゃってください」。14 彼に言われた、「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか」。
  - 譬え：17 そこで彼は心の中で、『どうしようか、**わたしの**作物をしまっておく所がないのだが』と思いめぐらして 18 言った、『こうしよう。**わたしの**倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。19 そして**自分の**魂に言おう。たましいよ、**おまえには**長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』
- メッセージは、質問してきた人にだけ答えているわけではない。「15 それから人々にむかって言われた」
- 何が愚かなのか。
- 一般の人には「貪欲」を避けることがテーマである。最初の人の兄弟は、たしかに、貪欲なのだろう。しかし、その悪をあげつらうことは、自分もそれを望んでいること、貪欲であることを承認していることでもあるのだろう。貪欲な人に引き込まれる。プロスペクト理論が言うように、得をするより、損をしないことを選択する傾向が人間にはあり、それが貪欲の実態なのかもしれない。すなわち、他者との関わりの中で、合理性すらない選択をし続ける。イエスが言っているのは、そのようなものに、引っ張られては行けないということなのだろう。感想にもあったが、貪欲は、伝染すると表現できるかも知れない。
  - プロスペクト理論（Prospect Theory）は、認知心理学者であるダニエル・カーネマンとアモス・トヴェルスキーによって提案された行動経済学の理論です。プロスペクト理論は、人々がリスクを評価し、意思決定を行う際の心理的特性を説明するために開発されました。

    プロスペクト理論は、伝統的な経済理論である期待効用理論に対して、人々の意思決定が合理的ではなく、主観的な評価に基づいて行われることを主張します。以下に、プロスペクト理論の主な概念を説明します。

    1. 個別の価値関数: プロスペクト理論では、利得や損失を評価する際に、人々は個別の価値関数を持っているとされます。価値関数は、利得や損失に対する主観的な価値を表現し、それに基づい

て選択を行います。一般的に、損失に対する感受性は利得に対する感受性よりも大きいとされます。

2. 損失回避の傾向: プロスペクト理論によれば、人々は損失を回避する傾向があります。同じ金額の利得と損失を比較した場合、損失を避けることを優先する傾向があります。これは、「損失回避のプレミアム」と呼ばれる現象です。

3. 参照点の重要性: プロスペクト理論では、意思決定において参照点が重要な役割を果たすとされます。参照点は、人々が選択肢の利得や損失を評価する際の基準となります。参照点に対する利得や損失がどれだけあるかによって、人々の評価や意思決定が変化することがあります。

プロスペクト理論は、経済学や金融学、マーケティングなどの分野で広く応用されています。この理論は、人々の意思決定における心理的要素やバイアスを考慮することで、より現実的なモデルを提供します。

10.2.7 聖書の会（3）思い煩うな

ルカによる福音書を中心として、マタイによる福音書を参考にして、学びましょう。

10.2.7.1 ルカ 12 章 22-34 節

22 それから弟子たちに言われた、「それだから、あなたがたに言っておく。何を食べようかと、命のことで思いわずらい、何を着ようかとからだのことで思いわずらうな。23 命は食物にまさり、からだは着物にまさっている。24 からすのことを考えて見よ。まくことも、刈ることもせず、また、納屋もなく倉もない。それだのに、神は彼らを養っていて下さる。あなたがたは鳥よりも、はるかにすぐれているではないか。25 あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。26 そんな小さな事さえできないのに、どうしてほかのことを思いわずらうのか。27 野の花のことを考えて見るがよい。紡ぎもせず、織りもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28 きょうは野にあって、あすは炉に投げ入れられる草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。29 あなたがたも、何を食べ、何を飲もうかと、あくせくするな、また気を使うな。30 これらのものは皆、この世の異邦人が切に求めているものである。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要であることを、ご存じである。31 ただ、御国を求めなさい。そうすれば、これらのものは添えて与えられるであろう。32 恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。33 自分の持ち物を売って、施しなさい。自分のために古びることのない財布をつくり、盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえなさい。34 あなたがたの宝のある所には、心もあるからである。

10.2.7.2　マタイ 6 章 19-34 節

19 あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上
に、宝をたくわえてはならない。20 むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し
入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。21 あなたの宝のある所には、心もあるからであ
る。22 目はからだのあかりである。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう。23 しか
し、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、
どんなであろう。24 だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、ある
いは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできな
い。25 それだから、あなたがたに言っておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思い
わずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にま
さるではないか。26 空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしない。
それだのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれ
た者ではないか。27 あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ば
すことができようか。28 また、なぜ、着物のことで思いわずらうのか。野の花がどうして育っているか、
考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。29 しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソ
ロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。30 きょうは生えていて、あすは炉に投げ
入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださ
らないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。31 だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるい
は何を着ようかと言って思いわずらうな。32 これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。
あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。
33 まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろ
う。34 だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の
苦労は、その日一日だけで十分である。

ルカによる福音書 12 章 22-34 節福音書対照表

10.2.7.3　問い

1. ルカでは「愚かな金持ち」のたとえと、この箇所は、それぞれ、誰に向けて、語られていますか。

2.「思い煩うな」と言われていますが、思い煩いとは、どのようなことでしょうか。あなたは、どのようなことに思い煩いますか。

3. なぜ思い煩わなくて良いのでしょうか。なぜ思い煩ってはいけないのでしょうか。その理由を挙げてみましょう。

4. 御国を求める（マタイ：神の国と神の義をと求める）とはどのようなことでしょうか。（ルカ 12:31, マタイ 6:33）

5. 天に宝をたくわえるとはどういう事でしょうか。（ルカ 12:33, マタイ 6:20）

6. マタイでは、ルカに加えてどのようなことが教えられていますか。

10.2.7.4 参照

- 思い煩うな（ [*1] ）色々な部分に分裂する。ヘブル語でも「撹乱される、心配する」シングル・ハートでいなさい。distracted.
  - ルカ 10:41 主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。
  - マタイ 10:19 彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。
  - ピリピ 4:6 何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。
- 主の養い：
  - ヨブ 38:41 からすの子が神に向かって呼ばわり、／食物がなくて、さまようとき、／からすにえさを与える者はだれか。
  - 詩篇 147:8,9 主は雲をもって天をおおい、地のために雨を備え、／もろもろの山に草をはえさせ、9 食物を獣に与え、／また鳴く小がらすに与えられる。
- 寿命を伸ばす：
  - 詩篇 39:6 まことに人は影のように、さまよいます。まことに彼らはむなしい事のために／騒ぎまわるのです。彼は積みたくわえるけれども、／だれがそれを収めるかを知りません。
- テモテ前書 6:17-19 この世で富んでいる者たちに、命じなさい。高慢にならず、たよりにならない富に望みをおかず、むしろ、わたしたちにすべての物を豊かに備えて楽しませて下さる神に、のぞみをおくように、18 また、良い行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び、19 こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げるように、命じなさい。
- ルカ 16:9 またあなたがたに言うが、不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう。
- 「あなたの目が澄んでおれば（ [*2]）」は、単一、単純、シングル・アイ「あなたの目が悪ければ（ [*3]）」雑念や口実から、可哀想な人を可哀想でないかのように見過ごし、物惜しみをする目
- テモテ前書 6:9,10 富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである。10 銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした。
- 詩篇 37:25 わたしは、むかし年若かった時も、年老いた今も、／正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が／食物を請いあるくのを見たことがない。

[*1] : i) to be anxious - to be troubled with cares, ii) to care for, look out for (a thing) - to seek to promote one's interests, caring or providing for. STRONGS: to be drawn in different directions, distraction

[*2] : i) simple, single, ii) whole, iii) good fulfilling its office, sound - of the eye

[*3] : i) full of labours, annoyances, hardships, ii) bad, of a bad nature or condition

- 詩篇 68:19 日々にわれらの荷を負われる主はほむべきかな。神はわれらの救である。〔セラ
- 詩篇 31:15 わたしの時はあなたのみ手にあります。わたしをわたしの敵の手と、／わたしを責め立てる者から救い出してください。
- 詩篇 95:7 主はわれらの神であり、／われらはその牧の民、そのみ手の羊である。どうか、あなたがたは、／きょう、そのみ声を聞くように。
- コロサイ 3:1,2 このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。2 あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。

10.2.7.5　記録

- 日時：2023 年 11 月 4 日午後 7 時半〜9 時半
- 出席 11 名

10.2.7.6　問いについて

1.「愚かな金持ち」のたとえと、この箇所は、誰に向けて。
    - 「それだから」（22）と繋がっているようである。
    - 「愚かな金持ち」のたとえは、群衆の中の質問をしたひとりと、「人々」（13,15）、この箇所は、弟子たち。（22）
    - [DQ] マタイではどうでしょうか。
        - マタイ 5:1 イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。
        - マタイ 7:28,29 イエスがこれらの言を語り終えられると、群衆はその教にひどく驚いた。29 それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。
2. 思い煩いとは？どのようなことに思い煩うか。
    - 「何を食べようか」と、命のことで思いわずらい、「何を着ようか」とからだのことで思いわずらうな。
    - 「命は食物にまさり、からだは着物にまさっている。」大切なことをなおざりにする？
3. なぜ思い煩わなくて良いか。なぜ思い煩ってはいけないか。
    - 24 からすのことを考えて見よ。まくことも、刈ることもせず、また、納屋もなく倉もない。それだのに、神は彼らを養っていて下さる。あなたがたは鳥よりも、はるかにすぐれているではないか。25 あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。26 そんな小さな事さえできないのに、どうしてほかのことを思いわずらうのか。27 野の花のこ

とを考えて見るがよい。紡ぎもせず、織りもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28 きょうは野にあって、あすは炉に投げ入れられる草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。29 あなたがたも、何を食べ、何を飲もうかと、あくせくするな、また気を使うな。30 これらのものは皆、この世の異邦人が切に求めているものである。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要であることを、ご存じである。

- 神が養っていてくださる。異邦人が求めていること。父は、必要をご存知。
- [DQ] 異邦人が求めていることとは、どのような意味で言っているのでしょうか。
- 自分の寿命を延ばすことができない。
- [DQ] 天の父がわたしたちに必要なものをすべて知っているということは、あなたの生き方にどう影響しますか。
- [DQ] なりゆきに（自然に）まかせて何もしなくて良いということでしょうか。

4. 御国を求める（マタイ：神の国と神の義をと求める）とは。
   - 父が望まれることを求める。自分にたいして、地の人々に対して。
5. 天に宝をたくわえるとは。
   - [DQ] 教会にたくさん、献金しなさいということでしょうか。
   - [DQ] 神様のことばかり考えていなさいということでしょうか。
   - かみさまがたいせつにされること、かみさまにとってたいせつな人々をたいせつにすることについて、考えること。行動すること。
   - [DQ] 宝とは何でしょうか。
6. マタイでは、ルカに加えて。
   - マタイ 6 章 19〜24 節で、自分の宝を蓄えることについてどんなことを教えていますか。
     - 宝と金銭や富との違いは？「宝のあるところに心もあると言えるようなもの？」
     - 苦しい体験、病気、才能？
     - 虫がつかないように、丁寧に管理すれば良いのでしょうか。
   - 神と富とに仕えるとはどういうことでしょうか。
   - どちらも、独裁君主だということでしょうか。
   - 神の国と神の義をと求めるとはどのようなことでしょうか。

10.2.7.7 メモ

- マタイ 6:1 「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう。」から始まり、施し（1-4)、祈り＋主の祈り（5-15)、断食（16-18）とあり、次にここに含まれる「天に宝を積みなさい」(19-21、ルカ 12:33-34)「目は体の灯」(22-23、ルカ 11:34-36)「神と富」(24、ルカ 16:13)「思い煩うな」(25-34、ルカ 12:22-32)と続く。
- 思い煩う（ルカ 12:22,25,29, マタイ 6:25,27,28,31,34,34）
- 神の養いに信頼し（23,24)、自己の無力を悟り（25,26)、父なる神の愛にすがって（27-30）
  - なにはともあれ神の国を求める。
  - 施しをする。
- ルカでは、弟子たちに語っているが、マタイの場合がそうであるように、周囲に、人々も居るのかも知れない。「貪欲」から「思い煩い」になっている。弟子たちが、神の御心を学ぶためには、または、イエスに従っていくためには、まさに、こころが分裂していてはいけないのだろう。同時に、自然から、学ぶことも教えている。聖書のことばだけではなく、あらゆるものから、学ぶこともできるのだろう。神様はさまざまな方法で、様々なものを通して、教えられる。フローレンス・ナイチンゲールの「神の考えを知るには、統計学を学ばなければいけません。そこに、神の目的を図る物差しがあるからです。」(‘To understand God’s thoughts we must study statistics, for these are the measure of his purpose.’ ）も、世界から、神の御心、目的を知る、一つの道を教えているのだろう。

10.2.8 聖書の会（４）「ぶどう園の労働者」のたとえ

10.2.8.1 マタイ 20 章 1-16 節

1 天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。2 彼は労働者たちと、一日一デナリの約束をして、彼らをぶどう園に送った。3 それから九時ごろに出て行って、他の人々が市場で何もせずに立っているのを見た。4 そして、その人たちに言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当な賃銀を払うから』。5 そこで、彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろとに出て行って、同じようにした。6 五時ごろまた出て行くと、まだ立っている人々を見たので、彼らに言った、『なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか』。7 彼らが『だれもわたしたちを雇ってくれませんから』と答えたので、その人々に言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい』。8 さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った、『労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように、賃銀を払ってやりなさい』。9 そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつもらった。10 ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけであっ

た。11 もらったとき、家の主人にむかって不平をもらして 12 言った、『この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに、あなたは一日じゅう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました』。13 そこで彼はそのひとりに答えて言った、『友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。14 自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。15 自分の物を自分がしたいようにするのは、当りまえではないか。それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか』。16 このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」。

マタイによる福音書 20 章 1-16 節福音書対照表

10.2.8.2 問い

1. この主人は、どんな目的のために何をしますか。(1,2)
2. 主人は、夜明け、九時、十二時、三時と五時ごろに、どのようなひとと、どのような約束をして、雇いますか。(3-7)
3. 主人はどのように、給与を払いますか。(8-10)
4. 最初に雇われた人たちはなぜ不平を言うのでしょう。(11)
5. 主人は、どのように応答していますか。(13-15)
6. 「このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」は、そして、このたとえは、何を教えているのでしょうか。(16, 参照：マタイ 19:27-30)

10.2.8.3 参照

- 冒頭は原語では、‘
  ’ (NKJV For the kingdom of heaven is like a landowner who went out early in the morning to hire laborers for his vineyard.) とあり、前段マタイ 19:27-30 の例示になっている。
  - 参照：19:30 30 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。29:16 このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」。
    - 同様の構造：マタイ 7:16・7:20、24:42・25:13
- マタイ 19:27-30 そのとき、ペテロがイエスに答えて言った、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるでしょうか」。28 イエスは彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。29 おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつ

ぐであろう。30 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。（ここに続く）（誰が救われることができるのか（マタイ 19:16-26））

- 1 自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。
  - パレスチナでは身近な、雨期をすぐあとに控えた、忙しい、一刻を争うぶどうの収穫期を思わせる。
- 1 デナリ：当時の労働者の一日の平均賃金だが、生活にはギリギリ
  - 資料によると 1 デナリで、小さな 10〜12 切れのパン、3〜4 デナリで、12L の小麦、15 キロの小麦パンを焼ける。30 デナリで、奴隷の衣服、100 デナリで牛 1 頭。（資料によって異なる）
- ユダヤの労働時間は、朝の 6 時から夕方の 6 時までの 12 時間。
- 律法では、賃金は、その日のうちに支払うよう定められていた。
- ルカ 23:42,43 そして言った、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。43 イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。
- コリント前書 15:8-10 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。9 実際わたしは、神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でいちばん小さい者であって、使徒と呼ばれる値うちのない者である。10 しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。そして、わたしに賜わった神の恵みはむだにならず、むしろ、わたしは彼らの中のだれよりも多く働いてきた。しかしそれは、わたし自身ではなく、わたしと共にあった神の恵みである。
- ピリピ 3:12-15 わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。13 兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、14 目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。15 だから、わたしたちの中で全き人たちは、そのように考えるべきである。しかし、あなたがたが違った考えを持っているなら、神はそのことも示して下さるであろう。
- バークレイ：神が与えるのは賃金ではなくて贈り物であり、報酬ではなくて恩寵である。

10.2.8.4 記録

- 日時：2023 年 11 月 5 日午前 8 時 15 分〜10 時半
- 出席 11 名

10.2.8.5　問いについて

1. 主人は何のために何をするか。

    - 1 天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。2 彼は労働者たちと、一日一デナリの約束をして、彼らをぶどう園に送った。
    - [DQ] ぶどう園に送るとは、どのようなことを意味しているのでしょうか。
    - [DQ] 働かせること？主人は、何も労働しないのでしょうか。

2. 夜明け、九時、十二時、三時と五時ごろに、誰と、どのような約束で、雇うか。

    - 3 それから九時ごろに出て行って、他の人々が市場で何もせずに立っているのを見た。4 そして、その人たちに言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当な賃銀を払うから』。5 そこで、彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろとに出て行って、同じようにした。6 五時ごろまた出て行くと、まだ立っている人々を見たので、彼らに言った、『なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか』。7 彼らが『だれもわたしたちを雇ってくれませんから』と答えたので、その人々に言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい』。
        - 夜明け（と同時）：労働者たちと、一日一デナリの約束をして、彼らをぶどう園に送った。
        - 九時：他の人々が市場で何もせずに立っているのを見た。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当な賃銀を払うから』。（一デナリとは言っていない）
        - 十二時：同じようにした
        - 三時：同じようにした
        - 五時：まだ立っている人々を見たので、彼らに言った、『なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか』。彼らが『だれもわたしたちを雇ってくれませんから』と答えたので、その人々に言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい』。
    - 朝早くから雇ってもらうように、市場に立っていた人がいる一方、九時、十二時、三時、五時のひとたちは、そこまでの努力をしていないように見える。背後に何があるかはわからない。五時の人々に「一日中、立っていたのか」と聞いているので、出会いが無かったのかも知れない。他にも雇う人はいたかも知れず、根こそぎ雇うことはしていないのかも知れない。
    - この管理人は、足繁く、市場に労働者を雇いに行っている。人手が足りないからだろうか。資本を湯水のように使って、貪欲に、仕事を進ませるためだろうか。おそらく、そうではない。天国のたとえなので、天国に向かい入れよう、永遠の生命を与えたいというのが、この管理人の本来の目的なのだろう。

3. 給与の払い方

- 8 さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った、『労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように、賃銀を払ってやりなさい』。9 そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつもらった。10 ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけであった。
- [DQ] なぜ、最後にきた人々から払うように命じたのでしょうか。演出的効果を上げるためだろうか。おそらくそうではない。仕事にありつけてよかったね。一日の報酬を上げるよ。
- [DQ] それぞれの人達はどう思ったでしょうか。

4. 最初に雇われた人たちの不平

- 11 もらったとき、家の主人にむかって不平をもらして 12 言った、『この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに、あなたは一日じゅう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました』。
- ある観点からの公平さを考えると、この人たちの言い分は正しい。何が違うのだろうか。大切にする観点？他者理解？
- 放蕩息子のたとえの兄（ルカ 15:11-32）
- ずっと、サボっていたかも知れない。そうであってもだろうか。

5. 主人の応答

- 13 そこで彼はそのひとりに答えて言った、『友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。14 自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。15 自分の物を自分がしたいようにするのは、当りまえではないか。それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか』。
- 不正は含まれていないことをまずは、主張している。
- ここでは、主人が Generous（気前がよい）ことに視点を当てているが、その「恵みのみ」なのだろうか。
- [DQ] 主人は、なぜ、そうしたかったのだろうか。妬みを起こさせるため？ではないだろう。大切にしたかったことは。神の性質とは。

6. 何を教えているか。（参照：マタイ 19:27-30）

- 「このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」（16）
- 直接的には、先の者は、最後に一デナリもらい、喜べず、不平をいうということで、主人のこころを受け取れない。後のものは、一日分の、給与をもらい、喜ぶ。
- 直接的には弟子たちに。それとも、一般の人向けに。それとも普遍的な真理。

- ひとには、簡単には見えない、社会的不公正の中で、ひとは生きている。御心をもとめること、御心を行うことは、それほど簡単ではない。

10.2.8.6 メモ

- 背景
  - 金持ちの青年（19:16-30, マルコ 10:17-31, ルカ 18:18-30）の最後の部分に、ペテロが「そのとき、ペテロがイエスに答えて言った、『ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるでしょうか』。」（19:27）と問い、「38 イエスは彼らに言われた、『よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。29 おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。30 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。』」（19:28-30）に続いている。
    * イエスの率直な答えと、普遍化と、注意すべきこととして、たとえが配置されている。
    * そう考えると、一デナリは、永遠の生命を意味しているようである。直接的には結びつかないかも知れない。
    * 十二弟子を持ち上げておいて、最後に「しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。」とする。なかなか、注意深い言説である。
    * 29 節までは、マルコにも、ルカにも含まれるが、30 節は、マルコのみ。マルコでは、このあと、三度自分の死と復活を予告するが続き、そのあとに、ヤコブとヨハネの願いが、続いている。ルカでは、やはり、三度自分の死と復活を予告するが続き、エリコの近くで盲人を癒やす記事を経て、ザアカイの記事に至る。
  - 場面設定：天国に関するたとえ。
  - 登場人物：ある家の主人（1)、ぶどう園で働く労働者（6 時、9 時、12 時、3 時、5 時)、管理人（8）
- 19:27 「そのとき、ペテロがイエスに答えて言った、『ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるでしょうか』。」に対して、神の国の様子を描き出すことで、柔らかく否定しているように見える。
- 神の国の平等・公平と恵みの関係について考えさせられる。
- どのひとも、一日、1 デナリは必要である。一人ひとりが大切。どんな理由であっても、一デナリ受け取ることは感謝。しかし、その基準は、公平さや、平等さでは、表現できないものだろう。
- 問題点は見えても、解決方法、完全な公平さは、わからないもの。神の国では、基本的な、正しさは確保されるものの、なぜまでは、表現できないかも知れない。わからない部分があることを、覚えなさいとい

うことだろうか。

- 背景（19:16-30）に戻って、考えるべき。（マルコで学ぶ予定）
- 天国の法則に目が開かれることは、世界が広くなることでもあると思う。

第 11 章

まとめ

聖書のまなびはいかがですか。みなさんと、共に、学ぶことができる幸いを、心より感謝して。

第 12 章

聖書の会の準備

聖書の会の準備として、どのようなことをしているか、備忘録、反省もこめて、紹介します。

12.1 概要

1. テキストを何回か読み、範囲を決める。
    - 前後のつながりも確認して、どこで切るかを検討する。
2. 特に共観福音書の場合、対照箇所を確認。
    - 前後関係など、位置づけが、同じか、確認する。
    - 対照表を作成。日本語に寄りすぎると、ことばの意味が取れない場合もあるので、英語を加えるのもよい。いくつかの翻訳を併記するのもよいが、訳の違いに囚われて、中身の理解に繋がらないときもあるので、最近は、あまり重視していない。
    - 背景などはことなるので、対照箇所があっても、中心とテキストを決めておいたほうがよい。
3. 対照箇所もふくめて、何回か読み、質問（ディスカッション・クエスチョン）をいくつか作成する。
    - 最初は、この段階は難しいので、すでにあるもの（冊子など）を利用するのもよい。
    - わたしは、過去の学びがあるので、対照箇所の質問もふくめて、まずは書き出し、それから、取捨選択している。
4. 自分で、質問に対する応答を書いてみる。
    - 自分で応答を書くと、質問の文言が不適切だったり、テキストの用語との違いに気づいたりする。適宜、質問文を修正する。

- さらに、応答を活性化するために、場合に応じて追加する、質問事項を書き出す。

5. 聖書の引用箇所を参考に、他の聖書の箇所との関係をみる。

    - なれないと、なぜ、その聖書箇所が引用されているのか分からなかったり、どんどん、引用箇所に引っ張られたりするが、参考程度に止め、いくつか、メモとして残す。
    - 箇所によっては、地図を参考にすることも、理解の助けになることもあるので、確認。
    - 原語のギリシャ語（や、ヘブル語）が気になる場合がある。ネストレ・アーランド（や、BHS）が一般的だが、簡単に調べられるものとして、わたしは、blueletterbible.org を利用している。英語だが、単語の意味も確認できる。ブラウザーの翻訳機能を使うことも可能。

6. 注解書・説教集など、参考にできるものを読みながら、質問を加えたり、修正したりする。

    - この作業を、あまり早くにしないことがたいせつ。そうでないと、どうしても、それに引き寄せられてしまう。
    - 聖書学者や、牧師が書いていることが多く、多くの示唆に富んだ、記述があると思わるが、それに引き寄せられたり、あるいは、自分が受け取った、自分が感動したことに、偏ってしまい、みなで、考えながら、聖書を読むことを阻害することにもつながるので、気をつける。特に、説教集の場合は、教会でのメッセージが想定されており、一つの解釈に導く傾向があり、ディスカッションスタイルで、さまざまな読み方を許容する場合には、妨げとなる場合もあるので、みなが、自分の考え、感想が出しやすいことを優先する。

7. 質問票を完成させ、一部印刷。

    - この段階で、もう一度、わたしは、手書きで、質問票に自分の応答を書き、これまでに、メモした、様々な情報を、欄外などに加えて、必要に応じて、説明したり、問を発展させたりできるようにする。
    - この段階で、質問票を修正する必要がある場合もある。配布分完成。

8. 質問票と、対照表を、参加者に配布。

    - 事前配布が望ましいと思うが、一般的には、事前学習をするひとは少ない。
    - 聖書の会のリマインドも含めて、わたしは、これらを配布、連絡している。

9. 聖書の会

    - そのときの会の出席メンバーによっても対応が変わるので、司会は難しい。
    - 極力、みなが、自分の考えを出しやすいように、それを、歓迎できるようにすることが肝要。
    - 出席メンバーにある程度、慣れた人がいるときは、一回目テキストを読んだ後に、少し、自分で、読む時間を取ってもらい（2-3 分）そのあとで「なにか、疑問や考えてみたいこと、印象に残ったこと

などありますか。」と聞いている。

- 質問票にはないが、よい問が出されたときは、メモをして、あとから、それについても、話すときを持つのがよい。
- 聖書知識があまりないひとも、意見を言えるように、知識豊富な人が、他の箇所をどんどん引用するときには、なるべく、今回のテキストに集中するように促すなど、みなが、安心して発言できる場を作ることがたいせつ。
- 難しい箇所の場合には、背景を説明するなどから始めるときもあるが、その説明も、最初は非常に簡単にすべきだと思う。理解を助けることに集中したい。

10. 感想

- 最後に、かならず、ひとりずつ、感想を言ってもらっている。むろん、今日は、パスします。も許容して。
- ゆっくり、他者のこえに耳を傾け、できるだけ、一回は発言する機会を作るためでもある。何回か続けてきていると、いつも寡黙なひとが、非常に深い感想、または、日常的な痛みを吐露することもある。それが、互いから学び、互いに愛し合うことに繋がることを聞きながら祈っている。

11. 振り返り

- 振り返りメッセージがある場合は、送ってもらっている。
- 自分でも、記録を確認し、出席人数などだけでなく、質問や印象箇所、メモなど、この機会に、書き加えておくとよい。

12.2 心がけていること

12.2.1 奇跡の解釈

丁寧にテキストを読むことを心がけ、単純化バイアスに陥らないように気をつけています。特に、奇跡物語と呼ばれるものについては、次のような解釈を、否定はしませんが、それ以外の見方ができないかを考えています。

- 科学的に起こり得ないことだから、作り話に違いない
- イエスは神様だから、なんでもできる

科学的視点というのは、合理的な解釈をしたいとの要求は常にありますが、非常に、狭い価値観で見ているようにも思います。さらに、大切にしたいのは、すこし違う価値観であもあると思う。また、イエスは、神だからなんでもできると考えるのは、楽だが、それも、一つの思考停止で、イエスに倣うものにはなれない。

著者が、伝えたいこと、または、イエスがそのことを通して、伝えていることは何なのかを理解したいと願っています。

第 13 章

資料

13.1　マルコによる福音書表題

マルコ	見出し	マタイ	ルカ	ヨハネ
1:1-8	洗礼者ヨハネ、悔い改めの洗礼を宣べ伝える	3:1-12	3:1-9	1:19-28
1:9-11	イエス、洗礼を受ける	3:13-17	3:21-22	NA
1:12-13	試みを受ける	4:1-11	4:1-13	NA
1:14-15	ガリラヤで宣教を始める	4:12-17	4:14-15	NA
1:16-20	四人の漁師を弟子にする	4:18-22	5:1-11	NA
1:21-28	汚れた霊に取りつかれた男を癒やす	NA	4:31-37	NA
1:29-34	多くの病人を癒やす	8:14-17	4:38-41	NA
1:35-39	巡回して宣教する	NA	4:42-44	NA
1:40-45	規定の病を患っている人を清める	8:1-4	5:12-16	NA
2:1-12	体の麻痺した人を癒やす	9:1-8	5:17-26	NA
2:13-17	レビを弟子にする	9:9-13	5:27-32	NA
2:18-22	断食についての問答	9:14-17	5:33-39	NA
2:23-28	安息日に麦の穂を摘む	12:1-8	6:1-5	NA
3:1-6	手の萎えた人を癒やす	12:9-14	6:6-11	NA
3:7-12	湖の岸辺の群衆	NA	NA	NA
3:13-19	十二人を選ぶ	10:1-4	6:12-16	NA
3:20-30	ベルゼブル論争	12:22-32	11:14-23; 12:10	NA
3:31-35	イエスの母、きょうだい	12:46-50	8:19-21	NA
4:1-9	「種を蒔く人」のたとえ	13:1-9	8:4-8	NA

マルコ	見出し	マタイ	ルカ	ヨハネ
4:10-12	たとえを用いて話す理由	13:10-17	8:9-10	NA
4:13-20	「種を蒔く人」のたとえの説明	13:18-23	8:11-15	NA
4:21-25	「灯」と「秤」のたとえ	NA	8:16-18	NA
4:26-29	「成長する種」のたとえ	NA	NA	NA
4:30-32	「からし種」のたとえ	13:31-32	13:18-19	NA
4:33-34	たとえを用いて語る	13:34-35	NA	NA
4:35-41	突風を静める	8:23-27	8:22-25	NA
5:1-20	悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす	8:28-34	8:26-39	NA
5:21-43	ヤイロの娘とイエスの服に触れる女	9:18-26	8:40-56	NA
6:1-6	ナザレで受け入れられない	13:53-58	4:16-30	NA
6:7-13	十二人を派遣する	10:1; 5-15	9:1-6	NA
6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される	14:1-12	9:7-9	NA
6:30-44	五千人に食べ物を与える	14:13-21	9:10-17	6:1-14
6:45-52	湖の上を歩く	14:22-33	NA	6:15-21
6:53-56	ゲネサレとで病人を癒やす	14:34-36	NA	NA
7:1-23	昔の人の言い伝え	15:1-20	NA	NA
7:24-30	シリア・フェニキアの女の信仰	15:21-28	NA	NA
7:31-37	耳が聞こえず舌の回らない人を癒やす	NA	NA	NA
8:1-10	四千人に食べ物を与える	15:32-39	NA	NA
8:11-13	人々はしるしを欲しがる	16:1-4	NA	NA
8:14-21	ファリサイ派の人々とヘロデのパン種	16:5-12	NA	NA
8:22-26	ベトサイダで盲人を癒やす	NA	NA	NA
8:27-30	ペトロ、イエスがメシアであると告白する	16:13-20	9:18-21	NA
8:31-38; 9:1	イエス、死と復活を予告する	16:21-28	9:22-27	NA
9:2-13	イエスの姿が変わる	17:1-13	9:28-36	NA
9:14-29	汚れた霊に取りつかれた子を癒やす	17:14-20	9:37-43a	NA
9:30-32	再び自分の死と復活を予告する	17:22-23	9:43b-45	NA
9:33-37	いちばん偉い者	18:1-5	9:46-48	NA
9:38-41	逆らわない者は味方	NA	9:49-50	NA
9:42-50	罪への誘惑	18:6-9	17:1-2	NA

マルコ	見出し	マタイ	ルカ	ヨハネ
10:1-12	離婚について教える	19:1-12	NA	NA
10:13-16	子どもを祝福する	19:13-15	18:15-17	NA
10:17-31	金持ちの男	19:16-30	18:18-30	NA
10:32-34	イエス、三度自分の死と復活を予告する	20:17-19	18;31-34	NA
10:35-45	ヤコブとヨハネの願い	20:20-28	NA	NA
10:46-52	盲人バルティマイを癒やす	20:29-34	18:35-43	NA
11:1-11	エルサレムに迎えられる	21:1-11	19:28-40	12:12-19
11:12-14	いちじくの木を呪う	21:18-19	NA	NA
11:15-19	神殿から商人を追い出す	21:12-17	19:45-48	2:13-22
11:20-26	枯れたいちじくの木の教訓	21:20-22	NA	NA
11:27-33	権威についての問答	21:23-27	20:1-8	NA
12:1-12	「ぶどう園の農夫」のたとえ	21:33-46	20:9-19	NA
12:13-17	皇帝への税金	22:15-22	20:20-26	NA
12:18-27	復活についての問答	22:23-33	20:27-40	NA
12:28-34	最も重要な戒め	22:34-40	10:25-28	NA
12:35-37	ダビデの子についての問答	22:41-45	20:41-44	NA
12:38-40	律法学者を非難する	23:1-36	20:45-47	NA
12:41-44	やもめの献金	NA	21:1-4	NA
13:1-2	神殿の崩壊を予告する	24:1-2	21:5-6	NA
13:3-13	終末の徴	24:3-4	21:7-19	NA
13:14-23	大きな苦難を予告する	24:15-28	21:20-24	NA
13:24-27	人の子が来る	24:29-31	21:25-28	NA
13:28-32	いちじくの木の教え	24:32-35	21:29-33	NA
13:33-37	目を覚ましていなさい	24:36-44	NA	NA
14:1-2	イエスを殺す計略	26:1-5	22:1-2	11:45-53
14:3-9	ベタニアで香油を注がれる	26:6-13	NA	12:1-8
14:10-11	ユダ、裏切りを企てる	26:14-16	22:3-6	NA
14:12-21	過越の食事をする	26:17-25	22:7-14; 21-23	13:21-30
14:22-25	主の晩餐	26:26-30	22:15-20	NA
14:26-31	ペトロの離反を予告する	26:31-35	22:31-34	13:36-38
14:32-42	ゲッセマネで祈る	26:36-46	22:39-46	NA
14:43-50	裏切られ、逮捕される	26:47-56	22:47-53	18:3-12
14:51-52	一人の若者、逃げる	NA	NA	NA

マルコ	見出し	マタイ	ルカ	ヨハネ
14:53-65	最高法院で裁判を受ける	26:57-68	22:54-55; 63-71	18:13-14; 19-24
14:66-72	ペトロ、イエスを知らないと言う	26:69-75	22:56-62	18:15-18; 25-27
15:1-5	ピラトから尋問される	27:1-2; 11-14	23:1-5	18:28-38
15:6-15	死刑の判決を受ける	27:15-26	23:13-25	18:39-19:16
15:16-20	兵士から侮辱される	27:27-31	NA	19:2-2
15:21-32	十字架につけられる	27:32-44	23:26-43	19:17-27
15:33-41	イエスの死	27:45-56	23:44-49	19:28-30
15:42-47	墓に葬られる	27:57-61	23:50-56	19:38-42
16:1-8	復活する	28:1-8	24:1-12	20:1-10
16:9-11	（結び一）マグダラのマリアに現れる	28:9-10	NA	20:11-18
16:12-13	二人の弟子に現れる	NA	24:13-35	NA
16:14-18	弟子たちを派遣する	28:16-20	24:36-49	20:19-23
16:19-20	天に上げられる	NA	24:50-53	NA
NA	NA	NA	NA	NA
NA	結び二	NA	NA	NA
7:16; 9:14; 46; 11:26; 15:28	底本に節が欠けている箇所の異本による訳文	NA	NA	NA

13.1.1 マルコに含まれていない表題

マタイ	見出し…2	ルカ…3	ルカ…4	見出し…5
1:1-17	イエス・キリストの系図	3:23-38	1:1-4	献呈の言葉
1:18-24	イエス・キリストの誕生	2:1-7	1:5-25	洗礼者ヨハネの誕生、予告される
2:1-12	東方の博士たちが訪れる	NA	1:26-38	イエスの誕生が予告される
2:13-15	エジプトに避難する	NA	1:39-45	マリア、エリザベトを訪ねる
2:16-18	ヘロデ、こどもを皆殺しにする	NA	1:46-56	マリアの讃歌
2:19-23	エジプトから帰国する	NA	1:57-66	洗礼者ヨハネの誕生
NA	NA	NA	1:67-80	ザカリアの預言
NA	NA	NA	2:8-21	羊飼いと天使

マタイ	見出し...2	ルカ...3	ルカ...4	見出し...5
NA	NA	NA	2:22-38	神殿で献げられる
NA	NA	NA	2:39-40	ナザレに帰る
NA	NA	NA	2:41-52	神殿での少年イエス
4:23-25	おびただしい病人を癒やす	6:17-19	NA	NA
5:1-2	山上の説教を始める	NA	NA	NA
5:3-12	幸い	6:20-23	NA	NA
5:17-20	律法について	NA	NA	NA
5:21-26	腹を立ててはならない	NA	NA	NA
5:27-30	姦淫してはならない	NA	NA	NA
5:33-37	誓ってはならない	NA	NA	NA
5:38-42	復讐してはならない	6:29-30	NA	NA
5:43-48	敵を愛しなさい	6:27-28; 32-36	NA	NA
6:1-4	施しをするときには	NA	NA	NA
6:5-15	祈るときには	11:2-4	NA	NA
6:16-18	断食をするときには	NA	NA	NA
6:19-21	天に宝を積みなさい	12:33-34	NA	NA
6:22-23	目は体の灯	11:34-36	NA	NA
6:24-24	神と富	16:13-13	NA	NA
6:25-34	思い煩うな	12:22-32	NA	NA
7:1-6	人を裁くな	6:37-38; 41-42	NA	NA
7:7-12	求めなさい	11:9-13	NA	NA
7:13-14	狭い門	13:24-24	NA	NA
7:15-20	実によって木を知る 12:33	6:43-44	NA	NA
7:21-23	あなたがたのことは知らない	13:25-27	NA	NA
7:24-29	家と土台	6:47-49	NA	NA
8:5-13	百人隊長の子を癒やす	7:1-10	7:11-17	やもめの息子を生き返らせる
8:18-22	弟子の覚悟	9:57-62	7:36-50	罪深い女を赦す
9:27-31	二人の盲人を癒やす	NA	8:1-3	イエスに仕える女たち
9:32-34	口の利けない人を癒やす	NA	9:51-56	サマリア人から歓迎されない
9:35-38	群衆に同情する	NA	10:1-12	七十二人を派遣する
10:26-31	恐るべき者	12:2-7	10:17-20	七十二人、帰って来る
10:32-33	人前でイエスを認める	12:8-9	10:25-37	善いサマリア人
10:34-39	平和でなく剣を	12:51-53; 14:26-27	10:38-42	マルタとマリア

マタイ	見出し…2	ルカ…3	ルカ…4	見出し…5
11:2-19	洗礼者ヨハネとイエス	7:18-35	11:27-28	真の幸い
11:20-24	悔い改めない町を叱る	10:13-15	12:1-3	偽善に気をつけさせる
11:25-30	私のもとに来なさい	10:21-22	12:13-21	「愚かな金持ち」のたとえ
12:15-21	傷ついた葦を折ることはない	NA	13:1-5	悔い改めなければ滅びる
12:33-37	実によって木を知る 7:16-20	6:43-45	13;6-9	「実がならないいちじくの木」のたとえ
12:43-45	汚れた霊が戻って来る	11:24-26	13:10-17	安息日に、腰の曲がった女を癒やす
13:24-30	「毒麦」のたとえ	NA	14:1-6	安息日に水腫の人を癒やす
13:36-43	「毒麦」のたとえの説明	NA	14;7-14	客と招待する者への教訓
13:44-50	「天国」のたとえ	NA	15:8-10	「無くした銀貨」のたとえ
13:51-52	天国のことを学んだ学者	NA	15:11-32	「いなくなった息子」のたとえ
15:29-31	大勢の病人を癒やす	NA	16:1-13	「不正な管理人」のたとえ
18:10-14	「迷い出た羊」のたとえ	15:3-7	16:19-31	金持ちとラザロ
18:15-20	きょうだいの忠告	17:3-3	17:11-19	規定の病を患っている十人の人を清める
18:21-35	「仲間を赦さない家来」のたとえ	NA	18:1-8	「やもめと裁判官」のたとえ
20:1-16	「ぶどう園の労働者」のたとえ	NA	18:9-14	「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえ
21:28-32	「二人の息子」のたとえ	NA	19:1-10	徴税人ザアカイ
22:1-14	「婚礼の祝宴」のたとえ	14:15-24	NA	NA
23:37-39	エルサレムのために嘆く	13:34-35	21:34-38	目を覚ましていなさい

マタイ	見出し…2	ルカ…3	ルカ…4	見出し…5
24:45-51	忠実な僕と悪い僕	12:41-48	22:24-30	いちばん偉い者
25:1-12	「十人のおとめ」のたとえ	NA	NA	NA
25:14-30	「タラントン」のたとえ	19:11-27	NA	NA
25:31-46	すべての民族を裁く	NA	NA	NA
27:3-10	ユダ自殺する	NA	NA	NA
27:62-65	番兵、墓を見張る	NA	22:35-38	財布と袋と剣
28:11-15	番兵、報告する	NA	23:6-12	ヘロデから尋問される

マルコによる福音書の表題

13.2　登録・対面・遠隔

参加者数と登録者数（点で表示）
日付
2025.06.19
2025.06.12
2025.06.05
2025.05.29
2025.05.22
2025.05.15
2025.05.08
2025.05.01
2025.04.24
2025.04.17
2025.03.13
2025.03.06
2025.02.27
2025.02.20
2025.02.13
2025.02.06
2025.01.30
2025.01.23
2025.01.16
2025.01.09
2024.12.12
2024.12.05
2024.11.28
2024.11.21
2024.11.14
2024.11.07
2024.10.31
2024.10.24
2024.10.17
2024.10.10
2024.10.03
2024.09.26
2024.09.19
2024.09.12
2024.07.18
2024.07.11
2024.07.04
2024.06.27
2024.06.13
2024.06.06
2024.05.30
2024.05.23
2024.05.16
2024.05.09
2024.05.02
2024.04.25
2024.04.18
2024.04.11
2024.02.29
2024.02.22
2024.02.15
2024.02.08
2024.02.01
2024.01.25
2024.01.18
2024.01.11
2023.12.21
2023.12.14
2023.12.07
2023.11.30
2023.11.23
2023.11.16
2023.11.09
2023.11.02
2023.10.26
2023.10.19
2023.10.12
2023.10.05
2023.09.28
2023.09.21
2023.09.14
2023.09.07
2023.08.31
2023.08.24
2023.08.17
2023.08.10
2023.08.03
2023.07.27
2023.07.20
2023.07.13
2023.07.06
2023.06.29
2023.06.22
2023.06.15
2023.06.08
2023.06.01
2023.05.25
2023.05.18
2023.05.11
2023.05.04
2023.04.27
2023.04.20
0
20
40
参加者数
遠隔
対面

第 14 章

福音書が伝えるイエス

四つの福音書を読みながら、イエスはどのような方なのか考えていきたい。以下は、あくまでも、わたしが読み取ったイエス像であり、一般的にキリスト教会で理解されているものとは、異なることを断っておく。

14.1　マルコによる福音書から

14.2　マルコによる福音書について

聖書箇所：1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。

14.2.1　洗礼者ヨハネ、悔い改めの洗礼を宣べ伝える

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 1-8 節福音書対照表

14.2.2　イエス、洗礼を受ける

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 9-11 節福音書対照表

1:11 すると天から声があった、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。（主の心にかなう神の子であるとの召命）

14.2.3　試みを受ける

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 12-13 節福音書対照表

1:13 イエスは四十日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた。そして獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた。（御使に仕えられていると意識）

14.2.4　ガリラヤで宣教を始める

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 14-15 節福音書対照表

1:14,15 ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」。（終末への備えと神の国の宣教開始）

14.2.5　四人の漁師を弟子にする

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 16-20 節福音書対照表

1:17 イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。（弟子の育成の開始）

14.2.6　汚れた霊に取りつかれた男を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 21-28 節福音書対照表

1:22 人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。（権威ある者のように教える）

1:23-25 ちょうどその時、けがれた霊につかれた者が会堂にいて、叫んで言った、「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。すると、けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。

14.2.7　多くの病人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 29-34 節福音書対照表

14.2.8　巡回して宣教する

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 35-39 節福音書対照表

1:38,39 イエスは彼らに言われた、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教を宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」。そして、ガリラヤ全地を巡りあるいて、諸会堂で教えを宣べ伝え、また悪霊を追い出された。（ガリラヤ各地での宣教）

14.2.9　規定の病を患っている人を清める

聖書箇所：マルコによる福音書 1 章 40-45 節福音書対照表

1:40-42 ひとりの重い皮膚病にかかった人が、イエスのところに願いにきて、ひざまずいて言った、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると、重い皮膚病が直ちに去って、その人はきよくなった。（汚れていると思われ・思っているものを清める）

14.2.10　体の麻痺した人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 2 章 1-12 節福音書対照表

2:9-11 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。（罪を赦すことができるのは神のみと考えられていたときに、罪をゆるし、中風の者をいやす）

14.2.11　レビを弟子にする

聖書箇所：マルコによる福音書 2 章 13-17 節福音書対照表

2:16,16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。（罪人を招くため）

14.2.12　断食についての問答

聖書箇所：マルコによる福音書 2 章 18-22 節福音書対照表

2:19,20 するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう。（花婿が取り去られる時を予定）

2:21,22 だれも、真新しい布ぎれを、古い着物に縫いつけはしない。もしそうすれば、新しいつぎは古い着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなる。まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそうすれば、ぶどう酒は皮袋をはり裂き、そして、ぶどう酒も皮袋もむだになってしまう。〔だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである〕」。（新しい葡萄酒は新しい皮袋に）

14.2.13　安息日に麦の穂を摘む

聖書箇所：マルコによる福音書 2 章 23-28 節福音書対照表

2:27,28 また彼らに言われた、「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」。（安息日は人のため、イエスは、安息日の主）

14.2.14　手の萎えた人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 1-6 節福音書対照表

3:4-6 人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。（安息日にひとをいやし、パリサイ人・ヘロデ党の者、イエスを殺す計画を相談）

14.2.15　湖の岸辺の群衆

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 7-12 節福音書対照表

3:11,12 また、けがれた霊どもはイエスを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子です」と言った。イエスは御自身のことを人にあらわさないようにと、彼らをきびしく戒められた。（けがれた霊の神の子告白と証言の禁止）

14.2.16　十二人を選ぶ

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 13-19 節福音書対照表

3:13-15 さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。（十二人を立て、使命を与える）

14.2.17　ベルゼブル論争

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 20-30 節福音書対照表

3:28,29 よく言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」。（イエスの使命の正しい認知と聖霊を

汚す罪）

14.2.18　イエスの母、きょうだい

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 31-35 節福音書対照表

3:35 神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。（神のみこころを行う者）

14.2.19　「種を蒔く人」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 1-9 節福音書対照表

14.2.20　たとえを用いて話す理由

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 10-12 節福音書対照表

4:11 そこでイエスは言われた、「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。（たとえで語られる）

14.2.21　「種を蒔く人」のたとえの説明

聖書箇所：マルコによる福音書 3 章 13-20 節福音書対照表

14.2.22　「灯」と「秤」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 21-25 節福音書対照表

14.2.23　「成長する種」「からし種」たとえを用いて語る

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 26-34 節福音書対照表

14.2.24　「成長する種」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 26-29 節福音書対照表

14.2.25　「からし種」のたとえ

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 30-32 節福音書対照表

14.2.26　たとえを用いて語る

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 33-34 節福音書対照表

14.2.27　突風を静める

聖書箇所：マルコによる福音書 4 章 35-41 節福音書対照表

4:39-41 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。（風も波も従わせるイエス）

14.2.28　悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 1-20 節福音書対照表

5:7 大声で叫んで言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓ってお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。（対話をしていやす）

5:17 そこで、人々はイエスに、この地方から出て行っていただきたいと、頼みはじめた。（イエス追い出される）

14.2.29　悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす（1）

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 1-10 節福音書対照表

14.2.30　悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒やす（2）

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 11-20 節福音書対照表

14.2.31　ヤイロの娘とイエスの服に触れる女

聖書箇所：

14.2.32　ヤイロの娘とイエスの服に触れる女（1）

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 25-34 節福音書対照表

5:34 イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」。（長血の女をいやす）

14.2.33　ヤイロの娘とイエスの服に触れる女（２）

聖書箇所：マルコによる福音書 5 章 21-24, 35-43 節福音書対照表

5:39-41 内にはいって、彼らに言われた、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいって行かれた。そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。（死んだ少女を生き返らす）

14.2.34　ナザレで受け入れられない

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 1-6 節福音書対照表

6:2,3 そして、安息日になったので、会堂で教えはじめられた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これらのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵はどうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、どうしてか。この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまずいた。（故郷で受け入れられない）

14.2.35　十二人を派遣する

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 7-13 節福音書対照表

6:7 また十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれた霊を制する権威を与え、（けがれた霊を制する権威をさずけ弟子を派遣）

14.2.36　洗礼者ヨハネ、殺される

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 14-29 節福音書対照表

14.2.37　五千人に食べ物を与える

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 30-44 節福音書対照表

- 五千人の給食とはどのようなものだったのだろうか

6:34 イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。（憐れみ・奉仕・教育）

6:42-44 みんなの者は食べて満腹した。そこで、パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。パンを食べた者は男五千人であった。（五千人をやしなう）

14.2.38　五千人に食べ物を与える（１）

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 30-34 節福音書対照表

14.2.39　五千人に食べ物を与える（２）

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 35-44 節福音書対照表

14.2.40　湖の上を歩く

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 45-52 節福音書対照表

14.2.41　ゲネサレトで病人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 6 章 53-56 節福音書対照表

14.2.42　昔の人の言い伝え

聖書箇所：

14.2.43　昔の人の言い伝え（1）

聖書箇所：マルコによる福音書 7 章 1-13 節福音書対照表

7:5-8 そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、／『この民は、口さきではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教として教え、／無意味にわたしを拝んでいる』。あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」。（パリサイ人と律法学者たちを批判）

14.2.44　昔の人の言い伝え（2）

聖書箇所：マルコによる福音書 7 章 14-23 節福音書対照表

7:15 すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人をけがすのである。（ユダヤ教の実践を批判）

14.2.45　シリア・フェニキアの女の信仰

聖書箇所：マルコによる福音書 7 章 24-30 節福音書対照表

7:24 さて、イエスは、そこを立ち去って、ツロの地方に行かれた。そして、だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れていることができなかった。（異邦人の地、ツロで、異邦人スロ・フェニキヤの女の女を癒す）

14.2.46　耳が聞こえず舌の回らない人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 7 章 31-37 節福音書対照表

7:37 彼らは、ひとかたならず驚いて言った、「このかたのなさった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」。（ガリラヤにもどり耳が聞えず口のきけない人を癒す）

14.2.47　四千人に食べ物を与える

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 1-10 節福音書対照表

8:5,6 イエスが弟子たちに、「パンはいくつあるか」と尋ねられると、「七つあります」と答えた。そこでイエスは群衆に地にすわるように命じられた。そして七つのパンを取り、感謝してこれをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟子たちはそれを群衆に配った。（四千人を養う）

14.2.48　人々はしるしを欲しがる

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 11-13 節福音書対照表

8:12 イエスは、心の中で深く嘆息して言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。（ガリラヤ湖西岸でも受け入れられず撤退）

14.2.49　ファリサイ派の人々とヘロデのパン種

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 14-21 節福音書対照表

8:15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。（パリサイとヘロデのパン種を警戒するように注意）

14.2.50　ベトサイダで盲人を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 22-26 節福音書対照表

8:22 そのうちに、彼らはベツサイダに着いた。すると人々が、ひとりの盲人を連れてきて、さわってやっていただきたいとお願いした。（盲人をいやす）

14.2.51　ペトロ、イエスがメシアであると告白する

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 27-30 節福音書対照表

8:29 そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。（ピリポ・カイザリアでの告白）

14.2.52　イエス、死と復活を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 8 章 31-38 節, 9 章 1 節福音書対照表

8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、（受難告知・イエスに従う者）

14.2.53　イエスの姿が変わる

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 2-13 節福音書対照表

9:2,3 六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、（山上の変貌）

9:7 すると、雲がわき起って彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった、「これはわたしの愛する子である。これに聞け」。（弟子たちも聞く）

9:9-13 一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみがえるとはどうい

うことかと、互に論じ合った。そしてイエスに尋ねた、「なぜ、律法学者たちは、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか」。イエスは言われた、「確かに、エリヤが先にきて、万事を元どおりに改める。しかし、人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか。しかしあなたがたに言っておく、エリヤはすでにきたのだ。そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった」。（時は満ちたか）

14.2.54　汚れた霊に取りつかれた子を癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 14-29 節福音書対照表

9:25 イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。（おしの霊に憑かれたこどもをいやす）

14.2.55　再び自分の死と復活を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 30-32 節福音書対照表/マルコによる福音書 9 章 30-32 節福音書対照表（参照付）

14.2.56　いちばん偉い者

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 33-37 節福音書対照表

9:35 そこで、イエスはすわって十二弟子を呼び、そして言われた、「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。（仕えるものに）

14.2.57　逆らわない者は味方

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 38-41 節福音書対照表/マルコによる福音書 9 章 38-41 節福音書対照表（ルカ参照付）

14.2.58　罪への誘惑

聖書箇所：マルコによる福音書 9 章 42-50 節福音書対照表

14.2.59　離婚について教える

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 1-12 節福音書対照表

14.2.60　子どもを祝福する

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 13-16 節福音書対照表

14.2.61　金持ちの男

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 17-31 節福音書対照表

14.2.62　金持ちの男（1）

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 17-22 節福音書対照表

10:21,22 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。すると、彼はこの言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。（金持ちの青年）

14.2.63　金持ちの男（2）

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 23-31 節福音書対照表

10:31 しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」。（イエスに従う者）

14.2.64　イエス、三度自分の死と復活を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表/マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表（参照付）

10:32-34 さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。するとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。（イエスの姿勢）

14.2.65　ヤコブとヨハネの願い

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 35-45 節福音書対照表

10:42-45 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。（あがないの死）

14.2.66　盲人バルティマイを癒やす

聖書箇所：マルコによる福音書 10 章 46-52 節福音書対照表

10:48 多くの人々は彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」。（テマイの子、バルテマイという盲人のこじきをいやす）

14.2.67　エルサレムに迎えられる

聖書箇所：マルコによる福音書 11 章 1-11 節福音書対照表

- マルコ、マタイ、ルカでは、このときが公生涯において、最初にエルサレムに来たときとして描かれているが、ヨハネでは、逆に、エルサレムや、その周辺、ユダヤなどでの活動についてたくさん書かれている。
- エルサレム入城の書き方が、マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネそれぞれに異なる。実際、エルサレム入城は、イエスにとってどのようなものだったのだろう。

14.2.68　神殿から商人を追い出す

聖書箇所：マルコによる福音書 11 章 12-26 節福音書対照表

マルコによる福音書 11 章 15-19 節福音書対照表

マルコ、マタイ、ルカでは、宮きよめと言われる記事は、イエスのエルサレム入城のすぐ後に書かれているが、ヨハネでは、イエスの活動の最初に書かれている。

14.2.69　いちじくを呪う

マルコによる福音書 11 章 12-26 節福音書対照表

マルコ 11:12-14 と 20-26 に分かれて書かれており、その間に、宮きよめ（11:15-19）の記事が挟まっている。マタイでは、宮きよめを先におき、そのあとに、まとめて（21:18-22）記しているが、記述内容的にも、マルコがもとであると思われる。このあと、イエスは、宮で、何日も教え続けることもあり、宮きよめのあとのこととし

ては、あまり辻褄があわないように、感じる。そこで、個人的には、この地域、ベタニヤなど、エルサレム近郊の信仰者を守るため、共観福音書、とくに、そのもととなっていると思われる、マルコによる福音書には、通常受難週とよばれる、最後の週の活動以外、ユダヤやエルサレムでのイエスの活動を書かないしわ寄せが背景にり、宮きよめの直前に連動させて、いちじくを呪う（あとで、ペテロが「あなたが呪ったいちじく」と言っている）記事が、ここに置かれているのではないかと思う。

しかし、エルサレム入城の翌日ではないかもしれないが、実際に、このようなこともあったのかもしれない。すなわち、イエスが空腹のゆえに、不機嫌になり、それがゆえに、宮きよめのような、乱暴なこともしてしまったのかもしれない。「いちじくの季節でなかったからである。」（13）というマタイにはない一文や、「弟子たちはこれを聞いていた。」（14）という、冷静にながめている弟子たちの記述は、それを表現しているのかもしれないと思う。イエスは、「食をむさぼる者、大酒を飲む者（マタイ 11:18,19、ルカ 7:33,34）」だとも言われており、聖人君主にあるまじきこととして、このできごとを、なぞが秘められているなどと、特別な解釈をしないほうが良いと思う。同時に、そうであっても、不機嫌ではおわらずに、かならず、たいせつなことを教えてくださるのが、ペテロをはじめとする、弟子たちにとっての、イエスだったのだろう。

祈りについて、または、願いの実現については、簡単に、語れるものではない。ここでは、最初に、「神を信じなさい」（22）とはじめ、「よく聞いておくがよい。」（23a）という重要なことを語るときの、慣用句ではじめ、まずは、神に信頼することから、「だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう。」（23b）と続ける。おそらく、眼の前に、オリーブ山（「この山」）があり、死海（「海」）が見えているかどうかは別として、その光景も想像できる場所だったのだろう。つづけて「そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう。」（24）というが、このことばが、独り歩きすると、危険も伴う。神様への信頼、そして、神様が何を望まれるかが理解できていなければ、利己的に、祈りを使ってしまう可能性もあるからである。ここで、「また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるしてくださるであろう。」（25）と日常に引き戻すように、ゆるしについて語っている。ここでは、恨み事とあるので、それはなにかと考えてしまうが、「だれかに対して何らかのわだかまり (anything you have against someone)」ぐらいの意味で、それを、許容（　　）しなさいとしているように見える。つづけて「あなたがたのあやまち（　　）」（25）とあるものも、英語では、trespasses とも訳されている。それが、神様のご性質なのだろう。常に、小さな過誤も、ゆるしてくださっているということなのだろう。

（2024.9.26）

14.2.70　権威についての問答

マルコによる福音書 11 章 27-33 節福音書対照表

「イエスが宮の内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、みもとにきて言った、『何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか』。」（マルコ 11:27b,28）から始まってい

る。祭司長、律法学者、長老たちは、最高議会（サンヘドリン）の構成メンバー、主だった人たちという意味だろう。ギリシャ語では、みな、複数男性の定冠詞が 3 つともについており、みな、複数いたのだろう。

実は、使徒行伝 4 章 7 節で弟子たちも、同じように問われている。「あなたがたは、いったい、なんの権威、また、だれの名によって、このことをしたのか」。このときも、大祭司の一族も集まっているので、まさに、最高議会の中心メンバーがイエスの前に現れたのだろう。イエスを殺そうとする企てについては、何回かすでに書かれているが、指導者たちが問うているということでも、重要な場面である。

気になるのは「何の権威」「これらの事」「誰が権威を授けたか」だろう。まず最初に、「これらの事」「そうする権威」である。マルコの記述によると、エルサレムでのことはこのときのことしか書かれていないので、はっきりしない。「これらの事」が、宮きよめ（マルコ 11 章 15-19 節）を指すのであれば、もうすこし具体的に問うだろう。すると、マタイ 21:23b で「その教えておられる所にきて」とあり、ルカ 20:1 では「イエスが宮で人々に教え、福音を宣べておられると」とあるので、宮で教えることを指すととるのが良いように思う。マルコでは、直接的には書かれていないが「宮の内を歩いておられると」とあり、回廊（柱：スコラで支えられている）を歩きながら教えるのが、エルサレムでも通常のことであったようなので、「教えていること」について言っていると取るのが自然だろう。マタイ 21:14 では、宮きよめの際に「そのとき宮の庭で、盲人や足なえがみもとにきたので、彼らをおいやしになった。」とも書かれているので、そのような噂を聞いたことも背景にあったのかもしれない。実際、ヨハネによる福音書を見ると、癒やしもふくめ、多くのわざをエルサレムおよびその周辺でされていることが分かる。

何の権威によって教えているのか、誰が宮で教える権威を授けたのか、と理解すれば、非常に自然である。そのように書かれていないのは、癒やしのような力ある業や、福音の宣教など、さまざまなことを排除しないように「これらのこと」とまとめられているのかもしれない。一義的に教えることであれば、宮で教えることに関しては、祭司長たち、教える内容については、律法学者たちが、権威を授ける人たちであったのだろう。宮きよめもふくめた全体的な秩序を考えると、長老たちを含めた、最高議会のもとにある事項となる。

しかし、イエスは、直接的には答えず「一つだけ尋ねよう。それに答えてほしい。そうしたら、何の権威によって、わたしがこれらの事をするのか、あなたがたに言おう。ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」（29b,30）と逆に問い返す。これは、議論の技術などではなく、本質を突いた問いだったと思う。おそらく、この人たちのなかにも、ヨハネの「罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマ」（マルコ 1:4）は天から、すなわち、神様の喜ばれることと、認めざるをえないと考えていた人もいただろう。ルカが記すように、ヨハネが祭司の子であるなら、ヨハネをよく知っている人もいたことだろう。同時に「人々が皆、ヨハネを預言者だとほんとうに思っていた」（32b）ということは、ヨハネのバプテスマが天からのものではないとし、地に引き下ろすことは、自分たちの人々に対する宗教的優位性も失いかねないとうことにもなる。

ヨハネ福音書記者またはその付近には、祭司長の知人（ヨハネ 18:15）も居たようであるし、実際、ヨハネ福音書では次のように証言している。「しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。」（ヨハネ 12:42,43）心の分裂が表現されている。真理だと思っても、それを受け入れられない。信じても告白できない。さらに、行動にまでは移せない。共観福音書には、かろうじてアリマタヤ

のヨセフのことが記されているが（マルコ 15:43、マタイ 27:57、ルカ 23:51、ヨハネ 19:38）微妙な心の内を持っていた人たちも多かったのだろう。すくなくとも、祭司長、律法学者、長老たちと出てきたら、これは敵対する「悪者」などと考えないほうがよい。わたしたちと同じような人たちだったのではないだろうか。

おそらく、この人たちは「自分たちは、神の御心、真理を知っている。少なくとも、群衆（一般の人々）とは比較にならない知識をもっている。」と考え、「真理を探求するのではなく、自分たちが持っている知識に頼って判断しようとし」さらに、「自分たちの優越によって人々の間で築いてきた『ひとのほまれ』を手放せない。」面はあるのだろう。しかし、わたしたちに、このような態度がないとは言えないように思う。

求められているのは、自分の弱さを知り、悔い改めによって救いをもとめる生き方。神の御心をつねにもとめて、自分の信じることがほんとうに、神様のみ心なのかを問いつづける生き方だろうか。ここで、はからずも、このひとたちは「わかりません」と答えているが、それは、たいせつな出発点であるようにも思う。宿題をもらったと感じた人も居たかもしれない。まさに『わたしの家（宮）は、祈の家ととなえらるべきである』。自分の心が、神様のみこころと同期しているかを問う場所なのだろう。わたしたちも、悔い改めて、自らを低くし、御心を求めて生きるものでありたい。そして、この人たちの中にも、そのような悔い改めを経験したひとがいることを期待する。

（2024.10.3）

14.2.71　「ぶどう園の農夫」のたとえ

マルコによる福音書 12 章 1-12 節福音書対照表

彼らはいまの譬が、自分たちに当てて語られたことを悟ったので、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。そしてイエスをそこに残して立ち去った。(マルコ 12:12)

と最後にある。まず「彼ら」は誰であろうか。1 節にも「そこでイエスは譬で彼らに語り出された」と彼らが登場するので、それより前、すなわち、権威についての問答で、質問する、祭司長、律法学者、長老たち、これらは、サンヘドリン（最高会議）のメンバーを代表しているが、民の指導者たちをさすと考えてよいだろう。すると、このたとえは、11 章 27-33 節とつながっていると考えるのが良さそうである。

マタイでは、「二人息子」のたとえ（マタイ 21:28-32）が挿入されているが、それを除くと、マタイも、ルカも、権威についての問答のあとに置かれている。注意を要するのは、ルカでは、「そこでイエスは次の譬を民衆に語り出された」（ルカ 20:9）と始まっており、他にもひとが居たことが想定されている。ただ、そのルカも最後は「このとき、律法学者たちや祭司長たちはイエスに手をかけようと思ったが、民衆を恐れた。いまの譬が自分たちに当てて語られたのだと、悟ったからである。」（ルカ 20:19）となっているので、やはり主としてはたとえが語られた対象は、民の指導者たちと考えてよいだろう。追加しておくと、マタイで挿入されているたとえの最後にも「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。32 というのは、ヨハネがあなたがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった。」（マタイ 21:31b,32）

とあり、この前の権威についての問答でのイエスの相手である民の指導者が「あなたがた」に対応している。

そうすると、たとえのなかの、ぶどう園の主人は、神様、農夫は、民の指導者たちと理解するのが自然だろう。では、ぶどう園はどうだろうか。おそらく、民の指導者たちが、世話をすべきだった、イスラエルの民を意味するのだろう。しもべたちは、預言者など、神様からの使いで、明確ではないが、バプテスマのヨハネも含まれているように思われる。主人の愛子は、イエスであろう。民の指導者たちは、すでに、宮きよめのときにも、どうかしてイエスを殺そうと計っているが（マルコ 11:18）、その人たちに対して、神の愛子である、イエスが殺されることを語っていることになる。同時に、「あなたがたは、この聖書の句を読んだことがないのか。『家造りらの捨てた石が／隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、／わたしたちの目には不思議に見える』」。（マルコ 12:10,11）とも語られており、殺されるという事実以上のことが語られている。そのことも含めて、イエスが「これらのことをする権威」（マルコ 11:28）に対する、応答以上のものが語られていることになる。

疑問に思うのは、なぜ、民の指導者は、主のしもべを受け入れず、打ちたたき、殺してしまうのか。そして、主は、なぜ、愛子ならうやまってくれると考えたのか。そして、神様が受け取ろうとしていた実は何なのだろうかということである。一つ一つ考えてみよう。

神様は、ぶどう酒が欲しかったのだろうか。おそらく、なにかにたとえられているのだろう。ぶどう園から得られるもの。民から得られるものである。それは、神様が喜ばれること。神様が受けるべき栄光だろうか。それは、神様が望まれること、神様が望まれることをもとめ、神様のみ心に生きることだろうか。それこそが、神様が栄光を受けることだろう。そのことのために、民の指導者は立てられているにもかかわらず、神様の栄光のためではなく、自分たちの栄光のため、自分たちのためになることを求めたということだろうか。それを、神様がうけるべきものを、自分たちのものとするということだろうか。もう少し、適切な表現があるかもしれない。

この民の指導者たちは、民が主に仕えるために立てられた人たちであったはずである。神様は、このひとたちが、神様のためと言っているなら、愛子をうやまってくれることは当然と思ったということだろうか。実際は、そうではない。なんと悲しいことだろうか。しかし、おそらく、それは、様々なところに存在することなのだろう。現代的には、一人ひとりが、神様に従うことがたいせつで、指導者の責任ではないという観方もあるかもしれない。しかし、指導者として立てられるものはおり、互いに愛し合うにしても、神様が喜ばれることのために、互いに助け合うこともまた、当然だろう。責任というより、それを喜びとできるかということだろうか。

民の指導者は、そしてわたしたちは、どうして、そのようにできないのだろうか。それこそじっくり考えるべきことである。

（2024.10.10）

14.2.72　皇帝への税金

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 13-17 節福音書対照表

イエスの言葉じりを捕らえようとして、「カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。（14b）と問うてきたひとたちに、「デナリを持ってきて見

せなさい」（15b）と答え、彼らがデナリをもってくると、「これは、だれの肖像、だれの記号か」。（16b）と問い、「カイザルのです」（16c）との答えに対して「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。（17a）と命じる。彼らはイエスに驚嘆した。（17b）と終わっているが、なんとも痛快である。しかし、それで良いのだろうか。

まず、我々が理解しておかなければならないのは、聖書に明確に書かれてはいないが、熱心なユダヤ教徒、とくにファリサイ人は、税金を納めることは、ローマに従属することで、自由を失い、アブラハムの子としての尊厳が失われる危機的な状態だと考えていたのではないかと言うことである。ルカ 20:20b に「イエスを総督の支配と権威に引き渡す」ことが目的であったとも書かれている。マルコでは、単に「言葉じりを捕らえようとした」とあるだけだが、すでに、イエスを捕らえ（12:12b）殺そうと考えていたことが「祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、どうかしてイエスを殺そうと計った。」（11:18）と、宮きよめの箇所の最後に書かれている。このあとの経緯からも推察できるように、おそらく、死刑の権限は、サンヘドリンにはない。すると、ルカが書いているように、総督に殺してもらうことが合法的に、かつ自分たちの手を汚さず、民衆からの批判の矢面にも立たずにできる最良のこととなる。それには、ここで議論されている、問いは重要で、これもルカが後の裁判の場でのこととして書いているように「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。（ルカ 23:2）という言質（げんち：あとで証拠となるような約束の言葉。ことばじち。）をとることを目指したのだろうと想像できる。

我々にとって理解しにくいのは、政治的に、ローマに支配されており、レギオン（大隊）などの存在を見れば、熱心党のテロ的なものではこの状態を覆せず、ヘロデ大王の死後、アケラオの支配から直轄地となったように、その支配が強化されることを見ているひとたちにとっては、税金を納める程度は仕方がないと思うのではないかということである。しかし、貨幣に書かれた、自ら DIV 神とする、ローマ皇帝、最高神祇官と名乗る、政教一致と思われる支配状況の中で、税金を自分たちの貨幣ではなく、支配者の貨幣に支配され、それによって税をも納めることは、我慢ならないことだったのかもしれない。一般的にみると、ローマ帝国は、支配体制も盤石で、制度などもしっかりしていたような印象を受け、当時としては、ある程度、永続可能にみえるが、ユダヤ人にとってはそうではなかったのだろう。ヨハネ 8:33 の「わたしたちはアブラハムの子孫であって、人の奴隷になったことなどは、一度もない。どうして、あなたがたに自由を得させるであろうと、言われるのか」。は印象的である。これだけで、十分な理解が得られたとは思わないが。

税金についてイエスはどのように考えていたのだろうか。イエスの「デナリを持ってきて見せなさい」（15b）という、実物教育にまず驚かされる。実際に、デナリには、神的存在、または神との仲介者としての皇帝のイメージが描かれ、言葉が添えられている。それを確認し「これは、だれの肖像、だれの記号か」（16b）と問い、ことばじりを得ようとする人に答えさせる。「カイザルのです」（21a）そのあとで「それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。（21b）と答えるのである。神のものにも、神の肖像、神の記号が記されているのか。象徴的には、「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」（創世記 1:27）も、ひとつの回答なのかもしれない。しかし「はじめに神は天と地とを創造された。」（創世記 1:1）と信じるなら、すべてのものが神の創造物なのだろう。すると、すべてが神のものとなる。しかし、すると、神のものの中に、カイザルのものがあるのか、それがどのような関係にあるのかが問題になる。とても難しい問題も生じるように思う。実物教育とともに、この質問は、イエスのことばじりを捕らえようとしていた

人たちは、それ以上、なにも言えなかったかもしれないとは思うが、イエスが伝えたかったこと、または問いたかったことは何なのだろう。おそらく、最初の問い「カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。（14b）に戻るなら、「神様のものは神様にお返しすべきでしょうか。お返ししなければならないでしょうか。」となるように思われる。そして、これは、「すべてのものが神様のものであるなら、神様のものを神様にお返しするにはどのようにしたら良いのでしょうか。という問いにもつながる。」このことを、イエスは考えてもらいたかったのだろうか。神様にお返しすることは、おそらく、神殿税などではなく、神様のみこころを行うこと（マルコ 3:35）なのだろうか。

国または統治者と信仰の問題、政治・経済と宗教だろうか、神様のもとでの自由も関係するだろうか、これらについての、現代的意味を考えたいが、イエスのことばは、これらに関係はしていても、明確には何も伝えていないように思う。あくまでも、問いかけなのだろうか。問いかけは、質問者にとっては、驚き（17b）であり、真剣にこのことばについて考えようとしたひとも居たかもしれないが、わたしたちにとってはどうなのだろうか。困難な問題が目の前にあるときに、神様の視点で見てみることが促されているのかもしれないとは思う。自分の置かれた状況や、その他の障壁に困難や苦しみや理不尽さの原因を求めるのではなく、神様がなにを求めておられるか、わたしたちが、どのような応答をすべきかは、問われているように思う。神のものが、神様のしるしが付いているものに囲まれているならば。

（2024.10.17）

14.2.73　復活についての問答

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 18-27 節福音書対照表

23 復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。と、サドカイ派の人たちが問うた時、イエスは、24b「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか。25 彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。と答え、さらに、26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている」。と教えている。

神様による復活は、御使のような存在としてよみがえることをいっているのであって、この世での規定などとは、無関係、次元がことなるものであるとまずは述べている部分は、ある程度理解できるように思う。しかし、サドカイ派ということで、モーセ五書のだれでも知っている出エジプト記 3 章 6 節からの引用の解釈には驚かされる。確かに、モーセに、『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と現在形で語っているのだから、アブラハム、イサク、ヤコブの神であるということは、今も続いているということを意味するように思う。しかし、アブラハム、イサク、ヤコブも何らかの意味で、神と共に生きていることと、復活とは同一のことなのだろうか。それは、正直良くわからない。

もう少し問いを拡大してみると、「死んだひとが生き返ること、イエスの復活、一般の（イエス以外の）ひとの死

後の（最後の日の）復活、神との関係において生き続けること、それぞれの関係と、それぞれの意味についてはどう考えたらよいのだろうか。」少し整理しないといけない。まず、エリヤ（列王記上 17:17-24）や、エリシャ（列王記下 4:18-37）が、死んだひとを生き返らせたり、イエスが、ヤイロの娘（マルコ 5:35-43、マタイ 9:23-26、ルカ 8:49-56）、ナインでのやもめの息子（ルカ 7:11-17）、ラザロ（ヨハネ 11:38-53）を生き返らす記事は、死から生き返るまで、あまりときを経ていないので、他の三種類のこととは、別のものと分類してもよいように思う。むろん、これらが、神様が肉体の死にも介入しうることを示していることは確かなのだろうが。また、マタイ 27:53 の記事（そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。）については、検証が難しいので、これも、別のものと分類することにしよう。

すると、大きく分けると、イエスの復活と、一般の人の死後の復活と、ここでイエスが述べている、神と共に生きることに分類できるように思う。どれも難しい。イエスの復活はと、一般の人の死後の復活は、別の機会に扱うこととし、今回のテキストの中心部分を占めると思われる、神と共に生きることについては、ここで考えておきたい。テキストは最初にも引用したように、次のようになっている。

> 26 死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている

永遠の方との交わりは、一瞬のこと、わたしたちが肉体的に生きていることではなく、時を超えたものだと伝えているのだろう。すごいこと、素晴らしいことである。

> イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。（ヨハネ 11:25-26 ）

ヨハネによる福音書の言葉も、通じる部分があるように思われる。ヨハネによる福音書の言葉を使うと、永遠の命だろうか。イエスを通して、神様との交わりの中に生きることだろうか。そのように、抽象化・普遍化してよいのか、不安は残る。

わたしが、現在書けるのはこのぐらいだが、最後に、この箇所の並行箇所におけるルカによる福音書の言葉を引用しておく。

> 34 イエスは彼らに言われた、「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、35 かの世にはいって死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、とついだりすることはない。36 彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。
>
> 38 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。人はみな神に生きるものだからである」。

前半における「かの世にはいって死人からの復活にあずかるにふさわしい者たち」では、復活にあずかることを、それにふさわしい者たちに限定している。「御使い」が「天使（福音書ではここのみ）」に変えられ、さらに、「また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ない」と論理的に、死なないことに結び

つけられている。

後半では、「人はみな神に生きるものだから」と、解釈が入っている。パウロの解釈が入っているかどうかまでは、検証できないが、マルコのような素朴な記述ではなく、一歩、踏み込んだものになっていることはたしかである。ルカの解釈である。

まったくの私見でかつ確信・確証もないが、マルコが書かれた時点では、パウロの書簡（少なくとも主要なもの）は、すべえて書かれ、ある程度流布されていた可能性もあると思うが、マルコ著者の周辺、または、マルコの情報源では、復活についての理解が一定しておらず、深められていなかったのかもしれない。そのような背景のもとで生み出されたことも、勘案して読まないといけないのかもしれない。

（2024.10.24）

14.2.74　最も重要な戒め

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 28-34 節福音書対照表

神殿での議論において、「イエスが巧みに答えられたのを認めて」（28b）律法学者が、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」（28c）とイエスに問い、イエスが「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。（29-31）答える。律法学者は「先生、仰せのとおりです、『神はひとりであって、そのほかに神はない』と言われたのは、ほんとうです。また『心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また自分を愛するように隣り人を愛する』ということは、すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです」（32b,33）と応じたのにたいして、イエスは「あなたは神の国から遠くない」（34b）と応じた箇所である。

マタイに対照箇所があり、ルカの善いサマリア人のたとえの直前にある律法学者との問答も、内容的に非常に似ているが、すくなくとも、マタイ、ルカとも、イエスを試そうとして問うたとあり、マルコに書かれている動機、およびそのあとの、律法学者の応じ方とは異なるので、まずは、マルコのテキストに集中して考えてみたい。

まず、この律法学者は、「イエスが巧みに答えられたのを認めて、イエスに質問した」とあるので、マルコは、このひとを好意的に描いている。最後に、このひとが、イエスのことばに応答したあとにも、「イエスは、彼が適切な答をしたのを見て言われた」とあるので、イエスとこの律法学者のやりとりを、マルコが好意的に書いていることは確かだろう。マタイは、このあとの 23 章で、律法学者、パリサイ人に対して非常に厳しい言葉を延々とイエスが語った様子を描いているので、この律法学者に対しても好意的には書けなかったのかもしれない。

さて、この律法学者の質問は、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」である。これに対して、イエスは、「第一のいましめはこれである」、「第二はこれである」として旧約聖書のことばを引用し、最後に「これより大事ないましめは、ほかにない。」と語っている。「第一のもの」という質問に、第一、第二と答えているので、これらは、一つのもの、または、深く関係しているものと捉えることができるように思う。

旧約聖書にも、また、他の同時代の文書（十二族長の遺言など）からも、旧約聖書にあるたくさんのいましめを数えたり、別のことばで、まとめたり、特別に重要なことばを抽出したりというこころみがされていたようである。その中心にあったのが、「聞け（シェマ）」ではじまる、イエスが最初にあげている、申命記６章４・５節であろう。

> イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。

イエスは、さらに、レビ記 19 章 18 節からの引用も用いている。引用は一部であるが、全体は以下のようなものである。

> あなたはあだを返してはならない。あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。わたしは主である。

この二つを結びつけて、「主（または神）を愛し、隣人を愛する」という表現は、上に挙げた『十二族長の遺言』にもあり、特に新しいことではないようである。

しかし、いくつか気になることがある。イエスのこたえは、

> 「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。

まず、「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。」の部分は、マタイにもルカにも欠けている。また、さらに、小さいことではあるが、申命記にはない、「思いをつくし（with all thy mind）」が、イエスのことばには、入っていることである。

ひとつめについては、あとで考えることにして、思いをつくしは、あとで、この律法学者が復唱している場面では、「知恵をつくし」となっており、英語では、“with all the understanding” であり、すべてをもって、または全身全霊をもってと言う意味のものが、このように表現されているだけで、大きな違いはないかもしれない。しかし、やはり、英語の “mind” から、知的、または理性的な面も含めているということを表現しているのかもしれない。しっかり、イエスが語ったことも考えてみよう。

実は、わたしは、この箇所は、何回か学んでいるが、この二つのいましめをつぎのようにまとめることにしている。

> 「たいせつなひと（かた）をたいせつにすることは、たいせつなひと（かた）のたいせつなひとをたいせつにすること。」が、神様を愛し、隣人を愛すること。神様を愛することは、かみさまがたいせつなことをたいせつにすること。そして、それは、御心をおこなうとも表現でき、それは、このように表現できるのではないかと思うからである。

レビ記では明らかに、隣人は、同胞、「あなたの民の人々」である。しかし、神様が愛される人びととすれば、それほど、限定されるわけではないし、さらに、「主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。」と宣言すれ

ば、全世界のひとを含みうることになるからである。

きょうだい、隣人、すべてのひとは、そう単純に一括りにはならないが、それこそが、知的、または、理性的な面もふくめて、神様を理解し、神様が愛しておられるひとが広がっていき、さらには、自分への神様の愛の大きさ広さも広がっていくことではないだろうか。

最後にイエスが、「あなたは神の国から遠くない」。と語る時、これは、ほとんど満点と、ポジティブなことを表現しているのか、ちょっと足りないということも含んでいるのかどちらかを考えてみよう。もう少し、表現を変えると、なにをもって、イエスが、この律法学者が、適切な答をしたと見たのだろうか。もし、少し足りないとすると、それは、何なのだろうかということである。

個人的には、適切な答えをしたと見たのは、弟子たちではないだろうかと思う。弟子に比較して、適切な旧約聖書（サムエル記上 15:22、ホセア 6:6）も踏まえて答えていることがあるように思う。同時に、「それから後は、イエスにあえて問う者はなかった。」とあるが、ここからは、弟子たちとの話が書かれていることを考えると、イエスに従っていくこと、イエスとともに生きることによってしか、自分の十字架を負ってイエスに従っていかなければ学べないことがあることを言っているのではないだろうか。弟子たちは、自分たちと比較して、この人はすごいと思ったかもしれないが、弟子たちには、学ぶ機会がつねに与えられていたのかもしれない。

14.2.75　ダビデの子についての問答

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 35-37 節福音書対照表

最も重要な戒めの最後は「それから後は、イエスにあえて問う者はなかった。」（12:34b）で終わっており、様々な人達との議論、問答は終わり、この箇所では、イエスから「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。」と問うところから始まっている。

マルコによる福音書は「神の子イエス・キリストの福音のはじめ。」（1:1）から始まるが、イエスがキリストであることについては、ペテロの告白（8:29）以外は、9 章 41 節に「だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報いからもれることはないであろう。」とある以外は、書かれていない。イエスがキリストであること、どのようなキリストであるかは全体で証言しているが、イエスが、自ら宣言するようなことは書かれていない。そんなマルコで、キリストとは、どのような方かについてこの箇所は、語っている。その意味からも、ここでキリストとうときは、直接的には、イエスのことを指しているのではなく、「イエス・キリストがダビデの子か」と問うているのではなく、最初の問いは、当時待望されていた「来たるべき神の油注がれたもの（キリスト）はダビデの子だと言えるのか」という問いであることを確認しておく必要がある。

ダビデについては、サムエル記上 16 章から記述が始まり、サムエル記下の全体、そして、先祖と共に眠って、ダビデの町に葬られるまで、イスラエルを 40 年治めた王である（列王記 2 章 10,11 節）また、ナタン預言と呼ばれている、サムエル記下 7:8-17 では「あなたの家と王国はわたしの前に長く保つであろう。あなたの位は長く堅うせられる」（7:16）ことが書かれているだけではなく、「わたしは彼らの上にひとりの牧者を立てる。すなわち

わがしもべダビデである。彼は彼らを養う。彼は彼らを養い、彼らの牧者となる。主なるわたしは彼らの神となり、わがしもべダビデは彼らのうちにあって君となる。主なるわたしはこれを言う。」（エゼキエル 34:23,24）など、明確とは言えないにしても、ダビデのような神のしもべが、治めるようになるとの預言が旧約聖書にいくつか見られる。（イザヤ 9:6,7、11:1,2、詩篇 89:20-24）律法学者たちは、この先を、いろいろと議論していたようだ。そのことを踏まえたイエスの問いかけである。

イエスは引き続き次のように語っている。

> 36 ダビデ自身が聖霊に感じて言った、／『主はわが主に仰せになった、／あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、／わたしの右に座していなさい』。37a このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。

この詩篇は、一般的に、ダビデの詩で、かつ、メシア（キリスト）に関する詩篇だと考えられており、ここで、主は、主なる神、わが主は、メシア、「わが」と読んでいるわたしは、ダビデをさすという理解のもとで、イエスは、「ダビデ自身がキリストを（わが）主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」と言っているのである。

整理すると三つの問いが考えられる。

A. イエスは、キリストはダビデの子だということを否定しているのか。

B. イエスは、自分がダビデの子であることを否定しているのか。

C. キリストは、ダビデの子を超える存在であるということか。

一つ一つ考えていくことにする。A は、少なくとも、表面的には、そのとおりであるように思われる。B については、イエスがキリストであり、かつ、A がその通りなら、論理的帰結として、キリストであるイエスは、ダビデの子ではないとなるが、上にも述べたように、ここでも、イエスは、ここでいうキリストであるかどうかについては、明確にしておらず、否定も肯定もしていないととるのが穏当であろう。最後に、C については、キリストとダビデの関係が明確に示されているわけではないが、ダビデのような、または、ダビデに従属する子分のようなものではないと言っているという意味で、ダビデの子を超える存在であると言っていると解釈してよいだろう。ただ、だから、神の子だと断言するのは、神の子について明確にしなければならいこともあり、すこし、行き過ぎであるように思われる。

簡単に言うと、来たるべきキリストは、ダビデが主と呼ぶようなもので、ダビデの子といわれるようなものではないと言っているのだろう。ダビデの子は、文字通りの息子ではないので、どのように定義するか考える必要があるが。

実は、マルコでは、ダビデの子ということばも非常に注意して使われているように見え、実際にイエスをダビデの子であると、呼ぶのは、エリコでの盲人（10:47,48）だけである。マタイでは、各所でイエスに対してダビデの子と言っていることとは、対照的である。（マタイ 1:1（系図）、12:23（ベルゼブル論争）、15:22（カナンの女）、21:9（エルサレム入城））ルカでも、降誕物語からは、ダビデの子孫であることが語られるが、ヨハネ 7:42「キリストは、ダビデの子孫から、またダビデのいたベツレヘムの村から出ると、聖書に書いてあるではないか」と言

った。」や、系図の議論に関する注意（テモテ前書 1:4、テトス 3:9）を考え、聖霊による処女降誕などの話を考えると、血筋として、ダビデの子孫かどうかは、あまり重要ではないとしたほうがよいように思う。そのいみで、ダビデの子かという問いも、血筋について無関係と理解したほうが良いだろう。

マルコは最後「37b 大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。」で終わっている。問答は前段で終了し、群衆は、イエスの話に非常に良い印象をもっていたことが書かれているのだろう。問答における驚かされる応答とともに、このような議論においても、イエスの聖書の一歩深い理解を通して語られており、非常に興味深い。

14.2.76　律法学者を非難する

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 38-40 節福音書対照表

大ぜいの人々に、「律法学者に気をつけなさい」とイエスは教えている。律法学者に対して、非難しているのではなく、教えの一部として語られていることがたいせつなのだろう。すなわち、ここから、どのような学びを得るかということである。単に、「長い衣を着て歩くこと」や「広場であいさつされること」や「会堂の上席、宴会の上座を好」むことや、「やもめたちの家を食い倒」すことや、「見えのために長い祈」をしなければ良いのだろうか。もし、そうであれば、そのようなものを避けるように教えるべきである。

マルコの律法学者非難は簡素で短く、マタイは非常に長く、ルカは異なる形にまとめてあるようだがそれは何を意味するのだろうか。調べてみると、マルコでは、イエスがパリサイということばを出す箇所は、マルコ 8:15 そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。だけのように思われる。イエスの受難告知でも、律法学者としている。ユダヤ人が多い地域で、対抗上、イエスの律法学者批判が拡大しているのかもしれないが、マルコでは、教えに集中しているとして、理解すべきだろう。

しかし、マルコの最初から見てみると、まず、イエスの教えに関して「人々は、その教に驚いた。律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。」（マルコ 1:22）からはじまり、律法学者やパリサイ人が絡む記事が非常に多いことに気付かされる。ということは、やはり、「律法学者に気をつけなさい」という教えを通して、イエスの真意を受け取らなければならない。

律法学者の対極はおそらくイエスであり、イエスに従うことが、律法学者に注意することなのだろう。すでに、最も大切な戒めとした目的が、神様を愛すること、隣人を愛することからズレてしまっていることを指摘しているのではないだろうか。それを示すには、この短い箇所で十分なのかもしれない。同時に、それは、キリスト者にも同じ危険があることを示してもいるだろう。神様を愛そうとしてはじめたことが、そこから離れてしまう。隣人を愛そうとしてはじめたことが、そこから離れてしまう。離してしまうものは何なのだろうか。おそらく、それが、自分中心視点、利得をもとめることなど、最初の目的とは離れたことが入り込んでしまっていることなのだろう。それを偽善というのかもしれない。自ら気づくことは難しいのかもしれないが、イエスは、それに気づくように促しているように見える。

14.2.77　やもめの献金

聖書箇所：マルコによる福音書 12 章 41-44 節福音書対照表

イエスが、賽銭箱に向かって座り、様子を見ていると、多くの金持ちがたくさん賽銭箱に投げ入れているのに対し、一人の貧しいやもめがレプタ二枚を捧げたのをみて、弟子たちに、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」と教えた箇所である。

マルコと、ルカは、ほぼ同じ構成で、やもめの献金を、ダビデの子についての問答、律法学者を非難する箇所のあと、神殿の崩壊を予告するの前においている。教える相手について、マルコでは、途中で「弟子たちを呼び寄せて」語られるが、ルカでは、その記述はなく、その前の律法学者を非難する箇所の冒頭の、「民衆が皆聞いているとき、イエスは弟子たちにいわれた。」(20:15) から続いているように思われる。内容を見ると他にもマルコとルカの違いがある。マルコには「さいせん箱にむかってすわり K (over against) 」とあるがその部分はルカにはない。そのあとも「多くの金持ち 」「ひとりの貧しいやもめ 」とマルコではなっているが、ルカでは「金持ちたち」「ある貧しいやもめ」となっている。短い箇所ではあるが全体として、ルカには、マルコの現場を切り取ったような表現が欠け、話し、または教えとしてまとめられているように見える。マタイでは、ダビデの子についての問答のあとは、律法学者とファリサイ派の人々を非難する箇所が殆ど一章続き、最後にルカでは別の箇所に含まれ、マルコにはない、エルサレムのために嘆く記事（マタイ 23:37-38, ルカ 13:34-35）があり、このやもめの献金についての記事はない。すなわち、律法学者やファリサイ派の人々は批判し、エルサレムが中心であることについては批判的でも、やもめの献金に対して最大の評価をする記事は入れられなかった背景があるのかもしれないと考えられる。ユダヤ人キリスト者の指導的な立場の人達が著書だったことと関係しているのだろうか。

貧しいやもめはなにかの象徴だろうか。やもめのようになれと言っているのだろうか。それとも、そうではないひとを非難しているのだろうか。おそらくそう単純ではないだろうが、少数者（minority）として描かれ、多数者（majority）には、「多くの金持ち」だけでなく、「ありあまる中から投げ入れた」「みんなの者」が含まれ、さらに、弟子たち、クリスチャンにも呼びかけられているのだろう。それ故に、マタイはこの箇所を加えず、律法学者やパリサイ人への批判・呪いでとめておいたのか。そう考えると、キリスト者自身として、心配になり、恐ろしくもなる。現代のキリスト者はどう読むだろうか。しかし、同時に、この貧しいやもめのようになりなさいと言っているのかと言う問いは、深く考えないと行けないと思う。同時に、ザアカイが財産の半分捧げて、イエスに「きょう、救がこの家にきた。」と言われたように、全財産を捧げるのが良いと考えるのもおそらく、適切ではない。

律法学者を非難する前段では、律法学者が律法の真意をそれを守ることによって神様の御心を行い、人々に教えることから離れて、またはそれて、違った方向にいってしまったことが問題であったように思われる。このやもめの献金の箇所でも、献金や寄付の本来の意味からそれてしまっていることが指摘されているのかもしれない。

では、献金のとは寄付の目的は何なのだろうか。それをまず考えなければならない。「神様の恵みと憐れみに対する感謝の応答として神様の業に捧げ物と奉仕によって加えさせていただくこと」だろうか。すなわち、神様との関係の営みの中に、捧げ物があるはずである。しかし、それが、自分の義を見せびらかすことになってしまっているのか。それを指摘しているのが、マタイ 6 章 2 節の「だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならすな。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。」かもしれない。

しかし、この箇所では、同時に、強烈な対比がある。イエスの「だれよりもたくさん入れた」という根拠が、「みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」となっている点である。律法を徹底するとういマタイの山上の垂訓の背景とは異なり、もっと直接的に、神様の視点を教えているように見える。すなわち、神様がどう見ておられるかをイエス様の視点から教えているのだろう。

では、イエスの目から見て（神様の秤で）やはりたくさんいれることがよいのかという問いが生じるが、それも少し違うように思う。では、結局、何を教えているのだろう。神様の視点を解き明かすだけでよいのだろうか。このやもめに「安心して行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」（マルコ 5:34,10:52）と言えるだろうか。神さまに委ねることで良いのだろうか。正直、このやもめの明日がきになってしまう。さらに、このやもめが、もし、その前の律法学者を非難する箇所にあるような、律法学者に家を食い倒された（マルコ 12:40）やもめだったら、放って置いて良いのだろうか。どう考えたら良いのだろうか。

この答えはわたしはわからない。しかし、おそらく、それは、正しい答えをイエスに教えてもらうのではなく、わたしたち一人ひとりが、神様の御心を行うことによって、神様とともに働くことに加えさせていただくことに、委ねられているのだろう。Savior Complex （わたしが助けなければいけないという強い感情）はどうしたら良いのだろうか。わからないことは、多い。

14.2.78　神殿の崩壊を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 1-2 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 1-2, 3-13 節福音書対照表

神殿の壮麗さに注意を促した弟子のひとりに対して、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。とイエスが答えている箇所で、この次の段落に続く。

柱はすべて金箔で覆われ、それ以外の部分も大きな大理石で作られていたため、白く輝いていたと、ヨセフスが描いている神殿であるが、AD66 年からのユダヤの反乱に対し、AD70 年に、ローマのテトス将軍によって補給路を断つことで、エルサレム内が飢饉となり、ユダヤは敗北。ローマ軍が金箔を剥がし取るために、丁寧に石柱を「その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなる」かたちで、神殿を破壊したと言われている。

その意味で、ここに書かれているイエスのことばは、40 年も前に、そのことを預言したものだと言われ、また学

者たちは、あまりにも記述が正確で、それが、おそらく、AD70 よりもあとに書かれた、マタイやルカにも全く同じ記述で書かれていることから、マルコが書かれたのも、AD70 年代ではないかとも言われている。

神殿破壊のことは、ヨハネ 2:19 にも、イエスが、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。と語ったと書かれており、このことは、マタイ 27:40 でも「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。と、イエスを非難する言葉として書かれているので、こちらの方は、確実にイエスの言葉であろうと思われる。無論、それだからと言って、13 章 2 節をイエスが言わなかったことにはならない。

しかし、この言葉は、基本的には、やもめの献金に関する記事に引き続き、物質的な壮麗さに目を奪われている、「弟子の一人」に対して、物質的な壮麗さは失われることを告げたものだとも取ることができる。その意味でも、預言の成就にこだわらない方がよいように思われる。

実際、このあとに続く会話でも、「いつ、そんなことが起るのでしょうか。」との問いからはじまるが、イエスは、AD70 年のことにとらわれず、主の日や、終わりの時などについて、考えている弟子たちに、たいせつなことを教えようとしておられる。人間の興味としては、世の終わりや、預言の成就に心が囚われてしまうことは、仕方がないが、イエスのメッセージはそこには、ないと思われる。

14.2.79　終末の徴

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 3-13 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 1-2, 3-13 節福音書対照表

神殿のことに関するイエスの言葉を受けて、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに「わたしたちにお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんなことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますか」。と尋ね、それに対して、イエスが応答している箇所である。

四人の中心的な弟子たちが「ひそかに」「わたしたちにお話しください」とイエスに尋ねる描写はとても、リアルで、弟子たちが、われわれと同じ地平に立っていることを感じさせ、親近感を感じる。しかし、おそらく、そのような問いにも、イエスは、注意すべき点、神様の御心をと伝えているのだろう。

にせのイエスに惑わされるな。戦争や自然災害や飢饉は起こっても、それで終わりではないこと。福音のために証言を求められる。そして、家族などすべての人に憎まれる。と書かれ、それぞれについて、注意点を語っている。一つ一つ実際にこのあと起こったことなのだろう。

個人的には、愛をたいせつにするにもかかわらず、すべての人に憎まれるようになるという箇所がとても衝撃的である。どう向き合えば良いのだろうか。さらに、「福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。」とも書かれている。これはどう理解すれば良いのだろうか。考えたい。

14.2.80　大きな苦難を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 14-23 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 14-23, 24-27 節福音書対照表

「荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。」（14）と始まるこの箇所は、まず、二重の意味があることを理解しなければいけないのだろう。すなわち、直接的には、神殿破壊がされる、ユダヤ戦役（AD66-70）のときのことであり、そして、そこで終わらない、将来のことについて語られている二重の構造である。実際、「荒らす憎むべきもの」は一義的には、ユダヤ教を冒涜し棄教させるために、神殿におぞましいものをもちこんだシリアのアンティオコスによるギリシャ化が想定されている。しかし、それは、イエスの時代にすでに終わっていることでもある。マルコが書かれた時代がユダヤ戦役の前か後かは不明だが、いずれにしても、それこそがこの箇所の預言ではないのだろう。もし、その預言のために書かれたのであれば、その時をもって、意味を失う。実際、「山へ逃げよ」と語られ、ユダヤにいた、その教えゆえに、キリスト者の多くは、山に逃げ、ローマによって滅ぼされなかったことも伝えられている。さらに、ここには「ユダヤにいる人」と限定的にも語られており、キリスト者は、すでに、広い範囲に広がっていたことも想定されている。つまり、ローマによるエルサレムの破壊、神殿崩壊は、ここで語られていることと重なると言えども、それが終わりではないことも確かである。それを理解して、読まなければならない。

イエスが伝えたかったことは、この前の部分（13 節まで）で尽きているようにも見えるが、同時に、そこで言われていることが、そのあとの時代に起こったことに照らして、理解しようとしているとも考えられる。いずれにしても、難しい箇所である。

14.2.81　人の子が来る

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 24-27 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 14-23, 24-27 節福音書対照表

また、イエスの再臨、世の終わりといわれるものが、来ないとは言っていない。まさに、「24 その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、25 星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。26 そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。」である。このことに注意を向けなければいけない。

ただし、旧約聖書の預言、そして、ダニエル書からの引用などが中心で、正直、イエスがこのような再臨の現象のことを弟子たちに伝えていたかは、よくわからない。しかし、それは、再臨がないということではない。ヨハネによる福音書などにも、イエスが戻ってくることは繰り返し述べられている。ただ、世の終わり、再臨などについて、イエスが何を私達に伝えたかったのかは、正直よくわからない。おそらく、弟子たちが知りたかったことに、かき消され、もともとのイエスのメッセージを読み取るのが難しくなっているのかもしれない。わたしたちは、主に従って、どう生きるかよりも、そのときがいつで、どのような前兆があるかのほうに、興味が行って

しまうように思う。それは、おそらく、イエスがわたしたちに伝えたかったこととは異なるのだろう。

14.2.82　いちじくの木の教え

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 28-32 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 28-32, 33-37 節福音書対照表

いちじくは、パレスチナでは、非常に一般的な植物であり、果実でもある。すぐ思い出すのは、創世記 3:7 「すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。」や、民数記 13:23 「ついに彼らはエシコルの谷に行って、そこで一ふさのぶどうの枝を切り取り、これを棒をもって、ふたりでかつぎ、また、ざくろといちじくをも取った。」がある。

マルコとマタイでは「そのように、これらの事が起るのを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」としているが、ルカでは、「神の国が近いのだとさとりなさい。」としている。しかし、「30 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。」は、三つの福音書とも共通している。マルコと、マタイには「その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。」があるが、ルカにはそれはない。しかし、「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。」は、三つの福音書とも共通である。

終わりの時は、子も知らないと言っている。そうであれば、わたしたちが、いつかを議論することは、おそらく、無意味なこと、すべきことではないのだろう。それよりも、すべきことがある。

14.2.83　目を覚ましていなさい

聖書箇所：マルコによる福音書 13 章 33-37 節福音書対照表/マルコによる福音書 13 章 28-32, 33-37 節福音書対照表

「目を覚ましていなさい」の部分は、マルコと、マタイのみで、ルカには欠けている。マルコでは、「気をつけて、目をさましていなさい。」が強調され二度繰り返されているが、マタイでは、「ノアの時」のことの描写や、「盗賊」に対する備えなどを加えて、より具体的になっている。ルカでは、並行箇所は、ないが、関連する段落が続いている。

ここのメッセージは、単純で「気をつけて、目をさましていなさい。」である。おそらく、日常的に、気をつけ、目を覚ましていなければいけないのだろう。

14.2.84　イエスを殺す計略

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 1-2 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,10-11 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

「過越と除酵との祭の二日前に、祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。」とあり、さらに、彼らは、「祭の間はいけない。民衆が騒ぎを起すかも知れない」と言っていた。とある箇所である。過越の日（金曜日）にイエスが十字架にかかることを考えると、水曜日だろうか。

このように計画したにもかかわらず、実際には、祭りの間に十字架に架かることも興味深い。このあとの女の人が香油を注ぐ記事は、ヨハネによる福音書によると、過越祭の六日前とあり、順序は編集されているのかもしれない。

マルコでは、実際に、なぜ、祭司長たちや律法学者たちが、イエスを殺そうと思ったかは、あまり明らかではない。ヨハネによる福音書によると、11:48 に、ラザロの復活の後に、「もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう」。とあり、この最後に書かれていることが起こることを、民のリーダたちは恐れていたことがわかる。他にも理由は、あったのだろうか。

14.2.85　ベタニアで香油を注がれる

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 3-9 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

ヨハネでは、過越祭の六日前となっており、マルコは、エルサレム入場を先に置き、ラザロの復活を描いていないので、イエスに対して、民の指導者たちの行動、この女の行為と、イスカリオテのユダのことを並べることで、イエスの周辺の人たちを描くことにしているのだろう。おそらく、実際には、ヨハネのように、過越祭の六日前に起こったことなのだろう。

マルコは、ベタニヤの、マルタ、マリヤ、ラザロのことを書かず、ここでも、重い皮膚病のシモンの家とだけ書いている。この人については、マルタ、マリヤ、ラザロと近い関係のひとと思われるが不明である。いずれにしても、リチャード・ボウカムが言っているように、マルコが書かれた時点では、マルタ、マリヤなどが生きており、エルサレムの近くで危険が及ぶことを避け、この女の名前の書かず、この家族と、イエスの近しい関係を伏せていたと考えるのが妥当であると思う。

さて、「ひとりの女が、非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、それをこわし、香油をイエスの頭に注ぎかけた。」（3b）と始まる。これが異常な行為であることは、このあとの、人々の反応からも、確かである。そのことを強調するためにも、マルコでは、一般的に人々と書いているのかもしれない。マタイでは、弟子たちとし、ヨハネでは、このあとの「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」（12:5）との発言を、イスカリオテのユダに記すことで、弟子たちなど、周囲にいるひとから、批判を遠ざけている。周囲の人は、多かれ少なかれ、驚いたのではないだろうか。

核は、まず、この行為をした女のひとを、人々が咎めたことに対し、イエスが庇（かば）ったことである。まず「するままにさせておきなさい。なぜ女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。」（6b）と言っている。まずは、この女の人を守っている表現である。ここにあるよい事の「よい」はカロスが使われており、NIV

では beautiful thing と訳しているように、アガトス（倫理的善）とはことなり、美しい行為というような意味である。ある意味では、主観でもある。

そして、次には、「貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときにはいつでも、よい事をしてやれる。しかし、わたしはあなたがたといつも一緒にいるわけではない。この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。」（7,8）なにか、イエス自身を特別な存在としているように思われるが、裏に秘められた、たいせつなことを伝えようとしているのだろう。

ひとは、銅貨 2 枚捧げたやもめはたいしたことをしないと評価し、高額なものを捧げたこの女にたいしては勿体ないことをするとする。しかし、イエスが示す神の視点は、もうすこし広いのだろう。絶対的な価値観を示すのではなく、そうではない見方もあるよと示しているように見える。

ヨハネにあるように、これが、マルタの兄弟マリアだとすると、少し違った見方もできるように思う。マリヤは、ヨハネ 11 章からこの箇所に続く箇所と、ルカ 10 章 38-42 節に登場するが、マルタは、さまざまなことを語っているが、マリヤは「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう」（11:32）と言っているだけで、かつこのことばは、マルタが 11 章 21 節で言ったのとまったく同じことばである。マリヤは常に座っており、給仕している、マルタとの対比が描かれている。障害者とは言えないかもしれないが、対人行動に関する強い特性をもった女性であったと思われる。そう考えると、そのような女性をイエスが庇ったことが書かれているととることもできる。

さて、マリヤはどのように考えて香油を注いだのだろう。石膏の壺をこわしたことから、すべてを捧げようとしたことがわかる。この直前には、兄弟ラザロの復活のことが書かれているから、そのことへの感謝を表現したともとれないことはないが、おそらく、それにとどまらない、マリヤの思いが詰まっていたのだろう。コミュニケーション、または、対人行動特性があるからこそ、他の人は受け取れなかったメッセージを、イエスからしっかり受け取っていたのかもしれない。具体的に、葬りの準備まで考えていなかったとしても、この女性が与えられ、受け取ったこと、「できる限りの事」「美しい行為」をしたのだろう。そして、それをイエスは、最大の賛辞をもって受け取られた。

イエス様の中の主なる神様は、そのような方なのだろう。ある行為を、値踏みして、こちらの方が良いとして、その行為を咎められるような形ではないのだろう。

14.2.86　ユダ、裏切りを企てる

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 10-11 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,10-11 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 1-2,3-9,10-11 節福音書対照表

文脈としては、マルコ 14 章 1,2 節からつながっている。民衆のイエスに対する人気が高まっていくかなで、そのことを危険視した、祭司長たち、律法学者たちが、イエスをどうにかして、捕え、殺そうと考えた時に、イエスの引き渡しに応じたのがイスカリオテのユダだとされる。

しかし、マルコでの記述は、非常に限られている。マルコで、イスカリオテのユダが登場するのは、十二弟子を

選んだ箇所（3:13-19)、今回の箇所と、イエスがゲッセマネで捕縛される箇所（14:43-50）のみである。しかし、マタイでは、最後の晩餐のときにも、イスカリオテのユダだけ別に取り扱っており（マタイ 26:25)、また、マタイと、ルカ由来の使徒行伝では、イスカリオテの死についても書いている。（マタイ 27:3-10、使徒 1:18-19）

後から書かれたとされるヨハネではかなり詳しい。まずは、十二弟子以外がイエスを離れていくことが書かれているヨハネ 6 章の最後（6:70,71）に、「イエスは彼らに答えられた、『あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である』。これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。」と書かれ、さらに、ベタニアでマリアが香油を注ぐ箇所で、「弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。」（12:4-6）とある。また、最後の晩餐においては、次のように書かれている。

> 21 イエスがこれらのことを言われた後、その心が騒ぎ、おごそかに言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。22 弟子たちはだれのことを言われたのか察しかねて、互に顔を見合わせた。23 弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についていた。24 そこで、シモン・ペテロは彼に合図をして言った、「だれのことをおっしゃったのか、知らせてくれ」。25 その弟子はそのままイエスの胸によりかかって、「主よ、だれのことですか」と尋ねると、26 イエスは答えられた、「わたしが一きれの食物をひたして与える者が、それである」。そして、一きれの食物をひたしてとり上げ、シモンの子イスカリオテのユダにお与えになった。27 この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。28 席を共にしていた者のうち、なぜユダにこう言われたのか、わかっていた者はひとりもなかった。29 ある人々は、ユダが金入れをあずかっていたので、イエスが彼に、「祭のために必要なものを買え」と言われたか、あるいは、貧しい者に何か施させようとされたのだと思っていた。30 ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。

27 節には「この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。」とある。ルカでは 22:3 に「そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれていたユダに、サタンがはいった。」とある。

まず、これらの違いをどう理解するかという問題が生じる。ひとつの考え方は、しばらくは、イスカリオテのユダが、裏切ったところまではわからなかったということである。時が経つにつれて、明確になって行ったということかもしれない。しかし、マルコにおいても、ユダがイエスの捕縛の際に手引きをしたことは明らかなので、ユダが裏切った背景、いつから裏切ろうとしていたかなどが、ペテロなど、ほかの十二弟子に明らかではなかったと言うことなのかもしれない。四福音書とも、ペテロがイエスを否んだ記事がかかれていることもあり、また、他の弟子たちは、かなり勇敢なことを言っていたものもいたが（ヨハネ 11:16)、イエスの捕縛のときに、イエスを捨てて逃げ去ったこともあり、ユダを問いただすこともなかったのかもしれない。

福音書より先に書かれたとされている、コリント前書 15:4,5 には、「4 そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。」とあり、イスカリオテ

のユダを区別していない。キリスト教会で、イスカリオテのユダ以外の弟子たちが、神聖化されていく過程で、だんだんとこのあたりが、差別化されていったのかもしれない。

では、イスカリオテのユダは、本当に、何が理由で、イエスを裏切ったのだろうか。イスカリオテのユダの死について描いている、マタイの記述をみると、イエスが死刑の判決を受けたことは、イスカリオテのユダの本意ではなかったように取れる。すると、窮地に陥れることで、熱心党のように、イエスが特別な力を発揮して、世の中を変えるという期待を持っていたという説も登場するが、明確にはわからない。ヨハネが書くように、貪欲から、お金を誤魔化していたというところに、帰結するのも、すこし短絡なように見える。それがわからない程度に、早く、イスカリオテのユダは死んでいったのかもしれない。

14.2.87　過越の食事をする

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 12-21 節福音書対照表

イエスを捕らえ殺す計画があり、イスカリオテのユダが、イエスを機会を捕らえて、引き渡す約束を祭司長にしたことが書かれた後という場面設定になっている。すなわち、読者は、誰が、イエスを裏切ったかを知っているという設定である。

まず、過越の食事の場所の準備のために、二人の弟子が遣わされる。「市内に行くと、水がめを持っている男に出会うであろう。その人について行きなさい。」イエスの指示についても、注意深く語られている。このあとも、その人に聞くのではなく、その人が入っていく家の主人に聞くことになっている。「するとその主人は、席を整えて用意された二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために用意をしなさい」。とあり、準備をしにはいくが、席を整えて用意されたとあるので、何人の会食かも、すでに伝えてあったように見える。「弟子たちは出かけて市内に行って見ると、イエスが言われたとおりであったので、過越の食事の用意をした。」をイエスの予言的な力が顕れたと取ることも可能であるが、マタイには「かねて話してある人の所に行って」（26:18）とあるので、当時の人は、おそらく、それよりも、マタイの同じ節にある「わたしの時が近づいた」ことに焦点があると理解しただろう。

夕方となり、除酵祭の一日目に入り、過越の食事をするときに、十二弟子と一緒にそこに行き、席につかれたとある。十二弟子と、イエスだけが席に着いていたと考えることも可能だが、過越の食事は、エルサレムに上ったそして、そこにいる皆でするものであるだろうから、おそらく、他にも、気心が知れた人たちがいたのではないだろうか。この家の人たちや、イエスについてきた、女性たちである。（マルコ 15:40,41）そのような場でのできごとであることを、考えておく必要がある。

まず、イエスは、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」と一同に告げている。（マルコ 14:18b）まず、注意すべきは、「裏切った」とは言われていない。聖書の書かれていない、さまざまな情報があったのかも知れない。しかし、イエスにとって、十二弟子のひとりが裏切ろうとしていることは明らかだったのだろう。不思議なことである。ただ、ヨハネ 6 章 66-71 節などをみると、十二弟子は、多くの弟子たちが離れて行っても、着いてきた人たちであると同時に、離れていく可能性も十分あったのではないだろうか。その意味でも、イエスがこれまでも、何回も弟子たちに伝

えてきた（マルコでは３回）捕らえられ、殺される時が近づいている今、一人一人に、自分の心を吟味させようとしたのかも知れない。このあとには、主の晩餐の記事があり、ペテロの離反の予告が続いている。主の晩餐について最初の書かれたと思われる、コリント第一の手紙 11:23-29 を引用する。

> 23 わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、24 感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。25 食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい」。26 だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。27 だから、ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すのである。28 だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである。29 主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによって自分にさばきを招くからである。

このあとのイエスのことばは、解釈が別れるところだろう。

> 20 イエスは言われた、「十二人の中のひとりで、わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者が、それである。21 たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」。

ここで、十二弟子の中の一人であることが明確になっている。21 節は、どう理解したら良いのだろうか。今回、読んで、単純に、「自分について書いてあるとおりに」または、定められたとおりに、または、わたしが、あなたがたに何度も伝えてきた通りにぐらいのいみだろうか、実は「書いてある」とあるが、旧約聖書からの引用だとすることは難しいように思う。（イザヤ書 52:13-53:12 のようなしもべの姿はイエスの中に明確にあったと思われる。）そして、後半である。定められた通りであったとしても、そこに関与し、裏切ることとなるものは、やはり、とても、悲しいことで。そのようにして、多くの苦しみを負うことは、堪えられないことで、そのひとの人生は、ほんとうに悲しいものだという嘆きの表現ではないだろうかと思った。そして、そのようなことを考えているものがあれば、ここで、悔い改め、違う生き方をしてほしいということではないだろうか。すると、他の弟子にも繋がる、メッセージである。「だれでもまず自分を吟味し」て、主の晩餐に預かるべきである。

人は、どうしても、最初に使わされた二人の弟子はだれなのかと考える。ルカでは、この二人は、ペテロとヨハネだとしている。（ルカ 22:8）イスカリオテのユダではないことは、確かだろうが、この二人かどうか、また否定する根拠もない。ただ、ルカ文書とされる、使徒行伝では、3 章、4 章、8 章に、ペテロとヨハネという記述があり、十二弟子の中で中心となったひとたちとして度々登場するので、ここでもそうしたのかも知れない。

また「弟子たちは心配して、ひとりびとり『まさか、わたしではないでしょう』と言い出した。」とあり、そして、当然、イエスは、イスカリオテのユダが裏切ることを知っていたことも前提として、このとき、ユダが「まさか、わたしではないでしょう」と答えていたら、イエスは、どうしただろうかと考えるのも自然である。マタイ 26:25 には「イエスを裏切ったユダが答えて言った、『先生、まさか、わたしではないでしょう』。イエスは言われた、『いや、あなただ』。」と書かれている。この最後は、直訳は、「それはあなたの言ったことです」なので、肯定の意味に使われることもあるようだが（マルコ 15:2 「ピラトはイエスに尋ねた、『あなたがユダヤ人の王で

あるか』。イエスは、『そのとおりである』とお答えになった。」も同種の言葉)、塚本虎二訳のように「いや、そうかもしれない」ぐらいの方が、余韻があるように思われる。明確に「いや、あなただ」と答えたとした時に、他の弟子たちが、反応しなかったとは考えにくい。

ヨハネの書き方も、マタイに近いが、席順も暗示するかのように書かれている。イエスが寝そべり、その右に、「イエスの愛しておられた者」がみ胸に近く席についていて、ペテロがイエスに聞くように促す。すると、イエスは「『わたしが一きれの食物をひたして与える者が、それである』。そして、一きれの食物をひたしてとり上げ、シモンの子イスカリオテのユダにお与えになった。この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。」としている。しかし、このあと、弟子たちが、イスカリオテのユダが裏切ろうとしていたことを認識しなかったことをみると、これも、どの程度正確なのか、後付けのように感じる。また、この「イエスの愛しておられた者」が誰なのかも、議論になる。ゼベタイの子、ヤコブの兄弟ヨハネとする説も有力だが、のちに長老ヨハネとされる人物だとする説もある。すると十二弟子以外のものが近くにいたこととなる。ヨハネは、かなり早い時期から、すべてお見通しといった記述がある。それは、後からの信仰告白だったように思われる。

> ヨハネ 2:23 過越の祭の間、イエスがエルサレムに滞在しておられたとき、多くの人々は、その行われたしるしを見て、イエスの名を信じた。24 しかしイエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。それは、すべての人を知っておられ、25 また人についてあかしする者を、必要とされなかったからである。それは、ご自身人の心の中にあることを知っておられたからである。
>
> ヨハネ 6:60-71 60 弟子たちのうちの多くの者は、これを聞いて言った、「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」。61 しかしイエスは、弟子たちがそのことでつぶやいているのを見破って、彼らに言われた、「このことがあなたがたのつまずきになるのか。62 それでは、もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、どうなるのか。63 人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。64 しかし、あなたがたの中には信じない者がいる」。イエスは、初めから、だれが信じないか、また、だれが彼を裏切るかを知っておられたのである。65 そしてイエスは言われた、「それだから、父が与えて下さった者でなければ、わたしに来ることはできないと、言ったのである」。66 それ以来、多くの弟子たちは去っていって、もはやイエスと行動を共にしなかった。67 そこでイエスは十二弟子に言われた、「あなたがたも去ろうとするのか」。68 シモン・ペテロが答えた、「主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。69 わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」。70 イエスは彼らに答えられた、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、あなたがたのうちのひとりは悪魔である」。71 これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

14.2.88　主の晩餐

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 22-25 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 22-25 節福音書対照表（参照付き（２））

最後の晩餐でのクライマックスと言われる場面で、キリスト教会において、聖餐式の起源となった箇所である。聖餐式について最初に書かれたのは、コリント人への第一の手紙 11 章 23-28 節の記事のようだが、マルコによるものの方が単純で、こちらが伝承としては、古いものなのかとも思わされる。マタイは、マルコを土台にして、少し詳しく説明しているように見える。パンにおいてはマルコでは単に「取れ」であるのに対し、マタイでは「取って食べよ」、杯に関しては、マルコでは、単純に「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」としているが、マタイでは「罪のゆるしを得させるようにと」という目的が加わっている。なお、ルカは、「新しい契約」ということばも使われており、パウロとの関係の近さからか、コリント人への第一の手紙の記述に似ているように思われる。

マルコは、これまでに、イエス自身が、受難と死、復活について三度（マルコ 8:31、9:31、10:34）語っており、ぶどう園の農夫のたとえ（マルコ 12:1-12）でも、子が殺されることが言われている。しかし、死の意味については、語られていなかった。「あがない」についても、マルコ 10:45 に一度「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである。」と書かれているが、死の意味が語られているとまでは言えないだろう。そのいみでも、受難と死の意味について語られたのは、マルコでは、この箇所が最初だと思われる。

まず、「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『取れ、これはわたしのからだである』。」とあり、裂かれたパンをイエスの体としているので、イエスのからだ、イエスの裂かれたからだを食すことにより、イエスの犠牲を受け入れ、イエスとの霊的な交わりに入ることを意味するのだろうが、祝福してこれをさきとあり、これは、自然な行為であり、ここから、イエスの裂かれたからだを想起するのは、後付けのようにも感じる。種入れぬパンは、罪のないことを意味しているとされているが、そこまで確実かどうかは不明である。

杯については「また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。イエスはまた言われた、『これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。』」と言っている。「契約」とくことばが使われたことの重さはあるだろう。また、過越祭の食事の時であり、出エジプト 24:3-8 の契約が意識されていることは確かだろうが、これが、マタイのように「罪の赦し」とまで明確に言えるかどうかは、これだけではわからないように思う。

原始的な形で、過越の祭の食事におけるこのパンと、杯のことが記録されたことにはとても重要な意味を持っていると思うが、世世に続く、キリスト教の中心的なサクラメントである聖餐式の起源としては、寂しいと感じてしまう。

ここからは、まったく個人的な解釈だが、マルコを読んでいると、弟子たちは、イエスの死に、向き合えていないように思われる。そのなかで、十二弟子の中に裏切ろうとしているものがいると言われて動揺し、このあとにも、ペテロの離反予告の記事が続くことを考えると、自分たちのラビの死という、不吉さの中で、それ以外のことは、残らなかったのではないだろうか。かろうじて、通常の、過越祭の食事とは異なる、この場面を覚えていたのかもしれない。そこから、贖罪論を確立した、パウロを通して、イエスの死の意味が、弟子たちの間でも深められ、しばらくたって書かれたのが、ヨハネの福音書の記述なのだろう。

パウロはイエスの地上での活動について述べない。しかし、ここでは、歴史的な事項として、「わたしは、主から

受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり」と始めていることは、非常に珍しい例であり、注目に値すると思う。このことは、弟子たちから聞いて、それをもとにしていると考えて良いだろう。

ヨハネでは、6 章ですでに、贖罪について語られている。その意味で、最後の晩餐のとき、イスカリオテのユダの裏切りと、ペテロの離反について書く間に、聖餐式の起源となることを書かなくてもよかったのかもしれない。おそらく、当時は、人肉食（カニバリズム（英語: cannibalism））をしているとの批判があったこともあり、古い戒めによる古い契約と対比して、新しい戒めとして、ヨハネが大切なものとしてうけとった、互いに愛し合いなさいのメッセージを入れたように思われる。この戒めのところからは、ユダが排除されているように見えるが、それについては、さらに一考がひつようなように思われる。

「なぜ、パンとぶどう酒を配餐し、イエスの死について語る前に、弟子の裏切りのことを語ったのだろうか。」イエスの死の意味をどう考えるかが、イエスに従っていくことの鍵となっているからだろうか。同時に、イエスに従うことなしには、この戒めを理解できないのかもしれない。

最後の晩餐の記事は、イエスが、どうしても、このときを持ちたかったことが伝わってくるたいせつな時であるが、マルコでの記事はあまり長くない。このときに、十二弟子には、すべて受け取ることはできなかったのかもしれない。そして、そのような中で、最後の週の伝承が確立していったのかもしれない。しかし、この最後の晩餐の重要さを振り返り、ここに、多くのイエスのメッセージを詰め込み、13 章から 17 章に含めたヨハネに感謝したい。むろん、時間がたつなかで、紡ぎ合わせた真理であり、イエスが語ったそのままかどうかは不明だが。

14.2.89　ペトロの離反を予告する

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 26-31 節福音書対照表

エルサレムでの過越祭の晩餐のあと、賛美を歌い、オリブ山にかけて行った時にイエスが「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。」さらに「しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」と言うのに対して、ペテロが「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」と言い返し、それにイエスが「あなたによく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そう言うあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」という箇所である。このあと、ペテロも、みんなのものも同じように「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」と言ったと記録されている。

晩餐の最初の方で「あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」（18）と言い、弟子たちはひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」という。さらに、裏切るのは、十二人の中のひとりであることを告げ、「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。」（21）と伝え、そのあとに、パンを「これはわたしのからだである」とわたし、一同は杯から飲み「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」と告げることが描かれている。

ペテロについては、マルコ 14:66-72（マタイ 26:69-75、ルカ 22:56-62、ヨハネ 18:15-18; 25-27）に、イエスを知らないと言う記事が記録されている。概要としては、四つの福音書ともに描かれている。とても、重要なこととして伝えているのだろう。また、マルコ 14:50 には「弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。」とあり、イエスにつまずくをどう理解するかにもよるが、他のでしたちも、イエスに最後まで従い通すことができなかったことが記録されている。

一方、イエスが伝えたふたつめの「わたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」については、マルコ 16:7 に「今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。描かれているが、実際に、よみがえってからのことは、最も古い写本には、残されていない。しかし、現存のものからは、マルコと、マタイでは、ガリラヤで、復活のイエスが弟子たちと会うことが描かれているが、ルカおよび使徒行伝 1:3,4 では、昇天まで、エルサレムに留まっているらしいことが描かれ、ヨハネでは、20 章までは、エルサレムで弟子たちに現れたことが描かれ、付録のような 21 章でガリラヤでのことが描かれている。また、ヨハネでは、この対応箇所でも、「主よ、どこへおいでになるのですか」。とペテロが問うところからはじめており、行く場所は、父のみもと（ヨハネ 14:28）であることが想定されているようだ。

他の福音書との比較を追加しておくと、マタイは、マルコと非常に似ている。かろうじてことなるのは、マルコでは「にわとりが二度鳴く前に」とある「二度」を削除、ペテロが「力をこめて」言った部分の「力をこめて」が削除されていることのみである。ルカでは、全員に語られたと思われる、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。」から始まる部分はなく、また、「しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」も書かれていない。また、ルカには「22:31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。が付け加えられている。また、ペテロのことばに「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」（33）と、修正が加えられている。ヨハネでは「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。」(マルコ 14:21) に呼応するように、または、ヨハネの新しい戒めのひとつ前にある、「子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。」（ヨハネ 13:33）に関連づけるように、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。（ヨハネ 13:37）と言っている。

弟子たちは、イエスの死の意味や、復活後のことについては、考えられないようすが、特に、マルコ（マタイも同様）からはみて取れる。さらに、ペテロも、おそらく他の弟子たちも、たとえ他の弟子はつまづいても、自分はつまづかないとも言っている。このような硬い覚悟の中、どうして、イエスを見捨てて逃げ去るのか、イエスを知らないと言うのかについては、対応する箇所で学ぶとして、イエスがどのような思いであったかについて考えてみたい。

イエスは、弟子たちは、つまづいても、信仰（どのようなものかは不明だが）イエスのもとにもどってくることを確信していたのだろうか。それは、イエスが神の子だから、超自然的な力でそれを予知したのだろうかと考える。それは、わからなかったのではないだろうか。ただ、どうなるにしても、神様に信頼していたと言うことで

はないだろうか。もしかすると、誰が裏切るか、それがイスカリオテのユダなのかも、はっきりとは知らなかったのではないかと思う。ただ、あきらかに、ルカでは、ペテロが、立ち直ることをイエスは知っている。また、ヨハネでも、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになろう」と書かれていることからも、ペテロが信仰を持ち続けることが想定されている。

最後に、イスカリオテのユダと弟子たちとの比較も考えてみたい。ほんとうに、イスカリオテのユダは、救いようがなく、他の弟子たちは、信仰が弱いとはいえ、問題がなかったのだろうか。すくなくとも、マルコには、それは、描かれていなようにもう思う。それは、イエスも知らず、神様に委ねられていたのではないだろうか。むろん、後からかかれた他の福音書では、そうはなっていないが。

14.2.90　ゲッセマネで祈る

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 32-42 節福音書対照表

イエスの祈りが書かれているだけでなく、弟子たちに、イエスの祈りとともにいてほしいという気持ちが、表現されている箇所に見える。

まず、最初に、弟子たちには、「わたしが祈っている間、ここにすわっていなさい」と言い、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行き、「恐れおののき、また悩みはじめて」との表現のあと、三人には「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。と伝えている。イエスは、神様のみこころを自分のものとするために、祈っている間、弟子たちにも、一緒に共にいてほしいと、願っている。さらに、中心的な弟子、ヤイロの娘を生き返らせた時（マルコ 5:37）も、山上での変貌の時（9:2）も、一緒に連れて行った三人である。アンデレを加えると、最初の弟子たちとマルコが伝える四人になるが、この四人は（13:3）で、神殿が崩壊するような、世の終わりについて、ともに尋ねている箇所にも登場する。アンデレは、ヨハネによる福音書には、単独でも登場しているが、直接関係ないので省略。

アンデレを加えた四人が、終末について 13 章の最初（13:3）に問うている箇所の最後（13:33-37）が、「目をさましていないさい」となっている。弟子たちは、おそらく、この世の終わりについて考えていただろうが、まさに、イエスと共に、目をさましていなければならない、もっともたいせつなときに差し掛かっていることには、気づけなかったのだろう。イエスは、このときにも、一般的な世の終わりではなく、自らにとってたいせつなだけでなく、神様のみこころの成就に関して、とても、たいせつな十字架の時のことをも思って、このことばを伝えていたのかもしれない。

イエスは「少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、『アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください』」と書かれている。

ルカでは「石を投げてとどくほど離れたところ」（ルカ 22:41）と書いているが、おそらく、それほどの距離ではなく、イエスの祈りも聞こえる、平伏して祈るイエスの苦しみも見てとることができる程度の距離だったろう。寝ていたのに、だれが、これらの言葉を聞き取ったのかという疑問は、一般的に繰り返されてきたようだが、あ

る時間経過のなかで、考えれば、祈りを聞き取ったことと、眠ってしまったことは両立すると理解することも自然である。「この時を過ぎ去らせてください」と「この杯をわたしから取りのけてください」は、同じような内容だと考えて良いのだろう。ヤコブとヨハネが「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。（10:37）と願った時にも、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。」（10:39）と言っている。この杯なのだろう。そして、晩餐のときに「多くの人のために流すわたしの契約の血」（13:24）と、ともに一つの杯から飲んだときのものともつながっているのだろう。この時、この杯は、そして、イエスを「恐れおののき、また悩みはじめ」させ、「悲しみのあまり死ぬほど」であるとイエスが語る苦しみはどのようなものなのだろうか。

ひとの痛み、苦しみ、そして、喜びや、本当にたいせつなものは、なかなか他人にはわからない、そして、自分でも、はっきりしないことがあるのかもしれないと考えているので、上に書いたように、イエス理解は、不可能だとは思っているが、とても、大切なことだとも考えているので、通常言われていることも復習しながら、考えてみたいと思う。視点としては、弟子たちはどのようなものを伝えようとしているのか、わたしは、どのようなものとして受け取るのか、そして、背後にある、イエスの苦しみはどのようなものであったのかと言うことである。

ChatGPT に、一般的に考えられている見解について聞くと、説明を加えて、以下の項目が挙げられている。

マルコ 14:33-34 の「恐れおののき、死ぬほどの悲しみ」には、複数の要素が絡んでいると考えられます。

1. 十字架の肉体的苦しみ（伝統的解釈）
2. 全人類の罪を背負う霊的苦しみ（神の裁きを受ける）
3. サタンの誘惑と霊的戦い
4. 弟子たちの裏切りと孤独
5. 人類の救いへの愛と悲しみ
6. 神の御心への従順の葛藤

「肉体的苦しみ」については、個人的には違うように思う。単に、このあと、弟子たちを含む、さまざまな殉教者たちが、イエスの十字架に匹敵するまたはそれ以上の苦痛の中でも、立派に信仰を証したとの比較ではなく、「死ぬのほど悲しみ」とそれを表現することは、考えられないからである。

「全人類の罪を背負う霊的苦しみ」が表現されていると、学生時代は考えていた。イエスは神の子で、父なる神様と霊も心も一致するような存在であったものが、罪を負い、汚れたものとなり、神から呪われた存在となることは、罪人なる人間には、理解できない苦しみである。これは「そして三時に、イエスは大声で、『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。」（15:34）から受ける印象には近いかもしれない。しかし、それは、マルコが描いている、「わたしに従ってきなさい」（2:14, 15, 8:34, 10:21, 参照 10:52, 15:41）と、全知・全能な神とはことなる、真の人間として生きる、イエスの苦しみとは、必ずしも一致していないように現在は、考えている。

「サタンの誘惑と霊的戦い」ルカ 4:13 に「悪魔はあらゆる試みをしつくして、一時イエスを離れた。」とあるのを受けて、ここでもサタンの誘惑のもとでの、霊的な戦いがあったとする考え方である。イエスの葛藤が描かれていることは確かで、最終的に、このような「文学的表現」をとることも可能かもしれないが、現実的な痛みや苦しみを、抽象的、現実社会の中で理解しづらいもの、または、物語化してしまうことに対する抵抗を感じる。

「弟子たちの裏切りと孤独」今回、マルコを十二弟子の失敗談として読んでいると「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」（14:18）と言われた時にも「まさか、わたしではないでしょう」としか言えず、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。」（14:27）と言われても、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」。（14:29）や「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。とペテロは言い切り、「みんなの者もまた、同じようなことを言った」（14:31）にも関わらず、結局、イエスを捨てて逃げ去り（14:50）、大祭司の庭にまで入って行ったペテロも結局、イエスを知らないと否むことになり、ここでも、眠ってしまうでしたち、あとになってから、イエスの「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。」（14:38）も、以前に、「目をさましていなさい」も思い出したかもしれないが、最後の晩餐以降、失敗の記憶しかない弟子たちにとっては、この「弟子たちの裏切りと孤独」を思うことは自然だったかもしれない。しかし、本当に、弟子たちはそれを伝えようとしたのか、イエスにとっての苦しみがここに由来しているのかは、疑問である。

弟子たちが離れて行ったことは、ヨハネ 6 章の後半に詳しく書かれており、ヤコブとヨハネが「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」（10:37）と願った時のやりとりなど、さまざまに、弟子たちのダメさ加減が緩和されることなく、直接的に伝えられている（マタイ、そして特にルカでは緩和された表現が用いられている）のが、マルコだとすると、ここで伝えられていることは、それを超えるもののように見える。同時に、孤独の中で、イエスが葛藤しなければならなかったこと、そして、弟子たちに互いに支え合って欲しいと願っていたことは、ヨハネ 17 章の、弟子たちのために祈るイエスなどからも、みて取れることであろう。自分がいなくなったあとのことについて、伝えようとしていたことは十分にあると思う。

「人類の救いへの愛と悲しみ」は、イエスが人間の罪の深さと、神の愛のあまりの大きな乖離に苦しまれたことだろうか。イエスにとっての神様は、いろいろな形で伝えられてはいるが、十分受け取れていないと思う。しかし、十二弟子、ほかの弟子たち、群衆とよばれる、一般の人たち、律法学者、パリサイ人、祭司長など、民の指導者の無理解を考えると、あまりに、むずかしいことを前にしつつ、自分が死んでいくことに関して、葛藤がなかったと言うほうが不自然だろう。しかし、これこそが、現代につづく、最大の課題であり、簡単にことばで表現できることでもない。個人的には、この問題にどう対応するかは、イエスも、そして、もしかすると、神様もまだ完全な答えをお持ちではないのではないかと思う。しかし、ここで、自分の十字架上での死、それは、「多くの人のために流すわたしの契約の血」（14:24）を流すことであったとしても「多くの人のあがないとして、自分の命を与えるため」（10:45）であっても、おそらく、完全解決だとは、イエスは考えていたなかったのではないだろうかと思う。

「神の御心への従順の葛藤」イエスの祈り「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」（36）を考えると、これが一番しっくりくるように思われる。すなわち、一つ前の「人類の救いへの愛と悲しみ」を思いつつ、神の御心は、ここで十字架へと向かう道にあるように思う。まだ、すべきことがあるのではないか、

弟子たちに教えるべきことがあるのではないかと考える中、神の明確な計画を十分理解できずに、ゆだねていくその葛藤である。イエスであっても、神のみこころを十分は理解できていないという謙虚さゆえの、思いではないだろうか。そして、御心を探究しつつも、もしかすると、御心を自分が完全には受け取っていないのかもしれないという思いも背後にはあったのかもしれない。一方で、神の愛は、一人一人を愛される神は、理解を超えている。他方、あまりに、人間的に、イエスを理解し過ぎであろうか。

同様の対話は、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」。ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。(10:25-28) にも現れている。ここでは、ペテロは、このように答えることによって、自分のなすべきことはしていると言っているようである。しかし、御心を知ることは、そこにとどまることではないのだろう。

最後に、他の福音書の記述について記す。マタイは、マルコに似ているが、説明が加えられている。たとえば、「恐れおののき、また悩みはじめて」は、マタイでは「悲しみを催しまた悩みはじめられた」。と書かれている。また、マルコではペテロにだけ語られている部分が、マタイでは、「あなたがたは」とされ、「また離れて行って同じ言葉で祈られた。」(39) とあるところは、マタイでは「また二度目に行って、祈って言われた、『わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように』。」(26:42) とより詳しく説明している。ルカは短いが、マルコ、マタイにはない、特別な表現が加えられている。弟子たちに最初から、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と伝え、どのぐらい離れたかについては「ご自分は、石を投げてとどくほど離れたところへ退き、ひざまずいて、祈って言われた」としている。祈りの場面でも「そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。」(43,44) が追加されている。最後も「祈を終えて立ちあがり、弟子たちのところへ行かれると、彼らが悲しみのはて寝入っているのをごらんになって言われた、『なぜ眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい』。」(22:45,46) と閉じている。ヨハネは、ゲッセマネでの祈りは書かれていないが、17 章全体が、イエスの祈りとして書かれているように見える。ヨハネは別途学ぶ必要があるだろう。

14.2.91　裏切られ、逮捕される

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 43-50 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表（2 頁）/ マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表（1 頁）

イエスが祭司長、律法学者、長老たちから送られた群衆に捕縛される場面である。そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに（43a）とあるので、ゲッセマネでの祈りからの続きで、場所は、エルサレムから近く、ルカによると「いつものように」（ルカ 22:39）「いつもの場所」（ルカ 22:40）と繰り返されているので、ユダも含めてよく知っている場所だったのだろう。ここで、ユダは「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえて、まちがいなく引っぱって行け」（44b）とあらかじめ「合図しておいた」ように、イエスに近寄り「先生」と言って（繰り返し）接吻した。そして、人々はイエスに手をかけて捕まえたとある。このあとに、「イエスのそばに立っていた者のひとりが、剣を抜いて大祭司の僕に切りかかり、その片耳を切り落した。」（47）とあり、それ以上なにも書かずに、イエスの言葉「あなたがたは強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕えにきたのか。わたしは毎日あなたがたと一緒に宮にいて教えていたのに、わたしをつかまえはしなかった。しかし聖書の

言葉は成就されねばならない」（48,49）が書かれ、最後に「弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。」（50）ことが書かれている。

まず、接吻による裏切りは、どのような意味があるのだろうか。45 節の「彼は来るとすぐ、イエスに近寄り、『先生』と言って接吻した。」の接吻は　　が用いられており、44 節の、友愛または友愛の表現としての接吻を表す　　と比較すると、「　- (kata-)」という接頭辞は「徹底的に」「繰り返し」「心から」というニュアンスを加えるため、この語は「何度も熱心に接吻した」「愛情を込めて接吻した」という意味合いになる。単なる、挨拶の接吻とは違っている。この言葉は、他に、ルカ 7:38、45、ルカ 15:20、および、使徒 20:37 のみで使われており、やはり、特別な言葉である。少し前まで会っていたことを考えると、全くの、偽善の表現なのだろうか。それとも、別れの挨拶、本当は愛していることの表現、何かを期待する動作なのだろうか。ユダが、なぜ裏切ったかとともに、興味深い問いである。

次には「大祭司の僕に切りかかり、その片耳を切り落した」ことである。ヨハネを見ると、これは、シモン・ペテロで、切られたのは、マルコスと名前が記されている。おそらく、そうなのだろう。マタイ、ルカとも、イエスがそれを止めること、さらに、ルカには、その耳を癒やされたことが書かれている。おそらく、批判される可能性のある内容について、批判されないようにしている可能性も排除できない。マルコの記述では、なにも書かれていないことが、不思議に感じるので、その説明が、他の福音書に書かれているように見える。

次には、イエスの言葉である。内容的には三つのことが言われている。自分は、強盗ではないこと。宮でも一緒にいたのに、捕まえなかった。そして、聖書は成就されなければならないである。

まずは、わたしが何が何者かは、理解してほしいと言うことだろうか。二つ目は、基本的には、イエスの話に聞き入っていた群衆が怖かったのだろう。そして、聖書の成就は、どの箇所なのかは、明確ではない。しかし、イエスは、イザヤ 53 などから、傷を負うことを、覚悟していたのだろうが、それが、この人たちと共有されていたかは不明である。

最後は、弟子たちが逃げていった箇所である。なぜ、逃げていったのか。よくわからない。ヨハネからは、イエスが、さらせたことが書かれている。弟子たちの弱さだろうか。なにをしたら良いのかわからなかったのではないだろうか。

以下、福音書の差異について記す。マタイは、マルコに近いが、大祭司の僕に切りかかった場面でのイエスの言葉を記している。「52b あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。53 それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。」（マタイ 26:52b,53）ルカには、ユダが接吻をしようとして近づいてきた時、「ユダ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか」（22:48）とあり、さらに、耳を切り落とした時「51 イエスはこれに対して言われた、「それだけでやめなさい」。そして、その僕の耳に手を触れて、おいやしになった。」（22:51）と癒した記事が書かれている。また最後に、「だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」（22:53b）が付け加わっている。ヨハネは、イエスの積極的な姿勢が描かれており、「4 しかしイエスは、自分の身に起ろうとすることをことごとく承知しておられ、進み出て彼らに言われた、「だれを捜しているのか」。5 彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。イエスは彼らに言われた、「わたしが、それである」。イエスを裏切ったユダも、彼らと一緒に立っていた。」（ヨハネ 18:4,5）とあり、ユダの近づき方も変化している。このあとにも、6 イエスが彼らに「わたしが、

それである」と言われたとき、彼らはうしろに引きさがって地に倒れた。7 そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスを」と言った。8 イエスは答えられた、「わたしがそれであると、言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人たちを去らせてもらいたい」。9 それは、「あなたが与えて下さった人たちの中のひとりも、わたしは失わなかった」とイエスの言われた言葉が、成就するためである。とあり、弟子たちを逃すことがまず書かれ、このあとに、切りつけたのは、ペテロであると証言し、切りつけられたのは、マルコスだとしている。（ヨハネ 18:10）

付録として、ユダについて私見を書いておく。マタイと、ルカ文書である使徒行伝に、ユダの自殺について書かれている。（マタイ 26:14-16, 25, 47-56, 27:3-10、使徒 1:18,19 ）自殺については、マルコと、ヨハネには書かれていない。また、マタイとルカ文書を比較すると、その記述はかなり異なる。さらに、1 コリント 15:5 には「ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。」とあり、ユダについては、言及していない。

裏切ったことは、四つの福音書で証言しており、間違いないだろう。しかし、死など、その後については、不明なのではないだろうか。一定の期間のあとには、いくつかの伝承が共有されていただろうが。

ユダの人生は「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう」（14:21）と表現される人生だったのではないだろうか。

どうであろうか。

14.2.92　一人の若者、逃げる

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 51-52 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 43-50,51-52 節福音書対照表

「ときに、ある若者が身に亜麻布をまとって、イエスのあとについて行ったが、人々が彼をつかまえようとしたので、その亜麻布を捨てて、裸で逃げて行った。」とあり、この文章は、他の福音書には含まれていない。

以下は推測でしかないが、ユダが、どの時点で他の弟子たちと別れたかが共観福音書では不明である。また、ゲッセマネに行ったのが、十二弟子とイエスだけなのかも不明である。ヨハネによると、イスカリオテのユダは、晩餐の途中で、イエスに促されてその場を去ったことが書かれており（ヨハネ 13:21-30）「ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。」（ヨハネ 13:30）これは、信頼できるとすると、このときに、大祭司のもとに、イエスたちの居場所とともに、引き渡すことを、知らせに行ったと思われる。もともと、晩餐の場所は、秘密にしていたと思われるので、この時点で、ユダを外に出したと言うことは、イエスは、ユダの裏切りに確信があり、予定の行動として、このようにしたと言うことになる。弟子たちが、あとから、理解したことなのかもしれない。

すると、おそらく、「祭司長、律法学者、長老たちから送られた群衆」がユダとともに向かったのは、この晩餐の場だったろう。しかし、そこには、すでに、イエスと弟子たちはいなかった。次に可能性のある、「いつもの場所」（ルカ 22:40）である、ゲッセマネの園に向かったのだろう。

亜麻布はエジプトなどで生産され、高価であり、主に裕福な人々が寝巻きや下着、または埋葬用の布として使用されるとされているので（ChatGPT）晩餐をした家の若者の可能性が高く、マルコにしか書かれていないことから、これがマルコであり、晩餐の場所は、「ペテロはこうとわかってから、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に行った。その家には大ぜいの人が集まって祈っていた。」（使徒 12:12）だったのかもしれない。

これは、あくまでも推測で、確証はない。

14.2.93　最高法院で裁判を受ける

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 53-65 節福音書対照表

最高法院での裁判について、このあと「夜が明けるとすぐ、祭司長たちは長老、律法学者たち、および全議会と協議をこらした末、イエスを縛って引き出し、ピラトに渡した。」（マルコ 15:1）とあるように、夜明け後の公式と思われる、全議会での協議について記しているが、基本的に、この箇所が主たる議論として、記されている。

イエスは、マルコでは、自分が神の子キリストだとは、明確には伝えていなかったように見えるが、ここでは、大祭司の「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」との問いに、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」と肯定的に答えている。それを「けがし言」（64）として、「死に当るものと断定した」（65）となっている。イエスは、どのように決意し、意図してこのように答えたのだろうか。

裁判については、四つの福音書には、いろいろと描かれており、すべてを挙げると、前大祭司アンナス（AD6-15）の家（ヨハネ 18:12-14,19-24）、それに、マルコでこの箇所で扱われているカヤパ（AD18-36）とサンヘドリン議員の前での裁き（マルコ 14:53-65, マタイ 26:57-68, ルカ 22:54,63-65）がつづき、上にも書いた、サンヘドリンの公式法廷（マルコ 15:1, マタイ 27:1, ルカ 22:66-71）、総督ピラトのもとでの裁判（マルコ 15:1-5, マタイ 27:2,11-14, ルカ 23:1-5, ヨハネ 18:28-38）、途中で、ガリラヤ領主ヘロデ・アンティパス（ルカ 23:6-12）に送られたことが、ルカだけに書かれており、最後に、総督ピラトでの裁き（マルコ 15:6-15, マタイ 27:15-26, ルカ 23:13-25, ヨハネ 18:39-19:16）で、死刑の決断が下される。どれを正式な裁判とするかは、困難だが、マルコは、大祭司（カヤパ）と、議会のメンバーでの審問と、ピラトのもとでの、死刑の決定についてのみ、記している。

最初に、「イエスを死刑にするために、イエスに不利な証拠を見つけようとしたが、得られなかった。多くの者がイエスに対して偽証を立てたが、その証言が合わなかったからである。」（55,56）とあるが、それに続いて、「わたしたちはこの人が『わたしは手で造ったこの神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建てるのだ』と言うのを聞きました」（58）と証言の一例が載っている。おそらく、神殿に関することは、イエスは、何回か述べているのだろう。マルコでは、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」（13:1）だけであるが、ヨハネ 2:13-22 には、宮清めの項で、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」（19）が書かれ、「イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである。それで、イエスが死人の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉とを信じた。」（21,22）とある。しかし、この記述からも、イエスが明確な意図をもって、伝えたかどうかは分かりにくい。少なくとも、その場にいた、

弟子以外には、理解されなかったであろう。神殿の崩壊預と合わせると、神殿での礼拝を絶対視していた、祭司長をリーダーとする宗教人には、理解し難いことだったろう。しかし、この発言が、資材に死罪に結びついたわけではない。

このあとに、「イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。」（61）ことを受けての、大祭司の問いとして、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」と、その応答、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」が記されている。最後の部分は、「わたしがあなたのもろもろの敵を／あなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」（詩篇 110:1）と

イエスが、（ほむべき者）神の子であることや、キリストであることを、群衆の前などでは、明確にしなかったのは、おそらくこれら共通理解はなく、または、少なくとも、イエスの理解と、人々の理解との相違もあり、ひとによってイメージを独り歩きさせたくなかったのだろう。それが伝えなかった理由なのだろう。「わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、／見よ、人の子のような者が、／天の雲に乗ってきて、／日の老いたる者のもとに来ると、／その前に導かれた。」（ダニエル 7:13）からの引用とされるが、最後の日についての預言であろうか、本当にそのような引用をされたか、正直よくわからない。

しかし、ここでは、そのような揺れがあっても、明確に肯定している。ここでは、 (I am) として、マタイのように、それは、あなたの言ったことというような、多少曖昧な部分を含む表現をさけている。理由は、正確には、わからないが、最後に、マルコのテーマ（1:1）でもある、神の子キリストであることを明確にしたのだろう。

これまで、マルコでは、上に挙げた、1:1 以外には、悪霊が神の子といっている、マルコ 3:11, 5:17 以外で、神の子との宣言または告白が登場するのは、イエスの死の場面で、イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。（15:39）だけである。それだけ、注意していることは確認しておきたい。

このあと、ある者はイエスにつばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたいて、「言いあててみよ」と言いはじめた。また下役どもはイエスを引きとって、手のひらでたたいた。（65）が記されている。イエスの受難預言の三回目、「また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」（10:34）を思い出させられる。

最後に他の福音書との差異について記す。まず、「ペテロ、イエスを知らないという」をどこに入れるかで、福音書ごとに記述の順序に関して差異がある。また、ヨハネでは、まずは、この時の大祭司カヤパのしゅうとのアンナスのところに、まず行ったことが書かれている。「わたしたちはこの人が『わたしは手で造ったこの神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建てるのだ』と言うのを聞きました」（58）の部分が、マタイでは、「この人は、わたしは神の宮を打ちこわし、三日の後に建てることができる、と言いました」（61）とあり、ルカと、ヨハネでは省略されている。マタイには、大祭司が「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」（62）と言った記述が挿入されている。「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」（61）と聞く部分は、マタイでは、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」（63）ルカは「あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」（67）これに対するイエスの応答「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」（62）は、マタイでは、「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、

間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」(64) ルカは「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。68 また、わたしがたずねても、答えないだろう。しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」。(68,69) だがそのあとに、彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」が続いている。これに対してヨハネは、 大祭司はイエスに、弟子たちのことやイエスの教のことを尋ねた。イエスは答えられた、「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。何事も隠れて語ったことはない。なぜ、わたしに尋ねるのか。わたしが彼らに語ったことは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。わたしの言ったことは、彼らが知っているのだから」(18:19-21) とだけ書いており、かなり印象が異なる。

14.2.94　ペトロ、イエスを知らないと言う

聖書箇所：マルコによる福音書 14 章 66-72 節福音書対照表/マルコによる福音書 14 章 26-31, 66-72 節福音書対照表

「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう。」(マルコ 14:26) とイエスが言うのに対し、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」。(29) とペテロは答え、さらに、「あなたによく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そう言うあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」。(30) と言われて、力を込めて「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。(31) と答えたペテロの末路が書かれている箇所である。

イエスが審問されている、大祭司の館の中庭で焚き火にあたっているペテロに、大祭司の女中が彼をみつめ、「あなたもあのナザレ人イエスと一緒だった」(67) と言う、これを否定して「わたしは知らない。あなたの言うことがなんの事か、わからない」(68) といい、庭口の方に出ていくと、先の女中が、そこにいた人たちに「この人はあの仲間のひとりです」(69) と言い出す。再び、ペテロは、それを打ち消す。すると、今度は、そばに立っている人々が「確かにあなたは彼らの仲間だ。あなたもガリラヤ人だから」。(70) と言うのに対し、「あなたがたの話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓いはじめた。(71) とあり、するとすぐ、にわとりが二度目に鳴いた。ペテロは、「にわとりが二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われたイエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。(72) と書かれている、非常に印象的な箇所である。

イエスは、晩餐の場面で、「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」(18) といい、弟子たちはひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。とあるが、ペテロの発言をみると、ペテロは、このようには、言わなかったのではないかと想像する。確信をもって、自分は、躓かないといい、死ぬことも厭わないといい、イエス捕縛の場面でも、ヨハネによると、剣をふるって、切りつけたのは、ペテロのようである。それだけの勇気をしめし、弟子たちは、みな逃げてしまったようだが、大祭司の中庭までついていったペテロが、なぜ、簡単に、イエスを否認するのだろうか。これが、まず、第一の問いである。そして、イエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。ペテロが、立ち直ったのは、なぜだろうかというのが、二番目の問いである。マルコには、このいずれにも明確には、答えていないように思われる。マルコは、ペテロが語った、または、ペテロ由来のものが多いと考えられていることからすると、ペテロの失敗談、自分は、そんな弱い人間なのだということを、告白して終わって

いるだけなのかもしれない。

一つ目の問いに対して、ゲッセマネで寝てしまったのが問題と答えるのでは、まったく不十分だろう。では、なぜなのだろうか。ルカは、「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。」（22:31）として、サタンの働きとする。子にに続けて、「しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」（22:32）ともイエスはつたえ、さらに、中庭で鶏が鳴くと「主は振りむいてペテロを見つめられた。」（22:61）とある。これが、二つ目の問いの答えなのかもしれない。

マタイでは、マルコとほとんど同じ構成で描いているので、一つ目の問いに対しても、二つ目の問いに対しても、明確な答えは語られていない。イエスの最後の晩餐の直前に置かれているメッセージが、マタイ 25 章の三つの譬え話であることを考えると、あるかたが語っておられたように、ペテロや、弟子たちが、この三つ目の譬えで語られている「これらの最も小さいもの」は、自分のこと、自分たちのことと気づかされたことを証しているのかもしれない。すると、最初の例えで語られる愚かな乙女や、一タラントを地に埋めて、主人に怒られる僕は、これらの最も小さいもの、ペテロ、または、弟子たちと認識させられたのかもしれない。ペテロがイエスに言い出した、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。（マルコ 10:28、マタイ 19:27、ルカ 18:28）などと言っていたことも、恥ずかしくなっただろう。これらは、最初の問いにも、二番目の問いにも答えることにはなっていない。おそらく、このあとを読まないとわからないと言うことだろう。「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」（14:24）には、ヒントがあるかもしれない。十字架上での死である。

ヨハネはどうだろうか。一つ目の問いに対しても、二つ目の問いに対しても答えは書かれていない。しかし、復活証言は、ヨハネには、たくさん含まれ、ペテロは新たな証明を与えられているので（ヨハネ 21 章）、二つ目の問いの答えは、復活の主との出会いとしているのかもしれない。

しかし、マルコにもどってここだけでわかることを考えてみよう。三回否むことについて丁寧に書かれている。最初は、女中、そして、次には、女中がそこにいた人たちに語るシーン、そして、最後は、そこにいた人たちが、ガリラヤ人であるという、ひとつの根拠をもって、集団知としている場面で、なんと、「あなたがたの話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓いはじめた。（71）とある。これは、 (1. to devote to destruction, 2. to declare one's self liable to the severest divine penalties) と強い言葉が使われており、つまり、もし、これが嘘なら、自分は神に呪われても良いと言う意味である。そこまで、言わせたのはなぜなのだろうか。世の終わりなら、気をつけて目を覚ましている、しかし、イエスが、恐れおののき、また悩みはじめて「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。（33,34）と言われたときには、目を覚ましていることができず、女中から言われたり、女中に、そこにいた人たちに、言われたり、そこにいた人たちに言われたようなときには、適切に対応できないと言うことなのかもしれない。裁判で、お前は、イエスの弟子かと言われたら、証言できたのかもしれない。寒いなかで、火にあたっていたときには、準備ができていなかったのかもしれない。日常的にイエスを主だとは告白していないと言うことなのだろう。考えさせられる。

福音書の差異について、いかに記録する。マルコとマタイは似ているが、マタイでは、強化されている点がいく

つかある。マルコでは、二回目も同じ女中（先の女中）とあるが、マタイでは、「ほかの女中」としている。これは、二人または三人の証言がたいせつであることと関係しているのかもしれない。一方、マルコでは「にわとりが二度目に鳴いた」と書かれているが、マタイでは「するとすぐ鶏が鳴いた。」としている。最後は、マルコでは「イエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。」となっているが、その最後の部分は、「外に出て激しく泣いた。」としている。ルカは、多少、マタイに近いように思われる。ただし、マルコでが単に「そう言って入口の方に出て行くと」とあるところが「約一時間たってから」が挿入され、さらに、「主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、『きょう、鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われた主のお言葉を思い出した。」が挿入されている。ヨハネは情報が多い。まず、なぜ、ペテロが中庭に入れたかについての説明があり、さらに、女中は、門番であったことも書かれている。火についても、炭火とあり、そこにいる人の説明もかかれている。また、二回目と三回目の間には、大祭司アンナスの尋問が挿入されている。

14.2.95　ピラトから尋問される

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 1-5 節福音書対照表

大祭司邸での、審議のあと、ペテロの否認の記事が挿入されたあと、「夜が明けると（すぐ）」祭司長たちは長老、律法学者たち、および全議会と協議をこらした末、イエスを縛って引き出し、ピラトに渡したと始まる。深夜の審議がいつまで続いたかは不明で、また、この朝の協議内容もまったく不明だが、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」に肯定的にイエスが応じ、この汚しごとは、死に値するとして、律法のもとで、自らの責任のもと、石打ちの刑にすることは、回避した、または、ヨハネが「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」。（ヨハネ 18:32）と書いているように、禁じられていたために、さけ、総督ピラトのもとに送っている。ピラトは、「あなたがユダヤ人の王であるか」と問い、イエスが肯定する。このあと、祭司長たちは、イエスのことをいろいろと訴えた。とあるが、イエスは沈黙を守る。ところまでが書かれている。

ピラトは、ローマ帝国のユダヤ属州の総督（26-36）で、通常は、カイサリア（Caesarea Maritima）に駐在していたようで、1961 年に発見された碑文も残っているとのことである。過越祭の時などは、エルサレム神殿の北西角に位置している、アントニア要塞に滞在していたとのことである。ピラトは「ちょうどその時、ある人々がきて、ピラトがガリラヤ人たちの血を流し、それを彼らの犠牲の血に混ぜたことを、イエスに知らせた。」（ルカ 13:1）との記録があり、また、ヨセフスなどに、「エルサレムにローマ皇帝ティベリウスの肖像入り軍旗を持ち込んだことでユダヤ人の反発を招いたが、最終的に撤回を余儀なくされた。」「エルサレム神殿の資金を用いて水道を建設し、市民の抗議を武力で鎮圧した。」の記録もあり、残虐と言われ、不人気のようだが、情報が少ないようにも思われる。福音書から受ける印象とは、少し異なる。福音書が書かれた時代背景から、ローマに責任を負わす書き方はできなかったのではないだろうか。

ピラトはすぐ「あなたがユダヤ人の王であるか」と問うている。これは、訴状の内容だと取るのが自然あだろうが、ユダヤ人の群衆を扇動していると表現しても、このようになるかもしれない。しかし、この「ユダヤ人の王」が、マルコ 15:26 にあるイエスの罪状書きに書かれていたことからも、重要である。

これに対して、イエスは、「そのとおりである」とお答えになった。イエスはどのように考えておられたのだろう

か。マルコでは、表現が明確ではないが、エルサレムの入城記事で「ホサナ、／主の御名によってきたる者に、祝福あれ。今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」（11:9,10）は、マタイでも、ルカでも、そしてヨハネでも、明確に「王」ということばが用いられているように、そのような群衆の声を許容しているとはいえる。

正直、イエスの心うちは、よくわからない。ヨハネには、イエスの胸の内を再現するような記述がある。「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。（ヨハネ 18:36）さらに、「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」（ヨハネ 18:37）とこたえ、ピラトの「真理とは何か」（ヨハネ 18:38）で終わっている。この世のものではなく、かつ、父なる神様についてあかしをするのがイエスが証してきたということなのだろう。正当であるように見えるが、どうだろうか。

最後に、イエスの沈黙について考えてみたい。イエスは、ピラトや、眼前にいる、ひとたちをどうみていたのだろうか。神様の御心、自分の使命を考えていたのだろうか。正直よくわからない。

他の福音書との差異について記す。マタイは、マルコに非常に近い。1 節に「イエスを殺そうとして」と目的を追加。マルコでは、4 節で、ピラトに「何も答えないのか。見よ、あなたに対してあんなにまで次々に訴えているではないか」と言わせているが、3 節の「そこで祭司長たちは、イエスのことをいろいろと訴えた。」は、マタイでは、削除し、「あんなにまで次々に、あなたに不利な証言を立てているのが、あなたには聞えないのか」としている。細かなことだが、マルコではピラトとだけ書かれているが、マタイでは、総督ピラトとし、そのあとの総督としている。マルコは、ピラトが総督であることは、だれでも知っていると想定しているのだろう。それだけ証言としては古いと思われる。ルカでは、訴えた内容として、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」（2）としている。また、ピラトに、「わたしはこの人になんの罪もみとめない」と言わせ、これに対して、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」とピラトの厳しい判決を誘導しているように見える。ヨハネには、もっと情報が多い。まず、ピラトのところを、官邸とよび、「けがれを受けないで過越の食事ができるように、官邸にはいらなかった。」としている。過越の食事は、この晩に食べると想定している。さらに、死刑を要求していることを、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と主張し、律法で裁く内容とは区別しているように見える。さらに、「あなたは、ユダヤ人の王であるか」の問いについても、最後には、「それでは、あなたは王なのだな」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。」としているが、その前に、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。を付け加え、さらに、ユダヤ人の王であることを肯定した後にも、わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」と付け加え、ピラトに「真理とは何か」と問わせ、さらに「わたしには、この人になんの罪も見いだせない。」と言わせている。いずれにしても、かなり詳細になっている。

14.2.96　死刑の判決を受ける

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 6-15 節福音書対照表

総督ピラトのもとでイエスの十字架刑が決定される。マルコでは、前段（15:1-5）において、ピラトの「あなたがユダヤ人の王であるか」（2）との問いに対して、イエスは「そのとおりである」（2）と答え、そのあとは、なにも答えていない。今回の箇所では、祭りのたびに恩赦があったことが書かれ（6）暴動を起こし人殺しをして繋がれていた暴徒バラバがいたことが書かれ（7）群衆が、恩赦を要求する（8）ところから始めている。ピラトはこれに対して「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」（9）と応じ、さらに、「それは、祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからである。」（10）と書いている。これに対して、祭司長たちは、バラバの方をゆるしてもらうように、「群衆を扇動した」(11) とある。つまり、イエスの恩赦に進む可能性があったことを示唆しているように見える。しかし、「それでは、おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの人は、どうしたらよいか」（12）と問うと、彼ら（おそらく群衆）は「十字架につけよ」（13）と叫び、ピラトが「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」（14）と言っても、どうにもならず、「それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。」（15）となっている。

以下、

- ピラトはなぜイエスを十字架につける決断をしたのだろうか。
- イエスが十字架刑に至ったのは、誰の何が責任なのだろうか。
- それぞれの福音書がたいせつなこととして伝えているのはどのようなことなのだろうか。

についても考えてみたいと思う。

福音書によって強調点は異なるが、ヨセフス（ユダヤ古代史）によると、ピラトは就任時に、皇帝の肖像が書かれた旗をエルサレムに持ち込もうとして、強い反対を受け、カイザリアにも強い嘆願があったり、神殿に納められた金を使って、水道工事をしようとして、これも、暴動に発展し、多くを殺したとの記録もある。最終的には、サマリヤからの上訴によって、職を追われたようである。ヨセフスの記述をそのまま信じて良いかどうかはわからないが、直轄地シリアの提督ではなく、ユダヤ・サマリヤの総督であるピラトは、上訴をある程度避けるために、たみの声を聞く必要もあり、強く訴える、大祭司たちに煽動された、群衆の前では、自分の思いで決断することはできなかったのだろう。死罪にあたるような罪はないということを、ピラトに言わせているのは、ローマ帝国の中で活動するキリスト教徒である著者の護教的側面が入っていることを排除することはできないだろうが、ユダヤ人社会において、祭司長や、長老たちのリーダーシップが失われることを避けようとする動きが、背景にあることは、おそらく、否定できないであろう。

しかし、ここで、イエスが十字架刑に至ったのは、誰の何が責任かに、集中してしまうのは、おそらく、不十分なのだろう。背後に、神がおられること、そして、人間の様々な罪があることも見とらなければいけないだろう。

マルコでは「煽動」ということばがあるように、もしかすると、イエスを赦してほしいと願っている民も、群衆の中にはいたのかもしれないが、その声がかき消される、または、大声とならなかったところには、弱さがあったのかもしれないし、罪がないものが、十字架刑で死刑になることへの、抗議は、強くはならなかったのだろう。祭司長や、長老たち、さらには、群衆も、神が愛されるイエスの死、神の子の死かもしれないということろには、行き着けなかった悲しい現実がある。イエスがなぜ、十字架刑で死ななければならなかったかは、この後も含めて、考えるべき問いなのだろう。

最後に、他の福音書の記述について、考えてみる。マタイと、ルカは、基本史料は、マルコ、または、マルコとおなじのようであるが、多少異なる点がある。

マタイでは、恩赦についての背景説明の後「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか。バラバか、それとも、キリストといわれるイエスか」（マタイ 27:17b）と、バラバかイエスのどちらかが恩赦を受けるという単純化が行われている。特徴的なこととしては、ピラトの妻のことば「あの義人には関係しないでください。わたしはきょう夢で、あの人のためにさんざん苦しみましたから」（マタイ 27:19）が挿入されている。また、「ピラトは手のつけようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った、『この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい」。すると、民衆全体が答えて言った、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい』。」（マタイ 27:24,25）と、責任の所在に関するやりとりが記録されている。

ルカでは、すこし枠組みに変化があり「『おまえたちは、この人を民衆を惑わすものとしてわたしのところに連れてきたので、おまえたちの面前でしらべたが、訴え出ているような罪は、この人に少しもみとめられなかった。ヘロデもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう』。」（ルカ 23:14-16）と、祭司長たちと役人と民衆を呼び出して告げるところから始めている。さらに、「ピラトはイエスをゆるしてやりたいと思って、もう一度かれらに呼びかけた。」（ルカ 23:20）「ピラトは三度目に彼らにむかって言った、『では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全くみとめられなかった。だから、むち打ってから彼をゆるしてやることにしよう』。」（ルカ 23:22）とまで書いている。しかしピラトに詰め寄る（ルカ 23:23b）強行な彼らに押し切られて、彼らの願い通りにしたと書かれている。

ヨハネでは、まず、恩赦の枠組みが説明され、次に、「1 そこでピラトは、イエスを捕え、むちで打たせた。2 兵卒たちは、いばらで冠をあんで、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着せ、3 それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。そして平手でイエスを打ちつづけた。」（ヨハネ 19:1-3）と始めている。共観福音書では、鞭打ったり侮辱を与えるのは、判決後である。このあとに「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。（ヨハネ 19:4b）と言った後「見よ、この人だ」（ヨハネ 19:5b）というあたりは印象的である。さらに「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」（ヨハネ 19:6）とピラトが言った後に、ユダヤ人たちが、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」といい、これに対して、ピラトはさらに「あなたは、もともと、どこからきたのか」（ヨハネ 19:9）と問い、「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」に対して、イエスが「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに

対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」（11b）といい、さらに、赦そうとするピラトにたいして、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。（ヨハネ 19:12b）「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」（15b）の声を聞き、ユダヤ人に引き渡すことを決めたことが記録されている。ユダヤ人たちも貶められ、なんとも残念な結末である。

マルコでは、明確とは言えないが、基本的には、暴動を起こし殺人をしたバラバが赦され、ピラトはなんら罪を認めることができなかったイエスが十字架刑にされることが書かれている。特に、ルカや、ヨハネでは、罪がないことが強調されているが、マタイと、ヨハネでは、責任についても述べられている。形式的には、ユダヤ人の責任としているが、枠組みは、死刑の権限を持っている、ピラトが総督である、ローマ帝国政府であることも揺るがない事実であるが、ヨハネには、そのような権威も、神のもとにあることが述べられ、人々が、神の権威か、人の権威のどちらに従うかが問われている関係になっている。

14.2.97　兵士から侮辱される

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 16-20 節福音書対照表（ルカを加えたもの）

大きくまとめると、ユダヤ議会（サンヘドリン）のメンバーによる審問と、ローマ総督ピラトのもとでの裁判は終結し、大祭司は、自らを神の子とすることは、神への冒涜で死に値するとし、ピラトは、「それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。」（15:15）と書かれている。厳密に考えるなら、今回の箇所は、鞭打ち後となる。総督官邸は邸宅とよばれ、大きな公務用の家があったということであろう。それが、ローマ総督用に特別に作られたものなのか、ヘロデのものなのかは不明のようだ。おそらく、ヘロデ大王の力と、ヘロデアンティパスの力の差を考えると、いくつも、ヘロデ大王の邸宅があり、その一つが、ローマ総督の官邸とされていたのではないかと想像する。いずれにしても、バルコニーなど、外に面したところから、中に引き入れたのだろう。

全部隊（　　[*1]）は、数百人の部隊だと考えられるが、他にも、処刑者がいたことを考えると、警護の意味もあったろうが、全員が刑場に向かったわけではないだろう。

「そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、『ユダヤ人の王、ばんざい」と言って敬礼をしはじめた。』」（17,18）とある。ここでは、紫の衣と、荊棘の冠は、おそらく、王の表彰であろう。紫の衣は、赤紫または緋色とも言われるが、高級なものが使用されたことには、不自然さもある。兵士のマントなのか、または、ルカに「またヘロデはその兵卒どもと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえした。」（ルカ 26:11）と書かれているので、このはなやかな着物の可能性もある。

「『ユダヤ人の王、ばんざい』と言って敬礼をしはじめた。」（18）とある。‘Ave Caesar’ カエサル万歳をもじったものだと言われる。Ave は、Hail, be well の意味。つぎに、「葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ、ひざまずいて拝んだりした。」（19b）であるが、まさに、「嘲弄」（20）（馬鹿にしてなぶること。あざけりもてあそぶこ

[*1] スペイラ（　: a military cohort; the tenth part of legion, i. the tenth part of legion, ii. if auxiliaries either 500 or 1000, iii. a maniple, or the thirtieth part of a legion）レギオンの 10 分の 1 とされる。レギオンは、4000 人ないし、6000 人の軍団。

と。）なのだろう。最後は「こうして、イエスを嘲弄したあげく、紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを十字架につけるために引き出した。」（20）である。

鞭打ちは、十字架刑に伴ったようだが、このような嘲弄は、ローマ兵の鬱憤はらしだったように見える。わからずに、しているのであろうが、おそらく、イエス個人に向けてというより、ユダヤ人への蔑みのように思われる。イエスがどうされたかは、なにも書かれていない

最後に、福音書の差異について、簡単に記す。

十字架刑判決後のイエスの嘲弄・侮蔑の記事は、マルコとマタイにはあるが、ルカと、ヨハネにはない。ルカに記されているのは、イエスの捕縛後、ペテロの否認が挟まれ、次の、ユダヤ人議会での朝の審問の直前の記事である。さらに、嘲弄、侮蔑をした主体は、おそらく、兵士たちであったろうが、内容も、異なる。ヨハネは、前回学んだ、ピラトの裁判の最中の出来事として書かれ、十字架刑の一部としての、刑罰としてではない。

14.2.98　十字架につけられる

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 21-32 節福音書対照表

「こうして、イエスを嘲弄したあげく、紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを十字架につけるために引き出した。」（15:20）に続けて、「そこへ、アレキサンデルとルポスとの父シモンというクレネ人が、郊外からきて通りかかったので、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。」（21）と始まる。クレネは北アフリカ、チュニジアとリビアあたりと言われ、シモンは、シメオンのギリシャ語化した、ユダヤ人の名前とすると、ディアスポラで、過越の祭りにエルサレムに上ったのかもしれないし、たまたま通りかかったのかもしれない。郊外からとあるのは、いろいろな取り方が可能なのだろう。「アレキサンデルとルポスとの父」とあり、おそらく読者の中には認識できる人がいたと考えられる。マルコはローマで書かれた可能性が高いと考えると、ローマ 16:13 の「主にあって選ばれたルポスと、彼の母とに、よろしく。彼の母は、わたしの母でもある。」のルポスとは同一人物の可能性が十分にある。また、使徒 13:1 「アンテオケにある教会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、およびサウロなどの預言者や教師がいた。」とある、ニゲルと呼ばれるシメオンの、ニゲルは、アフリカの黒人のことなので、アフリカ人との混血で、このシモンなのかもしれない。ルカの「それをになってイエスのあとから行かせた。」からは、十字架を負って、イエスに従うことが印象的に書かれている。（参照：マルコ 8:34 それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい。ルカ 9:23 それから、イエスは皆に言われた。「私に付いて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を負って、私に従いなさい。ルカ 14:27 自分の十字架を負って、私に付いて来る者でなければ、私の弟子ではありえない。）

連れて行った先は「ゴルゴタ、その意味は、されこうべ」。エルサレムの城壁外、北西の地のようであるが、されこうべが放置されていることはエルサレム周辺では考えられないということから、形状がされこうべにに ていたのかとの案があるが、不明である。に「そしてイエスに、没薬をまぜたぶどう酒をさし出したが、お受けにならなかった。」（23）一般的に、痛み止めと言われるが、それを受けられたなったことが記録されている。苦しみを受け止めるという意味以外に、14:25 あなたがたによく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたし

は決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。ともつながりがあるのかもしれない。どの程度の深い意味があるのかは、不明だが。

くじをひいて、イエスの着物を分けたことが書かれている。これが、イエスの着物なのだろう。紫の衣が、ヘロデが与えたものだとしても、それは、20 「こうして、イエスを嘲弄したあげく、紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを十字架につけるために引き出した。」とあるので、この時イエスが着ていたものではないだろう。着物をわけた詳細も、ヨハネ 19:23,24 により詳しく書かれている。いずれにしても、詩篇 22:18 「彼らは互にわたしの衣服を分け、／わたしの着物をくじ引にする。」と関係していると理解するのは、このあとの関係からも、適切だろう。

「イエスを十字架につけたのは、朝の九時ごろであった。」これは、ヨハネ 19:14 「その日は過越の準備の日であって、時は昼の十二時ころであった。」と表面的には矛盾する。確定的なことは不明だが、有力な説として、「マルコはユダヤ式時間を使用（第 3 時＝午前 9 時)、ヨハネはローマ式時間を使用（第 6 時＝午前 6 時ごろ)」とも言われている。

「イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。また、イエスと共にふたりの強盗を、ひとりを右に、ひとりを左に、十字架につけた。」と続く。罪状書きについては、ヨハネ 19:19-21 に詳しい。いずれにしても、ローマに対する反逆罪ということを罪状書は示しているのだろう。

このあと、三種類の人々の言葉が記録されている。まず、そこを通りかかった者たち、「29b イエスをののしって言った、『ああ、神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ、30 十字架からおりてきて自分を救え』。」次に、祭司長たち、律法学者たち、「31b かわるがわる嘲弄して言った、『他人を救ったが、自分自身を救うことができない。32 イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう』。（これは、裁判では、明確にならなかった（14:58）ことと関係しているが、イエスは、このことを、公言していたのだろう。）さらに、「一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。」（32）とある。興味深いのは、「ユダヤ人の王」「イスラエルの王」と両方が用いられ、かつ、他人を救ったとも、証言されていることである。それが、自分の関係しなければ、嘲笑の対象でしかないということだろうか。

他の福音書からの部分について最後に考える。まず、マタイは、微細な違いはあるが、基本的に、マルコを踏襲している。ルカと、ヨハネには、独自記事が多い。

ルカでは、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな」（23:26）から始まる、終末または、エルサレム陥落の預言と思われることばが、挿入され、さらに、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。（23:34）が付加されている。これは、使徒行伝 7:60 のステパノの祈りに通じる。さらに、イエスとともに十字架にかかった、たの二人の受刑者との会話が付加され、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。（42,43）の美しい言葉でおわっている。

ヨハネは、罪状書についてより詳しく、「ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。ユダヤ人の祭司長た

ちがピラトに言った、「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」。ピラトは答えた、『わたしが書いたことは、書いたままにしておけ』。」（ヨハネ 19:19-22）と詳細に書かれ、さらに、最後に、イエスの母についての言葉などが付け加えられれいる。「さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、『婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です』。それからこの弟子に言われた、『ごらんなさい。これはあなたの母です』。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。」（ヨハネ 19:25-27）

14.2.99　イエスの死

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 33-41 節福音書対照表

前段では、イエスが十字架に架かり、さまざまな人々が、イエスを罵ったり、嘲弄したりする様子が最後に書かれていた。まず、「昼の十二時になると、全地は暗くなって、三時に及んだ。」（33）とあり、昼の正午に暗くなり、それは、三時までとある。過越祭は満月の時なので、新月のときに起こる日食ではあり得ないので、単に、暗雲が立ち込めたことが言われているのだろう。「そして三時に、イエスは大声で、『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。」（34）とある。これは、基本的に、アラム語（当時の日常語）で（ラマの部分は、ヘブル語に音が近い）、マタイには、ヘブル語に近い音で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と書かれているが、これも、サバクタニの部分は、アラム語である。また、ルカと、ヨハネにはない。衝撃的すぎると考えられたのかもしれない。この段落の中心は、これをどう受け取るかだろう。そのあとには、「すると、そばに立っていたある人々が、これを聞いて言った、『そら、エリヤを呼んでいる』。ひとりの人が走って行き、海綿に酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとして言った、『待て、エリヤが彼をおろしに来るかどうか、見ていよう』。」（35,36）とあり、エリヤを呼んでいると受け取ったようだ。これは、ユダヤ人だろうから、音（エリとエリヤの近さ）からそう感じたというより、マルコ 9:11-13 にあるように、エリヤの到来を望んでいたという一つの説によっていたのだろう。そして、「イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた。」（37）とある。消耗刑なので、非常に早い死だと言わざるを得ない。イエスの死因も考えるべき課題だろう。さらに「そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。」（38）とあるが、これがどのようにどこから見えたかなど、疑問点も残り、象徴的な意味として、宣言されているのだろう。このときに、「イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、『まことに、この人は神の子であった』。」（39）明確な根拠を探すより、百卒長がそのように証言したと単純に理解すれば良いのかもしれない。マタイ 8:5-13 や、ルカ 7:1-10 の百卒長の僕が癒される話を聞いていたと想像することは、可能なのかもしれないが、場所もガリラヤのことであり、適切かどうかは不明。そして最後に「また、遠くの方から見ている女たちもいた。その中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロメがいた。彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサレムに上ってきた多くの女たちもいた。」（40,41）と女性たちのことが書かれている。このあとの、空の墓の証言や、二人以上のものが目撃していたことが、記録されているのかもしれない。ヨハネ 19:25-27 によると、イエスの愛しておられた弟子もそこにいたように書かれているが。

さて、『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』は何を伝えているのだろうか。福音書には、肉体的苦痛は描かれていない。殉教者はこのイエス以上の肉体的・精神的苦しみを味わうものもいたことを考えると、肉体的・生理的苦痛から、このように、神に見捨てられたとイエスが告白していると取るのは、おそらく当たっていないし、キリスト教会はそうは理解しなかったろう。また、ゲッセマネで、神からの召命（このことが主（イエスの父なる神）からきていること）については解決済みで 14:36 「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」と祈っていることを考えると、ここで、神に助けられると期待していたと考えるのも、おそらく、的外れであろう。すると、キリスト教会の伝統的な理解、または、パウロが「神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。」（2 コリント 5:28）と言っているように、罪を担った結果、（父なる神の御心に生きてきた、神の子イエスが）神から引き離されたと考えるのが、妥当なのだろう。最後の晩餐のときの「マルコ 14:24b これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」ぜベダイの子らに教えた「マルコ 10:45 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」も同様の趣旨であろうか。

「神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた」（37b）は、実際にそれが、目撃される可能性は少ないように思われるが、基本的には、神との関係に関して特別のことが起こり、物質的な障壁、または、特別な人（大祭司）を介してでないと、神との交わりが許されない状況が変化したことを伝えているのだろう。ヘブル書には「兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかることなく聖所にはいることができ、20 彼の肉体なる幕をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいって行くことができるのであり、」（ヘブル 10:19,20）とある。

マルコの冒頭が「神の子イエスキリストの福音のはじめ」（1:1）で始まることを考えると、百卒長の『まことに、この人は神の子であった』という証言はマルコ全体を通しても重要なものであるが、理由ははっきりしない。しかし、中間管理職の異邦人が、一部始終を見て告白した言葉は重いのだろう。ガリラヤからイエスに従ってきた女性たちの証言ではなく、百卒長の証言としたことは、とても、意味があると思う。あまり、理由を探ることは適切ではないのかもしれない。

以下、他の福音書のマルコとの差異について考察する。

マタイ：『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』は、マルコ以外は、マタイにしかない。マタイは、加えて、「また地震があり、岩が裂け、52 また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。」（27:51b-53）とあり、このことを根拠にして、「百卒長および彼と一緒にイエスの番をしていた人々が」が「まことに、この人は神の子であった」（54b）と証言したとしている。マタイは、マルコを基本的には踏襲しているので、最後の女性たちについての記述は、同じ人について言っていると考えて良いだろう。すなわち、「小ヤコブとヨセとの母マリヤ」は「ヤコブとヨセフとの母マリヤ」、そして、おそらく、これは、イエスの母マリア、「サロメ」は「ゼベダイの子たちの母」であろう。

ルカ：イエスの最後の言葉を「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」（46b）としている。マルコでは、「イエス

は声高く叫んで」だけ書かれている。その補完であろう。百人隊長のことばは、「ほんとうに、この人は正しい人であった」（47b）に変更され、自らも、この正しい人を十字架に架けた一人としている。さらに、最後に、「この光景を見に集まってきた群衆も、これらの出来事を見て、みな胸を打ちながら帰って行った。」（48）としており、イエスの死は、自分たちに関係していることを、ある程度証言しているのだろう。ルカも、この一人に身を置いているのかもしれない。女性たちの名前を書かないのは、危険を避けるためよりも、直接的には、読者は知らない人たちで、また、すでに、皆、死んでおり、読者にとって価値がないと判断したのだろうか。

ヨハネ：言葉が変更されている。「わたしは、かわく」は、欠乏を訴えているが、たんに、喉が乾いたということではないだろう。何を表して意いるのだろう。「すべてが終った」は、地上における、使命が終わったことを意味しているのだろう。葡萄酒を受け、このように叫んで死んでいく人生を、わたしも許されれば幸せ。である。

それぞれ、酸い葡萄酒についての記述がちょっと違っているが理由は不明である。

14.2.100　墓に葬られる

聖書箇所：マルコによる福音書 15 章 42-47 節福音書対照表

安息日になる前に、地位の高い議員であったアリマタヤのヨセフは、ピラトのもとに行き、イエスの死体の引き取り方を願いにいく。イエスがすでに死んでしまったか不審におもったピラトは、百卒長に確かめ、死体をヨセフにわたす。ヨセフは亜麻布に死体を包み、岩を掘って作った墓に納め、石をころがしておく。マグダラの母マリヤと、ヨセの母マリヤはイエスの納められた場所を見届ける。

申命記 21:22-23 に「もし人が死にあたる罪を犯して殺され、あなたがそれを木の上にかける時は、23 翌朝までその死体を木の上に留めておいてはならない。必ずそれをその日のうちに埋めなければならない。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。あなたの神、主が嗣業として賜わる地を汚してはならない。」とあり、さらに、次の日が安息日であったこともあり、早くに葬る必要が合ったことがわかる。一般的には、ユダヤでは、処刑された人であっても、共同墓地に埋葬することが決まっていたようだが、ユダヤの町（ルカ 23:51）アリマタヤの出身のヨセフの行動によって、犯罪人としではなく、王のような埋葬をされることになる。ヨハネに登場する「没薬と沈香とをまぜたものを百斤」は、32.6kg となるから、途方もない量である。

アリマタヤのヨセフには、いろいろな修飾語がついている。「神の国を待ち望んでいる人」は、このように、単に、待っているのではなく、それが生活にも現れている人なのだろう。弟子たちが、数人の女性と少数の男性（愛する弟子など）を除いて、みな逃げてしまっていると思われる時に、地位の高い金持ちのヨセフの行為には、驚かされる。これこそが、（神の国＝神の支配）神の御心がなる世界を心から願っているものの行動なのだろう。ピラトに願うことができたのも、ピラトともよい関係を築こうとしていたのかもしれない。（ペテロの福音書にはそのような記述もある）

ピラトは、イエスの死の確認をする。足を折ることは、窒息死を招くことのようだが、イエスの場合は、すでに、ぐったりしていて、その必要はなく、窒息死していたのだろう。死因についての研究の論文も興味深い。William D. Edwards et al. (1986), “On the Physical Death of Jesus Christ”, Journal of the American

Medical Association (JAMA), Vol. 255, No. 11, pp. 1455–1463. [リンク]。おそらく、仮死状態であるとか、死体を盗んだなどは、考えなくて良いことのように思う。少なくとも、マルコによる福音書などに書かれている、弟子たちの様子を考えると、そのようなことをするようには、まったく感じられない。

他の福音書との差異については、以下の通りである。

マルコでは、ヨセフについて「地位の高い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人」としているが、マタイでは、「アリマタヤの金持で、イエスの弟子であった。」とし、ルカでは、「善良で正しい人、ユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。」とし、ヨハネでは「ユダヤ人をはばかって、ひそかにイエスの弟子となったアリマタヤのヨセフ」と紹介し、微妙にことなっている。ピラトが「イエスがすでに死んでしまったか不審におもって百卒長に確かめ」たとの記事は、マルコにしかない。

墓について、マタイは「新しい」とし、ルカでは、「まだだれも葬ったことのない」とし、ヨハネでは、「だだれも葬られたことのない新しい墓」と形容している。

ヨハネには、「また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。」とニコデモの記事を入れ、埋葬は二人の共同作業としている。

ルカには、最後に「イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが納められる様子を見とどけた。そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。」（23:55,56）を加えている。

ルカとヨハネでは、安息日を休んだ記事で終わっている。

14.2.101　復活する

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 1-8 節福音書対照表

安息日が明け、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメが、イエスに塗るために、香料を買い求め、週の初めの日（日曜日）の早朝、日の出のころ、墓の入り口の石をだれが転がしてくれるか心配しながら、墓に行った。ところが、すでに、石はすでにころがしてあり、墓の中には、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっていた。そして「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。伝えられたが、女たちはおののき恐れ、墓から出て逃げ去り、人には何も言わなかった。

まず、過越の日がこの年は、安息日の土曜日で、イエスが十字架に架けられたのは金曜日、葬られたのはその夕方と思われる。「安息日が明け」とあり、それは、土曜日の 6 時過ぎかもしれない。香料を買い求めた。女性たちの、イエスへの奉仕（ルカ 8:1-3）の一つなのだろう。ここには、十二弟子は登場しない。十二弟子は逃げ去り、キレネ人シモン、アリマタヤのヨセフ、百卒長、そして、女性たちが、イエスと共にいる人として書かれており、

マルコ 10:31「しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」が具現化しているように見える。

マルコは、石がすでに転がしてあることが書かれ、なぜそうなったのかは書かない。（マタイにはそれが説明されている）墓の中にいる人も、「真白な長い衣を着た若者」と単数で書かれ、ルカやヨハネのように二人ではない。そして、イエスがよみがえった（　：He is risen）ことと、ガリラヤでお会いできることが告げられる。

おののき恐れは、余韻を残す。それでよいように思う。

女たちは、「誰にも、何も（　　）」言わなかったとあるが、むろん、あとでは、語ったから記録されているのだろう。ただ、ここで、終わっているのは、印象的でもあり、余韻を残している。もしかすると、実際には、ペテロと、一緒にいた、もう一人の弟子には、伝えたが、他の人には伝えなかったことを、マルコは表現しているのかもしれないが、いずれにしても、復活について理解するには、十分な時間がかかったことを示しているのではないだろうか。その混乱は、かえって真実を伝えているように見える。

ここで終わっていたとしても、それで良いのかもしれない。あとは、復活の事実を確認することではなく、一人一人が、復活のイエスと出会うことなのだろう。

他の福音書との差異については、以下の通りである。

マタイでは、墓に行った女性たちは、「マグダラのマリヤとほかのマリヤ」であったと書いている。大きな地震が起こったことが書かれ、その理由として、「主の使」が石をころがし、その上に座ったからとしている。「その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。」とその姿も形容され、マタイでは見張りこのとが書かれていたので（27:62-66、参照 28:11-15）「見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。」（28:4）とも書かれている。女性たちに伝えた言葉は、マルコとほぼ同じだが、ペテロの名前は使わず「弟子たち」となっている。また末尾も「そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」としている。

ルカでは、女たちとして、最初には名前をあげないが、最後に「この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ（ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ（ルカ 8:3））、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。」とあり、何人もいたことが想定されている。まず、墓が空であることを確認し「途方にくれていると、見よ、輝いた衣を着たふたりの者が、彼らに現れた。」とあり、ここでは、二人となっている。女たちに告げた内容には、ガリラヤに行かれることは述べられていない。しかし、イエスが頻繁に語っていたことを思い出し「使徒たちに話した。」とあるが、「ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。」が、続いている。最後に、おそらく重要な写本にない〔ペテロは立って墓へ走って行き、かがんで中を見ると、亜麻布だけがそこにあったので、事の次第を不思議に思いながら帰って行った。〕が追記されている。

ヨハネでは、「マグダラのマリヤが、墓から石がとりのけてあるのを発見。」シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子に報告。かれらが、空の墓を確認したことが書かれているが、同時に、「しかし、彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、まだ悟っていなかった。」と記している。

14.2.102　（結び一）マグダラのマリアに現れる

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 9-11 節福音書対照表

- どのようにして、マグダラのマリアはイエスだと気づいたのだろうか。

イエス自身の復活後の最初の顕現の記事である。マルコ以外に、マタイとヨハネに含まれるが、マルコはマグダラのマリヤについて、これまで三回（15:40,47,16:1）登場させていてこれが四回目だが、説明がなかったこともあり「イエスは以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたことがある。」（16:9）と説明している。そして、「マリヤは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいる所に行って、それを知らせた。」（10）とあるが、「彼らは、イエスが生きておられる事と、彼女に御自身をあらわされた事とを聞いたが、信じなかった。」（11）と結んでいる。マグダラのマリヤが墓にいることの記述は前の節 16:8 にはなく、つながりは良くない。

マルコとヨハネが直接証言に近いものを収録した可能性が高く、マタイとルカは間接証言を収録した可能性が高いと考えると、三人程度の女性たちが空の墓に驚き、ペテロとイエスの愛しておられた弟子に伝え、その後、マグダラのマリヤだけが、ペテロたちが去った墓に戻り、泣いているときに、復活のイエスに出会ったとするのが整合性からは可能性が高いように思われる。また、マタイとルカは、とくに女性たちから間接的に聞いた証言を書き記したとすると、だれが、どの部分に一緒にいたかなどは、不正確になる可能性がありうる。ルカでは、「そこで女たちはその言葉を思い出し、墓から帰って、これらいっさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した。」（ルカ 24:8,9）と、その言葉を思いだす場面を、空の墓の直後に置いている。ヨハネの時代には、実際に復活の主に会うことが重要で、その第一証言者がマグダラのマリヤということで、彼女を中心にしているのだろう。

マリヤへの顕現をどう理解するかは、記述が詳しい、ヨハネにそって解釈した方が望ましいと思うので、先に、他の福音書の記述と、マルコとの差異を記す。

マタイは、前の空の墓およびイエスの顕現の記述の後に、番兵の報告の記事（28:11-15）が置かれている。しかし、「そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」（マタイ 28:8）に続いて「すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。」（マタイ 28:9）とあり、走っていく途中なのかと思うが、やはり、つながりが良いとは言えない。イエスが「彼ら」と複数に「平安あれ」と語って顕現され、彼らは拝したことが書かれ、ここで、ガリラヤに行くべきことが伝えられている。

詳しいのは、ヨハネである。全体として、マグダラのマリヤを中心に描かれており、空の墓については、知らせを受けた、ペテロとイエスの愛しておられた弟子が確認する記事が入り、それから、おそらく、ペテロたちのあとを追って、もう一度墓に行ったと思われる、マグダラのマリヤへの顕現が描かれている。墓の中の「白い衣を着たふたりの御使が」イエスの死体の置かれた場所に、座っていて、「女よ、なぜ泣いているのか」と語りかけ、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と答えて、後ろを振り向いたらそこにイエスが立っていたが、それがイエスであるとは気づかなかったとある。そして、先ほどど同

様の会話のあと、イエスが「マリヤよ（M　）」と語りかけて、はじめて、イエスであることを認識し、「ラボニ（先生　　）」と答える（　　·M　.　　·　,　　.（16 イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。））。さらに、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と伝えられ、弟子たちに報告したことが書かれている。

触るなの部分も、トマスとの比較は、興味深い。マリヤは、たいせつなメッセージを受け取ったのだろう。

「わたしの兄弟たちの所に行って」伝えるように書かれており、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』をみても、イエスの父は、あなた方の父ということから、兄弟だということを示している。

これを見ると、マグダラのマリヤにとって大切なのは、イエスと出会ったこと。そして、イエスが伝えているのは、「わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」ということである。生きて、神のみもとにいるよ、と同時に、愛をこめた、別れの挨拶のように見える。同時に、ガリラヤがマタイや、前回の箇所で、マルコにも示されているが、イエスとともに生きたことを通して、イエスにお会いできるということなのかもしれない。ただし、ガリラヤは、ルカ文書には、登場しない。

14.2.103　二人の弟子に現れる

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 12-13 節福音書対照表

マグダラのマリヤが、イエスが生きておられることと、彼女にご自身を顕されたことを、弟子たちのところへ行って（マルコでは伝えた相手は不明瞭）伝えたが、信じなかったとあるが、マルコでは、「そのうちのふたりが」と始まる。（ヨハネでは、弟子たちのところへ行って、報告したとだけ書かれている）そのうちのふたりが、「いなかの方へ歩いていると、イエスはちがった姿で御自身をあらわされた。」とある。エルサレムにいたので、エルサレム以外は、みないなかであろうが、みやこを離れたことが、明記されているのだろう。（ルカでは、場所も明確に書かれている。後述。）印象的なのは「ちがった姿」の部分である。マルコには、なにも書かれていない。何と違っていたかは不明だが、一つには、マグダラのマリアに表れたのとは、「ちがった姿」であったのだろうか。しかし、これに続けて「このふたりも、ほかの人々の所に行って話したが、彼らはその話を信じなかった。」と、マグダラのマリヤの場合と同様に、「彼らは、信じなかった。」として終わっている。

この並行箇所として書かれていると思われるのは、ルカで、詳細に書かれている。

週の初めの日の朝、墓に「女たち」が向かい、空の墓を見ていると「輝いた衣を着たふたりの者」に、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか」。（24:5b-7）と言われ、「女たちはその言葉を思い出し、墓から帰って、これらいっさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した。」が「使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。」（14:11）今回の記

事が、これに続いている。「この日」とはじまり、ふたりの弟子（一人はクレオパ K　　であることが 18 節に書かれている。もう一人は不明だが、ヨハネ 19:15 にある、クロパ K　を、クレオパと同一人物として、もう一人をその妻とする説もある。また、このクロパの妻マリヤは、十字架のもとに立っていた女性の一人として描かれていて、それは、イエスの母マリアの姉妹であるとか、小ヤコブをアルパヨの子ヤコブととる説もあるので、全体として、もう一人は不明とするのが適切か？）が、「エルサレムから七マイル（60 スタディオン ＝ 7.1km）ばかり離れたエマオという村へ行きながら、このいっさいの出来事について互に語り合っていた。語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。」（13-15）「しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。」（16）とある。そこから、イエスとの会話が「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。（17）と始まる。そこで、彼らは「悲しそうな顔をして立ちどまった。」とあり、説明が書かれ（18-20）、さらに「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。」（21）との信仰告白も付け加えている。また、「わたしたちの仲間である数人の女が朝早く墓に行きますと、イエスのからだが見当らないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行って見ますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。（22-24）との話が続き、ここでイエスが、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。」（25-27）とあり、このあとに、イエスを引き留め、「彼らと共に泊まるために、家にはいられた。一緒に食卓につかれ」（28,29）「パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。」（30,31）とあるが、「すると、み姿が見えなくなった。」書かれており、このあとに、「彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。（32）と互いに確認し合い、「すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなさった」と言っていた。」中で、「そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した。」（35）とこの報告をしたことが書かれている。

この日とあり、かつこの日の朝の出来事について知っていることが書かれ、食事をともにしてから、エルサレムにすぐ帰ることも書かれている。おそい午前中か、午後の早い時間に、エマオに向かったのである。到着したのは、エマオだと思われるが、そこですぐに食事をしているようすからも、この二人またはそのうちのひとりの家であったと考えるのが自然だろう。やはり夫婦だったかもしれない。二人が歩きながらその日のことを互いに語り合っていたとあるが、ふたりとも弟子であり、情報についても、いろいろと聞いていただろうが、そのまま信じるところには至っていなかったのだろう。イエスは話の内容について問う。これに対して、二人が説明するが、その様子は、知らないことを批判するような雰囲気がはいっていることともに、期待していたが、死んでしまったことで、望みが途切れてしまったことが、悲しそうな顔をしてにも表れているように見える。絶望のもとでは、寛容に愛せないのだろうか。これに対して、その人（イエス）は、不信仰を咎め、聖書全体から語る。しかし、わたしがイエスであるとは言わない。信仰によって気づかないといけなかったのだろうか。そして、先に行こうとするイエスをとどめ、泊まることを勧め、食事の席で、パンを裂く姿をみて、イエスだとわかったとある。エマオが家だとすると、ガリラヤでの五千人養いや、四千人養いは、立ち会っておらず、最後の晩餐のときには、そこにいたのだろうか。情報を得ていることからも、その可能性もある。説明された知識ではなく、パンを裂くそ

の仕草でわかったのだろうか。共に食事をすることに、特別な意味があり、地上のことではなく、神様に目を向けることにつながったのかもしれない。信仰により目が開かれたのだろう。そのあとすぐ、エルサレムに向かう。コリント前書 15 章（15:5）以外には、ペテロによみがえりの、イエスが顕れたことは書かれていないが、ペテロも信仰の目で、イエスを見たのだろうか。マルコでも、ペテロに知らせることが含まれており、そこから、イエスの愛の赦しを確認し、イエスに見えることができたのかもしれない。最後には、マルコのように、信じないものもいたことは、書かれていないが、この次のエピソードとつながっており、そのときには、トマスがともにいなかったことが、ヨハネ 20 章（ヨハネ 20:24,25）には書かれており、やはり、信じなかったものもいたことが証言されている。復活による顕現は、客観的、普遍的な事実とは、違ったのだろう。

14.2.104　弟子たちを派遣する

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 14-18 節福音書対照表

「その後」とあり、時期や場所は不明。イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。」と続いている。「十一弟子」という表現は、マルコでははじめてで、マタイや、ルカ文書によっているように見える。イエスを見たという証言を信じなかったことを責めたとある。マルコでは、マグダラのマリヤの顕現、二人の弟子への顕現において、証言を信じなかったことが書かれていた。それを指しているのだろうか。このあとに、宣教命令と信じる者にたいするしるしが書かれている。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」。唐突な感じがする。まず、宣教命令もなにの説明もなしに、全世界に出ていっては、唐突である。このあとの、歩みを顧みて、書かれているのかもしれない。また、使徒行伝に、パウロがへびをつかむことの記録（28 章）があるが、ひとつひとつのしるしというより、信じるものは、困難があっても、それを乗り越えることができることを示唆しているようにも見える。

他の福音書の記述はかなり異なっている。

マタイ：「十一弟子たち」とはじめ、場所をガリラヤの、かつイエスが行けと命じた山となっている。また、「イエスに会って拝した」とある一方、疑うものもいたことが書かれ、このあとに、権威授与と、宣教命令が書かれているが、マルコとは内容がかなり異なる。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。

ルカ：「こう話していると」と始まり、クレオパともう一人が報告した直後とされており、場所は、エルサレム、かつ、マグダラのマリアにも顕れた、週の初めの日と思われる。驚いている様子が書かれ、イエスが「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって

見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」と、ご自分について「霊」ではないと、証言ししている。さらに、「ここに何か食物があるか」と言い、彼らが差し出した「焼いた魚の一きれを」を皆の前で食べたことが記されている。「モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」こと。さらに、「キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である。見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。と告げる。

ヨハネ：「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方」とあり、ルカと一致している。「弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると」イエスは、「安かれ」と言われ、「手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。」とある。信じることができたようである。また、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」と遣わし、「息を吹きかけて」「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」と伝えている。

あまりに、四つの福音書の記述が違っていて、それをどのようなものとして受け取るか、この違いをどう解釈するかも難しいと感じる。

14.2.105　天に上げられる

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 19-20 節福音書対照表

まず、「主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。」とあり、このあとの弟子たちの活動の様子と主の働きが、「弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。」と書かれている。

ルカなどの影響をうけて書かれたものか、しばらく時をへて、追記されるころに、振り返ってこのような記述にしたのかは不明。少なくとも、後半は、そのような印象が強い。神の右は、神様の正しさのようなものを表現するのであろうから、具体的に、神が視覚的に見えさらにその右にイエスが座られたという動作として捉える必要はない。「しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」（ルカ 22:69）

他の福音書としては、ルカにのみ書かれ、使徒行伝にさらに追記されている。

まずルカには「それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた。〕彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。とその後の弟子たちの様子で終わっている。

使徒行伝では、いつの事とは書かず「さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、『主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか』。彼らに言われた、『時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるで

あろう』。こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、『ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう』。」となっている。このあとに、「それから彼らは、オリブという山を下ってエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにある。」（1:12）とあり、場所は、オリブ山（エルサレムから 900m 以内）のような印象を受ける。ベタニヤ（3km 弱）とは異なる。

弟子たちは、イスラエルの復興の時を考えていたようである。しかし、イエスは、いつかという問いには、答えず、時期や場合はあなたがたの知る限りではない。として、「イエスの証人」となるとされている。証人になりなさいという表現とは異なるように見える。さらに、再臨のことが書かれている。イエスの教えの中で、不在の主人をテーマとした話を想起させる。（ルカ 12:34-52、ルカ 19:11-27、マタイ 24:45-51, 25 章全体）我々はつい、再臨は、いつなのか、それはどのような形が起こるのかなどが気になるが、私たちは、イエスの教えに従い、イエスを証し、証言するもの、不在の主人を待って、忠実に・誠実に生きるべき存在なのだろう。

ルカのキリスト教史観としてまとめられている傾向があるが、ヨハネ 20 章の「聖霊を受けよ」などをみると、聖霊をうけることは、個人的な体験が基本で、一人一人によって異なるのではないかと思われる。復活のイエスの地上でのはたらきと、聖霊の働きを区別するには、昇天について記録することも重要であったと思われるが、ルカでは、ベタニヤ、使徒行伝では場所は明確ではないが、エルサレムを起点としていることから、エルサレムのように見える。ルカと、使徒行伝で書かれた目的が異なっていると思われるが、違いも気になる。

14.2.106　復活について

聖書箇所：マルコによる福音書 16 章 1-8 節福音書対照表

マルコによる福音書 16 章 9-11 節福音書対照表

マルコによる福音書 16 章 12-13 節福音書対照表

マルコによる福音書 16 章 14-18 節福音書対照表

マルコによる福音書 16 章 19-20 節福音書対照表

参考箇所（上記以外の復活に関係する聖書箇所）：

イエス自身についての証言（マルコを中心に。ルカではもっと数が多い）：

- 一回目：マルコによる福音書 8 章 31-38 節, 9 章 1 節福音書対照表
- 二回目：マルコによる福音書 9 章 30-32 節福音書対照表
- 三回目：マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表

- 参照付き：マルコによる福音書 10 章 32-34 節福音書対照表（参照付）
  - ルカ：5:35、9:22、44、12:50、13:32、17:25、18:31-34
- ヨナのしるし：マタイ 12:39-41、16:4、ルカ 11:29-32

高い山でイエスの姿が変わる：マルコによる福音書 9 章 2-13 節福音書対照表

エルサレムでの復活に関する問答：マルコによる福音書 12 章 18-27 節福音書対照表

マタイに含まれる番兵の配置と報告：27:62-66, 28:11-15

ヨハネ独自の記事：イエスの死のあとに、19:32-37

- トマスに関する追記　ヨハネ 20:24-29
- ガリラヤでのことヨハネ 21 章

パウロによる証言：

- コリント前書 15:3-8 コリント前書 15:3-8 わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、4 そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。6 そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。7 そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、8 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。
- コリント前書 15:35-44 しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。36 おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。37 また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦であっても、ほかの種であっても、ただの種粒にすぎない。38 ところが、神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。39 すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。40 天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。41 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。42 死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、43 卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、44 肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。
- （参考）2 テモテ 2:18 彼らは真理からはずれ、復活はすでに済んでしまったと言い、そして、ある人々の信仰をくつがえしている。

人工知能まとめ：ChatGPT Deep Research (2025.5.20) [リンク]（参照：Grok3 beta [リンク]）

14.2.106.1　A. パウロ証言

まず、コリント前書 15 章 3-18 （特に 5-8）で、復活の主が現れた記述がある。おそらく、聖書に含まれる最古の証言だろう。ただし、復活から 20 年ないし 25 年後であろう。「5 ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。6 そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。7 そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、8 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。」とある。

順に並べると、ケパ、十二人、五百人以上の兄弟たちに同時に、ヤコブ、すべての使徒、パウロとなる。

わかることとして、男性のみが書かれている。ケパ（シモン・ペテロ）に現れたことの証言は、ルカ 24:34 に記録があるのみ。十一人に現れた記述は、マルコ 16:14-18、マタイ 28:16-20 にあるが、十二人とすると、記述がないだけでなく、十二人目は、イスカリオテのユダかどうかが疑問としてあがる。五百人以上の兄弟たちに同時に、またヤコブとあることの記録はない。これらは、イエスが復活したとの確信を共有したことなのかもしれない。

パウロについては、使徒行伝 9:1-19、22:6-16、26:12-18 にあり、使徒行伝記者とされる、ルカは、何度もこのことを聞かされていたと思われる。

次に、復活した体についての記述として、コリント前書 15 章 35-44 （特に 40-44）を取り上げる。「40 天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。41 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。42 死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、43 卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、44 肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。」

「地に属する、朽ちる、卑しい、弱い肉のからだ」と「天に属する、朽ちない、栄光ある、強い霊のからだ」が対比されている。

ギリシャ的霊肉二元論に基づくキリスト仮現論への復活においても反論するため、福音書においては、復活のイエスについても、その肉体性を確実とするために、体を見せたり、魚を食べたりという記述があるが、パウロの記述からは、そのようなことが想定されているとは考えられない。多様な信者の中で、少しずつ、イエスの復活に関する記述が詳しくなっていった可能性もあると思われる。また、福音書においても、そのような箇所における四つの福音書の統一は見られない。

14.2.106.2　B. 福音書証言

福音書同士に矛盾点もみられるが、整合性をとりつつ、復活について、描いてみよう。

安息日が明け、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメが、イエスに塗るために、香料を買い求め、週の初めの日（日曜日）の早朝、日の出のころ、墓の入り口の石をだれが転がしてくれるか心配しながら、墓に行った。ところが、すでに、石はすでにころがしてあり、墓の中には、右手に真白な長い衣を着た若者がすわってい

た。そして「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。伝えられる。マルコでは、女たちはおののき恐れ、墓から出て逃げ去り、人には何も言わなかった。とあるが、ヨハネでは、ペテロともう一人のイエスの愛しておられた弟子には伝えたことが書かれている。

ヨハネでは、マグダラのマリヤを中心に描かれている。簡単に、「マグダラのマリヤが、墓から石がとりのけてあるのを発見。」とあり、シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子に報告。かれらが、空の墓を確認したことが書かれているが、同時に、「しかし、彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、まだ悟っていなかった。」と記している。

それから、おそらく、ペテロたちのあとを追って、もう一度墓に行ったと思われる、マグダラのマリヤへの顕現が描かれている。墓の中の「白い衣を着たふたりの御使が」イエスの死体の置かれた場所に、座っていて、「女よ、なぜ泣いているのか」と語りかけ、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と答えて、後ろを振り向いたらそこにイエスが立っていたが、それがイエスであるとは気づかなかったとある。そして、先ほどど同様の会話のあと、イエスが「マリヤよ（M　）」と語りかけて、はじめて、イエスであることを認識し、「ラボニ（先生　　）」と答える（　　·M　.　　·　　,　　.（16 イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。））。さらに、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と伝えられ、弟子たちに報告したことが書かれている。

さて、ルカでは、「この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。」と記してから、これにつづけて、「この日」とはじまり、ふたりの弟子（一人はクレオパ）が、「エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、このいっさいの出来事について互に語り合っていた。語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。」（13-15）「しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。」（16）とある。そこから、イエスとの会話が「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。（17）と始まる。そこで、彼らは「悲しそうな顔をして立ちどまった。」とあり、説明が書かれ（18-20）、さらに「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。」（21）との信仰告白も付け加えている。また、「わたしたちの仲間である数人の女が朝早く墓に行きますと、イエスのからだが見当らないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行って見ますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。（22-24）との話が続き、ここでイエスが、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。」（25-27）とあり、このあとに、イエスを引き留め、「彼らと共に泊まるために、家にはいられた。一緒に

食卓につかれ」（28,29）「パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。」（30,31）とあるが、「すると、み姿が見えなくなった。」書かれており、このあとに、「彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。（32）と互いに確認し合い、「すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなさった」と言っていた。」中で、「そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した。」（35）とこの報告をしたことが書かれている。

この場面と思われることを、マルコは加筆の箇所に、「この後、そのうちのふたりが、いなかの方へ歩いていると、イエスはちがった姿で御自身をあらわされた。このふたりも、ほかの人々の所に行って話したが、彼らはその話を信じなかった。」（16:12,13）と記している。

さて、ルカでは、二人の弟子たちは、すぐにエルサレムに戻り、そこで、ペテロにも現れたとのニュースを聞いた時に、イエスが現れ、「こう話していると」と始まり、クレオパともう一人が報告した直後とされており、場所は、エルサレム、かつ、マグダラのマリアにも顕れた、週の初めの日と思われる。驚いている様子が書かれ、イエスが「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」と、ご自分について「霊」ではないと、証言ししている。さらに、「ここに何か食物があるか」と言い、彼らが差し出した「焼いた魚の一きれを」を皆の前で食べたことが記されている。「モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」こと。さらに、「キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である。見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。と告げる。

おそらく、マルコはこのときのことを、16 章 14-18 節に書いていると思われる。ただ、マルコでは、「その後」とはじまり、時期や場所は不明になっている。イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。」と続いている。「十一弟子」という表現は、マルコでははじめてで、マタイや、ルカ文書によっているように見える。イエスを見たという証言を信じなかったことを責めたとある。マルコでは、マグダラのマリヤの顕現、二人の弟子への顕現において、証言を信じなかったことが書かれていた。それを指しているのだろうか。このあとに、宣教命令と信じる者にたいするしるしが書かれている。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」。唐突な感じがする。

マタイでは、「十一弟子たち」とはじめ、場所をガリラヤの、かつイエスが行けと命じた山となっている。また、「イエスに会って拝した」とある一方、疑うものもいたことが書かれ、このあとに、権威授与と、宣教命令が書かれているが、マルコとは内容がかなり異なる。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバ

プテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。

ヨハネでは、「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方」とあり、ルカと一致している。「弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると」イエスは、「安かれ」と言われ、「手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。」とある。信じることができたようである。また、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」と遣わし、「息を吹きかけて」「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」と伝えている。

さらにヨハネでは、このときに、十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは一緒におらず、ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」と言い張ったとあり、さらに、「八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。と書かれている。ヨハネは、ここに、結びのことばと思われるようなものがついている。

ヨハネは、21 章に、ガリラヤでの顕現について書いている。まず、テベリヤの海で、「シモン・ペテロが、デドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子らや、ほかのふたりの弟子たちと一緒にいた時のことである。」とはじめ、共に漁に行くが、その晩は何も取れず、明け方、イエスが岸に立っており、「子たちよ、何か食べるものがあるか」。と聞き、彼らが「ありません」と答えると、イエスは、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう」。といい、実際、彼らが網をおろすと、魚が多くとれ、それを引き上げることができなかった。と書かれている。共に食事をする。イエスはペテロに、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。と聞き、ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言われた。ことが三度繰り返して書かれている。さらに、イエスは「よくよくあなたに言っておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」。と、ペテロの死に方について伝えたと書かれている。このあとに、イエスの愛しておられた弟子についてペテロがイエスに聞くくだりがあり、ヨハネによる福音書は、この弟子が書いたことが書かれている。

ルカには、昇天の記事が最後にあり、それは、使徒行伝の記事と繋がっているように見える。場所は、エルサレム近くのベタニヤで、以下のように書かれている。「それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた。〕彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。」使徒行伝では、「さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、『主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか』。彼らに言われた、『時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、

あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう』。こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、『ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう』。」

14.2.106.3　C. **問い**

14.2.106.4　D. **マルコを中心に**

14.2.106.5　E. **個人的瞑想**

参考文献

1. 地図：キリスト時代のパレスチナ (Wikimedia: 聖書地図 (JBS1956))
2. 地図：Halman Bible Atlas [Bible Maps]
    1. John the Baptist [106]
    2. Palestine in the time of Jesus (1) [103]
    3. Palestine in the time of Jesus (2) [103a]
    4. Jesus' Ministry in Galilee and Journey to Jerusalem [107a]
    5. Galilee in the Time of Jesus [107]
    6. Jesus' Ministry around the sea of Galilee [108]
    7. Jesus' Ministry beyond Galilee [109]
    8. Jesus' Journey from Galilee to Judea [110]
    9. Jesus in Judea and Jerusalem [111]
    10. Passion Week in Jerusalem [113]
    11. Herod's Temple [126a]
3. 十二弟子（使徒）Twelve Disciples (Apostles) [pdf]
4. The Temple at Jerusalem in Jesus' Day, Clyde W. Votaw, University of Chicago [pdf]
5. 参考文献:
    1. ペルセウスコレクションギリシャとローマの資料 [リンク]
    2. 共観福音書：参考 [リンク]

付録 A

トマスの福音書

The Gospel of Thomas

Early Christian Writings（初期キリスト教文書）サイトの The Gospel of Thomas（トマスによる福音書）に関してまとめたページ中の Berlin Working Group for Coptic Gnostic Writings （コプト語によるグノーシス文書のベルリン作業グループによる英訳）から Google Chrome の翻訳機能で日本語化し、その後多少修正したものです。

これらは、生きているイエスが語った隠された言葉です。
そして、ディディモス・ユダ・トマスがそれを書き記しました。

(01) そして彼は言った。「これらの言葉の意味を知る者は死を味わうことはないだろう。」

(02) イエスはこう言っています。
(1) 「探し求める者は、見つけるまで探し続けることをやめてはならない。
(2) 見つけたとき、彼は落胆する。
(3) 落胆したとき、彼は驚く。
(4) そして、彼は万物の王となる。」

(03) イエスはこう言っています。
(1) 「あなたたちを導く者たちが、『見よ、王国は天にある』と言うなら
、空の鳥があなたたちより先に行くでしょう。
(2) 彼らが、『それは海にある』と言うなら、魚があなたたちより先に行くでしょう。
(3) むしろ、王国はあなたたちの内にもあり、外にもあります。」
(4) 「あなたたちが自分自身を知れば、あなたたちは知られるようになり、
あなたたちは生ける父の子供であることを悟るでしょう。
(5) しかし、あなたたちが自分自身を知らないなら、あなたたちは貧しく、あなたたちは貧しくなっています。」

(04) イエスはこう言っています。

(1) 「年老いた人は、ためらうことなく、生後七日目の幼子に命の場所について尋ね、そして彼は生きる。
(2) 多くの最初の者が最後となり、(3) 一人の人間となる。」

(05) イエスはこう言っています。
(1) 「あなたの前にあるものを知りなさい。そうすれば、
あなたから隠されているものは、あなたに対して明らかになります。
(2) 隠されているもので、明らかにならないものは何もありません。」

(06)
(1) 弟子たちはイエスに尋ねた。
「断食をすべきでしょうか。
また、どのように祈り、施しをすべきでしょうか。
また、どのような食事を守るべきでしょうか。」
---
(2) イエスはこう言われました。「偽りを言ってはならない。(3) 憎むことをしてはならない。
(4) すべては、真理によって明らかにされるからである。
(5) 隠されたもので、あらわにならないものは一つもない。
(6) 隠されたもので、あらわにならないものは一つもない。」

(07) イエスはこう言っています。
(1) 「人に食べられ、ライオンが人間になるライオンは幸いです。
(2) ライオンに食べられ、ライオンが人間になる人は呪われています。」

(08)
(1) そして彼は言う。「人間は、
海に網を投げて、海から小さな魚でいっぱいの網を引き上げた賢い漁師のようなものである。
(2) 賢い漁師は、その中に大きな良い魚を見つけた。
(3) 彼はすべての小さな魚を海に投げ戻し、大きな魚を楽々と選んだ。
(4) 聞く耳のある者は聞くべきである。」

(09) イエスはこう言われます。
(1) 「見よ、種まき人が出て行き、手いっぱいに種をまいた。
(2) ある種は道に落ち、鳥が来てついばんだ。
(3) ほかの種は岩の上に落ち、土に根を張らず、穂も出なかった。
(4) ほかの種は茨の中に落ち、茨が種をふさいでしまい、虫がそれを食べた。
(5) ほかの種は良い土に落ち、良い実を結び、
一枡に六十、一枡に百二十の実を結んだ。」

(10) イエスはこう言っています。「わたしは世界に火を投げ込んだ。そして見よ、わたしはそれが燃え尽きるまで見守っている。」

(11) イエスは言いました:
(1) 「この天は滅び、その上にある天も滅びる。
(2) 死者は生き返らず、生きている者は死なない。
(3) あなたがたは死んだものを食べた日に、それを生かした。あなた
がたが光の中にいるとき、何をするのか。
(4) あなたがたが一つであったその日に、二つになった。
しかし二つになったとき、何をするのか。

(12)
(1) 弟子たちはイエスに言った。「私たちは、あなたが私たちから去って行かれることを知っています。
では、だれが私たちを治めるのでしょうか。」
(2) イエスは彼らに言った。「あなたたちはどこから来たのかは関係なく、義人ヤコブのところに行きなさい
。彼のために天と地が創造されたのです。」

(13)
(1) イエスは弟子たちに言われた。「私と比べて、私が誰に似ているか教えてください。」
(2) シモン・ペテロはイエスに言った。「あなたは正しい使者のようです。」
(3) マタイはイエスに言った。「あなたは（特に）賢い哲学者のようです。」
(4) トマスはイエスに言った。
「先生、あなたは誰に似ているか、私にはとても言えません。」
(5) イエスは言われた。「私はあなたの先生ではありません。あなたは
私が測り出した湧き出る泉で飲んだのです。」
(6) そしてイエスはトマスを捕らえ、退いて、彼に三つの言葉を告げた。
(7) しかしトマスが仲間のところに戻って来ると、彼らは彼に尋ねた。
「イエスはあなたたちに何と言いましたか。」
(8) トマスは彼らに言った。「もし私が彼が私に言った言葉の一つでもあなたたちに話せば、
あなたたちは石を拾い上げて私に投げつけるでしょう
。すると石から火が出て、あなたたちを焼き尽くすでしょう。」

(14) イエスは彼らに言われた。
(1)「あなたがたが断食すれば、自分自身に罪を生じさせる。
(2) また、あなたがたが祈れば、罪に定められる。
(3) また、あなたがたが施しをすれば、自分の霊に害を及ぼす。
(4) また、あなたがたがどこかの土地に行き、あちこちをさまよい歩くとき、もし人々があなたがたを受け入れ
たら、
彼らが出すものを食べなさい。また、彼らの中の病人をいやしなさい。
(5) あなたがたの口に入るものは、あなたがたを汚さない。
かえって、あなたがたの口から出るものが、あなたがたを汚す。」

(15) イエスは言いました。「女から生まれなかった者を見たら、

ひれ伏して拝みなさい。その者こそあなたがたの父である。」

(16) イエスはこう言われます。
(1) 「人々は、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思っているかもしれません。
(2) しかし、わたしが地上に争い、火、剣、戦争をもたらすために来たことを彼らは知りません。
(3) 一つの家に五人いるでしょう。三人が二人に、二人が三人に、
父が息子に、息子が父に敵対するでしょう。
(4) そして彼らは孤独な者のように立ちます。」

(17) イエスはこう言われます。「わたしは、目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、
手が触れたことのないもの、人の心に思い浮かんだことのないものをあなたに与えます。」

(18)
(1) 弟子たちはイエスに言った。「私たちの終わりはどうなるのか教えてください。」
(2) イエスは言った。「あなたは、終わりについて今尋ねていますが、すでに初めを見つけたのですか。
初めがあるところに終わりもあるからです。
(3) 初めに立つ人は幸いです。
その人は終わりを知り、死を味わうことはありません。」

(19) イエスは言いました: (1)「存在する前に存在していた者に祝福あれ。
(2) もしあなたがたがわたしの弟子となり、わたしの言葉に耳を傾けるならば、これらの石はあなたがたの役に立つであろう。
(3) あなたがたの楽園には、夏も冬も形を変えず、
葉も落ちない五つの木がある。(4) それを知る者は死を味わうことはない。」

(20)
(1) 弟子たちはイエスに言った。「天国はだれに似ているか教えてください。」
(2) イエスは彼らに言われた。「それはからし種のようなものです。(3) < それは > すべての種の中で最も小さいものです。
(4) しかし、耕された土に落ちると、大きな枝を出して
、空の鳥の隠れ家になります。」

(21)
(1) マリアはイエスに言った。「あなたの弟子たちはだれに似ていますか。」
(2) イエスは言った。「彼らは、自分のものではない畑を託された召使のようなものです。
(3) 畑の所有者がやって来て、『畑をください』と言うでしょう。
(4) (しかし) 所有者は、それを彼らに譲るために
、そして畑を彼らに与えるために、彼らの前で裸になります。」
(5) 「だから私は言います。『家の主人は、泥棒が
来るのが近づいていると知ると、泥棒が来る前に警戒し、泥棒が
自分の家、自分の領地に押し入って財産を盗み去ることを許さないでしょう。』

(6) (しかし) あなたは、世に対して警戒しなさい。
(7) 腰に力強く帯を締めなさい。そうすれば、泥棒はあなたに近づく方法を見つけないでしょう。」
(8) 「あなたがたが待ち望んでいるものは、必ず見つかるであろう。
(9) あなたがたの中には、賢い人がいるはずだ。
(10) 果物が熟したとき、彼は鎌を手に持って急いでやって来て、それを収穫した。
(11) 聞く耳のある者は、聞くがよい。」

(22)
(1) イエスは乳飲み子をご覧になった。
(2) 弟子たちに言われた。
「乳飲み子であるこれらの幼子たちは、神の国に入る者たちのようです。」
(3) 彼らは言った。「では、私たちは幼子として神の国に入るのでしょうか。」
(4) イエスは彼らに言われた。「二つを一つにし、
内を外のように、外を内のように
、上を下のようにする。
(5) すなわち、男と女を一つにして、
男が男でなく、女が女でないようにする。
(6) 目の代わりに目を
、手の代わりに手を、足の代わりに足を、
像の代わりに像を造る。(7) そのとき、あなたたちは神の国に入るのです。」

(23) イエスはこう言われます。
(1)「わたしはあなたたちを千人の中から一人、万人の中から二人を選ぶ。
(2) そして彼らは一人のようになる。」

(24)
(1) 弟子たちは言った。「あなたのおられる場所を教えてください。
私たちはそれを探す必要があります。
」(2) イエスは彼らに言われた。「耳のある者は聞きなさい。
(3) 光のある人の内には光があり、その人は全世界を照らします。
もし輝かなければ、暗闇があります。」

(25) イエスはこう言っています。
(1)「あなたの兄弟をあなたの命のように愛しなさい！
(2) 彼をあなたの目のひとみのように守りなさい！」

(26) イエスはこう言っています。
(1)「あなたは兄弟の目にある木片は見える
が、自分の目にある梁は見えない。
(2) 自分の目から梁を取り除けば、

兄弟の目から木片を取り除くことができるようになる。」

(27)
(1)「もし世を離れなければ、あなたたちは神の国を見つけることはできない。
(2) もし安息日を安息日としなければ、あなたたちは父を見ることはないだろう。」

(28) イエスはこう言っています。
(1) 「私は世界の中心に立ち、肉体をもって彼らに現れた。
(2) 彼らがみな酔っているのを見つけた。渇いている者は一人もいなかった。
(3) わたしの心は人類の子らのために痛んだ。
彼らは心が盲目で、何も見えないからである。
彼らは空っぽのままでこの世に生まれ、
空っぽのままでこの世を去ろうとしている。
(4) しかし、今は酔っている。
(しかし) 酒を振り払えば、考えが変わるだろう。」

(29) イエスはこう言っています。
(1)「もし肉が霊によって存在するようになったのなら、それは不思議です。
(2) しかし、もし霊が肉体によって存在するようになったのなら、それは不思議の中の不思議です。
(3) しかし、この貧しさの中に、どうしてこれほどの富が宿ったのか、私は不思議に思います。」

(30) イエスはこう言っています。
(1)「三人の神がいるところには、彼らは神である。
(2) 二人か一人の神がいるところには、わたしも共にいる。」

(31) イエスはこう言っています。
(1)「預言者は自分の村では受け入れられない。
(2) 医者は自分を知っている者を治さない。」

(32) イエスはこう言っています。「高い山の上に建てられ、要塞化された町は倒れることも、隠れることもできない。」

(33) イエスはこう言われます。
(1)「あなたがたの耳で聞くことを、屋根の上から告げ知らせなさい。
(2) だれも、ともしびをともして枡の下に置いたり、隠れた所に置いたりはしない。
(3) むしろ、出入りするすべての人がその光を見ることができるように、それを燭台の上に置くのだ。」

(34) イエスはこう言っています。「盲人が盲人を導くと、二人とも穴に落ちてしまいます。」

(35) イエスはこう言っています。
(1)「だれでも、強い人の家に入って、
その人の手を縛らない限り、それを力ずくで奪うことはできない。

(2) そうすれば、その人の家を略奪するだろう。」

(36) イエスはこう言っています。「朝から晩まで、夕から朝まで、何を着ようかと心配してはいけません。」

(37)
(1) 弟子たちは言った。「あなたはいつ私たちの前に現れるのですか。私たちはいつあなたに会えるのですか。」
(2) イエスは言った。「あなたがたが恥ずかしがらずに衣服を脱ぎ、
幼子のようにそれを足の下に置き、踏みつけるならば、
(3) そのとき、生ける者の子を見るであろう。そして、恐れることはないであろう。」

(38) イエスはこう言っています。
(1)「あなたたちは、私があなたたちに話しているこれらの言葉を何度も聞きたいと望んだが
、それを聞く人が他にはいなかった。
(2) あなたたちが私を探しても、私を見つけられない日が来るだろう。」

(39) イエスはこう言っています。
(1)「パリサイ人や律法学者たちは知識の鍵を受け取っていたが、それを隠してしまった。
(2) 彼らは入ることができず、また入ることを望む者にも入らせなかった。
(3) しかし、あなたたちは蛇のように賢く、鳩のように純真であれ！」

(40) イエスはこう言っています。
(1)「ぶどうの木は父の外（ぶどう園）に植えられました。
(2) 支えがないので、根こそぎ引き抜かれ、枯れてしまいます。」

(41) イエスはこう言っています。
(1)「手に何かを持っている人には、さらに何かが与えられる。
(2) 何も持っていない人には、持っているわずかなものさえも取り上げられる。」

(42) イエスは言いました。「通り過ぎる人になりなさい。」

(43)
(1) 弟子たちはイエスに言った。「私たちにそんなことを言うあなたは、いったい何者ですか。
(2) 私があなた方に話していることから、私が誰であるかが分からないのですか。
(3) しかし、あなた方はユダヤ人のようになってしまいました
。彼らは木は愛するが
、その実を憎むのです。あるいは、実は愛するが、木を憎むのです。」

(44) イエスはこう言っています。
(1)「父を冒涜する者は、だれでも許される。
(2) 子を冒涜する者は、だれでも許される。
(3) しかし、聖霊を冒涜する者は、地上でも天でも、決して許されない。」

(45) イエスはこう言っています。

(1) 「いばらからはぶどうは収穫されず、あざみからはいちじくは採れません。それらは実を結ばないからです。(2) 善人は自分の宝物から善を出します。(3) 悪人は自分の心にある悪い宝物から悪を出します。そして悪を語ります。(4) 心の豊かさから悪が出てくるのです。」

(46) イエスはこう言っています。
(1) 「アダムから洗礼者ヨハネに至るまで、女から生まれた者の中で、洗礼者ヨハネを超える者は一人もいません。そのため、彼（つまり、ヨハネ）は目を伏せる必要はありません。(2) しかし、私はこうも言っています。『あなたたちのうちで小さくなる者は、神の国を知り、ヨハネを超えるでしょう。』」

(47) イエスはこう言っています。
(1) 「人が二頭の馬に乗り、二本の弓を伸ばすことは不可能である。(2) しもべが二人の主人に仕えることも不可能である。さもなければ、一方を敬い、他方を侮辱するであろう。(3) だれも古いぶどう酒を飲んで、すぐに新しいぶどう酒を飲みたがることはない。(4) 新しいぶどう酒を古い皮袋に入れてはならない。そうすれば、皮袋は破れない。また、古いぶどう酒を新しい皮袋に入れてはならない。そうすれば、皮袋は腐らない。(5) 古い継ぎはぎを新しい服に縫い付けてはならない。そうすれば、破れてしまう。」

(48) イエスはこう言っています。「もし二人が同じ家で互いに和平を結ぶなら、
彼らは山に向かって『立ち去れ』と言えば、山は立ち去るであろう。」

(49) イエスはこう言っています。
(1)「孤独な者、選ばれた者たちは幸いである。あなた方は神の国を見つけるであろう。
(2) あなた方はそこから来て、またそこに帰るであろう。」

(50) イエスは言いました:
(1) もし彼らがあなた方に「あなたはどこから来たのか」と尋ねたら、こう言いなさい。「私たちは光から来たのです。光はひとりでに生まれ、自らを定め、その姿に現れたのです。」
(2) もし彼らがあなた方に「それはあなたですか」と尋ねたら、こう言いなさい。「私たちは彼の子供であり、生ける父に選ばれた者です。」
(3) もし彼らがあなた方に「あなた方の間にある父のしるしは何ですか」と尋ねたら、こう言いなさい。「それは動きと静けさです。」

(51)
(1) 弟子たちはイエスに言った。「死者の復活はいつ起こるのでしょうか。新しい世界はいつ来るのでしょうか？」
(2) イエスは彼らに言われた。「あなたがたが待ち望んでいるもの（復活）は（すでに）来たが、あなたがたはそれを認識していない。」

(52)
(1) 弟子たちはイエスに言った。「イスラエルでは 24 人の預言者が語っており、皆あなたを通して語ったのです。」
(2) イエスは弟子たちに言った。「あなたたちは生きている者を自分たちから遠ざけ、死んだ者たちについて語り始めたのです。」

(53)

(1) 弟子たちはイエスに言った。「割礼は有益でしょうか、それとも有害でしょうか。」
(2) イエスは彼らに言われた。「有益であれば、父親は母親から割礼を受けて子供をもうけるでしょう。
(3) しかし、真の霊による割礼は、すべてのものに勝っています。」

(54) イエスは言いました。「貧しい人々は幸いです。天国はあなた方のものです。」

(55) イエスはこう言っています。
(1)「自分の父と母を憎まない者は、わたしの弟子になることはできません。
(2) 兄弟、姉妹を憎まず、わたしのように自分の十字架を負わない者は、わたしにふさわしくありません。」

(56) イエスは言いました。
「世を知るようになった者は、死体を見つけたのです。
そして、（この）死体を見つけた者にとって、世は価値がありません。」

(57) イエスはこう言っています。
(1) 「父の王国は、良い種を蒔いた人のようなものです。
(2) 彼の敵は夜中にやって来て、良い種の間に毒麦を蒔きました。
(3) その人は、(召使たちが) 毒麦を引き抜くことを許しませんでした。
彼は彼らに言いました。『毒麦を引き抜きに行って、小麦も一緒に引き抜かないように。』
(4) 収穫の日に、毒麦は明らかになり、引き抜かれ、焼かれます。」

(58) イエスはこう言っています。「苦労した人は幸いだ。その人は命を見つけたのだ。」

(59) イエスは言いました。「生きている間に生ける者を待ち望みなさい。
そうしないと、死んでから彼を見ようとします。
しかし、あなたは彼を見ることができないでしょう。」

(60)
(1) ＜イエスは＞、ユダヤへ向かう途中、あるサマリア人が子羊を盗もうとしているのを見た。
(2) イエスは弟子たちに言った。「あの人は子羊を狙っている。」
(3) 彼らはイエスに言った。「それを殺して食べるためです。」
(4) イエスは彼らに言った。「生きている間は食べない。殺して死体になった時だけ。」
(5) 彼らはイエスに言った。「そうでなければ、それはできない。」
(6) イエスは彼らに言った。「あなたたちも、死体になって食べられないように、休む場所を探しなさい。」

(61)
(1) イエスは言った。「二人は一つの寝床に横たわり、一人は死に、もう一人は生きる。」
(2) サロメは言った。「（それで）あなたは何者ですか？
あなたは私の寝床に＜よそ者＞として座り、私の食卓から食事をしたのです。」
(3) イエスは彼女に言った。「私は（常に）同じ方から来た者です。
私は父のものの一部を与えられました。」
(4) 「私はあなたの弟子です！」

(5) 「それゆえ私は言います。もし誰かが＜神＞のようになるなら、彼は光に満ちるでしょう。
しかしもし彼が（神から）離れた者となるなら、彼は闇に満ちるでしょう。」

(62) イエスはこう言っています。
(1)「私は、私の奥義を、それを知るにふさわしい者に語る。」
(2)「あなたの右の手が何をしようとも、あなたの左の手はそれを知らないはずである。」

(63) イエスはこう言っています。
(1) 「ある金持ちがいて、たくさんの財産を持っていました。
(2) 彼は言いました。『私は自分の財産を使って種を蒔き、刈り入れ、植え、
そして果実で倉を満たし、何一つ欠けることがないようにしよう。』
(3) 彼は心の中でこのように考えていました。そしてその夜、彼は亡くなりました。
(4) 耳のある者は聞くがよい。」

(64) イエスはこう言っています。

(1) 「ある人に客がいた。食事の用意が終わると、
召使を遣わして客を招かせた。
(2) 召使は最初の人のところに来て言った。『主人があなたを招いています。』
(3) 召使は言った。『私は商人たちに請求書を送っています。彼らは今晩私のところに来る予定です。私は行って彼らに指示を出します。食事には参加しません。』
(4) 召使は別の人のところに来て言った。『主人があなたを招いています。』
(5) 召使は言った。『私は家を買ったのですが、一日だけ呼び出されました。時間がありません。』
(6) 召使は別の人のところに行って言った。『主人があなたを招いています。』
(7) 召使は言った。『友人が結婚することになっており、私は食事の用意をすることになっています。私は行けません。食事には参加しません。』
(8) 彼は別の人のところへ行き、こう言った。「主人があなたを招待しています。」
(9) 彼は言った。「私は村を買ったのですが、家賃を取りに行くので行けません。すみません。」
(10) 召使いは立ち去り、主人に言った。
「あなたが食事に招待した人たちは、欠席したいと言っています。」
(11) 主人は召使いに言った。「道に出て行き、
見つけた人を連れてきて、食事に付き合ってもらいなさい。」
(12) 商人や商売人は私の父の所に入ることはできません。」

(65) 彼は言いました。「ある高利貸しがぶどう園を所有していました。彼はそれを農民に与え、農民に耕作させ、収穫物を受け取らせようとしました。(2) 彼は農民にぶどう園の収穫物を渡すよう、自分の召使いを送りました。
(3) 彼らは召使いを捕らえ、殴打し、殺しそうになりました。召使いは戻って主人に告げました。
(4) 主人は言いました。『彼らは彼を知らなかったのかもしれない。』
(5) 彼は別の召使いを送りましたが、農民たちはその召使いも殴りました。
(6) そこで主人は息子を送り、こう言いました。『彼らは私の息子に敬意を示すかもしれない。』

(7) (しかし) 農民たちは、彼がぶどう園の相続人であることを知っていたので、彼を捕らえ、殺しました。
(8) 耳のある者は聞くがよい。」

(66) イエスは言いました。「建築者たちが捨てた石を見せなさい。それが礎石です。」

(67) イエスは言いました。「すべてを知っている人が何か一つでも欠けているなら、その人はすでにすべてを欠いているのです。」

(68) イエスはこう言っています。
(1)「彼らがあなた方を憎み、迫害する時、あなた方は幸いです。
(2) しかし、彼ら自身は、あなた方を迫害した場所に居場所を見つけることはできないでしょう。」

(69) イエスはこう言っています。
(1)「心の中で迫害されてきた人々は幸いである。
彼らこそ真に父を知るようになった人々である。」
(2)「望む者の腹が満たされるように飢えに苦しむ人々は幸いである。」

(70) イエスはこう言っています。
(1)「もしあなたがそれを自分の内に生み出すなら、あなたが持っているものがあなたを救うでしょう。
(2) もしあなたがそれを自分の内に生み出さないなら、あなたの内に持っていないものがあなたを殺すでしょう。」

(71) イエスはこう言われました。「わたしはこの家を壊す。そして、だれもそれを建てることはできない。」

(72)
(1) ある人が彼に言った。「私の兄弟たちに、父の財産を私と分け合うように伝えてください。」
(2) 彼は言った。「人よ、だれが私を分配者にしたのか?」
(3) 彼は弟子たちのほうを向いて言った。「私は分配者ではないでしょう。」

(73) イエスはこう言っています。
(a)「収穫は豊かだが、働き手が少ない。
(b) しかし、収穫のために働き手を送ってくださるように主に願いなさい。」

(74) 彼は言った。「主よ、井戸の周りにはたくさんの人がいますが、井戸の中には何もありません。」

(75) イエスはこう言われました。「戸口には多くの人が立っているが、結婚式場に入るのは孤独な者たちだ。」

(76) イエスはこう言っています。
(1) 「父の王国は、商品を持っていて真珠を見つけた商人のようなものです。
(2) その商人は賢明です。彼は商品を売り、自分のために真珠だけを買いました。
(3) あなたも彼の宝を探しなさい。それは朽ちることなく、蛾も届かず、虫も食い尽くすことのできないところにとどまります。」

(77) イエスはこう言っています。
(1)「私はすべての上にある光です。私はすべてです。
すべては私から生まれました。そして、すべては私に来ました。」
(2)「木を割ってみなさい。そこに私がいます。
(3) 石を持ち上げてみなさい。そこに私がいるでしょう。」

(78) イエスはこう言われました。
(1)「なぜ田舎へ出かけたのか。風に揺れる葦を見るため、
(2) 柔らかい衣を着た人を見るためか。
(3) 彼らは柔らかい衣を着ており、真実を認識することはできない。」

(79)
(1) 群衆の中の一人の女がイエスに言った。「あなたを宿した子宮と、あなたを養った乳房に栄光あれ。」
(2) イエスは言われた。「父の御言葉を聞いて、それを忠実に守った人々に栄光あれ。
(3) あなた方が『妊娠しなかった子宮と、乳を与えなかった乳房に栄光あれ』と言う日が来るであろう。」

(80) イエスはこう言っています。
(1)「世を知る者は、（死）体を見つけたのです。
(2) しかし、（死）体を見つけた者には、世はふさわしくありません。」

(81) イエスはこう言っています。
(1)「富んだ者は王になるべきである。
(2) 権力を持つ者はそれを放棄すべきである。」

(82) イエスはこう言っています。
(1)「わたしに近い者は火に近い。
(2) わたしから遠い者は神の国から遠い。」

(83) イエスは言う。
(1)「像は人類に見えるが、その中にある光は像の中に隠されている。
(2) 父の光は現れるが、父の像は光によって隠されている。」

(84) イエスはこう言っています。
(1)「あなた方は、自分の似姿を見ると喜びに満たされる。(2) しかし、あなた方より前に存在していた自分の似姿を見ると、それらは死ぬことも、現れることもないのに、あなた方はどれほどのことを耐えることができるのか。」

(85) イエスはこう言っています。
(1) 「アダムは偉大な力と富を持って生まれました。しかし、彼はあなた方にふさわしくありませんでした。
(2) もし彼がふさわしかったなら、死を味わうことはなかったでしょう。」

(86) イエスはこう言っています。

(1) 「[狐には] 穴があり、鳥には巣がある。
(2) しかし、人の子には頭を置いて休む場所がない。」

(87) イエスはこう言っています。
(1)「肉体に依存する肉体は惨めである。
(2) そして、この二つに依存する魂も惨めである。」

(88) イエスはこう言っています。
(1) 「使徒と預言者たちがあなた方のもとに来て、あなた方に属するものをあなた方に与える。
(2) そしてあなた方は、自分の手に持っているものを彼らに与え、心の中で言うのだ。
『彼らはいつ来て、自分たちのものを取りに行くのだろうか。』」

(89) イエスは言いました：
(1) 「なぜ杯の外側を洗うのですか？
(2) 内側を作った方が外側も作ったのだということが分からないのですか？」

(90) イエスはこう言っています。
(1) 「わたしのところに来なさい。わたしのくびきは柔らかく、わたしの支配は温和です。
(2) そうすれば、あなたたちは安らぎを見いだすでしょう。」

(91)
(1) 彼らは言った。「あなたが誰であるかを教えてください。そうすれば私たちはあなたを信じるでしょう。」
(2) 彼は彼らに言った。「あなた方は天と地の面を調べます
が、あなた方の前にいる方を認識していません。
また、この機会をどう試すかを知りません。」

(92) イエスはこう言っています。
(1) 「求めよ、そうすれば見つかるであろう。
(2) しかし、あなたがたが昔わたしに尋ねたこと、
また、あの日にわたしがあなたがたに話さなかったことを、
わたしは今あなたがたに話そうと思っている。しかし、あなたがたはそれを求めないのだ。」

(93)
(1) 「聖なるものを犬に与えてはならない。犬がそれを糞山に投げ捨ててしまうからである。
(2) 豚に真珠を投げてはならない。豚が真珠を泥に変えてしまうからである。」

(94) イエスはこう言われます。
(1) 「探す者は見つける。
(2) 門をたたく者には開かれる。」

(95)［イエスはこう言っています：］
(1) 「もしあなたがお金を持っているなら、それを利子を付けて貸してはいけません。

(2) むしろ、あなたがそれを取り戻したくない人に与えなさい。」

(96) イエスはこう言われました。
(1) 「父の王国は女のようなものです。
(2) 彼女は少量のパン種を取り、それを生地の中に隠し、大きなパンを作りました。
(3) 耳のある者は聞くべきです。」

(97) イエスはこう言っています。
(1) 「[父の] 王国は、小麦粉の入った [壺] を運んでいる女性のようなものです。
(2) 彼女が道を歩いているとき、家から遠く離れたところで、
壺の取っ手が壊れ、小麦粉が道に漏れ出しました。
(3) (しかし) 彼女はそれを知りませんでした。彼女は問題に気付いていませんでした。
(4) 家に着くと、壺を床に置くと、それが空であることがわかりました。」

(98) イエスはこう言っています。
(1) 「父の王国は権力者を殺そうとした人のようなものです。
(2) 彼は自分の家で剣を抜き、自分の手が（十分に）強いかどうかを試すために壁に突き刺しました。
(3) そして権力者を殺しました。」

(99)
(1) 弟子たちはイエスに言った。「あなたの兄弟とあなたの母が外に立っています。」
(2) イエスは彼らに言われた。「ここにいる、わたしの父の御心を行う人たちが、わたしの兄弟、わたしの母です。
(3) 彼らこそが、わたしの父の王国に入る者たちです。」

(100)
(1) 彼らはイエスに金貨を見せて言った。「皇帝の民が私たちに税金を要求しています。」
(2) イエスは彼らに言った。「皇帝のものは皇帝に与えなさい。
(3) 神のものは神に与えなさい。
(4) 私のものは私に与えなさい。」

(101)
(1) 「わたしのように自分の父と母を憎まない者は、わたしの弟子となることはできない。
(2) わたしのように自分の父と母を愛さない者は、わたしの弟子となることはできない。
(3) わたしの母はわたしに命を与えたが、わたしの本当の母はわたしの母である。」

(102) イエスはこう言われました。「パリサイ人たちは災いである。彼らは牛の飼い葉桶の中で眠っている犬のようだ。犬は食べず、牛にも食べさせない。」

(103) イエスはこう言っています。「強盗が家のどこから侵入してくるかを知っている人は幸いだ。強盗が侵入する前に、立ち上がって自分の領地をまとめ、腰に帯を締めることができるからだ。」

(104)

(1) 彼らはイエスに言った。「さあ、今日は祈りと断食をしましょう !」
(2) イエスは言った。「私はどんな罪を犯したのですか、あるいは何に打ち負かされたのですか？
(3) しかし、花婿が結婚式の部屋から出てきたら、（私たちは）断食して祈りましょう。」

(105) イエスはこう言っています。「父と母を知る者は、遊女の子と呼ばれるでしょう。」

(106) イエスはこう言っています。
(1) 「あなたたちが二つを一つにすると、あなたたちは人の子となる。
(2) そして、あなたたちが『山よ、去れ』と言うと、それは去るであろう。」

(107) イエスはこう言っています。
(1) 「王国は百匹の羊を飼っている羊飼いのようなものです。
(2) 羊飼いは百匹の羊のうち、一番大きな一匹が迷い出ました。そこで九十九匹を残して、一匹を探し求め、ついに見つけました。
(3) 羊飼いは苦労の末、羊たちに言いました。『私は九十九匹よりもあなたたちを愛している。』」

(108) イエスはこう言っています。
(1) 「わたしの口から飲む者は、わたしのようになる。
(2) わたし自身がその人のようになる。
(3) 隠されているものがその人に現れる。」

(109) イエスはこう言っています。
(1) 「王国は、畑に宝を隠しているが、何も知らない人のようなものです。
(2) そして、彼は死後、それを息子に残しました。(しかし) 息子もそれを知りませんでした。
彼はその畑を引き継いで、それを売りました。
(3) それを買った人が来て、耕しているときに宝を見つけました。
彼は望む人に利子を付けて金を貸し始めました。」

(110) イエスはこう言っています。「世を見つけて富を得た者は、世を捨てるべきだ。」

(111) イエスはこう言っています。
(1) 「天と地はあなたの前で巻き上がる。
(2) そして、生ける者から生かされている者は、死を見ることはない。」
(3) イエスはこう言っていませんか。「自分自身を見つけた者には、世界は値しない。」

(112) イエスはこう言っています。
(1) 「魂に依存する肉は災いである。
(2) 肉に依存する魂は災いである。」

(113)
(1) 弟子たちは彼に言った。「王国はいつ来るのでしょうか。
(2) それは、待ち望んでいるだけでは来ません。

(3) 彼らは『見よ、ここだ』とか『見よ、あそこだ』とは言いません。
(4) 父の王国は地上に広がっていますが、人々はそれを見ません。」

(114)
(1) シモン・ペテロは彼らに言った。「マリアを私たちから遠ざけなさい。女性は生きるに値しないからです。」
(2) イエスは言った。「見よ、私は彼女を男にするために引き入れます。そうすれば、
彼女もあなたと同じように、生きた男の霊となるでしょう。」
(3) (しかし、私はあなた方に言います。)「男になったすべての女性は天国に入るでしょう。」

付録 B

ペテロの福音書

The Gospel of Thomas

Early Christian Writings （初期キリスト教文書）サイトの The Gospel of Thomas （トマスによる福音書）に関してまとめたページ中の Gospel of Peter から Raymond Brown による英語翻訳を選択し、GPT-4o の翻訳機能で日本語化し、その後多少修正したものです。

断片化しており、主要部分のみを英訳したもの。上記サイトでは、AD70-AD160 ごろの文書とされる。

B.0.1 レイモンド・ブラウンによる翻訳の GPT-4o による和訳

[1] しかし、ユダヤ人たちの中で、ヘロデもその裁判官たちも誰一人として手を洗おうとしなかった。そして、彼らが洗うことを望まなかったので、ピラトは立ち上がった。

[2] その後、王ヘロデは主を連れ去るよう命じ、彼らに言った。「私が命じたことを行え。」

[3] しかし、ピラトと主の友であるヨセフがそこに立っており、彼らが主を十字架につけようとしていることを知り、ピラトのもとに行き、主の遺体を埋葬のために求めた。

[4] そしてピラトはヘロデに遺体を求める使いを送った。

[5] ヘロデは言った。「兄弟ピラトよ、たとえ誰も求めなかったとしても、私たちは彼を埋葬したでしょう。なぜなら、安息日が近づいているからです。律法にはこう書かれています：『処刑された者に日没させてはならない』と。」

そして彼は、種なしパンの祭りの初日の前に彼を民に引き渡した。

[6] しかし、彼らは主を連れ去り、走りながら押し倒し、「今や我々が力を持ったので、神の子を引きずり回そう」と言った。

[7] 彼らは主に紫の衣を着せ、裁きの座に座らせて言った。「イスラエルの王よ、公正に裁け。」

[8] また、ある者が茨の冠を持ってきて、主の頭に置いた。

[9] 他の者たちは彼の顔につばを吐き、頬を叩いた。別の者たちは葦で彼を突き、鞭打ちながら「このような名誉をもって神の子を讃えよう」と言った。

[10] そして彼らは二人の犯罪者を連れてきて、主をその間に十字架にかけた。しかし、主は痛みを感じていないかのように沈黙していた。

[11] 彼らが十字架を立てると、「これはイスラエルの王である」と刻まれた。

[12] そして彼らは主の衣服を前に置き、それを分け合い、賭けのように分配した。

[13] しかし、犯罪者の一人が彼らをののしりながら言った。「我々は自分たちの悪事のためにこのような苦しみを受けている。しかし、この方は人々の救い主となった方だ。あなたたちは彼にどんな不正をしたのか。」

[14] 彼らはその言葉に怒り、主が苦しみ抜いて死ぬように足を折らないよう命じた。

[15] 正午になると、ユダヤ全土が暗闇に覆われた。彼らは太陽が沈んでしまうのではないかと心配し、不安になった。主がまだ生きていたからである。（というのも、彼らには「処刑された者に日没させてはならない」と書かれているからだ。）

[16] ある者が言った。「酢と胆汁を混ぜたものを飲ませよ。」そして彼らは混ぜたものを飲ませた。

[17] こうして、彼らは全てのことを成し遂げ、自らの罪を自分たちの頭に背負った。

[18] しかし、多くの人々が夜だと思い、灯火を持って歩き回り、つまずいた。

[19] そして主は叫び声を上げて言った。「私の力よ、力よ、あなたは私を見捨てた。」そしてその言葉を発すると、主は引き上げられた。

[20] 同じ時間、エルサレム神殿の幕が二つに裂けた。

[21] 彼らは主の手から釘を抜き、地面に横たえた。そして地が揺れ、大きな恐怖が広がった。

[22] その後、太陽が再び輝き、九時と分かった。

[23] ユダヤ人たちは喜び、主の遺体をヨセフに渡した。ヨセフは主の多くの善行を見ていた人物だった。

[24] ヨセフは主の遺体を受け取り、洗い、亜麻布で包み、自分の庭と呼ばれる墓に安置した。

[25] その後、ユダヤ人たち、長老たち、祭司たちは、自分たちがどれほどの過ちを犯したかを知り、自らを叩きながらこう言い始めた。「災いだ、我々の罪よ。裁きが近づき、エルサレムの終わりが来ようとしている。」

[26] しかし、私は仲間たちと共に悲しみ、霊の中で傷つき、隠れていた。というのも、彼らは私たちを犯罪者として、また聖所に火を放とうとした者として追い求めていたからだ。

[27] これらすべてのことに加え、私たちは断食をし、安息日まで日夜悲しみ嘆きながら座っていた。

[28] しかし、書記たち、ファリサイ派の人々、長老たちは互いに集まり、すべての民がつぶやき、胸を叩きながら「もし彼の死においてこれほどの大きな徴が起こったのなら、彼がどれほど正しい人であったか見よ」と言っていることを聞いた。

[29] それを恐れた（特に長老たちは)、彼らはピラトのもとに行き、懇願しながらこう言った。

[30] 「兵士たちを引き渡していただき、三日間、彼の埋葬場所を守らせてください。そうでないと、弟子たちが彼を盗み出し、民衆が彼が死からよみがえったと信じてしまい、私たちは害を受けることになります。」

[31] そこでピラトはペトロニウスという百人隊長と兵士たちを彼の墓を守るために引き渡した。長老たちと書記たちは彼らと共に墓へ行った。

[32] そして大きな石を転がして、そこにいた全員が百人隊長と兵士たちと共にその石を墓の扉に置いた。そしてそれを七つの蝋印で封印し、そこに天幕を張り、墓を守った。

[33] しかし、安息日が明けるころ、エルサレムやその周辺地域から群衆が来て、封印された墓を見ようとした。

[34] しかし、主の日が明ける夜、兵士たちが二人ずつ見張りをしている中、天から大きな声が響いた。

[35] 彼らは天が開け、輝かしい二人の男性がそこから降りてきて墓に近づくのを見た。

[36] その時、墓の扉に押し当てられていた石が自ら転がり、横へ動き、墓が開かれた。そしてその二人の若者が中に入った。

[37] その様子を見た兵士たちは、百人隊長と長老たちを起こした（彼らもまたその場にいて見張っていた)。

[38] 彼らが見たことを話していると、再び三人の男性が墓から出てくるのを見た。そのうちの二人がもう一人を支えており、十字架が彼らの後ろについてきた。

[39] その二人の頭は天に届いており、もう一人の頭は天を越えていた。

[40] そして彼らは天からの声を聞いた。「眠りについた者たちに告げ知らせたか？」

[41] すると十字架から応答があり、「はい」と聞こえた。

[42] その後、人々はピラトにこれらのことを知らせるべきかどうか相談し始めた。

[43] 彼らがまだ考えあぐねていると、再び天が開き、ある人が降りてきて墓の中に入るのを見た。

[44] これらを見た百人隊長の周りの人々は、夜のうちに墓を離れ、ピラトのもとに急いで行き、見たことすべてを詳しく説明し、非常に苦しみながらこう言った。「本当に彼は神の子でした。」

[45] これに対してピラトはこう答えた。「私は神の子の血について潔白である。しかし、これはあなたたちがそのようにするべきだと考えたことなのだ。」

[46] すると全員が進み出て、百人隊長と兵士たちに見たことを誰にも言わないよう命じるよう、ピラトに懇願し、訴えた。

[47] 彼らは言った。「というのも、我々が神の前で最も大きな罪を背負うことになったとしても、ユダヤ人たちの手に落ちて石打ちにされるよりは良いからです。」

[48] そこでピラトは百人隊長と兵士たちに何も言わないよう命じた。

[49] 主の日の明け方、主の女性弟子であるマグダラのマリアが（ユダヤ人たちが怒りに燃えていたため、主の墓で女性たちが死者に対して行う習慣的なことを行うことができなかったので）、女性の友人たちを連れて墓へ向かった。

[50] 彼女たちはユダヤ人に見られることを恐れながらこう言った。「もし彼が十字架につけられた日に嘆き悲しむことができなかったとしても、今この墓でそれを行おう。」

[51] 彼女たちは墓に着き、それが開かれているのを見つけた。中を覗き込むと、中にある若者が座っており、立派な衣をまとい、こう言った。

[52] 「なぜ来たのか？誰を探しているのか？十字架につけられた者ではないか？彼は復活し、ここにはいない。」

[53] 女性たちは恐れ、墓から逃げ去った。

(2025.05.15)

B.0.1.1　参考：Chrome の Google 翻訳

[1] しかし、ユダヤ人のうち、ヘロデもその裁判官たちも、手を洗う者はひとりもいなかった。彼らが洗うことを望まなかったので、ピラトは立ち上がった。

[2] そこで、ヘロデ王は主を取り去るように命じ、彼らに言った。「私が命じたことは、実行しなさい。」

[3] ところが、ピラトと主の友であったヨセフがそこに立っていて、彼らが彼（主）を十字架につけようとしているのを知って、ピラトの前に出て、主の遺体を埋葬のために求めた。

[4] そこでピラトはヘロデに人をやって、主の遺体を求めた。

[5] ヘロデは言った。「ピラト兄弟、たとえだれも願い出なかったとしても、私たちは彼を埋葬していたでしょう。もうすぐ安息日が明けますから。律法に『死刑に処せられた者の上に日は沈んではならない』と書いてあるからです。」

そして、除酵祭の第一日が来る前に、イエスを民に引き渡した。

[6] 彼らは主を捕らえて走り、押しのけながら言った。「神の子を、我々が支配するようになった今、引きずって行こう。」

[7] そして、主に紫の衣を着せ、裁判の椅子に座らせて言った。「イスラエルの王よ、公正な裁きを。」

[8] 彼らのうちの一人が、茨の冠を持って来て主の頭に載せた。

[9] そこに立っていた者たちは、主の顔につばきをかけ、頬を平手打ちする者もいれば、葦の棒で突き刺す者もいた。また、鞭打って言った。「このように、神の子を尊ぶのだ。」

[10] 彼らは二人の悪事を働く者を連れて来て、彼らの真ん中で主を十字架につけた。しかし主は痛みも感じていないかのように黙っていた。

[11] 彼らは十字架を立てて、「これはイスラエルの王である」と書いた。

[12] そして、王の衣を王の前に置き、それを分けて賭けにした。

[13] ところが、悪事を働く者の一人が彼らをののしって言った。「私たちは自分が犯した罪のせいで、こんな苦しみを受けたのに、この方は人々の救い主であるのに、あなたたちに何の不正をしたというのか。」

[14] 彼らは彼（主）に腹を立て、苦しみながら死ぬように、足を折らないように命じた。

[15] しかし、すでに真昼で、ユダヤ全土は暗くなっていた。人々は、イエスがまだ生きておられるのに、太陽が沈んでしまうのではないかと心配し、心を煩わせていた。「死刑に処せられる者の上には、日が沈んではならない」と書いてあるからである。

[16] そこで、ある人が言った。「彼に酢いぶどう酒に胆汁を飲ませよ。」彼らは混ぜ物を作って飲ませた。

[17] こうして彼らはすべてのことを成し遂げ、自分の頭に罪を負わせた。

[18] しかし、多くの人は、夜だと思って、ともしびを持って歩き回っていたが、倒れた。

[19] すると、主は叫んで言われた。「わが力よ、ああ、力よ、あなたはわたしを見捨てた。」こう言って、イエスは天に上げられた。

[20] すると、ちょうどそのとき、エルサレムの聖所の垂れ幕が二つに裂けた。

[21] 彼らは主の手から釘を引き抜いて、主を地に置いた。全地が震い、大いなる恐怖が起こった。

[22] すると、太陽が輝き、時が第九時であることがわかった。

[23] ユダヤ人たちは喜び、ヨセフが多くの善行を行ったのを見てきた者だったので、ヨセフにその遺体を埋葬するように渡した。

[24] ヨセフは主を引き取り、体を洗い、亜麻布で巻き、ヨセフの園と呼ばれる自分の墓に納めた。

[25] そのとき、ユダヤ人たち、長老たち、祭司たちは、自分たちの犯した罪の大きさに気づき、身を打ちたたきながら、「ああ、わたしたちの罪は災いだ。裁きは近づき、エルサレムの終わりも近づいている。」と言いました。

[26] しかし、わたしと仲間たちは悲しみ、心に傷を負っていたので、隠れていました。彼らはわたしたちを不正を行う者として、また聖所に火をつけようとしている者として追いかけていたからです。

[27] これらすべてのことのほかに、わたしたちは断食し、安息日まで夜も昼も座って嘆き、泣いていました。

[28] しかし、律法学者、パリサイ人、長老たちは、民衆がみなつぶやき、胸を打ちながら、「もしイエスの死に際し、このような大きなしるしが起こったのなら、なんと正しい方だったのだろう」と言っているのを聞いて、互に集まり、

[29] （特に長老たちは）恐れてピラトの前に進み出て、懇願して言った、

[30] 「私たちに兵士を引き渡してください。三日間、イエスの墓の番をさせてください。弟子たちが来てイエスを盗み出し、民衆がイエスが復活したと信じて、私たちに不当な扱いをすることがないように。」

[31] そこでピラトは百人隊長ペトロニウスを兵士たちと共に墓の番に引き渡した。こうして長老たちと律法学者たちは、彼らと共に墓に着いた。

[32] そこで、そこにいた全員、百人隊長、兵士たちは大きな石を転がして墓の入り口に置き、

[33] 七つの蝋印で印をつけ、そこに天幕を張って守った。

[34] 安息日の明け方が早いと、エルサレムとその近郊から群衆が、封印された墓を見ようとやって来た。

[35] 主の夜明けの夜、兵士たちが二人ずつ番ごとに墓の番をしていたとき、天に大きな声がした。

[36] すると、天が開けて、輝く二人の人がそこから降りてきて墓に近づいた。

[37] ところが、入口を塞いでいた石がひとりでに転がって、墓の脇を少し転がって行ったので、墓が開いて、二人の若者は中に入った。

[38] これを見た兵士たちは、百人隊長と長老たちを起こした。彼らもそこにいて、番をしていたからである。

[39] 彼らが見たことを語り伝えているうちに、また三人の男が墓から出て来るのが見えた。ふたりはひとりを支えており、十字架がそのあとについていた。

[40] ふたりの頭は天に届いていたが、ひとりの頭は、彼らに手を伸ばして天を越えて連れ出されていた。

[41] そして彼らは、天から声がして、「眠っている者に告げ知らせましたか」と言うのを聞いた。

[42] 十字架の上から、「はい」と言う声が聞こえた。

[43] そこで人々は、ピラトにこれらのことを説明しようと、共通の見解を求めていた。

[44] 彼らがまだ検討しているうちに、天が開け、ある人が下りてきて墓にはいったのが見えた。

[45] これらのことを見て、百人隊長の周りにいた人々は、夜中にピラトの前に急いで行き（自分たちが守っていた墓を出て）、実際に見たことをすべて語り、非常に苦悩しながら、「本当にこの人は神の子だった」と言った。

[46] ピラトは答えて言った。「私は神の子の血については潔白である。しかし、あなたにはそうすることが当然だと思われたのだ。」

[47] すると、皆が進み出て、百人隊長と兵士たちに、自分たちが見たことをだれにも話さないように命じてくださるように、イエスに懇願し、勧めた。

[48] 彼らは言った。「ユダヤ人の手に落ちて石打ちにされるよりは、神の前に大罪を犯したほうがよいのです。」

[49] そこでピラトは百人隊長と兵士たちに何も言わないように命じた。

[50] 主の日曜日の明け方に、主の女弟子マグダラのマリアが、ユダヤ人たちが怒りに燃えて主の墓に参って、女たちが愛する死者のためにいつもしていたことをしなかったが、

[51] 女友達を連れて、イエスが納められてある墓に来た。

[52] 彼女たちはユダヤ人たちに見られるのではないかと恐れて、こう言った。「主が十字架につけられた日に、泣いたり、体をたたいたりすることができなかったのに、今は墓でそんなことができていいのに。

[53] しかし、墓の入り口に置かれている石を、だれが私たちのためにころがしてくれるだろうか。そうすれば、私たちは中に入って、主のかたわらに座り、期待されていたことをすることができるのに。」

[54] というのは、石が大きかったので、私たちは人に見られるのではないかと恐れたからである。もしできないなら、主を記念して持ってきたものを入り口に投げましょう。家に着くまで泣きながら殴り続けましょう。」

[55] 彼女たちが出かけて行ってみると、墓が開いているのが見えた。進み出てかがみ込むと、墓の中央に、立派な衣をまとった美しい若者が座っているのが見えた。その若者は彼女たちに言った。

[56]「なぜ来たのですか。だれを捜しているのですか。十字架につけられた方を捜しているのではありません。あの方は復活して去っておられます。しかし、もし信じないなら、かがんで、彼が納められていた場所を見なさい。ここにはおられません。あの方は復活して、遣わされた所へ去っておられるのです。」

[57] すると、女たちは恐れて逃げ去った。

[58] さて、その日は除酵祭の終わりの日で、祭りが終わっていたので、多くの人が家に帰っていました。

[59] しかし、私たち十二人の主の弟子は泣き悲しみ、それぞれが起こったことを悲しんで、自分の家に帰って行きました。

[60] さて、私とシモン・ペテロと兄弟アンデレは、網を持って海へ出かけました。アルパヨのレビも私たちと一緒にいました。彼は主から…

付録 C

十二族長の遺言

The Testaments of the Twelve Patriarchs

Early Christian Writings （初期キリスト教文書）サイトの The Testaments of the Twelve Patriarchs（十二族長の遺言）に関してまとめたページ中の Roberts-Donaldson English Translation （ロバーツ・ドナルドソンによる英訳）から Google Chrome の翻訳機能で日本語化し、その後多少修正したものです。

C.1 I. ルベンの思考に関する遺言

1. ルベンの遺言の写し。彼がその生涯の百二十五年目に死ぬ前に息子たちに命じたことを記したもの。ヨセフの死後二年経って彼が病気になったとき、息子たちと孫たちが彼に会いに集まった。彼は彼らに言った。「子供たちよ、私は死にそうだ。先祖たちの道を行く。」そして彼はそこに兄弟のユダ、ガド、アシェルがいるのを見て彼らに言った。「兄弟たちよ、私を起こしてくれ。私が心に秘めていることを兄弟たちと子供たちに告げよう。今から私は力が尽きる。」そして彼は立ち上がって彼らに口づけし、泣きながら言った。「兄弟たちよ、聞きなさい。私が命じることを父ルベンに聞き入れなさい。」そして、見よ、私は今日、天の神をあなたたちに証言者として呼びます。あなたたちは、若さゆえの無知と淫行に歩むことがないように。私はその中で貪欲に走り、父ヤコブの床を汚しました。私はあなたたちに言います。神は七か月の間、私の腰にひどい疫病を負わせました。父ヤコブが私のために主に祈らなかったなら、主は確かに私を滅ぼされたでしょう。私が主の目に悪と映るこのことをしたとき、私は三十歳でした。そして七か月の間、私は死ぬほどの病気にかかりました。そして七年間、主の前に心を定めて悔い改めました。私はぶどう酒や強い酒を飲まず、肉を口にせず、おいしい食物も味わわず、自分の罪が大きかったので、それを嘆きました。イスラエルでは、このようなことはなされません。

2. 子供たちよ、今、私が悔い改めのときに見た七つの誤りの霊について、私に聞いてください。七つの霊はベリアルから人間に対して与えられ、若者の働きの主要なものです。七つの霊は人間の創造のときに与えられ、人間のすべての働きがそれらによってなされるべきです。最初の（1）霊は命の霊であり、それによって人間の全存在が創造されます。第二の（2）霊は視覚の霊であり、それによって欲望が生じます。第三の（3）霊は聴覚の霊であり、それによって教えが生じます。第四の（4）霊は嗅覚の霊であり、それによって空気と呼吸を吸う味覚が

与えられます。第五の（5）霊は言語の霊であり、それによって知識が生じます。第六の（6）霊は味覚の霊であり、それによって食物と飲み物を食べることが起こります。そしてそれらによって力が生み出されます。なぜなら、食物には力の基礎があるからです。第七の霊は生殖と性交の霊であり、快楽への愛を通して罪も入り込む。それゆえ、それは創造の順序では最後であり、若者の順序では最初である。なぜなら、それは無知に満ちており、若者を盲人を穴に、家畜を断崖に導くからである。

3. これらすべてに加えて、第 8 の (8) 眠りの霊があり、これによって人間の本性の陶酔と死のイメージが作り出されます。これらの霊には誤りの霊が混じっています。第 1 の (1) 淫行の霊は、本性と感覚に宿ります。第 2 の (2) 飽くことを知らない霊は腹の中に宿ります。第 3 の (3) 闘争の霊は肝臓と胆汁の中に宿ります。第 4 の (4) はへつらう霊と策略の霊であり、過剰なおべっかによって人は外見上は公正であるように見せます。第 5 の (5) は傲慢の霊であり、人を奮い立たせて高慢にさせます。第 6 の (6) は嘘の霊であり、破滅と嫉妬の中で言葉を偽り、親族や友人から言葉を隠すのです。第 7 の (7) は不正の霊であり、これによって窃盗と盗みが行われ、人は心の欲望を実現させます。不正は他の霊と共謀して策略を働かせる。これらすべてに加えて、眠りの霊、第八の霊は誤りと幻想と結びつく。そして若者は皆、真実から心を暗くし、神の律法を理解せず、父祖の戒めに従わないので、私も若い頃にそうであったように滅びる。

さあ、子供たちよ、真実を愛しなさい。そうすれば、それがあなたたちを守るでしょう。私はあなたたちに忠告する。父ルベンに聞き従いなさい。女を見ても気にかけてはならない。夫の権威のもとで女と密かに交わってもならない。女の問題に干渉してもならない。ビルハが屋根のある場所で水浴びをしているのを見ていなかったら、私はこの大いなる罪に陥ることはなかった。女の裸のことを思いながら、私はその忌まわしい行為をするまで眠ることができなかった。父ヤコブが父イサクと留守にしていたとき、私たちがベツレヘムのエフラタに近いガデルにいたとき、ビルハは酔って、自分の部屋で裸で眠っていた。私は入って彼女の裸を見たので、不敬な行いをし、眠っている彼女を残して立ち去った。するとすぐに、神の使いが私の不敬な行いについて父ヤコブに告げ、彼は来て私のために嘆き、二度と彼女に触れなかった。

4. ですから、女性の美しさに心を留めず、その行いについて思い悩むこともしないでください。主を畏れて心を一心に歩み、仕事に励み、学びに励み、羊の群れの中を歩き回り、主が御心にかなう妻をあなたがたに与えてくださるまで、あなたがたは私のような苦しみに遭わないようにしてください。父が死ぬまで、私は非難のあまり、ヤコブの顔をじっと見つめることも、兄弟のだれにも話すこともできませんでした。そして今でも、私の良心は私の罪のために私を苦しめています。そして父は私を慰めてくれました。父は私のために主に祈り、主が私に示されたとおり、主の怒りが私から離れるようにしてくれたからです。その時から、私は守られ、罪を犯さなかったのです。ですから、子供たちよ、私が命じるすべてのことを守りなさい。そうすれば、罪を犯すことはありません。淫行は魂の破壊であり、魂を神から引き離し、偶像に近づける。なぜなら、淫行は心と理解力を欺き、若者を時期尚早に地獄に落とすからである。淫行は多くの人を滅ぼした。なぜなら、男が年老いていても、高貴であっても、ベリアルと人の息子たちから非難され、笑いものになるからである。ヨセフはあらゆる女性から身を遠ざけ、あらゆる淫行から思いを清めたので、主と人々の前に好意を得た。エジプトの女は彼に多くのことをし、魔術師を呼び、彼に媚薬を与えたが、彼の魂の目的は邪悪な欲望を許さなかった。それゆえ、私の父祖の神は、あらゆる目に見える死と隠れた死から彼を救い出した。淫行が心を征服しないなら、ベリアルもあなたに征服しないであろう。

5. 子供たちよ、女性は有害である。なぜなら、女性には男性に対する力も強さもないので、外見上は巧妙に行動して、いかにして男性を引き寄せるかを考えるからである。そして、力で打ち負かすことができない男性を、女性は策略で打ち負かすのである。さらに、神の天使が女性について私に告げ、女性の方が男性よりも淫行の精神に打ち負かされ、心の中で男性に逆らって企てるのだと教えた。そして、女性はまずその装飾によって心を欺き、視線で毒を吹き込み、それから行為によって男性を虜にするのである。なぜなら、女性は力で男性を打ち負かすことはできないからである。

それゆえ、子供たちよ、姦淫から逃れ、妻や娘たちに頭や顔を飾らないように命じなさい。なぜなら、これらのことで欺くすべての女性は永遠の罰を受けるからです。このようにして、彼らは洪水の前に監視者を誘惑しました。そして、監視者が彼らを絶えず見ていると、お互いに欲望に陥り、心の中でその行為を思いつき、男性の姿に変身して、夫たちと交わっているところに現れました。そして、心の中でその幻影を欲望した女性たちは、巨人を産みました。監視者は天に届くほどの姿で彼らに現れたからです。

6. それゆえ、淫行には気をつけなさい。そして、もしあなたがたが心を清く保ちたいと思うなら、すべての女性に対してあなたの感覚を守りなさい。また、同じように、男性と交わらないように命じなさい。そうすれば、彼らも心を清く保つことができるでしょう。不敬虔な行為をしていないにもかかわらず、絶え間ない会合は、彼らにとっては治癒不可能な病気であり、私たちにとってはベリアルの永遠の非難です。淫行はそれ自体に理解も敬虔さもなく、その欲望には嫉妬がすべて宿るからです。それゆえ、あなたがたはレビの子らに対して嫉妬し、彼らよりも高く上げられようと努めるでしょう。しかし、あなたがたはそうすることができません。神が彼らの復讐をなさり、あなたがたは悲惨な死を遂げるからです。主はレビに主権を与え、ユダにも、また彼らと共に私にも、ダンとヨセフにも、私たちが支配者となるようにと、主はお与えになりました。それゆえ、私はあなたがたに命じて、レビに聞き従うように。なぜなら、彼は主の律法を知り、主が宣言された大祭司であるキリストの時代の終わりまで、イスラエル全体のために裁きと犠牲の規定を与えるからである。私は天の神にかけてあなたたちに命じる。隣人に対しては、それぞれ誠実に行動し、謙虚な心でレビに近づき、彼の口から祝福を受けるように。彼はイスラエルを祝福し、特にユダを祝福するであろう。なぜなら、主は彼をすべての民の支配者に選んだからである。そして、私たちは彼の子孫を崇拝する。なぜなら、彼は目に見える戦争と目に見えない戦争で私たちのために死に、あなたたちの間で永遠の王となるからである。

7. ルベンは息子たちに命令を下した後、死んだ。彼らは彼を棺に入れ、エジプトから運び出し、父祖たちの埋葬地であったヘブロンの二重の洞窟に埋葬した。

C.2　II. 嫉妬に関するシメオンの遺言

1. シメオンの言葉の写し。彼が死ぬ前に、ヨセフが死んだ年に、彼の生涯の 120 年目に、息子たちに語ったこと。ヨセフが病気のとき、息子たちが見舞いに来たので、ヨセフは元気を取り戻し、起き上がって息子たちに口づけし、こう言った。

2. わが子らよ、父シメオンに聞きなさい。わたしが心に抱いていることを。わたしは父ヤコブの次男として生ま

れた。母レアは、主が彼女の祈りを聞いて下さったので、わたしをシメオンと名付けた。わたしは非常に強くなり、何事にもひるまず、何事にも恐れを抱かなかった。わたしの心はかたくなで、わたしの精神は動かされず、わたしの内臓は無感覚であった。いと高き者から、魂と肉体において、勇気が人々に与えられたからである。そのとき、父がヨセフを愛していたので、わたしはヨセフにねたみを抱き、彼を滅ぼそうと心に定めた。偽りの君がねたみの霊を送り、わたしの心をくらませたので、わたしは彼を兄弟と思わず、父ヤコブを惜しまなかったからである。しかし、彼の神、彼の先祖の神は、御使いを遣わして、わたしの手から彼を救い出してくださった。というのは、私が羊の群れに香油を捧げるためにシケムへ行き、ルベンが私たちの必需品とすべての貯蔵品があるドタムへ行ったとき、私たちの兄弟ユダは彼をイシュマエル人に売り渡したのです。ルベンが帰ってきたとき、彼は悲しんでいました。ルベンを無事に父のもとへ返してあげたかったからです。しかし、私はユダがルベンを生かしておいたことに憤り、五か月の間彼に対して怒り続けました。しかし神は私を制し、私の手の働きを一切禁じられました。私の右手は七日間半ば萎えていたからです。子供たちよ、私はヨセフのせいでこのことが起きたことを知り、悔い改めて泣きました。そして主に、私の手を元通りにしてくださり、すべての汚れとねたみとすべての愚かさから守ってくださるようにと願いました。というのは、私は兄ヨセフをねたんで、主と父ヤコブの前で悪事を企てたことを知っていたからです。

3. それで、子供たちよ、偽りの霊と嫉妬の霊に気をつけなさい。嫉妬は人の心全体を支配し、食べることも飲むことも、良いことをすることも許さない。嫉妬は人を滅ぼそうと常にそそのかす。嫉妬される者は栄えるが、嫉妬する者は衰える。私は二年間、主を畏れて断食し、自分の魂を苦しめた。そして、嫉妬からの解放は神を畏れることによって得られることを学びました。人が主に逃げれば、悪霊は彼から逃げ去り、彼の心は楽になる。そして、彼は今後、自分が嫉妬していた相手に同情し、彼を愛する者を非難せず、こうして嫉妬をやめる。

4. 父は私が悲しんでいるのを見て、私のことを尋ねた。私は「私は心が痛みます」と言った。ヨセフを売った罪で、私は彼ら全員よりも悲しんだからである。私たちがエジプトに下って行ったとき、彼がスパイとしてヨセフを捕らえた時、私は自分の苦しみが正当なものであることを知っていたので、悲しまなかった。ヨセフは善良な人で、内に神の霊を持っていた。彼は慈悲深く、憐れみ深く、私に悪意を抱かず、むしろ他の兄弟たちと同じように私を愛した。だから、子供たちよ、すべての嫉妬やねたみから身を守り、真心と善意をもって歩み、父の兄弟を心に留めなさい。そうすれば、あなたたちにも神が恵みと栄光を与え、あなたたちの頭に祝福を与えてくださるであろう。あなたたちが彼に見たように。彼は生涯、このことで私たちを非難せず、自分の魂のように、自分の息子たちにまさって私たちを愛してくださった。そして神は我々に栄光を与え、我々すべてに富、家畜、果物を惜しみなく与えた。愛する子供たちよ、あなたがたも互いに善良な心をもって兄弟を愛し、ねたみの心を捨て去りなさい。ねたみの心は魂を野蛮にし、肉体を滅ぼすからです。ねたみは人の企てを怒りと戦争に変え、流血を煽り、心を狂わせ、人に分別を持たせません。さらにねたみは眠りを奪い、魂を騒がせ、肉体を震わせます。ねたみは眠っているときでさえ、人を惑わして魂をむしばみ、邪悪な霊でそれをかき乱し、肉体を動揺させ、眠りから覚めた心を混乱させます。そして、ねたみは邪悪で有毒な霊を持っているかのように人々に現れるのです。

5. それゆえ、ヨセフは容姿が美しく、見栄えがよかった。なぜなら、彼の中には邪悪が少しも住んでいなかったからである。霊の苦しみは顔に表れるからである。さて、わが子らよ、主の前に心を清くし、人々の前で道を正しなさい。そうすれば、神と人々の前で恵みを得るであろう。また、淫行を犯さないように注意しなさい。淫行はすべての悪の母であり、神から離れ、ベリアルに近づくからである。エノクの書物に、あなたたちの息子たち

があなたたちとともに淫行に堕落し、剣でレビに対して悪事を働くと書かれているのを私は見た。しかし、彼らはレビに勝つことはできない。なぜなら、彼は主の戦いを遂行し、あなたたちのすべての軍勢を征服するからである。そして、レビとユダには少数の者が分裂し、あなたたちのうちに王権を持つ者はいないであろう。それは、わが父ヤコブが祝福の中で預言したとおりである。

6. 見よ、わたしはあなたがたの魂の罪から解放されるために、すべてのことをあなたがたに予告した。今、あなたがたがあなたがたのねたみとすべての頑固さを捨て去るなら、わたしの骨はイスラエルでバラのように、わたしの肉はヤコブでユリのように栄え、わたしの香りはレバノンの香りのようになる。聖なる者たちはわたしから永遠に杉のように増え、その枝は遠くまで伸びる。そのとき、カナンの子孫は滅び、アマレクには残されたものはなく、カパドキア人はみな滅び、ヘテ人はみな完全に滅ぼされる。そのとき、ハムの地は衰え、すべての民族は滅びる。そのとき、全地は苦難から解放され、天の下の全世界は戦争から解放される。そのとき、セムは栄光を与えられる。なぜなら、イスラエルの力ある主なる神が、地上に人として現れ、アダムによって救われるからである。そのとき、すべての偽りの霊は踏みつけられ、人々は邪悪な霊を支配するであろう。そのとき、私は喜びのうちに立ち上がり、いと高き方をその驚くべき御業のゆえに祝福するであろう。なぜなら、神は肉体を取り、人々とともに食事をし、人々を救われたからである。

7. そして今、私の子供たちよ、レビに従いなさい。そうすれば、ユダであなたたちは救われるでしょう。そして、この 2 つの部族に対して高ぶってはいけません。彼らからあなたたちに神の救いが起こるからです。主はレビから祭司のような者を、ユダから王のような者を、神であり人である者を起こすでしょう。こうして、彼はすべての異邦人とイスラエルの民族を救うでしょう。それゆえ、私はあなたたちにすべてのことを命じます。あなたたちもあなたの子供たちに命じ、彼らが代々それを守るようにするためです。

8. シメオンは息子たちに命令を下し終え、120 歳で父たちと共に眠りについた。彼らは彼を朽ちない木の棺に納め、その骨をヘブロンに運び去った。彼らはひそかにエジプト人との戦いでそれを運び去った。エジプト人はヨセフの骨を宮殿の宝物庫に保管していた。ヨセフの骨が去るとエジプト全土に暗黒と陰鬱が訪れ、エジプト人に非常に大きな災いが降りかかり、ランプを持っていても兄弟が分からないようになると魔術師たちが彼らに告げたからである。

9. シメオンの子らは喪の定めに従って父の死を悼み、モーセの手によってエジプトから出国する日までエジプトに留まった。

C.3 III. 祭司職と傲慢さに関するレビの遺言

1. レビの言葉の写し。彼が息子たちに命じたすべてのこと、彼らが行うべきこと、そして審判の日まで彼らに起こるべきこと。彼が彼らを呼んだとき、彼は健康であった。なぜなら、彼は死ぬであろうと示されていたからである。そして彼らが集まったとき、彼らにこう言いなさい。

2. 私レビはハランで身ごもり、そこで生まれ、その後父と共にシケムに来ました。私がまだ若く、およそ二十歳

の時、シメオンと共に、姉妹ディナのためにハモルに復讐しました。そして、私たちがアベル・マウルで羊の群れを飼っていたとき、主を理解する霊が私に臨み、私はすべての人が道を堕落し、不義が城壁を築き、不義が塔の上に座っているのを見ました。私は人類のことを悲しみ、私が救われるように主に祈りました。すると、私は眠りに落ち、高い山を見ました。これはアベル・マウルのアスピス山です。すると、天が開け、神の使いが私に言いました、「レビよ、入りなさい」。そこで私は第一の天から第二の天に入り、そこで、天と天の間に水がかかっているのを見ました。また、私は、これら二つの天よりも、はるかに輝く第三の天を見た。そこには、限りない高さがあった。そこで私は御使いに言った、「これはなぜですか」。すると御使いは私に言った、「これらのことを不思議に思うな。あなたがそこに昇ると、これらよりも、比べものにならないほど輝く四つの天を見るであろう。あなたは主の近くに立ち、主に仕える者となり、その奥義を人々に語り、イスラエルを贖う方について宣べ伝えるであろう。そして、主はあなたとユダを通して人々の間に現れ、彼らのうちのあらゆる種族を救うであろう。あなたの命は主の分け前となり、あなたの畑、ぶどう畑、果物、金、銀は主となるであろう」。

3. では、七つの天について聞いてください。最も低い天は、人間のあらゆる不義に近いため、より陰鬱です。第二の天には、主の制定の日、神の正しい裁きのために用意された火、雪、氷があります。そこには、悪人への復讐のための報復の霊がすべています。第三の天には、欺瞞とベリアルの霊に復讐するために、審判の日のために任命された軍隊の軍勢があります。そして、これらの上にある第四の天まではすべて聖なるものです。なぜなら、すべての中の最も高い天には、すべての神聖さをはるかに超えた至聖所に、大いなる栄光が宿るからです。その隣の天には、主の御前にいる天使たちがいて、義人のすべての無知のために主に仕え、宥めの供え物をします。そして彼らは主に適度な甘い香りと血を流さない供え物を捧げます。そしてその下の天国には主の御前にいる天使たちに答えを伝える天使たちがいます。そしてその隣の天国には王座、領地があり、そこでは常に神に賛美歌が捧げられています。それゆえ、主が私たちを見るときはいつでも、私たちはみな揺り動かされます。そうです、天も地も深淵も、主の威厳の前で揺り動かされます。しかし人の子らはこれらのことに注意を払わず、罪を犯し、至高者を怒らせます。

4. それゆえ、主が人の子らに裁きを執行することを今知りなさい。なぜなら、岩が裂け、太陽が消え、水が干上がり、火が震え、すべての被造物が動揺し、目に見えない霊が溶け去り、墓が至高者の苦しみの中で荒らされるとき、不信仰な人々は自分の罪の中に留まり、それゆえ罰をもって裁かれるからです。それゆえ、至高者はあなたの祈りを聞いて、あなたを罪から切り離し、神の子、しもべ、神の臨在の奉仕者とならせようとされました。あなたは知識の輝く光としてヤコブを照らし、イスラエルのすべての子孫にとって太陽のようになります。そして、主が御子の優しい憐れみによってすべての異教徒を永遠に訪れるまで、あなたとあなたのすべての子孫に祝福が与えられるでしょう。それでもなお、あなたの息子たちは彼を十字架につけようと手をかけるでしょう。それゆえ、あなたは助言と理解力とを授かり、神についてあなたの子らに教えることができる。神を祝福する者は祝福され、神を呪う者は滅びるからである。

5. すると、天使は天の門を私に開け、私は聖なる神殿と栄光の玉座に座しておられるいと高き方を見た。そして彼は私に言った、「レビよ、私が行ってイスラエルの真ん中に宿るまで、私はあなたに祭司職の祝福を与えた」。それから天使は私を地上に連れて行き、盾と剣を与えて言った、「ディナのゆえにシェケムに復讐しなさい。そうすれば、私はあなたと共にいる。主が私を遣わされたからだ」。そして私はそのとき、天の石板に書かれているとおり、ハモルの子らを滅ぼした。そして私は彼に言った、「主よ、どうかあなたの名を教えてください。そうす

れば、苦難の日にあなたを呼ぶことができます」。すると彼は言った、「私はイスラエルの子孫のために執り成しをする天使である。あらゆる悪霊が彼らを攻撃するので、彼らを完全には打ち倒さない。」これらのことがあった後、私はまるで目が覚めたかのように、いと高き方と、イスラエルの子孫とすべての義人のために執り成しをする天使とを祝福しました。

6. 父のもとに着くと、青銅の盾を見つけた。それゆえ、その山の名はアスピスで、ゲバルの近く、アビラの右にある。わたしはこれらの言葉を心に留めた。わたしは父および兄弟ルベンと相談して、ハモルの子らに割礼を受けさせるように命じた。彼らがイスラエルで行った忌まわしい行いにわたしは嫉妬したからである。そしてわたしはまずシケムを殺し、シメオンはハモルを殺した。その後、兄弟たちが来て、剣の刃で町を撃った。父はそれを聞いて怒り、彼らが割礼を受け、その後に殺されたことを悲しみ、祝福してわたしたちに別の扱いをした。わたしたちは父の意に反してこのことを行ったので罪を犯し、その日父は病気になった。しかし、私は神の判決がシケムに災いをもたらすことを知っていました。なぜなら、彼らは私たちの妹ディナにしたのと同じことをサラにもしようとしたのですが、主がそれを阻止されたからです。そして彼らは私たちの父アブラハムが外国人であったときに迫害し、彼の群れが増えたときには迫害し、彼の家に生まれた彼の召使いエブラエを侮辱しました。そして彼らは外国人すべてにこのようにし、彼らの妻を力ずくで奪い、男性自身を追放しました。しかし、主の怒りは突然彼らに極限まで降りかかりました。

7. そして私は父に言った。「ご主人様、怒らないでください。あなたによって主はカナン人を滅ぼし、彼らの地をあなたとあなたの後の子孫に与えてくださるのです。この日からシケムは無知な者の町と呼ばれるでしょう。人が愚か者をあざけるように、私たちも彼らをあざけりました。彼らはイスラエルで愚かなことをして私たちの妹を汚したからです。」そこで私たちは妹を連れてそこから出発し、ベテルに着きました。

8. そして七十日が過ぎた後、わたしはまたそこで、前と同じようなものを見た。白い衣を着た七人の人がわたしに言った、「立って、祭司の衣と、正義の冠と、悟りの胸当てと、真理の衣と、信仰の冠と、奇跡の冠と、預言のエポデを着けなさい」。彼らはそれぞれこれらのものを携え、わたしに着せて言った、「今から後、あなたとあなたの子孫は永遠に主の祭司となりなさい」。最初の者はわたしに聖なる油を塗り、審判の杖を与えた。第二の者は清い水でわたしを洗い、最も聖なるパンとぶどう酒を与え、聖なる栄光の衣をわたしに着せた。第三の者はエポデのような亜麻布の服をわたしに着せ、第四の者は紫色の帯をわたしに巻かせ、第五の者は豊かなオリーブの枝をわたしに与えた。六番目は私の頭に冠を置き、七番目は祭司の冠を私の頭に置き、私の手に香を満たしたので、私は主の祭司として仕えることになった。そして彼らは私に言った、「レビよ、あなたの子孫は三つの枝に分けられる。それは来たるべき主の栄光のしるしである。第一は忠実な者であり、彼より大いなる者はいない。第二は祭司職につく。第三は、新しい名がその上につけられる。なぜなら、彼はユダから王として起き上がり、異邦人のやり方に倣って、すべての異邦人のために新しい祭司職を立てるからである。彼の出現は、私たちの父アブラハムの子孫の崇高な預言者のように、言い表せないほどである。イスラエルのすべての望ましいものは、あなたとあなたの子孫のものとなり、あなたがたは見栄えのよいものをすべて食べ、主の食卓はあなたの子孫に分配され、彼らのうちのある者は大祭司、裁判官、書記官となる。彼らの口によって聖所は守られるからである。そして私が目が覚めたとき、このことは前のことと似ていると悟った。そして私はこのことも心に秘め、地上の誰にも言わなかった。

9. 二日後、私とユダは父のあとについてイサクのもとへ上って行った。父の父は私が見たすべての幻のことば

のとおりに私を祝福したが、彼は私たちと一緒にベテルへは来ようとしなかった。私たちがベテルに着くと、父ヤコブは私に関する幻で、私が彼らのために主の祭司となるのを見た。そこで彼は朝早く起きて、私を通してすべての十分の一を主に納めた。そして私たちはヘブロンに着いてそこに住むようになった。イサクは神の使いが私に示したとおり、主の律法を思い起こさせるために、私を絶えず呼び続けた。そして彼は祭司職の律法、すなわち犠牲、全焼の供え物、初物、自発的な供え物、感謝の供え物について私に教えた。彼は毎日私を教え、主の御前に私のために尽力した。そして彼は私に言った、「わが子よ、淫行の霊に気をつけなさい。このようなことは続くであろう。そして、あなたの子孫によって聖なるものを汚すであろう。だから、あなたはまだ若いうちに、傷のない、汚れのない、ペリシテ人や異邦人の血統ではない妻をめとりなさい。聖所に入る前には身を洗い、犠牲をささげるときには身を洗い、また犠牲をささげ終えたときにも身を洗いなさい。常に葉の生えている十二本の木から、その実を主にささげなさい。アブラハムが私に教えたとおりである。すべての清い獣、清い鳥から、主に犠牲をささげなさい。すべての初子とぶどう酒の初物をささげなさい。すべての犠牲に塩を添えなさい。

10. それゆえ、子供たちよ、私が命じることを何でも守りなさい。私は先祖から聞いたことを、すべてあなたたちに知らせた。あなたたちが世の終わりに世の救い主に逆らって行う不敬虔と背きのすべてから、私は解放されている。あなたたちは不敬虔な行いをし、イスラエルを欺き、主からイスラエルに対して大きな災いを起こす。あなたたちはイスラエルに対して不法な行いをするから、エルサレムはあなたたちの邪悪さに耐えられない。神殿の垂れ幕は裂けて、あなたたちの恥を隠すことができない。あなたたちは異邦人の間に捕虜として散らされ、そしりと呪いと踏みつけられる。主が選ぶ家は、義人エノクの書にあるように、エルサレムと呼ばれる。

11. それで、私が妻を迎えたとき、私は二十八歳で、彼女の名はメルカといった。彼女は身ごもって男の子を産み、その名をゲルシャムと名づけた。私たちはこの国に寄留していたからである。ゲルシャムとは寄留者と訳される。私は彼について、彼が第一の地位に就くことはないだろうと見た。そしてコハテは私の三十五歳のとき、東の方に生まれた。そして私は、彼が全会衆の真ん中の高い所に立っているのを夢で見た。それで私は彼の名をコハテと名づけた。これは威厳と教訓の始まりを意味する。そして第三に、彼女は私の生涯の四十歳のとき、メラリを産んだ。彼の母は彼を産むのに苦労したので、彼をメラリと名づけた。これは私の苦しみを意味する。なぜなら彼も死んだからである。そしてヨケベドは私の六十四歳のとき、エジプトで生まれた。私は当時、同胞の間で名声を得ていたからである。

12. ゲルシャムは妻をめとり、彼女はロムニとセメイを産んだ。ケハテの子らはアンブラム、イサール、ケブロ、オゼル、メラリの子らはムーリ、ホムシであった。私が九十四歳のとき、アンブラムは私の娘ヨケベドを妻にめとった。彼と私の娘は同じ日に生まれたからである。私がカナンの地に行ったとき、私は八歳、シケムを殺したときは十八歳、十九歳で祭司となり、二十八歳で妻をめとり、四十歳でエジプトに行った。見よ、あなたたちは私の子供、三代目の私の子供である。私が百十八歳のとき、ヨセフは死んだ。

13. そして今、子供たちよ、私はあなた方に命じます。心から主を畏れ、主のすべての律法に従って純粋に歩むように。また、子供たちに学問を教え、彼らが生涯理解力を保ち、絶えず神の律法を読むようにしなさい。神の律法を知る者は皆、尊敬され、どこへ行ってもよそ者とならないからです。そうです、彼は先祖以上に多くの友人を得るでしょう。また、多くの人が彼に仕え、彼の口から律法を聞きたいと願うでしょう。子供たちよ、地上で正義を行いなさい。そうすれば、天に宝が見つかります。また、魂に良いものを蒔けば、人生でそれを見出すでしょう。悪いものを蒔けば、すべての悩みと苦難を刈り取ることになるからです。熱心に神を畏れて知恵を得

なさい。なぜなら、捕囚に連行され、町々が破壊され、土地や金銀、あらゆる所有物が失われても、不信心による盲目と罪による麻痺を除いて、賢者の知恵は誰にも奪われることはないからです。敵の中にあっても、それは彼にとって栄光となり、異国の地で故郷となり、敵のただ中にも友が見出されるからです。もし人がこれらのことを教え、それを行うなら、私たちの兄弟ヨセフのように、王たちと共に王位に就くでしょう。

14. そして今、我が子らよ、私はエノクの書から、最後にはあなたがたが不信心な行いをし、あらゆる悪意をもって主に手を置くことを知った。そしてあなたがたの同胞はあなたがたのことで恥じ、すべての異邦人にとっては嘲りとなるであろう。なぜなら、私たちの父祖イスラエルは、世の救い主に手を置く祭司長たちの不信心さから清められるからである。天は地よりも清く、あなたがたは太陽や月のように天の光である。あなたがたが不信心で暗くなったら、すべての異邦人はどうなるのか。このようにして、あなたがたは私たちの種族に呪いをもたらすであろう。彼らのために世の光が来たのである。それはすべての人を照らすためにあなたがたの間に与えられたのである。あなたがたは神の定めに反する戒めを教えながら、主を殺そうとするであろう。あなたがたは主の供え物を奪い、主の分け前を盗むであろう。あなたたちは主に犠牲をささげる前に、その最上の部分を取り、軽蔑しながらそれを遊女たちと食べるであろう。あなたたちは主の戒めを不道徳な行為の中で教え、夫のある女たちを汚し、エルサレムの処女たちを汚し、遊女や姦婦たちと交わるであろう。あなたたちは異邦人の娘たちを妻にめとり、不法な清め方で清めるであろう。あなたたちの結合は不敬虔さにおいてソドムとゴモラのようになるであろう。あなたたちは祭司職が人々に対して高ぶっているために高ぶるであろう。それだけでなく、神の戒めに対しても高ぶって、聖なるものをあざ笑い、軽蔑しながら嘲笑するであろう。

15. それゆえ、主が選ばれる神殿は汚れによって荒廃し、あなたたちはすべての国々で捕虜となり、彼らの間で忌まわしい者となり、神の正しい裁きによって非難と永遠の恥辱を受けるであろう。あなたたちを見る者は皆、あなたたちから逃げ去るであろう。そして、私たちの先祖アブラハム、イサク、ヤコブがいなかったら、私の子孫は一人も地上に残らなかったであろう。

16. そして今、私はエノク書で、あなたがたは七十週の間、道を踏み外し、聖職を汚し、犠牲を汚し、律法を堕落させ、預言者の言葉を無視するであろうことを知りました。あなたがたは邪悪な心で義人を迫害し、敬虔な人を憎み、忠実な人の言葉を忌み嫌い、いと高き方の力で律法を新たにする人を欺く者と呼ぶでしょう。そして最後に、あなたがたが思うように、彼の復活を理解せず、罪のない血を邪悪にも自分の頭に負って、彼を殺害するでしょう。彼のために、あなたがたの聖地は荒れ果て、地面にまで汚され、あなたがたには清い場所がなくなるでしょう。あなたがたは異邦人の中で呪われ、散らされるでしょう。しかし、彼が再びあなたがたを見て、憐れみの心で、信仰と水を通してあなたがたを彼のもとに連れて行くでしょう。

17. 七十週について聞いたので、祭司職についても聞きなさい。ヨベルの年ごとに祭司職があるからです。最初のヨベルの年には、最初に祭司職に油を注がれた者が偉大となり、父のように神に語ります。彼の祭司職は主への畏れで満たされ、主の喜びの日に彼は世の救いのために立ち上がります。第二のヨベルの年には、油を注がれた者は愛する者たちの悲しみのうちに身ごもります。彼の祭司職は尊ばれ、すべての人の間で栄光を与えられるでしょう。そして、第三の祭司は悲しみにとらわれ、第四の祭司は悲嘆にとらわれます。なぜなら、彼には不義が大いに課せられ、イスラエルのすべてが隣人を憎むからです。第五の祭司は暗闇にとらわれ、第六、第七の祭司も同様です。そして第七週には、主と人々の前で、私が言い表せないほどの汚れが起こります。これらのことを行う者たちはそれを知るからです。それゆえ、彼らは捕らわれ、略奪され、彼らの土地と財産は破壊されます。

そして第五週には、彼らは荒れ果てた国に戻り、主の家を再建します。そして第七週には、祭司、偶像崇拝者、争い好き、金銭好き、傲慢、無法、好色、子供や獣を虐待する者たちがやって来ます。

18. そして主から彼らの罰が下った後、主は新しい祭司を祭司職に立て、その者に主のすべての言葉が明らかにされる。そして彼は、日が満ちる時に、地上に真実の裁きを執行する。そして彼の星は、昼の光の中で知識の光を放つ王のように天に昇り、彼は昇天するまで世界で称賛される。彼は地上の太陽のように輝き、天の下の世界からすべての暗闇を追い払い、全地に平和が訪れる。彼の時代には天は喜び、地は喜び、雲は喜び、主の知識は海の水のように地上に注がれる。そして主の臨在の栄光の天使たちは彼の中で喜ぶ。天は開かれ、栄光の神殿から、父の声とともに、聖化がイサクの父アブラハムからのように彼に臨むであろう。そして、いと高き方の栄光が彼の上に語られ、理解と聖化の霊が水の中で彼の上にとどまるであろう。彼は主の威厳を真実に永遠に彼の子らに与えるであろう。そして、すべての世代、まさに永遠に彼の跡を継ぐ者はいないであろう。そして、彼の祭司職においてすべての罪は終わりを迎え、不法な者は悪から休み、義人は彼に休むであろう。そして、彼は楽園の門を開き、アダムに対する脅迫の剣を取り去るであろう。そして、彼は聖徒たちに命の木から食べることを許し、聖なる霊が彼らの上にとどまるであろう。そして、ベリアルは彼によって縛られ、彼は悪霊を踏みつける力を彼の子供たちに与えるであろう。そして、主はその子供たちを喜び、主はその愛する者を永遠に喜ばれるであろう。そのとき、アブラハム、イサク、ヤコブは喜び、わたしも喜び、すべての聖徒たちは喜びを着るであろう。

19. そして今、我が子らよ、汝らは皆聞いた。それゆえ、汝らは闇か光か、主の律法かベリアルの業か、自ら選びなさい。そして我々は父に答えて言った、「我々は主の前に、主の律法に従って歩みます」。そして父は言った、「主が証人であり、その天使たちも証人であり、私も証人であり、汝らも、汝らの口の言葉についての証人です」。そして我々は答えた、「我々は証人です」。こうしてレビは息子たちに命令することをやめ、足を伸ばして、百三十七歳まで生きた後、先祖たちのもとに集められた。そして人々は彼を棺に納め、その後、ヘブロンでアブラハム、イサク、ヤコブのそばに葬った。

C.4　IV. ユダの遺言：不屈の精神、金銭への愛、そして淫行について。

1. ユダの言葉の写し。彼が死ぬ前に息子たちに語ったこと。彼らは集まって彼のもとに来たので、彼は彼らに言った。「私は父の 4 番目の息子として生まれました。母は私をユダと名付けて、『主は私に 4 番目の息子まで与えてくださったので、私は主に感謝します』と言いました。私は若い頃、機敏で活発で、すべての点で父に従いました。そして、母と母の姉妹を尊敬していました。そして、私が大人になったとき、父ヤコブは私のために祈って言いました。『あなたは王となり、すべての点で繁栄します。』

2. 主は、畑でも家でも、わたしのあらゆる働きに恵みを示された。わたしは雌鹿を捕まえて、父のために肉を調理した。わたしは狩りでノラを捕らえ、平原にいるすべてのものを追い抜いた。わたしは野生の雌馬を追い抜いて、それを捕まえて飼いならした。また、わたしはライオンを殺し、その口から子やぎをひったくった。わたしは熊をその足をつかんで、崖から転がした。もしわたしに襲いかかる獣があれば、犬のように引き裂いた。わたしは野生の猪に遭遇し、狩りで追いつくと、引き裂いた。ヘブロンの豹が犬に飛びかかったので、わたしはそ

の尻尾をつかんで投げ飛ばし、ガザの辺りで犬を粉々に打ち砕いた。わたしは野原で草を食む野牛の角をつかんだ。そしてそれを振り回して気絶させ、私から投げ捨てて殺した。

3. カナン人の二人の王が、我々の群れと多くの民を率いて戦いの陣形を組んで来た時、私は一人でスール王を襲撃し、捕らえ、足を殴り倒して殺した。そしてもう一人の王タプエを、馬に乗ったまま殺し、民を皆追い散らした。アコル王は巨人で、馬に乗ったまま前後に矢を投げていたが、私はこれを殺した。私は六十ポンドの石を投げつけ、彼の馬に投げつけて殺した。そして私はアコルと二時間戦い、彼を殺した。そして彼の盾を二つに裂き、足を切り落とした。そして彼の胸当てを剥ぎ取ると、見よ、彼の仲間八人が私と戦い始めた。そこで私は自分の衣服を手に巻き付けた。わたしは彼らに石を投げつけ、四人を殺し、残りは逃げ去りました。そして父ヤコブは、すべての王の王、身長十二キュビトの巨人、ベリサを殺しました。すると彼らは恐れをなし、わたしたちと戦うのをやめました。ですから父は、わたしが兄弟たちと一緒にいたときは、戦争を心配しませんでした。父はわたしに関する幻を見て、力ある天使がどこへでもわたしについて来て、わたしが打ち負かされないようにするのを見たからです。

4. そして南方では、シェケムの戦争よりも大きな戦争が起こりました。私は兄弟たちと戦列を組み、千人の兵士を追跡し、そのうち二百人と四人の王を殺しました。そして私は城壁の上で彼らに立ち向かい、さらに二人の王を殺しました。こうして私たちはヘブロンを解放し、王たちの捕虜を全員連れ去りました。

5. 翌日、私たちはアレタへ出発しました。アレタは堅固で城壁に囲まれ、近づき難く、私たちを死に至らしめる恐れのある町でした。そこで私とガドは町の東側から、ルベンとレビは西側と南側から近づきました。城壁の上にいた者たちは、私たちが一人きりだと思い、私たちに襲い掛かりました。そこで私たちの同胞は、はしごを使って両側から密かに城壁を登り、町の人々に知られないように入城しました。私たちは剣の刃で町を占領し、塔に避難していた者たちには火を放ち、塔と彼らを奪いました。私たちが出発すると、タフの者たちが私たちの捕虜を襲ったので、私たちは息子たちと共に塔を占領し、タフまで彼らと戦いました。そして彼らを殺し、町を焼き、そこにあるすべてのものを略奪しました。

6. 私がクゼバの水辺にいたとき、ヨベルの人々が戦いにやって来たので、私たちは彼らと戦いました。そして、セロムの彼らの同盟者を殺し、彼らが逃げることも、私たちに襲いかかることも許しませんでした。そして、マキルの人々が私たちの捕虜を奪い取ろうと、5 日目に私たちのところにやって来ました。私たちは彼らを攻撃し、激しい戦いで彼らを打ち負かしました。彼らは軍隊であり、それ自体が強力だったので、私たちは彼らが丘の坂を登る前に彼らを殺しました。そして、私たちが彼らの町に着くと、彼らの女たちが、町が立っている丘の頂上から石を私たちの上に転がしました。そして、私とシメオンは町の後ろに身を隠し、高地を占領し、町全体を完全に破壊しました。

7. そして翌日、二人の王の町が大軍を率いて我々に攻め寄せているとの知らせが我々に届いた。そこで私とダンはアモリ人であると称し、同盟者として彼らの町に入った。そして夜が更けるころに我々の兄弟たちがやって来て、我々は門を開け、すべての人々とその財産を滅ぼし、彼らのものをすべて略奪し、彼らの城壁を三つとも打ち倒した。そして我々は敵の王たちの避難所であるタムナに近づいた。そこで私は傷を負って怒り、丘の頂上まで彼らに向かって突撃した。彼らは石や矢で私を襲った。もし私の兄弟ダンが助けてくれなかったら、彼らは私を殺せただろう。そこで我々は怒りをもって彼らに襲いかかり、彼らは皆逃げ去った。そして彼らは別の道を通

って父に懇願し、父は彼らと和平を結びました。私たちは彼らに危害を加えず、彼らと休戦し、捕虜を全員返還しました。そして私はタムナを建て、父はランバエルを建てました。この戦争が起こったとき、私は 20 歳で、カナン人は私と私の同胞を恐れていました。

8. また、私は多くの家畜を所有し、アドラム人イランを牧者の長としていました。私が彼のところへ行ったとき、アドラムの王バルサンに会い、彼は私たちのために宴会を開きました。彼は私を歓待し、娘のバトシュアを妻として与えてくれました。彼女はエル、オナン、シェラを産みましたが、主が彼ら二人を打たれたので、彼らは子供を持たずに死にました。シェラは生き残り、彼の子供はあなたたちです。

9. メソポタミアのラバンから帰ってきてから、父とわれわれは、父の兄弟エサウとその息子たちとともに、18 年間平和に暮らしました。そして 18 年が経過し、私の生涯の 40 年目に、父の兄弟エサウが大勢の力強い軍勢を率いてわれわれを襲いました。エサウはヤコブの弓に倒れ、セイル山で死にました。イラムナの頂上に上ったところで、彼は殺されました。そしてわれわれはエサウの息子たちを追撃しました。彼らは鉄の壁と青銅の門を持つ町を持っていましたが、われわれはそこに入ることができず、周囲に陣取って包囲しました。20 日経っても彼らがわれわれに門を開けなかったので、私は皆の目の前で梯子を立て、盾を頭に乗せて登り、3 タラントの石で攻撃しました。そして登り、彼らのうちの勇士 4 人を殺しました。翌日、ルベンとガドが侵入し、さらに六十人を殺しました。そして彼らは私たちに和平の条件を求めました。私たちは父の目的を知っていたので、彼らを貢物として受け入れました。そして彼らは、私たちがエジプトに下るまで、小麦二百コル、油五百バト、ぶどう酒千五百セアを与えてくれました。

10. これらのことの後、私の息子エルはメソポタミア出身のアラムの娘タマルを妻に迎えました。エルは邪悪で、カナンの地の者ではないタマルについて疑念を抱いていました。そして三日目に主の使いが夜彼を打ちました。彼は母の悪巧みによって彼女を知ることはありませんでした。彼女から子供をもうけることを望まなかったからです。婚宴の日に私はオナンを彼女にめとりました。彼もまた邪悪で彼女を知りませんでしたが、一年彼女と暮らしました。私が彼を脅すと、彼は母の命令に従って彼女と寝ました。そして彼もまた邪悪で死にました。私はシェラをも彼女に与えたかったのですが、私の妻バトシュアはそれを許しませんでした。彼女はタマルがカナンの娘ではないことを恨んでいたからです。

11. 私はカナンの民族が邪悪であることを知っていたが、若さゆえの思いが私の心を曇らせた。彼女が酒を注ぎ出すのを見たとき、私は酒に酔って騙され、彼女の前に倒れた。私が留守の間に、彼女はカナンの地からシェラを妻として迎えた。私は彼女のしたことを知り、心の中で苦しみながら彼女を呪った。彼女もまた、息子たちの邪悪さの中で死んだ。

12. これらのことの後、タマルは未亡人となって二年が経ち、私が羊の毛を刈りに上って行くことを聞き、花嫁の衣装を身にまとい、町の門の向かいに座った。というのは、結婚しようとしている女は七日間、門のそばで姦淫の行為をしなければならないというのが、アモリ人の掟だからである。そこで私はホゼブの水に酔い、酒のせいで彼女だとはわからず、彼女の美しさが、彼女の着飾った様子によって私を欺いた。そこで私は彼女のところへ寄りかかって、「あなたのところへ入りたい」と言った。すると彼女は、「何をくださいますか」と言ったので、私は彼女に杖と帯と王冠を与え、彼女と寝た。彼女は身ごもった。私は彼女が何をしたのか知らず、彼女を殺そうと思ったが、彼女はひそかに私の誓約書を送って、私を辱めた。わたしが彼女を呼んだとき、わたしが酔って

彼女と寝ていたときに語った秘密の言葉も聞いた。それは主から出たものだったので、わたしは彼女を殺すことができなかった。彼女がひそかにそれをして、他の女から質入れを受けたのかもしれないと思ったからである。しかしわたしは死ぬまで彼女に近づかなかった。イスラエル全土でこの忌まわしいことを行ったからである。また町にいる人々は、花嫁が町にはいないと言った。彼女は他の所から来て、しばらく門に座っていたので、わたしが彼女のところに入ったことはだれにも知られていないと思ったからである。この後、飢饉のため、わたしたちはヨセフのもとにエジプトへ行った。わたしは四十六歳で、七十三年そこに住んでいた。

13. それで今、子供たちよ、私が命じるすべてのことについて、父に聞き従い、私の言うことをすべて守り、主の定めを行ない、主なる神の命令に従いなさい。また、自分の欲望に従って歩んではならず、心の高慢さで空想の思いに従ってはならない。若さの強さを誇ることもいけない。これもまた主の目に悪とされるからである。なぜなら、私は戦いの際、容姿のよい女の顔に欺かれたことがないことを誇りにし、父の妻ビルハのことで兄弟ルベンを非難したので、嫉妬と不品行の霊が私の中に渦巻き、ついに私はカナン人バテシュアと、息子たちの婚約者タマルの前に倒れ、義父に、「父と相談して、あなたの娘をめとろう」と言ったからである。そして彼は王様だったので、娘のために限りない金の蓄えを私に見せてくれました。そして彼は彼女を金と真珠で飾り立て、女らしい美しさで宴会の時に私たちに酒を注がせました。そして酒は私の目を惑わせ、快楽は私の心を盲目にしました。そして私は彼女を愛し、堕落し、主の戒めと私の父祖たちの戒めを破り、彼女を妻に迎えました。そして主は私の心の思いに従って私に報いてくださったので、私は彼女の子供たちに喜びを感じませんでした。

14. さあ、子供たちよ、酒に酔ってはならない。酒は心を真理から遠ざけ、情欲の情を燃え立たせ、目を迷わせるからである。淫らな精神は、酒を心に快楽を与える奉仕者として持っている。この二つは人から力を奪うからである。人が酒を飲んで酔うと、汚れた思いで心を乱して淫行に駆り立て、肉体を肉欲に駆り立てる。そして、欲望の原因があれば、その人は罪を犯しても恥じない。子供たちよ、酒とはそういうものだ。酔っている者はだれも敬わない。見よ、酒はわたしをも迷わせたので、わたしは町の群衆を恥じなかった。わたしはすべての人の目の前でタマルに寄り、大きな罪を犯し、息子たちの恥を覆い隠したからである。その後、私は酒を飲み、神の戒めを敬わず、カナンの女を妻に迎えた。それゆえ、子供たちよ、酒を飲む者は分別を必要とする。酒を飲む際の分別とは、品位を保つ限り飲むべきである。しかし、この限度を超えると、欺瞞の精神が彼の心を攻撃し、彼の意志を働かせる。そして、それは酔っぱらいに汚いことを話させ、違反しても恥じることなく、むしろ自分の不名誉を喜び、自分は良いことをしていると考えるようになる。

15. 淫行を犯し、自分の裸を現す者は、淫行の奴隷となり、その力から逃れることはできない。私もまた、淫行の裸を現したのである。私は、私の杖、すなわち私の部族の支え、私の帯、すなわち私の力、私の冠、すなわち私の王国の栄光を与えた。それから、私はこれらのことを悔い改め、老齢になるまで、酒も肉も摂取せず、喜びも見なかった。そして、神の天使は、女たちが永遠に王と乞食を同様に支配することを示した。そして、女たちは王からその栄光を、勇敢な男からその力を、乞食からは貧しさを支えるわずかなものさえも奪う。

16. 子どもたちよ、それゆえ、酒には節度を守りなさい。酒には四つの悪霊、すなわち（１）欲、（２）憤り、（３）暴動、（４）不道徳な利益の霊が宿っているからです。もしあなたがたが、恥じらいながら、神を畏れて、喜んで酒を飲むなら、あなたがたは生きるでしょう。もしあなたがたが恥じらいながら飲まず、神を畏れなければ、酔いがやって来て、恥じらいが忍び込むからです。しかし、たとえあなたがたが全く飲まなくても、暴言、争い、中傷、神の戒めに対する違反などの罪を犯さないように気をつけなさい。そうすれば、あなたがたは時が来ない

うちに滅びるでしょう。また、酒は神と人の奥義を異邦人に明らかにします。それは、わたしが、神の戒めと父ヤコブの奥義を、神が告げることを禁じたカナンの人バテシュアに明らかにしたのと同じです。そしてワインは戦争と混乱の原因にもなります。

17. 子供たちよ、だから私はあなたたちに命じる。金銭を愛してはならない。また女性の美しさに目を向けてはならない。なぜなら、金銭と美しさのために、私はカナン人バテシュアのもとに迷い込んだからである。私は、この二つのことのせいで、私の同族であるあなたがたが悪に陥ることを知っている。私の息子たちのうちの賢い人々でさえ、彼らが傷つけ、父に対する私の従順さゆえに主が私に与えてくださったユダの王国を衰退させるであろう。私は父ヤコブの言葉に一度も背いたことはなく、彼が命じたことはすべて実行した。そして、私の父の父アブラハムは、私がイスラエルの王となるように祝福し、イサクも同様に私を祝福した。そして私は、王国が私から確立されることを知っている。

18. わたしは義なるエノクの書にも、あなたがたが終わりの日にどんな悪事をなすかを読んだ。それゆえ、わが子らよ、不品行と金銭欲とに気をつけ、父ユダに聞き従いなさい。これらのものはあなたがたを神の律法から引き離し、魂の悟性をくらませ、傲慢を教え、人に隣人への同情心を抱かせないようにする。それらは人の魂からすべての善を奪い、労苦と悩みに縛りつけ、眠りを奪い、肉を食い尽くし、神への供え物を妨げ、祝福を心に留めず、預言者の語ることに耳を傾けず、敬虔の言葉に腹を立てる。神の戒めに反する二つの情熱に仕える者は神に従うことができない。なぜなら、それらがその人の魂をくらませ、その人は昼も夜も同じように歩くからである。

19. 子供たちよ、金銭への愛は偶像崇拝へと導く。なぜなら、金銭によって惑わされると、人々は神でない者たちのことを口にし、金銭を持つ者は狂気に陥るからである。私は金銭のために子供たちを失った。私の肉体の悔い改めと魂の謙虚さ、そして父ヤコブの祈りがなかったら、私は子供を持たずに死んでいたであろう。しかし、私の父祖の神は憐れみ深く慈悲深いので、私が無知でそうしたために私を赦した。欺瞞の君主が私の目をくらませ、私は人として、肉体として無知になり、罪に堕落した。そして私は、自分は無敵だと思っていたが、自分の弱さを知った。

20. ですから、子供たちよ、二つの霊が人間を支配していることを知りなさい。それは、真理の霊と誤りの霊です。そして、その真ん中には、知性の霊があり、知性はそれに属し、望むところへ向かうのです。そして、真理の行いと誤りの行いは、人の胸に記されており、主はそれを一つ一つご存知です。そして、人の行いが主から隠される時はありません。なぜなら、人の胸の骨に、主の前に書き記されているからです。そして、真理の霊は、すべてのことを証言し、すべてのことを告発します。罪を犯す者は、自分の心によって焼かれ、裁判官に顔を上げることができません。

21. そして今、私の子供たちよ、レビを愛しなさい。そうすれば、あなたたちは留まり、彼に逆らって高ぶることはない。そうしないと、あなたたちは完全に滅ぼされてしまうからである。主は私に王国を、彼に祭司職を与え、王国を祭司職の下に置かれた。私に地上のものを、彼に天にあるものを与えられた。天が地よりも高いように、神の祭司職は地上の王国よりも高い。主はあなたたちよりも彼を選んだのは、主に近づき、主の食卓と初穂、すなわちイスラエルの子らの最上のものを食べるためである。あなたたちは彼らにとって海のようになる。海の上で、正しい者と正しくない者が投げ飛ばされ、ある者は捕らえられ、ある者は富むように、あなたたちの間でも、あらゆる人種が共にいて、ある者は危険にさらされ、捕らえられ、ある者は略奪によって富むであろう。支

配者たちは巨大な海の怪物となり、魚のように人間を飲み込む。彼らは自由な息子や娘を奴隷にし、家、土地、家畜、金銭を略奪し、多くの人の肉でカラスやツルを不当に養う。彼らは悪に走り続け、貪欲にますます前進する。そして、嵐のような偽預言者が現れ、すべての正しい人々を迫害する。

22. そして主は彼らに分裂をもたらし、イスラエルには絶え間ない戦争があるでしょう。そして異民族の間では私の王国は終わりを迎えます。イスラエルの救いが来るまで、正義の神が現れるまで、ヤコブとすべての異邦人が平和に休むことができるまで。そして彼は永遠に私の王国の力を守るでしょう。主は私に誓いを立てて、王国は私から、そして私の子孫から永遠に絶えることはないと誓われたからです。

23. 子供たちよ、今、私は多くの悲しみを抱いています。あなたたちが王国に逆らって行う淫らな行い、魔術、偶像礼拝のためです。あなたたちは霊媒をする者たちに従い、娘たちを歌う娘、占い師や迷いの悪魔のための娼婦にし、異邦人の汚れにまみれるでしょう。これらのことのために、主はあなたたちに飢饉と疫病、死と剣、報復の包囲、敵を引き裂くための犬、友人ののののしり、破壊と目の萎縮、子供の虐殺、妻の攫われ、財産の略奪、神殿の炎、あなたたちの国土の荒廃、異邦人の間での奴隷化、そして彼らはあなたたちのうちの何人かを妻のために宦官にするでしょう。あなたがたが謙虚な心で主に立ち返り、悔い改めて、神のすべての戒めに従って歩むならば、主は慈悲と愛をもってあなたがたを訪れ、敵の束縛からあなたがたを救い出してくださるであろう。

24. そしてこれらのことの後、ヤコブから平和のうちに星があなた方の前に昇り、私の子孫から正義の太陽のような人が立ち上がり、人の子らと共に柔和で正義に歩み、その者には罪が見いだされないであろう。そして天が彼の上に開かれ、聖なる父からの聖霊の祝福が注がれるであろう。そして彼はあなた方に恵みの霊を注ぐであろう。そしてあなた方は真実において彼の子らとなり、彼の戒め、初めと終わりに従って歩むであろう。これは至高なる神の枝であり、これはすべての肉なる者にとって命の泉である。その時、私の王国の笏が輝き、あなた方の根から茎が生え、そこから異邦人のための正義の杖が生え、主を呼び求めるすべての者を裁き、救うであろう。

25. これらのことの後、アブラハム、イサク、ヤコブが生き返り、私と私の兄弟たちがイスラエルの君主となり、あなたの王笏となる。第一はレビ、第二は私、第三はヨセフ、第四はベニヤミン、第五はシメオン、第六はイッサカル、というようにすべて順調である。そして主はレビを祝福し、臨在の天使は私、栄光の力はシメオン、天はルベン、地はイッサカル、海はゼブルン、山々はヨセフ、幕屋はベニヤミン、天の光はダン、地の肥沃な部分はナフタリ、太陽はガド、オリーブはアシェルである。そして主の民は一つ、言葉は一つとなる。ベリアルの偽りの霊はもはや存在しない。彼は永遠に火に投げ込まれるからである。そして、悲しみのうちに死んだ者たちは喜びのうちに起き上がり、主のゆえに貧しかった者たちは富み、乏しかった者たちは満たされ、弱かった者たちは強くなり、主のゆえに殺された者たちは命に目覚める。そして、ヤコブの鹿は喜びのうちに走り回り、イスラエルの鷲は喜びのうちに飛ぶ。しかし、不信心な者たちは嘆き、罪人たちはみな泣き、すべての民は永遠に主を讃えるであろう。

26. それゆえ、私の子供たちよ、主の教えをすべて守りなさい。主の道に正しく従う者には希望があるからです。そして彼は彼らに言った。「私は今日、百十九歳で、あなたたちの目の前で死ぬ。だれも私を高価な衣服で埋葬したり、私の内臓を裂いたりしてはならない。それは王たちが行うべきことだ。あなたたちと一緒に私をヘブロンに運んで行きなさい。」ユダはこれらのことを言って眠りについた。彼の息子たちは彼が命じたすべてのとおりに行い、彼を父親たちと一緒にヘブロンに葬った。

C.5　V. イッサカルの遺言、簡素さについて。

1. イッサカルの言葉の記録。彼は息子たちを呼び寄せて言った。「子供たちよ、父イッサカルに聞き従い、主に愛されている者たちよ、私の言葉に耳を傾けなさい。私はヤコブの 5 番目の息子で、恋なすびの報酬として生まれました。ルベンが野から恋なすびを持って来たので、ラケルは彼に会い、それを受け取った。ルベンは泣き、母レアは彼の声を聞いて出てきた。この恋なすびは、アラムの地の水の谷の下の高地で採れる、香りのよいリンゴであった。ラケルは言った。「あなたにはあげません。子供たちの代わりに、私のものになるからです。」リンゴは 2 つあった。レアは言った。「あなたは私の処女の夫をめとったので、それで十分です。これらも取るのですか。」彼女は言った。「あなたの息子の恋なすびの代わりに、今夜ヤコブをあなたのものにしてください。」レアは彼女に言った。「誇ってはならない。自慢してはならない。ヤコブはわたしのもので、わたしは彼の若い時の妻なのだから。」しかしラケルは言った。「どうしてそうなるのでしょう。彼はわたしと最初に結婚し、わたしのために十四年間父に仕えたのです。人の策略と狡猾さが増し、策略が地上で栄えているのに、あなたに何をしたらよいのでしょう。そうでなければ、あなたは今ヤコブの顔を見ることはなかったでしょう。あなたは彼の妻ではなく、策略によってわたしの代わりに彼のところに連れ去られたのです。父はわたしを欺いて、その夜わたしを連れ出し、わたしが彼に会わないようにしたのです。わたしがそこにいたら、こんなことにはならなかったでしょう。」ラケルは言った。「恋なすびを一羽取りなさい。もう一羽は、一晩わたしから雇ってください。」ヤコブはレアと知り合い、彼女はみごもってわたしを産んだ。その報酬のゆえにわたしはイッサカルと呼ばれた。

2. そのとき、主の使いがヤコブに現れて言った、「ラケルは二人の子を産むでしょう。彼女は夫との交わりを拒み、節制を選んだからです。」母レアが夫との交わりのために二つのりんごを手放さなかったなら、彼女は八人の息子を産んでいたでしょう。このために彼女は六人を産み、ラケルは二人を産みました。主は恋なすびのゆえに彼女を訪れられたからです。主は、彼女がヤコブとの交わりを望んだのは、子供を欲するためであって、快楽の欲のためではないことを知っておられたのです。彼女はさらに進んで、もう一つの恋なすびも受けるために、翌日もヤコブを手放しました。それゆえ、主は恋なすびのゆえにラケルの願いを聞き入れられました。彼女はそれを欲したのですが、食べず、そのときいたいと高き方の祭司のもとに持って行き、主の宮でそれをささげたのです。

3. 子どもたちよ、私は成長して、心の正直に歩み、両親や兄弟のために農夫となり、季節に応じて畑の果物を収穫しました。父は私が純真に歩んでいるのを見て、私を祝福してくれました。私は自分の行いに干渉せず、隣人に対して悪意や中傷をしませんでした。私は誰に対しても悪口を言ったり、誰の命をも非難したりせず、自分の目に純真なまま歩みました。それで私は 30 歳のとき妻を迎えました。労働で体力が消耗し、女性との楽しみなど考えたことがなかったからです。労働中は眠って十分でした。父はいつも私の純真さを喜んでいました。私が労働して得たものはすべて、まず祭司の手によって主に捧げ、すべての産物と初物を捧げ、それから父に捧げ、それから自分のために取りました。主は私の手にその恵みを 2 倍に増やしてくださいました。そしてヤコブも、神が私の純粋さを助けてくださったことを知っていました。なぜなら、私は心の純粋さをもって、すべての貧しい人や苦難に陥っている人に、地上の善いものを与えたからです。

4. 子供たちよ、今、私の言うことを聞き、単純な心で歩みなさい。私は、主を喜ばせるすべてのことをそこに見

たからです。単純な人は、金をむさぼらず、隣人を騙さず、さまざまなごちそうを欲しがらず、さまざまな衣服を楽しまず、長生きすることを思い描かず、ただ神の意志を待ち望み、誤りの霊は彼に対して何の力も持ちません。彼は、女性の美しさを心に思い浮かべることができず、腐敗で心を汚さないためです。妬みは彼の思いに入り込むことができず、嫉妬は彼の魂を溶かすことはなく、飽くなき欲望で利益を思い悩むこともありません。彼は、人生の正直さを歩み、単純な心ですべてを見て、世の誤りによる悪意を彼の目に認めず、主の戒めのどれか一つでも曲解されるのを見ないようにします。

5. 子どもたちよ、それゆえ、神の律法を守り、単純さを身につけ、純真に歩みなさい。神の戒めや隣人のことに、好奇心から詮索しすぎず、主と隣人を愛し、貧しい人や弱い人に同情しなさい。背中をかがめて農作業に取り組み、あらゆる農作業で土地を耕し、感謝しながら主に供え物をささげなさい。主は地の初穂で私を祝福してくださったからです。アベルから今に至るまで、すべての聖徒を祝福されたのと同じです。地の肥沃な産物のほかに、あなたに与えられるものはないのです。その果実は労苦して実ります。私たちの父ヤコブは地の恵みと初穂で私を祝福してくれました。ヤコブの子らのうち、レビとユダは主によって栄光を与えられた。主は彼らを選び、一方に祭司職を、他方に王国をお与えになったからです。それゆえ、彼らは従い、あなたの父の純真さに従って歩みなさい。イスラエルに降りかかる誘惑を打ち砕くことはガドに与えられたからです。

6. 我が子らよ、私は知っている、終わりの時に、汝らの息子らは単純さを捨てて貪欲に執着し、純真さを捨てて悪意に近づき、主の戒めを捨ててベリアルに執着し、農業を捨てて邪悪な策略に従い、異邦人の間に散らばり、敵に仕えるであろう。それゆえ、汝らは汝らの子供たちにこれらのことを命じ、彼らが罪を犯したとしても、より早く主のもとに立ち返るようにしなさい。主は慈悲深く、彼らを救い出し、彼らの土地に連れ戻すであろうから。

7. 私は百二十二歳ですが、死に至る罪を犯したことは一度もありません。妻のほかに、私は女性を知りません。私は高慢な目で淫行をしたことはありません。私は惑わされるために酒を飲んだことはありません。私は隣人のどんな良い物も欲しがりませんでした。私は心の中に悪意を持ったことはありません。私の唇から嘘をついたことはありません。誰かが悲しむと、私は彼と一緒に泣き、貧しい人とパンを分け合いました。私は独りで食事をしたことはなく、道標を動かしたこともありません。私は生涯、敬虔と真実を実践しました。私は力を尽くして主を愛し、すべての人を自分の子供のように愛しました。子供たちよ、あなたがたもこれらのことを行いなさい。そうすれば、ベリアルの霊はすべてあなたがたから逃げ去り、悪意のある人の行為はあなたがたを支配することはありません。また、すべての野獣を征服し、天の神が純粋な心で人々と共に歩んでいるのです。

そして彼は、彼をヘブロンに運び、そこの洞窟に彼の父たちと一緒に埋葬するようにと彼らに命じた。そして彼は足を伸ばして、ヤコブの 5 番目の息子として、高齢で死んだ。四肢は健全で、力は衰えることなく、永遠の眠りについた。

C.6　VI. ゼブルンの遺言：同情と慈悲について

1. ゼブルンの記録。これは彼が生涯の百十四年、ヨセフの死後三十二年目に子供たちに命じたものである。彼は彼らに言った。「ゼブルンの子らよ、わたしに聞き従い、父の言葉に心を留めよ。わたしはゼブルン、両親への良

い贈り物である。わたしが生まれたとき、父は縞模様の杖で自分の分を得、羊の群れと牛の群れの両方を非常に多くした。子供たちよ、わたしは生涯、考えのほかは罪を犯したことなど知らない。また、ヨセフに対して無知の罪を犯したこと以外、不正を行ったことも覚えていない。それは、兄弟たちを隠して、父に行われたことを告げなかったからである。わたしはひそかに激しく泣いた。兄弟たちがみな、秘密を漏らす者は剣で殺すと合意していたので、わたしは彼らを恐れたからである。しかし、彼らが彼を殺そうとしたとき、私は涙ながらに彼らにこの罪を犯さないように強く懇願しました。

2. シメオンとガドがヨセフを殺そうとして攻めてきたので、ヨセフはひれ伏して彼らに言った。「兄弟たちよ、わたしをあわれんでください。父ヤコブの腹をあわれんでください。罪のない者の血を流すために、わたしに手を下さないでください。わたしはあなたがたに罪を犯したことはありません。もしわたしが罪を犯したなら、懲らしめをもってわたしを懲らしめてください。しかし、父ヤコブのために、わたしに手を下さないでください。」彼がこれらの言葉を語ると、わたしは彼をあわれみ、泣き始めた。わたしの心はわたしのうちで溶け、わたしの内臓のすべてがわたしの魂のうちで解けた。ヨセフもまた泣き、わたしもまた彼とともに泣いた。わたしの心臓は激しく脈打ち、体の節々は震え、わたしは立っていることができなかった。彼はわたしが彼とともに泣いているのを見て、また彼らが彼を殺そうとして攻めてくるのを見て、彼らに懇願しながらわたしの後ろに逃げた。ルベンは立ち上がって言った。「兄弟たちよ、彼を殺さないで、私たちの先祖が掘って水がなかったこの乾いた穴の一つに投げ込んでしまいましょう。このため主はヨセフを救うために、そこに水が湧き出るのを禁じられたのです。そして主は、彼らがヨセフをイシュマエル人に売るまで、そのように定められたのです。」

3. わたしの子ヨセフの代価のうち、わたしは何の取り分も受け取らなかった。しかし、シメオン、ガド、および他の六人の兄弟は、ヨセフの代価を受け取り、自分たちと妻子のために履物を買って言った。「わたしたちはそれを食べない。それはわたしたちの兄弟の血の代価だから。しかし、彼はわたしたちの王であると言ったから、それを踏みにじろう。彼の夢が何を意味するか見てみよう。」エノクの律法の文書には、兄弟に子孫を残さない者は、その履物を解かれ、その顔につばきをかけられると書いてある。ヨセフの兄弟たちは、兄弟が生きることを望まなかったので、主はヨセフの履物を彼らに解かれた。彼らがエジプトに入ったとき、門の前でヨセフのしもべたちに解かれ、ファラオのやり方でヨセフに敬意を表した。彼らはヨセフに敬意を表しただけでなく、つばきをかけられ、すぐにヨセフの前にひれ伏し、エジプト人の前で恥をかかされました。この後、エジプト人は私たちがヨセフに対して行ったすべての悪事を聞いたからです。

4. これらのことがあった後、彼らは食物を運び出した。私はヨセフを哀れに思い、二日二晩何も食べなかった。ユダは彼らと一緒に食事をせず、穴を見張っていた。シメオンとガドが戻ってきて、ユダを殺すのではないかと恐れたからである。彼らは私が食事をしないのを見て、ヨセフが売られるまで私を見張らせた。ヨセフは三日三晩穴の中に留まり、飢えたまま売られた。ルベンは、自分が留守の間にヨセフが売られたと聞いて、身にまとった衣服を引き裂き、嘆いて言った。「父ヤコブにどんな顔をしたらよいだろう。」そして金を持って商人たちの後を追ったが、だれも見つからなかった。彼らは大通りを離れ、険しい横道を急いで通ったからである。ルベンはその日、食物を食べなかったので、ダンが彼のところに来て言った。「泣くな、悲しむな。父ヤコブに言うべきことがわかった。」われわれは雄やぎを一頭殺し、それにヨセフの着物を浸して、『見よ、これがあなたの息子の着物か』と言おう。彼らは父ヨセフを売ろうとしたとき、その着物をはぎ取って、奴隷の古い着物を着せたのである。シメオンはその着物を持っていましたが、それを渡そうとせず、剣で引き裂こうとしました。ヨセフが生き

ていて、彼を殺さなかったことに腹を立てたからです。そこでわれわれはみな一緒になって彼に対して立ち上がり、『もしそれを渡さないなら、イスラエルでこの悪事をしたのはあなただけだと言うぞ』と言いました。そこで彼はそれを渡したので、彼らはダンが言ったとおりになりました。

5. そして今、我が子らよ、主の命令を守り、隣人に慈悲を示し、すべての人に対して、人だけでなく動物に対しても、同情心を持つようにと、私はあなた方に命じます。このことのために、主は私を祝福してくださいました。私の兄弟が皆病気になったとき、私は病気にならずに済みました。主はそれぞれの目的を知っておられるからです。ですから、私の子らよ、心に同情心を持ちなさい。人が隣人にするように、主も同じようになさるからです。私の兄弟の息子たちは、ヨセフのせいで病気になり、死にかけていました。彼らは心に慈悲を示さなかったからです。しかし、私の息子たちは、あなたがたが知っているように、病気にならずに済みました。また、私がカナンの海岸にいたとき、父ヤコブのために魚を捕りました。そして、多くの魚が海で窒息したとき、私は無傷でとどまりました。

6. 私は海に航海するための船を造った最初の者であった。主が私に海に関する理解と知恵を授けてくださったからである。私は船の後ろに舵を下ろし、真ん中のまっすぐなマストに帆を張った。そしてその船で岸に沿って航海し、エジプトに入るまで父の家のために魚を捕った。そして憐れみの心で、私は自分の魚をすべての外国人に与えた。外国人や病人や老人がいれば、私は魚を煮て上手に調理し、必要に応じてすべての人に提供し、彼らを集めて憐れみの心で扱った。それゆえ、主は私に多くの魚を捕ることを許された。隣人に分け与える者は、主からさらに多くを与えられるからである。私は 5 年間魚を捕り、見かけるすべての人に与え、父の家全体に十分な量を持ってきた。夏には魚を捕り、冬には兄弟たちと一緒に羊を飼った。

7. さて、私がしたことをあなたたちに告げましょう。私は冬に、困窮して裸の人を見て、同情し、家からこっそりと衣服を盗み出して、困っている人に与えました。ですから、私の子供たちよ、神があなたたちに与えてくださったものの中から、すべての人に公平に同情と慈悲を示し、すべての人に善意を持って与えなさい。そして、求める人に与えるものがその時ないなら、慈悲の心でその人を憐れみなさい。私は知っている、私に求める人に与えるものがその時私の手には見つからず、私は彼と一緒に 7 スタロング以上泣きながら歩き、私の心は彼に同情を切望したのです。

8. ですから、子どもたちよ。あなたがたも、すべての人に対してあわれみの心を持ちなさい。そうすれば、主もあなたがたをあわれんでくださるでしょう。終わりの日に、神はそのあわれみを地上に送るからです。どこにでも、神のあわれみの心を見つけるなら、神はそこに住まわれます。人が隣人に対してどれほどあわれみ深いかによって、主も同じようにその人に対してあわれみ深いのです。私たちがエジプトに下ったとき、ヨセフは私たちに対して悪意を抱かなかったが、私を見ると、あわれみに満たされました。子どもたちよ。あなたがたも、彼をよく見て、悪意を抱かずに自分を正し、互いに愛し合いなさい。兄弟を悪く思ってはいけません。これは一致を壊し、すべての親族を分裂させ、心をかき乱すからです。悪意を抱く者はあわれみの心をもたないからです。

9. 水をよく見なさい。水は一緒に流れ、石、木、砂をなぎ払う。しかし、もし多くの流れに分かれるなら、地はそれを吸い上げ、無価値になる。あなたがたも分かれるなら、そのようになる。二つの頭に分かれてはならない。主が造られたものはすべて、一つの頭を持っている。主は二つの肩、二つの手、二つの足を与えたが、すべての肢体は一つの頭に従う。私は先祖の書いたものから、終わりの日にあなたがたは主から離れ、イスラエルの中で

分裂し、二人の王に従い、あらゆる忌まわしい行いを行い、あらゆる偶像を拝み、あなたがたの敵はあなたがたを捕虜にし、あなたがたはあらゆる病と苦難と魂の苦悩を抱えて諸国民の中に住むであろうと学んだ。これらのことの後、あなたがたは主を思い出し、悔い改めるであろう。主はあなたがたを立ち返らせてくださるであろう。主は慈悲深く、同情心に満ち、人の子らに悪を負わせない。なぜなら、彼らは肉であり、誤りの霊が彼らのすべての行いを欺くからである。そしてこれらのことの後、主自らがあなたたちの前で立ち上がり、正義の光となり、癒しと同情がその翼にあるであろう。彼はベリアルから人の子らのすべての捕われ人を救い出し、誤りの霊はすべて踏みつけられるであろう。そして彼はすべての国々を彼への熱意に引き戻すであろう。そしてあなたたちは、主が選ぶ人の姿で神を見るであろう。彼の名前はエルサレムである。そして再びあなたたちは言葉の邪悪さで彼を怒らせ、終わりの時まであなたたちは捨てられるであろう。

10. 子供たちよ、今、私が死ぬことを悲しむな、また私があなたたちのもとを去ることを心配するな。私はもう一度あなたたちの中で、その息子たちの中で統治者として立ち上がる。そして主の律法と父祖ゼブルンの戒めを守った私の部族の中で喜ぶ。しかし、不信心な者には主は永遠の火をもたらし、彼らを代々滅ぼすであろう。私は先祖たちのように安息に急いで行く。しかし、あなたたちは一生、力を尽くしてあなたたちの神である主を畏れなさい。これらのことを言って、彼は静かに眠りについた。息子たちは彼を棺に納め、その後、彼をヘブロンに運び、先祖たちと共に葬った。

C.7　VII. 怒りと嘘に関するダンの遺言。

1. ダンが晩年に息子たちに語った言葉の記録。ダンは生涯の百二十五年目に家族を呼び集めて言った。「ダンの子らよ、私の言葉に耳を傾けよ。父の口から出た言葉に心を留めよ。私は心の中で、また生涯を通して、真実と公正な行いは善であり神に喜ばれること、また嘘と怒りは悪であることを証明してきた。なぜならそれらは人にあらゆる悪を教えるからである。子供たちよ、私は今日、あなたたちに告白する。私は心の中で、誠実で善良な人であったヨセフの死を喜んだ。また、ヨセフの父が私たちよりも彼を愛していたので、ヨセフが売られたことを喜んだ。嫉妬と虚栄の霊が私に言った。「あなたも彼の息子だ」。するとベリアルの霊の一人が私に働きかけて言った。「この剣を取り、それをもってヨセフを殺せ。父が殺されたとき、父もあなたを愛するであろう。これは、豹が子やぎを食い尽くすように、わたしもヨセフを食い尽くそうという、わたしの忠告の怒りの霊である。しかし、わたしたちの父ヤコブの神は、わたしが彼をひとりで見つけることのないように、わたしの手に彼を渡さず、イスラエルで二つの部族が滅ぼされるような不義を行うことをわたしに許さなかった。

2. そして今、子供たちよ、私は死に瀕しており、真実を告げます。あなたたちが偽りの心と怒りの心を抑え、真実と寛容を愛さなければ、あなたたちは滅びるでしょう。子供たちよ、怒りには盲目があり、憤慨している人は誰に対しても真実を知りません。なぜなら、たとえそれが父や母であっても、敵のように扱い、たとえそれが兄弟であっても、それを知らず、たとえそれが主の預言者であっても、彼に従わず、たとえそれが正しい人であっても、彼を顧みず、友人を認めないからです。怒りの心は偽りの網で彼を取り囲み、彼の生まれながらの目を盲目にし、偽りによって彼の心を暗くし、彼自身が作った視力を与えます。では、彼は何で彼の目を囲むのでしょうか。心の憎しみで。そして彼は兄弟に対してねたみの心を与えます。

3. 子供たちよ、怒りは有害である。なぜなら、怒りは魂そのものにとって魂のようになるからである。そして怒りは怒っている人の体を自分のものにし、その魂を支配し、体に自分の力を与えて、あらゆる悪事を働かせる。そして魂が何かをするときはいつでも、魂は見たことがないので、行われたことを正当化する。したがって、怒っている人が力のある人であれば、その怒りには三倍の力がある。一つ目は彼の家来たちの力と助けによるものであり、二つ目は彼の怒りによるものであり、それによって彼は不正を説得し、打ち負かす。そして三分の一は彼自身の体の性質と彼自身の性質を持ち、悪事を働く。そして怒っている人は弱いが、それでも彼は性質によるものの二倍の力を持っている。なぜなら怒りは常にそのような人を悪事に助けるからである。この霊は常にサタンの右に嘘をつき、その行いが残酷と嘘によって行われるようにするのです。

4. だから、怒りの力はむなしいと悟りなさい。怒りはまず言葉で刺し、次に行為で怒っている人を強くし、厳しい懲罰でその心をかき乱し、こうして激しい怒りでその魂をかき立てるのです。ですから、だれかがあなた方を非難しても、怒ってはいけません。また、だれかがあなたを良い人だとほめても、喜びを感じたり見せたりして、浮かれたり浮かれたりしてはいけません。なぜなら、怒りはまず聞く人を喜ばせ、理解力をかき立てて怒りの根拠を理解させるからです。それから、怒りながら、自分が怒っているのは当然だと思うのです。子どもたちよ、あなたがたが損失や破滅に陥ったら、激しく動揺しなさい。なぜなら、この精神こそが、人々に失われたものを欲しがらせ、その欲望に燃え上がらせるからです。あなたがたが進んで損失を被っても、腹を立ててはいけません。なぜなら、彼は腹を立てて嘘をつき、怒りを起こすからです。怒りと嘘は二重の害悪である。彼らは互いに話し合って心をかき乱す。魂が絶えずかき乱されると、主はそこから離れ、ベリアルがそれを支配する。

5. それゆえ、私の子供たちよ、主の戒めを守り、主の律法を守りなさい。そして、怒りから離れ、偽りを憎みなさい。そうすれば、主はあなたたちのうちに住み、ベリアルはあなたたちから逃げ去るでしょう。互いに真実を語りなさい。そうすれば、情欲と混乱に陥ることはないでしょう。平和の神がいるので、平和でいられるでしょう。そうすれば、あなたたちに戦争は起こりません。生涯を通じて主を愛し、真心で互いに結び合いなさい。私は、終わりの日に、あなたたちが主から離れ、レビを怒らせ、ユダと戦うであろうことを知っています。しかし、あなたたちは彼らに勝つことはできません。主の天使が両者を導くからです。イスラエルは彼らによって立つからです。あなたたちが主から離れるときはいつでも、あなたたちはすべての悪に歩み、異邦人の忌まわしい行いを行い、不敬虔な女たちと交わるでしょう。誤りの霊が、あらゆる悪意をもって、あなたがたのうちに働くであろう。わたしは義人エノクの書で読んだが、あなたがたの君はサタンであり、不品行と高慢の霊がみなレビに服従し、レビの子らを罠にかけ、主の前に罪を犯させるであろう。そしてわたしの子らはレビに近づき、すべてのことにおいて彼らとともに罪を犯すであろう。ユダの子らは貪欲になり、ライオンのように他人の財産を略奪するであろう。それゆえ、あなたがたは彼らとともに捕らわれて連れ去られ、そこでエジプトのすべての災害と、異邦人のすべての悪意を受けるであろう。しかし、あなたがたが主に立ち返るとき、あわれみを受け、主はあなたがたに平和を呼びかけながら、その聖所にあなたがたを導き入れるであろう。そして、ユダ族とレビ族の中から主の救いがあなたがたのために起こるであろう。そして、彼はベリアルと戦い、我々の領土に勝利の復讐を与えるであろう。そして、彼はベリアルから捕虜、聖徒たちの魂を取り去り、不従順な心を主に向けさせ、主に呼び求める人々に永遠の平和を与えるであろう。そして、聖徒たちはエデンで休み、義人は永遠に神の栄光となる新しいエルサレムで喜ぶであろう。そして、もはやエルサレムは荒廃に耐えず、イスラエルは捕虜にされないであろう。なぜなら、主はそこにいて、人々の間に住み、イスラエルの聖なる方が謙虚さと貧困の中で彼らを統治するからである。そして、彼を信じる者は、天で真実に統治するであろう。

6. そして今、我が子らよ、主を畏れ、サタンとその霊に気をつけなさい。そして神と、あなたたちのために執り成しをする天使に近づきなさい。なぜなら、彼はイスラエルの平和のために神と人との間の仲介者だからです。彼は敵の王国に立ち向かうでしょう。それゆえ、敵は主を呼び求める者すべてを滅ぼそうと躍起です。なぜなら、イスラエルが信じる日に、敵の王国は終わることを彼は知っているからです。そして平和の天使はイスラエルを強め、悪の極みに陥らないようにするでしょう。そしてイスラエルの罪の時に、主は彼らから離れて、御心を行う者を追いかけます。彼の天使の誰に対しても、彼のようなことはありません。そして彼の名前はイスラエルのあらゆる場所と異邦人の間にあるでしょう。救い主。ですから、我が子らよ、身を守りなさい。すべての悪行から離れ、憤りとすべての偽りを捨て、真実と寛容を愛しなさい。また、父から聞いたことを子供たちにも伝えなさい。異邦人の父があなたがたを受け入れてくださるためです。父は真実で、寛容で、柔和で、へりくだった方であり、その行いによって神の律法を教えられるからです。ですから、すべての不義から離れ、主の律法の正義を固く守りなさい。そして、私を先祖の近くに葬ってください。

7. そして、これらのことを言うと、彼は彼らに口づけをし、長い眠りについた。そして彼の息子たちは彼を埋葬し、その後、彼らは彼の骨をアブラハム、イサク、ヤコブのそばに運び上げた。しかし、ダンが彼らに預言したように、彼らは神の律法を忘れ、彼らの相続地、イスラエルの血統、そして彼らの親族から疎外されるだろうと、その通りになった。

C.8 VIII. 自然の善良さに関するナフタリの遺言。

1. ナフタリの遺言の記録、彼が生涯の百三十二年目に死ぬときに定めた事柄。七月四日に息子たちが集まったとき、彼はまだ健康だったので、彼らのために祝宴を開き、大いに楽しんだ。朝になって目が覚めたあと、彼は彼らに「わたしは死にそうだ」と言ったが、彼らは信じなかった。そこで彼は主をほめたたえ、昨日の祝宴のあとで死ぬことを断言した。それから彼は息子たちに言い始めた。「子供たちよ、聞きなさい。ナフタリの息子たちよ、父の言葉を聞きなさい。わたしはビルハから生まれた。ラケルは策略を巡らし、自分の代わりにビルハをヤコブに与え、彼女はラケルの膝でわたしを産んだので、わたしはナフタリと呼ばれた。ラケルはわたしを愛した。わたしは彼女の膝で生まれたからである。私がまだ幼く、体が弱かったころ、彼女は私に口づけして、「ああ、私の胎内にいる時から、あなたのような兄弟が見たいものです」と言ったものでした。ヨセフも、ラケルの祈りのとおり、すべての点で私と似た者となりました。私の母はビルハといい、リベカの乳母デボラの兄弟ロテウスの娘で、ラケルと同じ日に生まれました。ロテウスはアブラハムの家系の人で、神を畏れるカルデア人で、自由な身分の高貴な人でした。彼は捕虜となり、ラバンに買われました。ラバンは彼にはしためアエナを妻として与えました。彼女は女の子を産み、彼が捕虜となった村の名にちなんでジルパと名付けました。次に彼女はビルハを産み、「娘は新しいものを欲しがっています。生まれるとすぐに、乳房を欲しがったのです」と言いました。

2. そして、私は鹿のように足が速かったので、父ヤコブは私をあらゆる用事と使節に任命し、鹿のように祝福を与えた。陶工が器の内容を知っていて、その中に粘土を運ぶように、主は霊に応じて肉体を造り、肉体の能力に応じて霊を植え付ける。そして、両者は髪の毛の 3 分の 1 でも欠けることはない。いと高き方の被造物はすべて、重さ、量り、規則に従っているからである。陶工がそれぞれの器の用途を知っていて、それが何に十分であ

るかを知っているように、主は肉体がどこまで善行を行えるか、いつ悪行を始めるかを知っておられる。主が知らない創造物や考えはない。なぜなら、主はすべての人を自分のイメージに従って創造したからである。人の力は人の働きと同じであり、人の心は人の働きと同じであり、人の目的と同じである。神の律法においても、ベリアルの律法においても、その心と口は同様であり、その目と眠りは同様であり、その魂と言葉は同様である。光と闇、見るものと聞くものの区別があるように、男と男、女と女の区別もある。顔やその他の類似のものには、何かに優劣があると言うべきではない。神はすべてのものを秩序正しく善く造られた。五感は頭にあり、首は頭に結び付けられ、髪は美しさのために、心臓はさらに理解のために、腹は胃の分割のために、菖蒲は健康のために、肝臓は怒りのために、胆汁は苦味のために、脾臓は笑いのために、手綱は狡猾さのために、腰は力のために、肋骨は収容のために、背は強さのために、などである。ですから、子供たちよ、神を畏れて善行に励みなさい。軽蔑したり、時宜にかなわない無秩序なことは何もしてはいけません。目に聞くように命じても、聞くことができないのと同じように、暗闇の中では光の働きをすることはできないのです。

3. それゆえ、あなたがたは、過度の行為によって自分の行いを堕落させたり、空虚な言葉で自分の魂を欺いたりしようと熱望してはならない。なぜなら、あなたがたが心の清らかさをもって沈黙を保つなら、神の意志を堅く保ち、悪魔の意志を捨てることができるからである。太陽と月と星は秩序を変えない。それと同じように、あなたがたも、自分の行いが無秩序なときに神の法を変えてはならない。諸国は迷い、主を捨て、秩序を変え、石や木に従い、誤った霊に従った。しかし、わが子らよ、あなたがたはそうであってはならない。大空、地、海、そしてすべての創造物において、主がすべてを造られたことを知り、その性質を変えたソドムのようになることのないようにしなさい。同じように、見張り人もまた、その性質を変えた。主は洪水のときに彼らを呪い、彼らのために地を荒廃させ、人が住まず、実りのない所とした。

4. 子供たちよ、これらのことを私は言う。なぜなら、私はエノクの聖なる書物で、あなたがた自身も主から離れ、異邦人のすべての悪事に従って歩み、ソドムのすべての不義を行うと読んだからである。そして主はあなたがたを捕囚にし、そこであなたがたは敵に仕え、すべての苦難と苦難に覆われ、ついに主はあなたがたをみな滅ぼすであろう。そしてあなたがたは衰え、少数になった後、あなたがたは立ち返って、あなたがたの神である主を認めるであろう。そして主は、その豊かな慈悲によって、あなたがたを自分の土地に連れ戻すであろう。そして、彼らは父祖の土地に帰った後、再び主を忘れ、悪事を働くであろう。そして主は彼らを全地の面に散らすであろう。そして主の慈悲が来るまで。主は、遠くにいる者にも近い者にも、すべて正義を行い、慈悲を示す人である。

5. 私の人生の 40 歳のとき、私は幻の中で、エルサレムの東にあるオリーブ山に太陽と月が止まっているのを見ました。そして、私の父の父であるイサクが私たちに言いました。「それぞれ自分の力に応じて走ってそれらをつかみなさい。それらをつかむ者は、太陽と月を手に入れるでしょう。」そこで私たちは皆一緒に走りました。レビは太陽をつかみ、ユダは他の者よりも先に月をつかみ、彼らも彼らとともに持ち上げられました。レビが太陽のようになったとき、ある若者が彼に 12 本のしゅろの枝を与えました。ユダは月のように明るくなり、その足元には 12 の光線がありました。そしてレビとユダは走って、お互いをつかみました。すると、見よ、地に雄牛がいて、2 本の大きな角があり、背中に鷲の翼がありました。私たちはそれをつかもうとしたが、できませんでした。ヨセフは我々より先に進み、彼を捕えて、彼とともに高い所に登った。そして私はそこにいたので見たが、見よ、聖なる書物が我々に現れてこう言っていた。「アッシリア人、メディア人、ペルシア人、エラム人、ゲラカイ人、カルデア人、シリア人は、イスラエルの十二部族を捕虜として所有するであろう。」

6. そしてまた七ヶ月後、私は父ヤコブがヤムニアの海辺に立っているのを見た。私たち息子たちも彼と一緒にいた。すると見よ、一隻の船が乾いた肉を満載して通り過ぎて行った。水夫も水先案内人もいなかった。その船には「ヤコブ」と書いてあった。父は私たちに「船に乗り込もう」と言った。私たちが船に乗り込んだとき、激しい嵐と大風の暴風が起こり、舵を取っていた父は私たちから逃げ去った。私たちは暴風に巻き込まれ、海の上を流され、船は水で満たされ、大波に打たれてほとんど粉々になった。ヨセフは小舟に乗って逃げ、私たちはみな十二の板に分かれ、レビとユダは一緒にいた。こうして私たちはみな遠くまで散らばってしまった。それからレビは荒布をまとい、私たち全員のために主に祈りました。すると嵐がやむと、船はすぐに平穏なように陸に着きました。そして、見よ、私たちの父ヤコブがやって来て、私たちは心を合わせて喜びました。

7. 私は父にこの二つの夢を話しました。すると父は私に言いました。「これらの事は、イスラエルが多くの苦難に耐えた後、時が来れば必ず成就する。」すると父は私に言いました。「私はヨセフが生きていると信じている。主が彼をあなたと共に数えておられるのをいつも見ているからだ。」そして父は泣きながら言いました。「わが子ヨセフよ、あなたは生きている。しかし私はあなたを見ない。あなたもあなたを生んだヤコブを見ない。」そして父はこれらの言葉を聞いて私たちも泣かせました。私は彼が売られたと告げようと心に燃えましたが、兄弟たちを恐れました。

8. 子供たちよ、見よ、私は終わりの時をあなたたちに示し、イスラエルですべてのことが実現するであろうことを伝えた。それゆえ、あなたたちも自分の子供たちに命じて、レビとユダに結び付けなさい。ユダを通してイスラエルに救いが起こり、彼によってヤコブは祝福されるからである。彼の部族を通して、神が地上の人々の間に住み、イスラエルの血統を救うのが見られるであろう。そして神は異邦人の中から義人を集めるであろう。子供たちよ、あなたたちが善いことをするなら、人々も天使たちもあなたたちを祝福するであろう。そして神はあなたたちを通して異邦人の間で栄光をあらわし、悪魔はあなたたちから逃げ去り、野獣はあなたたちを恐れ、天使たちはあなたたちから離れないであろう。人が子供をよく育てれば、その人はそれをよく覚えておくであろう。同様に、良い行いは神によく覚えられるであろう。しかし、善を行わない者は、人々や天使から呪われ、神は彼によって異教徒の間で辱められ、悪魔は彼を自分の道具とし、すべての野獣は彼を支配し、主は彼を憎むでしょう。律法の戒めは二つあり、賢明に実行されなければなりません。男には妻を抱く時があり、祈りのためにそれを控える時があります。このように、二つの戒めがあり、順序を守って実行しないと、罪をもたらします。他の戒めについても同様です。ですから、神にあって賢く、また賢明であり、戒めの順序とすべての仕事の掟を理解しなさい。そうすれば、主はあなたがたを愛されるでしょう。

9. そして彼は何度も彼らにそのような言葉を命じた後、彼の骨をヘブロンに移し、彼の先祖たちと一緒に埋葬するように彼らに勧めた。そして彼は楽しく食べて飲んでから、顔を覆って死んだ。そして彼の息子たちは父ナフタリが命じたすべてのことをそのまま行った。

C.9　IX. 憎しみに関するガドの遺言。

1. ガドの遺言の記録、彼が生涯の百二十七年目に息子たちに語ったこと。「私はヤコブの七番目の息子で、羊の群れを飼うことに勇敢でした。私は夜、羊の群れを見張りました。ライオン、狼、豹、熊、あるいはどんな野獣でも、囲いにやって来ると、私は追いかけて、手でその足をつかみ、振り回して気絶させ、二スタロングの向こうへ投げ飛ばして殺しました。ヨセフは私たちと一緒に三十日間ほど羊の群れを飼っていましたが、体が弱くなり、暑さのために病気になりました。そして、彼はヘブロンの父のもとに戻りました。父はヨセフを愛していたので、ヨセフをそばに寝かせました。ヨセフは父に、ジルパとビルハの息子たちが、ユダとルベンに知られずに、家畜の最良のものを殺して、それを食べていたことを告げた。ヨセフは、私が熊の口から子羊を取り出し、熊を殺したのを見たからである。私はその子羊を殺したが、それが生きられないのが悲しかったので、私たちはそれを食べた。そして父に告げた。私はヨセフがエジプトに売られる日まで、そのことで彼に対して憤っていた。そして憎しみの心が私の中にあり、ヨセフに会うことも、彼の話を聞くことも望まなかった。ヨセフは、ユダに知られずに羊の群れを食べたことを、面と向かって私たちを叱責した。そして、彼が父に告げたことは何でも、父は信じた。

2. 子供たちよ、私は今、自分の罪を告白する。私は何度も彼を殺したいと思った。なぜなら、私は死ぬほど彼を憎んでいたし、彼に対して慈悲の心は全くなかったからである。さらに、私は彼の夢のせいで彼をさらに憎んだ。そして、子牛が地から草を食い尽くすように、私は彼を生ける者の地から食い尽くそうとした。そこで、私とユダは彼を金貨三十枚でイシュマエル人に売り、そのうち十枚を隠し、二十枚を兄弟たちに見せた。このように、私は貪欲さから彼を滅ぼすことに全力を尽くした。そして、私の父祖の神は、私がイスラエルで不義を行わないように、彼を私の手から救い出した。

3. そして今、私の子供たちよ、正義を行うために真理の言葉と、いと高き方の律法すべてに耳を傾けなさい。憎しみの心によって迷わないようにしなさい。それは人のすべての行いにおいて悪であるからです。人が行うことはすべて、憎む者が忌み嫌うものです。主の律法を行っても、主を称賛しません。主を畏れ、正しいことを喜びとしても、主を愛しません。彼は真実を軽蔑し、自分の道を正しく整える人をねたみ、悪口を言い、傲慢さを愛します。なぜなら、憎しみが彼の魂を盲目にしたからです。私もヨセフを見ました。

4. ですから、子供たちよ、憎しみには気をつけなさい。憎しみは主ご自身に対して不義をなすからです。憎しみは隣人を愛することに関する主の戒めの言葉を聞こうとせず、神に対して罪を犯すのです。兄弟がつまずくと、憎しみはすぐにそれをすべての人に告げ知らせようとし、そのことで彼が裁かれ、罰せられ、殺されることを切望します。また、それが奴隷であれば、主人に訴え、殺すことが可能なら、あらゆる苦難をもって彼に対して陰謀を企てます。憎しみはねたみから生じ、善行で栄えている人々を見たり聞いたりすると、ねたみでいつもむかつきます。愛が死者を生き返らせ、死刑に定められた者を呼び戻すように、憎しみは生きている者を殺し、小さなことで罪を犯した者を生かしておこうとはしません。というのは、憎しみの霊はサタンと共に働き、すべての事において性急な心をもって人々を死に至らしめるからである。しかし、愛の霊は神の律法と共に働き、忍耐をもって人々を救いに至らせるからである。

5. 憎しみは悪です。なぜなら、憎しみは絶えず嘘をつき、真実に逆らって語るからです。また、小さなことを大きなものとし、暗黒を光のように気に留め、甘いものを苦いと呼び、中傷、戦争、暴力、あらゆる悪の極みを教え、心を悪魔の毒で満たします。子供たちよ、あなたがたが憎しみから逃れ、主の愛に固く従うように、私は経験からこれらのことを言います。正義は憎しみを追い出し、謙遜は憎しみを滅ぼします。正しく謙遜な人は、他人に責められるのではなく、自分の心に責められるので、悪を行うことを恥じます。主がその人の意図を見ておられるからです。彼は、いと高き者への畏れが憎しみに打ち勝つので、だれに対しても悪口を言いません。主を怒らせることを恐れて、だれに対しても、いや、思いの中でも悪事を行ないません。私はヨセフについて悔い改めた後、これらのことをようやく学びました。なぜなら、敬虔な心による真の悔い改めは不信仰を滅ぼし、暗闇を追い払い、目を開かせ、魂に知識を与え、精神を救いに導くからです。そして、悔い改めを通して、人から学ばなかったことを知るのです。神は私に心の病をもたらされました。父ヤコブの祈りが介入しなかったなら、私の魂は間違いなく去っていたでしょう。人は罪を犯したことにより、同じ罪によって罰せられるのです。私の心は容赦なくヨセフに向けられていたので、私の心も容赦なく苦しみ、11 か月間裁かれました。それは、ヨセフが売られるまで私がヨセフをねたんでいた期間と同じ期間でした。

6. そして今、子供たちよ、あなたがたは互いに兄弟を愛し、心から憎しみを捨て、行いにおいても、言葉においても、また魂の思いにおいても互いに愛し合いなさい。なぜなら、父の前では、私はヨセフと平和に話したが、出て行ったとき、憎しみの霊が私の心を暗くし、私の魂は彼を殺そうと動かされたからである。それゆえ、心から互いに愛し合いなさい。もし誰かがあなたに対して罪を犯したなら、優しくそれを告げ、憎しみの毒を追い出し、あなたの魂に偽りを育ててはならない。そして、もし彼が告白して悔い改めたなら、彼を許しなさい。もし彼がそれを否定したとしても、彼と争ってはならない。彼が誓いを立てて、あなたがたが二重に罪を犯すことのないために。争っている最中に、見知らぬ人にあなたがたの秘密を聞かれてはならない。彼が憎んで敵となり、あなたに対して大きな罪を犯すことがないために。なぜなら、彼はしばしばあなたと偽りの話をしたり、悪意を持ってあなたをだまして、自分自身から毒を奪ったりするからである。ですから、もし彼がそれを否定し、有罪とされ、恥をかかされ、黙らされたなら、彼を誘惑してはいけません。否定する者は悔い改めて、もうあなたに対して悪事を働かなくなります。そうです、彼はあなたを尊敬し、あなたを恐れ、あなたと平和に暮らすでしょう。しかし、もし彼が恥知らずで、自分の悪事を続けるなら、それでも心から彼を許し、神に復讐してください。

7. 誰かがあなたよりも繁栄しても、悲しんではならない。その人のためにも祈りなさい。その人が完全に繁栄するように。おそらく、それはあなたにとっても益となるでしょう。そして、もし彼がさらに栄えたとしても、すべての肉なる者は死ぬことを忘れず、ねたんではなりません。そして、すべての人に善と益とを与えてくださる神に賛美をささげなさい。主の裁きを求めなさい。そうすれば、あなたの心は安らぎ、彼は平安を得るでしょう。また、私の父の兄弟エサウのように、人が悪事によって富んだとしても、ねたんではならない。主の終わりを待ちなさい。主は、悪人からその恩恵を取り上げる、あるいは悔い改める者にはそれを残しておく、あるいは悔い改めない者には永遠の罰を留保するからです。ねたみを持たず、すべてのことにおいて主に感謝する貧しい人は、すべての人の中で富んでいます。なぜなら、その人は人々に対して悪いねたみを持たないからです。ですから、あなた方は心から憎しみを捨て去り、正しい心をもって互いに愛し合いなさい。

8. また、あなたがたも、これらのことを自分の子供たちに告げて、ユダとレビを敬いなさい。主は彼らからイスラエルの救い主を立てられるからです。あなたがたの子供たちは最後には彼らから離れ、主の前に悪と悪事と腐

敗のうちを歩むことを私は知っています。彼はしばらく休んでから、また子供たちに言いました。「子供たちよ、父の言うことを聞いて、私を先祖のところに葬ってください。」そして彼は足を引き締めて、安らかに眠りについた。そして五年後に彼らは彼を運び上げ、先祖たちとともにヘブロンに葬った。

C.10　X. 悪徳と美徳の二つの側面に関するアシェルの遺言。

1. アシェルの遺言の記録、彼が生涯の百二十年目に息子たちに語ったこと。彼がまだ健在であったとき、彼は彼らに言った。「アシェルの子らよ、父の言うことを聞きなさい。私は神の目に正しいことをことごとくあなたたちに告げよう。神は人の子らに二つの道、二つの心、二つの行い、二つの場所、二つの目的を与えた。それゆえ、すべてのものは二つずつあり、一つは他の一つに対応している。善と悪の二つの道があり、それによって私たちの胸の中の二つの心がそれを区別する。それゆえ、魂が善を喜ぶなら、そのすべての行いは義にかなっており、罪を犯してもすぐに悔い改める。というのは、彼は義に心を定め、悪を捨てて、すぐに悪を打ち倒し、罪を根絶するからである。しかし、もし彼の心が悪に傾くなら、彼のすべての行いは悪意に満ち、彼は善を追い払い、悪を受け入れ、ベリアルに支配され、たとえ彼が善を働いても、それを悪に歪めてしまう。なぜなら、彼が善を行おうとして始めるときはいつでも、彼は自分の行いの終わりを悪に導くからである。悪魔の宝は悪霊の毒で満たされているのを知っているからである。

2. そこで、彼は言う、「善を語る魂が悪のためにあり、その行いの結末は害悪につながる」。悪に身を投じる者に対して同情を示さない人がいる。これには二つの側面があるが、全体としては悪である。また、悪を行う者を愛する人もいる。彼は悪のために死ぬことさえ選ぶので、同じように悪の中に住んでいます。これに関しては、二つの側面があることは明らかだが、全体としては悪の行いである。愛はあるが、それは悪を隠す邪悪にすぎず、善のように見える名前を持っているが、行いの結末は悪に向かいがちである。また、盗み、不正を行い、略奪し、騙し、さらに貧者を憐れむ人もいる。これもまた二つの側面があるが、全体としては悪である。彼は隣人を騙して神を怒らせ、いと高き者に対して偽りの誓いを立て、なおかつ貧しい者を憐れむ。律法を命じる主を軽視し、怒らせ、貧しい者を元気づける。彼は魂を汚し、肉体を陽気にする。彼は多くの人を殺し、少数の者を憐れむ。これにも二重の面がある。また別の者は姦淫と淫行を犯し、食物を断つ。しかし断食で悪事を働き、その権力と富で多くの人を堕落させ、その極度の邪悪さから戒めを実行する。これにも二重の面があるが、全体としては悪である。このような人々は豚や野ウサギのようだ。彼らは半分は清いが、実際には汚れている。神は天の石板でこのように宣言した。

3. 子どもたちよ、それゆえ、彼らのように善と悪の二つの顔を身につけてはならない。善のみに固執しなさい。善の中に神は安息し、人々はそれを求めるからである。悪から逃れ、善行によって悪魔を滅ぼしなさい。二面性のある者は神に仕えるのではなく、自分たちの欲望に仕え、ベリアルと自分たちに似た人々を喜ばせようとするからである。

4. 善人は、たとえ顔が真っ白な人でも、二面性のある人からは誤りを犯していると思われるかもしれませんが、神の前には正しいのです。多くの者は悪人を殺すことで二つの行いをしています。善で悪を行うのです。しかし、

全体は善です。なぜなら、神は悪を根こそぎにし、滅ぼしたからです。ある人は、情け深い者を憎み、姦淫する者や盗む者には悪を行う。これもまた二面性がありますが、全体は善です。なぜなら、彼は主の模範に従って、良いと思われるものを悪いものといっしょに受け取らないからです。また別の人は、口を汚し、魂を汚さないために、暴れまわる者たちと良い日々を過ごそうとはしません。これもまた二面性がありますが、全体は善です。なぜなら、そのような人は雄鹿や雌鹿に似ているからです。なぜなら、野生の状態では汚れているように見えますが、実際にはまったく清いからです。なぜなら、彼らは神に対する熱心さをもって歩み、神が憎み、戒めによって禁じているものを避け、善から悪を遠ざけているからです。

5. 子どもたちよ、それゆえ、すべてのことには二つあり、一方が他方に対抗し、一方が他方に隠されているのが分かるでしょう。死は命に、不名誉は栄光に、夜は昼に、暗黒は光に取って代わられます。すべてのものは昼の下にあり、正しいものは命に取って代わられます。それゆえ、永遠の命も死を待っています。真実が偽りであるとか、正しいことが間違っているなどと言うことはできません。すべての真実は光の下にあるように、すべてのものは神の下にあるからです。私は生涯でこれらすべてのことを実証し、主の真実から迷い出ることなく、いと高き方の戒めを究め、全力を尽くして真摯に善に歩みました。

6. 子どもたちよ、あなたがたも主の戒めに心を留め、真摯な態度で真実に従いなさい。裏表のある者は二重の罰を受けるからです。人々と争う誤りの霊を憎みなさい。主の律法を守り、善のように悪に心を留めず、本当に良いことに目を向け、主のすべての戒めを守り、主に心を向け、主に安らぎなさい。人々が目指す目的が彼らの正義を明らかにし、主の天使とサタンの天使を区別するからです。魂が悩まされて去るなら、それは欲望と悪行において仕えた悪霊に苦しめられるでしょう。しかし、平和の天使を静かに喜びをもって知っているなら、それは生きている間に彼を慰めます。

7. 子供たちよ、主の天使を知らず、永遠に滅びたソドムのようになってはならない。なぜなら、あなたがたが罪を犯し、敵の手に渡され、あなたがたの国は荒れ果て、あなたがたは地の四隅に散らされることを私は知っているからだ。そして、あなたがたは散らされて、役に立たない水のように無視されるが、いと高き方が地を訪れるときまで、いと高き方が人の姿で来られ、人々とともに食べたり飲んだりし、平和のうちに水で竜の頭を砕く。いと高き方はイスラエルとすべての国々を救うであろう。神は人の姿で語る。それゆえ、あなたがたはこれらのことを子供たちに告げ、彼らが神に背かないようにしなさい。私は天の石板で、あなたがたが実際に神に背き、神に対して不敬虔な行いをし、神の律法ではなく人の戒めに従うだろうと読んだからである。それゆえ、あなたたちは私の兄弟ガドやダンのように散らされ、自分の土地、部族、言語を知らないでしょう。しかし、主はアブラハム、イサク、ヤコブのために、その深い憐れみの希望を通して、信仰のうちにあなたたちを集めます。

8. ヨセフはこれらのことを彼らに告げて、彼らに命じて言った。「わたしをヘブロンに葬ってください。」ヨセフは安らかに眠り、そして死んだ。その後、ヨセフの息子たちは命じたとおりに、ヨセフを運び上げ、父祖たちとともに葬った。

C.11　XI. 禁酒に関するヨセフの遺言。

1. ヨセフの遺言の記録。彼は死に際、息子たちと兄弟たちを呼び集めて言った。「子供たち、兄弟たちよ、イスラエルに愛されたヨセフに聞き従い、息子たちよ、父に耳を傾けなさい。私は生涯、ねたみと死を見てきたが、主の真実に迷い込まなかった。この兄弟たちは私を憎んだが、主は私を愛された。彼らは私を殺そうとしたが、私の父祖の神は私を守られた。彼らは私を穴に落としたが、いと高き方は私を引き上げてくださった。私は奴隷として売られたが、主は私を自由にしてくださった。私は捕らわれの身となったが、主の力強い手が私を助けてくださった。私は飢えに苦しめられたが、主自らが私を養ってくださった。私は独りだったが、神は私を慰めてくださった。私は病気だったが、いと高き方が私を訪れてくださった。私は牢獄にいたが、救い主は私に恵みを示し、縛られていたが、彼は私を解放してくださった。中傷の中で、主は私の訴えを弁護し、エジプト人の苦々しい言葉の中で、主は私を救い出し、ねたみと欺瞞の中で、主は私を高めてくださった。

2. こうしてファラオの料理長ポティファは私に家を託し、私は恥知らずな女と格闘し、彼女と罪を犯すよう私をそそのかしました。しかし、私の父イスラエルの神は燃える炎から私を守ってくださいました。私は牢獄に入れられ、殴られ、嘲られました。そして主は牢番の目に私を憐れんでくださいました。主は暗闇の中でも、束縛の中でも、苦難の中でも、困窮の中でも、主を畏れる者を決して見捨てられません。神は人のように恥じることなく、人の子のように恐れることなく、地上に生まれた者のように弱くもなく、押しのけられることもないからです。むしろ、どこにいても近くにおられ、いろいろな方法で慰め、魂の目的を試すために少しの間立ち去ってくださいます。十の試練で主は私を承認し、私はそのすべてに耐えました。忍耐は強力な魅力であり、忍耐は多くの良いものを与えるからです。

3. エジプト人は何度私を死をもって脅したことでしょう。何度私を罰に引き渡し、それから呼び戻し、私が彼女と行動を共にしないときには脅したことでしょう。そして彼女は私に言いました。「もしあなたが私に身を捧げ、私たちの主人となるなら、あなたは私と私のすべてのものの主人となるでしょう。」そこで私は父ヤコブの父祖たちの言葉を思い出し、私の部屋に入り、主に祈りました。そしてその七年間断食し、主人には贅沢な暮らしをしているように見えました。なぜなら、神のために断食する者は顔の美しさを得るからです。誰かが私にワインを与えても、私はそれを飲みませんでした。そして三日間断食し、食べ物を取って貧しい人や病人に与えました。そして私は朝早く主を求め、メンフィスのエジプト人の女のために泣きました。彼女は私を絶えず悩ませ、夜になると私を訪ねるふりをして私のところに来たからです。最初、彼女には男の子がいなかったため、私を息子とみなすふりをしました。そこで私は主に祈り、彼女は男の子を産みました。それで彼女はあなたのために私を息子として抱きしめましたが、私はそれを知りませんでした。最後に、彼女は私を淫行に引き込もうとしました。そしてそれを知ったとき、私は死ぬほど悲しみました。彼女が出て行ったとき、私は我に返り、彼女の悪意と欺瞞を見たので、多くの日彼女のために嘆きました。そして私は、彼女がその邪悪な欲望から離れるかもしれないと、至高者の言葉を彼女に告げました。

4. 彼女は聖人のような言葉で何度私をへつらい、その話には陰険さがあり、夫の前では私の貞潔さを褒め称えながら、二人きりになると私を破滅させようとした。彼女は公然と私を貞潔だと褒め称え、ひそかに私に言った。「夫を恐れるな。夫はあなたの貞潔さを確信しているから、たとえ誰かが私たちのことを話しても、彼は決して信

じないだろう。」これらすべてのことのために、私は荒布をまとって地面に横たわり、主が私をエジプト人から救い出してくださるように神に懇願した。しかし、彼女は何も説得できず、主の言葉を知るために、教えを求めて再び私のところへ来た。そして彼女は私に言った。「もしあなたが私に偶像を捨てさせようとするなら、私に説得されなさい。私は夫に偶像から離れるよう説得し、私たちはあなたの主の律法に従って歩みます。」そこで私は彼女に言った。「主は、主を敬う者が汚れた状態になることを望まれず、また姦淫する者を喜ばれない。」彼女は自分の邪悪な欲望を成し遂げようと願いながら、黙っていた。そして私は、主が私を彼女から救い出してくださるようにと、断食と祈りにさらに専念した。

5. また別の時に彼女は私に言った、「もしあなたが姦淫をしないなら、私は夫を殺し、あなたを正式に夫として迎えよう」。私はこれを聞いて、着物を裂いて言った、「婦人よ、主を畏れなさい。そして、この悪事を行ってはなりません。そうしないと、あなたは完全に滅ぼされてしまいます。私はあなたの不敬虔な考えをすべての人に告げ知らせるでしょう。」彼女は恐れて、彼女の悪事を誰にも告げないようにと頼みました。そして彼女は、贈り物で私を慰め、人の子らが喜ぶものをすべて私に送って、立ち去りました。

6. そして彼女は魔法をまぶした食物を私に送る。そしてそれを運んできた宦官が来た時、私は見上げて、恐ろしい男が私にその皿と共に剣を渡しているのを見た。そして私は彼女の計画が私の魂を欺くためのものであることを悟った。そして彼が出て行くと、私は泣いた。そして私はその食物も彼女の他の食物も味わわなかった。それである日の後、彼女は私のところに来て食物を見て、私に言った、「これは何だ、あなたが食物を食べなかったとは？」そこで私は彼女に言った、「それはあなたがそれを死で満たしたからだ。なぜあなたは『私は偶像に近づかず、主だけに近づく』と言ったのか？」それゆえ今、私の父の神が天使によってあなたの邪悪さを私に明らかにしたことを知ってください。そして私はあなたがそれを見て悔い改めるかもしれないなら、あなたを有罪にするためにそれを隠しておいたのです。しかし、不信心者の邪悪さは、貞潔に神を敬う者たちには何の力もないことを、あなたが知るように、私はそれを取って彼女の前で食べ、こう言った。「私の父祖の神、アブラハムの天使が私とともにいますように。」すると彼女は私の足もとにひれ伏して泣きました。そこで私は彼女を起こして戒め、彼女はもうこの悪行はしないと約束しました。

7. しかし、彼女は淫らなことをしようと心に決めていたので、ため息をつき、顔を伏せました。夫は彼女を見て、「なぜ顔を伏せているのか」と言いました。彼女は、「私は心が痛み、私の魂のうめきが私を苦しめています」と言いました。彼は病気ではない彼女を慰めました。それから、夫がまだ外に出ている間に彼女は私のところに駆け込んできて、「もしあなたが私に同意しないなら、私は首を吊るか、井戸か崖に身を投げます」と言いました。ベリアルの霊が彼女を悩ませているのを見たとき、私は主に祈り、彼女に言いました、「なぜあなたは罪に悩まされ、動揺しているのか。覚えておいてください、もしあなたが自殺すれば、あなたの夫の妾であなたのライバルであるセトンがあなたの子供たちを殴り、あなたの記念碑を地球から破壊するでしょう。そして彼女は私に言った、「それでは、あなたは私を愛しておられるのです。私の命と子供たちを気遣ってくださって、それだけで私には十分です。私は自分の欲望をかなえられると期待しています。」そして彼女は、私がこのように言ったのは私の神によるのであって、彼女によるのではないことを知らなかった。なぜなら、もし人が邪悪な欲望の激情に屈したなら、そのときは彼女もそうであったように、それによって奴隷になったのだから。そして、彼が征服した激情に関して何か良いことを聞くと、彼はそれを自分の邪悪な欲望に受け入れるのである。

8. 子供たちよ、あなたがたに告げます。彼女が私から去ったのは午後六時ごろでした。私はその日ずっと主の前

にひざまずき、夜通し祈り続けました。そして夜明けごろ、私は泣きながら起き上がり、エジプト人から解放されるよう祈りました。そしてついに、彼女は私の衣服をつかみ、無理やり私を引きずり、彼女と交わろうとしました。彼女が狂って無理やり私の衣服をつかんでいるのを見て、私は裸で逃げました。そして彼女は夫に私を偽って告発し、エジプト人は私を自分の家の牢獄に投げ込みました。そして翌日、エジプト人は私を鞭打ってから、自分の家の牢獄に送りました。それゆえ、私が鎖につながれていたとき、エジプトの女は怒りのあまり病気になり、私が暗闇の住まいにいる間、主を賛美して歌い、ただ口実でエジプトの女から解放されたというだけで、喜びの声で喜び、私の神を讃えているのを聞いていた。

9. 彼女は何度私に使いを送ってこう言ったことか。「私の望みをかなえてくれれば、私はあなたを束縛から解き放ち、時間を暗闇から解放してあげよう !」しかし私は心の中でさえ彼女に傾倒しなかった。なぜなら神は、秘密の部屋で気ままに気ままに暮らす人よりも、暗闇の洞窟で貞潔に断食する人を愛されるからである。貞潔に暮らし、また栄光も望む人は、いと高き神がそれが彼にとって有益であると知っていれば、私に与えたのと同様に、彼にもこれを授けてくださる。彼女は病気であったにもかかわらず、何度思いがけない時に私のところに降りてきて、私が祈る声に耳を傾けてくれたことか！そして私は彼女のうめき声を聞いても黙っていた。というのは、私が彼女の家にいるとき、彼女は私が彼女の前にひれ伏すように、腕や胸や足をさらけ出すのが常だったからである。彼女は非常に美しく、私の欺瞞のために見事に飾られていたからである。そして主は彼女の策略から私を守ってくれました。

10. 子どもたちよ、忍耐と断食を伴う祈りが、どんなに大きなことを成し遂げるか、あなたがたは知っているはずです。ですから、あなたがたが忍耐と謙遜の心をもって節制と純潔を追い求めるなら、主はあなたがたのうちに住んでくださるでしょう。主は節制を愛しておられるからです。いと高き方が住まわれる所ならどこでも、人がねたみや奴隷状態や中傷に陥っても、その人のうちに住まわれる主は、その人の節制のゆえに、悪から救い出すだけでなく、わたしと同じように、その人を高め、栄光を与えます。人は、行いにおいても、言葉においても、思いにおいても、あらゆる点で守られているからです。兄弟たちは、父がわたしを愛しておられたことを知っています。わたしは心に高ぶることはなく、子どもであったにもかかわらず、思いの中で神を畏れていました。わたしは、すべてのものは過ぎ去ることを知っていたので、自分を律し、兄弟たちを敬っていました。彼らを恐れて、私は売られたときも黙っていた。そして、イシュマエル人に、自分がヤコブの息子で偉大で力強い人物であることを明かさなかった。

11. だから、あなたがたも、自分の行いにおいて神を畏れ、兄弟を敬いなさい。主の教えを実践する人は皆、主に愛されるからです。私がイシュマエル人とともにインドコルピタイのところへ行ったとき、彼らは私に尋ねたので、私は兄弟たちに恥をかかせないように、彼らの家の奴隷であると答えました。すると、彼らの長男が私に言いました、「あなたは奴隷ではありません。あなたの外見がそれを明らかにしています」。そして彼は私を殺そうとさえ脅しました。しかし私は彼らの奴隷であると答えました。さて、私たちがエジプトに入ったとき、彼らは私をめぐって争いました。彼らのうちのだれが私を買い取って連れて行くべきかと。それで、彼らが商品を持って戻ってくるまで、私が彼らの商人のところにいるエジプトにとどまることは、すべての人にとって良いことでした。そして主は私にその商人の目に好意を与え、彼は自分の家を私に託しました。主はわたしの力によって彼を祝福し、銀と金を増し加えられた。わたしは三か月と五日間、彼とともにいた。

12. そのころ、ポティファルのメンフィス人の妻が、非常に盛大に通りがかり、私に目を留めた。宦官たちが私

のことを彼女に告げたからである。彼女は夫に、商人がヘブライ人の若者を利用して金持ちになったことを告げて言った。「確かに、カナンの地からその若者が盗み出されたと聞いています。それで、今、彼に裁きを下し、その若者を連れて行ってあなたの管理人にしなさい。そうすれば、ヘブライ人の神があなたを祝福するでしょう。天からの恵みが彼の上にあるからです。」

13. ポティファルは彼女の言葉に納得し、商人を連れて来るように命じて言った。「私が聞いている話は、ヘブル人の国から魂を盗み出し、奴隷として売っているということですが、どういうことですか。」そこで商人はひれ伏して懇願して言った。「ご主人様、何をおっしゃるのか私にはわかりません。」商人は言った。「それでは、あなたのヘブル人のしもべはどこから来たのですか。」彼は言った。「イシュマエル人が帰って来るまで、彼を私に託したのです。」しかし商人はそれを信じず、彼の服を脱がせて打つように命じた。しつこく言い張るので、ポティファルは言った。「若者を連れて来なさい。」私は連れて来られて、宦官の長に敬意を表した。彼はファラオに次いで第三位の位で、すべての宦官の長であり、妻子や側室を持っていたからである。そして彼は私を彼から引き離して、「あなたは奴隷か、それとも自由人か」と言ったので、私は「奴隷です」と答えた。すると彼は私に、「あなたはだれの奴隷か」と聞いたので、私は「イシュマエル人です」と言った。すると彼はまた私に、「どうして彼らの奴隷になったのか」と言ったので、私は「彼らはカナンの地から私を買い取ったのです」と言った。しかし彼は私を信じず、「あなたは嘘をついている」と言って、私の服をはぎ取って鞭打つように命じた。

14. メンフィスの女は私が殴られているのを窓から見ており、夫に人をやってこう言わせた。「あなたの判決は不当です。あなたは、盗まれた自由人を、まるで罪人であるかのように罰するのです。」そして私が殴られているのに他の答えをしなかったので、彼は、その子の持ち主が来るまで、私たちを監禁するように命じた。すると彼の妻は彼に言った。「なぜあなたは、この高貴な子を監禁したままにしておくのですか。むしろ、この子は解放されて、あなたのところにお仕えすべきです。彼女は私が罪を犯したいと思っているのを見たいと思ったのです。私はこれらのことをすべて知らなかったのです。」そこで彼は妻に言った。「証拠が示されないうちに他人のものを奪うのは、エジプト人の習慣ではありません。」彼は商人についても私についても、私は投獄されなければならないと言い、こう言った。

15. 24 日後、イシュマエル人がやって来て、父ヤコブが私のことで嘆いていると聞いて、私に言った。「奴隷なのに泣いているなんて、どうして言ったのですか。私たちは、あなたがカナンの地の勇士の息子で、あなたの父上が荒布をまとってあなたのために悲しんでいることを知りました。私はまた泣きたかったのですが、兄弟たちに恥をかかせないように、我慢しました。そして、私は「知りません。私は奴隷です」と言いました。すると彼らは、私が彼らの手にあるのを悟られないように、私を売ろうと相談しました。ヤコブが彼らに致命的な復讐をするのではないかと恐れたからです。ヤコブは主に対しても人に対しても勇敢であると聞いていたからです。そこで商人は彼らに言った。「ポティファルの裁きから私を解放してください。」そこで彼らは来て、わたしを尋ねて言った。「わたしたちは彼を金で買いました。それで彼はわたしたちを追い払ったのです。」

16. そのとき、メンフィスの女は夫にわたしを指差して、わたしを買うように勧めました。彼らがわたしを売ろうとしていると聞いたからです、と彼女は言いました。そこで彼女は宦官をイシュマエル人のところに遣わして、わたしを売るように頼みましたが、宦官は彼らと取引する気はなかったので、引き返しました。宦官は彼らを試した後、奴隷に彼らが高額の値段を要求していることを女主人に知らせました。そこで彼女は別の宦官を遣わして言いました。「たとえ彼らが金二ミナを要求しても、金を惜しむことなく、その少年を買ってここに連れてき

なさい。」そこで彼はわたしのために金八十枚を彼らに渡し、女主人にはわたしのために百枚が贈られたと言いました。それを見たわたしは宦官を罰しないように黙っていました。

17. 子供たちよ、兄弟たちに恥をかかせないように、私がどれほど大きなことを耐え忍んだか、あなたがたもわかっているでしょう。あなたがたも互いに愛し合い、寛容に接して互いの欠点を隠しなさい。神は兄弟の一致と、愛に適う心の目的を喜ばれるからです。そして、私の兄弟たちがエジプトに着いて、私が彼らの金銭を返し、彼らを責めず、まことに、彼らを慰め、ヤコブの死後、彼らをさらに愛し、彼が命じたすべてのことを非常に豊かに行ったことを知ったとき、彼らは驚きました。なぜなら、私は彼らがほんの些細なことでも苦しむことを許さず、私の手にあるすべてのものを彼らに与えたからです。彼らの子供たちは私の子供たちであり、私の子供たちは彼らの召使いのようでした。彼らの命は私の命であり、彼らのすべての苦しみは私の苦しみであり、彼らのすべての病気は私の弱さでした。わたしの土地は彼らの土地であり、わたしの計画は彼らの計画であった。わたしは、自分の世俗的な栄光のゆえに、彼らの間で傲慢に自分を高めたのではなく、彼らの間では最も小さい者の一人としてあった。

18. 子供たちよ、あなたがたも主の戒めに従って歩むなら、主はあなたがたをそこに高め、世々限りなく良いもので祝福してくださいます。もし誰かがあなたがたに悪を行おうとしているなら、善行によってその人のために祈りなさい。そうすれば、主によってすべての悪から救われるでしょう。見よ、あなたがたも知っているように、私は辛抱強く主人の娘を妻に迎えました。そして、彼女とともに金百タラントが与えられました。主が私に仕えるために与えられたのです。また、主はイスラエルの美しい花にまさる花のような美しさを私に与え、私がすべての点でヤコブに似ていたので、力と美しさにおいて老齢まで私を保たせてくださいました。

19. 子供たちよ、わたしが見た幻をあなたがたも聞きなさい。十二頭の鹿が草を食んでいたが、九頭は国中に分かれて散らされ、三頭も同様であった。またわたしは、ユダから亜麻布の衣を着た処女が生まれ、彼女から汚れのない子羊が出た。その左にはライオンのような者がいた。すべての獣がこれに襲いかかったが、子羊はこれらを打ち負かし、滅ぼし、踏みつけた。そして、天使たちも人々も全地も彼のために喜んだ。そしてこれらのことは時が来れば、終わりの日に起こるであろう。それゆえ、子供たちよ、主の戒めを守り、ユダとレビを敬いなさい。彼らから神の子羊があなたたちのために起き、恵みによってすべての異邦人とイスラエルを救うからである。彼の王国は永遠の王国であり、揺るがされることはないからである。しかし、ヨギたちの間での私の王国は、夏の後には現れない監視者のハンモックのように終わりを迎えるだろう。

20. 私は、私の死後、エジプト人があなたたちを苦しめるであろうことを知っている。しかし、神はあなたたちの訴えを引き受け、あなたたちを、あなたたちの先祖に約束されたところへ導くであろう。しかし、あなたたちは私の骨を携えて登りなさい。私の骨が引き上げられるとき、主は光の中にあなたたちとともにおられ、ベリアルはエジプト人とともに暗闇の中にいるであろう。そして、あなたたちの母ジルパを携えて登り、ビルハの近く、競馬場のそば、ラケルのそばに寝かせなさい。そして、彼はこれらのことを言い終えると、足を伸ばして、長い眠りについた。そして、イスラエルのすべて、エジプトのすべてが、大いなる嘆きをもって彼を嘆いた。というのは、彼はエジプト人を自分の体のように思いやり、親切にし、あらゆる仕事、助言、事柄において彼らを助けたからである。

C.12　XII. 純粋な心に関するベンジャミンの遺言。

1. ベニヤミンが百二十歳になってから、その息子たちに語った言葉の記録。彼は彼らに口づけして言った。「アブラハムが百歳でイサクを産んだように、私もヤコブに産まれた。ラケルが私を産んだとき死んでしまったので、乳が出なかった。それで、彼女のはしためビルハに乳を飲ませた。ラケルはヨセフを産んだ後、十二年間不妊であったが、十二日間断食して主に祈り、みごもって私を産んだ。父はラケルを深く愛し、彼女から二人の息子が生まれるのを見たいと祈った。それで私は永遠の子と呼ばれた。それがベニヤミンである。」

2. それで私がエジプトへ行ったとき、兄のヨセフが私を認めて、私に言った、「彼らは父に何と言って私を売ったのか」。私は彼に言った、「彼らはあなたの着物を血で濡らして送り返し、『これはあなたの息子の着物か』と言ったのです」。彼は私に言った、「その通りだ、兄弟よ。イシュマエル人が私を捕らえたとき、彼らのうちのひとりが私の着物をはぎ取り、帯を締めさせ、私を鞭打ち、逃げろと命じたのです。そして彼が私の着物を隠そうと立ち去ったとき、ライオンに出会い、彼を殺しました。それで彼の仲間は恐れて、私を仲間に売り渡しました。

3. 子供たちよ、あなたがたも、天の神である主を愛し、その戒めを守り、善良で聖なる人ヨセフに従いなさい。そして、あなたがたが私を知っているように、あなたがたの心を善に向けなさい。心が善い人は、すべてのことを正しく見ます。主を畏れ、隣人を愛しなさい。ベリアールの霊があなたがたをあらゆる厄介な邪悪に誘い込むとしても、厄介な邪悪はあなたがたを支配することはないでしょう。ヨセフが私の兄弟ヨセフを支配しなかったのと同じです。どれほど多くの人が彼を殺そうとしたことでしょう。そして神は彼を守られました！神を畏れ隣人を愛する者は、神の畏れによって守られているので、ベリアールの空中の霊によって打たれることはありません。また、人や獣の策略によって支配されることもありません。なぜなら、彼は隣人に対する主の愛によって助けられているからです。というのは、彼は私たちの父ヤコブに、私たちの兄弟のために祈ってほしいと懇願し、主がヨセフに関して彼らが企てた悪を彼らに負わせないようにしてくださるようにと願ったからです。そしてヤコブは叫びました。「わが子ヨセフよ、あなたは父ヤコブの心を勝ち取ったのです。」そして彼は彼を抱きしめ、2時間口づけして言いました。「あなたのうちに、神の子羊、すなわち世の救い主についての天の預言が成就するであろう。彼は汚れのない者として背く者たちに引き渡され、罪のない者として、異邦人とイスラエルの救いのために、契約の血によって不信心な者たちのために死刑に処せられ、ベリアルと彼に仕える者たちを滅ぼすであろう。」

4. 子どもたちよ、善人の目的を知っているか。善良な心で彼の憐れみに倣い、栄光の冠をかぶりなさい。善人は暗い目をしていない。彼はすべての人に慈悲を示す。たとえ彼らが罪人であっても、彼に関して悪を企んでいても。善を行う者は善なる方に守られて悪に打ち勝ち、義人を自分の魂のように愛する。誰かが栄光を受けても、彼はねたまない。誰かが富んでも、彼はねたまない。誰かが勇敢であれば、彼は彼を称賛し、彼は心の静かな人を信頼し称賛する。彼は貧しい人に慈悲を示し、弱い人に親切にし、神を讃美する。神を畏れる者を盾で守るかのように、彼は神を愛する人を助け、いと高き方を拒む者を戒めて立ち返らせる。善良な心の恵みを持つ者を、彼は自分の魂のように愛する。

5. 我が子らよ、もしあなたがたが善良な心を持っているなら、邪悪な者もあなたがたと平和に暮らし、放蕩者も

あなたがたを敬い、善に転じるであろう。貪欲な者はその過度の欲望をやめるばかりでなく、その貪欲の果実を苦しむ者に与えるであろう。あなたがたが善行をするなら、汚れた霊さえもあなたがたから逃げ去るであろう。まことに、獣さえも恐れてあなたがたから逃げ去るであろう。善行に対する尊敬の念が心にあれば、暗闇は彼から逃げ去るからである。もし誰かが聖なる人を傷つけるなら、彼は悔い改めるであろう。聖なる人はののしる者に憐れみを示し、黙っているからである。もし誰かが義なる魂を裏切るなら、そして義なる人は祈りながらもしばらく謙虚になるであろうが、その後間もなく、私の兄弟ヨセフがそうであったように、はるかに栄光に満ちた姿で現れるであろう。

6. 善良な人の心は、ベリアルの霊の欺瞞の力に屈しない。なぜなら、平和の天使が彼の魂を導くからである。彼は、腐敗するものに情熱的に目を向けず、快楽を欲して富を集めない。彼は快楽を喜ばず、隣人を傷つけず、食物で自分を甘やかさず、自分の目の高慢さで誤りを犯さない。なぜなら、主が彼の分だからである。善良な心は、人の栄光と不名誉を認めず、どんな悪意も嘘も、戦いも悪口も知らない。なぜなら、主が彼の中に住み、彼の魂を照らし、彼はいつでもすべての人に対して喜ぶからである。善良な心には、祝福と呪い、侮辱と名誉、悲しみと喜び、静けさと悩み、偽善と真実、貧困と富の二つの言葉がない。しかし、それはすべての人々に関して純粋で腐敗しない一つの性質を持っています。それは二重の視覚も二重の聴覚もありません。なぜなら、彼が行うこと、話すこと、見るすべてのことにおいて、主が彼の魂を監視していることを知っており、彼は神と人々から非難されないように彼の心を清めているからです。しかし、ベリアルのすべての仕事は二重であり、単一ではありません。

7. 子どもたちよ、それゆえ、ベリアルの悪行から逃れよ。それは従う者に剣を与える。そして剣は七つの悪の母である。まずベリアルによって心が宿り、最初に嫉妬が起こり、次に絶望が起こり、次に苦難が起こり、次に捕らわれの身となり、次に窮乏が起こり、次に困難が起こり、次に第四に捕らわれの身となり、第五に窮乏が起こり、第六に悩みが起こり、第七に荒廃が起こった。それゆえカインもまた神によって七つの復讐に引き渡された。なぜなら主は百年ごとに一つの災いをカインにもたらしたからである。彼は二百年苦しみ、九百年目には義なる兄弟アベルのゆえに洪水で荒廃した。カインは七百年、レメクは七十七倍の年で裁かれた。なぜなら、兄弟を憎む嫉妬においてカインに似た者たちは、永遠に同じ罰で裁かれるからである。

8. ですから、子供たちよ、あなたたちも悪行やねたみ、兄弟への憎しみを避け、善と愛に固く付きなさい。愛に純粋な心を持つ人は、不品行な女に目を向けません。その人の心には汚れがありません。神の霊がその人の中に宿っているからです。太陽が糞や泥の上に輝いても汚れず、むしろその両方を乾かして悪臭を追い払うように、純粋な心は、地上の汚れの中に閉じ込められても、むしろ人を高め、汚れることはありません。

9. さて、私は、義なるエノクの言葉から、あなたたちの間にも悪行があるだろうと推測します。あなたたちはソドムの淫行と同じ淫行を犯し、少数の者を除いて皆滅び、女たちと過度の情欲を抱くでしょう。そして主の王国はあなたたちの間にはないでしょう。主はすぐにそれを取り去られるからです。しかし、神の神殿はあなたたちの分として建てられ、あなたたちの間で栄光に輝くでしょう。なぜなら、主はそれを取り、十二部族とすべての異邦人がそこに集められ、いと高き方がその独り子の訪問によって救いを送るまでです。そして、主は神殿の正面に入り、そこで主は侮辱され、木の上に上げられます。そして神殿の幕が裂かれ、神の霊が火が注ぎ出されるように異邦人の上に降りるでしょう。そして彼は墓からよみがえり、地から天に昇るであろう。そして私は彼が地上ではいかに卑しく、天ではいかに栄光に満ちているかを知っている。

10. ヨセフがエジプトにいたとき、私は彼の顔と容貌を見たいと切に願っていた。そして父ヤコブの祈りによって、昼間に目覚めている間に、彼の完全な姿を見た。子供たちよ、私が死につつあることを知りなさい。だから、互いに真実と正義を行い、公平を尽くして忠実に行いなさい。そして主の律法と戒めを守りなさい。私はすべての相続財産の代わりに、これらのことをあなたたちに教える。だから、あなたたちもそれを永遠の所有物として自分の子供たちに与えなさい。アブラハムもイサクもヤコブもそうしました。彼らはこれらすべてのものを相続財産として私たちに与えて言った、「主がすべての国民にその救いを現すときまで、神の戒めを守りなさい」。そのとき、あなたたちはエノク、ノア、セム、アブラハム、イサク、ヤコブが喜びにあふれて右から立ち上がるのを見るであろう。そのとき、私たちも、部族ごとに立ち上がり、謙遜な人の姿で地上に現れた天の王を礼拝する。そして地上で彼を信じる者は皆、彼とともに喜ぶ。そしてそのとき、すべての人が立ち上がる。ある者は栄光に、ある者は恥辱に。そして主はまずイスラエルを、彼らが主に対して行った不正のゆえに裁かれる。主が救世主、肉体をとった神として現れたとき、彼らは彼を信じなかったからである。そしてそのとき、主はすべての異邦人を、主が地上に現れたときに信じなかったすべての異邦人を裁かれる。そして主は、異邦人の選ばれた者たちのうちのイスラエルを、ちょうどミデヤン人のうちのエサウを叱責したように叱責される。エサウは同胞を欺き、淫行と偶像礼拝に陥らせた。彼らは神から離れ、主を畏れる者たちのうちの子供のようにはならなかった。しかし、あなたがたが主の御前に聖潔のうちに歩むなら、あなたがたは再びわたしに希望を持ち、イスラエルは皆主のもとに集められるであろう。

11. そして、私はもはや、あなたがたの略奪のゆえに、貪欲な狼と呼ばれず、主の働き手として、善を行う者に食物を分配する者と呼ばれるであろう。そして、後の時代に、私の子孫の中から、主に愛される者が立ち上がるであろう。彼は地上で主の声を聞き、新しい知識をもってすべての異邦人を照らし、知識の光をもって救いのためにイスラエルに突入し、狼のようにそれを引き裂き、異邦人の会堂にそれを与えるであろう。そして、世の終わりまで、彼は異邦人の会堂とその指導者たちの間で、すべての人の口にある音楽の旋律のようにいるであろう。そして、彼はその働きと言葉の両方が聖書に書き記され、永遠に神に選ばれた者となるであろう。そして、彼のために、私の父ヤコブは私にこう教えた。「彼はあなたの部族の欠けているものを満たすであろう。」

12. そして彼は言い終えると、こう言った。「子供たちよ、私はあなたたちに命じる。私の骨をエジプトから運び出し、私の父祖たちのいるヘブロンに私を葬りなさい。」こうしてベニヤミンは百二十五歳で亡くなり、人々は彼を棺に納めた。イスラエルの人々がエジプトを去ってから九十一年目に、彼らとその兄弟たちは、彼らの父祖たちの骨をカナンと呼ばれる場所にひそかに運び出し、ヘブロンの父祖たちの足元にそれを葬った。そして彼らはカナンの地から戻り、エジプトの地を去る日までエジプトに住んでいた。

付録 D

パピアス断片

Fragments of Papias

Early Christian Writings （初期キリスト教文書）サイトの Fragments of Papias （パピアス断片）に関してまとめたページ中の Fragments of Papias（ロバーツ・ドナルドソンによる英訳）から Google Chrome の翻訳機能で日本語化し、その後多少修正したものです。

主の神託の解説からのパピアスの断片。

I.

[パピアスの著作は一般に流通している 5 冊で、これらは「神の託宣の解説」と呼ばれています。イレナエウスは、これらが彼が書いた唯一の作品であると述べ、次のように書いています。「これらのことについては、ヨハネの教えを聞き、ポリュカルポスの友人であった古代人パピアスの著書の 4 冊目に証言があります。5 冊は彼によって書かれたからです。」イレナエウスはこのように書いています。さらに、パピアス自身も、著書の序文で、自分は聖なる使徒の教えを聞いたり目撃したりしたのではないことを明らかにしています。しかし、彼は、私たちの宗教の真理を、使徒たちと知り合いだった人々から受け取ったことを次のように語っています。]

しかし、私は、長老たちからいつ受けたか注意して教え、記憶の中に大切に蓄えた教えを、私の解釈とともに書き留めることを惜しみません。同時に、その教えが真実であることをあなたに保証するためです。なぜなら、私は、群衆のように、多くを語る者ではなく、真理を教える者を、また、奇妙な戒めを語る者ではなく、主が信仰に与えた戒めを、真理そのものから発して語る者を喜んだからです。そこで、長老たちに付き添っていた者が来たら、私は彼らの言ったことを詳しく尋ねました。アンデレやペテロが何を言ったか、フィリポやトマス、ヤコブ、ヨハネ、マタイ、あるいは他の主の弟子たちが何を言ったか、主の弟子であるアリスティオンと長老ヨハネが何を言ったか、などです。というのは、私は、本から得られるものよりも、生きた、いつまでも残る声から来るものの方が、私にとって有益だと考えていたからです。

II.

[初期のキリスト教徒は] 敬虔な純真さを実践する人々を「子供」と呼んだ。[パピアスが『主の解説』の第一巻で

述べ、クレメンス・アレクサンドリアヌスが『教育学』で述べているように。]

III.

ユダはこの世で不信心の悲しい例として歩き回っていました。彼の体は膨れ上がり、戦車が容易に通れる場所も通れず、戦車に押しつぶされて内臓が飛び出してしまったのです。

IV.

[主の弟子ヨハネを見た長老たちは、主がその時代についてどのように教えたかを彼から聞いたことを思い出し、こう言いました]「ぶどうの木が生える日が来ます。その木にはそれぞれ一万本の枝があり、それぞれの枝には一万本の小枝があり、それぞれの真の小枝には一万本の若枝があり、それぞれの若枝には一万房があり、それぞれの房には一万のブドウがあり、ブドウを絞ると一房から二十五メトレテス（1 メトレテス =39 リットル）のワインが採れます。そして、聖徒の誰かが一房をつかむと、他の者が叫ぶでしょう。『私の方がもっと良い房です。私を取ってください。私を通して主を祝福してください。』同様に、一粒の小麦から一万本の穂が生まれ、穂ごとに一万粒の粒が生まれ、一粒ごとに十ポンドの澄んだ純粋な小麦粉が生まれる。リンゴ、種子、草も同様の割合で生産される。そして、すべての動物は、そのとき地球の産物だけを食べて、平和で調和のとれた人間に完全に従うようになる。」[これらのことについては、ヨハネの教えを聞き、ポリュカルポスの友人であった古代人パピアスの書物に記されている。パピアスは、彼の書物の第四巻に記されている。パピアスは五冊の本を著した。そして彼はこう付け加えた。「これらのことは信者には信じられる。しかし、裏切り者のユダは信じず、『主はどうしてこのような成長を遂げられるのか』と尋ねたが、主は『誰が彼らのところに来るか、彼らは見るであろう』と言われた。」これらは、預言者イザヤが述べた時代です。「狼は子羊と共に伏す」など（イザヤ書 11:6 以下）。

V.

長老たちが言うように、天国に住むにふさわしいとみなされた人々はそこへ行き、他の人々は楽園の喜びを楽しみ、他の人々は都の壮麗さを所有するでしょう。なぜなら、救い主は、彼を見るにふさわしい人々に応じて、どこにでも見られるからです。しかし、百倍のものを生産する人々の住居と、六十倍のものを生産する人々の住居と、三十倍のものを生産する人々の住居との間には、この区別があります。最初の人々は天に上げられ、二番目の人々は楽園に住み、最後の人々は都に住むでしょう。そして、この理由で主は「私の父の家には住まいがたくさんある」と言われました。すべてのものは神のものであり、神はすべての人々にふさわしい住居を与え、神の言葉が言うように、各人がふさわしいかどうかに応じて、父からすべての人々に分け前が与えられるのです。そして、これは結婚式に招かれて宴会をする人々が横になる寝床です。使徒の弟子である長老たちは、これが救われる人々の段階と配置であり、彼らはこのような段階を経て前進し、さらに聖霊を通して息子に、そして息子を通して父に昇り、使徒が言うように、息子はやがて父にその仕事を譲るだろうと言っている。「なぜなら、彼はすべての敵をその足元に置くまで支配しなければならないからである。滅ぼされる最後の敵は死である。」なぜなら、神の国の時代には、地上にいる正しい人は死ぬことを忘れるからである。「しかし、万物が彼に従うと言われるとき、万物を彼に従わせた方が除かれているのは明らかである。そして、万物が彼に従わせられるとき、そのとき、子自身もまた、万物を彼に従わせた方に服従するであろう。それは、神がすべてのものにおいてすべてとなるためである。」

VI.

[ここで言及するパピアスは、使徒たちの言葉を彼らに同行した人々から受け取ったと断言し、さらにアリスティオンと長老ヨハネから直接聞いたと主張している。したがって、彼は彼らの名前を頻繁に挙げ、その著作の中で彼らの伝承を述べている。これらの状況を知ることは有益であるかもしれない。また、すでに述べたパピアスの記述に、彼が伝承から知識を得たと述べているいくつかの奇跡的な行為を語る他の一節を加えることも価値があるかもしれない。使徒フィリポが娘たちとともにヒエラポリスに住んでいたことは上で述べた。ここで、同時代に生きていたパピアスが、フィリポの娘たちから素晴らしい物語を受け取ったとどのように語っているかを指摘しなければならない。というのは、彼は、彼の時代に死人が生き返ったと語っているからである。彼はまた、バルサバスというあだ名のユストスに関するもう一つの奇跡についても言及しています。彼は主の恵みにより、猛毒を飲み込んだのに何の害も受けなかったのです。さらに、同じ人物は、書かれていない伝承から得た他の事柄も書き留めています。その中には、救い主に関する奇妙なたとえ話や教え、そしてもっと伝説的な性質のものもあります。その中には、死から復活した後、キリストの個人的な統治がこの地上に確立される千年期が来ると書かれています。さらに、彼は自身の著作の中で、前述のアリスティオンによる主の言葉のその他の物語や、長老ヨハネの伝承を伝えています。これらの点に関する情報については、読者に本自体を参照してもらうだけで十分ですが、ここでは、すでに抜粋した部分に加えて、最も重要なこととして、福音書を書いたマルコに関する伝承を付け加えます。パピアスはそれを次のように述べています。「そして長老はこう言った。」マルコはペテロの通訳となり、記憶にあることをすべて正確に書き留めました。しかし、彼がキリストの言行を語ったのは、正確な順序ではありませんでした。なぜなら、彼は主の声を聞いたことも、主とともに行ったこともなかったからです。しかし、私が言ったように、後に彼はペテロに同行しました。ペテロは、彼の指示を [聞き手の] 必要に応じて調整しましたが、主の言葉を規則的に語るつもりはありませんでした。したがって、マルコは、記憶にあることをこのように書き留めても間違いではありませんでした。特に注意を払ったのは、聞いたことを省略せず、記述に虚偽の内容を盛り込まないようにしたからです。[これは、パピアスがマルコについて語ったことですが、マタイについては次のように述べています]。マタイは [主の] 預言をヘブライ語でまとめ、各自ができる限りの解釈を行いました。[同じ人物が、ヨハネの第一の手紙とペテロの手紙からの証拠を同様に使用しています。そして彼はまた、主の前で多くの罪を告発された女性の話を語ります。それはヘブル人による福音書の中に見出されます。

VII.

パピアスは、一言一句次のように語っています。「神は、彼ら（天使たち）の一部に世界の秩序に対する統治権を与え、その統治をうまく行うよう彼らに命じました。そして、そのすぐ後にこうも言っています。「しかし、彼らの秩序は、何の役にも立たなかったのです。」

VIII.

この本（黙示録）の霊感に関しては、これ以上言葉を加える必要はないと私たちは考えています。なぜなら、聖なるグレゴリウス・テオロゴスとキュリロス、さらに古い時代のパピアス、エイレナイオス、メトディオス、ヒッポリュトスでさえ、この本について完全に満足のいく証言をしているからです。

IX.

キリストの胸に寄りかかった使徒の弟子で高名なヒエラポリスのパピアス、クレメンス、アレクサンドリアの[教会] の司祭パンタイヌス、そして賢明なアモニウスといった古代の最初の解説者たちから機会を得て、彼らは互いに同意し、6 日間の働きはキリストと全教会を指していると理解しました。

X.

(1) 主の母マリア。(2) クレオパまたはアルパヨの妻マリア。クレオパは司教であり使徒であったヤコブ、シモン、タダイ、ヨセフの母であった。(3) ゼベダイの妻マリア・サロメ。福音書記者ヨハネとヤコブの母。(4) マグダラのマリア。この 4 人は福音書に記されている。ヤコブ、ユダ、ヨセフは主の叔母 (2) の息子であった。ヤコブとヨハネもまた主の叔母 (3) の息子であった。小ヤコブとアルパヨの妻ヨセフの母マリア (2) は主の母マリアの姉妹であった。ヨハネはマリアをクレオパと名付けたが、それは彼女の父親か一族の血筋か、あるいは他の理由による。マリア・サロメ (3) は夫か村からサロメと呼ばれている。マリアには 2 人の夫がいたことから、クレオパのマリアと同一人物であると主張する者もいる。

付録 E

ユダヤ戦記

THE WARS OF THE JEWS, OR HISTORY OF THE DESTRUCTION OF JERUSALEM By Flavius Josephus

At the Project Gutenberg, Translated by William Whiston（ウィリアム・ウィストンによる英訳）から Google Chrome の翻訳機能で日本語化し、その後多少修正したものです。[リンク]

E.1　序文

1. 1 ユダヤ人がローマ人と戦った戦争は、現代における戦争だけでなく、ある意味では、これまで聞いたことのある戦争の中でも最大のものでした。都市が都市と戦った戦争、あるいは国家が国家と戦った戦争の両方においてです。事件自体には関係のない人々が、うわさで矛盾した話を寄せ集め、詭弁的なやり方で書き留めました。また、その場にいた人々は、ローマ人へのお世辞かユダヤ人への憎しみから、物事について偽りの報告をしました。彼らの著作には、時には非難や賛辞が含まれていますが、事実の正確な真実はどこにも含まれていません。そこで、私は、ローマの統治下で暮らす人々のために、以前私たちの国の言葉で書いて上野に送った本をギリシャ語に翻訳することを思いつきました。2 マティアスの息子ヨセフはヘブライ人として生まれ、祭司でもあり、最初はローマ人と戦い、その後の出来事に立ち会うことを余儀なくされた者です。[私はこの作品の著者です]

2. さて、この大混乱が起こった当時、ローマ人の情勢は大混乱に陥っていた。改革を求めるユダヤ人たちも、時代が混乱すると立ち上がった。彼らはまた、力と富を求めて栄えていたため、東方の情勢は当時非常に混乱しており、ある者は利益を望み、他の者はそのような混乱の中で損失を恐れていた。ユダヤ人は、ユーフラテス川の向こう側の同胞全員が自分たちとともに反乱を起こすことを期待していた。ローマ人の近隣のガリア人も動き、ゲルティン人も静かではなかったが、ネロの死後、すべてが混乱していた。そして、今や与えられた機会に促されて、多くの人が王権を狙うようになり、兵士たちは金銭を得ることを期待して、変化を装った。したがって、私は、このような重大な情勢で真実が偽造されているのを見て、それに注意を払わないのはばかげたことだと思った。しかし、戦争に参加しなかったギリシャ人やローマ人がこれらのことを知らず、お世辞や作り話を読んでいるのを許す一方で、パルティア人、バビロニア人、最も遠いアラブ人、そしてユーフラテス川の向こう側、ア

ディアベニ川の向こう側の我が国民は、私の情報を通じて、戦争がどこで始まり、それが我々にどのような悲惨さをもたらしたか、そしてどのような形で終わったかを正確に知っていた。

3. 確かに、これらの著者は、その記述を歴史と呼ぶことに自信を持っている。しかし、その点で、彼らは目的を果たせていないだけでなく、健全なことを何も語っていないように私には思える。なぜなら、彼らはローマ人の偉大さを誇示しようとしながら、ユダヤ人の行動を軽視し、小さく征服しただけの者が偉大に見えるのは当然であるとは考えていないからだ。また、彼らは戦争の長さ、戦争で非常に苦しんだローマ軍の多さ、指揮官の力を見過ごすことを恥じていない。彼らのエルサレム周辺での多大な労働は、彼らが成し遂げたことが小さなこととみなされれば、不名誉なものとみなされるだろう。

4. しかし、私はローマ人を賞賛する人々に反対して他の極端に行くつもりはなく、また私の同胞の行動を過度に高く評価しようと決心するつもりもありません。私は両方の行動を正確に追及するつもりです。しかし、私が記述する出来事に関して、私が抱いている情熱に合わせて言葉を選び、私の祖国が被った悲惨さについていくらかの嘆きを許していただく必要があります。なぜなら、それを破壊したのは私たち自身の扇動的な気質であり、ユダヤ人の暴君たちがローマの権力を私たちにもたらし、不本意ながら私たちを攻撃し、私たちの聖なる神殿を焼き払ったこと、それを破壊したティトゥス・シーザー自身がその証人であり、戦争中ずっと、扇動者によって抑圧された人々を哀れみ、しばしば自発的に都市の占領を遅らせ、その作成者に悔い改めの機会を与えるために包囲に時間を与えたからです。しかし、もし誰かが我々に対して不当な非難をするなら、我々が暴君や強盗について熱く語ったり、我が国の不幸をひどく嘆いたりしているとき、歴史を書く際の規則に反するとしても、ここでの私の感情を許して欲しい。なぜなら、我々の都市エルサレムはローマ統治下の他のどの都市よりも幸福な状態に達したが、最後には再び最悪の災難に陥ったからである。したがって、私には、世界の始まり以来のすべての人々の不幸は、ユダヤ人の不幸と比較すれば、それほど重要ではないように思われる。その作者も外国人ではない。このため、私は嘆きを抑えることができない。しかし、もし誰かが私を非難することに固執するなら、事実そのものは歴史部分に帰し、嘆きは作者自身にのみ帰する。

5. しかし、ギリシャ人の学者たちが、比較すると昔の戦争をはるかに凌ぐほどの偉大な行為が自分たちの時代になされたにもかかわらず、いまだにそれらの事件の裁判官として座り、古代の最高の作家たちの努力を痛烈に非難していることは、正当に非難できる。現代の学者たちは、雄弁さでは昔の作家たちより優れているかもしれないが、彼らが意図したことを実行する点では彼らに劣っている。また、彼らはアッシリア人とメディア人について新しい歴史を書いているが、まるで古代の作家たちが彼らの事件を記述すべきでなかったかのように。しかし、彼らは能力において彼らにはるかに劣っており、彼らの概念も彼らとは異なっている。なぜなら、昔は誰もが自分の時代に起こったことを書くことを引き受けたからである。彼らの行動への直接の関心が価値あるものを約束し、読者に嘘だとわかるような嘘を書くことは非難されるべきことであった。しかし、以前に記録されていないことの記憶を保存し、自分の時代の出来事を後世に伝えるという仕事は、本当に賞賛と称賛に値する。さて、他の人の作品の配置と順序を変更するだけの人ではなく、以前に語られなかったことを語るだけでなく、自分自身の歴史全体を構成した人は、真剣に苦労したと評価されるべきである。したがって、私は外国人であるにもかかわらず、[この歴史について] 多大な費用と多大な労力を費やした。そして、この作品を、ギリシャ人と蛮族の両方に対する偉大な行為の記念碑として捧げます。しかし、私たちの主要人物の中には、利益と訴訟のために口を大きく開けて舌を自由にしているが、歴史を書くときは完全に口を閉ざしている人もいる。歴史を書くときは、

真実を語り、多大な労力をかけて事実を集めなければならない。そして彼らは、そのような歴史の執筆を、より弱い人々、君主の行動を知らない人々に任せています。しかし、ギリシャの歴史家の間でどれほど無視されても、歴史的事実の真実は、私たちによって優先されるべきです。

6. ユダヤ人の古代史について、彼らがもともと何者だったのか、エジプト人に対してどのように反乱を起こしたのか、どの国を旅したのか、その後どの国を占領したのか、そしてどのようにそこから追い出されたのかを書くのは、適切な機会ではないし、他の理由からも不必要であると思う。それは、私より前の多くのユダヤ人が、私たちの祖先の歴史を非常に正確に書き記したからである。ギリシャ人の中にも、私たちの歴史を自分たちの言語に翻訳した者がいたが、彼らの歴史の真実をあまり間違えていない。しかし、これらの出来事の著者や私たちの預言者が書き終えたところから、私は立ち上がり、歴史を書き始める。さて、私の時代に起こった戦争については、できる限り熱心に、非常に広範囲に検討するが、私の時代以前のことについては、簡単に触れる。

7. [例えば、私が語るには] エピファネスという名のアンティオコスがエルサレムを武力で奪い、3 年 3 か月保持した後、アサモネウスの息子たちによって国外に追い出されたこと、その後、彼らの子孫が政府について争い、彼らの居住地にローマ人とポンペイウスを招いたこと、アンティパトロスの息子ヘロデが彼らの政府を解体し、ソシンスを招いたこと、また、アウグストゥスがローマ皇帝でクィンティリウス・ウァルスがその国にいたときに、ヘロデの死後、私たちの民が暴動を起こしたこと、ネロの 12 年に戦争が勃発し、ケスティウスに何が起こったか、戦争の最初の出撃でユダヤ人が敵対的に襲撃した場所など。

8. また、彼らが近隣の都市の周囲に壁を築いた経緯、ケスティウスの敗北でネロが戦争の結末を恐れ、ウェスパシアヌスをこの戦争の将軍に任命した経緯、ウェスパシアヌスが息子の長男とともにユダヤ地方に遠征した経緯、彼が使用したローマ軍の数はどのくらいだったか、ガリラヤ全土で彼の援軍のうち何人が孤立したか、彼がガリラヤの都市のいくつかを完全に武力で、他の都市を条約や条件で占領した経緯についても述べる。さて、ここまで来たら、ローマ軍の戦闘時の秩序の良さと軍団の規律、ガリラヤ両地方の広さ、その性質、ユダヤの境界について説明するつもりである。そして、これに加えて、私は特に、その地方特有のもの、そこにある湖や泉、そしてそれらが陥落したときに各都市に起こった悲惨な出来事について、私がそこで行われたことや受けた苦しみを目にしたとおり正確に述べます。私自身が経験した災難を一つも隠さず、真実を知る人々に語ります。

9. この後、ユダヤ人の状況が非常に悪くなったとき、ネロが死に、エルサレムを攻撃しようとしていたウェスパシアヌスが政権を握るために呼び戻されたこと、政権の獲得に関連してどのような兆候が彼に起こったか、そのときローマでどのような政権の変化が起こったか、そして彼が兵士たちによって不本意ながら皇帝にされたこと、そして彼が帝国の政権を握るためにエジプトへ出発したとき、ユダヤ人の状況が非常に混乱したこと、また暴君たちがユダヤ人に対して反乱を起こし、彼らの間で不和に陥ったことなどを語る。

10. さらに、ティトゥスが二度目にエジプトからユダヤに進軍した経緯、また、彼がどのようにして、どこで、何人の軍隊を集めたか、彼が到着したとき、反乱軍によって町がどのような状態にあったか、彼がどのような攻撃をし、何個の塁壁を築いたか、町を囲む三つの城壁とその寸法、町の強さ、神殿と聖なる家の構造、さらにそれらの建物と祭壇の寸法、そしてすべて正確に測定されたこと、また、彼らの祭りのいくつか、清めの七つの儀式、5 祭司の神聖な儀式、祭司と大祭司の衣服、神殿の至聖所の性質についても記述する。ただし、何事も隠さず、既知の事実に何事も付け加えない。

11. この後、私は、暴君たちが自国民に対して行った蛮行、ローマ人が外国人を容赦した寛容さ、そしてティトゥスが都市と神殿を守りたいという願いから、反乱分子に妥協するよう何度も促したことについて語る。また、人々の苦しみと災難、反乱によってどれほど苦しめられ、飢餓によってどれほど苦しめられ、ついには捕らえられたかについても述べる。また、脱走兵の不幸や捕虜に与えられた罰についても言及する。また、カエサルの同意に反して神殿が焼かれたこと、神殿に保管されていた多くの聖なる品々が火の中から取り出されたこと、また、都市全体が破壊され、その前に起こったしるしや不思議についても言及する。そして、暴君たちを捕虜にし、大勢の奴隷にし、彼らそれぞれがどのようなさまざまな不幸に見舞われたか。さらに、ローマ人が城壁の残骸に何をしたか、国中にあった要塞をどのように破壊したか、ティトゥスが国中を巡り、その問題を整理し、イタリアに帰還して凱旋したか。

12. 私はこれらすべてのことを七冊の本にまとめ、この戦争を知る人々には不満や非難の余地がないようにした。そして、私は真実を愛する人々のためにそれを書き記したのであり、虚偽の関係に満足する人々のためではない。そして、私はこれらのことの記述を、私が第一章と呼ぶものから始めることにする。

E.2 第一巻

E.2.1 第 1 章

> エルサレムの町がいかにして陥落し、神殿が略奪されたか（アンティオコス・エピファネスによる）。また、マカバイ家、マティアス、ユダの行動についても、またユダの死についても。

1. エピファネスと呼ばれたアンティオコスが、シリア全土に対する権利をめぐって第 6 代プトレマイオスと口論していたのと時を同じくして、ユダヤの権力者たちの間で大きな反乱が起こり、彼らは政権獲得をめぐって争いました。一方、高位の者たちは、それぞれが同等の者に従うことに耐えられませんでした。しかし、大祭司のひとりであるオニアスが優勢に立ち、トビアスの息子たちを町から追い出しました。彼らはアンティオコスのもとに逃げ、彼らを指導者として利用し、ユダヤに遠征するよう懇願しました。王は事前にそのように準備していたので、彼らの要求に従い、大軍を率いてユダヤ人を襲撃し、力ずくで町を占領し、プトレマイオスを支持する大勢の人々を殺害し、兵士たちを派遣して容赦なく略奪しました。彼はまた神殿を略奪し、3 年 6 か月間、毎日罪の償いの犠牲を捧げるという習慣を止めさせました。しかし、大祭司オニアスはプトレマイオスのもとに逃げ、ヘリオポリスのノムスで彼から地位を与えられ、そこにエルサレムに似た都市と、その神殿に似た神殿を建てました。これについては、後で適切な場所でさらに詳しく説明します。

2. アンティオコスは、この都市を思いがけず占領したり、略奪したり、そこで大虐殺を行ったりしても満足せず、激しい怒りに駆られ、包囲中に受けた苦しみを思い出し、ユダヤ人にその国の法律を破棄させ、幼児に割礼を受けさせず、祭壇に豚の肉を捧げるように強要した。ユダヤ人は皆これに反対し、最も有能な者たちは死刑に処された。要塞の守備に派遣されたバッキデスもまた、これらの邪悪な命令を受け、生来の蛮行に加わり、あらゆる種類の極悪非道な行為にふけり、住民の中でも最も立派な者たちを一人ずつ苦しめ、毎日公然と都市を破壊すると脅し、ついには極悪非道な行為によって貧しい人々を刺激して復讐させた。

3. そこで、モディンという村に住む祭司の一人、アサモネウスの息子マティアスは、5 人の息子がいる自分の家

族とともに武装し、短剣でバッキデスを殺した。そして、多数の守備隊を恐れて山に逃げた。そして、多くの民衆が彼に従ったので、彼は勇気づけられて山から下り、アンティオコスの将軍たちと戦い、彼らを打ち負かしてユダヤから追い払った。こうして、彼はこの成功によって政権を握り、自らの民衆の自由な同意によって君主となり、その後、長男のユダに政権を残して亡くなった。

4. ユダは、アンティオコスがじっとしているはずがないと考えて、同国人から軍隊を集め、ローマ人と友好関係を結んだ最初の者となり、エピファネスが二度目の遠征を行ったときに、ローマで大敗を喫して彼を国外に追い出した。この大勝利に勇気づけられたユダは、それまで隔離されていなかった市内の守備隊を襲撃した。そこでユダは彼らを市街地から追い出し、兵士たちを下市街地、つまりシタデルと呼ばれる地域に追いやった。それからユダは神殿を掌握し、その場所全体を清めて周囲を壁で囲み、祭儀用の新しい器を作って神殿に持ち込んだ。以前の器は汚されていたからである。またユダは別の祭壇を築き、犠牲を捧げ始めた。そして市街地が再び神聖な秩序を取り戻したとき、アンティオコスは死んだ。その息子アンティオコスが王国を継承したが、ユダヤ人に対する憎悪も継承された。

5. そこでこのアンティオコスは、歩兵五万、騎兵五千、象八十頭を集め、ユダヤを通って山岳地帯に進軍した。それから彼は小さな町ベツスラを占領したが、道の狭いベツザカリスという所でユダが軍隊を率いて彼と出会った。しかし、軍勢が戦闘に入る前に、ユダの兄弟エレアザルは、象の一番高いところに大きな塔が飾られ、金の軍装で守られているのを見て、アンティオコス自身がその上にいると思い、自分の軍勢よりずっと先に走り、敵の軍勢を切り抜けて象に追いついたが、王と思われるその象は背が高すぎて、近づくことができなかった。しかし、彼は武器を獣の腹に突き刺し、獣を倒し、圧死させた。彼は偉大なことを試みたに過ぎず、命よりも名誉を優先していることを示しただけだった。象を支配していたのは単なる一介の人間であり、もし彼がアンティオコスであることが判明したとしても、エレアザルがこの大胆な一撃によって成し遂げたことは、彼が死を選んだように見えることだけだった。彼には栄光ある行動を起こすというわずかな希望があったのに。いや、この失望は、彼の兄弟 [ユダ] にとって、戦い全体がどのように終わるかの前兆となった。ユダヤ人が長い間勇敢に戦ったのは事実だが、王の軍は数で勝り、運も味方していたため、勝利を得た。そして、彼の部下の多くが殺されると、ユダは残りの者を連れてゴフナの領地に逃げた。そこでアンティオコスはエルサレムに行き、食料が不足していたため、数日だけそこに留まり、そのまま出発した。彼はその地を守るのに十分だと考えた守備隊を後に残したが、残りの軍はシリアに冬営地を構えるために撤退した。

6. さて、王が去った後、ユダは怠け者ではなかった。同胞の多くが彼のもとに来たので、彼は戦いから逃れた者たちを集め、アダサという村でアンティオコスの将軍たちと再び戦った。そして、戦いで敵に強敵となり、多くの敵を殺したが、最後には彼自身も殺された。それから数日後、彼の兄弟ヨハネはアンティオコスの党派に陰謀を企てられ、彼らに殺された。

E.2.2　第 2 章

ユダの後継者であるヨナタンとシモン、そしてヨハネ・ヒルカノスについて。

1. ユダの兄弟であるヨナタンが王位を継承すると、彼は他の点でも、自分の民との関係でも非常に慎重に行動

し、ローマ人との友好関係を維持することで権威を強固にした。また、息子のアンティオコスとも同盟を結んだ。しかし、これだけでは彼の安全は確保できなかった。アンティオコスの息子の後見人であった暴君トリフォンが彼に対して陰謀を企てたのだ。さらに、トリフォンは彼の友人たちを奪おうとし、ヨナタンが数人の仲間とともにプトレマイスからアンティオコスのもとへ向かう途中、策略で彼を捕らえて拘束し、その後ユダヤ人に対する遠征を行った。しかし、後にヨナタンの兄弟であるシモンに追い払われ、敗北に激怒したシモンは、ヨナタンを殺害した。

2. しかし、シモンは勇敢に政務を遂行し、近隣の都市であるガザラ、ヨッパ、ヤムニアを占領した。また、守備隊を制圧し、城塞を破壊した。その後、シモンはアンティオコスの援軍となり、アンティオコスがメディア遠征に出る前にドラで包囲したトリフォンに対抗した。シモンはトリフォン殺害に協力したにもかかわらず、王にその野心を恥じ入らせることはできなかった。アンティオコスが将軍ケンデベウスを軍隊と共に派遣し、ユダヤを荒廃させ、シモンを征服するのにそれほど時間はかからなかったからである。シモンは年老いていたにもかかわらず、ずっと若いときのように戦争を指揮した。また、シモンは息子たちを一団の勇士と共にアンティオコスに派遣し、自らも軍隊の一部を率いて別の方面から攻撃した。彼はまた、山岳地帯の多くの場所で多数の兵士を待ち伏せさせ、彼らに対するあらゆる攻撃で優勢に立った。そして、このように輝かしい勝利を収めた後、大祭司に任命され、また、170 年続いた [セレウコス] 帝国の統治の後、ユダヤ人をマケドニア人の支配から解放した。

3. このシモンも陰謀を企てられ、宴会で義理の息子のプトレマイオスに殺された。プトレマイオスはシモンの妻と二人の息子を牢に入れ、ヨハネを殺すために何人かの者を遣わした。ヨハネはヒルカノスとも呼ばれていた。2 しかし、若者は彼らが来ることを事前に知らされると、急いで町に向かった。町の人々は父の輝かしい行いの記憶とプトレマイオスの不正に対する憎しみを心に抱いていたため、非常に信頼していたからである。プトレマイオスはまた別の門から町に入ろうとしたが、ちょうどその時ヒルカノスを認めた人々によって撃退された。そこで彼はすぐにエリコの周囲のダゴンと呼ばれる要塞に退却した。さて、ヒルカノスは、父が以前に務めていた大祭司の地位を受け、神に犠牲を捧げた後、母と兄弟たちを救おうと、急いでプトレマイオスを攻撃した。

4. そこでヒルカノスは要塞を包囲し、他の点ではプトレマイオスより優れていたが、親族に対する正当な愛情に関しては彼に圧倒された。プトレマイオスは困惑すると、母親と兄弟たちを連れ出し、城壁の上に立たせ、皆の目の前で棒で殴り、すぐに立ち去らなければ真っ逆さまに突き落とすと脅した。これを見たヒルカノスの同情と気遣いは怒りをこらえるには強すぎた。しかし母親は鞭打ちにも、脅された死にも動揺せず、手を伸ばして息子に、自分が受けた傷に動揺せず、この哀れな男を助けてやってくれと懇願した。なぜなら、プトレマイオスが家族に与えた傷の罰を受けるかもしれないとしても、プトレマイオスの力で死ぬ方が、いつまでも生き続けるよりはましだったからだ。さて、ヨハネの場合、彼は母親の勇気を思い、彼女の懇願を聞いて攻撃を開始した。しかし、彼女が殴られ、鞭で引き裂かれているのを見ると、彼は弱り果て、完全に愛情に打ち負かされた。こうして包囲が遅れたので、ユダヤ人が 7 年ごとに 7 日目に休む安息の年がやってきた。そのため、この年にプトレマイオスは包囲から解放され、ヨハネの兄弟たちとその母親を殺し、フィラデルフィアの僭主であったコティラスとも呼ばれるゼノンの元に逃げた。

5. アンティオコスはシモンに苦しめられたことに激怒し、ユダヤに遠征し、エルサレムの前に座り込んでヒルカノスを包囲した。しかしヒルカノスは、すべての王の中で最も裕福であったダビデの墓を開け、そこからおよそ三千タラントの金を奪い取り、三千タラントの約束でアンティオコスに包囲を解かせた。さらに、彼は十分な

金を持った最初のユダヤ人であり、外国人の援軍も雇い始めた。

6. しかし、別の時、アンティオコスがメディアへの遠征に出かけ、ヒルカノスに復讐の機会を与えたとき、彼はシリアの都市にすぐ攻撃を仕掛けた。そこには優秀な軍隊がいないことがわかったからである。そこで彼はメダバとサメア、その近隣の町々、シェケム、ゲリジムを占領した。さらに、エルサレムの神殿を模して建てられた神殿の周囲に住んでいたクテア人の国を征服した。また、イドマヤの多くの都市、アドレオン、マリサも占領した。7. 彼はまた、ヘロデ王が建てたセバステの町があるサマリアまで進軍し、周囲を城壁で囲み、息子のアリストブロスとアンティゴノスを包囲に当たらせた。彼らはそれを非常に強く押し進めたので、市内に飢饉が広がり、人々は決して評価されない食物を食べざるを得なくなった。彼らはまた、キュジケノスと呼ばれていたアンティオコスに援助を求めた。そこで彼は準備を整えて彼らの招きに応じたが、アリストブロスとアンティゴノスに打ち負かされ、実際彼はこれらの兄弟たちにスキトポリスまで追跡され、彼らから逃げ去った。そこで彼らはサマリアに戻り、再び群衆を壁の中に閉じ込めた。そして彼らは都市を占領すると、それを破壊し、住民を奴隷にした。そして彼らは事業で依然として大きな成功を収めていたので、熱意が冷めるのを許さず、軍隊を率いてスキトポリスまで行軍し、そこを侵略して、カルメル山内の全地域を荒廃させた。

8. しかし、ヨハネとその息子たちのこうした成功は、妬まれ、国内で反乱を引き起こした。そして、多くの人々が結束し、戦争に突入するまでは落ち着こうとしなかったが、戦争で敗北した。そこでヨハネは残りの人生を非常に幸せに過ごし、33 年間にわたって、非常に並外れたやり方で政府を運営した。彼は 5 人の息子を残して亡くなった。彼は確かに非常に幸せな人であり、彼のせいで財産について不満を言う理由はまったくなかった。彼だけが、世界で最も望ましい 3 つのもの、すなわち国家の統治、高位の神官職、そして予言の才能を持っていた。なぜなら、神は彼と会話し、彼はその後に起こることを何も知らなかったわけではなかったからである。そのため、彼は、2 人の長男が引き続き政府の主人となることはないだろうと予見し、予言した。そして、彼らの悲惨な運命と、彼らが幸福において父親よりどれほど劣っていたかを説明することは、我々の物語として大いに価値があるだろう。

E.2.3 第 3 章

> アリストブロスは頭に王冠をかぶった最初の人物であり、母と兄弟を殺した後、わずか一年しか統治せずに自らも死んだ。

1. 彼らの父の死後、彼らのうちの長男アリストブロスは、政府を王国に変え、バビロニアの奴隷状態から解放されて我々の民がこの地に降り立ってから 471 年 3 か月後に、最初に頭に王冠をかぶった。さて、彼は兄弟の中で、自分と隣り合っていたアンティゴノスに愛情を抱いていたようで、アンティゴノスを自分と同等の者とした。しかし、他の兄弟については、彼らを縛り、牢獄に送った。また、彼は母親を拘束した。なぜなら、彼女が彼と政府を争ったからである。なぜなら、ヨハネスは彼女を公務の女官として残していたからである。彼はまた、彼女を牢獄で縛り殺すほどの蛮行を行った。

2. しかし、彼が愛し、王国のパートナーにしていた兄アンティゴノスの件では、復讐は彼の手を逃れた。宮殿の悪人が彼に対して企てた中傷によって、彼は兄を殺したのである。確かに、最初は、アリストブロスは、兄に対

する愛情から、また、これらの話の大部分は、その話の語り手たちの嫉妬によるものだと考えたために、彼らの話を信じようとしなかった。しかし、かつて、アンティゴノスは、神のために幕屋を建てるという古い習慣がある祭りに、軍隊から華麗な姿でやって来たことがある。ちょうどその頃、アリストブロスは病気で、祭りの終わりに、アンティゴノスは武装した部下たちを従えて、できるだけ美しく着飾って、そして、主に、兄のために神に祈るためにやって来たのである。ちょうどそのとき、これらの悪党たちが王のもとにやって来て、武装した兵士たちがいかに尊大な態度でやって来たか、アンティゴノスがいかに横柄な態度で進軍したか、その横柄さは一私人としては大きすぎるため、大勢の兵士を率いて王を殺すために来たのだ、と告げた。アンティゴノスは、王国を自ら奪取する力があるのに、王の名誉をわずかに享受しているだけでは耐えられない、と。

3. アリストブロスは、次第に、不本意ながら、これらの告発を信じるようになった。そのため、彼は、いかなる事故に対しても安全を確保するよう心掛けながらも、公然と疑惑を明かさないように注意した。そこで、彼は、かつてはシタデルと呼ばれ、後にアントニアと改名された場所に病床にあったため、彼の遺体の警備員をある暗い地下道に配置した。そして、アンティゴノスが武器を持たずに来たら、そのままにしておけ、しかし、もし彼が鎧を着て来たら、殺せと命令した。また、彼は、武器を持たずに来るように事前に知らせるために、何人かを遣わした。しかし、このとき、王妃は、彼の破滅を企む者たちと非常に巧妙に共謀した。彼女は、派遣された者たちに、王の伝言を隠蔽するよう説得し、アンティゴノスに、彼の兄弟が、ガリラヤで、素晴らしい軍用装飾が施された鎧を手に入れたと聞いたと告げさせたのである。そして、彼は現在病気のため、来てそのすべての豪華な衣装を見ることができないので、今すぐに鎧を着た彼に会いたいと強く望んでいた。なぜなら、彼は言った、「もうすぐあなたは私から去っていくからです。」

4. アンティゴノスはこれを聞くとすぐに、兄の温厚な性格から、兄が危害を加えるとは考えず、鎧を着て兄に見せに来た。しかし、ストラトスの塔と呼ばれたあの暗い通路を歩いているときに、護衛兵に殺され、中傷がいかにしてすべての善意と自然な愛情を破壊するか、また、我々の善意のどれもが嫉妬に永久に抵抗できるほど強くないことを示す顕著な例となった。

5. そして、この機会にユダが来たことには誰もが驚くだろう。彼はエッセン派に属し、これまで予言で人を裏切ったり騙したりしたことはなかった。この男は、神殿のそばを通りかかったアンティゴノスを見て、知り合いに叫んだ。[アンティゴノスの教え子として彼に付き添っていたのは、少なくなかった] 「おや、不思議だ！」彼は言った。「真実は私の目の前で死んでおり、私が予言したことのいくつかは偽りであることが判明したので、今死ぬのは私にとって良いことだ。このアンティゴノスは今日生きているが、今日死ぬべきだった。そして、あの致命的な判決によれば、彼が殺されるはずの場所は、ここから 600 ファーロング離れたストラトスの塔だった。しかし、今日は既に 4 時間が経過しており、その時点で予言が満たされることは不可能だ。」老人はこれを言うと、心の中で落胆し、こう続けた。しかし、しばらくして、アンティゴノスが地下の場所で殺害されたという知らせが入りました。その地下の場所は、海辺にあったカエサレアと同じ名前で、ストラトスの塔とも呼ばれていました。この曖昧さが、預言者の動揺を引き起こしたのです。

6. そこでアリストブロスは自分が犯した大罪を悔い改めたが、これが彼の病気を悪化させる原因となった。彼の病状はますます悪化し、自分の犯した罪を考えるだけで彼の魂は絶えず動揺し、耐え難い悲しみで内臓が引き裂かれ、大量の血を吐いた。そして彼に付き添っていた召使の一人がその血を吐いているとき、超自然的な摂理によって、彼はアンティゴノスが殺されたまさにその場所で足を滑らせて倒れ、殺害された彼の血の跡に殺人者

の血をこぼし、その跡は今も残っていた。そこで、まるで召使がその場所にわざと血をこぼしたかのように、見物人の間で悲痛な叫び声が上がった。王はその叫び声を聞くと、何が原因なのか尋ねた。誰も彼に告げる勇気がなかったため、彼はますます彼らに何が起こったのかを知らせるよう迫った。そしてついに、彼が彼らを脅して、彼らに話すように強いると、彼らは告げた。すると彼は涙を流し、うめき声をあげて言った。「私は、自分が犯した大罪に関して、神の全能の目から逃れることはできないと悟った。しかし、私の親族の血の復讐が私を急いで追いかけてくる。おお、この最も厚かましい体よ！殺された母と兄弟のために受けるべき罰のために死ぬべき魂を、いつまで引き留めておくつもりだ！私自身、いつまで血を一滴ずつ使い果たすつもりだ？彼らにそれを一度に全部飲ませよう。そして、彼らの亡霊が、私の腸のいくつかの包みを彼らに差し出しても失望しないようにしよう。」彼がこれらの言葉を言うとすぐに、彼は 1 年も統治せずにすぐに死んだ。

E.2.4　第 4 章

27 年間統治したアレクサンダー・ヤネウスはどのような行動をとったか。

1. そして今、王の妻は王の兄弟たちを解放し、アレクサンダーを王とした。アレクサンダーは他の兄弟たちよりも年上で、気質も温和であった。アレクサンダーは政権に就くと、自らを治めようとする兄弟の一人を殺害したが、もう一人の兄弟は静かな生活を愛し、公務に干渉しないとして大いに尊敬していた。

2. そのとき、アレクサンダーと、アソキス市を占領したラテュルスと呼ばれるプトレマイオスとの間に戦いがあった。彼は確かに多くの敵を殺したが、勝利はむしろプトレマイオスに傾いた。しかし、このプトレマイオスが母親のクレオパトラに追われてエジプトに退却すると、アレクサンダーはガダラを包囲してこれを占領した。また、ヨルダン周辺の要塞の中で最も強固なアマトスも占領した。そこにはゼノンの息子テオドロスの最も貴重な所有物があった。そこでテオドロスは彼に向かって進軍し、自分の所有物と王の荷物を奪い、ユダヤ人一万人を殺害した。しかし、アレクサンダーはこの打撃を挽回し、軍を海沿いの地域に向け、ラフィアとガザ、そして後にヘロデ王によってアグリッピアスと呼ばれるようになったアンテドンも占領した。

3. しかし、彼がこれらすべての都市の住民を奴隷にした後、ユダヤ人の国民は祭りの時に彼に対して反乱を起こした。というのも、こうした祭りでは一般的に暴動が起きるからである。そして、彼の外国の援軍であるピシディア人とキリキア人が彼を助けなければ、彼らが彼に仕掛けた陰謀から逃れられないように思われた。シリア人に関しては、ユダヤ人に対する生来の敵意のため、彼は彼らを傭兵部隊に決して受け入れなかった。そして、彼は反乱者を 6000 人以上殺害した後、アラビアに侵攻し、その地をギレアデ人とモアブ人と共に占領すると、彼らに貢物を納めるよう命じ、アレトゥスに戻った。そして、テオドロスがその大成功に驚いたので、彼は要塞を占領し、それを破壊した。

4. しかし、ゴラン高原付近で彼を待ち伏せし、陰謀を企てていたアラビアの王オボダスと戦ったとき、彼は全軍を失い、軍は深い谷間に密集し、ラクダの大群に粉砕された。そしてエルサレムに逃げたとき、彼は以前から彼を憎んでいた群衆を挑発し、彼に対する反乱を起こさせた。これは彼が受けていた災難の重大さのためであった。しかし、彼は当時彼らにとって手ごわすぎた。そして、両軍の間で戦われた数々の戦いで、彼は 6 年間の間に 5 万人以上のユダヤ人を殺した。しかし、彼はこれらの勝利を喜ぶ理由がなかった。彼は自分の王国を滅ぼし

ただけだったからである。ついに彼は戦いをやめ、臣民と話し合い、和解しようと努めた。しかし、彼の行動のこの変わりやすく不規則な性質は、彼らに彼をさらに憎まれるようにした。そして、ユダヤ人がなぜ自分をそんなに憎んでいるのか、そして彼らをなだめるために何をすべきかと尋ねると、彼らは自殺すればいいと答えた。なぜなら、死んでからでさえ彼らにそのような悲劇的なことをした彼と和解するには、そうすることしかできなかったからだ。同時に、彼らはエウケロスと呼ばれるデメトリオスに協力を依頼した。彼は大きな利益を期待して彼らの要求に快く応じ、軍隊を率いて来たので、ユダヤ人はシェケムの周りの援軍と合流した。

5. アレクサンダーは、1000 人の騎兵と 8000 人の歩兵傭兵で両軍を迎え撃った。また、味方のユダヤ人も 1 万人を率いていた。一方、敵軍は 3000 人の騎兵と 14000 人の歩兵を率いていた。さて、彼らが戦闘に入る前に、両王は布告を出し、互いの兵士を引き離して反乱を起こそうとした。一方、デメトリオスはアレクサンダーの傭兵を自分から引き離そうとし、アレクサンダーはデメトリオスに味方するユダヤ人を自分から引き離そうとした。しかし、ユダヤ人は怒りを止めようとせず、ギリシア軍も不誠実な態度をとらなかったため、彼らは交戦し、武器を駆使して激しい戦いを繰り広げた。この戦いでは、アレクサンダーの傭兵が心身ともに最大の功績を挙げたにもかかわらず、デメトリオスが勝利した。しかし、この戦いの結果は、両者にとって予想と異なるものとなった。デメトリオスを招いた者たちも、彼が勝利したにもかかわらず、彼に固執し続けたわけではなかった。そして、アレクサンダーが山に逃げたとき、彼の状態の変化を憐れんで六千人のユダヤ人が彼のもとにやって来た。しかし、デメトリオスはこの事態に耐えることができなかった。しかし、アレクサンダーがすでに彼に匹敵する存在になり、国全体が彼のところに駆け寄ってくるだろうと考えて、国を離れ、自分の道を歩み始めた。

6. しかし、残りのユダヤ人たちは、外国の援軍が去った後も彼との争いをやめず、アレクサンダーと絶え間なく戦い、アレクサンダーは彼らの大半を殺し、残りをベルネセリスの町に追いやった。そして、その町を破壊した後、捕虜をエルサレムに連行した。いや、彼の怒りは極度に高まり、その蛮行は不敬虔なレベルにまで達した。800 人を町の真ん中で十字架に掛けるよう命じたとき、彼は彼らの妻や子供たちの喉を彼らの目の前で切り裂いた。そして、彼は妾たちと酒を飲み、寝ているときに、これらの処刑を見た。人々はこれに非常に驚き、翌晩、反対派の 8000 人がユダヤ全土から逃げ出した。彼らの逃亡はアレクサンダーの死によってようやく終わった。こうして、彼は、遅くとも非常に困難な状況ではあったが、このような行動によってついに王国に平穏をもたらし、それ以上の戦闘をやめた。

7. しかし、ディオニュシオスとも呼ばれるアンティオコスは、再び問題の原因となった。この男はデメトリオスの兄弟であり、セレウコス家最後の人物であった。3 アレクサンダーは、アラビア人に向かって進軍していたとき、彼を恐れていた。そこで、山に近いアンティパトリスとヨッパの海岸の間に深い溝を掘り、溝の前に高い壁を築き、突然の接近を防ぐため、木の塔を建てた。しかし、それでも彼はアンティオコスを追い払うことができず、塔を焼き、溝を埋め、軍隊を率いて進軍した。そして、アレクサンドロスが彼を阻止しようとしたことに対する復讐を、取るに足らないこととみなしたので、彼はアラブ人に向かって直接進軍した。アラブ人の王は、敵と交戦するのに最も適した地域に退却し、それから突然、一万人の騎兵を引き返しさせ、混乱したアンティオコスの軍隊に襲いかかり、恐ろしい戦いが起こった。アンティオコスの軍隊は、彼が生きている間は戦い続けたが、アラブ人によって大虐殺が行われた。しかし、彼が倒れると、彼は最前線にいて、軍隊を結集する上で極めて危険な状況にあったため、彼らは皆退却し、彼の軍隊の大部分は戦闘中または逃走中に壊滅した。カナ村に逃げた残りの者たちは、わずかな例外を除いて、必需品の欠乏で全員が死に絶えた。

8. この頃、ダマスカスの人々はメンヘンスの息子プトレマイオスに対する憎しみから、アレタスを招いてケレシリア王とした。アレタスもまたユダヤに遠征し、戦いでアレクサンダーを打ち負かしたが、その後双方の合意により撤退した。しかしアレクサンダーはペラを占領した後、テオドロスの領地を欲しがって再びゲラサに進軍し、守備隊の周囲に三重の城壁を築いてから、その地を力ずくで占領した。またゴラン、セレウキア、アンティオコスの谷と呼ばれた地域を破壊した。さらに、ガマラの堅固な要塞を占領し、そこの知事であったデメトリオスから、彼にかけられた多くの罪のゆえに、その財産を剥奪し、この遠征に丸三年を費やした後、ユダヤに戻った。そして今、彼はその成功のゆえに国民から好意的に迎えられた。そこで戦争から一息ついたとき、彼は病気にかかった。四日熱にかかっていたため、再び軍事活動に取り組めばこの病気が治るだろうと考えた。しかし、時宜にかなわない時期にそのような遠征を行い、体に耐えられる以上の苦難を強いたために、彼は自ら命を絶った。こうして、彼は 27 年間の統治の後、苦難のさなかに亡くなった。

E.2.5　第 5 章

アレクサンドラは 9 年間統治し、その間、パリサイ人が国の実質的な支配者でした。

1. さて、アレクサンドリアは王国を妻のアレクサンドリアに残し、ユダヤ人が今や喜んで彼女に服従するだろうと期待した。なぜなら、彼女は彼がユダヤ人に対して行ったような残酷な扱いを非常に嫌っており、彼らの法律を破ることに反対し、それによって人々の好意を得ていたからである。彼の期待は間違っていなかった。この女性は、人々が彼女の敬虔さについて抱いていた評価によって、領土を維持したからである。彼女は主に自国の古い慣習を研究し、彼らの神聖な法律に反する人々を政府から追放した。そして、彼女はアレクサンドリアとの間に二人の息子をもうけたので、彼女は年長のヒルカノスを大祭司に任命した。それは彼の年齢のためであり、またそれに加えて、彼の無気力な性格が公衆を混乱させるような性格ではないためであった。しかし、彼女は弟のアリストブロスを、彼の気質が激しいため、私人として彼女のもとに留めた。

2. そして、パリサイ人たちが彼女に加わり、彼女の政治を助けた。彼らはユダヤ人の一派で、他の人たちよりも信心深く、法律をより正確に解釈しているようだった。アレクサンドラは神に対して非常に敬虔な女性だったので、彼らに並外れたほど従った。しかし、これらのパリサイ人たちは、少しずつ巧妙に彼女の好意を得、彼ら自身が公務の実質的な管理者となった。彼らは望む者を追放し、権力を弱め、望むままに人を縛り、解放した。4 つまり、彼らは王権を享受し、その費用と困難はアレクサンドラのものだった。彼女は大事の運営に賢明な女性で、常に兵士を集めることに熱心だった。そこで彼女は軍隊を半分に増強し、外国の軍隊を大量に獲得した。その結果、彼女の国家は国内で非常に強力になっただけでなく、外国の有力者たちからも恐れられるようになり、彼女は他の人々を統治し、パリサイ人が彼女を統治した。

3. そこで、彼らは、アレクサンドロスの友人で、名士でもあったディオゲネスを自ら殺害し、彼が王の助言に加担して、800 人の男たちを十字架につけたと告発した。また、アレクサンドラを説得して、自分たちに対して彼を怒らせた残りの者たちを死刑にするよう説得した。彼女は迷信深く、彼らの望みを聞き入れ、彼らは好きな者を殺した。しかし、危険にさらされた者のうちの主だった者はアリストブロスのもとに逃げ、彼は母親を説得して、男たちの威厳を理由に彼らを許すが、無実だと思わない限りは町から追放するよう説得した。そのため、男たちは処罰されずに、国中に散らばった。しかし、アレクサンドラがダマスカスに軍隊を派遣したとき、プトレ

マイオスが常にその町を抑圧しているという口実で、彼女はダマスカスを占領し、大きな抵抗もしなかった。彼女はまた、プトレマイス付近に軍を率いて駐屯し、協定と贈り物でクレオパトラを包囲していたアルメニア王ティグラネスを説得し、立ち去るよう要求した。その結果、ルクルスのアルメニア遠征中に起こった国内の騒乱のため、ティグラネスはすぐに包囲から解放された。

4. その間にアレクサンドラは病気になり、彼女の息子アリストブロスは、若さゆえの温情で友人であった大勢の召使たちとともにこの機会を捉え、すべての要塞を占領した。また、彼はその中の金銭を使って傭兵を集め、自ら王となった。さらに、ヒルカノスが母親に訴えると、母親は彼の事情を憐れみ、アリストブロスの妻と息子たちをアントニアに拘留した。アントニアは神殿の北側に接する要塞であった。すでに述べたように、そこは昔はシタデルと呼ばれていたが、後にアントニウスが [東の領主] であったときにアントニアという名前が付けられた。同様に、他の都市、セバステとアグリッピアスも名前が変更され、セバストゥスとアグリッパからその名前が与えられた。しかし、アレクサンドラは、アリストブロスが弟を相続権から排除したことに対する罰を与える前に、9 年間統治した後に亡くなった。

E.2.6　第 6 章

> アレクサンドロスの後継者ヒルカノスが王位継承権を放棄すると、アリストブロスが王位に就く。その後、同じヒルカノスはアンティパトロスの助けによりアベタスに連れ戻される。最後にポンペイウスが兄弟間の争いの仲裁者となる。

1. さて、ヒルカノスは王国の相続人であり、彼の母は死ぬ前にそれを彼に託した。しかし、アリストブロスは力と寛大さにおいて彼より優れていた。そして、エリコの近くで王国をめぐる争いを決着させるために彼らの間に戦いがあったとき、大部分はヒルカノスを捨ててアリストブロスに寝返った。しかし、ヒルカノスは彼と共にいた仲間たちとともにアントニアに逃げ、彼の身を守るために人質（アリストブロスの妻とその子供たち）を彼の手に渡した。しかし、事態が極限に達する前に、彼らは合意に達した。アリストブロスが王となり、ヒルカノスはそれを辞任するが、王の兄弟として他のすべての名誉を保持することであった。そこで彼らは神殿で和解し、人々が彼らの周りに集まる中、非常に親切に抱き合った。彼らも住居を変え、アリストブロスは王宮へ行き、ヒルカノスはアリストブロスの家に退いた。

2. アリストブロスと意見が合わない人々は、彼が予期せず政権を獲得したことを恐れた。特に、アリストブロスが昔から憎んでいたアンティパトロスが恐れた。アンティパトロスはイドマヤ人の生まれで、祖先や富、その他の権威からその国の有力者の一人であった。アンティパトロスはヒルカノスを説得して、アラビアの王アレタスのもとに逃げ、王国を主張させた。また、アレタスを説得してヒルカノスを迎え入れ、王国に連れ戻すよう説得した。また、アリストブロスの道徳観を大いに非難し、ヒルカノスを大いに褒め、アレタスに彼を迎えるよう勧め、これほど大きな王国を統治する彼が、傷ついた者を助けるのは、いかに恥ずべきことかを語った。アリストブロスは、ヒルカノスが生まれながらの特権によって属していた領土を奪われ、不当に扱われたと主張した。そして、二人に自分の望むことをするように仕向けた後、彼は夜にヒルカノスを捕らえて町から逃げ出し、非常に素早く逃走を続け、アラビア王の王宮であるペトラという場所に逃げ込み、そこでヒルカノスをアレタスの手に委ねた。そして、彼と多くの話し合いをし、多くの贈り物で彼を説得し、王国を回復できる軍隊を与えるよう説

得した。この軍隊は5万人の歩兵と騎兵で構成されており、アリストブロスはこれに抵抗することができず、最初の攻撃で見捨てられ、エルサレムに追いやられた。ローマの将軍スカウルスがやって来て時宜にかなった介入をして包囲を解かなければ、彼も最初は力ずくで捕らえられていただろう。このスカウルスは、ティグラネスと戦ったとき、ポンペイウス大王によってアルメニアからシリアに派遣された。そこでスカウルスは、メテッルスとロリウスが最近占領したダマスカスに来て、彼らにその地から立ち去らせた。そして、ユダヤの状況を聞いて、ある戦利品を求めてそこへ急いだ。

3. それで、彼が国に着くとすぐに、両兄弟から使者がやって来て、それぞれが彼の援助を求めた。しかし、アリストブロスの三百タラントは、彼にとって、大義の正当性よりも重要であった。スカウルスはその金額を受け取ると、ヒルカノスとアラビア人に使者を送り、包囲を解かなければローマ人とポンペイウスの恨みを買ってやるぞと脅した。それでアレタスは恐れおののき、ユダヤからフィラデルフィアに撤退し、スカウルスも再びダマスカスに戻った。アリストブロスは [兄弟の手から] 逃げるだけでは満足せず、全軍を集めて敵を追跡し、パピロンと呼ばれる場所で戦い、敵の約六千人を殺し、アンティパトロスの兄弟ファリオンも殺した。

4. ヒルカノスとアンティパトロスは、アラビア人からの希望をこのように奪われると、その希望を敵に転嫁した。ポンペイウスがシリアを通ってダマスカスに来ていたので、彼らはポンペイウスのもとに助けを求めて逃げた。そして、賄賂もなしに、アレタスに使ったのと同じ公正な嘆願をし、アリストブロスの暴力的な振る舞いを憎むように、そして、彼の善良な性格と年齢の優越性の両方から、王国が正当に属する彼に王国を与えるように懇願した。しかし、この場合、アリストブロスはスカウルスが受け取った賄賂を頼りにしていたため、自分自身も不足していなかった。彼自身もそこにいて、できる限り王族にふさわしい方法で身を飾った。しかし、すぐに彼は、そのような卑屈な態度で来るのは自分にふさわしくないと考え、慣れているよりもずっと卑しい方法で自分の目的を果たすことに耐えられなかった。そこで彼はディオスポリスから出発した。

5. この彼の行動にポンペイウスは大いに憤慨した。ヒルカノスとその友人たちもポンペイウスに大いにとりなしをした。そこでポンペイウスはローマ軍だけでなく、シリアの援軍の多くも率いてアリストブロスに向かって進軍した。しかしペラとスキトポリスを通り過ぎてコリアに着いたとき、地中海地方を通ってユダヤ地方に入るところであるが、そこでアリストブロスがアレクサンドリアに逃げたと聞いた。アレクサンドリアは高い山の上にある、極めて壮麗に要塞化された要塞である。そこでポンペイウスはアリストブロスに使いを送って下りてくるように命じた。彼はそのように横柄な態度で呼ばれたので、その呼びかけに応じるよりも、戦いで運試しをしたいと思った。しかし群衆が大いに恐れているのを見て、友人たちはローマ軍の力はどれほどのものか、それがいかに無敵であるかを考えるよう彼に勧めた。そこで彼は彼らの助言に従い、ポンペイウスのもとに下って行った。そして、自分のことと、政権を握った自分の大義の正当性について長々と弁明した後、要塞に戻った。そして、兄が再び彼を招き入れると（自分の大義を弁護するよう)、彼は下って来て、その正当性を語り、それからポンペイウスから何の妨害も受けずに立ち去った。彼は希望と不安の間で揺れ動いていた。そして彼が下って来たのは、ポンペイウスに政権を全面的に認めてもらうためだった。そして、彼が城塞に上って行ったのは、あまりに身分を卑しめているように思われないようにするためだった。しかし、ポンペイウスは彼に要塞を明け渡すよう命じ、要塞を明け渡すよう総督全員に手紙を書かせた。彼らは、ポンペイウスの自筆以外の手紙には従わないという命令を受けていた。そこで彼は命令に従ったが、それでも行われたことに憤慨し、エルサレムに退き、ポンペイウスと戦う準備をした。

6. しかしポンペイウスは彼に包囲の準備をする時間を与えず、彼の後を追った。また、エリコでミトリダテスの死を知らされたため、彼は攻撃を急がざるを得なかった。さて、ここはユダヤで最も肥沃な土地で、バルサムの木のほかに、たくさんのヤシの木が生えている。その新芽は鋭い石で切り取られ、切り口から涙のように滴る汁が採取される。そこでポンペイウスはその場所に一晩陣を張り、翌朝エルサレムに急いだ。しかし、アリストブロスは彼が近づいてくるのを恐れ、懇願するために彼に会いに来た。彼はまた、金銭を約束し、自分と町の両方を彼の手に引き渡すと約束し、それによってポンペイウスの怒りを和らげた。しかし、彼は同意した条件を一つも実行しなかった。というのは、アリストブロスの一派は、約束した金を受け取るために派遣されたガビニウスを市内に入れることさえしなかったからである。

E.2.7　第 7 章

ポンペイウスはエルサレムの町を明け渡し、神殿を力ずくで奪取した。ポンペイウスはどのようにして至聖所に入ったのか。また、ユダヤで彼が行ったその他の功績は何だったのか。

1. この仕打ちにポンペイウスは激怒し、アリストブロスを拘留した。そして、彼は町に到着すると、どこから攻撃を仕掛けるかを調べた。なぜなら、城壁は非常に堅固で、突破するのは困難であり、城壁の前の谷は恐ろしく、その谷の中にある神殿自体も非常に堅固な城壁に囲まれており、町が陥落しても、その神殿は敵が退却する第二の避難場所となるだろうと考えたからである。

2. さて、彼がこの件について長々と議論しているうちに、市内の民衆の間で騒乱が起こった。アリストブロス派は戦って王を解放する用意があり、一方ヒルカノス派はポンペイウスに門を開けるつもりだった。そして、ローマ兵の整然とした秩序を見て、人々は後者の派閥が非常に多数派になることを恐れた。そこでアリストブロス派は敗北し、神殿に退却し、神殿と市内を結ぶ橋を破壊して両者の連絡を遮断し、最大限の抵抗を準備した。しかし、他の者たちはローマ軍を市内に迎え入れ、宮殿を彼に引き渡したので、ポンペイウスは彼の高官の一人であるピソを軍隊とともに宮殿に送り、神殿に逃げ込んだ者たちのうち誰一人として妥協に応じさせることができなかったため、彼は市内のあちこちに守備隊を配置した。それから彼は、ヒルカノスの部隊が彼らに助言と援助を与える用意ができているように、彼らの周囲にあるすべてのものを攻撃に有利になるように配置した。

3. しかしポンペイウスは自ら神殿の北側にあった溝と谷全体を埋めた。軍隊自身がその目的のために資材を運ばなければならなかった。そして谷の深さがあまりにも深かったため、その谷を埋めるのは確かに困難なことだった。特にユダヤ人は優位な立場から彼らを撃退するためにあらゆる手段を講じていた。ローマ軍もその努力に成功しなかった。ポンペイウスはユダヤ人が宗教上の理由であらゆる仕事を断つ第七日に注意を払っていなかったため、土手を上げ、その日に兵士たちが戦うのを控えていた。なぜならユダヤ人は安息日にのみ防御行動をとったからである。しかしポンペイウスは谷を埋めるとすぐに、土手に高い塔を建て、ティルスから運んできた武器を城壁に近づけ、それを打ち壊そうとした。そして石を投げる者たちは、その上に立っていたものを打ちのめし、追い払った。しかし、この街のこちら側にある塔は非常に大きな抵抗力を持っており、その大きさと壮麗さはまさに並外れたものでした。

4. さて、ここで、ローマ人が経験した多くの困難において、ポンペイウスは、ユダヤ人の不屈の精神の他の例だ

けでなく、特に彼らが四方から矢で包囲されたときでさえ、宗教的な儀式をまったく中断しなかったことに感心せざるを得なかった。というのは、まるで町が完全に平和であるかのように、彼らの毎日の犠牲と浄化、そして彼らの宗教的礼拝のあらゆる分野が、依然として極めて厳格に神に捧げられていたからである。また、神殿が実際に陥落し、彼らが祭壇の周りで毎日殺されたときでさえ、彼らは法律で定められた神への礼拝の例を怠ることはなかった。というのも、包囲の 3 ヶ月目に、ローマ人は大変な苦労をしながらも塔の 1 つを倒し、神殿に入ることができたからである。さて、最初に壁を乗り越えようとしたのは、シラの息子ファウストゥス・コルネリウスであり、次に彼に続いたのは 2 人の百人隊長、フリウスとファビウスであった。そして、これらの各部隊には、自らの部隊が従い、ユダヤ人を四方から包囲して、神殿に避難しようと逃げているユダヤ人や、しばらくの間自衛のために戦っているユダヤ人を殺害した。

5. 祭司たちの多くは、敵が剣を手に襲いかかってくるのを見ても、何の妨害もなく礼拝を続け、神への礼拝の義務を自分の身の安全よりも優先したため、酒を捧げたり、香を焚いたりしているときに殺された。祭司たちの大部分は敵対する同胞によって殺され、数え切れないほどの群衆が断崖から身を投げた。いや、中には、自分たちが直面している克服できない困難に混乱し、壁に近い建物に火を放ち、彼らも一緒に焼けた者もいた。ユダヤ人は 1 万 2 千人が殺されたが、ローマ人は殺されたのはごくわずかで、負傷した者の方が多かった。

6. しかし、当時国民が被っていた災難の中で、これまで誰にも見られなかった聖所が外国人に開放されたことほど国民を動揺させたものはなかった。ポンペイウスと彼の取り巻きたちは、大祭司以外は誰も立ち入ることが許されていない神殿に入り、そこに保管されているもの、すなわち燭台とそのランプ、テーブル、注ぎ口、香炉などすべて金でできており、また大量の香料が山積みにされ、聖なる金二千タラントも積まれていた。しかしポンペイウスはその金にも、そこに保管されていた他の物にも触れず、神殿を奪った翌日には、神殿の周りの大臣たちに神殿を清め、いつもの供え物を捧げるよう命じた。さらに、彼はヒルカノスを大祭司に任命した。それは、包囲戦の間、他の点では彼の側に非常に機敏に動いただけでなく、国内の民衆がアリストブロスのために戦うのを阻止する手段となったからである。彼らはそうでなければ、アリストブロスのために戦うことを非常に喜んでいた。その手段によって、ヒルカノスは良き将軍の役割を演じ、恐怖よりも慈悲によって民衆を彼と和解させた。さて、捕虜の中には、アリストブロスの義父で彼の叔父でもある人物が捕らえられた。そこで、彼は最も罪深い者たちを斬首で罰したが、ファウストスと彼と共に勇敢に戦った者たちには、栄誉ある贈り物で報い、国とエルサレム自体に貢物を課した。

7. 彼はまた、彼らが以前占領していたケレシリアに属するすべての都市を国から奪い、当時ローマの長官に任命されていた者の支配下に置き、ユダヤをその本来の境界内に収めた。また、ユダヤ人によって破壊されていたガダラを再建した。9 これは、ガダラ出身で、彼自身の解放奴隷の一人であったデメトリオスを満足させるためであった。彼はまた、国土の中央にあった、それまでに破壊されていなかった都市、すなわちヒッポス、スキトポリス、ペラ、サマリア、マリサ、さらにアシュドド、ヤムニア、アレトゥサを彼らの支配から解放した。彼はまた、ガザ、ヨッパ、ドラという海沿いの都市、そして昔はストラトスの塔と呼ばれていたが、後にヘロデ王によって最も壮麗な建物が再建され、カエサレアと名前を変えられた都市についても同様に対処した。彼はこれらすべてを市民に返還し、シリア属州の管轄下に置いた。この属州とユダヤ、エジプト、ユーフラテスまでの地域をスカウルスに総督として委ね、2 個軍団を彼に支援させた。一方、スカウルスはアリストブロスとその子供たちを捕虜として連れて、キリキアを通ってローマに向かうのに全力を尽くした。2 人の娘と 2 人の息子のうち、息

子のアレクサンダーは行く途中で逃げたが、弟のアンティゴノスは姉妹たちとともにローマに連れて行かれた。

E.2.8　第 8 章

ポンペイウスから逃亡したアリストブロスの息子アレクサンダーはヒルカノスに対して遠征を行うが、ガビニウスに打ち負かされ、要塞を彼に引き渡す。その後、アリストブロスはローマから脱出し、軍隊を集めるが、ローマ人に敗れ、ローマに連れ戻される。ガビニウス、クラッスス、カッシウスに関するその他の事柄も含む。

1. その間、スカウルスはアラビアに遠征したが、ペトラ周辺の場所の難しさで阻止された。しかし、彼はペラ周辺の地域を荒廃させたが、そこでも彼は大きな困難に直面していた。彼の軍隊は飢餓に苦しんでいたからである。その不足を補うために、ヒルカノスは彼にいくらかの援助を与え、アンティパトロスを通して彼に食料を送った。スカウルスは、彼とよく知り合いだったアレタスに彼を送り、和平を買うための金銭を払うよう説得した。アラビアの王はその提案に応じ、彼に 300 タラントを与えた。それを受けてスカウルスはアラビアから軍を撤退させた。

2. しかし、ポンペイウスから逃亡したアリストブロスの息子アレクサンダーは、しばらくしてかなりの数の兵を集め、ヒルカノスに重くのしかかり、ユダヤを制圧し、すぐに彼を倒そうとした。実際、彼はエルサレムに来て、ポンペイウスによって破壊された城壁を再建しようとしていたが、スカウルスの後継者としてシリアに派遣されたガビニウスは、他の多くの点と同様に、アレクサンダーに対する遠征で勇敢さを示した。アレクサンダーは、ガビニウスが自分を攻撃することを恐れて、武装した一万人の歩兵と千五百人の騎兵からなる大軍を集めた。彼はまた、アラビアの山々にあるアレクサンドリア、ヒルカニオン、マカエロスなど、適切な場所の周囲に城壁を築いた。

3. しかしガビニウスは、マルクス・アントニウスを先に遣わし、全軍を率いて自らも従った。ただし、アンティパトロスの周囲の精鋭部隊と、マリコスとピトラオスの指揮下にあるユダヤ人部隊は、マルクス・アントニウスの周囲の指揮官たちと合流し、アレクサンダーと対峙した。ガビニウスはその後すぐに主力部隊を率いてその部隊に向かった。アレクサンダーは、合流した敵軍の突撃に耐えることができず、撤退した。しかし、エルサレムに近づくと、戦闘を強いられ、戦闘で 6 千人の兵士を失った。そのうち 3 千人が倒れ、3 千人が生き残ったため、残りの兵士とともにアレクサンドリアに逃げた。

4. さて、ガビニウスがアレクサンドリアに着くと、そこに多数の者が陣取っていたため、戦いになる前に彼らに以前の罪を赦すと約束して、彼らを説得しようとした。しかし、彼らが妥協の条件に耳を傾けなかったので、彼は彼らの多くを殺し、多くを城塞に閉じ込めた。彼らのリーダーであるマルクス・アントニウスは、この戦いで目覚ましい活躍を見せた。彼はいつも勇敢だったが、今回ほど勇敢さを見せたことはなかった。しかし、ガビニウスは城塞を奪取する軍隊を残して自ら出発し、破壊されなかった都市を定住させ、破壊された都市を再建した。したがって、彼の命令により、次の都市が復興された。スキトポリス、サマリア、アンテドン、アポロニア、ヤムニア、ラフィア、マリアッサ、アドロエウス、ガマラ、アシュドド、その他多数。すると、大勢の男たちが喜んでそれぞれの島に駆けつけ、そこの住民となった。

5. ガビニウスはこれらの都市を制圧すると、アレクサンドリアに戻り、包囲を続けた。アレクサンドリアは政権獲得を諦め、使節を派遣して、アレクサンドリアを侮辱した罪を許すよう懇願し、後にアレクサンドリアをアレクサンドリアに引き渡す際に、残りの要塞であるヒルカニウムとマカエロスをガビニウスに引き渡した。アレクサンドリアの母の説得により、ガビニウスはこれらを全て破壊した。第二の戦争でガビニウスが収容所にされないようにするためである。母は、ローマで捕虜となった親族、つまり夫と他の子供たちを心配して、ガビニウスをなだめるためにそこにいた。その後、ガビニウスはヒルカニウムをエルサレムに連れて行き、神殿の維持を彼に委ねたが、その他の政治は貴族が行うことを定めた。彼はまた、国全体を 5 つの地域に分け、1 つの地域をエルサレムに、別の地域をガダラに、別の地域をアマトスに、4 番目をエリコに割り当て、5 番目の地域にはガリラヤの都市セフォリスを割り当てました。こうして人々は君主制から解放されて喜び、今後はすべて貴族によって統治されることになりました。

6. しかし、アリストブロスは新たな騒乱の根拠をもう一つ与えた。彼はローマから逃亡し、昔から彼に好意を抱いていた、変化を望むユダヤ人の多くを再び集めた。そして、最初にアレクサンドリアを占領したとき、彼はその周りに壁を築こうとした。しかし、ガビニウスがシスクリア、アントニウス、セルウィリウスの指揮する軍隊を彼に向けて送ると、彼はすぐにそれに気づき、マカエロスに撤退した。そして、役に立たない群衆については、彼は解散させ、武装した者だけを連れて進軍した。その数は 8000 人だった。その中には、エルサレムで副官を務めていたが、1000 人の部下とともにアリストブロスに逃亡したピトラオスもいた。そのため、ローマ軍は彼に従い、戦闘になると、アリストブロスの部隊は長い間勇敢に戦った。しかし、ついに彼らはローマ軍に打ち負かされ、そのうちの五千人が倒れ、約二千人が小さな丘に逃げたが、アリストブロスと共に残った千人はローマ軍を突破し、マカエロスに進軍した。王は最初の夜をその廃墟に宿営した後、戦争がしばらく止むなら、別の軍隊を召集できると期待していた。したがって、彼はその要塞を強化したが、やり方は悪かった。しかし、ローマ軍が襲い掛かると、彼は二日間、自分の力を超えて抵抗したが、その後捕らえられ、ローマから一緒に逃げていた息子のアンティゴノスとともに、捕虜としてガビニウスのもとへ連れて行かれた。そして、ガビニウスのもとから、彼は再びローマへ連れて行かれた。そこで、元老院は彼を監禁したが、彼の子供たちをユダヤに返した。なぜなら、ガビニウスは手紙で、要塞を彼に引き渡す代わりに、アリストブロスの母親にそうすることを約束したと彼らに伝えたからである。

7. ガビニウスがパルティア人との戦争に進軍していたとき、プトレマイオスの妨害を受けた。ガビニウスはユーフラテス川から戻るとプトレマイオスをエジプトに連れ戻し、ヒルカノスとアンティパトロスを利用してこの遠征に必要なすべてのものを用意させた。アンティパトロスは彼に金、武器、穀物、援軍を提供した。また、彼はそこにいたユダヤ人を説得し、ペルシウムの大通りを警備して彼らが通れるようにした。しかし、ガビニウスが不在の間、シリアの他の地域が動き出し、アリストブロスの息子アレクサンダーが再びユダヤ人を反乱させた。そこで彼は非常に大きな軍隊を集め、国内のローマ人全員を殺害し始めた。ガビニウスは恐れて（彼はすでにエジプトから戻っていたが、この騒動のために急いで戻らざるを得なかった)、アンティパトロスを派遣し、反乱者の一部を説得して静かにさせた。しかし、アレクサンダーのもとには三万人が残っており、アレクサンダー自身も戦う気満々だった。そこでガビニウスは戦いに出向いたが、ユダヤ人たちは彼と出会った。タボル山の近くで戦いが起こり、一万人が殺され、残りの群衆は散り散りになって逃げていった。そこでガビニウスはエルサレムに来て、アンティパトロスの望むとおりに政府を定め、そこから進軍してナバテア人と戦い、打ち負かした。パルティンから逃げたミトリダテスとオルサネスについては、密かに追い払ったが、兵士たちには逃げたと告げた。

8. その間に、クラッススがガビニウスの後継者としてシリアにやって来た。彼はパルティア遠征の資金としてエルサレム神殿の残りの金貨をすべて奪った。またポンペイウスが触れなかった二千タラントも奪ったが、ユーフラテス川を渡ったとき、クラッスス自身も軍も共に滅んだ。この件については、今は語るにふさわしい時期ではない。

9. しかし、カッシウスはクラッススに続いて、シリアに進軍していたパルティア軍を阻止した。カッシウスはその州に逃げ、そこを占領すると、急いでユダヤに進軍し、タリケアを占領すると、3 万人のユダヤ人を奴隷にした。また、アリストブロスの反乱軍を支援していたピトラオスも殺害したが、そうするように助言したのはアンティパトロスであった。このアンティパトロスは、アラビソスの名門キュプロス家の妻を娶り、ファサイロスとヘロデ（後に王となった）の 4 人の息子をもうけた。さらに、ヨセフとフェロラスもいた。また、サロメという名の娘もいた。彼は、親切な奉仕と親切なもてなしによって、あらゆる場所で権力者たちと親交を深めた。アレクサンドロスは、その親戚と結婚することで、アラビア王と最大の友好関係を結んだ。そのため、アレクサンドロスがアリストブロスと戦争をしたとき、彼は子供たちを彼に託した。カッシウスがアレクサンドロスに和解と静穏を強いると、彼はパルティア人が再びそこを渡るのを防ぐためにユーフラテス川に戻った。この件については、別の機会に述べることにする。11

E.2.9　第 9 章

> アリストブロスはポンペイウスの友人によって連れ去られ、その息子アレクサンダーもスキピオによって連れ去られた。アンティパトロスはポンペイウスの死後、カエサルとの友情を育み、その戦争でもミトリダテスを支援して大きな功績を挙げた。

1. さて、ポンペイウスと元老院がイオニア海を越えて逃亡すると、カエサルはローマと帝国を支配下に置き、アリストブロスを解放した。また、彼に 2 個軍団を委ね、急いでシリアに送り込んだ。彼ならシリアとユダヤに隣接する地域を容易に征服できると期待したからである。しかし、嫉妬がアリストブロスの敏捷性とカエサルの期待を妨げた。ポンペイウスの党員が毒を盛って殺したためである。そして、長い間、彼は自分の国で埋葬されることさえなく、彼の死体は蜂蜜に保存されたまま地上に横たわっていたが、アントニウスによってユダヤ人に送られ、王家の墓に埋葬された。

2. 彼の息子アレクサンドロスも、アンティオキアでスキピオに斬首されたが、これはポンペイウスの命令によるもので、ローマ人に対して行った悪事の罪で法廷に告発された。しかし、当時レバノスの下でカルキスの支配者であったメネウスの息子プトレマイオスは、息子フィリッピオをアスカロンに送り、兄弟たちを彼のもとに連れて行った。アスカロンはアンティゴノスとその姉妹たちをアリストブロスの妻から引き離し、父親のもとに連れて帰った。そして、アンティゴノスは妹に恋をして結婚したが、後に彼女のせいで父親に殺された。プトレマイオス自身も息子を殺した後、アレクサンドラという名の彼女と結婚し、その結婚のおかげで、彼は彼女の兄妹をより大切に扱うようになった。

3. さて、ポンペイウスが死んだ後、アンティパトロスは寝返り、カエサルとの友好関係を育んだ。ペルガモスのミトリダテスは、エジプトに対抗する軍勢を率いてペルシウム周辺の街道から締め出され、アセアロンに留まら

ざるを得なくなったので、かつて暮らしていたアラビア人たちに助力を説き、自らも三千人の武装兵を率いてカエサルのもとに赴いた。また、シリアの有力者たち、またリバノス、プトレマイオス、ヤンブリコス、そしてもう一人のプトレマイオスの住民たちにも助力を促した。こうして、その国の都市は喜んでこの戦争に参戦した。そのため、ミトリダテスは、アンティパトロスから得たさらなる力を頼りに、ペルシウムに進軍することを敢えてした。そして、彼らが通行を拒否すると、彼はその都市を包囲した。この場所への攻撃でアンティパトロスは特に目立った。彼は向かい側の城壁の一部を崩し、周囲の兵士たちとともに真っ先に市内に飛び込んだのである。

4. こうしてペルシウムは陥落した。しかし、彼らが進軍を続けると、オニアスの国と呼ばれる地域に住むエジプトのユダヤ人たちが彼らを阻止した。そこでアンティパテルは彼らを阻止しないよう説得しただけでなく、彼らの軍隊に食料を与えるよう説得した。そのため、メンフィス周辺の人々でさえ彼らと戦わず、自ら進んでミトリダテスに加わった。そこで彼はデルタを回り、ユダヤ人の陣営と呼ばれる場所で残りのエジプト人と戦った。いや、右翼のすべてが戦いで危険にさらされたとき、アンティパテルは方向転換し、川岸に沿って彼のところまで来た。なぜなら、彼は左翼を率いて彼に反対する者たちを打ち負かしていたからである。この勝利の後、彼はミトリダテスを追撃していた者たちを襲撃し、その大部分を殺し、残りの者たちを追撃して彼らの陣営を奪取したが、自分の部下のうち失ったのはせいぜい 80 人であった。ミトリダテスは追撃の間に約 800 人の兵士を失った。彼自身も予想外に助かり、アンティパトロスの偉大な行為についてシーザーに非の打ちどころのない証人となった。

5. そこでカエサルは、アンティパトロスに他の危険な計画を遂行するよう奨励し、そのために彼に大きな賞賛と報酬の希望を与えた。そのすべての計画において、彼は多くの危険に身をさらし、最も勇敢な戦士となった。そして、彼の勇敢さの証拠として、彼の体中に多くの傷があった。そしてカエサルはエジプトの問題を解決し、再びシリアに戻るとき、彼にローマ市民の特権と免税を与え、彼に名誉と友情の印を与えて彼を賞賛の対象にした。このため、彼はヒルカノスを大祭司に任命した。

E.2.10　第 10 章

> シーザーはアンティパトロスをユダヤの総督に任命し、同様にファサエロスをエルサレムの総督に、ヘロデをガリラヤの総督に任命した。しばらくしてヘロデは [サンヘドリンの前で] 自ら釈明するよう求められ、無罪となった。セクストゥス・シーザーはバッソスによって裏切り殺され、マルクスが後を継いだ。

1. この頃、アリストブロスの息子アンティゴノスがカエサルのもとにやって来て、驚くべき形でアンティパトロスのさらなる昇進のきっかけとなった。というのは、アンティパトロスは、父がポンペイウスとの争いのために毒殺されたらしいことを嘆き、スキピオの兄に対する蛮行を訴え、恩赦を請う際に敵意を混ぜるべきではなかったのに、カエサルの前に出て、ヒルカノスとアンティパトロスが彼とその兄弟たちを故郷から完全に追い出し、彼らの国に関して多くの例で不当かつ法外な行動をとったことを非難した。また、彼らが彼をエジプトに送り込んだ援助については、それは彼に対する善意からではなく、以前の争いから彼らが抱いていた恐れから、そして [敵] ポンペイウスとの友情に対する許しを得るために行われたものであった。

2. そこでアンティパトロスは上着を脱ぎ捨て、自分の受けた傷の数々を見せ、カエサルに対する好意について

は、自分自身は何も言わなかったが、体が悲鳴を上げていたため、一言も言う必要がなかった、アンティゴノス自身もローマ人の敵であり逃亡者の息子であり、父から受け継いだ革新と反乱を好む性格でありながら、ローマ総督の前で他人を告発し、自分が生き長らえていることに満足すべきときに、自分に利益をもたらそうとするアンティゴノスの大胆さに驚いた、と言った。というのは、彼が公務を統括したいと望んだ理由は、それを必要としていたからというよりも、もし彼がそれを手にすることができれば、ユダヤ人の間に反乱を起こさせ、ローマ人から得たものを、彼にそれを与えた人々に不利益となるように利用するかもしれないからであった。

3. カエサルはこれを聞くと、ヒルカノスを最高神官に最もふさわしい者と宣言し、アンティパトロスに望む権威を選ぶ許可を与えた。しかし、その権威の決定は、その権威を授けた者に委ねた。こうしてヒルカノスはユダヤ全土の行政長官に任命され、さらに、破壊された国の城壁を再建する許可を得た。カエサルは、これらの名誉ある許可をカピトリオンに刻ませるように命令し、それがカエサル自身の正義とアンティパトロスの美徳の証としてそこに立つようにした。

4. しかし、アンティパトロスはカエサルをシリアから連れ出すとすぐにユダヤに戻り、まずポンペイウスが倒した自国 [エルサレム] の城壁を再建し、次に国中を巡って、そこにある騒乱を鎮めようとした。そこで彼は、すべての人々を半ば脅し、半ば忠告し、ヒルカノスに服従すれば、幸福で平和に暮らし、所有物を享受し、しかも全世界が平和で平穏であると告げた。しかし、利得を得るために新たな問題を起こして冷淡な希望を抱いている者たちの言うことを聞いてしまうと、ヒルカノスは総督ではなく領主となり、ヒルカノスは王ではなく暴君となり、ローマ人もカエサルも支配者ではなく敵となるだろうと告げた。なぜなら、彼らはヒルカノスを総督に任命したのだから、彼を政府から排除することを許さなかったからである。そして、こう言うと同時に、彼はヒルカノスが無気力で、王国の事柄を管理するのに適さないと見て、自ら国の事柄を解決した。そこで彼は長男のファサエロスをエルサレムとその周辺の地域の総督に任命し、また、非常に幼かった次男のヘロデを同等の権限をもってガリラヤに派遣した。

5. ヘロデは活動的な人物であり、すぐにその活動的な精神を働かせるのにふさわしい材料を見つけた。盗賊の首領ヒゼキヤが大勢の男たちを率いてシリアの近隣地域を襲撃しているのを知ったヘロデは、ヒゼキヤを捕らえて殺し、さらに他の多くの盗賊たちも殺した。この功績はシリア人にとって特に喜ばしいものであったため、ヘロデは村々や都市で、ヒゼキヤがシリアの平穏を守り、所有物を守ったことを称えて賛美歌を歌った。このとき、ヘロデは偉大な皇帝の親族でシリアの大統領であったセクストゥス・シーザーと知り合いになった。彼の輝かしい行動に正当な見習いたいという気持ちから、ファサイロスも彼に倣うようになった。したがって、彼は自ら市の事務を管理することでエルサレムの住民の好意を獲得し、いかなる不愉快な方法でも権力を乱用しなかった。それによって、国民はアンティパトロスに王にのみ与えられるべき敬意を払い、国民全員が彼に与えた名誉は絶対君主に与えられるべき名誉と同等であった。しかし、アンティパトロスはヒルカノスに対する善意や忠誠心を少しも減らさなかった。

6. しかし、彼はその繁栄の中で嫉妬から逃れることは不可能だと分かった。というのは、これらの若者たちの名声は、ヒルカノス自身にも内心では影響を与えていたが、ヒルカノスは誰にもそのことを言わなかった。しかし、彼が主に悲しんでいたのは、ヘロデの偉大な行為と、多くの使者が次々にやって来て、彼があらゆる事業で得た大きな評判を彼に伝えたことであった。また、王宮自体にも、彼に対する嫉妬をかき立てる多くの人々がいた。つまり、若者たちかアンティパトロスの慎重さによって計画が妨げられた人々である。これらの人々は、アンテ

ィパトロスとその息子たちに公務を委ねることで、彼は王の名だけを持ち、その権威を全く持たずに座についた、と言った。そして、自分の利益に反して王を育てるという誤った行動をいつまで続けるのかと彼に尋ねた。というのは、彼らはもはや政務を隠すことはなく、明らかに国の君主となり、彼を権威から追放したからである。ヘロデが口述や手紙で命令することなく、ユダヤ人の法律に反して、あれほど多くの者を殺したときもそうであった。したがって、彼が王ではなく私人であったとしても、ユダヤ人は裁判に臨み、彼に答えるべきであり、また、裁判で有罪判決が下されるまでは誰も殺されないという彼の国の法律にも従うべきである。

7. ヒルカノスは、次第にこれらの説教に激怒し、ついには耐えられなくなり、裁判を受けるためにヘロデを召喚した。そこで、父の助言に従い、ガリラヤの状況が許すとすぐに、彼はガリラヤに駐屯軍を置いた後、エルサレムに上陸した。しかし、彼は十分な兵士を率いて来た。確かに、ヒルカノスの政府を打倒できるほどの軍隊を持っているようには見えないほどの人数であったが、嫉妬する者たちの侮辱を受けるほどの人数ではなかった。しかし、セクストゥス・カエサルは、若者が敵に捕らえられ、処罰されるのではないかと恐れた。そこで、ヒルカノスに、死刑の告発を無罪にするよう、何人かを差し向けた。ヒルカノスは、自分も死刑に処する気だったから、死刑に処する気だったとして、彼を無罪とした。

8. しかしヘロデは、王の同意なしに処罰を逃れたと思い、セクストゥス、ダマスカスに退き、再び召喚されても従わないよう、あらゆる準備を整えた。すると、悪意ある者たちがヒルカノスを怒らせ、ヘロデは怒って出て行き、自分と戦う用意をしていると告げた。王は彼らの言うことを信じたが、敵が自分より強いのを見て、どうしたらよいか分からなかった。そして今、ヘロデはセクストゥス・カエサルによってコエレシリアとサマリアの将軍に任命されたので、国民の好意だけでなく、彼自身の力によっても恐るべき存在となった。そのためヒルカノスは極度の恐怖に陥り、彼がすぐに軍隊を率いて自分に向かって進軍してくるだろうと予想した。

9. 彼の推測は間違っていなかった。なぜなら、ヘロデは、ヒルカノスが公の法廷で告発して脅したことに対する怒りから、軍隊を召集し、エルサレムに進軍してヒルカノスを王国から追放しようとしたからである。そして、父と兄が一緒に出かけてヒルカノスの怒りの勢いを弱めなければ、彼はすぐにそれを成し遂げた。その怒りの強さは、脅迫と恐怖以上の復讐はせず、彼が権力を握っていた王を赦すようにと彼に説き伏せたことによる。また、裁判にかけられたことに腹を立てるあまり、無罪放免になったことへの感謝を忘れるべきではないし、憂鬱なことについて長く考えすぎて、救出されたことへの感謝を忘れるべきではないとも説き伏せたことによる。そして、もし私たちが、戦争の勝敗の裁定者は神であるとみなすべきであるならば、不当な理由は軍隊が有利になるよりも不利になる。そして、それゆえ、ヘロデは、自分の王、自分の支持者、そしてしばしば自分の恩人であり、自分に対して決して厳しくなかった者、つまり、邪悪な助言者たちの言うことに耳を傾けたのと同程度、そして不正の影を自分にもたらしただけである者と戦う場合、勝利を確信しきれないはずだ、と。こうしてヘロデはこれらの議論に説得され、自分がすでに行ったことは将来の希望には十分であり、国民に自分の力を十分に示せたと考えた。

10. その間に、アパミアをめぐってローマ人の間で騒乱が起こり、ポンペイウスへの好意からセクストゥス・カエサルを裏切り殺害したケシリウス・バッススが内戦を起こした。バッススはポンペイウスの軍隊の指揮権も握った。しかし、カエサルの残りの指揮官たちがカエサル殺害の罰としてバッススを全軍で攻撃したため、アンティパトロスもまた、殺害されたバッススとまだ生きていたカエサルの友人である息子たちを派遣して彼らに援助を求めた。この戦争が長引くと、セクストゥスの後継者としてマルクスがイタリアからやって来た。

E.2.11　第 11 章

ヘロデはシリア全土の総督に任命され、マリコスは彼を恐れてアンティパトロスを毒殺した。そこで兵士の護民官たちは彼を殺すよう説得された。

1. 当時、ローマ人の間では、カエサルが 3 年 7 ヶ月間政権を握っていたのに、カッシウスとブルートゥスがカエサルを突然裏切り殺害したことで、激しい戦争が勃発していた。14 この殺害により、非常に大きな動揺が起こり、有力者たちは互いに激しく対立し、誰もが自分たちが前進するために最も希望を抱いている党派に味方した。そこでカッシウスは、アパミアの軍勢を受け入れるためにシリアに赴き、そこでバッススとマルクス、そして彼と対立していた軍団との和解を実現した。そこで彼はアパミアの包囲を解き、軍の指揮を執り、都市から貢物を徴収し、彼らが耐えられないほどの金銭を要求した。

2. そこで彼はユダヤ人に七百タラントを納めるように命じた。そこでアンティパトロスはカッシウスの脅しを恐れて、この金額を集めるのを息子たちや知り合いの人たちに分担させ、すぐにやらせた。その中で彼は、自分と敵対していたマリコスという人物にも、必要に迫られて自分の分もやるように要求した。さて、ヘロデはまず第一に、カッシウスの怒りを和らげるために、ガリラヤから百タラントの自分の分を持ってきて、カッシウスに大いに気に入られた。そして、残りの者たちが遅れていると非難すると、町々自体に怒りを覚えた。そこで彼はゴフナとエマオ、および他の二人のあまり有名でない者たちを奴隷にした。それどころか、マリコスがもっと急いで貢物を徴収しなかったからと、まるでマリコスを殺すかのように事を進めた。しかしアンティパトロスは、この男と他の都市の破滅を防ぎ、すぐに 100 タラントを持ち込んでカッシウスの好意を得た。15

3. しかし、カッシウスが去ると、マリコスはアンティパトロスが自分にしてくれた親切を忘れ、自分の邪悪な行いの邪魔者だったマリコスを急いで追い払おうと、自分を救ってくれたアンティパトロスに対して度々陰謀を企てた。しかし、アンティパトロスはマリコスの権力と狡猾さを非常に恐れ、彼の裏切りの計画から身を守るために軍隊を編成するためにヨルダン川を越えて行った。しかし、マリコスが陰謀に巻き込まれると、彼は厚かましさでアンティパトロスの息子たちを苦しめた。なぜなら、彼はエルサレムの守護者であったファサイロスと、戦争の武器を託されていたヘロデを、多くの言い訳と誓いによって完全に欺き、父との和解を成立させるよう説得したからである。こうして、彼は再びアンティパトロスによって守られ、シリアの当時の総督マルクスは、マリコスが革新を企てたためにマリコスを殺害する決意を思いとどまった。

4. カッシウスとブルートゥスが、他方で若いカエサル（アウグストゥス）とアントニウスと戦ったとき、カッシウスとマルクスはシリアから軍隊を集めた。ヘロデは必需品の調達に大いに貢献しそうだったので、彼らは彼をシリア全土の総督に任命し、歩兵と騎兵の軍隊を与えた。カッシウスはまた、戦争が終わったら彼をユダヤの王にすると約束した。しかし、息子の権力と希望が彼の破滅の原因となった。マリコスはこれを恐れ、アンティパトロスに毒入りの薬を与えるために、金銭で王の酌官の一人を堕落させた。こうして、マリコスはマリコスの悪行の犠牲となり、宴会で死んだ。彼は他の点では政務に積極的で、ヒルカノスに政権を取り戻し、それを彼の手に保持した人物であった。

5. しかし、マリコスは、アンティパトロスを毒殺した疑いをかけられ、群衆が彼に怒りをぶつけたとき、それを

否定し、人々に自分が無罪であると信じさせた。彼はまた、もっと大きな存在になろうと準備し、兵士を募った。なぜなら、彼は、ヘロデが父の死を復讐するために軍隊を率いてすぐにマリコスに襲い掛かってきたので、彼が黙っているとは思わなかったからである。しかし、群衆が暴動を起こす恐れがあるので、公然とマリコスを処罰しないようにという兄弟ファサイロスの助言を聞いて、マリコスはマリコスの謝罪を認め、その疑いを晴らしたと公言し、また、父親のために盛大な葬儀を行った。

6. そこでヘロデは、当時騒乱状態にあったサマリアに行き、その町を平和に治め、その後、ペンテコステ祭の日に武装した部下を連れてエルサレムに戻った。そこでヒルカノスは、非難を恐れたマリコスの要請により、部下が身を清めている間、外国人を国に招き入れて混じり合うことを禁じた。しかしヘロデはその口実と、その命令を下した者を軽蔑し、夜中にやって来た。そこでマリコスがやって来てアンティパテルの死を嘆いた。ヘロデもまたマリコスを信じ込ませたが（彼はマリコスの嘆きを真実であると認めた）、彼に対する怒りを抑えるのに苦労した。しかし、彼自身もカッシウスに宛てた手紙の中で父の殺害を嘆いた。カッシウスもまた、他の理由でマリコスを憎んでいた。カッシウスはヘロデに父の死の復讐をするよう言い、部下の護民官たちにはヘロデが行っている正義の行為に協力するよう密かに命令した。

7. カッシウスがラオデキアを占領すると、権力者たちが贈り物や王冠を手に、四方八方から集まってきたので、ヘロデはマリコスを処罰するためにこの時間を割いた。マリコスはそれを察知してティルスにいたとき、人質にしていた息子をティルス人の中からひそかに引き離し、自分はユダヤに逃げる準備をしようと決心した。逃げ切れないという絶望感から、もっと大きなことを考えるようになった。カッシウスがアントニウスとの戦争に忙しい間に、国をローマ人に対する反乱へと駆り立て、ヒルカノスを簡単に退位させて王冠を手に入れようと考えたからである。

8. しかし運命は彼の望みをあざ笑った。ヘロデは彼が熱心になっていることを見抜いて、ヒルカノスと彼を夕食に招いた。しかし、彼の傍らにいた主立った召使の一人を呼び出して、夕食の準備をさせるかのように彼を送り出したが、実際には彼に対して企てられた陰謀を事前に知らせるためであった。そこで彼らはカッシウスが彼らに与えた命令を思い出し、剣を手に町から出て海岸に向かい、マリコスを四方から取り囲み、多くの傷を負わせて殺した。ヒルカノスはすぐに驚いて気を失い、驚いたために倒れた。マリコスを殺したのは誰かと尋ねた時、彼はやっと意識を取り戻した。そして護民官の一人が、それはカッシウスの命令によるものだと答えると、彼は「それでは」と言った。「カッシウスは、私と祖国の両方を、彼らに対して陰謀を企てていた者を断ち切ることで救ってくれたのだ」。彼が自分の感情に従って言ったのか、それとも恐れが大きかったためにそう言ってその行動を賞賛せざるを得なかったのかは定かではないが、この方法でヘロデはマリコスに罰を与えた。

E.2.12　第 12 章

ファサイロスはフェリクスにとって手ごわすぎた。ヘロデもまた、ラトルでアンティゴノスを打ち負かした。ユダヤ人はヘロデとファサイロスの両者を告発したが、アントニウスは彼らを無罪とし、四分領主とした。

1. カッシウスがシリアから去った後、エルサレムでまた暴動が起こり、フェリクスは軍隊を率いてファサイロス

を襲撃した。ヘロデにマリコスの死の復讐をするために、彼の兄弟を襲おうとしたのである。ヘロデはちょうどその時、ダマスカスの総督ファビウスと一緒にいて、兄の助けに行く途中、病気で足止めされた。その間、ファサイロスはフェリクスに厳しく接し、マリコスを助けたことと、マリコスの兄弟が要塞を占領した際に見落としたことの両方について、ヒルカノスの恩知らずを非難した。ヒルカノスはすでに多くの要塞を占領しており、その中で最も強固だったマサダも占領していたからである。

2. しかし、ヘロデの力に対抗できるものは何もなかった。ヘロデは回復するとすぐに他の要塞を再び奪い、嘆願者の姿勢で彼をマサダから追い出した。また、すでに 3 つの要塞を占領していたティルスの暴君マリオンをガリラヤから追い出した。しかし、捕らえたティルス人については、全員生かしておいた。それどころか、何人かに贈り物をして追い払い、それによって町から好意を勝ち取り、暴君に憎しみを抱かせた。マリオンは、シリア全土に暴君を置いたカッシウスの暴君的権力を確かに得ており、ヘロデへの憎しみから、アリストブロスの息子アンティゴノスを助けたが、それは主にファビウスのおかげであった。アンティゴノスは金銭でファビウスを助手にし、彼が下ったときには彼を味方につけていた。しかし、彼が必要とするものをすべて供給したのは、アンティゴノスの親族であるプトレマイオスだった。

3. ヘロデはユダヤの街路でこれらの者たちと戦って勝利し、アンティゴノスを追い払ってエルサレムに帰った。彼はその輝かしい行動により、すべての人から愛されていた。以前は彼に好意を寄せていなかった人々も、彼がヒルカノス家と結婚したことにより、彼に加わったのである。彼は以前、自分の国から、ドリスという名の、高貴な血筋の妻を娶り、彼女からアンティパトロスをもうけたのと同様に、今度は、アリストブロスの息子でヒルカノスの孫娘であるアレクサンダーの娘であるマリアムネと結婚し、それによって王の血縁者となったのである。

4. しかし、カエサルとアントニーがフィリッピ近郊でカッシウスを殺害し、カエサルがイタリアへ、アントニーがアジアへ、そしてビテュニアのアントニーに大使を送った他の都市へ行ったとき、ユダヤ人の有力者たちもやって来て、ファサイロスとヘロデを、彼らが力ずくで政権を維持しており、ヒルカノスは名誉ある名声以上のものを持っていないと非難した。ヘロデはこの非難に答える用意があるように見え、多額の金銭を与えてアントニーを友人にし、アントニーを怒らせて、他の人々が彼に反対するのを聞かないようにした。こうして彼らはこのとき別れた。

5. しかし、その後、ユダヤ人の主だった人物百人が、アンティオキアを通ってダフネにやって来た。アントニーは、すでにクレオパトラに奴隷の身分になるほど恋をしていた。これらのユダヤ人は、威厳と雄弁さの両方で最も有力な人物を前面に押し出し、兄弟たちを非難した。17 しかしメッサラは彼らに反対し、兄弟たちを擁護し、ヒルカノスは彼らとの関係を理由に彼の側に立った。アントニーは両方の言い分を聞いた後、ヒルカノスにどちらの党派が統治に最も適しているか尋ねた。ヒルカノスは、ヘロデとその党派が最も適していると答えた。アントニーはその答えに喜んだ。なぜなら、以前ガビニウスと共にユダヤに進軍したとき、父アンティパトロスから親切で親切なもてなしを受けたからである。そこで彼は兄弟たちを四分領主とし、ユダヤの統治を彼らに委ねた。

6. しかし、使節たちがこのやり方に憤慨すると、アントニーは彼らのうち 15 人を捕らえて拘留し、すぐに殺すつもりで、残りの者も追い払った。このときエルサレムでさらに大きな騒動が起こった。そこで彼らは、エルサレムへ向かう途中のアントニーが滞在していたティルスに、再び 1000 人の使節を派遣した。騒ぎを起こしたこれらの人々に対して、アントニーはティルスの総督を派遣し、捕まえられる者全員を処罰し、四分領主とした者

たちを行政に定着させるよう命じた。

7. しかし、その前にヘロデとヒルカノスは海岸に出て、これらの使節たちに、軽率な争いで自らを破滅させたり、祖国に戦争をもたらさないように熱心に頼んだ。彼らがさらに暴虐を極めると、アントニーは武装した兵士たちを派遣し、大勢の人々を殺し、さらに負傷させた。殺された者たちはヒルカノスによって埋葬され、負傷者は医師の手当てを受けた。しかし、逃げ延びた者たちは静かにしていたわけではなく、むしろ町の情勢を混乱に陥れたため、アントニーは激怒し、拘束していた者たちも殺した。

E.2.13　第 13 章

パルティア人はアンティゴノスをユダヤに連れ戻し、ヒルカノスとファサエロスを投獄した。ヘロデの逃亡、エルサレムの占領、そしてヒルカノスとファサエロスの苦難。

1. それから二年後、パルティア人の総督バルザファルネスと王の息子パエオルスがシリアを占領し、リサニアスが父プトレマイオス（メネウスの息子）の死後、カルキスの統治権を継承していたとき、彼は総督を説得し、千タラントと五百人の女性を約束してアンティゴノスを王国に連れ戻し、ヒルカノスを王国から追い出した。パコルスはこれらの手段で説得され、海岸に沿って行軍し、地中海沿いにユダヤ人を襲うようバルザファルネスに命じた。しかし、海辺の民のうち、ティルス人はパコルスを受け入れなかったが、プトレマイオスとシドンの人々は彼を受け入れた。そこで彼は、自分の馬の一隊を、王家の、彼自身の名を持つある酌官 [パコルス] に託し、ユダヤに進軍して敵の情勢を調べ、アンティゴノスが援助を必要とするときに助けるよう命令した。

2. これらの人々がカルメル山を荒らしていたとき、多くのユダヤ人がアンティゴノスのもとに駆けつけ、この地への侵攻の用意を見せた。そこで彼は彼らをドライモスと呼ばれる場所（森 18 ）に先に送り、その場所を占領させた。そこで彼らの間で戦いが起こり、彼らは敵を追い払い、追撃してエルサレムまで追いかけ、人数が増えて王宮まで進んだ。しかしヒルカノスとファサイロスが強力な部隊を率いて彼らを迎え撃つと、広場で戦いが起こり、ヘロデの党は敵を打ち負かし、神殿に閉じ込め、隣接する家に 60 人の男を警備兵として配置した。しかし兄弟たちに対して騒ぎを起こしていた民衆が押し寄せ、その男たちを焼き殺した。一方、ヘロデは、彼らを殺したことに激怒し、民衆の多くを襲撃して殺害した。その結果、一方が待ち伏せして毎日交互に他方を襲撃し、民衆の間で虐殺が絶え間なく行われた。

3. さて、ペンテコステと呼ばれる祭りが近づいたとき、神殿の周りのすべての場所と町全体が、田舎から出てきた大勢の人々でいっぱいでした。彼らの大部分は武装していました。そのとき、ファサイロスは城壁を守り、ヘロデは少数の兵士とともに王宮を守っていました。そして、町の北側で戦列を乱していた敵を襲撃し、非常に多くの敵を殺し、全員を敗走させました。そして、そのうちの何人かを町の中に閉じ込め、他の何人かを外側の城壁の中に閉じ込めました。その間、アンティゴノスは、パコルスが彼らの間の調停者になることを望みました。そして、ファサイロスは、騒乱を鎮めるために来たと見せかけて、実際にはアンティゴノスを助けるために来たパルティア人を、500 騎の騎兵とともに町に入れ、手厚くもてなすように説得されました。しかし、彼はファサイロスに陰謀を企て、戦争を終わらせるためにバルザファルネスに使節として行くよう説得した。ヘロデはそれに反対し、陰謀者を殺すよう勧めたが、野蛮人は生来不誠実なので、彼が仕掛けた罠にはかからないようにした。

しかし、パコルスは出かけて行き、疑われないようにヒルカノスを連れて行った。また、自由人と呼ばれる騎兵の何人かをヘロデに残し、ファサイロスを残りの者たちと一緒に導いた。

4. ところが、ガリラヤに着くと、その地方の民衆が反乱を起こし、武装していたことが分かり、彼らは非常に巧妙に指導者のもとにやって来て、自分たちへの親切な態度で裏切りの意図を隠すように懇願した。そこで指導者はまず贈り物をし、その後、彼らが立ち去るときに待ち伏せをした。そして、エクディポンと呼ばれる海沿いの都市の一つに着くと、彼らは陰謀が企てられていることに気づいた。そこで彼らは、千タラントの約束と、アンティゴノスが彼らと一緒にいた五百人の女性のうち最も多くの女性をパルティア人に捧げたことを知らされたからである。また、夜間に蛮族が常に待ち伏せしていることも知った。彼らは、エルサレムでヘロデが最初に捕らえられるのを待っていなければ、この前にも捕らえられていた。なぜなら、ヘロデが彼らのこの裏切りを一度でも知らされれば、彼は自分の身を守るだろうからである。これは単なる報告ではなく、彼らはすでに警備員がそれほど遠くないところにいたのを目撃した。

5. ファサイロスは、オフェリウスが熱心に説得したにもかかわらず、ヒルカノスを見捨てて逃げ去ろうとは考えなかった。なぜなら、この男は、シリア人の中で最も裕福なサラマッラから陰謀の全容を聞き出していたからである。しかし、ファサイロスはパルフィリア総督のもとへ行き、この裏切りの陰謀を企てたこと、そして主に金銭目的でやったことを面と向かって非難した。そして、アンティゴノスが王国のために約束した以上の金銭を、彼らを守るために与えると約束した。しかし、この狡猾なパルティア人は、謝罪と誓いによってこの疑惑をすべて払拭しようと努め、それからパコルスのもとへ向かった。その直後、残って指揮権を握っていたパルティア人たちは、ファサイロスとヒルカノスを捕らえたが、彼らは彼らの不誠実さと偽証を呪うことしかできなかった。

6. その間に、献酌官が送り返され、ヘロデを騙して町から連れ出し、命令通りに捕らえる計画を立てた。しかしヘロデは最初から蛮族を疑っていた。そして、裏切りの計画を知らせる手紙を届ける使者が敵に捕まったという知らせを受けて、町から出ようとしなかった。パコルスは、手紙を届けた使者に会いに行くべきだと強く主張した。手紙は敵に盗まれておらず、内容は陰謀ではなくファサエロスの仕業であると。しかし、他の人から弟が捕らえられたと聞いていた。そして、世界で最も聡明な女性であり、ヒルカノスの娘であるアレクサンドラ 20 は、彼に、外出しないでほしい、そして今や公然と彼を攻撃しに来た野蛮人たちに身を委ねないようにと懇願した。

7. パコルスとその友人たちは、いかにして秘密裏に計画を実行に移すかを検討していた。これほどの慎重さを持つ男を公然と攻撃してかわすのは不可能だったからである。そこでヘロデは彼らを阻止し、敵に知られることなく、夜中に最も近しい人々と出発した。しかし、パルティア人はそれを知るや否や彼らを追跡した。彼は母と妹、婚約中の若い女性とその母親、そして末の弟に、最善を尽くすように命じ、自分は家来たちとともに、蛮族を寄せ付けないように全力を尽くした。そして襲撃のたびに、多数の蛮族を殺し、マサダの要塞にたどり着いた。

8. いや、彼は経験から、パルティア人よりもユダヤ人が彼に激しく攻撃し、絶えず彼を悩ませていることを知った。これは彼が町から 60 スタディオン離れたときからずっと続いていた。このため、町は時々、ある種の定期的な戦闘に発展した。さて、ヘロデがユダヤ人を打ち負かし、その多くを殺した場所に、彼は後に、そこで行った偉大な行為を記念して城塞を建設し、最も高価な宮殿でそれを飾り、非常に強力な要塞を建て、自分の名前にちなんでヘロディウムと名付けた。さて、彼らが逃げている間、毎日多くの人が彼に加わった。そして、イドマヤのトレサと呼ばれる場所で、彼の兄弟ヨセフが彼に会い、マサダは 9000 人以上のそのような大群を収容でき

ないので、彼の多くの追随者を休ませるよう彼に勧めた。ヘロデはこの助言に従い、従者のうち最も重荷となる部分をイドマヤへ行かせて旅の糧食を与えた。しかし、彼は近親者と共に無事に要塞にたどり着き、従者のうち最も勇敢な者だけを残した。そして、そこに女性たちの護衛として部下 800 人と包囲戦に十分な糧食を残し、自らはアラビアのペトラへと急いだ。

9. エルサレムのパルティア人は略奪に明け暮れ、逃げた人々の家や王宮を襲撃し、ヒルカノスの金だけは惜しまず奪った。その金は三百タラントを越えなかった。彼らは他の人々の金も奪ったが、期待したほどではなかった。ヘロデは長い間蛮族の不誠実さを疑っていたので、彼の財宝の中でも最も豪華なものをイドマヤに移送するように気を配っていたし、彼の家臣たちも皆同じようにしていた。しかしパルティア人は、国中を戦争で満たしながらもそれを非難せず、マリッサの町を破壊し、アンティゴノスを王に据えただけでなく、ファサイロスとヒルカノスを縛って彼の手に引き渡し、アンティゴノスに苦しめようとした。アンティゴノス自身も、ヒルカノスにひざまずいて彼の耳を自分の歯で噛み切った。それは、いかなる状況の変化があっても、彼が二度と大祭司の地位に就くことができないようにするためであった。なぜなら、職務を遂行する大祭司は完全で、傷のない者でなければならなかったからである。

10. しかし、彼は勇気のせいでファサイロスを虐待する目的を果たせなかった。剣も手も使いこなせなかったが、石に頭をぶつけて虐待をすべて防いだ。こうして彼はヘロデの実の兄弟であり、ヒルカノスが最も堕落した親戚であることを示し、非常に勇敢に死に、その行動にふさわしい人生の終わりを迎えた。また、彼の最期については別の報告もある。すなわち、彼はその脳卒中から回復し、アンティゴノスが彼を治療するために派遣した外科医が傷口に毒物を詰めて彼を殺したという。彼がどの死に方をしたにせよ、その始まりは輝かしいものだった。また、彼が息を引き取る前に、ある貧しい女性からヘロデが彼らの手から逃れたことを知らされ、そのとき彼は「私は今、安らかに死にます。私の敵に復讐してくれる一人を生き残らせたからです」と言ったと伝えられている。

11. これがファサエロスの死であった。しかしパルティア人は、彼らが最も望んでいた女性たちを逃したにもかかわらず、エルサレムの統治権をアンティゴノスの手に委ね、ヒルカノスを捕らえて縛り、パルティアに連行した。

E.2.14　第 14 章

> ヘロデはアラビアで拒絶されると、急いでローマに行き、そこでアントニーとシーザーが協力して彼を王にしようとします。

1. さて、ヘロデは、兄がまだ生きている間に、王から金を急いで手に入れようと、アラビアへの旅をますます熱心に続けた。その金だけによって、彼は野蛮人の強欲な気質を説得して、ファサイロスを助けようとした。なぜなら、彼はこう考えていたからだ。アラビアの王が父の友情を忘れ、強欲で彼に無償の贈り物をしてくれないとしても、兄を救い出すのに十分な金を彼から借り、救い出すべき彼の息子を質物として彼の手に渡すだろう。そこで、彼は兄の息子、7 歳になる息子を連れて行った。今や彼は兄のために 300 タラントを与える用意ができており、それを受け入れてもらうためにティルス人のとりなしを願うつもりだった。しかし、運命は彼の勤勉さをはるかに超え、ファサイロスが死んだので、ヘロデの兄弟愛は今や無駄になった。さらに、彼はアラビア人の間

に永続的な友情を見出すことができなかった。彼らの王マリコスはすぐに彼のもとに使者を送り、国外へ戻るよう命じ、パルティア人の名を口実に、あたかも彼らが使節を通してヘロデをアラビアから追放するよう彼に告発したかのようにした。しかし実際には、彼らはアンティパトロスに借りがあるものを隠しておき、父親が息子たちに与えた無償の贈り物に対する返礼をしたくないと考えていた。彼はまた、自分と同様にアンティパトロスが彼らの間に預けたものをヘロデから奪おうとする人々の厚かましい助言を受け入れた。そしてこれらの人々は彼の王国にいたすべての人々の中で最も有力であった。

2. ヘロデは、アラビア人が敵であり、彼らが最も友好的であると期待していたまさにその理由から敵であると知り、自分の情熱が示唆するような返答を彼らに与えたので、引き返してエジプトに向かった。さて、彼は最初の晩、後に残してきた人々と会うために、その国の寺院の一つに宿泊した。しかし、翌日、彼がリノクラに向かっているとき、彼の兄弟が死んだこと、そして彼がなぜ死んだのかという知らせがもたらされた。彼は、現在の状況に耐えられる限りの悲しみを味わった後、すぐにそのような心配を捨てて、旅を続けた。しかし、しばらくして、アラビアの王は自分のしたことを悔い改め、すぐに使者を送って彼を呼び戻した。ヘロデは彼らを阻止してペルシウムに来たが、そこでは艦隊にいた者たちから通行許可を得ることができなかったので、彼らの艦長たちに、彼らを通して行かせてくれるように頼んだ。そこで、彼らはその男の名声と威厳を尊敬していたので、彼をアレクサンドリアに案内した。彼がその町に到着すると、クレオパトラは彼を盛大に迎えた。クレオパトラは、彼が今行っている遠征の軍の指揮官になるよう説得されるかもしれないと期待した。しかし、彼は女王の懇願を断り、その時起こった嵐の激しさにも、イタリアで起こっていた騒乱にも恐れることなく、ローマに向けて出航した。

3. しかし、パンフィリア付近で危険にさらされ、船の積荷の大部分を降ろさざるを得なかったため、カッシウスとの戦争でひどく荒廃したロドス島になんとか無事にたどり着いた。そこで彼は友人のプトレマイオスとサッピニウスに迎えられ、当時は金欠であったにもかかわらず、非常に大きな三層構造の船を準備し、友人たちとブルンドゥシウムへ航海し、そこから急いでローマへ向かった。そこで彼はまず、父の友情の故にアントニウスのもとへ行き、自分と家族の災難を告げ、要塞に包囲された近親者を残して嵐の中を航海し、助けを懇願した。

4. そこでアントニーは、ヘロデの情勢の変化に同情心を抱いた。それは、アンティパトロスから受けた厚遇を思い起こしたからでもあったが、とりわけヘロデ自身の徳のためでもあった。そこで彼は、かつて自ら領主としたユダヤ人をアンティパトロスに王位に就けようと決心した。また、アンティゴノスとの争いも、彼がヘロデに対して抱いていた大きな尊敬に劣らず重要な動機であった。アンティゴノスは反乱者であり、ローマ人の敵であるとみなしていたからである。カエサルに関しては、ヘロデはアントニーよりもカエサルのほうが準備が整っていると感じた。カエサルは、父と共に経験した戦争、カエサルから受けた厚遇、カエサルが示した善意を非常に鮮明に覚えていたからである。さらに、ヘロデ自身にも活動的なところがあった。そこで彼は元老院を召集し、メッサラスとそれに続いてアトラティヌスがヘロデを彼らの前に連れ出し、彼の父の功績とローマ人に対する彼自身の好意を詳細に説明した。同時に彼らは、アンティゴノスが敵であることを示した。それは彼がすぐに彼らと争ったからだけではなく、彼が今やローマ人を無視し、パルティア人を利用して政府を握ったからであった。これらの理由は元老院を大いに動かした。その時点でアントニーがやって来て、パルティア戦争ではヘロデが王になるのが彼らの利益になると彼らに告げたので、彼らは全員それに賛成票を投じた。そして元老院が解散すると、アントニーとシーザーはヘロデを間に挟んで出かけ、執政官と他の行政官たちは犠牲を捧げ、カピトリノで勅令を布告するために彼らの前に出た。アントニーはまた、ヘロデの治世の初日に彼のために祝宴を催した。

E.2.15　第 15 章

アンティゴノスは、ローマから戻ったヘロデによって監禁から解放されたマサダの人々を包囲し、すぐにエルサレムに進軍し、そこで賄賂によって腐敗したシロを発見する。

1. この間、アンティゴノスはマサダにいた者たちを包囲した。彼らは他の必需品は十分にあったが、水が不足していた。そのため、ヘロデの兄弟ヨセフは、マリコスがヘロデに対する罪を悔い改めたと聞いて、200 人の友人とともにアラビア人のもとへ逃げようとしていた。ヨセフは、出発するその夜に大雨が降り、貯水池が水で満たされていたため、逃げる必要がなかったのかもしれないが、すぐに要塞から出て行った。その後、彼らはアンティゴノス一行を襲撃し、野戦で、また密かに待ち伏せして、多くの者を殺した。しかし、彼らの試みは常に成功するわけではなく、時には打ち負かされて逃げ去ることもあった。

2. その間に、ローマの将軍ウェンティディウスは、パルティア人の侵攻を抑えるためにシリアから派遣され、それを終えるとユダヤにやって来た。それは、ヨセフとその一行を助けるという見せかけで、実際はアンティゴノスから金をもらうためだった。そして、エルサレムのすぐ近くに陣を張った後、十分な金をもらうと、軍の大部分を連れて出発した。しかし、軍の一部をシロに残していった。もし全員を連れて行ってしまったら、賄賂を受け取ったことがあまりにも公然と発覚してしまうかもしれないからである。アンティゴノスはパルティア人が再び助けに来ることを期待していたので、その間シロと良好な関係を築いて、その希望が妨げられないようにした。

3. さて、このころヘロデはイタリアから出帆し、プトレマイスに着いていた。そして、外国人と自国の兵士から少なからぬ軍隊を集めると、ガリラヤを通ってアンティゴノスに攻め入った。その際、ウェンティディウスとシロの援助を受けた。この二人は、アントニウスから派遣されたデリウスがヘロデを [自分の王国に] 迎え入れるよう説得した人物である。ウェンティディウスはこのころ、都市にいて、パルティア人によって起こった騒乱を鎮圧していた。ユダヤのシロは、アンティゴノスが彼に与えた賄賂によって堕落していた。しかし、ヘロデ自身は権力を失ってはいなかったが、彼の軍勢は日ごとに増え、ガリラヤ全土は、ほとんど例外なく彼に加わった。そこで彼は、包囲されている親族を救うために、マサダという最も必要な事業に着手しようと考えた。しかし、ヨッパは彼の行く手を阻み、そこへ行くのを妨害した。なぜなら、彼がエルサレムに行くとき、背後に敵の手に砦が残っていないように、敵の手中にあるその都市をまず奪取する必要があったからである。シロもまた、今や彼の軍をエルサレムから撤退させるもっともらしい機会があったので、喜んで彼に加わった。そして、ユダヤ人たちが彼を追跡し、彼を圧迫したとき、ヘロデは少数の部下とともに彼らに全力で襲いかかり、すぐに彼らを敗走させ、窮地に陥っていたシロを救った。

4. その後、ヘロデはヨッパを占領し、親族を解放するためにマサダに急いだ。彼が進軍しているとき、父との友情に誘われて、あるいは彼がすでに得ていた名声に誘われて、あるいは父と父の両方から受けた恩恵に報いるために、多くの人が彼のもとにやって来た。しかし、それでも彼の側に最も多くいたのは、彼が王国を樹立するときの期待であった。そのため、彼はすでに征服しにくい軍隊を集めていた。しかし、彼が進軍しているとき、アンティゴノスは彼を待ち伏せしたが、敵にはほとんど、あるいは全く危害を加えなかった。しかし、彼はマサダやレッサ要塞にいた親族を再び簡単に取り戻し、それからエルサレムに進軍した。そこではシロにいた兵士たち

が彼の側に加わり、彼の力を恐れた多くの兵士たちもエルサレムから来た。

5. ヘロデが町の西側に陣を張ると、そこにいた衛兵は矢を放ち、矢を投げつけ、他の衛兵は隊列を組んで飛び出し、最前線にいる者たちを攻撃した。しかしヘロデは、町の安全と民の利益のために来たのであり、公然の敵に復讐するつもりはなく、たとえ敵が自分に対して最も頑固であったとしても、彼らに忘却を与えるために来たのだと、城壁に布告するよう命じた。するとアンティゴノス側にいた兵士たちは反対の声をあげ、誰にもその布告を聞かせず、陣営を変えることも許さなかった。そこでアンティゴノスは城壁から敵を撃破するよう軍に命令した。それに応じて、彼らはすぐに塔から矢を投げつけ、敵を敗走させた。

6. そしてここでシロは彼が賄賂を受け取っていたことを知った。彼は多くの兵士に必需品の不足を訴えさせ、食料を買うために給料を要求させ、冬営に適した場所に連れて行くよう要求させた。なぜなら、町の周囲のすべての地域はアンティゴノスの軍隊によって荒廃させられ、すべてのものを奪い去っていたからである。こうして彼は軍隊を動かし、彼らを包囲から解放しようとした。しかしヘロデはシロの指揮下にある大尉たちや多くの兵士たちのところへ行き、カエサル、アントニウス、元老院から派遣された自分を見捨てないよう懇願した。そうすれば、彼はその日のうちに彼らの必要物資を賄うことができるからである。その懇願をした後、彼は急いで田舎へ行き、非常に多くの必需品をそこに持ち込んだので、シロの言いなりはすべて断ち切られた。そして、その後の数日間、食料に困らないようにするため、彼はサマリア（彼に加わった都市）付近の人々に、穀物、ワイン、油、家畜をエリコに運ぶように使いを送った。アンティゴノスはこれを聞くと、自分の部隊の何人かに、穀物を集める者たちを妨害し、待ち伏せするようにと命令を授けた。この命令は守られ、武装した大勢の男たちがエリコの周囲に集まり、食料を運ぶ者たちを監視するために山々に伏した。しかし、ヘロデは怠けることなく、ローマ人五個、ユダヤ人五個の計十個大隊と、その中に混じった傭兵部隊、それに数人の騎兵を連れてエリコに来た。そして到着すると、町は無人で、山の頂上を占拠していた五百人の男たちが妻子とともにいた。彼はこれらを捕らえて解散させ、その間にローマ軍は町の残りの部分を襲撃し、家々があらゆる種類の良いもので満ちているのを発見して略奪した。そこで王はエリコに守備隊を残して戻ってきて、冬営するために彼のところにやって来た町々、すなわちユダヤ（またはイドマヤ）、ガリラヤ、サマリアにローマ軍を派遣した。アンティゴノスはまた、アントニウスへのお礼として、シロから賄賂をもらって、彼の軍隊の一部をリダで受け入れさせた。

E.2.16　第 16 章

> ヘロデはセフォリスを捕らえ、洞窟にいた強盗を制圧した。その後、彼は自分の敵であるマカエロスに復讐し、サモサタを包囲していたアントニウスのもとへ向かった。

1. こうしてローマ人はあらゆる物資に恵まれ、戦争から解放された。しかしヘロデは安住せず、イドマヤを占領し、二千人の歩兵と四百人の騎兵を率いてそこを守った。そしてアンティゴノスが反乱を起こさないように、弟のヨセフをそこへ送った。また、マサダにいた母親と親族全員をサマリアへ移し、彼らを安全に住まわせた後、ガリラヤの残りの部分を奪い、アンティゴノスがそこに置いた守備隊を追い払うために進軍した。

2. ヘロデはセフォリスに着くと、23 激しい雪の中、難なくその町を占領した。町を守るべき衛兵は、襲撃される前に逃げ去った。町には必需品が豊富にあったので、彼はそこで、困っていた追随者たちに休息の機会を与え

た。その後、彼は洞窟にいた盗賊たちのところへ急いだ。盗賊たちは国土の大部分を制圧し、戦争そのものが引き起こしうるほどの甚大な被害を住民に与えた。そこで、彼は前もって歩兵三個大隊と騎兵一隊をアルベラ村に送り、40 日後に自ら残りの軍勢を率いて戻った。24 しかし、敵は彼の襲撃に怯むことなく、武器を手にして迎え撃った。彼らの技量は戦士のそれであったが、大胆さは盗賊の大胆さであった。そのため、激しい戦いになると、彼らはヘロデの左翼を右翼と共に敗走させた。しかしヘロデは、突然右翼から旋回して彼らを助けに来た。そして、左翼も逃げるのをやめて、追撃者たちを襲った。彼らは勇気を失ってしまった。彼らは、自分たちに直接仕掛けられた攻撃に耐えられなくなり、引き返して逃げ去った。3. しかしヘロデは彼らを追跡し、追跡中に彼らを殺し、その大部分を滅ぼした。残った者たちは川 [ヨルダン] の向こうに散らばった。そしてガリラヤは、洞窟に隠れて生き残った者たちを除いて、彼らが受けていた恐怖から解放された。彼らは征服されるまでに長い時間を要した。そのために、ヘロデはまず、兵士たちに彼らの以前の労働の成果を分配し、彼ら一人一人に銀百五十ドラクマを与え、指揮官たちにはさらに多くの金を与えて、彼らを冬営地に送り返した。彼はまた、末の弟フェロアスに、彼らが食料を買える良い市場を確保することと、アレクサンドリアの周囲に城壁を築くことを命じた。フェロアスは、その命令を両方とも実行した。

4. その間にアントニーはアテネに滞在し、一方ウェンティディウスはシロとヘロデをパルティア人との戦争に招集したが、まずユダヤの問題を解決せよと命じた。そこでヘロデは喜んでシロをウェンティディウスのもとへ行かせ、自らは洞窟内の者たちを攻撃した。これらの洞窟は岩山の断崖にあり、どの側からも近づくことはできなかった。というのも、洞窟に上るには曲がりくねった非常に狭い小道しかなかったからである。しかし、洞窟の正面にある岩の下には深い谷があり、傾斜はほぼ垂直であった。そのため、この場所を攻撃するのは不可能であるとして、王は長い間どうしたらよいか迷っていた。しかし、ついに彼は極めて危険を伴う策略を講じた。というのは、彼は部下のうち最も頑強な者を箱に入れて降ろし、洞窟の入り口に置いたからである。この男たちは強盗とその家族を殺し、抵抗したので火を放って焼き払った。ヘロデは彼らのうちの何人かを救いたいと思い、来て自分のところに引き渡すようにとの布告を出したが、自ら進んで来た者は一人もいなかった。やむなく来た者の中には、捕らわれるよりは死を選んだ者も多かった。そこで、ある老人が七人の子どもの父親であった。その子どもたちとその母親は、差し出された保証と右手によって、次のようにして彼らを殺した。老人は彼ら全員に出て行くように命じ、自分は洞窟の入り口に立って、出て行った自分の息子を殺した。ヘロデはこの光景を間近で見ており、同情の念に駆られ、老人に右手を差し伸べて子供たちを助けて欲しいと懇願した。しかし、老人は言ったことを少しも改めず、ヘロデの身分の卑しさを激しく非難し、子供たちだけでなく妻も殺した。そして子供たちの死体を崖から投げ捨てた後、ついには彼らを追いかけて自分も飛び降りた。

5. このようにしてヘロデはこれらの洞窟とそこにいた盗賊たちを制圧した。それから彼はそこに反乱を起こさないために十分だと考えた軍勢の一部を残し、プトレマイオスを将軍に任命してサマリアに戻った。彼はまた武装した歩兵三千人と騎兵六百人を率いてアンティゴノスに向かった。さてここでガリラヤで騒乱を起こしていた者たちは、彼が去った後もそうする自由があり、彼の軍の将軍プトレマイオスを不意に襲撃して殺害した。彼らはまた国土を荒廃させ、沼地や見つけにくい場所に退却した。しかしヘロデはこの反乱の知らせを受けると、直ちに国土の救援に赴き、多くの反乱軍を壊滅させ、彼らが包囲していた要塞の包囲をすべて解いた。彼はまた、国にもたらした変化に対する罰として、敵から 100 タラントの貢物を徴収した。

6. この頃 [パルティア人は既に国外に追い出され、パコルスも殺されていた]、ウェンティディウスはアントニウ

スの命令により、ヘロデの援軍として千騎と二個軍団をアンティゴノスに派遣した。アンティゴノスは彼らの将軍マカエロスに手紙で助けに来てくれるよう懇願し、ヘロデの暴力と王国に与えた損害について多くの悲痛な苦情を述べた。そして、そのような援助に対して金銭を与えると約束した。しかし、彼は信頼を裏切るようマカエロスの誘いに応じなかった。なぜなら、彼は自分を派遣した者を軽蔑していなかったし、特にヘロデが [他の申し出よりも] 多額の金銭を与えていたからである。そこで、彼はアンティゴノスに友好を装いながら、彼の情事を探るためにスパイとしてやって来た。しかし、ヘロデはそれを思いとどまらせたが、彼はそれに従わなかった。しかしアンティゴノスは彼の意図を事前に察知し、彼を町から追い出し、城壁から敵に対抗するかのように彼から身を守った。マカエロスは自分の行いを恥じて、エマオのヘロデのもとに退いた。そして失望に激怒し、出会ったユダヤ人を皆殺しにした。ヘロデを支持する者も容赦せず、アンティゴノスを支持する者のように扱った。

7. そこでヘロデは彼に非常に怒り、マカエロスを敵として戦おうとしたが、憤りを抑え、マカエロスの悪政を告発するためにアントニーの元へ向かった。しかしマカエロスは彼の罪に気づき、すぐに王の後を追い、和解を懇願して勝ち取った。しかしヘロデはアントニーへ行く決心を止めなかった。アントニーがユーフラテス川近くの堅固な都市サモサタを大軍で包囲していると聞いて、彼はさらに急いだ。これは彼の勇気をすぐに示すのに、そしてアントニーに大いに感謝することを行うのに、ちょうどよい機会だと考えたからである。実際、彼は到着するとすぐにその包囲を終わらせ、多数の蛮族を殺し、彼らから多くの獲物を奪った。そのため、アントニーは以前から彼の勇気を賞賛していたが、今ではさらにそれを賞賛するようになった。したがって、彼は彼にさらに多くの栄誉を与え、彼が王国を獲得するというより確かな希望を与えた。そして今やアンティオコス王はサモサタを引き渡さざるを得なくなった。

E.2.17　第 17 章

> ヘロデの夢に予言されていたヨセフ（ヘロデの兄弟）の死。ヘロデは二度も奇跡的に助かった。彼は兄弟を殺したパプスの首を切り落とし、それをフェロラス（もう一人の兄弟）に送り、ほどなくしてエルサレムを包囲し、マリアムネと結婚した。

1. そのころ、ヘロデのユダヤでの情勢は悪化していた。彼は兄のヨセフに全権を委ねたが、彼が戻るまではアンティゴノスに攻撃を仕掛けないよう命じた。なぜなら、マカエロスは彼がすでに行ったことから明らかなように、彼が頼りにできるような助力者ではないからである。しかし、ヨセフは兄が遠くにいると聞くと、受けた命令を無視し、マカエロスが同行させた五つの大隊とともにエリコへ進軍した。この進軍は、当時は真夏であったため、穀物を奪取するためのものであった。しかし、敵が山岳地帯や通行困難な場所で彼を攻撃すると、彼は非常に勇敢に戦っていたため、彼自身も殺され、ローマ軍の全大隊は壊滅した。というのは、これらの部隊はシリアから集められた新兵たちであり、戦争に不慣れな者たちを支援するようなベテラン兵士と呼ばれる者たちはその中には混じっていなかったからである。

2. アンティゴノスにとってこの勝利は十分ではなかった。彼は激怒し、ヨセフの死体を残酷に扱うに至った。殺された者たちの死体を手に入れた彼は、兄のフェロラスが 50 タラントを支払ってでもヨセフの首を切った。そしてアンティゴノスのこの勝利の後、ガリラヤの状況は混乱に陥り、アンティゴノス派の者たちはヘロデの味方の主だった人々を湖に連れて行き、そこで彼らを溺死させた。イドマヤでも大きな変化が起こり、マカエロスが

ギッタと呼ばれる要塞の 1 つに壁を築いていた。しかしヘロデはまだこれらのことを知らされていなかった。サモサタを占領した後、アントニーがシリアの情勢をソシウスに任せ、アンティゴノスに対抗してヘロデを助けるよう命じた後、ソシウスはエジプトに去った。しかしソシウスはヘロデを助けるためにユダヤに 2 つの軍団を先に派遣し、その後すぐに残りの軍団も追従した。

3. ヘロデがアンティオキアの近くのダフネにいたとき、彼は明らかに兄の死を予兆する夢を見た。そして、動揺してベッドから飛び起きると、その災難を知らせる使者がやって来た。そこで、彼はしばらくこの不幸を嘆いた後、悲しみの大半を後回しにして、敵に向かって急いで進軍した。そして、自分の力では到底できないほどの進軍を終えて、レバノンまで行った後、その山の近くに住む人々から 800 人の兵士を助手として集め、彼らとローマ軍団を一つ加え、夜明け前にガリラヤに突入して敵と遭遇し、彼らが去った場所まで追い返した。また、彼は要塞に対して即座に攻撃を続けた。しかし、非常に恐ろしい嵐のために、要塞を占領する前に近隣の村に陣を張らざるを得なかった。しかし、数日後、アントニウスから来た第二軍団が彼に加わると、敵は彼の力に恐れをなし、夜の間に要塞から撤退した。

4. その後、彼はエリコを通り抜け、兄弟の殺害者たちに復讐するために全力を尽くした。そこで彼は神の啓示を受け、その予期せぬ脱出に成功したとき、神に非常に愛される人物という評判を得た。その晩、彼は多くの有力者たちと宴会を催した。宴会が終わり、客が全員出て行くと、家はたちまち倒壊した。彼はこれを、自分がこれから行っている戦争でどんな危険に遭遇するか、またどうやってそこから逃れるかの一般的な兆候だと判断したので、朝になって軍隊を率いて出陣した。そのとき、敵の約 6,000 人が山から駆け下りてきて、彼の最前線にいる者たちと戦い始めた。しかし、彼らはローマ軍と直接対決するほど大胆ではなく、遠くから石や矢を投げつけた。その方法で、かなりの数の負傷者を出した。その戦闘でヘロデ自身の側も矢で負傷した。

5. アンティゴノスは、勇気だけでなく兵士の数でもヘロデを上回ろうと考え、仲間の一人であるパップスを軍隊とともにサマリアに派遣した。パップスはマカエロスと戦う運命にあった。しかしヘロデは敵の国を制圧し、5 つの小さな都市を破壊し、そこにいた 2000 人の兵士を殺し、家を焼き払ってから陣営に戻った。しかし、彼の本拠地はカナという村にあった。

6. さて、大勢のユダヤ人が毎日、エリコや国内の他の地域からヘロデのもとにやって来た。ある者はアンティゴノスへの憎しみから、またある者はヘロデが行った輝かしい行為を尊敬してそうしたが、他の者は不合理な変化への欲求に駆り立てられた。そこでヘロデは直ちに彼らを襲撃した。パップスとその一行は、彼らの数にも熱意にも恐れることなく、彼らと戦うために非常に機敏に進軍した。そして戦いは接戦となった。他の軍はしばらく抵抗したが、ヘロデは、兄弟の殺害に対する激怒から、その首謀者たちに復讐しようと、危険を冒してすぐに反対者たちを打ち負かした。そして、彼らを打ち負かした後、彼は常に、抵抗を続ける者たちに軍を向け、彼ら全員を追撃した。それで大虐殺が起こり、ある者は元の村に押し戻された。彼はまた最後尾の者を激しく攻撃し、その大勢を殺した。彼はまた敵と共に村に攻め込んだが、そこの家々は武装した男たちでいっぱいで、上の部屋には防衛のために兵士たちが詰めかけていた。彼は外にいる者を打ち負かすと、家を粉々にし、中にいる者をかき出した。多くの家の屋根を揺り起こし、そのせいで家々は山のように死んだ。廃墟から逃げ出した者も、兵士たちが剣を手に受け止めた。殺されて山のように横たわった者の数は非常に多く、征服者たちは道を通ることができなかった。敵はこの打撃に耐えられず、集まった群衆は村の者が殺されたのを見て散り散りになって逃げ去った。この勝利を確信したヘロデは、冬の深まりによって妨げられなければ、ただちにエルサレムへ進軍した。

これが彼の輝かしい進軍の妨げとなり、すでにエルサレムを放棄する気になっていたアンティゴノスが今や敗北するのを妨げたのである。

7. 夕方になって、ヘロデは疲れた友人たちを解散させて、自分も普通の兵士のようにまだ甲冑を着て暑いうちに入浴に出かけた。彼に付き添う召使は一人だけだった。彼が浴室に入る前に、敵の一人が剣を手にして彼の顔に襲いかかった。それから二人目、三人目、そしてさらに続いた。彼らは戦場から甲冑姿で浴室に逃げ込んできた者たちで、しばらくの間、非常に恐れ、人目につかないままそこに横たわっていた。彼らは王を見ると、恐れおののき、裸であったにもかかわらず、逃げるように王のそばを走り抜け、公道に逃げようとした。偶然にも、これらの男たちを捕まえることのできる者は他に誰もいなかった。ヘロデとしては、自分自身が危害を加えられなかったことに満足し、全員が無事に逃げることができた。

8. しかし翌日、ヘロデはアンティゴノスの将軍で戦いで殺されたパップスの首を切り落とし、殺された兄弟の罰として、その首を彼の兄弟フェロラスに送った。なぜなら、彼はヨセフを殺した男だったからである。さて冬が深まると、ヘロデはエルサレムに進軍し、その城壁まで軍を率いた。これは彼がローマで王となってから 3 年目のことであった。そこで彼は神殿の前に陣を張った。その側は包囲される可能性があり、ポンペイウスはそこから町を占領した。そこで彼は軍隊に工事を分担させ、郊外を破壊し、3 つの土手を建て、その土手に塔を建てるよう命令し、彼の知り合いの中で最も働き者の者を工事に残した。しかし彼自身はサマリアに行き、すでに述べたように、以前婚約していたアリストブロスの息子アレクサンダーの娘を妻に迎えた。そして彼は、すでに敵から大いに軽蔑されていたため、都市の包囲中に、ついでにこれを成し遂げた。

9. こうしてマリアムネと結婚した後、彼はより強力な軍勢を率いてエルサレムに戻った。ソシウスもまた騎兵と歩兵の大軍を率いて彼に加わり、彼は中部地方を通ってその軍勢を彼の前に送り、その間に彼はフェニキアに沿って進軍した。そして全軍が集結すると、歩兵十一個連隊と騎兵六千人、さらに軍勢の少なからぬ部分を占めるシリアの援軍が加わり、北壁の近くに陣を張った。ヘロデは元老院の布告に頼り、その布告によって王となった。ソシウスはアントニウスを頼りにし、アントニウスはヘロデの援助に彼の配下の軍勢を送った。

E.2.18　第 18 章

ヘロデとソシウスがいかにしてエルサレムを武力で占領したか、そして

アンティゴノスがどのような死を遂げたか。また、クレオパトラの強欲な

気質についても。

1. さて、町にいたユダヤ人の群衆はいくつかの派閥に分かれていた。神殿の周りに群がっていた人々は彼らのうちの弱い者だったので、この時代では、最初に死ぬのが最も幸せで信心深い者だと言い張っていた。しかし、より勇敢で頑強な者たちは、集団で集まり、さまざまな方法で他の人々を略奪し、特に町の周囲の場所を略奪した。これは馬にも人にも食料が残っていなかったためである。しかし、普段から戦闘に慣れている戦闘員の中には、包囲中に町を守るよう任命された者もおり、彼らは土手を築いた者たちを城壁から遠ざけた。彼らは常に敵の兵器を妨害する何らかの兵器を考案していたが、地下の鉱山ほど成功したものはなかった。

2. さて、強奪行為に関して言えば、王は待ち伏せを仕掛けて彼らの逃走を阻止しようとした。また、食料不足に関しては、遠くから食料を届けるようにした。また、ローマ軍の戦争技術によって、王はユダヤ人を手荒く扱った。彼らは極めて勇敢であったが、今や確実に死に至るローマ軍との直接戦闘には踏み込もうとはしなかった。しかし、地下の鉱山から突然ユダヤ人の真ん中に現れ、彼らが壁を一つ打ち崩す前に、その代わりに別の壁を築いた。そして、総じて言えば、彼らは最後の最後まで持ちこたえると決心していたので、苦労も工夫も全く不足していなかった。実際、彼らは周囲に大軍を従えていたにもかかわらず、5 か月の包囲に耐え、ついにヘロデの選抜兵の何人かが城壁を突破して町に陥落し、ソシウスの百人隊長たちもその後を追った。そして彼らはまず神殿の周囲を占領した。そして軍隊がなだれ込むと、ローマ軍がこの包囲の長さに激怒していたことと、ヘロデの周りにいたユダヤ人たちが敵が一人も残らないように懸命に努力していたことのせいで、至る所で大勢の人々が虐殺された。狭い通りや家の中に群がっていたり、神殿に逃げ込んでいたりしたユダヤ人たちは、大勢の人々に切り刻まれた。幼児にも老人にも、あるいは弱者にも慈悲は示されなかった。王は使者を遣わして民衆を赦すように命じたが、誰も虐殺から手を引こうとはせず、狂ったように老若男女を問わず民衆を殺戮した。そのとき、アンティゴノスは、自分の過去や現在の運命を顧みず、城塞から降りてきてソシウスの足元にひれ伏した。ソシウスは、彼の状態が一変したことを全く憐れむことなく、ひどく嘲笑し、アンティゴナと呼んだ。26 しかし、ソシウスはソシウスを女扱いしたり、自由にしたりはせず、縛り付けて監禁した。

3. しかし、敵を支配下に置いたヘロデの目下の関心事は、外国の援軍の熱意を抑えることであった。というのは、異国の民の群れは神殿や聖なる家にある神聖なものを見ることに非常に熱心であったからである。しかし、王は、見るべきでないものを見られたら、勝利は敗北よりも悪いと考え、一部は勧告、一部は脅迫、いや、一部は力ずくで、彼らを制止しようと努めた。また同時に、彼は都市の略奪を禁じ、ソシウスに、ローマ人は都市から金と人員を奪い去ることで、彼を王として荒廃させるつもりなのかと真剣に尋ね、居住可能な土地の支配権は、これほど多くの市民を虐殺する代償としては小さすぎるとソシウスに告げた。ソシウスが、包囲中に受けた苦しみに対する褒美として、兵士たちにこの略奪品を与えるのは当然だと言ったとき、ヘロデは、自分の金から兵士一人一人に褒美を与えると答えた。こうして彼は祖国の解放を買い取り、彼らへの約束を果たし、兵士一人一人に豪華な贈り物をし、指揮官たちにも相応の贈り物をし、ソシウス自身にも非常に寛大な贈り物をした。そのため、誰もが裕福な状態で去ることができた。そこでソシウスは金の冠を神に捧げ、アンティゴノスを縛り付けてアントニーのもとへ連れて行き、それから斧で殺された。27 彼は最後まで生きることへの強い願望と冷淡な希望を抱いていたが、彼の卑怯な行動によって、死に値するものとなった。

4. そこでヘロデ王は、市内の群衆を区別し、自分の側にいる者には名誉を与えてさらに友人にしたが、アンティゴノス派の者には殺害した。また、金が底をついたので、持っていた装飾品をすべて金に換えて、アントニーとその周囲の者たちに送った。しかし、これですべての苦しみから逃れることはできなかった。アントニーはクレオパトラへの愛にとりつかれ、彼女の魅力にすっかり魅了されていたからである。クレオパトラは血縁者を一人残らず殺し、その後、血縁関係のない者も殺した。そこで彼女はシリア人の主だった者たちをアントニーに中傷し、彼らを殺させるよう説得した。そうすれば、簡単に彼らの所有物の支配者になれるからである。いや、彼女はユダヤ人とアラブ人に対しても貪欲な態度を示し、密かに両国の王ヘロデとマリコスを彼の命令で殺害するよう働きかけた。

5. さて、アントニウスは彼女の命令に部分的に従った。というのは、彼はこのような善良で偉大な王たちを殺す

ことはあまりにも忌まわしいこととみなしていたが、それによって彼らに対する友情が薄れてしまったからである。彼はまた、彼らの領土の大部分を奪い、バルサムの木が生えているエリコのナツメヤシの植林地さえも奪い、それを彼女に与えた。また、エレウテロス川のこちら側の都市、ティルスとシドンを除くすべての都市も奪った。そして、彼女はこれらの都市の支配者となり、パルティア人に対するアントニウスの遠征をユーフラテスまで案内した後、アパミアとダマスカスを経由してユダヤにやって来た。そこでヘロデは、多額の贈り物で彼女の憤りを鎮めた。彼はまた、自分の王国から奪われた場所を彼女から、年間 200 タラントの家賃で借りた。彼は彼女をペルシウムまで案内し、できる限りの敬意を払った。それから間もなく、アントニーはパルティアから戻り、ティグラネスの息子アルタバゼスを捕虜として連れて行き、クレオパトラへの贈り物とした。このパルティア人はすぐに、金銭と彼が奪ったすべての戦利品とともにクレオパトラに与えられた。

E.2.19　第 19 章

アントニーはクレオパトラの説得によりヘロデをアラブ人と戦うために派遣し、数々の戦いを経てついに勝利を収めた。また大地震についても。

1. さて、アクティウムの戦争が始まったとき、ヘロデはユダヤでの苦難から解放され、アンティゴノスの妹が占領していたヒルカニアを手に入れていたので、アントニーの援助に赴く準備をしていた。しかし、クレオパトラは、アントニーが経験した危険に加わることを巧妙に阻止した。というのも、すでに述べたように、彼女はユダヤとアラビアの王たちに対して陰謀を企てていたので、彼女はアントニーを説得して、アラビア人との戦争をヘロデに委ねたからである。そうすれば、ヘロデが勝てば、彼女はアラビアの女王となり、負ければユダヤの女王となり、そして、どちらかの王をもう一方の王で滅ぼすことができる。

2. しかし、この策略はヘロデにとって有利に働いた。まず彼は敵から人質を取って大軍を編成し、ディエスポス付近で彼らに進軍するよう命じた。そして、断固として彼と戦ったその軍隊をヘロデは打ち負かした。この敗北の後、アラブ人は大移動し、大勢でセレシリアの都市カナタに集結し、ユダヤ人を待ち構えた。ヘロデはそこに到着すると、この戦争を特に慎重に管理しようとし、陣地の周囲に壁を築くよう命令した。しかし、群衆はその命令に従わず、以前の勝利に勢いづいて、すぐにアラブ人を攻撃し、最初の攻撃で打ち負かし、その後追撃した。しかし、その追撃にはヘロデを罠にかける罠が仕掛けられていた。一方、クレオパトラの将軍の一人で、常にヘロデに敵対していたアテニオは、カナタからその地方の人々をヘロデに向かわせた。この新たな攻撃を受けて、アラビア人は勇気を奮い起こして引き返し、両軍は越えるのが困難な石の多い場所に大軍を集結させ、そこでヘロデの兵を敗走させ、大虐殺を行った。しかし、戦いから逃れた者たちはオルミザに逃げ、そこでアラビア人は彼らの陣営を包囲し、そこにいたすべての兵もろともそれを占領した。3. この惨事の少し後、ヘロデは彼らを救援するためにやって来たが、遅すぎた。この打撃のきっかけは、将校たちが命令に従わなかったことであった。戦いが突然始まらなかったら、アテニオはヘロデに仕掛けた罠に適切な時期を見つけられなかったであろう。しかし、その後アテニオはアラビア人と互角に戦い、彼らの国を制圧し、彼らに勝利だけでは補えないほどの損害を与えた。しかし、彼が敵に復讐しているとき、もう一つの神の摂理による災難が彼に降りかかった。彼の治世の年、アクティウムをめぐる戦争が最高潮に達した春の初めに、大地が揺れ、おびただしい数の家畜と三万人の兵士が死んだ。しかし軍隊は野外にいたため被害を受けなかった。その間、この地震の評判はアラビア人を大い

に勇気づけ、悲しい事故の常として、それを途方もないレベルまで高め、ユダヤ全土が転覆したかのように見せかけた。そこで、住民のいない土地を容易に支配できると考えた彼らは、まずユダヤ人からやって来た使節を犠牲にし、それからすぐにユダヤに進軍した。さて、ユダヤ民族はこの侵略に恐れおののき、次から次へと起こる災難の大きさにすっかり意気消沈した。ヘロデは彼らを集めて、次のような演説をして、彼ら自身を弁明するよう促そうと努めた。

4. 「あなた方が今感じている恐怖は、私には非常に不合理にあなた方を捕らえているように思われます。確かに、あなた方は神の罰に遭ったことに動揺するのは当然でしょう。しかし、人間の侵略に同じように恐怖するのは男らしくありません。私自身は、この地震の後、敵に恐怖を感じるどころか、神がアラブ人に餌を仕掛け、我々が彼らに復讐できるようにしたのだと思っています。彼らの今回の侵略は、彼らが武器や戦闘能力に大きく依存しているからというよりも、我々の偶然の不運から生じているのです。さて、人間自身の力ではなく、他人の不運に頼る希望は、非常に厄介なものです。なぜなら、人間には不運も幸運も確実性がないからです。しかし、運は変わりやすく、一方から他方へと移り変わることは容易に観察できます。これは、例から容易に学ぶことができます。あなたたち自身の間で。あなたたちがかつて戦いで勝利を収めたとき、あなたたちの敵がついにあなたたちを打ち負かした。そして今、あなたたちを確実に打ち負かすと思っている者たちが、打ち負かされるであろう。なぜなら、人は自信過剰になると警戒を怠るが、恐怖は人に用心深く行動することを教え込むからである。だから私はあなたたちの臆病さから、あなたたちが勇気を持つべきであることを証明しようと思う。あなたたちが本来あるべきよりも、そして私があなたたちに望んでいたよりも大胆に進軍したとき、アテニオの裏切りが起こった。しかし、あなたたちの現在の鈍さと一見したところの気落ちは、私にとっては勝利の保証であり確証である。そして確かに、事前にこのように慎重であることは適切である。しかし、戦闘に臨むときには、私たちは気を引き締め、敵がどんなに邪悪であろうとも、いかなる人間も、いかなる神の不運も、ユダヤ人が生きている間は彼らの勇気をくじくことはできない、と信じさせるべきである。また、彼らのうちの誰も、アラブ人を決して見逃したり、そのような人が自分の財産の主人になることを許したりはしない。アラブ人は、ある意味で捕虜にし、何度も捕虜にしたのである。無生物の震えに動揺したり、この地震が別の災難の前兆だと想像したりしてはならない。なぜなら、このような自然現象は自然の成り行きによるものであり、それが直接的にもたらす害以外には、人間にとって何の意味もないからである。疫病、飢饉、地震の場合、おそらく前兆となる短い兆候があるかもしれないが、これらの災難はそれ自体でその力を制限している [他の災難を予感させることなく]。実際、戦争は、たとえそれが激しいものであったとしても、地震がもたらしたものよりも大きな害を我々にもたらすことができるだろうか。いや、敵の破滅の兆しが見えており、それも非常に大きなものです。これは自然のものでもなく、外国人の手から生じたものでもありません。彼らは人類の慣習に反して、我々の大使を野蛮に殺害しました。彼らはこの戦争に関して、あたかも彼らを神への犠牲とみなすかのように、非常に多くの大使を殺しました。しかし、彼らは神の偉大な目と無敵の右手を避けようとはしません。もし我々がまだ先祖の勇気を少しでも保ち、大胆に立ち上がってこれらの契約違反者を罰するならば、我々はまもなく彼らに復讐されるでしょう。ですから、各自が妻や子供のため、あるいは国の危機のためではなく、我々の大使のために戦い続けましょう。死んだ大使たちは、我々のこの戦争を、生きている我々自身よりもうまく指揮するでしょう。そして、あなたが私に統治されるなら、私自身が危険にあなたより先に向かいます。あなた方は、軽率な行動によって自分自身を傷つけない限り、あなた方の勇気は抑えられないということを十分知っているからです。」30

5. ヘロデは、この演説で彼らを励まし、彼らがいかに機敏に行動するかを見て、神に犠牲を捧げた。そして、そ

の犠牲を捧げた後、軍を率いてヨルダン川を渡り、敵に近いフィラデルフィアのあたり、その間にある要塞のあたりに陣を張った。それから、彼は遠くから彼らを撃ち、すぐに戦闘に突入したいと考えた。というのも、彼らのうちの何人かは、その要塞を奪取するために事前に派遣されていたからである。しかし、王は、彼らを要塞からすぐに打ち破る何人かを派遣し、自らは毎日戦闘態勢を整える軍の最前線に出て、アラブ人に戦闘を招いた。しかし、彼らは恐怖に怯え、誰も陣地から出てこなかった。また、将軍のエルテモスは恐怖のあまり一言も発することができなかった。そこでヘロデが彼らを襲い、砦を破壊した。そのため、彼らは戦闘に駆り出されざるを得なくなったが、無秩序に戦い、騎兵と歩兵が入り乱れた。彼らは確かに数ではユダヤ人より優勢だったが、敏捷性では劣っていた。勝利を絶望したため、危険に身をさらさざるを得なかったのだ。

6. 抵抗している間、殺された者はそれほど多くなかったが、背を向けるとすぐに、ユダヤ人に踏みつけられた者も、自分たち自身に踏みつけられた者も大勢いた。逃げる途中で倒れた者は五千人にも達した。残りの群衆は城壁に群がって、すぐに死ぬのを防いだ。ヘロデは彼らを取り囲んで包囲した。彼らが武器を取った敵に捕らえられそうになったとき、彼らはさらにもう一つの苦難に見舞われた。それは渇きと水不足であった。王は彼らの使節の言うことを聞こうとしなかった。彼らが身代金として五百タラントを差し出すと、王はますます彼らを迫った。彼らは渇きにやられそうになったので、出て来て、自ら進んでユダヤ人に引き渡した。五日間で四千人が拘束された。六日目に、残った群衆は助かる見込みがないと絶望し、戦いに出た。ヘロデは彼らと戦い、再び約七千人を殺した。ヘロデはアラビアに非常に厳しい罰を与え、人々の士気をすっかり失わせたので、国民はヘロデを彼らの支配者に選んだ。

E.2.20　第 20 章

> ヘロデはカエサルによって王国の地位を固められ、豪華な贈り物によって皇帝との友情を育みます。一方、カエサルは、クレオパトラによって奪われた王国の一部を、ゼノドルスの領土も加えて彼に与えることで、その親切に応えます。

1. しかし、ヘロデは、アクティウムですでにシーザーに打ち負かされていたアントニーとの友情のせいで、非常に重要な問題に当面頭を悩ませていた。しかし、彼は傷つくよりも恐れていた。というのも、シーザーはアントニーを完全に破ったとは思っていなかったが、ヘロデは彼を助け続けていたからである。しかし、王は危険に身をさらすことを決意し、シーザーが当時住んでいたロードス島に航海し、王冠を被らず、私人のような服装と外見で、しかし王としての振る舞いでシーザーのもとに来た。そこで彼は真実を一切隠さず、アントニーの面前でこう語った。「シーザーよ、私はアントニーによってユダヤ人の王に任命されたので、私は王権を最善に、そして完全に彼の利益のために行使したと告白します。アラビア人が私を妨害しなかったなら、あなたは確かに私を武装させ、彼の切っても切れない仲間として見ていたであろうことを、これ以上隠すつもりはありません。しかし、私はできる限り多くの援軍と何万 [コリ] もの穀物を彼に送りました。いや、実際、私はアクティウムで彼に与えた屈辱の後、恩人を見捨てたわけではありません。戦争で彼を支援できなくなったとき、私はできる限りの最良の助言を与えました。そして、彼の状況を立て直すにはクレオパトラを殺すしかないと彼に告げました。そして、もし彼女が死んだら、彼の安全のために金と城壁を提供し、軍隊と私自身をあなたとの戦争で支援すると約束しました。しかし、彼のクレオパトラへの愛情が彼の耳をふさいでいたが、それはあなたに統治権を与えた神自身

も同様であった。私も彼と共に打ち負かされたことを認める。そして彼の最後の財産とともに私は王冠を脱ぎ捨て、あなたの徳に安全を期待してここに来た。そしてまず、私が誰の友人でもなく、どれほど忠実な友人であったかを考えて欲しい。」

2. カエサルは彼にこう答えた。「いや、あなたは安全であるだけでなく、王となるでしょう。しかも、以前よりも確固とした王となるでしょう。なぜなら、あなたは友情の堅固さゆえに、多くの臣下を統治するにふさわしいからです。そして、私の成功を期待して、私との友情を同様に堅固に保とうと努力してください。それは、あなたの寛大な性格から私が期待していることです。しかし、アントニーがあなたよりもクレオパトラを好んだのは良いことです。この方法で、私たちは彼女の狂気を利用してあなたを獲得し、私があなたの友人になる前に、あなたは私の友人になり始めました。そのため、クィントゥス・ディディウスは、あなたが剣闘士たちと戦うために彼に援助を送ったと私に書き送っています。したがって、私は、法令によってあなたに王国を確約することを約束します。また、今後は、あなたがさらに親切にするよう努めます。アントニーがいなくても何の損失もないだろう。」

3. カエサルは王にこのような親切な言葉を語り、王の頭に王冠を再びかぶせた後、勅令で王に与えたものを宣言し、その中で王のことを大いに褒め称えた。そこでヘロデは贈り物で王に親切にするよう要求し、アントニーの友人で王の懇願者となったアレクサンダーを許すよう求めた。しかし、カエサルの怒りは王に勝り、王は自分が請願した男が犯した多くの非常に大きな罪について不平を言い、そのようにして王の請願を却下した。この後、カエサルはシリアを通ってエジプトに向かったが、ヘロデは豪華なもてなしで王を迎えた。そして、彼はまず、プトレマイオスのあたりで軍を閲兵しているシーザーに同行し、友人全員と宴会を開き、それから残りの軍に宴会に必要なものを分配した。また、彼らがペルシウムまで乾いた土地を通って行軍する時には、水をたっぷり用意し、そこからの帰還の時も同様にした。その軍には必需品が何も不足していなかった。そのため、シーザーも兵士たちも、ヘロデの王国は彼が彼らに与えた寛大な贈り物には小さすぎると考えていた。そのため、シーザーがエジプトにやって来てクレオパトラとアントニーが死んだ時、彼はシーザーに他の名誉の印を授けただけでなく、クレオパトラに奪われた国だけでなく、ガダラ、ヒッポス、サマリアも与えることで、王国を拡張した。さらに、海沿いの都市ガザ 31、アンテドン、ヨッパ、ストラトスの塔からも。また、遺体の護衛として、クレオパトラに以前贈られたガラテヤ人四百ガロンをカエサルに贈った。カエサルがこれらの贈り物をしようと強く思ったのは、贈り物を受け取った人の寛大さほどではなかった。

4. さらに、アクティウムでの最初の競技会の後、彼はトラコニティスと呼ばれる地域とその近隣のバタニア、およびアウラニティスの地域の両方を王国に加えました。そして次の機会に、リュサニアスの家を借りたゼノドロスは、トラコニティスからダマスカス人の間に盗賊を送り込んでいました。そこでダマスカス人はシリアの大統領ウァロに頼り、彼らが陥っている災難をカエサルに報告するよう依頼しました。カエサルはそれを知ると、この盗賊の巣窟を壊滅させるよう命令を送り返しました。そこでウァロは彼らに対して遠征を行い、その土地から盗賊を追い出し、ゼノドロスからそれを奪いました。カエサルはまた、その後、ダマスカスに来た盗賊の巣窟とならないように、その土地をヘロデに与えました。ゼノドロスは、また、ヘロデをシリア全土の総督に任命したが、これは、ゼノドロスがシリアに再び戻った 10 年後のことであった。この任命は、他の総督が彼の助言なしに行政を行うことができないほどに定着した。しかし、ゼノドロスが死ぬと、カエサルはトラコニティスとガリラヤの間にある全土を彼に与えた。しかし、ヘロデにとってさらに重要だったのは、彼がカエサルにアグリッパ

に次いで愛され、カエサルに次いでアグリッパに愛されたことであった。そのため、彼は非常に大きな幸福を得た。しかし、彼の魂の偉大さはそれを上回り、彼の寛大さの大部分は信心深さの促進に向けられた。

E.2.21　第 21 章

ヘロデが基礎から建て直した神殿や町々、また彼が建てた他の建物について、また彼が外国人に示した壮麗さについて、そしてすべての点で幸運が彼に恵まれたことについて。

1. そこで、ヘロデは治世の第 15 年に神殿を再建し、周囲の土地を壁で囲んだ。その土地は囲む前の 2 倍の広さであった。彼がその費用を投じた金額も莫大で、その周囲の富は数え切れないほどであった。その証拠は、神殿の周囲に建てられた大きな回廊と、その北側にあった城塞である。回廊は基礎から建てたが、城塞は莫大な費用をかけて修復した。それは王宮にほかならず、彼はアントニウスに敬意を表して、その宮殿をアントニアと名付けた。彼はまた、上町に宮殿を建て、そこには 2 つの非常に大きくて美しい部屋があった。その広さは、聖なる家そのものとは比べものにならないほどであった。彼は 1 つの部屋をカエサレウムと名付け、もう 1 つを友人にちなんでアグリッピウムと名付けた。

2. しかし、彼は特定の建物に名前を付けることでその記憶を保存しただけではなく、その寛大さは都市全体にまで及んだ。彼はサマリアの国土の周りに 20 スタディオンの長さの非常に美しい城壁を築き、そこに 6 千人の住民を移住させ、非常に肥沃な土地を割り当て、このようにして建設されたこの都市の真ん中にシーザーの非常に大きな神殿を建て、その周りに 3 スタディオン半の聖地を配し、セバストゥス、つまりアウグストゥスにちなんでその都市をセバステと名付け、非常に規則的な方法で都市の事務を処理した。

3. カエサルがさらにもう一つの国を彼に与えたとき、彼はそこにもヨルダン川の泉のすぐそばに白い大理石の神殿を建てた。その場所はパニオンと呼ばれ、そこにはとてつもなく高い山の頂上があり、その横、下、あるいは底に暗い洞窟が開いている。その中には恐ろしい断崖があり、急に深いところまで落ち込んでいる。そこには動かすことのできない大量の水があり、誰かが何かを下ろして水面下の深さを測ろうとすると、どんなに長い縄でも届かない。ヨルダン川の泉はこの空洞の根元から外側に湧き出しており、これがヨルダン川の最大の起源であると考える人もいるが、そのことについては後の歴史でより正確に述べることにする。

4. しかし王はエリコにも、キプロス城塞と以前の宮殿の間に、旅行者にとって以前のものよりも良くて便利な場所を建て、同じ友人にちなんで名付けた。一言で言えば、彼の王国には、カエサルの名誉のために何かがなければ目的にかなう場所は一つもなかった。そして彼は自分の国を神殿で満たした後、自分の州にも同様に自分の尊敬のしるしを注ぎ込み、カエサレアスと名付けた多くの都市を建てた。

5. そして、海辺にひどく荒廃した都市（ストラトスの塔という名）があるのに気づいたとき、その場所は立地条件が良かったため、彼の寛大さによって大いに改善できると考え、すべてを白い石で再建し、いくつかの非常に素晴らしい宮殿で飾った。特にその寛大さを示したのは、この都市が位置するドラとヨッパの間の海岸全体に良い避難所がなかったため、フェニキアからエジプトに向けて出航した者は皆、南風の脅威のために荒れた海に漂うしかなかった。その風が少しでも強く吹くと、非常に大きな波が起こり、岩に打ち寄せ、その波が引くと海は遠くまで激しく荒れる。しかし王は、費やした費用とその寛大な処分によって自然を克服し、アテネのピュレク

ム 33 よりも大きな港を建設し、水の奥深くに他の深い停泊所（船のためのものも）を建設した。

6. 彼が建設した場所は彼の目的とは大きくかけ離れていましたが、それでも彼はその困難と格闘し、その建物の堅固さは海によって容易に打ち負かされることはありませんでした。そして、その作品の美しさと装飾は、まるで作業に何の困難もなかったかのようでした。なぜなら、彼が前に述べたほどの広さの空間を測ったとき、彼は 20 尋の水に石を降ろしたからです。その石の大部分は長さ 50 フィート、深さ 9 フィート、幅 10 フィートで、さらに大きなものもありました。しかし、港がその深さまで埋め立てられると、彼は海上にすでに存在していた壁を 200 フィートの幅まで拡張しました。そのうち 100 フィートには波の力を弱めるために建物が建てられ、そこからプロクマティア、つまり波の最初の砕け散り場と呼ばれました。しかし、残りの空間は石の壁で囲まれていました。この壁には非常に大きな塔があり、その中で最も重要で最も美しい塔は、カエサルの義理の息子であったドルススにちなんでドルシウムと呼ばれていました。

7. また、船乗りたちが住んでいた場所には、たくさんのアーチがありました。その周囲には、陸に上陸する人たちのための埠頭 [または船着場] となる大きな谷、または歩道がありました。しかし、入り口は北にありました。なぜなら、北風がそこの風の中で最も穏やかだったからです。港の入り口には、両側に 3 つの大きな巨像が柱で支えられていました。港に船で入っていくときに左側にある巨像は、頑丈な塔で支えられています。しかし、右側の巨像は、2 つの直立した石を接合して支えられており、その石は入り口の反対側にある塔よりも大きかったです。港につながる建物が連続していましたが、それらも白い石でできていました。そして、この港に町の狭い通りが続いており、互いに等間隔で建てられていました。港の入り口の向かい側の高台には、美しさと大きさの両方で優れたシーザーの神殿がありました。そこにはカエサルの巨像があり、それはユピテル・オリンピオスの巨像に似せて作られたものであった。ローマのもう一つの巨像は、アルゴスのユノの巨像に匹敵するほどであった。そこで彼は、その都市を属州に、港をそこの水夫たちに捧げた。しかし、その建物の名誉はカエサルに帰し、それに従ってその建物をカエサレアと名付けた。

8. 彼はまた、その宗派にふさわしい方法で、円形劇場、劇場、市場などの他の建物を建て、5 年ごとに競技会を定め、同様にそれらをシーザー競技会と呼んだ。そして、彼は最初に第 192 回オリンピックで最大の賞品を提案した。この競技会では、優勝者だけでなく、その次点の者、さらには 3 位の者も、彼の王の恩恵を受けることができた。彼はまた、海岸沿いにあり、戦争で破壊されていた都市アンテドンを再建し、アグリッペウムと名付けた。さらに、彼は友人アグリッパに対して非常に深い慈悲を持っていたため、神殿に自分で建てた門に彼の名前を刻ませた。

9. ヘロデもまた、他の誰よりも父を愛した人物であった。彼は父のために記念碑を建てた。それは、彼の王国で最も美しい平野に築いた町であり、川や木々が豊かであった。彼はまた、エリコの上にある城塞の周りに壁を築いた。それは非常に頑丈で非常に立派な建物であった。彼はそれを母親に捧げ、それをキュプロスと名付けた。さらに、彼はエルサレムにあった塔を捧げ、それを兄弟のファサイロスの名で名付けた。その構造、大きさ、壮麗さについては、後で説明する。彼はまた、エリコから北に続く谷間に別の町を建て、それをファサイリスと名付けた。

10. そして、彼は家族や友人を永遠に伝えたのと同様に、自分自身の記念碑も怠らず、アラビアのほうにある山に要塞を築き、自分の名をとってヘロディウムと名付けた。35 また、エルサレムから 60 スタディオン離れた、

女性の胸の形をした丘を同じ名前で呼んだ。彼はまた、大きな野心をもって、その丘に多くの奇妙な芸術を施し、その頂上の周囲に円塔を建て、残りの空間を最も高価な宮殿で埋め尽くした。その結果、内部の部屋の景観が素晴らしかっただけでなく、外壁、仕切り、屋根にも多大な富が費やされた。これに加えて、彼は膨大な量の水を遠くから莫大な費用をかけて運び、丘自体が適度な高さで、完全に人工的に作られたものであったため、最も白い大理石でできた 200 段の階段をその丘に築いた。彼はまた、丘の麓に、友人たちとともに家具を収納するのに十分な広さの宮殿を建てた。そのため、要塞にはあらゆる必需品が揃っていたため、都市のように見えたが、その境界からすると、宮殿に過ぎなかった。

11. そして、彼は多くのものを建設した後、その魂の偉大さを外国の多くの都市に示しました。彼はトリポリ、ダマスカス、プトレマイスに運動のための宮殿を建て、ビブルスの周りに城壁を建て、ベリトゥスとティルスに大きな部屋、回廊、寺院、市場を建て、シドンとダマスカスに劇場を建てました。彼はまた、海辺に住むラオデキア人のために水道を建設し、アスカロンの人々のために浴場と高価な噴水を建設し、中庭を囲む回廊も建設しました。これらは、その技量と広さの両方で賞賛に値しました。さらに、彼は一部の人々に森と牧草地を捧げました。いや、彼の寄付した土地を持つ都市は少なくなく、まるで自分の王国の一部であるかのように。彼はまた、毎年の収入と永久の収入を、修行のための集落に与え、コスの人々だけでなく彼らにも、そのような報酬が決して不足しないように定めた。彼はまた、必要な者すべてに穀物を与え、船を建造するための多額の資金をロードスに与えた。彼はこれを多くの場所で、そして頻繁に行った。そしてアポロンの神殿が焼け落ちたとき、彼は自分の費用でそれを以前よりも良い方法で再建した。彼がリュキア人やサムニア人に贈った贈り物について、またイオニア全土で彼が大いなる寛大さを示したことについて、私は言うまでもない。そしてそれは、すべての人の必要に応じたものだった。そして、アテネ人、ラケデモニア人、ニコポリス人、そしてミシアにあるペルガモスも、ヘロデが彼らに贈った寄付で満ちているではないか。そしてシリアのアンティオキアに属するあの広い空き地については、彼はそれを磨かれた大理石で舗装しなかったか。それは 20 スタルロングの長さだったが。以前はそこが汚れと不潔さで満ちていたため、すべての人に避けられていたのに、彼は同じ場所に同じ長さの回廊を造った。

12. 確かに、彼が恩恵を与えた特定の場所特有の恩恵だったと言う人もいるかもしれない。しかし、彼がエレア人に与えた恩恵は、オリンピック競技会の栄光が及ぶ限り、ギリシャ全土だけでなく、居住可能な地球全体に共通の寄付だった。なぜなら、オリンピック競技会が資金不足のために無に帰し、古代ギリシャの名残が消え去ったことを知った彼は、5 年目のオリンピック競技会の復活に参戦しただけでなく、ローマへの航海中に偶然その場に居合わせただけでなく、永久に金銭収入を彼らに与えたので、そこでの参戦者としての彼の記念碑は永遠に失われない。ファサエリス、バタニア、キリキア周辺の小都市の人々が以前支払っていた年金を彼が軽減したのと同じように、人々が支払った負債や貢物について調べるのは、果てしない仕事になるだろう。しかし、彼は、これらの都市に、その所有者たち自身よりも多くの贈り物を与えながら、嫉妬にさらされたり、必要以上に多くの財産を狙っていると思われたりするのではないかという恐れが、彼の心の偉大さを大いに乱していた。

13. ヘロデは、その魂にふさわしい肉体を持ち、常に優れた狩猟者で、馬に乗る優れた技術によって、大抵の場合、大きな成功を収めた。一日に 40 頭の野獣を捕獲したからである。36 その地方では熊も飼育されており、その大部分は雄鹿と野ろばで満たされている。彼はまた、誰にも抵抗できないほどの戦士でもあった。そのため、彼が槍を真っ直ぐ前方に投げ、矢を的に向けて放つ様子を見て、その訓練の素早さに驚嘆した者も少なくない。そして、彼のこうした精神と肉体の強さによる活躍に加え、運も非常に彼に有利であった。彼は戦争でほとんど

失敗しなかった。失敗したときも、彼自身が失敗の原因となったのではなく、誰かに裏切られたか、兵士たちの無謀さが敗北を招いたかのどちらかであった。

E.2.22　第 22 章

大祭司アリストブルスとヒルカヌス、そして女王マリアムネの殺害。

1. しかし、外面的な大成功の報いとして、ヘロデは家庭内の問題を起こし、妻のせいで家庭内で激しい不和が起こり始めた。妻をとても愛していたからである。ヘロデが政権に就いたとき、彼は以前私人だったときに結婚していた妻を追放した。妻はエルサレム生まれで、アリストブロスの息子アレクサンダーの娘マリアムネと結婚していた。マリアムネのせいで彼の家庭内に不和が生じたが、それはすぐに起こったこともあったが、主に彼がローマから帰国した後に起こった。まず第一に、彼はマリアムネとの間に生まれた息子たちのために、ドリスの息子アンティパトロスを町から追放し、祭りのとき以外は町に入ることを許さなかった。その後、彼は妻の祖父ヒルカノスがパルティンから彼の元に帰ってくると、陰謀を企てているのではないかと疑っているという口実で彼を殺害した。このヒルカノスはシリアを侵略した際にバルザファルネスに捕らえられていたが、ユーフラテス川の向こうの故郷の人々は、彼の境遇を哀れんで、彼が自分たちのところに留まることを望んだ。彼らがヘロデのもとへ川を渡らないように勧めたとき、彼がその望みに従っていれば、彼は死ななかっただろう。しかし、孫娘をヘロデと結婚させたことが彼の誘惑だった。なぜなら、彼はヒルカノスを頼りにし、自分の国を愛しすぎていたため、そこに戻ってきたからである。ヘロデを怒らせたのは、ヒルカノスが王国を手に入れようとしたことではなく、ヘロデよりもヒルカノスが彼らの王になる方がふさわしいということだった。

2. ヘロデがマリアムネとの間にもうけた 5 人の子供のうち、2 人は娘、3 人は息子であった。このうち末っ子はローマで教育を受け、そこで死んだが、上の 2 人は母親が高貴な身分であったことと、ヘロデが王位につくまで生まれていなかったことから、王家の血を引く者として扱われた。しかし、これらすべてよりも強かったのは、マリアムネに対する彼の愛情であり、その愛情は毎日彼を大いに燃え上がらせ、他の動機と共謀して、彼女を心から愛していたため、他に何の悩みも感じなかった。しかし、マリアムネの彼に対する憎しみは、彼の彼女に対する愛情に劣るものではなかった。彼女が彼のしたことに対して憤慨するのは、確かに正当な理由があったが、彼女の大胆さは、彼の彼女に対する愛情から生じたものであった。彼女は、祖父ヒルカノスと兄アリストブロスに対して彼がしたことについて、公然と彼を非難した。というのは、ヘロデは、アリストブロスがまだ子供であったにもかかわらず、容赦しなかったからである。17 歳で大祭司の位を与えたとき、その地位を授けた後、すぐに彼を殺したのである。しかし、祭りのとき、アリストブロスが聖なる祭服を着て祭壇に近づいたとき、大勢の群衆が涙を流した。そこで、その子供は夜のうちにエリコに送られ、そこでヘロデの命令でガルスたちによって池に浸され、溺死させられたのである。

3. これらの理由から、マリアムネはヘロデとその妹と母を、彼女への愛情のせいで口がきけない間、非常に侮辱的な態度で非難した。しかし、女たちはマリアムネに対して非常に憤慨し、彼女がベッドで浮気をしたと中傷した。このことがヘロデを最も怒らせると考えた。女たちはまた、その話の信憑性を高めるために、他の多くの状況を信じ込ませようと画策し、彼女がエジプトのアントニウスに自分の絵を送り、彼女の性欲があまりに激しく、不在のときでも、女に夢中になる男と、彼女に暴力を振るう力を持つ男に姿を現したと非難した。この告発

はヘロデに雷のように落ち、彼を混乱させた。特に、クレオパトラへの愛が嫉妬を引き起こし、クレオパトラは抜け目のない女性であり、彼女のせいでリサニアス王もアラビア人マリコスも連れ去られたと考えていたからである。彼の恐怖は結婚の解消だけでなく、命の危険にまで及んだからである。

4. それで、ヘロデは外国に旅に出ようとしたとき、自分の妻を、自分の姉妹サロメの夫であるヨセフに託した。ヨセフは、自分に忠実で、血縁関係からして善意を示してくれる人である。また、もしアントニーが彼を殺したら、妻を殺すようにという秘密の命令も彼に与えた。しかし、ヨセフは悪意はなく、ただ、死によってさえも妻と離れ離れになることは考えられないという王の妻への愛を示すために、この重大な秘密を彼女に明かした。ヘロデが戻ってきて、二人で話し合ったとき、彼は多くの誓いを立てて彼女への愛を証明し、彼女に対する愛情ほど他の女性に抱いたことがないと彼女に保証した。「そうです」と彼女は言った。「確かに、あなたはヨセフに命令を与えて私を殺すように命じたとき、あなたは私への愛を示したのです。」37

5. この重大な秘密が暴露されたと聞いたとき、彼は気が狂ったように、ヨセフが彼女を堕落させない限り、彼の命令を決して明かさなかっただろうと言った。彼の激情は彼を完全に狂わせ、彼はベッドから飛び降りて、狂ったように宮殿を駆け回った。その時、彼の妹サロメもその機会を利用して彼女の評判を台無しにし、ヨセフに対する彼の疑惑を確証した。そこで、彼は抑えきれない嫉妬と怒りから、二人をすぐに殺すように命じた。しかし、激情が収まるとすぐに、彼は自分のしたことを悔い改め、怒りが治まるとすぐに、彼の愛情は再び燃え上がった。そして実際、彼女に対する彼の欲望の炎はあまりにも燃え上がっていたので、彼は彼女が死んだとは考えられず、混乱した状態でも、まるで彼女がまだ生きているかのように彼女に話しかけたようだった。時が経つにつれて、彼女が死んだ今、彼の悲しみと悩みは、彼女が生きている間に抱いていた愛情と同じくらい大きいことが明らかになった。

E.2.23　第 23 章

> マリアムネの息子たちに対する中傷。アンティパテリスが彼らの前に立つ。彼らは皇帝の前に告発され、ヘロデは彼らと和解する。

1. マリアムネの息子たちは、母が受け継いだ憎しみを受け継いでいた。彼らはヘロデが彼女に対して犯した罪の大きさを考え、ヘロデを自分たちの敵として疑った。ローマで教育を受けている間もそうだったが、ユダヤに戻ってからもそれはさらに強まった。彼らのこの気質は、大人になるにつれて強まっていった。結婚適齢期になると、一人は叔母サロメの娘と結婚した。サロメは母を告発していたのである。もう一人はカッパドキアの王アルケラオスの娘と結婚した。彼らは、心の中に憎しみを抱きながら、大胆に語るようになった。中傷する者たちも、そのような大胆さにつけこみ、ある者は王に、二人の息子が王に対して裏切りの計画を企てていることをもっとはっきりと告げた。そして、アルケラオスの義理の息子であった彼は、義父を頼りに、逃亡して、ヘロデをカエサルの前で告発する準備をしていた。ヘロデの頭がこれらの中傷で十分にいっぱいになったとき、彼はドリスとの間にもうけたアンティパトロスを、他の息子たちに対する防御として再び寵愛し、彼らを彼らよりも優先させるためにできる限りのあらゆる手段を講じ始めた。

2. しかし、この息子たちは、自分たちの状況の変化に耐えることができなかった。しかし、無一文の母親から生

まれた息子を見ると、生まれの高貴さゆえに憤りを抑えられなかった。しかし、不安になると、いつでも怒りをあらわにした。そして、息子たちの怒りが日に日に増すにつれ、アンティパトロスは、すでに、父親を褒め称え、兄弟たちに対するさまざまな中傷を企て、自らも彼らの話を語り、他の適切な人物に彼らに対する別の話をもたらせるなど、非常に優れた自分の能力をすべて発揮し、ついには、兄弟たちが王国を継承する望みを完全に断ち切った。なぜなら、彼はすでに、父親の遺言で、後継者として公に記されていたからである。したがって、彼は、王冠以外の王族の装飾品や王族の印を携えて、カエサルのもとに送られた。また、彼は、母親を再びマリアムネのベッドに迎え入れることも間に合うようにできた。彼が同胞に対して使った二種類の武器は、おべっかと中傷であり、それによって彼は内密に事態を悪化させ、王は息子たちを処刑しようと考えるほどになった。

3. そこで父親はアレクサンダーをローマまで連れて行き、シーザーの前で自分を毒殺しようとしていると告発した。アレクサンダーは嘆き悲しんで話すことはほとんどできなかったが、アンティパトロスよりも有能でヘロデよりも賢い裁判官がいたので、謙虚に父親を責めることを避け、強い理性で父親に対する中傷を論破した。そして自分と同様に危険にさらされていた弟の無実を証明した後、最後にはアンティパトロスの狡猾さと彼らが被っている不名誉を嘆いた。彼はまた、内に秘めていた清廉潔白な良心だけでなく、雄弁さによっても自分を正当化することができた。なぜなら、彼は演説において抜け目のない人物だったからである。そして最後に、もし父親が彼らにこの犯罪を反対するなら、彼らに死刑を執行する権限があると言ったとき、彼は聴衆全員を泣かせた。そして彼は、告発を却下し、父と彼らを直ちに和解させるよう、カエサルに説得した。しかし、この和解の条件は、彼らがあらゆる点で父に従うこと、そして父が望む者に王国を譲る権限を持つことであった。

4. その後、王はローマから戻り、これらの告発に関して息子たちを許したように見えたが、それでも彼らに対する疑念がなかったわけではなかった。彼らの後には、これらの告発の源泉であるアンティパトロスが続いたが、彼は彼らを和解させた彼を尊敬していたため、彼らに対する憎しみを公然とは明らかにしなかった。しかし、ヘロデはキリキアを航海し、エレウサに寄港した。38 そこでアルケラオスは彼らを非常に親切に扱い、義理の息子の救出に感謝し、彼らの和解を非常に喜んだ。これは、彼が以前にローマの友人たちに、裁判でアレクサンドロスを援助するようにと手紙を書いていたため、なおさらであった。そこで彼はヘロデをゼフィリオンまで案内し、30 タラント相当の贈り物をした。

5. さて、ヘロデはエルサレムに着くと、民衆を集め、3 人の息子を彼らに紹介し、不在の理由を弁明し、神に大いに感謝し、また、混乱に陥っていた家を落ち着かせ、息子たちの間に和解をもたらしたカエサルにも大いに感謝した。それは王国そのものよりも重要なことだった。「そして、私はこれをさらに確固たるものにするつもりだ。カエサルは私に、国政を掌握し、後継者を任命する権限を与えたからだ。したがって、彼の親切に対する報いとして、また私自身の利益のために、私は私のこの 3 人の息子を王とすることを宣言する。そして、まず第一に、私がしようとしていることを神が承認してくださるように祈り、次に、あなたたちの承認も望む。彼らのうちの 1 人の年齢と、他の 2 人の高貴さによって、彼らは王位を継承できるだろう。いや、実際、私の王国はあまりにも大きいので、王をもっと増やすには十分かもしれない。さて、シーザーが仲間にし、父が任命した者たちを、その地位にとどめなさい。彼らに不当な敬意や不平等な敬意を払ってはならない。それぞれの生まれの特権に従って。なぜなら、そのような敬意を不当に払う者は、年齢相応以上の名誉を受けた者を喜ばせることはなく、名誉を失った者を悲しませることになるからである。彼らと会話する親族や友人については、私は彼らそれぞれに彼らを任命し、彼らが和合するための保証となるように彼らを任命する。彼らが会話する者たちの気性の悪さ

は、彼らの間に争いや口論を引き起こすことは承知しているが、もし彼らが会話する者たちが気性のよい者であれば、彼らはお互いに自然な愛情を保つであろう。しかし、私は彼らだけでなく、私の軍の指揮官全員が今のところ私だけに希望を託すことを望む。なぜなら、私はこれらの息子たちに王国を譲り渡すのではなく、王としての栄誉のみを与えるからである。それによって、彼らは統治者として統治の甘美な部分を享受することになるが、統治の重荷は私が望むと望まざるとにかかわらず私自身が負うことになる。そして、私が何歳であるか、私がどのように人生を送ってきたか、そして私がどれほど敬虔であったか、皆が考えてほしい。私の年齢は、人々がすぐに私の命の終わりを期待できるほど高くはない。また、若いうちに人を断つような贅沢な暮らしをしてきたわけでもない。私たちは神に対して非常に敬虔なので、非常に長生きできるだろう。しかし、私の息子たちと親しくなり、私を破滅させようとする者は、彼らのために私が罰するだろう。私は自分の子供たちをねたむような人間ではない。そして、それゆえ、人々に彼らに大きな敬意を払うことを禁じている。しかし、そのような [過度の] 敬意は彼らを傲慢にさせる方法であることを私は知っている。そして、彼らに近づくすべての人が、もし彼が善人であることが判明した場合、私から報酬を受け取るだろうが、もし彼が扇動的であることが判明した場合、彼の悪意のある迎合は、それを示した人から何も得られないだろうと心に留めるならば、彼らはすべて私の側、つまり私の息子たちの側につくだろうと私は思う。なぜなら、私が統治し、彼らと調和することは彼らの利益になるからだ。しかし、私の善良な子供たちよ、自然の神聖さそのものについて考えてください。そのおかげで、野獣の間でさえ自然な愛情が保たれます。次に、私たちの間にこの和解をもたらしたシーザーについて考えてください。そして第三に、私があなた方に命じる権限を持っていることを行うようにあなた方に懇願している私のことを考えてください。兄弟たち、続けてください。私はあなたたちに王の衣装と王の栄誉を与える。そして、あなたたちが互いに一致しているならば、私が決めたことが守られるよう神に祈る。」王はこのように言い、息子たち一人一人に丁重に挨拶した後、群衆を解散させた。群衆の中には、王の言ったことに同意し、それが実行されることを願う者もいたが、事態の変化を望む者は、王の言ったことを聞いていないふりをした。

E.2.24　第 24 章

> アンティパトロスとドリスの悪意。アレクサンダーはグラフィラスのことで非常に不安になる。ヘロデは、疑っていたフェロラスと、彼らに悪事を働くと知っていたサロメを赦免する。ヘロデの宦官たちは拷問を受け、アレクサンダーは縛られる。

1. しかし、兄弟たちが別れた後も、彼らの間の争いは続き、互いに対する疑念はますます深まった。アレクサンダーとアリストブロスは、長子の特権がアンティパテルに確定したことを非常に悲しんだ。同様に、アンティパテルは、兄弟たちが後を継ぐことに非常に腹を立てた。しかし、この後者は気まぐれで政治的な性格だったので、口をつぐむ方法を知っており、非常に巧妙に、それによって兄弟たちに対する憎しみを隠した。一方、アレクサンダーは、生まれの高貴さに頼り、心にあることをすべて口にしていた。さらに彼らを刺激する者も多く、彼らの [見かけの] 友人の多くは、彼らの知人の中に潜り込み、彼らの行動を探ろうとした。アレクサンダーが言ったことはすべて、すぐにアンティパテルに伝えられ、アンティパテルからヘロデに伝えられ、さらに付け加えられた。また、若者は心の素朴さから、相手を怒らせずに何かを言うことはできず、言ったことはやはり彼に対する中傷に変わった。そして、もし彼が少しでも会話を自由にしていたら、些細なことから大きな非難が捏造された。アンティパトロスもまた、絶えず誰かを挑発して、彼が彼について語った嘘が何らかの真実の根拠を持っている

ように見せかけようとしていた。そして、語られた多くの話のうち、そのうちの 1 つでも真実であると証明されれば、残りの話も真実であると推測された。そして、アンティパトロスの友人たちについて言えば、彼らは皆、生来非常に慎重に話すか、考えを隠すために買収されていたため、これらの重要な秘密は彼らを通じて何も漏れなかった。アンティパトロスの生涯を邪悪な謎と呼ぶのも間違いではない。なぜなら、彼は金銭でアレクサンドロスの知人を堕落させたか、おべっかで彼らの好意を得たからである。この二つの手段によって、彼はすべての計画を達成し、彼らに主人を裏切らせ、盗み出し、主人のしたことや言ったことを暴露させた。このように、彼はあらゆる点で非常に巧妙に行動し、中傷によって非常に抜け目なく道を切り開いた。彼はアレクサンダーとアリストブロスに対しては親切な兄弟であるかのような顔をしていたが、他の人々を唆して彼らがヘロデに何をしたかを密告させた。そして、アレクサンダーに対して何か不利なことが告げられると、彼はやって来て [彼の味方である] ふりをして、言われたことに反論し始めたが、その後は内密に物事を企て、王が彼に対して憤慨するようにした。彼の一般的な目的は、陰謀を企てることだった。そして、アレクサンダーが彼の父を殺そうと待ち伏せしていると信じ込ませようとした。アンティパトロスが彼に対して行った謝罪ほど、これらの中傷を確証するものはなかった。

2. これらの方法によりヘロデは激怒し、若者たちに対する彼の自然な愛情が日ごとに減るのと同程度に、アンティパテルに対する愛情は増していった。廷臣たちもまた、自ら進んで、また王の命令によって、同じ行動をとるようになった。特に王の親友であるプトレマイオス、王の兄弟たち、そして彼のすべての子供たちがそうであった。アンティパテルはすべてにおいて万能だったからである。そしてアレクサンダーにとって最も辛辣なことは、アンティパテルの母親もまたすべてにおいて万能だったということである。彼女は彼らに対して助言を与え、継母よりも厳しく、義理の息子を憎むのが普通である以上に王妃の息子たちを憎んでいた。そのため、すべての人々はすでに、有利になることを期待してアンティパテルに敬意を払っていた。そして、王の命令は、すべての者を兄弟たちから遠ざけた。王は、最も親しい友人たちに、アレクサンダーやその友人たちに近づいたり、敬意を払ったりしてはならないと命じたのである。ヘロデもまた、宮廷の召使たちだけでなく、外にいる友人たちからも恐ろしい存在となった。というのは、カエサルは、他のどの王にも、自分から逃げた者を、たとえ自分の管轄外の町からでも連れ戻すことができるという特権を、カエサルに与えたことはなかったからである。ところで、若者たちは自分たちに対してなされた中傷を知らなかった。そのため、彼らはそれに対して身を守ることができず、むしろそれに屈した。彼らの父親は、彼らのどちらに対しても公然と苦情を申し立てなかったからである。しかし、しばらくして、父親が自分たちに対して冷淡であること、また、気になることがあれば何でもひどく動揺していることから、彼らは事態がどうなっているかを悟った。アンティパトロスは、叔父フェロラスと叔母サロメを敵に回し、いつも妻のように彼女と話し、彼女らを自分たちに対していらだたせていた。さらに、アレクサンドロスの妻グラピュラは、自分の高貴な家系と家系を [偉人から] 引き出し、父方はテメノス、母方はヒュスタスペスの息子ダレイオスの血筋で、自分は王国の他の誰よりも優れた女性であると偽り、彼らに対する憎悪を増大させた。彼女はまた、ヘロデの妹や妻たちの家系の卑しさを頻繁に非難し、彼女らは皆、美しさでヘロデに選ばれたのであって、家柄で選ばれたのではないと述べた。ところで、彼の妻たちは少なくなかった。ユダヤ人は昔から多くの妻を娶ることが許されていたし、この王も多くの妻を好んでいたからである。これらすべては、グラピュラの自慢と非難のせいでアレクサンダーを憎んだ。

3. いや、アリストブロスは、グラピュラの非難に怒りを覚えただけでなく、義理の母であるサロメと口論を起こしていた。彼は妻の家族の卑しさを絶えず責め立て、自分が身分の低い女性と結婚したのに対し、兄のアレクサ

ンダーは王族の女性と結婚したと不平を言った。これを聞いたサロメの娘は泣き、さらにこうも話した。アレクサンダーは他の兄弟の母親たちを脅し、自分が王位についたら、彼女たちを娘たちと機織りをさせ、田舎の兄弟たちを学校の先生にする、そして、そのような仕事に就くよう、彼女たちは注意深く教育されていたのだと、冗談を言った。そこでサロメは怒りを抑えきれず、すべてをヘロデに話した。また、彼女の証言は、彼女自身の義理の息子に対するものであったため、疑われることもなかった。また、王の心を激怒させたもう一つの誹謗中傷もあった。王は、息子たちが絶えず母親のことを話し、母親を悼む中で、王を呪うことをやめなかったこと、また、王が後の妻たちにマリアムネの衣服を贈ったとき、彼女らは、すぐに王室の衣服の代わりに、盗んだものを毛糸で編むと脅したことを耳にした。

4. こうしたことから、ヘロデは若者たちの高慢な気持ちを多少は恐れていたものの、彼らを改心させることを諦めることはなかった。海路でローマに向かう前に、ヘロデは若者たちを呼び寄せ、王として少し脅したが、父親として彼らを戒め、兄弟を愛するように勧め、今後改心するなら以前の罪を赦すと言った。しかし若者たちは、自分たちに対してなされた中傷を論破し、それは偽りであると言い、自分たちの行為は自分たちの無罪を証明するのに十分であると主張した。さらに、ヘロデ自身もそのような話には耳をふさぎ、簡単に信じるべきではない、なぜなら誰かが耳を傾ける限り、自分たちに不利な嘘をつく者が絶えないからである、と言った。

5. こうしてすぐにヘロデをなだめ、父としてその場の恐怖から解放された彼らは、その後しばらくして悲しみに暮れることになった。というのは、サロメと叔父フェロラスが敵であることを知っていたからである。二人とも重厚で厳格な人物であり、特にフェロラスは王冠以外の王国のあらゆる事柄でヘロデと協力していた。また、彼は自分の収入で百タラントを稼ぎ、ヨルダン川の向こう側のすべての土地の恩恵を受けていた。その土地は、カエサルにヘロデを領主とするよう頼み、ヘロデはそれに従って領主となった。ヘロデはまた、王族から妻をヘロデに与えていたが、それは自分の妻の妹に他ならず、彼女の死後、自分の長女を持参金三百タラントで結婚させた。しかし、フェロラスは自分の女奴隷への愛情から、この王女との結婚を断った。そのためヘロデは激怒し、その娘を自分の兄弟の息子であるヨセフと結婚させた。ヨセフは後にパルティア人によって殺害された。しかし、しばらくして彼はフェロラスに対する怒りを抑え、女奴隷に対する愚かな情熱を克服できなかったとして彼を許した。

6. いや、フェロラスは、王妃 [マリアムネ] が生きていたずっと前から、ヘロデを毒殺する陰謀を企てているかのように告発されていた。そして、非常に多くの密告者がやって来たので、ヘロデ自身も、同胞を非常に愛していたにもかかわらず、言われたことを信じ、恐れるようになった。そして、彼は、疑われている人々の多くを拷問にかけ、最後にフェロラス自身の友人たちのところへ行った。彼らのうち誰も公然と罪を告白しなかったが、彼らは、彼が愛するフェロラスを連れてパルティアへ逃亡する準備をしていたことを認めた。また、サロメの夫で、前の夫が姦通で死刑に処された後、王がサロメを結婚させた夫であるコストバルスも、彼のこの陰謀と逃亡を企てるのに一役買った。サロメ自身も、中傷のすべてを逃れることはできなかった。というのは、彼女の兄弟フェロラスは、ヘロデと激しく敵対していたアラビアの王オボダスの長官シレウスと結婚する約束をしたと彼女を告発したからである。しかし、彼女はこのことと、フェロラスが告発したすべてのことについて有罪となり、赦免を得た。王はまた、告発されていたフェロラスの罪についても赦免した。

7. しかし、家族全員の怒りはアレクサンダーのもとに向かい、そのすべてが彼の頭上にのしかかった。王の側で彼らが担っていた役職から明らかなように、王から最も尊敬されていた宦官が三人いた。彼らのうちの一人は王

の執事に任命され、もう一人は王のために夕食の用意をし、三人目は王を寝かしつけて横になった。アレクサンダーは多額の贈り物でこれらの男たちを説得し、淫らな行為をさせた。それが王に告げられると、彼らは拷問を受け、有罪となり、すぐに王と交わした犯罪行為を自白した。彼らはまた、自分たちがそうするように仕向けられた約束と、アレクサンダーがいかにして自分たちを欺いたかを知った。アレクサンダーは彼らに、ヘロデは老人で、髪を染めるほど恥知らずな男で、若返ると信じない限り、彼に期待を寄せるべきではないと告げていた。しかし、彼らは、彼が望むと望まざるとにかかわらず、王国の継承者となる人物に注意を向けるべきであり、その人物は間もなく敵に復讐し、友人たちを幸福にし、そしてまず第一に彼ら自身を祝福するであろう。権力者たちはすでにアレクサンダーに内密に敬意を表しており、兵士の隊長や将校たちも密かに彼のもとを訪れていた。

8. これらの告白はヘロデを非常に怖がらせたので、彼はそれをすぐに公表しようとはしなかった。しかし、彼は密かに夜昼にスパイを派遣し、行われたことや言われたことすべてを詳しく調べさせた。そして、誰かが [反逆の] 疑いがあると、彼は彼らを死刑に処した。そのため、宮殿はひどく不当な手続きで満ちていた。なぜなら、誰もが他人に対して敵意や憎しみを抱いていたため、中傷をでっち上げたからである。また、王の血なまぐさい怒りを、口論していた相手に不利になるように悪用する者も多く、嘘は簡単に信じられ、中傷がでっち上げられるよりも早く罰が下された。ちょうどそのとき他の人を告発していた者も告発され、有罪判決を下した者とともに処刑に連行された。王の命が危険にさらされていたため、取り調べは非常に短時間で済んだからである。彼はまた、非常に激しい憎しみに陥り、告発されていない者を誰一人として愛想よく見ることはできず、自分の友人に対しては最も残酷な態度を取った。したがって、彼は彼らの多くに宮廷に来ることを禁じ、実際に罰する権限のない者には厳しい言葉を投げかけた。しかし、アンティパトロスに関しては、彼は今や不運に見舞われているアレクサンダーを侮辱し、親族の勇敢な仲間を集めて、彼に対してあらゆる種類の中傷を巻き起こした。そして王に関しては、その途方もない中傷と策略に非常に恐怖し、アレクサンダーが抜き身の剣を手に自分のところに来るのを見たと錯覚した。そこで彼はすぐにアレクサンダーを捕らえ、縛り、拷問によって友人たちを尋問した。その多くは [拷問で] 死んだが、何も発見せず、良心に反することを何も言わなかった。しかし、彼らのうちの何人かは、耐え忍んだ苦痛のせいで嘘を言わざるを得ず、アレクサンダーとその兄弟アリストブロスが彼に対して陰謀を企み、狩りをしている彼を殺してローマに逃げる機会をうかがっていたと言った。これらの告発は信じ難い性質のものであり、彼らが陥っていた大きな苦境にのみ基づいて作られたものであったが、王はそれを容易に信じた。彼は息子を縛った後、彼が不当なことをしたのではないと見えるようにすることが、いくらか慰めになると考えた。

E.2.25　第 25 章

アルケラオスはアレクサンダー・フェロラスとヘロデの間の和解を実現させた。

1. さて、アレクサンダーは、父を説得するのは不可能だと悟ったので、どんなにひどい災難であれ、それに立ち向かうことを決意した。そこで彼は敵を告発する書物を 4 冊書き、陰謀を企てていたことを告白した。しかし、それと同時に、大部分の廷臣が彼と共謀しており、特にフェロラスとサロメがそうであったと宣言した。それどころか、サロメは一度やって来て、彼が望むと望まざるとにかかわらず、夜中に彼と寝るように強要した。これらの書物はヘロデの手に渡り、権力者に対する大騒ぎとなった。そして今、アルケラオスは義理の息子と娘のこ

とで恐れをなして急いでユダヤにやって来た。彼は適切な助手として、非常に慎重な態度でやって来て、策略によって王に脅迫を実行させなかった。というのは、アレクサンダーのもとに着くと、彼は叫んだ。「この哀れな婿はいったいどこにいるのだ？父を殺そうと企んだ者の首をどこで見ることができるのか？私はこの手でそれをバラバラに引き裂こうとしている。こんなに立派な夫を持つ娘にも、私は同じことをしてやる。たとえ彼女が陰謀の共犯者でなくても、こんな奴の妻であることによって、彼女は汚れているのだ。そして、もしアレクサンダーがまだ生きているなら、この陰謀の対象となっているあなたの忍耐力に感心せずにはいられない。カッパドキアから急いで来たので、彼がずっと前に罪で死刑に処せられているのを目にするだろうと思っていた。それでも、あなたへの敬意と尊厳から、私は娘を彼と結婚させたのだが、今、私たちは二人について相談しなければならない。もし、あなたの父としての愛情があまりに大きくて、息子を罰することができないのなら、彼はあなたに対して陰謀を企てたのなら、我々は右手を変え、この機会に我々の怒りを次々に表現しよう。」

2. この尊大な宣言をした後、彼は混乱していたにもかかわらず、ヘロデの怒りを和らげ、ヘロデはアレクサンダーが彼に読ませるためにまとめた本を彼に渡した。そして、彼はそれぞれの頭に着くと、ヘロデと共にそれについて検討した。そこでアルケラオスは、彼が利用した策略の機会を捉え、徐々にこれらの本に名前が載っている人々、特にフェロラスに罪をなすりつけた。そして王が彼の真剣な言葉を信じたのを見て、彼は言った。「我々は、若者自身がそのような悪党たちに陰謀を企てられているのではなく、若者があなたを陰謀したのではないのかを考えなければなりません。彼はすでに王族の特権を享受しており、あなたの後継者の一人になる見込みがあるため、彼がそのような恐ろしい犯罪に陥る理由が私にはわかりません。私が言いたいのは、彼を説得する人物がいないなら、あるいは若者を説得する能力があることを悪用する人物がいないなら、ということです。なぜなら、そのような人物によって、若者だけでなく老人も騙されることがありますし、彼らによって最も有名な家系や王国が転覆されることもあります。」

3. ヘロデは彼の言ったことに同意し、次第にアレクサンダーに対する怒りは和らいだが、フェロラスに対する怒りはより強かった。なぜなら、4 冊の本の主な主題はフェロラスだったからである。フェロラスは、王の性向が突然変わったこと、アルケラオスとの友情が王をどうすることもできないこと、そして王には身を守るための名誉ある手段がないことを察知し、厚かましい行動で王の安全を確保した。そこで彼はアレクサンドロスのもとを離れ、アルケラオスに頼った。アルケラオスは、アレクサンドロスが多くの犯罪で直接捕らえられ、それによって彼が王に対して陰謀を企て、この若者が現在陥っている不幸の原因であることが明らかにされた今、彼がその狡猾な悪行と、告発された罪の否認をやめ、告発を告白し、まだ彼に好意を抱いている兄に許しを請わない限り、彼を許す方法はないだろう、しかし彼がそうするなら、彼はできる限りの援助を彼に与えるだろう、と彼に告げた。

4. この助言にフェロラスは従い、同情を最もかき立てるような服装をし、黒い布を体にまとい、目に涙を浮かべてヘロデの足元にひれ伏し、自分がしたことの許しを請い、自分が非常に邪悪な行いをしたことを告白し、告発されたすべての罪を犯したと告白し、女性への愛がもたらした心の混乱と混乱を嘆いた。そこでアルケラオスがフェロラスを連れてきて告発し、証言させたとき、アルケラオスは彼の言い訳をして、ヘロデの怒りを和らげた。これは、ある家庭内の例を用いて行われた。というのは、彼は自分の兄弟からもっと大きな被害を受けたとき、復讐の情熱よりも自然の義務を優先したからである。なぜなら、王国でも肉体と同じように、どこかの部分が常に体重によって膨張しており、その場合には、そのような部分を切除することは適切ではなく、穏やかな治療法

で治癒することが適切であるからです。

5. アレヘラオスがこのように言い、さらに同じ目的でさらに多くのことを言ったことで、ヘロデのフェロラスに対する不興は和らいだ。しかし、アレヘラオスはアレクサンダーに対する憤りを捨てず、娘を離婚させて自分から引き離すと言い、ついにはヘロデをその境遇に追い込み、以前の彼に対する態度とは逆に、若者のためにアルケラオスに懇願し、娘を彼と婚約させ続けるようにさせた。しかしアルケラオスは、彼女が他の誰かと結婚することは許すが、アレクサンダーとは結婚させないと彼に強く信じ込ませた。なぜなら、アレヘラオスは、その縁によって結ばれた関係とそれに伴う特権が維持されるという非常に貴重な利点を考えていたからである。王は、もしその結婚を解消しないなら、息子はそれを大いに喜ぶだろう、特に若者と彼女との間にはすでに子供がおり、その妻は王にとても愛されていたので、彼女が妻のままである限り、以前のように罪を犯すことがないように、彼の大きな守り手となるだろう、だから、もし彼女が一度王から引き離されれば、王は絶望に陥るだろう、なぜなら、そのような若者の試みは、家庭で愛情を落ち着かせることで、その試みから逸らされると、最も和らぐから、と言った。そこでアレヘラオスはヘロデの望みに従ったが、困難を伴い、若者と和解し、父親とも和解した。しかし、彼は、この件のすべてについてすでに皇帝に詳細を書いたので、どうしてもローマに遣わされて皇帝と話し合う必要があると言った。

6. こうして、アルケラオスの策略は終わりを迎え、彼は義理の息子を危険から救い出した。しかし、これらの和解が終わると、彼らは宴会や楽しい娯楽に時間を費やした。そしてアルケラオスが去るとき、ヘロデは彼に 70 タラントの贈り物と、宝石をちりばめた黄金の王座、宦官数名、そしてパンニキスと呼ばれる側室を与えた。また、彼は友人全員に、その身分に応じて相応の敬意を払った。同様に、王の親族全員が王の命令により、アルケラオスに豪華な贈り物をした。こうして、彼はヘロデとその貴族たちによってアンティオキアまで案内されて旅を続けた。

E.2.26　第 26 章

エウリュクレスがマリアムネの息子たちを中傷した経緯と、コスのエウアラトスが彼らに対して謝罪したが効果がなかった経緯。

1. 少し後、アレヘラオスの策略をはるかに超える男がユダヤにやって来た。彼はアレクサンドロスと非常に賢明に結ばれた和解を覆しただけでなく、彼の破滅の原因となった。彼はラケデモニア人で、名前はエウリュクレスであった。彼は非常に堕落した男で、金銭欲から王の支配下に住むことを選んだ。ギリシアでは贅沢は満足できなかったからである。彼はヘロデに豪華な贈り物を贈り、彼の目的を達成するための餌として仕掛けたが、すぐに何倍にもなって返ってきた。しかし、彼は贈り物など何の価値もないとみなした。彼が購入した品々で王国を血に染めない限りは。したがって、彼は王にへつらったり、巧妙に話したり、また嘘の賛辞を送ったりして、王をだました。というのは、彼はすぐにヘロデの盲点に気付き、ヘロデを喜ばせるためにあらゆることを言い、行い、それによって彼の最も親しい友人の一人となったからである。なぜなら、国王も周囲の者も、このスパルタ人を祖国のゆえに大いに尊敬していたからである。41

2. さて、この男は、家族の腐敗した部分、兄弟同士の争い、父親が彼らそれぞれに対してどのような態度を取

っているかに気付くと、まずアンティパトロスの家に下宿することにしたが、アレクサンダーをアンティパトロスとの友情を装って騙し、アルケラオスの古い知り合いであると偽った。そのため、彼はすぐにアレクサンダーの忠実な友人として親しく認められた。また、すぐに兄のアリストブロスにも自分を推薦した。そして、このようにしてこれらの人物を試した後、ある人物にはある方法で、別の人物には別の方法で、それぞれを騙した。しかし、彼は主にアンティパトロスに雇われていたので、アレクサンダーを裏切ったのである。これは、長男である間、彼の期待の邪魔をする人々の陰謀を見過ごしたからだとアンティパトロスを非難することによってであった。そして、アレクサンダーを非難した。なぜなら、女王の子として生まれ、王の娘と結婚したアレクサンダーは、卑しい女の子に王位継承権を主張することを許したからだ。しかも、彼にはアルケラオスが完全な形で彼を支えていた。また、アレクサンダーの忠告は、アルケラオスとの偽りの友情のため、若者には誠実なものと思われた。そのため、アレクサンダーは、アンティパトロスの自分に対する態度を嘆き、何も隠さず、ヘロデが彼らの母親を殺した後、彼女から王国を奪ったのも不思議ではないと語った。これに対して、エウリュクレスは、彼の境遇を哀れみ、彼とともに悲しむふりをした。また、エウリュクレスは、仕掛けた餌で、アリストブロスにも同じことを言わせた。こうして、彼は兄弟二人に父親への不満を訴えるようそそのかし、それからアンティパトロスのところへ行き、これらの重大な秘密を彼に伝えた。彼はまた、自分の兄弟たちが彼に対して陰謀を企て、剣を抜いて襲い掛かろうとしているかのように、独自の作り話を付け加えた。この情報に対して彼は多額の金銭を受け取り、そのことでアンティパトロスを父の前に推薦し、ついにアレクサンダーとアリストブロスを墓に運ぶ作業を引き受け、父の前で彼らを告発した。そこで彼はヘロデのもとに行き、彼から受けた恩恵への報いとして彼の命を救い、親切なもてなしに対する報いとして彼の命の光を保つと告げた。剣は長い間研がれ、アレクサンダーの右手は長い間彼に対して伸ばされていたが、彼は彼の道に障害を置き、彼のスピードを妨げ、彼の計画に協力するふりをした。アレクサンダーは、ヘロデは他人の王国を統治することに満足していないと言った。そして、母親を殺した後、その政権を荒廃させようとした。しかし、その上、彼は偽の後継者を擁立し、彼らの先祖の王国をあの厄介なアンティパトロスに与えようとした。今や、ヒルカノスとマリアムネの亡霊をなだめるために、復讐を果たそうとした。なぜなら、流血なしにそのような父親から政権を継承するのは、彼にとってふさわしくないからである。毎日、そうするように彼を刺激する多くの出来事が起こるので、彼は何も言えず、それが彼に対する中傷の機会を与える。なぜなら、他の場合でも、生まれの高貴さについて言及されると、彼は不当に中傷されるが、彼の父親は、確かにアレクサンダー以外の誰も高貴な生まれではないし、そのような高貴さを欠いた父親は不名誉であると言うだろうからである。彼らが狩りをしているときに彼が何も言わないと、彼は怒らせることになる。そして、もし彼が誰かを褒めても、彼らはそれを冗談のように受け取る。彼らはいつも父親が容赦なく厳しいと感じ、アンティパトロス以外には誰に対しても自然な愛情を持っていない。そのため、この陰謀がうまくいかなければ、彼は喜んで死ぬが、父親を殺した場合、自分を救う十分な機会がある。第一に、彼には簡単に逃げることができる義父のアルケラオスがいる。第二に、彼には今日までヘロデの性格を知らなかったシーザーがいる。なぜなら、その時は、父親が彼を脅かしていたときのような恐怖感を持って彼の前に現れることはないだろうから。そして、その時は、自分だけに関係する告発を持ち出すことはなく、まず第一に、彼らの国の災難、彼らがどのように死に至るまで課税されているか、そして流血によって得られた富がどのような贅沢と邪悪な習慣に使われているかを公然と主張するだろうからである。我々の富を手に入れているのはどのような人々なのか、彼が恩恵を与えている都市は誰のものなのか、彼は祖父 [ヒルカノス] と母 [マリアンネ] に何が起こったのかを調べさせ、王国の甚だしい悪事を公然と宣言するだろう。そのため、彼は父親殺しとみなされるべきではない。しかし、それは彼に対する中傷の機会を与える。なぜなら、他の場合でも、生まれの高貴さについて

言及されると、彼は不当に中傷されるが、彼の父親は、確かにアレクサンダー以外には誰も高貴な生まれではないし、彼の父親はそのような高貴さを欠いているために不名誉であると言うだろうからである。彼らが狩りをしているときに彼が何も言わないと、彼らは怒る。彼が誰かを褒めると、彼らはそれを冗談のように受け取る。彼らはいつも父親が容赦なく厳しいと感じ、アンティパトロス以外の誰にも自然な愛情を持っていない。そのため、この陰謀が成功しなければ、彼は喜んで死ぬが、父親を殺した場合、彼は自分自身を救う十分な機会を持っている。第一に、彼には簡単に逃げることができる義父のアルケラオスがいる。第二に、彼には今日までヘロデの性格を知らなかったシーザーがいる。なぜなら、そのとき彼は、父が彼を脅かしていたときにいつもしていたような恐怖感を父の前に抱いて現れることはなく、そのときは自分だけに関係する告発を持ち出すこともなく、まず第一に、彼らの国の災難、彼らがいかにして死に至るまで課税されているか、流血によって得られた富がどのような贅沢や邪悪な行為に使われているかを公然と主張するだろう。我々の富を手に入れているのはどのような人々か、彼が恩恵を与えている都市は誰のものか。祖父 [ヒルカノス] と母 [マリアムネ] に何が起こったのかを調べさせ、王国の甚だしい邪悪さを公然と宣言するだろう。そのため、彼は父殺しとみなされるべきではない。しかし、それは彼に対する中傷の機会を与える。なぜなら、他の場合でも、生まれの高貴さについて言及されると、彼は不当に中傷されるが、彼の父親は、確かにアレクサンダー以外には誰も高貴な生まれではないし、彼の父親はそのような高貴さを欠いているために不名誉であると言うだろうからである。彼らが狩りをしているときに彼が何も言わないと、彼らは怒る。彼が誰かを褒めると、彼らはそれを冗談のように受け取る。彼らはいつも父親が容赦なく厳しいと感じ、アンティパトロス以外の誰にも自然な愛情を持っていない。そのため、この陰謀が成功しなければ、彼は喜んで死ぬが、父親を殺した場合、彼は自分自身を救う十分な機会を持っている。第一に、彼には簡単に逃げることができる義父のアルケラオスがいる。第二に、彼には今日までヘロデの性格を知らなかったシーザーがいる。なぜなら、そのとき彼は、父が彼を脅かしていたときにいつもしていたような恐怖感を父の前に抱いて現れることはなく、そのときは自分だけに関係する告発を持ち出すこともなく、まず第一に、彼らの国の災難、彼らがいかにして死に至るまで課税されているか、流血によって得られた富がどのような贅沢や邪悪な行為に使われているかを公然と主張するだろう。我々の富を手に入れているのはどのような人々か、彼が恩恵を与えている都市は誰のものか。祖父 [ヒルカノス] と母 [マリアムネ] に何が起こったのかを調べさせ、王国の甚だしい邪悪さを公然と宣言するだろう。そのため、彼は父殺しとみなされるべきではない。そして、彼らがいかにして死に至るまで課税され、流血によって得られた富がどのような贅沢と邪悪な行為に使われているか、我々の富を得ているのはどのような人々か、彼が恩恵を与えている都市は誰のものか、彼は祖父 [ヒルカノス] と母 [マリアムネ] に何が起こったのかを調べさせ、王国の甚だしい邪悪さを公然と宣言するだろう。そのため、彼は親殺しとみなされるべきではない。そして、彼らがいかにして死に至るまで課税され、流血によって得られた富がどのような贅沢と邪悪な行為に使われているか、我々の富を得ているのはどのような人々か、彼が恩恵を与えている都市は誰のものか、彼は祖父 [ヒルカノス] と母 [マリアムネ] に何が起こったのかを調べさせ、王国の甚だしい邪悪さを公然と宣言するだろう。そのため、彼は親殺しとみなされるべきではない。

3. エウリュクレスがこの不吉な演説をした後、彼はアンティパトロスを、父を慕う唯一の子供であり、そのため父に対する他の者の陰謀の妨げになっていると大いに称賛した。以前の告発に対して怒りを抑えきれなかった王は、このことで、治りがたいほど激怒した。そのとき、アンティパトロスは別の機会に、父のもとに他の人を送り、兄弟たちを告発し、彼らがユクンドゥスとティラノスと個人的に話し合ったことを告げた。彼らはかつて王の馬の主人であったが、いくつかの罪のためにその名誉ある職から外されていた。ヘロデはこの告発に非常に激

怒し、すぐにその男たちを拷問するよう命じたが、彼らは王に伝えられたことについて何も告白しなかった。しかし、ある手紙が提出された。それは、アレクサンダーが城の知事に宛てて書いたもので、彼が父を殺したときに彼とアリストブロスを城に迎え入れ、その際に武器を与え、その他できる限りの援助をしてほしいと願う内容だった。アレクサンダーは、この手紙はディオファントスの偽造であると言った。このディオファントスは王の秘書官で、大胆で、誰の筆跡も偽造するのが巧妙な人物だった。そして、彼は多数の筆跡を偽造した後、ついにその罪で死刑に処された。ヘロデ王も城の知事を拷問にかけるよう命じたが、告発内容については何も聞き出せなかった。

4. しかし、ヘロデは証拠があまりに弱いと感じたが、息子たちを監禁するよう命じた。これまでは息子たちは自由だったからである。また、彼は家族の厄介者であり、この卑劣な告発の捏造者であったエウリュクレスを救い主であり恩人であると呼び、50 タラントの報酬を与えた。すると彼は、自分がやったことの正確な報告ができないよう、すぐにカッパドキアに行き、そこでアルケラオスから金をもらい、ヘロデとアレクサンダーを和解させたと厚かましくも偽った。そこから彼はギリシャに渡り、このように悪事で得た金を同様に悪事に使った。そのため、彼はカエサルの前で、アカイアに反乱を起こし、その都市を略奪したとして二度告発され、追放された。こうして彼は、アリストブロスとアレクサンダーに対して犯した邪悪な行為の罰を受けたのである。

5. しかし、コスのエウアラトスをこのスパルタ人と対立させるのは、今や価値があるだろう。なぜなら、彼はアレクサンドロスの最も親しい友人の一人で、エウリュクレスが来たのと同じ時期にアレクサンドロスのもとを訪れたからである。そこで王は、アレクサンドロスが告発されたことは真実であるかどうかを彼に尋ねた。彼は、若者たちからそのようなことは聞いたことがないと誓って彼に保証した。しかし、この証言は、あの惨めな者たちの罪を晴らすのに何の役にも立たなかった。なぜなら、ヘロデはただ、彼らに不利なことを言うことに耳を傾ける気があり、最も喜んで耳を傾けたからであり、彼らが有罪であると信じ、彼らに対して憤慨を示した者は皆、彼に最も同情的だったからである。

E.2.27　第 27 章

> ヘロデはカエサルの指示により、エウリュトスで息子たちを告発した。彼らは法廷に引き出されなかったが、有罪判決を受け、しばらくしてセバステに送られ、そこで絞首刑に処された。

1. さらに、サロメはヘロデの息子たちに対する残酷さを激化させた。アリストブロスは、義母であり叔母でもある彼女を、彼ら自身と同じような危険に巻き込もうと望んだからである。そこで彼は、サロメ自身の安全を守るよう彼女に使いをやって、王が彼女を死刑に処す準備をしていることを伝えた。それは、彼女が以前アラビアのシルレウスと結婚しようとしたとき、王の敵である彼に王の重大な秘密を漏らしたかのような告発があったためである。そして、これが最後の嵐としてやって来て、以前大きな危険にさらされていた若者たちを完全に沈めたのである。サロメは王のもとに駆けつけ、自分に与えられた忠告を王に告げた。そこで王はもはや我慢できず、若者たち二人を縛るように命じ、二人を互いに離しておいた。彼はまた、軍の将軍ウォルムニウスをただちにシーザーのもとに派遣し、友人のオリンポスも同行させた。オリンポスは、その情報を文書で携えていった。彼らがローマに船で向かい、王の手紙をシーザーに届けるとすぐに、シーザーは若者たちの事件に非常に困惑した。しかし、彼は、父親から息子たちを有罪とする権限を奪うべきだとは思わなかった。そこで彼は手紙を書いて、

息子たちに対する権限を彼に与えた。しかし、同時に、彼に対する陰謀の件については、公の法廷で調査し、親族と属州の知事を陪審員として任命するのがよいだろうとも言った。そして、もしその息子たちが有罪と判明したら、死刑に処する。しかし、彼らが彼から逃げることしか考えていないようであれば、罰を軽くするべきだとも。

2. これらの指示に従って、ヘロデはベリュトスにやって来た。そこでは、カエサルが法廷を召集するよう命じていた。そして、裁判官を集めた。カエサルの手紙で指定されていたように、最初に座ったのは、サトゥルニヌスとペダニウス、そして彼らと共にいた副官たちで、彼らには行政長官のウォルムニウスもいた。彼らの隣には、王の親族や友人たち、サロメ、フェロラスが座っていた。その後ろには、アルケラオスを除くシリア全土の主要人物たちが座っていた。ヘロデは、アルケラオスがアレクサンドロスの義父であったため、彼に疑いを持っていた。しかし、彼は息子たちを公開法廷に召喚しなかった。これは非常に巧妙なやり方だった。なぜなら、彼らがただ現れただけでも、彼らは間違いなく哀れみを受けるだろうと彼は十分に知っていたからである。そして、もし彼らが話すことを許されたなら、アレクサンドロスは彼らが告発されたことに容易に答えたであろう。しかし、彼らはシドンタン人の村プラタネに拘留されていました。

3. そこで王は立ち上がり、まるで彼らがそこにいるかのように息子たちを非難した。そして彼らが彼に対して陰謀を企てたという告発の部分については、証拠がなかったため、弱々しく主張した。しかし、彼は、非難、冗談、有害な態度、そして死よりも重い彼に対する 1 万の同様の罪状について、陪審員の前で主張した。誰も彼に反論しなかったため、彼は、まるで自分が有罪判決を受けたかのように、息子たちに対して苦い勝利を得たので、彼らに自分のケースを哀れむよう促した。そこで彼は各人に判決を求めたが、最初にサトゥルニヌスが下した判決はこれであった。彼は若者たちを有罪としたが、死刑にはしなかった。なぜなら、今そこにいる自分の 3 人の息子がいる彼が、他人の息子の死に投票することはふさわしくないからである。2 人の副官も同様の投票をした。彼らの例に倣った者もいたが、ウォルムニウスはより悲観的な側に投票し始め、その後に続いた者たちは皆、若者たちに死刑を宣告した。ある者はお世辞から、ある者はヘロデへの憎しみからであったが、彼らの犯罪に対する憤りからであった者はいなかった。そして今やシリアとユダヤのすべてがこの悲劇の最後の場面を大いに期待し、待っていたが、誰もヘロデが子供たちを殺すほど野蛮であるとは思っていなかった。しかし、彼は子供たちをティルスに連れ去り、そこからカエサレアに船で行き、若者たちにどのような死を与えるべきかを思案した。

4. さて、王の老兵で、テロという名の者がいた。彼にはアレクサンダーと非常に親しく友人でもあった息子がおり、彼自身も若者たちを特に可愛がっていた。この兵士は、自分が行っていることに対する憤りのあまり、ある意味気が狂っていた。そして最初、歩き回りながら、正義は踏みにじられ、真実は滅び、自然は乱され、人間の生活は不正に満ち、その他、自分の命を惜しまない人間に情熱が思い起こさせるあらゆることが起こっている、と大声で叫んだ。そしてついに彼は勇気を出して王のところへ行き、こう言った。「本当に私は、あなたが最も愛すべき人々に対して、最も邪悪な悪党の言うことを聞いているとき、あなたは最もみじめな人だと思います。あなたは、フェロラスとサロメを死刑にすべきだと何度も決意しているのに、あなたの息子たちに対しては、彼らの言うことを信じています。一方、彼らは、自分の息子たちの継承を断つことで、すべてをアンティパテルに委ね、それによって、完全に自分たちの力でできるような王をあなたに選んでいます。しかし、アンティパテルの兄弟たちのこの死は、兵士たちから彼を憎むことになるのではないか、考えてみてください。若者たちを同情する者しかいませんし、大隊長たちの多くは、公然と憤慨しています。」こう言うと、彼は憤慨している者たちの名前を挙げたが、王は、テロ自身とその息子とともに、その者たちを直ちに捕らえるよう命じた。

5. そのとき、トリフォという名の床屋がいた。この男は一種の狂気の中で民衆の中から飛び出してきて、自分を責めて言った。「このテロは、私がお前の首を切るときに、剃刀でお前の喉を切るようにも私を説得しようとし、その見返りにアレクサンダーが多額の贈り物をくれると約束した。」これを聞いたヘロデは、テロとその息子、床屋を拷問で調べた。しかし、他の者たちが告発を否定し、テロもそれ以上何も言わなかったので、ヘロデはテロをもっと厳しく拷問するよう命じた。しかし、息子は父を憐れんで、王が許してくれるなら、すべてを王に明かすと約束した。息子はこれに同意した後、父はアレクサンダーの説得で彼を殺そうとしていると言った。ある者は、これは父を拷問から解放するために偽造されたものだと言った。そして、それは真実だと言う人もいました。

6. ヘロデは民衆の集会で将軍たちとテロを告発し、民衆を結集させて彼らに対抗させた。そして彼らは床屋のトリフォンと共に処刑された。彼らは木片や石を投げつけられて殺された。彼はまた息子たちをカエサレアから遠くない町セバステに送り、そこで絞殺するよう命じた。彼の命令はすぐに実行されたので、彼は彼らの死体をアレクサンドリアの要塞に運び、母親の祖父アレクサンダーの傍らに埋葬するよう命じた。これがアレクサンドリアとアリストブロスの最期であった。

E.2.28　第 28 章

アンティパトロスがすべての人に憎まれていること、そして王が殺された人々の息子たちを自分の親族と結婚させていること、しかしアンティパトロスが王に彼らを他の女性と結婚させさせたこと。ヘロデの結婚と子供たちについて。

1. しかし、アンティパトロスは今や王位継承権を争う余地のない人物であったにもかかわらず、国民から耐え難い憎悪が彼に向けられた。なぜなら、彼らは皆、彼が同胞に対する中傷を企んだ人物であることを知っていたからである。しかし、彼は、殺された者たちの子孫が成長するのを見て、恐ろしく恐れ始めた。アレクサンダーにはグラピュラとの間にティグラネスとアレクサンダーという二人の息子がいた。アリストブロスにはヘロデ、アグリッパ、アリストブロスという息子がおり、ヘロディアスとマリアムネという娘たちもおり、これらはすべてサロメの娘ベルニケとの間に生まれた。グラピュラに関しては、ヘロデはアレクサンダーを殺すとすぐに、彼女とその相続分をカッパドキアに送り返した。彼はアリストブロスの娘ベルニケをアンティパトロスの母方の叔父と結婚させたが、アンティパトロスは、彼女と不和になっていた彼女を和解させるためにこの縁談を企てた。また、贈り物やその他のへつらい方でフェロラスやカエサルの友人たちの好意を得て、ローマに少額の金を送った。サトゥルニヌスやシリアの友人たちも、彼の贈り物で十分に満たされた。しかし、彼が贈り物を多く与えれば与えるほど、彼はますます憎まれた。贈り物は寛大さからではなく、恐れから金を使っているからだ。その結果、贈り物を受け取った人々は以前よりも彼に好意を抱かなくなり、何も与えなかった人々は彼の敵意を強めることになった。しかし、彼は、予想に反して王が孤児たちの面倒を見ているのを見て、また同時に、彼らの父親を殺したことに対する後悔を、彼らから生まれた子供たちへの同情から感じて、毎日、ますます多額の金銭を与えていった。

2. そこでヘロデは親族や友人たちを集め、子供たちを彼らの前に立たせ、目に涙を浮かべながらこう言った。「これらの子供たちの父親を私から奪ったのは不運な運命でした。これらの子供たちは孤児という身分から当然の同情によって私に推薦されたのです。しかし、私は非常に不幸な父親であったにもかかわらず、より良い祖父

のように見えるよう努力し、これらの子供たちに私の後継者として最も愛する後見人を残すつもりです。そこで、私はあなたの娘フェロラスを、アレクサンダーの兄弟の長男と婚約させ、あなたに彼らの世話を義務付けます。また、私はあなたの息子、アリストブロスの娘アンティパテルと婚約させます。ですから、あなたはその孤児の父親になってください。私の息子ヘロデ [フィリップ] は彼女の姉妹をもうけます。彼女の母方の祖父は大祭司でした。そして、私を愛する者は皆、私の兄弟の一人となりましょう。これらの性質には感情が込められており、私に愛情を持つ者なら誰もそれを破棄することはない。そして私は、神が私の王国と子孫のために、これらの子供たちを結婚させてくださり、彼らの父親たちを見たときよりももっと穏やかな目で彼らを見守ってくださるよう祈る。」

3. 彼はこれらの言葉を語りながら涙を流し、子供たちの右手を合わせ、その後、愛情を込めて子供たち一人一人を抱きしめ、集会を解散させた。これに対して、アンティパトロスは直ちに大騒ぎになり、行われたことを公然と嘆いた。なぜなら、これらの孤児たちに与えられたこの名誉は、父の存命中でさえ、彼自身の破滅を招くものであり、アレクサンドロスの息子たちがアルケラオス（王）とフェロラス（領主）の両者から支援を受けることになれば、政権を失う危険が再び生じるだろうと彼は考えたからである。また、彼自身が国民からいかに憎まれ、彼らがこれらの孤児たちをいかに哀れんでいるか、ユダヤ人が彼の同胞たちを生きていたときにどれほど大きな愛情を抱いていたか、そして彼によって彼らが死んだ今、彼らがどれほど喜んで彼らを思い出しているかを考えた。そこで、彼はあらゆる手段を講じてこれらの婚約を解消しようと決心した。

4. さて、彼は、気難しい父親にこの件について秘密裏に話すことを恐れた。父親は、ほんの少しの疑いにも動揺した。そこで、彼は思い切って父親のもとへ行き、面と向かって、父親が授けてくれた尊厳を剥奪しないよう、また権力が他の者たちにある間は、王の名だけは持たないようにと懇願した。なぜなら、アレクサンドロスの息子が、祖父のアルケラオスとフェロラスの両者を後見人にすれば、彼は決して政権を維持できないからである。そして、王族の多くが存命していたので、彼は、その [予定された] 結婚を変更してくれるよう、熱心に懇願した。さて、王には 9 人の妻がいて、42 人の子どもがいた。アンティパトロスはドリスから生まれ、ヘロデ・フィリップは大祭司の娘マリアムネから生まれた。アンティパスとアルケラオスもサマリア人マルタケから生まれた。また、彼の娘オリンピアスも、彼の兄弟ヨセフの息子が結婚していた。エルサレムのクレオパトラによってヘロデとフィリッポスが生まれ、パラスによってファサイロスが生まれた。また、ロクサナとサロメという二人の娘がいた。一人はフェドラ、もう一人はエルピスから生まれた。また、子供のいない妻が二人いた。一人は従妹でもう一人は姪だった。この二人のほかに、アレクサンドロスとアリストブロスの姉妹である二人の娘がマリアムネから生まれた。王族があまりに多かったため、アンティパトロスはこれらの結婚を変更するよう彼に懇願した。

5. 王は、彼がこれらの孤児たちに対してどのような態度を取っているかに気づき、それに怒りを覚えた。そして、自分が殺した息子たちについて、それがアンティパトロスの偽りの噂によって引き起こされたのではないだろうかという疑念が心に浮かんだ。そこで、その時、彼はアンティパトロスに長くて不機嫌な返事をさせ、立ち去るように命じた。しかし、その後、彼は巧妙にお世辞を言って説得し、結婚を変えた。彼はアリストブロスの娘を彼に、彼の息子をフェロラスの娘と結婚させた。

6. この例から、このおべっか使いのアンティパトロスがどれほど多くのことを成し遂げたかがわかるだろう。サロメが同じような境遇にあっても成し遂げられなかったことさえも。というのも、アンティパトロスの妹で、カエサルの妻ユリアの助けでアラビア人シルレウスとの結婚を熱望していた彼女が、ヘロデ王は、彼女がその計画

を中止しなければ、彼女を憎むべき敵とみなすと誓ったからである。また、アンティパトロス自身の同意に反して、友人のアレクサスと結婚させ、彼女の娘の一人をアレクサスの息子と、もう一人をアンティパトロスの母方の叔父と結婚させた。また、王がマリアムネとの間にもうけた娘のうち、一人はアンティパトロスの妹の息子、もう一人はアンティパトロスの兄の息子ファサイロスと結婚した。

E.2.29　第 29 章

アンティパトロスは耐え難い存在となり、ヘロデの遺言を携えてローマに派遣される。フェロラスは妻を残そうと弟を捨て、自宅で死去する。

1. アンティパトロスは孤児たちの希望を断ち切り、自分の利益になるような関係を結んだ後、王国に一定の期待を抱いているかのように、活発に行動した。そして、今やその悪行に確信が加わったため、彼は我慢できなくなった。なぜなら、すべての人々の憎しみを避けることができず、人々に与えた恐怖の上に自分の安全を築いたからである。フェロラスもまた、彼が王国に定着しているとみなし、彼の計画に協力した。また、宮廷には女性たちが集まり、新たな騒動を引き起こした。フェロラスの妻は、その母と妹、そしてアンティパトロスの母とともに、宮殿で非常に厚かましくなった。彼女はまた、王の二人の娘を侮辱するほど横柄で、44 そのために王は彼女を非常に憎んだ。しかし、これらの女性たちは彼に嫌われていたにもかかわらず、他の女性たちを支配していた。ただ一人、サロメだけが、彼女たちの仲睦まじい合意に反対し、彼らの会合を王に報告し、それが王の利益にならないと告げた。そして、彼女が自分たちに対してどんな中傷をし、どれほどヘロデが怒っているかを知った女性たちは、公の会合や互いの親しいもてなしをやめた。いや、それどころか、王が聞いているところでは、互いに言い争っているふりをした。アンティパトロスも同様の偽装を利用した。公の事柄になると、彼はフェロラスに反対したが、それでも彼らは秘密の陰謀を企て、夜になると陽気に会合した。他人の観察は、互いの合意を確認する以上のことはしなかった。しかし、サロメは彼女たちのしたことをすべて知っていて、ヘロデにすべてを報告した。

2. しかし彼は彼らに対して、特にフェロラスの妻に対して怒りに燃えた。というのは、サロメが主に彼女を告発していたからである。そこで彼は友人や親族を集め、そこでこの女性を多くのことで、特に彼女が彼の娘たちに対して行った侮辱について告発した。彼女はパリサイ人たちが彼に対して行ったことに対する報酬として彼らに金銭を提供し、彼に媚薬を与えて彼の兄弟を彼の敵に仕立て上げた。ついに彼はフェロラスに話を向け、次の二つのことを彼に選択させると言った。兄弟と一緒にいるか、それとも妻と一緒にいるか。フェロラスが妻を捨てるくらいなら死んでも構わないと言ったとき、ヘロデはその件でこれ以上何をすべきか分からず、アンティパトロスに話を向け、フェロラスの妻とも、フェロラス自身とも、彼女の所有物である誰とも関係を持たないようにと命じた。アンティパトロスは公然とその命令に違反しなかったが、密かに夜の会合に出席し、サロメに見られることを恐れたため、イタリア人の友人たちを介し、ローマに移住できるように手配した。というのは、アンティパトロスをしばらくの間カエサルのもとに送るのが適切であると彼らが書いたとき、ヘロデは遅滞することなく、彼を派遣し、豪華な出席者と多額の金銭を添え、彼に遺言状を持たせた。遺言状では、アンティパトロスに王国が遺贈され、アンティパトロスの後継者にちなんでヘロデと名付けられた。そのヘロデとは、大祭司の娘マリアムネの息子である。

3. アラビア人のシルレウスもまた、シーザーの命令を無視してローマに航海したが、これはニコラオスが以前アンティパトロスと起こした訴訟に関して、全力でアンティパトロスに対抗するためであった。このシルレウスは、自身の王アレタスとも激しい争いをしていた。なぜなら、彼はアレタスの他の多くの友人、特にペトラ市で最も有力な人物であるソヘモスを殺害していたからである。さらに、彼はヘロデの家令ファバトゥスに多額の金銭を与えて、ヘロデに対抗するのを手伝わせて説得していた。しかし、ヘロデがさらに金銭を与えると、彼はシルレウスを手放すよう説得し、こうしてシーザーが要求した支払いをすべて要求した。しかし、シルレウスは支払うべき金額をまったく支払わず、ファバトゥスをシーザーに告発し、自分がシーザーのために執事になったのではなく、ヘロデのために執事になったのだと言ったので、ファバトゥスはそのことで彼に腹を立てたが、ヘロデにはまだ非常に尊敬されていたので、シルレウスの重大な秘密を暴き、シルレウスが自分の護衛の一人であるコリントスを買収して堕落させたので、彼はコリントスに注意しなければならないと王に告げた。そこで王は従った。コリントスはヘロデの王国で育てられたが、生まれはアラビア人であった。そこで王はコリントスを直ちに逮捕するよう命じた。コリントスだけでなく、一緒に捕まった二人のアラビア人も逮捕した。一人はシルレウスの友人で、もう一人は部族の長であった。最後の二人は拷問を受け、コリントスから多額の金をもらってヘロデ王を殺害しようとしたことを告白した。そしてシリア総督サトゥルニヌスの前でさらに尋問された後、ローマに送られた。

4. しかし、ヘロデはフェロラスに懇願するのをやめず、妻を離縁するよう強要し続けた。45 フェロラスを憎む理由は数多くあったが、フェロラス自身を罰する方法を思いつくことができなかった。ついには、フェロラスをひどく憎んだため、フェロラスと弟を王国から追放した。フェロラスはこの傷を非常に辛抱強く受け止め、自分の領土（ヨルダン川の向こうのペレア）に去って行き、逃亡の唯一の手段はヘロデの死であり、生きている間は二度と戻らないと誓った。また、弟が病気になったときも、死ぬ前に何か命令を残そうと思って、フェロラスを自分のところに呼び寄せたにもかかわらず、戻ることはなかった。しかし、ヘロデは思いがけず回復した。しばらくしてフェロラス自身も病気になったが、ヘロデは大いに穏健な態度をとった。というのは、彼は彼のところへ行き、哀れに思い、介抱したからである。しかし、彼の愛情は彼に何の役にも立たなかった。フェロラスはその少し後に死んだからである。ヘロデは彼の生涯の最後の日まで、彼に深い愛情を抱いていたが、毒で殺したという噂が広まった。しかし、彼は彼の遺体をエルサレムに運ばせ、国中で彼のために大いに哀悼の意を表し、彼のために盛大な葬儀を執り行った。これが、アレクサンドロスとアリストブロスの殺害者の一人が辿り着いた結末であった。

E.2.30　第 30 章

> ヘロデがフェロラスの死について調査したところ、アンティパトロスが彼のために毒薬を準備していたことが判明した。ヘロデはドリスとその共犯者、そしてマリアムネを宮殿から追放し、彼女の息子ヘロデの名を遺言書から抹消した。

1. しかし、罰は元の犯人であるアンティパトロスに移され、フェロラスの死に端を発した。というのは、解放された者たちの何人かが悲しそうな表情で王のもとを訪れ、兄が毒で殺され、妻が変わった方法で調理したものを持ってきたが、それを食べた途端、兄は病気にかかった、アンティパトロスの母と妹が二日前にアラビアから、

そのような薬を調合する技術に長けた女性を連れてきて、フェロラスに媚薬を調合させようとしたが、媚薬の代わりに猛毒を与え、その女性と知り合いだったシルレウスの計らいでそれが行われた、と告げたからである。

2. 王は多くの疑惑に深く心を動かされ、女中や自由人の何人かをも拷問にかけた。そのうちの一人は苦しみの中で叫んだ。「天と地を統べる神が、このすべての悲惨の元凶であるアンティパテルの母を罰してくださいますように！」王はこの告白に心を動かされ、さらに真相を究明しようとした。そこでこの女は、アンティパテルの母がフェロラスやアンティパテルの女中たちと親しく、また密会していたこと、そしてフェロラスとアンティパテルが王のもとから帰ってくると一晩中一緒に酒を飲んでいたこと、男奴隷も女中も誰もそこにいさせなかったこと、そして自由人の一人がそのことを知った。

3. そこでヘロデは女中たちを一人ずつ拷問にかけたが、全員が前述の発見に一致し、合意によりアンティパトロスはローマへ、フェロラスはペレアへ出発した。というのは、彼らはしばしば次のように話し合ったからである。ヘロデはアレクサンダーとアリストブロスを殺した後、彼らとその妻を襲うつもりである。なぜなら、マリアムネとその子供たちを殺した後は、誰も容赦しないからである。このため、できるだけ野獣から遠ざかるのが最善である。アンティパトロスは母親の前で自分の状況を何度も嘆き、自分の頭には白髪が生えており、父親は日に日に若返っており、本格的に王になる前に死を迎えるかもしれない、ヘロデがいつ死ぬかはまだ誰にもわからないが、もし死んだとしても、王位継承権を享受できるのはほんのわずかな間だけであろう、など。アレクサンドロスとアリストブロスの息子であるヒドラの首長たちが成長しつつあること、父によって、彼の子供たちが跡を継ぐという希望を奪われたこと、彼の死後の跡継ぎは自分の息子ではなく、マリアムネの息子ヘロデになることになっていたこと、この点でヘロデは明らかに気が散っていて、自分の遺言がそのように行われると考えていたこと、彼はすべての父親の中で自分の子供を最も憎んでいたため、自分の子孫が一人も残らないように気を配っていたこと。しかし、彼は兄弟をもっと憎んでおり、そのために、彼は少し前に自分に百タラントを与えて、フェロラスと関わりを持たないようにした。フェロラスが、「私たちは彼に何の害を与えたのか？」と言った時、アンティパトロスはこう答えた。「彼が我々の持つものすべてを奪い、我々を裸にして生かしておいてくれれば良いのだが。しかし、この野獣から逃れることは不可能だ。この野獣は殺人を好み、我々が個人的に一緒にいても、公然と誰かを愛することを許さない。しかし、我々にも勇気と男の手があれば、公然と愛することができるだろう。」

4. 拷問の際、女たちはこれらのことを語った。また、フェロラスはペレアに逃げる決心をしたとも語った。ヘロデは百タラントの件で、女たちの言ったことをすべて信じた。なぜなら、彼はその件について誰とも話をしておらず、アンティパトロスとだけ話をしていたからである。そこで彼はまずアンティパトロスの母に怒りをぶつけ、アンティパトロスが彼女に贈った、非常に高価な装飾品をすべて取り上げ、彼女を再び宮殿から追い出した。彼はまた、拷問の後、フェロラスの女たちを、今は和解したように世話した。しかし、彼自身は大いに動揺し、あらゆる疑惑に激怒し、罪のある人を拷問せずにはおかないだろうと恐れて、多くの無実の人々を拷問に連行した。

5. そして、王はサマリアのアンティパトロスを尋問しようとした。アンティパトロスはアンティパトロスの執事であった。アンティパトロスを拷問したところ、アンティパトロスが仲間のアンティフィロスにエジプトから致死性の毒薬を取り寄せさせたこと、アンティパトロスの叔父テウディオがそれを手に入れてフェロラスに渡したことが分かった。アンティパトロスは、自分がローマにいる間に父親を連れて行って、自分がやったという疑いを晴らすようにと彼に命じていたからである。フェロラスもこの毒薬を妻に託した。そこで王は彼女を呼び寄

せ、受け取ったものをすぐに持って来るように命じた。そこで彼女は、まるでそれを持って来るかのように家から出てきたが、王の尋問や拷問を避けるために、家の屋上から身を投げた。しかし、神の摂理によるものと思われるが、アンティパトロスが彼を罰しようとしたとき、彼女は頭ではなく体の他の部分から落ち、逃げた。彼女が連れてこられたとき、王は彼女を介抱し（彼女は落ちたとき、最初はまったく意識がなかった）、なぜ身を投げたのか尋ね、もし彼女が本当のことを話すなら罰を免除すると誓った。しかし、もし彼女が何かを隠したら、拷問で彼女の体をバラバラに引き裂き、埋葬される部分を残さないと誓った。

6. すると、女は少し間を置いてから言った。「フェロラスが死んだ今、なぜ私はこれらの大いなる秘密を語るのをためらうのでしょうか。それは、我々のすべてを破滅させるアンティパテルを救うことにつながるだけです。それでは王よ、聞いてください。そして、欺かれることのない神ご自身が、私がこれから言うことの真実の証人となってください。フェロラスが死にゆく間、あなたがフェロラスのそばに座って泣いていたとき」、そのとき彼は私を呼び寄せて言った。「愛しい妻よ、私は兄が私に対してどのような態度を取っているかに関して大いに誤解し、私にこれほど愛情深い彼を憎み、私が死ぬ前に、私のためにこれほど不機嫌な彼を殺そうと企てました。私自身は、私の不信心の報いを受けています。しかし、あなたは、アンティパテルが我々に残し、彼を滅ぼすためにあなたが保管している毒を持ってきてください。そして、私の目の前でそれをすぐに火で焼き尽くしてください。そうすれば、私は死なないでしょう。目に見えない世界で復讐される可能性がある。」私は彼の命令に従ってこれを持って行き、その大部分を火の中に空けましたが、不確かな将来とあなたへの恐怖のために、少しは私自身の使用のために残しておきました。

7. 彼女がそう言うと、箱を持ってきた。その中には少量のこの薬が入っていた。しかし王は彼女を放っておき、拷問をアンティフィロスの母と兄に移した。二人はアンティフィロスが箱をエジプトから持ち出し、アレクサンドリアの医師である兄から薬を受け取ったと告白した。それからアレクサンドロスとアリストブロスの幽霊が宮殿中を巡回し、他の方法では発見できなかったことの調査官や発見者となり、疑いのない者を尋問に連れ出した。その結果、大祭司の娘であるマリアムネがこの陰謀に気づいていたことが判明し、彼女の兄たちも拷問を受けたときにそれが事実であると断言した。そこで王は、母親が息子に対して行ったこの横柄な行為に復讐し、アンティパトロスの後継者として以前から指名されていたヘロデを、その処遇から抹消した。

E.2.31　第 31 章

> アンティパトロスはバティルスによって有罪判決を受けるが、それを知らずにローマから帰国する。ヘロデは彼を裁判にかける。

1. これらのことが終わった後、バティルスが尋問を受け、アンティパテルの有罪を宣告した。バティルスは、アンティパテルの計画の決定的な証拠となった。実際、バティルスは彼の解放された男にほかならなかった。この男は、別の致命的な薬、つまり毒蛇の毒と他の蛇の汁を持って来た。最初の薬が効かなかった場合、フェロラスとその妻は、これも武器にして王を滅ぼすためだった。また、彼は、アンティパテルの父に対する傲慢な試みに加えて、王の息子でローマで教育を受けた、まだ若かったが寛大な性格の兄弟、アルケラオスとフィリップに対して書いた手紙も持ち込んだ。アンティパテルは、自分の希望に反しないように、できるだけ早く彼らを排除しようとした。そのために、彼はローマの友人の名で彼らに対する手紙を偽造した。彼は賄賂で彼らのうちの何人

かを堕落させ、彼らが父親をひどく非難し、アレクサンダーとアリストブロスを公然と嘆き、彼らが呼び戻されたことに不安を抱いていることを書かせた。なぜなら彼らの父親はすでに彼らを呼び寄せていたからであり、それがまさにアンティパトロスを悩ませていたことだった。

2. いや、実際、アンティパトロスはユダヤにいたとき、ローマに旅立つ前に、ローマから彼らに対する同様の手紙を送るために金を渡し、それからまだ彼を疑っていなかった父親のもとを訪れ、兄弟たちのために謝罪し、手紙に書かれていたことのいくつかは虚偽であり、他のものは単に若気の至りであると彼らのために主張した。しかし、兄弟たちに対して手紙を書いた人々に贈り物をして多額の金を費やしたのと同時に、高価な衣服や様々な織りの絨毯、金銀の杯、その他多くの珍しい品物を購入して帳簿を混乱させようとした。そうすれば、そのような家具に多額の費用が費やされていることが目に見えるので、手紙を書くために人を雇うのに使った金を隠すことができる。というのは、彼は 200 タラントに上る費用の帳簿を提出したが、その主な口実は、シルレウスとの訴訟だったからである。そのため、彼の悪行は、たとえ小さなものであっても、より大きな悪行によって覆い隠され、拷問による尋問はすべて、彼が父親を殺そうとしたことを暴露し、手紙は彼が兄弟を殺そうとした二度目の試みを暴露した。しかし、ローマに来た者の中で、ユダヤでの彼の不幸を彼に知らせる者は一人もいなかった。有罪判決から帰国まで七ヶ月が経っていたにもかかわらず、彼ら全員が彼に対して抱いていた憎しみはあまりにも大きかった。そして、おそらく、彼に告げようとした者の口を封じたのは、殺された兄弟たちの亡霊だったのだろう。その後、彼はローマから手紙を書き、友人たちに、すぐに彼らのところに行くこと、そしてカエサルによって栄誉ある退去を告げたことを知らせた。

3. さて、王は、この陰謀者を捕らえたいと望み、また、彼が何らかの方法で自分の状況を知って警戒するのではないかと恐れたので、彼に宛てた手紙では怒りを隠した。他の点では親切に書いたのと同様、彼は彼に急ぐよう頼んだ。なぜなら、彼が早く来れば、母に対する不満を捨てることができるからだ。アンティパトロスは、母が宮殿から追放されたことを知らなかったわけではない。しかし、彼は以前に、タレントゥムでのフェロラスの死に関する手紙を受け取っていて、そのことに大いに嘆いていた。そのため、ある者は彼を自分の叔父のために書いたと称賛した。しかし、おそらくこの混乱は、彼が陰謀を企てて失敗したために生じたものであろう。そして彼の涙は、叔父フェロラスのためというより、その計画に従属するはずだった彼の死に対するものであった。さらに、毒が発見されるかもしれないという、彼の計画に対する一種の恐怖が彼を襲った。しかし、キリキアにいたとき、彼は父親から前述の手紙を受け取り、それに応じて大急ぎした。しかし、ケレンデリスに航海したとき、まるで彼の魂が自分自身に何らかの災難を予感しているかのようで、彼の心に母親の不幸に関する疑惑が浮かんだ。そのため、最も思いやりのある友人たちは、母親が追い出された理由がわかるまでは、軽率に父親のもとに行くべきではないと助言した。母親にかけられた中傷に彼が巻き込まれるのを恐れたからだ。しかし、それほど思いやりがなく、アンティパトロスの安全よりも、自分たちの故郷を見たいという願望を重視していた友人たちは、急いで帰国するよう説得した。旅を遅らせることで父親に悪い疑いをかけ、彼に対する噂を流す者たちの手掛かりを与えないように。なぜなら、もし何かが彼に不利に働いたとしたら、それは彼の不在によるものであり、彼がそこにいたらそんなことはできなかっただろうから。そして、彼らは、不確かな疑いのために確実な幸福を奪い、むしろ父親のもとに戻って、彼のせいで不安定な状態にある王権を彼に引き継がせないのは馬鹿げていると言った。アンティパトロスはこの最後の忠告に従った。なぜなら、神の摂理が彼を [破滅へと] 急がせたからである。そこで彼は海を渡り、カエサレアの港であるセバストゥスに上陸した。

4. そしてここで彼は、まったく予期せぬ孤独に遭遇した。誰もが彼を避け、誰も彼に近づく勇気はなかった。なぜなら、彼はすべての人から等しく憎まれていたからである。そして今やその憎しみは自由に表に現れ、人々は王の怒りに怯え、人々は彼から遠ざかるようにした。なぜなら、街全体 [エルサレム] はアンティパテルに関する噂で満ちていたが、アンティパテル自身はそれを知らない唯一の人物だったからである。なぜなら、ローマへの航海を始めたとき、これほど華々しく追い出された人はいなかったが、今、これほど不名誉な形で戻された人はいなかったからである。そして実際、彼はすでにヘロデの家族にどんな不幸があるのかを疑い始めていたが、その疑いを巧妙に隠し、内心は恐怖で死ぬ覚悟ができていたが、無理やり大胆な表情をしていた。彼は今やどこにも逃げることができず、彼を取り囲む困難から抜け出す方法もなかった。実際、王が脅迫していたため、王室の事情について確かな情報さえも得られなかった。しかし、少しでも良い知らせがあるという希望はあった。何も発見されていないかもしれないし、もし何か発見されたとしても、厚かましさと巧妙な策略で罪を免れることができるかもしれない。それが彼が救出のために頼りにしていた唯一のものだった。

5. そして、彼はこれらの希望を抱き、友人を一人も連れずに宮殿に着くまで身を隠していた。なぜなら、友人たちは侮辱され、最初の門で締め出されたからである。ちょうどそのとき、シリアの大統領ウアルスが宮殿にいた。そこでアンティパトロスは父親のもとへ行き、大胆な表情で彼に近づき、挨拶をした。しかしヘロデは手を伸ばし、彼から顔を背け、叫んだ。「このような凶悪な告発を受けているのに、私を自分の腕の中に引き入れようとするとは、親殺しの兆候だ。この卑劣な悪党め、神よ、お前を辱めよ。お前にかけられたこれらの罪を晴らすまでは、私に触れてはならない。私はお前を裁く法廷に任命する。ちょうどいいタイミングでここにいるこのウァルスを裁判官に任命する。明日の弁護に備えておけ。お前にふさわしい弁解を準備する時間はたっぷりあるからな。」アンティパトロスは混乱し、この告発に答えることができなかったので、立ち去った。しかし、彼の母と妻がやって来て、彼に対して得たすべての証拠を告げた。そこで彼は我に返り、告発に対してどのような弁護をすべきか考えた。

E.2.32　第 32 章

> アンティパトロスはウァルスの前で告発され、最も強力な証拠によって [父に対する] 陰謀を企てたとして有罪判決を受けた。ヘロデは回復するまで処罰を延期し、その間に遺言を改ざんした。

1. さて、翌日、王は親族や友人の法廷を召集し、アンティパテルの友人たちも招集した。ヘロデ自身とウァルスが法廷長を務め、ヘロデはすべての証人を召集し、召喚を命じた。その中には、アンティパテルの母の家政婦の何人かも召喚された。彼らは、母から息子に宛てた次の手紙を運んでいるところを捕まったばかりだった。「これらのことはすべてすでに父上に知られてしまったので、シーザーから何らかの援助を得ない限り、父のもとへは行かないでください。」この証人と他の証人が召喚されると、アンティパテルはやって来て、父の足元にひれ伏して言った。「父上、お願いです。前もって私を非難しないでください。偏見のない耳で私の弁護に耳を傾けてください。もし許してくださるなら、私は無実であることを証明します。」

2. そこでヘロデは彼に黙るように叫び、ウァルスにこう言った。「ウァルスよ、あなたや他のすべての正直な裁判官は、アンティパテルが卑劣な悪党であると断定するだろうと私は考えざるを得ません。また、あなたは私の不運を憎み、このような子供たちを生んだことで私自身もあらゆる災難に値すると判断するのではないかと恐れ

ています。しかし、このような惨めな息子たちにこれほど愛情深い父親であった私はむしろ哀れまれるべきでしょう。なぜなら、私が以前の息子たちに王国を定めたとき、彼らがまだ幼かったにもかかわらず、そしてローマでの教育の費用に加えて、彼らをカエサルの友人にして他の王たちから羨ましがられるようにしたとき、彼らが私に対して陰謀を企てていることがわかったからです。彼らは死刑に処されましたが、それは主にアンティパテルのためにでした。なぜなら、彼は当時若く、私の後継者に任命されていたので、私は彼を危険から守るために特に注意を払ったからです。しかし、この放蕩な野獣は、私が示した忍耐に飽き足りなくなると、私が与えたその豊かさを自分自身に逆らって利用した。というのは、私は長生きしすぎていると思われたし、私が年老いてきたことに彼は非常に不安を感じていたからである。彼はこれ以上留まることもできず、親殺しで王位に就こうとした。そして、以前は何の評価も受けていなかった彼を田舎から宮廷に連れ戻し、女王から生まれた私の息子たちを追い出し、私の領土の継承者にしたことで、私は当然罰せられた。ああ、ウァルスよ、私は息子たちをそそのかして私に逆らわせ、アンティパテルのために彼らの正当な期待を打ち砕いたという、私の大きな愚行をあなたに告白する。実際、私が彼らにした親切は、アンティパテルに対してしたことに匹敵するものだっただろうか？私は、ある意味では、生きている間に王位を明け渡し、遺言で領土の継承者として公然と指名し、彼に年間50タラントの収入を与え、私自身の収入から法外な金額を彼に与えた。そして、彼がローマへ航海しようとしていたとき、私は彼に3タラントを与え、私の子供たちの中で彼だけを、彼の父の救出者としてシーザーに推薦した。さて、私の他の息子たちは、アンティパトロスのようなどんな罪を犯したのか？そして、この息子が私に対して陰謀を企てたことを示すほどの、彼らに対するどんな確固たる証拠が彼らに提出されたのか？それでも、この親殺しは、自分のために話すことを僭称し、狡猾な策略で真実を覆い隠そうとしている。ああ、ウァルスよ、あなたは彼から身を守らなければならない。なぜなら、私は野獣を知っているし、彼がいかにもっともらしく話すか、そして彼の偽りの嘆きを予見しているからだ。この男は、アレクサンダーが生きているときに、彼の世話をし、私の体を他人に託さないようにと私に勧めた男だ！この男は、私のベッドにやって来た男だ。そして誰かが私を罠にかけようとしないかと見回した！この男こそ私の眠りを守り、危険の恐怖から私を守り、息子たちの虐殺で私が苦しんでいるときに慰め、生き残った兄弟たちが私にどんな愛情を抱いているかを見守ってくれた男だった！この男こそ私の守護者であり、私の体の守護者だった！そして、ああヴァルスよ、あらゆる機会に彼が悪賢いことを、そして偽りの術を思い起こすとき、私は自分がまだ生きていることがほとんど信じられず、どうしてこのような悪事を企む深い陰謀家から逃れられたのか不思議に思う。しかし、何らかの運命が私の家を荒廃させ、私にとって最も大切な人たちを絶えず私に敵対させるので、私は涙を流して自分の不運を嘆き、孤独な状況にひそかにうめくだろう。しかし、私の血に飢えた者は誰一人罰を逃れられないと決心している。たとえ証拠が私の息子たち全員に及んだとしても。」

3. ヘロデがこう言うと、混乱したために言葉を止められ、友人の一人ニコラウスにアンティパトロスに対する証拠を提出するよう命じた。しかしその間に、アンティパトロスは頭を上げて（父の足元に横たわっていた）、大声で叫んだ。「父よ、あなたは私のために謝罪してくださいました。あなたは、私をずっとあなたの保護者としていたと告白しているのに、どうして私が父殺しになることができるでしょうか？あなたは私の親孝行をとんでもない嘘と偽善と呼ぶのです！では、他の事柄ではあれほど巧妙な私が、どうして、これほど恐ろしい犯罪を犯した者が人々から隠されるのは容易なことではなく、すべてを見通す、どこにでも存在する天の審判者から隠されるのは不可能なことであると理解できないほど狂っているのでしょうか？それとも、神があなたに対する邪悪な計画のために彼らにこれほど大きな罰を与えた私の兄弟たちがどのような結末を迎えたかを私は知らなかった

のでしょうか？実際、私をあなたに対して怒らせるようなものは何だったのでしょうか？王になるという希望がそうさせるのでしょうか？私は私はすでに王様でした。あなたから憎しみを疑うことができたでしょうか？いいえ。私はあなたに愛されていたのではありませんか？他に何を恐れることができましょうか？いいえ、あなたを安全に守ることで、私は他の人たちに恐怖を与えていました。私はお金が欲しかったでしょうか？いいえ。なぜなら、私ほどお金を使うことができた人は誰でしょうか？実際、父上、私が全人類の中で最も忌まわしい存在であり、最も残酷な野獣の魂を持っていたとしても、あなたが私に授けてくださった恩恵に圧倒されなかったでしょうか？あなた自身が言うように、あなたは私を宮殿に連れてきました。あなたは多くの息子たちよりも彼を優先しました。あなたは自分の生きている間に彼を王様にし、あなたが私に授けた他の多くの恩恵によって、あなたは私を嫉妬の的としました。ああ、惨めな人よ！父上、あなたがこの辛い不在を経験し、それによってあなたに対する嫉妬が湧き起こる大きな機会を与え、あなたに陰謀を企てている者たちに長い余地を与えることになるとは！しかし、父上、私があなたの仕事に関わっていなかったのは、老齢のあなたをシルレウスが軽蔑しないためでした。ローマは私の親孝行の証人であり、しばしば私をフィロパテルと呼んだ居住可能な地球の支配者であるシーザーも同様です。47 彼があなたに送った手紙をここで受け取ってください。ここに挙げられている中傷よりも信じられるものです。これらの手紙は私の唯一の弁明です。これらは、私があなたに対して抱いている自然な愛情の証明として使います。王国に私に対する潜在的な憎しみがあることを知っていたため、私が [ローマに] 航海したのは自分の意志に反したことであったことを思い出してください。おお、父上、あなたが、私に対する中傷と嫉妬の時間を与えることを強いることで、不本意ながら私を破滅させたのです。しかし、私はここに来て、私に不利な証拠を聞く用意ができています。もし私が親殺しであったとしても、私は陸路も海路も通ってきましたが、どちらにも不幸はありませんでした。しかし、この裁判の方法は私にとって有利ではありません。なぜなら、おお、父上、私はすでに神の前にもあなたの前にも有罪判決を受けているように思われるからです。そして私はすでに有罪判決を受けているのだから、拷問を受けた他の者たちの言うことを信じないでほしい。私を苦しめるために火を放ち、拷問台を私の内臓に突き通してください。この汚れた体が発するどんな嘆きも無視してください。私が親殺しなら、拷問を受けずに死ぬべきではないのです。」このようにアンティパトロスは嘆き泣き叫び、他の全員、特にウァルスに同情を抱かせた。ヘロデは、自分に対する証言が真実であることを知っていたため、感情が強すぎて泣くことを許さなかった唯一の人物だった。

4. そして今、ニコラオスは王の命令で、アンティパトロスの悪巧みについて多くのことを主張し、アンティパトロスに対する彼らの同情の結果を防いだ後、後にアンティパトロスに対して激しく大きな告発を行い、王国で起こったすべての悪事、特に彼の兄弟の殺害を彼のせいにし、彼が彼らに対して起こした中傷によって彼らが滅んだことを証明した。彼はまた、まだ生きている彼らに対して、あたかも彼らが王位継承のために陰謀を企てているかのように陰謀を企てたとも言った。そして [彼は] 自分の父のために毒を準備した者が自分の兄弟に対する害悪を控えるなどとどうして考えられるのかと言った。そして彼はヘロデを毒殺しようとしたことを彼に告発し、発見されたいくつかのことを順に説明した。そして、フェロラスの件については、アンティパトロスがフェロラスに弟を殺害させ、王の最愛の人たちを堕落させ、宮殿全体を悪で満たしたために、非常に憤慨していた。そして、他の多くの告発とその証拠を主張した後、彼はそれをやめた。

5. するとウァルスはアンティパテルに弁明を命じたが、彼は黙って横たわり、「神が私の無実を証明してくださいます」としか言わなかった。そこでウァルスは薬を要求し、当時獄中にあった有罪判決を受けた犯罪者に飲ませた。その犯罪者はその場で死亡した。そこでウァルスはヘロデと非常に内密に話し合い、この会合の報告をカ

エサルに書き送った後、一日滞在して立ち去った。王もアンティパテルを縛り、彼の不幸をカエサルに知らせるために人を遣わした。

6. その後、アンティパトロスがサロメに対しても陰謀を企てていたことが発覚した。アンティフィロスの家政婦の一人がローマから手紙を持って来たのである。手紙には、カエサルの妻ユリアの女中アクメが書かれていた。アクメは、サロメがユリアの書類の中に書いた手紙を見つけ、王への好意から密かに王に送ったと王に伝えた。サロメのこの手紙には、王に対する最も痛烈な非難と、王に対する最も厳しい告発が含まれていた。アンティパトロスはこの手紙を偽造し、アクメを堕落させて、ヘロデに送るよう説得したのである。これは、アンティパトロスに宛てた彼女の手紙によって証明されました。この女性は彼に次のように書きました。「あなたの望みどおり、私はあなたの父に手紙を書き、その手紙を送りました。そして、王がそれを読んだら妹を許さないだろうと確信しています。すべてが達成されたとき、あなたが約束したことを覚えておくといいでしょう。」

7. この手紙が発見され、サロメに対して偽造された手紙の内容が明らかになると、アレクサンドロスに対する手紙も偽造されたのではないかという疑念が王の心に浮かんだ。さらに、アンティパトロスのせいで妹を殺しかけたため、王はひどく動揺し、激怒した。そのため、王はもはや彼のすべての罪を罰するために彼を連れ出すのをためらわなかった。しかし、熱心にアンティパトロスを追跡していたとき、彼はひどい病気にかかり、抑制された。しかし、彼はアクメとサロメに対する陰謀についてのすべての報告をカエサルに送り、また彼の遺言を取り寄せてそれを改変し、その中でアンティパスを王とした。アンティパトロスがアルケラオスとフィリッポスの評判を彼に対して悪く言ったため、アンティパスは彼らの面倒を見なかった。しかし、彼はカエサルに、彼が彼に与えた他の贈り物に加えて、千タラントを遺贈した。彼はまた、妻、子供、友人、そして約 500 人の解放奴隷にも財産を残しました。また、他のすべての人に大量の土地と金銭を遺贈し、妹のサロメに敬意を表して、最も豪華な贈り物を与えました。これが、現在変更されている彼の遺言の内容でした。

E.2.33　第 33 章

> 金色の鷲は切り裂かれる。死を覚悟したヘロデの蛮行。自殺を図る。アンティパトロスを殺すよう命じる。5 日間生き延びてから死ぬ。

1. さて、ヘロデの病気はますますひどくなっていった。これは、彼の病気が老齢で憂鬱な状態にあったときに起こったからである。彼はすでに 70 歳で、子供たちの災難によって病気になり、健康であったときでさえ人生の楽しみがなかった。また、アンティパトロスがまだ生きているという悲しみも彼の病気を悪化させた。彼は、アンティパトロスを無差別に殺すのではなく、彼が回復したらすぐに殺すことを決意し、彼を [公然と] 殺害することを決意した。

2. 王の身に、他の災難に加えて、ある民衆の反乱も起こった。エルサレム市には、その国の法律に最も通じていると考えられ、そのため国中で非常に尊敬されていた二人の学者がいた。一人はセフォリスの子ユダ、もう一人はマルガルスの子マティアスであった。彼らが法律を解説すると、若者たちが大勢集まってきて、毎日、成人しようとしている若者たちの軍隊のようなものが集まっていた。さて、王が憂鬱と病気で衰弱しつつあると知らされた彼らは、知り合いに、今こそ神の大義を守り、国の法律に反して建てられたものを取り壊すのにふさわしい

時だと告げた。というのは、いかなる動物の像や顔、あるいはそれに類するものを神殿に置くことは、いかなるものであっても違法だったからである。さて、王は神殿の大門の上に金色の鷲を立てていたが、この学者たちはそれを切り倒すように勧め、もし危険が起こったら、国の法律のために死ぬのは栄誉なことである、なぜなら魂は不滅であり、そのために死んだ者には永遠の幸福が待っているからである、と説いた。一方、卑しい心を持つ者や、自分の魂を正しく愛するほど賢明でない者は、徳の高い行いの結果として死ぬよりも、病気で死ぬことを選んだ。

3. 彼らが弟子たちにこの話をしているとき、王が死にそうだという噂が広まり、若者たちはさらに大胆に作業に取りかかりました。そこで彼らは太い綱で神殿の上から降り、正午に、大勢の人が神殿にいたときに、斧であの金色の鷲を切り倒しました。このことはすぐに王の神殿の守備隊長に伝えられ、彼は大勢の兵士を率いて駆けつけ、40 人ほどの若者を捕らえて王のもとに連れてきました。そして、守備隊長がまず彼らに、金色の鷲を切り倒すほどの勇気があったかと尋ねると、彼らはそうしたと告白しました。そして守備隊長が、誰の命令でそうしたのかと尋ねると、彼らは、自分たちの国の法律の命令だと答えました。さらに守備隊長が、自分たちが死刑に処せられるときにどうしてそんなに喜んでいられるのかと尋ねると、彼らは、死んだ後にもっと大きな幸福を享受できるからだと答えました。48

4. これに王は激怒し、病気を克服して出て行き、民衆に語りかけた。その中で王は、これらの男たちを、神聖冒涜の罪を犯し、法を装ってさらに大きな企てをしており、不敬虔な者として罰せられるべきだと厳しく非難した。そこで民衆は、多数の者が有罪になるのではないかと恐れ、まずこの仕事に就かせた者、次にこの仕事に巻き込まれた者を罰したら、残りの者に対する怒りはおさまるだろうと望んだ。王は、困難を伴いながらもこれに従い、ラビたちとともに自ら降りてきた者を生きたまま焼き殺すよう命じ、捕まった残りの者をしかるべき役人に引き渡して、彼らに処刑させた。

5. その後、病気が彼の全身を襲い、さまざまな症状で体のあらゆる部分がひどく不調になった。微熱があり、体の表面全体に耐えがたい痒みがあり、結腸に絶え間ない痛みがあり、足の周りに水腫があり、腹部に炎症があり、陰部が腐敗して虫がわいた。さらに呼吸が困難で、まっすぐに座っているとき以外は呼吸できず、全身がけいれんしたため、占い師はこれらの病気は彼がラビに対して行ったことに対する罰だと言った。しかし、彼は数々の病気と闘い、まだ生きる希望を持ち、回復を望み、いくつかの治療法を考えた。そこで、彼はヨルダン川を渡り、カリロエの温泉を利用した。この温泉はアスファルト湖に流れ込んでいるが、それ自体は飲めるほど甘い。そこで医師たちは、彼の全身を油の入った大きな容器に下ろして温かい油で洗うのがよいと考えました。すると彼の目は衰え、まるで死にそうな様子で意識が朦朧としました。そのとき召使たちが騒ぎ立てると、その声で彼は再び意識を取り戻しました。しかし、彼は回復の見込みがないと感じ、兵士一人につき 50 ドラクマを与え、指揮官や友人たちには多額の金銭を与えるよう命令しました。

6. それから彼は戻ってエリコに来たが、その身体はひどく憂鬱で、今にも死にそうな状態だった。そのとき彼は恐ろしい悪事を企てた。というのは、彼はユダヤ民族全体の最も高名な男たちを村々から集め、競馬場と呼ばれる場所に閉じ込めたからである。それから彼は妹のサロメと彼女の夫アレクサスを呼び、彼らにこう言った。「ユダヤ人が私の死に際して祝祭を行うことは十分承知しているが、私の命令に従うなら、他の理由で哀悼され、豪華な葬儀を行うのは私の力である。今拘束されているこれらの男たちを取り囲むように兵士を送り、私が死んだらすぐに彼らを殺してくれ。そうすればユダヤ全土、そして彼らの家族全員が、望むと望まざるとにかかわら

ず、それを聞いて泣くだろう。」

7. 彼が彼らに与えた命令はこれであった。ローマの使節から手紙が届き、そこには、アクメがシーザーの命令で死刑に処せられ、アンティパトロスが死刑を宣告されたという知らせが伝えられた。しかし、彼らは、ヘロデが彼を追放したいのであれば、シーザーはそうすることを許すと書いていた。そこで彼はしばらく元気を取り戻し、生きたいと願ったが、すぐに苦痛に打ちひしがれ、食べ物がなくなり、けいれん性の咳で混乱し、自然死を避けようとした。そこで彼はリンゴを取り、ナイフを求めた。なぜなら彼はリンゴの皮をむいて食べていたからである。それから彼は周囲を見回し、邪魔する者がいないことを確認し、まるで自分を刺そうとするかのように右手を挙げた。しかし、彼の従兄弟であるアキアボスが走って来て、彼の手を握り、そうするのを妨げた。そのとき、宮殿では、まるで王が息を引き取るかのように、非常に大きな嘆きが起こった。アンティパトロスはそれを聞くとすぐに勇気を奮い起こし、喜びの表情で看守たちに、金銭を要求して、自分を解放して欲しいと懇願した。しかし、監獄の看守長は、その意図を妨害しただけでなく、走って行って王にその計画を告げた。そこで王は、体調が悪くなるほどの大声で叫び、すぐに護衛兵を何人か遣わしてアンティパトロスを殺した。また、彼をヒルカニウムに埋葬するよう命じ、遺言を再度変更し、その中で長男でアンティパスの兄弟であるアルケラオスを後継者にし、アンティパスを領主とした。

8. ヘロデは息子の殺害から 5 日間生き延びて死んだ。アンティゴノスを殺害させて王国を手に入れてから 34 年間統治していたが、ローマ人によって王にされてから 37 年間統治していた。さて、彼の財産はというと、他のすべての点では繁栄していた。もし他の誰かがそうであったなら、それは他の誰よりも繁栄していた。なぜなら、彼は私人から王国を手に入れ、それを長い間保持し、自分の息子たちにそれを残したからである。しかし、家庭の事情では、彼は非常に不運な男であった。兵士たちが彼の死を知る前に、サロメと彼女の夫は出てきて、王が殺害を命じた監禁されていた人々を解放し、考えを変えて、全員をそれぞれの家に帰らせるつもりだと告げた。これらの人々が去ると、サロメは兵士たちに王が死んだことを告げ、彼らと残りの群衆をエリコの円形劇場に集めて集会を開いた。そこで王から指輪を託されたプトレマイオスが彼らの前に出て、王が得た幸福について語り、群衆を慰め、兵士たちに残された手紙を読み、その中で彼は後継者に善意を持つように熱心に勧めた。そして手紙を読んだ後、彼は遺言を開いて読み、その中でフィリッポスがトラコニティスと近隣諸国を相続し、アンティパスが前述のように領主となり、アルケラオスが王となることになっていた。彼はまた、ヘロデの指輪と、彼が結んだ契約書を封印してカエサルの元に届けるよう命じられていた。なぜなら、カエサルは彼が結んだ契約書すべての主となり、彼の遺言を承認することになっていたからである。そして、彼は、彼が結んだ契約書が以前の遺言書にあったとおりに保管されるように命じた。

9. そこで、アルケラオスの昇進を祝って歓呼の声が上がった。兵士たちは群衆とともに隊列を組んで巡り、彼に好意を約束し、さらに、彼の統治を祝福するよう神に祈った。その後、彼らは王の葬儀の準備に取りかかった。アルケラオスは、その豪華な装飾品を一切省かず、死者の華やかさを増すために王室の装飾品をすべて持ち出した。宝石で刺繍された金の棺台と、紫色の様々な織りのベッドがあり、その上に死体が紫色で覆われていた。頭には王冠が置かれ、その上には金の冠があり、右手には王笏があった。棺台のそばにはヘロデの息子たちと親族の大勢がいた。その次には護衛兵、トラキア人、ゲルマン人、ガリア人の連隊が続き、まるで戦争に行くかのように見えたが、軍の残りは武装し、隊長や士官に規則正しく従って先頭に立った。その後に 500 人の召使と解放奴隷が手に甘い香料を持って続いた。そして遺体は 200 スタルゴン運ばれ、ヘロデが埋葬を命じたヘロデオンに

運ばれた。ヘロデの生涯の終わりとしてはこれで十分だろう。

(2024.12.5) 脚注省略

E.3　第二巻

69 年の間隔を含みます。ヘロデ王の死からウェスパシアヌスが征服に派遣されるまでユダヤ人ネロ著。

E.3.1　第 1 章

アルケラオスは人々のために葬儀の宴会を開き、ヘロデの物語。その後、大騒動が起こり、群衆とイエスは兵士たちを彼らに送り、約 3000 個を破壊します。

1. さて、アルケラオスがローマに旅をしなければならなかったことが、新たな騒動のきっかけとなった。というのは、彼は父のために七日間喪に服し、群衆を前にして非常に高価な葬儀の宴を催した後（この習慣は多くのユダヤ人にとって貧困の原因となっている。なぜなら、彼らは群衆を前に宴会を催さざるを得ないからである。もしこれを怠る者は聖人とはみなされないからである）、彼は白い衣をまとい、神殿に上った。そこで人々はさまざまな歓呼の声で彼を迎えた。彼はまた、高座と金の玉座から群衆に優しく語りかけ、彼らが父の葬儀に熱心に取り組んだことと、彼がすでに王国に定着しているかのように彼に従ったことに対して感謝を返した。しかし同時に、彼は彼らに、遺言によってこのすべての事柄の責任者とされているシーザーが継承を認めるまで、王の権威もそれに伴う名前も現時点では引き受けないだろうとも告げた。というのは、兵士たちがエリコで彼の頭に王冠を載せようとした時、彼はそれを受け取らなかったからだ。しかし、上位の領主たち（ローマ人）が彼に王国の完全な称号を与えた時、兵士たちだけでなく民衆の迅速さと彼に対する好意に対しても、彼は十分な報奨を与えるだろう。なぜなら、彼はすべての点で父よりも優れているように努めるべきだからだ。

2. 群衆はこれに喜び、すぐにイエスが何を意図しているかを試そうと、イエスに多くのことを要求した。ある者は税金を軽くしてほしいと、またある者は商品にかかる税金を免除してほしいと、またある者は牢獄にいる者を釈放してほしいと叫んだ。いずれの場合もイエスは群衆の好意を得るために、喜んで彼らの満足のいく答えを出した。その後、イエスは [適切な] 犠牲を捧げ、友人たちと宴会を開いた。そして、夕方近くになると、改革を望む大勢の人々が群がり、王の公的な追悼が終わると、自分たちで嘆き始めた。彼らは、神殿の門の上にいた金色の鷲を切り倒したためにヘロデに殺された者たちを嘆いた。この哀悼は個人的なものではなく、嘆きは非常に大きく、哀悼は厳粛で、泣き声は町中に響き渡るほどで、国の法律と神殿のために命を落とした人々に対するものであった。彼らは、ヘロデに尊敬されていた人々にこれらの人々に対する罰が与えられるべきだ、まず第一に、彼が大祭司に任命した人物の地位を剥奪すべきだ、そして彼よりも敬虔で清廉な人物を選ぶのがふさわしい、と叫んだ。

3. これらの騒ぎにアルケラオスは腹を立てたが、ローマに急いで向かっていたため、大衆と戦う際にそのような行動で国内に留まるかもしれないと恐れ、その張本人に復讐するのを控えた。そこで彼は、力ではな

く説得によって改革者たちを黙らせようとし、将軍を密かに彼らのところに送り、黙るように勧めた。しかし、反乱者たちはアルケラオスが神殿に入ってきて、何か言う前に石を投げて追い払った。アルケラオスの後からやって来た他の者たちにも同じような扱いをしたが、その多くはアルケラオスが彼らを冷静にさせるために送った者たちだった。彼らはどんな場合でも激しい態度で応じた。そして、彼らが相当な人数であれば黙らないだろうことは明らかだった。そして実際、ユダヤ人が過越祭と呼び、多くの犠牲を捧げて祝う無酵母パンの祭りが近づいていた時、数え切れないほどの民衆が礼拝のために国外からやって来た。彼らの中には、神殿に立ってラビたち（処刑された）を嘆き、自分たちの反乱を支えるために物乞いをして生計を立てる者もいた。これにアルケラオスは恐れをなし、病気が民衆全体に広がる前に、密かに護民官を兵士の部隊と共に彼らのところに送り、騒ぎを起こした者を力ずくで黙らせるよう命じた。これに民衆は激怒し、多くの兵士に石を投げつけて殺したが、護民官は負傷して逃げ去り、逃げるのに苦労した。その後、彼らは、何も悪いことをしていないかのように、犠牲を捧げ始めました。アルケラオスは、群衆を流血なしに抑えられるとは思えませんでした。そこで、彼は全軍を彼らに送りました。歩兵は大群で都市の道から、騎兵は平野の道から送りました。彼らは、犠牲を捧げている彼らを突然襲い、約 3,000 人を殺しました。しかし、残りの群衆は近くの山々に散り散りになりました。アルケラオスの使者たちは、彼らを追い、それぞれに自分の家に退くように命じ、彼らは皆そこへ行き、祭りを去りました。

E.3.2 第 2 章

アルケラオスは多くの親族とともにローマへ向かう。彼はそこでアンティパトロスによってシーザーの前で告発されるが、その手段によって、告発者たちよりも裁判で優位に立つニコラウスが彼のために作った防御。

1. アルケラオスは、母親と友人のポプラス、プトレマイオス、ニコラオスとともに海辺へ下り、フィリップを宮殿の執事として、また家事の世話をさせるために残しました。サロメも息子たちとともに彼と一緒に行き、王の兄弟や義理の息子たちも行きました。彼らは、表面上は、彼の後継者となるためにできる限りの援助を彼に与えに行ったのですが、実際は、彼が神殿で行った行為が法律に違反したとして彼を告発するために行ったのです。

2. 彼らがカエサレアに着くと、シリア総督サビヌスが彼らに出会った。彼はヘロデの遺品を回収するためにユダヤへ向かっていたが、そこに到着したシリア総督ウァルスが、それ以上先へ進むのを止めた。このウァルス、アルケラオスはプトレマイオスの熱心な懇願により、呼び寄せたのである。実際、このとき、サビヌスはウァルスを喜ばせるために、城塞にも行かず、父親の金が保管されている宝物庫も閉じず、カエサルがこの件に気付くまでじっとしていると約束した。そこで彼はカエサレアに留まったが、邪魔者がいなくなり、ウァルスがアンティオキアへ行き、アルケラオスがローマへ船で渡ると、彼は直ちにエルサレムへ向かい、宮殿を占拠した。そして、彼は城塞の長官たちと執事たち（王の私事の長官たち）を召集し、金銭の記録を調べ、城塞を占領しようとした。しかし、それらの城塞の長官たちは、アルケラオスから課せられた命令を無視せず、城塞を守り続け、それらの管理はアルケラオスよりもむしろカエサルのものだと言い張った。

3. その間に、アンティパスもまたローマに行き、王国をめぐって争い、彼が王に指名された以前の遺言が、後の遺言よりも有効であると主張した。サロメもまた、アルケラオス自身とともに航海したアルケラオスの親族の多くと同様に、彼を助けると約束していた。彼はまた、母親とニコラウスの兄弟プトレマイオスも連れて行った。ニコラウスはヘロデの最も尊敬する友人の一人であり、彼に大きな信頼を寄せていたため、非常に有力な人物のように見えた。しかし、アンティパスは主に弁論家のイレネウスに頼っていた。彼の権威により、彼はアルケラオスが兄であり、第二の遺言で王国が彼に与えられたという理由で、アルケラオスに屈するよう勧めた者たちを拒絶した。彼を憎んでいたアルケラオスの親族全員も、ローマに着くとアンティパスに心を寄せた。第一に、彼らは皆、自分たちの法律の下で（王なしで）生活し、ローマの総督の支配下に入ることを望んでいた。しかし、もしその点がうまくいかなかった場合、彼らはアンティパスが自分たちの王になることを望んだ。

4. サビヌスもまた、同じ目的で手紙を送り、その中でアルケラオスをカエサルの前で告発し、アンティパスを高く評価した。サロメと彼女と共にいた者たちも、アルケラオスが告発した罪を整理し、カエサルの手に委ねた。彼らがそれを終えると、アルケラオスは自分の訴えの理由を書き記し、プトレマイオスを通じて父の指輪と父の記録を送った。そして、カエサルは、二人が主張する内容を熟考し、王国の重荷や収入の多さ、ヘロデが残した子供の数などを考慮し、さらにこの機会にウァルスとサビヌスから受け取った手紙を読み、ローマ人の主要人物を集め [その集会では、アグリッパの息子ガイウスと、彼自身によって養子とされたその娘ユリアスが第一席に座っていた]、弁護士たちに話す許可を与えた。

5. そこでサロメの息子アンティパトロス（アルケラオスの敵対者の中でもっとも抜け目のない弁護人）が立ち上がり、次のように彼を非難した。アルケラオスは言葉では王位を争ったが、行為では長らく王権を行使しており、そのことで今になって意見を聞き入れようとしたのはカエサルを侮辱したにすぎない。アルケラオスは王位継承についての決意を貫かず、ヘロデの死後、ある人物を唆して王冠を自分の頭に載せるよう動員した。アルケラオスは自ら王位に就き、王として答弁し、軍の配置を変え、高位の地位を与えた。また、王として民衆が彼に求めた要求にすべて従い、また、最も重要な理由で父王によって拘束されていた者たちを解任した。結局、彼は王権の影を欲しがり、その実体は既に自分のものにしていた。こうしてカエサルは物ではなく言葉の支配者となった。彼はまた、父を悼んでいるのは見せかけだけで、昼間は悲しそうな顔をしているが、夜は酒を飲み過ぎているとさらに非難した。この振る舞いから、群衆の最近の騒動が起こり、人々はそれに憤慨していると彼は言った。実際、彼の全演説の趣旨は、祭典にやって来た群衆を神殿の周りで殺害したアルケラオスの罪を重くすることだった。彼らは自分たちの犠牲の最中に残酷に殺害された。そして、神殿には死体が山積みになっているが、告発される前に突然外国との戦争が起こったとしても、これほど山積みにすることはできなかっただろうと彼は言った。そして彼は、父が彼の蛮行を予見していたため、彼が王国に希望を抱くことはなかったが、彼の精神が肉体よりも弱く、健全な判断ができず、二度目の遺言で後継者に指名した息子の性格がよくわからなかったときだけ、そうしていたのだ、と付け加えた。そして、これは、彼が以前に指名した息子に不満を言うことがなく、その体が健全で、精神にいかなる激情もなかったときに行われた。しかし、もし誰かが、ヘロデが病気のときの判断が他のときの判断よりも優れていたと考えるなら、アルケラオスは、法律に反し、法律に不利な行動をとった彼自身の行動によって、王国を失ったのだ。あるいは、彼がそれを手に入れる前に多くの者を殺したカエサルから政府を手に入れたこの男は、いったいどのような王になるのだろうか！

6. アンティパトロスは、この目的について大部分語り、告発のあらゆる部分を証明するために、アルケラオスの親族を証人として多数連れて行った後、演説を終えた。そこでニコラオスが立ち上がり、アルケラオスの弁護を行った。彼は、神殿での虐殺は避けられなかったと主張した。殺された者たちは、アルケラオスの王国だけでなく、彼について決定を下すことになるカエサルの敵になったのだ。彼はまた、アルケラオスの告発者たちが、彼が告発される可能性のある他のことをするように彼に助言していたことも示した。しかし、彼は、ヘロデがカエサルを継承を確認する人物として任命したため、この遺言が他の何よりも有効であるとみなされるべきであると主張した。というのは、自分の権力を退けてそれを世の支配者に譲り渡すほどの賢明さを示した者が、自分の後継者となるべき人物についての判断を間違えたとは考えられないし、継承の調停者に誰を選ぶべきかをよく知っていた者が、自分の後継者に選んだ人物を知らないはずがないからだ。

7. ニコラオスが言うべきことをすべて言い終えると、アルケラオスがやって来て、カエサルの膝の前にひざまずいた。するとカエサルは、非常に親切な態度でアルケラオスを起こし、彼が本当に父の後継者にふさわしいと宣言した。しかし、彼はまだ自分の件について確固たる決断を下していなかった。しかし、その日彼と一緒にいた陪審員たちを解散させた後、彼は聞いた申し立てについて、遺言書に記されている人物の誰かをヘロデの後継者にするのが適切かどうか、あるいは、支援を必要としていると思われる人々の数が多いため、政府を彼の子孫全員で分割すべきかどうかについて、一人で熟考した。

E.3.3　第 3 章

ユダヤ人はサビヌスの兵士たちと大戦いを繰り広げ、エルサレムで大規模な破壊が起こる。

1. シーザーがこれらの件について何も決めないうちに、アレヘラオスの母マルタケが病気になり、死んだ。また、ウァルスからユダヤ人の反乱に関する手紙がシリアから届けられた。これはウァルスによって予見されていた。そのため、アルケラオスが航海に出た後、ウァルスは反乱の扇動者を制止するためにエルサレムに向かった。国民が安住しないのは明らかだったからである。そこでウァルスはシリアから連れてきた軍団の 1 つを市内に残し、自らはアンティオキアに向かった。しかし、彼が去った後、サビヌスがやって来て、彼らに改革の機会を与えた。彼は城塞の守護者たちに城塞を引き渡すよう強要し、ウァルスが残した兵士だけでなく、自分の家臣の多くにも頼っているとして、王の金銭を激しく捜索した。彼はその家臣たち全員を武装させ、貪欲の道具として利用した。さて、ユダヤ人がペンテコステ（すなわち 50 日目）と呼んでいた七週間後に祝われる祭りが近づいたとき、その名前は過越祭の後の日数に由来していたが、人々は集まったが、それは慣例の神への礼拝のためではなく、彼らが抱いていた（「現状に対する」）憤りのためであった。そこで、ガリラヤ、イドマヤ、エリコ、ヨルダン川の向こうのペレアから、大勢の群衆が集まってきた。しかし、ユダヤ自体に本来属していた人々は、数においても、人々の機敏さにおいても、他の者たちより優れていた。そこで彼らは三部に分かれ、三か所に陣を張った。一つは神殿の北側、もう一つは競馬場の南側、そして三番目の部分は西側の宮殿であった。こうして彼らはローマ軍を四方八方から取り囲み、包囲した。

2. サビヌスは、彼らの多さと勇気に恐れをなし、ウァルスに何度も使者を送り、すぐに救援に来るよう懇願

した。遅れれば、彼の軍団は粉砕されてしまうからである。サビヌス自身は、要塞の最も高い塔に登った。その塔はファサイロスと呼ばれていた。パルティア人に滅ぼされたヘロデの兄弟の塔と同じ名前である。そして、その軍団の兵士たちに敵を攻撃するよう合図した。サビヌスはあまりにも驚いて、自分の部下のところまで降りて行く勇気がなかった。そこで兵士たちは圧倒され、神殿に飛び込んでユダヤ人と恐ろしい戦いを繰り広げた。その戦いでは、彼らを苦しめる者は誰もいなかったが、彼らの技術と他の者たちの戦争における技術不足によって、彼らは彼らよりも手強い存在であった。しかし、ユダヤ人の多くが回廊の頂上に登り、ローマ人の頭に矢を投げつけたとき、ローマ人の多くが殺された。上から武器を投げた者たちに復讐するのは容易ではなかったし、直接戦おうとやって来た者たちを倒すのも容易ではなかった。

3. ローマ軍は、この二つの状況にひどく悩まされていたので、その規模と費用の両方で賞賛に値する建築物であった回廊に火を放った。すると、その上にいた者たちはたちまち炎に包まれ、その多くがその中で死んだ。また、突然襲い掛かってきた敵によって、彼らの多くが滅ぼされた。彼らの中には、後ろ向きに壁から身を投げた者もいたし、絶望的な状況から、自らの剣で自殺して火を防いだ者もいた。しかし、壁から這い出てローマ軍に襲い掛かった者の多くは、驚愕したため、ローマ軍に簡単に倒された。ついにユダヤ人の一部が殺され、他の者たちも恐怖のあまり逃げ惑う中、兵士たちは、今は放棄されていた神の宝庫を襲撃し、およそ四百タラントを略奪した。そのうちサビヌスは、兵士たちが持ち去らなかったすべてのものを集めた。

4. しかし、この神殿の建造物と兵士の破壊は、ローマ軍に対抗するために、はるかに多くの、そしてより好戦的な者たちが集結するきっかけとなった。彼らは宮殿を取り囲み、急いで立ち去らなければ宮殿にいる者全員を動員すると脅した。彼らは、サビヌスが軍団を率いて出撃すれば、危害を加えないと約束したからである。また、ローマ軍を捨ててユダヤ人を支援した王の軍勢も多数いた。しかし、その中で最も好戦的な集団、セバステの 3000 人の兵士はローマ軍に寝返った。彼らの指揮官であるルフスとグラトゥスも同様の行動をとった。[グラトゥスは王の軍勢の足を、ルフスは馬を率いていた] 彼らは、たとえ軍勢がなくても、戦争で天秤をひっくり返す力と知恵を持っていたため、それぞれが大きな存在であった。ユダヤ人たちは包囲し、要塞の壁を破壊しようとし、サビヌスとその一行に邪魔をしないで自分たちの道を行くようにと叫んだ。彼らは長い年月を経て、今や先祖が享受していたあの昔の自由を取り戻せると期待していた。サビヌスは自分が陥っていた危険から逃れることができて本当に満足していたが、ユダヤ人が彼に与えた保証を信用せず、そのような優しい扱いは彼らを罠にかけるための餌にすぎないと疑っていた。この考えと、ウァルスからの救援を期待していたことが相まって、彼はさらに長く包囲に耐えた。

E.3.4 第 4 章

ヘロデのベテラン兵士が騒乱を起こす。ユダ。シモンとアトロノエウスが王の名を継ぐ。

1. このころ、国内で大きな騒乱が起こり、各地で騒乱が起こりました。そして、今や機会が訪れたため、多くの人が王のために立ち上がろうとしました。実際、イドマヤではヘロデの古参兵二千人が集まり、武装して王の党派と戦いました。王の従兄弟アキヤボスが、最も堅固に防備された場所から戦いましたが、平地で直接対決することは避けました。ガリラヤの町セフォリスにも、ユダ（かつて国を蹂躙し、ヘロデ王

に征服された大盗賊ヒゼキヤの息子）という人物がいました。この男は少なからぬ群衆を集め、王の武具が保管されている場所を破壊し、周囲の人々に武器を与え、支配権を握ろうとする者たちを攻撃しました。

2. ペレアでも、王の従者の一人シモンは、自分の容姿と背の高さに頼って、自分の頭にも王冠をかぶせ、集めた盗賊団と出かけて、エリコの王宮やその他多くの高価な建物を焼き払い、火の中から奪い取るなどして、簡単に略奪して戦利品を手に入れた。そして、王の歩兵隊長グラトゥスがトラコン人の弓兵とセバステの最も戦闘的な者を連れてこの男と戦わなければ、彼はすぐにすべての立派な建物を焼き払っていただろう。彼の歩兵は戦闘で大量に殺された。グラトゥスは、シモンが狭い谷間を逃げていたとき、逃げる彼の首を斜めに打って骨を折って、彼自身も切り裂いた。ヨルダン川近くのベタランプタにあった王宮も、ペレアから出てきた他の反乱分子によって焼き払われました。

3. この頃、ある羊飼いが王になろうとした。彼はアトロンゲウスと呼ばれた。彼にそのような威厳を期待させたのは、彼の肉体の強さと、死を嫌う彼の魂であった。これらの資質に加えて、彼には彼と同じような 4 人の兄弟がいた。彼はこれらの兄弟のそれぞれに武装した兵士の部隊を置き、侵略の際には彼らを将軍や指揮官として利用し、自身は王のように振る舞い、より重要な問題にのみ干渉した。このとき、彼は頭に王冠をかぶり、その後も兄弟とともにかなりの期間国中を蹂躙し、ローマ人と王の党員の両方を殺すリーダーとなった。また、それによって彼に何らかの利益がもたらされるならば、ユダヤ人は誰一人として彼から逃れられなかった。彼はかつて、エマオでローマ軍団を包囲しようとした。彼らは軍団に穀物と武器を運んでいた。そこで彼の部下は矢と投げ矢を放ち、百人隊長アリウスと部下の中でも最も勇敢な 40 人を殺した。一方、同じ運命をたどる危険にさらされていた残りの部下は、グラトゥスとセバステの部下が助けに来たため、逃げることができた。そして、これらの部下は、このようにして同国人と外国人の両方に仕え、この戦争の間ずっとそうしていたが、しばらくして 3 人が制圧された。長男はアルケラオスに、次男はグラトゥスとプトレマイオスの手に落ちた。しかし、4 人目は、アルケラオスが身柄を確保するために右手を差し出すと、彼に降伏した。しかし、これが彼らの最後となるのは、彼らがユダヤ全土を海賊戦争で満たしていた後のことだった。

E.3.5 第 5 章

ヴァルスはユダヤの騒乱を作曲し、約 2 人を十字架にかける反逆者の千人。

1. ウァルスはサビヌスと指揮官らが書いた手紙を受け取ると、軍団全体（彼がそこに残していた）のことを心配せずにはいられなかった。そこで彼は急いで彼らを救出し、残りの 2 個軍団と、それらに所属する 4 つの騎兵隊を連れてプトレマイオスに進軍した。王や都市の知事らが派遣した援軍に、そこで彼と会うよう命令した。さらに彼はベリュトスの人々から、彼らの都市を通過した際に 1500 人の武装兵を受け取った。他の援軍部隊がプトレマイオスに到着するとすぐに、またアラビア人アレタス（ヘロデに対する憎しみから、騎兵と歩兵の大軍を率いていた）が到着すると、ウァルスはすぐに軍の一部をプトレマイオスに近いガリラヤに派遣し、友人のガイウスを指揮官として派遣した。ガイウスは、彼と対峙した者たちを敗走させ、セフォリス市を占領して焼き払い、住民を奴隷にした。しかし、ウァロス自身は、全軍を率いてサマリアに進軍した。そこでは、この騒乱の間、市は騒ぎ立てていなかったので、市自体には干渉せず、

アラスという村のあたりに陣を張った。アラスはプトレマイオスの所有であり、そのため、ヘロデの友人たちにも非常に怒っていたアラブ人によって略奪された。そこからウァロスは、別の要塞化された場所であるサンフォ村に進軍し、他の村と同様に、この村でも略奪した。彼らは、公共の収入に属する金銭を全て持ち去ったため、今やすべてが火と流血に満ち、アラブ人の略奪に抵抗できるものは何もなかった。エムナウスもまた、住民が逃げ去った後に焼き払われたが、これはアリアス周辺の人々の虐殺に対するウァルスの怒りによる命令であった。

2. そこから彼はエルサレムに進軍し、ユダヤ人に見られるや否や、彼らの陣営を解散させた。彼らもまた立ち去り、国中を逃げ回った。しかし、市民たちは彼を迎え入れ、この反乱に関与していないと釈明し、自分たちは騒ぎを起こしたのではなく、祭りのせいで群衆を受け入れざるを得なかっただけであり、反乱を起こした者たちを助けるよりもむしろローマ人とともに包囲されたのだと言った。これ以前には、アルケラオスの従兄弟のジョセフと、セバステの者たちと王の軍隊を率いるグラトゥス、そしてルフスが彼に会っていた。また、いつものように武装したローマ軍団も彼に会っていた。というのも、サビヌスに関しては、ウァルスの目に留まる勇気がなく、それ以前に町から出て海辺へ行ってしまったからである。しかしウァルスは、この騒動の張本人たちを攻撃するために軍の一部を国内に派遣し、大勢の人々を捕らえた。ウァルスは、この騒動に最も無関係とみられる者たちを拘留し、最も罪深い者たちを磔にした。その数は約 2000 人であった。

3. また、イドマヤにはまだ一万人の兵士が武装しているとの報告があったが、アラビア人が援軍として行動せず、自分たちの欲望のままに戦争を指揮し、ヘロデに対する憎しみから、彼の意図とは逆に国に危害を加えていることを知ると、彼は彼らを送り返したが、反乱を起こした者たちに対しては、自分の軍団を率いて急いで進軍した。しかし、反乱者たちは、アキアボスの助言により、戦闘になる前に彼に降伏した。そこでウァルスは群衆の罪を許したが、彼らの隊長たちをカエサルのもとに送り、尋問させた。カエサルは残りの者を許したが、王の親族の何人か [彼らの中にはヘロデの親族もいた] は、自分の一族の王と戦争をしたため、死刑にするよう命令した。ウァルスはこのようにしてエルサレムでの問題を解決し、以前の軍団をそこに守備隊として残して、アンティオキアに戻った。

E.3.6 第 6 章

ユダヤ人たちはアルケラオスに大いに不満を抱き、ローマ総督の支配下に置かれるかもしれない。しかし、シーザーが彼らの言うことを聞いて、彼はヘロデの領土を分配した彼自身の喜びに従って、彼の息子たちの間で。

1. しかし、今やユダヤ人からローマのアルケラオスに対する別の告発が起こり、彼はそれに応じなければならなかった。それは反乱の前にウァルスの許可を得て祖国の解放を嘆願するためにやって来た使節たちによってなされた。やって来た使節の数は 50 人だったが、彼らを支持したローマのユダヤ人は 8000 人以上いた。そして、カエサルが宮殿内のアポロンの神殿で主要なローマ人の会議を召集したとき [これは彼自身が莫大な費用をかけて建設し装飾したものだった]、ユダヤ人の大群は使節たちと共に立ち、反対側にはアルケラオスとその友人たちが立っていた。しかし、アルケラオスの親族はどちらの側にも立たなかっ

た。というのは、彼らはアルケラオスの側に立つことを許さなかったが、彼に対する憎しみと嫉妬の念から、告発者たちと一緒にカエサルに見られることを恐れていたからである。このほか、アルケラオスの兄弟フィリッポスもそこにいた。彼はウァルスの親切心から、二つの理由で事前にそこに送られていた。一つは、彼がアルケラオスを助けるためであり、もう一つは、カエサルがヘロデの所有物を子孫に分配する場合、彼がその一部を得るためであった。

2. さて、告発者たちは、話す許可を与えられると、まず第一にヘロデの法違反について論じ、彼は王ではなく、すべての暴君の中でも最も野蛮な者であり、彼らが彼から受けた苦しみによって彼がそのような者であることがわかった、非常に多くの人が彼によって殺されたとき、生き残った人々は非常に悲惨な状況に耐えたので、死んだ人々を幸福な人々と呼んだ、彼は臣下の死体だけでなく都市全体を拷問し、自国の都市に多くの損害を与え、一方で外国人の都市を飾り立てた、そして彼は境界外の人々に親切にするためにユダヤ人の血を流した、彼は国民が昔享受していた幸福と法の代わりに、国民を貧困と最大の不義で満たした、と言った。つまり、ユダヤ人は、わずか数年の間に、ヘロデから、彼らの先祖がバビロンから出て故郷に帰ってからクセルクセス 3 世の治世の間に受けた災難よりも多くの災難を受けたのである。しかし、国民は苦難に慣れて非常に劣悪な状態に陥っていたため、後継者が国民をひどい奴隷状態に陥れたにもかかわらず、自ら進んで従った。そのため国民は、父の死後、非常に偉大な暴君の息子であったにもかかわらず、アルケラオスを喜んで王と呼び、ヘロデの死を悼み、後継者の成功を祈った。しかし、このアルケラオスは、自分がヘロデの真の息子ではないと思われないように、3000 人の市民を殺害して統治を開始した。あたかも、彼がその統治のために神に血の犠牲を捧げ、祭りで神殿を同じ数の死体で満たすつもりであるかのようであった。しかし、多くの悲惨な目に遭った後に残された者たちは、ようやく自分たちが受けてきた災難を考え、戦争中の兵士のように、顔に（これまでのように背中ではなく）鞭打ちを受けることに抵抗する正当な理由があった。そこで彼らは、ローマ人がユダヤの（哀れな）残党に同情し、残党を野蛮に引き裂く者たちにさらさないでほしい、そして彼らがシリアと連合し、自分たちの指揮官によって統治してほしい、そうすれば、現在、扇動者や戦争好きの誹謗中傷を受けている者たちも、自分たちの上に置かれた統治者が、たとえ我慢できる者であっても、耐えられる者であれば、耐えられることが（すぐに）証明されるだろう、と祈った。そこでユダヤ人たちは、この願いで告発を終えた。そこでニコラオスは立ち上がり、王たちに対する告発を論破し、ユダヤ民族は統治するのが難しく、生まれつき王に従わない民族であると自ら非難した。また、アルケラオスのもとを離れ、告発者たちのところへ行ったアルケラオスの親族たち全員を非難した。

3. そこでカエサルは、双方の言い分を聞いた後、その会議を解散した。しかし数日後、彼はヘロデの王国の半分をエトナルクという名のアルケラオスに与え、彼がその地位にふさわしい者となるなら、後に彼を王にすると約束した。しかし残りの半分については、彼はそれを二つの四分領に分け、ヘロデの他の二人の息子に与えた。その一人はフィリップに、もう一人はアルケラオスと王国を争ったアンティパスに与えた。このアンティパスの下にはペレアとガリラヤがあり、その収入は二百タラントであった。しかしバタニア、トラコニティス、アウラニティス、およびヤムニア周辺のゼノンの家のいくつかの地域は、収入百タラントでフィリップの支配下にあった。一方、イドマヤ、ユダヤ全土、サマリアはアルケラオスの部族領となったが、サマリアは他の国とともに反乱を起こさなかったため、税の 4 分の 1 が軽減された。また、ストラトスタワー、セバステ、ヨッパ、エルサレムなどの都市もアルケラオスの支配下としたが、ギリシアの

都市ガザ、ガダラ、ヒッポスは王国から切り離し、シリアに加えた。アルケラオスに与えられた国の収入は 400 タラントであった。サロメもまた、王が遺言で彼女に残した財産のほかに、ヤムニア、アシュドド、ファサエリスの女主人となった。さらに、カエサルは彼女にアスカロンの王宮を与え、彼女はそのすべてで 60 タラントの収入を得たが、彼女の家をアルケラオスの部族領に置いた。ヘロデの残りの子孫は、遺言で彼らに遺贈されたものを受け取ったが、それに加えて、カエサルはヘロデの処女である二人の娘に銀五十万 [ドラクマ] を与え、フェロラスの息子たちに嫁がせた。しかし、この家族による分配の後、彼はヘロデから遺贈された千タラントを彼女らに与え、死者を偲んで自分にはわずかな贈り物だけを残した。

E.3.7 第 7 章

偽アレクサンダーの歴史。アルケラオスは追放されるそしてグラフィラは亡くなり、二人に何が起こったのか夢の中で見せられていたのです。

1. そのころ、生まれはユダヤ人だが、シドンでローマの解放奴隷の一人と一緒に育った男がいた。その男は、顔が似ていることから、自分がヘロデに殺されたアレキサンダーであると偽った。この男は、見つからないようにとローマにやって来た。彼には、同じ国の出身で、王国の事情をすべて知っている助手がいて、彼とアリストブロスを殺すために送られた者たちが彼らに同情し、彼らの死体に似た死体を彼らの代わりに置いて彼らを盗んだことを話すように彼に指示した。この男はクレタ島にいたユダヤ人を騙し、豪華な旅の見返りに彼らから大金を巻き上げた。そしてそこからメロスに航海し、そこで彼は間違いなく本物だと思われたので、さらに大金を巻き上げ、彼をもてなした者たちを説得してローマまで一緒に航海させた。そこで彼はディケアルキア（プテオリ）に上陸し、そこに住むユダヤ人から多額の贈り物を受け取り、父の友人たちからまるで王様であるかのように扱われた。それどころか、顔立ちが似ていることから彼は非常に評判が高く、アレクサンダーを見たことがある人や彼をよく知っている人は、彼がまさに同一人物であると断言した。そのため、ローマにいたユダヤ人全員が彼を見るために群がり、彼が運ばれた狭い場所に数え切れないほどの群衆が立っていた。メロスの人々はあまりにも気が散っていたため、彼を輿に乗せて運び、自分たちの費用で王様の付き添いを続けた。

2. しかし、カエサルは、アレクサンダーがヘロデに告発されていたため、アレクサンダーの顔の輪郭をよく知っていたため、その男を見る前から、その顔つきに偽りがあることに気付いていた。しかし、彼は、アレクサンダーの評判がいくらか自分に重きを置いていることを承知し、アレクサンダーをよく知っていたケラドゥスを遣わして、その若者を連れて来るよう命じた。しかし、カエサルはアレクサンダーを見て、すぐにその顔つきに違いがあることに気付いた。そして、アレクサンダーの全身が奴隷のそれのように強靭な質感になっていることに気付くと、そのすべてがでっちあげだと理解した。しかし、彼の言った厚かましさに、カエサルは大いに怒りを覚えた。というのは、アリストブロスについて尋ねられたとき、彼も生き延びており、裏切りを恐れてキプロスにわざと残しておいたと答えたからである。二人が別々にいると、陰謀家たちが二人を自分の手に収めるのが難しくなるからである。そこでカエサルは彼を一人だけ連れて行き、「もしお前にそのような偽りの話をするようそそのかした者が誰かを突き止めるなら、お前の命を差し上げよう」と言った。そこで彼はそいつを見つけ出すと言い、カエサルの後をついて行き、金を

得るために彼の顔が似ていることを悪用したユダヤ人を指さした。そのユダヤ人は、アレクサンダーが生前受けたよりも多くの贈り物をあらゆる都市で受け取っていたからである。カエサルはその策略を笑い飛ばし、この偽りのアレクサンダーを、その肉体の強さを理由に自分の漕ぎ手の中に入れたが、そいつをそそのかした者を死刑にするよう命じた。しかしメロスの人々は、彼のために費やした費用によって、その愚かさに対して十分に罰せられていた。

3. そして今、アルケラオスは自分の部族を掌握し、ユダヤ人だけでなくサマリア人も野蛮に利用した。これは、彼と以前から争っていた彼らに対する恨みからであった。そこで、両者は彼に対する使節をカエサルに送った。そして、彼が統治して 9 年目に、彼はガリアの都市ウィーンに追放され、彼の財産はカエサルの金庫に入れられた。しかし、伝えられるところによると、カエサルに呼び出される前に、彼は 9 つの穂の穀物が実って大きくなっているのを見たが、それは牛に食べられてしまったようだった。そこで、彼は占い師とカルデア人数人を呼び寄せ、それが何の前兆だと思うか尋ねたところ、彼らのうちの一人は一つの解釈をし、他の一人は別の解釈をしたが、エッセン派の一人シモンは、穀物の穂は年を表し、牛は耕作によって国土を変化させるので、物事の変化を表していると思うと言った。したがって、彼は穀物の穂の数だけ統治し、さまざまな運命の変化を経験した後、死ぬであろう。アルケラオスはこの解釈を聞いてから 5 日後、裁判に召喚された。

4. カッパドキア王アルケラオスの娘グラフィラが見た夢についても、記録しておく価値があると思わざるを得ない。彼女は最初、我々が論じてきたアルケラオスの兄弟であるアレクサンダーの妻であった。このアレクサンダーは、既に述べたように、ヘロデ王の息子で、彼によって処刑された。このグラフィラは、彼の死後、リビア王ユバと結婚したが、彼の死後、故郷に戻り、未亡人として父親と暮らした。その後、族長アルケラオスが彼女を見て、深く恋に落ち、当時妻であったマリアムネと離婚して彼女と結婚した。そこで、彼女がユダヤに来てしばらくそこにいたとき、アレクサンダーが自分のそばに立っているのが見えたと思った。そして、彼はこう言った。「リビア王との結婚はあなたにとって十分だったかもしれない。しかし、あなたは彼に満足せず、私の家族に戻り、3 番目の夫のところへ行った。そして、この厚かましい女よ、あなたは私の兄弟である彼を夫に選んだのだ。しかし、私はあなたが私に与えた損害を見逃すつもりはない。あなたが望むかどうかにかかわらず、私はあなたを [すぐに] 再び手に入れるだろう。」グラフィラは、この夢の話を聞いてから 2 日間、かろうじて生き延びた。

E.3.8 第 8 章

アルケラオスの民族国家は [ローマ] の属州に縮小される。ガリラヤのユダの反乱。三つの宗派。

1. そして今、アルケラオスのユダヤ領は属州に縮小され、ローマ人の騎士階級の一人であるコポニウスが、カエサルから生死の権限を委ねられ、行政長官として派遣された。彼の統治下で、ユダという名のガリラヤ人が同胞に反乱を起こさせ、ローマ人に税金を払うのを我慢し、神の許で人間を領主として服従するなら、彼らは臆病者だと言った。この男は独自の宗派の教師であり、他の指導者とは全く異なっていた。

2. ユダヤ人には三つの哲学的宗派がある。最初の宗派の信奉者はパリサイ派、二番目の宗派の信奉者はサド

カイ派、そしてより厳しい規律を主張する三番目の宗派はエッセン派と呼ばれる。この最後の宗派は生まれながらのユダヤ人であり、他の宗派よりもお互いに深い愛情を持っているようである。これらのエッセン派は快楽を悪として拒絶し、節制と情熱の克服を美徳とみなす。彼らは結婚を軽視し、他人の子供を、彼らが従順で学習に適しているうちに選び出し、彼らを親族とみなし、自分たちの作法に従って育てる。彼らは結婚の適性と、それによって人類の継承が継続されることを完全に否定するわけではないが、女性の好色な振る舞いを警戒し、一人の男性に対する貞操を守り続ける女性はいないと確信している。

3. これらの人々は富を軽蔑し、非常に話し上手で、私たちの感嘆を誘います。また、彼らの中には、他の人より多く持っている人はいません。なぜなら、彼らのところに来る人は、持っているものを全員で共有しなければならないという掟があるからです。そのため、彼ら全員の間には、貧困や富の過剰は見られず、各人の所有物はお互いの所有物と混ざり合っています。つまり、すべての兄弟の間には、いわば一つの遺産があるのです。彼らは油を汚れと考えており、自分の承認なしに油を塗られた人は、体から油を拭き取ります。汗をかくことは良いことだと考えているからです。白い服を着ることも良いことだと思っています。また、共同の事柄を管理する管理人が任命されていますが、彼らは全員のためになる以外のことは何もしていません。

4. 彼らには特定の都市はなく、多くの者があらゆる都市に住んでいる。そして、彼らの宗派の誰かが他の場所から来たとしても、彼らが持っているものは、まるで自分のものであるかのように彼らに開かれている。そして、彼らは、以前に知らなかった人々のところへ、まるでずっと前から知り合いであるかのように入っていく。このため、彼らは辺鄙な場所へ旅行するときには何も持っていかないが、それでも盗賊を恐れて武器は持っていく。したがって、彼らが住むどの都市にも、外国人の世話をし、衣服やその他の必需品を提供する特別の人が任命されている。しかし、彼らの習慣や身体の管理は、主人を恐れる子供が使うようなものである。また、彼らは、衣服や靴が最初に破れたり、時が経ってすり減ったりするまで、交換を許さない。また、彼らは互いに何も買ったり売ったりしない。しかし、彼らは皆、自分の持っているものを、それを欲する者に与え、その代わりに、自分にとって都合の良いものをその人から受け取る。そして、何の見返りも与えられないとしても、彼らは望む者から欲しいものを取ることが完全に許されている。

5. 神に対する彼らの敬虔さは、非常に並外れている。なぜなら、彼らは日の出前には世俗的な事柄について一言も話さず、祖先から受け継いだ特定の祈りを、まるで日の出を祈願するかのように唱えるからである。その後、彼らはそれぞれ、管理者によって、彼らが熟達しているいくつかの技を練習するために送り出され、午後 5 時まで非常に熱心にその技に取り組む。その後、彼らは再び一箇所に集まり、白いベールを身にまとってから、冷水で体を洗う。そして、この浄化が終わると、彼らはそれぞれ、他の宗派の者が立ち入ることは許されない、自分の部屋に集まる。彼らは、清らかな態度で、まるで聖なる神殿に入るかのように食堂に入り、静かに腰を下ろす。その上に、パン焼き人がパンを並べる。料理人も、一種類の食べ物を一皿持ってきて、それを各人の前に出す。しかし、祭司は食事の前に祈りを唱えます。そして、祈りを唱える前に誰も食べ物を味わうことは許されていません。同じ祭司が食事を終えると、食事の後にもう一度祈りを唱えます。そして、食事を始めるときと終えるとき、彼らは食物を授けてくださった神を讃えます。その後、彼らは白い衣服を脱ぎ、夕方まで再び仕事に取り掛かります。それから、同じようにして夕食のために家に戻ります。そこに見知らぬ人がいれば、彼らと一緒に座ります。また、彼らの家を汚すよ

うな騒ぎや騒動は決してなく、彼らは順番に皆に話す許可を与えます。彼らの家でこのように保たれている沈黙は、外国人には何か途方もない謎のように見えます。その理由は、彼らが常に節制を実践していることと、割り当てられた食べ物と飲み物の決まった量、そして彼らに十分すぎるほどの量だからです。

6. そして実際、他のことに関しては、彼らは管理者の命令に従ってのみ行動します。彼らの間では、困っている人を助け、慈悲を示すというこの 2 つのことだけが、各自の自由意志で行われます。なぜなら、彼らは、困っている人に援助を与え、困っている人に食物を与えることを自らの意志で許可されているからです。しかし、管理者の許可なしには、親族に何も与えることはできません。彼らは正当な方法で怒りを分散させ、激情を抑えます。彼らは忠実さで際立っており、平和の使者です。彼らの言うことは何でも、誓いよりも堅固です。しかし、彼らは誓いを避け、それを偽証よりも悪いものとみなします。4 なぜなら、神に誓わずに信じられない人は、すでに罪に定められていると言うからです。彼らはまた、古代人の著作を研究することに多大な労力を費やし、その中から自分の魂と身体に最も有益なものを選び取り、自分の病気を治す可能性のある根や薬石について調べます。

7. しかし、もし誰かが彼らの宗派に入信したいと思っても、すぐには受け入れられず、1 年間は彼らが従うのと同じ生活様式を課せられ、その間は排除され続ける。そして彼らは彼に小さな斧と前述の帯と白い衣服を与える。そして、その期間に彼が彼らの節制を守れるという証拠を示すと、彼は彼らの生活様式に近づき、浄化の水の参加者となる。しかし、彼は今でさえ彼らと一緒に暮らすことを認められない。なぜなら、この彼の不屈の精神の証明の後、彼の気質はさらに 2 年間試されるからである。そして彼がふさわしいと思われれば、彼らは彼を彼らの仲間に入れる。そして、彼が彼らの共通の食物に触れることを許される前に、彼はまず第一に神に対して敬虔に行動し、次に人々に対して公正を守り、自分の意志で、あるいは他人の命令によって、誰にも害を与えないという厳粛な誓いを立てなければならない。彼は常に悪人を憎み、正しい者の助け手となること。すべての人、特に権力者に対して常に忠誠を示すこと。神の助けなしには誰も政権を獲得できないからである。権力を握ったとしても、いかなる時も権力を濫用せず、衣服やその他の装飾品で臣下を凌駕しようとはしないこと。常に真実を愛し、嘘をつく者を戒めようとすること。盗みから手を遠ざけ、不法な利益から魂を守ること。自分の宗派の者から何も隠さず、命を危険にさらしてでも彼らの教義を他人に漏らさないこと。さらに、彼は自分が受け継いだもの以外では彼らの教義を誰にも伝えないと誓う。盗みをせず、彼らの宗派に属する書物と天使たちの名前を保存する。これらは彼らが改宗者を自分たちのものにするための誓いである。

8. しかし、凶悪な罪を犯した者は、彼らはその仲間から追放される。そして、そのようにして仲間から引き離された者は、しばしば悲惨な死を遂げる。なぜなら、彼は自分が立てた誓いや従事してきた慣習に縛られているため、他の場所で出会う食物を自由に食べることはできず、死ぬまで草を食べ、飢えで体を飢えさせるよう強いられるからである。そのため、彼らは、彼らが死の淵に立たされるまで耐えてきた悲惨さは、彼らが犯した罪に対する十分な罰であると考え、彼らに対する同情心から、最後の息をひきとった多くの人々を再び受け入れるのである。

9. しかし、彼らが下す判決は、最も正確かつ公正であり、100 人未満の法廷の票決によって判決を下すことはありません。そして、その数によって一度決定されたことは、変更できません。彼らが神自身に次いで最も尊敬しているのは、彼らの立法者 [モーゼ] の名前であり、もし誰かが彼を冒涜すれば、死刑に処せら

れます。彼らはまた、長老たちや大多数に従うことを良いことだと考えています。したがって、10 人が一緒に座っている場合、他の 9 人が反対している間は、誰も話しません。また、彼らの真ん中や右側に唾を吐くことも避けます。さらに、彼らは他のどのユダヤ人よりも、7 日目に労働から休むことを厳格に守ります。なぜなら、その日に火を燃やさなくても済むように、前日に食べ物を準備するだけでなく、その場所から容器を移動したり、その上に腰掛けたりしないからです。いや、他の日には、彼らは櫂（最初に彼らの仲間に迎え入れられたときに与えられた種類の斧）で 1 フィートの深さの小さな穴を掘り、神の光線を冒涜しないように衣服で体を覆い、その穴にゆっくりと入り、その後、掘り出した土を再び穴に戻す。そして、これも、この目的のために選んだ、より人里離れた場所でのみ行う。そして、この身体の安楽は自然なことであるにもかかわらず、まるでそれが彼らにとって汚れであるかのように、その後に体を洗うことが彼らの規則となっている。

10. さて、準備期間が過ぎると、彼らは 4 つの階級に分けられます。そして、年少者は年長者より劣っているので、年長者が年少者に触れた場合は、外国人の仲間と混じったかのように、身を洗わなければなりません。彼らはまた長生きで、その多くは食事の質素さのおかげで 100 歳以上生きています。いや、私の考えでは、規則正しい生活のおかげでもあります。彼らは心の寛大さによって人生の悲惨さを軽蔑し、苦痛を超えています。そして死についても、それが彼らの栄光のためであれば、彼らはそれを永遠に生きるよりも良いと考えています。実際、ローマ人との戦争は、彼らが試練の中でどれほど偉大な魂を持っていたかを豊富な証拠で示した。彼らは拷問され、歪められ、焼かれ、引き裂かれ、あらゆる種類の拷問器具をくぐり抜け、立法者を冒涜するか、禁じられたものを食べるように強制されたが、どちらも行うことはできず、拷問者を喜ばせることも、涙を流すことも一度もできなかった。彼らは苦痛の中でも微笑み、彼らに苦痛を与えた人々を嘲笑し、再び受け入れられることを期待して、非常に喜んで魂を明け渡した。

11. 彼らの教義はこうである。肉体は朽ちるものであり、肉体を構成する物質は永久的なものではないが、魂は不滅であり、永遠に存続する。魂は最も微細な空気から生まれ、ある種の自然の誘惑によって引き込まれた牢獄のように肉体と結びついているが、肉体の束縛から解放されると、長い束縛から解放されたように喜び、上昇する。そしてこれはギリシャ人の意見に似ている。すなわち、善良な魂は海の向こうの、雨や雪の嵐や猛暑に悩まされることのない地域に住み、その場所は海から絶えず吹く西風の穏やかな息吹によってリフレッシュされる場所である。一方、彼らは悪しき魂には、終わりのない懲罰に満ちた暗く荒れ狂う巣窟を割り当てる。そして実際、ギリシャ人も、英雄や半神と呼ぶ勇敢な人々には祝福された人々の島々を割り当て、邪悪な人々の魂には不信心な人々の領域である冥府を割り当てたとき、同じ考えに従っていたように私には思える。彼らの寓話では、シシュポス、タンタロス、イクシオン、ティテュオスなどの特定の人物が罰せられると語られている。これは、魂は不滅であるというこの第一の仮定に基づいており、そこから美徳への勧告と悪事からの戒めが集められ、それによって善人は死後に報いを受けるという希望によって人生の行いが改善され、それによって悪人は、この世では隠れていても死後に不滅の罰を受けるという恐れと期待によって悪徳への激しい傾向が抑制される。これらは魂に関するエッセン派の神聖な教義であり、彼らの哲学を一度でも味わった者にとっては避けられない餌となる。

12. 彼らの中には、聖書を読み、さまざまな浄化法を駆使し、預言者の講話に常に精通して、将来起こることを予言しようとする者もいる。そして、彼らの予言が外れるということはめったにない。

13. さらに、エッセン人の別の宗派がある。8 彼らは生活様式、慣習、法律については他の宗派と同意しているが、結婚に関しては彼らと異なっている。結婚しないことで、後継者になる見込みという人生の主要な部分を断ち切ってしまうと考えているのだ。いや、むしろ、もしすべての男性が同じ意見であれば、人類全体が失敗するだろうと考えているのだ。しかし、彼らは配偶者を 3 年間試し、3 回自然の浄化を経験すると分かったら、子宝に恵まれる可能性が高い試練として、実際に結婚する。しかし、彼らは妻が妊娠しているときには、妻に同伴しない。これは、彼らが快楽のためではなく、子孫のために子供を産むことを示すためである。さて、女性は、男性が腰に帯を締めるように、衣服の一部を着用して浴室に入る。これが、このエッセン人の宗派の習慣である。

14. しかし、最初に述べた他の 2 つの宗派について言えば、パリサイ派は、その法則の正確な説明に最も長けているとみなされ、最初の宗派を導入した人々です。彼らはすべてを運命 [または摂理] と神に帰しますが、正しいことを行うか、または反対のことを行うかは、主に人間の力にあることを認めています。ただし、運命はすべての行動に協力しています。彼らは、すべての魂は不滅であるが、善人の魂だけが他の体に移され、悪人の魂は永遠の罰を受けると言います。しかし、サドカイ派は 2 番目の宗派を構成し、運命を完全に排除し、神は私たちが悪を行うか行わないかに関与していないと想定しています。そして、善を行うか悪を行うかは人間自身の選択であり、どちらか一方はすべての人に属し、好きなように行動できると言います。彼らはまた、魂の不滅と冥界での罰と報酬の信仰をも奪います。さらに、パリサイ人は互いに友好的で、調和と公衆への敬意を実践しています。しかし、サドカイ派の互いに対する態度はある程度乱暴で、同じ党派の人との会話はまるで他人であるかのように野蛮です。これが、ユダヤ人の哲学的宗派に関して私が言わなければならなかったことです。

E.3.9 第 9 章

サロメの死。ヘロデとフィリップが建設。ピラト事件騒動。ティベリウスがアグリッパを追放拘束されたがカイアスは彼を解放し、王。ヘロデ・アンティパスは追放される。

1. さて、アルケラオスの部族がローマの属州に落ちたので、ヘロデの他の息子たち、フィリポ、そしてアンティパスと呼ばれたヘロデは、それぞれ自分の四分領の統治を引き受けた。というのは、サロメが死んだとき、彼女は自分の領地とヤムリガ、そしてファサエリスにあったナツメヤシの植林地をアウグストゥスの妻ユリアに遺贈したからである。しかし、57 年 6 ヶ月 2 日統治したアウグストゥスの死後、ローマ帝国がユリアの息子ティベリウスに移譲されると、ヘロデとフィリポはともに四分領に留まり、後者はヨルダン川の泉のそば、パネアスの地域にカエサレア市を建設し、また下ガウロニティスにユリアス市を建設した。ヘロデはまたガリラヤにティベリウスという町を建て、またペレア（ヨルダン川の向こう側）にもユリアスという町を建てた。

2. さて、ティベリウスによってユダヤの行政長官として派遣されたピラトは、夜間に、皇帝の旗と呼ばれる像をエルサレムに送り込んだ。これは、昼間、ユダヤ人の間で非常に大きな騒動を引き起こした。というのは、近くにいた人々は、自分たちの法律が踏みにじられていることの証拠として、それを見て驚いたからである。なぜなら、法律では、いかなる像も市内に持ち込むことを許可していないからである。いや、

市民自身がこの処置に憤慨しただけでなく、膨大な数の人々が国外に駆け出してきた。彼らは熱心にピラトのもとにカエサレアに赴き、それらの旗をエルサレムから持ち出し、それらを彼らの古い法律を侵害されないよう保存するよう懇願した。しかし、ピラトが彼らの要求を拒否したので、彼らは地面にひれ伏し、5 日と 5 夜の間、その姿勢で動かなかった。

3. 翌日、ピラトは広場の法廷に座り、群衆に答えを求めた。そして兵士たちに合図を出し、全員一致でユダヤ人を武器で取り囲むよう指示した。兵士たちはユダヤ人を三列に取り囲んだ。ユダヤ人たちはその予期せぬ光景に非常に驚いた。ピラトはまた、カエサルの像を認めなければ切り刻むと言い、兵士たちに裸の剣を抜くよう暗示した。するとユダヤ人たちは、まるで合図が一斉に届いたかのように、一斉にひれ伏し、首をむき出しにして、自分たちの法律を破られるよりは殺される方が早いと叫んだ。ピラトは彼らの途方もない迷信に大いに驚き、旗印をすぐにエルサレムから持ち去るよう命令した。

4. この後、ピラトは[*1]と呼ばれる聖なる財宝を水道につぎ込み、400 スタディオンも離れた所から水を引いたことで、また別の騒動を起こした。これに群衆は憤慨し、ピラトがエルサレムに着くと、法廷に押しかけ、騒ぎ立てた。ピラトは事前にこの騒動について知っていたので、武装した兵士たちを群衆の中に混ぜ込み、兵士たちに私服の下に身を隠し、騒ぎ立てる者たちを剣ではなく杖で殴るように命じた。それから法廷から合図を出した。ユダヤ人たちはひどく殴打され、鞭打たれて死んだ者も多かった。また踏みつけられて死んだ者も多かった。それによって、群衆は殺された人々の惨状に驚き、黙っていた。

5. その間に、父ヘロデに殺されたアリストブロスの息子アグリッパが、領主ヘロデを告発するためにティベリウスのもとにやって来た。ヘロデは告発を認めず、ローマに留まり、他の著名人と親交を深めたが、特に当時は私人であったゲルマニクスの息子ガイウスと親交を深めた。このアグリッパはある時、ガイウスをもてなした。ガイウスは他のいくつかの理由で彼に非常に好意的であったため、ついには手を差し伸べて、ティベリウスが死んで、彼が早く世界皇帝になるのを見たいと公然と望んだ。このことをアグリッパの召使の一人がティベリウスに告げた。召使は激怒し、アグリッパを縛るよう命じ、6 か月間監獄でひどい扱いをさせた。ティベリウスは 22 年 6 か月 3 日統治した後、死去した。

6. しかしカイウスが皇帝に任命されると、彼はアグリッパを拘束から解放し、すでに亡くなっていたフィリップの四分領の王とした。しかしアグリッパがその地位に就くと、四分領主ヘロデの野心的な欲望をかき立てた。ヘロデが王権を望むようになったのは、妻ヘロディアスが彼の怠惰を非難し、彼が皇帝のもとへ航海しないからこそ、その大いなる威厳を失っているのだと言ったからである。なぜなら、皇帝はアグリッパを一個人から王にしたのだから、四分領主からその地位に昇進させるのに何の努力もいらないからだ。この議論はヘロデに有利に働き、ヘロデはカイウスのもとへ行き、その野心のためにスペインへ追放された。アグリッパは彼を告発するために彼を追いかけ、カイウスは四分領主ヘロデにもその地位を与えた。それでヘロデは妻が追って行ったスペインで死んだ。

[*1] [神殿の宝物庫に納められた神に捧げられた聖なるお金にここで用いられているコルバン、つまり供え物のこの用法は、私たちの救い主の言葉、マルコ 7:11、12 を例証しています。]

E.3.10　第 10 章

カイウスは彼の像を神殿そのもの、そしてペトロニウスがそこで何をしたか。

1. さて、ガイウス・シーザーは、自分が得た財産をひどく悪用し、自分を神とみなし、自分も神と呼ばれることを望み、国から最も高貴な人々を排除しました。彼はまた、ユダヤ人にまでその不信心を広げました。そこで、彼はペトロニウスを軍隊とともにエルサレムに派遣し、彼の像を神殿に置き、11 ユダヤ人が受け入れない場合には、反対する者を殺し、残りの国民すべてを捕虜にするよう命じました。しかし、神は彼のこれらの命令に関心を寄せました。しかし、ペトロニウスは、3 つの軍団と多くのシリア人援軍を率いて、アンティオキアからユダヤに進軍しました。さて、ユダヤ人の中には、戦争の話を信じることができなかった人もいましたが、それを信じた人々は、どのように身を守るべきか非常に困惑しており、恐怖はすぐに全員に広がりました。なぜなら、軍隊はすでにプトレマイスに到着していたからです。

2. このプトレマイスは、大平原に築かれたガリラヤの海辺の都市である。周囲は山々に囲まれている。東側は 60 スタディオン離れたガリラヤに属し、南側は 120 スタディオン離れたカルメルに属している。北側は最も高い山で、その地方の人々からティルスの梯子と呼ばれており、100 スタディオン離れている。非常に小さなベルス川 12 が 2 スタディオン離れたところに流れている。その近くにはメンモンの記念碑 13 があり、その近くには 100 キュビトほどの広さの場所があり、それは賞賛に値する。その場所は丸くて窪んでおり、ガラスのような砂が採れるからである。その場所は、多くの船が積荷を積んで空になった後、風によって再び満たされ、遠くにあった、むき出しの普通の砂に過ぎなかった砂が、あたかも意図的に運ばれ、この鉱山はそれをすぐにガラス質の砂に変えます。そして私にとってさらに不思議なのは、その余分なガラス質の砂が、その場所から取り除かれると、再びむき出しの普通の砂になるということです。これが、私たちが話している場所の性質です。

3. しかし、ユダヤ人たちは妻子とともにプトレマイスの近くの平原に大勢集まり、ペトロニウスにまず法律を、次に自分たちのために嘆願した。そこで彼は嘆願者の大勢と嘆願に説得され、軍隊と像をプトレマイスに残し、ガリラヤに進み出て、ティベリアスの群衆と名士全員を呼び集め、ローマ人の力とカエサルの脅迫を見せた。さらに、彼らの嘆願が不当であることを証明した。なぜなら、彼らに服従しているすべての国々が、それぞれの都市に、他の神々とともにカエサルの像を置いているのに、彼らだけがそれに反対するのは、ほとんど反逆者の行為に似ており、カエサルに損害を与えるからである。

4. そして彼らが自分たちの法律と国の慣習を主張し、神の像も、人間の像も作ることは許されないばかりか、それを自分たちの国の卑しい場所、まして神殿に置くことさえ許されないと主張したとき、ペトロニウスは答えた。「私もまた、自分の主の法律を守る義務があるのではないか。もし私がそれを破って、あなたたちを許すなら、私が滅びるのは当然だ。一方、私ではなく、私を遣わした方があなたたちと戦争を始めるだろう。なぜなら、私もあなたたちと同じように命令を受けているからだ。」そこで群衆は全員、自分たちの法律のために苦しむ覚悟があると叫んだ。そこでペトロニウスは彼らを静めて言った。「それでは、カエサルと戦争をするのか。」ユダヤ人たちは言った。「私たちはカエサルとローマ人のために、毎日二度犠

牲を捧げている。」しかし、もし彼らがその像を置くなら、まずユダヤ民族全体を犠牲にしなければならない。そして、彼らは子供や妻とともに殺される覚悟ができていた。これにペトロニウスは驚き、彼らの言い表せないほどの信仰心と、そのために死ぬ覚悟をさせた勇気に同情した。そこで彼らは解散させられたが、効果はなかった。

5. しかし、その後の数日間、彼は権力者を個人的に、また群衆を公的に集め、時には説得し、時には助言を与えた。しかし、彼は主に脅迫を用い、ローマ人の権力とガイウスの怒りを主張し、さらに、彼自身が [命令通りにする] 必要性を主張した。しかし、彼らはどうにも説得できず、彼は国が耕作されないままになる危険があることを知った。[民衆が 50 日間も何もせずにいたのは種まきの時期だった。] そこで、彼はついに彼らを集め、自分自身が危険を冒すのが最善であると告げた。「神の助けによって、私もシーザーに勝って、あなたたちと同じように危険から逃れることができるでしょう。それは私たち双方にとって喜ばしいことです。あるいは、シーザーが怒り続けるなら、あなたたちのような大勢のために、私は自分の命を危険にさらすこともいといません。」そこで彼は、シーザーの繁栄を熱心に祈っていた群衆を解散させ、プトレマイオスから軍隊を率いてアンティオキアに戻りました。そこからすぐにシーザーに手紙を送り、ユダヤに侵入したことと国民の嘆願について知らせ、国と国民の両方を失うつもりがない限り、彼らに法律を守らせ、以前の命令を撤回しなければならないと伝えました。カイウスはその手紙に激しく答え、ペトロニウスが命令の実行に非常に遅れたため、死刑にすると脅しました。しかし、ガイウスの手紙を携えて来た者たちは嵐に遭い、海上で 3 か月間足止めされたが、ガイウスの死の知らせを携えて来た者たちは順調な航海を送った。したがって、ペトロニンスは、自分に対する手紙を受け取る 27 日前に、ガイウスに関する手紙を受け取った。

E.3.11 第 11 章

クラウディウスの統治とアグリッパ。アグリッパとヘロデの死について二人が残した子供たち。

1. ガイウスが 3 年 8 ヶ月統治し、裏切りにより殺害されたとき、クラウディウスはローマにいた軍隊によって急いで退去させられ、政権を握ろうとした。しかし元老院は、執政官センティス・サトゥルニヌスとポンポニウス・セクンドゥスの助言により、彼らと共にいた 3 個連隊の兵士に都市の平穏を保つよう命令し、大勢で首都に上陸し、ガイウスから受けた野蛮な扱いを理由に、武力でクラウディウスに対抗することを決意した。そして、彼らは、昔統治されていたように、国民を貴族制の下に落ち着かせるか、少なくともそれにふさわしい人物を投票で皇帝に選ぶことを決意した。

2. ところで、このときアグリッパはローマに滞在しており、元老院は相談するために彼を招集し、同時にクラウディウスは、必要があれば彼に仕えさせようと、陣営から彼を召集した。そこで彼は、クラウディウスがすでに事実上皇帝に任命されていることを知って、彼のところへ行き、クラウディウスは彼を元老院への大使として派遣し、彼の意図を知らせた。第一に、兵士たちに急かされたのは彼の申し出がなかったこと、さらに、彼に熱心だった兵士たちを見捨てるのは不当だと考え、もしそうしたら彼自身の運命が危うくなるだろう、なぜなら、一度帝国に召集されたことは危険な事態だからである。さらに彼は、暴君のようにではなく、善良な君主として政府を運営するつもりだと付け加えた。というのは、皇帝と呼ばれる

栄誉には満足するが、自分の行動の一つ一つにおいて、彼ら全員から助言を受けるようにするだろう、というのは、彼は生来穏健派ではなかったが、カイウスの死は、その地位においていかに冷静に行動すべきかを十分に証明してくれるだろう、という理由からだ。

3. このメッセージはアグリッパによって伝えられた。これに対して元老院は、彼らには軍隊があり、最も賢明な助言者もいるので、自発的な奴隷状態に耐えるつもりはない、と答えた。元老院の返答を聞いたクラウディウスは、再びアグリッパを元老院の元に派遣し、次のようなメッセージを伝えた。「自分に忠誠を誓った者たちを裏切る考えには耐えられない。また、戦う気のない者たちと、不本意ながらも戦わなければならないことは分かっている。しかし、もしそうなるなら、戦争の場所は市外に選ぶのが適切だ。なぜなら、自分たちの市の寺院を自分たちの同胞の血で汚すのは信心深くないからだ。しかも、これは彼らの軽率な行為のせいでしかない。」アグリッパはこのメッセージを聞くと、それを元老院議員たちに伝えた。

4. その間、元老院に属する兵士の一人が剣を抜いて叫んだ。「おお、我が同胞たちよ、我々が同胞を殺し、クラウディウスに味方する親族に暴力を振るうというこの選択の意味は一体何なのか。我々は彼を皇帝として迎え入れることができる。彼には誰も責めることができない、そして彼には [政府を主張する] 正当な理由がたくさんある。そしてこれは我々が戦う相手に関してである。」彼はこう言うと、元老院全体を行進し、兵士全員を連れていった。すると貴族たちは皆、自分たちがこのように見捨てられたことにすぐに非常に恐れた。しかし、それでも、自分たちが救われる道が他には見当たらなかったので、彼らは兵士たちと一緒に急いで同じ道を行き、クラウディウスのもとへ向かった。しかし、クラウディウスの幸運に最も便乗した者たちは、裸の剣で城壁の前で彼らとすぐに対峙した。もしアグリッパが先に駆けつけ、彼らがどんなに危険なことをしているのかクラウディウスに告げていなかったら、先に来た者たちは危険にさらされていたかもしれないと懸念する理由があった。もしアグリッパが先に駆けつけ、彼らがどんなに危険なことをしているのかを告げ、貴族たちに対して狂気の沙汰になっているこれらの者たちの暴力を抑えなければ、クラウディウスは統治するのが最も望ましい人々を失い、砂漠の皇帝になるだろうと告げていなかったら。

5. クラウディウスはこれを聞くと、兵士たちの暴動を抑え、元老院を陣営に迎え入れ、丁重に扱い、すぐに彼らとともに出て行き、帝国に初めて来たときの神への感謝の捧げ物を捧げた。さらに、彼は父祖の王国のすべてを直ちにアグリッパに与え、アウグストゥスがヘロデに与えたトラコニティスとアウラニティスの領土に加え、さらにこれらの領土に加えて、リサニオス王国と呼ばれた王国も与えた。彼はこの贈り物を法令で人々に発表したが、行政官たちに、寄付金を真鍮の板に刻ませ、首都に掲げるよう命じた。彼は、義理の息子でもあった兄ヘロデに、娘ベルニケとの結婚によりカルキス王国を与えた。

6. こうして、アグリッパは広大な領土を享受して富を流入させ、また、その金を些細なことに浪費することもせず、エルサレムを城壁で囲み始めた。城壁が完成していれば、ローマ軍が包囲して攻め落とすことは不可能だったであろう。しかし、城壁を本来の高さまで築く前にカエサレアで彼が亡くなったため、それができなかった。彼はその後 3 年間統治し、他の 3 年間はテトラルキアを統治した。彼は、キュプロスとの間に生まれた 3 人の娘、ベルニケ、マリアムネ、ドルシラと、同じ母親から生まれた息子、アグリッパを残してこの世を去った。彼は非常に幼い子供を残したため、クラウディウスはローマの属州とし、クスピウス・ファドゥスを総督に任命し、その後ティベリウス・アレクサンダーが、古い法律を一切変更する

ことなく、国を平穏に保った。この後、カルキスの王ヘロデが死に、兄の娘ベルニケとの間に生まれた二人の息子を残した。彼らの名はベルニケ・ヤヌスとヒルカノスであった。また、前妻マリアムネとの間にアリストブロスも残した。彼の兄弟で、私人として死んだ者もいた。その名もアリストブロスで、ヨタペという名の娘を残した。これらは、私が以前に述べたように、ヘロデの息子アリストブロスの子供たちである。アリストブロスとアレクサンダーは、ヘロデとマリアムネとの間に生まれ、ヘロデによって殺された。しかし、アレクサンダーの子孫はアルメニアで統治した。

E.3.12　第 12 章

クマヌスの下で起こった多くの騒乱は、方形座。フェリクスはユダヤの検察官です。アグリッパは進化しているカルキスから大王国へ。

1 さて、カルキスの王ヘロデの死後、クラウディウスはアグリッパの息子アグリッパを叔父の王国の統治者に任命し、クマヌスはローマの属州であった残りの地域の行政長官の職を引き受け、そこでアレクサンダーの後を継いだ。その下でクマヌスは騒乱を起こし、ユダヤ人の破滅が進んだ。というのは、群衆が無酵母パンの祭りのためにエルサレムに集まり、ローマ軍の歩兵が神殿の回廊を見張っていたとき（彼らは常に武装しており、祭りの際には集まった群衆が何か新しいことをするのを阻止するために警備していた）、兵士の一人が上着をはだけ、みだらな態度で身をかがめ、ユダヤ人にズボンを向け、そのような姿勢から予想されるような言葉を発した。これに群衆は皆憤慨し、クマヌスに兵士を罰するように大声で叫んだ。一方、若者のより無謀な部分、そして生まれつき最も騒々しい者たちは、戦いに加わり、石を拾い上げて兵士たちに投げつけた。クマヌスは、民衆全員が襲撃してくるのではないかと恐れ、もっと武装した者を呼び寄せた。彼らが大勢で回廊に入ってくると、ユダヤ人たちは非常に驚いた。そして、神殿から追い出されたユダヤ人たちは、市内に逃げ込んだ。そして、彼らが逃げようと群がるあまりの暴力はすさまじく、互いに踏みつけ合い、互いに圧迫し合い、ついに一万人が殺された。この祭りは国全体の悲しみの原因となり、すべての家族が自分の親戚を嘆いた。

2. さて、この後、盗賊による騒動から生じたもう一つの災難が続いた。ベテボロンの公道で、カエサルの召使ステファノが家具を運んでいたところ、盗賊が襲って奪ったのである。これを受けてクマヌスは、盗賊を追跡して捕まえなかったとして、近隣の村々を回って住民を縛り上げて連れて来るようにと、人々を遣わした。さて、ここで、ある兵士が律法の聖典を見つけ、それを引き裂いて火に投げ込んだのである。14 ユダヤ人たちは、国中が炎に包まれたかのように大混乱に陥り、宗教に対する熱意から、まるで機械に頼むかのように大勢が集まり、一斉に叫びながらカエサレアのクマヌスのもとに駆けつけ、神とその法を冒涜したこの男を見逃さず、行ったことに対して罰を与えてくれるよう懇願した。そこで、クマヌスは、群衆が自分から納得のいく答えをもらわない限り黙らないだろうと悟り、兵士を連れてきて、処刑を要求する者たちの手中を通し、処刑するよう命じた。それが終わると、ユダヤ人たちは立ち去った。

3. その後、ガリラヤ人とサマリア人の間で争いが起こった。それはサマリアの大平原にあるゲマンという村で起こった。そこでは、大勢のユダヤ人が祭り [仮庵の祭り] のためにエルサレムへ上って行く途中、あるガリラヤ人が殺された。さらに、大勢の人々がサマリア人と戦うためにガリラヤから駆けつけた。しかし、彼らの主だった人物たちがクマヌスのもとに来て、この災難が治らなくなる前にガリラヤに来て、この殺

人の首謀者たちを罰してほしいと懇願した。なぜなら、殴り合いをせずに群衆を分裂させる方法は他になかったからだ。しかし、クマヌスは彼らの懇願を他の用事のために先延ばしにし、嘆願者たちをうまく行かせずに帰らせた。

4. しかし、この殺人事件がエルサレムで噂されると、群衆は混乱し、祭りを去りました。指揮する将軍もいないまま、彼らはサマリアへと激しく進軍しました。彼らは、彼らの上に置かれた行政官の誰からも統制されることを望まず、ディネウスの息子エレアザルとアレクサンダーによって、盗みと反逆の企てを阻止されました。これらの男たちは、アクラバテネの地方領土の近隣の人々を襲撃し、容赦なく殺害し、村々に火を放ちました。

5. しかしクマヌスは、セバステの部隊と呼ばれる一隊の騎兵を率いてカエサレアから出てきて、略奪された者たちを助け、またエレアザルに従っていた大勢の者たちを捕らえて、さらに多くを殺した。そして、サマリア人と戦うために熱心に戦った残りの群衆に対しては、エルサレムの支配者たちが荒布をまとい、頭に灰をかぶって走り出て、サマリア人への復讐を企てることでローマ軍がエルサレムに攻め寄せてくるのを刺激しないように、彼らの祖国と神殿、彼らの子供たちと妻たちに同情し、たった一人のガリラヤ人への復讐のために彼らに最大の破滅の危険をもたらさないよう、彼らに立ち去るように懇願した。ユダヤ人たちは彼らの説得に従い、散り散りになった。しかし、罰を受けずに済むと期待して盗みを働く者も大勢いた。そして、より大胆な略奪や暴動が国中で起こった。サマリア人の有力者たちは、シリア総督ウンミディウス・クワドラトゥスのもとにティルスに赴き、国を荒廃させた者たちを罰するよう求めた。ユダヤ人の有力者たちや、大祭司アナヌスの息子ヨナタンもそこへやって来て、サマリア人が起こした殺人が騒乱の火付け役であり、クマヌスが殺人の張本人を罰することを嫌がったことで、このような事態を引き起こしたのだと語った。

6. しかしクワドラトゥスは、その時点では両者を延期し、自分がその地へ行ったら、あらゆる状況について綿密に調査すると告げた。その後、彼はカエサレアへ行き、クマヌスが捕らえた者全員を十字架につけた。そこからリダ市へ来たとき、サマリア人の事件を聞き、その戦いに関与していたと聞いていたユダヤ人 18 人を呼び寄せ、彼らの首をはねた。しかし、彼はユダヤ人の中で最も権力のある他の 2 人、大祭司のヨナタンとアナニア、このアナニアの息子アルタヌス、およびユダヤ人の中で名声のある他の何人かをカエサルのもとへ送った。彼はサマリア人の最も高名な者たちに対しても同様に行なった。また、彼はクマヌス（総督）と護民官ケレルにローマへ航海し、カエサルに何が行われたかを報告させるよう命じた。これらのことを終えると、パウロはリダからエルサレムに上り、群衆が何の騒ぎもなく無酵母パンの祭りを祝っているのを見て、アンティオキアに戻った。

7. さて、ローマのカエサルはクマヌスとサマリア人の意見を聞いたとき（それは、ユダヤ人の大義を熱心に支持していたアグリッパの耳に届き、同様に多くの有力者たちがクマヌスを支持していた）、サマリア人を非難し、彼らのうち最も有力な三人を死刑にするよう命じた。彼はクマヌスを追放し、ケレルを縛ってエルサレムに送り、ユダヤ人に引き渡して拷問を受けさせ、町中を引き回してから斬首するように命じた。

8. その後、カエサルはパラスの兄弟フェリクスをガリラヤ、サマリア、ペレアの行政長官として派遣し、アグリッパをカルキスからさらに大きな王国に移した。カエサルは、フィリッポスに属していたバタナエ、

トラコニティス、ガウロニティスを含むテトラルキアをアグリッパに与え、それにリサニア王国と、ウァルスが統治していたアビレネ属州を加えた。しかし、クラウディウス自身は、13 年 8 ヶ月 20 日間統治した後、死去し、妻アグリッピナの妄想によって養子に迎えたネロを後継者にした。クラウディウスには、前妻メッサリナとの間にブリタンニクスという息子がおり、ネロと結婚させたオクタウィアという娘もいた。また、ペティナとの間にアントニアという娘もいた。

E.3.13 第 13 章

ネロはアグリッパ王国に 4 つの都市を追加したが、他のユダヤの一部はフェリクスの支配下にあった。シカリイの魔術師とエジプトの偽りの預言者。ユダヤ人とシリア人がカエサレアで争います。

1. さて、ネロが享受していた莫大な幸福と富のせいで狂人のように行動し、その幸運を他人に害をなすために使ったこと、そして、どのような方法で兄弟、妻、母を殺害し、その蛮行が最も近い親戚にまで広がったこと、そして、ついには気が狂って舞台や劇場の役者になったことなどについては、それらの主題については至る所に十分な著述家がいるため、これ以上は述べない。しかし、ユダヤ人が関係していた当時の行動について述べることにする。

2. そこでネロは、小アルメニア王国をヘロデの子アリストブロスに授け、17 アグリッパの王国に 4 つの都市を加え、それらの都市に属すべき領地を与えた。すなわち、アビラ、ペレアのユリアス、タリケア、ガリラヤのティベリアである。しかし、ユダヤの残りの地域については、フェリクスを総督に任命した。このフェリクスは、大盗賊エレアザルと、彼と共に 20 年間国中を荒らしていた多くの者を生け捕りにして、ローマに送った。しかし、彼が十字架につけた盗賊の数は、また、彼らの間で捕らえられ、処罰された者の数は、数え切れないほど多かった。

3. 国からこれらの者が一掃されると、エルサレムにシカリと呼ばれる別の種類の強盗が出現し、昼間や町の真ん中で人を殺した。彼らは主に祭りのときにこれを行い、群衆の中に紛れ込み、衣服の下に短剣を隠し、それで敵を刺した。そして、誰かが死んで倒れると、殺人者は彼らに対して憤慨している人々の一部となった。こうして、彼らは非常に評判の高い人物として現れ、決して発見されなかった。彼らに殺された最初の人物は大祭司ヨナタンであり、彼の死後、毎日多くの人が殺されたが、人々がそのように仕向けられるのではないかという恐怖は、災難そのものよりもさらに悲惨であった。そして、戦争のときのように、誰もが毎時間死を覚悟していたので、人々は前方を見張り、遠くにいる敵に気付かざるを得なかった。友人が彼らのところにやって来たとしても、彼らは彼らをこれ以上信用する勇気はなかった。しかし、彼らが疑念を抱き、身を守ろうとしている最中に、彼らは殺された。彼らに対する陰謀家たちの素早さはそれほどで、その策略はそれほど狡猾だった。

4. もう一つの邪悪な集団も集まっていた。彼らの行為はそれほど不純ではなかったが、その意図はもっと邪悪で、この殺人者たちと同じように、この都市の幸福な状態を破壊した。彼らは神の啓示を装って人々を騙し、惑わし、政府の改革や変更を企てた者たちだった。彼らは群衆を説得して狂人のように行動させ、神が自由の兆しをそこに示してくれると偽って、彼らの前に荒野へ向かった。しかしフェリクスはこの行

為が反乱の始まりになると考え、武装した騎兵と歩兵を派遣し、その多くが殺された。

5. しかし、エジプト人の偽預言者がいたが、その偽預言者は、ユダヤ人に、前者よりも多くの害を及ぼした。彼は詐欺師で、預言者のふりもして、彼に惑わされた三万人の男たちを集め、彼らを荒野からオリーブ山と呼ばれる山まで連れて回り、そこから力ずくでエルサレムに侵入しようとしていた。そして、ローマ軍と民衆を一度でも征服できれば、彼と共に町に侵入する護衛兵の助けを借りて、彼らを支配しようとしていた。しかし、フェリクスは彼の企てを阻止し、ローマ兵と共に彼を迎え撃ち、民衆は皆、彼の攻撃に協力した。そのため、戦闘になると、エジプト人は他の数人と共に逃げ、彼と共にいた大部分の者は殺されるか、生け捕りにされた。しかし、群衆の残りは、それぞれ自分の家に散り散りになり、そこに身を隠した。

6. さて、これらのことが鎮まると、病んだ身体によくあるように、別の部分が炎症を起こした。詐欺師や強盗の一団が集まり、ユダヤ人に反乱を起こさせ、自由を主張するよう勧め、ローマ政府に服従し続ける者を死に至らしめ、自ら奴隷の身分を選んだ者は、その望む性向から強制的に離れさせるべきだと言った。彼らは別々の集団に分かれ、国中を待ち伏せし、有力者の家を略奪し、有力者を殺害し、村々に火を放った。そして、ユダヤ全土が彼らの狂気の影響で満たされるまで、炎は日増しに燃え上がり、ついには直接戦争にまで至った。

7. カエサレアではまた別の騒動があった。そこに住むシリア人と混血していたユダヤ人が、彼らに対して騒動を起こしたのである。ユダヤ人は、その都市は自分たちのものだと偽り、それを建設したのはユダヤ人、つまりヘロデ王だと言った。シリア人も、その建設者はユダヤ人だと告白したが、それでも彼らは、その都市はギリシャの都市だと言った。なぜなら、そこに像や神殿を建てた者は、ユダヤ人のためにそれを設計することはできないからだ。このため、両者は互いに争い始めた。そして、この争いはますます激しくなり、ついには武器を手にすることになり、勇敢な者たちが戦いに出た。ユダヤ人の長老たちは、騒ぎたがる自分たちの民を止めることができず、ギリシャ人は、ユダヤ人に打ち負かされるのは恥ずべきことだと考えたからである。さて、これらのユダヤ人は富と肉体の強さにおいて他の者たちを上回っていたが、ギリシャ側は兵士の援助という利点があった。ローマ軍の守備隊の大部分はシリアから召集された。そして、シリア側とこのように関係があったので、彼らはシリア側を支援する用意があった。しかし、都市の総督たちは、すべての者を静かにさせようと気を配り、どちらかの側で戦うことに最も賛成する者を捕らえると、鞭打ちや鞭打ちで罰した。しかし、捕らえられた者たちの苦しみは、残りの者たちを怖がらせたり、やめさせたりはしなかった。彼らはますます激怒し、暴動に深く関与した。フェリクスはかつて市場に入って、ユダヤ人がシリア人を打ち負かした後、立ち去るように命じ、もし立ち去らなければ、従わなければと脅したので、兵士たちを彼らのところへ送り、彼らの多くを殺した。その結果、彼らの所有物は略奪された。暴動がまだ続いたため、フェリクスは、それぞれの特権について議論するために、両側の最も著名な人物たちをネロへの大使として選んだ。

E.3.14　第 14 章

フェストゥスはフェリクスの後継者となり、フェリクスの後継者はアルビヌスとなった。フロラスは政府の蛮行によってユダヤ人の戦争参加。

1. さて、フェストゥスがフェリクスの後を継いで総督となり、国内で騒乱を起こす者たちを正すことを自分の仕事とした。彼は盗賊の大部分を捕らえ、その多くを殺した。しかし、フェストゥスの後を継いだアルビヌスは、フェストゥスがしたようには職務を遂行しなかった。また、彼が関与していない悪事は、名指しできるようなものは一切なかった。したがって、彼は政治的立場で、あらゆる人々の財産を盗み、略奪しただけでなく、国民全体に税金を課しただけでなく、各都市の元老院または以前の総督によって盗みで投獄されていた人々の親族が金銭で身代金を払うことを許した。そして、彼に何も与えなかった者以外は、犯罪者として投獄された者はいなかった。この頃、エルサレムの反乱者たちの計画は非常に恐るべきものであった。彼らのうちの主だった人物は、アルビヌスから暴動行為を続ける許可を買っていた。一方、騒乱を好む一部の人々は、アルビヌスと親交のある者たちと結託していた。そして、これらの邪悪な悪党たちは、それぞれ自分の盗賊団に囲まれていた。一方、アルビヌス自身は、大盗賊や暴君のように、仲間の中で目立ち、周囲の人々に対する権力を乱用し、静かに暮らす人々から略奪していた。その結果、財産を失った人々は、自分たちが受けた被害に憤慨する理由があるにもかかわらず、黙っていなければならなかった。一方、逃げ延びた人々は、他の人々と同じように苦しむのではないかという恐怖から、罰を受けるに値する人物にへつらわざるを得なかった。全体として、誰も自分の意見を言う勇気はなく、暴政は一般的に容認されていた。そして、このとき、都市を破滅に導く種がまかれたのである。

2. アルビヌスの性格はこのようなものであったが、彼の後を継いだゲッシウス・フロルス 18 は、比較すると彼が最も優れた人物であったことを示した。というのは、アルビヌスは悪事のほとんどを内密に、ある種の偽装をもって行ったのに対し、ゲッシウスは国家に損害を与える不正行為を尊大な態度で行った。そして、死刑囚を処罰するために死刑執行人として派遣されたかのように、略奪や嫌がらせを一切怠らなかった。本当に哀れな場合には、彼は最も野蛮であり、最も不道徳な場合には、彼は最も厚かましかった。真実を隠すことにかけては、誰も彼を超えることはできず、彼ほど巧妙な欺瞞の方法を編み出すこともできない。彼は確かに、個人から金を巻き上げることは些細な犯罪にすぎないと考えていた。そこで彼は、都市全体を略奪し、一度に大勢の人々を破滅させ、略奪した物の一部を分け与えるという条件で、盗賊になる自由を彼らに与えたと、国中にほぼ公然と宣言した。したがって、彼のこの貪欲な金銭欲が原因で、全地方が荒廃し、多くの人々が自国を離れ、外国の州に逃げた。

3. 実際、ケスティウス・ガルスがシリアの属州長官だったころ、誰もフロルスに対抗する使節を彼のもとに送ろうとはしなかった。しかし、彼がエルサレムに着いたとき、種なしパンの祭りが近づくと、300 万人もの民衆が彼の周りに集まり、彼らの国の災難を哀れんでくれるよう懇願し、フロルスを国の災いの元だと非難した。しかし、彼はそこにいてケスティウスのそばに立っていたので、彼らの言葉をあざ笑った。しかし、ケスティウスは群衆を静め、フロルスが今後はもっと優しく接するように配慮すると約束すると、アンティオキアに戻った。フロルスは彼をカエサレアまで案内し、彼を欺いたが、彼はまさにそのとき、国民に対する怒りを示し、彼らと戦争を起こそうとしていた。その手段だけが、彼が自分の凶悪な行為を隠せると考えていたのである。というのは、平和が続けば、ユダヤ人を皇帝の前に告発できると予想していたからである。しかし、もしユダヤ人に反乱を起こさせることができれば、より大きな悲惨さによって、彼らが告発する軽犯罪を自分の責任に転嫁できるだろうと。そのため、反乱を起こさせるために、毎日ユダヤ人に災難を与え続けたのである。

4. さて、そのころ、カエサレアのギリシア人はユダヤ人に対してあまりにも強硬で、ネロからその都市の統治権を奪い、司法上の決定を下していた。同時に、ネロの治世の第 12 年、アグリッパの治世の第 17 年、アルテミシウスの月に戦争が始まった。さて、この戦争のきっかけは、それが我々にもたらしたあの大きな災難とはまったく釣り合いが取れないものであった。カエサレアに住むユダヤ人は、その場所の近くにシナゴーグを持っていたが、その所有者はカエサレアのギリシア人であった。ユダヤ人は、その場所の所有権を購入しようと何度も試み、その価格に対してその価値の何倍もの金額を提示していた。しかし、所有者は彼らの申し出を無視したため、彼らを侮辱する形でその場所に他の建物を建て、それらを作業場にし、狭い通路だけを残して、シナゴーグまで通るのに非常に面倒な状態にした。そこで、ユダヤ人の若者の熱心な人たちは急いで労働者のところに行き、そこに建てることを禁じた。しかし、フロルスは彼らが力を使うことを許さなかったため、ユダヤ人の有力者たちは、徴税人のヨハネとともに、どうしたらよいか非常に困り、8 タラントの申し出でフロルスを説得して工事を妨害させた。それから、彼は金銭を得ることだけを考え、彼らが望むことは何でもすると約束し、それからカエサレアからセバステへ立ち去り、あたかもユダヤ人に戦う許可を売ったかのように、暴動が十分に進むのを放っておいた。

5. さて、その翌日、すなわち週の七日目に、ユダヤ人たちが会堂に殺到していたとき、カイザリヤの、ある反抗的な性格の男が、土器を手に入れ、それを底を上にして会堂の入り口に置き、鳥を犠牲に捧げた。このことは、ユダヤ人をひどく怒らせた。彼らの律法が冒涜され、その場所が汚されたからである。そこで、ユダヤ人のうちの冷静で穏健な部分は、再び総督に頼るのが適切だと考えたが、反抗的な部分や、若者の熱意に燃えている人たちは、激しく闘争しようと燃え上がった。カイザリヤの異邦人の間でも、同じ目的で反抗的な動きが起こっていた。彼らは、合意により、犠牲を捧げるために、あらかじめその人を送っていたからである。そのため、すぐに殴り合いになった。そこで、戦いを阻止するよう命じられた騎兵長のユクンドゥスがそこへやって来て、土器を奪い取り、騒乱を鎮めようとした。しかし、カエサレアの人々の暴力に打ち負かされたとき、ユダヤ人たちは律法の書物を持って、カエサレアから 60 ハロン離れた彼らの土地であるナルバタに退却した。しかし、ヨハネと彼と共にいた主だった 12 人の男たちは、セバステのフロルスのもとへ行き、彼らの状況を嘆き悲しんで訴え、助けを求め、できるだけの礼儀をもって、彼らが彼に与えた 8 タラントのことを思い出させた。しかし、ヨハネは男たちを捕らえて牢に入れ、カエサレアから律法の書物を持ち出したとして告発した。

6. さらに、エルサレムの市民は、この件を非常に不快に感じながらも、その激情を抑えていた。しかし、フロルスは、雇われたかのように行動し、戦争を炎上させ、何人かを派遣して聖なる宝物から 17 タラントを持ち出し、カエサルがそれを欲しがっていると偽った。これに対して、人々は直ちに混乱し、大声で叫びながら神殿に駆けつけ、カエサルを名指しで呼び、フロルスの暴政から解放してくれるよう懇願した。また、一部の反乱分子はフロルスを大声で非難し、籠を持ち歩き、財産もなく惨めな状態にある者のために、いくらかの金を乞うた。しかし、彼は金銭に対する自分の愛を恥じることはなく、むしろさらに激怒し、さらにもっと金を欲しがった。そして、本来ならカエサレアに行って、そこから始まっていた戦争の火を消し、騒乱の機会をなくして（そのために 8 タラントの報酬を受け取ったのだが）、その代わりに、騎兵と歩兵の軍隊を率いて急いでエルサレムに進軍し、ローマ軍の力で自分の意のままにし、恐怖と脅迫でその都市を屈服させようとした。

7. しかし民衆はフロルスにその企てを恥じ入らせたいと望み、兵士たちを歓呼して迎え、従順に彼を迎え入れようとした。しかし彼は百人隊長カピトを 50 人の兵士とともに先に派遣し、彼らに退却を命じ、以前彼らがひどく非難した彼を今さら親切に迎え入れるふりをしないようにさせた。そしてもし彼らが寛大な心を持ち、自由に話すことができるなら、面と向かって彼をからかい、言葉だけでなく武器でも自由を愛する者のように見せかける義務があると言った。このメッセージに民衆は驚愕し、カピトの騎兵が彼らの真ん中にやってくると、彼らはフロルスに挨拶したり、従順な態度を示したりする前に散り散りになった。そこで彼らは自分の家に引きこもり、その夜を恐怖と面目ない混乱の中で過ごした。

8. さて、このときフロルスは宮殿に居を構え、翌日には法廷を宮殿の前に設置して着席した。すると、高僧、権力者、市内の最も高名な人々がみな法廷の前にやって来た。そこでフロルスは、自分を非難した者たちを引き渡すよう命じ、犯罪者を引き渡さなければ、彼らも当然の報復を受けることになるだろうと告げた。しかし、彼らは民衆が平和的であることを示し、不当な発言をした者たちの許しを請うた。これほど大勢の民衆の中には、本来あるべき以上に大胆な者や、若いために愚かな者もいたとしても、まったく不思議ではない。そして、誰もが自分の犯した罪を悔い、その後のことを恐れてそれを否定している限り、罪を犯した者とそうでない者を区別することは不可能である。しかし、国の平和を確保し、ローマ人のために都市を守るような協議を行うべきであり、少数の悪人のためにこれほど大規模で善良な集団を混乱に陥れるよりも、むしろ多数の無実の人々のために少数の有罪者を許すべきである。

9. フロルスはこれにさらに激怒し、兵士たちに大声で、上市場と呼ばれる場所を略奪し、出会った者を殺すように命じた。そこで兵士たちは、指揮官のこの訓戒を自分たちの利益欲にかなうものと受け止め、派遣された場所を略奪しただけでなく、家々に押し入って住民を殺した。そこで住民たちは狭い路地に沿って逃げ、兵士たちは捕まえた者を殺した。略奪の手段は一つもなかった。また、おとなしい人々も多数捕まえてフロルスの前に連れて行き、フロルスはまず鞭で罰し、それから十字架につけた。したがって、その日殺された人々の総数は、妻子とともに約 3,600 人であった (幼児さえも容赦しなかった)。そしてこの災難をさらに重くしたのは、このローマの蛮行の新しい方法であった。というのは、フロルスは、それまで誰もやったことのないことを敢えてやろうとしたからである。つまり、騎士階級の男たちを法廷の前で鞭打ちにかけ、十字架に釘付けにするというのである。彼らは生まれながらのユダヤ人であったが、ローマ人の尊厳を有していた。

E.3.15 第 15 章

ユダヤ人を救済するためのベルニスのフロラスへの嘆願についてしかし、それは無駄だった。また、扇動的な炎が消えた後、消された情熱は、フロラスによって再び燃え上がった。

1. ちょうどその頃、アグリッパ王はアレクサンドリアへ行き、アレクサンダーがネロからエジプトの統治権を奪い取ったことを祝福しようとしていた。しかし、妹のベルニケがエルサレムに来て、兵士たちの邪悪な行為を目にして、ひどく動揺し、何度も自分の騎兵長と護衛をフロラスのもとへ送り、こうした虐殺をやめるよう懇願した。しかし、フロラスは彼女の要求に応じず、すでに殺された人々の多さや、仲裁に入った彼女の高貴さにも全く関心がなく、ただこの略奪によって自分が得る利益だけを考えていた。それど

ころか、兵士たちのこの暴力は狂気の域に達し、女王自身にも向けられた。というのは、彼らは彼女の目の前で捕らえた者たちを苦しめ、殺しただけでなく、彼女自身も自殺していたからである。彼女が宮殿に逃げて彼らを阻止し、兵士たちの侮辱を恐れて身の回りに護衛をつけて一晩中そこに留まっていたなら、そうはならなかったであろう。彼女はそのときエルサレムに住んでいた。それは、神に立てた誓いを果たすためであった。病気やその他の苦難に苦しめられた者たちは、誓いを立て、犠牲を捧げる 30 日前には酒を断ち、頭髪を剃るのが通例である。ベルニケは今、その誓いを実行しており、フロラスの法廷の前に裸足で立って、彼に [ユダヤ人を許すように] 懇願した。しかし、彼女は敬意を払われることもできず、彼女自身も殺される危険なしには逃げることができなかった。

2. これはアルテミシウス月（ヤール）の 16 日目に起こった。翌日、激しい苦しみに襲われた群衆は上市場へ駆けつけ、亡くなった人々のために大声で嘆き悲しんだ。そして、その叫び声の大部分はフロルスに向けられたものだった。権力者たちは高僧たちとともに恐れおののき、衣服を引き裂き、彼らの前にひれ伏して、彼らがすでに受けた苦しみに加えて、フロルスを不治の苦しみに陥れないように止めるよう懇願した。群衆は、彼らにそれを望んだ人々への敬意と、フロルスが彼らにこれ以上の危害を加えないだろうという希望から、すぐに従った。

3. それでフロルスは騒動が終わったことに心を痛め、その炎を再び燃え上がらせようと努め、他の高官たちとともに大祭司たちを呼び寄せ、民衆がこれ以上の改革をしないことを示す唯一の方法は、カエサレアから上って来る兵士たちを迎えに行くことだと言った。そこからは 2 個大隊がやって来る。そしてこれらの人々が群衆にそうするように勧めている間に、フロルスは前もって大隊の百人隊長たちに、ユダヤ人の挨拶に返事をしないように下級の者たちに通告するように、そしてもし彼らが彼の不利な状況に何か返事をしたら武器を使うようにと指示を出した。そこで大祭司たちは神殿に民衆を集め、彼らの惨めな状態が回復不能になる前に、ローマ軍に会いに行き、大隊に非常に礼儀正しく挨拶するようにと彼らに要請した。しかし、扇動的な側はこれらの説得に応じなかった。しかし、破壊された者たちのことを考えて、彼らは最も大胆な行動をとる者たちに傾倒した。

4. このとき、すべての祭司とすべての神のしもべは、神聖な儀式に使う聖なる器と装飾用の衣服を持ち出しました。また、竪琴を弾く者と賛美歌を歌う者も楽器を持って出てきて、群衆の前にひれ伏し、それらの聖なる装飾品を自分たちのものにして、ローマ人にそれらの聖なる宝物を奪わせないようにと懇願しました。また、大祭司たちも、頭に大量の塵をまき散らし、胸は裂けた部分以外は何も覆わず、高官たち全員の名前を挙げて懇願し、群衆も皆で、小さな罪で国を荒廃させようとする者たちに国を裏切らないように懇願しました。「ユダヤ人から挨拶を受けたところで兵士に何の利益があるというのか。今彼らを迎えに行かなければ、あなたたちの状況に何の修正がもたらされるというのか。もし彼らが礼儀正しく挨拶をすれば、フロラスとの交渉はすべて断たれ、戦争が始まる。それによって彼らは祖国を取り戻し、これ以上の苦しみから解放される。さらに、もし彼らが少数の反乱者に屈服するなら、それは自らの統制力のなさを示すことになる。一方、これほど大きな民族である彼らにとっては、他の者たちに冷静に行動するよう強制する方がふさわしいのだ。」

5. 群衆や反乱軍に対して彼らが用いたこれらの説得によって、彼らは脅迫によって一部の者を、また彼らに払われた敬意によって他の者を拘束した。その後、彼らは彼らを連れ出し、静かに、そして落ち着いた態

度で兵士たちと会い、兵士たちに近づくと、彼らに挨拶した。しかし彼らが返事をしなかったため、反乱軍はフロルスに対して叫び、それが彼らに襲いかかる合図となった。そこで兵士たちはすぐに彼らを取り囲み、棍棒で彼らを打ち、彼らが逃げ去るときに騎兵が彼らを踏み倒したので、ローマ軍の打撃によって、そして彼ら自身の互いを踏み潰す暴力によって、多くの者が倒れて死んだ。門の周りには恐ろしいほどの人だかりができ、皆が他の者より先に進もうと急いでいる間に、逃げるのを遅らせ、倒れた者たちはひどい被害を受けた。彼らは、上層部にいた大勢の者たちに窒息し、粉々にされた。また、葬式をするために、誰一人として身元を判別することもできなかった。彼らを殴り倒した兵士たちは、追いついた者たちに容赦なく襲いかかり、群衆をベゼタと呼ばれる場所から押しのけ、23 押しのけながら、神殿とアントニアの塔に侵入して占領しようとした。フロルスもまた、これらの場所を占領したいと望み、王宮から同行していた者たちを連れ出し、城塞 [アントニア] まで追い詰めようとしたが、その試みは失敗に終わった。民衆はすぐに彼に逆らって、彼の試みの暴力を止めたからである。そして彼らは家の屋上に立って、ローマ軍に向かって矢を投げた。ローマ軍は、その武器が上から飛んできたためひどく傷つき、狭い通路を塞いでいた群衆の中を通り抜けることができず、宮殿にあった陣地へと退却した。

6. しかし、反乱者たちは、フロルスが再びやって来て、アントニアを通して神殿を占領するのではないかと恐れた。そこで、彼らはすぐにアントニアにつながる神殿の回廊を襲撃し、それを切り倒した。これによりフロルスの貪欲さは静まった。なぜなら、彼は神殿にある神の宝物を手に入れたいと切望し、そのためにアントニアに入ることを望んでいたが、回廊が破壊されるとすぐにその試みをやめたからである。それから彼は高位の祭司とサンヘドリンを呼び寄せ、彼自身は確かに町から出るが、彼らが望むだけの大きな守備隊を残すと告げた。そこで彼らは、彼が彼らに一隊残してくれるなら、何も変更しないと約束した。ただし、ユダヤ人と戦った隊は残さないと。なぜなら、群衆はユダヤ人から受けた苦しみのために、その隊に悪意を抱いていたからである。そこで彼は彼らの望みどおりに部隊を変更し、残りの軍勢とともにカエサレアに戻った。

E.3.16　第 16 章

ケスティウスは護民官ネポリタヌスを派遣して、ユダヤ人の状況はこうだった。アグリッパはユダヤ人の民に説教して彼らの心をそらすローマ人と戦争をするつもりだったからです。

1. しかし、フロルスはユダヤ人に戦争を始めさせる別の方法を考案し、ケスティウスに使者を送り、ユダヤ人が反乱を起こしたと偽って告発し、以前の戦いの始まりをユダヤ人に帰し、彼らがその騒乱の張本人であり、その被害を受けただけだと偽った。しかし、エルサレムの知事たちはこの件で沈黙せず、自分たちもケスティウスに手紙を書き、ベルニケも同様に、フロルスが市に対して犯した違法行為について書いた。ベルニケは両方の報告を読んで、指揮官たちと相談した。彼らの中には、もし反乱が本当なら反乱を罰し、ユダヤ人がローマの支配下で平静を保っているなら、ローマの情勢をより確実な基盤の上に解決するために、ケスティウスが軍隊を率いて出征するのが最善だと考えた者もいた。しかし、彼は親しい友人の一人を事前に派遣して情勢を視察させ、ユダヤ人の意図を忠実に報告させるのが最善だと考えた。そこで、彼は護民官の一人であるネオポリタヌスを派遣し、アレクサンドリアから戻る途中のアグリッパ王をヤムニ

アで迎え、誰が彼を派遣したのか、またどのような用事で派遣されたのかを伝えた。

2. そして、ここには、高位の祭司やユダヤ人の権力者、そしてサンヘドリンが、王の無事な帰還を祝福するためにやって来た。彼らは王に敬意を表した後、自分たちの災難を嘆き、フロルスから受けた残酷な仕打ちを王に語った。その残酷さにアグリッパは大いに憤慨したが、巧妙なやり方で、本当に哀れに思うユダヤ人たちに向けて怒りを転嫁し、彼らの高慢な思いを打ち砕き、彼らがそれほど不当な仕打ちを受けていないと信じ込ませ、復讐を思いとどまらせようとした。こうして、他の者よりも理解力があり、所有物のおかげで平和を望んでいたこれらの偉人たちは、王が彼らに与えたこの叱責が彼らの利益のために意図されたものであることを理解した。しかし民衆に関しては、彼らはエルサレムから 60 スタリオンもやって来て、アグリッパとネオポリタヌスの両者を祝福した。しかし、殺された人々の妻たちが真っ先に駆けつけ、嘆き悲しんだ。民衆もまた、彼らの嘆きを聞いて嘆き悲しみ、アグリッパに助けを求めた。彼らはまた、ネオポリタヌスに叫び、フロルスのもとで彼らが耐えてきた多くの悲惨さについて不平を言った。そして、彼らが町に入ってくると、市場が荒廃し、家々が略奪されている様子を見せた。それから、彼らはアグリッパの手を借りてネオポリタヌスを説得し、一人の召使を連れてシロアムまで町を歩き回り、ユダヤ人は他のすべてのローマ人に服従しており、フロルスが彼らに対して極度に蛮行を働くことを不快に思っているだけだと知らせた。そこで彼は歩き回り、人々の上機嫌さを十分に体験した後、神殿に上って群衆を呼び集め、ローマ人に対する彼らの忠誠を高く評価し、平和を保つよう熱心に勧めた。そして神殿で許された神への礼拝を執り行い、ケスティウスのもとに戻った。

3. しかし、ユダヤ人の集団は、王と高僧に訴え、ネロにフロルスに対抗する使節を送る許可を願い出た。彼らが沈黙しているから、彼らがこのような大虐殺の原因となったという疑いを持たれないようにするためである。彼らは反乱を起こす気で、誰が戦争を始めたのかを明かしてその報告を阻止しなければ、自分たちが戦争の先駆者とみなされると主張した。そして、もし誰かがそのような使節を送るのを妨害すれば、彼らは黙っていないだろうと公然と思われた。しかしアグリッパは、彼らがフロルスの告発者として派遣する人を任命するのは危険すぎると考えたが、彼らが戦争の気質にあるので、彼らを見過ごすのは適切ではないと考えた。そこでイエスは、群衆を大きな回廊に集め、妹のベルニケをアサモネ人の家に住まわせ、彼らに見えるようにした。[その家は回廊の上にあり、橋が神殿と回廊を結んでいる上の町への通路にあった] そして、次のように語った。

4. 24 「もし私が、あなたたちが皆ローマ人と戦争をすることに熱心で、人々のより純粋で誠実な部分が平和に暮らすことを望まないことに気づいていたなら、私はあなたたちのところに出向いてはいなかったし、あなたたちに助言を与えるほど大胆でもなかったでしょう。なぜなら、聞く人々が反対のことをすることに同意しているなら、人々に彼らがすべきことをするように説得する傾向のあるすべての講話は不必要だからです。しかし、ある者は若く、戦争がもたらす悲惨さを知らないために戦争に熱心であり、ある者は自由を取り戻すという不合理な期待から戦争に賛成し、またある者は戦争を逃れることを望み、それゆえあなたたちの混乱に乗じて抵抗できない者たちの所有物を得ようと真剣に戦争に固執しているので、私はあなたたち全員を集め、あなたたちにとって有益だと思うことを話すのが適切だと考えたのです。そうすれば、前者はより賢くなり、考えを変え、最も優れた人々は戦争によって何の害も受けないのです。他人の悪行を非難しなさい。そして、もし私の言うことが気に入らないからといって、誰も私に対して騒ぎ立

てないでください。なぜなら、回復の余地を認めず、反乱を決意している人々は、私の勧告が終わった後も、同じ感情を持ち続ける力を持っているからです。しかし、あなた方全員が沈黙を守らない限り、私の話は、私の話を聞くつもりのある人々との関係においてさえ、地に落ちてしまうでしょう。あなた方の代理人によってあなた方にもたらされた損害や、自由の輝かしい利点について、多くの人が悲惨な叫びを上げていることはよく知っています。しかし、戦争に行かなければならないのはあなた方であり、あなた方が戦わなければならない相手は誰なのかという問いを始める前に、私はまず、ある意味で結びついているそれらの口実を切り離します。なぜなら、あなた方があなた方に損害を与えた人々への復讐を目的とするのであれば、なぜこれを自由を取り戻すための戦争であると偽るのでしょうか。しかし、もしあなたがすべての隷属を耐え難いものと考えるなら、あなたの特定の統治者に対して不満を訴えても何の役にも立ちません。彼らがあなたたちを穏健に扱ったとしても、隷属することはやはり同様に不当なことなのです。今、考えられるいくつかのケースを考えてみてください。あなたたちが戦争に行く理由がいかに少ないかがわかります。あなたたちが最初に行う理由は、総督たちに対して行う告発です。ここでは、権力者に従順であり、彼らを刺激してはいけません。しかし、小さな違反で人々を激しく非難すると、非難した相手を刺激して敵に回すことになります。なぜなら、これでは彼らが内密にあなたを傷つけるのをやめ、ある程度慎み深くなり、あなたが持っているものを公然と浪費するようになるからです。さて、忍耐強く耐えることほど打撃の威力を和らげるものはない。そして、傷ついた者が静かにしていれば、傷つける者は苦しめるのをやめる。しかし、ローマの大臣たちがあなたたちに対して有害で、治癒不可能なほど厳しいことは当然のこととしておこう。しかし、あなたたちをこのように傷つけたのはローマ人全員ではない。また、あなたたちが戦争をしようとしているカエサルもあなたたちを傷つけたわけではない。彼らの命令によって邪悪な総督があなたたちのところに送られたのではない。西にいる者は東にいる者を見ることができないし、実際、東にいる者にとって、この地方で何が行われているかを聞くことさえ容易ではないからだ。一人のために大勢と戦争をしたり、小さな理由のためにこのような強大な人々と戦争をしたりするのは馬鹿げている。しかも、これらの人々はあなたたちが何を訴えているのか知ることができないのに。いや、私たちが訴えているような犯罪はすぐに修正されるかもしれない。なぜなら、同じ総督が永遠に続くことはないからである。おそらく後継者たちはもっと穏健な傾向を持ってやってくるだろう。しかし戦争については、いったん始まったら、再び簡単にはやめられず、またそれに伴う災難なしには耐えられない。しかし自由を取り戻したいという願望については、今更それをふけるのは時期尚早である。昔、自由を失わないように真剣に努力すべきだったのに。奴隷状態の最初の経験は耐え難いものであり、奴隷状態にならないように努力するのは当然だっただろう。しかし、一度服従させられてから逃げ出した奴隷は、自由を愛する人というよりはむしろ反抗的な奴隷である。なぜならその時こそ、ポンペイウスが最初に国に来たときにローマ人を決して受け入れないように、できる限りのことをする適切な時期だったからである。しかし、我々の祖先や王たちは、我々よりもはるかに恵まれた状況にあり、資金、強靭な肉体、そして勇敢な魂のいずれにおいても、ローマ軍の小部隊の攻撃に耐えられなかった。しかし、一世代から次の世代へと服従することに慣れ、最初に服従した者たちよりはるかに劣るあなた方は、その状況でローマ帝国全体に対抗する勇気がある。一方、ギリシャの自由を守るためにかつては自らの都市に火を放ち、陸を航行し海を渡り、海では抑えきれない傲慢な王子クセルクセスを追跡し、ヨーロッパには広すぎるほどの軍隊を率いて、一隻の船で逃亡者のようにクセルクセスを逃がし、小サラミスでアジアの広大な部分を破壊したアテネ人は、現在でもローマ人の奴隷である。そしてイタリアから送られた命令はギリシャの主要な統

治都市の法律となる。テルモピュライとプラタイアで大勝利を収め、アゲシラオスを王に迎え、アジアの隅々まで捜索したラケデモニア人も、同じ領主を受け入れることに満足している。マケドニア人も、フィリップとアレクサンダーがいかに偉大な人物であったかを今でも思い描いており、後者が彼らに世界帝国を約束していたことを知っており、彼らは大きな変化に耐え、運命が彼らに代わって前進した人々に服従している。さらに、私たちよりも完全な自由を要求するより大きな理由がありながら、それでも服従している他の 1 万の国があります。全世界が服従している人々に奴隷となることを恥ずべきことだと考えるのはあなた方だけです。どのような軍隊を頼りにしているのですか？あなたがたが頼りにしている武器は何ですか？ローマの海を占領できる艦隊はどこにありますか？そして、あなたの事業に十分な財宝はどこにありますか？エジプト人やアラブ人と戦争をするつもりですか？ローマ帝国についてよく考えてみませんか？自分の弱さを評価しませんか？ローマ人の力は居住可能な地球のあらゆる場所で無敵であるのに、あなたの軍隊は近隣諸国にさえ何度も負けていませんか？いや、むしろ彼らはさらにその先を求めています。東側ではユーフラテス川全体も、北側ではドナウ川も彼らにとって十分な境界ではありません。南の限界としては、リビアから無人の国まで、西側ではカディスまで彼らは探索しました。いや、実際、彼らは海の向こうに居住可能な別の地球を求め、これまで知られていなかったブリテン諸島まで武器を運んできました。それであなたは何を主張しているのですか？あなたはガリア人よりも裕福で、ゲルマン人よりも強く、ギリシャ人よりも賢く、居住可能な地球上のすべての人々よりも数が多いのですか？ローマ人に対抗するほどの自信があなた方を駆り立てているのですか？奴隷状態に耐えるのはつらいことだ、と言われるかもしれません。その通りです。しかし、この世のあらゆる人々の中で最も高貴とみなされていたギリシャ人にとっては、どれほどつらいことでしょう。彼らは広大な国土に住んでいますが、ローマの杖の束 6 つに服従しています。マケドニア人の場合も同じで、あなた方よりも自由を主張する正当な理由があります。アジアの 500 の都市はどうですか？彼らは、1 人の総督と執政官の杖の束に服従していないのですか？ヘンロキ、コルキ、タウリの国、ボスポラス海峡に住む人々、ポントス周辺の国、メオティスについては、言うまでもありません。これらの国は、以前は領主さえも知りませんでしたが、今では 3,000 人の武装兵に服従し、以前は航行不可能だった海を 40 隻の長い船が平和に保っています。非常に激しい暴風雨が吹き荒れている。ビテュニア、カッパドキア、パンフィリア、リュキア、キリキアの人々は、どれほど力強く自由を訴えたであろうか。しかし、彼らは軍隊を持たずに貢納させられている。トラキア人の境遇はどうなっているのか。彼らの国は幅が 5 日間の旅程、長さが 7 日間の広さで、あなた方の国よりもはるかに厳しい性質を持ち、はるかに防御力が高く、その厳しい寒さのおかげで軍隊の攻撃を防いでいる。彼らはローマ軍の駐屯地の 2000 人に服従していないのか。ダルマチアとドナウ川までの隣接地域に住むイリュラ人は、わずか 2 個軍団で統治しているではないか。その軍団によって、彼らはダイア人の侵略を食い止めたのだ。そして、ダルマチア人は自由を取り戻すために何度も反乱を起こし、かつてはこれほど徹底的に鎮圧されたことはなかったが、いつも軍勢を集めて反乱を起こしたが、今ではローマ軍団の指揮下で非常に平穏である。さらに、どんな民族でも反乱を起こすには大きな利点があるが、ガリア人は東側はアルプス山脈、北はライン川、南はピレネー山脈、西は海に囲まれた自然に囲まれているため、最も反乱を起こせる。ガリア人は、いかなる攻撃も防ぐための障害物があり、305 もの民族を抱えているが、それどころか、いわば国内に幸福の源泉を持ち、ほとんど全世界に幸福の豊かな流れを流している。しかし、ガリア人はローマ人に貢物として甘んじ、ローマ人から繁栄を得ている。そして、彼らがこのような状況に陥るのは、彼らが女々しい心を持っているからでも、自由を守るために 80 年間も戦争に耐えてき

たような卑しい血筋だからでもなく、ローマの力と幸運を非常に重視しているからであり、その幸運は彼らの武器よりも効力がある。したがって、これらのガリア人は、1200 人の兵士に隷属させられているが、その数は彼らの都市の数とほとんど変わらない。スペインの鉱山から掘り出された金も、彼らの自由を守るための戦争を支えるには十分ではなかったし、ローマから陸と海で遠く離れていることも、それを可能にはしなかった。ルシタニア人とスペイン人の戦闘民族も逃れられなかった。古代の住民にとって恐ろしいものであった海の潮流も逃れられなかった。いや、ローマ人はヘラクレスの柱を越えて腕を伸ばし、雲の中を歩き、ピレネー山脈を越えてこれらの国々を征服した。そして、これらの人々は征服するのが非常に困難であったが、1 つの軍団で十分な守備力があった。ローマから遠く離れた所に。ゲルマン人の大群について聞いたことのない者があなた方の中にいるだろうか。確かにあなた方は彼らが力強く背が高いのを、そしてローマ軍が至る所で彼らを捕虜にしているのを、しばしば自分自身で見たことがある。しかし、広大な国に住み、肉体よりも大きな精神と死を憎む魂を持ち、野獣よりも激しい怒りを持つこれらのゲルマン人は、ライン川をその活動の境界とし、8 つのローマ軍団によって飼いならされている。捕虜となったゲルマン人は彼らの召使いとなり、残りの全国民は逃げて自力で逃れなければならなかった。エルサレムの城壁に頼っているあなた方も、ブリトン人がどんな城壁を持っていたか考えたことがあるだろうか。なぜなら、ローマ軍はブリトン人のもとへ航海し、海に囲まれている彼らを征服し、この居住可能な地球の大陸よりも小さいわけではない島に居住したからである。そして、これほど大きな島を守るには、4 個軍団で十分です。そして、最も好戦的な集団であり、多くの国の領主であり、強力な軍勢に囲まれたパルティア人が、ローマに人質を送っているというのに、なぜ私がこの件についてこれ以上語らなければならないのでしょうか。お望みなら、イタリアでさえ、東洋で最も高貴な国が、平和という観念の下で、ローマに服従しているのを見ることができます。今や、太陽の下にいるほとんどすべての人々がローマ軍に服従しているとき、あなた方だけが彼らと戦うのでしょうか。そして、これは、偉大なハンニバルとフェニキア出身の貴族を自慢していたカルタゴ人の運命と、スキピオの手に倒れたカルタゴ人の運命を考慮に入れずにです。実際、ラケデモニア人から派生したキュレネ人や、水不足で居住不可能な地域にまで広がった民族マルマリット人、ほとんど聞いたことのないような恐ろしい場所であるシルテス、ナサモン人、ムーア人、そして膨大な数のヌミディア人でさえ、ローマの勇敢さを止めることはできなかった。そして、居住可能な地球の 3 分の 1 である [アフリカ] は、その国々があまりに多くて数え切れないほどあり、大西洋とヘラクレスの柱に囲まれ、紅海に至るまで無数のエチオピア人を養っているが、ローマ人はこれを完全に征服した。そして、ローマ人の大衆を 1 年のうち 8 か月間養う大地の毎年の果実のほかに、これはあらゆる種類の貢物を支払い、政府の必要に応じた収入をもたらす。彼らはあなた方のように、そのような命令を自分たちにとっての恥辱とは考えていません。彼らの中にはローマ軍団が一つしかいませんが。実際、遠く離れた国々に対するローマ人の力をあなた方に見せる機会などあるでしょうか。エジプトから学ぶのがそんなに簡単なのに、どうしてそんなことをするのか？この国はエチオピアや幸福なアラビアまで広がり、インドと国境を接している。人頭税の収入からわかるように、アレクサンドリアの住民のほかに 750 万人の人口を抱えている。アレクサンドリアは反乱の大きな誘惑であるにもかかわらず、ローマ政府に服従することを恥じていない。なぜなら、この国は人口と富に満ちており、その上、長さは 30 ファーロング、幅は 10 ファーロングにも達するほど大きいからである。そして、1 か月でローマに納める貢物は、あなた方が 1 年間に納める貢物よりも多い。それどころか、金銭で納める以外に、1 年で 4 か月分の穀物をローマに送っている。また、ほぼ通行不能な砂漠、港のない海、川、湖など、四方を城壁で囲まれてい

る。しかし、これらのことはローマにとってあまりに強すぎたわけではない。しかし、その都市に駐留する２個軍団は、エジプトの遠隔地と、より高貴なマケドニア人が住む地域の両方にとって手綱となる。では、あなたがたの援軍として雇う人々はどこにいるのか？彼らは、人が住んでいない世界の地域から来なければならないのか？居住可能な地球上のすべてのものはローマ人の支配下にある。あなたがたのうちの誰かが、ユーフラテス川の向こうまで希望を広げ、アディアベネに住む同胞が援助に来ると期待しない限りは。しかし、彼らは不当な戦争で自らを困らせることはないだろうし、もし彼らがそのような悪い助言に従ったとしても、パルティア人は彼らがそうすることを許さないだろう。なぜなら、彼らとローマ人との間の休戦を維持することは彼らの関心事であり、彼らの政府の下でローマ人に対して進軍する者がいれば、彼らは両者間の協定を破ることになるからである。したがって、残っているのは、神の助けに頼るということである。しかし、これはすでにローマ人の側にある。なぜなら、これほど広大な帝国を神の摂理なしに治めることは不可能だからである。よく考えてみよ、征服できる相手と戦っているときでさえ守るのが難しい宗教的慣習をここで守ることは、どれほど不可能なことか。そして、神の律法を破ることを強いられることで、神に顔を背けさせてしまうのに、どうして神の助けを期待できるだろうか。そして、安息日の慣習を守り、その日に何もしないようになれば、包囲された者が休んでいる日に包囲戦で最も忙しかったポンペイウスに先祖がそうであったように、簡単に捕らえられるだろう。しかし、戦時に国の法律を破れば、あなた方が誰のために後に戦争に行くのか私には分かりません。あなた方の関心事はただ一つ、祖先の誰に対しても何もしないことです。そして、神の宗教に自ら背いているのに、どうして神に助けを求めるのでしょうか。戦争に行く人は皆、神か人間の助けを頼りにしています。しかし、あなた方が戦争に行くと、その助けが両方とも断たれるので、戦争に行く人は明らかに破滅を選びます。自分の手で子供や妻を殺し、この最も素晴らしい故郷の街を焼き払うのを何が妨げるのでしょうか。この狂気のいたずらによって、あなた方は殴られるという非難を免れるでしょう。しかし、友よ、船がまだ港にいる間に、迫り来る嵐を予見し、港からハリケーンの真ん中に出航しないのが最善です。予見せずに大きな不幸に陥る人々を私たちは当然哀れに思うからです。しかし、明白な破滅に突き進む者は、非難を受ける（同情の代わりに）。しかし、確かに誰も、あなたがたが合意に基づいて戦争に参加できるとは考えられないし、ローマ人があなたがたを支配下に置いてから、あなたがたを節度を持って扱うだろう、あるいはむしろ、他の国々への見せしめとして、あなたがたの聖なる都市を焼き払い、あなたがたの国全体を完全に滅ぼさないだろうとも考えられない。なぜなら、戦争を生き延びたあなたがたは、どこにも逃げ場を見つけられないだろうからである。なぜなら、すべての人々はすでにローマ人を主人としているか、今後主人とするのではないかと恐れているからである。いや、実際、危険はここに住んでいるユダヤ人だけでなく、他の都市に住んでいるユダヤ人にも関係している。なぜなら、あなたがたが戦争に突入した場合、またその理由でも、あなたがたの敵はあなたがたの一部をその中に入れない民族は、居住可能な地球上には存在しないからである。そして、ユダヤ人がいるすべての都市は、少数の男たちのために虐殺で満たされ、彼らを殺害した者たちは赦されるでしょう。しかし、もしその虐殺が彼らによって行われなかったら、あなた方にとても親切な人々に対して武器を取ることがいかに邪悪なことか考えてください。ですから、あなた方の子供や妻ではなくとも、このあなた方の首都とその神聖な城壁に同情してください。神殿を惜しまず、聖なる家とその神聖な家具をあなた方自身のために保存してください。なぜなら、もしローマ人があなた方を支配下に置いても、彼らはもはや彼らから遠ざかることはないでしょう。以前の禁欲が、あれほど恩知らずに報いられたからです。私はあなた方の聖域、神の聖なる天使たち、そして私たち全員に共通のこの国

に証言を求めます。私はあなた方の保存のために何も隠していません。そして、あなた方が行うべき助言に従うなら、あなた方と私に共通の平和が得られるでしょう。しかし、もしあなたが 4 つの情熱にふけるなら、あなたは私が免れるであろう危険に遭遇するでしょう。」

5. アグリッパがこのように話すと、彼と妹は涙を流し、涙で民衆の暴力をかなり抑えた。しかし、民衆は、ローマ人と戦うのではなく、フロルスと戦うと叫んだ。フロルスによって彼らが受けた苦しみのせいで。それに対してアグリッパは、彼らがすでに行ったことはローマ人と戦うのと同じだと答えた。「あなた方は、カエサルに支払うべき貢物を支払わず、アントニアの塔につながる回廊（神殿）を切り離した。したがって、あなた方がこれらを再び結合し、貢物を支払えば、反乱の機会は防げるだろう。なぜなら、要塞はもはやフロルスの所有物ではなく、あなた方はフロルスに貢物を支払う必要はないからだ。」

E.3.17　第 17 章

ユダヤ人とローマ人の戦争の始まりとマナヘムについて。

1. 人々はこの助言に従い、王とベルニケとともに神殿に上って回廊を再建し始めた。また、統治者と元老院議員は村々に分かれて貢物を集め、すぐに不足額の 40 タラントを集めた。こうしてアグリッパは脅かされていた戦争を終わらせた。さらに、彼はカエサルが後継者を送るまで、フロルスに従うよう民衆を説得しようとしたが、民衆はこれによってさらに激怒し、王を非難して町から追い出した。それどころか、反乱者の中には厚かましくも王に石を投げつける者もいた。そこで、王は改革派の人々の暴力が抑えられないのを見て、自分が受けた侮辱に非常に腹を立て、彼らの支配者たちを権力者とともにフロルス、カエサレアに派遣し、自分が自分の王国に退いている間に、国内で貢物を徴収するのにふさわしいと思われる人物を任命させた。

2. そしてこのとき、人々を戦争に駆り立てた主な人物たちが、マサダと呼ばれる要塞を襲撃した。彼らは裏切りによって要塞を奪い、そこにいたローマ人を殺し、自分たちの仲間に要塞の守備をさせた。同時に、当時神殿の長官を務めていた、大祭司アナニアの息子で非常に勇敢な若者であったエレアザルは、神聖な儀式に仕える者たちに、外国人に対してはいかなる贈り物も犠牲も受け取らないように説得した。そしてこれが、ローマ人との戦争の本当の始まりであった。なぜなら、彼らはこの理由でカエサルの犠牲を拒否したからである。そして、大祭司や指導者の多くが、彼らの君主のために捧げるのが慣例であった犠牲を省略しないよう彼らに懇願したが、彼らは説得されなかった。彼らは大勢の人々に大いに頼っていた。なぜなら、革新者たちの最も有力な部分が彼らを助けたからである。しかし、彼らは神殿の長官エレアザルを最も尊敬していました。

3. そこで権力者たちが集まり、大祭司たちと協議した。パリサイ人の長たちもそうだった。そして、すべてが危機に瀕しており、彼らの災難は回復不能になりつつあると考え、何をすべきか協議した。そこで彼らは、言葉で反乱者たちをどうにかしようと決心し、日の出に面した内宮 [祭司たちの庭] の門である青銅の門の前に民衆を集めた。そして、まず第一に、彼らはこの反乱の試みと、彼らが祖国にこれほど大きな戦争をもたらしたことに激しい憤りを示した。その後、彼らは彼らの偽りを不当であると論破し、彼らの先

祖は外国人から与えられた寄付金で神殿を飾っており、外国から贈られたものは常に受け取っていたと語った。そして、彼らは誰かの犠牲を拒否するどころか（これは不信心の最大の例である）、神殿の周りにまだ見える状態で長い間そこに残っていた寄付品を自ら置いていた。彼らは今やローマ人をいらだたせて武器を取って彼らに対して攻撃を仕掛けさせ、彼らに戦争を挑むよう誘い、奇妙な神への崇拝の新たな規則を持ち出し、彼らの都市が不信心で非難される危険を冒すことを決意した。一方で彼らはユダヤ人以外の外国人には犠牲を捧げることも崇拝することも認めなかった。そして、もしそのような法律がたった一人の個人に対して導入されたら、その人は自分に対して決定された非人道的な例として憤慨するだろう。彼らはローマ人や皇帝を顧みず、彼らの供物さえも受け取ることを禁じている。しかし、彼らの犠牲を拒否することで、自分たちの犠牲を捧げることが許されなくなるのではないかと恐れずにはいられない。そして、彼らが早く賢くなって、以前のように犠牲を捧げ、被害を受けた人々の耳にその報告が届く前に [外国人に捧げた] 損害を正さなければ、この都市は君主権を失うだろう。

4. 彼らがこれらのことを話している間、彼らは自分たちの国の慣習に精通した祭司たちを連れてきて、彼らの先祖は皆、外国から犠牲を受け取っていたと報告した。しかし、それでも改革者たちは誰一人としてその言葉に耳を傾けようとしなかった。いや、神殿の周りで奉仕する者たちは礼拝に出席しようとせず、戦争を始める準備をしていた。そこで権力者たちは、反乱を鎮圧するのは自分たちには難しすぎること、そしてローマ人から生じる危険がまず自分たちに降りかかることを悟り、自分たち自身を救おうと努め、使節を派遣した。そのうちの何人かはフロルスに派遣され、その長はアナニアの子シモンであった。他の者はアグリッパに派遣され、その中で最も著名なのは王の親族であるサウロ、アンティパス、コストバルスであった。そして彼らは、二人に軍隊を率いて町に赴き、鎮圧が困難になる前に反乱分子を殲滅するよう要請した。この恐ろしい知らせはフロルスにとっては朗報であった。彼は戦争を起こすつもりだったので、使節たちには何の返事もしなかった。しかしアグリッパは反乱を起こしている者たちと戦争の相手となる者たちを同じように気遣い、ローマ人のためにユダヤ人を、ユダヤ人のために神殿と首都を守りたいと望んでいた。また、騒乱が続くことは自分の利益にならないことも分かっていた。そこで彼は、アウラニティス、バタニア、トラコニティスから民衆の救援に三千人の騎兵を派遣した。彼らは騎兵長ダレイオスと軍の将軍ヤキムスの子フィリップの指揮下にあった。

5. これを受けて、権力者たち、大祭司たち、そして平和を望む民衆の全員が勇気を奮い起こし、上市（シオン山）を占領した。なぜなら、反乱軍は下市と神殿を支配していたからである。そこで彼らは絶えず石や投石器を互いに使い、双方に絶えず矢を投げつけた。時には軍隊を派遣して白兵戦をすることもあったが、反乱軍は大胆さでは勝っていたが、王の兵士たちは技術では勝っていた。後者は主に神殿を奪取し、神殿を汚す者たちを追い出すことに努めた。反乱軍はエレアザルと共に、すでに手にしていたものに加えて、上市を奪取しようと努めた。こうして、7 日間、双方で絶え間ない殺戮が続いたが、どちらの側も奪取した部分を明け渡そうとはしなかった。

6. さて、翌日はシロフォリオ祭であった。祭には、祭壇用の薪を各自が持参するのが慣例であった [消えることなく常に燃えている火に燃料が不足することがないようにするため]。その日、彼らは反対派をこの宗教の遵守から排除した。そして、弱い民衆の中に群がっていたシカリ派 [シカリ派とは、シカと呼ばれる剣を胸に抱えた盗賊たちの呼称である] の多くを仲間に加えると、彼らはより大胆になり、計画をさら

に進めた。そのため、王の兵士たちはその数と大胆さに圧倒され、彼らは屈服し、力ずくで上市から追い出された。その後、他の者たちは大祭司アナニアの家と、アグリッパとベルニケの宮殿に火を放った。その後、彼らは火を文書保管所に運び、債権者の契約書を急いで焼き払い、債務の支払い義務を解消した。これは、債務者であった大勢の人々を味方につけ、貧しい人々を説得して、裕福な人々に対する反乱に加わらせようとしたためであった。そこで、記録保管者は逃げ去り、残りの人々は記録に火をつけた。こうして彼らは都市の神経を焼き尽くした後、敵を襲撃した。そのとき、権力者や大祭司の何人かは地下の納骨堂に逃げ込み、身を隠した。他の者は王の兵士とともに上宮に逃げ込み、すぐに門を閉めた。その中には、大祭司アナニアやアグリッパに派遣された使節もいた。そして今、反乱軍は彼らが得た勝利と彼らが焼き払った建物に満足し、それ以上進まなかった。

7. しかし翌日、すなわちロウの月（アブ）の 15 日、彼らはアントニアを襲撃し、そこに駐留していた守備隊を 2 日間包囲し、その後守備隊を捕らえて殺し、城塞に火を放った。その後、彼らは王の兵士たちが逃げている宮殿に進軍し、4 つの部隊に分かれて城壁を攻撃した。城内にいた者たちは、襲撃者が非常に多かったため、誰も出撃する勇気がなかった。しかし彼らは胸壁や小塔に分散して、包囲者を撃ち、そのおかげで多くの盗賊が城壁の下敷きになった。彼らは昼夜を問わず互いに戦い続けた。反乱軍は、中にいる者たちが食糧不足で疲れ果てるだろうと考え、外にいる者たちは、包囲が長引くことで他の者たちも同じように疲れ果てるだろうと考えた。

8. その間に、ユダの子でガリラヤ人と呼ばれていたマナヘムという男が [非常に狡猾な詭弁家で、かつてキレニウスのもとでユダヤ人が神に背いてローマ人に従っていると非難していた]、何人かの名士を連れてマサダに退き、そこでヘロデ王の武器庫をこじ開け、自分の民だけでなく他の盗賊にも武器を与えた。彼はこれらを護衛として利用し、王の身分でエルサレムに帰還した。彼は反乱軍のリーダーとなり、包囲を続けるよう命令を出した。しかし彼らには適当な道具がなく、上から矢が降り注いでいたので壁を崩すのは不可能だった。しかし、彼らは塔の一つの下に遠くから地雷を掘り、塔をぐらつかせた。そしてそれをやり遂げた後、燃えやすいものに火をつけてそのままにしておいた。そして、その下の土台が焼け落ちると、塔は突然崩れ落ちた。しかし、そのとき彼らは内部に築かれた別の壁と遭遇した。なぜなら、包囲された者たちは彼らが何をしているかを事前に察知しており、おそらく塔は基礎を崩すときに揺れたからである。そこで彼らは別の防備を用意した。包囲者たちは、すでにその場所を占領したと思っていたが、予期せずそれを見て、かなり動揺した。しかし、内部にいた者たちはマナヘムと他の反乱の指導者たちに使いを送り、降伏して出て行けと頼んだ。これは王の兵士と彼ら自身の同胞だけに許され、彼らはそれに従って出て行った。しかし、残されたローマ軍は大いに落胆した。なぜなら、彼らはそのような大群をかき分けて進むことができなかったからである。そして、安全のために彼らに右手を与えるように頼むことは、彼らにとっての恥辱になるだろうと考えた。それに、もし彼らが右手を与えたとしても、彼らはそれを頼りにしようとはしなかった。そこで彼らは、簡単に捕らえられる陣営を放棄し、ヒッピコス、ファサイロス、マリアムネと呼ばれる王家の塔へと逃げた。しかし、マナヘムとその一行は兵士たちが逃げた場所を襲撃し、彼らが塔に登る前に捕まえられる限りの兵士を殺し、彼らが残したものを略奪し、陣営に火を放った。これはゴルピオス（エルル）の月 6 日に実行された。

9. しかし翌日、大祭司は水道に隠れていたところを捕らえられ、兄弟のヒゼキヤとともに盗賊に殺された。

そこで反乱軍は塔を包囲し、兵士が一人も逃げないように警備を続けた。要塞が陥落し、大祭司アナニアが死んだことでマナヘムは傲慢になり、野蛮で残忍になった。彼は政務をめぐって争う相手がいないと考え、我慢できない暴君に過ぎなかった。しかしエレアザルとその一行は、自由を求めてローマから反乱を起こしたのに、その自由を同胞に裏切るのはよくない、たとえ暴力を振るったことはなくても自分たちより卑しい領主を擁立するのはよくない、と口論になった。また、もし公務を統括する者を任命しなければならない場合、その特権を彼ではなく他の誰かに与える方が適切だとも考えた。彼らは神殿で彼を襲撃した。彼はそこに堂々と礼拝し、王の衣装を身にまとい、武具を身につけた従者たちを連れていたからである。しかしエレアザルとその一行は、他の民衆と同様、激しく彼を襲った。彼らは石を手に取って彼を攻撃し、詭弁家に投げつけた。そして、彼が一度破滅すれば、反乱全体が地に倒れるだろうと考えた。さて、マナヘムとその一行はしばらく抵抗したが、群衆全体が彼らに襲いかかっているのに気付くと、彼らはそれぞれ逃げられる道に逃げた。捕まった者は殺され、身を隠した者は捜された。彼らのうち数人はひそかにマサダに逃げたが、その中にはマナヘムの親族で、後にマサダで暴君の役を演じたヤイロの息子エレアザルもいた。マナヘム自身はオフラと呼ばれる場所に逃げ、そこでひそかに潜んでいたが、彼らは彼を生け捕りにして皆の前に引きずり出し、さまざまな拷問を加えて拷問し、最後には彼を殺した。彼の配下の指揮官たちもそうしたが、特に彼の暴政の主役であるアプサロムがそうしたのである。

10. そして、私が言ったように、民衆は確かに彼らを助け、これによって反乱行為がいくらか修正されることを期待していた。しかし、他の人々は戦争を終わらせようとは急がず、マナヘムを殺した今、より危険の少ない戦争を遂行することを望んでいた。民衆が兵士の包囲をやめるよう熱心に願ったとき、彼らはさらに熱心に戦争を推し進め、ローマの将軍メティリウスがエレアザルに使者を送り、命だけは助けるという保証を与えてほしいと頼んだが、武器とその他の持ち物を引き渡すことに同意した。他の人々は喜んで彼らの嘆願に応じ、ニコデモの子ゴリオン、サドゥクの子アナニア、ヨナタンの子ユダを彼らに送り、右手と誓いの保証を与えさせた。その後、メティリウスは兵士たちを降ろした。兵士たちは武器を所持していた間は、反乱分子に干渉されることもなく、裏切りの兆候もなかった。しかし、降伏条項に従って、全員が盾と剣を置き、これ以上の危害の疑いもなく立ち去ろうとすると、エレアザルの部下が暴力的に攻撃し、彼らを取り囲んで殺害した。彼らは防御もせず、慈悲を請うこともなく、降伏条項と誓約の違反を叫ぶだけだった。このようにして、メティリウスを除くすべての兵士が残忍に殺害された。メティリウスが慈悲を請い、ユダヤ教徒になって割礼を受けると約束したとき、彼らは彼を生かしておいたが、他の者は助けなかった。ローマ軍にとってこの損失は軽微で、大軍のうち数人が殺されただけだった。しかし、それはユダヤ人自身の破滅の前兆であるように思われ、人々は、戦争の回復不可能な機会が与えられたこと、ローマ人からの復讐は免れたとしても、何らかの復讐を期待するのが当然であるような忌まわしいもので街全体が汚染されたことを見て、公に嘆き悲しんだ。そのため、街は悲しみで満たされ、街の穏健派の人々は皆、扇動者の邪悪さのために罰を受けるのではないかと大いに動揺した。実際、この殺人は安息日に行われたのであり、その日はユダヤ人は神への崇拝のために仕事から休息を取っていた。

E.3.18 第 18 章

ユダヤ人に降りかかった災難と虐殺。

1. さて、カエサレアの人々は、兵士たちが殺されたまさにその日、その時刻に、彼らの中にいたユダヤ人を殺した。これは神の導きによるに違いないと思われる。一時間の間に二万人以上のユダヤ人が殺され、カエサレア全土からユダヤ人住民が一掃された。というのは、フロルスは逃げた者を捕らえ、縛り上げてガレー船に送ったからである。カエサレアでユダヤ人が受けたこの打撃に、全国民は大いに激怒した。そこで彼らはいくつかのグループに分かれ、シリア人の村々、およびその近隣の都市、フィラデルフィア、セボニティス、ゲラサ、ペラ、スキトポリス、さらにガダラ、ヒッポスを破壊した。そしてガウロニティスを襲撃し、いくつかの都市を破壊し、いくつかの都市に火を放ち、それからティルス人のケダサ、プトレマイス、ガバ、カエサレアに向かった。セバステ（サマリア）もアスケロンも、攻撃された暴力に抵抗することができなかった。彼らはこれらを焼き払った後、アンテドンとガザを完全に破壊した。また、これらの都市の周りの村々の多くも略奪され、捕らえられた人々は大量に殺された。

2. しかし、シリア人は殺した者の数においてユダヤ人と互角であった。彼らは町で捕らえた者を殺したが、それは以前のようにユダヤ人を憎んでいるからだけではなく、ユダヤ人から身を守るためであった。そのためシリア全土の混乱はひどく、すべての町は二つの軍隊に分かれて互いに陣取り、一方の勢力が生き残るためにはもう一方の勢力を滅ぼさなければならなかった。昼は流血に明け暮れ、夜は恐怖に暮れたが、その二つのうち、後者の方がより恐ろしかった。シリア人はユダヤ人を滅ぼしたと思ったとき、ユダヤ主義者たちをも疑っていたからである。そして、どちらの側も、相手側に疑念を抱く者を殺すことには関心がなかったため、相手側と混ざると、あたかも彼らが外国人であるかのように非常に恐れたのである。さらに、利得への貪欲さは、昔は彼らに対して非常に温和で温厚に見えた相手に対してさえも、相手を殺すための挑発となった。彼らは恐れることなく、殺された者の財産を略奪し、殺した者の戦利品を、あたかもそれが決戦で得たものであるかのように、自分の家に持ち帰った。そして、最も多くの敵に勝利した者として、最も多くの分け前を得た者は名誉ある人物とみなされた。当時、都市が埋葬されずに横たわっている死体でいっぱいで、老人の死体が幼児と混じって、皆死んで散らばっているのを見るのは普通のことだった。女性もまた、裸を隠すものもなく、その中に横たわっていた。当時、州全体が言い表せないほどの災難に満ち、脅かされていたさらに野蛮な習慣に対する恐怖は、すでに犯されていたものよりもどこでも大きかった。

3. これまでのところ、紛争はユダヤ人と外国人の間で起こっていたが、彼らがスキトポリスに遠征したとき、敵として行動するユダヤ人を見つけた。彼らはスキトポリスの人々と戦闘態勢をとり、我々との関係よりも自分たちの安全を優先し、同胞と戦った。いや、彼らの機敏さは非常に大きく、スキトポリスの人々は彼らを疑った。そのため、彼らは夜間に市を襲撃し、不幸なことに、それによって同胞に反抗したことを謝罪することになるのではないかと恐れた。そこで彼らは、もし彼らが同意を確認し、異民族である彼らへの忠誠を示したいのであれば、家族とともに市から出て近くの森に行くように命じた。彼らが何も疑うことなく命令どおりに行動すると、スキトポリスの人々は、安全を確かめるために二日間じっとしていた。しかし三日目の夜、彼らは機会を伺い、無防備な者や眠っている者など、全員の喉を切り裂いた。殺された者の数は一万三千人を超え、彼らは彼らの持ち物をすべて略奪した。

4. シモンに何が起こったかは、我々が語る価値があるだろう。彼はサウロというユダヤ人の間で評判のよい男の息子であった。この男は、その肉体の強さと大胆な行動で他の者とは一線を画していたが、その両方

を悪用して同胞に危害を加えた。毎日やって来ては、スキトポリスのユダヤ人を大勢殺し、しばしば敗走させ、彼一人で軍の勝利の原因となった。しかし、同じ民族の者たちを殺害したことで、当然の罰が彼に下った。スキトポリスの人々が森の中で彼らに矢を投げたとき、彼は剣を抜いたが、敵の誰にも攻撃しなかった。そのような大群に対しては何もできないと分かったからである。しかし、彼は非常に感動的な方法で叫び、こう言った。「おお、スキトポリスの民よ、私は、あなたたちに対する忠誠の保証として、私の親族を多数殺害したのに、あなたたちに対して行ったことの罰を受けるのは当然だ。したがって、私たちは、自国に対して最も邪悪なやり方で行動した外国人の不誠実さを、非常に当然経験している。したがって、私は、汚れた惨めな人間として、自分の手で死ぬことにする。敵の手で死ぬのはふさわしくないからだ。そして、その行為が、私にとって、私の大罪に対する罰であり、私の勇気の証であり、私の称賛である。そうすれば、敵の誰も、私を殺したのは自分だと自慢することができず、私が倒れるときに誰も私を侮辱することはないだろう。」こう言うと、彼は哀れみと怒りの目で家族を見回した（その家族は妻と子供、そして年老いた両親で構成されていた）。まず、彼は父親の白髪をつかみ、剣で突き刺した。次に母親にも同じことをしたが、母親は喜んで剣を受け取った。その後、妻と子供たちにも同じことをしたが、誰もが敵に殺されるのを避けたいと願って、ほとんど剣に身を委ねた。家族全員を見回すと、全員に見えるように彼らの体の上に立ち、右手を伸ばして、自分の行動が全員に見えるようにし、剣を自分の腹に鞘に収めた。この若者は、その体の強さと魂の勇気ゆえに哀れむべき存在だったが、外国人に忠誠を誓ったため（同胞に対して）、当然の報いを受けた。

5. スキトポリスでのこの殺害のほかに、他の都市も彼らの中にいるユダヤ人に対して反乱を起こした。アスケロンの都市は二千五百人を殺し、プトレマイスの都市は二千人を殺し、少なからぬ者を監禁した。ティルスの都市も多数の者を殺したが、さらに多くの者を監獄に留めた。さらに、ヒッポスの都市とガダラの都市も、ユダヤ人のうち最も勇敢な者を殺したが、恐れる者を監禁したままにした。シリアの他の都市も同様に、各自がユダヤ人を憎むか恐れるかしたが、アンティオキア人、シドン人、アパミアン人だけが、彼らと共に住む者を許し、ユダヤ人を一人たりとも殺すことも監禁することもしなかった。おそらく、彼ら自身の数が多すぎて、ユダヤ人の企てを軽蔑したため、彼らを許したのであろう。しかし、この恩恵の最大の部分は、彼らが革新をしない人々に対して同情したことによるものだと思います。ゲラサ人に関して言えば、彼らは彼らと一緒に住んでいる人々に害を与えませんでした。そして、立ち去ろうとする人々に対しては、彼らの国境が届くところまで彼らを案内しました。

6. アグリッパの王国でもユダヤ人に対する陰謀が企てられていた。アグリッパ自身はアンティオキアのケスティウス・ガルスのもとへ出かけていたが、公務を任せるために仲間の一人、ノアルスを残していた。ノアルスはソヘムス王の親族であった。26 さて、バタニアから七十人の男たちがやって来た。彼らはその家族と他の民衆の中では最も賢明な人々であり、軍隊を自分たちの手に委ねたいと望んでいた。彼らは、もし騒乱が起こった場合に反乱を起こす者を抑えるのに十分な警備員を周囲に揃えることができるようにするためであった。このノアルスは夜中に王の武装した兵士たちを派遣し、その七十人全員を殺害した。彼はアグリッパの同意を得ずにこの大胆な行動に踏み切った。彼は金銭を愛するあまり、王国を破滅に導いたにもかかわらず、自分の同胞に対しては邪悪な行為を選んだのである。そして彼はその国民をこのように残酷に扱い、それは法律にも反することであったが、アグリッパにそのことが伝えられた。アグリッパはソヘムスを慮って彼を死刑にすることは敢えてしなかった。しかし、彼は彼の総督職を直ちに終わらせ

た。しかし、反乱者たちはエリコの上にあるキプロスと呼ばれる城塞を占領し、守備兵の首を切り、要塞を完全に破壊した。これは、マカエロスにいたユダヤ人の大群が、守備兵のローマ軍にその場所を立ち去らせ、彼らに引き渡すよう説得したのとほぼ同じ頃であった。このローマ軍は、その場所が武力で占領されるのではないかと非常に恐れ、ある条件で彼らと立ち去る協定を結んだ。そして、彼らが望んでいた安全を確保すると、マカエロスの人々が自分たちの安全のために守備兵を置いていた城塞を引き渡し、自分たちの力でそれを保持した。

7. しかし、アレクサンドリアでは、ユダヤ人に対するこの地の人々の反乱は絶え間なく続いていた。それは、アレクサンダー大王が、ユダヤ人がエジプト人に対して彼を援助する用意があることを知り、その援助に対する報酬として、この都市で彼らにギリシャ人自身と同等の特権を与えたまさにその時からであった。この名誉ある報酬は、彼の後継者たちのもとでも彼らに継続され、彼らはまた、彼らが異邦人によって汚されることなく生活できるように、特別な場所を彼らのために確保し、それによって以前のように外国人とあまり混ざり合わなくなった。彼らはまた、彼らにマケドニア人と呼ばれるというさらなる特権を与えた。いや、ローマ人がエジプトを占領したとき、最初の皇帝も、その後の誰も、アレクサンダーがユダヤ人に与えた名誉を減らすことを考えなかった。しかし、それでもギリシャ人との衝突は絶えず起こり、総督たちは毎日彼らの多くを罰したが、反乱は悪化した。しかし、このとき特に、他の場所でも騒動があったため、彼らの間の混乱はより激しくなった。というのは、かつてアレクサンドリア人がネロに送る使節団について協議するために公開集会を開いたとき、多数のユダヤ人が劇場に押し寄せた。しかし、敵対者たちは彼らを見ると、すぐに叫び声をあげ、彼らを敵と呼び、スパイとして来たと言った。そこで彼らは飛び出して、彼らに暴力をふるった。残りの者たちは逃げる途中で殺されたが、3 人の男は捕らえられ、生きたまま焼き殺すために引きずり回された。しかし、ユダヤ人全員が一斉に彼らを守ろうとした。彼らは最初、ギリシャ人たちに石を投げつけたが、その後、ランプを手に取り、激しく劇場に押し寄せ、人々を一人残らず焼き殺すと脅した。そして、都市の知事ティベリウス・アレクサンダーが彼らの激情を抑えなければ、彼らはすぐにそうしていた。しかし、この男は彼らに武力で知恵を教え始めることはせず、彼らの中に何人かの主要人物を密かに派遣し、それによって彼らに静かにして、ローマ軍を挑発しないように懇願した。しかし、扇動者たちはティベリウスの懇願を嘲笑し、そうしたことを非難した。

8. さて、改革派の者たちは、何か大きな災難に見舞われるまでは鎮まらないだろうと悟ると、彼は、市内にいたローマ軍団 2 個と、偶然リビアから集まっていた 5,000 人の兵士たちを、ユダヤ人を滅ぼすために彼らに向けて派遣した。彼らはまた、ユダヤ人を殺すだけでなく、彼らの所有物を略奪し、彼らの家に火をつけることも許された。これらの兵士たちは、ユダヤ人が一緒に住んでいたデルタと呼ばれる市内の地域に激しく突入し、命じられたとおりに行動したが、彼ら自身も流血を経験した。ユダヤ人たちは集まって、最も武装した者たちを最前線に置き、長い間抵抗したが、いったん撤退すると、容赦なく滅ぼされた。そして、彼らの全滅は完全で、あるものは野原で捕らえられ、他のものは家に押し込められ、それらの家はまず家の中にあったものを略奪され、次にローマ人によって火をつけられ、幼児には慈悲が示されず、老人には配慮がなかった。彼らはあらゆる年齢の人々を殺戮し続け、その場所全体が血で溢れ、5 万人が死体の山の上に横たわった。残りの人々も、彼らが嘆願しなければ救われなかったであろう。そこでアレクサンダーは彼らの状況を哀れみ、ローマ人に撤退命令を出した。彼らは命令に従うことに慣れていたので、最初の暗示で殺害をやめたが、アレクサンドリアの民衆はユダヤ人に対して非常に強い憎しみを抱い

ていたため、彼らを呼び戻すのは困難であり、彼らに死体を手放させるのは大変なことだった。

9. そしてこれが、このときアレクサンドリアのユダヤ人に降りかかった悲惨な災難であった。そこでケスティウスは、ユダヤ人が至る所で武装しているのに、これ以上じっとしているわけにはいかないと考え、アンティオキアから第 12 軍団を率いて出発し、残りの各軍団から 2000 人ずつ、歩兵 6 個大隊、騎兵 4 個軍団、さらに王たちから派遣された援軍を選んだ。アンティオコスは騎兵 2000 人と歩兵 3000 人を同数の弓兵とともに派遣した。アグリッパも歩兵同数と騎兵 1000 人を派遣した。ソヘムスも 4000 人を率いて従ったが、その 3 分の 1 は騎兵だったが、大部分は弓兵で、こうしてプトレマイスに進軍した。また、多くの援軍が [自由] 都市から集められたが、彼らは確かに軍事面で同じ技能を持っていなかったが、その敏捷性とユダヤ人への憎しみで、技能の不足を補っていた。ケスティウス・アグリッパ自身も、国中を行軍する際の案内人として、また、なすべきことを指揮するために同行した。そこでケスティウスは軍勢の一部を引き連れ、急いでガリラヤの堅固な都市ザブロンに進軍した。ザブロンは人々の都市と呼ばれ、プトレマイス地方と我々の国を隔てる場所であった。ケスティウスは、そこは人々が見捨てられ、大勢の人が山に逃げていたが、あらゆる種類の良い物で満ちていたのを発見した。彼は兵士たちにそれらの略奪を許可し、その都市に火を放った。その都市は見事な美しさを誇り、ティルス、シドン、ベリトスのような家々が建てられていた。その後、彼は国中を制圧し、行く手を阻むものはすべて奪い取り、周囲の村々に火を放ち、プトレマイスに帰還した。しかしシリア人、特にベリトゥスの人々が略奪に忙しくしていたため、ユダヤ人は勇気を奮い起こした。ケスティウスが退却したことを知っていたからである。そして、予期せず残っていた者たちを襲撃し、約二千人を殺した。27

10. そしてケスティウス自身はプトレマイスから進軍し、カエサレアに着いたが、軍の一部を先にヨッパに送り、もしその町を [奇襲で] 占領することができれば、それを保持するように、しかし、もし市民が彼らが攻撃に来ると気付いた場合に備えて、彼と残りの軍のために留まるようにと命令した。そこで、彼らのうちの何人かは海沿いに、また何人かは陸路で急行し、両側から襲い掛かり、容易に町を占領した。住民は逃げるための準備をしておらず、戦闘の準備もしていなかったので、兵士たちは彼らに襲い掛かり、彼ら全員とその家族を殺し、それから町を略奪し、焼き払った。殺された者の数は 8,400 人であった。同様に、ケスティウスはカエサレアに隣接するナルバテネの領土にも相当数の騎兵を送り、その領土を破壊し、その住民の多くを殺害した。また、彼らは所有物を略奪し、村々を焼き払った。

11. しかしケスティウスは第 12 軍団の指揮官ガルスをガリラヤに派遣し、その国を征服するのに十分と思われる軍勢を彼に引き渡した。彼はガリラヤの最も強固な都市セフォリスで歓呼の拍手で迎えられた。この都市の賢明な行動により、他の都市は静まり返った。一方、反乱分子と盗賊はガリラヤの真ん中、セフォリスの向かいに位置する山に逃げた。その山はアサモンと呼ばれている。そこでガルスは軍勢を率いて彼らに立ち向かったが、その男たちはローマ軍より高所にいたため、接近するローマ軍に矢を投げつけ、約 200 人を殺した。しかしローマ軍が山を回り、敵軍より高所に侵入すると、他の軍勢はすぐに打ち負かされた。軽装甲しか身につけていなかった彼らは、全面武装して戦ってきた敵の力に耐えることはできず、敗れたときには敵の騎兵から逃れることもできなかった。そのため、山間の近づきにくい場所に身を隠したのはほんの数人だけだったが、残りの二千人以上は殺された。

E.3.19　第 19 章

ケスティウスがユダヤ人に対して行ったこと、そしてそのエルサレムを包囲し、彼は何の世の中の出来事。また、どんな深刻な災害も彼は隠遁中にユダヤ人から迫害を受けた。

1. さて、ガルスはガリラヤでこれ以上の改革の兆しがないと見て、軍隊を率いてカエサレアに帰還した。しかしケスティウスは全軍を率いてアンティパトリスに進軍した。そして、アフェクという塔にユダヤ人の大軍が集結しているとの知らせを受けると、彼らと戦うために一隊を派遣した。しかし、この一隊は、ユダヤ人が戦闘になる前に彼らを脅かして散らした。そこで彼らは到着し、陣営が放棄されているのを見て、陣営とその周囲の村々を焼き払った。しかしケスティウスがアンティパトリスからリダに進軍したとき、町には人が誰もいなかった。というのは、群衆は皆、仮庵の祭りのためにエルサレムに上って行ったからである。しかし、姿を現した者のうち 50 人を殺し、町を焼き払って進軍した。そしてベトボロンを通って上っていき、エルサレムから 50 スタディオン離れたガバオという場所に陣を張った。

2. しかしユダヤ人は、戦争が自分たちの首都に近づいているのを見て、祭りを中止し、武器を手に取り、群衆に大いに勇気づけられ、突然、無秩序に、大きな音を立てて戦いに赴き、安息日 29 日を最も重視していたにもかかわらず、残りの第 7 日をまったく考慮しませんでした。しかし、その激怒は彼らに宗教的遵守（安息日）を忘れさせ、戦いにおいて彼らを敵にとって手強いものにした。それゆえ彼らは非常に激しくローマ軍に襲い掛かり、彼らの隊列を崩し、彼らの真ん中を行進し、進むにつれて大虐殺を行った。そのため、戦闘でまだ疲れていない騎兵と歩兵の一部が方向転換して、まだ崩れていない軍の一部を助けていなかったら、ケスティウスとその全軍は危険にさらされていたであろう。しかし、ローマ軍は 515 人が殺され、そのうち 400 人が歩兵、残りが騎兵であった。一方、ユダヤ人の損失は 22 人にとどまり、そのうち最も勇敢だったのはアディアベネ王モノバゾスの親族で、その名はモノバゾスとケネデウスであった。彼らの隣にはペレアのニゲルとバビロンのシラスがいた。彼らはアグリッパ王のもとからユダヤ人のもとへ逃亡していた。彼は以前、アグリッパの軍隊に仕えていたからである。ユダヤ軍の前線が遮断されると、ユダヤ人たちは市内に退却した。しかし、ギオラの息子シモンは、ベトロンに登っていたローマ軍の背後に襲い掛かり、軍の後衛を混乱に陥れ、武器を運ぶ多くの獣を奪い取り、セムを市内に連れ込んだ。しかし、ケスティウスがそこに 3 日間留まったので、ユダヤ人たちは市内の高台を占領し、市内の入口に監視員を配置し、ローマ軍が進軍を開始したら休むまいと公然と決意しているように見えた。

3. そして今、アグリッパは、敵の膨大な軍勢が周囲の山々を占領している今、ローマ軍の情勢さえも危険にさらされているのを見て、ユダヤ人が言葉で同意するであろうことを試みようと決心した。つまり、ユダヤ人全員に戦闘をやめるよう説得するか、あるいは、彼らの冷静な部分を敵陣から引き離すように仕向けるつもりだった。そこで、彼は、ユダヤ人に最もよく知られたボルケウスとフェブスを派遣し、武器を捨てて彼らの側に来るなら、ケスティウスが彼らに右腕を与え、ローマ軍が彼らの不正行為を全面的に許すと約束した。しかし、反乱軍は、全軍が自分たちの安全を願ってアグリッパ側につくことを恐れ、直ちに使節団を襲撃して殺害することを決意した。そこで、彼らはフェボスが一言も言わないうちに彼を殺したが、ボルセウスは負傷しただけで、逃げ去ることで彼の運命を免れた。そして、人々はこれに非常に怒り、

反乱者を石や棍棒で殴り、彼らを自分たちの前から街に追いやった。

4. しかしケスティウスは、ユダヤ人の間で始まった騒乱が攻撃の好機であると見て、全軍を率いてユダヤ人を敗走させ、エルサレムまで追撃した。それから彼は、町から 7 スタリオン離れたスコプス（または監視塔）と呼ばれる高台に陣を張った。しかし、町の人々が少しは屈服するかもしれないと期待して、3 日以内に攻撃することはしなかった。その間に、彼は兵士の多くを近隣の村に送り、穀物を奪取した。そして 4 日目、すなわちヒュペルベレテウス（ティスリ）の月 30 日に、彼は軍を整列させて町に侵入した。さて、民衆は反乱軍によって抑えつけられていた。しかし、反乱軍はローマ軍の秩序のよさに大いに恐れをなし、郊外から退却し、町の奥地や神殿に退却した。しかしケスティウスが町に入ると、ベゼタと呼ばれる地区、つまりケノポリス（新市街）に火を放った。木材市場にも放火した。その後、ケスティウスは町の上部に入り、王宮の向かいに陣を張った。そして、このとき力ずくで城壁内に入ろうとしていれば、すぐに町を制圧し、戦争はすぐに終結していただろう。しかし、軍の召集長ティラニウス・プリセウスと騎兵将校の多くがフロルスに堕落させられ、フロルスをその企てからそらした。それがこの戦争が長引いた原因であり、ユダヤ人はこのような救いようのない災難に巻き込まれたのである。

5. その間に、町の有力者の多くがヨナタンの子アナヌスに説得され、ケスティウスを町に招き入れ、門を開けようとした。しかしケスティウスは、ユダヤ人に対する怒りから、また彼らが本気だとは到底信じられなかったことから、この申し出を無視した。そのためケスティウスは、この件を長引かせ、反逆者たちは裏切りに気づき、アナヌスとその仲間を城壁から突き落とし、石を投げつけて家の中に追い込んだ。しかし、彼らは塔の中に適度な距離を置いて立ち、城壁を乗り越えようとする者たちに矢を投げつけた。このようにして、ローマ軍は 5 日間城壁を攻撃したが、無駄だった。しかし翌日、ケスティウスは、精鋭の兵士を多数率いて弓兵たちとともに、北側の神殿に侵入しようとした。しかしユダヤ人たちは彼らを回廊から追い払い、彼らが壁に近づいたときには何度も撃退したが、ついには多数の矢が彼らを遮り、退却させた。しかしローマ軍の最前列は盾を壁に立てかけ、その後方にいる者たちもそうし、さらに後方にいる者たちも同様に盾を壁に立てかけ、彼らがテストゥド（亀の背）と呼ぶもので身を守った。投げられた矢はその上に落ち、滑り落ちて彼らに害を与えなかった。こうして兵士たちは自分たちに危害を加えることなく壁の下を掘り、神殿の門に火を放つ準備を整えた。

6. そして、反乱軍は恐ろしい恐怖に襲われ、その多くは、まるですぐに陥落させられるかのように、街から逃げ出した。しかし、人々は勇気を奮い起こし、街の邪悪な部分が屈服したところに、門を開けて、ケスティウス 30 を彼らの恩人として受け入れるために、そこに向かった。ケスティウスがもう少し長く包囲を続けていれば、間違いなく街を陥落させていただろう。しかし、神がすでに街と聖域に対して抱いていた嫌悪感のせいで、その日のうちに戦争を終わらせることができなかったのだろうと私は思う。

7. ケスティウスは、包囲された者たちが勝利を絶望していたことも、民衆が彼に対してどれほど勇敢だったかも知らなかった。そこで彼は兵士たちをその場所から呼び戻した。そして、町を占領できる見込みがまったくないと絶望し、恥辱を受けることなく、何の理由もなく町から撤退した。しかし、彼のこの予期せぬ撤退に気づいた盗賊たちは勇気を取り戻し、彼の軍の後方に駆けつけ、騎兵と歩兵のかなりの数を殺した。そしてケスティウスは一晩中スコプスの陣地に留まり、翌日さらに進軍したが、敵はそうすることで彼を追撃し、やはり最後尾の軍を襲って彼らを殺した。彼らはまた、軍隊の両側の側面に襲い掛かり、斜

めに矢を投げつけ、最後尾の者たちは、追撃してくる敵の数が膨大であると考えて、背後から傷を負わせた者たちに向き直ろうともしなかった。また、両側から迫ってくる者たちを追い払おうともしなかった。武器が重くて隊列を粉々にしてしまうのを恐れたからであり、ユダヤ人が軽装で、自分たちに襲い掛かろうとしているのを見たからである。これが、ローマ軍が敵に復讐できずに大いに苦しんだ理由である。そのため、彼らは道中ずっと攻撃を受け、隊列は乱れ、隊列から追い出された者たちは殺された。その中には、第六軍団の指揮官プリスカス、護民官ロンギヌス、騎兵隊の指揮官エミリウス・セクンドゥスがいた。それで、彼らが以前のキャンプ地であるガバオにたどり着くのは困難だったが、荷物の大部分を失うことなしにはできなかった。ケスティウスはそこで 2 日間滞在し、このような状況でどうしたらよいか非常に悩んだ。しかし、3 日目に敵の数が増え、周囲がユダヤ人でいっぱいになっているのを見て、彼は遅れが自分の不利益になること、そしてこれ以上そこに留まればさらに多くの敵に襲われることを理解した。

8. それで、より速く逃げるために、彼は軍の行軍を妨げるものを投げ捨てるよう命令を出した。そこで彼らは、投げ矢や機械を運ぶものを除いて、ラバや他の動物を殺した。投げ矢や機械は自分たちで使うために取っておいたが、これは主にユダヤ人が彼らを捕らえるのを恐れたためであった。それから彼は軍をベトロンまで行軍させた。ユダヤ人は彼らが広い場所にいるときはそれほど迫らなかったが、狭い通路を通って下る途中で彼らが囲い込まれたとき、彼らのうちの何人かは彼らの前に立ち、そこから抜け出すのを妨げ、他の者たちは一番後ろの者を低い場所に突き落とした。そして、群衆全体が通路の入り口に向かって伸び、投げ矢でローマ軍を包囲した。こうした状況で、歩兵は身を守る術を知らず、騎兵は危険にさらに追い詰められた。騎兵は激しい打撃を受け、隊列を組んで道を進むことができず、坂道はあまりにも高かったため、騎兵は敵に向かって行進することができなかった。また、騎兵が頻繁に落ちたり転げ落ちたりする断崖や谷は、両側にたくさんあったため、逃げる場所もなく、身を守るための手段も思いつかなかった。ついに、彼らが陥った窮状は非常に大きく、彼らは嘆き、極度の絶望に陥ったときに使われる悲痛な叫び声をあげた。ユダヤ人たちが互いに励まし合いながら叫ぶ歓喜の声も、また反響し、この最後の声は、喜びと激怒が同時に混じった叫び声となった。実際、事態は急激に悪化し、夜が明けるまでに、ユダヤ人はケスティウス軍のほぼ全員を捕虜にしていた。そのとき、ローマ軍はベトロンに逃げ、ユダヤ人は周囲のすべての場所を占領し、彼らが朝に出てくるのを待ち構えていた。

9. そしてそのとき、ケスティウスは、公の行進のための場所が確保できないと絶望し、最もうまく逃げる方法を考えた。そして、兵士たちのうち最も勇敢な 400 名を選ぶと、彼らを最も堅固な要塞に配置し、朝の衛兵のところに上がるときに、軍旗を立てるように命じた。ユダヤ人に、まだ全軍がそこにいると信じ込ませるためである。その間、彼自身は残りの軍勢を引き連れて、音もなく 30 ハロン行進した。しかし、ユダヤ人たちは朝になって陣地が空であることに気づき、自分たちを欺いた 400 名に襲いかかり、すぐに矢を投げて彼らを殺し、その後ケスティウスを追いかけた。しかし、彼はすでに夜の大部分を逃走に費やしており、日中はさらに速く行進した。兵士たちは驚きと恐怖のあまり、包囲戦用の武器や投石用の武器、戦争の道具の大半を後に残していった。そこでユダヤ人はローマ軍をアンティパトリスまで追撃したが、追いつけないと分かると戻って武器を奪い、死体を略奪し、ローマ軍が後に残した獲物を集め、歌いながら走って首都に戻った。ユダヤ人自身は数人を失っただけだったが、ローマ軍の歩兵 5,300 人と騎兵 380 人を殺した。この敗北はネロの治世第 12 年、ディウスの月 [マルケスワン] の 8 日に起こった。

E.3.20　第 20 章

ケスティウスはネロに大使を派遣。ダマスカスの人々彼らと一緒に住んでいたユダヤ人を殺せ。エルサレムはケスティウスの追跡を中止した後、帰還した都市へ行き、防衛の準備を整え、軍隊の将軍たち、特にこれらの本の著者ヨセフス。彼の管理。

1. この災難がケスティウスに降りかかった後、ユダヤ人の最も高名な者の多くが、沈みかけている船から逃げるように、町から泳いで逃げた。そのため、兄弟であるコストバルスとサウロは、アグリッパ王の軍の指揮官であったヤキムスの息子フィリップとともに町から逃げ出し、ケスティウスのもとへ向かった。しかし、王宮で彼らとともに包囲されていたが、逃げようとしなかったアンティパスが、その後、反乱軍によって殺害された経緯については、後で述べる。しかし、ケスティウスは、サウロとその友人たちを、彼らの希望により、アカイアのネロのもとへ送り、彼らが陥っている大きな苦難を彼に知らせ、彼らが戦争を引き起こした責任をフロルスに負わせ、フロルスに対する彼の憤りを誘発することで、自身の危険を軽減しようとした。

2. 一方、ダマスカスの人々は、ローマ軍の壊滅を知らされると、自分たちの中にいたユダヤ人の虐殺に着手した。彼らはユダヤ人をすでに公の儀式の場所に閉じ込めていたので、虐殺には何の困難もないと考えた。しかし、彼らは自分たちの妻たちを信用していなかった。妻たちはほとんど全員がユダヤ教に溺れていたからである。そのため、彼らの最大の関心事は、妻たちからこれらのことをいかにして隠すかということであった。そこで彼らは、狭い場所にいた一万人のユダヤ人を襲い、全員武器を持たずに、しかも一時間の間に、邪魔する者もいないまま、彼らの喉を切り裂いた。

3. しかし、ケスティウスを追っていた者たちは、エルサレムに帰還すると、ローマ人を支持する者たちを暴力で圧倒し、またある者たちを説得してローマ人に加わらせ、神殿に大勢集まり、戦争のために多くの将軍を任命した。また、ゴリオンの息子ヨセフと大祭司アナヌスは、市内のすべての事柄の統治者に選ばれ、特に市の城壁を修復する任務を与えられた。シモンの息子エレアザルは、ローマ人から奪った戦利品とケスティウスから奪った金、さらに公共の財宝の大部分を手に入れていたが、彼らはエレアザルをその職に任命しなかった。なぜなら、エレアザルが暴君的な性格で、彼の追随者たちが彼の周りで警備員のように振る舞っているのが分かったからである。しかし、エレアザルの金銭不足と彼の巧妙な策略により、人々は彼の策略を回避し、あらゆる公務において彼の権威に従うようになった。

4. 彼らはまた、イドマヤのために他の将軍を選んだ。すなわち、大祭司のひとりであるサッピアの子イエスと、大祭司アナニアの子エレアザルである。また、当時のイドマヤの総督ニゲルに命じた。ニゲルはヨルダン川の向こうのペレアに属し、そこからペレア人と呼ばれていた一族の出身であった。32 彼は前述の将軍たちに従うよう命じた。彼らはまた、国の他の地域の世話も怠らなかった。シモンの子ヨセフはエリコに、マナセはペレアに、エスクのヨハネはタムナの地方長官に遣わされた。リダも彼の担当に加えられ、ヨッパとエマオも担当した。マティアスの子ヨハネはゴフニティカとアクラバテネの地方長官に任命され、マティアスの子ヨセフスは両ガリラヤの地方長官に任命された。その地方で最も強力な都市であった

ガマラも彼の指揮下に置かれました。

5. それで、他の指揮官たちは皆、自分の担当する地域の事柄を、彼らが得意とする敏速さと慎重さで管理した。しかし、ヨセフスがガリラヤに着いたとき、彼が最初に心配したのは、その土地の人々の好意を得ることだった。そうすれば、他の点では失敗しても、概して成功するだろうと考えたからである。そして、自分の権力の一部を偉い人たちに委ねれば、彼らを親友にできるだろうし、自分の命令を彼らと同じ土地の、彼らと親しい人たちに執行させれば、民衆から同じ好意を得られるだろうと自覚していた。そこで、彼は最も賢明な人たち、年長者の中から 70 人を選び、彼らをガリラヤ全体の支配者に任命した。それは、各都市で小さな争いを審理するために 7 人の裁判官を選んだのと同じである。というのは、より大きな問題、すなわち生死に関わる問題に関しては、彼はそれらを彼と七十人の長老たちのもとに持ち込むように命じたからである。

6. ヨセフスもまた、法によって事件を裁定する規則を定めた後、人々の相互の扱いに関して、外敵からの安全を確保するために準備を整えた。そして、ローマ軍がガリラヤに攻め入ることを知っていたので、ヨタパタ、ベルサバイ、セラミスの周囲のしかるべき場所に城壁を築いた。さらに、カファレコ、ヤパ、シゴ、そしてタボル山と呼ばれる場所、タリケア、ティベリアの周囲にも城壁を築いた。さらに、下ガリラヤにあるゲネサル湖近くの洞窟の周囲にも城壁を築いた。上ガリラヤの各地、アハバリの岩と呼ばれる岩、セフ、ヤムニト、メロトにも城壁を築いた。ガウロニティスでは、セレウキア、ソガネ、ガマラを要塞化した。しかし、セフォリスの人々に関しては、彼らだけが彼自身の城壁を築く許可を与えた。これは、彼らが裕福で、戦争に行く用意ができており、そのための命令を必要としないことを知っていたからである。ギスカラの場合も同様で、その周囲に城壁を築いたのはレビの子ヨハネ自身であったが、ヨセフスの同意があった。しかし、残りの要塞の建設については、彼は他のすべての建設者と一緒に働き、そのために必要なすべての命令を出すために立ち会った。彼はまた、ガリラヤから 10 万人以上の若者からなる軍隊を集め、彼ら全員に、彼が集めて準備していた古い武器を装備させた。

7. そして、ローマ軍が無敵になったのは、主に命令に従う素早さと武器の絶え間ない訓練によるものだと考えた彼は、兵士たちに武器の使い方を教えることは諦めた。武器の使い方は経験によって身につくものだった。しかし、命令に従う素早さは士官の数が多いためだと気づき、ローマのやり方に倣って軍隊の区分をもっと細かくし、多くの下級将校を任命した。また兵士たちをさまざまな階級に分け、十人隊長、百人隊長、そして千人隊長の下に置いた。さらに、より大規模な部隊の指揮官もいた。また、互いに合図を送ったり、トランペットで兵士たちを呼び集めたり、軍の翼を広げて旋回させたりする方法、そして片方の翼が成功したら引き返して頑強な兵士たちを助け、最も被害を受けたものの防衛に加わることも教えた。彼はまた、魂の勇気と肉体の強靭さに関することを絶えず教え、とりわけ、ローマ人の秩序正しさをはっきりと告げ、彼らが肉体の強さと魂の勇気の両方で、ある意味では居住可能な地球全体を征服した人々と戦うことになることを告げて、彼らを戦争に向けて訓練した。彼は、彼らが窃盗、強盗、略奪、同胞を騙すといった、彼らがかつて行っていた犯罪を慎み、近親者に危害を加えても決して自分の利益にならない限り、戦闘になる前から彼らが戦争で守る秩序正しさを試してみるべきだと彼らに告げた。なぜなら、戦士が良心を保っているとき、戦争は最もうまく行われるからである。しかし、私生活で悪人である者は、彼らを攻撃する敵として、彼らを攻撃する敵として、神自身も敵対することになるからである。

8. そして彼はこのようにして彼らに忠告を続けた。彼は戦争のために十分な軍隊、すなわち歩兵六万と騎兵二百五十人を選び、さらに彼が最も信頼していたこれらの他に、約四千五百人の傭兵がいた。また彼は自分の護衛として六百人の兵を持っていた。傭兵を除く残りの軍隊は都市で容易に維持できた。なぜなら上に挙げた都市のそれぞれが兵士の半分を軍隊に送り出し、残りの半分を食料を得るために国内に留めていたからである。そのため、一部は戦争に、残りは仕事に送られ、穀物を送り出した者は、武器を所持していた者から、穀物から得られる安心感によってその代金を受け取った。

E.3.21 第 21 章

ギカラのヨハネについて。ヨセフスはヨハネが彼に対して仕掛けた陰謀と特定の都市の奪還彼に反抗した者たち。

1. ヨセフスがガリラヤの行政に携わっていたとき、裏切り者が現れた。レビの子ギスカラ出身で、ヨハネという名の人物である。彼の性格は非常に狡猾で悪賢い人物であり、その地の名士たちの並外れた人物であり、悪事に関してはどこにも仲間がいなかった。彼は最初は貧しく、長い間、彼の欠乏が彼の悪事の計画の妨げとなっていた。彼はすぐに嘘をつくが、自分の作り話で信用を得ることには非常に長けていた。彼は人々を騙すことが美徳であると考え、最も大切な人々でさえ騙した。彼は偽善的な人道主義者であったが、利益を望むときは流血を惜しまなかった。彼の欲望は常に大きなことに向けられ、彼は自らが仕掛けた卑劣で悪事で自分の希望を膨らませていた。彼は盗みを働くことに特別な才能を持っていたが、そのうちに、その無礼な行為に一定の仲間を得た。最初はその仲間は少数だったが、彼が悪事を続けるにつれて、その数はますます増えていった。彼は、仲間が悪事で簡単に捕まらないように気を配り、残りの仲間の中から、最も強靭な肉体と、最も勇敢な精神を持ち、さらに武術に長けた者を選んだ。彼は、主にティルス地方からやって来て、村から逃げてきた放浪者であった 400 人の集団を集め、彼らを使ってガリラヤ全土を荒廃させ、突然彼らの間で戦争が起こることを大いに期待していたかなりの数の人々を激怒させた。

2. しかし、ヨハネスはこれまで金銭不足のため、権力を握ろうとする野心や出世の試みを抑制していた。しかし、ヨセフスが彼の気質の活発さに大いに満足しているのを見て、まずは故郷の都市 [ギスカラ] の城壁の修復を任せるよう説得し、その仕事で裕福な市民から多額の金を受け取った。その後、ヨハネスは巧妙な策略を考案し、シリアに住むユダヤ人は同胞以外の人が作った油を使わなければならないと偽り、ヨセフスに彼らの国境に油を送る許可を求めた。そこで、彼はティルスの金でアッティカのドラクマ 4 枚に相当するアンフォラ 4 個を購入し、半アンフォラ 1 個を同じ価格で販売した。ガリラヤは当時特に油の産地であったため、大量の油を送り出し、またそうする唯一の特権を持っていたため、彼は莫大な金額を集め、その金をすぐにその特権を与えた者の不利益になるように使った。そして、ヨセフスを一度でも倒すことができれば、ガリラヤの統治権を自ら手に入れることができると考えた。そこで彼は、自分の指揮下にある盗賊たちに盗賊遠征にもっと熱心になるように命令し、国に革新を望む者が多く現れれば、国を助けに来た彼らの将軍を罠にかけ、殺すか、あるいは盗賊を見過ごした場合は、国の人々に対する彼の怠慢を非難するかのどちらかを考えた。また、ヨセフスが政務をローマ人に引き渡しているという噂を遠くまで広め、彼を破滅させるためにそのような陰謀を数多く企てた。

3. ちょうどその頃、大平原の警備に当たっていたダバリッタ村の若者たちが、アグリッパとベルニケの執事であったプトレマイオスに罠を仕掛け、彼が持っていたすべてのものを奪った。その中には、高価な衣服が数多く、銀の杯も少なくなく、金貨 600 枚もあった。しかし、彼らは盗んだものを隠すことができず、すべてをタリケアのヨセフスに持ち込んだ。そこで彼は、彼らが王と王妃に暴力をふるったことを責め、彼らが持ち込んだものをタリケアの最も有力な人物であるエネアスに預け、しかるべき時期に持ち主に返還するつもりでいた。ヨセフスのこの行為は、彼を最も危険な状況に陥れた。盗んだ者たちは、ヨセフスに憤慨していた。それは、自分たちには何も分け前がなかったからであり、また、ヨセフスの意図が何であるかを事前に察知していたからであり、ヨセフスは、彼らが苦労して手に入れた物を王と女王に惜しげもなく引き渡すつもりだったからである。彼らは夜中にそれぞれの村に逃げ帰り、ヨセフスが自分たちを裏切ろうとしていると、すべての人に告げた。また、近隣の町々で大騒動を起こし、朝には武装した十万人の男たちが駆けつけてきた。その群衆はタリケアの競馬場に群がり、ヨセフスに対して非常に不機嫌な叫び声をあげた。ある者は裏切り者を解任すべきだと叫び、またある者は彼を火あぶりにすべきだと叫んだ。ヨハネは多くの人々を怒らせたが、当時ティベリアの総督であったサッピアの子イエスも同様であった。そのとき、ヨセフスの友人たちや護衛たちは、群衆のこの激しい襲撃に非常に恐れをなし、4 人を除いて全員逃げ去った。ヨセフスが眠っていると、人々は家に火をつけようとしていたので、彼らは彼を起こした。ヨセフスと一緒に残った 4 人は彼に逃げるように説得したが、彼は自分が見捨てられたことにも、彼に向かってくる大群衆にも驚かず、衣服を引き裂かれ、頭に灰をまき散らされ、両手を後ろに回し、剣を首に下げたまま、群衆に向かって飛び出した。これを見て、彼の友人たち、特にタリケアの人々は彼の境遇を哀れんだが、田舎から出てきた人々や近隣の人々は彼の統治が重荷に見え、彼を非難し、彼ら全員の金をすぐに差し出し、彼らを裏切るために交わした約束を白状するように命じた。というのは、彼らは、彼の服装から、彼が疑われていることを何も否定しないだろう、そして、赦免を得るために、彼がそのような哀れな態度を取ったのだ、と想像したからである。しかし、この謙虚な姿は、彼に対して非常に怒っている人たちを、彼らが怒っている事柄に関して互いに対立させようとする彼の策略の準備として意図されたものに過ぎなかった。しかし、彼はすべてを告白すると約束した。そこで彼は話すことを許され、こう言った。「私はこの金をアグリッパに返すつもりも、自分で手に入れるつもりもなかった。なぜなら、私は君たちの敵を味方だとは思わなかったし、君たちの不利益になることを自分の利益だとも思わなかったからだ。しかし、タリエヘアの人々よ、私は君たちの町が他の町よりも安全のために要塞を必要としており、城壁を建てるための資金が必要であることを知った。また、ティベリアや他の町の人々がこれらの戦利品を奪おうと企てるのではないかと恐れたので、この金を秘密裏に保管して、君たちを城壁で囲むつもりだった。しかし、もしこれが君たちを喜ばせないなら、私が持ってきたものを見せて、君たちに略奪させてやろう。しかし、私が君たちを喜ばせるほどうまく行動したなら、君たちの恩人を罰してもいいだろう。」

4. そこでタリケアの人々は大声で彼を称賛したが、ティベリアの人々は他の一団とともに彼を酷評し、何をするか脅した。そこで両者はヨセフスとの争いをやめ、互いに争い始めた。そこで彼は、友人であるタリケアの人々、約 4 万人にのぼる友人たちへの依存を大胆に強調し、群衆全体に対してより率直に話し、彼らの無謀さを大いに非難した。そして、この金でタリケアの周りに城壁を築き、他の都市も安全にすると言った。なぜなら、彼らが金を誰のために調達するかに同意し、金を調達した者に対して腹を立てないようにすれば、金に困ることはないからだ。

5. すると、惑わされていた残りの群衆は退却したが、それでも彼らは怒りながら立ち去り、そのうちの二千人が鎧を着た彼に襲いかかった。彼はすでに自分の家に帰っていたので、彼らは外に立って彼を脅した。そのとき、ヨセフスは彼らから逃れるために再び二番目の策略を使った。彼は家の屋上に登り、右手で彼らに黙るように求め、彼らに言った。「あなたたちが何を欲しがっているのか私には分からないし、あなたたちが何を言っているのか聞こえない。あなたたちが騒がしい音を立てているからだ。」しかし、もし彼らが何人かを彼のところへ送り込んで、彼とそれについて話すことができれば、彼らの要求をすべて受け入れると言った。そして、彼らのリーダーがこれを聞くと、彼らは家に入ってきた。それから彼は彼らを家の最も奥まった場所に引き寄せ、そのホールのドアを閉めてそこに置き、彼らの内臓がすべてむき出しになるまで鞭打った。その間、群衆は家の周りに立っていて、彼が中に入った人々と、彼らが彼に何を要求しているかについて長々と議論しているのだと思った。彼はすぐにドアを開けさせ、血まみれの男たちを外に追い出した。これは、彼を脅していた人々をひどく怖がらせ、武器を投げ捨てて逃げ去った。

6. しかしヨハネは、ヨセフスの逃亡により嫉妬が増し、ヨハネに対する新たな陰謀を企てた。ヨハネは病気を装い、健康回復のためにティベリアスにある温泉に入る許可をヨセフスに求める手紙を書いた。ヨセフスは、それまでヨハネの陰謀を疑っていなかったが、ヨハネのために宿舎と必需品を提供するよう市の知事に手紙を書いた。その恩恵を受けたヨセフスは、2 日後にはやるべきことを実行した。ある者は欺瞞的な詐欺で、またある者は金で騙し、ヨセフスに反抗するよう説得した。ヨセフスによって市の守護者に任命されていたシラスは、すぐにヨハネに手紙を書き、ヨハネに対する陰謀を知らせた。ヨセフスは手紙を受け取ると、一晩中熱心に行軍し、翌朝早くティベリアスに着いた。そのとき、群衆の残りがヨセフスに出会った。しかし、ヨセフスが来るのは自分の利益にならないと考えたヨハネスは、友人の一人を遣わし、自分が病気で寝たきりなので、ヨセフスに挨拶に行けないと偽った。しかし、ヨセフスがティベリアの人々を競技場に集め、受け取った手紙について彼らと話し合おうとすると、ヨハネスは密かに武装した男たちを遣わし、ヨセフスを殺すよう命令した。しかし、武装した男たちが剣を抜こうとしているのを見て、人々は叫び声を上げた。その叫び声を聞いてヨセフスは振り返り、剣が自分の喉元に迫っているのを見て、大急ぎで海岸に向かい、6 キュビトの高さの高台で人々に向けて話そうとしていた演説を中断した。それから、港にあった船をつかみ、2 人の護衛とともに船に飛び乗り、湖の真ん中に逃げ去った。

7. しかし、彼といっしょにいた兵士たちはすぐに武器を取り、陰謀者たちに向かって進軍した。しかしヨセフスは、少数の人々の嫉妬から内戦が起こり、町が破滅することを恐れた。そこで彼は、自分の身の安全を確保することだけを心がけ、誰も殺したり、騒乱のきっかけを作ったとして誰かを非難したりしないようにと、仲間の何人かを遣わした。彼らは彼の命令に従い、静かにしていたが、隣国の人々は、この陰謀と陰謀者のことを知ると、大勢集まってヨハネに対抗した。しかし、彼は彼らの企てを阻止し、故郷の町ギスカラに逃げた。一方、ガリラヤ人たちはそれぞれの町からヨセフスのもとに駆けつけた。そして、今や何万もの武装した男たちとなって、彼らは叫び声をあげた。彼らの利益を裏切る陰謀家ヨハネに襲いかかり、同時に彼と彼を受け入れた町を焼き払おうとしているのだ。そこでヨセフスは、彼らの好意を快く受け止めたが、それでも怒りを抑え、敵を殺すのではなく、賢明な行動で鎮圧するつもりだと告げた。そこで彼は、ヨハネとともに反乱に加わった各都市の者を名指しで除外した。各都市からやって来た者たちは、彼らをすぐに彼に示し、5 日以内にヨハネを見捨てない者たちの財産を奪い、彼らの家と家族を火で焼き払うと公に布告させた。するとヨハネの仲間の 3 千人がすぐに彼を離れ、ヨセフスのもとに来て、彼

の足元に武器を投げ捨てた。そこでヨハネは、シリア人の逃亡者二千人とともに、公然とした企てをやめ、より秘密裏に裏切りの手段に転じた。そこでヨハネは密かに使者をエルサレムに送り、ヨセフスが強大な権力を持っていると告発し、阻止しなければすぐに暴君として彼らの首都にやって来るだろうと知らせた。この告発は民衆に事前に知られていたが、気に留めなかった。しかし、一部の高官や支配者たちは嫉妬から、ヨハネに密かに金を送った。ヨセフスと戦うために傭兵を集められるようにするためである。彼らはまた、ヨハネを政府から呼び戻すための布告を出したが、その布告では十分ではないと考えた。そこで彼らはさらに二千五百人の武装兵と、彼らのうちの最高位の者四人を派遣した。ノミコスの子ヨアザル、サドゥクの子アナニア、そしてヨナタンの子シモンとユダは皆、弁論の達人であり、これらの人々がヨセフスに対する人々の好意を奪おうとした。これらの者たちは、もし彼が自発的に去るなら、彼の行いについて報告することを許すが、もし彼が頑固に政権に留まることを主張するなら、彼を敵として扱うようにと指示した。ヨセフスの友人たちは、軍隊が彼に向かって来ると彼に知らせたが、彼らが来る理由については事前に知らせなかった。それは彼の敵の秘密会議の間でのみ知られていたからである。そして、この方法によって、セフォリス、ガマラ、ギスカラ、ティベリアの 4 つの都市が直ちに彼に対して反乱を起こした。しかし、彼はこれらの都市を戦争なしで奪還し、計略によってこれら 4 人の指揮官を敗走させ、彼らの最も有能な戦士たちを捕らえると、彼らをエルサレムに送った。そして、ガリラヤの人々は彼らに対して非常に憤慨し、これらの軍隊だけでなく、逃亡して阻止しなかったならば、彼らを送った者たちをも殺害しようと熱心に考えた。

8. さて、ヨハネはその後、ヨセフスを恐れてギスカラの城壁の中に引き留められたが、数日のうちにティベリアは再び反乱を起こし、その中の人々はアグリッパ王に [権力を行使するためにそこに戻るように] 求めた。しかし、彼が約束の時間に来なかったため、その日数人のローマの騎兵が現れ、彼らはヨセフスを町から追い出した。さて、彼らのこの反乱はすぐにタリケアアイで知られ、ヨセフスは穀物を集めるために一緒にいた兵士全員を派遣していたので、反乱者たちに向かって一人で行進するか、そこに留まるか、わからなかった。なぜなら、もし彼が遅れたら王の兵士たちが彼を阻止し、町に入るかもしれないと恐れたからである。なぜなら、彼は翌日は安息日であり、彼の進行を妨げるであろうため、何もするつもりはなかったからである。そこで彼は策略を巡らして反乱軍をかわそうとした。まず、タリケアエの門を閉ざすよう命じ、だれも外に出て、彼が企てている策略をティベリアの人々に密告できないようにした。それから、湖にあった船をすべて集めた。その数は二百三十隻で、各船に四人以下の船員を乗せた。そこで彼は急いでティベリアに航海し、人々が船を見るのが容易でないほど町から離れた場所に留まり、空の船をそこで上下に浮かべるよう命じた。彼自身は、護衛七人および非武装の者らを連れて、見える範囲に近づいた。しかし、まだ彼を非難していた敵対者たちは城壁の上から彼を見ると、非常に驚いて、すべての船が武装した兵士でいっぱいであると思い、武器を投げ捨て、仲裁の合図で彼に都市を救ってもらうよう懇願した。

9. これに対してヨセフスは、彼らをひどく脅し、非難した。彼らはローマ人に対して最初に武器を取ったのだから、その前に内乱で兵力を費やし、何よりも敵が望んでいることをするべきだ。さらに、彼らの安全を守り、城壁を築いた者に対しては、彼らの都市の門を閉ざすことを恥じなかったヨセフスを捕らえようと急ぐべきだ。しかし、ヨセフスは、彼らのために弁解できる仲裁者を受け入れ、都市の安全のためになる協定を結ぶだろう。すると、ティベリアの最も有力な 10 人がすぐにヨセフスのもとにやって来た。ヨセフスは彼らを船に乗せ、都市から遠く離れたところまで運ぶように命じた。それから、ヨセフスは、彼

らの元老院の最も高名な 50 人の他の人物を彼のところへ呼び、彼らも彼らのためにヨセフスにいくらかの保証を与えるように命じた。その後、彼は次々と新たな口実をつけて他の者たちを召集し、彼らの間に同盟を結ばせた。そして、こうして船を満載した船の船長たちに、直ちにタリケアイに向けて出航し、その者たちをそこの牢獄に閉じ込めるよう命令した。ついに彼は、600 人から成る彼らの元老院全員と、およそ 2000 人の民衆を捕らえ、タリケアイへと連行した。35

10. そして、残りの民衆が、この反乱の首謀者はクレイトスだと叫んだとき、彼らは彼に怒りを彼に向けるよう求めた。しかし、誰も殺すつもりのないヨセフスは、護衛の一人であるレビウスに船から出て、クレイトスの両手を切り落とすよう命じた。しかし、レビウスは一人で敵の大群の前に出るのは怖かったので、行くことを拒否した。そこでクレイトスは、ヨセフスが船の中で激怒し、自ら罰を執行するために船から飛び降りようとしているのを知った。そこで彼は岸から、片方の手を残して欲しいと頼んだ。ヨセフスは、もう片方の手を切り落とすという条件で、これに同意した。そこで彼は剣を抜き、右手で左手を切り落とした。ヨセフス自身に対する恐怖は大きかった。こうして彼はティベリアの人々を捕虜にし、空の船と護衛兵七名で再びその都市を奪還した。さらに数日後、彼はセフォリスの人々とともに反乱を起こしたギスカラを奪還し、兵士たちに略奪を許可した。しかし彼はすべての略奪品を集めて住民に返還した。彼はセフォリスとティベリアの住民にも同じことをした。というのは、彼はこれらの都市を征服したとき、略奪を許すことで彼らによい教訓を与え、同時に彼らに金銭を返還することで彼らの好意を取り戻そうと考えたからである。

E.3.22　第 22 章

ユダヤ人は戦争の準備を整え、ジオラス、略奪に倒れる。

1. こうしてガリラヤの騒乱は静まり、人々は内乱の継続をやめると、ローマ人との戦争の準備に取りかかった。エルサレムでは、大祭司アルタヌスとローマ人の利益に反する多くの権力者たちが城壁を修復し、多くの戦争用の道具を作ったので、町のいたるところで矢やあらゆる種類の鎧が金床の上に置かれた。若者の大群は規則性もなく運動に励み、あらゆる場所が騒々しい行為で満ちていたが、穏健派の人々は非常に悲しんでおり、自分たちに降りかかる災難を予感して、大いに嘆く者も多かった。また、平和を愛する人々にとっては災いの前兆と理解されるような前兆も観察されたが、戦争を煽った者たちはそれを自分たちの好みに合うように解釈した。そして、ローマ軍が攻めてくる前から、この都市の状態はまさに破滅に運命づけられた場所であった。しかし、アナヌスの関心は、戦争の準備をしばらく脇に置き、扇動者たちに自分たちの利益を考慮させるよう説得し、熱狂者と呼ばれる者たちの狂気を抑えることであった。しかし、彼らの暴力は彼にとってあまりにも強すぎた。彼がどのような結末を迎えたかは、後で述べることにする。

2. アクラベネの支配権については、ギオラスの息子シモンが、革新を好む大勢の者を集め、国を荒らすことに着手した。彼は金持ちの家を荒らすだけでなく、彼らの肉体を苦しめ、その支配権において公然と前もって暴政を働こうとした。そして、アルタヌスと他の支配者たちが彼に対して軍隊を派遣したとき、彼と彼の仲間はマサダの盗賊たちのところへ退却し、そこに留まり、彼らとともにイドマヤの国を略奪し、アナヌスと彼の他の敵対者たちは殺害された。そして、その国の支配者たちは、殺害された人々の多さと彼

らの所有物の絶え間ない略奪に非常に悩まされ、軍隊を召集し、村々に守備隊を置き、侮辱から彼らを守ることにした。当時のユダヤの状況はこのような状態でした。

E.4　第三巻

E.4.1　第 1 章

E.4.2　第 2 章

E.4.3　第 3 章

E.4.4　第 4 章

E.4.5　第 5 章

E.4.6　第 6 章

E.4.7　第 7 章

E.4.8　第 8 章

E.4.9　第 9 章

E.4.10　第 10 章

E.5　第四巻

E.5.1　第 1 章

E.5.2　第 2 章

E.5.3　第 3 章

E.5.4　第 4 章

熱心党から呼び出されたイドマヤ人はすぐにやって来たエルサレムへ。そして彼らが町から追い出されたとき、彼らは一晩中そこに横たわっていた。大祭司の一人であるイエス彼らに演説し、イドマヤ人シモンが答えるそれに。

1. さて、この巧妙な演説で、ヨハネは熱心党員たちを怖がらせた。しかし、彼は外国からの援助が何を意味するのか直接言うことはせず、ひそかにイドマヤ人にほのめかしただけだった。しかし、熱心党の指導者たちを特に怒らせるために、彼はアナヌスが野蛮なことをしようとしていると中傷し、特に彼らを脅した。この指導者たちは、シモンの息子エレアザルとファレクの息子ザカリアで、彼は、何をなすべきかを考える上でも、決意したことを実行する上でも、彼ら全員の中で最も説得力のある人物のようだった。二人と

も祭司の家系出身だった。二人は、皆に共通する脅迫だけでなく、特に自分たちに向けられた脅迫も聞いて、さらに、アルタヌスとその一行が、自らの支配権を確保するために、ローマ人を招き入れたことについても、ヨハネの嘘の一部であった。彼らは、自分たちが窮地に陥っている時間が短いことを考慮して、どうすべきか長い間躊躇した。なぜなら、民衆はすぐにでも彼らを攻撃する用意ができており、彼らに対して仕掛けられた陰謀は突然のものだったため、外国からの援助を得られるという望みはほとんど絶たれていたからである。なぜなら、彼らの同盟者の誰かがそのことを知らされる前に、彼らは苦難の極みに達しているかもしれないからである。しかし、イドマヤ人を呼び寄せることに決心したので、彼らは次のような趣旨の短い手紙を書いた。アナヌスは民衆に圧力をかけ、彼らの首都をローマ人に売り渡そうとしている。彼ら自身は他の民衆から反乱を起こし、自由を守るために神殿に拘留されている。彼らが救出を期待できる時間はわずかしか残されていない。そして、彼らがすぐに助けに来なければ、彼ら自身もすぐにアルタヌスの手に落ち、都市はローマ人の手に落ちるだろうと警告した。彼らはまた、使者たちに、イドマヤ人の支配者たちにさらに多くの状況を伝えるよう命じた。さて、このメッセージを伝えるために、2人の活動的な人物が提案された。彼らは、物事がこの状況にあることを説得する能力があり、前者よりもさらに必要な条件は、足が速いことだった。なぜなら、彼らは、常に騒々しく無秩序な国民であり、常にあらゆる動きを監視し、変化を喜ぶので、彼らが彼らの望みにすぐに従うことを十分に知っていたからである。そして、あなたが少しでも彼らをおだて、嘆願すると、彼らはすぐに武器を取り、動き出し、まるで宴会に行くかのように戦いに急ぐ。確かに、このメッセージを伝えるには、迅速な派遣が必要だった。その点では使者たちには何ら欠陥はなかった。彼らの名前は二人ともアナニアであり、彼らはすぐにイドマヤ人の支配者たちのもとにやって来た。

2. さて、これらの統治者たちは、その手紙の内容と、さらに手紙を持って来た人々が彼らに伝えたことに非常に驚き、狂ったように国中を駆け回り、人々に戦争を起こせという布告を出した。そこで、布告で指定された時間よりも早く、突然群衆が集まり、首都の自由を維持するために全員が武器を手にした。そして、彼らのうちの 2 万人が戦闘隊形を組んで、ヨハネとソサスの子ヤコブの 4 人の指揮官の指揮下でエルサレムに来た。このほかに、カスラスの子シモンとクルソトスの子ピネアスがいた。

3. 使者の退出はアナヌスにも衛兵にも知らされていなかったが、イドマヤ人の接近はアナヌスに知られていた。彼らが来る前にアナヌスはそれを知っていたので、彼らに対して門を閉め、城壁を警備するよう命じた。しかしアナヌスは彼らと戦うことは決して考えず、彼らが殴り合う前に説得がどう作用するか試そうとした。そこで、アルタヌスに次ぐ大祭司長の長老であるイエスは、彼らの向かいの塔の上に立ってこう言った。「確かに、この都市には多くの、そして様々な種類の災難が降りかかってきたが、そのいずれにおいても、あなたが邪悪な人々を助けに来た今ほど、この都市の運命に驚いたことはない。これは非常に異常なやり方だ。なぜなら、あなたが我々に対抗する最も邪悪な人々を助けるために来たのが私にはわかる。しかも、我々の首都が野蛮人に対する支援にあなたを呼んだとしても、あなたはそのようなことをほとんどできないほどの敏捷さで。そして、もし私が、あなたの軍隊が彼らを招いた人々と同じような人々で構成されていたと知っていたら、私はあなたの試みをそれほどばかげているとは思わなかっただろう。なぜなら、人々の心を一つに固めるものは、彼らの習慣の間にある同盟ほどないからだ。しかし、あなたがあなたを招いたこれらの人々について、もしあなたが一人ずつ調べれば、彼ら全員が一万人の死に値することがわかるだろう。国中を荒らし回った連中は、放蕩に自分の財産を費やし、事前に試すために狂っ

たように近隣の村や都市を略奪し、結局、密かにこの聖なる都市に駆け込んだ。彼らは盗賊であり、その途方もない邪悪さによってこの最も神聖な場所を汚し、今や聖域で酒を飲み、殺した人々の略奪品を飽くことのない腹につぎ込んでいるのが見られる。あなた方と共にいる大勢の者達は、彼らの首都が外国人に対する支援に彼らを呼んだとしたら、彼らがいかにもふさわしい鎧を着ているのが見える。国民全体が邪悪な悪党の巣窟を守ろうとしているのを見ると、あなたのこのやり方を運試し以外の何と呼べようか。私は長い間、あなたがこんなに突然にこんなことをする動機が一体何なのか疑問に思っていた。なぜなら、あなた方は、よほどの理由がない限り、盗賊のために、また親族の民のために、武装して戦うことはしないはずだからだ。しかし、ローマ人が偽装しているという話があり、私たちはこの都市を彼らに売り渡すつもりだとされている。あなた方の部下の中には、最近、その件について騒ぎ立て、首都を解放するために来たと言っている者もいる。我々に対してこのような嘘をでっち上げたこの悪党どもを、我々は感心せずにはいられない。なぜなら、彼らは、我々が本来自由を望み、それゆえに外国の敵と戦うのに最も適している人間であることを怒らせるには、我々が最も望ましい自由を裏切ろうとしているかのように作り話をでっち上げる以外に方法はないと知っていたからだ。しかし、この中傷をするのはどのような人々なのか、また、どのような人々に対して中傷がでっち上げられているのかを考え、虚偽の演説ではなく、双方の行動から真実を収集すべきである。なぜなら、我々には、最初に反乱を起こさずにローマ人に身を売る力があったのに、あるいは一度反乱を起こした後、再び彼らの支配下に戻る力があったのに、しかも近隣諸国がまだ荒廃していなかったのに、我々がローマ人に身を売る理由などあるだろうか？ローマ人と和解するのは容易なことではありません。もしそうしたいと望んだとしても、彼らはガリラヤを征服し、傲慢で横柄になっています。彼らがこれほど我々の近くにいる時に、彼らを喜ばせようとすることは、死よりも悪い非難を我々にもたらすでしょう。私自身は、確かに、死ぬよりは彼らと平和でいたいのですが、一度彼らと戦争をして戦った今、彼らの下で捕らわれの身で暮らすよりは、名誉ある死を選びます。しかしさらに、彼らは、我々が人民の支配者であり、ローマ人に内密にこのような手紙を送ったと主張しているのでしょうか、それとも人民の一般投票によってそれが行われたのでしょうか。もし我々だけがそれをしたのであれば、この裏切りに対処するために我々の召使として送られた我々の友人の名前を挙げさせましょう。この用事で出かけた時に捕まった人、または帰ってきた時に捕まった人はいますか。彼らは我々の手紙を持っていますか。我々が、毎時間会話を交わしているこれほど大勢の市民から隠れていられるだろうか。一方、田舎で密かに行われていることは、少数の熱心党員に知られているようで、しかも監禁されており、寺院から町へ出ることもできない。彼らが自分たちの傲慢な行為に対してどのように罰せられるべきかを悟ったのは、今回が初めてだろうか。というのも、これらの人々が今のような恐怖から解放されていた間は、我々の誰かが裏切り者であるという疑いは生じなかったからだ。しかし、もし彼らがこの告発を人々に対して行うのであれば、これは公の協議の上で行われ、人々の誰一人として他の集会の参加者に反対してはならない。そうであれば、この問題の世間の評判は、特別な兆候よりも早くあなたに伝わっていただろう。しかし、どうしてそんなことが起こり得たのでしょうか。では、協定を確認するために使節が派遣されたのではないのでしょうか。そして、その目的のために任命された使節が誰だったのか、彼らに教えてもらいましょう。しかし、これは、死を恐れ、迫りくる罰を逃れようと努力している人々の口実にほかなりません。なぜなら、運命がこの都市を裏切って敵の手に渡ると決めたのであれば、私たちを偽って告発しているこれらの人々以外に、それをする厚かましさを持つ者はいないからです。彼らの厚かましい行為を完遂したい悪意は、彼らが裏切り者になること以外にありません。そして今、あなたたちイ

ドマヤ人はすでに武器を持ってここに来ています。あなたたちの義務は、まず第一に、あなたの首都を支援し、私たちの通常の法廷の規則を侵害し、私たちの法律を踏みにじり、剣を善悪の裁定者にした暴君たちを私たちと一緒に断ち切ることです。彼らは、市場の真ん中に立っていた高貴な人々を、何の罪もないまま捕らえ、縛り付けて拷問し、彼らが言うことや懇願することを聞くことさえせずに、彼らを殺したのです。よろしければ、戦争の途中でなくても、市内に入って、私が今言ったことの跡がまだ残っているのを見て、彼らの強欲な手によって人が住まなくなった家々や、殺された親族を悼む黒い服を着た妻や家族を見ることができます。また、市内のいたるところで彼らのうめき声や嘆きを聞くことができます。なぜなら、この俗悪な悪党どもの侵入を味わったことのない者はいないからだ。彼らは狂気の域にまで達し、その厚かましい略奪の場を田舎や辺境の都市から、国民全体の顔であり頭であるこの都市に移しただけでなく、都市から神殿にまで移した。神殿は今や彼らの収容所、避難所、そして我々に対する準備の源泉となっている。そして、この場所は居住可能な世界で崇拝され、地の果てまで噂でしか知らない人々によって尊敬されているが、我々の間で生まれたこの野獣どもによって踏みにじられている。彼らは、ある民族が他の民族と戦い、ある都市が別の都市と戦い、あなたの国が自国の内臓に対して軍隊を組織したと聞いて、すでに陥っている絶望的な状況に今や勝利を収めている。そうした手続きの代わりに、私が前に言ったように、あなたが私たちと一緒にこれらの悪党たちを断ち切るのが、そして特に、あなたにこの詐欺を働いたことに対して、つまり、彼らに協力するようあなたに頼む厚かましさに対して復讐するのが、非常に適切で合理的です。彼らは、彼らを罰する準備ができているとして、恐れを抱いて立っているべきでした。しかし、あなたがこれらの人々の招待にいくらか配慮するのであれば、武器を置いて、私たちの親族という概念で市内に来て、援軍と敵の中間のミドルネームを名乗り、この事件の裁判官になってください。しかし、これらの人々が、このような否定できない、このような甚だしい犯罪についてあなたの前に召喚されて裁判を受けることで何を得るか考えてください。彼らは、自分たちに対して告発されていない人々の話を聞くことを許さず、彼ら自身のために一言も話そうとしません。しかし、あなたが来ることで彼らにこの利益を得させてください。しかし、それでも、あなたがこれらの人々に対する私たちの憤りに加わらず、私たちの間で裁きもしないのであれば、私が提案しなければならない 3 番目のことは、私たちの両方を放っておいて、私たちの災難を侮辱せず、首都に対するこれらの陰謀家たちと一緒にいないことです。我々の何人かがローマ人と会談したという強い疑惑をあなたが抱いているとしても、あなたがたには市内への通路を監視する権限があります。そして、我々が告発されている何かが明るみに出た場合、あなたがたの首都を守り、有罪とされた者に罰を与える権限があります。敵は、市街地に近いあなた方を阻止することはできません。しかし、結局のところ、これらの提案のどれもが受け入れられず、穏健なものに思えないのであれば、あなたがたが武器を携えているのに、門が閉ざされているのも不思議ではありませんか。」これらの提案はどれも受け入れられるものではなく、穏健なものでもないようですが、あなた方が武器を携えているのに門が閉ざされているのも不思議ではありませんか。」これらの提案はどれも受け入れられるものではなく、穏健なものでもないようですが、あなた方が武器を携えているのに門が閉ざされているのも不思議ではありませんか。」

4. イエスはこう語った。しかし、イドマヤ人の群衆は彼の言葉に耳を傾けず、町に容易に入ることができなかったため激怒した。将軍たちも武器を捨てるという申し出に憤慨し、誰かの命令で武器を捨てることは捕虜に等しいと考えた。しかし、彼らの指揮官の一人であるカスラスの息子シモンは、大騒ぎして自分の

部下の騒ぎを静め、大祭司たちが聞こえるように立って、次のように言った。「自由の守護者たちが神殿で拘留されているのも不思議ではない。我々の共通の町の門を閉ざす者たちがいるのだから。」彼らは、自分たちの国に忠誠を誓い、同時にローマ人を受け入れる用意がある。いや、ローマ人が来たら門に花輪を飾るつもりかもしれない。一方、彼らは自分たちの塔からイドマヤ人に話しかけ、自由を守るために手にした武器を投げ捨てるよう命じている。そして、彼らは我々の首都の警備を同族に任せようとしない一方で、彼らの間の争いの裁きを彼らに委ねると公言している。いや、彼らはある者が法的な裁判もなしに他人を殺したと非難する一方で、自分たち自身は不名誉なやり方で国民全体を非難し、かつてはそこに礼拝に来たすべての外国人にさえ開かれていたその都市を、今では自分たちの国から壁で遮断している。我々は確かに、あなた方のところへ、そして我々の同胞との戦いのために急いで来た。我々がそんなに急いで来た理由は、あなた方が不幸にも裏切ったあの自由を守るためである。あなた方は、おそらく、あなた方が監禁している人々に対しても、同様の罪を犯したでしょうし、彼らに対しても、我々に対して使うのと同じもっともらしい口実を集めたのでしょう。その後、あなた方は神殿内の人々を支配し、公務だけを任せている彼らを監禁しました。また、あなた方と最も近縁の国々に対して、都市の門を閉ざしました。そして、他の人々にそのような有害な命令を与えながら、あなた方は彼らに圧制されていると不平を言い、あなた方自身によって圧制されている人々を不正な統治者と呼んでいます。あなた方の行動の矛盾に気をとられているあなた方のこの言葉の乱用に耐えられる者は誰でしょうか。つまり、あなた方はイドマヤ人があなた方を首都から排除し、あなた方が自国の神聖な役職から排除しているということではないでしょうか。神殿に包囲されている者たちについて、彼らがあなたたちが高名な人物と呼んでいる暴君たちを罰する勇気があったにもかかわらず、彼らはあなたたちの悪事の仲間であったため、何の非難も受けずに、あなたたちから始めなかった、と文句を言うのは当然である。しかし、もしこれらの人々が公共の必要性が要求する以上に慈悲深かったのであれば、イドマヤ人である私たちは神のこの家を守り、共通の国のために戦い、外部から攻撃する者にも内部から裏切る者にも戦争で対抗する。ローマ人があなたたちを待つのに疲れるか、あなたたちが自由の味方となり、自由に対して行ったことを悔い改めるまで、私たちはここで鎧を着て城壁の前に留まるつもりである。」

5. イドマヤ人はシモンの言ったことに喝采を送ったが、イエスはイドマヤ人がすべての穏健な提案に反対し、町が両側から包囲されているのを見て、悲しんで立ち去った。イドマヤ人の心も安らかではなかった。彼らは町から追い出されたことで自分たちにもたらされた損害に激怒していた。熱心党は強力だったが、自分たちを支持する者はいないと考えたため、彼らはその件について疑念を抱き、その多くがそこに来たことを後悔した。しかし、何もせずに帰ってきた場合に彼らに伴うであろう恥辱は、彼らの後悔をはるかに上回り、非常に劣悪な野営地であったにもかかわらず、一晩中城壁の前で横たわっていた。というのは、その夜、ものすごい嵐が起こり、非常に激しい風が吹き、激しい雨が降り、稲妻が絶えず、恐ろしい雷鳴が響き、地面が驚くほど激しく揺れ、地震のような音がしたからである。これらの出来事は、世界の体制がこのような混乱に陥ったとき、人々に何らかの破滅が降りかかることの明白な兆候であった。そして、これらの不思議な出来事は、これから起こる大きな災難の前兆であったと誰もが推測するであろう。

6. さて、イドマヤ人と市民の意見は一致していた。イドマヤ人は、武器を取ったことで神が怒っており、首都に戦争を仕掛けた罰を逃れることはできないと考えていた。アナヌスとその一行は、戦わずして勝利し、神が彼らのために将軍として行動したと考えていた。しかし、実際には、彼らは将来起こることについて

誤った推測をしており、それらの出来事を敵に不吉なものにし、彼ら自身もそれらの悪影響を被ることになった。イドマヤ人は、体を一つに結んで互いに防護し、それによって体を温め、頭の上に盾をつなげて、雨にそれほど傷つかなかった。しかし、熱心党員たちは、自分たちよりもこれらの人々が危険にさらされていることを深く心配し、集まって、彼らを助ける方法を思いつくことができないかと周囲を見回した。彼らのうち、より熱烈な者たちは、武器を使って衛兵を強引に追い込み、その後、町の真ん中に突入し、助けに来た者たちに公然と門を開けるのが最善だと考えた。衛兵は混乱し、彼らの予期せぬ試みに屈するだろうと考えたからだ。特に彼らの大部分は武器を持たず、戦争の知識もなかった。また、市民の大群は簡単には集結せず、嵐で家に閉じ込められるだろう。そして、もし彼らの計画に危険があるなら、自分たちのせいで惨めに命を落としている大群を見過ごすよりは、自分たち自身でどんなことでも我慢する方がましだと考えた。しかし、彼らのうちのより慎重な者たちは、この強引な方法に反対した。なぜなら、彼らは周囲に衛兵が多数いるだけでなく、イドマヤ人のために町の城壁自体も厳重に監視されているのを見たからである。彼らはまた、アナヌスがいたるところにいて、毎時間衛兵のもとを訪れるだろうと考えた。確かに他の夜もそうしていたが、その夜は省略された。アナヌスの怠惰のせいではなく、運命の横暴な定めによるもので、アナヌス自身も、そして大勢の衛兵も彼とともに死ぬことになった。実際、夜は更け、嵐も非常にひどかったので、アナヌスは回廊の衛兵たちに寝る許可を与えた。一方、熱狂者たちは神殿の鋸を使って門のかんぬきを切り裂こうと考えていた。風の音と、それに劣らない雷の音も、ここで彼らの計画に加担し、鋸の音は他の者たちには聞こえなかった。

7. そこで彼らは密かに神殿から出て町の城壁へ行き、鋸を使ってイドマヤ人の向かいの門を開けた。最初イドマヤ人自身も恐怖に襲われ、アナヌスとその一団が攻撃に来ると想像して動揺したので、全員が右手を剣に当てて身を守った。しかし、すぐに彼らは自分たちに近づいて町に入ったのが誰なのかを知るようになった。そしてイドマヤ人がその時町を襲ったとしても、その時の彼らの激怒ぶりから、誰も彼らを一人残らず滅ぼすことを阻むことはできなかっただろう。しかし、彼らはまず熱心党員を拘束から解放しようと急いだ。彼らを連れ込んだ者たちは、彼らがそのように熱心に望んでいた。そして、彼らが苦難の最中に、彼らが来た目的の者たちを見落とさず、彼らをさらに大きな危険に陥れないようにするためであった。というのは、一度衛兵を捕らえてしまえば、町を襲撃するのは容易いが、町が一度警戒状態になれば、衛兵を倒すことはできない、なぜなら衛兵がそこにいると分かると、衛兵は彼らと戦うために身構え、神殿に入るのを妨害するからである。

E.5.5　第 5 章

E.5.6　第 6 章

E.5.7　第 7 章

E.5.8　第 8 章

E.5.9　第 9 章

E.5.10　第 10 章

E.5.11　第 11 章

E.6　第五巻

E.6.1　第 1 章

E.6.2　第 2 章

E.6.3　第 3 章

E.6.4　第 4 章

E.6.5　第 5 章

寺院の説明。

1. さて、この神殿は、すでに述べたように、堅固な丘の上に建てられました。最初、頂上の平地は、聖なる家と祭壇を置くにはほとんど十分ではありませんでした。周囲の土地は非常に不均一で、断崖のようでした。しかし、神殿を建てたソロモン王が東側に壁を築いたとき、神殿のために築かれた土手の上に一つの回廊が加えられ、他の部分には聖なる家は何もなかったのです。しかし、後の時代に、人々は新しい土手を加え、12 丘はより広い平地になりました。その後、北側の壁を壊し、神殿全体の周囲に十分なだけの土地を確保しました。そして彼らは丘の麓から神殿の周囲 3 面に壁を築き、期待以上の大工事を終えると(この工事に長い年月が費やされ、神聖な財宝はすべて使い果たされたが、それでもなお、居住可能な全地から神に送られた貢物によって補充されていた)、上庭を回廊で囲んだ。これは神殿の最下庭を後から行ったのと同じである。この回廊の最下部分は 300 キュビトの高さに建てられ、場所によってはそれ以上になった。しかし、基礎の深さ全体は見えなかった。彼らは土を運び、谷を埋め立て、町の狭い通りと同じ高さにしようとしたからである。そこでは 40 キュビトの大きさの石が使われた。当時彼らが持っていた莫大な資金と人々の寛大さにより、この試みは信じられないほど成功した。そして、達成されることは期待もできなかったが、忍耐と長い時間によって、完成に至った。

2. さて、これらの基礎の上にある作品は、そのような基礎に値しないものではありませんでした。すべての回廊は二重で、それらに属する柱は高さが 25 キュビトで、回廊を支えていました。これらの柱はそれぞれ 1 つの完全な石でできており、その石は白い大理石でした。屋根は奇妙な彫刻が施された杉で飾られていました。これらの回廊の自然の壮麗さと優れた磨き、そして継ぎ目の調和は、非常に注目すべき眺めを提供しました。また、外側には画家や彫刻家の作品で飾られていませんでした。回廊（最外庭）の幅は 30 キュビトで、アントニアの塔を含めてその全体の周囲は 6 ファーロングでした。空気にさらされた中庭全体にはあらゆる種類の石が敷かれていました。これらの [最初の] 回廊を通り抜けて神殿の第二の中庭に行くと、周囲は石で造られた仕切りがあり、その高さは 3 キュビトでした。その造りは非常に優美で、その上には等間隔で柱が立っていました。柱には、ギリシャ文字とローマ文字で「外国人は聖域に入ってはならない」という清浄の掟が記されていました。神殿の第二の中庭は「聖域」と呼ばれ、第一の中庭から 14 段の階段で上がれる場所でした。この中庭は四角形で、周囲には独特の壁がありました。建物の高さは、外側は 40 キュビトでしたが、13 階段で隠されており、内部の高さはわずか 25 キュビトでした。丘のより高い部分に面して階段で建てられているため、丘自体に覆われて内部を完全には見分けることができませんでした。この 13 段の向こうには 10 キュビトの距離があり、これはすべて平らでした。そこからさらに 5 キュビトの階段があり、門に通じていました。門は北側と南側に 8 つ、その両側にそれぞれ 4 つ、東側には必然的に 2 つありました。その側には女性のための仕切りが建てられていたため、女性のための 2 番目の門が必要でした。この門は最初の門の向かい側の壁から切り取られました。他の側にも南側の門と北側の門が 1 つずつあり、そこから女性の庭への通路がありました。他の門に関しては、女性はそこを通ることは許されていませんでした。また、女性が自分の門を通るときも、自分の壁の外に出ることはできませんでした。この場所は、我が国の女性にも、他の国の女性にも、同じ国の女性であれば平等に割り当てられた。この中庭の西側には門は全くなく、壁はそっち側に完全に建てられていた。しかし、門の間にある回廊は壁から部屋の前まで内側に伸びていた。回廊は非常に美しく大きな柱で支えられていた。これらの回廊は単一で、その大きさを除けば、下庭の回廊に劣るものではなかった。

3. これらの門のうちの九つは、そのすべての側面が金銀で覆われており、その戸口の側柱や鴨居も同様であった。しかし、聖なる宮の外にある一つの門は、コリントの青銅でできていて、銀と金で覆われているだけの門よりはるかに優れていた。それぞれの門には二つの扉があり、その高さはそれぞれ三十キュビト、幅は十五キュビトであった。しかし、それらの門の内側には三十キュビトの広い空間があり、それぞれの側に部屋があり、その幅と長さはともに塔のように建てられており、その高さは四十キュビト以上あった。また、これらの部屋を支えている二本の柱があり、その周囲は十二キュビトあった。他の門の大きさはどれも同じであったが、聖なる宮の門の東側に開いているコリントの門の上の門は、それよりずっと大きく、その高さは五十キュビトであった。その扉は 40 キュビトあり、他の扉よりもずっと豪華で厚い銀と金の板で覆われ、非常に高価な方法で装飾されていました。これらの 9 つの門には、ティベリウスの父であるアレクサンダーによって銀と金が注がれました。さて、女性の庭の壁からこの大きな門まで 15 段の階段がありましたが、他の門からそこに続く階段は 5 段短かったです。

4. 神殿の最も神聖な部分である、中庭の中央に置かれた聖なる家は、12 段の階段で上がれ、正面の高さと幅は等しく、それぞれ 100 キュビトであったが、後ろは 40 キュビト狭かった。正面には、両側に肩と呼ばれるものがあり、さらに 20 キュビト続いていた。最初の門は高さ 70 キュビト、幅 25 キュビトであっ

たが、この門には扉がなかった。なぜなら、それは天国の普遍的な可視性を表し、どこからも排除できないことを表していたからである。正面は全面が金で覆われており、そこから家のより内側の最初の部分が全て見えた。その部分は非常に大きかったので、より内側の門の周りの部分はすべて、それを見る人々には輝いて見えた。しかし、家全体が内部で二つに分かれていたため、私たちの目に見えていたのは最初の部分だけでした。その高さは、全体にわたって 90 キュビト、長さは 50 キュビト、幅は 20 キュビトでした。しかし、家の最初の部分のこの端にあった門は、すでに述べたように、その周囲の壁全体と同様に、全体が金で覆われていました。門の上には金のブドウの木があり、そこから人の背丈ほどもあるブドウの房が垂れ下がっていました。しかし、この家は二つに分かれていたため、内側の部分は外側よりも低く、高さ 55 キュビト、幅 16 キュビトの金の扉がありました。しかし、これらの扉の前には、扉と同じ大きさのベールがありました。それはバビロニアのカーテンで、青、上質の亜麻布、緋色、紫で刺繍されており、その織り目は本当に素晴らしいものでした。また、この色の混合には神秘的な解釈が伴うのではなく、宇宙のある種のイメージである。緋色は謎めいた火を、上質の亜麻は大地を、青は空気を、紫は海を意味しているようであった。この類似性の基礎となる色は、この二つの色であるが、上質の亜麻と紫はそれぞれ独自の基礎の起源を持ち、一方は大地から、他方は海から生まれた。このカーテンには、生き物を表す十二の星座を除いて、天の神秘的なものすべてが刺繍されていた。

5. 誰かが神殿に入ると、その床が彼らを迎えた。神殿のこの部分の高さは六十キュビト、長さも同じであったが、幅はわずか二十キュビトであった。しかし、その六十キュビトの長さはまた分割され、その最初の部分は四十キュビトで切り取られ、その中には、すべての人々の間で非常に素晴らしく有名な三つのもの、すなわち、燭台、供えのパンのテーブル、および香の祭壇があった。七つのともしびは七つの惑星を意味していた。燭台からはたくさんのともしびが出ていたのである。テーブルの上の十二のパンは、黄道十二宮と一年を意味していた。しかし、香の祭壇は、海から補給された 13 種類の甘い香りのする香料によって、神が地球上の居住不可能な部分と居住可能な部分の両方にあるすべてのものの所有者であり、それらはすべて神の使用のために捧げられるべきであることを意味しました。しかし、すべての神殿の中で最も奥まった部分は 20 キュビトでした。これもまた、幕によって外側の部分から分離されていました。そこには何もありませんでした。そこは近づくことも侵すこともできず、誰にも見られず、至聖所と呼ばれていました。さて、神殿の下の部分の両側には小さな家があり、そこから他の家へと通じる通路がありました。それらの数は非常に多く、3 階建てでした。また、神殿の門からそれらの両側に入口がありました。しかし、神殿の上部には、そのような小さな家はありませんでした。神殿はそこでは狭く、40 キュビト高く、下部よりも小さい本体であったからです。したがって、床から 60 キュビトを含む全体の高さは、100 キュビトであったことがわかります。

6. さて、神殿の正面の外面には、人々の心や目を驚かせるようなものは何もありませんでした。なぜなら、神殿は重厚な金の板で全面が覆われていて、太陽が昇る最初の瞬間に、非常に燃えるような輝きを反射し、無理やり見ようとする人たちは、太陽の光線を見るときと同じように、目をそらしたからです。しかし、この神殿は、遠くから近づいてくると、見知らぬ人には、雪に覆われた山のように見えました。金メッキされていない部分は、非常に白かったからです。その頂上には、鳥が止まって汚れないように、先の尖った釘が付いていました。その石の中には、長さが 45 キュビト、高さが 5 キュビト、幅が 6 キュビトのものもありました。この神殿の前には、高さ 15 キュビトの祭壇があり、長さと幅は同じで、それぞれの寸

法は 50 キュビトでした。神殿は四角形で、角は角のようであった。そこに至る通路は、知覚できないほどの傾斜をなしていた。それは鉄の道具を使わずに造られ、いかなる鉄の道具もそれに触れることはなかった。また、高さ約 1 キュビトの仕切り壁があり、それは良質の石で造られ、見栄えがよいようになっており、聖なる家と祭壇を囲み、外にいる人々を祭司たちから遠ざけていた。さらに、淋病やらい病にかかっている者は完全に町から締め出され、女性も月経が続くと神殿から締め出され、その不浄から解放されたときも、前述の限度を超えることは許されなかった。男性も、完全に清浄でない者は神殿の内庭に入ることを禁じられ、清浄でない祭司たち自身も神殿に入ることを禁じられた。

7. さて、身体に何らかの欠陥があるために奉仕できない祭司の家系の者たちは皆、そのような欠陥のない者たちとともに仕切りの内側に入り、家系のゆえに彼らと分け前をもらいましたが、それでも自分の私服以外は何も着ませんでした。なぜなら、奉仕する者以外は誰も聖なる衣を着ていなかったからです。しかし、身に何の傷もない祭司たちは、上等な亜麻布を着て祭壇に上りました。彼らは、奉仕の規則に違反する恐れがあるため、主に酒を控えました。大祭司も彼らとともに上りました。もちろんいつもというわけではなく、七日目と新月、そして毎年祝う私たちの国に属する祭りがあるときだけでした。彼が儀式を行うとき、彼は股下から股下まで届くズボンを履き、亜麻布の内衣と、青い衣を着ていた。その衣は丸く、縫い目がなく、房飾りが付いていて、足まで届いていた。房飾りには金の鈴も付いており、その中にはざくろが混じっていた。鈴は雷を、ざくろは稲妻を意味していた。しかし、その衣を胸に結びつける帯には、金、紫、緋色、また上等の亜麻布と青色の様々な色の五列の刺繍が施されていた。その色は、神殿の垂れ幕にも刺繍が施されていたことを、私たちが以前あなた方に話したとおりである。エポデにも同様の刺繍が施されていたが、金の量はもっと多かった。その形は、胸にかけるストマッカーの形をしていた。その上には、小さな盾のような二つの金のボタンが付いていて、エポデを衣に留めていた。これらのボタンには、その国の部族の名前が刻まれた、非常に大きくて非常に優れた 2 つの赤縞瑪瑙がはめ込まれていました。反対側には、一方に 3 つ、もう一方に 4 つの、合計 12 の石がぶら下がっていました。赤縞瑪瑙、トパーズ、エメラルド、カーバンクル、ジャスパー、サファイア、瑪瑙、紫水晶、リグレ、縞瑪瑙、緑柱石、貴石で、そのそれぞれに前述の部族の名前が刻まれていました。また、上等な亜麻布のミトラが彼の頭を囲み、青いリボンで結ばれていました。その周囲には別の金の冠があり、その中に神聖な名前（神の）が刻まれていました。それは 4 つの母音で構成されています。しかし、大祭司は他の時にはこれらの衣服を着用せず、より簡素な服装をしていました。彼がそれをしたのは、神殿の最も神聖な場所に入ったときだけで、それは年に一度、私たち全員が神への断食を行う習慣がある日にだけだった。これが町と神殿に関することのすべてである。ただし、これに関連する習慣と法律については、より正確な話はまた別の機会にしましょう。ここでは触れられていない、これに関連する多くの事柄が残っているからです。

8. さて、アントニアの塔は、神殿の庭の二つの回廊の角、すなわち西側と北側の回廊の角に位置していた。それは高さ五十キュビトの岩の上に建てられ、大きな断崖の上にあった。それはヘロデ王の作品であり、彼はそこに彼の生まれながらの寛大さを示した。第一に、岩自体は、装飾のため、また登ろうとする者も降りようとする者も足を踏み入れることができないように、基礎から滑らかな石片で覆われていた。その隣、そして塔自体の建物に来る前に、高さ三キュビトの壁があったが、アントニアの塔自体の空間全体は、その壁の内側、高さ四十キュビトまで建てられていた。内部は宮殿のような広さと形をしており、中庭や水浴場、野営地用の広い空間など、あらゆる種類の部屋や設備に分かれていた。そのため、都市に必要な

設備がすべて揃っているため、複数の都市で構成されているように見えるが、壮麗さから宮殿のようであった。また、全体の構造は塔に似ており、四隅にはさらに 4 つの塔があった。他の塔の高さはわずか 50 キュビトであったが、南東の角にある塔は 70 キュビトあり、そこから神殿全体を眺めることができた。しかし、神殿の 2 つの回廊とつながる角には、両方の回廊に下りる通路があり、そこを通って衛兵 [この塔には常にローマ軍団が駐留していた] が、ユダヤの祭りのときには武器を持って回廊の間を何度も行き来し、人々が何か新しいことをしようとしないよう監視した。神殿は町を守る要塞であり、アントニアの塔は神殿を守るものであった。そして、その塔には、これら三つの守備隊がいた。14 また、上部の町に属する特別な要塞があり、それはヘロデの宮殿であった。しかし、すでに述べたように、ベゼタの丘のために、アントニアの塔とは分けられていた。そして、アントニアの塔が立っていたその丘は、これら三つの中で最も高かったので、新しい町に隣接しており、北側の神殿の視界を遮る唯一の場所であった。そして、今のところは、町とその周囲の城壁について述べたので十分であろう。なぜなら、私は、それについて、他の場所でより正確な説明をしようと考えたからである。

E.6.6　第 6 章

E.6.7　第 7 章

E.6.8　第 8 章

E.6.9　第 9 章

E.6.10　第 10 章

E.6.11　第 11 章

E.6.12　第 12 章

E.6.13　第 13 章

E.7　第六巻

約 1 か月の間隔を含みます。ユダヤ人がティトゥスによるエルサレム占領まで追い込まれた極限状態から。

E.7.1　第 1 章

悲惨さがさらに悪化し、ローマ軍がアントニアの塔を攻撃した経緯。

1. こうしてエルサレムの惨状は日増しに悪化し、反乱分子たちは、飢餓が人々を襲った後、自分たちをも襲う中、自分たちが受けている災難にますます苛立っていた。そして実際、山積みになった多数の死体は恐ろしい光景で、悪臭を放ち、町から出撃して敵と戦おうとする者たちの妨げとなった。しかし、すでに一万人の殺人に慣

れていた者たちは、死体を踏みつけながら行進しなければならなかったので、彼らは恐れることはなく、死体の上を行進する者たちを憐れむこともなかった。また、死者に対するこの侮辱が自分たちにとって不吉な前兆であるとも考えなかった。しかし、彼らはすでに自国の人々を殺害して右手を汚しており、その状態で外国人と戦うために駆け出したため、あたかも神が彼らを罰するのに遅すぎるかのように、神自身を非難したように私には思える。というのは、彼らは勝利の希望を持っているかのように戦争を進めなかったからである。彼らはすでに陥っていた救済の絶望を、残忍なやり方で誇っていたからである。そして今や、ローマ人は、物資を集めるのに非常に苦労していたにもかかわらず、すでに述べたように、都市に隣接する田園地帯のすべての木を切り倒した後、21 日間で堤防を築き上げた。そして実際、田園地帯の景色自体が憂鬱なものであった。というのは、以前は木々や美しい庭園で飾られていた場所が、今ではどこもかしこも荒れ果て、木々はすべて切り倒されていたからである。かつてユダヤやこの都市の最も美しい郊外を見た外国人が、今は砂漠と化したこの地を目にすれば、この大きな変化に悲嘆せずにはいられない。戦争が美の痕跡をすべて完全に破壊してしまったからである。また、以前この地を知っていた人が、今突然この地を訪れても、再びこの地を知ることはできなかったであろう。しかし、たとえその人がこの都市にいたとしても、それでもこの地を尋ねたであろう。

2. そして今や堤防が完成し、ローマ人とユダヤ人の双方に恐怖の根拠を与えた。というのは、ユダヤ人は堤防を焼き払わない限り、都市は陥落するだろうと予想していたが、ローマ人も、一度堤防を焼き払ったら、決して陥落できないと予想していた。なぜなら、物資がひどく不足し、兵士たちの肉体は過酷な労働で衰弱し始め、魂は多くの失敗に終わり弱り始めたからである。いや、市内で起きた災難そのものが、市内の災難よりもローマ人にとって大きな落胆となった。ユダヤ人の戦士たちが、そのようなひどい苦難の中でもまったく慰められず、一方で彼ら自身も勝利の望みがどんどん薄れていき、堤防は敵の策略に、武器は壁の堅固さに、最も接近した戦いは攻撃の大胆さに屈することを余儀なくされたからである。そして、何よりも彼らを落胆させたのは、ユダヤ人の勇敢な魂が、暴動、飢餓、そして戦争そのものによって彼らが被っている多くの苦難を凌駕していることに気づいたことだった。彼らは、ユダヤ人の攻撃の激しさは無敵であり、彼らが示す敏捷性は災難によっても落胆することはないだろうと容易に想像した。不幸を勇気の向上に変えた幸運な者たちが、耐えられないはずがないからだ。これらの考慮から、ローマ人は以前よりも川岸の警備を厳重にした。

3. しかし、ヨハネと彼の仲間は、この城壁が崩れ落ちた場合に備えて、その後の安全確保に気を配り、破城槌が彼らに向けられる前に任務に取りかかった。しかし、彼らはやろうとしていたことを成し遂げることができず、たいまつを持って出かけ、岸に近づく前に大いに落胆して戻ってきた。その理由は次のとおりである。第一に、彼らの行動は一致しているようには見えず、別々のグループに分かれて、別々の間隔で、ゆっくりと、おずおずと、一言で言えば、ユダヤ人らしい勇気もなく出かけた。というのは、彼らは今や、わが国民特有の、大胆さ、攻撃の激しさ、敵に一斉に突撃すること、そして最初は成功しないものの、やろうとしていることを粘り強く続けることに欠陥があったからである。しかし、彼らは今、いつもより気だるく出撃し、同時にローマ軍がいつもより勇敢に隊列を組んでおり、体と鎧で堤防を守り、四方八方から火が入り込む余地がないようにしていた。そして、彼らの魂はみな非常に勇敢で、隊列を離れるくらいなら死んでもいいくらいだった。というのは、もし彼らの作品が一度でも焼け落ちれば、すべての希望が断たれるという考えに加えて、兵士たちは、勇気には狡猾さが、鎧には狂気が、技術には群衆が、そしてローマ人にはユダヤ人がまったく手ごわいことを、非常に恥じていたからである。ローマ軍には、今やもう一つの有利な点があった。それは、ユダヤ人が町から出てくるとき、包囲用の兵器が彼らと協力して、遠くのユダヤ人にまで矢や石を投げることができたということである。それによって

倒れた者は隣にいる者の邪魔となり、さらに進む危険が彼らの試みに対する熱意をそぐのであった。そして矢の下を逃げた者たちは、接近戦になる前に敵の隊列の整然とした緊密さに恐れをなした者もいれば、槍で刺されて引き返した者もいた。ついに彼らは互いの臆病さを非難し、何もせずに撤退した。この攻撃はパネムス（タムズ）の月の最初の日に行われた。ユダヤ人が撤退すると、ローマ軍は武器を持ってきたが、その間ずっとアントニアの塔から石が投げつけられ、火と剣、そしてユダヤ人が必然的に利用したあらゆる種類の矢で攻撃された。というのも、ローマ軍は自分たちの城壁に大きく依存しており、ローマ軍の武器を軽蔑していたにもかかわらず、ローマ軍が武器を持ってくるのを阻止しようと努めたからである。ローマ人は逆に激しく抵抗した。ユダヤ人のこの熱心さは、アントニアの塔の壁が弱く、基礎が腐っていたため、塔に何らかの影響が及ぶのを避けるためだと考えたからである。しかし、塔は兵器の打撃に屈することはなかった。しかし、ローマ軍は敵の矢が絶えず投げつけられる衝撃に耐え、上から襲いかかるいかなる危険にも屈することはなく、そこで兵器を投入した。しかし、そのとき、彼らは敵の下にいて、投げつけられた石によってひどく傷ついたので、彼らのうちの何人かは盾を体に投げつけ、一部は手、一部は体、一部はカラスを使って、塔の基礎を掘り崩し、苦労して石を 4 つ取り除いた。その後、両軍に夜が訪れ、当面この戦いは終わった。しかし、その夜、ジョンが以前に策略を使って堤防を崩した場所の城壁は破城槌によって大きく揺さぶられ、地面が崩れて突然城壁が崩れ落ちた。

4. この事故が予期せず起こったとき、双方の心はさまざまな影響を受けた。ユダヤ人は、壁の陥落が予期せぬことであり、その場合に備えて何も準備していなかったため、落胆するだろうと予想されたが、アントニアの塔自体はまだ立っていたため、勇気を奮い起こした。ローマ軍は、壁の陥落に予想外の喜びを覚えたが、ヨハネとその一行がその中に築いた別の壁を見て、すぐに喜びが消えた。しかし、この第二の壁への攻撃は、以前の壁の攻撃よりも容易であるように思われた。なぜなら、今や崩れ落ちた以前の壁の部分を通って、この壁まで登るのがはるかに容易であるように思われたからである。この新しい壁は、アントニアの塔よりもずっと脆弱であるように思われたため、ローマ軍は、この壁があまりにも突然に建てられたため、すぐに倒壊するだろうと考えた。しかし、誰も今この壁に登ろうとはしなかった。なぜなら、最初に登ろうとした者は、必ず殺されるからである。

5. さて、ティトゥスは、戦争における兵士の機敏さは主に希望と善意の言葉によって刺激されるということ、また、激励と約束はしばしば人々に危険を忘れさせ、時には死そのものを軽蔑させるということを考慮して、軍隊の最も勇敢な部分を集め、これらの方法で兵士たちに何ができるかを試した。「おお、戦友よ」と彼は言った。「危険のないことをするように人々に勧めることは、まさにその勧めを受ける人々にとって不名誉なことである。そして実際、勧める側にとっても、それは彼自身の臆病さの議論である。したがって、私は、そのような勧めは、事態が危険な状態にあり、それでも誰もが自ら試みる価値がある場合にのみ利用されるべきであると考える。したがって、この壁を登るのは困難な仕事であるという点で、私はあなたと完全に同じ意見である。しかし、勇敢さに対する名声を望む人々が、栄光のうちに死ぬことは勇敢なことであり、ここで必要な勇気は最初に試みを始める人々に報われないことはないと私が特に示したときに、その後に明らかになるような困難と格闘するのは適切である。そして、あなたたちを説得するための私の最初の議論は、おそらく一部の人があなたたちを思いとどまらせるのに適切であると考えるであろうもの、つまり、彼らの過酷な状況下でさえ、これらのユダヤ人の不屈さと忍耐から取ろう。なぜなら、平時においても戦争のやり方を教え込まれ、また戦争で勝利を収めてきたローマ人であり私の兵士であるあなたがたが、手腕においても、あるいは魂の勇気においても、ユダヤ人に劣るというのは、似つかわしくないことであり、特にあなたがたが勝利の最終段階にあり、神ご自身の助けを受けているときに、そうであるからだ。私たちの不幸はユダヤ人の狂気によるものであり、彼らの苦しみはあなたがたの勇

気と神があなたがたに与えた助けによるものである。彼らが起こした暴動、彼らが受けている飢餓、彼らが今耐えている包囲、そして私たちの軍隊の力なしに彼らの城壁が崩壊したことは、彼らに対する神の怒りと、神が私たちに与えた助けの表れでなくて何だろうか。したがって、あなた方が本当に優れている人々に対して自分達が劣っていることを示すことも、あなた方に与えられた神の助けを裏切ることも、あなた方にとって適切ではない。そして実際、ユダヤ人は長い間他人の奴隷になることを学んできたので、見捨てられてもあまり恥じる必要はないが、それでも死を軽蔑し、もはやそうではないようにし、我々を征服する希望ではなく、我々の真ん中に頻繁に突撃してくることは、卑しく価値のないこととしか考えられない。彼らの勇気を示すためだけに。我々は、陸と海に属する世界のほとんどすべてを支配しており、もし彼らを征服しなければ非常に恥ずべきことになるので、一度も危険を伴う敵に対する試みをせず、我々が持っている勇敢な武器を持って何もせずにじっと座り、飢餓と幸運が我々の仕事を成し遂げるまで待つだけです。そして、我々が望むものをすべて手に入れるために、少しの危険を冒して力を得たときです！我々がアントニアのこの塔に登れば、我々は都市を占領します。もし都市内の人々と戦う機会がもうあれば、それはないと思いますが、その時我々は丘の頂上にいるでしょうから。1 そして敵が息をつく前に攻撃すれば、これらの利点は我々に確実かつ突然の勝利を約束する。私としては、今のところ戦争で死んだ人たちを賞賛するつもりはない。2 勇敢な戦いの最中に殺された人々の不滅性については語るのを怠ることはできない。しかし、反対の性格の人たちが平和な時に何らかの病気で死ぬかもしれないと呪わずにはいられない。彼らの魂は肉体とともに墓場に送られる運命にあるからだ。剣によって戦いで肉体から切り離された魂は、エーテル、つまり最も純粋な元素に受け入れられ、星々の間に置かれた仲間と結合し、善良な悪魔や幸運の英雄となり、その後子孫にその姿を見せるということを知らない徳の高い人がいるだろうか。一方、病んだ肉体とともに消耗する魂には、地下の夜が訪れて無に溶解し、深い忘却が訪れてすべての記憶を消し去るが、それにもかかわらず、彼らはこの世のすべての汚れや穢れから清らかである。それで、この安楽さの中で、魂は同時にその生命、その肉体、そしてその記念碑の極限に達するのです。しかし、神はすべての人に死が必然的に訪れると定めたので、剣はどんな病気よりもその目的に適した道具です。では、運命に明け渡さなければならないものを公共の利益に明け渡さないことは、なぜ非常に卑しいことではないのでしょうか。そして、この話を私がしたのは、最初にこの壁を登ろうとする者は、その試みで殺されるに違いないが、それでも真の勇気のある者は最も危険な試みでさえ逃れるチャンスがあるという仮定のためです。第一に、以前の壁の倒壊した部分は簡単に登ることができます。そして、新しく建てられた壁は簡単に破壊されます。ですから、あなた方の多くは勇気を奮い起こしてこの仕事に取り掛かり、互いに励まし合い、助け合ってください。そうすれば、この勇気はすぐに敵の心を打ち砕くでしょう。そして、おそらくあなた方のような素晴らしい計画は流血なしに達成されるかもしれません。なぜなら、ユダヤ人があなた方が彼らのところへ向かおうとする最初の段階であなた方を妨害しようとすることは当然想定されるからです。しかし、あなた方がいったん彼らから身を隠し、力ずくで追い払えば、あなた方のほんの少数が彼らを阻止して壁を乗り越えたとしても、彼らはあなた方の努力をこれ以上持ちこたえることはできないでしょう。最初に壁を登った人については、私が与えるであろう報酬によって、他の人が彼を羨むようにしなかったとしたら、私は恥ずかしさで顔を赤らめます。そのような人が命からがら逃れたなら、彼は今彼と同等である他の人々を支配するでしょう。しかし、試みで死んだ者に最大の報酬が与えられることも事実です。」3

6. ティトゥスのこの言葉を聞いて、群衆の残りは、このような大きな危険に怯えた。しかし、サビヌスという名の、シリア生まれの兵士がいた。彼は、行動においても、示した魂の勇気においても、非常に不屈の精神の持ち

主のように見えた。しかし、彼が任務に就く前は、彼の体は弱く、兵士には不向きだと誰もが思っただろう。なぜなら、彼の肌は黒く、肉は痩せて薄く、肉づきが悪かったからだ。しかし、この小さな体には、ある種の英雄的な魂が宿っていた。その体は、彼の中にあるあの特別な勇気には、実に狭すぎた。したがって、彼は最初に立ち上がり、こう言った。「私は喜んであなたに身を委ねます、シーザー。まず城壁を登り、私の勇気と決意に運命が続くことを心から望みます。そして、もし不運が私の計画の成功を阻むことがあっても、私の不運は予期せぬものではなく、あなたのために自ら死を選ぶものであることに留意してください。」こう言って、左手で盾を頭上に広げ、右手で剣を抜くと、ちょうどその日の午後六時ごろ、城壁に向かって行進した。彼の勇敢さを真似しようと決心した他の 11 人が彼に続いたが、それ以上ではなかった。しかし、それでもこの人物は彼ら全員の中で主役であり、神の怒りに駆られたように先頭に立った。すると、城壁の警備員がそこから彼らを撃ち、四方八方から無数の矢を彼らに投げつけた。また、非常に大きな石を彼らの上に転がし、彼と一緒にいた 11 人のうちの何人かを倒した。しかしサビヌス自身は、投げつけられた矢に当たったが、その矢に圧倒されたにもかかわらず、城壁の頂上に登り敵を敗走させるまで攻撃の勢いを緩めなかった。ユダヤ人たちは彼の強大な力と勇敢な精神に驚嘆し、さらに、城壁の上に登ったのは実際よりも多くの者だと想像したため、敗走した。ここで、運がまだ美徳を妬み、輝かしい業績の達成を常に妨げていると嘆かずにはいられない。これは、私たちの前にいる男が目的を達成したばかりのときの場合だった。そのとき、彼はある大きな石につまずき、非常に大きな音を立ててその上に真っ逆さまに倒れたのである。そこでユダヤ人たちは引き返し、彼がひとりで倒れているのを見て、四方八方から矢を投げつけた。しかし、彼はひざまずいて盾で身を隠し、まず彼らから身を守った。そして、彼に近づいた者の多くを傷つけたが、受けた傷の多さのせいで、彼はすぐに右手を緩めざるを得なくなり、ついには体中が矢で覆われて息絶えた。彼はその勇敢さゆえに、もっとましな運命に値する者だったが、予想通り、あまりにも大きな試みで倒れた。彼の仲間の残りは、ユダヤ人が 3 人を石で打ち砕き、壁の頂上に登ったところで殺害した。他の 8 人は負傷し、引きずり降ろされて野営地に運ばれた。これらのことは、パネムス（タムズ）の月の 3 日目に行われた。

7. 二日後、最前線にいて川岸の見張りをしていた十二人の男たちが集まり、第五軍団の旗手と騎兵隊の二人、そしてラッパ手一人を呼び寄せた。彼らは夜の九時ごろ、音を立てずに廃墟を抜けてアントニアの塔に向かった。そして眠っている最初の衛兵の喉を切り裂いた後、城壁を占領し、ラッパ手にラッパを鳴らすよう命じた。すると、残りの衛兵は突然立ち上がり、何人立ち上がったか誰にも分からないうちに逃げ去った。彼らは恐怖から、またラッパの音を聞いて、敵の大勢が立ち上がったと思ったからである。しかし、シーザーは合図を聞くとすぐに、軍隊に直ちに武装するよう命じ、指揮官たちとともにそこへ行き、まず最初に、彼とともにいた選抜兵とともに上っていった。ユダヤ人が神殿へ逃げ去ろうとしていたとき、彼らはヨハネがローマ軍の土手の下に掘った坑道に落ちた。そこで、ユダヤ軍の両部隊、ヨハネの部隊とシモンの部隊の反乱分子が彼らを追い払った。そして、最高レベルの力と敏捷性において、まったく不足はなかった。なぜなら、彼らは、ローマ軍が神殿に侵入すれば、自分たちは完全に破滅するとみなしていたからである。ローマ軍も同じことを、彼らの全征服の始まりとみなしていた。そこで、神殿の入り口で恐ろしい戦いが繰り広げられ、ローマ軍は神殿を占領するために押し寄せ、ユダヤ人は彼らをアントニアの塔まで追い返していた。その戦いでは、槍も槍も双方とも役に立たず、双方とも剣を抜いて、白兵戦を繰り広げた。この戦いの間、両軍の兵士の配置は区別がつかず、場所が狭いために兵士たちが互いに入り乱れて混乱し、無作為に戦った。一方、立てられた音は、非常に大きな音であったため、不明瞭な形で耳に届いた。両軍で大虐殺が行われ、戦闘員たちは死んだ者の死体や鎧を踏みつけ、粉々に打ち砕い

た。したがって、戦いがどちらの側に傾いたとしても、有利な者は互いに前進するよう励まし合い、敗れた者は大いに嘆いた。しかし、それでも逃げる余地も追撃する余地もなく、無秩序な革命と退却が続き、軍は互いに入り乱れていた。しかし、最前列にいる者たちは、殺すか殺されるかのどちらかを余儀なくされていた。逃げ場は全くなかった。なぜなら、両軍とも後ろから来た者たちが、前にいる者たちを進軍させ、軍の間に隙間を作らせなかったからである。ついに、ユダヤ人の激しい熱意はローマ軍の技量にはかなわず、戦いは完全にその方向に傾いた。戦いは夜の 9 時から朝の 7 時まで続いたが、ユダヤ人は群れをなして進軍し、神殿が危険にさらされていることを動機としていた。ローマ軍はここに軍の一部しか残っていなかった。なぜなら、その側の兵士たちが頼りにしていた軍団は、彼らのところまで来ていなかったからである。そのため、現時点では、ローマ軍はアントニアの塔を占領するだけで十分だと考えた。

8. しかし、ビテュニア出身の百人隊長ユリアンがいた。彼は非常に評判が高く、以前その戦争で私が会ったことがあり、その戦闘技術、肉体の強さ、そして魂の勇気の両方において最も名声の高い人物の一人であった。この男は、ローマ軍が敗走し、悲惨な状況にあるのを見て（アントニアの塔でティトゥスの傍らに立っていた)、飛び降り、すでに勝利していたユダヤ人をたった一人で逃げさせ、神殿の内庭の隅まで退却させた。群衆は彼の力も激しい攻撃も単なる人間のものではないと考えたのか、彼から群がって逃げ去った。そこで、彼は散り散りになっていたユダヤ人の真ん中を突進し、捕まえた者を殺した。実際、カエサルの目にこれより素晴らしいもの、あるいは他の人々にこれより恐ろしいものに映った光景は他になかった。しかし、彼自身も運命に追われており、人間に過ぎない彼が逃れることは不可能だった。なぜなら、彼の靴は厚くて鋭い釘でいっぱいだったからである。他の兵士たちと同じように、彼も神殿の舗道を走っているときに足を滑らせ、鎧が立てた大きな音とともに仰向けに倒れた。逃げていた者たちは引き返した。そこでアントニアの塔にいたローマ兵たちは、その男を恐れて大声で叫んだ。しかしユダヤ人たちは群がって彼を取り囲み、槍や剣で四方八方から彼を襲った。彼は盾にこれらの鉄の武器の打撃を何度も受け、何度も立ち上がろうとしたが、襲ってきた者たちに倒された。しかし、横たわったまま、剣で何人もの敵を刺した。また、致命傷を受ける可能性のある体の部位はすべて兜と胸当てで覆われていたため、すぐには殺されなかった。彼もまた首を体に引き寄せ、他の手足はすべて粉砕され、誰も彼を守ろうとはせず、運命に身を任せた。さて、カエサルはこの非常に勇敢な男に、特に大勢の人々の目の前で殺されたことに深く心を痛めた。彼自身も助けに行きたいと思ったが、その場所は許してくれず、助けることのできる者もあまりに恐れおののいて試みることができなかった。こうして、ユリアヌスは死と長い間格闘し、致命傷を与えた者のうち無傷で済ませた者はほとんどいなかったが、ついには首を切り裂くことができた。そして、ローマ人の間だけでなく、カエサル自身だけでなく、敵の間でも非常に大きな評判を残した。その後、ユダヤ人が彼の死体を拾い上げ、ローマ人を再び逃げさせ、アントニアの塔に閉じ込めた。さて、ユダヤ人側のこの戦いで最も勇敢に戦い、最も熱心に戦ったのは、ヨハネの党からはアレクサスとギュフテウス、シモンの党からはマラキア、メルトの子ユダ、イドマヤ人の司令官ソサスの子ヤコブ、そして熱心党からはヤイロの子シモンとユダの二人の兄弟であった。

E.7.2　第 2 章

ティトゥスがアントニアの塔を破壊するよう命令し、その後ヨセフスにユダヤ人に再び降伏を勧めるよう説得した経緯。

1. そして今、ティトゥスは、彼と一緒にいた兵士たちに、アントニアの塔の基礎を掘り起こし、彼の軍隊が登るための通路を整備するように命じた。一方、彼自身はヨセフスを彼のもとに連れて来た。[というのは、彼は、その日、すなわちパネムス [タムズ] の 17 日目に、「毎日の犠牲」と呼ばれる犠牲が失敗し、それを捧げる人がいなかったために神に捧げられず、人々がそれにひどく困惑していると知らされていたからである]。そして、ヨセフスに、もし彼が悪意を持って戦う気があるなら、自分の町や神殿を破壊する危険なしに、好きなだけ兵士を連れて出かけて戦うことができるが、神殿を汚したり、それによって神に反抗したりすることは望まない、と以前ヨハネに言ったのと同じことを言うように命じた。彼が攻め込んだユダヤ人の誰かが今ややめてしまった犠牲を、彼が望むなら捧げることができる、と。そこでヨセフスは、ヨハネだけでなく、もっと多くの人々に聞かれるような場所に立ち、カエサルが彼に与えた任務をヘブライ語で彼らに告げた。6 そこで彼は、彼ら自身の都市を救い、神殿を襲おうとしている火災を防ぎ、そこで神にいつもの供物を捧げるよう熱心に人々に懇願した。彼のこの言葉を聞いて、民衆は大きな悲しみと沈黙に包まれた。しかし、暴君自身はヨセフスに対して多くの非難を浴びせ、さらに呪いの言葉も加え、最後に、そこは神の都市であるため、都市の陥落を恐れることはないと付け加えた。これに答えて、ヨセフスは大声でこう言った。「確かに、あなたは神のためにこの町を驚くほど清浄に保ってきた。神殿も全く汚れていない！また、あなたが助けを期待している神に対して不敬虔な罪を犯したことはない！彼は今でもいつもの供物を受けている！あなたは卑劣な悪党だ！誰かがあなたの毎日の食べ物を奪うなら、あなたは彼を敵とみなすだろう。しかし、あなたは永遠の崇拝を奪ったあの神をこの戦争であなたの支援者にしたいと望んでいる。そして、あなたはその罪をローマ人に帰している。彼らは今に至るまで私たちの法律を遵守させ、あなたの力で中断されたこれらの供物を神に捧げることをほとんど強制しているのだ！この町でなされた驚くべき変化に、うめき声と嘆きを免れることができる人がいるだろうか？外国人や敵でさえ、今やそのことを正そうとしているのだから。汝が引き起こした不信心は、ユダヤ人であり、我々の法律を学んだ汝が、他の者たちよりも彼らにとって大きな敵となったということである。しかし、それでも、ヨハネよ、悔い改めて、最後の最後になっても、間違ったことを改めることは決して不名誉なことではない。汝には、エコニヤ書にその例がある。ユダヤ人の王よ、もしあなたがこの町を救おうとお考えなら、バビロンの王が彼と戦ったとき、この町が陥落する前に自ら進んでこの町から出て、家族とともに自主的に捕囚となった者よ。それは、聖所が敵に渡されないようにするため、また神の家が放火されるのを見ないようにするためである。このため、彼はすべてのユダヤ人の間で神聖な記念物として讃えられ、彼の記憶は不滅となり、あらゆる時代を通じて私たちの子孫に新鮮に伝えられるであろう。ヨハネよ、これはこのような危険な時代には優れた例であり、私はローマ人があなたを許すであろうとあえて約束しよう。そして、あなたにこの勧告をする私は、あなたの同胞の一人であることに留意しなさい。ユダヤ人である私が、あなたにこの約束をするのである。そして、あなたにこの勧告を与える私が誰であるか、そして私がどこから来たのかを考えるのは、あなたにとってふさわしいことである。生きている間は、自分の親族を見捨てたり、先祖の法律を忘れたりするような奴隷状態にはならないでしょう。あなたはまたも私に対して憤慨し、私に向かって騒ぎ立て、私を非難しています。実際、私は、運命に逆らってあなたにこのような親切な招待をし、神が非難した人々を強制的に解放しようと努めている以上、これらすべてよりもひどい扱いを受けるに値することを否定できません。そして、古代の預言者の書物、特に今まさにこの惨めな都市に実現しようとしているあの神託に何が書かれているのか知らない人がいるでしょうか。彼らは、誰かが自分の同胞を虐殺し始めたときにこの都市が陥落すると予言したからです。そして、今やこの都市も神殿もあなたの同胞の死体で満ちているではありませんか。ですから、ローマ人を通してあの町と神殿を清めるために、この火を起こしているのは神であり、8 あなたがたの汚れで満ちているこの町を根こそぎにしようとしているのは神ご自身なのです。」

2. ヨセフスがこれらの言葉を話すとき、彼の目はうめき声と涙でいっぱいだったが、彼の声はすすり泣きに遮られた。しかし、ローマ人は彼の苦しみを哀れに思い、彼の行為に驚かざるを得なかった。しかし、ヨハネと彼と共にいた人々は、このことでローマ人に対してますます憤慨し、ヨセフスをも彼らの手中に収めようと望んだ。しかし、この演説は多くの良識ある人々に影響を与えた。実際、彼らの中には、反乱軍が配置した警備隊を恐れて、そこに留まった者もいたが、それでも自分たちと都市は破滅する運命にあると確信していた。また、ローマに逃げた者もいた。ローマには、大祭司ヨセフとイエス、大祭司の息子３人（父はキレネで斬首されたイシュマエル)、マティアスの息子４人、マティアスの息子１人（父の死後逃亡、９すでに述べたように、その父はギオラスの子シモンによって３人の息子とともに殺された)、大祭司たちとともにローマに寝返った貴族たちも多かった。さて、カエサルは他の点ではこれらの人々を非常に親切に迎えただけでなく、彼らが他の国の慣習に従って生きることを好まないことを知っていたので、彼らをゴフナに送り、当分そこに留まるように頼み、この戦争から解放されたら、各自の所有地を再び返すと告げた。そこで彼らは、危険を恐れることなく、喜んで割り当てられた小さな町に退却した。しかし、彼らが姿を現さなかったため、反乱分子は再び、これらの脱走兵はローマ軍に殺されたと流した。これは、同様の扱いを恐れて残りの者たちが逃亡するのを思いとどまらせるためのものだった。彼らのこの策略は、以前の同様の策略と同様に、しばらくの間成功した。なぜなら、残りの者たちは、同様の扱いを恐れて、これによって逃亡を思いとどまったからである。

3. しかし、ティトゥスはゴフナからこれらの人々を呼び戻した後、ヨセフスと共に城壁を回り、人々に姿を見せるよう命じた。これを受けて、多くの者がローマ人の元へ逃げた。これらの人々も大勢で集まり、ローマ人の前に立ち、うめき声と涙を浮かべながら、まずローマ人を市内に完全に受け入れ、そこを自分たちの居住地として残すよう扇動者に懇願した。しかし、もしそのような提案に同意しないのであれば、少なくとも神殿から出て、自分たちのために聖なる家を残しておいて欲しいと。なぜなら、ローマ人は最も差し迫った必要がない限り、聖域に火をつけることはしないだろうからである。しかし、扇動者はますます彼らに反対した。そして彼らは、これらの脱走兵を激しく激しく非難する一方で、神殿の神聖な門に矢や槍や石を投げつける準備をした。門は互いに適切な距離を置いて設置されたので、神殿の周囲の空間全体が墓地に例えられるほどだった。そこには死体の数が非常に多かったからである。聖なる家自体が城塞に例えられるほどであった。したがって、これらの男たちは、そうでなければ近づくことのできないこれらの聖なる場所に、鎧を着て突撃し、彼らの手は流した同胞の血でまだ温かいままであった。いや、彼らは非常に大きな罪を犯したので、ユダヤ人がローマ人に対してそのような虐待を犯していたなら当然抱くであろう憤りと全く同じ憤りを、ローマ人は今や、自分たちの宗教的慣習に対するユダヤ人の不敬虔さに対して抱いたのである。いや、実際、ローマ兵の中には、聖なる家を神聖な恐怖の目で見、崇拝し、強盗たちがその苦しみが癒えなくなる前に悔い改めることを願わなかった者は一人もいなかった。

4. さて、ティトゥスはこの事態に心を痛め、ヨハネとその一行を非難して言った。「あなたたち、卑劣な悪党どもは、我々の許可を得て、聖所の前にこの仕切り壁を立てたではないか。あなたたちは、その壁から離れたところに柱を立て、ギリシャ語とあなたたちの文字で、外国人は誰もこの壁の向こう側へ行ってはならないというこの禁令を刻むことを許されたではないか。10 我々は、たとえローマ人であっても、向こう側へ行った者を殺すことをあなたたちに許可したではないか。それなのに、あなたたちは今何をしているのだ、この悪党ども。なぜこの神殿で死体を踏みつけるのか。なぜ、外国人とユダヤ人自身の血でこの聖なる家を汚すのか。私は、自分の国の神々と、かつてこの場所を気にかけたすべての神に訴える。[なぜなら、私は、今、この場所が誰からも気にかけられているとは思わないからである。] また、自分の軍隊と、今私と一緒にいるユダヤ人たちにも訴える。

そして、あなたたち自身にも、この聖域を汚すことを強制しないよう、約束する。そして、あなたたちが戦う場所を変えさえすれば、ローマ人はあなたたちの聖域に近づいたり、そこを攻撃したりはしない。いや、あなたたちが望むと望まざるとにかかわらず、私はあなたたちの聖なる家を守るよう努力する。」11

5. ヨセフスがカエサルの口からこれらのことを説明したので、盗賊も暴君も、これらの勧告はティトゥスの彼らに対する善意からではなく、恐怖から出たものだと考え、そのことで傲慢になった。しかし、ティトゥスは、これらの人々が自分たちに対する同情によって動かされるわけでもなく、聖なる家を救うことに何の関心も持っていないのを見て、しぶしぶ彼らに対する戦争を再開した。確かに、その場所は非常に狭かったので、全軍を彼らに向かわせることはできなかったが、百人中最も勇敢な兵士三十人を選び、各護民官に千人ずつ割り当て、ケレアリスを彼らの総司令官に任命し、その夜の九時ごろに神殿の衛兵を攻撃するよう命令した。しかし、彼はすでに鎧を着て彼らとともに下る準備をしていたが、彼の友人たちは危険の大きさと司令官たちが彼らに示唆したことのために、彼を行かせようとしなかった。というのは、彼らは、カエサルが塔の上に座り、戦いで名を成した兵士たちに褒賞を与える方が、塔から降りてきて兵士たちの先頭に立って危険を冒すよりも、彼ら全員が勇敢に戦い、カエサルが見守る中、勇敢に戦うだろうと言ったからである。この助言にカエサルは従い、兵士たちにこのように従う唯一の理由は、彼らの勇敢な行動を判断でき、勇敢な兵士が隠れて褒賞を逃すことがなく、臆病な兵士が罰を受けずに済むことがあり、彼らへの罰と褒賞の分配者である彼自身が目撃者となり、行われたすべてのことを証言できるからだと言った。そこで彼は、兵士たちを前述の時間に仕事に送り出し、自分はアントニアの塔の高い場所へ出て、何が起こったのかを見ようとし、そこで待ち焦がれながら出来事を待っていた。

6. しかし、派遣された兵士たちは、彼らが期待したように神殿の衛兵が眠っているのを見つけられず、大声で叫びながら激しく襲い掛かってきたので、すぐに彼らと白兵戦を強いられた。神殿内の他の者たちは、見張りの者たちの叫び声を聞くとすぐに、軍隊を率いて彼らに襲い掛かった。そこでローマ軍は、最初に襲い掛かってきた者たちの攻撃を受けたが、その後に続いた者たちは自軍に襲い掛かり、その多くは自軍の兵士を敵のように扱った。両側で立てられた大きな混乱した騒音のせいで、互いの声を聞き分けることはできず、夜の闇のせいで視覚による判別もできなかった。さらに、同時に彼らが抱いていた激情と恐怖から生じた盲目状態もあった。そのため、兵士たちにとって、誰が襲われたかは皆同じだった。しかし、この無知は、ローマ人よりもユダヤ人に害を及ぼさなかった。なぜなら、彼らは盾の下に団結し、他の者たちよりも規則的に出撃し、それぞれが合言葉を覚えていたからである。一方、ユダヤ人は絶えず散在し、攻撃と退却を無作為に行い、そのためしばしば互いに敵であるように見えた。なぜなら、彼らは皆、暗闇の中でローマ人として戻ってきて襲撃してきた自軍の兵士たちを受け入れたからである。そのため、敵よりも自軍の兵士によって負傷した者の方が多かった。そして、夜が明けて、正義の性質が後で目で見て分かった。それから、彼らは別々の集団で戦闘隊形を組み、規則的に矢を投げ、規則的に防御した。どちらの側も屈したり疲れたりすることはなかった。ローマ人は、ティトゥスの監視下にあるとして、単独の兵士と全連隊の両方で、誰が最も激しく戦うべきかを互いに争った。そして誰もが、勇敢に戦えばこの日が昇進の始まりだと結論づけた。ユダヤ人が勇敢に行動する大きな動機となったのは、自分たちと神殿に対する恐怖と、勇敢に行動するよう一部の者を激励し、他の者を殴打し脅迫する暴君の存在であった。さて、この戦いは大部分が静止した戦いで、兵士たちは前進し、すぐに突然戻ってくるという展開だった。逃げるにも追撃するにも長い距離はなかったからだ。しかし、アントニアの塔からはローマ軍の間で騒々しい声が聞こえ、ユダヤ人に手強いときはいつでも勇敢に前進するよう大声で叫んでいた。そして彼らが後退しているときに留まるように命じた。そのため、ここは一種の戦場であった。この戦いで何が行われたかは、ティトゥスにも彼の周

囲にいた者にも隠し切れなかったからである。ついに、夜の九時に始まったこの戦いは、日の五時過ぎまで終わらなかったことが明らかになった。そして、戦いが始まったのと同じ場所で、どちらの側も相手を後退させたとは言えなかった。しかし、両軍とも勝利はほぼ不確かなままであった。その中で、ローマ軍として名乗り出た者は大勢いたが、ユダヤ軍の側では、シモンの側にいた者のうち、メルトの子ユダとヨサスの子シモン、イドマヤ人からはヤコブとシモン（後者はカスラスの子、ヤコブはソサスの子）、ヨハネの側にいた者のうち、ギュフテウスとアレクサス、熱心党からはヤイロの子シモンが名乗り出た。

7. その間に、ローマ軍の残りは、7 日間でアントニアの塔の基礎を一部破壊し、神殿への広い通路を確保した。それから軍団は第一の中庭に近づき、12 堤防を築き始めた。1 つの堤防は内神殿の北西の角に面し、13 もう一つは二つの門の間にある北の建物に面していた。他の 2 つは、一つは神殿の外庭の西側の回廊に、もう一つは北側の回廊に面していた。しかし、ローマ軍はこれらの工事をここまで進めたが、大きな苦労と困難を伴い、特に 100 スタディオンも離れたところから資材を運ばなければならなかった。さらに困難もあった。ユダヤ人が仕掛けた罠を突破できるほどの自信過剰と、逃げ切れないという絶望感からユダヤ人が奮い立ったことによるものであった。というのは、ユダヤ人の騎手の中には、薪や干し草を集めに出かけるときに、餌を探している間、手綱をつけずに馬に餌を食べさせていた者がいたからである。ユダヤ人は、その馬に群がって襲いかかり、馬を奪ったのである。そして、このようなことが何度も繰り返され、カエサルは、馬が盗まれたのはユダヤ人の勇敢さによるというよりも、自分の部下の不注意によるものだと確信し、残りの兵士たちに馬の世話をさせるために、もっと厳しくしようと決心した。そこで、馬を失った兵士の一人を死刑にするよう命じた。これによって残りの兵士たちは大いに恐れおののき、彼らは今後のため馬を温存した。もはや、自分たちだけで餌を食べにいくために馬を放っておかず、まるで馬が自分たちに馴染んだかのように、必需品が不足するときはいつも彼らについていくようになったのである。このようにして、ローマ軍は神殿に対して戦いを続け、神殿に対して堤防を築き続けたのである。

8. ローマ軍が突破口を登ってから 1 日が経った後、反乱軍の多くは飢餓に苦しめられ、略奪も失敗に終わり、集まってオリーブ山にいたローマ軍を襲撃した。これは 11 時頃のことである。ローマ軍は、まずこのような襲撃は予想していないだろう、次に、ローマ軍はその時は身の安全を保っているだろうから、簡単に打ち負かすことができるだろうと考えた。しかし、ローマ軍はローマ軍が攻撃に来ることを事前に知っていたので、突然近隣の陣地から一斉に駆けつけ、ローマ軍が要塞を越えたり、周囲に築かれた壁を突破したりするのを阻止した。この後激しい戦闘が起こり、ここで双方が多くの素晴らしい行動をとった。ローマ軍は勇気と戦争の技術の両方を発揮し、ユダヤ人は度を越した暴力と耐え難い情熱でローマ軍に襲いかかった。一方の者は恥辱に駆られ、他方の者は必要に迫られて駆り立てられた。というのは、ユダヤ人を逃がすのはローマ人にとって非常に恥ずべきことと思われたからである。彼らは今や一種の網に捕らえられていた。一方、ユダヤ人が助かる唯一の望みは、暴力によってローマの壁を突破することであった。そして、ユダヤ人がすでに打ち負かされ、谷に押し込められていたとき、騎兵隊に属するペダニウスという名の男が、激しい勢いで彼らの側面に馬を駆り立て、逃げる敵の若者の足首をつかんだ。しかし、その男は頑丈な体格で、鎧を着ていた。ペダニウスは馬から身を低くかがめ、疾走しながらも、右手と体の他の部分の力は強大で、また、馬術にも非常に長けていた。そこで、この男は獲物を貴重な宝物のようにつかみ、捕虜としてカエサルの元へ連れて行った。そこでティトゥスは、相手を捕らえた男の力強さに感心し、捕らえられた男にローマの城壁への攻撃の罪で死刑に処するよう命じたが、自らは神殿の包囲と土手の築堤の強化に取り組んだ。

9. 一方、ユダヤ人は、戦争がどんどん高くなり、聖なる家そのものにまで迫るにつれて、これまでの戦いに非常に苦しんでいたので、病気がこれ以上広がらないように、いわば感染した体の手足を切り落とした。彼らは、アントニアの塔に繋がっている北西の回廊に火をつけ、その後、その回廊の約 20 キュビトを破壊し、それによって聖域を焼き始めた。その 2 日後、または前述の月 [パネムスまたはタムズ] の 24 日、ローマ人は、火がさらに 15 キュビト広がったときに、もう 1 つの回廊に火をつけた。ユダヤ人は同様にその屋根を切り落とし、アントニアの塔が神殿から切り離されるまで、火を止めることができたにもかかわらず、彼らはその作業を完全にやめなかった。いや、彼らは神殿が最初に放火されたときじっとしていて、この火の広がりが自分たちの利益になると考えた。しかし、両軍は神殿の周りでまだ互いに戦い続けており、戦争は特定の勢力が互いに攻撃を繰り返すことによって進められた。

10. さて、そのころユダヤ人の中に、背が低く、見苦しい容姿をしており、家柄も他の面でも品位のない男がいた。その名はヨナタンであった。彼は大祭司ヨハネの記念碑のところに出て行き、ローマ人に対してそのほか多くの横柄な言葉を吐き、ローマ人の中でも最も優れた者たちに一騎打ちを挑んだ。しかし、そこにいた軍隊の多くは彼を怒鳴りつけ、その多くは彼を恐れた。彼らの中には、死を望んでいる者と戦うのはふさわしくない、なぜなら、救いを全く望まない者たちは、他の感情のほかに、対抗できない者を攻撃する激しさを持ち、神自身を顧みないからである、と考えた者もいた。そして、たとえ打ち負かしても大したことにはならず、捕虜にされる危険のある人物に危険を冒すのは、男らしい勇気ではなく、男らしくない無謀さの例となるだろう。そこで、その男の挑戦を受ける者は誰も出てきてはこなかったため、ユダヤ人は臆病者と何度も非難を浴びせたが（彼自身は非常に傲慢な男で、ローマ人をひどく軽蔑していた）、騎兵隊のプデンスという名の男が、相手の言葉とその厚かましさ、そしておそらくは相手の背丈の低さに対する軽率な傲慢さから、相手に向かって走り出し、他の点では手ごわかったが、不運に見放された。というのは、彼が倒れたので、倒れたところをヨナタンが駆け寄ってきて喉を切り裂き、それから死体の上に立ち、血まみれの剣を振り回し、左手で盾を振り回し、ローマ軍に何度も喝采を送り、死者を喜び、ローマ軍をからかった。ついに百人隊長のプリスコスが、彼が飛び跳ねて馬鹿騒ぎをしているところに矢を放ち、彼を貫いた。それに対して、ユダヤ人とローマ人の両方が、それぞれ別の理由で叫び声を上げた。そこでヨナタンは傷の痛みでめまいがして、敵の死体の上に倒れ込んだ。これは、戦争で成功した人々に、正当な理由もなく、突然復讐が降りかかることがあるという明白な例であった。

E.7.3　第 3 章

ユダヤ人が考案した、多くのローマ人を焼き殺した策略について。また、ローマ市内で起こった恐ろしい飢餓についても記述。

1. ところが、神殿にいた反乱分子は毎日、土手にいた兵士たちを撃退しようと公然と試み、前述の月 [パネムスまたはタムズ] の 27 日には、次のような策略を企てた。彼らは西側の回廊 14 の梁とその下の屋根の間にある部分を乾いた材料で満たし、またアスファルトとピッチも詰め、それから、苦労に疲れたかのようにその場所から退いた。このやり方で、激しい感情に駆られたローマ人の中でも最も無分別な者の多くが、彼らが退くのを必死に追いかけ、梯子を回廊にかけ、突然そこに登った。しかし、彼らのうちの賢明な者は、ユダヤ人のこの説明のつかない撤退を理解すると、以前いた場所に立ち止まった。しかし、回廊は梯子を上った者たちでいっぱいだっ

た。そのとき、ユダヤ人たちはそのすべてに火をつけた。そして、突然、あらゆるところで炎が噴き出すと、危険から逃れていたローマ人は、非常に大きな驚きに襲われた。危険の真っ只中にいる人々も同様に、非常に困惑していた。それで、自分たちが炎に囲まれていることに気づいたとき、彼らのうちの何人かは町に後ろ向きに身を投げ、何人かは敵の中に飛び込んだ。また、多くの者は仲間のところに飛び降り、手足を粉々に砕いた。しかし、こうした暴力的な手段を取ろうとした者の多くは、火によって阻止された。中には自分の剣で火を防いだ者もいた。しかし、突然、火は、そうでなければ死んでいたであろう人々を囲むほどにまで広がった。しかし、カエサル自身は、多くの人々を救出する方法がなかったので、命令もなしにそこに駆けつけたにもかかわらず、このようにして死んだ人々に同情せずにはいられなかった。しかし、これは滅ぼされた者たちにとって、いくらか慰めとなった。皆が、その死の責任を負わされたその人物の悲嘆を見ることができたからである。その人物は、彼らに向かって公然と叫び、飛び上がって、周囲の者たちに、彼らを救うために全力を尽くすよう勧めた。こうして、彼らは皆、カエサルのこの言葉と意図を墓碑として携え、明るく死んだ。確かに、広い回廊の壁の中に退避し、火を免れた者もいたが、そのときユダヤ人に包囲された。彼らは長い間ユダヤ人に抵抗したが、それでもユダヤ人に傷つけられ、ついには皆倒れて死んだ。

2. 最後に、彼らの中にいたロンガスという名の若者が、この悲しい事件の記念品となった。亡くなった者全員が記念碑に値するが、この男は他の誰よりも記念碑に値するようだった。ユダヤ人たちはこの男の勇気を称賛し、さらに彼を殺したいと望んだ。そこで彼らは、命の保証を与えて、彼らに下って来るよう説得した。しかし、彼の兄弟コルネリウスは、逆に、彼自身の栄光もローマ軍の栄光も汚すなと説得した。彼はこの最後の忠告に従い、両軍の前で剣を振り上げ、自ら命を絶った。しかし、火に囲まれた者の中に、アルトリウスという一人がいて、彼は巧妙な手口で逃げた。なぜなら、彼は同じテントで寝ていた仲間の兵士の一人ルキウスを大声で呼び、「もしあなたが来て私を迎えてくれるなら、私はすべての財産をあなたに相続させる」と言ったからである。すると、彼はすぐに駆け寄って彼を迎えた。アルトリウスは彼の上に身を投げ出して自分の命を救ったが、彼を迎えた者は相手の体重で石畳に激しく打ち付けられ、即死した。この悲惨な事故はローマ人をしばらく悲しませたが、それでもなお将来に対する警戒を強め、ユダヤ人の妄想に対する有利にもなった。ユダヤ人は、その場所や住民の性質を知らないために、その妄想によって大きな損害を受けたのである。さて、この回廊は、ヨハネの塔まで焼失した。ヨハネは、クシストゥスに通じる門をめぐってシモンと戦った際にこの塔を建てた。ユダヤ人はまた、回廊に上った者を滅ぼした後、その回廊の残りの部分を神殿から切り離した。しかし翌日、ローマ人は北の回廊を東の回廊まで完全に焼き払った。東の回廊の共通の角は、ケドロンと呼ばれる谷につながり、その上に建てられていた。そのため、その深さは恐ろしいほどでした。これが当時の神殿の状態でした。

3. さて、市内で飢餓で死んだ人々の数は膨大で、彼らが経験した悲惨さは言葉に尽くせないほどでした。なぜなら、どこかに何か食べ物の影が少しでも見えれば、すぐに戦争が始まり、親友たちがそれをめぐって互いに戦い、お互いから最もみじめな生活の糧を奪い合うからです。死にゆく人々に食べ物がないとは誰も信じようとしませんでしたが、強盗たちは彼らが死ぬときに、誰かが懐に食べ物を隠し、死んだふりをしていないかと捜索しました。いや、強盗たちは欠乏にあきれ、狂犬のようによろめき、よろめきながら走り回り、酔っ払いのように家のドアにぶつかりました。また、彼らは非常に困窮していたため、同じ日に同じ家に 2、3 回も押し入りました。さらに、彼らの飢えは耐え難いものだったので、彼らはあらゆるものをかみ砕かざるを得なかったが、最も汚らしい動物でさえも触れようとしないものを集め、それを食べるのを我慢した。ついには、彼らは帯や靴も手放さなかった。盾に付いていた革さえも剥がしてかじった。古い干し草の切れ端さえも、ある人たちの食べ物となった。

また、ある人たちは繊維を集め、ごく少量を 4 アテネ（ドラクマ）で売った。しかし、なぜ私は飢餓が人々にもたらした、無生物を食べるという恥知らずな厚かましさについて記述する一方で、ギリシャ人にも蛮族にも歴史にない事実を語ろうとしているのだろうか。それについて話すのは恐ろしいし、聞いても信じがたいことだ。私は実際、後世にこれほど不吉なことを伝えていると思われないように、わざとこのわが国の災難を省いたが、私の時代には数え切れないほど多くの目撃者がいる。それに、この時祖国が経験した悲惨さを抑えたことに対して、祖国が私に感謝する理由はほとんどなかったでしょう。

4. ヨルダン川の向こうに、マリアという名の女性が住んでいました。彼女の父はエレアザルで、ベテゾブ村の出身です。ベテゾブはヒソプの家を意味します。彼女は一族と富で名声を博し、他の群衆とともにエルサレムに逃げ、その時は彼らとともにそこで包囲されていました。この女性のその他の所持品、つまりペレアから持ち出して町に移したものは、すでに押収されていました。彼女が蓄えていたものや、なんとか取っておいた食べ物も、毎日彼女の家に駆け込んできた強欲な番兵に奪われていました。このことでこの哀れな女性は激怒し、強欲な悪党たちを頻繁に非難したり呪ったりして、彼女に対する彼らの怒りをかき立てていました。しかし、彼女が自分自身に対して起こした憤りからか、彼女の境遇への同情からか、彼らのうちの誰も彼女の命を奪おうとはしなかった。そして、もし彼女が何か食べ物を見つけたとしても、彼女は自分の労働が自分のためではなく他人のためであることを悟った。そして、飢餓が彼女の内臓と骨髄を突き刺し、彼女の情熱が飢餓そのものを超越するほどに燃え上がる中、もはや彼女にはこれ以上の食べ物を見つける方法がなくなっていた。彼女は自分の情熱と自分が置かれている窮状以外のことは考えなかった。そこで彼女は非常に不自然なことを試みた。そして、自分の乳房を吸っている幼い息子をつかみ上げ、こう言った。「ああ、この哀れな子よ！この戦争、この飢饉、この暴動で、誰のためにお前を守ればいいのだ？ローマ人との戦争に関して言えば、彼らが我々の命を守れば、我々は奴隷になるしかない。この飢饉もまた、奴隷になる前に我々を破滅させるだろう。しかし、この暴動を起こす悪党どもは、他の二人よりも恐ろしい。さあ、私の糧となり、この暴動を起こす悪党どもを怒らせ、世間の物笑いとなりなさい。それが、我々ユダヤ人の災難を完遂するのに今欠けているすべてなのだから。」こう言うとすぐに、彼女は息子を殺し、それから焼いて、半分を食べ、もう半分を自分のそばに隠しておいた。すると、すぐに反乱軍がやって来て、この食べ物のひどい臭いを嗅ぎつけ、どんな食べ物を用意したか見せなければ、すぐに喉を切ると脅した。彼女は、彼らのために非常に良い分を取っておいたと答え、息子の残りを覆い隠した。そこで彼らは恐怖と驚きに襲われ、その光景に驚いて立ち尽くした。彼女は彼らに言った。「これは私の息子です。そして、起こったことは私自身の仕業です。さあ、この食べ物を食べなさい。私自身が食べたのですから。女性よりも優しいふりをしたり、あるいは母親よりも慈悲深い者よ。しかし、あなたがそんなに几帳面で、私が半分食べたのにこの私の供え物を忌み嫌うなら、残りも私のために取っておけ。」その後、男たちは震えながら出て行った。これほど恐れたことは他にない。そして、なんとか残りの肉を母親に残した。すると、町全体がこの恐ろしい出来事で溢れ、誰もがこの悲惨な状況を目の当たりにすると、まるでこの前代未聞の行為を自分たちがやったかのように震え上がった。このように飢餓に苦しむ人々はとても死にたがり、すでに死んでいた人々は、そのような悲惨な話を聞くことも見ることもないほど長く生きていなかったので、幸いだとみなされた。

5. この悲しい出来事はすぐにローマ人に伝えられたが、彼らの中にはそれを信じられなかった者もいれば、ユダヤ人が苦しんでいることを哀れに思った者もいた。しかし、これによって我々の国に対して通常よりも激しい憎しみを抱くようになった者も多かった。しかし、カエサルは、この件に関して神の前で弁解し、ユダヤ人に平和と自由を与え、彼らの以前の横柄な習慣をすべて忘れ去ることを提案したが、彼らは和平の代わりに反乱を、平

和の代わりに戦争を、そして飽食と豊かさの代わりに飢饉を選んだのだ、と言った。彼らは我々がこれまで守ってきたあの神殿を自らの手で焼き払い始めたのだから、このような食べ物を食べるのは当然だ。しかし、自分の子供を食べるというこの恐ろしい行為は、祖国そのものの転覆によって覆い隠されるべきであり、人々は、母親たちがこのようにして養われているこのような都市を、居住可能な地球上の太陽の見える場所に残すべきではない。このような食物は、母親たちよりも父親たちが食べるのにふさわしいが、彼らはこのような悲惨な状況に耐えた後も、我々に対して依然として戦争状態にあるのだから。そして、彼はこう言うと同時に、これらの人々が置かれている絶望的な状況について考えていた。また、このような苦しみに耐えた後で、このような人々が冷静さを取り戻すことは期待できない。おそらく、そのような苦しみを避けるためだけに、彼らは悔い改めたのである。

E.7.4　第 4 章

堤防の建設が完了し、破城槌が運び込まれたが、何もできなかったため、ティトゥスは神殿の門に火をつけるよう命令を出した。その後間もなく、彼の同意に反して、聖なる家自体が焼き払われた。

1. そして今、2 つの軍団がルース [アブ] の月の 8 日目にその壁の防御を完了した。そこでティトゥスは破城槌を持ってきて内陣の西側の建物に向けるよう命令した。なぜなら、破城槌が運ばれる前に、他のすべての機械の中で最も頑丈なものが 6 日間休むことなく壁を叩き続け、何の痕跡も残さなかったからである。しかし、石の巨大な大きさと強い結合は、その機械や他の破城槌よりも優れていた。他のローマ人は確かに北門の基礎を掘り起こし、苦労の末に最も外側の石を取り除きましたが、門は内側の石によって支えられ、無傷のまま立っていた。機械やカラスによるそのような試みに絶望した作業員が、はしごを回廊に運び込むまで。ユダヤ人は彼らがそうするのを邪魔しなかったが、彼らが立ち上がると、彼らに襲い掛かり、戦った。彼らは梯子を突き落とし、真逆の方向に投げ飛ばした。また、梯子を降りてきた者を多く殴り、盾で身を守る前に剣で殺した。さらに、梯子が武装した兵士でいっぱいのときに、梯子のいくつかを上から投げ落とした。同時にユダヤ人も大虐殺されたが、旗を掲げていた者たちは、旗が盗まれるのを許すのは恐ろしいことであり、自分たちの大きな恥辱となると考え、旗のために懸命に戦った。しかし、ユダヤ人はついにこれらの兵器を手に入れ、梯子を上った者たちを破壊した。残りの者たちは、殺された者たちの苦しみに非常に怯え、撤退した。ローマ人のうち、死ぬ前に良い功績を残さずに死んだ者は一人もいなかったが。反乱軍のうち、以前の戦いで勇敢に戦った者たちは、今や同様のことをした。彼らに加えて、暴君シモンの兄弟の息子エレアザルもそうした。しかし、ティトゥスは、外国の神殿を救おうとする彼の努力が兵士たちの損害につながり、さらには殺害されることに気づいたので、門に火をつけるよう命令を出した。

2. その間に、エマオから来たシモンの護衛の中で最も血なまぐさいアナヌスと、マガダトゥスの息子アルケラオスが彼のもとに脱走した。彼らは、ユダヤ人が征服者だった時代にユダヤ人を離れたので、まだ許されるだろうと期待していた。ティトゥスは、彼らの狡猾な策略としてこれに異議を唱えた。また、ユダヤ人に対する彼らの他の蛮行について聞いていたので、急いで二人を殺そうとした。彼は彼らに、彼らが極度の苦難に陥ったために脱走に追い込まれただけで、自らの善意で脱走したのではない、彼ら自身の町はすでに彼らによって火をつけられ、その火の中から彼らは急いで逃げ出したのだから、彼らは救われるに値しない、と言った。しかし、脱走者に約束した安全は彼の憤りを克服し、彼はそれに従って彼らを解雇したが、他の人々に与えたのと同じ特権は彼

らに与えなかった。そして兵士たちはすでに門に火をつけており、門の上にあった銀の炎はすぐに門の中の木材に伝わり、そこから突然燃え広がり回廊を焼き尽くした。ユダヤ人たちは周囲にこの火が燃えているのを見て、体とともに意気消沈し、あまりの驚きに、誰一人として身を守ろうとも火を消そうともせず、ただ黙って傍観するだけだった。しかし、彼らは今燃えているものが失われたことを悲しむことはなく、それによって今後のことを考えて賢くなるどころか、聖なる家自体がすでに燃えているかのように、ローマ人に対する怒りをかき立てた。この火はその日も翌日も燃え続けた。兵士たちは周囲の回廊を一度にすべて焼くことはできず、少しずつ焼くしかなかったからである。

3. しかし、翌日、ティトゥスは軍の一部に火を消し、軍団が楽に進軍できるよう道を作るよう命じ、自らは指揮官たちを集めた。集まったのは、全軍の指揮官ティベリウス・アレクサンダー、第 5 軍団の指揮官セクストゥス・ケレアリス、第 10 軍団の指揮官ラルキウス・レピドゥス、第 15 軍団の指揮官ティトゥス・フリギウスの 6 人の主要人物であった。また、アレクサンドリアから来た 2 軍団の指揮官エテルニウス、ユダヤの総督マルクス・アントニウス・ユリアヌスも同席していた。その後、残りの総督と護民官全員が集まった。ティトゥスは彼らに、聖なる家についてどうすべきか助言を求めるよう提案した。彼らのうちのある者は、戦争のルールに従って行動し、それを破壊するのが最善の方法だと考えた。なぜなら、ユダヤ人は、その家が立っている限り、決して反乱をやめないだろうからである。ユダヤ人は皆、その家に集まっていたのである。他の者たちは、ユダヤ人がそこを離れ、誰も武器を置かなければ、彼はそれを救うことができるだろう、しかし、もし彼らがそこに侵入し、さらに戦うなら、彼はそれを焼き払えるだろう、という意見であった。なぜなら、その場合、それは聖なる家ではなく、要塞と見なされることになるからである。そして、それを焼くという不敬な行為は、それを強制した者たちのものであり、彼らには属さないからである。しかし、ティトゥスは、「ユダヤ人がその聖なる家に侵入し、そこから我々と戦うとしても、我々は、人間自身ではなく、無生物に対して復讐すべきではない」と言った。そして、彼は、そのような大規模な建造物を焼き払うことは絶対に賛成しない、なぜなら、それはローマ人自身にとって害になるが、それが存続する限り、彼らの政府にとって飾り物となるからである。そこで、フロント、アレクサンダー、ケレアリスはその宣言に勇気づけられ、ティトゥスの意見に同意した。その後、この集会は解散され、ティトゥスは指揮官たちに、残りの軍は動かないように、しかし、この攻撃で最も勇敢な者を使うようにと命令した。そこで、彼は、部隊から選ばれた選抜された兵士たちに、廃墟を通り抜けて火を消すように命じた。

4. この日、ユダヤ人たちは疲れ果て、動揺していたため、攻撃を控えたのは事実である。しかし翌日、彼らは全軍を集め、東門から神殿の外庭を守る者たちに大胆に突撃した。これはその日の 2 時頃のことであった。これらの守備隊は勇敢に攻撃を受け、盾で身を守り、あたかも壁のようにして、部隊を密集させた。しかし、彼らがそこに長く留まることはできず、突撃してくる多数の者たちと彼らの激情に圧倒されるであろうことは明らかであった。しかし、カエサルはアントニアの塔から、この部隊が敗走しそうであるのを見て、彼らを支援するため、選りすぐりの騎兵を派遣した。そこでユダヤ人たちは攻撃に耐えることができず、最前線にいた者たちが虐殺されると、残りの者たちの多くが敗走した。しかし、ローマ軍が撤退すると、ユダヤ人たちは彼らに襲い掛かり、戦いを挑んだ。そして、ローマ軍が再び襲い掛かると、彼らは再び撤退した。そして、その日の午後五時ごろ、彼らは圧倒され、神殿の内庭に閉じこもった。

5. そこでティトゥスはアントニアの塔に退き、翌日の早朝に全軍を率いて神殿を襲撃し、聖なる家の周囲に陣取ることを決意した。しかしその家については、神は確かにずっと前にそれを焼く運命にしていた。そして今、

時代の巡りに従ってその運命の日が来た。それはルウス [アブ] の月 10 日であり、その日、その家は以前バビロン王によって焼かれた。しかし、この炎はユダヤ人自身から生じ、彼らによって引き起こされた。ティトゥスが退くと、反乱軍はしばらく静まり、その後再びローマ軍を攻撃した。そのとき、聖なる家を守る者たちは、神殿の内庭を燃やしている火を消す者たちと戦った。しかし、このローマ軍はユダヤ人を敗走させ、聖なる家そのものまで進軍した。そのとき、兵士の一人が、命令を待つこともなく、また、このような大事業に何の心配も恐れもせず、ある種の神の怒りに駆られて、燃えている材料をいくらかひったくると、別の兵士に持ち上げられて、聖なる家の北側にある周囲の部屋への通路となっている金色の窓に火をつけた。炎が上がると、ユダヤ人たちは、このような強大な災難に必要な大騒ぎをし、それを防ぐために一斉に駆けつけた。そして、今や彼らは、聖なる家が滅びようとしていたので、もはや命を惜しまず、いかなるものにもその力を抑えられなかった。彼らがその家の周りにこれほどの警備をしていたのは、聖なる家のためだった。

6. さて、ある人物がティトゥスのところに駆け寄って、この火事のことを告げた。ティトゥスは最後の戦いの後、テントで休んでいた。そこで彼は大急ぎで立ち上がり、そのまま聖なる家に駆け寄って火を消した。彼の後には指揮官全員が続き、その後ろには各軍団が大驚いて続いた。こうして、大軍の無秩序な動きに当然のごとく、大騒ぎと騒動が起こった。そこでカエサルは、戦っている兵士たちに大声で呼びかけ、右手で合図して、火を消すように命じた。しかし、カエサルが大声で話したにもかかわらず、彼らは別の方法でより大きな騒音によってすでに耳がかすんでいたため、彼の言うことを聞かなかった。また、カエサルが手で合図しても、彼らのうちのある者は戦いに、またある者は激情に気を取られていたため、注意を払わなかった。しかし、そこに駆けつけた軍団は、いかなる説得も脅迫も彼らの暴力を抑えることができず、この時、各自の激情が指揮を執っていた。彼らが神殿に群がると、彼らの多くは互いに踏みつけられ、多くの者は、まだ熱く煙を上げている回廊の廃墟に倒れ、彼らが征服した者たちと同じように悲惨な形で滅ぼされた。そして、彼らが聖なる家に近づくと、シーザーの反対の命令をまったく聞いていないかのように振る舞い、彼らの前にいる者たちに火をつけるよう促した。反乱者たちは、すでに大きな苦境に陥っていたため、火を消すために協力する余裕がなく、至る所で殺され、至る所で殴打された。民衆の大部分は弱く武器を持たず、捕らえられたところではどこでも喉を切り裂かれた。祭壇の周囲には死体が積み重なっており、祭壇に上る階段には大量の血が流れ、祭壇の上で殺された死体もそこに落ちた。

7. さて、カエサルは兵士たちの熱狂的な怒りを抑えることができず、火はますます燃え広がったので、指揮官たちとともに神殿の聖域に入り、そこにある物を見て、外国人の記録に残っている物よりはるかに優れており、我々自身が自慢し信じていた物より劣らないことを知った。しかし、炎はまだ内部にまで達しておらず、聖なる家の周りの部屋をまだ燃やしていたので、ティトゥスは神殿自体はまだ救われるかもしれないと考えて、急いでやって来て兵士たちに火を消すよう説得し、百人隊長リベラリウスと彼の周囲にいる槍兵の一人に、抵抗する兵士たちを杖で叩いて鎮圧するよう命じた。しかし、彼らの情熱は、カエサルに対する尊敬と、彼らを禁じたカエサルに対する恐怖、ユダヤ人に対する憎しみ、そしてユダヤ人と戦うというある種の激しい傾向に対しては、あまりにも激しすぎた。さらに、略奪の希望は、内部のすべての場所がお金でいっぱいであり、その周囲がすべて金でできているという意見を持つように多くの人を駆り立てた。さらに、その場所に入った者の一人が、兵士たちを制止するために急いで駆け出したカエサルを阻止し、暗闇の中で門の蝶番に火を放った。そのため、司令官たちが退却し、カエサルも彼らとともに退却し、誰も外にいる者に火をつけることを禁じなくなったとき、聖なる家自体からすぐに炎が噴き出した。こうして、カエサルの承認なしに聖なる家は焼け落ちた。

8. さて、このような作品が破壊されたことを嘆くのは当然である。なぜなら、それは、その奇妙な構造と大きさ、それに与えられた莫大な富、そしてその神聖さによる輝かしい評判の両面において、私たちが見聞きしたすべての作品の中で最も素晴らしいものであったからである。しかし、そのような人は、それがそうなるように定めたのは運命であり、生き物についても、作品や場所についても避けられないことである、という考えで自分を慰めることができるかもしれない。しかし、そこに記されているこの期間の正確さには驚かざるを得ない。なぜなら、私が前に述べたように、聖なる家が以前バビロニア人によって焼かれたのと同じ月と日が今観察されたからである。さて、ソロモン王によって築かれた最初の基礎からウェスパシアヌス帝の治世の 2 年に起こったこの破壊までの年数は、1,130 と 7 ヶ月と 15 日とされている。キュロス王の治世の二年目にハガイによって二度目の建築が行われてから、ウェスパシアヌス帝によって破壊されるまで、六百三十九年と四十五日が経過した。

E.7.5　第 5 章

聖なる家の大火災でユダヤ人が経験した大苦難。偽預言者と、この破壊に先立つ兆候について。

1. 聖なる家が燃えている間、手近なものはすべて略奪され、捕らえられた一万人が殺された。年齢を問わず同情の念や、厳粛な敬意は見られず、子供、老人、俗人、司祭が皆同じように殺された。そのため、この戦争はあらゆる人々を巻き込み、命乞いをした者も、戦って身を守った者も、皆、破滅に追いやった。炎は遠くまで運ばれ、殺された者のうめき声とともに反響した。この丘は高く、神殿の工事は非常に大規模だったため、街全体が燃えているように思われた。この騒音よりも大きく恐ろしいものは想像できない。なぜなら、一斉に行進していたローマ軍団の叫び声と、今や火と剣に囲まれた反乱軍の悲痛な叫び声が同時に聞こえたからである。上に残った民も敵に打ち負かされ、非常に動揺し、自分たちが受けている災難に悲痛なうめき声をあげた。町にいた群衆も丘の上にいた人々と共にこの叫びに加わった。さらに、飢餓で衰弱し、口がほとんど閉ざされていた多くの人々も、聖なる家の火を見ると、全力を尽くしてうめき声や叫び声をあげた。ペレア 17 も、周囲の山々と同様にその反響を返し、全体の騒音の勢いを増した。しかし、この混乱よりも悲惨さの方がひどかった。というのは、神殿が立っている丘自体が、そのあらゆる部分が火で満たされているように熱く沸騰し、血の量は火よりも多く、殺された者の数は殺した者よりも多かったと思われるからだ。地面はどこにも見えず、そこに死体が横たわっていた。しかし兵士たちは、逃げる者たちに襲いかかりながら、死体の山を踏み越えていった。そして今、ローマ軍によって神殿の内庭から追い出された盗賊の大群は、外庭に入り、そこから町に入るのに苦労し、残りの民衆は外庭の回廊に逃げ込んだ。祭司たちのうちの何人かは、聖なる家から釘を引き抜いた。そこには鉛でできた台座のついた聖なる神殿があり、矢の代わりにローマ軍に矢を放った。しかし、そうしても何の得もなかったし、火が彼らの上に燃え上がったので、彼らは幅 8 キュビトの城壁の方へ退き、そこに留まった。しかし、彼らの中の高位の 2 人は、ローマ軍に寝返れば助かったかもしれないし、勇気を出して他の者と共に運命を共にしたかもしれないのに、火の中に身を投げ、聖なる神殿と共に焼かれた。彼らの名前はベルガスの子メイラスとダレウスの子ジョセフであった。

2. そしてローマ人は、聖なる家の周囲をそのままにしておくのは無駄だと判断して、その場所すべてを焼き払い、また、東側と南側の 2 つを除く回廊と門の残骸も焼き払った。しかし、その 2 つは後に焼かれた。彼らはまた、莫大な金額のお金、莫大な数の衣服、その他の貴重な品々が保管されていた宝物庫も焼き払った。簡単に言

えば、ユダヤ人の富のすべてがそこに積み上げられ、一方で裕福な人々はそこに部屋を建てていたのである。兵士たちはまた、神殿の外庭にあった回廊の残りにもやって来た。そこには、女性や子供、そして大勢の人々が約6,000 人ほど逃げていた。しかし、シーザーがこれらの人々について何か決定を下す前、あるいは指揮官に彼らに関する命令を与える前に、兵士たちは激怒し、回廊に火を放った。その結果、彼らのうちの何人かは頭から身を投げて命を落とし、何人かは回廊で焼死した。また、誰一人として命を逃れることができなかった。これらの人々の破滅の原因は、偽預言者 19 であった。その預言者は、まさにその日に市内で、神が彼らに神殿に登るよう命じ、そこで救出の奇跡的な兆候を受けるだろうと公に布告したのである。当時、暴君たちに買収された多数の偽預言者が、人々に神の救出を待つべきだと告げ、人々に騙していた。これは、人々が逃亡しないようにするため、また、そのような希望によって恐れや不安から解放されるためであった。さて、逆境にある人は、そのような約束に容易に従うものである。というのは、そのような誘惑者が、患者を苦しめる苦難から解放されると信じ込ませるとき、患者はそのような解放への希望に満ちているからである。

3. こうして、みじめな民は、これらの詐欺師や神自身を偽る者たちに説得され、非常に明白で、自分たちの将来の破滅をはっきりと予言するしるしに注意を払わず、信じもせず、見る目も考える心もない、夢中になった人々のように、神が彼らになさった告発に耳を傾けなかった。こうして、剣に似た星 20 が町の上に立ち、彗星のような姿が 1 年間続いた。また、ユダヤ人の反乱の前、戦争に先立つ騒動の前にも、人々が大勢で種を入れないパンの祭りに集まったとき、クサンティコスの月 21 [ニサン] の 8 日、夜の 9 時に、祭壇と聖なる家の周囲に非常に強い光が輝き、明るい昼間のように見えた。それは 30 分間続いた。この光は、無知な者には良い兆しと思われたが、聖なる書記官たちは、その直後に起こる出来事の前兆であると解釈した。同じ祭りのとき、大祭司に連れられて犠牲に捧げられた雌牛が、神殿の真ん中で子羊を産んだ。さらに、内陣の東の門は、神殿の中央にあって、神殿の東の門のすぐ外側に、子羊を産んだ。神殿の中庭は真鍮でできていて非常に重く、20 人の男たちが苦労して閉め、鉄で補強された土台の上にあり、1 枚の石でできた堅い床に非常に深くボルトが締められていたが、夜中の 6 時ごろに門がひとりでに開くのが見られた。そこで神殿の番兵たちが駆けつけて神殿の守衛長に知らせた。守衛長はそこに行き、非常に苦労しながら門を再び閉めることができた。これはまた、神がそれによって彼らの幸福の門を開いたかのような、非常に幸せな奇跡であると一般の人々に思われた。しかし、学識のある人々は、彼らの聖なる家の安全がひとりでに崩れ、門が敵に有利になるように開かれたことを理解した。そこで彼らは、その合図は彼らに迫っている荒廃の前兆であると公に宣言した。これらのほか、その祭りの数日後、アルテミシウス月（ヤール）の 21 日には、ある驚くべき信じられない現象が起こった。その出来事は、目撃者が語らなかったら、またその後に起こった出来事がそのような警告に値するほど重大なものでなかったら、単なる伝説のように思われただろう。なぜなら、日が沈む前に、戦車と鎧を着た兵士の軍団が雲の中を走り回り、都市を取り囲んでいたからだ。さらに、私たちがペンテコステと呼ぶその祭りでは、祭司たちが慣例通り、夜に神殿の内庭に入り、神聖な奉仕を行っていたとき、まず最初に震えを感じ、大きな音が聞こえ、その後、大勢の人が「ここから立ち去ろう」と言っているような声が聞こえたという。しかし、さらに恐ろしいのは、アナヌスの息子で平民で農夫のイエスが、戦争が始まる 4 年前、町が非常に平和で繁栄していたときに、神殿で神のために幕屋を建てるのが私たちの習慣である祭りに来たことです。突然、大声で叫び始めた。「東からの声、西からの声、四方からの声、エルサレムと聖なる家に対する声、花婿と花嫁に対する声、そしてこの民全体に対する声だ！」これが、昼も夜も町のすべての路地を歩き回っているときの彼の叫びだった。しかし、民衆の中で最も著名な何人かは、彼のこの恐ろしい叫びに非常に憤慨し、男を捕らえて何度も厳しいむち打ちを加えた。しかし、男は自分の意見

を言うことも、彼を叱責する人たちに特有のことを言うこともせず、以前叫んだのと同じ言葉を言い続けた。そこで、私たちの支配者たちは、これが男の神の怒りの一種であると推測し、彼をローマの総督のところに連れて行き、骨がむき出しになるまで鞭打たれた。しかし、彼は自分のために嘆願することも涙を流すこともせず、鞭が打たれるたびに、できるだけ悲しげな声で「エルサレムに災いあれ !」と答えた。アルビヌス（当時は総督だった）が彼に「あなたは誰ですか？どこから来たのですか？なぜそのような言葉を発したのですか?」と尋ねたとき、彼は自分の言ったことに何の返答もせず、それでも憂鬱な歌を歌い続けたので、アルビヌスは彼を狂人だと思い、彼を解雇した。さて、戦争が始まるまでの間、この男は市民の誰にも近づかず、そう言っているところを市民に見られなかった。しかし、彼は毎日、あたかもそれが彼の計画された誓いであるかのように、「エルサレムに災いあれ !」という悲しげな言葉を発していた。また、毎日彼を殴る者に対して悪口を言うことも、彼に食べ物を与える者に対して良い言葉をかけることもなかった。しかし、これはすべての人々に対する彼の返答であり、実際、これから起こることの悲しげな予兆にほかならなかった。彼のこの叫びは祭りで最も大きく、彼はこの歌を 7 年 5 ヶ月間、しわがれたり疲れたりすることなく歌い続けた。そして、我々の包囲戦で彼の予兆が本格的に実現するのを見たとき、歌は止んだ。なぜなら、彼が城壁の周りを回っているとき、彼は最大限の力で叫んだからだ。「悲惨だ、再び町に、人々に、そして聖なる家に !」そして、最後に「悲惨だ、私自身にも !」と付け加えたちょうどその時、機械の 1 つから石が飛び出し、彼を襲い、すぐに殺した。そして、彼がまさに同じ予兆を口にしているとき、彼は息を引き取った。

4. さて、これらのことをよく考えてみると、神は人類を守り、あらゆる方法で人類の生存のために何をすべきかを人類に予示しておられるが、人間は狂気と自発的に自ら招いた悲惨さによって滅びることがわかる。というのは、ユダヤ人はアントニアの塔を破壊して神殿を四角形にし、同時に彼らの聖なる預言に「彼らの神殿が四角形になったとき、彼らの町と聖なる家は陥落する」と書いていたからである。しかし、この戦争を遂行するにあたり、彼らを最も奮い立たせたのは、彼らの聖なる書物にも記されていた「そのころ、彼らの国から一人が居住可能な地球の統治者になる」という曖昧な預言であった。ユダヤ人はこの予言を特に自分たちに当てはまるものと受け止め、多くの賢者はそのことでその決意を誤ってしまった。さて、この神託は、ユダヤの皇帝に任命されたウェスパシアヌスの統治を確かに示していました。しかし、人間は運命を事前に知っていても、それを避けることはできません。しかし、これらの人々は、これらの合図のいくつかを自分の好みに従って解釈し、いくつかを完全に軽蔑しました。その結果、彼らの狂気は、彼らの都市の占領と彼ら自身の破滅の両方によって明らかになりました。

E.7.6　第 6 章

ローマ人が旗を神殿に掲げ、ティトゥスに歓呼の声をあげた様子。ユダヤ人が慈悲を懇願したとき、ティトゥスが彼らに語った言葉。ユダヤ人がそれに対してどのような返答をしたか。そしてその返答がティトゥスの憤りをいかに引き起こしたか。

1. さて、反乱軍が町に逃げ込み、聖なる神殿とその周囲のすべての建物が焼き払われたとき、ローマ軍は旗を神殿に持ち込み、24 東の門に旗を立てた。そこで彼らは犠牲を捧げ、ティトゥス帝を 25 大いに歓喜した。そして今や兵士たちは略奪で得た戦利品を大量に手に入れ、シリアでは金一ポンドが以前の半分の値段で売れた。し

かし、聖なる神殿の壁の上にじっとしていた祭司たちについて言えば、26 喉が渇いた少年がいた。彼は命の保証としてローマ兵に右手を差し出してほしいと頼み、喉が渇いていると告白した。衛兵たちは彼の年齢と苦境を哀れみ、それに応じて右手を差し出した。そこで彼は自分で降りてきて、水を飲み、彼らのところに来た時に持っていた容器に水を満たし、それから立ち去って自分の友人たちのところへ逃げて行った。衛兵たちは誰も彼に追いつくことができなかったが、それでも彼らは彼の不誠実さを非難した。それに対して彼はこう答えた。「私は約束を破ったのではありません。私が自分に与えた保証は、私があなたたちと一緒にいるためではなく、ただ私が安全に降りてきて水を汲むためだったのです。私はその両方を果たし、それによって約束を忠実に守ったと思っています。」そこで、その子供が騙した人々は彼の狡猾さに感心し、また彼の年齢にも感心した。その後 5 日目に、飢餓で衰弱していた祭司たちが降りてきて、衛兵に連れられてティトゥスのところへ行き、命乞いをした。しかし彼は、彼らに対する赦免の時は過ぎ去っており、彼らだけが正当に救われると期待できるこの聖なる家が破壊されたこと、そして司祭たちが所属する家自体とともに滅びることが彼らの職務にかなうことだ、と答えた。そこで彼は彼らを死刑にするよう命じた。

2. しかし、暴君たち自身と彼らと共にいた者たちは、四方から包囲され、逃げ場もなく、いわば壁で囲まれていることを知ると、口頭でティトゥスと交渉することを望んだ。そこで、ティトゥスは性格が優しく、町を破壊から守りたいという願いと、盗賊たちが激怒したと考えた友人たちの助言とが相まって、神殿の外庭の西側に陣取った。その側にはクシストゥスの上に門があり、上町と神殿を結ぶ橋があったからである。この橋が暴君たちとカエサルの間にあり、彼らを隔てていた。群衆は両側に立っていた。ユダヤ民族は恩赦を大いに期待してシンランとヨハネの周りに、ローマ人はティトゥスが自分たちの嘆願をどう受け止めるかを大いに期待してカエサルの周りに立っていた。そこでティトゥスは兵士たちに怒りを抑え、矢を放たないように命じ、彼らの間に通訳を置いた。これは彼が征服者であることを示すものであった。そしてまず演説を始め、こう言った。「諸君、諸君は、我が国の惨状にもう飽き飽きしているだろう。諸君は、我々の偉大な力についても、諸君自身の大きな弱さについても、正当な認識を持たず、狂人のように暴力的で無分別なやり方で、諸君の国民、諸君の都市、諸君の聖なる家を破壊しようと企ててきた。諸君は、ポンペイウスが最初に諸君を征服して以来、反乱を止めず、その時以来、ローマ人と公然と戦争をしてきた。諸君は、ローマ軍のごく一部が諸君に十分対抗できるのに、大軍に頼ったのか。同盟者の忠誠心に頼ったのか。そして、我々の支配の境界外に、どんな国があるというのか。ローマ人より先にユダヤ人を助けることを選んだのは誰ですか？あなた方の軍隊は我々の軍隊より強いのですか？いや、あなた方はゲルマン人自身が我々のしもべであることを知っています。あなた方の城壁は我々より強いのですか？頼む、ブリトン人を包囲している大洋の壁よりも大きな障害が他にありますか？それでも、ローマ人の武器を崇拝しています。あなた方は魂の勇気と指揮官の賢明さにおいて我々を上回っていますか？いや、実際、あなた方はカルタゴ人が我々に征服されたことを知らないはずがありません。したがって、あなた方が我々に反抗したのは、我々ローマ人の親切心以外には何もないでしょう。まず第一に、我々はあなた方にこの土地を所有するように与え、次にあなた方の国の王をあなた方に任命し、第三に、あなた方の祖先の法律をあなた方に保持し、あなた方が望むように、あなた方だけで、あるいは他人の間で生きることを許可しました。そして、私たちがあなたに与えたすべての恩恵の中で、神に捧げる貢物を集める許可が私たちの最大の恩恵です 27 彼に捧げられた他の贈り物とともに、我々はこれらの寄付金を運んだ者たちに責任を問うことも、禁じることもしなかった。ついには、我々の敵であったにもかかわらず、君たちは我々よりも裕福になり、我々の金で我々に対する戦争の準備をしていた。いや、結局のところ、君たちはこれらすべての恩恵を享受していたとき、その莫大な富を、君た

ちに与えた者たちに向け、無慈悲な蛇のように、君たちに親切にしてくれた者たちに毒を吐いたのだ。だから、君たちはネロの怠惰を軽蔑し、骨折したり脱臼したりした手足のように、その時は静かに横たわり、悪意はあったものの、別の時を待っていたのだろうと思う。そして今、君たちの病気はかつてないほどひどくなり、厚かましく大きな希望が許す限り、君たちの欲望を拡大したのだ。この頃、父がこの国に来たのは、ケスティウスの指揮下であなたがたが行ったことに対する罰を与えるためではなく、あなたがたを戒めるためだった。父があなたがたの国を転覆させるために来たのであれば、あなたがたの源泉に直行し、すぐにこの町を荒廃させたであろう。一方、父はガリラヤとその周辺地域を焼き払い、あなたがたに悔い改める時間を与えた。あなたがたは、この人道的な行為を父の弱さの証拠とみなし、私たちの温和さで厚かましさを養った。ネロがこの世を去った後、あなたがたは最も邪悪な者たちがしたであろうことをし、内紛によって私たちに対して行動するよう自らを鼓舞し、私と父が戦争の準備のためにエジプトへ行ったその時間を悪用した。また、私たちが皇帝になったとき、あなたがたは私たちに対して騒動を起こすことを恥じなかった。それは、私たちが軍の将軍に過ぎなかったとき、私たちがいかに温和であったかをあなたがたが経験していたにもかかわらずである。しかし、政府が我々に移譲され、他のすべての人々がそれに対して沈黙し、外国でさえも使節団を派遣し、我々が政府に加わることを祝福したとき、あなた方ユダヤ人は我々の敵であることを明らかにした。あなた方は、騒乱を起こすのを助けるためにユーフラテス川の向こう側の同胞に使節団を派遣した。あなた方は都市の周囲に新しい壁を築き、暴動が起こり、一人の暴君が他の暴君と争い、あなた方の間で内戦が勃発した。あなた方ほど邪悪な民族にしか起こらないようなことだった。その後、私は父に不本意ながらこの都市にやって来て、父から悲しげな命令を受けた。人々が平和を望んでいると聞いて、わたしはそれを喜んだ。この戦争を始める前に、わたしはあなたたちにこの行為をやめるよう勧めた。あなたたちがわたしと長い間戦っていたときでさえ、わたしはあなたたちを許した。わたしは逃亡者たちに保証として右手を与えた。わたしは約束したことを忠実に守った。彼らがわたしのもとに逃げてきたとき、わたしは捕虜にした多くの人々に同情した。わたしは戦争に熱心な者たちを、彼らを抑えるために拷問した。わたしは不本意ながら、戦争兵器をあなたたちの城壁に持ち込んだ。わたしは、兵士たちがあなたたちを殺戮しようとしたとき、常にあなたたちに対して厳しくするのを禁じた。勝利のたびに、あたかもわたし自身が征服されたかのように、あなたたちを和平に説得した。わたしがあなたたちの神殿に近づいたとき、わたしは再び戦争の法則を離れ、あなたたち自身の聖域を守り、あなたたちの聖なる家をあなたたち自身のために保持するよう勧めた。わたしはあなたたちがそこから静かに退出し、あなたたちの保存のために安全を確保した。いや、もしお前たちがそうしたいのなら、私は他の場所で戦う許可を与えた。それでもお前たちは私の提案を一つ一つ軽蔑し、自らの手でお前たちの聖なる家に火をつけた。そして今、卑劣な奴らよ、口頭で私と交渉したいのか？かつてはこのような聖なる家だったのに、今は破壊されてしまったのに、何のためにそれを保存しようとするのか？お前たちの神殿が破壊された今、お前たちは何の保存を望むのか？お前たちは今もなお、鎧を着てじっと立っているのか？また、この極限状態にあっても、嘆願者のふりをする気などないのか。ああ、哀れな生き物たち！お前たちは何を頼りにしているのか？お前たちの民は死んでしまったのではないか？お前たちの聖なる家は消えてしまったのではないか？お前たちの街は私の手中にあるのではないか？お前たちの命も私の手中にあるのではないか？お前たちはまだ死ぬことが勇敢なことだと考えているのか？しかし、私はあなたたちの狂気に倣うつもりはない。もし武器を捨て、私に体を差し出すなら、私はあなたたちの命を許す。そして私は温厚な主人のように振る舞う。治せないものは罰せられ、残りは私自身のために保存されるだろう。」だが、お前たちはまだ私の提案を一つ一つ軽蔑し、自らの手でお前たちの聖なる家に火をつけた。そして今、卑劣な悪党どもよ、口頭で私と交渉したいのか？かつてはこのような聖なる家だったのに、今は破壊されてしまったのに、何のために救

おうとするのか？神殿が破壊された今、お前たちは何の保存を望むのか？だが、お前たちはこの時に鎧を着てじっと立っているのか？この極限状態にあっても、嘆願者のふりをする気などないのか。ああ、哀れな生き物たちよ！お前たちは何を頼りにしているのか？お前たちの民は死んでいないのか？お前たちの聖なる家は消え去ったのではないか？お前たちの街は私の手中にあるのではないか？お前たちの命も私の手中にあるのではないか？お前たちはまだ死ぬことが勇敢なことだと考えているのか？しかし、私はあなたたちの狂気に倣うつもりはない。お前たちが武器を捨て、死体を私に引き渡すなら、私はあなたたちの命を与えよう。そして私は温厚な一家の主人のように振舞おう。治癒できないものは罰せられ、残りは私自身のために保存されます。」だが、お前たちはまだ私の提案を一つ一つ軽蔑し、自らの手でお前たちの聖なる家に火をつけた。そして今、卑劣な悪党どもよ、口頭で私と交渉したいのか？かつてはこのような聖なる家だったのに、今は破壊されてしまったのに、何のために救おうとするのか？神殿が破壊された今、お前たちは何の保存を望むのか？だが、お前たちはこの時に鎧を着てじっと立っているのか？この極限状態にあっても、嘆願者のふりをする気などないのか。ああ、哀れな生き物たちよ！お前たちは何を頼りにしているのか？お前たちの民は死んでいないのか？お前たちの聖なる家は消え去ったのではないか？お前たちの街は私の手中にあるのではないか？お前たちの命も私の手中にあるのではないか？お前たちはまだ死ぬことが勇敢なことだと考えているのか？しかし、私はあなたたちの狂気に倣うつもりはない。お前たちが武器を捨て、死体を私に引き渡すなら、私はあなたたちの命を与えよう。そして私は温厚な一家の主人のように振舞おう。治癒できないものは罰せられ、残りは私自身のために保存されます。」

3. ティトゥスの申し出に対して、彼らはこう答えた。「決してそうしないと誓ったので、受け入れることはできない。しかし、妻子とともに、自分たちを取り囲む城壁を抜ける許可が欲しい。そうすれば、砂漠に行き、町をティトゥスに任せることができる」。これに対してティトゥスは、彼らがすでに捕虜になっているのに、まるで征服者であるかのように、自分と条件を結ぼうとしていることに憤慨した。そこで彼は、彼らに次のような布告を出すように命じた。「もう脱走兵として出てこないようにし、また、これ以上の安全を期待しないように。今後は誰も容赦せず、全軍で彼らと戦う。できる限り自力で救わなければならない。今後は戦争法に従って彼らを扱う」。そこで彼は兵士たちに、町を焼き払い、略奪するように命令したが、その日は何もしなかった。しかし翌日、彼らは文書保管所、アクラ、評議会の建物、そしてオフラスと呼ばれる場所に火を放った。その時、火はアクラの真ん中にあったヘレナ女王の宮殿にまで燃え広がり、飢餓で破壊された人々の死体でいっぱいの家々とともに、小道も焼け落ちた。

4. 同じ日に、イザテス王の息子や兄弟たち、そして他の多くの有力な民衆がそこに集まり、自分たちの安全のためにシーザーに右腕を与えてくれるよう懇願した。シーザーは、今残っている者たち全員に非常に怒っていたが、以前の穏健な態度を捨てることはせず、これらの人々を受け入れた。その時、シーザーは確かに彼ら全員を拘留したが、王の息子や親族は拘束し、ローマに連れて行き、彼らの国がローマに忠誠を誓うための人質とした。

E.7.7　第 7 章

反乱者たちが多くの悪事を起こし、多くの不幸に見舞われた後、彼らに何が起こったのか。また、カエサルがどのようにして上市都市の支配者になったのか。

1. すると、反乱軍は、非常に堅固であったため、多くの人が財産を預けていた王宮に突入し、ローマ軍を追い払

った。また、王宮に群がっていた約 8,400 人の民衆を皆殺しにし、彼らの所有物を略奪した。さらに、ローマ軍のうち 2 人を生け捕りにした。1 人は騎兵で、もう 1 人は歩兵であった。彼らは歩兵の喉を切り裂き、この一件でローマ軍全体に復讐しようとして、直ちに彼を町中を歩かせた。しかし、騎兵は、ローマ軍の命を救うために何か提案したいことがあると言った。そこで、彼はシモンの前に連れて行かれたが、そこにいたときには何も言うことがなかったので、彼はシモンの指揮官の 1 人であるアルダラスに引き渡され、処罰された。アルダラスは彼の両手を後ろで縛り、両目に帯を巻いた後、首を切ろうとしているかのように、彼をローマ軍の前に連れ出した。しかし、その男は処刑を阻止し、ローマ軍の元へ逃げた。ユダヤ人の死刑執行人が剣を抜いている間に逃げた。敵から逃げ去った後、ティトゥスは彼を殺すことは考えられなかった。しかし、敵に生かされて捕らえられたため、もはやローマ軍の兵士であるに値しないと判断し、武器を取り上げ、所属していた軍団から追放した。これは、恥をかく者にとっては、死刑そのものよりも重い罰であった。

2. 翌日、ローマ軍は下町から盗賊を追い出し、シロアムに至るまですべてに火を放った。兵士たちは町が破壊されるのを見て本当に喜んだ。しかし、反乱軍が持ち物をすべて持ち去り、上町に退却したため、略奪品は手に入らなかった。彼らはまだ自分たちの犯した悪事を少しも悔い改めておらず、まるでうまくやったかのように横柄だった。町が燃えているのを見て、彼らは陽気な様子で、喜びに満ちた表情を浮かべ、彼らの言うところの、死が彼らの悲惨さを終わらせるだろうと期待していた。したがって、人々は殺され、聖なる家は焼け落ち、町は燃えていたので、敵にはもう何も残っていなかった。しかし、この極限の状況でも、ヨセフスは町の残りを救ってほしいと彼らに懇願するのに疲れることはなかった。彼は彼らの蛮行と不信心について長々と語り、彼らが逃げるための助言を与えたが、それによって彼らに笑われただけで、彼は何も得るものはなかった。彼らは誓いを立てたため投降することを考えられず、四方を囲まれてすでに一種の捕虜になっていたため、広場でローマ軍と戦うだけの力もなかったが、人を殺すことに慣れていたため、それに応じて行動せずにはいられなかった。そこで彼らは都市の前に散り散りになり、ローマ軍に逃亡しようとする者を捕まえるために、その廃墟の中で待ち伏せした。その結果、多くのそのような逃亡者が彼らに捕らえられ、全員殺された。なぜなら、彼らは食糧不足のために逃げるには弱すぎたため、彼らの死体は犬の餌にされたからである。今では、他のあらゆる死は飢餓よりは耐えられると考えられていたので、ユダヤ人は慈悲を得られそうになかったにもかかわらず、ローマ人のもとに逃げ、自ら進んで、殺人的な反乱軍に加わった。また、市内には死体のない場所はなく、飢餓か反乱で殺された死体で完全に覆われていた。そして、あらゆる場所が、その暴動か飢餓で死んだ人々の死体で満ちていた。

3. それで、暴君たちと彼らといっしょにいた盗賊団を支えていた最後の希望は、地下の洞窟や洞穴にあった。そこに逃げることができたとしても、捜索されることはないと彼らは思っていた。しかし、彼らは、街全体が破壊され、ローマ人が去った後、再び出て彼らから逃げ出そうとしていた。これは彼らの夢に過ぎなかった。なぜなら、彼らは神からもローマ人からも隠れることができなかったからだ。しかし、彼らは地下の隠れ家に頼り、ローマ人自身よりも多くの場所に火を放った。そして、このようにして火をつけられ溝に逃げ込んだ家から逃げた者たちを、彼らは容赦なく殺し、略奪した。そして、もし誰かの食べ物を見つけると、それをつかんで、血とともに飲み込んだ。いや、彼らは今や略奪品をめぐって互いに戦うようになった。そして、もし彼らの破壊がそれを阻止していなかったら、彼らの蛮行は死体そのものの味さえも彼らに感じさせたであろうと私は思わずにはいられない。

E.7.8　第 8 章

カエサルはどのようにして上市 [シオンの丘] の周囲に堤防を築き、それが完成すると機械を持ち込むよう命令したのか。そして彼は都市全体を支配した。

1. さて、カエサルは、上部の都市があまりにも急峻で、堤防を築かなければ陥落できないと悟ると、その工事の各部分を自分の軍隊に分配した。これは、ルース [アブ] の月 20 日のことである。さて、資材の運搬は困難な作業であった。というのも、私がすでに述べたように、都市の周囲 100 スタルの範囲内にあるすべての木々は、以前の堤防を作るためにすでに枝を切り落とされていたからである。4 つの軍団に属する工事は、王宮の向かいの都市の西側に建てられた。しかし、補助軍の全体と、彼らと共にいた残りの群衆は、クシストゥスに [堤防を築いた]。そこから彼らは橋と、シモンの塔に至った。シモンは、彼らが互いに戦争をしていたときに、ヨハネに対する要塞としてシモンが建てた塔である。

2. ちょうどこのとき、イドマヤ人の指揮官たちが密かに集まり、ローマ軍に降伏する案を協議した。そこで彼らはティトゥスに 5 人の男を送り、自分たちの安全のために右腕を差し出すよう懇願した。ティトゥスは、戦争の大部分がかかっていたイドマヤ人が撤退すれば、暴君たちも屈服するだろうと考え、しぶしぶと遅れた後、彼らの要求に応じ、命の保証を与えて 5 人を送り返した。しかし、イドマヤ人が出撃の準備をしていると、シモンはそれに気づき、ティトゥスのもとに向かった 5 人を直ちに殺し、指揮官たちを捕らえて牢に入れた。指揮官たちの中で最も目立っていたのはソサスの子ヤコブであった。しかし、指揮官が奪われて何をすべきか全く分からなくなったイドマヤ人の大群に対しては、彼は監視を命じ、より多数の守備隊で城壁を固めた。しかし、その守備隊は脱走兵に抵抗することができなかった。彼らのうち多数が殺されたが、脱走兵の数はそれよりはるかに多かったからである。彼らは全員ローマ軍に受け入れられたが、それはティトゥス自身が彼らを殺すという以前の命令を怠り、兵士たち自身も彼らを殺すことに飽き、彼らを生かすことでいくらかの金もうけを期待したからである。彼らは民衆だけを残し、残りの大群を妻子もろとも非常に安い値段で売り払った。それは売られた者が多く、買う者が少なかったからである。ティトゥスは、脱走兵は家族を連れて出られるように、一人で来るなと事前に布告していたが、それでも彼はこのような者も受け入れたのである。しかし、彼は彼らの中に罰に値する者がいないか見極めるために、彼らの上に何人かを区別する者を置いた。そして、売られた者の数は実に膨大であったが、民衆のうち四万人以上が救われ、カエサルは彼らをそれぞれ望むところへ放った。

3. ところが、ちょうどそのとき、祭司のひとりで、テブトゥスの子で、イエスと名乗る者が、カエサルの誓いによって、神殿に保管されていた貴重な品々の一部を渡すという条件で、保護されるという保証を与えられ、神殿から出て、聖なる神殿の壁から、聖なる神殿にあったものと同じ燭台二つ、テーブル、水盤、小瓶をイエスに渡した。すべて純金でできていて、非常に重かった。また、ベール、衣服、宝石、その他、神聖な礼拝に使う貴重な器物も数多くイエスに渡した。神殿の財務官ピネウスも捕らえられ、祭司たちの上着や帯、ヴェールに使うために保管されていた大量の紫や緋色の布、また大量のシナモンやカシア、その他大量の香料を見せた。これらは混ぜて毎日神に香として捧げられていたものだった。その他にも多くの宝物や神殿の神聖な装飾品が彼に渡された。これらの品々をティトスに渡したことにより、彼はこの男に対して、自ら進んで脱走した者たちに与えたのと同じ赦しを勝ち取った。

4. そして、ゴルピエウスの月（エルル）の 7 日、18 日後にローマ軍が城壁に兵器を突っ込んだとき、土塁は完成した。反乱軍がいなかったため、ローマ軍の一部は都市を救えないと絶望し、城壁から城塞に退却した。他の一部は地下室に降りたが、それでも大勢のローマ軍が砲台に兵器を突っ込んだ者たちから身を守った。しかし、ローマ軍は数と力で彼らを打ち負かした。そして何よりも重要なのは、ユダヤ人たちがすっかり意気消沈して弱っている間に、喜んで仕事を続けたことである。城壁の一部が破壊され、いくつかの塔が破城槌の衝撃に耐えると、抵抗する者たちは逃げ去り、暴君たちは必要以上に大きな恐怖に襲われた。敵が突破口を越える前に、彼らは完全に驚いて、すぐに逃げ去ろうとした。そして、これまでは邪悪な行いにおいて非常に横柄で傲慢だったこれらの人々が、打ち倒され、震え上がるのを見ることができた。その卑劣な人々の変化を観察することは、心を哀れむほどである。したがって、彼らは、守っている人々を押しのけて、それを突破して逃げるために、自分たちを取り囲むローマの城壁に向かって猛烈に走り回った。しかし、かつて忠実だった者たちが去ったのを見て（実際、彼らは大きな苦難に駆られて逃げたところへ逃げた）、また、他の者たちより先に駆けつけた者たちが西の壁が完全に倒されたと告げたとき、また他の者たちがローマ軍が侵入したと告げたとき、また他の者たちがローマ軍が近くにいて、自分たちを警戒していると告げたときも、それは彼らの視界に浮かんだ恐怖の命令に過ぎなかった。彼らはひれ伏し、自分たちの狂った行為を大いに嘆いた。そして、彼らの神経はひどく緩み、逃げることができなかった。ここで、これらの邪悪な悪党たちに行使された神の力と、ローマ人の幸運について主に考えるべきである。なぜなら、これらの暴君たちは、今や自分たちの力で持っていた安全を完全に奪い、力ずくで、あるいは飢餓以外の方法では決して捕らえられなかった塔から自らの意志で降りてきたからである。そして、ローマ人は、弱い城壁にあれほど苦労したにもかかわらず、幸運によって、彼らの機械では決して得られなかったものを手に入れたのです。なぜなら、これらの塔のうち 3 つは、上で述べたようなあらゆる機械式エンジンでは強固すぎたからです。

5. そこで彼らは、自らこれらの塔を去り、というよりはむしろ神自身によって塔から追い出され、シロアムの下の谷にすぐに逃げ、そこでしばらくの恐怖から立ち直り、その側にあるローマの城壁のその部分に向かって激しく突進した。しかし、勇気があまりにも落ち込んで十分な力で攻撃することができず、恐怖と苦悩で力が弱まったため、彼らは衛兵に撃退され、互いに離れて散り散りになり、地下の洞窟に降りていった。こうしてローマ軍は城壁の支配者となり、両者とも塔に旗を立て、この戦争の終わりが始まったときよりもずっと楽だったと、勝利を喜びの声をあげた。というのも、最後の城壁にたどり着いたとき、彼らは流血もなく、自分たちが見つけた真実をほとんど信じることができなかったからである。しかし、彼らに対抗する者が誰もいないのを見て、彼らはこのような異常な孤独が何を意味するのか疑問に思った。しかし、彼らは剣を抜いて大勢で街の路地に進み、外で追いついた人々を殺し、ユダヤ人が逃げた家に火を放ち、そこにいたすべての魂を焼き、残りの多くの人々を荒廃させた。そして、略奪するために家々にやって来たとき、彼らは家の中で家族全員が死んでおり、上の部屋は飢餓で死んだ人々の死体でいっぱいだった。彼らはこの光景に恐怖し、何も手を付けずに出て行った。しかし、彼らはこのようにして殺された人々に対して同情したが、まだ生きている人々に対して同じ気持ちはなかった。彼らは出会ったすべての人を襲い、死体で路地をふさいで、街全体を血で染めた。実際、多くの家の火はこれらの人々の血で消されたほどだった。そして実際、殺人者たちは夕方には撤退したが、夜の間に火は激しく燃え盛った。そしてすべてが燃えている中、ゴルピオス（エルル）の月 8 日がエルサレムに到来した。この包囲戦の間、エルサレムは多くの悲惨な目に遭いがちだった。もしエルサレムが最初の建設以来ずっとこれほど幸福を享受していたなら、間違いなく世界の羨望の的になっていただろう。また、この都市がこのような悲惨な運命を

たどったのは、この都市の打倒のきっかけとなったような世代を生み出したからである。

E.7.9　第 9 章

シーザーが市内に入ったときに出した命令。捕虜の数と包囲中に死んだ者の数。また、地下の洞窟に逃げた者についても。その中には暴君シモンとヨハネもいた。

1. さて、ティトゥスがこの [上] の町に着いたとき、彼はその町のいくつかの強固な場所だけでなく、特に暴君たちが狂気の行為で放棄したあの強固な塔に感心した。なぜなら、その塔の高さ、それぞれの石の大きさ、接合部の正確さ、またその幅の広さ、長さの広さを見て、彼は次のように述べた。「この戦争では確かに神が我々の助けになった。ユダヤ人をこれらの要塞から追い出したのは神に他ならない。人間の手や機械でこれらの塔を倒すなんてできるだろうか。」そのとき、彼は友人たちにそのような話を何度もした。また、暴君たちに縛られて牢獄に残されていた者たちを解放した。結局、彼は都市の残りの部分を完全に破壊し、その壁を倒した後、これらの塔を彼の幸運の記念碑として残しました。それは彼の援軍が功を奏し、他の方法では奪取できなかったものを獲得することを可能にしたのです。

2. さて、兵士たちはすでに人を殺すことにすっかり疲れていたが、それでもまだ大勢が生き残っているようだったので、カエサルは、武器を持って抵抗する者以外は殺さず、残りは生け捕りにするよう命令した。しかし、殺害命令を受けた者とともに、老人や病弱者も殺した。しかし、栄えある年齢で自分たちに役立ちそうな者たちは、一緒に神殿に追い込み、女たちの庭の壁の中に閉じ込めた。その庭には、カエサルの解放奴隷の一人と、友人の一人であるフロントを置いた。フロントは、それぞれの功績に応じて、各人の運命を決めることになっていた。そこでフロントは、互いに弾劾されていた反逆者や盗賊を皆殺しにしたが、若者の中からは背が高くて美しい者を選び、凱旋式のために残しておいた。残りの十七歳以上の民衆は監禁し、エジプトの鉱山へ送った。31 ティトゥスはまた、多くの民衆を贈り物として各州に送り、劇場で剣と野獣で彼らを滅ぼそうとしたが、十七歳以下の者は奴隷として売られた。さて、フロントがこれらの人々を区別していた日々の間に、一万一千人が食糧不足で死んだ。彼らの中には、衛兵が彼らに抱いた憎しみのために、食物を口にしない者もいたし、また、食物を与えられても受け取ろうとしない者もいた。民衆は非常に多く、彼らは食料となる穀物さえも欠乏していた。

3. さて、この戦争中に捕虜となった者の数は、合計で 9 万 7 千人であった。包囲戦中に亡くなった者の数は 110 万人で、その大部分は確かに同じ民族であったが、エルサレム市民ではなかった。彼らは無酵母パンの祭りのために全国からやって来たが、突然軍隊に閉じ込められ、最初は非常に窮地に陥り、疫病による壊滅に見舞われ、その後すぐに飢饉が起こり、さらに急激に壊滅した。この都市にこれほど多くの人々を収容できたことは、ケスティウスの指揮下で捕らえられた者の数からも明らかである。ケスティウスは、この都市の力をネロに知らせたいと考え、そうでなければこの民族を軽蔑する気になっていたネロに、可能であれば、大祭司たちに全群衆の人数を数えてほしいと頼んだ。そこで、これらの大祭司たちは、過越祭と呼ばれる祭りが近づくと、第九時から第十一時まで、犠牲をほふるが、各犠牲につき十人以上の集団が参加することになる（彼らが自分たちだけで祭りをすることは許されていないからである）。そして、私たちの多くは、一つの集団に二十人いるが、犠牲の数は二十五万六千五百人であることに気づいた。これは、一緒に祭りを開いた十人以下を考慮すると、清く聖なる者たちの数は二百七十万二百人になる。なぜなら、らい病や淋病にかかっている者、月経のある女、その他汚れた者

たちは、この犠牲にあずかることは許されていないからである。また、礼拝するためにここに来る外国人も同様である。

4. さて、この膨大な群衆は確かに遠く離れた場所から集められたが、今や全国民は運命によって牢獄のように閉じ込められ、ローマ軍は住民で混雑した都市を包囲した。したがって、そこで死んだ人々の数は、人間や神がこれまでに世界にもたらしたすべての破壊を上回るものであった。公に知られていることだけを言えば、ローマ人は彼らのうちの何人かを殺し、何人かを捕虜にし、他の何人かは地中を捜索し、彼らがどこにいるかを見つけると、地面を掘り起こして出会った者すべてを殺した。また、2000 人以上がそこで殺されたのが発見されたが、一部は彼ら自身の手で、一部は互いの手で殺されたが、主に飢饉によって殺された。しかし、死体の悪臭は、そこに立ち寄った者たちにとって非常に不快なものであったため、ある者はすぐに逃げざるを得なかったが、他の者は利益を貪欲に求め、山積みになった死体の間に入ってはそれを踏みつけた。なぜなら、これらの洞窟には大量の財宝が見つかり、利益を期待していたため、それを得るためのあらゆる手段が合法とみなされたからである。また、暴君たちによって牢に入れられていた者たちの多くが今や連れ出された。彼らは最後の最後まで野蛮な残虐行為をやめなかったからである。しかし、神は正義にかなう方法で、彼ら両方に復讐した。ヨハネはというと、この洞窟で兄弟たちとともに食料を欲し、これまで何度も傲慢に拒絶してきたローマ人に、今度は自分の安全のために右手を差し伸べてくれるよう懇願した。しかしシモンは、苦境に立たされながらも必死に抵抗しましたが、後に述べるように、降伏せざるを得ませんでした。そのため、勝利のときまで留置され、その後殺害されることになりました。ヨハネも同様に、永久の投獄を宣告されました。そして今、ローマ軍は都市の端に火を放ち、都市を焼き払い、城壁を完全に破壊しました。

E.7.10　第 10 章

エルサレムの町はこれまで 5 回占領されたが、今回は 2 度目の荒廃であった。その歴史の簡潔な説明。

1. こうしてエルサレムはウェスパシアヌス帝の治世の二年目、ゴルペイオスの月 [エルル] の八日目に陥落した。この都市はそれ以前にも五回陥落していたが、荒廃したのは二度目であった。エジプト王シシャク、その後アンティオコス、その後ポンペイウス、その後ソシウスとヘロデが都市を陥落させたが、それでもなおそれを保持した。しかしこれらすべての前に、バビロン王がこれを征服し、建設後千四百六十八年六ヶ月でこれを荒廃させた。しかし、最初にこれを建設したのはカナン人の間で有力な人物であり、我々の言葉で [メルキセデク]、正義の王と呼ばれている。まさにそのような人物であった。そのため彼は [そこに] 神の最初の祭司であり、最初に神殿を建設し、[そこに] かつてサレムと呼ばれていたその都市をエルサレムと名付けた。しかし、ユダヤ人の王ダビデはカナン人を追い出し、そこに自らの民を住まわせた。ダビデの治世後 477 年 6 か月で、バビロニア人によって完全に破壊された。そこで統治した最初のユダヤ人であるダビデ王からティトゥスによるこの破壊までは 1179 年であったが、最初の建設からこの最後の破壊までは 2177 年であった。しかし、その非常に古い歴史も、その莫大な富も、居住可能な地球全体に広がったその国民の広がりも、宗教上の理由でそこに払われた崇敬の深さも、それを破壊から守るのに十分ではなかった。こうしてエルサレムの包囲は終わった。

(2024.12.4) 脚注省略

E.8　第七巻

E.8.1　第 1 章

E.8.2　第 2 章

E.8.3　第 3 章

E.8.4　第 4 章

E.8.5　第 5 章

E.8.6　第 6 章

E.8.7　第 7 章

E.8.8　第 8 章

E.8.9　第 9 章

E.8.10　第 10 章

E.8.11　第 11 章